

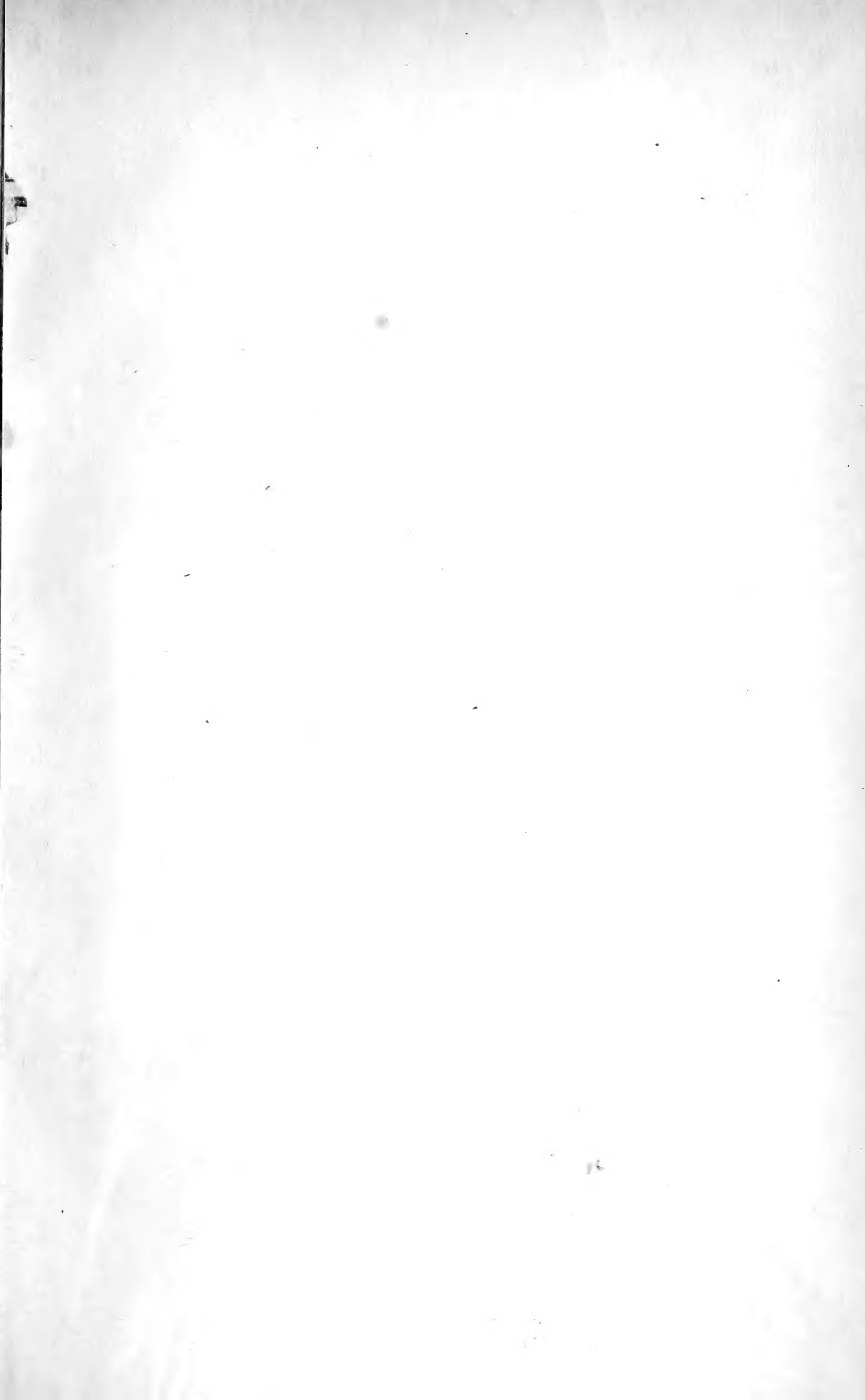


3 9088 01268 5202

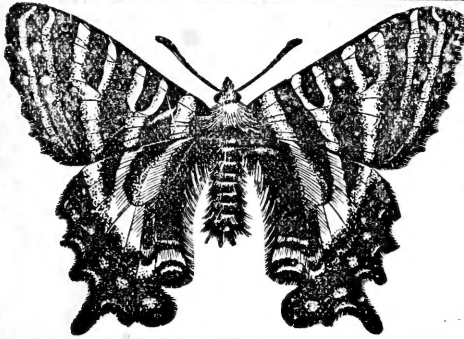
l. 7, 1803







(二月十五日發行)



THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第六拾五號

(第七卷第一冊)

目次 (禁轉載)

○セミヤドリガ竝に被害蟲類 (石版圖)

○學說……………一頁

○セミヤドリガの實驗……………佐々木忠次郎

○クンバインバウを記す……………桑名伊之吉

○果樹の綿蟲驅防の一策……………荒木武雄

○蠶組以外の寄生蛆に就て……………一〇頁

○講話……………名和靖

○蚤の發生と驅防方法……………名和靖

○雜錄……………一四頁

○六足蟲叢書(子の巻) 長野菊次郎 ○蟲界の漫語

(第一則) 齋藤啓二 ○食蟲動物の餌食研究に就て

林壽祐 ○昆蟲學發展の一方案 鳥羽源藏 ○蠶埵の構

成に就て 高橋徹一 ○蜻蛉の保護を如何にすべきヤ

神村直三郎

○通信……………二三頁

○島根縣下の兩害蟲調査報告 田中房太郎 ○土佐産

の蟲報(第八) 武内護文 ○岐阜縣郡上部の蝶類 櫻

田健藏 ○昆蟲月報(第七卷) 櫻井倚畔 ○昆蟲に關す

る葉書通信(第二十九報)……………三〇頁

○質問應答……………三三頁

○報……………三三頁

○明治三十六年の昆蟲學界 ○去年の昆蟲學界 ○工業

應用昆蟲叢報(第一報) ○千蟲萬彙錄(第一) ○特別講

習會の開會期 ○今後の昆蟲世界 ○長短期の兩講習會

○三重縣阿山郡の蟲報 ○晴天に甘露の雨 ○昆蟲標本

の展覧會出品の昆蟲標本と批評 ○食塵蟲の發

見 ○名和梅吉氏の來翰 ○岐阜縣の害蟲驅防施行の除

名會員の件に就て ○名和昆蟲研究所に對する建議 ○除

今年的天候に注意せよ ○米國製の蠅捕紙 ○物産品評

會の昆蟲標本 ○年賀狀の披露其他三件

(明治三十六年一月十五日發行)

I 59
V. 7
1903
Insects.

◎寄贈物件受領公告

- 一金壹圓也
 - 一金壹圓也
 - 一賜の刺評 イナゴ其他數頭
 - 一野蠶の繭 數頭
 - 一犬形刺情象 二頭
 - 一昆蟲に關する新聞切拔等數種
 - 一淡田燒醬油さし(蝶模樣付)一個
 - 一蟬鳴子(玩具)一個
 - 一打出蝶模樣紙 一枚
 - 一英國女生徒之理科應用畫
 - 一池邊之生物(印刷物)
 - 一輕便硯箱(群蝶模樣)一個
 - 一蝶形帽子掛(金屬製)一個
 - 一結風蝶 二個
 - 一肖像(寫眞) 一枚
 - 一醫事新聞 二冊
 - 一農事試驗場特別報告 第一號 一冊
 - 一蠟蟲及浮塵子に關する調査 一冊
 - 一島根縣農事試驗場臨時報告 第六號
 - 一中國民報(昆蟲記事) 一葉
- 右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す
- | | |
|-----|--------|
| 德島縣 | 本生良三君 |
| 三重縣 | 市川新松君 |
| 岐阜縣 | 村岡利一君 |
| 在宮津 | 田中芳男君 |
| 岐阜縣 | 宮田孝次郎君 |
| 岐阜縣 | 永澤甲子君 |
| 岐阜縣 | 神村直三郎君 |
| 岐阜縣 | 高橋喜之助君 |
| 石川縣 | 西川豊次郎君 |
| 靜岡縣 | 太田正耕君 |
| 大坂府 | 波比昌太郎君 |
| 東京市 | 波江寛君 |
| 千葉縣 | 林壽祐君 |
| 新潟縣 | 鶴飼二郎君 |
| 愛媛縣 | 矢野延能君 |
| 島根縣 | 田中房太郎君 |
| 岡山縣 | 松坂佳一郎君 |

名和昆蟲研究所

雜誌昆蟲世界愛讀者諸君中、御移動相成候場合に、新舊住處兩様に御明記の上、必ず御一報奉煩度候、從來御報無之か、若くは舊地御認め無之ため、非常に煩雜を來したる事往々有之に付、爲念御注意申上置候

名和昆蟲研究所會計部

第十五回全特別講習會開始

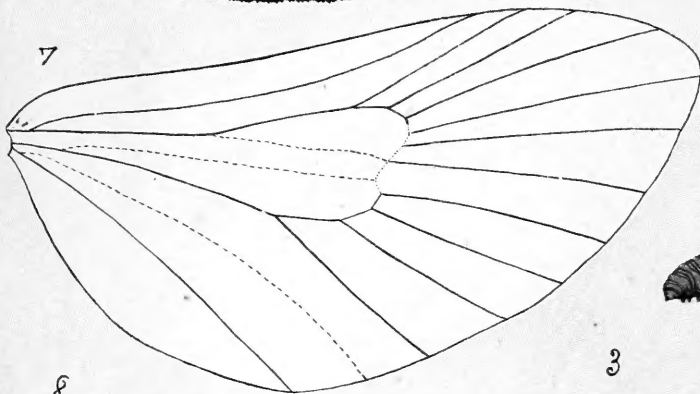
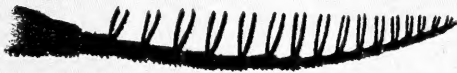
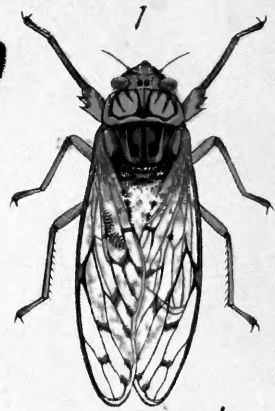
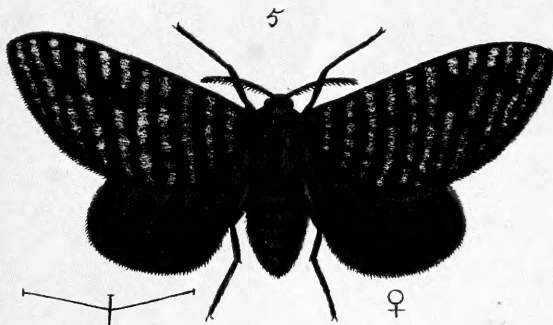
國害蟲驅除特別講習會開始
開期(自今年三月十日) 三週間以内
第十五回全國害蟲驅除講習會は今年春後、開催の筈の處、前號雜報に詳記の事情を生じ、來る三月開設の内國勸業博覽會の事情を以て、特別講習會の紀念として、特別講習會の開始を難するもの多々あり起れるを以て、之が開始を難するもの多々あり隨つて其必成を期し難し。是を以て試みに之を世の同志を問ひしよ、幸にして約半數の賛同を得たるを以て、三月十日を期して開講式を擧げ断然茲に三月十日を期して開講式を擧げ左の諸項を熟覽の上、二月廿八日限り、其手續を終了せられよ。

一、會期は三月十日より同月三十日に至る三週日以内とす。
二、會費は通常の講習會費と同額を收む。
三、講習學科の終了次第、修學旅行として、一同大坂市へ出張し内國勸業博覽會に陳列の昆蟲標本、驅除器械、驅除藥劑等苟しくも應用昆蟲學に關係あるものに就きて、親しく現物の説明品評を爲さしめ、各講師は公平の審査眼を以て、更に其優劣得失を示致す。

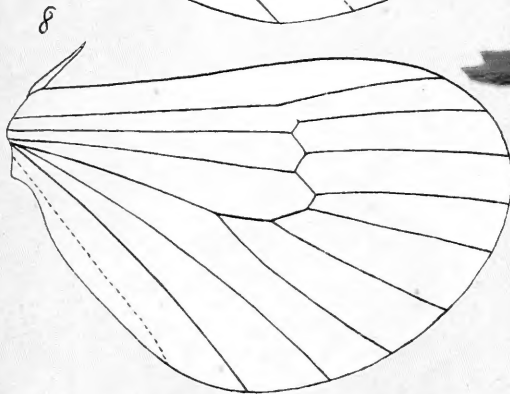
四、大阪へ往返の際、天候の如何によりては、比叡山若くは伊吹山に於て、各種の採集法を行ふ。
五、本會は長期講習會の豫備を行ふ。
六、修學旅行費は、各會員の自辨とす。
七、其他は普通講習會の規則に同じ。
八、規則書入用の向は返信用郵券を添へ至急照會せらるべし。
(附記)本會開會中に、當名和昆蟲研究所創立滿七年の紀念として昆蟲百五十萬供養塔の開眼式を舉行し、又大坂市に於ては、全國害蟲驅除講習會修業生の同窓會を開く計畫あり。

名和昆蟲研究所

一月十日



3



9

昭
和
十
五
年
五
月
印

五
印

A parasitic moth and the hosts (with parasitic larvae)

セミヤドリガ 蝋 寄生を受けるヒグラシとベッコウハゴロモ



(明治三十六年第一月)



◎セミノヤドリガ(蟬寄生蛾)の實驗 [第一版圖參看] 及び歐文參照

名和昆蟲研究所調査主任 名和梅吉

蟬は各地に普通の種なるが、其雄蟲の發聲の、特は斯昆蟲をして名を得せしめたるに似たり。此蟲に關する研究は、十數年前發行の動物學雜誌に、吾が名和先生及び其他二三の記載あり、又動物學彙報等には、松村松年外數氏の記述に係るものあり、余また本誌第一號以下種別等を連載せし事あれば、大體は於ての最早遺憾なかるべし。唯其體內に寄生する昆蟲に就て記述せしものに至りては、未だ之あるを見ず、是れ茲に實驗せし梗概を讀者に報道する所以なり。

原來寄生蟲と概言すれば、直ちに膜翅目若くは双翅目は屬する蟲類の如くは思惟せらるれども、蟬に寄生するものは、全たくそれと異あり、鱗翅目蛾類に屬する一種とす。但膜翅目若くは雙翅目のものは大概他蟲の体内に棲息し乍ら、養分を取り以て自體の生育を計るを常とすれども、蟬に寄生するものは、體外に寄居して養分を取るの差ひあり。此蛾を採集せしは、去る明治二十五年の十月にて、採集地は岐阜市の金華山なりしが、當時は其特性常態を知らざりしより、輕々等閑に附せしも、其後六年を経へて明治三十一年の八月上旬に至り、名和先生の養老山下に採集せられし時、ヒグラシゼミの体外に白

粉を出して棲息せる幼蟲の附着するものを獲て、余に之が飼育と調査とを命せられしかば、直ちに式の如く之を飼育場と收めて、日夜其舉動に注視せしに、日なからずして造繭するものありて、終に同月下旬一種の蛾に羽化しぬ。爾來、夏季に昆蟲を採集する毎に注意せしめ、漸やく被害蟬の不少なる事を知り得たり、而して目下其產地として目すべき地方は滋賀縣、富山縣、鳥取縣及び岐阜縣等とあす、恐らくは猶ほ多くの分布地あらんと思はる。

被害の蟬類 是より先、蟬類に寄生蟬のある事を發見するや、其宿主たる蟬種の異同によりて、托生蟲にも異同ありや否やを調査せしが、從來の經驗上、三蟬種に限り寄生するものなる事を知得せり。即ちヒゴラシゼミ (Pomponia japonensis, Distant) ミンミンゼミ (Pomponia maculicollis Metch.) 及びアブラゼミ (Graptopsaltria colorata, Stal.) なり。就中、被害の最多なりしはヒゴラシ種にして、ミンミン種之に亞ぎ、アブラ種に到りては、蓋し極めて稀少かりき。而して此類にして、横蟲類ウスバヨコバヒムシ科 (Fulgoroidea) のベツカフハゴロモヨコバヒ (Ricania japonica, Metch.) に寄生するものありと雖も、未だ同種なるや否やを確認せざるを以て、茲に斷言するは憚かる。

寄生の状態 幼蟲の蟬體に寄生するや、胸部の腹面或ひは腹部の背腹面よ、分泌せる白色の綿様物を粘纏して、其自體を被包するものあるが、分泌の量多きより、著るしく白色を呈するに至るを見る、故に寄生を受たる蟬體は、遠くより認知し得べし。而して宿主は其體の養分を吸取せらるゝが爲め、漸次衰弱して不活潑を極め、徒手能く捕獲せらるゝに至り、終に全たく絶命す。

幼蟲 脚部は非常な短かく、假足の如きは纔かに吸盤状をなせる痕跡を留むるのみ。其狀恰かも蛆の如く、十分生育を遂ぐれば、身長二分乃至三分許あり。頭部は最も小さく、淡黄色にして、他は薄き

赤褐色よて彩どつるも、恒^{つね}白粉^{はくふん}に被^{おほ}はるゝが故^{ゆゑ}、異色^{いしよく}なるやの觀^{くわん}あり。特に老熟^{らうじやく}は近づくに隨^{したが}ひ綿^{めん}様物^{やうぶつ}を分泌^{ぶんひ}すると益々^{ますます}甚^{はなは}だしきが如^{ごと}し。蓋^{けだ}し自體^{じたい}防禦^{ぼうぎよ}の具^ぐにして、假令^{たとひ}雨水^{うすい}の滴^{てき}下^かする事^{こと}あるも、毫^{かう}も浸透^{しんとう}するの患^{うれ}ひ無^なきなり。

繭^{まゆ} 老熟^{らうじやく}せし幼蟲^{やうちゆう}は、蟬^{せんだい}躰^{たい}を去^さりて蟬^{せみ}の棲息^{せいそく}せる樹幹^{じゆかん}、或^{ある}ひは其^{その}近傍^{きんぱう}の草葉^{そうわつ}上^{じやう}に於^おて營繭^{えいじん}す。其色^{そのいろ}白^{しろ}く、其形^{そのかたち}橢圓^{だまんでん}にして多少^{たせう}緊縮^{きんしゆく}しあるも、多量^{たやう}の綿^{めん}様物^{やうぶつ}を被覆^{ひふく}するを以^{もつ}て、一見^{いつけん}膨軟^{はうなん}なるやの感^{かん}あり。其^{その}大^{おほい}さ三分^{さんぶん}乃至^{およ}三分^{さんぶん}五厘^{ごりん}ありて、羽化^{うけわ}の際^{さい}には、先端^{せんたん}の口^{くち}を破^{やぶ}りて出^いづ。

蛹^{まゆ} 大^{おほい}さ二分^{にぶん}五厘^{ごりん}内外^{ないがい}ありて、圓筒^{えんとう}狀^{じやう}、淡褐^{たんかつしよく}色^{いろ}を呈^{てい}し、羽化^{うけわ}に近^{おほ}づく時^{とき}には、漸^{やう}やく黒色^{こくしよく}に變^{へん}ず。

成蟲^{せいちゆう}(蛾) 小形^{せうけい}にして黒色^{こくしよく}を呈^{てい}し、ミノムシノガ(Enneta minuscula, But.)又は^{また}ホシノハマキムシ

ノガ (Proctis nigra, Leach.)等に類^る似^しす。未^{いま}だ邦稱^{ほんしやう}無^なきを以^{もつ}て、これにセミノヤドリガの新稱^{しんせう}を命^{めい}せり。其大^{そのおほ}さ(頭部^{かぶ}より腹端^{はらたん}まで)は二分^{にぶん}乃至^{およ}二分^{にぶん}五厘^{ごりん}、翅張^{しやう}は、六分^{ろくぶん}乃至^{およ}七分^{しちぶん}五厘^{ごりん}あり。頭部^{かぶ}は小さ^ちくして黒色^{こくしよく}を呈^{てい}し、腹^{はら}は比較^{ひかく}的大^{たい}にして暗黒^{あんこく}色^{いろ}なり。觸角^{しよくかく}は短^{みじ}かく八厘^{はちりん}内外^{ないがい}を算^{さん}し、總^{すべ}て拾^{しゆ}六節^{ろくせつ}より成^なり、兩出^{りやうしゅつ}櫛齒^{しじゆう}狀^{じやう}を爲^なせり。胸腹^{きゆうはら}兩部^{りやうぶ}は、其^{その}黒色^{こくしよく}にして肥大^{ひだい}、前後^{ぜんご}翅^しまた全^またく黒色^{こくしよく}を呈^{てい}すれども、前翅^{ぜんし}は少^{すこ}しく濃^なく、上面^{じやうめん}には光澤^{くわうたく}ある瑠璃^{るり}色^{いろ}の小波^{せうは}紋^{もん}を印^{いん}せり。其翅^{そのし}脈^{みやく}は明^あかに中央^{ちゆうわう}脈^{みやく}を有^{いう}ず、且^{かつ}つ前中央^{ぜんちゆうわう}脈^{みやく}とも稱^{せう}すべき一^{いっ}線^{せん}は、半徑^{はんけい}脈^{みやく}の中央^{ちゆうわう}より發^{はつ}して第一^{だいいち}中央^{ちゆうわう}中央^{ちゆうわう}脈^{みやく}の基部^{きぶ}に達^{たつ}し、斯^かくて各半^{かくはん}徑^{けい}枝^し脈^{みやく}の基部^{きぶ}に於^おて全^またく分離^{ぶんり}せり。臀脈^{でんみやく}の第一^{だいいち}二^には明^あかなれども、第三^{だいさん}は之^{これ}を飲^かく。後翅^{こうし}の亞綠^{あろく}脈^{みやく}と半徑^{はんけい}脈^{みやく}とは相分^{あひぶん}離^りして、中央^{ちゆうわう}脈^{みやく}を有^{いう}せり、而^{しか}して臀脈^{でんみやく}は三^{さん}個^こを算^{さん}す。

終^{つひ}りに此種^{このしゆ}が如何^{いか}なる科^かに屬^{ぞく}すべきやは、參考^{さんかう}書^{しよ}の少^{すく}なき爲^{ため}、判明^{はんめい}せざるも、當^{たう}研究^{けんきゆう}所^{しよ}所^{しよ}藏^{ざう}書^{しよ}よ就^つき調査^{たうさ}せし結果^{けいこ}に依^よれば Megaropygidae 科^かのもの、如^{ごと}し、尙^なは後考^{こうかう}に俟^{まち}たんとす。

第一版圖解

- (1) はヒゲラシセミの蛹に、白色の綿様物を出して、幼蟲の寄生する狀 (2) は寄生の幼蟲(放大) (3) は其繭(自然大)
 (4) は其蛹(放大) (5) は成蟲即ちセミノヤドリガ(放大) (6) は觸角(放大) (7) 前翅の翅脈 (8) は後翅の翅脈 (9) はベツカフハゴ
 ロモヨコバロの蛹に蟬と同様に幼蟲の寄居する狀。

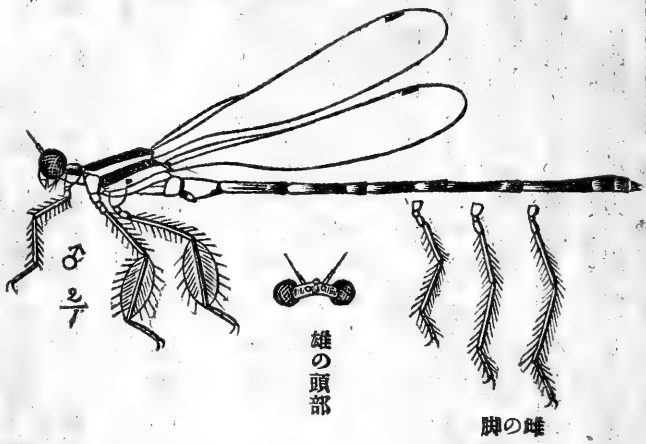
◎ グンバイ トンバウ を記す

理學博士 佐々木忠次郎

軍扇蜻蛉はイト トンバウの一種なふんど信ず。此は余が明治十五年の頃、始めて東京井ノ頭に於て採集せし種にて、其後絶て之を獲ざりしが、昨年昆蟲採集のため、同地に抵りし時、不圖往時を追想して搜索を加へしに、還た之を獲ることを得き。其雌雄は軀形畧ぼ同一にして、雌は雄に比して少しく大に軀長一寸二分五厘、翅張七分三厘あり。頭部は短濶にして約一分三厘を算し、其背面は黒さも、後縁は黄色を呈し、頭裏は淡黄を帯べり。複眼は球狀をなして、左右は凸出し、背面は緑褐に、其裏面は淡黄綠色なり。觸鬚は二節より成りて一粗毛を生じ、其色は黒し。胸部は淺黄綠色、背面は黒く、側面は、一條の黒帯を縦走せり。脚は細長くして、其一面は淡黄綠色を呈はすも、他の一面は黒色を以て彩どられ、大腿節と脛節とには、長さ黒粗毛の並列す。翅は前後兩翅ともに瑩徹透明、根基狭くして脈條黒く、縁點は灰褐を帯びて、その形は略ぼ長方となす。腹部は淡黄綠色あるも、背腹の兩線は黒く腹節の接線は淡緑を呈はし、其第九節の裏面は、陰具を存せり。雄は、頭胸兩部に於ける着色より斑紋に至るまで、略ぼ雌に似たるも、其腹部は前者よりも稍肥大に、且つ黒くして、第一第二及び第三の腹節の側面と、各腹節の接線とは淡黄綠色を帯ぶ、第二腹節の裏面は少しく膨起して、此に一孔を開き、以て精液を貯藏する囊も通せり。而して雄の特有に屬するは、其中後の兩脚の構造にあり、即ち中脚と後脚は前脚よりも長く、後脚は亦中脚よりも長きを常とし、特中後兩脚に於ける脛節の皮膚の

著るしく左右に開張して、自づから軍扇形を成し、其周縁に黒粗毛を並列するは、實一奇よして、斯種にグンバイ トンバウと命名せしも、蓋しこれ本づけるなり。

(倍二の雄)圖のサバントトイ イバンク



そも此蜻蛉は、常に池水河邊に飛翔するものにて、遠ざかる時は其形影を知ること難し。性好みて草叢灌木等の間に徘徊し、舉動不活潑に、飛翔極めて緩慢なるも、其翅の透明に、體軀の細長よ、且つ着色の緑黒なるは、輒はち他眼に觸ること難ければ、自づから鳥類其他の食蟲動物の侵襲を脱がるゝこと多らん。意ふに、斯種は同族間に於ても、相互認識の不便あるべく、隨ひて雌雄兩性の會合に際し、多少機會を缺く事もやあらん。但その雄の飛翔するや、軀軀の處在に判明せざるに關はらず中後兩脚に存する白色軍扇の、周圍の綠色と反映して、一見判別し得べきものあるが故よ、雄の飛翔するに際し、雌は能く其白色軍扇を望見みてこれに近づき、以て或作用を完ふするものゝ如し。此に至りて、雄よ特有の白軍扇は、好配偶を昵近せしむべき、唯一の目標たるを知るなり。

凡そ昆蟲よは、雄の雌を近づくるの器官を具備せるもの、他にも多く其例あり、即ち蟋蟀の長く月前に吟ずるが如き、又蟬蛸の高く樹蔭よ鳴くが如きは、ともに常に觸目聽耳する所、假し軍扇蜻蛉の軍扇

を具ふるよ同じからざるも、其能く美音妙聲を弄して、巧みよ自然の作用を行ふに至りては、彼此蓋し其理を一よし、而して其方法を異にするのみ。然れば斯學は從事する者にして、尙ほ深く進んで昆蟲界に於ける雌雄間の状態等を研究せば、實に興味ある解説を與ふること多からん。國號に縁故ある蜻蛉の記事を舁して、年頭の祝詞に替へ、併せて平素の希望を一言す。

◎東北地方の果樹の害蟲たる綿蟲驅防の一策

福岡縣

桑名伊之吉

葡萄の有害蟲なるフィルロキシラ(Phylloxera)が嘗て佛國の葡萄園を蹂躪せし事實は、何人も能く知る所なるが、昆蟲學者は如何なる種類の葡萄が、最も能くフィルロキシラの害に堪へ得べきかを研究の末遂に米國野生葡萄を發見して、其根部を佛國に輸入し、これに培養せんとする種類を接木するに及びて茲に回復の途を求め得、對岸の米國は於て水を用ゐる場合に、佛國にては舊より依りて葡萄酒を用ゐる事を得しのみか、又シャパン酒釀造の招牌をも繼續して店頭を掲ぐることを得たりき。蓋しフィルロキシラは葡萄の葉をも害すと雖ども、根部を害すること殘酷なるを以て、從來佛國產葡萄の根部は其被害特に甚しかりしき。乃ちフィルロキシラは、原と米國產の害蟲にして、佛國より移殖せる新種なるを以て斯くは劇烈の加害力を逞ふせしものと知らる。而して後年米國は於て發見したる野生の葡萄は、永くフィルロキシラの害に遇ひ來りしも、之に堪得るの性を有するが故に、遂に其被害を見ざるに至りしや佛國にして若し此の野生葡萄を發見せざらんか、恐くは今日の佛國產シャパン酒をば、世界の市場より驅逐せしむるべし。

又ニユージラランドに於ても、去る一千八百七十年に至る間は、綿蟲加害の爲め、林檎の栽培に好果を得難く、枝朶に根部に皆瘤癭を生じ、或ひは畸形に變じ、蕾に樹勢の發育不十分なるのみり、全く枯死するものすら、頻々多かりしを以て、當業者は林檎栽培を全廢し、之をタスマニア産の補給に仰ぐの外なしとまで唱道するに至りぬ。然るにヅキクトリアの人トーマス、ラング氏は、綿蟲の加害に堪へ得るの樹種あることを發見し、其種類をウインタメゼテン及びノーサンスパイの二種なりと斷定し、遂に此をニユージラランドに移殖せしに、頗る良効を收めり。蓋し此發見は綿蟲の性質を熟知せしに因けるものにて、綿蟲の冬期間は多く根部に棲息し、枝葉に於けるよりは寧ろ大害を加ふるに反し、此ウインタメゼテン (Winter majetin) 及びノーサンスパイ (Northern spy) 種の根部に限り、其寄生無りしより此理を擴げてニユージラランドをして、此健全の砧木と接枝するに各自好む所の種類を以てせしめたるに外ならず。翻つて我が東北地方に於ける綿蟲蕃殖の狀を視るに、其加害力の猖獗なる、決して前者に譲らば、朝野共に多年驅防に努むるも、未だ寸毫の効果を待ざるが如し、是豈に佛國、ニユージラランドの被害と同視すべきものならんや。

依て余は茲に二三の條項を擧げ、以て該蟲驅除豫防上の試験案に備へんとす、幸ひは卑見を容ふるゝとを得ば、蕾に記者の榮たるに止めず、また斯道研究上の一利たらん歟。

一、新ジラランドに栽培して綿蟲の根部を害せずと云へるウインタメゼテン種及びノーサンスパイ(美麗)種と、他の種類とに於ける綿蟲被害の比較研究をなすべし。

因に記す、ウインタメゼテン種は、未だ本邦の果樹書に見る所無きが如し、果して本邦に此種の栽培なくんば、急に之を他國に求むる可なり。

二、美麗種の根部を檢視して、綿蟲加害の有無を確證すべし、それと同時に他の多くの種類の根部をも檢視すべし。

一、若し本邦に移植の美麗種及びウインタメセン種の根部にも、綿蟲の加害無くば、將來此二種を多植するが、若しくば之れを砧木に供用すべし。

二、接木の際に少しく地表より離れしむべし、然らざれば、接枝より根を下ろすことあり。
(参考) 林檎は亦他の樹木の如く、其土地及び氣候によりて、適否の別あるものなるを記憶するを要す。

佛國の葡萄園とニュージーランドの林檎園とは、種類の選擇法によりて、害蟲の被害より獨立せしめたり豈獨り東北に於てのみ之を綿蟲より獨立せしめ能はざるの理あらんや。要は唯栽培家の熱心にして學理を應用し、兼て精密の研究を怠すと否やとあるのみ、物産開發上當業者の省慮を煩はさん。

◎蠶蛆以外の寄生蛆に就て 農商務省京都蠶業講習所 荒木武雄

明治三十五年十一月五日發行の農業雜誌中、蠶蛆に關して、在米國理學博士河内忠二郎氏の書信を載せたりしが、其文中に左の一節ありき。

荒木氏の述へられたる如く、若し此蠶蛆にして、彼の野蠶並に尺蠖等に寄生するものと、其性状を同ふするものとせば、小生は何處迄も、寄生蠅の室内に入り來りて、蠶兒の牀皮上に産卵するものと確信致居申候。云々

尙ほ河内氏は蠶蛆に關しては、一度も研究したることなき由をも附記せられたれば、斯かる疑問ありしとて、敢て深く尤むるに足らずと雖ども、世人の或ひは之れを誤解して、河内氏の説に重きを置かずとも限らざる可ければ、下に多少研究したる要點を概説すべし。

佛國印度及び支那等の諸國に於て蠶兒に寄生する蛆は、何れも蠶兒の皮膚上に産卵するものにして、本邦に於ける蠶蛆即ち (*Uginia sericariae* Rondani) とは別種に屬す。勿論、本邦に於ても、野蠶に寄生するもののみは、概ひね皮膚上に産卵するを以て、支那の蛆 (*Tachina rufica*) と殆んど同一種類なるべし。今蠶蛆と野蠶に寄生する蛆との間に於ける著明の相異點を對比すれば、次の如きものあり。

蠶 蛆

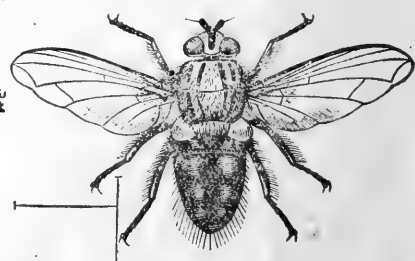
- 一、桑葉に産卵す。
- 二、卵色は黒くして光澤あり。
- 三、卵は蠶兒の胃中に於て孵化す。
- 四、神壘球に入る。

野 蠶 寄 蛆

- 一、蠶兒の皮膚上に産卵す。
- 二、卵毛は白くして少しく灰色を帯ぶ。
- 三、卵は皮膚上に於て孵化す。
- 四、直に内部に穿入して神壘球に入らず。

余輩の實驗したる所によれば、野蠶は蠶蛆の寄生を受けることあるも、そは極めて稀にして、之れと同時に若くば其前後に於て皮膚上に産卵する蛆の寄生を受けること甚だ多し。又た家蠶と雖ども野外に於て放飼するときは、往々皮膚上に産卵したる蛆の寄生を被ることあり。然れども現時本邦に於ては室内に於て飼育する蠶兒即ち家蠶の蛆害と云へば、殆んど全たく蠶蛆の寄生を被けたるもの、みなれば、皮膚上に産卵する蛆に就きては、未だ深く顧慮するに及ばざるが如し。蠶蛆驅除豫防法補遺 なほ筆の序に記すべきは、曩に發表せし蠶蛆驅除豫防法の補遺なり。凡そ此方は、最も簡易にして、毎々經費を要すること少なければ、微かき養蠶を營む人と雖も、其實行に苦まざるべしと信ず。

- 一、土間に於て上簾せしむる時は、上簾後八日目までに採繭を了するを可とす。然れども或る事情の爲めに之を行ふこと能はざるこき、又は土間に於て生繭を保存せざるべからざる場合には、左の方法を行ふに利あり。
- (イ)土間は常時牢硬にして虧隙なきを要す、斯る處に蛆蟲の潜伏に適應せざれば、唯其周圍に小溝を堀置き、後日溝の部分のみを地下面下四寸以上發掘して、土壤と共に蠶蛆を焼却すべし。(ロ)右の溝を木若くは漆喰にて造り、其四隅には蛆蟲を陥落せしむべき小孔を設け置かば、後日土を堀出だすに及ばざる可し。
- 二、第一の法に據らずとも、土間の周圍に蠶蛆の逃逸し能はざる防止の方法、例へば壁土にて堤防様の築土を施す可し。
- 三、生繭は二寸の深みある木箱に入るゝを可とすれども、之を製すること能はざる時は、左の方法の一つを擇むべし。
- (イ)板の周圍に、厚紙を以て高さ二寸の邊緣を造り、此内に生繭を置くべきと。(ロ)兩戸の内面に生繭を置くべきと。但虧隙あらば目張をなすべく、又周圍の縁低くして蛆蟲逸散の虞あらば、其部分には紙を上部より地平線に張り置くべきと。(ハ)障子の内面に生繭を置くべきと。但紙は破損せざる様十分に目張をなすべし、又周圍の縁低きときは、前記兩戸の項と同一の方法に據るべし。
- 四、桶、壘、算笥の抽出、長持及び鶴蓋等に入置くも可なり。



カコノツバノヘの圖



◎蚤の發生と驅防方法

名和昆蟲研究所長

名 和 靖

蚤は害蟲の一ツは違ひ無いが、農作害蟲の區域を離れて、衛生の害蟲と云ふ處うら、原病學で多少論じてある位で、普通には餘り記載されて無い。斯様に醫學上かゝ精研されて無いに就ても、昆蟲學上から計りも、細密に調査する必要がある。其上衛生と云ふ點から、各自が注意すべきもので、就中家政の整理は、不少の關係を有し、蚤の多少は、直ちに其人の品格は關はる事もあるから、輕蔑が出来ないのである。それで若し、誰か力を此方面に傾注する研究者があつて、從來、不明の事を説き明す事があらうものなら、斯學上の利益は言へぬもかな、醫學界に將た教育界は、貢獻する事が極めて多いのである。畢竟、茲は時節不相應の話をするのも、豫防的驅除の必要があるのと、斯學研究者が、田舎八百屋の眞似を廢めて、研究の餘地がある此蚤などの事を、專攻して欲いからの希望に外ならぬので、吾々同志の徒が、銘々其長處に従つて、狭く深く研究した日には、頗る拭目すべき事もあらうと思ふ。

楮ノミの事は粗ぼ世人の知らるゝ通り、其生涯の半ばは、動物の體軀に寄生するによつて生活し得る爲めに、半寄生蟲と呼ばれるのであるが、唯その經過を知らん人が多い處から、夏の初めなつて、始めて發生するものと誤解して居るが、世間一般の有様であるらしい。處が、此蟲は成蟲で年を越し、春の暖氣に伴れて産卵蕃殖するもので、夏になつて俄かに發生するものではない。則ち其卵子は、微小乍らも肉眼で見ることが出来る程で、塵芥の中に産附けられる(イ圖)、すると四五日経つて(ロ)圖の様なり幼蟲となり、此幼蟲は前後二週間計り、種々の不潔物を食ふて生育を遂ぐるのであるが、世人が蚤を誤解するのは、多く此幼蟲を知らん爲めである。幼蟲が十分成長すると、不潔物を纏めて(ハ)圖の如き繭を造り、其内で(ニ)圖のやうな蛹に化する、蛹期は普通二週間位であるから、都合三十四五日目で、始めて成蟲となる譯である。それで假りに春の彼岸頃に、産下された卵子で見ると、四月末か五月初め

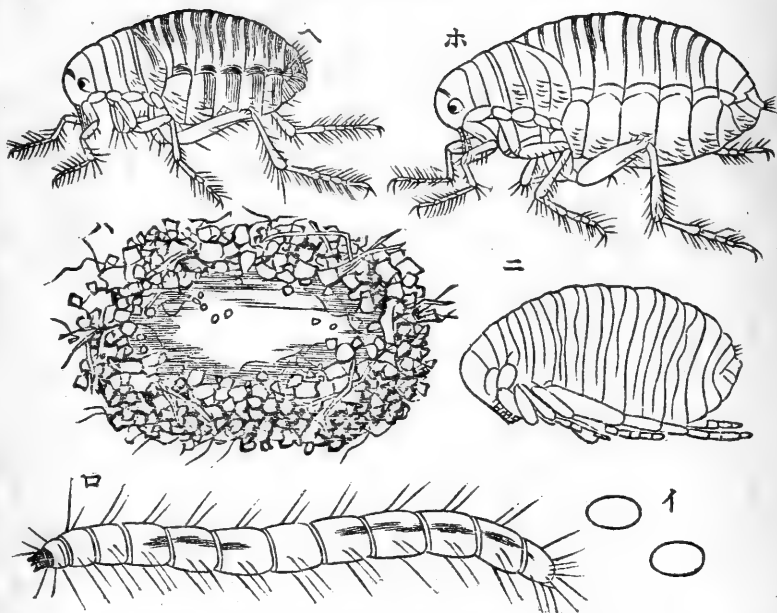
に至らぬでは、成蟲即ち蚤とは成れん事が明白で、其化育期間は則ち世人が未發生時期として、一向に注意を加へん大切の蕃殖期である。更之を適切に言ふと、唯幼老の相違があると云ふまでの事で成蟲となつて跳出すと、幼蟲で潜んで居る違ひはあるが、其蚤たるに於ては何も違ふ所が無い、故に夏に蚤害を欲せざる限りは、早く寒い間に、其巢窟を勦滅して、豫防するが宜いのである。

蛹期を経過して(ホ)兩圖の様な姿に變ずるのであるが、其中(ハ)は雄蟲で(ホ)は雌蟲である。扱此雌雄間に於ける形の大小の差は實に甚しいもので、古來、蚤の夫婦との譬喩さへある程である。嘗り大小の差がある計りのみか、又其色澤も、構造も多少は違つて居る。但し其動物を刺して生血を吸ふことだけは、雌雄兩性とも同様で、此點から申せば、彼の蚊子や蛇などは、餘程違ふて居る。……假令同ト衛生の害蟲とは言ひ乍ら……今更に之を學術的に申せば、ノミとは微翅目の蚤科に屬する昆蟲で、其種の多い中にも、人體に寄生するものは *Pulex irritans* L. の學名を有し、卵子は橢圓形で、幼蟲は淡灰白が、ツた地色で、頭が有つても足が無く、成蟲は口と脚が發達して居る代り、翅が殆んど退化し盡して、背上微か鱗狀の片板を残すのみで、觸角も極めて小さく、全身の構造が唯跳躍と吸收刺整に適合するやうに出來て居るのであるから、血を吸ふては其體の幾十倍の遠距離に跳ぶ役目を果すのも無理が無い。支那人は古くから蚤を解釋して、人を噛み跳ぶ蟲であると云ふてあるが、誠に能く其特徴を言顯はしてあると思ふ。そして此昆蟲は、舊式分類法では、双翅類に入れられてあつたが、近年之を特立せしめて、然かも微翅目てふ一目全部を占領せしめたのである。

以上は重に人體に寄生する種類の事であるが、外には犬の蚤、鳥の蚤、栗鼠の蚤、蝙蝠の蚤などもあつて、其宿主の違ふに伴れて、形質も多少變つて居る。昨年、我國へ來遊の英國の名士ロスチャイルド氏の談に依れば、氏が英國で集めた蚤の種類は、都合四十三種で、其中禽鳥のものが六種であるさうな氏はまた我が九州産のものをも集めて持歸つたが、其種類は未詳である。兎に角に、蚤の種類が意外に多いと云ふ事は、左の新聞所報によるも明確であるが、邦産のものも、恐らくは幾十種を算するであらう。

富豪ロスチャイルド氏の子息は、一種の蚤道樂を有して居つて、多くの蚤を集め、其種類を分けて見た處が、殆んど一萬種に及んださうで、中には随分奇妙な蚤もあつたが、其の中で最も珍らしいものは、北極地方の白熊の身體から獲た蚤、及び亞弗利加内地の或獸の身體から得た蚤などで、南米の某地に棲む土龍の身體から獲た蚤は、身長二分五厘もあつたさうで、この大きな蚤が、小さい土龍に寄生して居たのは餘程可笑しい。○蚤を捕へるのは随分困難であるが、座敷又は蒲團の上で捕るのとは違つて、野獸の身體から蚤

(大放) 圖 育 發 の 蚤



を捕るさいふこさは、餘程難かしい、若し或る動物を撃ち殺すに、蚤は直ぐに其の身體から逃げ去るから、動物の斃れるや否や、逸早く駈けて行かないと、目的物の蚤は得られぬ、これには非常の熟練と、敏捷の技術とが要るさうだ。

ロ氏の集めた蚤の中で、最も恐ろしいのは、南米地方に居るサーコピラバチウランスといふ蚤で、是は動物の皮膚の底に喰ひ入つて卵を産み落とし、遂に其動物を殺すことがある、若しこの蚤が、人間の身體について皮膚に喰ひ入つた時は、早速其の部分で切斷しなければならぬといふ事だ。○蚤の跳飛する力は、非常なもので、其身長四十倍を飛ぶさうだ、人間が蚤の割合に飛べば、二百四十尺の高さに飛び上ることが出来る譯だ。○昔し蚤に藝を仕込んで、玩弄品にすることが流行したさうで、何ういふ藝を仕込むかといふに、小さな箱を造つて蚤に曳かせたり、又身體の大きな雌馬に見立て、小さな雄蚤を其の上に乗せて、騎兵の真似をさせるなどは、餘程滑稽で面白いさうだ。○全体蚤は伶俐なものだから、根氣よく之に藝を仕込むと、随分巧なことを演るやうになる。嘗つて紐育の公園で、蚤に箱を曳かせる藝を演じさせて、公衆の觀覽に供したことがあつたが、同市の動物保護會は、蚤に馬具を付けるのを残酷だと言つて、大に運動した結果、この興行は遂に差し止められたことは、滑稽な話では無い。

鳥杏林氏は、蚤は赤色で、肥身小首、六足能く跳ぶ、夏月人家に濕熱の氣より生じて、自から牝牡ありと云ふてあるが、是は確かよ、古説を代表し、當時の眞理である。又其ノミと云ふ名稱は就き、貝原益軒翁が、蚤は血を飲む蟲であるからノミと稱するのである、と言はれたに引續へ、彼の大石千引大人は

此か少し蚤に關する雜説を述べやうな寺

ノミとはトミ(速蟲)かゝり起きたのだと書いてある、是は多分、六書正譌などを本としたのであらう。其他ノミはトビ(飛び)の轉語だとの説と、ノミ(退蟲)との説と二ツあるが、何れにしてもノミムシと云ふて無いのを見ると、血を飲むとの説は如何であらうか。又和名鈔や、新撰字鏡も、矢張ノミと訓まじてあるのを以て考ふれば、餘程古くから知られて居つた、衛生害蟲である事が明白だが、惜ひ事よは紀記の神話の條りには見當らん、併し支那の古い史書にはあるから、東洋に分布せられたのは、恐らく上古時代であらう。西洋でも四千年以前から、其特性を知つて居つたらしく、舊約全書の中「汝ノ杖ヲ伸べ地ノ塵ヲ打テえじぶと全國ニ蚤トナラシメヨト、彼等斯ナセリ、即チあるん杖ヲトリテ手ヲ伸べ地ノ塵ヲ撃ケルニ、蚤トナリテ人ト畜ニツケリ、埃及全國ニ於テ地ノ塵皆蚤トナリヌ、法術士等其秘術ヲモテ、斯行ヒテ蚤ヲ出サントシタリシガ能ハザリキ、蚤ハ人ト畜ニ着ク」とあるのも面白い。尙ほ佛國でルイ第十四世の時に、皇后陛下の思召で、御前に於て蚤の藝を演じさせた奇談も、右のロ氏の奇談と同じ紙上にあつた、斯る事は我國では未だ聞たことは無いが、山東京傳翁の本の中は、猫の蚤取と云ふ題があつて、猫一疋三文づゝで蚤取をした者があつた云ふ事を、西鶴の遺書から轉載してある、元祿正徳の頃には、随分奇妙な營業者もあつたらしい。又蚤が顯微鏡の検査をうけたのは、餘程後の事であるが、恐くは司馬江漢氏の寫生が最初で、次が森島中良氏で、次が栗本丹洲、高玄龍の二氏の放大圖であらうと思ふ、是は何れも、衛生の害蟲として研究せられたのである。

終りに蚤の驅防法に就て言ひ度いが、今は細説するの必要が無いと思ふ、何故をれば、除蟲菊の栽培が盛んなる今日であるから。併しうれば驅除法に就て言ふので、豫防法としては矢張昨今の中から、室内を清潔にすべきである。若し年に三回も四回も、床下から疊の間を掃除し、又屢々衣物などを洗濯しやうものなら、決して害を受くる事が無い、即ち蚤の多い家は不潔を意味するもので、潔癖家の處よは常に發生が極めて少ないのである。人よよると鼠が多いければ蚤が多いと申すが、是は誤りで、然様に人畜のものが混ざる氣遣ひは無いから取るに足らぬ。然らば豫防には、何時頃着手するが宜いかと云ふと、先づ各家の煤拂の時を以て第一着とするが宜い、即ち其同族の少ない間に掃除して、春の發生を促かさんやうにするが肝要である。其後、春暖開花の頃に一度、土用頃一度大掃除をしやうものなら、殆んど苦痛無しに安眠する事が出來て、一家の幸福は此上も無いのだが、何分不潔を不潔と思はん家が多いので、段々と蕃殖をさするのである。此際殊に注意すべきは、掃除をした時の塵芥を、必らず焼捨つるやうよ心懸くる事である。外に種々な驅除法もあるが、餘り煩はしいから、此邊で止めて置かうと思ふが、時機があつた、復た此續きを申さう。



◎六足蟲彙纂 (子の卷)

在岐阜市 長野菊次郎

(一) カイチン質 昆蟲の軀軀の外部を被ふ所のカイチン質 (Chitin) は、真皮細胞の分泌によりて生じたるものにして、蟲軀の脱皮といふことは、此部分を脱ぎ棄つることを謂ふなり。カイチンの名は、オーヂール (Ozier) 氏によりて名づけられたるが、ラッセーニエ (Lassaigne) 氏は之をアントモリン (Entomoline) と呼べり。其化學分子式につきては、種々の説ありて $C_6H_{14}NO_2$ 或は $C_8H_{16}NO_2$ とする人もあれど最近の研究によれば、 $C_{15}H_{30}NO_{10}$ なりと云ふ。

(二) 仔蟲の食量 ッラウベロット (Thouvenot) 氏は、亞米利加天蠶 (Telea polyphemus) が、五十六日間に消化する所の食量は、幼蟲の最初の重さの八万六千倍に相當すと云はれぬ。

(三) 蛹の色 鳳蝶の蛹は綠色を呈すること通常なれども、稀は褐色のものを見ることあり。箇は周圍の色彩に調和せん爲めの保護色にして、猶は彼の雨蛙が、棲息せる境遇の如何によりて、種々の色を表はすと同一理なり。嘗て或る有名なる英國の博物學者は、某蝶の幼蟲若干を採集して、之を一々異なる色紙にて裏張りしたる數個の箱内に分ち入れしに、應て蛹化するに及び、皆其箱の内部の色と、同色を呈したりきとあり。獨り色のみなならず、蛹の外部の状態も、亦已が靜止する周圍の状態に適應せることと、多くの昆蟲學者の既に認識せる所なり。

(四) 螟蛉の筋 ライフテット (Lyonet) 氏は、或る螟蛉は、三千九百九十三の筋あることを驗出した。而して其大部分は内部の機關に屬し、移動を助くる爲には千以上の筋ありとなり。昆蟲の移動力の非常あること、蓋し其理由あるを知るべし。

(五) 蚊の耳 蚊の類は、觸角に生せる無數の細毛によりて、音を聽くことを得べし、故に之を聽毛とは謂ふなり。今雄蚊の觸角を驗すれば、數百の細毛の叢生せるを見るべく、又調音叉を以て音を發する

時は、此等の毛の烈しく氈動することをも觀察し得べし。扱又各觸角の基部は、細きカイテン質棒より組成せられたる、最も精巧の器官ありて、此器は聽毛によりて得たる刺戟を、聽神經によりて腦に報すべき、神經纖維及び神經細胞を分布するも驚くべし。

◎ 蟲界の漫語 (第壹則)

千葉縣印旛郡 齋藤 啓 二

○花布紋蛾の發音 昆蟲類は發音するもの甚だ多し、其方法に就ては、先に長野氏の記されし如くなるが、此等の種類は直翅類に最も多く、鱗翅類は之を乏し。勿論鱗翅類も、其發音を知られたるもの、決して一二にして止まらずと雖ども、多くは皆口吻の摩擦、若くは翅片の振動作用等も因づくものなるべく、未だ悉ごとく此を以て特別の器官即ち發音器を具有するに依れりと謂ふこと能はざるが如し、而して眞に之あるは、唯々一のサラサモンガの雄蟲に於て見るのみ。そも、サラサモン蛾は燈蛾科に屬する黄色の小蛾にして、雄にありては翅の開張凡を一寸内外を算し(雌は稍大なり)、前翅上には數條の黒線及び紅色を交へ、恰も花文布の模様のおれに似て、外見甚はだ美麗に、其腹部には發音器を具ふ。余は去年七月十三日の夕、昆蟲採集を行へし際、桑樹を巡り乍ら發音する小蛾の飛翔を認めしかば、輒はち之を掬捕せしに、それ即ち此蛾にてありき。其音は恰かも天牛の發する音に髣髴として、十間餘の距離に於て猶は聽取するを得るより、余は其音によりて追跡を試み、尙は多くを捕へり蓋し雄に限りて發音器を具へ、雌に之を闕如するを以て考ふれば、他の蟲類のものと同しく、唯雄陶汰の結果たるや亦疑ひなし。其發音器の構造に就ては、他日更に精報するの期あるべきも、今は唯之を豫報し置くのみ。

○ピロウド コガ子 ピロウド コガ子は甲翅類金龜子科に屬す、黒剪絨様の軟毛を以て被はれたる

卵形の小甲蟲として、數多の果樹類又は十字科植物を食害す。此蟲は金龜子科の他のものと同じく、物に驚けば忽ち地上に墜落して、倉惶遁處を求め、土塊塵埃等の間に潜伏するも、之を發き出せば、復た周章狼狽の狀をなすの性を有し、彼の象鼻蟲科のもの、飽まで死狀を装ふとは稍其趣を異にせり。余昨年四月十六日、昆蟲採集の際、高燥なる臺地の畑中に於て、大麥の葉部の其だしく食害せられたるを目撃し、就て之を検するに、何ぞ圖らん此のピロウド コガ子の加害せしものならんとは。從來此蟲の十字科植物を食損するとは、常見聞せし所なりしも、斯くまで大麥に加害せんとは、露思はざりき。

◎食蟲動物の餌食研究に就て

在東都 林 壽 祐

食蟲動物の此地球上に分布して、其自衛の爲めは蟲類を餌食とせることの、直接も間接に、如何ばかり有益なるものなるかは、今爰にいふの要なけん。但同じく食蟲動物といふが中にも、終生蟲類を専食するものと、有脊動物の筋肉、或ひは穀類、草木の葉莖などを混食するものとあり。而して其價値の如何は、歸する所、餌食の如何によるものあれば、食蟲動物は恒に如何なる物を食するかを研究するは、必要の事にして、且つ早晚究めざる可らざる事業とす。古來、農を以て立國の大本なりと固信する我邦に於ては、果して是等の餌食を就きて研究する所ありしか、未だ研究する程に到らずとも、世人は常に動物の餌食に就て留意の傾向ありしか、と借問せば、食蟲動物は言はずもがな、一般の動物を就ても、よた留意する所甚だ微々たりさと答へざるを得ざる可し。而して今日に於てすら、唯食蟲鳥類の顯著なるものに保護鳥の名を附して、之が狩獵を禁得たるが如しと雖ども、未だ研究足らざるの故を以て、保護の恩恵を漏れたるもの、他に必ずや猶ほ多からんとは、識者の恒に愁ふる所ならずや。然れども、一般の動物につき研究するは、範圍廣きに過ぎ、且つ其餌食の何たるを穿鑿したればとて、煩勞を値ひずる利益の無きものも尠なからざれば、余は特に農業、山林、園藝等に密接の關係ある、食蟲動物のみを就き、其餌食を研究するを以て、目下の緊要務なりと信す。

邦産食蟲動物中、通常吾人の耳目に觸るゝものは、獸類に蝙蝠、狐、狸、猫、貂、家鼠、地鼠、田鼠、鼯鼠等あり。鳥類は鳴禽、撲撥、猛禽、攀木、涉水、遊水の諸類、何れも是れ食蟲性たゞざるは莫く就中、鳴禽類を以て、煩る饒多とすべし。爬蟲類には、石龍子、守居、水龜及び蛇の類あり。兩棲類は種類少けれども、蟾蜍、雨蛤、金線蛙、山蛙、土蛙、蟾蜍等、全類を舉げて蟲類を食とす。魚類は蟲類を食するもの尠なく、淡水産の鰻、鮪、鯉、鮒などの、僅かに水蟲及び水中に墜落せる陸蟲を食とす。にあるのみ。降つて無脊椎動物をいたれば、蜘蛛類に絡新婦、囊蜘蛛、螳螂、喜蛛、壁錢、蠅虎あり。多足類は蜈蚣、蚰蜒ありて、専ら蟲類を以て餌食とす。昆蟲類は種類多きを以て、食蟲性のもも尠なく、からず、蟻、蜻蛉、蜻蛉、豆娘、シホヤアブ、ムシヒキアブ、ヒラタアブ、斑猫、瓢蟲、ハチカクシ、サシガメ、アリモドキ、胡蜂、黄蜂、足長蜂の如きを其主なるものとす。而して姫蜂、馬尾蜂、蠅、蠅、蠅、カモドキバチ、寄生蠅の如きは、幼時に於ては、尺蠖、蜻蛉、螟蛉、毛蟲、烏蠅、夜盜蟲、螟蟲

蠅、葉捲蟲、蝗、甲蟲類及び他の蝶蛾類の幼蟲に寄生し、宿主の体肉を食盡するなり。均しく是れ蟲類を食滅すといへ、其餌食の種類によりては、却て吾人に有害なることあり、例へば龍蟲は水中の諸蟲を驅除すると共に、池沼等に養ふ幼魚をも食害し、寄生蠅は烏蠅、毛蟲、夜盜蟲などに寄生するを以て農作物に利益あれども、蠶兒には大害を加ふるが如きはあり。乃はち有益種といひ、有害種と云ひ、皆其益害を比較して命名せしに過ぎざるを知るに足らん。而して其區別を明確ならしめんには、主として其餌食を研究せざるべからず。抑も邦産の食蟲動物は、其類多しといへども、百種左右に止まるべく、之に反して昆蟲類に至りては、既に數萬種の多きものありと云はずや。特に動物の食を索ひるや、或は樹間叢裡に於てし、或は竅隙石陰に於てし、或は薄暮深更に於てし、且つその人影を見、避音を聽くの一刹那、巧みに隱遁潜伏を事とするを以て、之を究明するは多くの時間を費さるべからず。而して容易に之を成就せんと欲せば、勢はひ多くの人に頼らざるべからず。本邦もと科學思想に乏し、然はいへ今や幸に頼るべきの人に乏しからず、其頼るべきの人とは抑も誰ぞ、曰く本誌の讀者諸氏はなり。思ふに讀者諸氏は常に昆蟲の研究に従事し、又蟲類と植物とは如何なる關係を有するか、食蟲動物は如何に裨益を與ふるかは、業に既に熟知せらるゝ所ならん。是故に余は讀者諸氏と共に、平素食蟲動物の餌食を研究調査し、其調査の結果としては、有益種と有害種とを推斷し、斯くて明かに食蟲動物の價值標準を立てなば、農業山林園藝上の効益實に尠少なからざる可きを信ず、蓋し斯の如きは亦昆蟲類を學ぶ者の、當に進んで自任すべきの責務なる可ければあり。希くは熱誠に富める諸氏の微衷を諒として、此舉に賛同せられんことを切に望む。

◎昆蟲學發展の一方案

岩手縣氣仙郡 鳥羽源藏

近年、本邦に於て、昆蟲學に關する著述、報告、圖書等の公刊せらるゝもの、漸やく其數を加へ、また昆蟲を研究する者の競ふて各地に起れるは、誠に賀すべく慶すべき事ならずや。然はいへ、是等圖書類は、斯學を研鑽せんとする初學者に幾何の利便を與ふるか、或ひは反つて、錯誤を傳ふるものに非ざる無きやを想ふ毎に、萬感の交々胸臆に往來するものなきにあらず。試みに、各著書の昆蟲名稱を比較せよ、其記載の事實を對照せよ、甲書の蟲名は乙書と異なり、丙書の記事は甲乙とまた異なるものあらん

是等のこと獨り著書間に止らず、口舌を以て説明する各講演者の言辭に徴するも、往々同一の感想を抱かしむるものあるは、斯學の發展上、無上の一恨事にあらすとせんや。故にそが異同を辨へ、そが是非を確めんとせば、自から實驗を経るにわづざるより、得て昆蟲學の初歩ども正確に悟了する能はざるものあり。斯學の研究も亦難い哉。

凡そ、一昆蟲の生涯を記述するに當り、其形態の大小、色澤の如何、食餌の種類、發生及び發育の状態、生命の長短、動植物との關係、驅防、保護の方案等の如きに至りては、特に、各地諸般の狀況に應對して多少異同を來すは、理數の免る能はざる所なれども、然かも顯著の事實に於て、時に、甲者の誤謬たるを顧慮せずして、世に吹聴せしを、乙者更に之が誤謬を丙に傳へ、丙者誤謬を重ねて之を丁者に傳ふるに至りては、豈に歎すべきの事ならずや。特に其分布即ち產地等を擧ぐるに當りても、頗る不備の者あるが爲め、屢次、本邦昆蟲學者は、斯くまでも邦産の昆蟲は暗きかど疑はしむる事無きもあらず。則ち他の正確なる記述に於ても、また反つて疑惑心を起すことなきにしもあらざるなり。頃日、某々書を繕きしに、某蟲種は九州にのみ産し、某蟲種は國産にあらず、某蟲種は某地に限りて發生すと、焉んぞ知らん此は既より早く、我が東北地方に於て、屢次採獲せしものならんとは、嗚呼これ本邦昆蟲學の猶ほ幼稚たることを証するの適例にあらずや。去れば過去の事歴に省み、前途の遠遠を豫想すれば、本邦昆蟲學の爲め、其發達を計るの方法を講究する亦無用にあらざるを知るなり。

凡る事業の成否の、衆人協力の多少は密着の關係あるは、著明なる事實にして、昆蟲調査に於ても、亦甚はだ然るを見る。今本邦の昆蟲學上、調査を要すると多々あれども、先づ斯學の基礎たるべき、所産の蟲名、分布の狀況は、今猶ほ暗黒の裡にあるにあらずや。假し明白のものありとも、歳時を経るに従ひて異動を生せしや論なきあり、而して是等の調査は、實は難事には遠はざるも、各地に於ける有志の協心戮力に求めなば、其成效蓋し極めて速なるものあらん。試みよ之が調査方法を概説すれば、斯學の先輩を推して調査主任となし、今年は天牛科、明年は金龜子科、次年には蜻蛉類に移ると云ふが如き順序を以て、毎年一科若くは二、三科を限り、各地有志調査團體を作るも可ならんより其採集種の普通品たるを、將た珍異たるに論なく、悉くこれに調査本部に寄贈することを實行するにあるのみ。名和昆蟲研究所員何ぞ奮勵一番、各地有志に激して、其欲する所の蟲屬を望まざる、又何ぞ各科得意の専門家の爲めに、其勞を取らざる。否各専門家は何ぞ自から進んで調査の任に當り、又その要望の研究

材料を求めざる。意ふよ本誌の讀者は、全國に洽ねく、常に多くは昆蟲の採集を實行するの士人たらん而して此等の同志が種々の辛苦に依りて收蒐せる標品を寄贈するは、一時、空しく掌裡の璧を失ふの感あらん、然れども是等の標品集合して、遂に斯學に光明を發射するの要素たることを思はば、聊さか斯學に熱誠ある諸氏の心を慰むるに足るものあらん。況んや一旦失ひしと想定せる標品の他日妍美精彩の圖版となるものあらば、後學の啓發誘掖に資すべきの便多々あるべきをや。余は常々、講學の材料を蒐集寄贈するは、眞に學界の美事善行と思惟するを以て、愚案固より妙趣あるも、全國同好の一致協力に於て、始めて本邦昆蟲學に一段の進歩を來すべしと信ず、敢て所思を陳辯すること爾り。

編者云ふ。鳥羽氏の意見は時事に的切なるを以て、常昆蟲研究所また一臂の勞を取るを辞せざる可し。但氏は第一回全國昆蟲展覽會開設の旨趣書を讀み、又昨年三月發行の昆蟲世界「昆蟲分布の調査に就て」に於てふ雜報を閱覽せられたらんには、よも斯く當所を責むるに急なること能はざるべし。又鳥羽氏にして眞に分布調査材料の集成に意あらば、何ぞ當つて自から其摸範を世人に示さざる、是れ編者が氏に對つて、特に辯じ且つ望まざる可からざる所以なり。

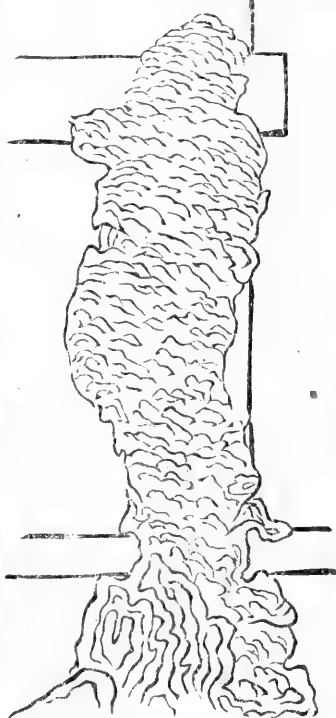
◎蟻塚の構成に就て

千葉縣長生郡 高橋 徹 一

蟻は膜翅目ニ屬する昆蟲にして、其軀體微小なりと雖ども、其性や敏慧に、能く智力と勇氣とを兼備し忍耐勉強の力飽まで強く、如何なる困難も遇ふとも決して屈撓することなし。而して此蟲の最も奇とすべきは、團隊の爲には、身を犠牲に供するまでの公義心も富み、一巢の中は社會生活を營むに當りてや、規律嚴正にして能く女王の統帥に服従し、又時としては他の蟻群との間も戰鬪を開始し、敵壘を屠りては其糧食を奪掠し、且つ敵兵の降るものをば收め捕へて、永く俘虜として之を役使し、或ひは牧畜を營み、時には一種植物の栽培收納を爲す等、其靈智眞に驚くべきものあり。而して其棲居即ち蟻巢には、微小なるものと、巨大なるものとの別ありて、之を地中若くは朽木の空隙等、常に外敵を避け雪雨の浸透せざる好適地を擇びて建設し、容易に其内部を窺ひ知ることを得ざらしむ。而して其巨大なるものは高さ數尺に達す、世に之れを蟻塚といふ稀に見る所のものたり。凡る蟻群の之を造るや、先づ建築の材料として朽木小枝木葉等を拾集し、微細に噛み碎き後層層を累積せしむるものにて、其色多くは暗黒、外觀如何にも粗雜あるが如きも、其内部の構造に至りては頗ぶる精巧を極め、王室あり、育兒室の

り、貯藏室あり、區劃整然、配置亦能く各々其の處を得るに似たり、豈に感すべく又驚かざる可からずや。然れば其種類習性より生殖變態等を子細に觀察したらんには、進歩勤勉の度、或ひは反つて人類の鑑戒に供すべきもの無きにしもあらざる可し。往時、天保年中、我が上總國東金町喜多村氏の倉庫内に稀世の大蟻塚あることを發見せしに、四方喧傳、來觀するもの多かりしが、爾來數十年の星霜を經過し處々漸やく歛損を生じたるも、原形今猶は依然として、同家に保存せらるゝといふ。余頃日篋底を探りて偶々該圖說一葉を獲さり、蓋し弘化中の梓行にかゝるもの、頗る珍異に屬するを以て左よこれを轉寫し、況く江湖同好の劉覽に供せんとす。

怪力亂神を語らずとは聖門の教、世の諺に蟻の堂といふ事あやしきものみ思ひつるに、今したしく是を見る、至微のものといへども性識の靈なる、人こゝろを感動せしむる者あり、遂に圖し其事實をしるし、世の誠となすに至る。此喜多村氏の家は、東金町を邊田方村といひしむかしより、近き頃まで火災をまねがらるゝ事數度、人こゝろをもつて奇異とす、天の祐る所積善の餘慶なるものか、幾させ數蟻の倉中に集り、かゝる圖のごとき莫大の業を仕出せるも、さもに珍らしく、世にも又稀なるべし、是奇妙の事にあらずして、至微の昆蟲といへども、火難の愁なき性識の靈、自然感通するなるべし、數萬の蟻こゝろを一致に和し、日夜勉勵し忘らず、志を達するに至る者は、思ひの天へ通するともいふべし、古諺曰、鶴鳴于垤(注曰蟻場謂之垤)亦謂之垤一以レ至者以三蟻之微一而能爲垤用二其至一也云々)予も今つくく見て感愴にたへず。夫人は萬物の靈として三才の一にありて、五尺の体を具し五常の理をうけながら、己が私情に迷ひ天の靈をくらまし、念情に流れて行て、歸らぬ年月を空數送り、木石といふも枯果るば、此蟻のために笑るゝ人の、人にして豈蟻にはづべけんや、見よ古人の文字を制するに、一字一點意をつくさざるなし、虫篇に義の字を用ゆるもむべなり、百歩の遠きにはしり、一往一返行列を亂さず、一食を得て衆蟻力を合せて是をさもにす、己が居る河を察して居るものは智なり、衆と力を合せて争はず、さもに勉て忘らざるものに義なり、年を経て守りうしなはず、正きをもつて道をゆづり争はぬものは仁なり、入々此



上總國山邊
郡東金町喜
多村甚左衛
門倉中蟻塚
堂眞圖
(高サ五尺
餘寸圍三尺
ヨリ尺八九
寸ニ至ル)

を深く思ひ、此蟻塚にならひ、一致一和道を守り、怠らず功を積まば、いかなる大業も亦なし得べし。古記曰、蛾子時術之（蟻子者、蟲之微者時術土而成大塚以喻學者由積學而成大道也）此にみづからも興起して圖し、世に傳ふ事とはなりぬ。

東峯舍直諒圖併記 喜多村氏 梓行

編者云ふ。蟻塚の大なるものの本邦に少なきは、本文にあるが如し。聞く、山梨縣甲斐國舊巨摩郡内には、其高さ四尺若くは其以上のもの數處もありて、中にも某寺に現存するものは特に大なりと記して以て讀者の參考とす。

◎蜻蛉の保護を如何にすべきか 静岡縣磐田郡 神村直三郎

蜻蛉は昆蟲類中、普通の種類にして、最も人目も觸れ易く、且つ常に兒童の玩弄となること多きものなり、これ一には其体格大きく、種類多く、且つ發生の夥多なるもよるべけれど、又一には其發現期の春初より秋末まで殆んど絶えず現はれて晝間飛翔することの多きにより、斯くは人目に觸るゝなりと思はる。「蜻蛉釣り今日はどこまで行たや」とは、加賀の千代女が其愛子を失へる時の吟なりと聞けるが、此吟を咏出せしめしを以て見るも、兒童が蜻蛉を釣りに弄ぶことの古今相同じきを知るあり。隨ひて此種に關しては俗説、歌謠、俳句、繪畫等も多く、扱は國號をさへ蜻蛉洲と誇稱するなど、極めて淺からの關係を有するなりけり。

然らば蜻蛉は如何ばかり効益を與ふるものなるか、是れ應用昆蟲學上注意すべき問題なるべし、然は云へ、常に農作物の害蟲を除くこと夥しきを認むるを以て、直ちに益蟲と稱することを憚らざるなり。今其一二を云へば、晝間も多く飛揚するイチモジ、ハナセ、リ、テフ及びモン、シロテフを捕食すると數を知らぬ程にて、蜻蛉の惹く竹木の枝の下に注目すれば、鱗翅類の翅片鱗粉の散乱せるを見ることを得ん「蜻蛉やとまり直して元の枝」とは、古くより人口に膾炙したる名句なれども、此とまり直す蜻蛉の蟲を捕りては復た舊の枝にとまることは、此句を味ふ者は勿論、恐くは作者自身も悟り得ざりしか。然れば「蜻蛉や蟲を捕へて元の枝」と改作せば實際は適へりと思ふなり。又カトリ、トンボなる一種あり、これに就き數年前或人の蜻蛉はなべて蚊を捕ふるものあるに、此種に限りてカトリの名を冠せたるは訝かしからずやといへるに、余は殊によく蚊を捕食するが故に、此名を負はせたるるべしと答へしことありしが、其後伊吹山採集の際、其山麓の上野村に宿りて夕景は小徑を散歩せし、此村は殊に蚊

の多かるに、亦これを食ふ此蜻蛉の發生も非常に多くて、四隣の景物の判明せざる薄暮に至るも、猶ほ屋後、樹下さては溪流のはどり杯に往來して、頻りに蚊族を捕食ふ勇壯の光景を目撃して、始めて其名稱の至當なることを確めぬ。斯がる形跡より推せば、蜻蛉は亦一の衛生上の益蟲とも云ふを得べきか。世にギンヤンマを指して、蚊の鷹と云へるも、蓋し蚊を捕食するに輕捷敏速なるの状を形容するなる可し。扱邦産の種類はと問はれ、七拾餘種ありとの事なるが、其中吾が遠江には、三拾種以上もあるべけれど、今名稱の明があるもののみを擧ぐれば。

- ギンヤンマ ○コヤマトンボ ○アチトトンボ ○ウチハトンボ ○コシホソトンボ ○カトリトンボ ○シホヤトンボ ○シホカラトンボ ○オホシホカラトンボ ○ヤマトンボ ○ハラビロトンボ ○トラフトンボ ○サナヘトンボ ○オホサナヘモドキ ○ロメヤマトンボ ○ミヤマトンボ ○シヤウダトンボ ○ウスバキトンボ ○ノシメトンボ ○ナツアカチ ○コシアキトンボ ○テフトンボ ○カハトンボ ○ハゲロトンボ ○アチイトトンボ ○キイトトンボ ○モノサシトンボ

この外尙數種は確かに産することを知ら、其種類亦少なしと謂ふ可からず、蓋し其種類の少をからざるのみならず、其發生の數頗る夥多にして、幼蟲の河川、池溝、水田等に栖めるもの、到る處多し。斯く多種多生の蜻蛉の田圃は、庭上は、樹陰に、叢間に、其閃めける露眼と、其鋭き堅腮を開きて、春花の綻ぶるに先ちて出で、秋霜の紅を染むるに後れて尙其同族の飛翔するを見ても、其腹を肥さんが爲めには夥多の害蟲の斃ざるものあるを悟るに難からず。而て次に起るべきは、これが保護の法に關する問題であらん。

蜻蛉の保護法としては、先づ小兒姝に學校生徒の之を捕殺し及び玩弄することを禁じせば可なりと説くものあり、又稻田の處々に竹を立て、これに憩ひしむるを良策とすと説けるもあり、然かも今日は同じく竹を立てるとならば、枝の多き竹を撰ぶべしと迄に進めり、是れ祝すべきの現象とやいはまし。然し乍ら、蜻蛉の保護はこれにて盡くせりと謂ふ可からず、蓋しその捕殺を禁ずるは、根本的保護の一方なれども、奏効の如何は之を知るに由なきを以て、單に有効法とすべきのみ、又竹を立つるは、蜻蛉を呼集め及び憩はしむるの法としては良好あるべけれど、去りて發生を多らしむるにもあらず、又斃死を少なからしむるよもあらず。依て次に其發生を増し、及び死滅を防止するの手段として、一二の卑見を言はんとす。

余が居に瀕せる用水路は、毎年秋季に水を落すを以て、涸水の際には魚族箱中に捕はる、此時蜻蛉の幼蟲は、或は畦畔に濁水と共に放出せられ、或は泥土と共に田上に擲棄せられて、空しく鮒轡を學ぶもの數を知らず、因て余は常に兒童を役使してこれを拾集せしめ、或は水器に養ひ、或は池水に放ちて其生を全ふせしめたるに、後には兒童なござるも、此幼蟲を見れば余が許に持來る者すらあるに至れり、これ死滅の幾分を防ぐの一例となべし。蜻蛉の産卵は必ず水面より於てするものにて、其水乏しき時よりは、能く庭上の雨潦も産卵す、故に雨潦の盡くると共に、其卵子は孵化力を失ふり、又は壓殺せられて、生殖の目的を遂ぐるに能はざるの虞あり、而して此難より救出して、可成多く産卵せしめ、且可成多く發生せしめんとせば、稻田の各處に可成多數の小池を設け、年中少許の水を貯る時は、蜻蛉は喜んでこれに産卵すべきを以て、幼蟲は水の下に越年し、應て翌年よりは羽化すべし。人あり、これ云ふべくして行ふべからざるの論なり、譬へば一段歩か一町歩毎に一坪の池としても、稲作は莫大の減損を見んと。これ一理あきならざるも、池底には、慈姑若くは蓮を植ゑ置くべく、又一年一二回これを浚ふ際には鰻鯰等をつふるの利あれば、稻の利益に増さるゝも劣ることはあらざるべし、現に各地方にて宅邊の田中に數坪の水溜りを設け、これに杜若、川骨等を植ゑ、又鯉を養ふ事は、常に田舎に見る所にあらずや、畢竟これを一步進めて益蟲を保護せんとの希望は出づるのみ。而して其得喪に至りては、余は一に之を大方識者の垂教に斷定せんとす。



◎島根縣下の兩害蟲調査報告

島根縣農事試驗場

田中房太郎

此調査書は第八回島根縣農事試驗場技手並びに農事巡廻教師協議會の決議に因づきて、試驗場及び吉田、八田の兩分場の調査は、各郡農會に於て調査せる所を加へたるものに係り、事は明治三十四年に屬す。斯學研究資料の一助に供せらるゝことを得ば幸甚なり。(編者云々、原書は三十餘枚にわたる精細の報告なるも、先に一たび之を全載せし事あれば、今はたゞ其要處の一部を抄出するに止めり)。

○ 螟蟲の部

螟蟲と地形、田畑、乾濕、肥瘠、寒暖並に稻種、栽培との關係は左の如し。

本場 山谷谿間よりは平原に多く、殊に家屋の近傍、道路の兩側、藪蔭等に多し。肥地に多く、瘠地に少なし。寒地に少く、暖地に多きが如し。稈の大きなものに多く、稈の小さなものに少なし。即ち龜治種の如きものも多く、小腹種の如き種類に少なし。有機質肥料を多量に施し、所謂大出來のものに多く、密植と疎植とは關係なきが如し。されど苗代は於ては厚播よりは、薄播に産卵多きが如し。

八束 肥沃地に稍や多き傾向あるが如し。稻莖柔軟肥大あるものに多く、強剛細小なる種類に少く、

早植多肥のものに多きが如し。

大原 道路高地畑に接近したる場所は、牛馬の糞、其他肥料分の雨水の爲めに流れ來り、稻莖の軟弱肥太に生育するを以て、螟蛾好んで産卵す。田畑兩者中には田は多しとす。乾濕に就ては濕田は多き傾きあり。又肥瘠寒暖に就ては、肥沃にして暖地に多し。稻の種類に就ては確實なる調査を得ずと雖も軟弱肥大性の稻種は寄生多きと疑ひなし。

仁多 地形は概して平坦地又は向陽の傾斜地、風の透過惡しき温暖地は發生多し。田畑共に同様に蝕害す。濕地は乾地に比して多少多きが如し。一般に肥地は瘠地に比して寄生多し。土地の寒暖に就ては一般に向陽平地の温暖なる部分は、谿谷山間の寒冷なる部分に比し發生被害共多し。稻種との關係は明かす。栽培との關係は概して窒素肥料の多かりしところ、及早植のものは被害多きを見る。

飯石 地形に就ては家屋堤防道路其他山麓等を以て遮られ、空氣の流通惡しき所謂風籠の地は多かりしを見る。土地の乾濕に關係少なきやの感あり。肥沃ある地に多くして瘠地並に寒地に少かりし、現に本郡の如き與飯石には殆んど其隻影もなかりしも、口飯石即ち掛合吉田以北には多かりき。稻種に就て云へば極小筋なるもの即ち大關種の如きは被害少かりしも、彼の害蟲に抵抗する力強勢ありと唱ふる龜治種の如き亦被害少からず。栽培上の關係よりすれば、第一化生はありては、早植に最も多くして晩植に少く、第二化期にありては、全く之に反して、晩植せしものに多く、早植せしものに少かりし。施肥との關係上に就ては、人糞尿又は草肥等、速効肥料を多量に施せしもの所謂柔出果をなせしものも多し。

簸川 土地の乾濕肥瘠乾地に少なく、濕地に多し。肥地は多く瘠地に少なし。陰地等の寒地に多く、暖地に少なし。糯、小天狗、彦四郎種は少なし。粗植に多くして密植は少なく、大苗は多くして小苗に少なし。安濃 道路、堤防等の傍りに割合に被害多し。陸稻の栽培少なきを以て明言する能はざるも、田畑に

差なきが如し。乾地よりも湿地に多きが如し。肥瘠に至りては未だ調査十分ならず。暖地は寒地より發生加害總て早し。中稻に最も多きが如し。稿稈の軟弱なるもの多き傾あり、福山稻の如きは螟蟲に罹り易し。苗代に於て苗の軟弱なるもの、葉色の濃厚なるもの、薄蒔あるもの等は螟蟲多し。又他の田區より獨り早く移植せるものには被害多し。

邇摩 空氣の流通悪く、殊に南北に山を扣ひたる溪間に多かりし。土地の乾濕の關係は別々異なるを認めず。土地肥沃にして窒素質多量に、稻の濃緑なるには被害多く、瘠薄にして稻の生育不十分なるに其害少なかりし。海岸部と山間部は、氣候異なるを以て、海岸部は發生早く、山間部は遅るゝも、第二化期に至りては大差なし。莖稈軟弱なる種類は、強硬なるものより被害多し。當試驗場に於ては福山種最も害多し。

邑智 總て人家の附近又は空氣不流通の土地に多く、乾田より濕田多し。稻栽培法との關係は、軟弱なる稻に發生多し。早稻よりも晚稻多し。

那賀 窒素肥料を多量に施したる稻、及稻莖の太き種類は被害多きが如し。

去田分場 土地肥沃にして且莖の大ある稻を栽培せしものは、其被害多きが如し。殊に綠苗を植へたるものに甚だし。

八田分場 畑に接續する田に多き傾向あり、特に濕田多し。肥沃の田地殊に人家の屋汁の流入する處には、其然らざる處よりも常に多し。土地の寒暖に對しては差異なきが如し。稻種により被害の多少左の如し。

(被害少なき稻種) 宗五郎、竹成撰、大國、五石代、奈良、關取。
(被害多き稻種) 皇國、豐前種、五ヶ防圭、知己、龜治、彌重、室撰、晚源藏。
(未完)

◎土佐産の蟲報 (第八)

高知縣土佐郡 武内護文

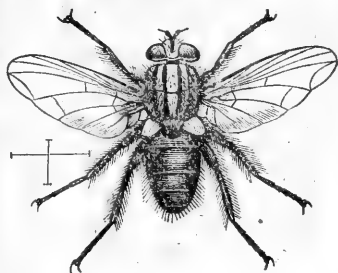
此日中蠶蠅及び牛蠅の二科は、他日縣下畜産の興る時を待て實驗を期す、又微小種にして所屬の不明なるものは、疑ひの儘近似の科中に出す。

○双翅類、家蠅科 (一)ダイコンバハ。(二)ムギノハムクリバハ。(三)ナノハムクリバハ。(四)

イハバハ。(五)コウシバハ。(六)カマキリバハ。(七)クロバハ。(八)キンバハ。(九)マダラ

ハハ(十)シマ(ハ)ハ(十)クソ(ハ)ハ(十)カヒコノウシ(ハ)ハ(十)地蠶の寄生蠅 二種
 (十四)天蛾蠅の寄生蠅。(十五)稻蠶の寄生蠅。(十六)稻の苞蟲の寄生蠅。(十七)大螟蟲の寄生蠅。(十八)金毛蟲の寄生蠅。(十九)蔬菜螟蛉の寄生蠅。(二十)薑螟蟲の寄生蠅。(二十一)稻の螟蛉の寄生蠅。(二十二)襍黑横枝蟲の寄生蠅。右の中、(一)は十數年前、大根に蛆害の状ある事を檢出して、成蟲は羽化せしめたるをあり、蓋し此種たるを疑はず。(二)は往々麥類に加害するを見る、又自然生の禾本科植物にも發生す。(三)は菜葉を蝕害す、到處に多少之を見る。(四)は最も多く發生す。(五)は(四)に似て少しく短小に、色稍黄味を帯び、牛馬の血液を吸ふものならん。(六)は夏秋の頃多く稻田に飛來す、即ち褐色横枝類の蕃殖を極むる時よして、よく横枝蟲の幼蟲を捕食す。(七)(八)は肉臭の在る處には常に之を産す。(九)は往々樹間に於て之を獲べし。(十)(十一)は圃場に於て多く之を見る。(十二)は全縣下の養蠶家に、必ず多少の害を加ふ、一年二化するもの少なからず。(十三)以下は皆主蟲の飼育中に獲たるもの。(十三)の一種は体長約を五分、短大にして腹部に赤褐の二大斑を有す、他の一種は体長約を三分、形態は普通寄生蠅に見る所と同じ、共に各種の夜盜蟲より出づ。(十四)は蘆薯の害蠅を剖解の時に獲。(十五)は短翅稻蠶の成蟲を切割して偶然之を獲たるもの、共に体長三分許、普通蠅蛆の形態あるも、未だ其成蟲を得ず。(十六)はイチモジハナセ、リテフの加害地に、必ず多少これよ伴ふ。(十七)(十八)(十九)は共に其色灰黒、体長二分五厘許、寄生蠅は普通見る所の形態を具ふ、而して此三者は、殆んど種別を明にすることを得ず。(二十)は

(蠅生寄のシムリクマハ)



形状、彩色、亦大差あるを見すと雖ども、体長一分七八厘あり。(二十一)は体長(二十)と大差なきも、色帯褐淡灰黄なり。(二十二)に至りては、其形態大よ上出諸種と異あり、体長一分二厘許、腹部は七節上方細長、頭幅は胸部より大よ、翅下に鱗片を缺く、形偽蜂蠅に似たり。而して複眼は頭上に於て極めて相近接し、頭頂の後方には三個の單眼ありて、觸角は三節、刺毛側より出づ、秋期ツマガロヨコバヒの成蟲を切割して、偶然其寄生を見たり、幼蟲は紡錘状を呈す。其後夥多の主體を剖開したるに、十中六七は、之が寄居するを實驗せり。

○喰蚜蛇科 (一)ハナアブ。(二)モモアブ。ハナアブ。(三)クロハナアブ。(四)ヒラタアブ。(五)

クロヒラタアブ。(六)ヒメヒラタアブ。此六種は、最も普通とす。就中(四)の幼蟲は圃場に多し。
 ○長吻蛇科 (一)ピロウドツリアブ。(二)ツリアブの一種。此中(一)は早春花上に多く。(二)は
 秋季稀に之を見る、躰形(一)に似て形稍大、翅は透明、躰毛は淡灰黄にして、全身に他の色彩を飾らす。
 ○長脚蠅科 アシナガバへの一種。是は躰長二分許、躰色金緑にして、春季紫雲英田に多し。
 ○黄蠅科 此科またシギバへ科とも云ふ。然れども未だ之を斷言するは憚かるものあるを以て、代
 ふるに左の寄生種を以てせん。

ナ、ホシテンタウムシ蛹の寄生蠅 躰長七厘許、胸部大に膨腫し、腹部小さく頭部更に小なり。翅
 は長く透明に、脚は頗る長くして腿節は太く、後脛節端に長針毛あり。全躰黄褐にして腹部は黒斑
 を印し、雌(未だ雄を認めず)の尾端は長く突出す。複眼は半球形にして青黒色を呈し。三個の小單眼褐
 あり、而して頭胸脚等に生ずる夥多の剛毛は黒色を呈す。去三十四年十月七日生瓢蟲の蛹に寄生せるを
 目撃し、採り來りて再び成蟲を得たるものにして、現時はアルコールに浸藏せり。

◎岐阜縣郡上郡の蝶報

岐阜縣郡上郡上保村 増田健藏

昨年本務の餘暇を以て、本郡内にて採集し得たる蝶類を左に報道す。此他なほ蝶蛾より甲蟲等二三百種
 あるも、何分名稱不明のため詳記すること難し。又茲に報ずる所の名稱は、宮島氏の命名を多く採用せ
 しが故に、多少普通名と相違の點もあるなる可し、讀者これを諒とせよ。

- 鳳蝶科 ●アゲハノテフ ●キアゲハ ●テフ ●ミヤマカラス ●アゲハテフ ●クロアゲハノテフ ●ヤマシヨラ

- 粉蝶科 ●ウスバシロテフ ●スザグロテフ ●モンキテフ ●ヤマキテフ ●キテフ ●ツマカグロキテフ ●モンシロテフ

- 蛺蝶科 ●サカサハチモンシテフ ●キタテハテフ ●ヒナドシテフ ●ルリタテハテフ ●アカタテハテフ
- ヒメアカタテハテフ ●ウラギンヘウモンテフ ●オホウラギンヘウモンテフ ●リヨクシヨクヘウモンテフ
- クモガタヘウモンテフ ●メスグロヘウモンテフ ●コミスザテフ ●ミスザテフ ●ガホミスザテフ ●イチモン

- 環紋蝶科 ●ムラサキテフ ●ムラサキテフ ●ヒメシヤノメテフ ●ヒカゲテフ ●ヒメキマダラテフ ●キマダラテフ ●モドキ ●シヤノメテフ

- キマダラテフ ●ヒメウラナミ ●シヤノメテフ

- 天狗蝶科 ●テング テフ
- 小灰蝶科 ●ヤマト シジミ テフ ●ベニ シジミテフ ●クロ シジミテフ ●ウラギン シジミテフ ●ウラナミ シジミテフ ●ツバメ シジミテフ ●トラフ シジミテフ ●ギン イチモンジ セセリテフ ●ホソバ子 セセリテフ ●コ チヤバ子 セセリテフ ●オホ チヤバ子 セセリテフ ●イチモジ セセリテフ

◎昆蟲月報 (第七信)

第八回全國害蟲驅除講習修業生

埼玉縣 櫻井 倚 研

九月 此月は氣候稍順に近かりしも、なほ曇雨にて冷涼に過ぎ、蟲類の現はるゝもの至つて尠なかりき。一日始めてクサヒバリ、ウマオヒムシの鳴聲を聴く、且つ之を捕ふ。二日農學校室内にてスバメガを獲たり。此日第二化のカノコガを見る。三日ミスヂテフ、ヒメアカタテハ、シヅミテフの二種を捕ふ。四日第二化ヒメジャノメテフを獲。五日ケウジョウラウ及びヒメゴマダラテフを獲。八日スヂキリムシ卵塊の寄生蜂出づ。九日ハンノキケムシ卵の寄生蜂出づ。十日クハノエダシヤクトリガを厨房の白壁上に捕ふ。此日亦キンケムシ蛾を獲たり。此上旬に多かりしはクサヒバリ、ウマオヒムシ、カノコガ、セヂスバメ、エビガラスバメ、キマダラテフ、ヒカゲテフ、獨角仙、コムラサキテフ、クハシヤクトリ蛾等なりしが、ウスイロコジヤノメテフは殊に多かりき。十一日クハケムシ孵化す。十六日始めてカマキリの成蟲を見る。十八日第二化のイチモジセ、リテフ及びハナセ、リテフ甚だ多く羽化せるを見る。十九日アキアカトンバウ(方言)盛んに出づ。二十日スヂグロテフを獲たり。此中旬にはヤママユノガ、ハナセ、リノ二種アキアカ子、クサヒバリ多く、ウスイロコジヤノメ、エンマコホロギ、コホロギ、クウハムシまた甚だ多く、ナラノタマバチの蟲癭、エゴノハナブシ裂開して成蟲出で、檜のイガヤドリバチの毬膨れ出でたりき。二十一日ホタルガを獲。二十三日ヒメクツハムシ(?)盛んふ啼きはじむ。此下旬は雨又は暴風來り、冷氣頓に加はりし等にて、眼に映する蟲類も少あく、多きものどてはコホロギ、アキアカ子、ハナセ、リノ二種とキテフ等にて、其他は全く鳴聲を止むると共に形體をも隠しき。

◎昆蟲に關する葉書通信 (第二十九報)

(一五七) 誘蛾燈の俗曲(宮城縣仙臺市、採蟲陳人) 螟蟲を點火誘殺するは、害蟲驅防の一方たるに違

はざるも、この月夜に効なく、將た風雨の夜は効無さを思はず、強めて之を執行せしめんとするは、も何の心ぞや。陳人屢次之を實地に試みて、其困難の尋常にあふざることを感じ、乃はち誘蛾燈は俗曲を作れり。古人は春宵一刻の價ひを、千金と評定せしかども、點火法一夜の痛苦は、殆んど勘算し得べからず。此俗曲は、彼の有名なる「秋の夜」の替歌なれば、本調子、二上りの節にて謠ふも可あるべし。但未定稿なれば、一二穩かならぬ廉はあるなる可し、讀者の離黄を加へられんことを望むになん。

春の夜は、可愛ものさは、さんざんな、さま見ぬ人の言葉かも。つけて(點火待てども、來ぬ蟲の、音するものは、風ばかり。降くる雨の、來つ、往きつ。わしや濡らされて、居るわいな。

(一五八)切蛆蚊姥の發生(三重縣多氣郡、阪口幸之助) 今年は葦葦田にキリウジ カガンボの幼蟲の

越冬せしもの多く、根部を損傷して枯死せしめたるも尠なからず。然るに餌に飢へたる鴉群の、此幼蟲を啄食するものあるが爲めは、幸ひにして天然の驅除行はるゝを見るも、農家は今より注意して、被害を防ぐことを宜けれ、又田間の鴉群は、漫りよ之を追はざることを宜けれ。(一月四日附)

(一五九)全國の講習修業生同窓會に就て(兵庫縣有馬郡、堂本俊治郎) 來る三月を以て特別講習會を

開設し、大阪市への修學旅行を機として、全國害蟲驅除講習修業生の同窓會を開かんとは、機關雜誌「昆蟲世界」の報ずる所なるが、その發起者の何れにあるを問はず、之が開催を決定せられんことを切望す。吾が同志も亦大に之を望むなる可し。幸ひは余は阪地の近隣に居住するを以て、微力の續かん限り之が奔走の勞は服せんとす、吾が同志の千難万障を排して、續々來會あらんことを冀ふ。

(一六〇)昆蟲の解體標本製作を望む(新潟縣岩船郡、佐藤榮) 醫學教授用ゐる人體標本より、植物

學用の標本に至るまで、各々解體標本のあるに引換へ、昆蟲は未だ其製作無きが如し、固より軀軀の構造簡易に、また實物を剖解するの便あるが爲め、之を製作するの要無きが如しと雖ども、研究上の瑕瑾たるを失はざる可し。故に余は之を紙製又は塑製として、翅脈、口器、腹節、脚節等の常に容易に見得べからざる諸部は勿論、また腹尾、聽器、音器等の特殊の器官をも詳知せしめ、なほ進んでは複眼の集成組織おごをも、蟲種別として世人に示さば、斯學普及上、有力の一方方法たるべしと信せり。畢竟、今日の圖書のみにては、多く利する所なければ、先づ斯かる種類のもの、確實に製作して低價で販賣しなば、諸學校各農會の利益は一方ならざるべし。就ては名和昆蟲研究所の率先之を製作して、取敢へ

す昆蟲學講習會説明用を充てられんことを望みて已まず。

(二六二) 元旦祝賀會餘興の福引(岐阜縣海津郡、大橋慧逸)

本年一月一日に祝賀會を郡下海西村に催ふしたるに、來集者は村内の有力者及び教職一同ありしが、其餘興の福引中に「岐阜縣の昆蟲學者」との題もありて、當選者には繩八筋を興へたり。餘りの事なれば、葉書集の材料ともと報道す。

(二六三) 昆蟲唱歌編作の必要(京都市丸太橋詰、坊城子孖生)

京都市蛸藥師通堺町角の龜屋某方よては、錦雞間祇候田中芳男翁自作の菓子唱歌を印行して、之を四方に配布せしむ噴々好評を博しぬ。昆蟲學の普及せざる今日、何すれど昆蟲唱歌を編述して、斯學思想を涵養せざる。余は名和昆蟲研究所が「昆蟲イロハ骨牌」制定の後は、厚賞を懸けて讀者より「昆蟲唱歌」をも募集せられんことを祈る。

(二六四) 害蟲驅除の効果(栃木縣鹽谷郡、高柳源多郎)

余は本年苗代田を短冊形となし、前後七回驅防法を行へたるも、其効果は地方稀有の豐作を來せり、即ち今年は當地方一般に凶作よて、三分乃至五分作の間なるが、余が自作のものは、幸ひに六分八厘の收穫を得たり。これを見るも害蟲驅防の忽よすべからざる事は明白なり、而して其詳細は、別紙十二年間收穫米平均一覽表よりて之を証し得べし。

(表は省略に附す)

(二六四) 地蜂の動作(山口縣吉敷郡、池田健熊)

昨秋當地龜山公園に遊ひし時、一頭の地蜂の地上二尺許の低處に往返するものあるを見しかば、之に注視せしに、目前約一間の小孔ある處に止まれり、余は興味を感ず乍ら、おほ其動作を注視せしよ、頻りに孔土を搔拂ふに努むるもの、如かりしが、其際特に驚きしは、蜂が前肢の尖端を巧みに内側に曲げて、工事を繼續する一事なりき。



問答

◎草蜻蛉に就て質問

(甲號)

秋田縣平鹿郡横手町 福岡安之助

余やクサ カゲロフの習性經過を知らんと欲すること久し、願くは優曇華より成蟲に至る間の變化を詳

記して、之を誌上に示されたし、世にまた同感の者多かんと信す。

◎猫頭横蟲等に就て質問 (乙號) 愛知縣知多郡八幡村 伊藤孫太郎

本書封入の柑橘に寄生せる五種の昆蟲に就き、別記の件々を垂教ありたし、又驅除劑、有効器具の價額及び其販賣所等をも併せて明示せよ。

◎栗毛蟲の蛹繭に就て質問 (丙號) 島根縣八束郡 齋藤儀一郎

舊臘の昆蟲世界問答欄に、天蠶の蛹繭に關する質疑應答ありしが、栗毛蟲の繭即ちスカシダハラの外皮は、全たく用途の無きものか、當縣下には多く之を産するを以て、敢て利用の途を問ふ。

右三問に對する答

名和昆蟲研究所内 永澤小兵衛

(甲號) 有益蟲クサ カゲロフの習性經過に就ては、既に「薔薇之一株、昆蟲世界」に其大體を説明し雜誌「昆蟲世界」紙上また屢次之を記載したるのみならず、一昨年發行の「大日本農會報」にも収録せしものあれば、特に之を事新らしく詳述するの要無かる可し。故にたい補遺の事項のみを答へんに。(壹)此蟲は卵即ち優曇華より、成蟲に至る一生涯には、約一ヶ月の日子を要す。(二)岐阜縣冬季昆蟲展覽會出品物採集の結果に依れば、此は全く成蟲の状態を以て、越年するものなるが如し。(三)本邦に於て、始めて優曇華の蟲卵たる事を確認せしは、顯微鏡舶來の後にて、其新説の公けよせられしは今より百年以前に在り。(四)優曇華に寄居する一種微少の寄生蜂あれば、優曇華の黒變を以て、直ちハ孵化期に近づけりとのみ思惟する時は、迷誤を來たすことあらん。(五)卵數は一定せざるも、常に多數を占むるものは、三四十粒の間にあるが如し。成蟲の體形また多少の相違無きにあらす。(六)成蟲時代も食を求むとの説は、稍信を措くに足れるが如きも、未だ確實ならず。(七)成蟲は生殖作用を終ふる時は、直ちに絶命す、夏夕蚊帳外に死屍あることあるは、多く此類とす。

(乙號) 質問の(第一)は、有物目横蟲類、横蚊蟲科に屬するミミヅク ヨコバヒムシの一種にて、常ニミミヅク モドキと稱するもの、幼蟲なり。此は植物の葉液を吸取し、又其卵を樹皮下に産下するものなるを以て、有害蟲種たるや論なし。但し未だ確實簡易の驅防法あることを耳にせざるに反して、また著大の加害あることをも聞かざれば、恐らくは蕃殖力に缺くる所あり、且つ恒に天敵の制裁を受くる事多きものならんか、常に暖地よりは比較上多く棲息する種にて、幼蟲の状態を以て越冬し、春暖老熟の

後は、羽化生殖を行ふものとす。』(第二より(第四)に至るまでは、何れも柑橘に普通なる貝殻蟲の寄生を被けし葉莖にて、其中(第二)は雌蟲の貝殻、(第四)は雄蟲の結繭とす。(第五)は貝殻蟲發生の餘響として、其分泌液に黴菌の蕃殖せしものに係る、俗にこれを煤病と云ふ、當昆蟲研究所よて發行の「貝殻蟲圖說」より、其驅防方法より此等の關係をも記述し置けり、就て一讀の勞を取られなば、疑問盡ごとく氷釋するの日あらんか。扱之が驅除法としては、冬季節に灰汁等にて被害樹を洗掃し、及び石油乳劑等を塗抹するを適當とすれども、若し患部微小なる時には、刷子又は棕櫚製の束子にて之を潰殺するも可あり。併し乍ら、如何も驅除に勉むるとも、枝條の選定を行なひ、又之が敵蟲を蕃殖せしむるも非れば奏効極めて少なる可し、而して煤病に至りては、先づ貝殻蟲即ち其根元を絶たば、自づから滅滅に歸すべきを以て、敢て深く憂ふるも足らず。其驅除用品販賣に關する事項は、未聞に屬し、茲は明答すること能はず。

(丙號) 前號の本誌紙上は掲載の天蠶の質問の、其旨意漠然として捕捉し能わざしが爲め、單だそれと對する要領を應答せしよ過ぎさりしが、聞く所は依れば、スカシダハラの外皮は、近年之を紡績絲の原料に供用すと云へり。頃者、物産家田中芳男氏、また此事の確實なる旨を物語られき。就て考ふるに、弘く此を蒐收したらんには、害物利用の途無きにあらずと雖ども、その幼蟲時代に天蠶絲を製するの利益に比して、更に多くの利得ありや否や、宜しく調査すべき問題あらん。問者も粗ば知らるゝからんが、本邦に於て毎歲清國より輸入の天蠶絲原價は、實に十萬圓以上の巨額あるを以て、邦内に於て天蠶を良好の釣纏に製し得る限りは、之を利用するを以て專要とすべしなり。

因に云ふ。質問書中は、往々其要點を示さずして、理解するに苦しましむるものと、言文一致牀し書綴りて、原稿整理上、意外の煩ひを感せしむるものとあり、是等は止むことを得ず、一時掲載を見合し置けり。又必ずず實物を添附せざる可からざる質問にも、更に其事無かりしを以て、今なは應答し難きものも少なからざれば、今後は成るべく一件毎に實物を添へられたし。但し從來落手の物は、途中既に毀損を生ゑ、鑿別の用へ供し難かりしもの其過半に居れば、包装を堅固よし、之を第四種郵便物「博物館標本」として、托郵然るべし、毎三十目二錢の郵税も過ぎざれば、自他の利便此上なげん。若し其添附の實物の返還を望まざる時は、其旨を記入し、且つ相當郵券をも封入ありたし。



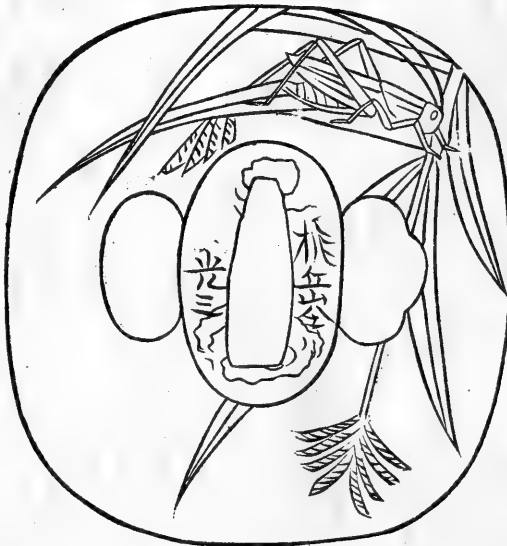
雜報

●明治三十六年の昆蟲學界

昨年は昆蟲學にとりて、忘却し得可からざる事項尠少なからざり

しも、何分俗塵の擾々たるは妨げられて、其發展の度も低かりしが、今年は内國大博覽會の刺戟によりて、多少礪砥の功を擧ぐるに至らんか。然は云へ功名利祿に趨せて、培根固柢の念に薄く、其技術を誇稱するに専らにして、其究明を懈怠するは破る者、今や滔々その風をなすが故に、斯學研究者にして、絶大の抱負と、確乎たる自信を保持するに非ざるよりは、或ひは濁流に陥り、或ひは岐路に迷ふの厄災無きにあざる可し。吾儕は必ずしも、同志者に對つて、其祖業を固守すべきの利を勸奨せず、又其多藝を通ずるは切なる情をも妨げず、然かも、各その本領を把持して特色を發揮するは力め、研究の多岐に涉らんよりは、寧ろ一能に優秀あらんことを禱る。更にまた私交の上には、假し吳越の思ひある者ありとも、斯學促進の爲めは、滿胸の城府を撤し、光風霽月の心を以て、彼我の便益を圖られんことを希へり。看よ蟲稱の區々として、其辨別に苦しむもの多きは、何のためぞ、華言巧説に欺瞞せられて、中途斯學を抛棄する者あるは、何のためぞ、斯學者間に、未だ卓絶の研究を遂げし者なきや、何のためぞ、邦産普通蟲種の概數す、今なほ判明せざるは、何のため

(鑄) 壹の報畫蟲昆用應業工



(贈寄氏衛兵小澤永縣城宮)

ず、既刊の蟲書に錯誤の充滿するは、何のためぞ、剩さへ國力を左右する農産物の損害を、速に救済し能はざるは、何のためぞ、要は斯學研究者の意思の牢強なざるに在らんのみ。由來、本邦は人心の一致和協を以て他よ誇る、而して其意氣の投合せざることを此くの如く、其寛懷宏量よ乏しきこと亦彼が如し、斯學の振興せざる、蓋し以なきに非ざるあり。惟ふよ愜意戮力、此弊を洗掃するの重任に當る者はたゞ吾が愛讀者の外に求むべからず、冀くば益々其心膽を健剛にし、其胸襟を濶大よし、居常斯學の忠奴良僕を以て自任し、長く邦家のため其本分を致されんことを、謹んで告ぐ。

●去年の昆蟲學界

去年吾が蟲學界よ發現せし事實の最と多かる中よ、二月に岐阜縣昆蟲會が、全縣下に於て冬季に採集せる昆蟲の展覽會を開設し、及び中川久知氏が、岐阜よ來りて鋸蜂を專攻したる、三月より各府縣に於て、競ふて小學兒童に採集せしめたる、四月よ英國人ロスチャイルド氏が、昆蟲採集の爲めよ來遊したる、五月よ農商務省所屬の吏員を、全國の害蟲發生地に分派し、及び此前後よ前年の害蟲地地租を特免しよる、六月に渡瀬庄三郎氏が、通俗話の「螢の話」を公行し、桑名伊之吉氏が、米國を辭して歸國し及び高千穂宣鷹氏が、九州昆蟲學研究所を開きたる、七月に名和昆蟲研究所が「全國昆蟲展覽會出品目錄」を公行し、及び農商務省農事試驗場昆蟲部處務規程を改正したる、八月に佐々木忠次郎氏が、カムストック氏の「昆蟲分類法」を譯述したる、十月に農商務總務長官が、各府縣に害蟲驅防上の注意を與へ及び名和梅吉氏が、斯學實況視察のために渡米したる、十一月よ松村松年氏が、留學滿期を以て獨逸より歸國したる等は、主要の事件あるべく、又各府縣に於て斯學の講習會を開き及び岐阜、静岡、兵庫、岩手諸縣の郡部よ於て、昆蟲展覽會を開設せしは、蟲學思想涵養の一助たるを失はざるべし。唯、出版圖書の比較的良著に乏しかりしは、誰しも遺憾とせし所にて、往々拙惡觀るに堪へざる圖版及び謬脱甚ざしき通俗書をさへ、公行せし者ありき。

●工業應用昆蟲叢書報 (第一報)

本號より逐次三四點づゝ連載せんとするは、工業に應用せられたる昆蟲の叢書なり。是は敢て摸範を示すとはあつねぞ、古來邦産の工業品よは如何よ廣く昆蟲を應用せしか、又如何に描出せられしかを了知し、而後舊式の短處は之を補足し、古製の長處は之を採擇しなば、將來發達せしめざる可からざる産業の上よ、必ずや多くの裨益あらんかと信せしによれり。去れば、其收むる所の品物も多方面に涉り、決して局部に止むることをせざるべし、即ち今回の二千年來一國の元氣、國民の魂魄と見做されたる刀劍の鏢類を示をに始まり、漸次他の工藝品、美術品よ推及ば

んとするなり。唯遺憾なるは、其所藏主名及び由來を知り難きものとあり、今や往々原品寄贈者の芳名を明記し難きものあるの一事とす。讀者にして世に示すべき昆蟲應用品の寫生圖、「若くは其縮寫圖を寄せらるゝことを得ば、斯學の啓發に一層補益するものあらんなり。

●千蟲萬彗錄(第一)

最近發行の諸報告より、昆蟲界の事項を抄出すること下の如し。

●新年早々、世界各國に於ける蟲料理、即ち食用昆蟲の事を記載せしは、日本新聞なるが、甲州の稻蠶の昆布巻、巴理の玉蟲のオムレツ、南米土人の強壯劑たる蟻の調理法をも、収録して漏す所無し。

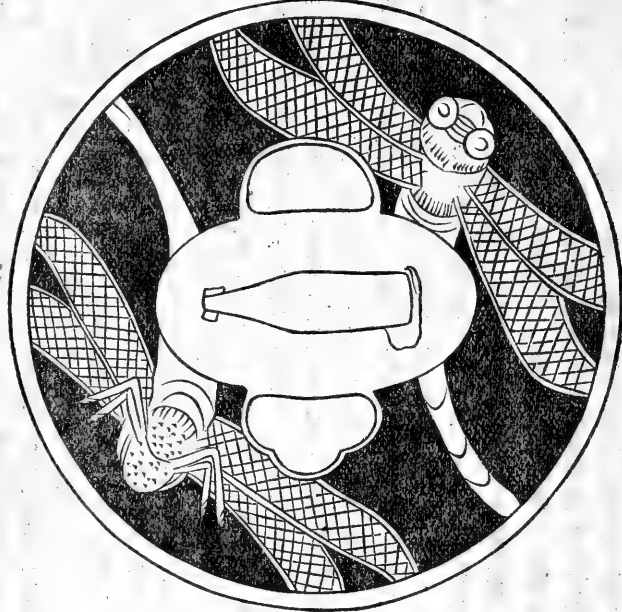
●徳島縣にては、縣内に發生の害蟲の性状及び其驅防方法を、郡市の勸業主任、町村吏員、警察官吏に知らしめんとて、來二月上旬には一週間の昆蟲講話會を、各郡市に開く豫定なるを以て目下調査中。

●山口縣豊浦郡にては、舊冬(十月下旬)に至るも、横蚊の發生夥多かりしより、郡令を發して之を驅除に従事せしむ。其後何等聞く所無きも、冬季に至るまで、斯く蕃殖すとは有緊暖地の名に負かず。

●山梨縣中巨摩郡内に、キリウツカガンが発生して麥苗を慘害す、爲めに驅除法として、一反歩に食鹽四十斤乃至百六十斤の溶液撒布を唱ふ。無海國に鹽水の驅除法を行はんよりは、先づ其禍根を絶て。

●富山縣新川郡下には、昨年蟲害にて收穫皆無の部落あり、特別免租案を國會に提出せんとせしに、解散に遭ふて、失望の極に達せり。不確實の希望を抱くを捨て、永世救護を受けざる方法を講ぜよ。

(鐸) 二の報畫蟲昆用應業工



(贈寄氏衛兵小澤永縣城宮)

(説明) 此品は全部鐵製にて、毫も他の裝飾無し

●静岡縣下にて「土地乃黒いのに白穢が見ゆる、あれは眞の毒被害稻」のカツカレ唄を作りし者あり。蓋し二十年前、練木喜三氏が「沖

の青いのに、白穂が見ゆる、あれは髓蟲被害稻」と謳ひしと同趣向。

●奈良縣の既往五年間の蟲害驅防費懸負擔額は、卅年に僅々五六圓弱、次年に六九五圓弱、次年七四五圓強、次に二二九九圓弱卅四年には増して、千五百九十圓八拾錢。何れの府縣も同様ならん。

●栃木縣は麻作を以て有名の地なるが、上下都賀、河内三郡は、夜盜蟲の害多きを以て、種々驅防策を講じ、昨秋の暴風雨後には天然驅除の効果を驗せしに、氣候の激變には何等關係する所なかりきと。

●兵庫縣淡路國に、三化生螟驅防の嚴令を發布せしに、津名郡全體反抗の態度を取り、頑として應ぜず、爲めに客冬に至り縣令を改正す。斯る事に苦情を鳴らす郡民は曲、苦情を言はしむる當局者は非。

●大阪府中河内郡東六郷村の某、先に害蟲驅除豫防委員を命ぜられ、其職に従事中、多量の驅除油を買入れたる如く裝ふて、金額の大半を懐にしたる舊惡露現す。誘蛾燈は人をも罪惡に誘ふ害物と見ゆ。

●新潟縣立農事試験場は、昆蟲試験成績書を、第五回内國勸業博覽會の参考品として出陳せんため、今や草案編纂に忙はしき。一昨年来、此縣が頻々昆蟲思想の進歩を表白するに至りしこそ頼母しけれ。

●徳島縣農會は、舊臘開きたる總會に於て、螟蟲驅防に小學校兒童利用の件を縣廳に建議す。其文中は、那賀勝浦の兩郡の一部は、本年既に之を實行して、其効果著るしきものあり云々の一節も見ゆ。

●山形縣飽海郡昆蟲研究會より、内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、害蟲標本十一函百二十三種、益蟲標本五函八十五種、計二百八種にして、其頭數約二千を越ゆ。定めて寒地特産の益蟲も多かりん。

●福井縣廳は、縣内の害蟲驅防功勞者十三名を撰抜して、之に功勞褒狀を與ふ。此は是、衆人に率先精勵し及び他を勸奨して、大に其効驗を顯はしめたるの篤志者のみなりと。縣治上また緊要の好方便。

●特別講習會の開會期 來る三月内國勸業大博覽會の開設を機とし、且つ當昆蟲研究所創立滿

七年の紀念として、全國害蟲驅除特別講習會開會の計畫ある由は、前號に既記を経たるが如し。其後開會賛同の旨を報じ越せる者、殆んど募集員の半數に達したるを以て、快よく其希望を納れ、來る三月十日より之を當昆蟲研究所内へ開くこととせり。但し修業式執行日は未定あるも、三週間内に結了の豫定なれば、遅くも三月廿九日頃には閉會を告ぐる事あらん。又修學旅行として、大坂市へ往返の際には百事儉約を守り、彼地淹留中と雖ども、喧騒華奢を避けたる認定旅舎に宿らしめて、日に四拾錢以内を消費するよ止めまめん内規を設けたれば、他の冗費を慎しむ時は、極めて少額を以て足れりとすべし。其入會申込期限は、來二月廿八日よて、當日まで確定名簿に登録せられざる者は、固く入會を謝絶する

も、前回までの修業生にて、此一行に加はんとする有志は、特に便宜を與ふる都合になし置けり。
(前號の雜報及び本號卷頭の廣告參看)

●今後の昆蟲世界 豫記の如く、雜誌「昆蟲世界」は、成るべく讀者の希望に副はんとて、從來各

地より寄せ來れる意見の一端を實行せりと雖
ども、なほ表紙、題籤、圖書等に至りては稍
彫刻の遅れたる爲め、多少豫告を變更せし廉
事も之あり、然れば此等は時機を見て追て改
むる所あらんとす。

●長短期の兩講習會 岐阜縣よ於て

は、縣の繼續事業として、去る三十一年以來
昨年まで五回、害蟲驅除講習會を開き、今年
また例の如く開設の趣むきなるが、更長
講習會をも開きて、來ん四月より一年間數名
の撰拔生に、講習を受けしむる事に内決せり
と、委しくは次號よて報せん。

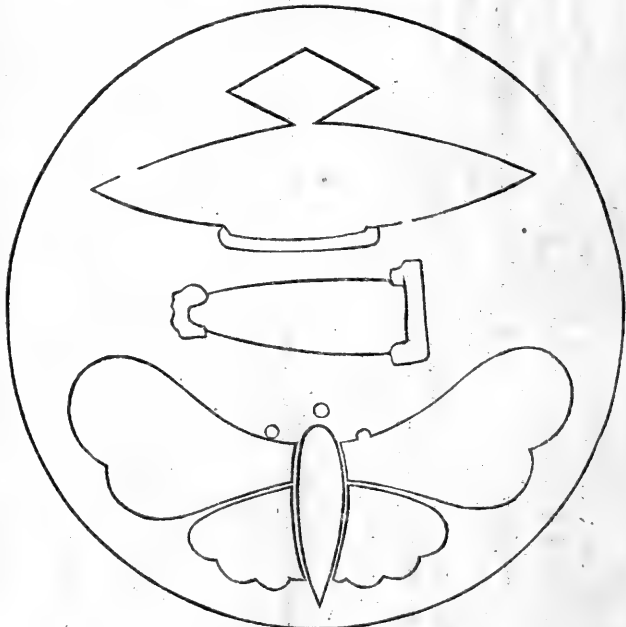
●三重縣阿山郡の蟲報 三重縣阿山

郡にては、農事講習生、小學教員等協定の上
昆蟲研究會を組織し、會員相互間の標本交換
斯業の調査、斯學思想の喚起等に資せんとして
已に橋本逸次郎、廣瀬安吉の二氏は之が準備
に着手せる趣むき、同地の西岡嘉十郎氏より
の通信に見ゆ。

●晴天に甘露の雨 本月十二日は晴天なりしに、岐阜縣大垣城附近の一柳樹下よ、雨滴點々降下

するより、人皆之を訝かり居りしに、偶々同行の宮地氏の早くも認めて、是は蚜蟲の群居せるなりとて

(録) 三の報書蟲昆用應業工



(贈寄氏衛兵小澤永縣城宮)

其二枝を折採りたるを見れば、此寒氣の候に關はらず、滿枝の蚜蟲の胎生をなすなりけり。勿論、冬季とは云へ、多少の蚜蟲の棲息は驚く足らぬと、然かも甘露の雨を降下するまで、群居且つ胎生とは稀有と謂はざるを得ざるべし。(ナ、ヤ、記す)

●昆蟲標本の展觀

近々岐阜縣下各郡より、第五回内國勸業博覽會へ出品の各種昆蟲標本は、大槪完成せしを以て、去る十日より日々、當昆蟲研究所の標本陳列館内に陳列して、一般の内覽も供せしよ、何れも熱誠をこめて製作せしもの、みなればにや、意外に多數の觀覽者あり。

●博覽會出品の昆蟲標本と批評

内國勸業博覽會よ、全國各地より出品の昆蟲標本は、極めて多からんと思はるゝが、同會を參觀し能はざる讀者の爲め、特よ一々之を紹介し且つ公正の批評をも加へんとす、讀者暫らく同會の開くるを待て、其真相を知られよ。

●食草蟲の發見

昨年十一月十日の發行に係る「サンフランシスコ、クロニクル」新聞に、布哇ホノルルの通信を載せ、中にランタナと稱する有害草に關する一節あり、是は從來知られたる食草昆蟲とは、其趣むきを異にするを以て、左よ之を轉載す。

布哇群島を通じて、痛く農作上の妨害をなすは、Lantana (馬鞭草科に屬する雜草?)と稱する雜草なり、之を根絶せしめんこの目的より、或昆蟲をば、遠くメキシコ國より移植せしめマウイ(Maui)島に於て専ら之が効果の如何を試験中なるが、該昆蟲は廣濶の土地に蔓延せるランタナ草を侵襲して、痛く之を蝕害し居れりとなり。原來布哇には、此雜草の蔓害甚ばだしく、海岸の一局部を除き、他の數千エーカーの地は、皆其被害を免がれざりしを以て、殆ど悉除に苦惱の結果、政廳よりは特に昆蟲學者ケーベル(Koeberle)氏をメキシコに派遣し、此雜草の蝕害者を目さる、昆蟲の採集に従事せしめたるにて、今や既に其多數を送り來りぬ。

●名和梅吉氏の來翰

在米國名和梅吉氏が、舊冬十一月廿八日附を以て、當昆蟲研究所に宛て送り越せる書簡中には、往々斯學者の參考を資すべき節もあれば、下に其要領のみを收載して、讀者の覽に供せん。

謹みて將に來らんとする新年を賀し、併せて益々斯學研究の進歩せんことを望み申候。叔私儀、上陸後桑港に止まり居り候處、去十一月二十二日、岡田虎次郎氏と共にスタンフォールド大學を訪ひ、尋で引續き同校教授ケロウク氏の指導を蒙り、大に利する所有之候

氏は非常に懇篤に待遇せられ候ため、同校所蔵の昆蟲標本は、大跡一通りは、自身に抽出して展觀するこの便宜を得たる次第にて其自由にして且開放主義なるには驚入申候。若し本邦なりせば、新外來の一書生が、思ふ儘に見學の出來ざるは勿論、過半は秘密の

(鏢) 四の報書蟲昆用應業工



(贈寄氏郎次増田石縣阜岐)

二字に封藏せられて、之を瞥見だもなし能はざる事と存じ候。但同大學の標本は多數には有之候も、整理の點より云へば、十分は難申哉に存居候。特に製作に缺點の多きは、分科的專攻上の常弊さは申し乍ら、多少物足らぬ心地も致され候。其一例として容器の事を申述ぶれば、保存函の如きは、攄造其當を得たりとも見受けられず、刺へ硝子面は塵芥を以て覆はれ、明かに内部の蟲體を見ることが能はざる爲め、其蓋を取らざれば、研究上の不便有之様に御座候。製作法は總て針にて留め、宛がら簡單製作標本のそれに類似致居候、中には雲母の小片に貼附したるもあれど、其には脚部の整理を缺き居候。兎に角、標本製作上の技術は意外に感ぜられ申候。展翅板は幾條もなく横線を劃して、双翅の平直を定むるに便し、翅は雲母にて被ひ、針もて一頭づゝ留め置くの仕方にて有之候。

同大學にては、婦人と雖も男子と共に、學生として研學する者多くケロツグ氏の講義を聴き、又鏡檢的に實物を研究する順序にて有之候。私も一日一時間だけ其講義を聞き申候處日本に於て爲す事と別に差なく、只多くの放大圖を示しつゝ廣きに涉りて講義さるゝ事は(日本に於てもなせども)稍少しく異なる點にて、主ばら簡單を旨とせられ候。其時の講義は、幼蟲の三大區別のことにて、バツカード氏の記述と同一の事に有之候。而して貝殼蟲に就てはケロツグ氏が世界に於ける種類の記述を擔當せられ居候やにて、類りに研究を積居らるゝことに候。且又同氏はアログアデーも研究し居られ申候、去れば貝殼蟲の研究には餘程都合にて、特に桑名伊之吉氏か、一昨年邦産を採集調査せられし數多の標本を、面のあたり見ることを得て、大いに利する點有之加之今後研究すべき有様の大體をも悟り申候。右につき大學近傍に於て、採集致したる二十餘種は、直ちにケロツグ氏に命名を乞ひ將來當

地に於て採集せしものにも、命名を願ふ事の約諾有之候へば、判明次第御送付可致候。

昨二十七日サンノセイ市に抵り、所謂サンノセイ貝殼蟲の産地を種々相尋ね候へ共、その原産地不明に有之、然るに新世界支社の新野氏に面談の結果、遠藤音吉氏なる者、早くより果樹の害蟲調査に熱心なりし由を承り、サンノセイ市を距る六哩程の處を尋ね行き種々究問する處有之候、何分當地は梨樹の類は少なく、ブルーム、ピーチ、アブリコット等の盛なる處にて、未だサンノセイ、スケールを見當り申さず、只一種の大害蟲たるバーア、スケールのブルームに發生し居るものを採集仕候。

其他當地にて一般に困却し居る害蟲は、ポーラーと稱するもの由にて、昨今其驅除中に有之候、是れは透翅蛾の幼蟲にて、植物の根部を害し候ものに御座候。カンカー、ウォームの話も聞き利する處有之候。尙御承知の如く當地は大農主義の事さて、果園の區畫の如きも、其面積頗る大に、眼眸の達する所、際限なき一面の果樹林にて、隨ひて害蟲驅除の事業も容易ならぬ義と察し得られ申候其驅除法なるものは格別進歩の微は無之候も、何れ此より東進せば、或は種々なる事も有之べくと存せられ候。却說サンソー貝殼蟲の爲にや、當地には梨樹さては非常に少なく、他の果樹に比して千分の一位に過ぎ不申候も、以前は相應に有之しやに承り申候當地人にイヤーホンと云ふ人有之候處、從來非常の熱心を以て貝殼蟲を集め居られ候由なれば、豫てクロツカ氏の添書を請ひ置候に付今明日の内には同氏を訪問する考へに御座候。唯閉口なるは言葉の十分意思を通じ難き事にて、先方の話の理解し能はぬ事の多きは、一層困難に御座候、然しながらクロツカ氏にも道を尋れる言葉を發し、或は必要なる場合には、文法に適はぬ言語ながらも辛じて口唇に上せ居り申候、彼の邦人に取れば極めて可笑事ならんも、亦止を得ざる次第と存じ、承知の上の耻をさらし居申候。

スタンフォールド大學にては、教授も生徒も、早朝より夕景までは、其々研究に従事せられ、時として、夜間に演說討論會なども開かれ互に知識の交換をなす等、愉快の中に新知識を得るの組織に有之、就中婦人の活潑にして男子同様に勉強するの一事は、豫想外に有之候。(以下省畧)

● 岐阜縣の害蟲驅防厲行

岐阜縣に於ては、今年は農作上の害蟲驅防を厲行するの決心にて、

先づ各郡の町村長及び警察吏一同を要部々々に招集して打合會を開き、万端の準備整ふるを待ちて、一齊縣内を施行する手筈にて、既に過日來二三郡に於ては其協議を遂げ了れり、而して之が實施の曉には監督として數名の縣屬若くは技手を各處に派遣し、又監督員としては縣害蟲驅除講習修業生より撰拔の者を、絶えず各受持方面を巡視せしむる都合なるが、目下は桑樹の姫鼻蟲驅除に其端緒を開き居れり。因に云ふ、本月十二日に安八郡大垣町を催ふせる同協議會には、郡長縣官を始め警察吏三十餘名、町村長十餘名に、おほ十數名の關係者盡とく集合せしを以て、諸事満足の協定をなし得たりきと。

● 除名會員の件に就て

假し、當昆蟲研究所證明の講習修業證書所持者たりとも、他日或ひは

惡徳の行爲をなし、或ひは法律の違反者とあり、又或ひは最初其受罰を僞りて入會したる者等ある時は事實判明次第、之を修業生名簿より削除するの内規なるを、近來會員の増加に伴れ、當所の面目に關する非行に出でし者、又は刑後の身にあり乍ら、堂々と當所の名を騙る者もありしと加にて、當所の迷惑一方にあらず。此輩は彼の假修業證書所持者と共に、固より他と同視すべき者な非ざるは勿論、表面上

自然除名に屬する者なるが故に、正當の會員は恒に監視を加へられたし。若し斯る儕輩の徘徊するに際し、證を擧げて一報を寄せたる、ことあらば、他の多數の會員を保護するの手段として、其不正行爲者の氏名を全國に通報し、兼て機關雜誌紙上に公告するに躊躇せざる可し。

●名和昆蟲研究所に對する建議

客臘開會の岐阜縣通常縣會は、殆んど滿場一致を以て左記

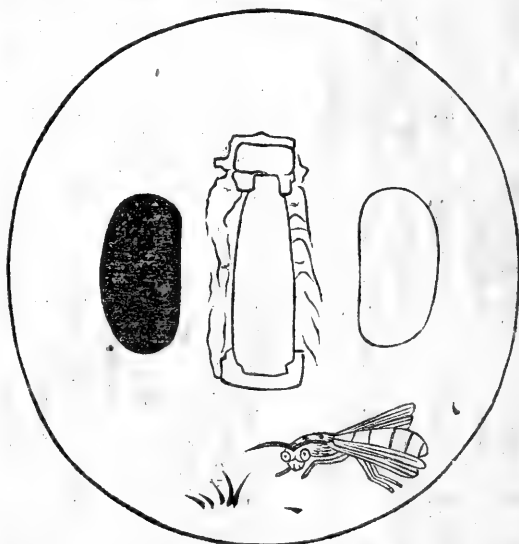
の建議案を可決せしが、是は早晚、當昆蟲研究所が事業の擴張を行はんとするを傳聞し、激勵を加へて其必成を期せしめんとするの意も出で、從來敢て補助をささげりしつつけ、今回は相當の援助を與へて、根基を強固せらしめんとするの發議に因づるものなりと云ふ。而して此建議に對する内容を至りては、提出者の説明に、粗ぼ之を悉くし置きたれば、今「濃飛日報」紙上收むる所の、當日の縣會傍聽筆記全文をも、併せて參照の用に充てん。

建議案 昆蟲學者名和靖の設立せる、昆蟲研究所は、創立以來、十數年の久しきを經て、漸く健全なる斯道の樞府となれり、茲を以て、各府縣及縣下各町村選拔生の贊を此に執る者、年々三百五十有餘名の多きに達し、從來の建物にては全く狹隘を感ずるに依り、今回壹万五千餘圓の豫算を以て、新築を計畫するに至れり、是れ斯道の爲め大に喜ぶべきの擧たるのみならず、彼れ研究所が、今日まで益蟲保護を、將た害蟲驅除に、社會に貢獻したる効績を考查すれば、此擧を一人の經營に放任せず、縣費を以て相當の補助をなすを適當なりと認む、依りて縣當局者は、該建築に向て十分なる調査を遂げ、相當の補助をなさんことを希望す、右及建議候也。

明治三十五年十二月十六日

岐阜縣會議長 野 呂 駿 三

(鐫) 五の報雷蟲昆用應業工



(贈寄氏衛兵小澤永縣城宮)

岐阜縣知事 川路利恭殿

提出者 春日善一 外四名

賛成者 澤田菊次郎 外二十四名

(參照) 明治卅五年十二月十六日午後二時廿五分開會、出席議員全員○議長(野呂)開會を報じ、建議案の提出ある旨を報告して、書記をして朗讀せしむ(前掲の建議案を指す)○議長(野呂)これより開議する旨を宣告す(中畷廿七番(中川)只今提出したる建議案に就て意見を述べたきを以て、少しの時間を與へられんことを望む○議長(野呂)議事日程を變更すべしとて、日程を變更す○廿七番(中川)は名和昆蟲研究所が昆蟲の爲めに社會國家に貢獻して居ることは言ふまでも無く、本日まで蒐集したる標本は、室に溢れる程にて何れも貴重なる標本にて、梅雨或は濕潤の甚だしき時期には、黴を生じて保存上不利なること、又一面には縣下を始め全國害蟲驅除講習會を開催するも、講習生を容るゝ處無く、今日までは短期の講習のみなりしも、漸次長期の講習を爲さんとする事になり居れど之に對しても差支なからず、又目下九州には昆蟲研究所を既に設置し、又北海道に於ても益々昆蟲の研究を爲さんとする事云ひ、斯く漸やく東西に昆蟲研究所が設立せられんとするに、名和昆蟲研究所は、其の名高きに比し、今日の如き現状にては、如何にも遺憾なり、既に帝國議會に於て、同研究所補助問題は二度まで通過したるも、不幸にして半途にて消滅したり、斯は全く現今の規模餘り狭小なる爲めに、補助する價值無きかの如く見認められたる由なれば、我々縣民は之に對し一層擴張したき考へなり、各員に於ても賛同ありて建議を可決し、縣當局者に向つて相當の補助あらんことを希望に堪へざるなり○六番(岡井)賛成○議長(野呂)異議無きを認め、建議することに決す。云々

●今年の天候に注意せよ 今春よ入らば、必ずや寒氣酷烈ならんとは、客冬の豫測談なりしが

今に至るも猶ほ九冬の嚴寒とは思はれぬ程にて、特に東北地方の如きは、人々違例と感ぜざるまで高温なる趣ひきなるが、若し此儘高温を保続する時は、直ちに昆蟲の發育を促進すべければ、順調に回復せん限りは、心を安んずべきにあらず。昨年は三月下旬に至り、俄か高温を來たしたる爲め、全國の開花期を五七日早め、且つ一時害蟲の化育を促したりしも、幸はひよ四月に寒冷を感つたると、早く驅防に着眼せしことにより、概して大被害を免がれ得たりしを以て、今年も豫じめ觀察測候も怠たらず、臨機適宜の處置に出でんよは、一般に災異を見るに至らざる可けれど、過去の天候は昨年と違ふ點も少なからず。去れば此際養蠶家の如きは、特に貯藏の蠶種の保護に注意して、氣候の激變のために、後日の不覺をとらざる様、絶えず油断せぬことをよけれ。

●米國製の蠅捕紙

在米國桑港の名和梅吉氏より送り越せる蠅取紙は、本月一日當所に到着

せしが、之を検するよ、厚紙面よ一種強粘性の樹脂を塗抹したるらしき、微のよ芳香を放てる即効紙様のものよて、其粘着力の強さには、誰しも驚き合へり。尙當日は恰かも元旦の事とて、人々自づかゞ喜色あり、負暖の蒼蠅また輕飛を試むるもの多かりしが、忽ち此魔劑の爲に翅足を捉はれて、見るく閻魔の廳に參賀せしもの、二三十頭の多きに及びしも可笑かりき。然るにても此等のものが、千年前よ唐土よて發明せられたらんには、憎蠅賦よ、左までの骨折は懸けまじきものを。

●物産品評會の昆蟲標本 舊冬十月三日静岡縣磐田郡に、郡物産品評會を開たき折、參考品

として十餘函の昆蟲標本を陳列せしが、其中五函は中遠農會のものにて、蝶蛾類、甲蟲類、蜻蛉類を蒐集し、二函は三河村農會のものよて、多く種類を集めたるも、排列は錯亂を來たし、二函は神村直三郎氏のものにて、地方普通の害蟲の經過を示し、一函は同縣濱名郡中野町鈴木伊平氏の寄贈せる害蟲標本にて、二十種内外の蟲種を收め、他の一函は見付町某氏の出品に係り、小蛾類十數種を集めしものなりきと、同地より通報ありき。

●年賀狀の披露 今年當昆蟲研究所に宛、贈り來せる二千餘通の年賀狀より、昆蟲に關するものを選択して、之を昨年のものよ較べしに、如何なる故にや、頗ぶる見劣る所ありき。今左よ、その中の主なるものよみを披露せん。

●石川縣鹿島郡西川豐次郎氏の農業の俗歌は、着眼に宜けれど、生硬にして未だ調をなきを缺點とす●岐阜縣山縣郡篠田五郎氏か、私製葉書の郭外に蟲名を記するに蚊眼的の小学を以てしたるは惜むべし、實は其記載の目的の不確實なるより寧ろ無くもかなと思はる●長野縣清水藏氏の、益蟲害蟲の印刷文は可、但し前年のものに比し頗ぶる及ばざる所あるを認む●岐阜縣加茂郡長瀬白氏か害蟲寫生圖を、手摺としたるは用意周到なり、併し觸角と脚の注意は缺けるもの、如し●山口縣中井猛之進氏が、蛾と蟬とを畫きて金蛾新蟬とは面白し、併し新蟬とあらば、ニイニイ種に代ふるにチツチツ種を以てするを良とすべし●大阪市木村壽祖治氏が用ゐたる私製葉書は、白虹の附録なるが、摸倣化の上には確かに新意匠あるを見る●東京市若原氏の私製葉書は、印刷良好にはあらざれど、馬追あるも珍らし●山口縣玖珂縣小田勢助氏が、ウサギトノホ云ふを一筆がきこしたるは、寧ろ滑稽とやいはまし●攝津池田の高山助太郎氏が、蜻蛉四頭を巴扇として、襖紙の摸倣圖案に擬したるは先づ目新しく、濃淡亦能く法に適へりと雖ども、四翅の配置の未だ美の境に入らざるを憾む●愛知縣西加茂郡牧野敏太郎氏が、上に甲蟲目の丸の國旗を樹て、蜻蛉結びの飾纒を下け、其下に膜翅類祝賀の狀を描きて、背自づから謹賀新年の文字を成さしめしは、如何にも經營慘憺の痕跡見ゆ、只この手腕あり乍ら、何故

に之を一層有用の方面に向けざりしかを疑ふのみ●山梨縣中巨摩郡和田恒作氏が「幾久しく蟻蚋の御愛顧を御願申候」の追記は妙なるも御愛顧といふては意味通せず、宜しく御交際に改むべし●兵庫縣明石郡井上藤太郎氏の、昆蟲相撲見立に正名と方名とを併記し、且つ其文を蟲盡しとなしたるは佳、練熟を缺かずんば尙更に佳なりしならん●千葉縣長生郡の高橋敏一氏のもの、新潟縣岩船郡の佐藤榮氏のもの、山梨縣南巨摩郡の依田常吉氏のもの、長野縣東筑摩郡の三澤勝重のものは、紙質、摸樣、印刷兩つながら、真好の私製葉書なるも、普通の賣品と聞く時は、何さなく貫目不足の思ひあり●島根縣八東郡安達庸一氏が詠める興歌二首は、普通の百姓や小供には解し得ず、今なほ師範校の臭味消散せぬも可笑し●静岡縣磐田郡神村直三郎氏が、蟲俳句を列記せしは例年の如し●東京市小山彰氏のシシミ蝶罷の輪廓は、其配置は適當なるも、斯く長き曲線は馬尾峰が夕顔別當外にては如何にやと思はる●其他なほ蝶蛾椿象と書したるの類多く、又昆蟲模様の繪葉書も數葉あれど、數年前に印刷せる例の豪華房名入等のみなれば、茲に略す。

●岐阜縣昆蟲學會記事

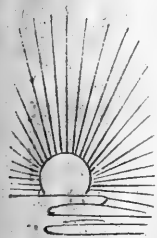
●岐阜縣昆蟲學會第四十九回月次會を、當昆蟲研究所内に開きしよ、折柄朝來の大雪にて北風さへ烈しかりしが、不破山縣稻葉揖斐諸郡の斯學篤志者十餘名の來會あり、先づ初めに第五回内國大博覽會へ出品すべき各種昆蟲標本二百餘函を周覽し、次に其製作配列意匠等に關する各自の意見を聞はして、長短の在る處を批評もし、注意をも與へ、最後に副會頭名和靖氏が標本出品に關する一場の談話ありて午後六時散會せしが、席上なほ種々の斯學談ありき。

●水曜昆蟲談話會

前號よ記載せる水曜昆蟲會を、其後間斷なく當昆蟲研究所に開きしが、舊臘以來、專は實物に對照して説明を加ふることなし、本月七日の夜の例會に於ては、重に有物目と鞘翅目に關する研究談及び最近刊行四十七雜誌中の昆蟲記事談等ありき。

●昆蟲標本陳列館の觀覽人

昨年十二月中に、名和昆蟲研究所の標本陳列館を觀覽せし人員は、總計二千四百七十八人にして、其中最も多かりしは、九日に於ける二百五十一人、最ども少なりしは、大晦日の三十一日よ於ける三十人にて、一日平均九十五人強よ當る。又昨年中觀覽の總人員は七万四千〇三十八人にして、其内最ども多かりしは、八月よ於ける一萬三十一人、最ども少かりしは四月に於ける一千〇一人にして、一ヶ月平均六千七百七十餘人に當れり。(右雜報は一月十三日脱稿)



謹賀新巻

明治三十六年第一月

再伸 昆蟲學も追々進歩の狀を呈し、害蟲驅防の成績また多少良好に立到候段、爲國家御同慶の至御座候。陳者昨今の如き寒中には、昆蟲を採集し得ぬ様誤解の向有之ため、採集、調査兩ながら之を放棄するの風あるは、甚は遺憾に存居候、就ては此際同志間に於てのみならずとも着々之を實踐躬行して、冬季昆蟲採集の洪利を示し、併て古來の迷謬を打破し、斯學思想普及の一助を供し申度候、畢竟今に豫防的驅除の完成せざるは、冬季生存の蟲種及其狀態を暗さの致す所あふんかど被存候間、特に御決行を希望する次第に候。致す所あ次よ、螟害驅防の一策としては、冬季より積葉、荊株其他に注意するの要は有之候も、現時の農家に對つて多く要望致し難き事情も有之に付、毎度申述候通り、先づ春季の採卵より夏季の莖切、秋季の拔穂を共同施行の目的を以て始めて確實の器械と、僅少の勞銀一婦女子又は小學兒童等を指すを以て、誠實に實行するより外、民情に適切の方法之なかる可く然すれば今日の如く敢て大害を來たすことあらざる可しと確信罷在候間、是亦同志相結んで實施致申度希望罷在候、此義は豫じめ同志の奮勵を期待すべく緊要事と存じ、舊臘發行の機關雜誌「昆蟲世界」へ略説を加へ置き申候。尙本年は大阪に内國大博覽會も開設に相成り、昆蟲標本も多々出品の模様に付、成るべくい來る三月を以て、全國害蟲驅除特別講習會を開き、會員一同と共に參觀の見込に候間、其節は同地に於て種々斯學上の件を御協量申度と、今より樂々居候間、御都合御見計つ上、御參會相成度候様致度候、年末筆貴下の御健勝を祝し、兼て將來の御勇奮を奉祈上候、勿々不盡

岐阜縣岐阜市京町

名和昆蟲研究所

所長 名和靖

主任 永澤小兵衛

調査主任(在米國) 名和梅吉

養蟲掛 森宗太郎

同補助 長屋六二

標本掛 棚橋昇

同補助 名和愛吉

同補助 木之村一

編輯主任 小森省作

圖書主任 伊藤七郎

同補助 名和貴子

庶務主任 石川和三郎

同補助 高橋喜男

會計主任 名和正也

雜誌
昆蟲
世界
合本
出來
廣告

○第十二號以下完備
本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第六卷(昨年分)出來

西洋綴
金文字
入美裝

●昆蟲世界第二卷 五部
右は明治三十一年發行分(但合本にあらず)
(自第拾貳號)
(至第拾六號)

●昆蟲世界第二卷合本壹册
右は明治三十二年發行分
(自第貳拾七號)
(至第貳拾八號)

●昆蟲世界第四卷合本壹册
右は明治三十三年發行分
(自第貳拾九號)
(至第肆拾號)

●昆蟲世界第五卷合本壹册
右は明治三十四年發行分
(自第肆拾壹號)
(至第伍拾貳號)

●昆蟲世界第六卷合本壹册
右は明治三十五年發行分
(自第伍拾三號)
(至第陸拾四號)

(合本は每册金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢
其他は定價の通り)

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

專賣特許
第四九八六號
莖切器發賣廣告

螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大まして之れか驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かざるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖も未だ完全の良器なく止むを得ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕ふのみならず全く螟蟲の潜伏せる稻莖を根底より刈去ることを得ざるが爲め害蟲驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲を嘆ま堪へざるなり發明者多年茲ま意を籠め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は上圖に示す如く小形の鎌に弾力性の遮匙を付したるものにして本器を使用するに先づ把手(ハ)を握り而して切取らんとする稻莖を左手まで握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間(イ)に當て鎌を少しく前方に押すへし然るときは遮匙(ロ)は弾力性あるを以て外方に開き稻莖を押し入るへし一度押し入れたる後は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は挿入する事なし此に於て鎌を入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害せず容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の良器にして静岡縣農事試驗場等の協賛を博せり定價一挺金拾錢、農會等の共同御用は特別割引

新發明莖切器の圖



製造元 靜岡縣小笠郡比木村 山本勸藏
發賣元 同 縣志太郡棧津町 吉野寅之助
縣下一手販賣所 岐阜市京町 高橋喜之助

◎害蟲圖解未刊の分豫告

- ◎ 稻の害蟲イナゴ(稻蝻)
- ◎ 稻の害蟲オホズキムシ(大螟蟲)
- ◎ 稻の害蟲セジロウンカ(背白浮塵子)
- ◎ 稻の害蟲ヒゲナガアブ(長角虻)
- ◎ 桑樹害蟲クハハマキ(桑葉捲蟲)
- ◎ 蠶の害蟲カヒコノウジバ(蠶蛆)



- ◎ 松樹害蟲マツケムシ(松蝨)
- ◎ 藍の害蟲アキノゾウムシ(藍象鼻蟲)
- ◎ 粟の害蟲アハノズキムシ(粟螟蟲)
- ◎ 胡麻害蟲メンガタスズメ(胡麻蠅)
- ◎ 赤楊害蟲ハンノキケムシ(赤楊蝨)
- ◎ 櫟の害蟲カミキリムシ(天牛)

- ◎ 梅樹害蟲ウメシヤクトリ(梅尺蠖)
- ◎ 稻の害蟲トビイロウンカ(褐色浮塵子)
- ◎ 稻の害蟲クロクサガメ(黒色椿象)
- ◎ 桑樹害蟲アラハマキムシ(青色葉捲蟲)
- ◎ 桑樹害蟲クハゴ(野蠶)
- ◎ 蔬菜害蟲モンシロテフ(菜の螟蛉)
- ◎ 蔬菜害蟲サルハムシ(菜の葉蟲)
- ◎ 大豆害蟲ヒメコガ子(姫金龜子)
- ◎ 梅樹害蟲ウメケムシ(梅蝨)

◎ 圖解の紙幅縦一尺三寸横九寸 ◎ 壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
 ◎ 百枚以上一圓壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢
豫約代價 壹枚拾錢郵稅貳錢
 但申込の際前金添附の事

圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但郵券代用壹割増の事

- ◎ 梨樹害蟲ナシゾウムシ(象鼻蟲)
- ◎ 梨樹害蟲ホシハマキ(星葉捲蟲)
- ◎ 果樹害蟲イラムシ(刺蟲)
- ◎ 藍の害蟲アキノズキムシ(藍の螟蟲)
- ◎ 粟の害蟲アハノヨトウムシ(粟螟蟲)
- ◎ 里芋害蟲セスチスズメ(烏蠅)
- ◎ 桐樹害蟲シモフリスズメ(桐蠅)
- ◎ 果樹害蟲ホシカミキリ(白斑天牛)
- ◎ 果樹害蟲ドウガ子ブンブン(金龜子)

發行所

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

謹賀新年

靜岡縣農事試驗場

岡田忠男

謹賀新年

在水戶

安資農夫

謹賀新年

大分縣大分郡

小野覺太郎

謹賀新年

藤澤節太郎

藤澤節太郎

謹賀新年

靜岡縣磐田郡

神村直三郎

恭賀新年

岐阜縣小阪專堂

小阪專堂

謹賀新年

岩手縣氣仙郡

鳥羽源藏

謹賀新年

長崎縣北高麗郡農事試驗場

中野末吉

恭賀新年

岐阜縣本巢郡草深

坪井伊助

謹賀新年

鳥取縣蓮佛萬吉

蓮佛萬吉

恭賀新年

岐阜縣

林茂

恭賀新年

謝平素之疎音祈將來之交誼

新瀧縣岩船郡神納村

謹賀新年

岐阜縣農會內

桑原貫之助

第十二回全國害蟲驅除講習會修業生

佐藤榮

謹賀新年

千葉縣

林齋藤啓二

謹賀新年

在水戶

中村馮次

謹賀新年

福岡縣

嶺要一郎

恭賀新年

埼玉縣風間七郎兵衛

風間七郎兵衛

遙賀新年

在米國桑港

岡田虎二郎

謹賀新年

青森縣上北郡三本木村

新渡戶稻雄

謹賀新年

埼玉縣

田口弘

謹賀新年

下總國安食町

後藤新左久

謹賀新年
栃木縣高柳源多郎

恭賀新年

香川縣大川郡丹生村

脇屋禎三郎

新春 一 點瓢蟲 蟲 男

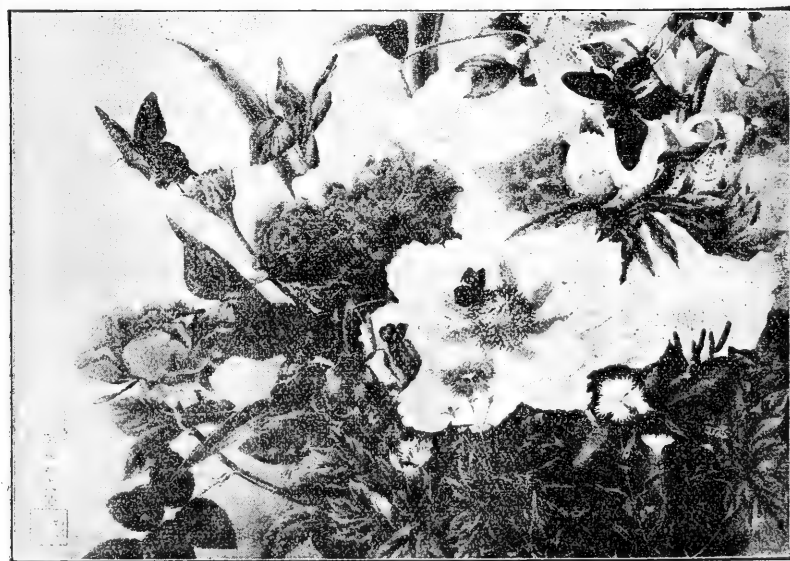
昆蟲世界の記事は、年中四角い事ばかりで、圭角の取れた小説杯の収録を容さぬが、新年に計りも、無邪氣で且つ三角位ぬ事を載しては如何だ、この讀者の注意があつたから、附録として、茲に一點瓢蟲談を掲ぐる事にした。

米國の昆蟲學者マアラット博士と云へば、明けて一昨年の春、貝殼蟲の天敵卽ち瓢蟲を調査する爲に、夫妻相携へて本邦に渡來した人であるが、此頃同夫人かゝ、名和昆蟲研究所の瓢蟲女史に宛て

扱此たびは、一しは御丹精を凝され玉ひ候て、御揮毫遊ばされ候最と麗はしき繪畫なば、遙々御寄贈下され、御厚意のほど誠に辱なく存上候、右は直ちに扁額に製らせ候て吾が居室に掲げ常に展觀の樂みを得候のみか、此に對する毎に、御慈母様並に御許様の事何となく、御なつかしく感ぜられ、雲山萬里を隔つる身をも打忘れ候て、親しく御面話の心地さへ致され申候、唯御書加へ遊ばされ候落款の漢文字は、解し得べくも無之につき、哀れ、其意味を御示し下され候はゞ満足此上なき次第に御座候、右御禮のしるしにもマクリスマスの贈物を、別包として差献じ候ま、御受納下され度候。

の書面があつた。是は博士夫妻が、岐阜へ來られた時、恰りも全國昆蟲展覽會が開かつてあつたので、會場へ案内し、處、參考室に女史が、彼此三月以上も要つて描いた、百花群蝶圖のあるのを見て是非斯様なのを一枚欲しいとの希望であつたから、去年の夏、茲に載せてあるやうな寫生畫を作つて、贈つたのよ對する挨拶状で、又先方かゝの贈物とは、繪具廿六種を指すのである。

然るに、瓢蟲女史と云ふ名前が、折々昆蟲世界紙上に現はれるので、其奇異を雅號かゝ、一體アンタウ ムシ女



史とは誰の事で、何んな意味で命けたのである、と質問をする物好も多いが、底にも底あり、蓋にも蓋ありで、普通は世の中の害蟲視せられる婦人子科に屬する此女性よ、瓢蟲と云ふ益蟲の名前をはづんだのは、決して偶然の事では無い。現に其譯を聽いてから、それよ肖かり度いと云ふて、秋山華子(優曇華の華を採れり)味勝秋子(秋津の秋を採れり)など、云ふ名前を自分の子供よ命けた親々さへもゐるのだ。斯學普及上、芽出度い話だから、少しく其譯を述べやう。

瓢蟲女史とは名和貴子嬢の事で、戸籍を引合よ出すと、名和昆蟲翁の長女で、其實名のタカコと云ふのが、既に瓢蟲を言顯はして居る。女史の誕生は明治十七年の今月の十九日で、其呱呱の聲を揚げた場處は、岐阜縣下揖斐郡の沓井村であつたが、當時昆蟲翁は、岐阜農學校に奉職して居られたから、岐阜の西野町に假寓を定めてあつたさうだ。是より先、最早分婉と云ふ場合に、飛脚が來たのであるが、是日は朝から瓢蟲の一種の取調べに餘念が無くて、遂に歸省の事も打忘れて居たのである。郷里では勿論、一同待ち切つて居つたが何時迄たつても、翁の姿が見わんところから、皆不平顔をして、歸宅が出來ンものなれば、責めては赤ン坊の名前計りも言ふて遣はすが宜い、と云ふ嫌味たつぶりの催促をした、すると翁は今更の様に改まつて、其三日目の夜に、委しく命名理由書を認め、又これに姫龜甲瓢蟲八倍大の彩色寫生圖を添へて、親類宛よ送附した、其書面は次の如くである(但し原文は、假名字會の規定書式に隨つて全く假名字のみで書たものであるが讀み易い爲めを思ふて、漢字よ改書した)。尙ほ此文中に注目すべき事は「我國にても、遠からせ益蟲として之を愛護するの由來る事と信ず」との一節と冬季の採蟲の一條で、當時は害益蟲の區別も知らん世の中であるし、又冬の蟲捕は、昆蟲翁に始まつた事が判然するのである、そして此豫言が果して二十年後の今日よ、的中したのである。

瓢蟲のシムウタンテコノメカメヒ



名を附ける條り

凡て物の名は、符號なり、人の名も亦然り、固より符號なれば何にても可なるものなれども、其中人には人の名ありて、なほ細かに分くる時は、男性には男性らしき名、女性には隨ひて女性の名あれば、また是に據らざる可からざるものなり。私事、一月十九日午前九時より、例の通り農學部へ出勤し、豫て捕ひ置きたる瓢蟲を細かに調べ且つ奇麗に色彩し、全く終業せしは正午なりしが、其日は土曜日の事とて、それより歸家せり。

瓢蟲は、漢文字にて瓢蟲と書き、英語にてこれをレデーホールドといふ、レデーとば、貴き女(漢字にて貴女と書く)ホールドは鳥(漢文字にて鳥と書く)といふ義なり、それは英國にて、餘り奇麗の蟲にて、且つ優しくして、何處までもなく貴きを以て、斯くは名づけしなり。此瓢蟲は六脚にて、常に私の調ふる職分中の蟲なり、此蟲の屬は數多くして、且種々の色を帯べるも、皆至つて奇麗なる種なり、其本領は恒に農家の流汗辛苦して、栽培せる草木を蝕害する所の惡しき蟲を、悉く喰ひ盡すものなれば、誠に國家の爲めに有益なる貴重すべき蟲とす、それ故西洋にては、何人も居常注意して、一頭だも之を殺すこと無しと云ふ、我國にても、遠からず益蟲として之を愛護するの由來る事と信ず。

阿崎氏の報知に、十九日の午前十一時頃、誠に安らかに女子分婉せりとの事。女子と聞く時は、前に記せし如く、女性相應の名を命

けざるを得ず、而して時恰かも、瓢蟲を描き居れる際なれば、紀念として貴女鳥の貴の字を取りて、之を邦訓にてタカミ名づけたるには、私に取りて頗ぶる満足する所なり。

明治十七年一月二十一日夜岐阜西野町寓居に記す

親族御中

名 和 靖

此書面を請取ツた親類達は當惑して、寧ろ正氣の沙汰の注文とは思はんであつたらしい、併し乍ら實の父親の好みと來ては、致方が無い、澁々乍らも、瓢蟲の英名 Lady bird 卽ち貴女鳥の貴の字を冠せて貴子と名付け、之をタカミと訓む事にしたのである。

其時はうれで濟ンだが、女史が十五六歳に成ツた頃に雅號が要る段よあつた、此時誰か折角優雅な號を選んださうだが、一向に翁の氣に入らぬので翁は、女史に諭して申すよは、御前の名のタカミと云ふのが、既に瓢蟲と云ふ意味であるのだから、今更彼此と別號を選ぶの必要が無い、矢張瓢蟲女史と附けるが宜いと云ふた。これが抑そも瓢蟲の雅號の由來で、

此時にもまた強制的命名式を行ふたのである。茲に掲げたのはマアラット氏來岐の時撮影した瓢蟲女史の小照である却説、血氣盛りの昆蟲翁が、一家の慶事を餘處にして熱中せられた瓢蟲と云ふのは、上圖の右方にあるヒメカメノコ

(看參項の本日の上學蟲昆中報雜號前)



テンタウムシの變種とも云ふべき微小の種類で、常に蚜蟲を食害する舉動の敏速なものであるが、春は薔薇科其他の蚜蟲を驅除し、夏は特々萩の葉を多く居る。當時翁が*を告げ、且つ是はヒトツボシ故なれば、眞逆に此寫眞にまでは見えないが、女史の頬の上には、一點の大きき黒子があつて、分類上の特徴とすべき價值があるかゞである。終りよ新春の試筆に、斯かる閑話をもつるも、畢竟聖代の餘澤であるから茲に謹んで、幾千代掛けて、大君の御代榮へまさんことを奉祝する。

尤ども是まで、瓢蟲女史の事を質問する者があれば、吾は審かゝ其出處

明治十七年一月十九日(早朝微雪)土曜日

岐阜華陽學校農學部内ノ赤松ノ皮間ニ潜伏ノ瓢蟲屬一頭ヲ捕フ(近傍ノ黒松ニハ殆ンド居ラズ)大サ一分二厘許ニシテ、形狀ハ楕圓チナシ、軀下面ハ平直、背面ハ半圓球狀チナス、角ハ十一節、趾ハ三節ヨリ成ル、其色ハ總テ光アルモノニテ、軀ノ下面、頭部及ビ胸部ノ一部分並ニ甲翅ノ接着スル端即チ翅ヲ張ラザル時、軀上ニ於テ中央ノ一縱線ハ深黒色ナリ、眼マタ然リ、但眼ノ間、角ノ後ニアル二點及胸部ノ左右兩端ハ白色ナリ、其他角ばるばい足部甲翅ハ赤色ヲ帯ビタル黄色ナリ

dorsal or ventral abdomen of the host. When the host bears a number of the larvae, it may be recognized from a distance, on account of the above said white substance. When these larvae are full grown they leave their host and move away to the trunks of trees or the leaves of plants, to spin their cocoons.

The cocoon is white, ellipsoidal and covered with a white woolen substance. The pupa is pale brown, cylindrical and turns black before it is transformed into the moth. The moth is small and black, and its expanse of wings is more than half an inch. The antennae are bipectinate, with 16 joints, and less than half the length of the forewing. The head, thorax and abdomen are all black. The forewings are black with many undulated lines of shining ultramarine, but the hindwings are dark.

On other occasions I found living on *Ricania japonica* certain parasitic larvae, which were closely allied to the species mentioned above, but the question as to whether these are the same or not, is still undecided.

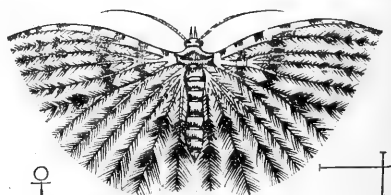
Plate 1. Fig. 1, *Pomponia japonensis*, with parasites; 2, larva; 3, cocoon; 4, pupa; 5, moth; 6, antenna; 7, nervuration of forewing; 8, nervuration of hindwing; 9, *Ricania japonica*, with parasites.

1, 3, 9, natural size; 2, 4, 5, 6, 7, 8, enlarged.



The Many-Plume Moth of Japan.

Distribution. Prov. Hitachi: Mito (Y. Nawa; March 12. 1898) Prov. Mino: Gifu and Kamagatani; Tokyo; Kobe; etc.



Orneodes hexadactyla?

Notes on a parasitic moth.

by

U. Nawa.

First assistant in Nawa's entomological laboratory.

Although several species of parasitic insects belonging to the Hymenoptera and Diptera, etc. All well known, it was not until I made the observations recored below that I was aware of such insects belonging to the Repidoptera.

In October 1892 I captured a small moth on Mount. Kinkwa (in the vicinity of Gifu), with which I was absolutely unfamiliar at the time. In the beginning of August 1898, mr. Y. Nawa found on Mount. Yōrō, some curious larvae covered with white substance, and living on the outside of the abdomen of *Pomponia japonensis*, these he brought back to our laboratory and bade me observe them closely, Where upon I put them into the breeding cage and observed them every day. After a few days they spun small cocoons, from which the moths which issued were found to be same as those of the species mentioned above. Afterwards the same kind of moths were collected in several prefectures of Japan; viz, Shiga, Toyama, Tottori, etc. According to my observations the cicadas on which the larvae most lived were the *Pomponia japonensis*, in less degree the *P. maculaticollis*; and least of all the *Graptopsaltria calorata*.

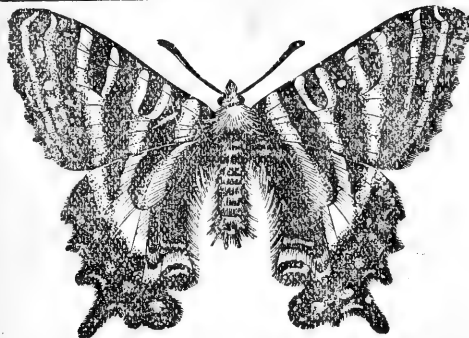
The larva appears at first sight a maggot, because its legs are very short and the prolegs can barely be traced. The head is very small and in colour pale yellow; the other parts of the body are pale redish-brown; but when full grown the body is covered with fine white hairs, which appear like a mass of cotton wool, which protect from rain. The larvae live on the ventral thorax and

595.70552

Vol.VII. FEBRUARY. 15TH, 1903. No.2.

二月十五日發行

（毎月一回十五日發行）



THE INSECT WORLD:
A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第 六 拾 六 號 (第 七 卷 第 二 冊)

目次

(禁轉載)

● イシガキテフの發育圖

● 學說……………一頁

● 邦産二十四鳥羽蛾(Ornithodes sp.)に對する疑問

● 岡田氏の採集寄贈に係る貝殼蟲種

● 邦産孳蝶蚊種上古棲息の説

● 第拾四回全國害蟲驅除講習會員の五分時演說

● 米國昆蟲界の所感一二名和梅吉

● 長野菊次郎の害蟲驅除講習會の必要

● 島根縣下の兩害蟲調査報告

● 入の用ゐる昆蟲の名稱

● 蟲方言

● 苗代の害益蟲に就て質問

● 右二件答

● 雜報……………三六頁

● 此好機を逸すること勿れ

● 工業應用昆蟲誌報

● 一覽

● 就て

● 標本陳列館の參觀人

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（明治三十六年二月十五日發行）

名和昆蟲研究所廣告

全國害蟲驅除講習會 修業生諸君よ告ぐ

今般第五回全國勸業博覽會の開設を機とし、全國害蟲驅除講習會を、來三月廿八日午後一時を以て大阪市に開き、一は以て舊交を温め一は以て將來の親和を圖り、聊か斯學の發展應用を助長せしめんとす、吾が同窓會員諸君は、此舉に賛意を表し、奮つて臨場あらんことを。

一、會場は目下交渉中に付三月發行の本誌を以て敬告すべし。
 一、全國害蟲驅除講習會生外の同志と雖も、之を正會員に准じて列席を許すべし故に、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持の諸君は、遠慮なく來臨ありし。
 一、列席參同の會員諸君は、三月二十日までに、名和昆蟲研究所庶務部内、同窓會幹事に宛通告ありし。
 附 當日は名和先生を初め昆蟲學者數名も來臨の都合なり

大博覽會 對する 賞品贈與 出品標本

第五回全國勸業博覽會の出品の昆蟲標本は、都合數百點の多きを算する趣あれば、隨つて斯學に裨益を與ふるもの亦少なかりざる可し。當昆蟲研究所茲も觀る所あり、此等出品標本中、左の條に該當するもの五點若くは七點を選抜して、各々これに紀念の賞品を贈與し、その斯學界に規範たるの名譽を表彰すると、もに、其功勞に對して一片の謝意を致さんとす。

一、紀念賞品は、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持者の出品に限り之を贈與す。
 一、紀念賞品は、博覽會審査の結果、最優等に位せる者のみに之を贈與す。但し、審査規程に入格せざるため、優等賞を受くること能はざるも、現品の優良と認むべきものある時は、特に之を拔擢することある可し。
 一、雜誌「昆蟲世界」愛讀者中、卓絶の標本を出品し若くは優等賞を得た時は、特に此規程を適用することある可し。
 一、紀念賞品は、昆蟲學に關係を有する書籍若くは、名和昆蟲研究所の徽章を附したる工藝品たるべし。

第十五回全國害蟲驅除特別講習會開始

開期 自今年三月十日 三週間以内
 至 同月三十日 定員約四十名

第十五回全國害蟲驅除講習會は、今年春後、三月開會の處、嘗て本誌に詳記の事情を生じ、明三開會の紀念として特別に開講せんとす。然れ起れるを以て、之が開始を難するもの多々あり隨つて其必成を期し難し。是を以て試みに之を世の同志に問ひし、幸にして約半數の賛同を得たるを以て三月十日を期して開講式を擧げ断然茲に三月十日を期して開講式を擧げ左の諸項を熟覽の上、今二月廿八日限り、其手續を終了せられよ。

- 一、會期は三月十日より同月三十日に至る三週日以内とす。
- 二、會費は通常の講習會費と同額を收む。
- 三、講習學科の終了次第、修學旅行として、一同大坂市へ出張し、內國勸業大博覽會に陳列の昆蟲標本、驅除器械、驅除藥劑等荷し、應昆蟲學に關係あるものに就きて、親しく現物の説明品評を爲さしめ、各講師は公平の審査眼を以て、更に其優劣得失を示教す。
- 四、大阪へ往返の際、天候の如何によりては、比叡山、伊吹山若くは月ヶ瀬の一を擇びて、各種の採蟲法を行ふ。
- 五、本會は長期講習會の豫備を以て准す。
- 六、修學旅行費は、各會員の自辨とす。
- 七、其他は普通講習會の規則に同じ。
- 八、規則書入用の向は返信用郵券を添へ至急照會せらるべし。(附記)本會開會中に、當名和昆蟲研究所創立滿七年の紀念として昆蟲百五十萬供養塔の開眼式を擧行し、又大坂市に於ては、全國害蟲驅除講習會修業生の同窓會を開く計畫あり。

二月十日

名和昆蟲研究所



Cyrestis thyodamas Boisduval. 圖育發のフテキガシイ

(明治三十六年 第二月)

新年海

御製

梓ゆみ八洲の外も波
風の静なる世の年立
ちにけり。



○イシガキテフの發育を記す(第貳版)

高知縣土佐郡

武内護文

鱗翅目蚊蝶科に屬するイシガキテフは、其體長六分餘、翅張一寸六七分(雄は雌よりも小)を算する中形の種よして、翅の外縁は、同科の他種に見るが如く、脈端稍突出して波狀をなし、後翅には尾様の突起ありて内縁角は圓く突出す。軀背は銀光を放てる灰白色よして、三條の黒縱線を通玄、翅は白色にして翅脈は細黒よ、脈間を横貫して或は曲折し、或は縦走せる數多の細線を畫き、特に其外縁よ近く走るものは、處よりて褐色を帯び、後翅の内縁角よ向ふて集る所のものは、末端にまた褐色を呈はすと雖ども、其他は皆黑色なり。翅の中央より少しく外方には、太き一條の黒線ありて、その後翅に在るものは内縁角に近く藍色を帯ぶ(雄の後翅には此線よ稍平行して太き一條の黒色あり)。此線と外縁の間は、前後翅共よ、雌にありては微のよ黄褐を呈し、灰黄色の斑紋數多ありて、其内縁角にあるものは褐色を呈す。前翅の前縁の基部、及び後翅の内縁部は、稍灰褐にして二三の白色部あり。雄にありてハ、翅の外縁の邊と雖ども、黄褐を帯ぶるとなく、雌に於ける灰黄色の斑紋は、濃淡各様の黒色にして、前翅の前縁角邊に、淡黒を彩る。其他の諸部の彩色は、概して雌に比して濃かあるを覺ふ、但し雌にして雄の如き彩色を有するものもあり。斯種の翅は薄くして、鱗粉を裝ふとも亦厚からず。其飛翔するや、翩々と

して紙片の風を飛颺するが如く、常々方向を左右上下に屈轉し、偶々蜜を求めて花上に戯ることあるも、概ね葉上或は土石の表を靜止す。而して靜止の時には、多く其全翅を水平に開置す。

抑もイシガキテフ(イシガケテフと云ふと同じ)の名は、其翅彩の宛がら、石壁の鑿皺の紋様を似たるより起れりと云へば、石壁紋蛺蝶の義たるや明白にて、其色彩の美、其描畫の妙、更々形容し得られぬ奇品なるに、加へて其飛翔の狀憐愛すべきを以て、從來、當地に於ける採集者の注目を惹く所となり、吾が土佐にありては、山中溪畔に珍しからざれども、市街附近の地には殆ど産せざるを以て、標本も亦頗る人目を悞ばしむ。

雌蟲の産卵するや、薛荔樹の新葉に止まりて、翅を開置したる儘、葉表に一顆づ、之を産附す、故も他種の如く尾端を曲ぐるの勞あるとなし。卵は雞卵形にして、長さ二厘五毛許、黄色にして其面平滑なり其上方の小端は稍大なる十一角をなせる平面部あり、更に之を圍みて隆線あり、各角頂よりは、一條の隆線を卵面の下端に通ず。隆線は皆淡黄色なれども、其凸隆せる部面は、鏡檢の際に殆ど白色の觀をなす蓋し光線の作用によりて然るなり。

幼蟲は充分成長すれば、體長一寸三分許に達す、圓筒形にして兩端少しく小に、腹面は較扁たし。全躰鮮綠色にして、腹面は淡綠、氣門下一帯は淡褐を帯び、其色腹面中央に向つて漸く消滅す。八對の脚亦淡褐を呈し、第五節の背上及び尾端に各一個、頭部頂上に一對の角狀突起あり、各突起面には無數の絞膚狀の小突起ありて、第五節上の突起の後面、及び尾突起の全面にある小突起には、稍長くして鋸齒狀をなすものあり。各突起は黒褐をれども、第五節上の突起の下半、及び頭上の突起の中央の大部は綠褐を帯ぶ。頭の前面には二個、兩側には各々一個の黒褐條(兩側のものは大、前面のものは小)ありて

此突起に連合す。第五節上の突起の直後を廻り、第三節後端の兩側に向つて、斜め淡黒褐の太き一線あり、兩縁濃色を帶ふ、又尾突起の前面に接して、第九節背の中央に達する大なる黒褐の線あり。幼蟲の第一二齡の頃は、全軀淡綠褐にして、背部較濃色に、各突起は更に濃色なり。而して幼蟲は終始薛荔の嫩葉を嗜食し、晝間は常に葉の中肋上に棲止して動かさず、頭部をば必らず葉と葉柄の接着點に置く。蛻皮の際には、先づ絹絲を以て尾脚を葉面に固着せしめ、休眠一晝夜の後、始めて其舊衣の脱するを見る。斯くて老熟するときは去て樹上に匍ひ廻はり、適處を求めて、其尾端を樹枝の裏面に附着し、約一晝夜を経て舊皮を脱すれば、茲に蛹化を遂ぐ。蛹は頭尾を通つて長一寸一分を普通とし、大軀は三角形にして側扁なり。頭端には幅五厘、長二分許の扁平にして彎曲せる長突起を有し、胸腹部の腹面には二個の大なる突隆部及び數多の凸凹を存す。體色は帶綠黒褐をなし、背面の中央には大なる黒線ありて頭部の突起端より尾端に達し、此より數多の小黒支線を並發し、更また無數の小黒線を分派し、以てその蛹體を網羅す。

幼蟲は適當の保護色を有し、其一二齡の頃は、食樹の嫩芽に似たるも、成長すれば葉色と異ならず。而して其頭部の突起は、頗る食樹の芽鱗の老枯せしものゝ酷肖し、又其晝間靜止して動かさず、頭部を芽鱗に近く向けて接着するが如きは、更に自然の妙を極む。就中、其擬形の最も巧妙なるは、蛹の枯葉を捲縮せる狀に扮するに在るなり。即ち其頭部の長突起は、宛然葉柄の如く、背上を縦貫せる黒線は、中肋の如く、此より支出せる小黒線は、葉脈の如く、網狀の小黒線は、亦樹葉の網狀脈にも髣髴たり其他大小數多の突起部の、枯葉の缺裂に異ならざる、又其殘積に似たる、其色の樹葉半ばは已に萎枯して、猶ほ微かに綠色を留むるに擬へる、特に蛹態の扁側にして、常に軀を一方に彎曲する狀の、枯葉を

懸垂せしが如きに至りては、何人も其造化の妙用に驚歎せざるは無きあり(其蛹躰を彎曲するは、全く其保護の爲とする性質なるべし、之を四面硝子を以て覆へる飼育器内にて試験せしに、何等空氣の振動を感ずると無りしに、猶ほ絶わす彎曲となせり)。

イシガキテフは成蟲にて越年するものにて、其春季四月中旬より下旬の頃現はるゝものは、翅縁往々破れ、彩色亦頗ふる衰ふ。次で五月中旬より六月上旬の間に出現し、其數は四月よりも遙に多し。次で七月上旬より下旬の間に出現し、終りに九月中旬、十月上旬の間に出づるを見る(七月と九、十月の間、猶ほ一回の發生おらざるかと思ひ、數年注意するも、未だ之を認むると能はず)。蓋し春季現はるゝものは即ち前年最終に出でたるもの、越年せしめて、多くは山間溪畔の薛荔に産卵し、第一回の幼蟲は、此處に生育す。而して夏季を迎ひ、炎熱の加はるに及べば、山中の幽邃にして、日射の劇からざる處に食樹を求めて産卵す、是れ夏生種の幼蟲の發見し難き所以なり。成蟲も亦夏日は、炎熱を避けて清涼静閑の境に移るもの多し、故に觀瀑納涼の際の如きは、點々綠樹間を往返して、一段の雅趣を添ふるを見る。余は未だ此蝶に對する寄生蟲其他の天敵を多く發見せずと雖ども、アシナガバチの類は、之を加害するものあるなるべし。現に昨春六頭の幼蟲を捕ひ來りて室内に試育し(食樹の一枝を硝子壘に差し込る儘にて、飼養箱を用ゐずして飼育せり)少時間外出せしに、僅かに一頭の死骸を留めて、他は悉く失踪せしに驚き、是れ或は家禽の爲に啄食せられしからん、然るにても保護色觀察の無効を歸したるは遺憾なり、と獨語を發し居りしに、折しも一頭のアシナガバチの翔來りて、頻りは何物かを壘上の葉間を搜索し、其獲る所なきに及んで、中空指して飛び去れるを見たとあり。乃ち知る、曩に幼蟲を食盡せしは、即ち此蜂にして、今や復たび來りて食料を索むるものなることを。於是乎、愈々昆蟲の嗅

覺の銳利なるを知り、特に仇敵間よ於ては、極めて鋭敏なる鳥類の視官を以てして、猶は足らざる所を補ひ、所謂害虫を天然的に驅除するの効少からざることを感嘆す。

◎邦産二十四鳥羽蛾(Orneodes sp.)に對する疑問

岐阜中學校教諭 長野菊次郎

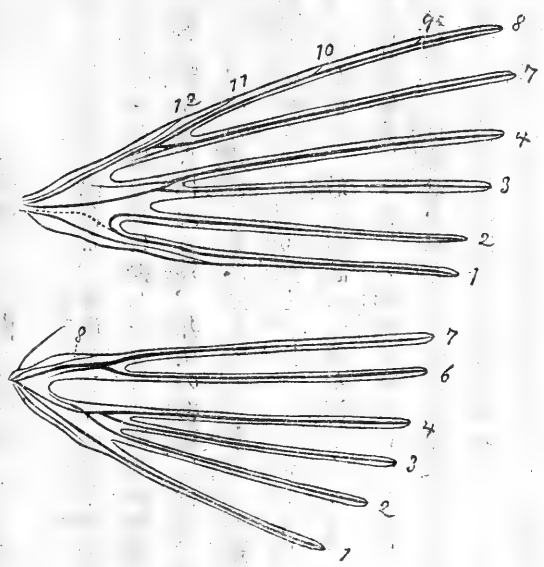
前號の英文欄の餘白よ、邦産の二十四鳥羽蛾の圖を掲げて、其分布の一部を記し、其學名には *Orneodes hexadactyla* を以て是に擬したりき。抑も此奇異なる蛾につきては、名和氏によりて昆蟲世界第十號に其發見を紹介せられたる外、邦文の書籍に於て、未だ嘗て之を見たることなし。然るよ不幸にも、前號の圖には、翅の分裂せる部分よ於て、多少の誤謬あるのみならず、之が記載を缺きしを以て、或は世人の誤解を招がんと測り難し。因りて、余が今日迄になしたる研究の一二を報することの、徒勞よあらざるべきを信じ、敢て本誌の一部を汚さんとす。

名和昆蟲研究所よ於ける此蛾の來歴につきては、明治三十一年三月十二日、名和(靖)氏が水戸市常盤公園に於て、採集せられたるものを以て嚙矢とす。之に三十四年十二月廿六日、岐阜市金華山麓に於て、吉田悦三、高橋喜男の兩氏が獲たるものと、三十五年一月一日に、岐阜縣揖斐郡霞間ヶ谷に於て、森宗木郎氏が採集したるものとを合して、僅かに四頭を藏するのみ。然れども、名和氏の證言よれば、明治三十二年二月十二日、當時神戸港在留のワイルマン氏が、其神戸附近にて採集せられたる標本中にも此蛾を一見せられたることあり、又農科大學助手土田都止雄氏が、偶々同大學の養蟲箱に、此蛾の數頭發生せしことを認め、多分忍冬より出でしものなぐんどの由を、名和氏に物語られし事ありと。

扱其名稱よつきては、邦書之之を徵證するよ足るべきもの無きを以て、更にカービー氏の歐洲蝶蛾譜

ケンブリッジ博物誌、カムストック氏、バックカード氏等の昆蟲書に参照せしよ、普く歐米に産する此蛾の一種に、オルチオデス(或はアルシタ)ヘキサダクテラOrneodes (Ainea) hexadactyla Sw. へるものあり。其四翅は黄灰色にして、皆六片に分裂し、上に暗黒線を彩どり、展張は殆んど一時の四分の三を數ふ。

第一圖 本邦産二十四鳥羽蛾の翅脈 (原圖)



而して、其幼蟲は黄色よして、頭部は黄褐色を呈し忍冬類の花芽中に生育して繭を營む云々とあり。此の如き簡單なる記事よよりて、其種名を確定するに能はざるは勿論なれども、十數種の書冊に載せたるもの、殆んど此の一種 (ロイニス氏の動物書よは他の一種をも記載せり) よして、且其幼蟲の嗜好植物が、忍冬の類ありとの點は、正に土田氏の談と一致する所あるより、遂に余輩をして本邦産のものも多分之と同種ならずや、との假定を下さしめり。然れども種名の考査の如きは、斯の如く輕擧に附すべきにあらざるを以て、爾來これが調査に従事せしよ今日よ及びては疑惑百出、轉た歸する所を知らざる境遇に陥りぬ。固より余の研究や、未だ其結末を告

げせ、而して早計にも、今日之を本誌よ公にする所以のもの、一は大方諸君の、此蛾は關して、一層注意せられんことを希望するに存す。

余は本邦産の二十四鳥羽蛾と、歐米種との異同を述ぶるゝ先だち、Orneodes hexadactylaを整理するの必要を感じ。何となれば歐米普通の此種さへ、書冊によりて其學名を異にし、往々混雜を醸すの虞れあるを以てなり。

抑も此オルネオデス（ヘキサダクテラは、メイリック（Meyrick）氏の分類法に従へば、鱗翅目の螟蟲蛾族（Pyralidina）多翼蛾科（Orneodidae）に隸するものにして、此屬の種類の世界は知られしものとは僅かに二十種許なり。然して歐米に普通なるは、即ち此ヘキサダクテラにて、英國にては之をTwenty Plume Mothと稱し、獨逸にてはGeisbatt geisshenと呼べり。元來、この蛾の四翅は、各六片は分裂して、都て二十四片あるに關せず、之を英國にて二十鳥羽蛾と稱すること、甚だ其當を得ざるが如しと雖どもTwentyとは、必ずしも二十と限りたるにあらず、稀には二十前後の不定數を指すことあるを以て、此意に解しなば、敢て妨げなかるべし。然れども、斯る名稱は、學術上混亂の虞れやることをや慮はかりけん、エンサイクロペーデア、ブリタニカ（Encyclopaedia Britannica）中には、確かに二十四鳥羽蛾（24-plumed moth）の名に改め置けり。

扱此蛾の學名につきては、始めリキアス（Linnaeus）氏によりてAlucitaとすへる屬名の下にHexadactylaとす種名を命せられし、翼蛾科Pterophoridaeの中に配せられたり。蓋しAlucitaとは、羅旬語の蚊とす意義として、此種の蛾が靜かに飛ぶ状態の、多少蚊に似たるを以て此名起り、Hexadactylaは六指といへる義を有し、其各翅の六裂せるによりて、扱は斯く名づけらる。然るゝ學術の進歩するに從ひ、多翼蛾科Orneodidaeを設立するの必要生ずると共に、Alucita屬の意義を縮少することとなしけん、アルシタ屬は今尚は翼蛾科中に存在するに關せず、多翼蛾屬Orneodesの名はラトレール（Latreille）氏によりて創設せ

られぬ。然れば今日にても、尙二十四鳥羽蛾をアルシータ屬に隸せしむる人少からず。去れば一見異屬の觀あるのみならず、其種名にも一二の異同を生じたれば、今普通の書籍を對照して、其異同を整理すること次の如し。

Alueia hexadactyla の稱を用ゐたる書は左の如し。

(一) Kirby. European butterflies and moths. 1882. P. 415.

(二) Cassell. Natural history. Vol. VI. 1896. P. 69.

(三) Gordon. Our Country's butterflies and moths. P. 86; Pl. 31, fig. 874.

(四) Lennis. Synopsis der Tierkunde. Bd. II, S. 365.

(五) Claus. Lehrbuch der Zoologie. 1897. S. 605.

Alueia polydactyla. Hb. の稱を用ゐたる也。

(一) The Cambridge natural history. 1901 Vol. VI, P. 426.

(二) Packard. Guide to the study of insects. 1889. P. 3574

Orneodes hexadactyla の稱を用ゐたるは。

(一) Comstock. Manual for the study of insects. P. 238.

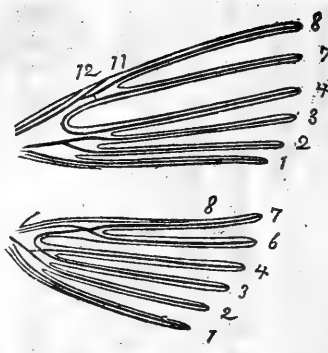
(二) Meryck. Handbook of British lepidoptera. 1895. P. 442.

又 *Encyclopaedia Britannica* に *O. hexadactylus* とあり。之を總括すれば、四種の稱呼を生ずれども、畢竟一種の異名に過ぎざるあり。

扱メーリック氏の記述せる所によれば、此多翼蛾科の特徴は、明ある單眼と發育したる吻と、三角形の翅とを有し、顎鬚は著しからず、前翅は六裂よして、室甚だ短かく、其第五脈を飲み、第七脈は分離し第八脈と第九脈とは相合せり。後翅も亦六裂にして室甚だ短かく、第五脈を飲み、第七脈は第六脈の基

部より發し、而して第八脈は獨立せり。又其多翼蛾屬の特徴を擧げんに、顔面は突出せる鱗にて被はれ、雄の觸角には微毛を生じ、唇鬚長くして斜に上方に向ひ、其第二關節は下方より突出せる鱗を有して稍總狀を呈し其先端は尖れり。前翅は第五六の兩脈及び第九十の兩脈を缺けり。次に廿四鳥羽蛾(O. hexadactyla)は、翅の展張十三乃至十六ミリメートルにして、唇鬚の最終關節(第三)は第二と其長さ等しく、前翅は灰黃褐色にして、二個の前縁紋を有し、一は前方に、一は中央より後方よりあり。中央帯は、其上

第二圖 オルチナアス、ヘキサダクタラの翅脈(イーリック氏原圖)



内方に向ひ、下部は中央外方に向へり。亞外縁帯は、黒くして白縁を有し中央部擴張せり。微毛の、灰色にして黒色を混じ、白色の横線あり。後翅

は灰色にて、白色及び黒色の横線を有し、微毛は灰色にして、白横線を畫し、四横線を形成せり」とあり。然るは邦産の種、即ち金華山麓及び霞間谷にて採集したるものは、翅の展張十七八ミリメートルにして、吻は發育し觸角の微小なる關節七十餘個より成り、これが微毛及び鱗を生じ、唇鬚は斜に上方に向ひて、長形の鱗にて被はれ、第二關節は第三關節よりも長し前後翅は共六片に裂けて灰色を呈し、尙微毛を密生したれば、其狀宛が羽毛の如し。前翅は、其前縁に數個の黒斑を點じ、黒色を呈せる基部帯

中央帯、亞外縁帯、等を有すれども、翅の分裂するが爲めに、殆んど斑紋なるやの觀あり。蓋し此等の部は、皆鱗を密生するを見る。後翅も亦前翅と同色にして、内後に近く二三の斑狀横帯を認むべし。今此等の點を擧來りて、之を歐米種に比するに、既に多少の差異あり、而して此より更に一步を進むべきは、其翅脈を剖檢するよあるあり。然るに名和氏の斯道に忠實なる、僅々四頭の標本を有するに止ま

るよ、其二頭を割きて研究の材料に給せたる、是れ余が深く感謝する所なり。余は此材料により、注意して其四翅を解去り、カムストック氏の鱗翅漂白法に従ひて、之を處理したり。即ち最初之をアルコールを以て潤はし、次に十%の鹽酸水溶液に浸し、次に之を漂白粉液に移し、再び之を鹽酸液に、次に漂白粉液よと再三之を反覆し、最終は復之をアルコールに浸して、後鏡檢を加へしよ、何ぞ圖らん、驚くべき差異の、翅脈の上に見え來らんとは。即ちメーリック氏のオルテラデス屬の記述には、前翅の第九十兩脈を缺くとあるよ、本邦種に於ては、第一圖に示すが如く、明か第九第十脈を存し、然かも鳳蝶屬に於けるが如く、第一脈と第二脈とを連接せる横脈あり。此脈につきては大に疑惑を生じたれば、四枝の前翅よつきて、反覆之を查檢したるが、皆同一の觀を現はしたりき。後翅に至りては、畧相似たれども、一脈の邊には、長き纖毛を密生して、之を除去すること困難なりしかば、一脈につきては多少疑ひを存せざるを得ず。假に此點よ對つては、多少の誤謬ありとするも、第一圖と第二圖とを比較せば思ひ半ばに過ぐるものあらん。願ふよ、余が此翅脈の研究は從事せしより、日尙は淺ければ、余の觀察或は正鵠を失せること無きよしもあふざる可し、唯ぞれ第九脈と第十脈の存在の事に至りては、決して余が觀察の錯誤よ出でしに非ざることを信じて疑はず。此の如く邦産の二十四鳥羽蛾が九、十兩脈を存せりとせば、メーリック氏の多翼蛾屬の定義とは符合せず。然らば多翼蛾屬の意義の範圍を、メーリック氏の説く所よりも、少しく擴張せしむるか、或は新に一屬を設くるに非ざれば、到底邦産種を入れるべきの餘地なきや必矣。蓋し此科たる、僅に一科一屬を存するに過ぎざればあり。然れども、此大問題につきては、將來専門家の判斷は俟つあるのみ、無識の余輩何をか言はん。唯、余は前よ假定せる考查の、全く輕率に、且誤謬よ出でしことを辯明して、本邦産の二十四鳥羽蛾は、歐米普通の *Orneodes hexadactyla*

に非ざることを断定し、暫くオルチラテスの一類か(Ornodes, sp.)として疑ひを存し置かんのみ。但し余が所謂本邦産種とは、金華山麓及び霞間谷採集のものを指すに止まり、水戸産のものに至りては是に與からず。若し詳細に研究したらんば、或は本邦亦數種を産するやも測り難し。余は此蛾につきて一層の研究を積み、若し多數の標本を得ることを得ば、外國の専門家に送りて、其種の檢定を請はんと欲す。然れども材料の豊富からざる今日に於ては、猶ほ十分の研鑽を重ねること能はざるの遺憾あり。大方の諸君、幸ひも此蛾につきて、大に注意せられ、若し之を採集せらるゝか、或は其幼蟲等を發見せられし時、一片報道の勞を給はり、併せて標本の分與を請ふことを得ば、幸甚將奈何ぞこれに及かんや。

將に此編を脱稿せんとするに際り、宮崎縣竹井繁滿氏より、次の報を得たり「昆蟲世界第六十五號記載のトリバガ昨年四月中旬、宮崎縣南那郡細田村大字塚田にて棕櫚の葉裏に居りしもの二頭を捕獲せり」云々、余が希望の一端、直に茲に酬ひ來れるを喜び、敢て望勤の情を編端に附記す。

◎岡田氏の採集寄贈に係る貝殼蟲種

福岡縣 桑名伊之吉

昆蟲採集及び標本製法に就ては、幾多の書籍あるを以て、今之を茲に細説を重ぬるは、無益の勞と云ふべし。されど貝殼蟲は、他の昆蟲と同視すべからざるものなれば、少しく其採集法を述べんとす。蓋し普通の採集者にして、能く昆蟲各目に通じ、自由に採集し得べき經驗ありと雖も、貝殼蟲に至りては幼穉拙劣なることあればかり。例へば年々幾多の採集者が、ブラジルの郊野や、南アメリカの山中、メリアキペリゴの河畔に採集を試むると雖も、所産貝殼蟲の未だ殆んど學界に知られざる事實に徴すべし。然かも是等の地方は、貝殼蟲を産せざるにはあらず、少しく經驗を有する者なりせば、一日の採集に

尙は能く既知の種類に増せる多種類を、同地に於て檢索し得べし。原來、熱帶地方には貝殻蟲の發生多く、中には奇異ある種類もありて、植物を害すること特に甚ざしきを以てなり。而して斯種や、幾多の昆蟲中、最とも採集し易く、且つ之を保存するにも、多くの容層を要せざるものとす。

一、採集の好適地 貝殻蟲は南北兩極に近づくに従ひて、生存するもの少なし、常は四十度以外の兩極に到れば、多く之あるを見ず。故は寒帶地方に於て、之を採集するの、多勞にして且少獲あるに反し、其生存に適する温帶及び熱帶地方に於ては、頗る蒐收に利便あり。特に本邦の如く地勢南北は延長して、あらゆる氣候を有する國に於ては、其何れの處たるを問はず、之が發生蕃殖を見る。就中、海拔の差甚はだしからざる土地を以て、好適の採集地とすべし。

二、託生の植物類 貝殻蟲は主に樹木に寄生するものなれば、寒帶圏内の如く、冬季に草木の凋落する、隆寒不毛の地には生存すること能はず。但或種ありては、植物の根部に寄生するを以て、假し幹葉は枯落するも、なほ食を地下の根部に求め得るが故に、寒威酷烈の地方も之を見ることあり。而して温帶地方にありては、櫻、櫟、柳、樺、樟、松、柏、薔薇及び果樹の枝條に多く、熱帶地方に行くに従ひて、草木の葉面に寄生するを見ることあるべし。凡そ熱帶地方なりせば、各種の植物に注意せざる可ざるも、殊に低地に培養せしものより留意すべし。又熱帶地方より移し來る植物を細檢するとき、坐ながらよして幾多の良標本を得べく、園藝用の温室は、また貝殻蟲採集の一良地となす。

三、貝殻蟲辨知法 貝殻蟲は著しく退化したる昆蟲にして、雌蟲は全く翅を缺如し、且つ常に活動せず、之を反して雄蟲は二翅を有す。今野外採集の時、曠目すべき要點を擧ぐれば、左の如し。

- (イ) 静止不動の昆蟲にして、多少の分泌物を以て被はれたるもの。
- (ロ) 外殼堅實にして半球形のもの、扁平楕圓形のもの、腫起せる圓形のもの及び五倍子様のもの。

(ハ) 硬體又は軟軀にして、針頭大より、短胴服の鈕子の大きさを有するもの。
(ニ) 綿質若しくは蠟質の分泌物の、樹木に附着する處。

四、貝殼蟲採集法 貝殼蟲寄居の局部を截取るべし、若し大樹の皮面に於て、之を發見したるときは

其部分を利刀にて削取るべし。

(イ) 野外採集の時は、貝殼蟲の寄生せる局部を截取り、之を白紙にて包み置くべし。若しレカナム種其他の軟軀種、若くは綿質の分泌物を以て被包せられたる種類なりせば、其一半を乾製標本用に充て、他の一半をば、酒精に浸漬して保存せしむべし。

(ロ) 封筒、紙箱等は、採集の際に必要なる携帶品の一たり。

(ハ) 蟲の體色、卵囊の形狀等は、採集の際に採集野帳に記載し、尙は寫生圖をも添附し置くべし。
(ニ) 託生植物は、必ず蟲と共に採集し、其種名等を記入し置くべし。

五、標本の貯藏法 貝殼蟲の宿れる枝朶をば、之を二寸許り切斷し、針に貫きて標本保存函に刺し納むべし。又硝子管に入れ置くときは、蟲體の脱落するも、甲乙相混錯するの憂ひなきを以て適良とす。但、肥大なる軟軀の種なるときは、酒精に浸すべし。(未完)

◎邦産瘧媒蚊種上古棲息の説(前)

仙臺岩麓 晴耕雨讀子

客冬發行の「昆蟲世界」に古への慶雲は、今の蚊柱たらん、との臆斷を寄せたりしが、これのみにては猶ほ悉さざる節もあれば、今茲に彼の説と聯繫の事實をものして、邦産瘧媒蚊種に對する一片の解説を試みるも、強ち無用にあらぬなる可し。蓋し斯種の問題は、未だ發表せらるゝに至らずと信するを以て、此際研究の端緒を啓き置かば、將來或ひは、種類調査の事業等に、多少の便宜あるべければなり。

一蚊帳の有無 上古、本邦に防蚊の具無し、中世以還、始めて蚊屋の製あるも、たい纒かに、貴族間の使用に供せられしに止まり、一般國民は之を常用とせざりき。萬葉集の「山田守翁置蚊火」云々、藤

原清輔が袋草紙に「忍ひで行ひけるに、蚊のくひければ、あをぎして、うちはをつゝ、眠りけるに」云々、及び和泉式部家集の「蚊やり火の煙けふたくあふぐ間に夜は暑さも覺えざりけり」等に徴すべし。然るを谷川士清氏が、古へは蚊帳ある事を證せんとて「蚊子幃は蚊屋なり、日本紀に見えたり、儀式帳に蚊屋の帷とも見也」と言はれしは如何にや。和名類聚鈔に蚊遣火を加夜利比と訓し置きながら、蚊帳の名目を缺き、古き物語本に、亦其名を載せざるより見るも、日本紀云々の説は疑はし。嬉遊笑覽に蚊屋の名は、太神宮儀式帳、延喜式などに見えたれど、むかしは下さまの用ひざりしなるべし。春日驗記に、白き蚊帳をかけたるが見えたり。もこ蚊やは、今の如くなる物にあらず、竹棹を四角にたて、それにさげるなり。故に蚊帳の耳は、布毎に付たるなり。吉日をふらびてつりそめ、又吉日に收る。晝の間は不用なれば、片端の竹を一方によせて、帳を一處にあつめて、裾をさりて片端の竹に打かけ置なり。

とあるは穩當よて、天野信景氏が「夏の間、そのかみ、如何にして蚊を防ぎし。唐土の書にも蚊幃といへり、我國の制と異なり。日本の蚊帳は密家の壁代に似たり」と怪しみしも、一理無きにあらず。按ずるよ、草菴和歌集に、紙屋紙の名を存え、近江蚊屋の製造の端緒を慶長に開きて、元和以後は盛んとなりし事など、想ひ合すれば、北條時代にも専ら紙帳を用ひしなるべし。三省録に一書を引て、紙帳の六徳を述べたる中に「紙もて造れる蚊牒一はりは」とあり、又燈前漫錄の戰國時代困苦の條に「夏は蚊に責られ、幾夜もまぶたを合さぬがちあり(中略)一夜二夜などは、細柵に、あるひは折釘、鎗杯に細引ひつはり、澁紙覆ひたるばかりなるべし、又は森林萱原をどの中に、かゝみ居て、あふき息をもつかれず、藪蚊、蛇、百足などの毒蟲に責られ」とあるも、其用多かりしを知るに足りぬべし。今に僻陬寒郷に於て、粗製の紙帳を用ゐる處あり、夏より秋の間、絶えず蚊帳を垂下せる儘にかし置くの風ありと云へるも、蓋し此等の名残なるべし。併し乍々、御産所日記よ、永亨六年義勝誕生の時、鶴龜の紋ある蚊

帳を調へる事見え、老人雑話には「信長の頃、常盤井殿といふ公家も、自見を望む人あり。媒介の人言いければ、夏の衣裳にて耻かしと宣ふ。何か苦しからずと申ければ、彼人も夏の装束ならんと思ひしよ、蚊帳を身に巻て逢れしと云」の實説をさへ載せられたれば、早や足利氏の全盛時代には、豪奢の蚊帳をも用ひしめ、其末路に至れば、落魄貧窮の家と雖ども、上流には必ず之を備へしものか。扱往時は、貧者のこれを用ゐること、何國も少かりしにや、高士傳には「董昌貧無幃、慵債作二蚊帳」ことあり。又唐土に古くより紙帳、紙幃の名あるも、是は、或ひは厚き白布を以て、或ひは厚絹を以て製り、主として冬月防寒の用に充てしものなれば、彼我の紙帳は、たゞ其稱を同うして、其製と其用を異にせしなり。但、本邦にても、近古までは、幼孩のためにとて、季節を擇ばず、蚊帳を使用せし事あるも、防寒のためなりしか、將た除蟲の爲めなりしやは詳かならず。

二國書の記載

本邦の大古史及び上古史には、蚊属の發生加害と瘧疾流行の記事とを缺けり。故も其

根據の薄弱なる前説のみを以て、未だ上古に蚊属棲息の確證となすも足らず。而して之が考徴に資すべきは、實も中古時代の記載にあり。即ち太神宮式諸社裝飾の部に「内蚊屋一條、絹蚊屋二條」云々、醍醐、三條、堀河の諸帝が 至尊の玉體を以て、なほ瘧疾に罹らせ給ひたりし正史の上の事實及び新撰字鏡に蚊字と瘧字とを收め、和名鈔の瘧病、桓山丸、離瘧湯、瘧鬼、蚊等に邦訓を施し置けるが如きは、共に動すべからざる左券もて、其他園太園、宇治拾遺物語、大鏡、古今著聞集、源氏物語、濱松中納言物語、東鑑、枕草紙、堤中納言物語、公事根源、禁秘抄、平家物語等に散見の蚊毒、瘧疾、疫鬼に關する記事、また有力の好例證たるを失はず。今之を綜合一括して、左も要點を掲げ、覽者をして諸書探求の煩勞を避けしめん。

一 書史の記載は、千二百年前より、蚊屬の發生加害を證明し、又約千年前より、瘧疾流行して、數百年間、綿々遺傳したる事實をも知らしむ。

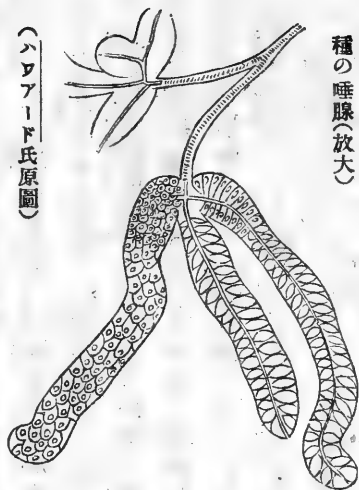
二 中世は防蚊具の不完全なりし爲めか、上は 至尊より、縉紳武將の貴族に至るまで、瘧疾を病む者少なかりざりき。

三 其病因及び媒介物に對する解説は、全たく唐土の迷譚を襲ひ、或ひは之を疫鬼の崇りまなし、或ひは之を胡蝶を捕獲せしが爲めなりとも言へき。

四 當時、瘧瘧の處方無きにあざりしも、世俗は迷信に驅られて、祈祝厭呪の法術に信賴する者多く、醫藥の如きは、寧ろ之を重視せざりき。

五 普通蚊種並に豹脚種をば、衛生の害蟲と認めしも、瘧媒蚊の存在は、更に之を知る者無かりき。(第一圖參看)

第一圖 普通蚊種の唾腺(放大)



(ハアアード氏原圖)

より、蚊屬の發生と、瘧疾の流行を示すものなるべし。例へば北海道舊土人が、今に至るまで蚊帳を用ゐるに、祖先以來、蚊屬の總稱としてエツトタンネキキリ(長鼻蟲の義なり、福井縣敦賀地方にて、蚊の吻とは云はずして、蚊の鼻と云ふとぞ)の名を存するが如く、未だ邦内は蚊帳の製無かりし當

斯く擧げ來れば、上古史には、一も徵證すべき要素を具備せざるが如くなるも、他方面より觀れば、また全たく之を認容すべき餘地無きよしもあらず。則ち、允恭紀二年の條下に蘭を以て山に行き、蟻を撥はんとすとあるは、明らかに蚊族蟻子類の生存を知らしむるものある可く、應神紀、安康紀雄略紀等も、蚊字を冠したる地名人名の散見するは、假ひ假借文字にもあれ、蚊屬棲息の影響とすべく、延喜式に、蚊野、野蚊等の神社名、及びエヤミグサてふ藥料を載せたる、大寶元年より追儼の儀式を行へる等の事實は、孰れも其以前

時より、既に蚊子の形質を知り、又能く瘧疾の怖るべきことも會得せし結果たらずとせんや。辭書に云ふ、蚊の古名カハピロコは、蝙蝠の子の義にて、蝙蝠の邦訓カハホリは、蚊屠の語より來れり。斯れば、蚊子の邦人に知られしは、極めて遠遠に屬するを以て、單だ上古に蚊帳無かりしとて、蚊屬の棲息を否認し得べきにはあらず。況して、これを常食とする蜻蛉の、他の衛生害蟲ともよ、開國草創の際より、其性貌を知られしに於てをや。

三蚊屬の移植 既記の臆想を以て、幸はひに誤謬に出でざらしめば、更に既往より遡りて、上古に於ける瘧媒蚊の發生加害をも、立證し得べきものあり。史に傳ふ、日本武尊の近江膽吹山の邪神を征し給ふや、その毒氣に觸れて、即ち發病し給ひきと。記事頗る簡約として、なほ半面を窺ひ知ること能はざるも、或ひのるれ、當時瘧疾は罹らせ給ひたりしには非ざりしか。斯く言はば、人のこれを難じて、附會虛妄の説となさんも、瘧媒蚊原種の、邦産と他産とに論無く、苟くも昆蟲の移植力の強大なることを了解し、併せて諸を神人雜居の時より、隣邦と交通を絶たざるの結果、多々他國産蟲種を舶載せし實例に窺みおぼ、豈に蚊屬も於てのみ、其事無しと謂ふを得べけんや。米國の昆蟲學者ハワード(H. O. Howard)氏は蚊子の移轉蕃殖を證せんとして「太平洋心の布哇國は、原と無蚊島たりしと、軌近米國との航路開通の後、船房より飛散分布せし蚊屬の爲め、漸やく侵襲を被け、現時蕃殖の狀、實は驚くべき堪へたり」と云へり。然かも余は寧ろ邦産鳳蝶科の或種すら、其初め外國より移されしは非ずやと疑ふ程なれば、大船巨船の出入に伴へる蚊屬の移植の如きは、敢て奇とするに足らざるべし。且るれ、常に翅力の微弱なる蚊屬と雖ども、或時期に適順の風力を藉る時は、なほ能く五六十哩の遠地に飛行せし實例無さにあらねば、甲地より乙地に移殖し、乙地より丙地に分布し、轉々遂に他の各地にも侵入するに

至るべきは、極めて視易き道理なり。此に至りて余は、昨秋十月初旬、我が亞米利加が、米國へ航行の次、稀有の大颶風に遭ふて、陸地を距る杳渺四百餘哩の洋中に、飄颻浮沈の最中、何地よりか吹送られけん、蝗蟲、蜻蛉の狂濤驚瀾の間を超へ來りて、船上に避難せしもの夥多なりき、との近信の、確實なることをも認むるは躊躇せず。

四瘧疾の流行 西洋の古國希臘に於て、瘧熱に四性あることを診別し、且截瘧方を究明せしは、西曆紀元前、約四百年の頃にして、羅馬の諸學者が、瘧疾の昆蟲に關係を有するものあることを唱道せしも亦紀元前にありきと云へば、彼の有毒蚊種の歐南を蹂躪せし初めは、實にそれ我が上世期に在りしか。

然は云へ、解熱特效劑の南米秘魯に於ける發見の、既往四百年を算ふるに止まり、又その病因(第二圖參看)の審明の、僅々二十年に滿たざる事實を以て之を推すに、當時考定の藥劑なるもの、常山、柴胡の漢醫方と、左のみ軒輊無かりしならん。按ずるに、新舊兩約全書には、蚊と瘧疾の記事を缺けども屢次熱病及び疫癘の語あり。是れ恐らくは、今の瘧疾をも含ましたるものなる可し。蓋し地中海沿岸諸國は、之が發生地域に屬し、古來侵害を被ふりし事幾回なるを知らざれば、小亞細亞地方も、其厄災を免がれ得ざる可ければなり。翻へつて東洋に於ては、我が神代の頃より、蚤く支那も流行し、書經の金縢篇にも「惟、爾元孫某、邁厲虐疾(中畧)乃納三冊于金縢之匱中、王翼日乃瘳、」とあり。稍降りて春秋の世に至れば、之を思ふる者次第は加はりしが如く、左傳は數次之を擧げし中にも、懿德帝の御宇に當る、定公四年三月の傳には「水潦方降、疾瘧方起、中山不服、」と見え、其他禮記、周禮より古本草書に至るまで、鑿々證據すべき記事は頗ぶる多く、特に唐代に纂輯の醫方書に、瘧瘧方數十首を列舉せしも驚くべし。斯る經驗のありしより、能く蚊子と瘧疾の特性をも辨知せしにや、物理小識には「兩

水多、則蚊多、天晴南薰久、則蚊亦少、(中畧) 江陵古岸李浦無蚊、荊州高齋無蚊、今揚州三層樓無蚊、五老峯無蚊、以三風涼也、と云ひ、東觀漢記には「壯士不病瘡、」とも云へり。本邦にては、有史以來、時々流行して上下其厄に罹れりと雖ども、當時醫家の宗とする所は、唐土の新古兩方も則とりて、風氣に侵されて之を内發するもの、と云ふに過ぎざりしかば、原病學上の議論は、一も視るべきの價値あるもの無く、遂に叢桂亭醫事小言をして「如何の事

第二圖
瘧蚊の唾腺(放大)

もや、府下八九年、追年して瘡多く、寛政三四年、寒暑の分
けも亦く四季共に多く、頽白以上、赤子も瘡あり」の疑問
を發さしむるに至りぬ。去れど下總、常陸、近江等の湖沼に
當める諸國、若くは尾張、美濃、越前の局部の如き沮洳の地
に、其流行の猖獗なるを認めしは明確にて、兼て少壯者に多
く、冬春季に少なき事實をも知悉せしは似たり。斯くて文化
の末年までは、痢瘡同因論の解釋の下に、主はら漢醫方のみを襲用せしが、文政
に至り、宇田川榛齋氏の和蘭藥鏡よりて、始めて機那劑有効の新説行はれ、爾
來、洋醫方は舊説を壓倒して、之が病理、經過、治方等次第分明となりしと、なほ近く數年前まで
は、其原因を沼氣の上騰に歸して、泥沼熱の稱を命じ、諸を昆蟲の媒介と料する者とは、更に世に
無かりき。韓國は瘧疾の流行する事は、嘗て之を耳にせしも、記載の材料に乏しければ、茲に引照する
に由無し。恐らくは、和漢のそれと甚はだしき相違なかる可きか。臺灣島に至りては、氣温頗る高く
周歲蚊屬の發生を絶たせ。剩さへ、内地産と其種を異するを以て、行毒加害亦猛烈を極め、去る卅二



(ハリアード氏原圖)

卅三年の兩年度の如きは、平均五千五百三十二名の新患者に對して、其六十一人即ち毎千人に十一人を亡せしめぬ。去れば軍隊衛生の點に於ても、彼此其狀を異にし、内地兵士の死亡數も對して、同年までは、七倍半の多さを算し、今や瘧媒蚊の驅防法を講じ、著るしく患者減少の好成績を挙げたりと稱し乍ら、卅四年には、千人に六、五弱、卅五年には六、四強の死亡數を示しき。聞く、治療の藥方また加減を要するものありと、或ひは然らんか。其他、九州より北海道に至る間には、瘧疾患者を見ざるの地方無しと雖ども、概ひね良性に屬するを以て、療法また左まで困難をあらず。唯、沖繩縣八重山島も、臺灣と同種の蚊屬を産すとは、嘗て博士緒方正規氏の證明せし所、萬里絶海の無人島たる南島島に、一種有毒性の蚊子を發生すとは、昨年八月、我が特派軍艦便乗者の報告せし所なり。今此等の諸例を湊合し來りて、更に之を上古の事實に推すに、對岸の發生地とは、微かに一條の海流を隔て、其氣候の蒸熱盛んにして、植物に饒かなる等は、必らずや開關の往時より、之が蕃殖を拒まざりしこと、猶ほ現今の北海道に蚊屬の多きが如き歟。況んや、南隣の諸群島より、延て大陸の南東部一帯の地は、實に瘧媒蚊種發生の中心點を以て目せらるゝをや。是れ諸舊記も、上古の瘧疾流行を缺くに關はらず、なほ其媒介蚊種の棲息を信せんとする大要なり。(未完)



講 話

新年海 皇后宮御歌

いくさ船いかりる
して仇浪も音せお御
代の年祝ふらし。

◎第拾四回全國害蟲驅除講習會員の五分時演說

舊冬十一月廿五日より二週間、當昆蟲研究所内に開會の第拾四回全國害蟲驅除講習會に於て、會員の催せる例の五分時演說中、特

に時弊に中れるもの數者を採りて、各地方に於ける狀況を知るの資となす。(編者記す)

(一) 昆蟲學思想未發達の影響よ就て

島根縣 安達 庸一

現今本邦に於て最も主要なる民業の首位を占むる農業界を願望いたしますと、害蟲と云ふ仇敵の爲めに、年々歳々實は夥たしい損耗を被ふつて居ります。此一事だけは如何なる愚民でも知らぬ者が無からうと信じます。併し乍ら惜ひ事には、農家は未だ嘗て自發的に了解的に此が驅防策を講じた事が無いのであります。それには種々の原因もありませうが、一言以て括約致しますれば、昆蟲學思想に乏しいからの事でありませう。そこで當局者は各方面から方策を考案しまして、害蟲の驅防とか、益蟲の保護とかと色々を啓發するやうに導いて居りますけれども、悲哉、その頑迷ある因習は、殆んど膠漆性をなしまして一向に効能が無く、遂に其教へをも聽かざり、依然として數百年前の驅除法即ちは蟲送りや、御札立てを以て農家の能事了れりと思ふて居るので、瑞穂國の美稱を得ました豊秋津洲も、今や不見穂の國の貧秋津島と云ふやうな、哀れ墓かい有様を現し來りまして、年々外國米の爲め幾千萬圓を取らるゝ次第であります。是は國家の前途よ於て、最も懸念すべき事柄であらうと存じます。然るに其職を盡さぬ農家の頑迷を打破し難しとすれば、他に一新活路を求むるの必要があるのであります。私の所謂、活路とは、國民教育と云ふに歸着するのであります。彼の米國の如きは、夙に實業教育を獎勵致しまして小學校時代から應用昆蟲學を教科の一として教授するとの事でありませうから、我國でも其轍を踏ましたならば、晩くも十年の後には、必らず見るべきの成績が現はれて、其時こそは國民一齊よ起て國利民福を圖るであらうと存じます。然るに今日の様な教目でありませうと、容易く斯かる目的を成遂ぐる事が出來ないのであります。中には寧ろ妨げとなるべき事もありませうから………とは申し乍ら、此様な希望を懷いて、之を實地に教授して見やうと云ふよりは、先づ教へられなければ成りませうから、私は此度遙々參りまして、名和先生の訓陶を願ふ事にしたのであります。恐らくは滿堂の諸君も同様の必要を感ぜらるゝ事と信じます。感慨の餘り一言茲に述ぶるのであります。

(二) 昆蟲學思想の喚起及び普及の一捷路

滋賀縣 西川 豊次郎

昆蟲の發生經過効害等よ就きましては、私は嘗て少しく學んだ事がありませうが、特に今回の講習で、名和研究所長始め、講師諸君の熱心なる教授に預かりまして、大に得る所がありました。然るに斯學思想を喚起し、及び普及せしむるの方法よ就て、私は平生考へて居りますが、それには歌が一番に宜しから

うと存じます。と申すのは學校で謳ふ唱歌でも、巷間で謳ふ俗歌でも、之を口にして居る間に不知不識その文句を覺へる事は明かな事で、又唱歌が徳性の涵養上、莫大を利益ある事も既に一般に認むる所でありまして、彼の鐵道唱歌の如きは、今や海濱山奥までも擴がりまして、到る處の小學兒童は勿論、商家の小僧も將た子守の小女に皆「流笛一聲新橋を」と歌ふでは有らせぬか。それで私は昆蟲の利益に關する唱歌や、害蟲驅除に關する唱歌や、益蟲保護に關する唱歌を作りまして、學校生徒に謳はしたならば何時と無く農家一般にも行渡りまして、次第に其事が實行さるゝ様になるだらうと考へます。私は少し以前から此念がありましたので、雜誌などあるのは見當り次第集めて居りましたが、其中で最も面白く感じましたのは、益蟲害蟲の數へ歌と、先月かの昆蟲世界にありました子守歌であります、聞く所によれば、長野縣では近頃此事が流行して居るさうであります。之を要するゝ、人間と云ふものい意地の悪いもので、見る勿れと申せば見たい、聽く勿れと申せば聽きたいと云ふ念を起しますから、假令規則や何やうで、事喧ましく申した所で、其一時は行はれませうが、先づ健忘の仲間入は免がれ得ません甚だしきは反抗の舉動をなす事もありますから、私は昆蟲學思想の喚起及び普及の爲めには、高潔流暢の唱歌を作つて學校で謳はしめ、更ゝ稍程度の卑くして俗歌に近いものを作つて一般の子守や、農家の間へ行はれしめたならば、從來の卑穢ある俗歌を改良する事も出來、そして斯學の智識を注入して最後の目的を成就する事が早からうかと信じています。就きましては先づ第一に製定の必要があるのは、立派な唱歌でありますが、専門家に材料を與へましたならば、作歌も作曲も、左まで困難な事とは思はれませんから、是非早く之を實施して、斯學開發の用ゝ供したいと願ふのであります。

(三) 蠶兒に寄生する蛆蠅の驅防談

長野縣 三澤勝重

私は秋蠶に就て意見を述べやうと思ふて居りましたが、先刻蠶蛆に就ての演説がありましたか、俄にそれと不少の關係を持つて居る題に就て一言致す事にしました。抑も此害蟲の蠶業界に與へる損害と申すものは、實に莫大なもので、少くも年々五十万圓以上の損失を來たすのであらうとの事でありますが就中吾が長野縣のやうな蠶種製造地では、非常な損害と苦痛とを被るのであります。而して其蕃殖の度合は、年一年と増加致すので、此有様で繼續をした日には、將來大恐慌を起すことが有らうと信じて疑ひを置きません。それと申すのは、昨今の處、北海道と遠隔の島國を除きますれば、全國到處其害がありまして、三十年前までは何れの桑園の桑葉を用ゐても、能く歩が附て善良な種子を製造する事

の出来た長野縣です、蠶業の發達と種子屋の増加に連れて、此害虫の移植甚はだしく、今日では普通の桑園のものでは、到底製種用に適さん處から、態々五六里もある遠方に桑園を仕立て種子を製造して居る姿でありませぬ。故に桑樹の手入に致せ、摘葉の運搬に致せ、其不便と申すものは多大でありまして今年の如きは被害の少ない地方ですら二三割の損害を來たし、甚はだしい地方になりますと九割以上即ち殆んど全部の被害がありました爲め、蠶種の出來ン土地もあつたのであります。斯う計りでは御解りに成りませぬまいが、私の縣は六千餘名の製種家がありまして、其手から年々二百万枚内外の蠶種を全國各地に供給するのでありますから、此蛆蠅のためには當業一般の苦心と申すものは中々一方でありませぬ、随つて其營業を廢止するやうな者の起るのも、亦實に已むを得ない次第であります。而して之が驅防法の如きも、既にこれ／＼研究を積れた考案のあるに關はらば、未だ其全功を收め得ないのは、畢竟當業者は昆蟲學思想の缺乏して居る爲めであらうと信じます。勿論私の地方には各郡に蠶種同業組合がありませぬ、驅除規程を設定してこれ／＼驅防を奨行して居りますが、中々容易に大害を滅盡させる事が出來ンのであります。先づ此くの如き次第で、何時までも黙過して居りますれば、一年は一年と蠶蛆加害の度を擴めまして、將來更に今日に倍したる損失を招ぐの日が無いとも限らんでありますから、それは對しての救濟策としては、私ども御同様に歸郷の日は、一般當業者は昆蟲學思想を注入して、大に鼓吹の勞を取るより外に手段が無い事と存じます、即ち根源から驅防せんければ、被害を免がれ得ない事と信するのであります。然し此一事計りでは中々實施は困難な事もありますから、或嚴重な法令を布て貰ひまして、強制的に施行さるるのも、當今の時勢上亦已むを得ないのであります……斯く申した處で、決して發令を好むのでは無いが……彼の枝葉は拘泥して、屑々たる驅防を施すが如きは遠い未來の事で、現在に於ては的切な方法とは思はれませぬ。兎に角、國家の利害問題でありますから、深く諸君の考慮を煩はしたいと存じます。

(四) 害虫に對する吾が地方の迷信誤解

香川縣 佐々木傳五郎

私は今朝、永澤先生より御話になりました「迷信」といふ事に就きまして、吾が住村に於て専ら行はれる迷信誤解を、御參考に述ぶる考へであります。偕私の地方に於て行はれる迷信には、四つありまして其中、第一は會て昆蟲世界誌上にも掲載されてありました「蟲よけの御守り」の一種であります、是は最も盛んに流行して居ります。即ち諸國の著名なる神社から、例の御札を受けて來まして、之を田

畑に立て置くので有ります。第二は御水と申すものでありますが、是は故ら徳島縣下ある御所神社に行き、若干の初穂料を献納しまして、神主から其御水を貰ひ、之を害蟲の發生する田畑へ、笹を以て撒かけるのであります。そして是は日歸りでなければ、其靈驗が無い杯といひまして、遠隔地の者でも必らず其日歸宅する事に致して、此水を持つて居るものは、途中で休憩しやうと思ひましても、養蠶家などは休まざるといふことであります。彼の三十年のウヅカ大發生の時などは、最も盛んでありました、然るに如何なる譯か、其年他村では、不幸にも大害を受けましたに關はらず、私の村は大なる害は無かつたのです。仍て迷信者は益々其度を高くして、全たく御水の御蔭と信じまして、益々尊ぶ様になりまし。第三は蟲送りであります、是は古來傳つて居る方でありまして、處の神主が嚮導となりまして、前に天狗の面を立て、大鼓を打ち乍ら「實盛さんの御通りじや、あと見ずに前さ行け」と大聲に呼び、各小字を廻るのであります。方言實盛蟲又はカブト蟲と云ふもの、即ちイチモジセセリの幼蟲を取つて、之を小字の西端へ持ち行きて、驅殺するのであります。是は驅除の一法としては幾分か其効力がありませうが、今に至るまで形式的に流れて、蟲一匹でも其一行に頼めば、それで全作の驅除は出來たものと思ふて居るのであります、實に耻入つた次第であります。第四は百万遍と云ふて、害蟲は發生すれば氏神に集つて、大なる念珠を以て念佛を百万遍唱へるのであります。是は昔し害蟲が發した時、行ふて非常な効力有つたと云ふて、彼の三十年にも行ひました、但し是は多く、疫病流行の際も行ふものであります、私が知つてから、害蟲の爲めに行ふたのは此年が初めてで有りました。其他迷信誤解のことを申上げますれば、實は多々ありますが、畢竟昆蟲思想は乏しくして、其何者たるを知らざるばかりでなく、之が發生經過と云ふことに付ては、全たく考へが無いから、此の如き迷ひが生ずるのであります。たゞ之を排斥する半信の人あるも、大勢の爲めには、遂に其仲間も引き入れられてしまふのであります。故に親切なる官の驅除法獎勵が有つても、之を強制的にやらせますと、只表面的即ち申分の爲めに餘義なく一度位は行らうかと云ふ様な次第で、又中には之を行はずも僞るものなど有ります。故に私は此等の迷信を除いて、眞正の驅除方法を行はしめるには、實地的に勵行するの他は無事と思ひます。仍て名和先生の高名を慕ひ、今回入會致した譯で、今後私の決心は、教授し預りし上は、實地に害蟲驅除を行ふと同時に、斯學思想の普及を獎勵するの考へで有ります。

雑録



新年海
東宮御歌
船毎にしろしの船手
うちなびき浦賑はし
く年立ちにけり。

◎米國昆蟲界の所感一一一

在米國桑港 名和梅吉

◎家蠅の群集

余の始めて米國領土シヤトル市に上陸し、尋で桑港及びサンホゼー市等を巡覽するや

其間最も多く目に觸れしものは、唯家蠅の群集にてありき。

該蠅は市内到る處に多く飛翔するが中にも

特に夥しく密集群飛するは、各馬車會社の近傍及び八百屋の店頭なり。人あり若し其店前を通過する時

には、一時に蠅群の飛揚して、宛がら一種名狀すべからざる大黒塊を現出するを見ん。而して斯く多くの

蠅の發生するは、本邦と異なり、此國は畜産業盛んにして、馬、牛其他の家畜を飼育する處多きより

その種族の繁殖次第に多さを加へ、且氣候の比較上温暖なるは、益々蕃殖を幫くるに起る。但スタンフ

ールド大學所在地たる、前者より遙か低温よ、且昨今の如きは寒氣酷烈なるに、亦其發生加害

の甚はだしきこと此くの如し、是れ聊か邦人の奇異に感ずる所なり。之が驅除豫防用としては、本邦の

それと同じく蠅叩きかるものありて、或ひは植物を利用して之を製し、或ひは銅線の如きものを束ねて

恰かも棕櫚葉製と同形を造れるもあり。去れを未だ此等のものを以て驅殺し盡せることを聽かむ。唯一

種最も普通の方法として、八百屋、菓子店、又は他の店頭を用ひて、驅除の効を奏すこと多きものを

粘液劑の蠅捕紙となす。是は方一尺五寸に一尺位の紙面に、黄色の粘着性樹脂の類を塗抹せしものに

て、恰もアラビヤゴム若くはワニスを塗抹したるが如し。若し誤つて蠅のこれに止まることあれば、直

ちに翅脚を捉れて復た飛去ることを得せしめざる輕便の驅除用品にて、價ひも亦低し。即ち竹の皮に

烏糞を塗りて驅除すると同一趣向に出でしものあり。

○大形竹節蟲種 桑港のゴードンゲート公園内は一大博物館ありて、中に宇内の珍奇數多を蒐收す

場の一隅は昆蟲標本三十餘箱の陳列あるが中に就て、最も奇なるは大形ナナフシムシにて、黄綠色

なるものと、褐色なるものとの二頭あり、何れも乾製として針を刺し置けり。其軀の長さは五寸五分許

前脚を伸したるものは八寸内外もありて、其軀上は刺を生ずること恰もトゲナナフシの如し。

○貝殼蟲の發生多し 桑港スタンフォード大學近傍及びサンホゼー近傍に就て、調査せし結果に依れば本邦に比して貝殼蟲の發生多きやの觀あり。去ればにや、路傍及び庭園内の植物の將々枯死せんとするものあるさへ少なからず、此國は貝殼蟲の専門家の輩出するも無理ありぬ事と云ふべし。而してサンホゼー近傍に於ける所謂サンホゼースケールは、其害固より猛烈なるも、託生植物たる梨樹は非常に少なく、之を見出すと蓋し容易よあらず。聞くこれ該蟲の加害劇甚の影響よ出づと。吁。

◎六足蟲彙纂 (丑の卷)

在岐阜市 長野菊次郎

(六) 蟻と蚜蟲との關係 蚜蟲の繁殖は、蟻の利益たること明白なり。然れども、蚜蟲は柔軟なる體を有して、他に防禦の機關なき昆蟲なれば、他の貪食ある昆蟲、例へば瓢蟲クサカゲロフ等の食餌となることを免れず。然れば、蟻は往々蚜蟲の小群を保護することあり、又蚜蟲の吸吮する軟枝の萎れ、又は乾く時あれば、蟻は注意して蚜蟲を運び、之れをば新鮮にして綠色を呈せる枝極に移すといへり。米國ミシシッピーの谿原(Mississippi Valley)には、穀物の根を吸ひて生活する一種の蚜蟲あり。此蚜蟲の卵は、秋期に地中に産下せられ、翌年の春、未だ穀物の栽培せられざる以前に孵化するものなり。然るも又同じ田畝に、此穀根蚜蟲より分泌する蜜を、非常に嗜める普通の小褐色蟻棲り。然れば此蚜蟲が、未だ吮ふべき穀根の無き時期に孵化するときは、此小褐色蟻は非常に心痛して、懇切に蚜蟲を一時藜の一種(Knotweed)の根に運び、其後再び適當なる食物を供すべき穀物の根に移すとなり。又ニューメキシコ(New Mexico)及びアリゾナ(Arizona)の乾燥地にては、蟻が蚜蟲を仙人掌の根にて養育すといひ、又某種の蟻は、蚜蟲を己の巢に伴ひて食物を給與し、其報酬として蜜を得ること少きからむと。然れば蚜蟲を蟻の家畜に擬すると大に其理由あり、蓋し昆蟲共棲の好例たり。(ジョルタン氏アニマル、ライフ)

(七) 昆蟲の嗅感 昆蟲が食物を尋ねること、配偶を索むること、或は敵又は同侶の接近を知覺するなどと等につきては、視覺及び聽覺よりも、嗅覺の力を藉ること多し。然れば、蟻は嗅覺によりて、巢に歸る道を誤らず、又其同侶をも識別すべし。又箱の内に、腐敗に傾ける肉の一片を入れ、之を密封して少しも臭氣を發せざらしむるときは、自ら腐肉を食とするか、又は幼蟲に食物を供せん爲めに、爛肉中を卵を置くべき必要ある蠅、又は或る甲蟲の如きものすら之を發見すること能はず。是れに反し、數年前コーネル大學校(Cornell University)に於てフロメチア蛾(Callisamia promethes)の雌數頭を一の箱の内よ

入れ、之を昆蟲室の内側ニ置きしに、數時間の後、四十頭の雄蛾が、昆蟲室の硝子屋根の上ニ飛び來るを見たりき。此際其昆蟲室及び其附近ニ、決して雄蛾の居らざりしこと、又雄蛾が外部より雌蛾を見ること能はざりしことも事實なれば、全く雄蛾が嗅覺によりて、他方より雌蛾を慕ひ來りしものなること疑なし。蓋し此蛾の觸角は能く發達して、細く支出せる羽毛狀を呈し、無數の嗅點の分布に適當なることを知らば、思ひ半ばに過ぎん。(ジヨルダン氏アニマル、ライフ)

編者云ふ。本説中(第六)蟻と蚜蟲との關係の末文にある仙人掌寄生種云々は、恐くは貝殼蟲の一種にて、彼の藥料及び顔料に供せらるゝ、それに非ざる。他の記載を疑ふことにはあらざれど、未だ解せざる節のあれば、致て爰に蛇足を添へて後考に資す。

◎害蟲驅除講習會の必要

大分縣耶馬 金色生

農業として作物を栽培するには、それ／＼利益のある方法を研究し、之を應用して一定の地處より、少しよても多分に利益を得ることを圖らなければならぬ、肥料は固より肝要で、其肥料の作物に於ける關係は、動物の食物に於けると同じことである、が濫りに何でも食はせさへすれば、宜いと云ふ譯には行かぬ。作物も動物の如く、不適當の肥料、即ち惡き食料を與ふれば、十分に生育をなし得ないのみならず、甚だしきは其健康を害し病氣を惹き起し、遂に枯死せることがある。次は選種も無論必要である。作物は數多種類があつて、一朝其選用を誤れば、如何程栽培に注意しても、好結果を得ることが出來ないのである。又勞力を減じて、作物の生育を完全ならしむる等の關係からして、耕耘器具の選用も亦肝要の事である。其他病害蟲災の驅除豫防や、收穫の方法等に至るまで、農業上研究を要する問題は甚だ多いが、其中で今日の處害蟲のことを研究するのが、我が農家に取つて焦眉の問題であらうと思ふ。一生涯薄利に暮す農民の口を糊する農産物が、一朝害蟲の慘食に遇ふて、其收穫量の大半を減却せらるゝに至つては、獨り農民の爲めにのみでは無く、國家の爲め大に憂ふべきことである。故に各府縣では害蟲驅除豫防規則なるものを設けて、只管其方面より力を盡して居られる。是れ我が國家の爲め實に喜ばしいことであるが、悲しむ哉、實際はその効能が甚だ少ない、是は何れも其厲行させやうとする方法が指命的に出來て、之れを強制的に行うと云ふ組織であるからで、更に語を換へて言へば、昆蟲の智識の足りない者が、理想を以て驅除の日割などを設けて、朴直無邪氣を農民を法律責めよするから、凡百の事が、農民の爲め不適當たるを免がれ得ない、結局効能の行き渡るのが遅くて、何時も其實が顯はれないのである。去れば一般の農民は、蔭では種々と小言を囁て、甚はだしい者よなると、露骨にも「農

業は我々の本職であるから、害虫が発生さへすれば、他人の指揮を受けずも、注油位の怠らないが、假以規定の日割なればとて、蟲の一匹も居らないのに注油するの必要は無からう、此かる規則を嚴格に遵守して居つては生計が立たぬ」と云ふて、折角の親切を怨言で報いて居る。其智識の程度が此位のものであるから、中々法令を用ゐる所ではない。乃で我が農業の今日の有様と、一般農民の性質から考へるのに、害虫驅除豫防法の完全を圖るゝは、結局農民其ものの智識を開発しなければならぬ。然すれば彼等は自ら進んで驅除豫防を行ふ様になつて、始めて十分の効果を見る事が出来るのである。抑も害虫の生ずるのは、偶然其發生するの日も生ずるものではなく、必らずや發生するの原因があるのであるから、先づ卵、幼蟲、蛹及び成蟲の四期に於ける經過を知り、其習性を記し、其長處を知り、其短處を察し以て豫め之を攻むべきの日を攻め、驅るべきの時に驅るゝ於ては、其驅除も容易の事である。斯く論じ來れば、農業の改良も何もかも、害虫驅除講習會の必要と云ふことに歸着する、これは特ゝ事六ヶしく文字を臚列するの必要が無いのである。して見ると講習會の價値の有無を評定するには、其標準を此邊に取るが最も早解りであらう。随つて岐阜の名和先生が、孤獨の身であり乍ら、茲に第拾五回全國害虫驅除講習會を開かるゝと云ふのは、其裨益を與ふるの多少、自から悟るべきである。



通信

◎島根縣下の兩害虫調査報告 (續)

島根縣農事試驗場

田中房太郎

新年海
東宮妃御歌
年浪のたてる且は海
原もあらたまりぬる
心地こそすれ。

◎氣候との關係 螟蟲と氣候の關係は左の如し。

本場 温度高くして雨天少なきときは、螟蟲の發生多きものゝ如し。

八束 氣候温暖にして霖雨多く、晴天と雖も南風多きときは、其發生多しと云ふ者あり。

大原 本年は插秧後の氣候温氣多く、温度高かりしを以て、螟蟲の繁殖を助長せし者の如し。而て本郡三成地方の經驗よては、六月初旬午前十時より、平均温度華氏七十度前後に至て蛹の羽化すると最盛なり。

飯石 本年の插秧前、及八月中に於ける氣候は、温度平穩なりしを以て、繁殖旺盛ありしならん。

簸川 西南風の爲め、蒸熱する時は俄かに發生し、西北風の爲め清涼あるときは、發生を止む。

安濃 本年は螟蟲の害多き方なりき。昨秋以來の氣候は、十月、十一月、十二月は平年より異ならず、何れかと云へば、晴天續きたる方なりき。一月上旬常になき温暖にして晴天續きたる方あるが、下旬より

二月より掛け、寒氣強く降雪多かりき。此を以て見るに、雪は二月の寒氣を覆ふて、反つて螟蟲の越年に

便なるよあらざりしか。

邑智 高温にして蒸熱甚だしきときは、最も盛に加害す。

那賀 發蛾期及孵化期に際し、晴天にて温度高ければ、最も蕃殖するの感あり。

吉田分場 氣候温暖にして、羽化期に雨量少なき時は、發生殊に多きやの感あり。

八田分場 冬季嚴寒の甚だしき年は、其然らざる年より少なく、又稻の生育期中に、曇雨天多くして

稻の軟弱なるときは、多く發育するの傾きあり。

○驅防季節 螟蟲を豫防驅除の好時季は左の如し。

本場 捕蛾、採卵法は五月下旬より、六月中は苗代田及び本田に於て、採卵捕蛾を行ふ事。心枯驅除

は、第一化生の分は六七月の交、第二化生の分は九月中に驅除すべし。刈株の所理は、乾田にては成る

べく低刈とすべし。藁の處理は刈取後翌年五月までに、飼料又は褥藁に供し、被害甚しきものは焼却す

るを良とす。

八束 捕蛾採卵は、五月下旬より六月下旬の間にすべく、被害稻の除去は、七月上旬より中旬、九月

上旬より中旬の間にあり。

大原 發蛾及び卵期に驅除するを以て好時期とす。

仁多 第一回化蛾誘殺は六月上中旬(三成地方)も、同上の採卵は六月中下旬(同上)も、枯莖拔取は七

月中下旬(同上)適當とし、第二回の化蛾誘殺は八月上中旬(同上)に、枯莖拔取は八月下旬以降(同上)とす

飯石 苗代時及插秧後に於て、燈火誘殺を行ひ、尙第一期被害に際し枯損せしものを抜取るべし。

簸川 苗代に於て捕蛾を行ひ、本田にては枯莖を刈取るべし。

安濃 春季に畦畔、堤防等の雜草を焼くと。苗代の時季に於て、誘殺並に捕蛾及卵塊を取ると。一番

除草より二番除草の間に於て、心枯莖を抜取ると。第二化發生の際、誘殺法を行ひ且つ白穂を抜取ると

邇摩 卵期採卵を行ふを好時期とす。

邑智 移植後本田に於て、採卵、枯莖拔取法を行ふを好時期とす。

那賀 苗代時期採卵捕蛾をなし、本田出穂の際、枯莖を除去するを好時期とす。

吉田分場 化蛾當時捕殺し、併せて採卵法を行ふべし、其効多さを認む。

八田分場 苗代は六月上旬に本田は六月、七月、九月は行ふべし。

(完)

◎アイヌ人の用ゐる昆蟲の名稱

在札幌農學校 三吉 豊 崖

緒言などは申上すまい、直に本題よかります。

- | | | | |
|------------|-----------|-----------|--------------|
| ○てふ(蝶) | ペポラップ | ○てふ | カマカタ |
| ○さりざりす(蚕) | アマムボ | ○さりざりす | バタ。バタバタ |
| ○はへ(蠅) | モシユ。ムシユ | ○はへ | エフムトコイ |
| ○はち | ソヤイ | ○はちのす(蜂巢) | ソヤイ、セツト |
| ○いなご(蝗) | アマキルシユ | ○いなご | チクバツ |
| ○まらみ | バラキ | ○のみ(蚤) | タイキ |
| ○か(蚊) | エトタンネ | ○か | エライライ |
| ○はたる(蝨) | ニナキボ | ○うじ(蛆) | モソスベ |
| ○まやくどり(尺蠖) | アイコンバツ | ○まやくどり | イテメキキリ |
| ○はさみむし(剪蟲) | オアイヤンチ | ○はさみむし | オアウウシユ |
| ○やんま | バンブク、チャップ | ○やんま(蜻蛉) | ハンク、チヨド、チャップ |
| | | ○のみ | キ |
| | | ○あぶ(蛇) | シラウ |
| | | ○あり(蟻) | イトンナツ |
| | | ○けむし(毛蟲) | キキリ |

編者云ふ。三吉氏は、この通信に對し、通學の餘暇に直接土人に就て研究せしものなり、この書簡をさへ添へられたれば、必ずや正確の調査を経たるものならん。然れど試みに、之を彼のジョン パチエロール氏の三對辭書に照すに、その蟲稱收載の範圍と云ひ漢字の用方といひ、將また誤譯の符合といひ、彼此盡く同一に出でしは、如何にも不可思議の極みならずや。加之バ氏の不注意が三吉氏の誤記かは知られど、中には夷言の成語を缺けるものすら少なからず。今バ氏のもの標準として、之に對比すれば、三吉氏のものには、次の如き缺點あるを認む。(壹)バラキの蟲に非ずして、昆蟲以外の木蠹即ち家畜のタニなることは、Tickの英名あるに徴して明らかし。(二)キは蚤にあらず、解にLougeの英名あるを以て見れば、是が正しく蠶なるべし。(三)蚊をエツトマン

子さばかりにては、言葉足らず、此二語は「鼻長し」この義なれど、下にキキリ即ち蟲と云へる語を添へざる可からず。(四)エウ
 イライは、蚊にあらず、蠟子類の稱なり。(五)イコン マツプは寧ろ青蟲を指す語にて、決して尺蠖の専用語にはあらず。(六)キ
 キリを毛蟲とするは誤なるべし、此語は蟲類の汎稱にて、また蠅の異名なり。故に上にウマ ウツシ即ち多毛の語を添ふるに非れ
 ば、毛蟲の語を成さず。(七)ヘボ ラツプは蝶にあらず、蛾即ちMothなり。又アベエトンベは蝶名に違はざるも、普通種即ちカ
 マカタミは異なりて、特り大形種に用ゐる語なり、混すべきにあらず。(八)エフイム コツイは、單に小蠅を云ふ稱にして、モエ
 ヲク ソヤイは、土蜂の専用語なり。これ亦誤れり。(九)蜻蛉の別名は、ハンブク チヤツプに非ず、ハンブク チヨチヤツプた
 らざる可からず。(十)其他、剪蟲のオアウツシユエ、基のアマボの下にキキリを脱したる、螢のニナキボ、剪蟲のオアイヤンチ
 の發音の正しからざる等、錯謬の一に數ふべきもの猶多し。就中、最も奇とすべきは、バ氏がチクバツプを、滑蟲即ち A Black
 beetles of any kind と記載し乍ら、之に誤つて蝗蟲の漢字を適てしに、親しく土人に就て調査を遂げたりと稱する三吉氏まで
 が、同じく蝗名の下に之を收録せし事なり。吾儕は常に斯種の寄書を歓迎し、又其調査の勞を多とし尙ぶ者なるに、今や三吉氏の
 寄稿に接して、轉た亡羊の歎なき能はず、氏たる者、それ深く省る所なくして可ならんや。

◎鹿兒島縣下の昆蟲方言

鹿兒島縣農會技手 林 俊 房

凡そ昆蟲に對する方言を調査せる事の、斯學研究上に必要あるは、今更言ふまでも無けれど、之を讀む
 者も亦頗ぶる興味の深さを感ずるなり。余會務を以て管内を歴巡する毎も、多少調査せしところあれば
 記してこれを雜誌「昆蟲世界」に寄す。但、縣下慣用の方言なるものの中は、●の符號を附したるが如
 きものもあるより、蟲種性別の説明其他は不利不便なる事擧て數へがたし、覽者ろれ焉を察せよ。

- 鳳子蝶類 トラコレチユチュ。
- 環紋蝶類 ぜんチュチュ。
- 其他の蝶類 チュチュ。
- 毛蟲類
- ホジヨ。
- 夜盜蟲の幼蟲 。
- 瓢蟲 。
- イシャヤンムシ。
- 天牛類 。
- ビワムシ。
- 金龜子
- 類 アブラムシ。
- 葛上亭長 。
- ラントムシ。
- 圓黑蜂 。
- ミツバチ。
- 雀蜂 。
- クマバチ。
- 赤
- 蟬 クマセツ又はセツ。
- 蚜蟲 。
- ヌイ。
- 或種の蛾類 。
- トンボ。
- 長脚蜂 。
- イラサバチ。
- 椿象類 。
- フムシ又はホウ(黒椿象をクロフ又はクロホウと云ふがごとし)。
- 横歧蟲類 。
- スカムシ
- 寫字蟲 。
- ギギモ。
- 蠅類 。
- へ。
- 長尾蛆 。
- ヲナクシ(其成蟲後架蠅をクツベ)。
- 田籠蟲
- ユヲトイガメ。
- 水黽 。
- アメンチャン。
- 螳螂 。
- ランガメ。
- 滑蟲 。
- アマメ。
- 蟋蟀 。
- ギミ

○蠱蟲類——タカ。○蜻蛉——ポイ。○齒黒蜻蛉——カワンポイ。○細蜻蛉——ウマンコポイ。○麥
 稈蜻蛉——(雄)コメンポイ(雌)アワンポイ。○軍扇蜻蛉——カッナポイ。○赤卒——ラシロサンポイ
 ○蜻蜓——コンポイ。

◎昆蟲月報 (第八信)

第八回全國書蟲驅
 除講習會修業生

埼玉縣 櫻井 倚 研

十月 此月よりは寒露、霜降の季節に入り、身に漸やく寒冷を覺へ、殊に下旬より毎朝霜を見るに至り、日脚は日一日と短かく、晴和の日と雖ども、蟲類の飛行は午前十時頃より午後二時頃までを限りとなしたれば、隨ひて捕獲せしもの眼に映るものも亦大に少かりき。一日、學校實習地菜株中にて、背筋濃黄色なる大形の天蛾を獲たり。二日クサギシンクヒ蟲蛾の一種ヤナギシンクヒ蛾を捕ふ。三日エビガラスマメを捕ふ。四日ヤママユノガを獲たり。七日實習地にてマヒク、カブリを獲。八日晴和温暖蕎麥畑よてハナセ、リテフ、ハナモグリ多数とモンシロテフ、モンキテフ數頭を目撃し、二三のオホハヤハテフの食を花蜜に求むるものを追捕す。九日亦オホハヤハテフ、ヒラドシテフ、ベニシタバガを獲たり。則ち此上旬に多かりしハナセ、リテフ、ハナモグリ、モンキテフありき。十一日ヘウモンテフ、ヤマトシ、ミテフを捕ふ。十五日オホカマキリの始めて産卵するを見る。此中旬は上旬と同トク唯々、カマキリ類の産卵の適所を求むるためか、又は他に餌食を求め難かりしよや、桑圃、篠藪等の向陽地に多く集合するを目撃するのみなりき。下旬は寒氣愈々加はり、蟲類の出づるものとは極めて少なく、廿四五日頃より、水棲昆蟲石蠶科の成蟲現出して、月末には發生甚た多かりしが、其種類に三種あるを認めたるも、名を辨せざれば記するに由無し。又温暖ある林中にカマキリ、イナゴ、コホロギ、エンマコホロギ集まるもの多く、中に就きカマキリ、イナゴは交殖を行ひ、稻田にはウスバヨコバヒムシ、ツマガグロヨコバヒムシ多く、草叢にはオホツマガグロヨコバヒムシ棲息し、桑圃にはクハジラミの發生夥多なりき。扱きた甲蟲類には、蕎麥の衰莖殘花よハナモグリ多く、蝶類にありては、唯モンキテフ、キテフ、モンシロテフ、シバミテフの點々徘徊するを見き。而して桑樹貝殼蟲の雄蟲の羽化すること多かりしが、其他には獨りミヤマアカトンバウの時を得顔は快遊輕飛を試むるものありしのみ。

十一月 此月は山野荒寥の景を呈し、所謂冬季採集の好季を報じたりしも、事に之は従ふことを得ざりき。此月の上旬も前月下旬と同じく、稻田にウスバヨコバヒムシ多くオホツマガグロヨコバヒムシ之に

次ぎ、双翅目の蚋ど、毛翅目のツ、ミノムシの羽化せしもの多く、有吻目のツノゼミは少なく、又時に
 オホハヤバテフの越冬するものをも見き。此前後は菜類、蘿蔔等に蚜蟲多く發生して、驅防其効無く
 爲よ收納期を早めたる處あり。又サルハムシ、キスデノミムシ等も、蔬菜類に集まり、朝鮮白菜の如き
 優良なるものには、特に加害多かりき。中旬亦略は之に同じかりしも、クリノクロアブラムシ多く發生
 して栗、檜、櫟の樹皮に寄生産卵せり、其群棲中に數頭のオホヒラタアブの幼蟲の、盛んに捕食するも
 のあるを見、試みよ之を飼育處に移せしに、蚜蟲の減少より食も窮して皆餓死を遂げき。野薊の花には
 花蠅群集し、此莖にも亦クロアブラムシの寄生ありしより、隨ひて之を捕食する益蟲も少なからざりき
 又茶の花にはヂバチ、ハナアブの數種吸蜜に忙はしく、ルリタテハテフ、アカタテハテフは猶ほ林中に
 其瘦影を留め茶、枇杷の花よは、往々ヒメアカカタテハテフ及びオホハヤバテフを獲たり。下旬も中旬
 と等しく、クリノクロアブラムシ、ハナバハ等のみなりしが、晴日には綿蚜蟲の交殖行はれ、キテフの彼
 方此方に飛迷ふもあり。一夕二頭の尺蠖蛾の火光を慕ひ來れるものを見たりしも、其名を知らず。又桑
 園枯葉の間よて、同種のもの二種を獲たるも、亦其よ名を知らず。此頃はミノムシの成蟲林中落葉間よ
 多く發生し、盛に交殖を遂ぐ、其翅色紋樣は皆枯葉に擬せど。外にクサカゲロフの稍小形にして、躰色
 黄褐、巧に枯葉に擬するものをも目撃せしかど、捕ふるに至らざりき。此他目よ入りしは、蜉蝣科コカ
 ゲロウの河邊よ飛べる、晴和なる日にクロバハへの負暖せる、秋生蜻蛉の款々として飛遊する等の數者よ
 過ぎざりき。



問答

◎苗代の害益蟲に就て質問（甲號）

島根縣八束郡持田村 三代作次郎

新年海
 威仁親王
 時知らぬ青海原も君が
 代ごいしにかはらぬ年
 立ちにけり。

苗代田に於ける害蟲驅防實行上の要あれば、左記の諸件に對し、詳細高教を給はりたし。

一、本邦短冊形苗代の起源及び各府縣に於ける之が實行の沿革。

二、本邦に於て短冊形苗代に對し、厲行の法令を頒布したる府縣名及び其年月。

三、苗代田に加害の蟲類は、螟蟲類、螟蛉、葉捲蟲、切蛆蚊蚋、苞蟲、橫蚊蟲、形毛蟲、稻蝻、稻象鼻蟲、頁泥蟲、根喰葉蟲、苞蟲類の外に、如何なる種類ありや。

四、苗代田の益蟲と稱するものには、小水蟲、食肉椿象科の各種、螟蟲寄生蜂、螟蛉寄生蜂、苞蟲寄生蜂、苞蟲寄生蠅、蜂類、蜻蛉類、塵芥蟲、頁子、水螳螂、蛇類等の外、如何なる蟲種ありや。又螟蛉寄生蜂(米苞爾蜂、麥苞爾蜂を除く)、食肉椿象、蜂類、蜻蛉類、塵芥蟲には如何なる種類ありや。

五、青腰蟲、田鼈蟲等は益蟲にあらざるか。又前記蟲類中に、有益蟲にあらざる種を混ぜざるか。

六、昆蟲以外の動物にして、苗代田に對し驅蟲の効益を與ふるは如何なるものなりや。

◎柑橘の天牛に就て質問 (乙號)

福岡縣遠賀郡矢矧村

小西繁藏

昨年、橙樹に天牛發生して、根際より少しく上部は小孔穴を鑿ち、多く鋸屑の如きものを排泄せり。之を驅除せんと、小刀にて内部を剖解し、水鐵砲を以て除蟲油を注射したりしよ、之が爲めにや幸ひに被害を止めたるも、絶えて其害蟲の存在を見ず。仍てその理由と、此蟲の性質經過等に關する説明を仰ぐ。

右二問に對する答

名和昆蟲研究所内

永澤小兵衛

(甲號) 本問の前半は、農政學の範圍に屬するを以て、昆蟲學上より應答することを難んず。然れども、亦全く關係無きにしもあらねば、左に其概要を答へ置かんとす。而して後半は、粗ば其要領を得たるが爲實施に際するも、甚はだしき支障を生ぜざる可しと信じ、これまた略答を止む。蓋し問者の意を満足せしめんと欲せば、少なくとも十數頁に渉る長文を要するが故なり。

一、本邦に於て、短冊形苗代田を考察せし濫觴は詳ならず、諸記録の證する所に依れば、精農地方に於ては、意外に早くより此方法を採用せしに似たり。而して今日の如く各地に實行せらるゝに至りしは、全く農學振興の賜ものにて、學者間に於て其有利を認めたるは、已に二十年前にあり、爾來益々其說行はれ、官費耕作の水田には、夙に之が試験と實行とを怠たらずりしも、農家は因習と誤解に拘束せられて、今より十年前までは、殆んど其利便を認識せざりき。然に、明治廿九年三月、法律第十七號を以て、農作害蟲驅除豫防法を公布せらるゝや、之が實行の第一手段として、強て短冊形苗代に改むるの必要起り、尋で勸業當路者の勸奨ありしより、漸次今日の如く弘く之を採用するに至れるなり。則ち既往の形蹟に就て之を觀れば、其初や實験家の得たる成績によりて

學者を動かさし、學者の究明を経て一般に擴まりしものと謂ふべし。而して之を採用獎勵せし中に、鹿兒島縣は特に名高く、常に警察吏をして監督の衝に常らしめき。又其普及に就て功勞ありしは、各地の農事試験場、農學校等の模範水田にて、之を一見せし者の忽ちに其迷誤を破りし實例少しとせず。要するに、前記法令發布前は、たゞ農談會の演題に供せらるゝに過ぎざりしが、一たび虫害臨防の緊要を知られしより、始めて世に活用せらるゝに至りしかど、今になほ形式のみを履みて、其眞用途を知らざる者の多きは、畢竟昆蟲の性質を辨へぬ餘響なるべし。

二、短冊形苗代に關する法令無し。但違警罪として實行を命じたる府縣は、今や全國の半に居る。又之を最上の行政権を以て、強制的に施行せしめたる地方も之無きにあらず、去る三十三年に宮城縣の縣令を發布して、罰金制を設けたるは其一例にて、一昨年來大阪府に繼續事業としての獎勵は、稍その趣を異にせり。斯れば、大體に於ては、違警罪の科料制を以て厲行を期するもの、如く其發布は概むれ明治三十年の大蟲災の後であり。

三、苗代田は稻作害蟲類の好交殖處なれば、地方によりては、猶ほこれよりも多かるべしと雖ども、茲に列擧の各種は特に顯著のもののみなれば、普通これを以て足れり可し。但し插秧期に際すれば、椿象科及び水虻科の或種の加害無きにしもあらず。

四、列記の蟲名に行夜、横蟲寄生蜂、擬塵芥蟲等を加ふるの要あるべし。又第二項の螟蛉寄生蜂には、青寄牛蜂と稱するものと、最も多く知らるゝ所の米粒狀の繭を結ぶもの等あり。食肉椿象には、種類多しと雖ども、其中主なるもの十餘種は、昆蟲世界紙上及全國昆蟲展覽會出品目錄に載せ置きたれば茲に省く。蜂類の大形種に屬するものにて、現に當昆蟲研究所にあるものは、約六七十種を算す。蜻蛉類また四十餘種あり。塵芥蟲に至りては、實に百餘種ありて、其形質また一にあらざれば、遺憾乍ら之を詳説し難し。

五、青腰蟲の類は、時に或ひは一二の植物を害することあるも、皆益蟲として保護するに足る。田鼈蟲は、其人の業務によりて、益害を異にするものなれば、輕しく評定し難し。次に前項列記の蟲稱中に就て、益蟲としての如何しきものを擧ぐれば、小水蟲、貝子、水螳螂等なるべし。そは或地方の如く秧田に魚類を放棄する時は、即ち大害を來たす可ければなり。又虻類とは、何れの種を目すにや不明なるも、水田には、左まで効益ありと思はれざるも多し。

六、昆蟲以外の食蟲動物は、其種類頗る多くして枚擧に遑あらず。就中、鳥類にありては、燕、杜鵑、四十雀の類、鶺鴒の類、雲雀、ヒタキ類、鴉、アトリ、其他保護鳥と稱せらるゝもの、兩棲類にありては、蛙の類、爬蟲類にありては、石龍子、守宮の類、哺乳動物にありては、蝙蝠及び或種の野獸、並びに蜘蛛類なるべし。なほ昨年來の昆蟲世界には、多く此種の記事を載せれば、反覆参照せらるべし。

(乙號) 加害蟲の添附無きを以て、之を知るに困しむも、恐くは普通の天牛種なるべし。此種は概むね夏秋の候を以て、數顆の卵子を樹皮下に一顆づゝ巧みに産附し、それより孵化の幼蟲は樹幹に蝕入し

て、生育二年の後ニ化蛹し、次で羽化を遂ぐるものなるが、其性多濕を好まざり、又多く早天を以て下卵の期となす。而して問者が其幼蟲を認め得ざりしは、深く棲處まで穿鑿せぬ爲めなる可けれど、絶えて生殘の徵候無くんば、其際窠中にて死したりと認むるも可ならん。たゞ注射器の構造悪しき時は、其用完全ならざるを以て、將來其點ニ注意し、幼蟲の幹心を縦貫するの性あるに應つて、液勢の直上し得るやうの構造とすべし。又此蟲の天敵としては、卵子ニ寄生する蜂種と、幼蟲に産卵する馬尾蜂とあれば常に此等を保護すると、もに、成蟲をば誘殺法その他の方法を以て驅防するに勉め、樹身をして衰枯を來さしめざるを肝要とす。



雜報

新年海

威仁親王妃

うら／＼さ朝日匂へ
り綿の原如何に長閑
き年の立つらむ。

●此好機を逸するふこ勿れ

來三月一日を以て、大阪に開設せらるべき第五回内國勸業博覽

會は、其名稱こそ明治十年以來同じけれ、其組織に至りては決して前回のもの、比にあらす。即ち將來東洋の先進帝國ニ開催せらるべき亞細亞大博覽會若くは萬國大博覽會の性質を有し、規模の濶大なる、内容の豊博なる、設備の齊整せる、淘汰の嚴正なる、決してこれを從前の規律を以て論すべからざるものあり。然れば學術界、實業家ニ於ても、理科、農業に關する斬新拭目の出品の多きは、豫期して疑ふべくもあらず。就中、昆蟲標本の出品は、從來一二の點數に止まれりしを、今回は農業館に陳列せらるべきもの、みよても、猶ほ能く二百餘點ニ上り、教育館また數十點に達し、加之山林館に於ても、多數の標本を陳列すと云へば、之に伴ふ器具藥劑より、各種の圖書、考案物等も隨ひて多く則ち一場の中、座からにして實學研磨の功を積む事を得べし、また地理的分布の調査に、種類異同の比較に便宜を享くる事それ幾何なるやを知らざるべし。あほ聞く所に依れば、東洋の諸隣邦は論無く、歐米大陸よりの出品も多く、各國競ふて來觀者を派出するの内議ありと然れば、其無形と有形を問はず、觀覽者の裨益蓋し極めて大なるものあらん。何はさて、斯學研究者の奮つて此會を利用し、其見聞を弘むるに勗められんことは切望して已まざる所なり。同志の士をば猛烈として起ち、敢て空しく此好機を逸去

せしむること勿れ。

●本號口繪の説明

本誌の巻首に收めたる口繪(第二版圖)は、學說欄の記事イシガキテフに對する發育寫生圖なるが、圖中の(イ)は葉上に産着の卵子(ロ)は其生育を遂げたる幼蟲(ハ)は蛹の懸垂の狀(ニ)は雌蝶靜止の側面(ホ)は雄蝶開翅の平面(ヘ)は卵粒の全部を放大とせしもの(ヘノ一)は卵粒の尖端を放大とせしものにて(ト)はすなはち幼蟲の食樹たるオホイタビ(桑科の植物)にて、無花果に近きもの漢名を蔘荔といひ、學名をFicus Pumila L.と云ふ)を示せるあり。尙ほ、本號收載せるイシガキテフの發育てふ記事に關し、記者武内氏より、左の如く訂正を要する旨の通告を接したれば、茲にその全文を録す、覽者其心して讀まれよ。

(洗盂) 六の報畫蟲昆用應業工



(贈寄氏郎三鐘隨守 縣知愛)

て其形影を認めず、多くは山中幽邃の處に在り、蓋し炎熱を避くるものか。其後復た一ヶ月許りを経れば、茲に(第四期)に入り、九月中下旬より、十月中下旬にかけて群飛を試るむ。此期のもは、十一月中旬に至るも猶ほ飛翔し、寒威の増進に連れ、其影を隠して越冬し、衰色繁翅の儘、早春より出て、次代の蕃殖を圖るなり。以上記載の中、第三期と第四期間の發現は、從來頗ぶる明瞭ならざりしに、彼の稿送附後、即ち昨年九月を以て、爾く確認を下せり。

○靜止の體形に就て、なほ言を添ふべきは、成蟲靜止の時に、翅を後方に折合す事の少なくして、常に平かに展開するの一事なり。○此種の斯く多く出現するは、誠に奇異なるが如きも、當地は氣候溫暖なるため、昆蟲の發生も他と同心ならず。金條毛蟲、枝尺蠖、

○雌にして雄の形色をなすもの無きに非ず」と但書にせしも、顧みれば僅々數頭調査せしに過ぎされば、此を以て決して確實なるモンキテフのそれと同視すべきに非ず、寧ろ此文字を削除せんとを望む。

○成蟲の發現期の記載に、不完全の點あれば、更に之を報せんに(第一期)早春三月中旬より、四月中旬の頃に及びて出で、其間約三旬は隻影を見ず、斯くて(第二期)に移り、五月中旬頃より、六月上旬中旬の頃に及びて、鮮麗なる新翅を翻して出づ。而して其後また約一ヶ月間は影を收む。但し此第一第二期に屬するものは、幼蟲成蟲兩つながら到處に多し。(第三期)のもは、七月中旬頃より、八月

上中旬にかけて、三伏暑盛の候に現はるゝも、光射劇烈の處には、絶

粟螟蟲の如きすら、皆全く三たび化生し、特に甚だしきは、昨年試験せる稻二化生生螟蟲中、四十餘頭は明かに第三化の成蟲を出し、其幼蟲また生育して越年をなせる程なれば、石壁紋線を以て、西化生と云ふも雖ども、敢て怪しむに足らざる可し。

●特別講習會の開閉に就て

來三月十日より開會すべき、第十五回全國害蟲驅除特別講習會は、其開會期間長さため、入會者は如何にやと思ひ居りしに、存外これに加盟の同志多く、現に全國各地の新聞報に據るも、世に歓迎をうけしは明白の事實なるが、九州四國の或官衙の如きは、特に部内、告示を發して之が入會を奨勵せし程なりと。又その閉會は三月三十日以前と規定し置きたるも、大博覽會の開場式は、聖上の臨御を仰ぎ、之を四月初めに舉行の事に内定せしを以て、一兩日の違ひなれば如何様にか差繰りても、此盛典は與かるやう修學旅行期を變更せん豫定なり。次に修學旅行中は、萬事儉約を守り、往還に紅券を携へて乗車するは勿論、大阪滞在中は前號所報の如く、一宿四十錢以内の指定旅舎に投ずること、内定せしを以て、都合一週間淹留すとも、其消費額は僅々五七圓の間に十分なれば、左よで苦痛を感せしむるに至らざるべし。なほ甚だしき障害の無からん限りは、往還何れかを關西鐵道の便に取り、伊賀大和の地方に於て、實地採集を試るまん希望なるが、是は未だ確定せしにあらず兎も角も、今回の特別講習會の開設を、名譽の紀念として、成るべく自他の利便を圖る等なれば、或ひは意外の好果を收むるに至るべき歟。

●害蟲驅除講習修業生の同窓會

名和昆蟲研究所の主催に係れる、全國害蟲驅除講習會修業生の同窓會を大阪市に開會の趣むきは之を前號に報ト置きしが、右は同地在住の會員諸氏の盡力により三月廿八日(土曜日)午後一時を以て會合するあと、なれり。又之が會員たるの資格に當らざる同志即ち各府縣の主權に係る短期講習の修業生等と雖ども、同日參集したる向をば、准會員と稱して列席を許諾せん都合なれば、此等有志の人は豫トめ其旨を當昆蟲研究所庶務部宛に申込まるべし。但し會場其他は目下交渉中なれば、確定を俟ちて之を次號に報せん。

●工業應用昆蟲畫報 (第二報)

本號より收めたる昆蟲畫報の(一)は古式の杯洗にて、黒塗に金粉もて製蜻蛉を散し蒔繪とかせしもの(二)は金澤地方の新製品にて、扇面に黒鳳蝶の百合花に戯むるの圖を畫き、それに三尺の紫英を添へたる總金高蒔繪の蓑笠なるが、その扇面は名和氏の家紋を、蝶花の配合は當昆蟲研究所より贈遺の寫生畫を應用せしものなりと(三)は鼓の胴にて、黒地の全面は、蝶鳥の

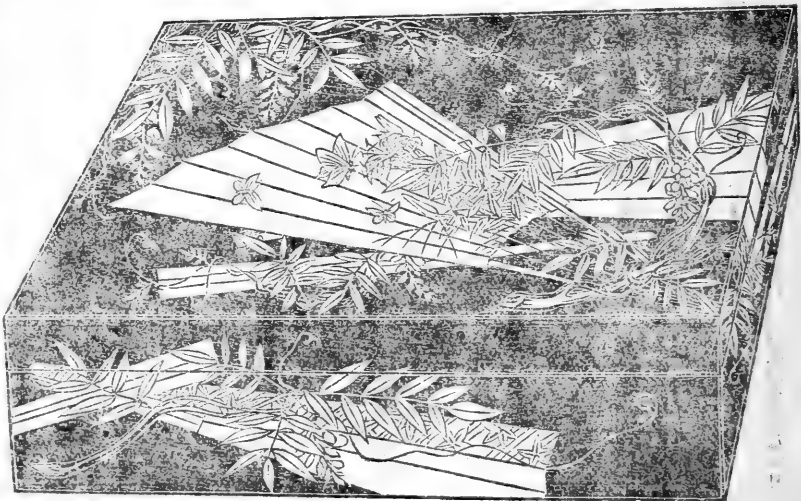
金模様ある古物なり、恐らくは儀式用に充てしものならん(四)は大垣城下の舊本陣飯沼旅店に於て奮來使用の飯器あるが、是また黒地の金蒔繪なり數羽の蝶は、模様なうで紋章なるべし。

●森林害益蟲標本の出品 農商務省山林局より、第五回内國勸業博覽會に出品すべき諸種の標本は、先年來、大日本山林會に於て採集裝成に従事せしが、其中には、森林の有益害動物標本五十七種、有益害昆蟲四百種を含み居れりと云ふ定めて斯學者に益するもの多かりん。

●静岡縣の昆蟲學講習會 静岡縣田方郡にては、去一月中旬、同縣農事試驗場技手岡田忠男氏を講師として、昆蟲學講習會を開きしに、六十一名の修業生を出し、又本月二日より、縣農會農事講習會の主催にて、一週間同様の會を開きたりすと云ふ。

●三十五年の昆蟲學講習會一覽 當昆蟲研究所事業の一として、昨三十五年中は開催せる各種の昆蟲學講習會は、實に次表の如くにて、一月より十二月に至る間に、都合十四回ありしが之を種別とすれば、普通即ち二週以上のものは五回にして、他は短期即ち一週以内のものに屬し、此總員は一千二百九十四名ありき。乃ち第一回のものより通算すれば、前後六十四回、五千五百十四名の會員に修業證書を授與したり。

(入草煙卷) 七の部畫昆用應業工



(贈寄氏二辰田由 縣川石)

開會月日	會期	會場 位置	催主	會名	會員種別等	人員
從一月廿五日 至一月廿九日	五日間	石川縣能美郡小松町	石川縣能美郡教育會	昆蟲學講習會	教育者實業者	一一八
從三月一日 至三月十四日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十一回全國害蟲驅除講習會	二府二十四縣	六一
從三月二十七日 至三月三十一日	五日間	千葉縣夷隅郡大多喜町	千葉縣夷隅郡農會	害蟲驅除豫防講習會	教育者實業者	一三二
從四月一日 至四月五日	五日間	岐阜縣養老郡高田町	岐阜縣養老郡農會	害蟲驅除講習會	教育者實業者	五四
從四月十日 至四月十九日	十日間	岐阜縣岐阜市京町	岐阜縣	第五回岐阜縣害蟲驅除講習會	實業者	三二
從五月十五日 至五月廿八日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十二回全國害蟲驅除講習會	一府十六縣	五七
從七月十九日 至七月廿三日	五日間	愛知縣寶飯郡豐川町	愛知縣寶飯郡教育會	昆蟲學講習會	教育者實業者	一六七
從七月廿五日 至七月廿九日	五日間	岐阜縣益田郡萩原町	岐阜縣益田郡教育會	昆蟲學講習會	教育者實業者	五七
從八月一日 至八月十四日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十三回全國害蟲驅除講習會	二府二十二縣	七三
從八月二日 至八月八日	七日間	靜岡縣磐田郡中泉町	靜岡縣磐田郡教育會	昆蟲學講習會	教育者實業者	五六
從八月十七日 至八月廿一日	五日間	愛知縣丹羽郡布袋町	愛知縣丹羽郡教育會	昆蟲學講習會	教育者	五四
從八月十九日 至八月十八日	十日間	鳥取縣鳥取市	鳥取縣私立教育會	夏期講習會昆蟲學科	教育者實業者	二九六
從九月廿三日 至九月廿五日	五日間	靜岡縣周智郡森町	靜岡縣周智郡農會	害蟲驅除講習會	教育者實業者	一〇二
從十一月廿五日 至十二月八日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十四回全國害蟲驅除講習會	二府十九縣	三七

計十四回、千二百九十四名。從三十一年至三十四年、合計五十回、三千二百廿四名。總計六十四回、五千五百十四名

(備考) 石川縣並に鳥取縣の講習に女子の出席多き、未だ前に其例を見ず。又鳥取縣の十日間講習は、授業時間少かりし故、自

づから短期講習の性質に屬せり。

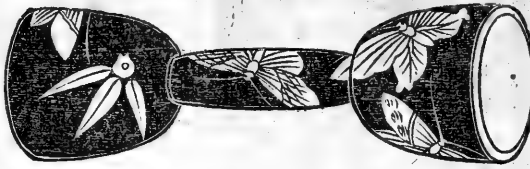
から短期講習の性質に屬せり。

●岐阜縣の講習事業

岐阜縣に於ては、本年四月より明年三月迄一年間、第一回長期害蟲驅除講習會を開き、又來る四月十日より同廿三日まで二週間、第六回短期講習會を開くにつき、去月廿三日告示第十號を以て其旨を管内に布告したるが、入會手續及び學科、心得の規定は左の如くなり。

●第一回長期害蟲驅除講習規程 ●一 開期 明治三十六年四月五日より明治三十七年三月廿五日迄 ●二 場所 岐阜市京町名和見蟲研究所内 ●三 講習科目左の如し (一) 昆蟲學 (二) 昆蟲分類法 (三) 害蟲驅除法 (四) 益蟲保護法 (五) 實習 ●四 定員 五名 ●五 講習生資格左の如し (一) 年齢二十年以上 (二) 二週間以上の害蟲驅除講習修業證書を有するもの (三) 縣下の住民たること ●六 出願期日 講習生たらんことを希望するものは二月十日までに履歴書を添へ知事に出願すへし ●七 入學試験 筆記試験口述試験に別ち筆記試験は明治廿六年二月廿日午前九時より出願者所屬の都市役所に於て之を行ふ、口述試験は筆記試験に合格したる者に就き同年三月六日午前九時より岐阜縣農會事務所樓上に於て之を行ふ、依て出願者は文具携帶の上都市役所へ又筆記試験に合格の通知を受けたるものは岐阜市京町縣農會へ當日午前八時三十分までに羽織、袴又は洋服着用出頭すへし ○試験科目左の如し (筆記試験) 一、動植物學大意 二、作文 三、數學 分數、比例、四則應用 (口述試験) 一、昆蟲學大意 ●八 給與 講習生には手當として一ヶ月金八圓支給す ●九 講習生心得 (一) 講習生入學の許可を得たるときは此の心得に服従するの誓約書を保証人連署を以て差出すへし 知事に於て保証人を不相當と認むる時は變更を命することあるへし (二) 講習生は講師の指導する所に従ひ干犯の處爲あるへからず (三) 講習生は風紀を重んじ品行を慎み講習の科業を勉勵すへし (四) 私事の爲め科業を休み又は他行せんとするときは講師の許可を受くへし (五) 講習修了后二ヶ年以内は本縣より害蟲驅除に關する事務を命令又は囑托したるときは其事務に従事すへし 此の命令又は囑托に應ぜざるときは第八項の給與金の全部又は一部を返還せしむることあるへし (六) 講習生科業を怠り講師の指導を遵奉せず風儀品行を亂し或は此の心得に違背するときは退學を命し第八項の給與金の全部若し一部を返還せしむることあるへし (七) 講習生は指定の寄宿舎に入るを要す。

(胸の鼓) 八の報毒蟲昆用懸業工



(贈寄氏衛兵小澤永 縣城宮)

宿舎に入るを要す。

●第六回短期岐阜縣害蟲驅除講習規程 ●一 開期 明治三十六年四月十日より同二十三日まで ●二 場所 岐阜市京町岐阜縣農會事務所樓上 ●三 講習科目左の如し (一) 昆蟲學大意 (二) 害蟲驅除法 (三) 益蟲保護法 (四) 野外實習 ●四 講習生資格 (一) 縣下の住民にして自ら農業に従事し若し若し同籍者に於て農業に従事するもの (二) 高等小學校卒業若し之と同等以上の學力を有するもの ●五 講習生の義務 講習中講習生心得を遵奉し講習修了后は郡市内に害蟲發生の場合に盡力し且一ヶ年間附近害蟲狀況を報告する事 ○講習生

一切の費用は自辨とし一定の寄宿舎に入ることを要す●六 出願期日講習生たらんことを望むものは二月末日までに履歴書を添へ郡市長を経て願出つべし●七 講習生心得(一)講習生は講師の指導する所に従ひ干犯の處爲ある可らず(二)講習生は風紀を重んじ品行を慎み講習の科業を勉勵すべし(三)私事の爲め科業を休み又は他行せんときは講師の許可を受くべし。

●米國の蝶類展覽會

水彩畫家大下藤次郎氏は歐米漫遊の次、現時米國新約克府に滞在中なるが、所友長野氏も宛、舊臘中旬同地發の書信には、次の一節ありきと「新約克市には、デントン氏の蒐集せられし蝶類の展覽會有之候、是はアメリカン、アート、ギャラリーと申す大建物の一室に開かれ申候。乃ち一見致候處、其種は皆世界の美しさものゝみよて、大なるは殆んど一尺に近く、其妍麗さ驚く計りに候。蝶の保存方法は、本國にて屢次見受候と同様にて、矢張蝶體だけを凹めたる白き型中に入れ其上面を硝子板にて掩ひしもの特多多く、稀は箱の兩側に幅狭き硝子二枚を並べ、其上に翅翼だけ安置せしも有之候へども、其保存の方法としては、格別新しき趣向も無之様に見受申候」云々。

●博覽會出品の昆蟲標本

第五回内國博覽會に、全國より出品の昆蟲標本は意外に多く已に第一部のみにて二百餘點に達する趣ひきなるが、其中岐阜縣下の各團躰及び私人の名義よて出品するは、第一部第八類へ十八點百拾貳箱、第二部第九類へ四點五箱、第九部第五十類へ八點八十三箱にて都て三十點貳百箱(保存箱の大きさは總て縦一尺に横一尺五寸)なるが、更にこれを各郡市に細別すれば左表の如くあり。

郡市名	部類	名稱	箱數	出品人名
岐阜市	九・五〇	昆蟲標本	二二	岐阜縣昆蟲學會
同上	九・五〇	昆蟲標本	一〇	名和昆蟲研究所
〇稻葉郡	二・八	害蟲標本	一〇	稻葉郡農會
〇同上	一・八	害蟲標本	四	藤田喜市
〇同上	一・八	害蟲標本	一	木方友九郎
〇同上	二・九	森林害蟲標本	一	羽島郡昆蟲研究會
〇羽島郡	一・八	害蟲標本	一〇	羽島郡昆蟲研究會
〇養老郡	一・八	害蟲標本	四	養老郡昆蟲學會
〇同上	二・九	森林害蟲標本	一	養老郡昆蟲學會
郡市名	部類	名稱	箱數	出品人名
〇安八郡	一・八	害蟲標本	七	安八郡農會
〇揖斐郡	一・八	害蟲標本	一五	揖斐郡昆蟲學會
〇同上	九・五〇	教育用標本	八	本巢郡昆蟲研究會
〇本巢郡	一・八	害蟲標本	七	本巢郡昆蟲研究會
〇山縣郡	一・八	害蟲標本	七	山縣郡昆蟲研究會
〇同上	九・五〇	昆蟲分類標本	一四	山縣郡昆蟲研究會
〇武儀郡	一・八	害蟲標本	五	武儀郡昆蟲研究會
〇郡上郡	一・八	害蟲標本	三	郡上郡昆蟲學會
〇同上	一・八	益蟲標本	一	郡上郡昆蟲學會

○海津郡 一・八 害蟲標本 一三 海津郡昆蟲研究会

○養老郡 九・五〇 教育用昆蟲標本 一 池邊尋常小學校

○同上 九・五〇 昆蟲分類標本 六一 之瀬尋常小學校

○不破郡 一・八 害蟲標本 六 不破郡農會

○同上 二・九 森林害蟲標本 二 不破郡農會

○同上 九・五〇 教育用昆蟲標本 一五日 垂井高等小學校

●栃木縣下の蟲塚

栃木縣下野國那賀郡横岡村地内「豫備」の碑といふがありて、碑面には種

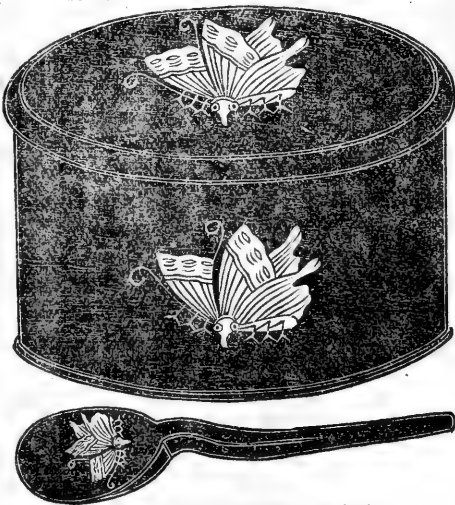
々の事柄を記し置ける趣むきなるが、是は同郡宿戸村の戸村忠恕と呼べる篤志者が、後世の危難を慮んはより、自費を投じて、嘉永元年四月に建立せ、救荒條目列記の碑とも云ふべきものなりと云ふ。今其中に就て、害蟲に關する事項の主要を擧ぐれば、苗代田の驅蟲方より螟蝗の除害も言ひ及ぼし、且つ鯨油等の他の驅除劑の事まで丁寧に説明かしたる節ありて、如何にも誠心實意より出でし美譽なることを見るに足れりと。依りて當昆蟲研究所は、該碑石所在地郡役所に照會書を發して其回答を求め、果して此説の如くんば、之を保存蟲塚の一に加へん都合なり。

●採蟲紀念碑に就て

當昆蟲研究所創立

滿七年の紀念として、本派本願寺岐阜別院構内に建設せんとする、採蟲碑の題額の揮毫は、從來種々の縁故あるより、之を大谷尊重師に依頼し置さしに俄然同寺老法主の遷化ありて、喪主代理たる同師は、先頭來服忌謹慎中なれば、爲めに豫定期間に彫刻を終へられまじき光景なれど、成るべく特別講習會中に竣工せしめんと苦心し苦れり。

(器飯) 九の報書蟲昆用應業工



(贈寄氏門衛右武沼飯 縣阜岐)

○加茂郡	一・八	害蟲標本	二	加茂郡昆蟲學會
○可兒郡	一・八	害蟲標本	七	可兒郡農會
○同上	二・九	森林害蟲標本	一	
○惠那郡	九・五〇	昆蟲分類標本	五	第三部教育會
○大野郡	一・八	害蟲標本	一〇	大野郡農會
○吉城郡	一・八	害蟲標本	三	吉城郡農會

●冬暖と昆蟲の發生

前號に今年の天候に注意すべき旨を警告せしが、其後數日果して中央氣象臺に於ても、同一の警戒を諸新聞紙に傳へ、又往々蠶種の被害をさへ報ずる地方を出せり。去れば當岐阜市の如きも、大寒立春の間、日中蚊影を認め、又夜間に家雀蛾の火光を慕ひ來れるもありき。たゞ鶯歌は平年よりも稍遅れ、一兩日前に至りて、始めて野黃鳥の囀づるを耳よせり。

●昆蟲書の出版

所友桑名伊之吉氏は、歸朝以來の奮里に於て、潛心斯學の研究に従事申なるが、今回昆蟲學研究法と云ふを著し、既に鉛版に附したる由なれば、公行の日を俟ちて批評をも試らるゝ之が紹介もせん臆算なり。意ふに斯種の著述は、現時の我國には、最も須要且つ適切なるべし。

●越冬螟蟲の調査

新潟縣中頸城郡に於て、昨年收穫の稻葉を剖檢して、莖内棲息の螟蟲を調査せしよ、一反歩の藁數は二十九萬四千九百二十六莖として、棲息の螟蟲は、幼老を合せて六百頭を算し全數中の被害莖は三千三十三本にして、それ二百二十五頭の生存あり。是は三處の平均數を反よ精算せしものなれば、多少の違ひは免がれざる可きも、死亡せしものとは、絶て無かりきと云ふ。

●昆蟲學界雜信

女子高等師範學校教授博物學擔任岩川友太郎氏は、學事視察として本月廿一日頃岐阜縣に來らるゝ豫定。●岐阜縣大垣町西濃印刷株式會社にては、最も妍麗に印刷せる蝶類及び私製葉書數葉を、内國大博覽會の出品の筈。●愛知縣名古屋市の金城婦人會にては、來月の通常會の節、講師を招きて室内害蟲談を聽問する由。

●岐阜縣昆蟲學會記事

岐阜縣昆蟲學會第五十回例會を、去る七日午後に開會せしに、酷寒を厭はず、郡部よりも數名の出席者ありて、初めに同會より博覽會の各種標本及び解説書等を看覽し、後ち小森省作氏の説明、長野菊次郎氏の廿四鳥羽蛾の話、其他種々の昆蟲談ありて同五時過に散會を告げたりき。又同會よりの出品物は已に整頓を告げ、數日前之を大坂市へ向け發送せしと云ふ。

●昆蟲標本陳列館の參觀人

去一月中、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は、總計二千六百三十人にして、其中最も多かりしは、三十日に於ける二百七十八人、最も少なかりしは、三月に於ける十三人にして、一日平均八十五人強に當り、その重かる者は各府縣の教育家、實業家及び學生等にて、中には數百里の遠地より來訪せしも多かりき。(右雜報は二月十四日脱稿)

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版
一 薔薇の 昆蟲世界 全

定價貳拾錢 郵稅貳錢 (郵券代用一割増)

臨時刊行第二編
通俗益蟲集覽 第一輯再版
(説明書附)

定價(郵稅共) 金貳拾貳錢(同上)

臨時刊行第三編
貝殼蟲圖說 全一冊 (版再)

定價(郵稅共) 金參拾七錢(同上)

- 農作物害蟲標本 壹組 (桐箱入解附 金四圓五拾錢)
- 農作物益蟲標本 壹組 (桐箱入解附 金參圓五拾錢)
- 教育用昆蟲標本 壹組 (桐箱入解附 金貳拾)
- 自然淘汰標本 壹組 (桐箱入解附 金四圓五拾錢)
- 雌雄淘汰標本 壹組 (桐箱入解附 金五圓五拾錢)
- 氣候變形標本 壹組 (桐箱入解附 金四圓五拾錢)
- 昆蟲發育標本 各種
- 山林園藝害蟲標本 各種
- 昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年二月 名和昆蟲研究所會計部

過般當昆蟲研究所近傍に出火有之候節新聞紙にて御承知の趣を以て、續々御見舞狀御遣相成辱く奉存候、當時小生は郡部出張中に候處、幸に全家其厄難を免れ申候間乍憚御休神願上度此段以紙上及御挨拶候也

明治三十六年二月

名和昆蟲研究所長 名和 靖

● アムスデンジ 桃 佛國モントロイユの原産本邦にて六月下旬に豐熟し市場の珍と劇賞せらる將來有望種なり樹性强健栽培し易し眞に之れ桃種中稀有の良種なり昨年一果十錢價す二年日より結實す上苗長三四尺壹本拾四錢 芽接苗一本五錢

● ワシントンネーブル 祇橙 米國より舶來せる柑橘中類の最大優等種にして其良好なると世間既に定評あり今茲に贅せず是又栽培し易く蜜柑の栽培せらるる地方には必ず適す

二年生上苗一本拾錢 三年生上苗長三四尺貳拾錢 照會は往復端書の外回答せず○爲替は淡路國船原郵便局

兵庫縣 津名郡 船原村 廣田殖産園

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其僞版同様ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

- 第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ(枝尺蠖)(三版) ●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
- 第三。稻の害蟲イチノズキムシ(二化生螟蟲) ●第四。煙草害蟲タバコノアラムシ(煙草螟蛉)
- 第五。稻の害蟲イチモジセセリ(苞蟲又葉捲蟲) ●第六。桑樹害蟲ヒメザウムシ(姬象鼻蟲)
- 第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲) ●第八。稻の害蟲イチノアラムシ(稻螟蛉)
- 第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲) ●第十。豌豆害蟲エンドウキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
- 第十二。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛) ●第十三。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ(複黑横紋又浮塵子)
- 第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(糸引葉捲蟲) ●第十四。茶樹害蟲チャケムシ(茶帖蜥)
- 第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ(擬瓢蟲) ●第十六。稻と麥の害蟲キリウジカガンボ(切蛆蚊姥)
- 第七。桑樹害蟲キンケムシ(金條毛蟲) ●第十六。桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
- 第十九。桑樹の害蟲クハケムシ(桑帖蜥) ●第十七。定價壹枚金拾五錢 郵稅貳錢 百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵稅百枚に付貳拾錢
- 第二十。稻の害蟲フタホシズ井ムシ(三化生螟蟲) (昨年八月新刊)

(昨年八月新刊)

(同十一月新刊)

◎害蟲圖解未刊の分豫告

- ◎稻の害蟲イナゴ(稻齧)
- ◎稻の害蟲オホズキムシ(大螟蟲)
- ◎稻の害蟲セジロウシ(背白浮塵子)
- ◎稻の害蟲ヒゲナガアブ(長角虻)
- ◎桑樹害蟲クハハマキ(桑葉捲蟲)
- ◎蠶の害蟲カヒコノウジバ(蠶蛆)



- ◎松樹害蟲マツケムシ(松蝨)
- ◎藍の害蟲アキノザウムシ(藍象鼻蟲)
- ◎粟の害蟲アハノズキムシ(粟螟蟲)
- ◎胡麻害蟲メンガタズメ(胡麻蠅)
- ◎赤楊害蟲ハンノキケムシ(赤楊蝨)
- ◎櫟の害蟲カミキリムシ(天牛)

- ◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ(梅尺蠖)
- ◎稻の害蟲トビイロウシ(褐色浮塵子)
- ◎稻の害蟲クロクサガメ(黑色椿象)
- ◎桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
- ◎桑樹害蟲クハゴ(野蠶)
- ◎蔬菜害蟲モンシロテフ(菜の螟蛉)
- ◎蔬菜害蟲サルハムシ(菜の葉蟲)
- ◎大豆害蟲ヒメコガ子(姬金龜子)
- ◎梅樹害蟲ウメケムシ(梅蝨)

◎圖解の紙幅縦一尺三寸横九寸 ◎壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
 ◎百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢
豫約代價 壹枚拾錢郵稅貳錢
但申込の際前金添附の事
 圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但郵券代用壹割増の事

- ◎梨樹害蟲ナシヅウムシ(象鼻蟲)
- ◎梨樹害蟲ホシハマキ(星葉捲蟲)
- ◎果樹害蟲イラムシ(刺蟲)
- ◎藍の害蟲アキノズキムシ(藍の螟蟲)
- ◎粟の害蟲アハノヨタウムシ(粟蠶)
- ◎里芋害蟲セスチズメ(烏蠅)
- ◎桐樹害蟲シモフリズメ(桐蠅)
- ◎果樹害蟲ホシカミキリ(白斑天牛)
- ◎果樹害蟲ドウガ子ブン(金龜子)

發行所

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

雜誌 昆蟲 世界 合本 出來 廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

第六卷(昨年分)出來

西洋綴
金文字
入美裝

昆蟲世界第二卷 五部

● 昆蟲世界第二卷 合本壹册

右は明治三十一年發行分(但合本にあらす)

● 昆蟲世界第三卷 合本壹册

右は明治三十二年發行分

● 昆蟲世界第四卷 合本壹册

右は明治三十三年發行分

● 昆蟲世界第五卷 合本壹册

右は明治三十四年發行分

● 昆蟲世界第六卷 合本壹册

右は明治三十五年發行分

(合本は每冊金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢
其他は定價の通り)

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典
として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本と
するに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝訂して
閣下索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

專賣特許
第四九八六號

莖切器發賣廣告

螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大よして之れか驅
除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を
撲殺するに如かざるなきは精農家諸君の汎く認む
る所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りな
りと雖ども未だ完全の良器なく止むを得
ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕
ふのみならず全く螟蟲の潜伏せる稻莖を
根底より刈去ることを得ざるが爲め害蟲
驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲を
嘆ま堪へざるなり發明者多年茲に意を籠
め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は
上圖に示す如く小形の鎌に彈力性の遮匙
を付したるものにして本器を使用するに
は先づ把手(一)を握り而して切取らんと
する稻莖を左手(二)で握り遮匙の頭部と鎌
の尖端との中間(イ)に當て鎌を少しく前
方に押すへし然るときは遮匙(ロ)は彈力
性あるを以て外方に開き稻莖を押し入るへ
し一度押し入れたる後は遮匙は彈力の爲め
元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全
なる稻莖は挿入する事なし此に於て鎌を
根底迄押し入れ後方に引くとときは毫も他の稻莖を害
せず容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の
良器にして静岡縣農事試験場等の協賛を博せり
定價一挺金拾錢、農會等の共同御用は特別割引

新發明莖切器の圖



製造元 静岡縣小笠郡北木村

山本勘藏

發賣元

同 縣志太郎燒津町

吉野寅之助

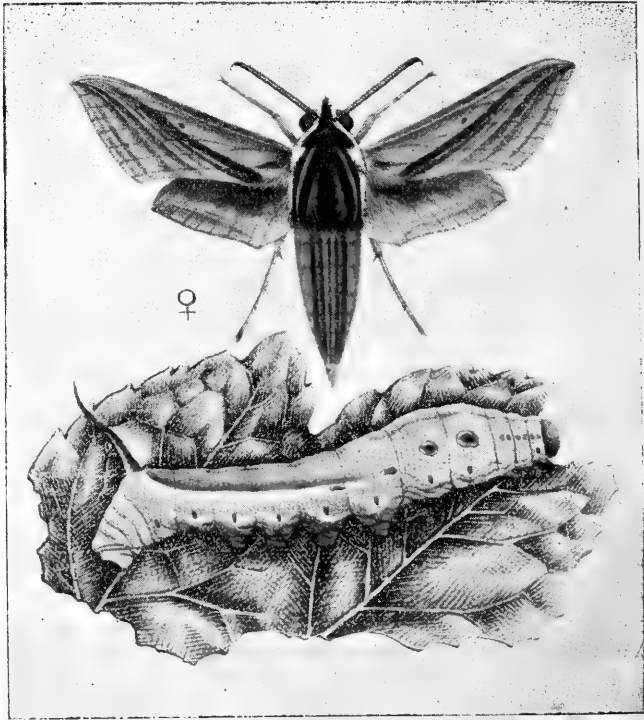
縣下一手販賣所 岐阜市京町 高橋喜之助

Chaerocampa japonica Boisd.

By K. Nagano.

Forewings grey-brown; a black discal dot; a blackish fascia from before middle of dorsum to apex, followed by several greyish and blackish stripes, nearly parallel to outer margin. Hindwings blackish-brown; towards dorsum yellowish-grey; a narrow yellowish-grey subterminal fascia. Wings below ochraceous, speckled and bordered with purplish-brown. Expanse 68-72mm. Head and thorax greenish-brown, suffused ochraceous-brown with whitish border. Abdomen greenish-brown, with four yellowish-grey stripes.

Kiusiu, Slikoku, Honsiu, Yezo; June, July. Larva green or redish-brown; dorsal line deeper; deeper subdorsal line from 6 seg. to horn; on 4,5 seg. with round green spots enclosed in white or yellow; Horn slightly curved, redish-brown; on *Vitis vinifera*, *Cissus japonica*, *Parthenocissus triaupidata*, etc.; July, Sept. Pupate in underground.



昆蟲世界

(每 月 一 回)
行 發 日 五 十

號 六 拾 六 第 卷 七 第

(年 六 十 三 治 明)
行 發 日 五 十 月 二

●昆蟲世界購讀紹介者芳名

秋田縣 細田茂吉君 (貳名)

静岡縣 石井泚平君 (壹名)

山梨縣 松井虎治君 (壹名)

福井縣 宮本三之丞君 (壹名)

鹿兒島 生熊與一郎君 (壹名)

茨城縣 中井久藏君 (壹名)

静岡縣 岡田忠男君 (壹名)

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◎岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

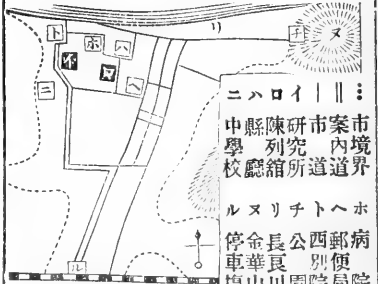
岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も每會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内 岐阜縣 昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

- 第五十一回月次會(三月七日) 第五十六回月次會(八月一日)
- 第五十二回月次會(四月四日) 第五十七回月次會(九月五日)
- 第五十三回月次會(五月二日) 第五十八回月次會(十月三日)
- 第五十四回月次會(六月六日) 第五十九回月次會(十一月七日)
- 第五十五回月次會(七月四日) 第六十回月次會(十二月五日)

(明治三十年九月十日内務省許可)
(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)



●本誌定價並廣告料

壹部郵稅共 金拾錢 (見本は五厘郵券)
壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢 (貳拾枚にて呈す)

(注意) 本誌は總て前金に非れば發送せず
●爲替拂渡局は岐阜郵便電信局●郵券代用
●は五厘切手にて壹割増とす

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付金拾錢とす

明治三十六年二月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
(岐阜縣岐阜市京町)

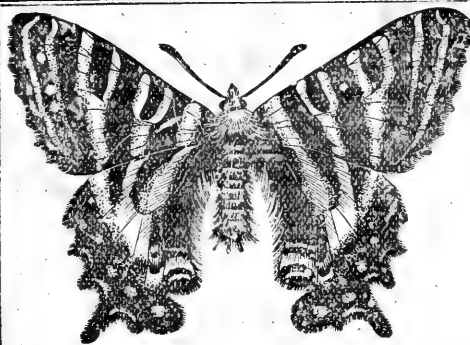
發行所 名和昆蟲研究所

不許轉載
編輯者 小森省作
印刷者 河田貞城

同縣掛斐郡鷺村大字公郷三番戶
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶

●名和昆蟲研究所案内
當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蠶室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館(五間に十六間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ
岐阜縣岐阜市京町

(大垣西濃印刷株式會社印刷)



THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

(毎月一回十五日發行)

(三月十五日發行)

昆蟲世界

第六拾七號

(第七卷第參册)

目次 (禁轉載)

●ノコギリムシとミヤマノコギリムシ (石版)

●論說 一頁

●昆蟲學研究者の學修すべき大教室 三頁

●貝殼蟲研究の發達史 桑名伊之吉

●イノブヰムシの解剖 岡田忠男

●邦産瘧蚊種上古棲息の説(後) 晴耕雨讀子

●外國の昆蟲書に就て 長野菊次郎

●講話 一九頁

●幼孩に欲裝式の昆蟲標本附新式標本 名和靖

●訪問 二五頁

●女子高等師範學校教授岩川友太郎氏の談話

●雜錄 二五頁

●栗毛蟲と天蠶に就て 芝原皓

●標本小竹浩 六足蟲彙纂(眞の巻) 長野菊次郎

●蚊に就て 三吉朋十

●岡山縣下年の螟卵摘採數 篠田春太

●田郡害蟲除景況 菅沼岩藏

●(續)武内護文の岐阜縣惠那郡農會の決議事項 書

●耕衣讀生(第九卷)櫻井倚畊

●田郡害蟲除成續表の出品 田中房太

●報 鹽田健藏

●知縣實飯郡の冬季昆蟲展覽會 田

●中周平

●雜報 四〇頁

●今年の蟲害を占ふ 農事試驗場の計畫

●博覽會出品の昆蟲標本 色と昆蟲との關係

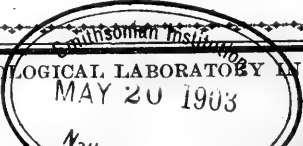
●蟲除講習修業生同窓會 國の消息

●説明 千蟲萬牙錄 全國害蟲驅除特別講習會の閉講式

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

(明治三十六年三月十五日發行)

MAY 20 1903



名和昆蟲研究所廣告

◎寄贈物件受領公告

- 一金貳圓也 岐阜縣 武藤百太郎君
 - 一金貳圓也 岐阜縣 山縣郡昆蟲學會
 - 一金壹圓也 岐阜縣 室 幾太郎君
 - 蟬巢 壹個 岐阜縣 吉田寅次郎君
 - 蜚蠊五頭 卵貳塊 靜岡縣 增井林太郎君
 - 蜚蠊 貳頭 島根縣 增田 齡造君
 - 昆蟲各稻(三十三種 二百二十三頭) 岐阜縣 塩田 健藏君
 - 台灣民報(昆蟲記事)三葉 台北縣 中村 辰治君
 - 蝶形帽子掛(金屬製)貳個 大阪府 由比昌太郎君
 - 打出花に蝶模様紙貳葉 岐阜縣 永澤 甲子君
 - 昆蟲模樣葉書(其他十二品) 靜岡縣 神村直三郎君
 - 昆蟲模樣挿畫(及古錢摺換) 各壹葉 京都市 山口福太郎君
 - 害蟲驅除寫真 壹葉 長野縣 藤本 清君
 - 鹿兒島縣農學 貳葉 鹿兒島縣 生熊與一郎君
 - 校養蟲室寫真 貳葉 岡山縣 赤枝小太治君
- 右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年三月十日 名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

- 埼玉縣 風間七郎兵衛君 (壹名)
- 三重縣 杉 村 卯 敬君 (壹名)

全國害蟲驅除講習修業生諸君よ告く

今般第五回内國勸業博覽會の開設を機とし、全國害蟲驅除講習修業生同窓會を、今三月廿八日午後第一時を以て大阪市に開き、一は以て舊交を温め一は以て將來の親和を圖り、聊か斯學の發展應用を助長せしめんことを、吾が同窓會員諸君は、此舉に賛意を表し、奮つて臨場あらんことを。

一、會場は大阪市天王寺清水八百松樓とす。(會費金壹圓)
 一、全國害蟲驅除講習修業生外の同志と雖も、名正會員に准じて列席を許すべからず。故に、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持の諸君は、遠慮なく來臨ありし。

一、列席參同の會員諸君は、三月二十日までに、名和昆蟲研究所庶務部内、同窓會幹事に宛通告ありし。

附 當日は名和先生を初め昆蟲學者數名も來臨の都合なり

大博覽會よ對する賞品贈與

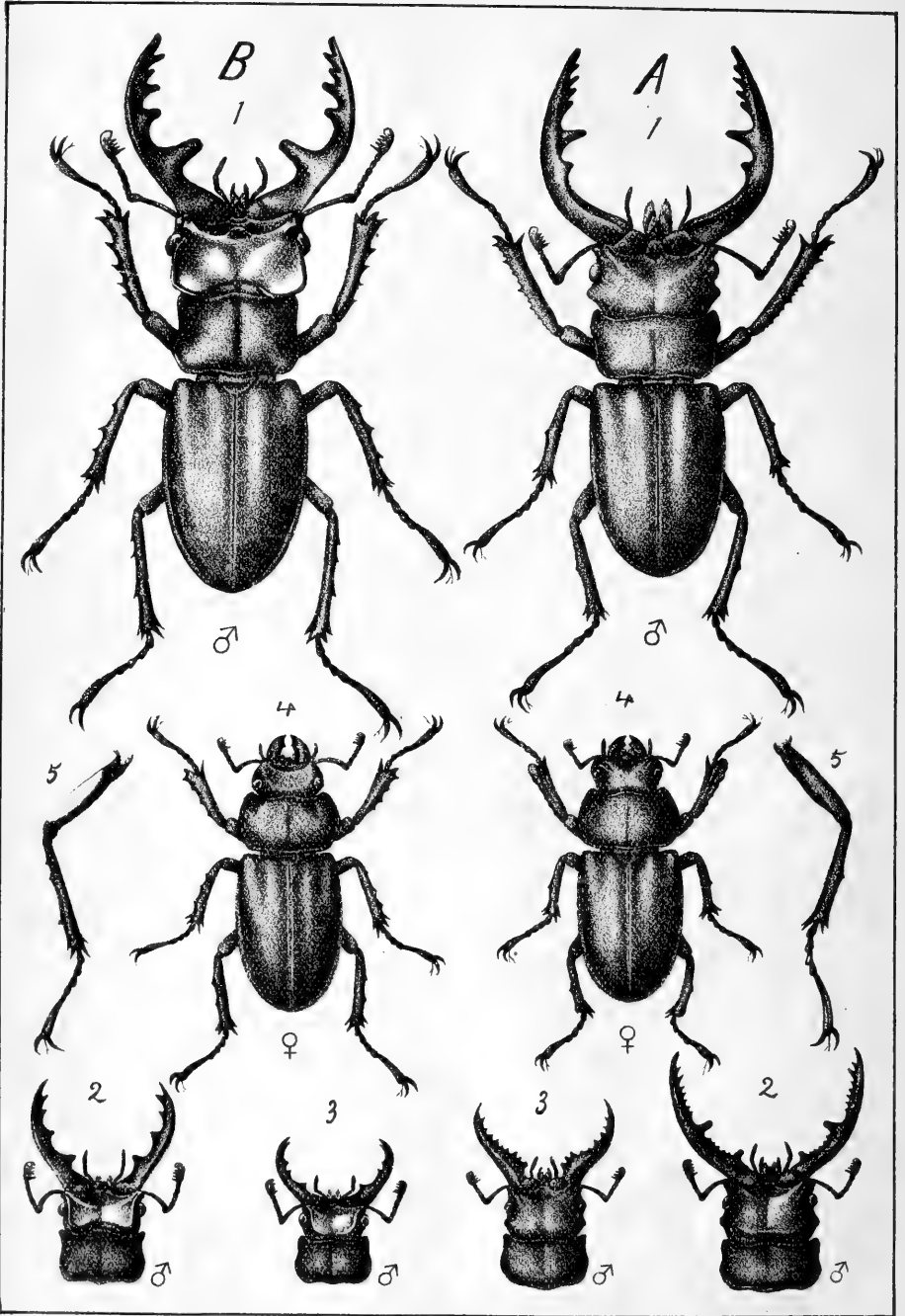
第五回内國勸業博覽會よ出品の昆蟲標本は、都合數百點の多きを算する趣あれば、隨ひて斯學に裨益を與ふるもの亦少なからざる可し。當昆蟲研究所茲に觀る所あり、此等出品標本中、左の條々該當するもの五點若くは七點を選抜して、各々これに紀念の賞品を贈與し、その斯學界に規範たるの名譽を表彰すると、もに、其功勞に對して一片の謝意を致さんとす。

一、紀念賞品は、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持者の出品に限り之を贈與す。

一、紀念賞品は、博覽會審査の結果、最優等に位せる者のみに之を贈與す。但し、審査規程に入格せざるため、優等賞を受くること能はざるも、現品の優良と認むべきものある時は、特に之を拔擢することある可し。

一、贈與昆蟲世界愛讀者中、卓絶の標本を出品し若くは優等賞を得たる時は、特に此規程を適用することある可し。

一、紀念賞品は、昆蟲學に關係を有する書籍若くは、名和昆蟲研究所の徽章を附したる工藝品たるべし。

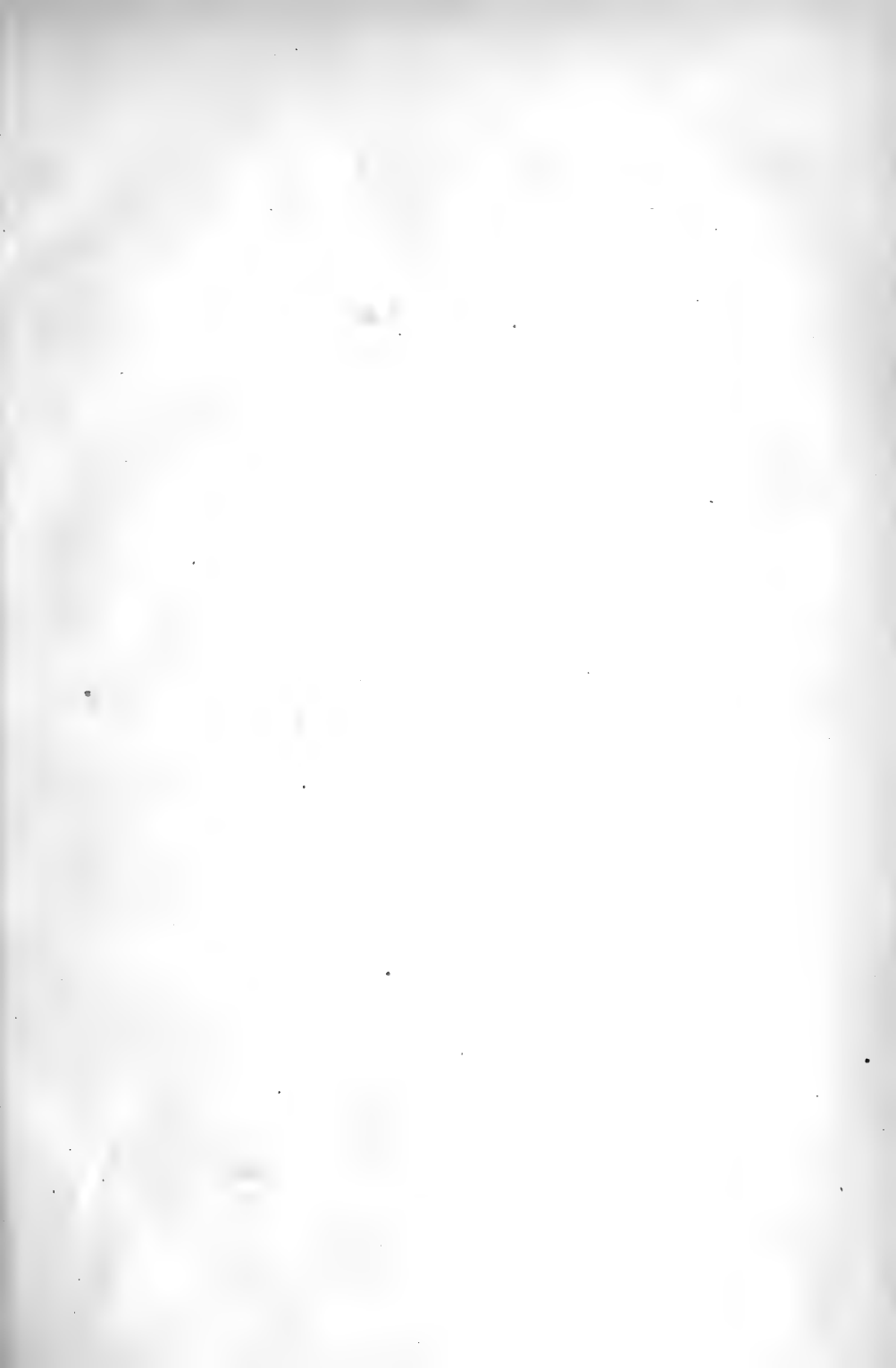


A. *Cladognathus inchinatus*, Motsch.

シムリギコノ

B. *Lucanus maculifemoratus*, Motsch.

シムリギコノマヤミ



論說



◎昆學研究者の學修すべき大教室

從來、内國大博覽會設定の報傳はるや、農商工業者の過半は、驚喜狂奔、たゞ其歡迎の同情を寄するに遅れざらんことを望むもの、如く、鶴首翹足、偏へも開場を期待するに反して、朝野の學者の、これに對する態度は、毎よ冷靜沈滞を事とし、未だ熱誠の以て世人を感動せしむるに足れるもの莫かりき。此を以て、前者は其出品の製作選擇に、勞費歲月を假すを厭はず、後者は微か其體面を保持するを以て足れりとなし、規模、點數、兩ががら復かに他よ及ばざるも、敢て介意せざるが如かりき。想ふよ、實業家の希望は、利益と名譽とを併得するに存し、學者の欲する所は、慎重著實に在るを以て、この二者は固と同視すべからざるも、蓋し豈、學者が安分退守を事とするの極、後進訓陶の天職を曠ふせる過失たらずといはんや。然は云へ、往事は追ふべからず、たゞ其反省に俟つあるのみありしが、時勢の遷移は、舊來の陋弊を攪破せしよや、今回の大博覽會には、此等學者輩の手に成りし出品、殆ど前回に倍蓰せりと。吾儕は未だ會場觀覽の機會を得ざるを以て、此卷說の眞偽を知らずと雖ども、躬苟くも四民の上班に在る學者の、國家に對する責務として、初より祇應よ然らざる可からざる事を信するが故に、學界の一慶事として同情を表示するに吝かならざる可し。

上記の事實は、學術界一般に對する所感なるが、單に昆蟲學の上より見るも、博覽會なるものゝ、優に一大活學教室たるの資格を有するなるべし。顧みれば、第一回内國大博覽會は、百事整備を缺き、學藝きは幼稚の時なりしも、猶ほ多少人智拓開の功を收め、第二回には、前回の刺戟よりて、害蟲圖其他を場の一隅に見ることを得、第三回の如きは、數多の標本と、蟲學上の著述とを陳列せしが爲に、始めて觀衆の視線を此方に導き、尋で第四回に至りて、弘く斯學の應用と、効益とを普知せしめたる結果、爰に昆蟲の研究の忽諸に附すべからざる事を悟らしむる事を得き。然れば、此進歩の状態を以て、之を歴史に譬ふれば、明治十年以前は、遜矣たる太古の暗黒時代たりしよ、一たび博覽會の開かるゝや、頓に舊套を脱して、上古の未開期に移り、十四年以後は、宛がら中古の半開期に於ける如く、始めて競進の端緒を此間に啓き、廿三年よりは、漸やく斯學に光彩を添へしこと、をさく近代の開化にも譲らず、而して廿八年以降は、實に今世期の前半の其にも似て、事毎に力を試験し費したるが如き形蹟無さゝあらず。即ち第五回内國大博覽會は、後期に屬する實行の發程を意味するや論無し、隨ひて其國家に貢獻する所、また尠少にあらざるを知るなり。特に、昆蟲標本の出品の如きは、頗る其區域を擴張して農業、林業、教育、水産の各館に分配せられ、點數また前回の比にあらざれば、その器具、藥劑、書籍の、裨益すべき品種も富めることを疑はず。是故に、斯學研究者にして、博覽會場を目的するに、神聖なる一大教室を以てし、審らかに眼に視て堅く腦に刻し、明かに心に讀みて嚴に躬に行はば、面のあたり自己に利し、また學者苦心の存する所を想察するに足らん。況して品物展觀の利に併せ、内外の名家に就て、實學上、至大の恩恵を被くべきものあるをや。往け、吾が同志の士、この新に開講せる一大教室は、假し爾が有形の財囊を奪ふことありとも、換ふるは形而上の福祿を以て報ゆるもの多からん。



◎貝殼蟲研究の發達史

米國理學士 桑名伊之吉

現今、吾人が、認識したる如き、貝殼蟲研究の應用、及び科學的必要も、第十九世紀の前半期を經過せるまでは、秩序的研鑽をなしたる事蹟を見ざるが如し。就中、一千八百五十年前の研究者は、主にBarens-prung, Bonche, Fonscolomb 及び Westwood 等にして、其種屬より云へば僅に三十三種なり也。爾後Bum-gaster, Fabricius, Curtis 等多くの新種を發見したるも、惜むらくは専ら外殼の形態より重きを置き、敢て深く解剖的特性に注意せざりしを以て、種屬の鑒定を誤りたるものまた尠なからざり也。

一千八百六十八年に至り、佛國の昆蟲學大家Signoret氏は、彼の貝殼蟲論作(Essai sur les Cochenilles)を起稿し、同七十六年を以て此一大著述を完結し、之を佛國學藝會年報(Annales de la Societes de France)に記載されしが、更に之を合冊裝成して廣く斯道研究者に配與せられぬ。其記する所は、六十九屬、二百五十八種より上り、當時世界に於て學名を有するあらゆる種屬を網羅しき。氏は、從來科學者の注意せざりし軀の解剖に留目して、「プレブラート」の製作及び顯微鏡の檢視をも遂げ、其主要局部、若くは全部を、精密巧緻の圖畫によりて説明し、以て記事の補足となしき。是れ實に斯學研究の一新法を後進輩に傳へしものと謂ふべきなり。

千八百八十年より同八十二年に涉り、北米合衆國コーネル大學の昆蟲學大家コムストック氏は、彼の有益

なる二報告を公しき。氏は専ら Diapriinae 亞科を攻究し學名を有する種類の雄蟲、及び多くの新種を發見せし中にも、デアスピネー亞科雌蟲臀板の組織を研究の結果、分類上重要な特點たることを首唱したるは、斯學界に一道の光明を添へしものと謂ふべく、其他ライレー、ホワードの兩氏、亦其論作を「昆蟲の生活」(Insect Life) に記載する所尠なからざりき。方今、貝殼蟲の専攻家として名聲の隆然たるは米國ニューメキシコ州のデー、デー、エー、コケール氏たるべし。氏は已に一百五十餘の新種をデスクライブし、以て貝殼蟲の總目錄を編纂しぬ、其如何に彼の腦漿を多費せしや想見するに餘りあり。尋で中央亞米利加産貝殼蟲をも研究し、乃ち之を Biologia Centrali America (Dec. 1899) に記載し、又別に貝殼蟲の食用植物 (Food Plants of the Coccidae) を公行して、一般攻究者の筈蹄たらしめむ。

ニュージーランド及びオーストラリアに於ては W. M. Maskell 氏よりて、二百餘の新種を發見されしが、一千八百七十八年ニュージーランド學藝會年報 (Trans. of New Zealand Inst.) に氏が研究の第一報告を收載せし以來、同九十七年に易簣せらるゝの日まで、絶えず筆を此蟲に執りたるのみか、其七十八年三月には「ニュージーランドの貝殼蟲」(Account of the Scale Insects of New Zealand) てふ有益の一書をも編纂しき。該書には廿三葉の色彩圖を挿入して、有害種六十七品を記載し、別々貝殼蟲の特性、及驅除方法に關する事項を細説し、尙濠大洲特産の五倍子貝殼蟲をば W. W. Froggatt の學界に紹介する所ありき。英國に於ける貝殼蟲の専攻家は F. W. Douglas 氏を以て嚆矢とすべし。氏が一千八百八十七年頃より、同九十四年まで、昆蟲學月報 (Ent. m. m.) に寄稿せし論説の前後二十七回に達せしを以て見るも、其蘊蓄の如何を察し得べし。一千八百九十一年に至り、Newstead 氏はド氏に續きて研究を開始せしが、一千八百八十五年までに知られし英國産貝殼蟲は、僅に二十種 (ド氏調査) なりしに、今日は將に一百種に垂

んたり。而してニ氏は去る一千九百二年を以て英國貝殼蟲圖說 (British Coccidae) ても大著述編述の功を成就し、書中には貝殼蟲の發生經過、貝殼蟲分沁の有用物、貝殼蟲の移植、天敵、採集法、人為的驅防、殺蟲劑、施劑法、貝殼蟲分類等の諸目を列次收載せり。英領印度にてはシロン貝殼蟲圖說 (Coccidae of Ceylon) ても大著述あり、是は E. E. Green 氏の手になり、其中第一二の兩卷は既に刷行して、斯學者の座右の用は供せらるゝを見る。

歐大陸全般より言ふ時はシグノレー氏以後、斯學研究の發達稍遲緩なるが如し、蓋し専攻家の少なきによれりとすべし。而してポヒミヤには Gulo 氏の自國産貝殼蟲を研究せしあり、イタリヤにては、Leonardia 氏の筆によりて「デアスピネ」亞科の「モノグラフ」成り、獨乙には Gulo 氏のあるありて、多く此蟲に就て學ぶ所ありき。

アフリカ産貝殼蟲には A. E. Eaton のアルゲリヤ地方に於て蒐集せし、高價の標本あるが爲め、ニユステード氏之を研究し、其結果をば一千八百九十二年のロンドン昆蟲學會報に記載せらる。キツプコロニイ ちた Lounsbury 氏の輩出ありて、既に幾多の有益なる研究を遂げられき。ガラバコス 群島の貝殼蟲は記者の手によりて調査を經、一千九百二年新育昆蟲學會報第十卷に寄稿しき、其種類は僅々四屬六種を算するに止まり、多くは他邦の移植に係るもの、如かり。

翻つて本邦の印行書を觀るに、貝殼蟲に關する記事決して尠なしとせず、中に、一千八百九十一年の夏名和昆蟲研究所の編纂にかゝる貝殼蟲圖説てふ一書は、斯學初歩の士を益するの大なるを知る。同年の九月、記者は更に日本貝殼蟲 (Coccidae of Japan) ても一論文を公にし、以て邦産貝殼蟲一百餘種の分布と、其寄主植物とを明かにし、又併せて二十餘の新種をデスクライプしき。是より先き、米國理學士高

階於菟次氏は、米國農務省の囑托によりて、本邦産貝殻蟲を採集したることありき。之を要するに、一千八百七十六年即ちシグノレー氏の時には、學名を有するもの僅に二百五十八種、過ぎざりしに、一千八百九十九年に至りて八百六十一種を増加するに至りしは、如何に種々の原因を存すとは云へ、第十九世紀後半期に於ける斯學の發達を徴知すべきなり。

◎イ子ノズキムシの解剖

静岡縣 岡田忠男

凡そ昆蟲學に志す者の、昆蟲外部の構成を知得するを以て足れりとするべからざるは勿論、内部の組織をも會得するの必要あるは、余の贅議を俟たざる所なり。而して昆蟲中、蠶兒の如きは、夙に諸家の研究よりて、内容外形を審かにし、また毫も遺憾なし、豈深く謝せざるべけんや。余偶々茲に感あり曩にイ子ノズキムシの解剖を試みぬ。然れども、其蟲軀の微小なると、余が研究の未熟なるとは、未だ要領を得せしめざる點多し、然るを大膽も今之を本誌に披露する所以のものは、偏へに大方諸君の叱正を請はんとするにあるのみ。そも解剖には初學たる余が、形體の微小にして最も検査に困難を感じるイ子ノズキムシを擇びしは、唯今の農界の一大害蟲として、利害の關係する所莫大なれば、之を解剖して軀體の構成を明かにする事の、間接にはズキムシ驅除の念慮を奮起すべき一材料たるを信トたるに本づけるなり。

余が解剖用に供したる螟蟲は、軀長八分内外、幅九厘のものにて、昨三十五年二月中、稻藁より採集せしを、湯殺の後酒精に浸藏せしものに係り、外部の色澤は多少變色せしやと感せしも、内部の諸機官に至りては、著るしき異状なかるべしと信せしものなりき。今内部の構成を述ぶるに先だち、其外部に對

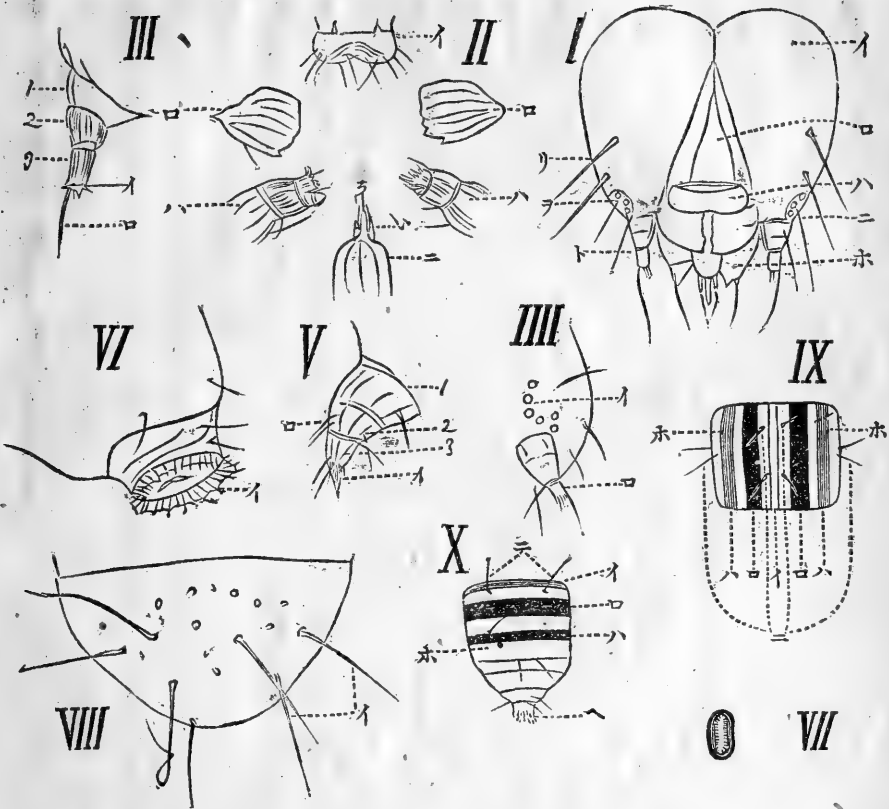
せる自己の實驗を略述する所あらんとす。

一、外部の構成 試みに一頭のイチノズキムシを取りて、之を外部より觀察するときは、其形圓筒

狀にして、頭尾の兩端は少しく尖り、中央部は稍太くして、明かに頭部と胴部とを辨別し得べし。次、胴部の十二環節の背面に鏡檢を加ふれば、第一環節は、恰も硬さ皮の如き板〔硬皮板〕ありて、上に硬毛を生じ、其狀半圓球の如く、第二環節より第十一環節に至るまでは、背面の中央に褐色の一線〔背線〕を走らす。これに傍へる兩側に、各々稍太き一線〔亞背線〕を有し、亦は其兩側には亞背線よりも細き一對の氣門線を有するを見る、即ちイチノズキムシは、都て五線を有すとすべし。第十二環節は、三角形をなし、背上に第一環節に同じき硬皮板を具へ、全皮膚上には處々粗毛を生せり。更に之を腹面より觀る時は、其頭部は口器、單眼、觸肢の三者を具し、第一二三の各環節には、爪を存せる三對の脚〔脚〕ありて、第四五の兩環節を除き第六七八九の四環節は、四對の腹脚を備へ、第十十一の兩環節を除き、最終の第十二環節には一對の尾脚を具ふるを見る。』なほ之が側面に就て觀察する時は、背線、亞背線、氣門線及び脚部を見るべく、特に第一四五六七八九十一の九環節は、氣門線を接して各個の小黒點〔氣門〕をも認め得べし、即ち呼吸作用を營む處として、其形橢圓をなせり。

頭部 頭部を細檢するに其兩側には、褐色半圓狀のキチン質板あり〔顛頂板〕あり、其中間の前方に位置する三角形の部分は、前頭板〔或は顛頂間板〕にて、其色淡黃に、左右兩邊の長さは、各二厘六毛強を算し、底邊は一厘八毛左右あり。

口器 口器は、キチン質より成れる一枚の上唇、一對の上顎、肉質なる一對の下顎、及び一葉の下唇とを以て構成せらる、而して幼蟲が稻莖中に棲息して咬嚼するに、最とも有効なるを上顎とす。上顎は



のうま かつしよく
 濃茶褐色にして、不正方形をなし其
 一邊には鋸齒あり、幅九毛強、長一
 厘強を算ま。上唇は淡茶褐色にして
 一個の瓣の如く、幅九毛九絲強あり
 て、處々に粗毛を生ぜり。下唇は肉
 質にして三節より成り、末節は二個
 の突起に分れ、其一方は二節を成し
 て先端尖り、他の一方は前者より比す
 れば、少しく太くして其先端に六本
 の肉状突起あること、恰も人の手の
 如し。下唇には二本の肉質突起あり
 て二節をなし、其末端に粗毛を生ず
 其長さ二節の突起を併せて五毛六絲
 強あり。此二突起の中央に吐絲口突
 出す、其長は五毛六絲強なり。
 觸肢 口部の兩側に位したる突
 起物にして、三節より成り、其長九
 毛五絲強ありて、一節は膨大し、先

端に至るに従ひて漸次縮小し、末端には三個の肉質突起、及び一本の粗毛生ぜり、其長七毛九絲あり。眼 兩觸肢の基部の外側に、黒褐色なる部分ありて、圓形なる單眼六箇宛を有せり。

胸脚 腹面の第一二三環節に附着する所の胸脚を採りて、實形を窺ふ時は、腹面は接する處より、先端第一に細まり、三節を有して、其末端は一個の濃褐色なる爪を有せり、而して三節とも各々粗毛を生ぜり、其形状は鏡檢圖に示すが如し。

腹脚 腹脚は第六環節より九環節に至る、軀の腹面の兩側に附着して肉質をなし、其先端は圓筒を截りたるが如く、直徑一厘五毛強ありて、其周圍は褐色の鈎狀物を附着し、尾脚は略ば腹脚に類似せり。

氣門 氣門は前已に記するが如く、第一四五六七八九十一の九環節の兩側、氣門線の下に位し、其の形は橢圓形を有せり。長徑四毛七絲弱、短徑三毛一絲強にして、其周圍は黒色をなし、中央の周圍よりは、辨毛の如きものを生じ、全體濃褐色を呈せり。

右に述べたるはイネノズキムシの外部の構成を簡單に觀察したる事項にして、或ひは要點を缺き、或ひは蛇足を加へし處も之ありん、讀者幸ひ之を諒せよ。(未完)

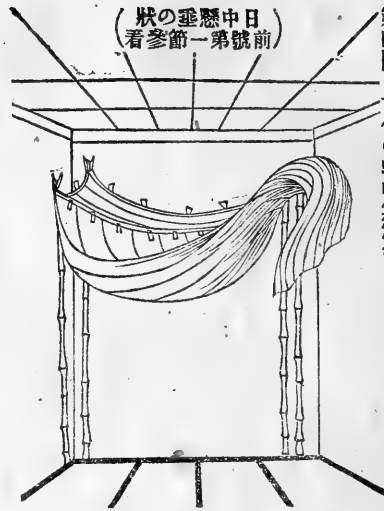
- (圖解) I、頭部の放大圖 [(イ) 顛頂板 (ロ) 前頭板 (ハ) 上唇 (ニ) 上顎 (ホ) 下顎 (ヘ) 下唇 (ト) 觸肢 (チ) 單眼 (リ) 粗毛] II、口器 (Reic hart 2×3) [(イ) 上唇 (ロ) 上顎 (ハ) 下顎 (ニ) 下唇 (リ) 粗毛 (ル) 吐絲口] III、觸肢 (Reic hart 4×3) I 2 3 環節 [(イ) 突起物 (ロ) 粗毛] IV、單眼 (Reic hart 2×3) [(イ) 單眼 (ロ) 觸肢] V、胸脚 (Reic hart 2×3) I 2 3 環節 [(イ) 爪 (ロ) 粗毛] VI、腹脚 (Reic hart 2×3) [(イ) 鈎] VII、氣門 (Reic hart 4×3) VIII、十二環節の硬皮板 (Reic hart 2×3) [(イ) 粗毛] IX、環節の背部の放大圖 [(イ) 背線 (ロ) 亞背線 (ハ) 氣門線 (ニ) 粗毛 (ホ) 氣門] X、環節の側面の放大圖 (Reic hart 2×3) [(ハ) 腹部]

◎邦産瘧媒蚊種上古棲息の説 (後)

仙臺岩麓 晴耕雨讀子

五蚊屬の性質 凡そ蚊子には、數十の種屬あるも、概して寒地よりは温地を好み、温地よりは熱地に多し。而して寒暖其處を異にすれば、隨ひて其種屬を異にすること、猶ほ植物帯に於ける、樹種の異なる表現のごとし。是を以て、東北諸國には、往々蚊帳の用を知らざる無蚊郷あるに反して、西南の暖地に於ては、冬春の候と雖ども、其化育を遂ぐる處多く、南北互ひに其種屬を異にするに伴れ、同一瘧名の下にも、自づから良悪性の差別を生ずるを見る。要するに、本邦は瘧媒蚊の蕃殖圏内に屬し、其四時の氣温の中和を得、且つ大氣の多湿多潤なるは、偶々以て蚊屬の發育を期待するに均しければ、一たびこれに移殖の機會を與へたらんは、忽條の間に、布哇國と同一の結果を來たすべきは、他の蟲種の分布蕃殖に照して昭々し。原來、蚊屬の移殖作用は、頗ぶる微弱にして、特に瘧媒蚊の翅力は、遠地の移動に堪へざるものなるも、時ありて意外の遠飛を試むること無きよしもあらず。是れ既に先進諸家の屢次實驗を経たる事實たるのみか、また暖地の原産と聞へたる此種族の、今や世界に瀰蔓して、毒を傳へ害を加ふるに徴すれば、思ひ半に過ぐるものあらん。然ればハワード氏も「英國の軍醫ヤング(H. A. Young)氏は、其調査を積める瘧媒蚊に就て、數多の例證を提供して、遂に、二百碼飛行説を主張し、クリストファー(Christopher)ステーション(Stephen)の二氏は、其試験より得たる實例に據りて、六百碼飛行説を懐き、なほ時としては、意外の遠距離に、移動するものなる事を立證せしかども、結局五十歩百歩の論争に過ぎざれば、寧ろ退きて、之が驅防を講ずること万全なれ」との意見を述べしなる可し。然は云へ、其種類によりて、能く驅防の全功を收め難き事あるを知らざる可らず。即ち昨年四月、米國ニューゼルシー(New Jersey)州に於て、蚊子の驅防調査に關する州令を布けるや、州立農事試験場技師

スミス (John. B. Smith.) 氏は、爲に報告せらく「**塩湖**は發生の蚊種ありせば、到底之を驅防すること能はず、假し病因を誘致することありとも、吾が力を以ては、之を救済するに由なし。」〔中畧〕瘧媒種は、普通種の化育を遂げ得ざる處も、常々蕃殖を遂ぐるものなれば、猶ほ精細の研究を積むに非んば、各般の驅防方法を案出すること難し云々、以て證とすべし。而してハワード氏は、このニウゼルシー産有毒蚊種の、漸次大陸内地も蕃殖する原因を以て、州海岸に散在の池沼に發生する蚊子の、日夕瀉車の輸送力を藉りて、遠近到處に分布せらるゝよあり、となせり。以上の事實に依る時は、瘧媒蚊種は本邦の原産にあらずとも、其初め、或作用によりて、他より移植せしものなることを畧ぼ認諾し得べく、併せて、其上古より棲息せしものなることをも、想像するに難からざるべし。



第四圖 古代の蚊帳(想定)

六邪神の毒氣

紀記を按ずるに、日本武尊の尾張より美濃を経て、近江國膽吹の山路に分入り給ひし

は、景行帝の四十年より四十三年の間にて、御齡正は三十歳左右の頃の事なり。たゞ其季節は詳らかならざるも、濃霧溟濛として深く峰影を鎖し、巨蟒蜿蜒として幽徑に蟠まり、氷雨沛然として來り撲てりきと云へば、時は夏秋炎暑の候よて、蚊屬化育の旺盛期たりしや論なかるべし。まして當時は有毒蚊種發生の卑濕地も多かりしなぐんに、幾夜か此間に露宿を重ね給ひし事とて、其刺螫を被けられしを、然りとぞは知り給はで、發病の誘因たる登山を試みられしものなぐんか。然れば大日本史などに、尊雲氣を侵されて、昏迷醉ひ給ひたるが如しとあるは、新婚過勞の御身に、加へて外界の刺戟頗ぶる急劇なりし

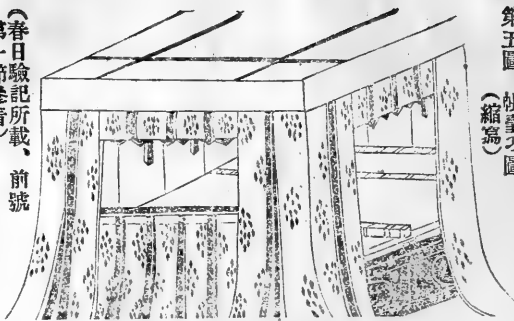
より、端無くも、茲に瘧疾の發作を促進して、惡寒戰慄を催ふし給ひたる時の前後を謂ふなる可く、其
 山麓の醒井に泉水を掬ひ、始めて醒め給ひたりとあるは、御體は高温灼熱を發して、煩渴引飲を事とし
 給ひたる第二の發作期間を謂ふなるべく、その醒井まで憇ひ給ひし時より、御身に痛みあることを感
 給ひたりとの、冷熱交發の御苦惱熾みて、病勢は漸やく第三期に移りたるも、なほ瘧疾は有がちの倦怠
 疼痛を覺えさせ給ひたる事を謂ふなるべし。斯れば御歸りの道すがら、脚力輕爽ならずと宣ひて、筈
 に撥りて行步を續けさせ給ひしも、哀れ當然の御事にて、其尾張路にて、復た少馮御苦しみを感じさせ
 給ひしは、發作當日の故にもやあらん。固より此頃は、沿道に宿舎の設けも無く、將た安かに攝療し給
 ふ術とても無きに、御年齡さへ、己に壯歲は達し給ひし事なれば、御惱の經過も、自づから重かるべき
 を、此行強めて數十里の長程を踏破せられしものから、伊勢國三重の里に、たどり着給ひたる頃よりは
 次第に御氣力も衰退し給ひたらんやう覺ゆ、最と畏き極みにこそ。按ずるも、膽吹は氣吹の義として
 人の此山より吐出す雲氣に觸る、者ある時は、忽ち其瘴毒も感して、疾みに臥せしより斯く名づく、
 とは古來の傳説なるも、余は史書を讀む毎に、頗ぶる此説を疑がひ、所謂瘴氣、毒氣を以て、疾病誘發
 の一刺戟は外ならざる可しと信じ、再轉、遂に尊の發瘧を信するに至りしなり。

(註) 驅逐志稿に云ふ。遠近諸道一も宿すべきの旅舎なく、就て借るべきの車輿なし、日暮れば則山野に露宿し、殆ど麋鹿の轉
 するが如し、稍其力ある人は、則到處草廬を結て臥し、病發すれば、則其廬中に於て休養す。今更科日記を按ずるに、常陸介菅原
 朝臣孝標得替して京に上る、治安元年九月三日任地を發し、十五日下野國某地の原野に宿す、終夜大雨、其宿する所の草菴將に漂
 はんさす、衆皆驚懼して寢るこ能はず(中略)十月晦日、參河國二村山に宿し、又草菴を一柿樹の下に結ぶ、終夜怖實其菴上に落
 つ、衆皆捨て之を食す。尋て尾張、美濃、近江を過ぎ、十二月二日京に入る。又初瀬寺に詣する記に、歸路奈良坂に至て、日將に
 沒せんとす、原野に一廬を設けて此に宿す。從者皆蔽膝或は筵席を敷て、廬外の草上に露宿し、冷露滿頭を濕す。云々、それ僅か
 に九百年前の官道に於てすら、行旅の難は猶ほ此くの如し。況して韓醫方に入るに先だつこき三百年、治安に先だつこき實に九百

年の上古にありては、生活上の不便、更にこれよりも甚はだしかりし事を想像するに難からし。

七記載の要領 余はもと醫學を知ら老、故に日本武尊の感毒を目して、直ちに疔瘡發作の致す所と断定するに憚かるものあり。然かも斯く言ふことを得ば、蚊種の研究上より利する所あるを以て、稍奇を銜

第五圖 帳臺の圖 (縮寫)



(春日驗記所載、前號第一節參看)

龍宮、高砂島の如き、蚊屬の原産地附近に來往し、更に片帆を寒潮に懸けて、常に韓吳の瘧疾流行地より出入せる、我が祖先の事蹟を追懷せば、今にして其固有種たるを、將た移殖種たるの別を論ふの要無けん。次に、本篇の綱領を摘載して、之が結尾となす。

ふも似たるも、敢て自説の是非を世の博識に質さんとするなり、幸ひに叱正を垂れよ。抑そも、余が斯かる妄想を懐くに至りしは、數年來、毒氣の性質を疑ふの餘り、閑を得れば則ち諸書の檢索に努めしに、偶々普通性三日熱の徵候は、國史の毒氣の記事と暗合する節あることを悟り、なほ季節の暑熱、沿道の卑濕、宿舎の不便、年齒の發達、婚後の冒險、氣候の激變等も、瘧因の一として數ふるに足るべきのみならず、其昏迷渴熱の狀、疼痛疲勞の態、また能く外臺秘要及び原南陽氏、ベルツ氏、抱氏等の瘧論に適合する所多かりしより、扱は採りて以て考證の資料に供せしなり。但蚊屬の固有種、移殖種、兩者何れも屬するやは、今なほ選擇に迷ふも、邦内より分布する十餘種中、特に瘧媒蚊の同一形質を具へ、且つ治ねく全土に蔓延せし跡に就て、之を稽ふれば、如何に蕃殖の迅速なる種族とは云へ、蓋し上世以後の新種とも思はれず。若しそれ、輕舟を暖流に操りて、遠く

子 蚊

一 國史には、上古に蚊屬の棲息を示さず。然れども蜻蛉科、蟻子科の蟲類の存在は、間接に之が發生を示す。

二 上中兩世期の中間に成れる歌集及び國史は、屢次蚊害を書し、また借訓として蚊字を用ゐたるもの多し。是れ早くより其發生加害を認めたる一證とすべし。

三 邦内に蚊屬發生の原始は、之を詳よせざるも、中古は蚊帳の製あるは、其蕃殖力の強弱如何を知らしむるに足れり。而して上古史の蚊屋野の稱は、茅野又は蚊谷野の義にして、蚊帳野ならざる可ければ、此を以て蚊帳あるの證となし難し。(第一圖及び第二圖參看)

四 住民の多少よりて、蚊屬の消長を左右せざる事實は、南島島及び北海道の例に於て之を證し得べく、船車によりて其分布區域を擴むるものなる事は、布哇島及び北米ニューゼルンダーランド等の例に於て之を證し得べし。

五 蚊子は其翅力強健ならず、特は瘧媒蚊種は、遠地の移動は適せず。然れども、適當の風力を藉るゝ時、若くは或時期に達したる時には、能く意外の遠地にも飛行することあり。

疾 瘧

一 既に上古は蚊屬の棲息せしものあらば、其自然の結果として、また瘧疾の隨伴をも認めざる可からず。去れど、古史に瘧疾の記事無しとて、敢て蚊屬の棲息説を左右するは足らず。

二 中古に至り、頓ち瘧疾傳播の跡を存し乍ら、其起源の澁晦にして、探り易からざるは、偶々以て、前世期以來の風土病たる事實を證徴するに足れり。而して上古史は之を載せざりしは、其名稱の定かならざるも、他の疫疾の如く、致命症にあらざるが爲めなりしならん。

三 中古期の初めより、追儼の儀式行はれ、又瘧鬼、エヤミノカミの稱を存するは、既に其以前に瘧疾の流行ありし事實を證す。

四 中古代に成れる史書に、多く瘧疾に關する説話、及び療方等を載せ、且つこれヲラハヤミエヤミ、オコリ等の病名を命じたるは、古くより該病の性質、經過を知れる結果たるべし。

五 東西の祖國に於て、二千年乃至三千年前より、瘧疾の流行を來たせしは、また本邦も、早くより其傳播の事實あることを推想せしむるは足れり。

論 結

一 現時、邦内に瘧媒蚊を産せざる地方無し。而して其分布區域の濶大なるは關はらさ、同一種

二 止まるは、之が分布期の頗る久遠なるを證するに足る。本邦は蚊屬の發育區域内は屬するに、加へて太古以來、他の蚊屬發生地及び瘧疾流行地との交通を絶たず。是れ、その分布と、瘧疾の傳播とを誘致するに、無二の機會を與へたるものと謂はざるを得ず。

三 邦産瘧媒蚊は、固有種にあらずして、移殖種に屬し、其初めや、分布上の諸要素を具備する西隣の清韓地方より、我が西北地方に移り來りしならん。蓋し南洋産とは、其種屬を異にし

隨ひて其病質をも異にするが故に、未だ其北遷を確認し難きのみならず、我の風土は、彼種の蕃殖行毒に、恰好の利便を與へざればあり。

四 瘧疾を媒介する蚊子は、決して一種に止まらざるに、本邦には從來、唯ハマダラ蚊(Anopheles punctipennis, say.)の知られしものあるのみ。故に上古に棲息せしものありとせば、今は現存種と同種なりしなる可く、瘧疾も亦同性たりしからん。

五 前舉の諸例に就て、判斷を下す時は、人烟稀疎の上古にも、なほ蚊屬の發生ありて、今日と同しく瘧因を媒介せしなるべし。

八脚氣病因の媒介物

脚氣病因の細菌なりや否や、又その發病の營養に關係ありや否や、等の觀察は、醫學上の問題に屬するを以て、余が容喙す

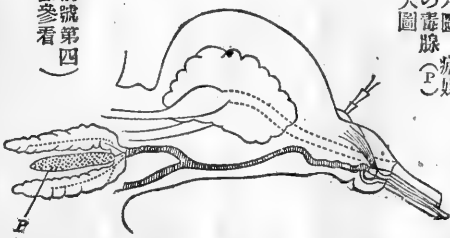
べき限りはあらず。然かも、其病因の傳播に至りては、昆蟲學の範圍にあるべしと信するを以て、爰に片言を附記せんとす。蓋し脚氣病と瘧疾とは

もと其病因を異にし、病性も同じからざる可しと雖ども、その發作徴候には、奇しくも彼此符合の點多きのみか、脚氣病の年々夏秋季を以て、瘧疾

流行地に發生するの事實は想ひ到れば、或ひは一種の昆蟲の其毒舌を弄して、病因を甲者より乙者に移植するに非ずや、との疑ひ無きはあらずれば

て、病因を甲者より乙者に移植するに非ずや、との疑ひ無きはあらずれば

(前號第四節參看)



(圖原氏ドアーアハ)

第六圖 瘧媒蚊の毒腺(大圖放)

なり。而して其媒介物は、瘧疾と同じく、蚊屬の一種たる鹹水蚊、若くはこれと近似の衛生害蟲に非ざる莫きか〔第三圖參看〕。意ふに雞肋の誘りは免がれ得ざる可きも、次々其類似點を掲げて、余がこの疑問を發したる事由を明よせん。但し、先輩間既よ此説ありと云はば、余また何をか争そはんや。

一、脚氣病の、其初め海港、若くは海邊の濕地に限局發生し、漸次内部の高地に傳播せし跡に就て之を見るに、猶ほ瘧疾の平地、若くは湖沼所在地に流行して、遂に其以外の地を侵襲せしが如し。

二、脚氣病は、啻り海濱湖沼の地を侵すのみならず、また洪水汎溢の虞ある卑低地に流行すること、猶ほ瘧疾のそれに於けるが如し。
三、脚氣病の、常に樓下の居住者、即ち昆蟲發生地に近き者に多く、高樓層閣に居住する者に少なきは、猶ほ二層樓、若くは三層樓上に、瘧疾患者の少なきが如し。

四、脚氣病の、群集雜居の不潔地に多發して、氣水の清鮮なる土地に少なき事實は、猶ほ瘧疾のそれに於けるがごとし。

五、脚氣病の、或一定の海拔以上の高地、若くは温泉涌出地を侵さざる事實は、猶ほ瘧疾のそれに於けるがごとし。

六、脚氣流行地と、未流行地との間に、丘陵の分界するものある時は、後者は概むれ其災厄を免がる。是れ猶ほ瘧疾のそれに於けるがごとし。

七、脚氣病者の、毎年四月に稀に、五月に増加し、七八月に其極度に達するは、昆蟲の盛衰と並行線をなすものにて、則ち猶ほ瘧疾患者の増減のそのごとし。

八、脚氣病の、概して霖雨の後、頓に炎暑に移る間に續發するは、猶ほ瘧疾の流行のそれに於けるがごとし。

九、脚氣病は、南洋熱帶諸島、及び印度海岸地方より、延て東亞の諸國に流行す。而して其區域は、粗ぼ瘧疾の流行區域と一致す。

十、脚氣病は、或機會を得れば、人によりて傳播せらるゝも、直接に人より人に感染するものにあらずと云へり。果して然らば、學校、兵營、獄舎に多く之が流行を見るは、或媒介物ありて、一時に其病因を多衆に移植するに依るに非ざるか。

十一、脚氣病は或媒介物の爲に、病因を移植せらるゝものなりせば、其海邊に發病多きと、他の幾多の事實とは、蚊屬若くはこれに近似の昆蟲の刺整によりて、傳播するものなる事を示すにあらざるか。

〔完〕

◎外國の昆蟲書に就て

岐阜中學教諭 長野菊次郎

〔一〕ホルランド氏の蝶譜 (Holland's The Butterfly Book) 此書は、ニューヨーク府ダーブルデー、ページ會社出版の自然叢書の一部として、初版は千八百九十八年に、第二版は千九百一年に刊行せらる。著

者はペンシルベニア州の西部大學の校長ホルランド氏（シカゴ大博覽會の節、日本出品の蝶類は、同氏の手によりて調査せられたり）にして、北亞米利加産の蝶類を、通俗的に記述したるものなり。大形の冊子にして、本文の紙數三百六十九頁を算し、第一章（三頁より二十五頁まで）は、卵、幼蟲、成蟲の形狀、變化、嗜好植物、軀軀の解剖、多形的、二形的、白色的（Albinism）黑色的（Melanism）雌雄半形的（Monstrosities）擬態、分布等の事項を記し、第二章（二十六頁―五十七頁）には、採集法、標本製作法、保存法等を述べ、第三章（五十八頁―六十八頁）には、分類法の大要を擧げ、第四章（六十九頁―七十四頁）には、北米の蝶類書籍につきて歴史的記述を試み、七十七頁より三百六十九頁までは、都て分類上の記載として、科屬種に於ける卵、幼蟲、蛹、成蟲の形狀、及び嗜好植物、時季等を明にせり。本文中の挿畫は百八十三圖にして、彩色寫真全面版は四十八葉あり、皆著者の採集したる標本より撮影せるものにして、其中の二葉には、幼蟲の形態都て七十三圖を有し、他の三葉より、蛹の形狀百八十一圖を有し、其餘の四十三葉には、蝶五百五十八種（變種をも含む）の雌雄、或は裏面又は二形等を表はしたれば圖數は七百五十三を數ふるあり。加之書中往々植物を加へて、自然の狀態、または美術的配置をなしたるもありて、殆んど實物と接する思ひあり。原價は三弗なるが、丸善商會の書目録は、七圓七拾錢とあり、實に廉かりと謂ふべし。著者の言はく、エドワルド氏の北米蝶譜（Edward's The Butterflies of North America. 全三冊にして、百五十六葉の彩色圖版を有す）は、百五十弗なれども、其の製作技術の價値に比すれば寧ろ廉かりと謂ふべく、スカッター氏のニュー、エングランド蝶譜（Soudner's The Butterflies of New England. 三卷にして、圖版八十九葉を有し、其一部分は着色あり）は、七十五弗なれども、此價額は唯著者の出費と、勞力と、時間の一部を償ふに過ぎず、然るに斯書の、此の如き廉價を

以て出版せられたる所以のものは、近來彩色寫真版の非常な發達したる結果に外ならず」と、以て本書の眞價が、果して那邊あるかを推測するに難からざるべし。本書は獨り昆蟲學者の指鍼たるのみならず、苟くも生物界に關係と趣味とを有する人の好侶たるを失はず、兼て紳士富豪の客室を飾るに足る。但し、本邦と北米とに共通の蝶類甚だ少なきを以て、此書よりて、邦産の種名を検索すること能はざるを憾ひのみ。

(二) ハワード氏の昆蟲書 (Howard's The Insect Book) 此書も亦自然叢書の一部なりして、米國農務省昆蟲部の主任たるハワード氏の著述にかゝり、一千九百二年も出版せられたり。此書に記す所は、甲翅類鱗翅類以外の昆蟲にして、各目各族等の記載に伴ふに、族科等の檢索表を以てし、且此等を代表すべき普通の昆蟲を選びて、其の發育、習性等を記述せり。元來通俗を主とせるを以て、前書と同宏く挿畫の非常な多きは、初學者に對して最も便益を與ふる點とすべし。今代表昆蟲の重なるものを擧ぐれば、カ、ミツバチ、マルバチ、ヤドリバチ、アリ、ヲナガバチ、キバチ、ノコギリバチ、カガンボ、ヤドリバチ、イヘバヘ、アブ、ブユ、ツリアブ、ムシヒキアブ、ウシバヘ、シマバヘ、タマバヘ、ノミ、シリアゲムシ、クサカゲロフ、オホクロステカゲロフ、セミ、ウンカ、ミ、ヅクヨコバヒ、カヒガラムシ、アブラムシ、マツモムシ、ミヅカマキリ、カハグモ、カメムシ、トコジラミ、ナ、フシ、シラミ、カマキリ、ゴキブリ、イナゴ、バツタ、コホロギ、キリギリス、ハジラミ、シロアリ、トンボ、シミ、トビムシ等の各種にして、終りに採集法、飼養法、標本製作法等を述べ、又附録として參考書目を擧げたり。本文は四百四頁にして、木版二百六十四圖を挿み、之を加ふるに十六葉の彩色寫真版と、三十二葉の黒刷寫真版を以てし、膜翅目に四百二十四、双翅目に二百四十四、脈翅目は六十、半翅目に百六十八、直翅目

に八十八、擬脈翅目(蜻蛉亞目)に百十一圖を添附し、皆學名を記入せり。唯その種よつきては、更^{また}何等の記載^{きざい}もな^なさずと雖^なども、著者^{ちやくしゃ}の採集^{さいしゆ}したる標本^{へうほん}によりて撮影^{さうえい}したる寫真版^{かざんぱん}は、簡單^{かんたん}なる記事を案^{あん}じて實物^{じつぶつ}を推測^{すいそく}するの困難^{こんなん}に勝^{まさ}れること萬々^{ばんばん}なりとす。然^{しか}れば一昆蟲^{こんちゆう}を捕^とへて、之^{これ}が所屬^{しよじゆく}を知らんと欲^{ほつ}する人^{ひと}、其圖版^{そのづはん}に照^{てら}して一考^{いつかう}せば、假令^{たごひ}其種^{そのしゆ}を知^しること能^{あた}はずとも、魯魚^{ろぎよ}の誤謬^{ごびやう}を招^{まね}ぐことは更^{さら}に無^なかるべし。發行所^{はつかうしよ}、代價^{たいげん}等は、都^すべて前書^{ぜんしよ}に同じ。



◎幼孩^{ごうがい}と笹裝式^{ささそうじき}の昆蟲標本^{こんちゆうひょうほん}附新式標本^{しんしきひょうほん}

名和昆蟲研究所長 名和 靖

私は去る明治三十三年の夏、デントン氏の笹裝式昆蟲標本^{ささそうじきこんちゆうひょうほん}に則^{したが}り、之^{これ}を折衷^{せつしゆう}しまして、其實用^{じつよう}の如何^{いかん}を、翌年^{しよねん}の春、岐阜市^{ぎふし}に開設^{かいせつ}の全國教育品共進會^{ぜんこくきよくひんきんしんかい}に尋ね^{もと}ました處^{ところ}が「昆蟲^{こんちゆう}ヲ玻璃板^{はりばん}ニテ壓平^{おさへい}シ、實物寫生^{じつぶつしやうせい}ノ用ニ供セシハ、其注意^{きちゆうい}至レリト云フベシ」との批評^{ひつぴう}を受け^うけました。其時^{そのとき}の顛末^{てんまつ}より製作^{せいさく}方法^{はうほう}など^{など}の事は、委^ましく昆蟲世界^{こんちゆうせかい}第四十九號^{だいじゆうしちゆうご}に載^のせました通り^{とおり}でありますから、茲^{こゝ}には略^{りやく}しますが、扱^{あつか}ひの理想的^{りてきてき}批評^{ひつぴう}ばかりでは、如何^{いかん}にも飽^あ足りぬ心地^{こころぢ}が致^{いた}ります處^{ところ}から、一ツ今度^{こんど}は之^{これ}を實地^{じつぢ}に應用^{えんよう}して見^みたいとの考^{かう}を起^{おこ}しました。が何處^{どこ}で誰^{たれ}に試験^{しけん}をして貰^{もら}ふたならば、一番^{いちばん}正確^{せうかく}の研究^{けんぎゆ}が出来るであらうかと存^{ぞん}じまして、種々^{しゆしゆ}苦心^{くしん}の末^{すえ}、一は小學校^{しょうがく}生徒^{せいと}、一は幼稚園^{幼稚園}の生徒^{せいと}を目的^{てきてき}として、取敢^{とくかん}へて、岐阜縣^{ぎふけん}不破郡^{ふたけ}垂井^{たれい}の尋常高等小學校^{じんじやうこうとうしょうがく}……これは昆蟲^{こんちゆう}に熱心^{ねつしん}な小竹浩君^{こたけひろ}も居^いられますし、又他^{また}は知合^{ちあひ}の教員^{きやういん}も居^いられますから、次^{つぎ}は愛知縣^{あいちけん}名古屋^{なごや}市の高等女學校^{こうとうにょがく}附屬幼稚園^{ふりやく幼稚園}……校長^{けいしやう}は知人^{ちじん}の甫守謹吾君^{ふしゆじんご}で、保姆長^{ほむぢやう}は、態々^{たいぢやう}岐阜縣^{ぎふけん}冬季昆蟲展覽會^{とうせいこんちゆうてんらんかい}を觀^みに參^まられ、坪内氏^{ひらうち}でありますから、斯^かう決定^{けつてい}しました處^{ところ}で、名古屋^{なごや}の幼稚園^{幼稚園}に標本^{ひょうほん}數個^{すうこ}を贈^{くわ}りましたのは、たしか一昨年^{いっさくねん}の十二月^{じふにがつ}でありましたが、同園^{どうえん}では、私の希望^{きぼう}を容^{ゆる}れて下さ

れまして、其利害に就き絶えず注目せられ、垂井の小學校でも、また實地は幾多の試験を積まれたのであります。

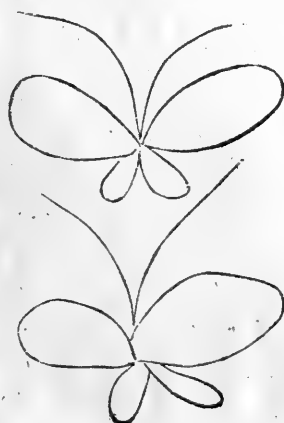
然るに其結果は如何かと云ふと、垂井小學校の如きは、之を各學年級の生徒に、寫生用標本として試験を遂げました處が、實に意外な好成績でありましたさうで、今回同校から第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本に添附して、其寫生畫數十葉を出品したのであります。是は博覽會場に陳列される、事でありませうから、別段精しくは申述べますまい。次に名古屋の幼稚園の方は如何かと云ふと、同園では、保育用として時々生徒に示し、又これを基本として記憶の試験も致され、且は蟲の形狀を畫かしひると共に、其結果に就て保姆長の批評をも徴したのであります。そして其批評と云ふのは、表裏から觀察を下したもので、此標本の價值を定むる上には、最とも緊要な點がありますから、他山の石として見る事が出来るおと、信じます。則ち毫も假借と潤飾を加へざる保姆長坪内氏の言によりますれば。

第一、幼児ノ感情 此ノ標本ニ接シテ、第一ニ美麗ナルコトヲ感ジ、已知ノ者ハ爭フテ指名シ、未知ノ者ハ、熱心ニ其名ヲ知ラントシ、種々ナル好奇心ヲ起シテ質問シ又コノ標本ノ如ク製セント望ム者多シ。

第二、製作方法 製作ニ就テハ、美麗ニシテ堅牢ナレバ、破損ノ憂ナク、害毒ヲ受クルコト、テモアラザレバ、幼児ノ玩具トシテハ適當ノ製作方ナリト思ハル。

第三、保育用 保育用トシテハ、天然ノモノニテ變色セズ、破損危險ノ憂ナキハ、他ノ標本ノ望ム能ハザル所ニシテ、圖畫ニマサルコト數等ナリ、然レドモ之ヲ標本トシテ、幼児ニ示スニハ、側面、背面、腹部等チ一面ノ内ニ現ハシナバ宜シカラシカ、唯此ノ製作ノ儘ニテハ、凡テノ部分ニツキ厚サ薄サ等モ明細ニ見能ハザルヲ以テ、十分ナル觀念ヲ與フルコト難ク、實際ニ於テ然ルヤノ疑念ヲ起ス者多キ心地ス。

第四、圖畫用 圖畫手本用トシテ寫サシムル時ハ、非常ニ眼及精神ヲ勞スルガ故ニ幼児トシテハ適當ナラズ、又唯輪郭ノミヲ寫サシムルモ、其區域ヲ定ムルコトニ於テ亦非常ニ苦心ス、サレバ保姆ガ輪郭ヲトリテ教示スルモ、之レヲ摸スルコト決シテ容易ナラズ、要スルニ圖畫手本用トシテハ不適當ノモノト思ハル、唯各幼児ニ數枚宛分チ與へ、隨意ニマカシ置カバ、或ハ摸寫スル者アルニ至ラン、或ハ時々其記憶ヲ引起シテ畫カシムルトキハ、幼兒ガコノ標本ニ對スル觀察ノ如何ヲ見ルヲ得ン。



滿五年一ヶ月の幼稚園男生の鉛筆畫
(初め標本を示し後記憶によりて畫かしたるもの)

第五、玩具用 玩具用トシテハ、危險破損ノ憂アラザレバ、適當ナルモノナレドモ、幼兒ノ性トシテ變化アルモノヲ喜ブ、故ニ變化無キモノハ、暫時ニシテ倦厭ヲ來タス、サレバ朝夕弄アモノトシテハ喜ビザルモノノ如シ。

と云ふ事である。即ち圖書用としての結果は、垂井小學校と稍異なる點を示したに相違は無いが、幼兒の玩具としては、更に危險が無く、幼兒も好んでこれに近づく、そして自然の美を知らしむるに足れると云ふ事を證明せられたのである。然るに此評語中には一面の内に、側面、背面、腹部等を現はせどの注意があるが、是は成し得べくして行へ難い事である、何故なれば斯く多くを裝成する時は、其面積が廣くなつて到底、幼稚園の生徒杯には扱ひ難くなることを免がれ得ぬ。又小兒の眼が各方に映射して錯雜をせんかと思ふ、即ち目映りがする爲に、却て宜くあるまいと思ふから、矢張複雑にせんのが宜しからう。假し蟲體の厚さと薄さが明かならざるもせよ、平面圖を書かするには、何も差支へがあらう道理が無く、普通の畫手本と思ふたならば、其以上の希望の起る筈が無いのであります。特に蝶蛾の最美の部分即ち四翅の翅表を示してあるのでありますから、腹部兩部が見はれませんが、先づ小兒の觀察には足りる事と思はれます。それは私の想定では無く、此評語の第一項に所謂、第一に美麗なることを感云々とは、主はち此點から起るのでありますから。それも玻璃板上に凹窪を穿つならば、亦格別であります。然らざる以上は、十分に腹部を見する譯に行かんことは明白であります。もと木片と硝子板とで壓平するのでありますから、外に致方が無いではありませんか。又輪郭云々の缺點は、如何にも然様かと思はれますけれども、全體これは標本と紙との間に硝子板を立て、輪郭線を畫かするのが正式でありますから、如何に上手でも、只見た計りでは巧く出来やう筈が無いのであります。そして終りの變化云々も、或ひは餘議かい次第ではあるやうですが、目的が目的でありますから、走馬燈や、發音玩具のやうな譯には參りません。若し種々な紋様彩色のあるものを、更代に與へたならば、恐らくは此缺點の幾分を補ふ事が出来る事と信じます。畢竟同園よりは、標本の數が少ないから、其感下が一層深かつたのであらう、かと思ふのであります。

然様は申すものゝ、此等の缺點を補足する爲には、別に考へて置た形式があるのであります、則ち其大さも、厚さも、將た挿入の昆蟲も、從來のものとは少まも事變りませんで、其効用を多からしむる様によ考察した積りの新式標本があります。それは玻璃板を以て表裏兩面から、或適宜な四角い木の枠を挿み、其内に昆蟲を裝置するもので、玻璃板へは小さいコロクをアラビヤガムで粘着し、これに蟲針を刺

留めるのであります(尤も留針は二三分の長さにて切去らざる可からず)。さう致せば翅表は勿論、能く翅の裏から脚部までも見えまして、厚さ薄さより、口器、腹部に至るまで明かで、また寄生植物、蛹なども添へて示す事が出来ませんが、蟲體の厚いもの、例へば甲蟲とか、蟬とかと申すものなれば、自づから著るしく板の厚さを増さんければ成らぬのと、表裏とも玻璃板でありますから、保存上舊式のものよりは確かに破れ易い、又強ゐて云へば、透視自在でありますから、標本の下は白紙の類を置かんければ判明せないし、輪郭線を取るよりも、更に多くの困難があるだらうと思ふのであります。それで私は此新式のものに就て、還た何處かで試験をして貰ふどの考を持つて居ります。

乍併、これは私の蜀隴の歎と申すもので、此箆装式標本は、初めかゝ幼稚園の寫生用に作つたものでは無く、矢張垂井のやうな昆蟲を知つて居る教師のある小學校で、程度の稍高い生徒に用ゐさるのが目的であつたから、小學以前の幼童には不適當ならうとは、豫期の一ツでありました。随ひて多少の缺點のあるのが當然で、又一方から申せば、幼稚園に居る生徒が、之を眞似て畫かうと云ふが、已に無理なのであります。そこで私は、斯く迄細密な試験せられた報告に接したのが、寧ろ意外であるとの感想を起したのであります。何故おれば、最初標本を寄贈する時に、全く玩具としての試験を願ひたいと申して、依頼したのでありますから。

今各地で試験せられました成績に就て、此標本の價值を定めますと、是は確か尋常科三四年生以上の寫生用に適當であるが、幼稚園生徒の如き智惠の少ない者には、少々程度が高い、其代り玩具として玩弄するには破損と障害の患ひが無く、又蟲名を教へるには適當の材料であつて、其美麗なるは自づから小兒をして近づかしめ得ると云ふ事を證明せられたのであります。何故なれば、名古屋の幼稚園で以て、三種の比較試験を行ふた中、實物を見ながゝ畫いた小兒は、苦惱を感ぜ乍も翅数が四ツあるが、記憶の儘のものよりは、翅が二枚のものやら、蟲體の無いものやら、其何物たるやを辨知すべからざるものやらが多いかゝであります。併し奇妙な事よりは、觸角がけり大槪畫いてありました、それも四歳から六歳の間の幼孩のみでありますから、觀察力の乏いのを尤むる譯には参りませんが……但しこれは、また大ひに其家庭と其小兒の性質の如何によつて、非常に相違を來すものであると云ふ事を記憶致さなければ成りませぬ。現に甫守君の愛子……僅かに四年五六ヶ月しか成らん男子に、緋威鐘蝶の標本を以て試験を致して見ました處が、何の苦も無く、四翅の缺刻うら、黒斑紋までも描き、又記憶によりて其

好む所の蝶を書かした處が、モンシロ蝶か、若くは黄蝶と認むべきものを描きましたから、誰もかも、右の幼稚園生徒と一様は論せられぬのであります。

尙これを中學校で、寫生手本用として、試験しました結果を聽きますに、此時代になれば、また格別で中には實物其儘とも云ふべき、立派な出来もあつたどの事でありますから、之を垂井小學校の事實と思合して見ますと、愈々高等小學程度以上は、活用せらるゝ事を確信すると共に、單だ視る、悞ぶ、と云ふ點に止れば、何れの幼孩も適當である事を悟つた次第であります。之を換言しますと、幼稚園時代は之を視て目に樂む計りであるが、尋常科時代は其名稱と、其形狀を記憶する様になり、高等科時代に入れば、色の配合から、特徴までを鑒別するやうになり、更に中學時代に進みますと、細緻の諸點にまで注目する事にあるのでありますから、此標本を應用しやうと思ふ教育者は、豫じめ此點を留目に欲まいのであります。又併せて、新式の標本をも試験して、其利害を研究して欲しいのであります。



誘問



◎女子高等師範學校教授岩川友太郎氏の談話

ナニ私が昆蟲の研究に従事しました來歴でありますと、それは中々舊い話でありまして……大學に居りました頃、即ち明治十一年頃からの事です。一體私は蟲をイザル事が好きでありまして、暇があると捕つては標本に製つて置いたのであります。其時の同好者は今の石川(千代松)君まで、同君は其頃類りと蝶類を集めたものです。佐々木(忠次郎)君なども、動物を研究されましたが、是は何が専門と云ふでは無く、昆蟲に身を入れたのは、蓋し駒場農學校へ行かれてからの後であるやうに思ひます。私は特に甲蟲類を集める事に時を費やしましたが、學校に居る中にも、餘程澤山ななりまして、天牛科のもの計りでも二百四五十種位はありましたせう。其時大學の教師で、語學を教へて居つた一英國人は頗ぶる昆蟲好で、石川君などは此教師に連れられて、青森縣下和田湖の邊で、徹夜蚊食はれた事があるのですが、一方の原子學を教へて居つた教師は、大の蟲嫌ひで私が蟲を集めて居るのを見て、蟲を

捕ツて何うするのだとの忠告まで致されました位でした。私は其後と云ふものは、蟲を隠して置いたのです。然るに十三年の頃でしたが、彼の有名なルイス氏が渡來して、九州から段々と北海道まで採集しました、其時大學に参りまして、本邦産の甲蟲を調べて見たいが、誰か採集して居った者があるまいかとの間に、教師がオニ生徒の中に一人あると云ふたので、直ちに紹介されました。其時私は採集は致したものの、今と變つて學名が少しも判りませんのよは、困つて居る最中でありましたから、名稱を聞かうと思ひました處が、ルイス氏は苦も無く、私の採集品に命名してやらうと言はれまして、即時に番號を記入して呉れたのです、然かも諸記の儘、自分の作りました甲蟲目録の番號を書いて呉れまして、そして此番號に引合して此の本から學名を探るが宜いと云ふて、目録を抛り出しました、實にその強記には驚たのでありました。私の採集しました天牛類は前に申述べましたやうな數でありましたが外に博物館にも異種類が澤山……約百四五十種もありましたらうか、旁々斯いふ有様で研究したのであります。此ルイス氏が來て居る時に、其旅宿を訪ひました處が、夫妻兩人で卓を圍んで居て、九州から北部へ掛けて採集したと云ふ甲蟲を順次並べて置きまして、ナント面白いでは無いかと申されましたから、能く之を見ますと、同一の種類でも北即ち寒地へ參れば參る程、翅鞘は光澤が無くあつたので、そして氏は此時多くの採集人を雇入れて捕らせましたが、歸つて來る、妻君共々瓶からあけては之を選擇する、其手際と申したら實に巧妙なものでありました。

昆蟲標本の製作法ですか……それは今と變りがあるものでした、處が可笑では有ませんか、今の名和(靖)君までが、私の處へ標本を見に來られた事もあつたのです。其頃は、フライアー氏などは、名を知られなかつたもので、誰一人専門に攻修された人が有ませんでした。日本蝶譜ですか、彼の本の第一巻は私が手傳て翻譯をしてやりました、たしか明治廿一二年の頃と覺へて居ります。それか後に種々變遷がありまして、今では殆んど昆蟲を研究しませんが、教育博物館にも關係がありましたが、少々標本を殖しましたが、其目的は諸縣へ頒與の爲でありました。又私が少年時代から集めた標本は、其後に一切之を高等師範學校に寄附をして仕舞ひました。私が學校を出ます頃に、今の農科大學から來て呉れいとの事でありましたけれども、其時は既に高嶺君との内約があつた後ですから、私は辭りまして、代りに佐々木君が行かれたのです、それは十四年の事であります。私の標本製作法の抄録ですと、ハイ承知しました、アレは早や二昔しも前の事でありますか、古物展覽會への出品には、丁度良いのです。



雑録

◎栗毛蟲と天蠶に就て

島根縣 江市 芝原 皓

本誌第六十四號、及び第六十五號よ、栗毛蟲に對する質問應答あり、而して其應答は、孰れも天蠶と混同せられたるが如し、今左に此等兩種に就きて、聊か説明を試みん。

栗毛蟲は樟蟲又シラガトラウ、ゲンヂキムシ、スキダハラ蟲等と稱し、山野に自生し、主に栗葉を食す。全身灰白色よして、白色の長毛を被り、體細長くして成長其極度よ達すれば三寸餘よ達す、老熟の後は葉を絡めて、一端開口したる褐色網目の繭を結ぶ。曾て數年前、我が出雲國にては非常に發生し、満山の栗樹又一葉を剩さず、終よは飢餓よ迫りて櫻、漆、櫨等よ寄生し、(針葉樹類を除く)なほ數種の樹葉をも蝕害せりき。斯くて、其翌年及び翌々年よ至るも、亦多少の發生ありしが、今日よては偶々標本を得んとするも容易に發見すると能はず。斯る大發生あるは、大約十數年よ一回よして、三四年の後に熄滅するを常とす。其一名を千日蟲と稱するは、蓋し之が爲めなり。(其當時空繭百夕の賣價凡六七錢にして、岡山より出張購買しき)

繭は紡ぎて糸となすを得べし、岡山縣には之れが製造所ありと聞く。又幼蟲より「テグス」を製するには老熟して全身黃褐色となりたるものを捕り、其頭部を引裂き、腹部を壓して二條の絲腺を取出し、少時間稀薄の醋酸又は食酢に浸し、豫じめ装置せる竹釘(先端を割りて糸を挟むべく製したるもの)の間よ其一端を挟み、靜かに之を引き延ばし、他の一端を又一方の竹釘に挟み、之を日乾となし、其乾きたるを待ちて收集し、之を馬耳塞石鹼、又は明礬、硼砂、石灰等にて練り上るなり。其方は石鹼からば水一升に對し十五夕許の割合に溶解し、之を以て煮沸すると二時間の後に取出し、清水を以て丁寧に洗滌し且つ表面に附着せる滓を除去し、後又緊張して之を陰乾し、更に柔かさ打ち葉を以て徐々に摩擦し、殘滓

を剥き落すときは、光澤ある絲を得るなり。是れ則ち出來上りたる「テグス」にして、釣魚に用ゐるものとす。現今、支那より輸入するもの、佐々木博士の説に従へば、本邦産の樟蟲とは別種にして、糸の強伸力は本邦産のものに優れりとなり。「テグス」は又老熟せる家蠶の蛆害等に罹りて、繭を造る能はず簇中に彷徨するものよりも製し得べし、其長さ凡そ七八寸あり)

天蠶は俗に之をヤママユと稱し、其學名は *Antherea Yamamai* にして、栗毛蟲とは全く別種のものなり。古來、本邦山野に自生し、櫟、櫛、榲、檜等を食とす。全身綠色にして、軀幹短かけれども、肥大よして短毛を生じ、成長其極に至れば、身長二寸四五分あり、老熟すれば葉間に綠色の繭を營ひ、(露出の部は濃緑なれども、葉に接したる部は淡緑にして、繭層甚だ薄し)。繭は長さ一寸四五分、幅七八分許あり長野縣南安曇郡にては、古へより之を飼育し、繰絲して他縣に輸出す、今尙柞蠶と共に盛に之が飼育に従事す。而して之れより製したる糸は、青白色にして強靱なり、古へは主に岐阜縮緬の經絲として用ゐられりと。元來、此絲は石灰分多く染色容易ならざるも、軌近化學的方法によりて之を精練し、蠶絲の代用品として各種の織物に使用せらる、繭一粒の價は約五六厘なり。

永澤小兵衛云ふ。芝原氏は、余が本誌第六十四號及第六十五號の應答に、クリケムシの繭に天蠶の漢字を當てたるを以て、恰も野蠶(ヤママユ)と混同せしやうに難せられしが、是は決して錯誤に出でしにあらす。勿論、芝原氏は、一時斯く誤解せしものなる可ければ、氏を咎むるにはあらざれど、諸書を渉獵せられたらんには、其是非を辨知し得たりしならんと思はる。余がクリケムシに天蠶の字を用ゐしは、小原桃洞、松井輝星、伊藤圭介等の諸先輩の説に従へるにて、氏が引證せる佐々木氏が譯述の動物書にも、同じく天蠶とあり。即ち物理小識卷十一の樟蟲と同一にて、此蟲は九州地方にては、主ば樟樹に寄生し、奥羽地方にては、常に胡桃を食害するも、普通には栗樹に多きより、扱はクリケムシと云ふなる可し。故にクリケムシ、クスムシ共に、本來毫も違ふ所なしと雖ども、前者は和名にて、後者は漢名たるの差あるのみ。なほヤママユとの區別に至りては、鄭氏の昆蟲草木略、源氏の和名鈔を始め、栗本氏の千蟲譜等參看せば、彼此自から分明せん。

◎博覽會出品の昆蟲標本

岐阜縣不破郡垂井尋常高等小學校

小 竹 浩

當校は明治三十一年五月以來、兒童の好んで注意を惹き、且つ日常生活に必須なる智識の淵源たる博物につぎ、之が標本採集を奨励し來りしが、其結果たる一部の植物種子は、之れを分類調整して、明治三

十四年四月、全國教育品展覽會に、昆蟲標本は明治三十五年二月、岐阜縣冬季昆蟲展覽會に出品したりき。今茲に記述せんとするは、本年三月より開設の第五回内國博覽會に出品したる昆蟲標本の内容なり。該標本は、もと實用に供するの目的より、高等小學教授用理科書、農業補習學校教授用益害蟲事項、及び高等女學校用理科程度等を參酌裝成せしものよして、凡て十五箱より成れり。今其配置の概略を順次記述すべし。

第一函、昆蟲の分類

約三十万の種屬を有する昆蟲よつぎ、規則正しく之が研究をなさ人には、先づ

分類法に従ひ、比較辨別の必要あるや言を俟たず、是れ第一に昆蟲の分類を擇びし所以なり。今其内容を記さんに、初學者に解し易からしめん爲めバツカード氏の分類法と、稍詳細に區別せる名和氏の分類法との二種を採れり、即ちバツカード氏分類法にありては羅翅類をミヤマアカチトンバウ、直翅類にイナゴ、半翅類をニイニイゼミ、鱗翅類にアカタテハ、テフ、双翅類をアブ、甲翅類をホシカミキリムシ、膜翅類をヤマバチを配列し、名和氏の分類法にありては、彈尾目よシミ、擬脈翅目よキイトトンバウ、直翅目よヒメバツタモドキ、總翅目にクロムクゲムシ、有吻目よキンガムシ、脈翅目にシリアゲムシ、毛翅目よコヂムキカゲロフ、鱗翅目にベニシジミ、テフ、微翅目にノミ、雙翅目にベツカフ、ハナアブ、鞘翅目にタケノベニカミキリムシ、膜翅目にハキリバチを配列せり。而して上部よは名和氏分類法に従ひて、彈尾目より順次膜翅目(凡て十二目)に至る各目に、一頭つゝ前記の標本を配し、其下にバツカード氏の分類法によりて、羅翅類より膜翅類(凡て七類)に至る各類の模範蟲即ち前記の蟲類各一頭を列ね、其間隔に朱線を施して、兩氏の分類法を對照し、且つ各目特殊の點につき簡易の説明を加へ置けり。

第二函、昆蟲の生殖及び變態

蟲類の繁殖は迅速にして且つ其變化に富めるは、昨は目よ餘る蟲群と

驚かれしよ、未だ久しからずして突然姿を隠す等のとあるより、蟲類は天より降りしか、將た地より湧きしか、或は一朝にして死滅せしやの疑ひを抱かしむる等の事實は、屢次耳にする所なり。故に第二函に於ては、生殖の種類を掲げて繁殖の如何を覺らしめ、變態を掲げて發育の順序、及び一期毎に甚しく其形態を變するものなることを知らしめんとせり。即ち生殖の種類に於ては、兩性生殖、單性生殖の二種に區別し、各數頭の標本を配列し、これに簡單なる説明を加へ、變態の種類に於ては、不變態、不完全變態、完全變態の三種に區別し、不變態の標本としてはシミを、不完全變態にハホ、ヅキガムシを、

完全變態にはカヒコを以て、各々卵より成蟲に至る生育順序を示し、また各々簡單なる説明を添付せり而して卵期、幼蟲期、蛹期に於て、如何に形狀に異同あるやを示さんがため別に卵十二顆(七類に分ちて各類一頭乃至數頭を列ぬ以下同し)幼蟲十七頭、蛹十六頭を配列せり。

第三函、昆蟲の解體 昆蟲の種族多しと雖ども、其軀軀は皆一様の様式を具ふるものにして、即ち頭

部、胸部、腹部の三者より成る。更ニ胸部を分解すれば、前胸、中胸、後胸の三となり、各胸には一對の脚と、中、後胸には各一對の翅翼を有するを見易からしめんため、羅翅類にミヤマアカチトンバウ

と、直翅類にカハラバツタ、を半翅類にユリノハナスヒを、鱗翅類にギンズチヘウモンテフを、双

翅類にアブを、甲翅類にミヤマクハガタムシを、膜翅類にクマバチを採りて頭部、前胸、中胸、後胸

腹部の五段に解躰し、更ニ羅翅類にヤマトンバウ、直翅類にイナゴ、半翅類にクマゼミ、鱗翅類にフク

ラス、バメ、双翅類にシホヤアブ、甲翅類にクハノカミキリムシ、膜翅類にヤマバチを採り、其口器

を分解して内部の構成を示し、且これに略説を附せり。

第四函第五函、昆蟲の雌雄陶汰 昆蟲類中、雌雄の最も變化したるは雄蟲にあり、是れ雄蟲は雌蟲に

比して常ニ其數多ければ、或は其姿容を妍麗にし、或は聲音を朗美にし、或は特殊の争闘具を生じ、以

て雌蟲の愛を買ひ、或は他を掠取するの便を圖るに因る、蓋し造化自然の妙理に出づ。此等の必要より

雄蟲の軀軀に變化を起し、之れを子孫ニ遺傳し、數多の生代を経て益々進化發達を來し、遂に著しく雌

雄相異なるに至れるなり、之れを雌雄陶汰と云ふ。此等の原理を示さんがため、第四、第五の二函には

其模範蟲二十八種を配列せり。今之を列叙すれば、雌の愛を買はん爲め雄蟲の躰より香氣を放つものと

してジャカウアゲハテフを、雄蟲が特異の斑紋を示すものとしてクロアゲハテフを、雄蟲の翅色に變

化の起れるものとしてコムラサキテフ及びヤマトシジミテフの類八種を、雄蟲が美聲を發するものと

してマツムシ、クツハムシ、セミ等八種を、雄蟲の觸角に變化の起りたるものとしてヒゲコガネムシ

等六種を、其他勇壯の狀を扮するものとしてクハガタムシ、カントムシの類四種を配列せり。(未完)

◎六足蟲彙纂 (寅の巻)

在岐阜市 長野菊次郎

(八)天蛾類の一盛一衰 天蛾類の多數は、地下にて蛹化するものなるが、初め其幼蟲の十分成育するや、頭部を下し、膨軟なる土壤を擇びて、茲に小穴を穿つ、然れども地下幾何なからざるに、大なる障

害物あるときは、此處を避けて地面より匍ひ出て、再び他の場處に其幽棲を求むるものあり。聽て地下數寸の位置より適當なる小房を設けて、此處に閑居を占め、一週内外を経て、其舊皮を脱すれば、遂に蛹體に化す。最初は綠色にして甚だ軟かなれども、廿四時間を経れば、稍硬くなりて褐色に變じ、翌年の春に至るまでは、安らかに此小土窖に休眠を遂ぐ。抑も此等の昆蟲は、何故か繭を績がさるかど問はゞ強き光線、寒冷、濕氣又は氣候の激變等を防がん爲には、繭中より在らんよりも、外圍の堅固なる地中に蟄居すること數等安全なれ、と答へんのみ。然れども、一盛一衰の定理は、地下の昆蟲にも免れ難く若し其嗜好食物の栽種せらるゝ前、蛹の潜める土地の耕鋤せらるゝときは、哀れや、この地中の閑室は忽ち反覆掘起の厄運に罹り、蛹は地面に露出せられて、或は禽鳥の食餌となり、又は他の方法によりて殄滅せらるゝに至るなり。此一節は、トマター蛾よつきての記事なれども、亦以て多少他の天蛾類にも適用し得べし。(ヂッケルソン氏の蝶蛾書)

(九) 幼蟲は對する保護の一二 親蟲が幼蟲の保護に對して、多少の注意を拂ふことは、所謂本能とも謂ふべくして、其方法も種々あり。今其一二を擧げんに、飛蠶の卵は堅き包被を以て掩はれたれば、外部よりの害を受くること少なく、コオヒムシ(負子)の卵は、雄蟲の背に置かれたれば、全く親の保護の下に立つものなり。其他多數の昆蟲は、長く且つ銳利なる産卵管を有して、地中又は屏若なる植物の葉若しくは莖中に産卵し、時に或は、樹幹の堅硬なる木質部中にさへ産卵するものあり。例へば、キリギリス、セミ、クダマキダマシ等の如し。且つ貝殻蟲の或種は、卵より蠟質を分泌して、往々美しき卵鞘を作り、以て卵の貯へられたる外部を被蓋することあり。又種々の蟲癭を生せしむる昆蟲は、植物の柔かなる組織中に其卵を産下するが爲に、仔蟲孵化する時は、植物に不規則なる成長を發して、所謂蟲癭を生ずるなり。抑も蟲癭は、獨り其仔蟲を保護するのみならず、亦其汁液の多量を、仔蟲の食物に供用するものにて、仔蟲は自卵の十分發育するまで癭癭内に寄居し、然る後局部を破りて外へ飛び去るなり。(ジヨルダン氏アニマル、ライフ)

因みに云ふ、前號の本欄「蟻と蚜蟲の關係」の條に、仙人掌の蚜蟲とあるは、編者の注意の如く、全く貝殻蟲と書すべきの誤りなり。爰に之を正誤す。

編者云ふ。コオヒムシに就て、其卵子を負ふを雄とするの説は、古來また邦人の信する所にして、千蟲譜の著者栗本丹洲氏の如きは確かに其一人とす。然れども、中には之を非とするの實驗者もありて、未だ何れも定まらざるが如し。是れ斯學研究者の、飼育と

剖檢を重ねて、其是非を決すべき好問題たらずせんや。又田中芳男氏は、明治七年六月、親しく之が鑒別を試るみにし、雌の尾端は、圓みを帯びて潤く、雄は雌よりも微しく細くして、二枝の刺様物を有し、卵數は百三十乃至百九十顆ありて、長さ一分弱なりしが、褐色なるに至りて、約一分五厘を算しきと。記して讀者の參考に資す。

◎蚊に就て

在北海道札幌農學校 三吉朋十

歐米などの肉舖にて、牛羊などの肉の、時々發光することあるはクービエー氏の書物も詳なり。又池沼墓地などの陰濕の地も、夜間青き火の搖々として飛廻ることあり、無智の人々は之れを人魂なり、靈魂なりなど云ふて大に恐る、若し之を捕へんと欲すれば、火は漸々と避逃し、彼方に走り、此方に走り一上一下、逃ぐるものは益々逃げ、追ふものは愈々追ひ、遂に知らざる中に池沼などに陥り、命を落すものあり、世この火を馬鹿火と云へり。昔一昆虫學者ありけるが、一夜網を携へて採集しつゝありける折しも、彼方の地上は三四尺の所を、青き火の玉のゆふもらと徘徊し居れるを見て、良き獲物なりと思ひ、追かけて網もてうましくふせてけるが、網の目の粗大なりしたためにや、隙間より皆逃去りぬ。再び密なる網もて試みけるも、中に數萬の蚊トンプの小さなが在りてけり。之れによりて人魂及び馬鹿の火なるものは、實は蚊などの群の發する燐なること世に知られたり。

古詩古文などの中に、慶雲、紫雲、赤雲など云へる文字多く見え、殊に我國及び唐の世に、慶雲など云ふ年號もありき。元祿甲申の年、谷川士清氏の書に、慶雲東京に表はれしこと誌されたり。其様は烟の如く立上り、圍一丈あまり、高さ四五丈もやあふん、雲の如く搖々と徘徊すどあり、これ皆蚊の群にして、勿論雲はあふざるなり。前の人魂と云ふものと同じ理にして、怪むに足らざるものなり。獨り蚊のみならず、蟬遊なども、かゝる事をなすことあり。獨り和漢のみならず、西曆一千八百七十九年にコロラドに表はれしも同じく蚊柱なりき。慶雲の説は、昆虫世界の晴耕雨讀子の記も詳あり。蚊のために、人の殺さるゝ事往々なるが、爰に魯西亞にて、今より七十年前、三十の馬、七十の牛、及び四百の羊の、蚊に襲はれて死せしことホルダー氏の動物書に見えたり。其の習性及び成育は、双翅目(Diptera)中の亞目蚊類(Nemocera)に屬し、別に蚊科(Chileidae)と呼ぶ一科をなす、雄蟲の觸角は羽狀をなし、凡て靜止のとき水に疊み、口は良く物を刺すに適し、雄は刺物を有せず。其幼蟲を、子と云ふ、我國に産すもの又多し。文學として歌はれたるものは、蚊遣火としては和歌に多く、蚊、蚊柱、子などとして、俳句、詩、英詩などに多し。

〔蚊〕

○夏の夜は蚊を傷にして五百兩 其角

○蚤の跡消れて間も無蚊にくはれ 著者

○蚊は名乗けり蚤は盗人のゆかり 其角

○晝の蚊の顔になり行く廣間哉 太 祇

○釣鐘の中よりわんさ出る蚊哉 一 茶

○残る蚊やちよいさ小松に隠れては 一 茶

○晝の蚊の來るや手を替品をかぬ 一 茶

〔蚊遣火〕

○わきも子に如何て知らせん蚊遣火の下もぬするは苦しかりけり

○藻鹽やく煙さのみも見ゆる哉海人のさまやに立る蚊遣火

○蚊遣火の煙に咽む山里は秋をこめたる夕霧を立つ

○夏來れは室の八島の里人も尙かやり火や思立つらん

○夕されはかやり火たかね宿もなしこの里人は月や見さらん

○立上る夕の蚊火の煙にそ有さ知らるゝ木隠の里

○かやり火の煙はよその思かは中目に曇る夏の夕暮

○夕されは燭にふすふるかやり火の下こかれつゝ上はつれなき

○誰かかくつけは置けん夏暮は松下もゆる宿のかやりひ

○いさゝ尙そさの梢茂合ひて煙に暮るゝ里のかやりひ

○かやり火の煙は人に知られ覺我下もえそ苦しかりける

○かやり火の消行見るそ哀なる我下もえよ果はいかにさ

〔蚊柱〕

○藻鹽やく須摩の浦はのかやり火に立る煙も色を變らぬ

○蚊柱に夢の浮橋かゝるなり 其角

〔蚊帳〕

○草深き静か伏屋の蚊柱に厭ふ烟を立ちそむる哉

○なくるまの風のなくれや蚊屋の難 藏 六

○物得たりかやのかくれの妹か文 召 波

○夕顔は蚊のなく程の暗さかな 祇 巫

○子や鳴ん其子の母も蚊の喰ん 嵐 蘭

○飛蚊に任せて行けば野茶屋哉 一 茶

○朝顔の花に泣き行く蚊の弱り 芭 蕉

○小庇やたらひ取られて蚊の迷 道 彦

○唐のかや終に枯れたる藻鹽草 一 茶

○南無阿彌陀佛の方より鳴蚊哉

顯 季

經 盛

家 隆

小 侍

真 淵

千 蔭

土御門院

出 羽

宗 良 親 王

行 宗

長 明

康 賢

○蚊柱のすきまから見る江戸の城 友 著

信 友

○かやを出て奈良を立行く若葉かな 一 茶

○小にくしやかやの内小宴 奥 州

○男なき寢醒のはこは蚊帳かな

- 霜寒き旅れのかやをつけ申す 如行
 ○面白や朝れのかやを人のそく 篤老
 ○子下や夜は結構な壺の月 一茶
 ○子子の天上したり三日の月 同人
 ○賢者なるものよ、汝らは子子を漉出して、駱駝を呑むものなり。(馬太傳二三章二四節)
 ○子子よ精出してふれあすは盆 一茶
 ○子子のふるや金魚の鼻の先

And round him the Suggema,

The Mosquito, sang his war-song, Longfellow

他二三の英詩あれども二ページに餘るものあれば省く。

○蚊はかひ也、人のはたへをかひ虫なり、ひを略せしあり。(益軒)
 ○蚊虻之力、不如牛馬、牛馬困於蚊虻、蚊虻乃有勢也。(俚言)

晴畊雨讀子云ふ。この「蚊の歌」は、三吉氏が將に印行せんとする著書の一節なる由なるが、舊冬余が「昆蟲世界」に連載せし慶雲蚊柱同體説の大意を、氏が摘録して本篇の骨子に充てられしを多とするの餘り、其杜撰粗瀆の節を示し置かん。(一)谷川士清氏の説は、解釋中の一節にて、普通の書籍にあらざれば、書とせずして説に改むべし。(二)谷川氏の記載には、蚊柱の高さと圍とを缺けるに、三吉氏は私断を以て之に附加へしは非事なり。恐くは、擅に谷川氏と天野氏の説とを混同せしものなるべし。(三)唐詩には蚊柱を詠ぜしものありとも思はれざるに、恰かも有るが如く記されしは如何にぞや。それとも確證ありての事か、疑はし。(四)草深きしづが伏屋云々の和歌は、七百年前の古歌にて、伴信友氏の詠草にはあらず。伴氏は近く弘化年間まで生存の學者なり。又此和歌中に「賤が伏屋」と書くべきを「靜が伏屋」と改めしは、片腹痛き僻事ならずや。(五)蟬蛸なども蚊柱を作るもあれども、是も甚しき誤謬なり、蟬蛸とは石蠶の化生せるカゲロフの名なれば、蚊柱と見ゆべき道理なし。定めて蚋子と蟬蛸とを同視せし過失ならん。(六)蚊虻之力不如牛馬云々の語は、一昨年一月發行の昆蟲世界に掲げ置きしを取りたるもの、扱其出典を知るに窮して、下に「俚言」の二字を添へしものならんが、斯る輕卒の事は、著者たらん者のなすべき業にあらずと思はる。是は、俚言にはあらで、子叢摘芳などにも引用せる格言なり。(七)唐の代に、慶雲の年號ありと言はれしかど、更に其事無し、亟かに訂正せらるべし。(八)慶雲蚊柱同體説は、余が臆想に出でしものなれば、これを以て確説とせし難きを、三吉氏が其是非を考究せずして、之を真理の如く断定せられしは、余の面目は此上なき事乍ら、學術研究上、好しからぬ至りなり、注意あらま欲し。尙ほ不審もあらば幾たびも質問せらるべし。





◎岡山縣下昨年の螟卵摘採數

岡山縣 篠岡 春太

昨明治三十五年、吾が岡山縣下に於て採取せし、二化生稻螟蟲卵塊數は左の如し。而して三十三年と三十四年とには、著しく其數を減じたりしよ、昨年は其數倍の多きを算せり、是れ手眼の熟練によれるのみならず、また其發生の夥多なりしに因れるならん。則ちこれを以て見るも、採卵法の如きは、僅かに一兩年の實施のみを以て、満足すべきにあらざるあり。

岡山市	一、九一〇塊	淺口郡	三六八、〇一六	苦田郡	一、〇四六、四六六
御津郡	一、八六八、四四一	小田郡	五〇二、五九三	勝田郡	一、五二九、三三二
赤磐郡	三、三三三、二七九	後月郡	三五六、四五三	英田郡	六二六、四二八
和氣郡	五二九、三二〇	吉備郡	一、二九九、五三三	久米郡	六一〇、三三七
邑久郡	三、七七一、七六七	上房郡	一、〇六八、六一八	計	二二、八二一、五六一
上道郡	三、二一六、三三九	川上郡	二六三、五六八	(備考)廿四年採取數	三、三八五、〇九四
兒島郡	四八九、一八九	阿哲郡	九一五、五九二	廿三年同	四、八九一、九三二
都窪郡	八六五、一一二	眞庭郡	九二七、八六八	廿二年同	二九、二五六、三六三

◎京都府天田郡害蟲驅除景況

京都府丹波國天田郡 菅沼 岩藏

吾が京都府天田郡農會は、昨年三月下旬を以て各町村農會技手を召集し、郡農技手足立鈔太郎氏を講師として、害蟲驅除講習會を開くもの一週間、其後當業者を集めて各町村農會に短期農事講習會を開き米麥作法、農作除害法等の講習をなし、講習會毎に豫て郡農會にて製作せる害益蟲の標本を携帶展覽せしめ、以て實物教授に勉むる所ありき。此際、短尺形苗代の奨勵は、郡役所と農會と、互に氣脈を通じて

之が實施を期し、當業者を勸奨して自から其必要を覺らしむるゝ勉めたりしも、敢て強制を加へざりしを以て、未だ普及するに至らざり、然かも統計の上に於ては年一年と改良の實を擧ぐるを見る、即ち左掲第一表の如し(表は略す)。一跡は三十四年は越冬の螟蟲多かりしを以て、皆警戒を怠らざりしが、果して昨年六月五日に至り、福知山近傍は發蛾夥しく、郡衙及び郡農會より、各町村役場及び町村農會に注意を促して、専ら卵蛾と幼蟲の採獲に従事せしめんとしたりしも、時恰も養蠶期にして、一般農家は速に着手し難きの事情あるより、郡下の小學校教員に協議を乞ひ、學校兒童を率ひて驅防を行はしめ、且其父兄の注意をも促せり、其結果として當業者及學童の採取せし卵塊は非常の多數に上りしが、之を表出するときは第二表の如し(表は略す)。而して郡内の農家は各戸多數の養蠶をなすより、害蟲の驅防期は恰も春蠶期と同時に、専ら苗代の手入をなす能はざる事情あるを以て、共同苗代の設置續々行はれ、今や郡内を通じて七十二ヶ處の多きを數ふるゝ至れり、蓋し美事とすべし。又稻苗を其本田に移植せしは六月十八日より同月二十五日の間に、苗代の害蟲驅防は概ね其効を奏したりしも、天候冷氣よして螟蛾の發生遅れ、多くは六月下旬に於てせしめや、早植のものには産卵特に多く、其六月二十二日迄に移植の分は被害甚しかりき、是れ或は插秧期間採卵を行ふ能はざりしに基因するやも測れず。依て被害の稻莖は、悉ごとく摘採して處分する事となし、拔穂を農會に集めて焼却し、又は堆積肥料とせり、實際の被害概算反別は左表の如し(表は略す)。

次に桑の害蟲たる尺蠖驅除の價値を見積るゝ、一貫目の桑葉を得べき刈桑の株は、十六頭の尺蠖を放飼せしに、之を喰盡したりとの實驗者の説より、桑葉一貫目の時價を金拾錢と假定すれば、即ち十六頭にて拾錢の損失を與ふるものにて、每一頭は六厘餘に當り、百頭六拾錢に相當するあり。然れば尺蠖の驅除は中々熱心に主張せられ、遂に買収法によりて、兒童子守に至る迄も、之が捕獲に従事するとはなりぬ。原來本郡に於ては、概して山畑又は宅地の附近に尺蠖の發生多く、糸引葉捲蟲は由良川沿岸の立木(高さ一丈乃至二丈五尺)桑園に多く、桑毛蟲は到處に發生して、孰れも加害すること尠なからず之を天田郡役所調査の統計に徴すれば、最近二ヶ年の被害額は左の如し。

三十四年 葉捲蟲、尺蠖、帖蠶 桑園三百三十三町七反歩、此被害損失金高二萬六千六百六十二圓。
三十五年 葉捲蟲、帖蠶、尺蠖 桑園百十五町二反歩、此被害損失金高八百三十三圓。

◎土佐産の蟲報 (第八の續)

高知縣土佐郡 武内護文

○食蟲蛇科

〔一〕シリナガアブ。〔二〕アラメアブ。〔三〕シホヤアブ。〔四〕ムシヒキアブ。〔五〕ツマグロムシヒキアブ。〔六〕オホイシアブ。〔七〕オホムシヒキアブ。此七種中、〔二〕と〔三〕とは最も多く〔四〕〔七〕は山中も多く〔一〕〔六〕は山中に産するを見るも、其數甚だ少く〔五〕に至りては尙少なし。

○水蛇科

〔一〕ヒゲナガアブ。〔二〕コウカバへ。水蛇科の蟲類中、〔一〕は最も多く産し、夏日多く稻葉に産卵す〔二〕も亦淨房附近に多し。其他なほ二三種あるも、其種名を詳にせず。

○蛇科

〔一〕ウシアブ。〔二〕メクラアブ。此中〔一〕は山間に多く、常々牛馬を追ふ〔二〕は稀に山間に於て獲べし、これ亦往々人を追ふ。其他稻田叢間には、諸種の蛇を産するも、皆其種名を詳にせず。

○毛蠅科

〔一〕クサバへ。〔二〕ヒメクサバへ。此中〔一〕は〔二〕に比して少なく〔二〕は最も多く産す稀々人を刺すとあり。

○擬蛾蠅科

〔一〕ガモドキバへ。〔二〕クロガモドキバへ。此二種は、共に全縣下に普通にして〔一〕は殊に多し。

○瘦蠅科

ヨモギノワタバへ。此種は全縣到處に其蟲癭を見る。但柳の鞠蠅は未だ之を發見せず。

○黃蠅科

此科に属する蟲類は、數種を獲たるも、未だ其種名を詳にせず。

○蚊科

〔一〕カ。〔二〕ヤブカ。〔三〕ハマダラカ。此三種中〔一〕は最も多産し〔二〕之より次ぐ。近年縣下は瘡病少なし、是れ〔三〕の見出し得ざる所以なり。然れど往年此疫頗る流行せるとあり、而して此蚊の時として多く發生するとは、亦疑ひを容れず。蚊子の種類は、固より夥多あるべきも、未だ多く檢出せず。

○擬蚊科

ヒメクロカモドキ。此種春期に多く發生して、屢次農家をして驚かしむるとあり。其他尙ほ數種あるも、固より種徴を詳にせず。

○大蚊科

〔一〕オホカガンボ。〔二〕ベツカフカガンボ。〔三〕キリウジカガンボ。此中〔一〕は山間に於て、屢次之を獲たり。〔二〕も亦北方の山中溪畔に於て僅數を産するを見る〔三〕は最も多く發生す、未だ苗代の加害を聞かずと雖ども、麥圃には屢次大害を加ふ。猶ほ一種、形〔三〕に酷似するも、全体に細毛を密生し、海濱の沙地に在りて麥類に加害するものあり、只憾むらくは未だ成蟲を見ず。要するに此科に属する小形種には多種あれども、其名を明にせず、中には單眼を有するものもあり。

○双翅の類附報 シホヤアブを、或地方に於てはサンセウダイフと稱し、キリウジカガンボをゲシ、オホツガ、オホツノガ、又はエドノカノ稱あり、ヒメクロカモドキは之をウジマンと稱する地方あり、ウジマンとは巨萬の大數の意味なり。其他は一般に蠅、蛇、蚋、蚊の通稱を用ゐる。 [完]

◎岐阜縣惠那郡農會の決議事項

岐阜縣惠那郡 晝耕夜讀生

明治三十六年度惠那郡農會總會を、去月一日より同郡役所樓上に開會せしが、奥田正道、曾我文六、三宅幸三、三氏の提出に係る「明治三十六年度、稻作害虫驅除豫防方法實施獎勵に對する方針」に對し、左の通り決定せり。

- 一、苗代は悉く短冊形に仕立つる事。
 - 二、苗代中に全力を注ぎて螟卵の摘採法を獎勵する事。但し掘殺、注油驅除をも併せ行はしむる事。
 - 三、本田に於ては(螟蟲)採卵、被害莖切取、白穂拔取、及び稻株の低刈り、刈株堀取等を行ひ、又(浮塵子)捕蟲網を使用し、兼て注油驅除をも行ふべき事。(其他の害虫に對しては、適宜の方法を執る事)
 - 四、苗代期間に於て藁の處置に注意する事。
 - 五、益蟲を保護する事。
- 右の方針を遂行する爲、左の方法を決定す。
- 一、郡内南中北の各部に、害虫驅除獎勵委員各一名を置き、驅除豫防の督勵を爲す事。但し委員は郡農會長に於て任命する事。
 - 二、各町村より害虫驅除員一名つゝを招集して、驅除豫防上の方法手段を講究せしむる事。
 - 三、驅除豫防實施に際し、警察權を利用する事。
 - 四、小學校生徒をして、害虫驅除益蟲保護を爲さしむる事。

◎學童の害虫驅除成績表の出品

島根縣農事試驗場 田中房太郎

今讀者の參考に供せんとするは、島根縣八束郡下の學童の、害虫驅除に従事せる効果表及び其説明なるが、是は皆第五回内國勸業博覽會の出品せしものゝ寫に係る。想ふに此等の事は、既に岐阜縣其他二三縣に於て實施せられたれば、今更耳新しき事實にあらざるも、未だ昆蟲思想の發達せざる本縣にありては、八束郡を以て之が嚆矢となす。而して此郡の斯る出品を必ず至れるは、數多の原因あるによれり

明治三十五年中島根縣八束郡學校生徒 害蟲驅除効果表

害蟲驅除セシメタル
學校數及ビ同生徒數

〔小學校及ビ實業補習學校 五九校
生徒 三、六四〇人

驅除セシ害蟲種別 個數

螟 幼塊 一八六九七塊
蟲 幼蟲 一〇七三七匹
蛾 蛹 一四三三匹
蛾 幼蟲 二九四八四羽

地 蠶 幼蟲 八五四匹
蛾 幼蟲 二五七羽

浮塵子 驅除反別 一三九畝
卵塊 三三六塊
成蟲 無數

其他 害蟲 一三〇四〇匹

効益推算 螟蟲驅除ノ爲被害ヲ免カ
レタル米穀高(第一化期) 五、一三三石
同上價格(同上) 五、一三七圓

捕獲セシ害蟲ヲ村農會等ニ賣却シ其
代金ヲ貯金ニナシタル生徒數及金額

〔生徒數 一、五三七人
貯金額 二、五三三圓

施設要領

島根縣八束郡民ハ概シ農業ヲ以テ生業トナスガ故ニ農業ニ關スル
思想ヲ養フハ即チ其生活ニ必須ナル知識ヲ授クルノ道ナリトス依
テ農業上害益蟲ニ關スル思想養成法ノ一方法トシテ又勤儉儲蓄ノ
美德ヲ涵養スルノ一端トシテ且又勞働ノ眞習ヲ造成スルノ一助ト
シテ明治三十五年二月本郡長ハ學校管理者及小學校長實業補習學
校長ニ訓示シテ左ノ方法ヲ實行セシメタリ

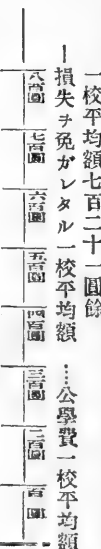
- 一、學校生徒ヲシテ害蟲及ビ其卵塊等ヲ捕獲セシムルコト
- 二、捕獲シタル害蟲及ビ其卵塊等ヲ村農會等ニ買取ラシムルコト
- 三、賣却シタル代金ハ驅除ニ從事セシ生徒ニ二分付シ貯金ニ充テシムルコト

今第一表ニヨリ試ニ螟蟲(第一化期)ニ就キ其驅除ノ効益ヲ畧述ス
レバ左ノ如シ

一、本郡内ニ於テ支米五千三百三十二石餘ノ被害即損失ヲ免カレ
從テ其價格五萬千三百二十七圓餘ノ効益ヲ收メタリ計算ノ方
法ハ解説書ニ詳記ス

又試ミニ之ヲ本郡公學費ニ對照スルトキハ左ノ如シ

螟蟲驅除ノ爲損失ヲ免カレタル總額 五萬千三百二十七圓
一校平均額八百九十九圓餘 四萬二千五百六十一圓
明治三十四年度公學費總額



即八束郡一箇年度公學費ヨリ多キヲ八千七百六十六圓ナリ

二、捕獲セシメタル害蟲ヲ村農會等ニ買取ラシメ其代金ヲ生徒
ノ貯金ニ充テタル額一人平均七錢五厘餘トナレリ

之ヲ要スルニ僅ニ螟蟲ノ第一化期ニ於テ學校生徒ヲシテ驅除セシ
メタル爲其被害ヲ免カレタル効益ハ一々年度以上ノ教育費ヲ償フ
ニ足り又害蟲賣却代金ヲ貯金ニ充テシメタルハ大ニ實業思想ヲ啓
發シ併セテ勤儉貯蓄ノ美德ヲ涵養スルニ於テ有益ノ舉ナリシコト
ヲ疑ハザルナリ

(各掛圖は縦九尺六寸六分)

と雖ども、また現郡長が縣の第四課に長として勸業を統管せる手腕を以て、一昨年以來、懇ろに郡務を料理せし結果たらずんばならず。是れ當り一郡の爲に慶すべき事たるのみならず、尙ほ進んでは縣下の事業として、實行の期の速かならんことを望みて已まざる所なり。(未完)

◎昆蟲月報 (第九信)

第八回全國害蟲
剔除講習修業生

埼玉縣 櫻 井 倚 暉

十二月 此月に入れば積雪堅氷を見るを例とするは、天候反つて温暖に過ぎ、雨天の日多かりき。去れば其間晴穩の日に現はる、蟲類も、概ね前月下旬のものと同トククリノアブラムシと菜類の蚜蟲とは依然として生存し、向陽の不淨處にはクロバへ愈々多く、夜間は蚊類の一種綠色を帯びたるもの、及び種々の小蟲の洋燈に飛來せるが如き温暖數夜ありしも、唯ヘラアブ、七星瓢蟲の幼蟲は之を認めざりき。此上旬より中旬に亘り、縣下各地の麥田にキリウジ多く發生して、加害甚しとの報新聞紙に傳へらる。余が近傍の少濕田に在りても、麥の完全に生長せしものとては、僅かに十中の一二にして、中には全圃殆ど禿たるが如きものあり、其以下の被害地に至りては、其多少言はずして明けし。現も長さ三尺の麥畦を穿ちて、四十二頭の多數を捕獲せしが如きは、其將來の加害如何を豫知するに足れり。又中旬は茶の殘花にてヒメアカタテハ二三を獲、時々モンキテフの陽地は飛翔するものを見き。是れ成蟲の儘越年せるものにして所謂オツチンテフの名に背かずと謂ふべし。尙ほ温暖なる夜には往々シロスデカミキリの燈火に誘はれ來るもありき。十七日煤拂の日、土間に据置ける置床の下より、多數のゴキブリ及びエビコホロギを發見せり。下旬に至れば、漸やく寒氣に復せり、此頃桑圃の冬耕を行へしにエダシヤクトリの幼蟲の株の根際に潜み、晴和の日中よりは上枝に登りて屈伸するを見、クハケムシの秋生種の皆根際の枯葉、及び株下に潜伏するを見き。又時々アカサシガメ、アカガチヲサムシ、アヲサムシ、オホゴミムシ等を掘出し、アカアリ、クロアリの巢及び或種の裸蛹をも掘得たることありき。(完)

附記 余や斯學に對する智識見聞共に狭く、實驗亦極めて淺薄なり、然るを自ら揣らず、昆蟲月報を綴りて、之が掲載を乞ひしに幸に捨てられず、文辭を修飾し、體裁を更め、且之が爲に貴重なる誌面を割愛せらるゝも數月、厚誼實に謝するに辭なし。而して其意たるや吾が名和先生が常に誠實を以て唱道せらるゝ蟲類の分布、及發熄の時期を調査するの一端に供する所なり。又各地の知人と標本交換の便を得んが爲なりき。而かも能く採集、飼育等を試みて、目的を達するに暇無きは大に耻づる所なり。將來斯學の知識を經驗を積み、稍自得するの日を俟て宿志の遂行を期し、以て名和先生の盛意に報ひ、併て同志各位に謝する所あらんことを察し、示教の勞を忝むこと勿らんことを。

◎岐阜縣郡上郡の蛾報

岐阜縣郡上郡上保村 塩田健藏

先に報道せし岐阜縣郡上郡産蝶類品目中に「(一)カラスバアゲハテフ、(二)イカリテフ、(三)ギフテフの三種を脱したれば、今之を補足すると、もに、左に名稱の分明なる蛾類を報道せん。而して其名稱は「日本昆蟲學」の記載に對照記名したるものなれば、或ひは通名と相違の點無きを保せず。

○穀蛾科 ●ヒゲナガテフ ●ススムシテフ ●びつさるミノムシ

○羽蛾科 ●フザマメトリバテフ

○尺蠖科 ●エダシヤクトリ ●トゲシヤクトリ ●ムメシヤクトリ ●トンボテフ

○擬尺蠖科 ●キンモンテフ ●イチアナムシテフ ●アケビテフ ●ベニシタバ ●シロシタバ ●オホトモエテフ

●トモエテフ ●カラムシテフ

○毒蛾科 ●キンケムシテフ ●マイマイテフ ●チャケムシ

○寶蛾科 ●カヒロ ●クハゴ ●ムメケムシテフ ●マツケムシテフ ●カレハテフ

○天蠶蛾科 ●ヤママユ ●テグステフ ●オホミヅアチテフ ●ヤマカマス

○天蛾科 ●オホスカシバ ●ベニスズメ ●セスガズズメ ●ウチスズメ ●モモスズメ ●メンガタズズメ ●エビガ

ラスズメ

編者云ふ。此報告申イカリモンガを蝶類に追記したりと雖も、此は蛾類天蛾科に屬する一種なれば、蛾類に入るを至當とす。又この蟲名は日本昆蟲學の記載に従へり云へば、今更詮方なれど、尺蠖蛾科と擬尺蠖蛾科のものには、青蟲蛾科、巴紋蛾科、枝尺蠖蛾科、梅尺蠖蛾科に分配すべき種類も少なからざるのみならず、マツケムシガ、カレコノハガ等の毛蟲蛾科に屬すべきを、蠶蛾科に配したるすら之あり、此等は今後注意すべき點なるべし。要するに、蛾をテフと呼ぶ時は、語呂圓滑なるも、之がため時としては蝶蛾の別を失ふ事あるを以て、成るべく劃然たる分界線を設くるを可とす。又松村氏の著書には、幼蟲名を本とせる尺蠖科、十分意義を表明し難き羽蛾科の如き、科名及び蟲名を用ゐたるも、共に妥當を缺けりと思はるれば、適宜斟酌を加ふるの要あるべし。

◎愛知縣寶飯郡の冬季昆蟲展覽會

愛知縣 田中周平

吾が三河國寶飯郡に於ては、三十六年度郡會の決議を経て、近々冬季採集の昆蟲展覽會を、豊川町妙嚴寺内に一週間開會の事に確定したるが、其開會期は名和昆蟲研究所長名和先生と協定せん等あり、恐くは五月の初なるべしとの事より、今や郡下各處に於ては専ら其準備に忙はし、左よ其二三を報告す。

一、冬季昆蟲展覽會開設に就き、去月廿八日を以て郡長中山眞琴氏より、幹事を囑托せられしは、木村永八郎、田中周平、中尾國光、水野龍治郎、神谷兵吉、松尾幸治郎、山口春次郎の七氏なりしが、譯で本月五日には、郡の中部の小學校長一同を國府高等小學校に會して、出品に關する商議をなせり。東部、西部、また同様の協議を遂ぐる都合なりき。

一、冬季昆蟲展覽會を郡事業とするに就き、中山郡長及び竹内祝學等の熱誠は、郡參事會員並に郡會議員諸氏を動かして、何の障害も無く決定せるもの、如し。故に此會にして好結果を得ば、異日教育上に不少の利益を興ふべきも、不幸豫想の如くならずんは反つて信望を殺くに至らんことを憂ひ、各關係者は皆汲々として之が設備に從事の狀あり。

一、赤阪高等小學校の冬季採集品は、約二百五十種あり、赤阪、長澤、萩の三尋常小學校また前者と伯仲の間にあり。而して昆蟲標本の外に數多の寫生圖をも出品せしめんとして、已に高等小學生に描寫せしめたるが、中には某處より發賣せる益害蟲圖と比較の爲めに、特に同種の昆蟲を畫きたるものあり。

一、各學校中には、昆蟲の研究に熱心なる教員も不少なるより、或ひは終業後に製作、整理に餘念無きもあり、又或ひは部下の職員を督勵して、専意成績を擧ぐるに怠らざるもありて、互に競進の一方に傾注し居るもの、如し。故に郡の利益より言ふ時は、之が爲めに一段の活氣を添へ來れるは争ふ可きにあらず。



雜報

● 今年の蟲害を占ふ 舊冬來、稍高温に過ぎし爲め、聊さか今年の害蟲發生を氣支ふ所ありし

に、それかあらぬか、各府縣に於て、町村に簡易の害蟲驅除講習會を開設せしもの頗ふる多く、今より防備をさく油断無ければ、假し多少の加害ありとも、遂に大災を見るに至らざる可し。且つ中央氣象臺の觀測に、最低温度を感せしは、二月廿一日にて、東京に於ける同日の温度は、攝氏の零下四度餘に下り、同廿三日は零下二度三、廿四日は同二度弱なりきと云へば、今に至るもなほまだ適順の天候に復したりとは思はれず。去れば啓蟄後に至るも、復た寒冷を感ずるの日ある可ければ、半は蟲類の發育を妨害するに足らんか。故に本年は農家の放心せざる限り、不幸を來さざるべきも、已に昨年に於て切蛆の爲めに加害せられたる麥田、尺蠖毛蟲の爲めは恐慌を來したる桑園も、多々各地にありとの報あれば

一、天候のみ依頼して、その驅防を懈怠すべきをわらす。

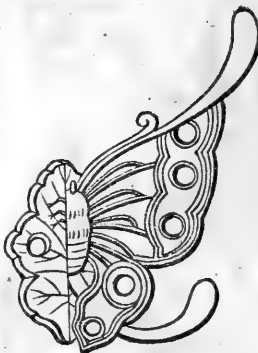
●農事試験場の計畫

聞く所によれば、東京西原の農商務省農事試験本場にては、各府縣より生徒を募集し、約一年間修業せしめて、之を各地に配置せん計畫あるも、その園藝害虫の講師に適當の人物なきより、未だ實行の運びに至らずと。

●内國勸業博覽會出品の昆蟲標本

今月一日より開會の、第五回内國勸業博覽會に出品せし讀者の出品大體は通せんことを乞はんとす。此記は、當昆蟲研究所員小森氏が、會場瞥見の際の所感を、過日の岐阜縣昆蟲學會例會に演説せし大要にて、固より外部に就ての鑒別は過ぎずと雖ども、また肯綮中し大要にて、固より外部に就ての鑒別は過ぎずと雖ども、また肯綮中の節無きにしてもあらざる可し、但し他に對する遠慮より、岐阜縣の出品は、一も加評せる所あらざりき、これまた已むを得ざる次第なり。

工業應用昆蟲畫報の十(帽子掛)



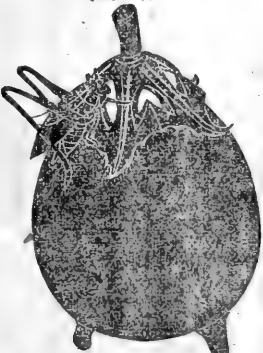
〔和歌山縣 藤枝碩三氏寄贈〕
〔大阪 市 由比昌太郎氏寄贈〕

余は岐阜縣昆蟲學會より出品の昆蟲標本を陳列せんが爲め、入阪の機會を得たれば、序に博覽會場内の各館を一覽せしが、其際瞥見の昆蟲標本に就て、記臆の概要を紹介すべし。但し是は三月一二の兩日間入館して、會務從事の傍ら、彷徨通觀せし所に係り、且つ閉館當日の事さて、なほ陳列を終らざる縣も多く、或は陳列して未だ出品人の名刺を掲げざるもの、或は高度に安置せし爲め、定かに其優劣を知り難きもの等ありしかば、固より精密の觀察を遂げ得へくもあらず。

●農業館 昆蟲標本の最も多く陳列せられたるは、農業館即ち第一部第八類に

して、諸官廳の出品を除くも、なほ二百餘點に上ることは、既に前號所報の如し先づ正門を入り、右折すれば、蓋に北海道廳の陳列場あり。北海道は内地とは風土も異なり、且つ昆蟲の研究者もあれば、種々豫想を描き居りしに、更に其事無かりしより、何やらん物足らぬ心地せられき。其より、青森縣を過ぎて岩手縣の區域に到れば、膽澤郡農事試験場の出品に係る有益昆蟲標本、有害昆蟲標本各一箱あり、次に島善平氏の出品有益動物標本一組(一箱?)あり。何れも感服すべき程の

工業應用昆蟲畫報の十(香爐)



(大阪 市 由比昌太郎氏寄贈)

(標訂) 二十の報請蟲昆用應業工



(贈寄氏男芳中田 市京東)

價値無なきものにて、特に島氏の出品に、有益動物として、中にノコギリムシ、シモフリズズメガ、ミンミンゼミ、ハルゼミ、ナツヂゼミ、オホザウムシ等を配列せしは、何の意なるやを解し難かり。外には晴山立郎氏の有害蟲標本一箱と、稗貫郡農會の昆蟲標本一組(二箱?)ありしのみ。宮城、福島、秋田の諸縣を過ぎて、山形縣に移れば、都て十六箱あり、裝飾等は心をを用ゐたるやう覺へしも、其出品人名も將た標本の種別も、之を知るに由無ししを以て、點數、意匠共に不明に屬せり。併し被害植物をも添へたる害蟲標本らしきもの六箱と、益蟲類を集めたる五箱、分類標本とも見得べきもの五箱ありしは確かにて、何れも是が云ふ缺點の少なきより評言を下せば、先づは無難のものを見て支へなからん。それより北陸區に入れば、新潟縣農事試験場より、二化生螟蟲標本、サンセウラムシ標本各一箱、二化生螟蟲蛾誘殺效對照表、及び成蹟表、二化生螟蟲の發育式、サンセウラムシの發育式、二化生螟蟲及びその寄生蜂圖解、サンセウラムシ圖解等を、掛圖となしての出品あり。富山、石川の二縣を過ぎて、福井縣に抵れば菟蟲驅除器二種、誘蛾燈五種の出品あり。斯くて長野、群馬、茨城の三縣を過れば、農商務省農事試験本場の陳列場の前に出づ、その中、昆蟲の陳列區は約十五六坪にて、東面北面に農作物害蟲十九種(二十種の内一種は田鼠)の圖解を扁額として掲げ(一面は約三尺に四尺大)下に實物標本を配置し、前に説明書を添へ、西南隅には苗代田に於ける螟蟲驅除の圖、三化螟蟲荊株螟取の圖を掲げ、下に二化生並に三化生螟蟲の發育模型を並置し、又苗代田及び本田に於ける浮塵子驅除の圖(各圖四尺に六尺大)を掲げたる下にはロメトビウナカ、ツマガロウナカの發育模型を示し、更に南面には、果樹の貝殼蟲驅除に青酸瓦斯薰烟を行ふの圖及び噴霧器にて蚜蟲、黴菌等を驅除するの圖を掲げ、下には所要の器械及藥品を示したり。而して中央には六角形の巨柱を立て、各面に貝殼蟲、横紋蟲、葉蜂、寄生蜂等の分類標本を配列し、又稻、藍、煙草、甘藍、胡瓜、桑樹、茶樹等の模型を作り、これに二十五種の害蟲を配當して、寄生加害の状態を知らしむるに便せり。有繫に國費を以て裝成せしだけ、其用架に、其説明方法に、覽者の注目を惹くに足れり。之に

次きて農務局製茶試驗所の出品に係る茶樹の害蟲(六箱)あり。次に農商務省東京蠶業講習所の出品あり、其品目は蠶兒の營繭模型、蠶蛆の經過模型、各種の病蠶模型、蠶體の發育順序(ホルマリン浸)、各種の消化試驗成績等の陳列あり。それより山梨、栃木の二縣を経て千葉縣に到れば、昆蟲標本三箱と捕蟲器、誘蛾燈の陳列あり。東京府、神奈川縣を越えて静岡縣に到れば、周智郡の出品にて

普通の昆蟲を害蟲と益蟲とに分類せしもの凡て二十四箱あり。但し粗大なる三箱と、害蟲標本六箱とは、出品人名不明なりしが、後者には被害植物をも添へて害蟲七十種を藏め、其排列製作共に可なるものなりき。次に愛知縣瀨美郡出品の害蟲標本六箱は、被害植物を添へ、且つ整理考案其宜しきに適ひ、傍目には優者の一に加ふべきものにて、外に服部松之丞氏の出品に係る標本四箱ありき。滋賀縣は農事試験場より名物の浮塵子の標本、並に被害稻の標本、寫眞を始めとして滋賀縣令規定の農作害蟲十七種(六箱)を出陳せり、可否は言はざるべし。岐阜縣は總て百十四箱にして、出品人は十五名なり、斯く多數の出品ありしより、其陳列面積に窮し、遂に之を以て門を造りたるは、蓋し艱難爾を玉にせしものか。それより順次進めば三重、和歌山の二縣よりは誘蛾燈の出品あり。徳島縣よりは農作物害蟲豫防方法書といふものを出品せしかど、主人公を知ることを得ざりし、又標本として本生良三氏の二箱、富本次郎氏の二箱ありしも、老練の痕跡を認めざりき。香川縣の十七箱中、赤澤新吾氏のもの二箱は稍可とも謂ふべく、其他には縣農事試験場より二化生螟蟲調査表、香川縣三化螟蟲分布圖等を出品せしのみ。愛媛縣よりは、愛媛縣害蟲發生圖と題する六尺に五尺もあらんかと思はるゝ大幅に、二化生螟蟲、三化生螟蟲、横波蟲、椿象、地蠶の發生及び加害の多少を設色點線を以て示したるものと、稻害蟲三化螟蟲驅除法(一冊)の出品あり。それより高知縣を過ぎて、九州區に入れば大分、熊本、北海都郡農會より、害蟲標本九箱、益蟲標本四箱の出品あり、標本は成蟲のみにして、益蟲の部にキマハリ、ハムシ類等の害蟲を混入せし目障りの種子なりき。鹿児島、沖縄、宮崎、長崎、佐賀、熊本の諸縣には別段記すべきものなく、福岡縣に入れば、嶺要一耶氏出品二十四箱あり、大體より云へば、優劣品の一たるに違はざるも、其一植物に數種の害蟲を添へ、且つ配列と整理とを缺きは確かに瑕瑾とすべく、恰かも害蟲群棲圖に對するやの感ありて、蝕害の自然的状態を示すものとも思はれざりき。特に同一植物に嚙桑と白點天牛とを宿らしたるが如き、又標本箱の不完全にして、保存には如何にやと危ふまじむるが如きは、聊さか惜むべき點なるべしと雖も、其多種なるを、稍製作に注意せしとは、此標本の長處たらんか。次に高千穂宣廣氏の出品に係る害蟲標本十箱あり、可否の評言は預かるべし。次に福岡縣農事試験場よりの害蟲圖解十二枚、並に稻、柑橘、藍、粟、煙草の摸形に對する二、三化生螟蟲、アゲハノテフ、アノズムシ、アハノアチカメ、タバコノアナムシ等の害蟲標本あり。其意匠は、本家の農商務省農事試験場の出品と何の變る所も無けれど、唯彼は全國を對手とし、此は一地方を示したるの差あるのみ。山口縣にては、田口仙三耶氏に稻の莖切缺の出品あり。廣島縣に隣れる岡山縣には縣立農學校の出品として、昆蟲標本十六箱あり。他の十二箱には、採集用紙をも添へたれど、其製作の不完全なる點より想像すれば、恐らく小學兒童の採集品なるべし(出品人名並に名稱等不明)。同縣岩崎安直氏出品の園藝加害動物標本は、菓子箱大の粗末なる小木函に、十數種の昆蟲を入れたるのみなり、名實の適はざるを笑ふ人も多かりき。島根縣の部には、誘蛾燈二個を陳列し。鳥取縣の昆蟲標本二箱は、製作こそ稍丁寧にしたれ、配列亂雜にして頗ぶる其當を得ざりし、製作者と出品人とは異人なるが爲めか。兵庫縣にも標本十箱ありしが、出品人並に名稱等を知ることを得ざりし。併し其製作、配列等より考ふれば、可なり苦心を積みしもの

なるべし。外には倉垣吉藏氏出品の驅蟲器といふものありき。大阪府藤戶基氏より害蟲標本五箱、南河内郡農會より蟻蟲驅除方法、及び成蹟品を出品せしが、その成蹟品の採取螟卵を以て巧に造れる額面なりしも面白く、且つ幼蟲を圓徑七寸許、高一尺二、三寸の二大玻璃瓶に滿盛せしも驚くべし。京都府には、都合十七箱ありしも、是亦出品人を知ることを得ざりき。

●林業館 此館には昆蟲標本の出品少なく、僅かに岐阜縣よりの五箱と、山林局より出品の参考品あるのみ。山林局のものは總て八十四箱にして、多く種類を集めたれば、参考に資すべきの價値はあれど、技術上より云へば、背て賞するに堪へず。

●水族館 此館また昆蟲標本の出品無く、唯青森縣、秋田縣、兵庫縣、東京府、京都府等より蟲態模擬の釣鉤を出品せしもの數種ありき。就中青森縣の出品に係る蜻蛉の餌鉤は、中々の上出来なりし。

●教育館 此館に入りし時は、時間限制せられて、匆忙裏に觀覽を遂げたれど、早已に胸臆に存する事項も少なし。先づ南口より入り右に折れて、美術學校、内務省、文部省等の出品陳列場を過ぎ、岐阜縣陳列場に到れば、出品人員八名にて、點數は八十一箱あり、去れど添出品の多かりし爲め、概むれ架上に配列せられたれど、衰眼を以てしては、到底微細なる點まで、批判を加ふることはざりし。次の愛知縣には愛知農林學校の出品に係る農林業教育標本中に、害益蟲標本二箱あり。大分縣に三箱、鹿兒島縣にも四箱ありしと覺ゆ。大阪府早川熊次郎氏出品七箱は、兩面硝子の函にて、一面には昆蟲をバルサンゼム()にて糊け、昆蟲の背腹を見得る様になせしもの、製作は可なり。兵庫縣有馬農林學校の出品せる害益蟲標本は言はぬが華なるべし。滋賀縣大津尋常高等小學校の出品せる理學科教授用昆蟲標本は、庭園モドキの繪畫に、十數種の昆蟲を配置したるもの、其拙劣は言ふまでもなし。鳥取縣の出品中に分類標本三箱あり。彼の岐阜縣大垣町西濃印刷株式會社が、全力を擧げて調製せる邦産六種の蝶類は、實に此館内にあるなり。

●工業館 此館を始めとし、参考館、美術館をも巡覽したりしが、昆蟲を美術工藝上に應用したるもの、亦數點ありき。去れど多くは模樣的支那一流の形式を具備せるもの、若くは製作者の腦中にて發見せし新種變種の類のみにて、實物を摸範せしもの、又は寫生畫より摸樣化せしものにては、遺憾乍ら觸目せざりき。

●色と昆蟲との關係

物の色と昆蟲とは、親密の關係を有するものにて、蚊帳地の色合により蚊

の侵襲も多少あるは、その適例とすべきなり。先年、イタリー及びフランスの二國に於て、養蠶室の外に色硝子を用ゐる時は、結果頗ぶる良好なりとて、特々好んで紫色を賞揚せしより、本邦にても東京蠶業講習所に於て、去る三十三年以來これが試験を繼續せし、前二國のとは全たく其成蹟を異にして無色のもの第一に居り、黄色、紅色、橙色これに亞ぎ、紫色と綠色のものとは、非常の不結果を來たし色素の暗黒に近づくと從ひて、愈々昆蟲に影響あることを確めたるが、其原因は就ては更に研究中なりと云ふ。昆蟲研究者は、深く注目すべき事ありと思はる。

●全國害蟲驅除講習修業生同窓會

前號に所報の如く、全國害蟲驅除講習修業生の同窓會は、今月廿八日午後一時より大阪市天王寺清水八百松樓に開會の都合なるが、同日は北陸、九州、東京附近よりの申込も多ければ、これに京畿地方の會員を合せ少くも百餘名に達すべく、特は斯學界に關係を有する名家數名の臨場を肯へるあり、又大阪新農報社の由比呂太郎氏が、百事其間を斡旋の勞に當らるゝ約ある等、諸事頗ぶる圓滿に進行したれば、當日は意外の盛會を來すべし。

●蟲の人の消息

松村松年氏は、獨逸より歸國以來、舊よりて北海道札幌農學校に在ることなるが、同校の紀要を公行の際、邦産泡吹蟲科〔有吻目、横蟲族〕の研究を發表せんとて、目下採筆中なりと。桑名伊之吉氏は、歸國後九州昆蟲學研究所を佐け、且つ其專攻學科を研修中なりしが、何か身上己むを得ざる都合あるやにて、近々異動を生ずるに至るべしとの事。岐阜中學校教諭長野菊次郎氏は、昨年来蛾類を研鑽中なりしが、遠かふぬ中に、東京の某校に榮轉すること、成りたれば、來月初旬、新任地へ赴ある、由。農商務省農事試験場技師中川久知氏は、今回其郷里より代議士に推選せられたるのみか公務に服し居りては、兎角研學上思はしからずとて、過般己辭意を漏らしたりとも云へり。在米國桑港の名和梅吉氏は、其後健在にて、斯學の研究をなし居れるが、渡航以來採集せし貝殼蟲數十種を、去月二十日附にて送り越せり。

●本號口繪の説明〔鋸蟲と深山鋸蟲〕

本號の巻首に挿入の第三版圖中の〔A〕は、ノコギリムシにして、〔B〕はミヤマノコギリムシなるが、符號の〔1〕〔2〕〔3〕を有するは、何れも雄蟲にして、〔4〕は雌蟲なり。その斯く雄蟲に於てのみ上顎の發達したるは、全たく雌雄淘汰の結果にして、其軀の發育不十分なるものは、從ひて上顎の發達も不十分なるを見る。他に此種に類似のものは、クハガタムシの各種、カプトムシ、及びダイコクムシの各種にて、是をた常より前種同様の妙理を存せり。而して此圖中〔A〕と〔B〕との雄蟲は、輒ち區別し得ると容易なるも、其雌蟲に至りては、蓋し之を難んず。たゞ〔5〕即ち其足部を於て、前種には樺色を帯ぶるが故に、分類裝成の際の特徴とすべし。

(錢銅古) 三十の報畫蟲昆用應業工



(贈寄氏郎太福口山 市都京)

● 千蟲高多錄 (第二)

最近の通信、公行の諸報告より、昆蟲界の事項を抄録すること下の如し。

○ 岩手縣の南部にては、蝶をテビラ、テビラコ、又カツカベとも呼び、北部にてはテークラ、テীগアラと呼ぶ、さば同縣小山幸右衛門氏の報道する所なり。方言ほど尊くして、解せぬものは無し。

○ 鹿兒島縣の螢狩の童謡を聴くに「ホタイ、ホタイ、コツチケ、ライガエハ、クツサレエ、オイガエハ、ヤナギノシタンヨカエ、ホータイ、ホタイ、ホタイ」と歌ふとは同地林俊房氏が通信の一節。

○ 静岡衛戍營に在りし一友の曰く、去年夏秋季に臺灣歸還兵の齎らし來れる臭蟲營内に發生し、爲に洒掃驅除法を履行しき、是れ其紀念なりと、笑て一頭を惠まる。さば中遠の神村直三郎氏の所報。

○ 群馬縣前橋附近に於ては、昨年秋季に桑尺蠖番殖して、被害樹頗ぶる多かりしが、春來の暖氣のため、越冬の幼蟲の出現するもの多く、養蠶家は何れも眉を蹙めて、今年の桑葉不足を歎き居れり。

○ 高知縣長岡、香美、安藝三郎の町村吏員及び警察吏五十餘名、害蟲驅除豫防講習を修了して修業證書を授かる、次で吾川、幡多、土佐、吾川の四郡また各々三日間の講習會を開く。美學賞すべし。

○ 宮崎縣廳訓令を發して、農作害蟲は舉動遲鈍の冬間に驅防すべきものなることを示し、且各郡に通牒して、縣廳員の指導監督の下に警察吏農會員等と戮力協定、嚴に之が實行を期すべき旨を命す。

○ 奈良縣高市郡各級農會は、害蟲驅防の一策として、先づ苗代期より移植期間に、螟卵蛾の買收を行はんとす。其買收率は五卵塊二厘十蛾二厘にして、五日毎に、現金若くは買收券と引換ふとの事。

○ 新潟縣廳螟蟲の大害を知り、將に細密の調査を加へんとす。即ち各郡を通じて弘く栽植する晚稻の藁一把を取り、其莖中に潜伏の螟數を算し、之を昨年調査を施せる統計に比較するにあるなり。

○ 兵庫縣飾磨郡に於ては、郡令を布きて畦畔の雜草焼却を命す、注意頗る多とすべし。惟麥田と紫雲英田に潜伏の害蟲多々あるを奈何せん。寧ろ飜つて其根本を絶つるの策を立つるに若らざるなり。

○ 福島縣福島町に於ては、先頃盛んに栗毛蟲の蛹繭な買收せしものあり。買價は毎百目三十五錢にして、その内實は神戸某商店の依頼に係り、内外國人に轉賣して、紡織絲の原料に供せんとするなり。

○ 山口縣下佐波郡、昨年螟害除却に熱中し卵蛾の買收を行ふ。爲めに費す所の金額は六百拾參圓にして、捕蛾百三十八萬四千餘頭、採卵三百二十五萬二千餘塊、外になほ百八十萬餘の卵蛾を獲たり。

○ 徳島縣名東郡害蟲驅除豫防方法を講じ、郡内各大字に數名の驅除委員を設け、又小學教員をして、昆蟲思想の注入及び實地指導に當らしめ、双々相俟て根絶を期せんとす。蓋し時務に適へるもの。

○山梨縣中巨摩郡農會、今年より小學兒童に、捕蛾採卵せしめんことを教育會に交渉し、異議なく其希望を容れらる。久しく福音に接せざりし同郡も、是より視るべきの好果を擧げん乎、勉めよや。

○長崎縣にては、舊臘來昆蟲の巡回講話を開始し、既に西彼杵、壹岐、北松浦の各郡を了へ、今や北高來。南松浦の方面に及ばんとす。是は一回の講話に三日を費やし、之を郡内樞要の地に開くもの。

○岐阜縣郡上郡上保村に於て、雪折の桑枝より姬象蟲十五六頭を發見し、爲に同蟲の蒞桑以外にも加害し、及び郡上郡に發生の事實を確め得たり。二月廿六日附を以て鹽田健藏氏より通報ありき。

○全國害蟲驅除特別講習會の開講式 豫期の如く、本月十日午前第九時を以て、第十五回全國害蟲驅除講習會開講式を當昆蟲研究所内に於て興行せり、來賓は岐阜縣農學試驗場員、縣農會理事

千葉縣杉谷彌之吉氏〔第九回全國害蟲驅除講習會修業生〕等にして、先づ名和昆蟲研究所長の開會の辭に講習中の心得の訓示あり、次よ來賓林正一氏、杉谷氏の祝詞演說あり、次に各府縣よりの祝詞祝電の披露あり、次に講習員總代山形縣長岡安吉氏の答辭ありて、其式を終へしが、當日まで來着せし會員は一府十九縣の出身四十名なり。因に同會第二回の修業生清水藏氏は、助手として盡力中なり。

○害蟲驅除の獎勵 京都府天田郡曾我井村農會に於ては、昨年螟卵採取に従事せる學童に對して、去月廿七日の慰勞褒賞授與式を執行せり。當日午前には笹尾尋常小學校に於て三十二名に授賞せしが、午後は堀尋常小學校に於て百三十五名に授賞せり、其際農會長、技手、郡書記等數名臨席し學校長以下共々訓諭を加へて獎勵せしが、今年度に於ても之を行はんとて、名和昆蟲研究所發行の害蟲圖解により、各種の害益蟲を説明し、目下は桑樹の枝尺蠖を驅除中なり。〔三月三日附、菅沼岩藏氏報〕

○工業應用昆蟲畫報〔第三報〕 本號に掲載の應用昆蟲畫報の〔十〕は、近ごろ發賣せる白銅製の帽懸にて、全體を蝶形に象どりしもの。〔十一〕は、青銅製の香爐にて、茄子に直翅類の昆蟲を配したるものなるが、其稍實物に近きは、富山縣工業學校の製作に係れるが爲めかと知る。〔十二〕は、承塵裝飾用の釘隠にて、是また地質は青銅なるが、製作は尾張名古屋市ありと云ふ。〔十三〕は、何れも銅錢の搦摸なるが、其中イはトイチダマ〔福一玉、穴一玉とも云ふ〕と稱し、古へ鏡師などの鑄造せしものにて通用錢にはあらずしも、錢面鳳子蝶を表はせしもの。次のハ〔嘉友〕は支那宋代の鑄錢にて、ロ〔信香〕は其背面を示せるもの、是は専ら祝賀用に充てしものなりとか。

○水棲昆蟲の出品 當昆蟲研究所出品の一として、左記の水棲昆蟲十五種二百餘頭を、第五回内

國勸業博覽會附屬水族館〔堺市大濱公園〕に陳列せしが、扱之が送附方法は、未だ多く經驗を有せざるより、種々苦心の末、試みに鐵葉空罐に水苔及び藁稈を填裝し、其中に蟲類を放ち、之を小包便に托したるは、去月廿五日なりしに、同廿七日附を以て、無事到着の報を得たれば、更に本月八日に至り、二十餘種數百頭を同一手續よりて送附せむに、此回も良結果を得たる旨の報告も接せり。想ふも水棲昆蟲は、今後大に研究せらるゝに至らんが、斯る場合に送運の方法を知らざれば、可惜、其用を全うせざる事なしとも限らず、斯學研究者は、宜しく研究すべき事ありと思はる。〔ナ、ヤ、記す〕

(甲翅類)

(半翅類)

(羅翅類)

●岐阜縣昆蟲學會記事

岐阜昆蟲學會第五十一回例會を、本月七日午後當昆蟲研究所内に開會

せしに、揖斐、可兒、安八等の郡部よりも、數名の會員の出席ありて、先づ小森省作氏の、第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本觀覽談あり、次は副會長名和靖氏の、博覽會出品昆蟲標本に對する所感を併せて、水棲昆蟲の出品始末、新式寫生用昆蟲標本に關する説話あり、終りに特別會員長野菊次郎氏の昆蟲蛹化の状態、方法より學者の研究すべき要點に就ての談話ありて、五時頃散會を告げたり。因に云ふ、次會は四月四日を以て開く事なるが、恰かも長野氏の新任地への出發は、其翌日頃に當れば、席上別意を表する爲め、何分多數の會員の參集を望む趣むきなり、悉しくは廣告欄内あり。

●昆蟲水曜會

當昆蟲研究所員の催しに係る同會の近況を報せば、去月二十一日の會は、名和愛

吉氏が梅毛蟲卵塊附着の樹枝調査、同月廿八日の會は、石田和三郎氏が最近刊行の諸報告より、數十種の昆蟲記事を摘採して、之を研究問題に供せる、本月七日の會に、高橋喜男氏がカハゲナの實驗談、棚橋昇氏が採集上の注意談、森宗太郎氏が蚊の飼育談等は其主要のものなり。

●昆蟲標本陳列館の參觀人

昨二月中は、當昆蟲研究所の標本陳列館を參觀せし人員は、總

計二千五百三十六人にして、其中最も多かりしは、二十七日に於ける二百五十三人、最も少かりしは十三日に於ける四十九人にして、一日平均百〇五人強に當り、重なる參觀人は、理學士岩川友太郎氏を始め、群馬、長野、大坂、其他各府縣の實業家、操觚者、教育家等なり。〔雜報、三月十一日脱稿〕

●注意

記事輻輳のため、本號には紙數四頁を増し、なほ餘れるは、之を次號に譲れり。

名和昆蟲研究所長名和晴著

第六版 一 薔薇の 株 昆蟲世界 全

定價貳拾錢 郵稅貳錢 (郵券代用一割増)

通俗益蟲集覽 第一輯再版 (説明書附)

定價 (郵稅共) 金貳拾貳錢 (同上)

昆蟲圖說 全一冊 (再版)

定價 (郵稅共) 金壹拾七錢 (同上)

- 農作物害蟲標本 壹組 (桐箱入解稅附 金四圓五拾錢)
- 農作物益蟲標本 壹組 (桐箱入解稅附 金參圓五拾錢)
- 教育用昆蟲標本 壹組 (桐箱入解稅附 金四圓五拾錢)
- 自然淘汰標本 壹組 (桐箱入解稅附 金五圓五拾錢)
- 雌雄淘汰標本 壹組 (桐箱入解稅附 金五圓五拾錢)
- 氣候變形標本 壹組 (桐箱入解稅附 金五圓五拾錢)
- 昆蟲發育標本 各種 (拾錢)
- 山林園藝害蟲標本 各種 (拾錢)
- 昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年三月 名和昆蟲研究所會計部

昆蟲廻轉器頒與廣告

この昆蟲廻轉器は、昆蟲の翅色と光線の關係を示さんが爲め、數年前考案せしものなりしも、適當の製作者に乏しかりしより、弘く頒與するに至らざるにしが、今同特別調製の依頼を受(昆蟲廻轉器)を以て、拾餘個を製作し、特世の希望者(器)に分たんとす。雌雄淘汰の原理を説き、天地自然の妙用を知らしめ、これを試せば、少なくも此種の益處を感ずる可からざるべし。一冊の價は、大圓とす、別送費を要す。



岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◎害蟲圖解未刊の分豫告

- ◎ 稻の害蟲イナゴ(稻蚤)
- ◎ 稻の害蟲オホズキムシ(大螟蟲)
- ◎ 稻の害蟲セジロウンカ(背白浮塵子)
- ◎ 稻の害蟲ヒゲナガアブ(長角虻)
- ◎ 桑樹害蟲クハハマキ(桑葉捲蟲)
- ◎ 桑の害蟲カヒコノウジバ(蠶蛆)



- ◎ 松樹害蟲マハケムシ(松蝨)
- ◎ 藍の害蟲マキノコ(象鼻蟲)
- ◎ 粟の害蟲マハノゾキムシ(粟捲蟲)
- ◎ 胡麻害蟲メンガサツゾイ(胡麻蝨)
- ◎ 楊梅害蟲ハンノキケムシ(楊梅蝨)
- ◎ 櫻の害蟲カミキリムシ(天牛)

發行所

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

- ◎ 梅樹害蟲ウメシヤクトリ(梅尺蠖)
- ◎ 稻の害蟲トビロウンカ(褐色浮塵子)
- ◎ 稻の害蟲クロクサガメ(黒色椿象)
- ◎ 桑樹害蟲アラハマキムシ(青色葉捲蟲)
- ◎ 桑樹害蟲クハゴ(野蠶)
- ◎ 蔬菜害蟲モンシロテフ(菜の螟蛉)
- ◎ 蔬菜害蟲サルハムシ(菜の葉蟲)
- ◎ 大豆害蟲ヒメコガチ(姫金龜子)
- ◎ 梅樹害蟲ウメケムシ(梅蝨)

●豫約代價

● 圖解は一回一冊です。● 壹冊の代價は、
 百圓以上は、送費を別送致す。● 郵費は別送致す。
 ● 郵送代金は、前払いにてお願いいたします。● 宛先不明の場合は、
 岐阜市京町 名和昆蟲研究所 宛にお願いします。

- ◎ 梨樹害蟲ナシノケムシ(象鼻蟲)
- ◎ 梨樹害蟲ホシノマキ(梨葉捲蟲)
- ◎ 果樹害蟲ノラムシ(刺蝨)
- ◎ 藍の害蟲マキノゾキムシ(藍の螟蛉)
- ◎ 粟の害蟲マハノゾウムシ(粟蝨)
- ◎ 里芋害蟲セフチスズメ(烏蠅)
- ◎ 桐樹害蟲シモフリスズメ(桐蠅)
- ◎ 果樹害蟲ホシカミキリ(白斑天牛)
- ◎ 果樹害蟲ドウガチブンブン(金龜子)

雜誌 昆蟲 世界 合本 出來 廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第六卷(昨年分)出來

西洋綴
金文字
入美裝

● 昆蟲世界第二卷 五部

右は明治三十一年發行の分(但合本にあらず) [自第拾貳號] 至第拾六號

● 昆蟲世界第三卷合本壹册

右は明治三十三年發行の分 [自第拾七號] 至第拾八號

● 昆蟲世界第四卷合本壹册

右は明治三十四年發行の分 [自第拾九號] 至第拾四號

● 昆蟲世界第五卷合本壹册

右は明治三十五年發行の分 [自第拾壹號] 至第拾貳號

● 昆蟲世界第六卷合本壹册

右は明治三十五年發行の分 [自第五十三號] 至第六拾四號

其他は定價の通り) 郵税金貳拾錢

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝訂して閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

專賣特許 第九八六號 莖切器發賣廣告

螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大にして之れか驅除を爲さんとすには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かざるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖も未だ完全の良器なく止むを得ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕ふのみならず全く螟蟲の潜伏せる稻莖を根底より刈去ることを得ざるが爲め害蟲驅除の目的を達する能はず空しく實は慨嘆も堪へざるなり發明者多年茲に意を籠めて此器を考ふる一良器を案出せり此鎌は先づ把手(ハ)を握り而して切取らんとする稻莖を左手よて握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間(イ)に當て鎌を少しく前方に押すを以て然るときは遮匙(ロ)は彈力性あるを以て外方に開き稻莖を押し入るへし一度押し入れたる後は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は挿入する事なし此に於て鎌を根底迄押し入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害せず容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の良器にして静岡縣農事試驗場等の協賛を博せり

新發明器切莖の圖



定價一挺金拾錢；農會等の共同御用は特別割引；製造元 静岡縣小笠郡比木村 山本勸藏

發賣元 同縣志太郡焼津町 吉野寅之助 縣下一手販賣所 岐阜市京町 高橋喜之助

大懸賞付薔薇苗販賣廣告

本園今回有感薔薇専門を以て好花諸彦と樂しみを共にせんと欲す今や開業に際し聊か祝意を表する爲左記大景品を附し本園薔薇苗の精良と廉價を世に知らしめんと欲す景品番號は三千枚限り進呈す

▲箱入り 郵税共壹圓

右薔薇苗は却賣同様廉價にして一組に付景品番號一枚を呈し景品番號三千に滿數の上は本誌及び大農園に廣告し其節定むる日の官報天氣豫報の字數より百番目を一等とし以下千番目に二等景品を附し百番毎に三等景品を呈し各十番毎に四等景品を附し最公平ある法により本誌愛讀者及び帝國農家一致協會員に限り景品を呈す

尙百番迄は一組の内一本五拾錢の苗一種入れ送る

●壹等 寫眞器 一組六拾圓 一人

●貳等 寫眞器 一組貳拾五圓 二人

●參等 細霧注射器 一臺七圓五拾錢の品 廿七人

●四等 絹手巾一枚宛 二百七十人

右の通紀念大景品を呈し特別廉價に精良種苗を供給す諸君此機に乗じ續々申込あれ
本園目下栽培薔薇種類二百十餘種

兵庫縣武庫郡 須磨村 薔薇園

臨時刊行 第一號編
名和昆蟲研究所編輯部編

增訂 再版 日本昆蟲分科表 全一冊

定價 郵税共金貳拾八錢(郵券代用一割増)
右は四百餘種の邦産昆蟲を收載して分類分科を示したるものなり

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

本月廿四日より廿九日まで、大阪出張中は、同市東區西高津中寺町十番地久成寺むし屋旅店の出店に滞在罷在候間、當昆蟲研究所同窓會員諸君并御用の方は同處へ御來車被成下度候

名和昆蟲研究所長 名和 靖

岐阜むし屋旅店廣告

今回昆蟲學研究家各位の御便利を圖り、第五回内國勸業博覽會開會中、出店を大坂市東區、西高津中寺町、十番地久成寺内に設け特別低價を以て御休宿の御用に應じ候間續々御光臨の程奉希望候

大坂市東區、西高津、中寺町十番地、久成寺

岐阜市 西野町 蟲屋旅店 大出店

●硫曹肥料を稲作に用ゆれば第一は米質を宜しくし且つ頗る收穫を増すべし一反歩は付五六斗より一石二三斗を増す之を舊肥料を用ひたるものより比すれば見掛も遙に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀あり舊肥料を用ひたるものは之に反したとへ見掛は異ならざるも米質悪し又籾の收穫は同じくも玄米となし春減少なく飯の相違あり之を舂きて白米となすに硫曹を用ひたる分は春減少なく飯の炊くに頗る炊殖すべし一例之は舊肥料の米は水一升米一升あるに硫曹の分は米一升水一升二合ならでは飯に適せず即二割以上炊殖の相違あり●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上之事柄に注意し之を實驗し其效用の偉大なるは驚くべし●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれば有羊熱帶地方通過の際多く腐融すべし●第一(過燐酸)を稲作に用ゆるは一反歩に三貫目より五貫目迄を舊肥料(大豆粕、腐肥、油滓、堆肥、厩肥等)に混交使用すべし●硫曹肥料を二施すあれ

登 録 商 標

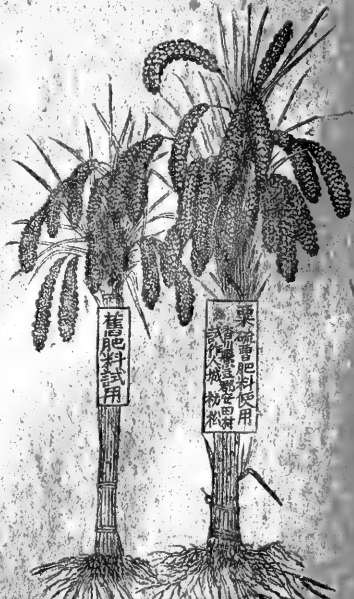
硫曹肥料

は第八號を最も適當とす一反歩に十貫目乃至十五貫目を二施す分れすべし(堆肥は何れも施すを宜しとす)●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷、麻、蘭其他陸稻、粟、砂糖黍、桑并野菜物、藥物等に施して其效實は驚くべきものあり●第五回勸業博覽會は硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金參百圓づゝ銀賞牌には金百圓づゝ一等賞牌は金五拾圓づゝ二等賞牌には金貳拾圓づゝ三等賞牌には金拾圓づゝを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農産物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麥及德島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を德島縣仁井輝藏氏へ銀壹(二ツ重)壹組を贈呈せり●硫曹肥料の明細并に見本等は御申越次第贈呈すべし

大附西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

電話西四一九番

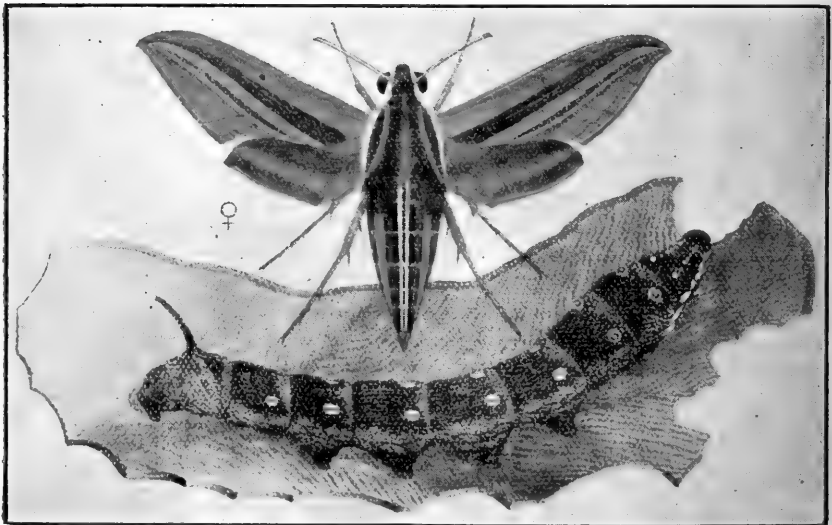


Chaerocampa oldenlandii Fab. (Sesuji-suzume)

By K. Nagano.

Closely allied to *C. japonica*. Forewings grey-brown with greenish; a black discal dot; a yellowish-grey fascia from middle of dorsum to apex, preceded by blackish stripes and followed by blackish and yellowish-grey stripes. Hindwings blackish-brown; a wide yellowish-grey subterminal fascia. Expanse 68-74 mm. Head and thorax greenish-brown, suffused yellowish-brown with whitish border. Abdomen greenish-brown with two silvery stripes on dorsal.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo. May, June, July. Larva black or dark greenish-brown, partly purplish; anterior edges of 4-11 seg. yellow; a subdorsal series of yellow and white spots on 1-3 seg., and 4, 5 seg. with round black spots encircled with yellow, and 6-10 seg. with round spots mixed with red, black, pale blue and yellow. Horn black, apex white: on *Colocasia antiquorum*, *Pinellia tuberifera*, etc. July to September.



●岐阜縣昆蟲學會員に急告

一 本月廿八日を以て、名和昆蟲研究所出身者の同窓會を大坂市に開催に付、本會員は博覽會出品の昆蟲標本參觀かた／＼可成御繰合せ同窓會より御出席相成候様致度候

一本會の爲め一方ならず盡力被下候特別會員長野菊次郎君、來月初旬東京市に轉任に付、四月の例會席上を以て、別意を表し度候間、同日は遅參なく御來會相成度候

右二件御注意まで廣告致候也

三月十日

岐阜縣昆蟲學會幹事

●岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

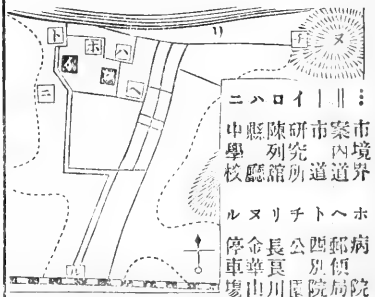
岐阜縣昆蟲學會は規則第三條より、依り晴雨に關はず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も每會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内 岐阜縣 昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

- 第五十二回月次會（四月四日）
- 第五十三回月次會（五月二日）
- 第五十四回月次會（六月六日）
- 第五十五回月次會（七月四日）
- 第五十六回月次會（八月一日）
- 第五十七回月次會（九月五日）
- 第五十八回月次會（十月三日）
- 第五十九回月次會（十一月七日）
- 第六十回月次會（十二月五日）

（明治三十年九月十日内務省許可）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）



●名和昆蟲研究所案内

名和昆蟲研究所の位置は上野の如くにて停車場より僅に十餘町養蠶室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館（五間、十六間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ
岐阜縣岐阜市京町

●本誌定價並廣告料

壹部 郵税共 金拾錢
壹年分拾貳部郵税共 金壹圓八錢
（注意）本誌は總て前金よ非れば發送せず
●爲替拂渡局は岐阜郵便電信局 ●郵券代用
●は五厘切手にて壹割増とす
●廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付金拾錢とす

明治三十六年三月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
（岐阜縣岐阜市京町）

發行所 名和昆蟲研究所

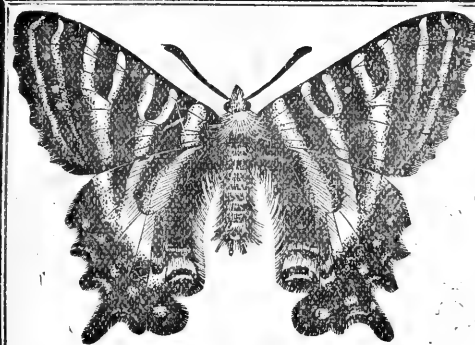
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
編輯者 同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸
印刷者 同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸

不許轉載
名和梅吉
小森省作
河田貞城

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

(四月十五日發行)

(每月一回十五日發行)



**THE INSECT
WORLD:**
A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY **Y. NAWA.**
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第六拾八號

(第七卷第四册)

目次 (禁轉載)

●竹節蟲の種類 (石版圖)

●學說……………一頁

●岡田氏の採集(寄贈)に係る貝殼蟲種(續)桑名伊之吉

●竹節蟲科に就て……………名和 晴

●動物に對する森林の保護……………岸部易太郎

●講話……………一四頁

●第拾五回全國害蟲驅除特別講習會員の五分時演說

●博覽會出品の昆蟲標本(續) 小竹浩○六足蟲彙報

●(卯の巻) 長野菊次郎○食蟲動物の餌食 林壽祐○

●昆蟲應用の釣魚法に就て 高橋徹一○昆蟲地名

●田村晴耕農夫○泥貢蟲の冬期潜伏箇所に就て 中浦

藤吉

●通信……………二四頁

●學童の害蟲驅除成績表の出品(續) 田中房太郎○

●岐阜縣郡上郡の蟲報 鹽田健藏○小學兒童害蟲驅除

●成績表 藤澤節太郎○土佐産の蟲報(第九) 武内護

●文○害蟲驅除に關する建議 岡田忠男○三重縣阿山

●郡の昆蟲方言 西岡嘉十郎○昆蟲に關する葉書通信

(第三十報)

●雜報……………三五頁

●作物病蟲害展覽會の昆蟲標本○第十五回全國害蟲

驅除特別講習會○全國害蟲驅除講習會修業生同窓會

●特別講習修業生の姓名○內國勸業博覽會昆蟲標本

●評 寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會規則○紀念昆蟲標本

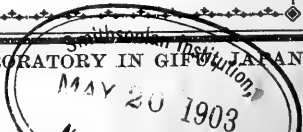
●葉書○昆蟲學者の歸朝○昆蟲標本の審査○温室○蠶

●蟲○岐阜縣害蟲驅除長期講習短期講習會○工業應

用昆蟲畫報(第四報)○岐阜縣昆蟲學會記事

(明治三十三年九月十四日第三種郵便物認可)

(明治三十六年四月十五日發行)



寄贈物件受領公告

- 一金甕圓也
- 一金甕圓也
- 一金甕圓也
- 一金甕圓也

第三回全國考蟲
驅除講習修業

一 半身肖像

第十四回全國害蟲
驅除講習修業

第十五回全國害蟲
驅除特別講習修業

- 一 博覽會農業館昆蟲門寫真三葉
- 一 蝶形額面 一個
- 一 蝶形額面 一面
- 一 蝶模樣陶器(香辛料入)一個
- 一 昆蟲模樣付箱(其他一品)
- 一 蝶模樣付筆筒 一個
- 一 昆蟲模樣封筒(其他四品)
- 一 除蟲御札 數十葉
- 一 新案捕蟲器 一個
- 一 エンヒケラシセミ、ヒョウゼミ、
- 一 ギフテフ其他數種(新潟縣岩船郡產) 一個
- 一 昆蟲模樣付ブリ 貳皿
- 一 飛騨國産笹魚 貳隻
- 一 モンキアゲハテフ其他各種(鳥取縣產)
- 一 ムラサキテフ 二頭

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年四月十二日

名和昆蟲研究所

- 長野縣 星野仙之助君
- 富山縣 稻垣豐治郎君
- 長野縣 清水重輝君
- 靜岡縣 神村直三郎君
- 鳥取縣 岡野庫八郎君
- 香川縣 依田憲五郎君
- 山梨縣 依田憲三郎君
- 京都府 近藤辰三郎君
- 鳥取縣 川崎作市君
- 香川縣 木内久松君
- 大分縣 染矢良右衛門君
- 新潟縣 山田益五郎君
- 新潟縣 飯田弘君
- 大崎市 由比昌太郎君
- 岐阜市 林正一君
- 岐阜市 高森勝治君
- 愛知縣 中村義上君
- 岐阜市 高橋喜之助君
- 大崎市 廣根至宜君
- 靜岡縣 神村直三郎君
- 新潟縣 佐藤榮君

新潟縣 佐藤榮君

- 岐阜縣 森野仁右衛門君
- 鳥取縣 高橋直義君
- 岐阜縣 所喜久君
- 東京市 開成箱

岐阜縣昆蟲學會々員諸君に告ぐ

本會特別會員永澤小兵衛君斯學調査のため今同臺灣并に清韓地方へ旅行の途に上られ候に付席上別意を表し度候間第五十三回月次會(即ち五月二日)には可成御差繰遅参なく御來會相成度候

四月十四日 岐阜縣昆蟲學會幹事

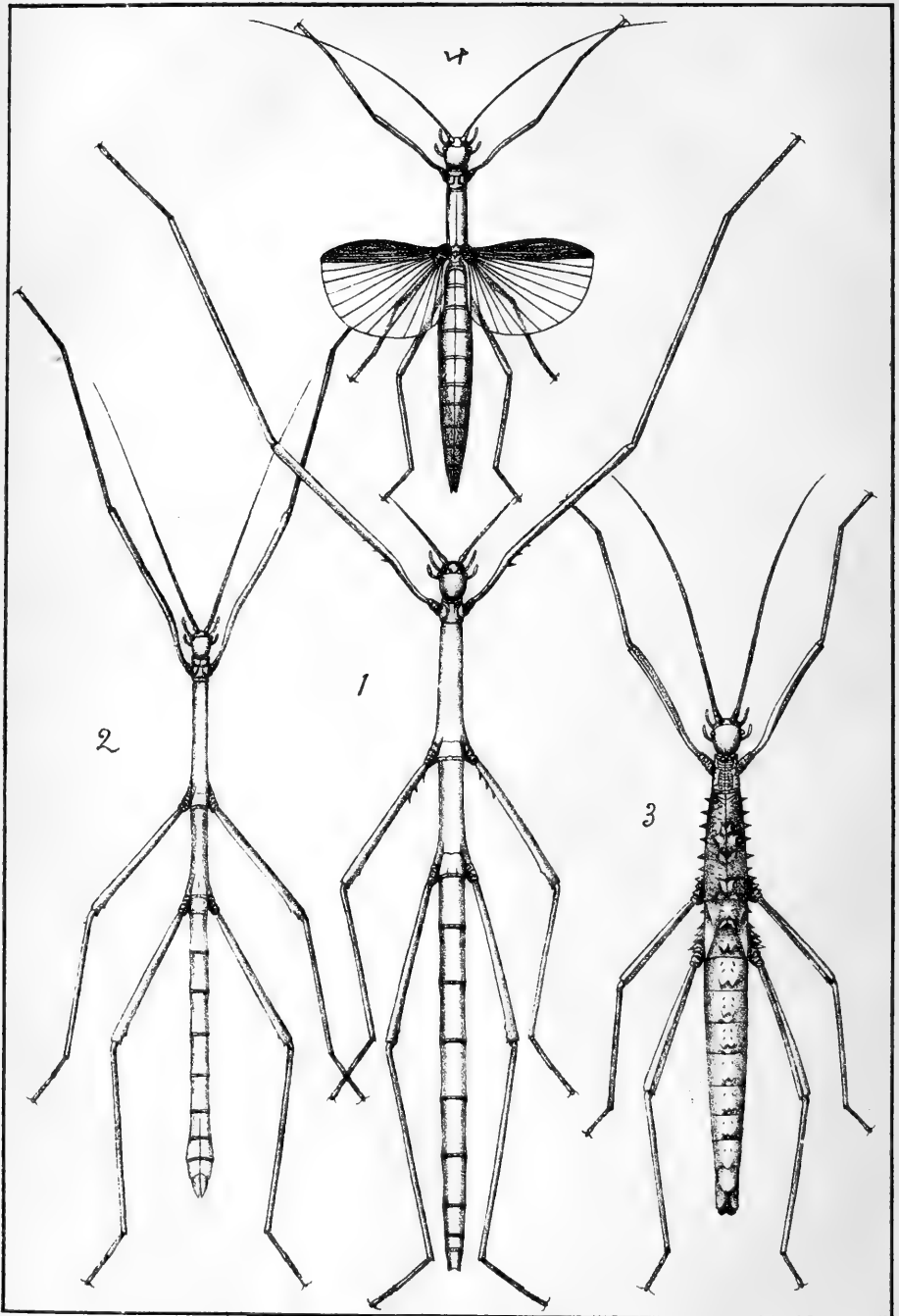
小生儀在岐中は各位の御懇情を辱ふし感銘の至り奉存候且つ出發の際は御見送被下候段難有御禮申上候

四月十日 東京市本所區横綱町一丁目 十七番地中尾方 長野菊次郎

大博覽會に對する賞品贈與

第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、都合數百點の多さを算する趣あれば、隨ひて斯學と裨益を與ふるもの亦少なからざる可し。當昆蟲研究所茲に觀る所あり、此等出品標本中、左の條に該當するもの五點若くは七點を選抜して、各々これに紀念の賞品を贈與し、その斯學界に規範たるの名譽を表彰するごにも、其功勞に對して一片の謝意を致さんとす。

- 一、紀念賞品は、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持者の出品に限り之を贈與す。
- 一、紀念賞品は、博覽會審査の結果、最優等に位せる者のみに之を贈與す。但し、審査規程に入格せざるため、優等賞を受くること能はざるも、物品の優良と認むべきものある時は、特に之を拔擢することある可し。
- 一、雜誌「昆蟲世界」愛讀者中、卓絶の標本を出品し若くは優等賞を得たる時は、特に此規程を適用することある可し。
- 一、紀念賞品は、昆蟲學に關係を有する書籍若くは、名和昆蟲研究所の徽章を附したる工藝品たるべし。



類 種 の 蟲 節 竹



◎岡田氏の採集寄贈に係る貝殼蟲種 (續) 福岡縣 桑名伊之吉

明治三十五年九月、静岡縣農事試驗場技手岡田忠男氏の寄送に係る、同氏の静岡縣下に於て採集したる貝殼蟲は、九屬十五種にして、採集地は皆新なり。左に之を記載すると共、岡田氏の厚意を鳴謝す。

一、杉のアスピテラタス (*Aspidictus cryptomeriae* Kuwana)

托生植物 杉
採集地 静岡市 採集者岡田氏

雌蟲の貝殼、通常長楕圓形にして、少しく腫起す、長さ一乃至二ミリあり、半透明にして灰白色を呈す。蛻皮は少しく一側に扁し、第一蛻皮の環節は明なり。第二蛻皮は分泌物を以て包はれたり。

雌蟲、体軀は扁平楕圓形にして、淡黄色なり。臀板は深黄色にして、五群の圓形分泌孔を有す。其中央にある一群は四乃至五孔より成り、前側の一對は七乃至八孔より成り、后側の一對は四乃至六孔より成る。臀板の游離縁には、能く發達せる三對の扁長板あり。第一及び第二對の外側は、尖端に向ひて次第に狭ばまりたり。第三對は、他の二對に比して、甚だ小にして、少しく鋸齒を有し、且つ、外側は斜面を有す。棘は扁長板よりは餘り長からずして、其游離縁には鋸齒を存し、第一對扁長板の中央に二本第一と第二對との間に二本、第二と第三對との間に三本、第三對の上位なる臀板縁は通常七本あり。各扁長板の基部には、一個の刺毛あり。且つ、第三對扁長板の上位に二個の刺毛あり。

雄蟲の貝殻、雌蟲の貝殻も似て小なり。蛻皮は殆んど中央に位し、長さ約一ミリあり。

是より先き、岐阜縣・福岡縣等にて、採集せしことあり。英彦山地方^{ちほう}では、杉の若木^{わかき}を害すると多し

二、黒點貝殻蟲 (Aspidiotus kelloggi Kuwana)

托生植物 モミツ 採集者岡田氏
採集地 静岡縣久能山

雌蟲の貝殻、貝殻は畧ぼ圓形にして、少しく腫起す。暗褐色^{みんせつしよく}(或は赤褐又は灰色なり)にして、蛻皮は殆んど中央にあり。第一蛻皮のある部分は炭黒色にして、臍狀^{さいじやう}を成し、第二蛻皮は少し分泌物^{ぶんびつぶつ}を以て包はれたり。直徑二乃至三ミリあり。

雌蟲、雌蟲の體軀は圓形にして、淡黄色なり。臀板は黄色よして、四群^{ぐん}の圓形分泌孔^{ねんけいしんひつこう}を有す。其前側の

一對は、十一乃至十七孔よりなり、后側の一對は、十二乃至十四孔よりなれり。臀板の游離縁^{いうりりげん}もある、

三對の扁長板は、能く發達して畧ぼ同大なり。棘^{けき}は扁長板よりは、短かくして鋸齒^{きょし}を有す。臀板の游離

縁^{りよく}の兩側には、各六個の短長不同なる、六個の根棒形なる成濃物^{せい濃ぶつ}(Thickening of the body wall) 相平行して、内部に向ふて縦走せり。

此種は、明治三十三年の夏、記者が福岡縣下^{かち}より始めて發見せし新種^{しんしゆ}よして、其托生植物の名は之を知る

よよしなし。

三、サンホゼー貝殻蟲 (Aspidiotus perniciosus Comstock.)

岡田氏の標本は、静岡縣農事試験場の果園^{くわいん}、及び、同縣下三島町に於て採集せしものにして、托生植物

は其よ苹果樹なり。

四、赤色貝殻蟲 (Aspidiotus aurantii Mask.)

托生植物 温州橘柑 紀州橘柑 採集者岡田氏
採集地 静岡縣濱名郡知波田村及び安部郡麻機村

是より先き、本邦各地に發生するを認めたり。

五、黒色貝殻蟲 (Aspidictus duplex Okll.)

托生植物 温州橘柑 採集者岡田氏
採集地 静岡縣濱名郡知波田村

是より先き、本邦各地に其發生を認め。

六、(Aspidictus duplex Var. paeoniae Okll.)

托生植物 木犀 採集者岡田氏
採集地 静岡縣安部郡大里村

前者の變種なれども、記者の意見にては、前者と全く別種となすも不可なかるべくと信ず。其前者と異なる主要の点は、圓形分泌孔として、前者は四群を有し、この變種は、單に二群を存す、而してデアス

ビデー分類中、圓形分泌孔は、最も、重要なものとされたり。

七、櫻の貝殻蟲 (Diaspis pentagona Tay.)

托生植物 桃 採集者岡田氏
採集地 静岡縣安部郡豊田村

是より先き、本邦各地にて、採集せしことあり。

八、バランの貝殻蟲 (Chionaspis aspidistræ Signoret)

此種は、温暖室、及び、盆栽類に多く寄生し、大害を加ふるものとして、雌蟲の貝殻は通常茶褐色、若くば、暗褐色をなし、雄蟲の貝殻は白色にして細長し。岡田氏の寄送に係る標本は、雌蟲のみにして、萬年青に寄生せり。氏は、之を縣下安部郡大里村にて採集せしと云ふ。東京、横濱其他の植木屋に於て

親しく之を見受けたり。

九、ミカンのカイラナスビス (Chionaspis minor Mask.)

托生植物 紀州橘柑 採集者岡田氏
採集地 静岡縣濱名郡知波田村

雌蟲の貝殻は、暗褐色にして、略ぼ牡蠣の狀をなすと雖ども、後端の幅甚だ廣し。雄蟲の貝殻は、細長

として白色を呈し、多く葉の裏面に群棲す。

是より先き、九州各地及紀州に於て、同植物に發見せり。

十、マキの貝殻蟲 (Florida florinae var. japonica Kuwa.)

托生植物 マキ 採集者岡田氏
採集地 静岡縣安部郡大里村

○〇〇〇の貝殻は、褐色にして、少しく腫起し、殻縁は近づくに従ひ、半透明なり。殻縁は略ぼ平行にして外貌は檳柑の長形貝殻蟲に似たり。

是より先き、本邦各地に於て、同植物に之を認めたり。

十一、(Parlatoria sp.)

標本の少さを以て、種類を確むること能はず。

十二、オーセシア (Orthezia sp.)

一頭の標本は岡田氏より送られたり。氏は之を、静岡縣下小山村にて、ミゾタゼに發見したりと云ふ。オーセシア屬の特性、雌蟲は、八環節より成る。觸角を有し、體軀は石灰質の板狀分泌物を以て包はれたり。肛門環には六個の粗毛を有す。雄蟲は、複眼を有せり。

此屬は、熱帶地方に生ずるシツ、タゼの類に多く寄生し、温暖室の大害蟲なり。本邦に産する種類にては、未だ學名の知られたるものなし。

十三、イセリア (Ioyria sp.)

柑橘樹に於て採集せしもの一頭(幼蟲)あれば、種名を知るに由あり。

十四、モノフレプス (Monophlebus sp.)

乾燥せる一頭の標本なれば、種名を確むること能はず。托生植物は柑橘なり。

十五、龜甲粉蟲 (Pulvinaria auranti O.Kll.)

托生植物 檳柑 採集者岡田氏
採集地 静岡縣安部郡大里村

(完)

◎竹節蟲科に就て (第四版圖參看) 名和 昆虫研究所長 名和 靖

竹節蟲(七節蟲)は直翅目に屬するものにて、目下當所、所藏の標品は四種にして各種とも異様の形狀を

あせり、是れ自然淘汰の結果として恰も竹の節の如き有様なるを以て此の名を得たり、又擬態としての例証は常に是を用ひらるゝを以て有名なり。本邦昔時よりアオドカケと稱し一種の有毒蟲として是に觸るゝことを嚴禁せしも全く無毒蟲に屬せり。該蟲は螻蛄科に近似するも彼は食肉蟲にして有益蟲なるも、是は食葉蟲にして有害蟲に屬す。今竹節蟲科の四種に就て左に畧述せんどす。

(1) 竹節蟲 (*Lonehodes nipponensis*) ナナフシムシは体の長さ凡そ三寸よして全体褐色をなせり。足部を收めて細長形を現せば恰も枯枝状と成りて容易に見出し難し。岐阜を始め岡山、高知其他にも産す。

(2) 枝竹節蟲 (*Lonehodes stomphax*) エダナナフシムシは体の長さ凡そ二寸五分にして体は帶赤褐色。足部は綠色なり。体は前種よりも細くして觸角は寧ろ長し。岐阜に於て稀に得る所なり。

(3) 銳刺竹節蟲 (*Acanthoderus japonicus*) トゲナナフシムシは体の長さ凡そ二寸にして全体褐色。胸部の各所より針狀突起を生せり、ナナフシムシに比して体形太く觸角又長し。岐阜縣霞間ヶ谷の鬱叢たる女竹の生ずる所に多く、又高知縣にも産す。

(4) 飛揚竹節蟲 (*Neosmia chloris*) トビナナフシムシは体の長さ一寸五分よして全体綠色、觸角特に長し、前の三種は四翅共退化して痕跡をも止めざるも該種は然らず、只上翅は退化するも痕跡を有し下翅は發育して飛揚に適す。其色は淡赤色あれども上端の部分は綠色を帯ぶるを以て一見恰も上翅の如し岐阜、滋賀、愛知、静岡、神奈川等の諸縣に産す。

以上四種の竹節蟲の記事に極めて簡單あるも圖版に對照せば恐くは其種を知り得るからん。幸々地方の諸君其産地を報せざらんとす。尙又竹節蟲科に屬するものは決して此四種に止まらざれば特に注意して新種の發見あらんとすを深く希望して止まざるなり。

◎動物に對する森林の保護

岐阜中學校 岸部易太郎

余、一昨年軍馬補充部本部の命に依り、米國ジャツチヨウ氏著森林栽培法一冊を翻譯せしが、今、其中の動物と森林とに關する部分を摘録して左に掲ぐ。

森林保護論は、森林及林産物の危害を被むる一切の物件、及、其災害の猛烈を除去し、又は、之を減少せしめんが爲めに、常々採るべき方法手段を包含す。而して此等の保護策なるものは即ち動物、若くは元行力に對して、豫め之を備ふる所のものなり。

(一) 動物と森林との關係

森林の安寧を増進する多數の有用なる動物あり。又時期に依りて有益ともあり、有害ともなりて、其價値の疑はしきものあり。又、其他の種類ありて、其生存に常に森林の生長に妨害あるものあり。第二の即ち疑はしき動物に至りては、人往々其被害を過算して、之を防禦せんとすることあり。然れども、此動物は、害を爲すこと極めて少しと雖ども、其性質、習慣の不明なるよりして、人、之を撲滅せんとするものなれば、從つて偏見妄説あり。

(イ) 有益動物

哺乳動物中、重く害蟲(蚜蟲、毛蟲、蝶、蛹及卵)を食して生活する肉食動物あり。即ち、蝙蝠、駒鹿の若干種、鼯鼠、蝟或は箭猪及臭獸とす。鼯鼠の穴居性は、時として森林養成場は在ては、有害なることありと雖ども、普通の森林に於ては却て大利益のものたるなり。是れ、鼯鼠は、土地を散解し、土壤をして濕氣と肥壤的物質とを收受把持するに適せしむるものなればあり。

黄鼬、鼯鼠の若干種、狐、ポール、キヤット及狸は、又極めて有益なる動物あり。是等の動物は、重に
鼠及多數の害虫を食するものあれば、之を保存せざるべからず。斯の如く是等の動物は、單よ、
鼠と昆虫のみを食して生活するものなれば、特に、其幼子を保存せざるべからず。
鳥類は、森林の貴重なる要素として、其緊要なること、極めて大なり。若干の大なる鳥類、例せば鷲、
秃鷲、隼、鷹、角鴟、レイザンの如きを除きては、概して樹木の健全なる生長を資するものなり。小
鳥に至つては、常よ樹木の生育に有害なる敵を捕ふるものあれば、成るべく其繁殖を力めざるべからず。
故に小鳥は、之を保護すべきものたるのみならず、其生育期間は、其重なる敵たる、猫及栗鼠を防禦し
て保護せざるべからず、棕鳥、啄木鳥、一切のツグミ屬、ブラツク、バルド、カスヒドリ、紫燕、黃鳥
シイダー、バルド、キヤット、バルド、レッド、アイド、グイレオ、及此種のもの、殊よ有益なるを
證せり。是等の鳥類は、昆虫を食するのみならず、冬期白雪の地上に積もるに當りて、力めて樹皮、枝
條中に存在する蟲卵を求るものなり。
囀鳥は、皆昆虫を食するものなれば、森林家は殊に之を保護し、且つ灌木若くは空窩ある樹木の存在す
る、或一定の場所を其儘になし置くべし、是れ鳥類の巢を作るに、最も好都合なればなり。若し斯の如
き便利なき場合には、函を樹間に懸けて、鳥類をして巢を作り、其雛を養育するに便らしむべし。又
普通の森林地に散在する所の野生苹果、櫻、李、梨の如き果樹は、之を放置して除去せざるを可とす。
是れ果樹は、鳥類が昆虫、毛蟲、及蟲卵を捕獲し得ざる時に於て、益鳥を養ふ助けとなる者なればなり
各種の蜥蜴、蛇の大半、ブライインド、ウオーム、蛙、蟾蜍も亦、害虫を食するのみならず、多くは鼠、
鼯鼠、其他小齧齒動物を捕ふるものなれば、又有益なる動物なり。

昆蟲類中にも肉食的にして重々自己種屬の小害蟲を食するもの多し左の甲蟲は此の種類に屬する者なり

(一) 大甲蟲カラソマ、カリダム及カラソマ、スクラテートル、前者の概ね夜間に總へての軟體幼蟲を捕へ、後者は晝間に之を捕へて食するなり。

(二) 伸節土甲蟲バシマカス、エロンゲイタスも亦一切の軟體幼蟲を食するものなり。

(三) 班蟻科の甲蟲はタイガー、ビートルと稱せらるゝものなり此甲蟲は穴を棲み常に其穴の頂上に在つて昆蟲の來るを待ち之を捕ふれば穴中に曳き行きて徐に之を食するなり。

(四) 最も廣く知られて益蟲と認めらるゝ所の甲蟲は瓢蟲即ちエツシネリデーあり此甲蟲は無聲に害蟲驅除の働を爲すものにして少時間之を食すること無數あり。

益蟲は皆甲蟲のみに止らず膜翅類中へ尙多數の益蟲あり殊に注意するの價値あり。

(一) 蜻蛉即ちアツダーポールト、フライ(リペリユウラ)、蟻及細腰蠅、此後の二者は其初生に於て既に肉食的にして他の昆蟲を食し又其卵をも食するなり。

(二) 大黃蜂は終日幼蟲と蛸蟪との搜索に忙はしく之を捕りて以て其仔を養ふものあり。

(三) 又他に有害なる毛蟲の蛹に卵を附着し是が孵化したる時に其毛蟲を食する有益なるものあり此種類(寄生動物)に屬するものはヒメバチ(テンスレドウ)にして若し一時を隔て、蠅と相並ぶれば微細の点

に至るまで其形狀類似して殆んど肉眼を以て鑑別し得べからざる程なり。大なる種類のものには蛹毎に一箇の卵を附着し小なるものは一箇の蛹を悉く其卵を附着す。卵は直ちへ孵化して幼蟲となり忽ち其蛹に侵蝕して將來有害なる蛾とあるべきものを食ひ盡すなり。

(四) 疑はしき動物

鳥類中何れが益鳥にして何れが害鳥なりや之を確知し居らざるべからざる人にして往々鳥類の働の善悪
は關し誤謬をなすことあり、殊に左の鳥類に關して然りとす。

カケス、此鳥は春、有益なる小鳥の卵を求り且つ大に好んで其肉を食す。然れども秋に至れば力めて榊
榊の實を集め處々土中へ埋めて冬期中の必要に供ふるに足るべき食を貯藏するものなるが幸に此鳥は陰
匿したる場所の大半を忘却するが故に埋められたる種實は發芽して良幼樹を發生するに至るあり。
雀、此鳥は就きては近來大に其有害を訴ふるを聞くことなるが許多の点より見れば林産物、園産物に有
害なるものなり。是れ此鳥は重に果實を食するものなればあり。然れども冬期に於ては樹皮より昆蟲の
卵を啄みて之を食するが故に最も有益なるものなり。春及初夏の生産期中は其仔を養はんが爲に多數の
昆蟲を殺し殊に其仔は發生後の初一週間は昆蟲の外何ものをも食せざるものなり然れども銃若くは捕獲
器を以て其過度の繁殖を防遏せざるべからず。

(二)有害動物

熊、狼、豹、野猫等の如き肉食動物は貴重なる野獸又ハ森林生長の増進に有用なる動物を食するものな
れば全然之を剿滅せざるべからず。

哺乳動物中齧齒類は最も有害なる動物にして殊に海狸を甚しとす齧齒類中直徑十二吋の樹木を一夜内に
嚙斷し得るものは獨り此海狸あるのみ紐育州に於ては現今殆んど殄滅せりと雖どもアチロンダック地方
に於ける溪流小河所謂海狸澤に於ては今尚歴然として海狸の慘害を見るを得るなり(中略)鼠は森林の
生長に極めて有害なり鼠は種實を食し幼樹の嫩き皮を咬み又苗木を嚙斷し多葉の樹木は實に彼等鼠暴
の重なる目的物にして又松柏の類をも剩さるるなり殊に松柏の森林が草の繁茂せる平野に圍繞せられ居

る。當りては其慘害を及ぼすこと甚しきものあり。蹊鼠は冬期中此草の下に潜伏し居りて此處より近隣の森林に向つて求食的遠征をなすものなり故に秋晚く幼樹間及其周圍に於ける草を成るべく短く刈り以て蹊鼠が幼樹の近隣に本營を構ふるを防ぐべし若し既に害を被りたらば其周圍を嚙まれたる樹木をば春早く地より上に切斷し以て幼芽の發生を促すべし。勿論周圍を嚙まれたる樹木と雖も實際發芽するものなれども樹液が樹木に循環すること能はざるが故に其活動衰へ爲め二期の間に枯死せるに至るなり。若し蹊鼠が大に増加して一種の時疫となるが如きことあらば動物界に於ける蹊鼠の敵を飼養し又は被害の森林中に數々豚其他の家畜を驅り彼等をして騷擾せしむるより他は良法あることなし(中畧)苟くも森林家たるものは森林樹木に有害なる昆蟲の習慣と生活とは關して最も細密周到なる注意を爲さるべからず、何とならば是等の事實を正確に識るにあらざれば此小動物の恐るべき暴害を沮遏し若くは被害の程度を減少すること能はざればなり。蓋し昆蟲の習慣は極めて多樣的なり二、三月に發生するものあり夏、發生するものあり。又は秋に至りて發生するものありて一様ならず。又一年間に其發達の四段階(卵、幼蟲、蛹、成蟲)を經過するものあり或は數年を経て完全なる發育をなすものあり又は一季期に數回孵化するものあり且つ昆蟲は其發達の段階中何れの状態に於て樹木を害するものなるや之を知ること亦趣味あり、通例昆蟲は其幼蟲たるの際に於て葉と小條とを食して害を爲すものあり、時としては羽翼の具りたる昆蟲殊に許多の甲蟲が斯の如き害を爲すことあり、一二の昆蟲が殊に如何なる樹木に害をなすものなるや之を觀察するも亦肝要なり。一種の樹木に限るあり數種の樹木を害するあり就中最も有害なるは松柏類と厚葉樹とを食するものなりとす。又葉のみ食するものあり芽を食するものあり樹木の内部に生活するものあり木質部と樹皮との間に住むものあり。又常に群をなして出づるものあり外に

出でざるものあり然るに其出づるや非常の大群をなすことあり或は動作遅緩にして單歩むものあり又は飛びて忽ち森林の大部分を覆ふものあり。

是に依りて之を見れば必ずや嚴正なる觀察を以て時期に應じ場處に應じて昆蟲の暴害を制し且つ之が蔓延を防禦すべき方法手段を採らざるべからず。而して之が好結果を奏すべき最有効なる方法は害蟲の自然の敵を蕃殖保護するのみならず進んで之を飼養するに在り、有益動物と有害動物との間に於ける比例が動物界に維持せらるゝは有害動物を殺戮する有益動物の蕃殖如何に因るものなり。蓋し此法則は之を昆蟲に適用するより明瞭なるはなし、多數の有益動物は有害動物を殺戮するに依りて眞に人類の恩恵者として貴重すべきものなりとす。

尙蟲害防禦策としては斷株、乾燥せる樹木、樹枝、伐採せる木材を移去し。又移去し能はざる木材は其樹皮を剝脱し以て昆蟲の發生所を打破するに在りとす、蟲害防壓の最も有効なる方法殊に天然林に於ける有効法は組織的整理法を應用すること是れなり、之を應用するに第一着手とすべきは正當に定期的な數回疏伐を行ふことなりとす此疏伐に依りて樹木は充分有力強壯なる生長を爲すに至る。而して斯の如き樹木に對しては有害なる昆蟲も甚たしき害を爲し能はざるものあり。

以上列擧せる被害の蔓延を防禦すべき方法を勵行せば充分昆蟲の害を避くるに難がらざるあり。苟くも此目的の爲めには被害の樹皮を剝取して之を燒棄し枯木は之を切り若し移去すること能はざらば之を燒棄すべし。又斷株は松柏類の斷株と雖も悉く其樹皮を剝きて他に移すか若くは燒棄すべし何となれば斷株殊に二年前に倒伐せられたる樹木の斷株は概ね總へて樹木を穿食する害蟲の巢窟となるを以て必ず之を根絶せざるべからざればなり。然れども若し之を大仕掛を行へば其費用鮮少なからざるが故に唯其樹

皮を剝取すべし以て同一の効果を奏するを得是れ樹皮を剝きたる斷株は有害昆蟲の巢窟とならざれば也
森林家よして有害昆蟲の習慣を細心觀察したるものは尙進んで相當の場所に所謂誘陷木なるものを置き
て宜しく其林地の被害を避くべし、害蟲の初めて群飛するに至らば森林の諸處に健全なる生木殊に松柏
類を倒伐し樹皮を剝取せず又枝をも除去することなく地を放棄し置くべし、昆蟲は好んで此新に倒伐し
たる樹木に附着するものなれば蟲卵の孵化するに先だち其樹木を移去し若くは焼燼すれば害蟲子孫の繁
殖に依りて受くる所の一切の危険を避くることを得るなり。然れども森林家たるものは力めて害蟲の習
慣を確知せざるべからず何とならば之を確知するにわらずんば夫の所謂誘陷木を移去焼棄すへき最も適
當の時期を確定すること能はざればなり。

合衆國昆蟲學取調委員會は一千八百八十一年其報告第七號中に森林及び日避け樹木に有害なる昆蟲を關し
極めて興味ある有益なる論文を掲載せり。之に依りて吾人は合衆國に於て實に昆蟲の多數にして被害を
逞しふするを知るあり、若しそれ深く之を知らんと欲するものは宜しく前記の冊子を參照すへし。著者
はドクトル、エイ、エス、バツクハード氏なり。

前記の報告に據れば榾は二百十四種の昆蟲を攻撃せられ楡は四十三種、ヒッコリーは八十七種、黒胡桃
は十一種、バツター、ナツトは十八種、栗は十八種、ローカストは二十種、槭は三十七種、樺は十九種
榲は十五種、チューリップ樹は九種、松柏は百二種、唐檜は二十四種の昆蟲に攻撃せらるゝものとす。
此報告よは是等の昆蟲を列舉説明するの外是等の害蟲を驅除するに應用すべき防禦策の事項をも記述す
る所あり然れども此驅除策は廣濶なる森林に於ては費用多く勞力を要することも大ければ普通の森林
家は能く之を應用する者極めて稀なるべし、若し森林中の大區域が昆蟲に占領せられ居らば吾人は其中

尙は何れの部分を救済し得べきや先づ之を決定し然る後其虫害を抑壓すべき手段を施して餘す所なきを要す。然れども若し非常に蔓延し來りて人力も到底之を施す由なくんば被害の樹木を切斷せざるべからず、若し實際之を切斷すること能はざる場合には火把にて昆蟲の驅除を計らざるべからず但し被害區域外に火の延焼せざる様適當の防備をなすべし、斯く火を以て昆蟲及蟲卵を燼滅したらば後ち直ちに被害の面積を再植し成るべく速かに森林の空隙を充實し風霜日光の侵入を防ぐべし。

紐育州よ於ける森林樹木の種類が其數歐洲に於ける種類に對し大に超過すると同一比例にて森林に有害なる昆蟲の數も亦歐洲より遙に多數なり。然れども紐育州にて昆蟲が森林の生長に及ぼす有害なる影響は我が天然林に生長する樹木の雜駁不同なると我が森林の濶大なると因りて今日に至るまで其被害歐洲の如く一般ならざりしなり、蓋し斯の如き天然林に於ては昆蟲は恐らく其已れの欲する一定の樹木に在りて靜に生活するものなるべく、又た斯の如き廣濶ある森林に於ては數種の昆蟲が或る一箇の樹木に及ぼす惨害の或は顯著なざるものあらん。而して森林樹木の雜駁不同なると森林の濶大なると此二者の事情は同時に有害昆蟲の自然の敵を多數繁殖せしむる好機會とはなれり然るにアジロンダツク地方の森林のみならず又他州に於ても貴重なる森林區域が漸次枯死しつゝあるを訴ふることを盛なるが故に吾人は此虫害の件に就きて等閑不注意あるべからざるなり、吾人は嚴に是等小動物の動作を觀察し其驅除に資することは總て之を等閑に附すべきにあらず。而して我が森林の濶大なることに就き精細なる觀察家が既に次期の未來は森林の豊富を誇らんよりは却つて森林稀少の不平を聞くの時なりと言へたるを考察し來れば吾人は害虫の驅除を以て焦眉の急務なりとせざるべからず。而して觀察家の言へるが如く事茲に至らんか森林樹木の多種類あることも亦過去の夢とならんのみ。



◎第拾五回全國害蟲驅除特別講習會員の五分時演説

左に掲ぐるは去三月十日より廿八日迄當昆蟲研究所の開催せる第拾五回全國害蟲驅除特別講習會に於て其會員のなしたる五分時演説の一斑なり紙面の都合により僅に左の五名を本欄に掲ぐ。

(一)物の見解

徳島縣 中瀬陸太郎

物の見解は、幾多の方面よりせねばなりませぬ。彼の圓體と申す處のものは、存外内方より見れば、窪みたるものではありませぬか。又良港と申す陸地の突き出でたるものも、實は海の突出せるものでありませう。諸君が上下と申さる、言葉も、廣き宇宙より見ますれば、左様には云へないことになります。野に咲き出たる薔薇は、美しとのみ思ひなば必老棘まさゝれます。心して見られよ、極めて美麗なるこのはてふも、其翅裏は枯葉と異りませぬ。茲に一錢銅貨どうんかどを比較せば、其大小は於ては逆も同日の比ではありませぬ。然るに、之を捨て置かんか、一は一錢のみの損であるが、一は幾千万圓の損になるか豫め知れませぬ。かゝる見地より、蟻螂と蜻蛉とを御覽なさい、彼は其鎌の如きものを振り翳し首は長く、腹太くして醜く、是れは翅の美麗にして、しかも飛翔輕快、只何となく人にすかれ、彼れは醜めるが爲めに無慈悲の手に斃れ、是れは美なるが爲めに弄殺さるゝではありませぬか。されど(蟻螂よ、天が汝と與へたる醜且つ殺伐なる態を恨む勿れ。蜻蛉よ、汝は邦人が女子を愚弄し、遂に美人落命とぞ、口きく事と酷似するの甚しさよ。さはいへ、社會は汝等を幾年までも斯くはせしめじ、汝等は遠からず活計歡樂の遊に耽るの時は必ず來らん)、と天と代つて推理するものは人のみである。果して然らば、我等が社會と對する務は餘程重いでせりませぬか。

(二)新潟縣に於ける害蟲驅除の根本的改良

新潟縣 山田益五郎

新潟縣に於ける害蟲驅除は、先づ農業組織の根本的改良よりせなければ、完全には出來ないのであります。新潟縣に於ける害蟲驅除の手段方法は、遺憾ながら幼稚なものでありまして、好成绩を擧ぐることに

は期して望まれたいので御座います。彼の明治三十一年に於て、浮塵子の爲めは空前の慘狀を極められた際に、當局者は、日に夜を繼ぎて奔走し、之れが驅除に盡瘁せられ其他政府に於ては國庫より補助をなし、縣農會郡農會も共々極力務められたけれども、遂に其効果を完ふせなかつたのであります。此の如き有様ゆへ頑固なる農民は到底驅除などは行はるべき筈がないとして、放棄するに至つたのであります。之れを早計にも測斷を下さしめたなれば、當局者あるものが其順序を無視したと云ふもので、恰も乞食に向て貯蓄を求むる如きもので御座います。夫れ驅除の完全に出來ないと云ふは、畢竟農民の位置の揚らぬと云ふ事が大原因であります。何となれば、元來吾が縣下は、各所に石油事業が盛んで、農民の多數は漸次之れに吸收されつゝある有様で、從來、宛然親子の如き密接なる關係を有して居りました地主と小作人とは、追々疎遠となり、即ち地主は商工業に手を出して失敗し、其結果農業資本は商工業者の手に入ると共々彼の嫌ふべき土地兼併の現象が益々多くなつたから、小作人は到底獨立の見込がなくなり、遂に祖先傳來の本城をも抛ち、一身を他方に投ずる機に至つたのである。斯の如く農民は、漸々郷里を去りて都會に集まるが故に、都會は益々繁盛し、其反動として農業萎靡の趨勢は彌や益しに強大となつたので御座います。曾て横井農學博士の申された都會熱なる現象は、此所に於て顯はれ來たのであります。斯様に農界が不振の逆境に陥りし事は、我が新潟縣の爲め、否日本帝國の爲めは嘆息せなければならぬことであります。依て之れが救済策として、私は害蟲驅除に依りて今迄二石取れた處から、二石五斗乃至三石の收穫を得んとするには、先づ農業の根本的より改良せなければならぬと存じます。要するは、今日の處では、一方からは地主と小作人との關係を、往昔の如く圓滑ならしむる政策を講究すると同時に、他の方面より農事改良の消極的唯の方法たる、害蟲の思想を農家に普及せしめ、驅除の實行を貫徹して以て兩々相俟ち、茲に始めて農業の隆盛を見るに至ることは、火を見るよりも尙は明かなること、存じます。聊か平素の持論の一端を申し上げて、五分間演説の責を塞ぎます。

(三) 浮塵子共同驅除の實驗談

大分縣 染 矢 良 佑

私は浮塵子共同驅除の實驗談を致しまして、五分間演説の責を塞ふと存じます。よつて順序上、苗代驅除の模様を御話して、其れより本田に移ろうと存じます。そこで驅除委員が浮塵子の發生を認めまゝたときは、先づ一着手として、苗代共同驅除の前日早朝、二三歩の小區域にて注油驅除の試驗をなし、以て全苗代分別に使用する總油量を確定し、直ち共同購入を致しませ。而して苗代地主に對しては、明

早朝苗代田の共同驅除を致すか、本夜中も水の加減、即ち只僅かに油の水面に浮び得るを程度とすべき旨を通告し、尙女笹の繁茂せるもの各一握宛を持參すべき様に傳へます。翌日に至り定時限に集合しませば、其中より年長にして監督者たるべき適任のもの、及び注意周到で注油方に熟練なるもの若干名を撰定致します。是に於て驅除委員は注油者も油量を指示し、直ちに水上より順次短冊形の間路に注油せしめ、他の者もは短冊形の方向に横隊に列ばしめ、適當なる間隔を採り、遅速をば様歩調を揃へ、手にせる竹笹を極めて強く左右に振り、可成苗に觸れざる様も致しまして、全たく其の竹を振りて起る所の風力を以て、害虫を通路上の水面に掃ひ落すのであります。而して監督者は、横隊の後方に在りて其動作を監視し、不完全の點あれば直ちに警告を致します。以上の如く施行しましたが、注油の適量なりしと、一方面より他方面に整頓前進するから、彼の害虫は遁避すべき活路を失ひ悉く溺死致しました。以上即ち苗代田に於て行つた方法でありますが、是れより本田に就ての模様を御話し致しませう。本田に於ても驅蟲劑の共同購入とか、監督者注油者の撰定杯は、苗代驅除の時と同様であります。只少し異なる所は、苗代と違ひ面積が廣くありますから、多數の人員を要します。故に、自然混雜を來し易くなりす。依て一見其組々を明瞭ならしむるため、赤、青等の片布を笠上も点附し、監督者は責任を負んで、決して間隔に不同を來たし、或は苗を踏み込む等のことなき様監督を嚴重にしました。そこで注油者先づ竹筒製の注油器を以て注油を始め、稍暫くして注油の一面に波及しますれば、竹笹を持てるもの、適當の間隔を採り横隊となり、軽く稻葉を掃ひ浮塵子を水面も落すのであります。右様致しますれば、單獨の驅除よりも、割合も僅少の時間にて比較的綿密なる驅除を行ふことを得、成績も餘程良好で御座りました。右御參考の一助とも相成りますれば仕合と存じます。

(四) 千葉縣下に於る害虫の種類より之が驅除法に及ぶ 千葉縣 行 木 勝

私は只今御照會下されました、千葉縣の行木であります。今晩は、千葉縣下に於ける害虫の種類と云ふとに付て少しく御話し致さうと存じます。吾が千葉縣下に於ける害虫は、大別して二種として一を社會的害虫一を作物害虫と致します。而して吾縣下に害を及ぼすことの大なるものは、害虫即ち六足蟲の害もあらずして、社會的害虫即ち二本足の高等動物の害であります。此社會的害虫は、何れの方面に害あるかと云へば、農作物を害するものにあらずして、農作物を耕作する者、且つは熱心に農事に従事する農民あり、漸く改良に向ひたる農家をして、其方針を誤らしむるのみならず、種々惡戯をなして其改

良驅除の發達を妨害します。是等の農民は多く頑固で智識が乏しいから、之れを驅除するには正當の道を以て行ふことが出来ませぬので、縣當局者は大に苦慮して、協議の結果法律第十七號を應用して縣令を發布することになりました。故に昨年は直々實施を試みましたが、大に好結果を得ました、然れども之れのみでは満足が出来ませぬ。尙ほ作物の害蟲、即ち螟蟲、浮塵子、椿象等種々あります。是等の蟲は、採卵に、捕蟲網に、誘蛾燈と種々の手段、器械を以て驅除に従事せしめて、幾分其効を奏しました以上は何れも行政の力を借りて行ひましたので、未だ完全と云ふことが出来ませぬ。即ち今日迄は、形式的驅除でありました。然らば今後完全に此道を行ふの策如何と云ふは、即ち農民は昆蟲志想を有せしむるのが上策であらうと存じます。左様致しますれば、農民は害蟲の恐るべきことを知り、天然に發生する採といふ迷信を破りて、眞に驅除を行ふ様になりませう。此責任こそ吾人が兩肩に荷ひつゝ、あるのであるから、歸國後は、夫々熱心に斯學の普及を計らねばならぬと存じます。

(五) 鹿兒島縣下に於ける農事上の模様

鹿兒島縣 河野 綾橘

我が鹿兒島縣下は、他縣と比して一般の事業後れまして、漸く今日に至り、昔日の夢を破り、稍々改良の端緒を開かんとする有様であります。然し乍ら農事と於ては、改良の途未だ開けず舊習を守り一向發達の形跡がありません。然るに近頃縣に農事試験場及び農會を設立せられ、之れが主催となりて農事講習會とか、農事講習會を聞き、改良の途を講せられませぬけれども、愚昧なる農民は毫も耳を傾けず失張舊來の方法を固守し、先祖代々の方法を従へば間違はないと頑として之れに従はないものが多いのであります。然し一方には、農事試験場なり、農會なりが模範農場を開設して成績を發表し、確かな証跡を示しますから、少しく智識ある農民は、其實を悟り幾分か信する様になりました。然しながら害蟲驅除と云ふことになりまると、種々なる迷信を抱き、中々行ひませぬので、當局者は大に苦心して居らるゝ有様であります。明治三十年度以來漸く浮塵子發生の場合に注油する位で、採卵法とか成蟲を捕獲する如き方法は更々行ひませぬ。偶々之れを教へますれば、反言して蟲の發生は歲柄によりて自然にわくのである、棄置けば自然と無くなる、餘計の御世話であると云ふ鹽梅であります。害蟲發生すれば神佛を祈願し、太鼓や鐘を打鳴らして、蟲舞り、蟲祭り採して色々騒ぎ立て狼狽し、唯目視して居る風であります。而して收穫の際には、本年は蟲が付きましたかか旋米を減つて呉れど地主は強請し、地主も止むを得ず之れを聞く様なことで、蟲に關する觀念は皆無であります。右様の有様でありますから、第

一迷信を打破し根本的改良の必要がある、實に其局に當るもの、心配であります。故に我縣下に大に害蟲の講話會を開き、標本杯を示して該思想の發達を謀るのが目下の急務であります。斯く申せば、我縣下農民の愚昧を發表し、耻を曝す様でありますけれども、外に申上る實驗談が御座りませぬので、實は五分間演説の責め防ぎ迄に、吾縣下農民の有様を申し上げた譯であります。



◎博覽會出品の昆蟲標本 (續)

岐阜縣不破郡垂井
尋常高等小學校

小 竹 浩

第六昆蟲の保護色 昆蟲界に就き仔細之を觀察すれば其彩色の万別なる口能く其形容する能はず筆能く描出する能はざるあり是れ巧みに敵の目を暗まし己が身を安全に護衛するの外ならず即常に綠葉上を棲む蟲類は其体色綠色を呈し砂上若くは土上を棲息するものは概ね土色を呈し蝶類は其止まるや概ね兩翅を背上に疊むを以て表面美なれども其裏面外界の諸物体に似たり蛾類は其止まるや概ね前翅を以て前翅の表面能く留止する處の物体に似たる色を有せり是れ昆蟲學上保護色と名く其他幼蟲より繭に至るまで之れ等の保護色を有するもの枚舉に遑あらず今是等の妙味を知らしめんため八種に區別し標本三十有餘を配列せり即樹幹に靜止するを以て樹皮と同色を呈するものアカタテハラフの翅の裏面ミミズクヨコバヒ等七種。草上を棲むを以て綠色あるものクツハムシ、アラガメムシ等八種。苔の附きたる樹木に靜止するを以て地衣と同色なるものキノカハガ(尺蠖蛾の一種)等四種。砂上に棲むを以て前翅の砂色なるものカハラバツタ等四種。夜間出づるを以て黒色あるものクロゴミムシ、クロオサムシ等五種。土中に棲むを以て土色を呈するものキリウヂカバンボノ幼蟲。青葉の上に棲むを以て綠色なるものヤマカマスノ幼蟲等の類を以てせり。

第七昆蟲之擬態 己が安全を圖り子孫の繁殖を全ふせんとするの必要より蟲類に保護色を有するは第六に示せり尙緻密に觀察せば其形態の奇異なる千差萬別にして實物を一見せば何人も其奇に驚かざるを得ず即樹枝に似たるあり鳥糞を擬するあり枯葉に似たるあり強動物に摸擬するあり是れ皆保護色と相待

て必要あるものにして自然の妙至れりと云ふべし之等を擬態と名く今其内容を擧ぐれば弱者が強敵の眼を避けん爲め其形色を外界の物体に似せしめ以て敵の攻撃を免るゝ者、弱者が其形色を他の強動物の形色に類似せしめ以て敵の攻撃を免るゝ者との二種に別ち更に前者を五に后者を四に細別せり即前者は樹枝に摸倣するものナ、フシムシ、エダシヤクトリムシ等五種、木の瘤に似たるものラジロカミキリムシオホコブザウムシ等五種、鳥糞を紛るゝものアゲハノテフノ幼蟲、木の枯葉を似たるものアケビノガ、敵に逢ひて死態を擬するものコガチムシ、ナシザウムシ等五種を配列し、后者は、蜂に似たる双翅類オホハチダマシ等三種、蜂を似たる蛾コスカシバガ、蜂に似たる甲蟲トラカミキリムシ等三種、蟻に似たる椿象アリモドキガメムシ等二種を配列せり。

第八昆蟲之警戒色并誘惑色 惡味を有する烏蠅の如き惡臭を放つ椿象の如きは多く鳥類の啄食を好まざるものなり斯の如き蟲類は己が所在を知らしめん爲め益々其彩色をして顯著からしむ之れを警戒色と云ふ強動物が弱動物を進撃し己が口腹を肥さんとする爲め其体色己が棲息する周圍の色に似たるもの若くば脉軀の外物に似たるもの之れを誘惑色と云ふ第八は全くこの理を示さんために裝成せるものなり今其内容を擧ぐれば警戒色を四に別つ即惡臭を分泌する蟲なることを外敵に表示する必要より美色を裝ふものミチヲシへ、キンガメムシ類八種、惡味を有する蟲なることを知らしめて外敵の誤食なからしめん爲め体色を裝ふものイモムシの類六種、毒毛を以て敵害を防ぐ蟲なるを知らしめん爲め美色を有するものキンケムシ類四種、敵をして害を加へざらしめんため多毛を以つて警戒するものサクラケムシ類三種を配列せり。誘惑色亦四種に別つ即水中に似たるものミヅカマキリ類、常葉上若くば枝上を以て綠色あるもの、水中に溜りたる枯枝に似たるものミヅカマキリ類、常葉上若くば枝上を以て綠色あるものカマキリの類、常に水中の土上にあるを以て泥色を呈するものタガメ等を配列せり。

第九昆蟲之生存競争 前に示せる如く己が体色を外物に摸倣し奇異なる形態を以て他物を擬し巧に敵眼を避け或は樹心に入り或は他物を纏ひ若くは堅き繭を造るやどある手段を以て安全を圖るも又一方には之れが弱点を看破し巧に寄生するあり捕食するありて其慘狀至らざるなしこれを生存競争と云ふ今其内容を示さば、葉を蠶食して一葉の青なきに至らしむる蝓類は(マツケムシ類)寄生蜂の爲めに其肉を食せらる(ウスバヤドリバチ、梅毛蟲寄生蜂類)、非常の速力を以て繁殖する蚜蟲は(ミドリアブラムシ類)片隅より敵蟲の爲めに征伐せらる、(クサカゲロフ、ヒラタアブ、テンタウムシ類)、樹幹の中に巢をく

ひて安全を誇る木蠹蟲は(テツバウムシ)馬尾蜂の長さ産卵管に挿入せらる(ヲナガバチ類)、堅固なる城郭を造りて敵害を防ぐ簞蟲は(茶ノミノムシ)寄生蜂の襲ふ所となる(茶ノミノムシヤドリバチ)、枝は摸倣して巧み強敵の眼を瞞着する枝尺蠖は(エダシヤクトリムシ)かもとさばちに寄生せらる(カモドキバチ)、飄々として艶花に戯れ餘念なき蝶は(キテフ類)蜻蛉の爲は不意に捕へ去らる(コヤマトンバウ)、夏日腥血を吸ひて人を困らす蚊は(蚊)蜻蛉に驅られ其幼蟲亦蜻蛉の幼蟲に食はる(カトリトンバウ、トンバウの幼蟲)、小蟲を捕へ巢に運はんとする蟻は(クマアリの類)ありちぢくの落穴は陥りて其餌食となる(ウスバカゲロフ幼蟲等)

第十昆蟲之自己防禦本能 前に示す如く昆蟲界は修羅場を演ずるは常に目撃するなりされば固き繭を造り或は恐嚇手段を以て或は跳躍する等種々の手段を以て生命を全ふせんとするは自然の理ありこれ等の方法を先天的に得たるを即自己防禦本能と云ふ其配列下の如し落下して敵害を免るゝもの(ナシザウムシ、バラリハムシの類六種)恐嚇手段を以て敵害を免るゝもの(イモムシの類三種)、惡臭ある肉角を出して敵害を免るゝ者(アゲハノテフの幼蟲類二種)、惡臭を出して敵害を免るゝ者(三井寺ハンメウ、ガメムシの類五種)毒針を以て敵を攻撃するもの(ダンゴバチ類六種)、跳躍して敵害を免るゝもの(ノミ、トビムシの類六種)横に這ひて体を隠すもの(ヨコバヒムシ類六種)他物を纏ひて自体を護るもの(ミノムシの類六種)繭を造りて自体を護るもの(イラムシ、ヤマカマスノガ類六種)、葉を綴りて自体を護るもの(ハマキムシ類四種)

◎六足蟲彙纂 (卵の卷)

在東京 長野菊次郎

(九) 蝗を斃す黴菌 蝗類が或る疫病の爲めに斃さるゝことあるは數年來昆蟲學者の注意せる所にして其病原の一としては或る黴菌の鉢内は生育するよよなるものなることも亦知られたり。此黴菌の爲めは撲滅せらるゝものは獨り蝗類のみならずして他の昆蟲にも及ぶものなれば數年來害蟲驅除の一法として殺菌の各種を人工的に散布せしめて効を奏したること少からず。然るゝ最も慘害を逞しくする蝗類が最も此黴菌に感染し易きは實に吾人の幸とする所なり。北亞米利加に於て往々自生的及び移住的蝗類の巨萬を打擔したる疫病の原因を考せる黴菌は數年前の發見にして其流行區域狹からず一地方より於ては全く殄滅し歸せしめたることあり、若し蝗類が此黴菌に惱まざるゝときは其動作不活潑となり將に死に瀕

菌の爲に死したる蝗



んには菌害を受たる蝗の生きたるもの又は死せるもの數多を捕へて之を穴に投ト是に撒布するに水を以てし又此上に投ずるは蝗の一行を以てして同じく水を撒布し次第は此の如くして穴に滿つるに至らしむ然る後錫板を以て其穴を蓋ひ數日間其儘になし置くべし但し其日數は氣候によりて多少の差異ありかくて其死せる蝗を地面に擴げて十分に之を乾かし其後之を碎粉して水に混するなり、水に混トたるものは十二時乃至四十八時間之を温めて此内に浸すは新に捕る蝗を以てし其後之を放つべし。然るときは早晩他の蝗は傳染して遂に全群に蔓延するに至るべしとなり、(昨年十二月十八日のシカゴ、ツリビュン)

◎食蟲動物の餌食

在東京 林 壽 祐

爰に出したる食蟲動物の餌食表中、有益有害と評せしは、主として農業山林業に對して定めしものなれば、縦令こゝには有害と附せらるゝものありといへども、強ち憎却すべくもあらず。而して評價を定むるは困難なるもの尠からず。又蟲類を食する事實あるも、如何なる蟲種を食するか、野外はあつては吾人の視力の及ばざること多し、讀者豫めこれを諒せよ。

食蟲動物の餌食表

種名 類別 餌食の種類

評價 摘 要

アヲハヅク 猛禽類

(益蟲) 蜻蛉。蜻蜓。蜂。
(害蟲) 飛生蟲。楸形蟲。金龜子。蟬。

有益

雉 雌 雄 雌 雄 雌 雄

(穀類) 稻。麥。粟。蕎麥。大豆。小豆。
(果實) 椎。
(嫩葉) ハコベ。クサボケ。菜。蕪。雜草。
(昆蟲) 蠶。蠅。蚊。蟋蟀。烏蟻。蟬蛉。

有害?

蕃殖スルキハ農作物ヲ食荒ラシ農家ヲ苦マシム

鶺鴒 雌 雄 雌 雄

(穀類) 豆。
(果實) 椎。コナラ。檜。シヤノヒゲ。雜草。
(葉花) ハコベ。クサボケの嫩葉。春蘭の花。
(昆蟲) 椎。コナラ等の蠶蟲。

有益?

穀類ハ豆ノ外食スルコト尠シ

鳥 鴉 燕雀類

(動物性) 飛蝗。蝗。蠶。金龜子。野蠶。田螺。蛙。鼠。蛇。鷄雛。鷄卵。有脊椎動物の内臟。
(植物性) 玉蜀黍。柳。密柑。落花生。甘藷。
(人造物) 豆腐。飯。團子。餅。

有害

白頭鳥 燕雀類

(果實) 南天。萬兩。モチ。カナメモチ。ウルシケシ。ガマズミ。ヤブニツケイ。バラ。柿。密柑。
(雜類) 木半夏の芽。椿の花液。檜の樹液。菜。甘藷。南瓜。飯。

?

未ダ蠶類ヲ啄食スルヲ見ザレドモ其習性ヨリ考フレバ必ズ食蟲スルナラン

アカツバラ 燕雀類

(果實) 南天。萬兩。モチ。カナメモチ。バラ。オツル。
(蟲類) ヲモドキ。カマズミ。ヤブニツケイ。柿。柿。
(植物性) 密柑。柿。花液。樹液。甘藷。
(昆蟲類) 蟻。蜘蛛。蚯蚓。

有害

蚯蚓ヲ獲ンガ爲メ古屋根ヲ破損スルト多シ

繡眼兒 燕雀類

(植物性) 密柑。柿。花液。樹液。甘藷。
(昆蟲類) 蜘蛛。蛇。蠅。蚋。蚊。蚜蟲。蟬蛉。

有益

◎昆蟲應用の釣魚法に就て

千葉縣 高橋 徹 一

昆蟲學研究の結果として農業工業醫學界に將た教育界に尠からざる裨補がある事は識者の夙に唱導する所なり而して猶水産業上にも應用し厚生利用の一要素たるのみならず兼て遊樂として一種の興味を有するものありとは鯉鮪等を釣獲する擬餌釣と同一法にして昆蟲の形体色澤斑紋等を模倣して釣餌と爲しこれに釣具を附し鮎鱒嘉魚の如き淡水魚類を欺誘し坐して之を釣獲するなり所謂擬蟲釣として現に相模地

方にては盛よ行はれつゝあれども未だ以て廣く世に歡迎流布するに至らざるなり蓋し其擬蟲の製作不完全よして顯著ある効果を收め得ざるに基因せざんばあらず元來此法たるや昆蟲の水上を飛行するの際魚類の跳躍捕獲するの狀況より案出せるものあるを以て其意匠材料色彩等今一層の思考を凝し昆蟲家の意見を參酌し之か製作を改良したらむには爲よ魚類の注目を惹起し釣漁を容易ならしめ全國を横貫する大小の川流各地に散在する無數の湖澤中より此法よより年々多額の漁獲を爲し延ひては國家經濟上好果を呈するに至らん乎而して此法たる從來専ら淡水魚類を漁するのみなれ共更に擬餌を工夫せば又以て鹹水魚類の釣獲も應用するを得べしされど海上に遊飛する昆蟲なきが如し然るに既刊昆蟲世界の所報に依れば彼のイチモジセ、リの如きは能く海上數里の遠程を羣集飛越すと云ふ斯る事實よ徴せば擬蟲釣の範圍を擴張するも豈難からんや昆蟲と水産との關係如此聊か所見を陳べ斯學研究家と水産家の參考に供す

◎昆蟲と地名

伊豫 田村晴耕農夫

日本紀に曰く雄略天皇四年秋八月辛卯吉野宮に行幸し玉ふ虻疾く飛び來りて天皇の臂を嗜ふ是に於て蜻蛉忽然として飛び來て虻を齧ひて去る天皇其心有るを喜び玉ひ蜻蛉を讀し此地を名けて蜻蛉野と爲すと昆蟲に關する地名を仔細に調ぶるよ於ては中には面白き話柄となるものも有らん、趣味ある歴史を有する處も有らん左に昆蟲名と呼ばれたる地名を報じて日永のお伽草とせん

京都市下京區蟻螂山町、近江愛知郡八木莊村蚊野外、伊勢度會郡東外城田村蚊野、上野北甘樂郡吉田村蚊沼、備中阿哲郡新砥村蚊家、日向兄湯郡高鍋町蚊口浦、渡島爾志郡乙部村蚊柱、下總印幡郡野原村松蟲新田、肥前西彼杵郡蚊燒村、膽振虻田郡虻田村、越後南蒲原郡鹿峠村蝶名林、岩代耶摩郡吾妻村蠶養、美濃加茂郡蜂屋村、近江栗太郡大寶村蜂屋、駿河庵原郡飯田村蜂ヶ谷、阿波海草郡中木頭村蜂ヶ谷、下野那須郡川西町蜂巢、肥前杵島郡住吉村蜂巢、信濃東筑摩郡松本町蟻ヶ崎、上野吾妻郡伊參村蟻川。

◎泥負蟲の冬期潜伏箇所就て

長野縣 中浦 藤吉

余は昨年十一月諏訪郡農事巡回教師の任を受け、赴任後、該郡よ於ける農作物各種の事項に就き調査せしに、稻作の害蟲たる泥負蟲の繁殖甚しく、最も慘害を逞ふする箇所あり。即ち同郡の東方よ聳ゆる、八ヶ嶽の山麓たる泉野、豊平、湖東、玉川、原の五ヶ村とす總て泥負蟲は、山間の冷水の掛れる田よ繁

殖し、其區域狭小なるものなるに、該所に就き、其被害の度を調査せしに、何れも箇所に因りて多少の輕重ありと雖ども、其繁殖區域全面に亘り、加害の度も意外に甚しく、爲す稻は生育時期遅れ、收穫の減少を蒙ると甚しきを知り、昨年十二月泉野村に出張し、冬期間に於ける、成蟲の潜伏所搜索は從事せり其狀況次の如し。

昨明治三十六年十二月二日、早朝より同郡泉野村へ出張し、同村長に相談して人夫四人を出さしめ、同村大字槻木の田圃よして毎年被害甚しき箇所に就き搜索に就事せり、最初各稻田の畦畔に探求せしも見當らず、次に小溝の水流に沿ふ畦畔に就き探求するも、之れ又見當らず、夫れより八ヶ嶽より流出し、同村を貫流する柳川の中洲ある、沙山の各暖所を搜索せしに、始めて野管の株中より成蟲の潜伏するを發見し、夫れより同所に在る此類の草株を取調たるに、大抵野管或は萱株中にて、砂の入り込み居るもの、砂中に淺く潜み居るを發見せり。其數凡そ十頭乃至廿四頭なりき。夫れより、山より生ずる萱及畦畔に生せる野管萱の株を驗せしに、何れも蟲の潜伏せざるものなし。茲に於て、始めて冬期間に於ける、此蟲の潜伏ヶ所を知れり、其後、本年二月二十七日、重ねて同村へ出張し、其後の經過を驗せしよ、とき即ち嚴寒積雪の候なりければ、積雪を掘り、萱管の株を取調べたるに、蟲は前の如く沙中に潜み居らずして、此等株の根元に出で、其莖葉に附着し居れり。之れ、即ち當地は寒氣最も強き所にして、寒中の氷結甚しく大抵地下四五寸迄は氷結し、一面の氷板とある、故に彼れ此氷板に閉ち込めらるゝを恐れ、株上に出で其莖葉中に潜むものなふんと察せらる。其後、三月廿七日又同村へ出張し、其經過の狀態如何を驗せしよ、此時期は既に暖候に向ひ居り、地中甚しく氷結するとなきを以て、又昨年暮の如く株に在る沙中は淺く潜み居れり。

編者云ふ本誌第一卷第三號論說欄内に於て理學博士佐々木忠二郎氏の泥負蟲調査の顛末を掲載せしが今又該蟲に付中浦氏より冬期潜伏個所に就て研究せられし記事を寄せられたれば之れを記すことなしの讀者夫れ兩々相對照せば利する處蓋し尠からざるべし



通信

◎學童の害蟲驅除成績表の出品

(續)

鳥根縣農事試驗場

田中房太郎

前號に於て今回第五回内國勸業博覽會に出品せし鳥根縣八東郡學校生徒害蟲驅除効果表あるものを紹介し置きまが茲に該の解説書をも記載して讀者の參考に資せんとす。

解説書

名

部 類 番號 品

九 四九 一 鳥根縣八東郡學校生徒害蟲驅除効果表

出品人 鳥根縣八東郡長 村上壽夫

材料 鳥根縣八東郡民の概ね農業を以て生業とあすが故に農業に關する思想を養ふは即ち其生活に必須なる知識を授くる所以なりとす仍て農業上害益蟲に關する思想養成の一方法として又勤儉儲蓄の美德を涵養するの一端として且又勞働の良習を造成するの一助として明治三十五年二月本郡長は學校管理者及小學校長、實業補習學校長に訓示して左の方法を實行せしめ毎月學校生徒の捕獲せし害蟲の數及び驅除に従事せし生徒數并に害蟲賣却代金等を報告せしめ之を統計せり

- 一、學校生徒をして害蟲及其卵塊等を捕獲せしむること
- 二、捕獲したる害蟲及其卵塊等を村農會等に買取らしむること
- 三、賣却したる代金は驅除に従事せし生徒に分付し貯金に充てしむること

効果の計算法 明治三十五年中各學校生徒の捕獲したる害蟲及其卵塊數并に其生徒數貯金額を統計し尙之を螟蟲の驅除より生ずる効益の推算を詳記し之を印刷して各學校管理者及學校長に配付せしが學校長は之を教材に管理者は一般農民に對し講話の材料に用ゐたるを以て其裨益實に尠なしとせ之而して其の効益の推算は第一化期第二化期の兩期に區分せしにより今第一化期に於ける推算を左に掲ぐ

明治三十五年中螟蟲第一化期捕獲數

螟蟲幼蟲總數	同蛾總數	同蛹總數	計	雌蛾數(上列計)
五、三五	二、四六	二、〇八	二、九六	二、四四

(備考)幼蟲、蛹、蛾は各雌雄の比例五分五分の割合と仮定す

雌蛾産卵塊數	卵塊數(採取ノ分)	卵塊數計
一四八、四五八	一八四、六四八	三三三、一〇六

(備考)雌蛾は卵塊一箇を産するものと仮定す

卵塊數	一卵塊數	卵塊總數	孵化すべき幼蟲の數
三三三、一〇六	八〇	二六六、四八〇	二二、三二八、七八四

(備考)總卵數の内二割は死し八割は孵化するものと仮定す又一塊の卵數は平均八十個と仮定す

孵化すべき幼蟲數	雌蛾産卵塊數(二化期)
二二、三二八、七八四	一〇、六五九、三九二

(備考)幼蟲の内二分の一を雌蛾とし雌蛾は卵塊一箇を産するものと仮定す

卵塊數 一塊
卵數 一
總 卵 數 一
孚化すべき幼蟲の數 一
三〇八、五三、八〇 八五、五三、六〇 六三、〇〇、六八

(備考) 總卵數の内二割は死し八割は孚化するものと仮定す
今稻の株數一坪七拾株とし株張を合せ一株の莖數を十本とし一坪の總莖數を七百本と定め第二期期の幼蟲一匹は稻一本宛を白枯せしむるものとせば其被害坪數及改算反別左の如し

被害總坪數 九七四五七、二、九八
改算反別 三二四八、五二三

本郡米作一反歩平均収納額一石五斗八升なるにより損失石數及其價格左の如し

被害反別 一反歩收米 損失總石數 同上價格
三五八、五三 一、五六〇 五三、七五 五三、七五〇

即ち僅に本年螟蟲第一化期中學校生徒の驅除したるのみにても學校一ヶ年度の經費を支へ得て尙餘裕あるを見る況んや地蠶浮塵子其他害蟲驅除に係るものを併算せば其効益の更に偉大なるべきに於てをや

審査請求の主眼 一、實業に關する思想を涵養すること。二、害益蟲の智識を興へ併て驅除豫防保護の必要を知らしむること。三、勞働の良習を造成すること。四、生徒をして貯金をあさしめ且勤儉儲蓄の美德を養成すること。五、實業の發達を圖ること。(完)

◎岐阜縣郡上郡の蟲報

岐阜縣郡上郡産の鞘翅目中種名の分明ありしものを報導せん而して其名稱は多く松村氏著日本昆蟲學に則りたるものあり。

郡上郡上保村 塩田 健藏

- 瓢蟲科 ●テンタウムシダマシ ●ナナホシテンタウムシ ●ムゲテンタウムシ ●ヒメアカホシテンタウムシ ●シロホシ
- テンタウムシ

(備考) 米價一石拾圓と仮定す
即ち五千百三十二石餘は螟蟲驅除の爲損失を免れたるものとすを得べく又價格にしては五萬千三百二十七圓餘の損失を免れたるものと云ふを得べし
試に之を本郡各村の公學費に比較するば左の如し

明治三十四年度公學費總計	四二、五六一	總校數	一校	平均額
害蟲驅除ノ爲損失ヲ免レタル額	五二、三二七、五一〇	總校數	一校 <td>平均額</td>	平均額
損失ヲ免レタル一校平均額	八六九、九五八	公學費一校平均額	一校 <td>平均額</td>	平均額
		公學費ニ對スル割合		
				八六九、九五八
				一、二〇五強

- 天牛科 ●クハトラムシ ●ハナカミキリムシ ●ゴマカミキリ ●ベニカミキリ ●シロスズガミキリ ●ホタルカミキリ
- クロカミキリ ●カミキリ ●キクスロ
- 象鼻蟲科 ●オホザウムシ ●イ子ザウムシ ●オトシアミ ●ヒメクロオトシアミ ●ヒメザウムシ
- 元著科 ●マメハンメウ ●ツチハンメウ
- 金龜子科 ●ダイコクコガ子 ●マグリコガ子 ●センチコガ子 ●ヒメゴガ子 ●マメコガ子 ●サイカチムシ ●ハナム
- グアリ ●オホハナムグリ ●カナブン
- 锹形蟲科 ●ミヤマクワガタ ●ノコギリクワガタ ●ヒメクワガタ
- 埋葬蟲科 ●シテムシ ●ヨツメモユマ ●シルフア ●アカクビシルフア
- ガムシ科 ●ガムシ ●コガムシ
- 龍蟻科 ●ゲンゴロフ ●キスザゲンゴロフ ●コシマゲンゴロフ ●コクロケンゴロフ ●スナムグリ ●オホスナムグリ

◎小學兒童害蟲驅除成績表

大分縣 藤澤節太郎

吾大分縣北海郡は昨三十五年小學校兒童を督勵し苗代田に於て螟蟲驅除を行ひしが其成績表及説明は左の如し

明治三十五年苗代田ニ於ケル小學校生徒害蟲豫防成績表
(△印は高等小學校、無印は尋常小學校)

校名	教師が生徒ヲ引 率シテ捕獲セシ		生徒が隨意 ニ捕獲セシ		合計	
	蛾數	卵塊數	蛾數	卵塊數	蛾數	卵塊數
宮河内	八三四	四〇七	四四七	二六六	一二八一	六七七
種道	八三	三六	二五一	二三七	二九三	二六三
丹生	三七五	二九五	二四九	二八〇	六八四	五〇五
西大在	九四	二六六	七三	四八七	一六六	七一五
大在	五〇〇	三〇〇	一九七三	八〇六	二〇七〇	八三六
市尾	三三九	一五三	一〇七三	一九四	一四三三	三〇六六

校名	教師が生徒ヲ引 率シテ捕獲セシ		生徒が隨意 ニ捕獲セシ		合計	
	蛾數	卵塊數	蛾數	卵塊數	蛾數	卵塊數
木田	五八三	一四九八	四三三	五三三	一〇一五	二〇三二
佐賀	—	—	—	—	—	—
木佐上	七五八	四八五	一四八四	三〇九	二二四二	七八五
神崎	二〇三五	一五〇九	七三五	九三〇	二七六〇	二四三六
大志生木	二八三	三二八	九四二	二六八	三八〇	五九五
佐志生	一六五〇	五二五	一五三	三三〇	一七〇三	八八二
下ノ江	三〇七	六三〇	三六七	七六三	一〇七四	一四九三
藤河内	三三三	—	—	—	—	—

熊崎	六〇〇〇	三〇〇〇	七九〇〇	六〇〇〇	一三九〇〇	九〇〇〇	青江下	四五	四八	三三二	三二八四	二五九二
上北津留	四〇〇〇	七三三六	—	—	四〇〇〇	七三三六	津久見	一〇一六	七六	—	一三	一〇一六
中白杵	—	四五〇〇	—	—	—	四五〇〇	千怒	一三六四	五九	—	三三	一三六四
下中白杵	六元	三七七	—	—	六元	三七七	△北部	—	—	—	—	二〇五九〇九
上南津留	—	—	—	—	—	—	△下北津留	二七〇	三五〇	五〇七五	一六八四	七四五
下南津留	五〇〇	八二七	—	—	五〇〇	八二七	△上北津留	四七四	五七一	二七〇	一六五七	七四四
市濱	—	二二七五	—	—	—	—	△南部	八三	二〇二	一八七一	三五五	二七六四
堅徳	三三九	一七四	一〇六	一八五	三四五	一九九	計	—	—	—	—	四四二二〇
青江上	一七三	六〇〇	三三	一〇一五	二〇元	七三三						

豫防驅除實行の爲め生ぜし効果の要點は左の如し

一、生徒の昆蟲志想を養成し益蟲の愛護をべく害蟲の嫌惡すべくして驅除の必要なることを知らしめ惹て父兄農民を感化せり 二、公共心を惹起せしめたり 三、共同驅除の必要を悟らしめたり。小貫農學士の調査によれば螟蟲は一雌蛾にして平均三百粒以内二百五十粒以上の卵を生じ又一卵塊卵粒の多きは二百六十五粒少さも三十粒にして二十個の卵塊平均の卵粒は九十二個余なり此計算より前表示處の卵塊の生育する場合は如何なる被害を及ぼすやを統計的に示せば左の如し 但卵塊中には二化性螟蟲三化性螟蟲の卵塊混和せしも計算の便宜上總て二化性の者とせり卵塊總數は四十四万五千三百個にして一卵塊の平均卵粒數を九十二個とせば總卵數は四千六百八十八万四千四百二十四。此幼蟲は蛾化ため孵化又は發育せざるものありとし。第一回發育の幼蟲數二千八十万四千四百二十四。此幼蟲は蛾化して雌雄相半するものとし雌蛾の數千四十万二千二百四十四匹なり一雌蛾二百五十粒を産卵せば總卵粒數廿六億五十五万二千五百粒あり内五割は敵蟲の爲め孵化又は發生せざるものありとし。第二回發育幼蟲數十三億二十七万六千二百五十四。今此幼蟲は各一本の稻を枯死せしむるものとし前記第一回第二回の幼蟲の爲め損失する處の稻數は合計十三億二千八百八十八万六千七百七十本に於て一本の稻は平均百粒の稲を結ぶものとし其粒數一千三百二十一億〇八百六萬七千七粒なり一升の粒數を四万粒とし其容量三萬三千〇二十七石〇一升六合七勺五才あり之れを五割摺とし産出する、玄米容量一萬六千五百十三石五斗〇八合五

勺七才の被害にして換言せば小學校生徒の豫防し得たる効果あり。今又本郡に於て米の最近平均産額を見るに三萬七千八百十六石六斗なれば前記豫防高は此平均産額の四割三分六厘強なり豫防の効力又大ならずや。

◎土佐産の蟲報 (第九)

高知縣土佐郡 武内 護 文

○鞘翅類瓢蟲科 (一)テンタウムシ。(二)ナ、ホシテンタウムシ。(三)シロホシテンタウムシ。(四)ヒメカメノコテンタウムシ。(五)オホテンタウムシ。(六)セスチテンタウムシ。(七)ヒメアカホシテン

タウムシ。(八)クビアカテンタウムシ。(九)アトホシテンタウムシ。(十)コクロテンタウムシ。(十一)テンタウムシダマシ。以上の數種中(一)は菜園よ多く來り、菜甫には比較的少し。(二)は之れに反す。

(三)は野生の薔薇其他小雜草木に多く、(四)はミヅツバ、蓼藍等の蓼科植物に來るもの多く、又其他の雜草に在ると少からず。而して此四種は晩春よりは、皆多く麥類に集り、早春よりは獨り(二)の紫雲英田に多きを見る、此内(一)(二)は全縣到る所に多く産し、(三)(四)は之れに次ぎ、(五)は到る所の桑樹に於

てのみ、之を見ると雖も、余り多からず。(六)に至ては、雜木間を搜て、偶然其一頭を獲たるのみ。(七)は到る所の桑樹菓樹等に、早春二三月の頃より、幹枝に匍行す。(八)は野外に於ては未だ其成蟲を得ず

と雖も、幼蟲は時よ桃樹に於て、ダイアスピス貝殼蟲の蛹を食すると少からざるを見る。(九)は山野の小木に多く之を見、(十)は稀に菓樹に之を見る。(十一)は馬鈴薯、茄子等に加害するとは比較的少く

専ら酸漿を食とす。而して其幼蟲の發生せるは、主として夏月陰涼の地に茂生せる酸漿に在りとす。土佐に在りては、瓢蟲科中有害のものは僅よ此一種あるを見るのみ、其他此科中小形の種に至ては、種名の不詳なるもの亦少からず、而して籬邊の竹蟲を食ふ一種は、最も大形なりとす。

○偽紅色葉蟲科 ヨツホシハムシダマシ。体長二分許、後方少く狭まり、脚細長にして、全体漆黒に

四黃小班あり。稀よ朽木皮下に於て發見するものは、即ち是ならんか、疑の儘之を掲ぐ。

○乾鰹蟲科 (一)カツラブシノムシ。(二)カマキリタマゴノムシ。(三)は鰹魚が膝下の主要物産の一

に在るを以て、大害蟲の一に加ふべき者なり。而して又乾藏の魚肥類を蠹蝕すると少からず。(二)は蟻

螂の卵を蝕害する小形種にして、其多毛の幼蟲が、蟻螂卵塊中よ群棲するに因て、俗に此卵塊を以て、

蛄斲類の巢なりと呼ぶの好證となすとあり。予は其成蟲の標本僅に一頭を有し、未だ檢鏡をなさずと雖

ども、此科の一屬なるを信す。種名は一に準じて仮りに之を附し置き、後日先識者の命名あるを知るの時、之に順はんと欲す。

○圓形蟲科 コマルガタムシ。夏月動物の死体に多し。此科の大形なるものは未だ之を獲ず、或は褐色にして堆肥中に在るものあり、稀よ之を見る。

○木蝕蟲科 キクヒムシ。体長四分内外、黒色よして翅鞘に赤紋あり。穀斗科の蠹傷中に在るものは即ち此種に非ずや。

○擬蟻科 (一)ルリホネムシ。(二)アカアシホシカムシ。(三)アカクビホシカムシ。共に鳥獸の腐肉に於て之を見る、而して(二)(三)は乾藏の魚肥よ來集すると少からず。

○吉丁蟲科 (一)タママシ。(二)ウバタムシ。(三)ヒメタママシ。此三種中(一)は夏月椶樹に多く、(二)は松樹に多し。(三)は往々山野の花上に見るとあり。其他、金綠色を呈するもの二種、(二)の形色に似たるもの二種あるを見るも、産數少く、マメタママシの形をなせるもの二種あり、産數稍多く、夏月点々樹葉に之を見る。

○叩頭蟲科 (一)サビキコリムシ。(二)コメツキムシ。(三)ウバタママシモドキ。(一)は夏月山野の土上、草莖等に於て之を獲、(二)は多く草上よ之を獲、(三)は飛揚するものよりは寧ろ樹上よ於て多く之を見る、而して冬月は、稀に朽木の皮下に之を見る。此三者は、夏月到る所に之を見る。朽木皮下を搜て、大形にして尾端の針斷せる針金蟲多きを見るは、想ふに(三)の幼蟲ならん。海濱の沙土中には、冬月多く、尾端の錐狀をなせる針金蟲の、越年せるものあり。土佐に於ける甘蔗作及び麥作の大害蟲なり。其他、小形なるものは、土上或は花葉上に於て獲るもの、其種類甚だ多く、最小なるものは体長僅に一分に充たず。ヒゲコメツキムシは之を産するも、稀少特異なるを見る。

○螢火科 (一)ホタル。(二)ヒメホタル。(三)キクスヒモドキ。(四)ヒメキタスヒモドキ。(五)クロ

キクスヒモドキ。以上の數種中(一)は山間の溪畔よ主産し、(二)は到る所よ多し。(三)は最も普通にして、成蟲は稀に麥穂を咬嚼し、或は他蟲を捕食するを見る。(四)と(五)は、(三)に次て之を産す。キクスヒモドキの種類にして、銅紫色を有するものは、北方の山中よ主産し、最も大形とす。ウバホタル

は山中にのみ之を産するを見る。

○死狀蟲科 ヘウホナムシ。未だ動植物の標本に加害するを見ずと雖ども、冬期寒氣酷烈の時よ於て

も、室内に出て来るもの少らざるとあり。

○花蚤科 ハナノミ。此一種を花上に於て獲たるのみ、未だ他種を發見せず。

○蛾形蟲科 (一)オホクハガタムシ。(二)クハガタムシ。(三)ヒメクハガタムシ。(四)ノコギリクハガタムシ。(五)ミヤマクハガタムシ。此五種は、山中穀斗科植物の樹液の滲出せる所は、大概之を見るとき雖ども、(四)と(五)は其數極めて少く、(二)と(三)は又た柳樹にも来る。

○金龜子科 (一)ダイコクムシ。(二)クソコガ子ムシ。(三)コウカコガ子ムシ。(四)ピロウドコガ子ムシ。(五)ヒゲコガ子ムシ。(六)コフキコガ子ムシ。(七)シロスデコガ子ムシ。(八)マメノコガ子ムシ

(九)コガ子ムシ。(十)ヒメコガ子ムシ。(十一)ドウガ子ムシ。(十二)ハナモグリ。(十三)クロハナモグリ。(十四)カナブイブイ。(十五)カブトムシ。此種の中(一)は頗る少く、(二)は到る所路上、十、十一月及び二、三月の頃に多し、(三)は山中に之を獲、(四)は多月石下、土中等に於て稀に之を見るも未だ春秋間より於て多く加害するを見ず。(五)は嘗て高知市附近之を見ず、高岡郡の某地に於て、採取したる一頭を見たり。(六)は夏月山中に於て、到る所之を見。(七)は松樹に於てのみ之を見る。此二種は近時餘り多産せり。近時多産して、松樹を占居するものはシマコガ子あり。(八)は最も多産し、豆類に加害すると少からず。又野生の薔薇等も多し、略ぼ(十)と食草を同す。(九)は又さ一般に多く、往々作物葉を害す。(十二)も亦最も普通にして、葉實に加害すると少からず。(十二)と(十三)は花上より多く、(十四)は他蟲を壓して、樹液を集る。(十五)は幼蟲を堆肥中に見ると頗る多くして、成蟲を樹上に見ると少し。成蟲には驚くべき大形のものあり。此他、猶ほ他種類を産す。

○天牛科 (一)ノコギリカミキリムシ。(二)トラフカミキリムシ。(三)ホシカミキリムシ。(四)クハノカミキリムシ。(五)タケノトラフカミキリムシ。(六)ハナカミキリムシ。(七)タケノベニカミキリムシ。(八)キクスビ。(九)オホキクスビ。(十)セスデカミキリムシ。(十一)ホタルカミキリムシ。(十二)ヤハズカミキリムシ。(十三)カミキリムシ。(十四)ミドリカミキリムシ。以上の數種中(一)は夏日到る

所の林間に之を見るも、産數敢て多からず。(二)は桑樹に於てのみ之を見、(三)は主ら柳樹に集り、又山野の諸木にも少からざるを見る。(四)は桑樹を害すると最も大なり。(五)は山野に棲み、又家屋内の竹器を來る。(六)は夏日花上に來る、然れども近時高知附近には、殆ど之を見ず。(七)は往々成蟲の越冬せるを見る、春期は往々麥類の莖葉上に來ることあり。(八)は山中に多く、(九)は山中及び菜園に少

からず、加害亦多し。(十)は中形にして黒色に、且つ赤條を有するものは是ならん。僅に一頭を獲たるのみ。(十一)は多く産せずと雖ども、亦獲難きの種類に非ず。(十二)と(十四)も亦同じ。(十三)は櫟、樅、樹及び栗樹の加害を擅にし、到る所之を産せざるはなし。其他、松樹に於て獲たるもの大小三種、大形長角のもの一種、中形乃至小形のもの、頗る多種を産するを見る、予嘗て土、阿の國境に於て見たるもの及び他の鞘翅目採集者の集むる所を見るに、往々中形以上の種にして、頗る異形なるものもあり。想ふに全縣皆山にして百種の樹林に富む我高知は、遍く踏査すれば幾多の異種を發見するや、未だ測り知るべからざるなり。(未完)

◎害蟲驅防に關する建議

靜岡縣 岡田 忠 男

靜岡縣農會は、本月七日の總會にて、左の如き害蟲驅防上に關する決議をなし、已に知事に建議したれば、茲に報告す。

害蟲驅防に關する教習を警察官吏に施行する建議書

害蟲農作物に於ける恰も疫癘の人命に於けるが如く其の禍害の劇甚にして其の損害の多大なる敢て論を俟たず本縣下の如き氣候暖和にして各種農作物の生産上天與の利便を有すると共に害蟲の生息繁殖にもまた適恰し人力を以て之れが絶滅を圖ること最も周到なるにあらずんば生産上の天恵は空しく害蟲の爲めに滅却せらるゝ虞あり國家の害蟲驅除豫防法を布き之れが防除の功を奏せんとする寔に宜なりとす本縣各階級農會或は講習講話に其の禍蟲を説き或は實地に是れが防除の方法を指示し當業者を提携し百方努力して措かずと雖ども未だ効果を完するを得ざるは深く遺憾とする所にして又憂慮に堪へざる所あり蓋し其効を奏するの難きは害蟲繁殖の強勢少しに因ると雖ども復た當業者の盡力未だ周到ならざるに職由せざんばならず而して當業者をして充分に盡力せしむるは農會其他督勵の任にある者の當り勉むべき所たるや勿論なるも之れを現今の情勢に徴するに郡村駐在の警察官吏をして督勵一層適切あるを得せまめば其の効果彌々大あるべきを思ふ警察官吏の督勵適切なるを得んには害蟲驅除豫防并に益蟲保護に關する適當の觀念を得せしむること殊に緊要あるを認む而して之を行ふの方法は巡查教習科中に害蟲防除の一科を加へ尙ほ郡村駐在警察官吏をして便宜之れを修むるの要を訓示せらるゝに在り若し夫れ講師の如きは官民其の人乏しからず窃に聞く所に據れば福岡島根兩縣の如き既之を實施し其他地方に於ても今や其の準備中にある者一二として止まらずと謂ふ閣下幸に明察を垂れ速に之を施行せらるゝに

於ては其効果蓋し顯著あるを信す。
右本會總會の決議に因り謹で建議候也

静岡縣知事宛

静岡縣農會 會長

◎三重縣阿山郡の昆蟲方言

第八回全國害蟲驅除講習會修業生

三重縣

西岡嘉十郎

我三重縣阿山郡地方に於ける昆蟲の方言は、本誌第五拾參號通信欄に於て、是れを報じ置きしが、其後予は所用ありて、長田、島ヶ原、小田の各村を巡回したる際、尙左記の數種を探り得たれば、是れを追報せん。

- 野蠶をノガイコ ●キクスイダマシをホタルノオバ ●ウバタマムシをクソタマムシ ●桑蠶をシロコ ●オニヤンマをヤクワントンポ ●キリウジカガンボをカノオバ ●桑天牛をケキリムシ ●天牛をドクムシ ●タガメをドテダ、キ ●トンボ類を凡てドンボ ●ヒメカマキリをカマキリノ三番子 ●蠶をカイコサン 又オカヒコ女郎サン ●マツモムシをアオノギムシ ●マツノコバチをマツモシ ●ノミをアカウマ ●茶毛蟲をホウジヨウムシ ●凡ての繭をマヘ ●トンボの幼蟲をヤモメ

◎昆蟲に關する葉書通信 (第三十報)

明治卅五年十二月廿八日 豊前國企救郡城

(一六五) 廿四鳥羽蛾の一產地(福岡縣企救郡、矢野宗幹)

野村大字城野の雜樹中にて此蛾を得たり。

昆蟲世界第六十五號口繪に御記載有之候セシ

(一六六) 蟬寄生蛾の一產地(栃木縣宇都宮市、水野清) 致せるを余の認めしは數年前の事ニ候も其當時更に意に留めざりしのみならず寄生蟲たることは夢にも知らず候、愚弟等の夏日採集め玩ぶ所の蟬を見るニ此寄生蟲の害を被り居るは多くミンミンゼミ及びヒグラシゼミニ於て認め申候夏日に至り候はば必ず採集致し御參考の爲御送附致すべく候雜誌記事中其產地は滋賀、富山、鳥取及岐阜縣等とす恐くは猶多くの分布地ある云々との事故當縣も慥に分布致し居り候故一筆御報導申上候(三月十九日附)

(二六七) 郡會の決議事項(三重縣阿山郡、西岡嘉十郎)

當三重縣阿山郡會は去る二月十四日より十七

日迄四日間開會せしが決議事項中昆蟲に關する事項次の如し(一)蠶業講習會費金四拾六圓八拾五錢(二)害蟲驅除講習會費金五拾六圓貳拾九錢(三)蠶病消毒獎勵費金九拾九圓(四)螟蟲卵買上補助費金百五拾圓

(二六八) 水棲昆蟲の動靜に就て(在堺市水族館、藤田政勝)

御寄贈被下候水棲昆蟲の爾來動靜に就き

次ニ御一報申上候。淡水槽廿九號を熟覽致し候得ば底にハ小砂水中にはクロモ、ヤナギモ茂生し隅には古き棒杭四五本突立て居り何んもなく物騒の水中、所で杭にはトンボ幼蟲、ミヅカマキリ、ゲンゴロウ各々割據して窺ひ居り底にはイシミノムシ類ノコ〜と匍ひ廻り居り水上にはミヅスマシ、マツモムシ陣取り恰も戰爭や今に開かれんとするの模様を浮ばせ申候偶に魚肉二三片を投與致し候へば佐々木先陣をキメ込むのはゲンゴロウにて次ぎはトンボ幼蟲ニ候互に食を取り合ひ爰に一大活劇は開始致され候次第誠に生存競争の眞景を一目窺知致すを得如何許りか世人の腦裏を刺撃致すか知れませんと存居候。尙面白き顯象は此水中に針魚即トゲウヲを二三尾入れ置き申候所恰も天然の境遇に於けるが如くトゲウヲはイシミノムシを食ひ回り申候、所がゲンゴロウ先生は忽然隅より躍り出てトゲウヲにかみ付き遂に是を斃し食ふ有様丁度互に敵討の状況を見るに異ならず候實に水棲昆蟲と魚類との關係ニ就ては大に研究を要する次第に候。如此有様にては所謂農業上の益蟲たるトンボは大に水産上の害蟲と云はざるを得ざる次第かと存候從て小生の主唱致居候其専門ノノ範圍内ニ於て害益蟲を區分し是れが保護、驅除を致せが大に必要の件と信玄て疑はざる次第に御座候。マツモムシ先生は一向元氣なく中々水中ニ入らず別に面白き様を呈し申さず候。却てトンボとかユリハナスヒ、ゲンゴロウ、ミヅカマキリの方が面白く見物人に感を抱かせ申候云々。(三月廿二日附)

(二六九) 害蟲報告(岐阜縣益田郡、松下千吉)

(一)桑樹ニハシムシ、カミキリムシ并に貝殼蟲、枝

尺蠖等に於て姬象鼻蟲は見當らず(二)稻田ニハ螟蟲のみにてウシカ等は見當らず(三)麥畑ニハキリウジの害あり(四)馬鈴薯の害蟲廿八星瓢蟲は近くの暖氣にて這ひ出せり(四月七日附)

(二七〇) 昆蟲研究會の發會(鳥取縣東伯郡、足羽財藏)

鳥取縣東伯郡昆蟲研究會の發會式舉行は四月

廿五日の豫定なり(三月廿六日附)



雜報

●作物病蟲害展覽會の昆蟲標本 此記事は本月一日より開會の大阪府農會主催の作物病蟲害展覽會場を愛知縣田中周平氏が縦覽せられし際の所感を本月四日岐阜縣昆蟲學會に於て演說せし大要にて今其原稿を得たれば茲に掲ぐることになしぬ

四月一日大阪府立農學校に到り同府農會開催に係る作物病蟲害展覽會を觀る本日始めて開場したること未だ整頓に至らざれども陳列第五箇室の内三箇室は殆んど陳列を終りたれば夫等に就き左に昆蟲に關するもののみを記して讀者に紹介せんます、第一室は昆蟲標本及び昆蟲圖畫を以て充たされたり中にも名和昆蟲研究所の製作に係る害蟲標本四拾八箱は每箱植物を挿入し害蟲との關係及經過を示されしは用意周到といふべし、尙同所出版の益蟲集覽(説明書付)害蟲圖解あり、愛知縣農事試驗場より害蟲標本四拾八箱、其他害蟲被害圖、同縣除菌、根好蟲、愛知縣分布圖の出品ありて害蟲標本には箱の底に植物を圖し其上に蟲を配せられしは上出来なり、同縣中島郡服部松之丞氏出品の介殼蟲標本一箱愛媛縣南宇和郡長月山口大吉氏出品の夜盜蟲標本一箱大阪府藤戸作次郎氏出品の浮塵子被害稻葉散葉は何れも餘り感服し難く富山縣坪田辰雄氏出品は中央に吉丁蟲を置き周圍に益蟲九種を配せしは如何に朽木縣下都賀郡富山村富田孝太郎氏出品の害益蟲標本は大形なる箱一個を以て左右二つに區別し右方には害蟲を左方には益蟲を配布しあれども其益蟲の中に害蟲の混入したるは目障りなりき大阪府門脇邊治馬氏の出品は害蟲十數種を十區に配置し每區害蟲數へ歌を添へたるは面白けれども歌には字辭あるを遺憾とす、岐阜縣揖斐郡昆蟲學會出品の害蟲標本五箱奈良縣農事試驗場出品の害蟲標本二箱兵庫縣明石郡井上藤太郎氏出品の害蟲標本一箱益蟲標本一箱は共に優秀のものならん、大阪府農會出品の昆蟲標本二拾六箱は製作排置共に感服する程の價値なし去れど府農會(長?)作岡氏の言に該標本製作人は誰を師とせしたるにあらず全く我流なれば体裁拙なれども斯道に熱心の程は實に感服の外なしと、愛知縣農事試驗場よりは根好蟲飼育試驗器の出品あり太坂府三島郡吹田村農會出品の害蟲圖解統計表及苗代田所在地畧圖は實べし愛知縣邊境郡より岡田順蟲探別法成績の出品あり尙其他數点の出品あれども出品人未詳なれば畧す、第二室に入れ此處は全く南河内郡農會出品の螟蟲探別成績及苗代田模型を以て充たされたり今同郡農會に於て實行したる方法を聞き得たれば其大要を述べん同農會にては明治三十五年四月各小學校教員及び兒童に對し害蟲圖解講

習會を開き同年五月廿九日螟蟲卵買上法を決議せり、苗代田は短冊形にして共同苗代さなし一個所百五十坪以下は許可せず、藁は田野に積み置くことを許さず(或る期間なるべし)若し聞かざるときは焼き棄つることせり、買上卵塊百九十万五千五百八十六、一塊の買上代金六毛つゝこし凡て郵便貯金壘紙及切手を以てし現金を與へず之れを奨励金と名づく其金額壹千百貳拾五圓七拾八錢五厘なりき、内兒童一人に對する最多額の奨励金を受けしは加納尋常小學校にして平均一人に付實に貳圓四拾貳錢に當り採卵數の最多平均を擧ぐれば白木村の一反歩平均七千八百三十二塊にして兒童一人一時間の平均實に百四拾六塊を採集せしと驚くべきとならずや且教師の監督宜しきを得て苗を傷むる等のことなく多數の卵塊を採蒐せしかば大に各町村に歡迎せられたるより本年は之れに倣ひ大阪府下一般に買上法を實施することに確定せりと聞く、兒童は之れより大に貯蓄心を興し昨年末に於て貯金總額四千九百九拾八圓壹錢四厘に達せりといふ、第三室に到れば害蟲驅除器械を陳列し室外には北河内郡農會より蒸熱藁の出品あり該藁は螟蟲被害藁を集めて天保山に運び蒸氣殺蟲法を行ひたるものにて今尙同法を行ひつゝありと聞く、刈取再出稻試験成績(螟蟲被害の稻を悉く刈取て其株より發芽せしめ收穫の如何を試みん爲め昨年は無害の稻を以てせり)

刈取期

刈らざるもの

七月九日刈

七月十九日刈

七月廿九日刈

八月十日刈

玄米收穫高

一、五五二

一、四〇五

二、一〇七

一、九二〇

一、六八五

以上は余が縱覽せし大要なるが恰も開會の初日なりし故出品人の名札をも貼付なきを以て誰が出品なるか判明せざれば一々事務員に聞糺したれども記事中出品人未詳とあるは事務員の多忙なりし爲め質問を見合せたるなり讀者之れを了せよ

第十五回全國害蟲驅除特別講習會

三月十日より開講の、第十五回全國害蟲驅除特別講習會は、二十三日迄に普通學科を修了し、廿四日永澤講師及森助手引率の下に、修學旅行として滋賀縣農事試驗場を參觀し、其より比叡山に昆蟲採集すべき筈の所生憎雨天の爲め京都に直行して同地に一泊の上大阪市へ出で、廿六、廿七の兩日は第五回内國勸業博覽會場に到り、全國より出品の昆蟲標本數百

点に就き、一々講習生をして各自批評せしめ、講師は之が判定を下して研究せしは本誌前號の論說欄に於て、博覽會なるものは單に昆蟲學の上より見るも、優に一大活學教室たるの資格を有するなるべしと豫言せしを、今茲も、之を實地に確めたるなり。廿八日は、午前中各自の意に任じ、午後一時より同市東區天王寺清水八百松樓に於て、修業證書授與式を舉行せり。今其次第を記さんに、重なる來賓は貴族院議員田中芳男氏、同氏の令息五一氏、令孫健太郎氏、秋田縣技師農學士小西文之進氏、農科大學教授理學博士佐々木忠次郎氏の諸氏を始め、大阪朝日、大阪毎日、大阪新報、及岐阜市濃飛日報等の諸新聞社員、三宅岐阜縣第四課長、渡邊、林、松尾縣屬、春日、大野の兩岐阜縣勸業委員等の人々よて、席定

まるや、名和昆蟲研究所長は授與式舉行の旨を告げ、次は證書を授與して一場の訓諭を爲し、夫より小西文之進氏の祝辭に代ふる演説、春日善一氏の祝辭朗讀、第二回全國害蟲驅除講習修業生三枝角太郎氏の演説ありて、講習生總代大分縣染矢良佑氏左の答辭を朗讀して、式を終り、暫時休憩の後、全國害蟲驅除講習生の同窓會は移れり。

答辭

天時地利人和三ツナガラ之ヲ併セ得テ茲ニ第十五回全國害蟲驅除特別講習會修業證書授與式ヲ舉行スルニ當リ昆蟲學界錚々ノ名士並各新聞記者及同窓先輩諸君ノ臨場ヲ辱フシ且賜フニ高論ヲ以テセラル本會ノ光榮何モノカ之ニ如カン抑モ萬般ノ事利學ヲ與サント欲スレバ必スヤ先ツ之ガ害物ヲ除去セザルベカラズ我が殖産力ノ増進ハ諸害蟲ノ驅除豫防ニ如クハナシ然リト雖モ經濟的ニ之ガ驅除豫防ヲ行ハント欲スレバ必スヤ蟲類ノ發生經過習性ヲ知悉スルニアラズンバ能ハス生等短時日ノ講習ナリト雖モ懇切ナル名和永澤兩講師ノ薰陶ニヨリ幸ニシテ其一端ヲ窺フコトヲ得タリ爾今以後千挫不屈万折不撓ノ精神ヲ以テ彌益斯學ヲ勉メ近キ將來ニ於テ東西相呼ビ南北相應シ經濟ニ適スル根本的大驅防ヲ行ヒ諸害蟲ノ全滅ヲ期シ大ニ我經濟界ニ貢獻スル處アラント欲ス聊カ蕪辭ヲ綴リ答辭トナス

明治三十六年三月廿八日

第十五回全國害蟲驅除特別講習會員總代

大分縣

染矢良佑敬白

●全國害蟲驅除講習會修業生同窓會

別項記載の通り、第拾五回全國害蟲驅除特別講習會修業證書授與式終了後、引續き開會せり。今其順序を記さんに、出席者百三十餘名にして、名和昆蟲研究所長名和靖氏開會の旨趣を演べ、次に貴族院議員田中芳男氏及び濃飛日報社主筆原眞澄氏の演説あり次に病氣又は差支等の爲臨席出來ざりし左の人々よりの祝詞祝電を披露せり。

工業應用昆蟲叢報の十四 (バイフ)

(大阪市 由比呂太郎寄贈)



發議に係る、左記の數項を決議し、直ちに宴會に移れり。

決議事項 一、同窓會を成るべく年一回開會する事。二、同窓會員間の氣脈は昆蟲世界誌上に於て通ずる事。三、同窓會員間に於て勉めて採集品を交換する事。四、同窓會員に非常の災厄あるときは之が救濟方を講ずる事。五、同窓會員旅行採集のときは常に便宜を與ふる事。

尚、宴會の模様を少しく記さんに、宴席に於て來會者一同へ、名和昆蟲研究所より寄贈の紀念盃、昆蟲世界雜誌并に害蟲圖解、大阪硫曹會社の寄贈品箱入菓子及び大阪市街并に博覽會場全圖、岐阜縣大垣町西

福岡縣桑名伊之吉氏、靜岡縣增田秀雄氏、同縣吉野寅之助氏、鳥取縣岡野庫八郎氏、兵庫縣堂本俊治郎氏、同縣井上藤太郎氏、岡山縣福井克雄氏

次に、第三回全國害蟲驅除講習會修業生大阪府橋本亮氏外二名の

濃印刷株式會社寄贈の紀念昆蟲繪葉書、靜岡縣燒津町吉野寅之助氏の寄贈に係る同氏が特許を受けたる莖切鎌、新潟縣岩船郡神納村佐藤榮氏寄贈の印刷物(岐阜の蟲歌)を配布し、尙大阪硯曹會社由比呂太郎中島喜三郎の兩氏より同窓會費の中へ金五圓、岐阜市安田定壽氏寄贈蝶模様付産、岐阜縣揖斐郡小森省作氏寄贈昆蟲模様付漆器、名和昆蟲研究所の寄贈に係る昆蟲應用の工藝品數十点は、或は餘興の福引として、或は抽籤として、夫々一同へ分配せり。着席は例の蟲名を附して席順を定め、互に相献酬して同窓間の舊交を温め、絃歌盛んよ起りて非常な盛會なりき。

因に記す、今回の同窓會に最も幹旋盡力せられし人々は、名和先生夫妻を始め名和昆蟲研究所員、西濃印刷株式會社の河田貞城氏新農報社の由比呂太郎氏、岐阜縣屬松尾國松氏、林茂氏、山内愷爾氏、第三回修業生大阪府橋本亮氏、第十二回修業生新潟縣佐藤榮氏第十四回修業生大阪府笹部利作氏、同群馬縣高山助太郎氏、第十五回修業生新潟縣山田益五郎氏、同佐藤田次郎氏、同秋田縣富樫明治郎氏、同大分縣染矢具佑氏、同奈良縣松村松次郎氏、同岡山縣原田寛太郎氏等の諸氏なりき。

●特別講習修業生の姓名 別項に記せる第十五回全國害蟲驅除特別講習會の修業生は左表の如く、一府十七縣四十八名なるが皆々熱心と一致により晝夜の別なく苦學の結果其成績に至りては非常に優良なりと尙姓名畧歴等は次の如し。

別組	府縣名	郡市名	町村名	族籍	役名	氏名	生年	月	畧歴
第一組	山形縣	西村山郡	西吾川村	平民	組長	長岡安吉	慶應二年	九月	農事講習會修業、農業ニ従事ス
	山形縣	西村山郡	吉生村	平民		宮本盛一	明治十二年	七月	高溪義塾卒業、村吏員
	千葉縣	印旛郡	八生村	平民		山田新之助	明治十四年	九月	高等小學校卒業、農事講習會修業
	長野縣	東筑摩郡	里山邊村	士族		藤森清	明治十四年	十月	高等小學校卒業、農藝講習會修業
第二組	德島縣	坂野郡	川内村	平民	組長	中瀬陸太郎	明治九年	九月	師範學校卒業、小學校訓導
	岡山縣	北葛城郡	西内村	平民		松村松次郎	明治九年	七月	北葛城郡吏員
	岡山縣	淺口郡	小坂村	平民		中元義忠	明治十二年	五月	農學校農科卒業、淺口郡農會技手
	京都府	與謝郡	上宮津村	平民	組長	武若喜藏	明治十六年	十月	高等小學校卒業、農事ニ従事ス
第三組	兵庫縣	多紀郡	畑村	平民	組長	木寅廣造	明治八年	五月	郡農事試驗場員、農友會幹事
	新潟縣	三島郡	板町	平民		山田益五郎	明治九年	二月	高等農學校在學中
	長野縣	水上郡	大豆島村	平民		河野綾橋	明治十三年	九月	農事講習會修業、農藝ニ従事
	鹿兒島縣	鹿兒島市	千石町	士族		保谷三郎	明治十三年	九月	鹿兒島縣農學校卒業、農事試驗場ニ研究中
第四組	秋田縣	仙北郡	神宮寺町	平民	副組長	富盛明治郎	明治四年	四月	縣農會評議員
	德島縣	板城郡	西村	平民		遠藤明治	明治十年	一月	中學校三ヶ年修業、蠶業ニ従事ス
	奈良縣	磯城郡	西村	平民	組長	片山伊平	明治十二年	十月	農事講習會修業、農業ニ従事ス
	山梨縣	大石郡	成村	平民		角田伊平	明治十四年	一月	農事講習會修業、農業ニ従事ス

組五第	愛媛高知大分	媛井香南	縣縣縣	松大野美都郡	山郡都郡	新南	形置賜	府海部郡	德島郡	京都府
組長	松木末清	松本甚太	松本末清	弘光甚太	染矢良佑	明治元年四月 明治九年十月 明治十四年八月 明治十七年八月	農事講習會修業、南海部郡農會幹事 農商務省京都農會講習所卒業高知縣醫種検査員 福元縣學校別科卒業、昆蟲講習會修業 元媛媛縣學校書記			

組六第	新形南	山置賜	新南	形置賜	山郡都郡	新南	形置賜	府海部郡	德島郡	京都府
組長	齋藤作兵衛	佐田次吉	土田藏	明治元年三月 明治七年二月 明治十七年五月	元神納付役場書記、農業二從事 農事講習會修業、農事二從事 元錦林學校教員、村農會技手					

組七第	大分縣	安房郡	千葉縣	兵衛郡	伊賀郡	仲山	長谷廣助	伊賀郡	長谷廣助	仲山
組長	岩井村平	長谷廣助	伊賀郡	明治三年五月 明治八年七月 明治十年六月	農事講習會修業、農業二從事 農事講習會修業、農會評議員 中學校卒業農業二從事、陸軍步兵少尉 農業講習會修業、南海部青年農會副長					

組八第	愛媛縣	朝日郡	兵衛郡	島田郡	新田郡	原田郡	加藤郡	宮本郡	新田郡	原田郡
組長	細見愛三	增波透茂	宮本國次	明治六年六月 明治十年四月 明治十五年七月 明治十六年四月	農事講習會修業、農友會幹事 速記術事務所修業、農友會幹事 農事講習會卒業、農事試驗場助手 中學校修業、農業二從事					

組九第	愛媛縣	北條郡	兵衛郡	島田郡	海部郡	三北郡	增波郡	明治六年六月 明治十年四月 明治十五年七月	農事講習會修業、農業二從事 根鄉村農會、同村助役 東京工學校卒業、農業二從事 農事講習會修業、農業二從事
組長	荒木大五郎	帶刀喜三	岡田宗三	明治八年一月 明治九年六月 明治十七年一月	高等小學校卒業、農事講習會修業 昆蟲及農業講習會修業、農業二從事 農事講習會修業、農業二從事 縣立農學校二ヶ年修業				

組十第	愛媛縣	北條郡	兵衛郡	島田郡	海部郡	三北郡	增波郡	明治六年六月 明治十年四月 明治十五年七月	農事講習會修業、農業二從事 根鄉村農會、同村助役 東京工學校卒業、農業二從事 農事講習會修業、農業二從事
組長	高野上	長安郡	兵衛郡	島田郡	海部郡	三北郡	增波郡	明治八年一月 明治九年六月 明治十七年一月	元明治村裁縫學校長 師範學校卒業、小學校訓導 縣立農學校卒業、印刷部農事教師 中學校卒業、高等農學校在學中

組十一第	高知縣	知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣
組長	吉本重吉	中本重吉	飯田弘	明治四年十月 明治十二年三月 明治十五年三月 明治十六年一月	農事講習會修業、長谷村助役 高知縣農學校卒業、農事試驗場技手 中學校二ヶ年修業、村役場書記 佐波郡農會評議員					

組十二第	兵庫縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣	高知縣
組長	大野上	長安郡	兵衛郡	島田郡	海部郡	三北郡	增波郡	明治六年六月 明治十年四月 明治十五年七月	農事講習會修業、農業二從事 根鄉村農會、同村助役 東京工學校卒業、農業二從事 農事講習會修業、農業二從事	

昆蟲世界第六拾八號 (三九)

雜報

第七卷 (一七七)

●内國勸業博覽會昆蟲標本評

第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本に對する批評は、豫

記の如く之を本號より順次連載すべし。此批評は、當昆蟲研究所の永澤小兵衛氏が、或標準に照合して可否を察別せしものに係れば、決して無責任の言辭を弄するものにあらず、故に中々或ひは酷言冷語を加ふるもの莫さにあふざる可きも、その全般に對する觀察に至りては、稍正鵠を失せざるべきか。

○出品に對する概評 今回開設の内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、南の方臺灣島より、北の方奥羽地方に渉り、其數實に數百點に下らず。而して之を大別する時は、農林の昆蟲と、學術研究用の昆蟲とをなすことを得べし。則ち前者には、植物に加害の蟲種より、その敵蟲及び害蟲驅防規則外の蠶蠅をも含ましめ、後者には、蟲學上の分布調査より、衛生の害蟲たる瘧媒蚊を包有せり。故に斯學研究上、不少の利便あるは勿論、歴々として近年蟲學普及の跡を知るべきものあり。乃ち之を前回に比較すれば、蟲學思想鼓吹の點に於ては、稍成功に殆しとすべし。

然れども、細かに之を觀察する時は、未だ頗ぶる遺憾の節なきにあらず。例へば各官衙、學校、農會間に於て其連絡を圖らざりし如き、個人出品の意外に多きが如き、收容蟲種の雜駁にして且つ少數なるが如き、昆蟲と植物の關係を示せるもの稀少なりしが如き、幾多の天敵を添加せざりしが如き、種類の選擇を慎まざりしが如き、出品物に對する説明を粗漫にせしが如き、邦稱を誤り學名を記入せざりしが如き、隅角脚部の整理より其他の裝成を顧ざりしが如き、保存を忽諸に附して早已に黴菌を宿らしめたるが如き、分科分類に交錯多きが如き、驅除器械及び藥劑に優良のもの無きが如き、昆蟲に對する記載及び附箋等を缺きしもの多きが如き、著書及び方案に觀るべきもの無きが如きは、決して斯學發達の兆と言ふことを得ざるべし。去れば、俚言を藉りて之を評すれば、所謂ドンガリの身長較べに過ぎざるなり。此よりの讀者に紹介するに當り、先づ臺灣、水産二館の出品より始めて、次に美術館昆蟲廳用品に入り、再轉林業館より農業館に及ばんとす。蓋し審查未了の際に、恣に私評を加ふる時は、爲めに不少の影響を來たすべきを以て成るべく他に煩累を及ぼさしめざるやう注意するは、操觚者の德義なりと信ぜしに因れり。

○臺灣館 臺灣館に陳列せられしもの、中にて、昆蟲學に關係を有し、兼て一般觀者の參考に供すべきは、恐くは蚊子の寫眞に及くもの莫かるべし。此寫眞は都合數葉より成り(一)は普通蚊種の卵塊(二)は瘧媒蚊種の卵塊(三)は邦産瘧媒種の幼蟲臺灣瘧媒種の幼蟲、普通種の幼蟲及び瘧媒種の幼蟲(四)は瘧媒種の蛹、普通種の蛹(五)は普通種の雄(六)は普通種の雌(七)は邦産瘧媒種の雄(八)は同種の雌(九)は臺灣瘧媒種の雄(十)は同種の雌にて、何れも引伸寫眞器を以て放大さなし、一見蚊屬の區別を知らしめし者なれば斯學者より、延て刀圭社會に益する所多し。然れども、これに關する解説さては一も之無く、唯不規則に配列せられしに止まれは未だ弘く覽者の注目を惹くに足らざるのみならず、之を一見したりして、何が爲に出品せられしやを理會する者少かりしが如し。

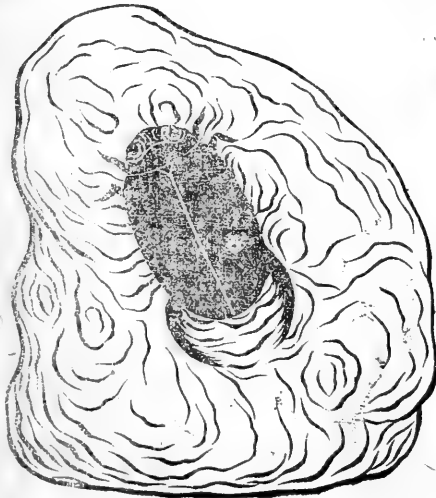
同島傳染病及び地方病累年比較表の示す所によれば、去三十年に、内地人の瘧疾に斃れし數は、患者一万人に對し二百三十八人九分

にて、廿一年には百十一人八分弱、廿二年には百十二人二分強、廿三年には八十人九分弱、廿四年には六十人三分の多數なりきと云へば、臺灣經營上此種の説明を要するや固より論なかるべきに、その茲に出でざりしは、千慮の一失とや謂はまし。なほ總督府は一年一部の醫家の命名せるアノフェリス北海道てふ假稱を採用せしにや、各寫眞に此名稱を記載したるが、是將た却つて觀者を迷はしむる仲媒たらざる莫きか。蓋し北海道の名は未だ廣く内地に分布の種類たることを説明するに足らざるのみならず、其命名の理由を知らざる者をして、頗ぶる疑ひを挿ましむるものあればなり。余は信ず、斯る小事と雖ども、其影響する所少なからざれば、寧ろ内地産の意義を附することを適當ならん。

蚊子の寫眞に對して、臺灣産の昆蟲標本八函あり、何れも分類的に排列せられしものにて、其種類また少なからざれば、斯學研究者は誰しも、垂涎せざることを莫し。是は總督府國語學校の出品にて博物館教員永澤定一氏の整理せしもの、由なるが、大體に於て異論無しと雖も、科名を舊式に採り、また横腹蟲科に僅に一頭を添附し、天狗蝶科に二頭を示し乍ら、其異同を知らしめざる等は、隔履の感なきにしもあらず。特に之を扁額に擬して、高く楣間の裝飾物となしたるが如き、又その陳列の順序を紊して各類目を混ぜしめたるは研究者に一方ならぬ不便を與ふる點にて、陳列係の無邪氣なる寧ろ憫むべきものあり。何れも各科の代表蟲を蒐收し、製作した普通の出來なるも、展覧板は舊製のものらしく、且昆蟲を左列させしも異様に思はしめぬ。更に望蜀主義より云へば、蟲側には一々土言と漢名とを記入せられ度かりしなり、其上學名あれば、なほ恩惠を被けし者多かりしならん、惜しき事してけり。試みに、その收容の科類を數へたるに、左の十目數十科類に上り、有吻目、直翅目、鞘翅目には、未だ見聞せざる奇品も鮮なからざりき。

工業應用昆蟲畫報の十五 (置物)

- 彈尾目 シミ科。トビムシ科。
- 直翅目 ハサミムシ科。アブラムシ科。カマキリ科。ナナフシムシ科。イナゴ科。キリギリス科。コホロギ科。
- 毛翅目 イサゴムシ科。
- 擬脈翅目 トンバウ科。イトトンバウ科。
- 有吻目 セミ科。ヨコバロムシ科。ユリノハナスヒ科。ヒゲホソガメムシ科。メダカガメムシ科。アヅキガメムシ科。ガメムシ科。トコヅラミ科。
- 脈翅目 カトンバウ科。
- 鱗翅目 ハナセセリテフ科。ツシミテフ科。タテハテフ科。マダラ



(岐阜縣) 野村安太郎氏寄贈

○テフ科。アゲハノテフ科。テンカテフ科。ツヤノメテフ科。コフテ科。外に蛾類數十種あり。
 ○鞘翅目。隱四節類。隱五節類。異節類。五節類。
 ○雙翅目。イハバヘ科。アシナガバヘ科。ムシヒキアア科。アア科。カ科。カカンボ科。

○膜翅目。有雜類各種。有劍類各種。
 なほ他に手藝科三學年の刺繡せる牡丹に蝶模様のもの、刺繡科教授標本に供用の藤花に蝶模様の布帛等ありしも、支那一流の形式に止まれば茲に略す。

○水産館。此館には昆蟲に關するもの極めて少なし、然かも水産講習所の出品に係る三種の釣繆は國益上親視すべきものにあらす從來テラスと云へば、天蠶の絲腺を用ひしも、茲に陳列のものに、原料を家蠶アール、家蠶青熟、家蠶バクダに取り、各種の繭、幼蟲、絲腺をも添附して觀者の注意を促せり。浸漬の方法適當にて、配列また佳なり、但之を出品するに臨み、何れ故に他の官衙と連絡を通せざりしやを怪しむのみ。假令今回の官衙の出品は、封建割居の觀ありとは云へ。●奈良縣生駒郡山町平野竹史氏の出品に魚族の寄蟲標本あり、其種類はタガメ、ユリノハナスヒ、コオヒムシ、ミカラ、ゲンゴロウムシ、コガタノゲンゴロウムシ、ヤゴ、ガムシ、ミヅスマシ、フツセンムシ、ミヅカマキリ、ミヅムシ、コムツムシ等にて、製作は熟練を缺けるが如し。●大阪市西區本町通清水五郎兵衛氏は、釣繆數種を出品せしが、一見精粗良惡を知るの便あり。●秋田縣北秋田郡の下遠時之助氏及青森縣弘前市の下山竹次郎氏の蟲形釣繆は、鏗鈴その他に擬したるものにて、可なり巧みに製出せしむごも、普通のものなれば評するまでの價値なかるべし。

●寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會規則

前號に於て愛知縣寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會

關する記事を掲げしが愈々開期は五月三日より一週間と確定せり尙該規則を得たれば左に掲げん。

(未完)

第一條 本會は昆蟲學思想の發達及び之が應用を圖らんが爲め明治廿六年五月三日より同月九日迄一週間寶飯郡役所内に於て開設す
 第二條 本會の出品は凡そ左の各種とす。○第一類分類標本 ○第二類寄蟲標本 ○第三類益蟲標本 ○第四類教育用標本 ○第五類裝飾用標本 ○第六類 參考品 ○第三條 前條の出品は學校其他團體若くは自己の製作又は考案に係るものとす ○第四條 出品は參考品を除き總て審査す、但參考品と雖も出品人の希望により審査することあるべし ○第五條 出品人は出品に對し再審査を乞ひ又は授與の褒賞を拒み若くは審査の決定に對し異議申立をなす事を得ず ○第六條 出品は審査上優等なるものには其の出品に對し一等より四等に至る等級に従ひ褒賞を授與す、但授與外の者又は參考品と雖も特に紀念狀を授與することあるべし ○第七條 本會に出品せんとするものは第一號書式の出品目錄を作り明治三十六年四月廿日までは寶飯郡役所第三課に差出すべし ○第八條 現品には採集場所及其の年月日を記載したる小札を一頭毎に添附すべし、但貝殼蟲等の類は一枝毎に添附すべし ○第九條 出品及解説書は明治三十六年四月廿七日までに必ず到着の日取を以て會場へ發送すべし ○第十條 出品運送に關する費用は總て出品人の負擔とす ○第十一條 本會に左の役員を置く。會長壹名。事務委員長壹名。審査委員長壹名。事務委員若干名。幹事若干名。審査委員若干名 ○第十二條 會長は本會一切の事務を統轄す。事務委員長は會長の指揮を受け事務を整理す。審査委員長は會長の囑托を受け審査事務を統轄す。事務委員は會長及び事務委員長の指揮を受け事務に従事す。幹事は會長及び事務委員長の指揮を受け會務を處理す。審査委員は審査委員長の指揮を受け審査事務に従事す ○第十三條 開會中は毎日午前八時より午後四時まで衆庶の參觀を許す ○第十四條、參觀人は本會役員又は監守人の承諾を得るに非ざれば陳列品に手を觸るゝことを得ず(以下書式略)

●紀念昆蟲繪葉書

前項記載に係る全國害蟲驅除講習修業生同窓會へ、大垣町西濃印刷株式會社より寄贈されし繪葉書は、一組都合三葉にて、一葉は緑と樺色との暈し地、イトトンパウと寄生蜂とを配置したるものとして、頗る優美なり、一葉は岐阜蝶と其食草たる細辛とを配置したる十二回着色

右版刷りの由なるが、

是亦意匠と云ひ、技術と云ひ、驚

くべきものにして、

岐阜蝶が飛揚の様は實に

眞に逼せられ、尙他の

一葉は、即ち下圖を示

せる如く、第五回内國

勸業博覽會農業館内岐阜

縣の昆蟲門を寫せる

ものなるが技術に於て

は前二者に比し、或は遜色あるも、有紫に老練と機敏なる同會社なれば、却々面白き思ひつきにて、見事なるものなり



(大垣印刷株式會社)

第五回博覽會農業館の昆蟲門

●昆蟲學者の歸朝 兼て洋行中なりし米國理學博士河内忠二郎氏は本月十三日無事歸朝されたる由當昆蟲研究所へ通知ありたり。

●昆蟲標本の審査 第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本の内、教育館の分は、本月二日頃より審査始まりて、最早結了の由なれども、農業館の分は、十五日頃より、開始の由は聞知せり。

●温室と瓢蟲 今回博覽會場内に設けられたる温室には、内國産を始め、諸外國の植物ありて、時ならぬ花、今を盛りと咲き揃ひ、一段の美を放て觀覽者を迎ふる様、最も見事なるが、之れに伴ひ、蚜蟲、貝殺蟲等の害蟲は、時を得顔に容捨なく繁殖し、係員は、大に苦辛して驅除に盡力せられしも、繁殖力に強きと、且つは適當の溫度を得たる該蟲は、容易く滅盡せず、大に苦慮されしかば、當昆蟲研究所より、彼の天敵たる瓢蟲類多數を送りたれば定めて相當に働き居るなるべし。

●岐阜縣害蟲驅除長期講習會 既記の如く、岐阜縣害蟲驅除長期講習會は、本月五日に、短期講習會は、十日は簡單なる開講式を舉げしが、詳細は紙面の都合は依り次號に記載すべし。

●工業應用昆蟲畫報(第四報) 本號に掲載の應用昆蟲畫報の(十四)はパイプの眞形として角質

は數頭の昆蟲を巧みに彫刻したるものにて今其技術者の姓名を知るに由なけれ共由比呂太郎氏には非常の困難をして得られ更に當所に寄贈せられたるものなり又(十五)は美濃國金山産出の褐色大理石に黑色大理石の附着したるものを以て黑色の分はコガタノゲンゴロウムシを巧みに彫刻したるものにて一見恰も現蟲の附着したるが如し、野村安太郎氏は元來大理石彫刻に妙を得たる人にて曾て全國昆蟲展覽會の際にキアグハテフを出品して賞讃せられ今回又博覽會へ枯木にウバタマムシの附着したる所を出品されたるが實に眞に迫りて觀るもの一人として驚かざるはなしと云へり。

●岐阜縣昆蟲學會記事 岐阜縣昆蟲學會第五十二回例會は、前號豫報の通り去四日午後より名

和昆蟲研究所内へ開會せり。今其次第を記さん、第一席名和副會長開會の辭に、續て特別會員長野菊次郎氏今回轉任の理由を報告し、第二席愛知縣田中周平氏大阪府農會主催に係る作物病蟲害展覽會觀覽談、第三席永澤小兵衛氏松岡恕庵先生傳補遺、第四席岐阜中學校教諭長野菊次郎氏は今回東京市の學校に轉任につき告別の辭を述べ、次て害蟲驅除に微菌を利用することに就き、外國の例を擧げて講話せられ、次は名和副會長は、本會を代表して、是迄長野氏が本會に對し、非常な盡力せられしを謝し、一同大に惜別の意を表し、散會したりき。

(雜報、四月十四日脱稿)

第六版
昆蟲の
昆蟲世界
全

定價拾錢 郵稅拾錢 (郵券代用一割増)

通俗益蟲集覽 (第一輯再版)
(説明書附)

定價(郵稅共)金貳拾五錢、同上

貝殼蟲圖説 全一冊 (再版)

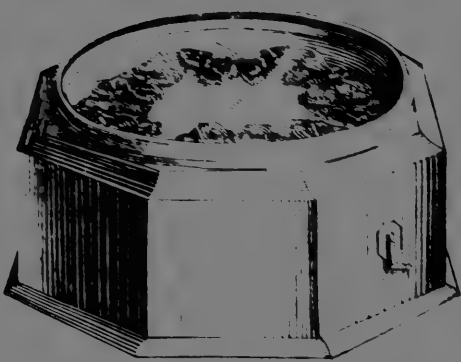
定價(郵稅共)金拾七錢、同上

- 貝殼蟲圖説(全一冊) 拾七錢、同上 (壹組) (郵券代用一割増)
- 昆蟲學研究用書籍及び器具一式
- 山林園芸害蟲標本 各種 (壹組) (郵券代用一割増)
- 昆蟲發育標本 各種 (壹組) (郵券代用一割増)
- 氣候地形標本 (壹組) (郵券代用一割増)
- 踏踏海流標本 (壹組) (郵券代用一割増)
- 自然淘汰標本 (壹組) (郵券代用一割増)
- 教育用昆蟲標本 (壹組) (郵券代用一割増)
- 昆蟲標本 (壹組) (郵券代用一割増)

名和昆蟲研究所會計部

昆蟲廻轉器頒與廣告

この昆蟲廻轉器は、昆蟲の翅色と光線の關係を示さんが爲め、數年前考案せしものなりしも、適當の製作者に乏しかりしより、弘く頒與するに至らざるにしが、今回特別調製の依頼を受て、拾餘個の特製を製作し、世の希望者に分たんとす。雄雄洵汰の原理を説き、天地自然の妙用を知らしめんと欲せば、少なくも此種の備へ無かる可からざるべし。一器の價は、今八圓とす、別に送費を要す。



岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなご言觸らし、其偽版同様ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

- 第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ(枝尺蠖)(三版)
- 第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
- 第三。稻の害蟲イチノズキムシ(二化生螟蟲)
- 第四。煙草害蟲タバコノアラムシ(煙草螟蛉)
- 第五。稻の害蟲イチモジセセリ(苞蟲又葉捲蟲)
- 第六。桑樹害蟲ヒメザウムシ(姬象鼻蟲)
- 第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲)
- 第八。稻の害蟲イチノアラムシ(稻螟蛉)
- 第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲)
- 第十。豌豆害蟲エンドウキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
- 第十一。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛)
- 第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ(稜黑横蚊又浮塵子)
- 第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(糸引葉捲蟲)
- 第十三。茶樹害蟲チャケムシ(茶帖蜥)
- 第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシタマシ(擬瓢蟲)
- 第十六。稻と麥の害蟲キリウジカガンボ(切蛆蚊姥)
- 第十七。桑樹害蟲キンケムシ(金條毛蟲)
- 第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
- 第十九。桑樹の害蟲クハケムシ(桑帖蜥)
- 第十九。桑樹の害蟲クハケムシ(桑帖蜥)
- 第二十。稻の害蟲フタホシズ井ムシ(三化生螟蟲)(同十一月新刊)

定價壹枚金拾五錢 郵稅貳錢

百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵稅百枚に付貳拾錢

(昨年八月新刊)

發行所

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

●硫曹肥料を肥作に用ゆれば第一は米質を宜しくし且つ頗る收穫を増すべし一反歩は付五六斗より一石二三斗を増す之を舊肥料を用ひたるものよりは比すれば見掛も遙に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀かり舊肥料を用ひたるものは之に反したる見掛は異ならざるも米質悪しく又収の收穫は同じくとも玄米となして一反歩三斗以上の相違あり之を春きて白米となすに硫曹を用ひたる分は春減少なく飯は炊くに頗る炊殖すべし(例之は舊肥料の米は水一升米一升あるに硫曹の分は米一升は水一升二合ならで飯に適せず即二割以上炊殖の相違あり)●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄に注意し之を實驗して其效用の偉大なるを驚くべし●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれば南洋熱帯地方通過の際多く腐融すべし●第一(過燐酸)を稻作に用ゆるは一反歩に三貫目より五貫目迄を舊肥料(大豆粕、油滓、堆肥、厩肥等)に混交使用すべし●硫曹肥料のみ施すを



は第八號を最も適當とす一反共に十貫目乃至十五貫目を二回に分施すべし(堆肥は何れも施すを宜しとす)●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷、麻、爾其他陸稻、粟、砂糖黍、桑并野菜物、菓物等に施して其效實を驚くべきものあり●第五回勸業博覽會に硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金參百圓づ、銀賞牌には金百圓づ、一等賞牌は金五拾圓づ、二等賞牌には金貳拾圓づ、三等賞牌には金拾圓づ、を贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農産物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麥及徳島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を徳島縣に井野藏氏へ銀壹三三圓壹組を贈呈せり●硫曹肥料の明細并に見本等は御申越次第贈呈すべし



大坂西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

電話西四一九番

雜誌 昆蟲 世界 合本 出來 廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界 合本

第六卷(昨半年分)出來

西洋綴
金文字
入美裝

●昆蟲世界第二卷 五部

〔自第拾貳號
至第拾六號〕

●昆蟲世界第二卷合本壹册

〔自第拾七號
至第拾八號〕

●昆蟲世界第四卷合本壹册

〔自第貳拾九號
至第貳拾號〕

●昆蟲世界第五卷合本壹册

〔自第拾壹號
至第拾貳號〕

●昆蟲世界第六卷合本壹册

〔自第五十三號
至第六拾四號〕

右は明治三十三年發行の分
右は明治三十四年發行の分
右は明治三十五年發行の分
(合本は每册金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢
其他は定價の通り)

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典
として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本と
するに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して
閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

ハ 圖の器切莖明發新



專賣特許
第四九八六號 莖切器發賣廣告
螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大まして之れか驅
除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を
撲殺するに如かさるなきは精農家諸君の汎く認む
る所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りな
り。雖も未だ完全の良器なく止むを得
ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕
ふのみならず全く螟蟲の潜伏せる稻莖を
根底より刈去ることを得ざるが爲め害蟲
驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲を
して其害欲を選みせしむるに到る實は慨
嘆ま堪へざるなり發明者多年茲意を籠
め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は
上圖に示す如く小形の鎌に彈性性の遮匙
を付したるものにして本器を使用するに
は先づ把手(ハ)を握り而して切取らんと
する稻莖を左手よて握り遮匙の頭部と鎌
の尖端との中間(イ)に當て鎌を少しく前
方に押すへし然るときは遮匙(ロ)は彈力
性あるを以て外方に開き稻莖を押入るへ
し一度押入れたる後は遮匙は彈力の爲め
元形に復し鎌の尖端を被覆して於の健全
なる稻莖は挿入する事なし此に於て鎌を
根底迄押入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害
せず容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の
良器にして静岡縣農事試驗場等の協賛を博せり
定價一挺金拾錢：農會等の共同御用は特別割引：

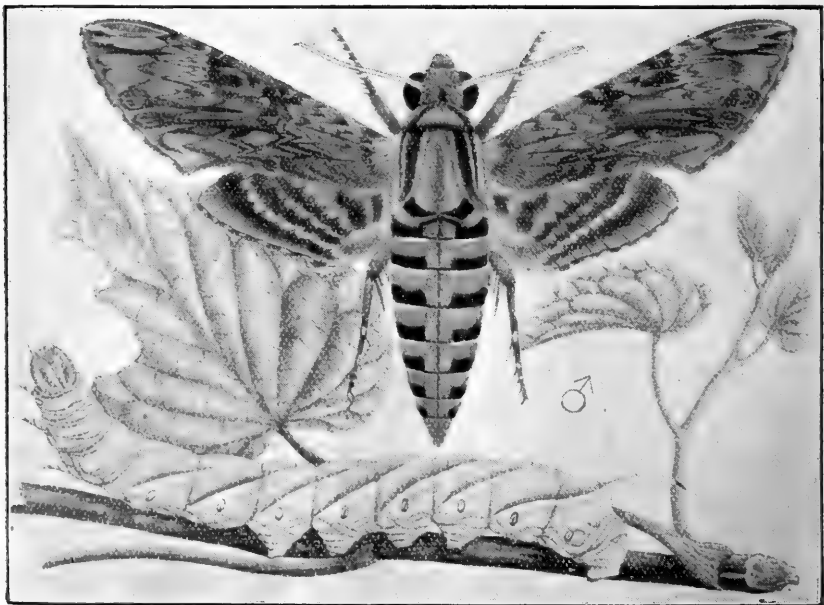
製造元 静岡縣小笠郡比木村 山本勘藏
發賣元 同 縣志太郎燒津町 吉野寅之助
縣下一手販賣所 岐阜市京町 高橋喜之助

Protoparce orientalis Butler. (Ebigara-suzume)

By K. Nagano.

This species seems to be same to *Sphinx convolvuli*, L. Forewings dark grey, whitish-sprinkled, with darker dentate striae; two narrow black streaks in middle; an irregular black apical line. Hindwings grey, whitish-sprinkled, with four black bands. Expanse 93-107mm. Abdomen dark grey, banded with white, red and black in each segments.

Kiusu, Shikoku, Honsiu, Yezo; 7, 8, 9. Larva green or brown, sometimes closely streaked; dorsal line dark; subdorsal line sometimes blackish; on 4-11 seg. often a series of oblique lateral white or dark stripes; horn black or ochreous, tip black: on *Ipomaea batatas*, *Calystegia sepium*, *Rharbitis hederacca*, *Tetragonia expansa*, etc.; 9, 10, 11. Pupa furnished with a long projecting convoluted tongue sheath.



岐阜屋旅店廣告

今回昆虫學研究家各位の御便利を圖り、第五回内國勸業博覽會開會中、出店を大坂市東區、西高津中寺町、十番地久成寺内に設け特別低價を以て御休宿の御用に應じ候間、續々御光臨の程奉希望候
 大坂市東區、西高津、中寺町
 十番地、久成寺

岐阜市 西野町 蟲屋旅店大出店

鱗翅目、蝶の部、天蛾の部
 掘脈翅目、蜻蛉の部 悉皆

右今回寫生圖出來分布調査用紙に納められば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんことを望む
 アブラムシ(蜚廉又は滑蟲)の標本
 右分布調査材料として、同志の寄贈を望む
 岐阜市京町 名和昆虫研究所

岐阜縣昆虫學會月次會廣告

岐阜縣昆虫學會は規則第三條に依り晴雨に關はず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆虫研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆虫研究所内 岐阜縣昆虫學會

- 岐阜縣昆虫學會本年中の日並は左の如し
- 第五十三回月次會(五月二日)
- 第五十七回月次會(九月五日)
- 第五十四回月次會(六月六日)
- 第五十八回月次會(十月三日)
- 第五十五回月次會(七月四日)
- 第五十九回月次會(十一月七日)
- 第五十六回月次會(八月一日)
- 第六十回月次會(十二月五日)

明治三十年九月十日内務省許可
 明治三十年九月十四日第三種郵便物認可



本誌定價並廣告料

壹部 郵稅共 金拾錢
 壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢
 (注意) 本誌は總て前金に非れば發送せず
 爲替拂渡局は岐阜郵便局 郵券代用は五厘
 切手にて壹割増とす
 廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十六年四月十五日印刷並發行

名和昆虫研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
 (岐阜縣岐阜市京町)

發行所 同縣揖斐郡鷺村大字公郷三番戶

編輯者 同縣安八郡大垣町宇野百五十三番戶

印刷者 同縣安八郡大垣町宇野百五十三番戶

不許轉載
 轉載

名和昆虫研究所案内

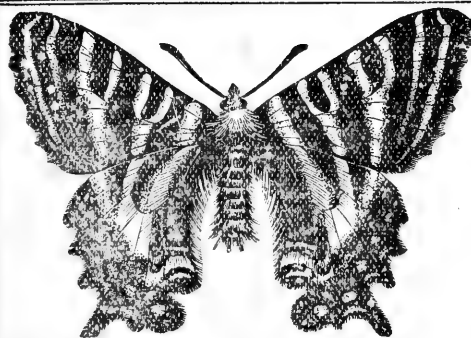
名和昆虫研究所の位置は上
 當昆蟲研究所の位置は上
 の如くにて停車場より
 僅に十餘町養蠶室あり
 又新築の岐阜縣物産館構
 内には常設の昆蟲標本陳
 列館(五間に十六間)あり
 て標本器具數千点を陳列
 す有志諸君の來訪を俟つ
 岐阜縣岐阜市京町

名和昆虫研究所

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

(五月十五日發行)

(每月一回十五日發行)



THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第六拾九號

(第七卷第五册)

目次 (禁轉載)

●口繪
○大島産の浮塵子各種(一) (石版圖)

●學說
○大島産の浮塵子に就て……………一頁

○コオロムシにつきての疑問……………生熊郎

○Anopheles maculatus Theobald. Anopheles Leucopisus……………長野菊次郎

を臺北附近に於て檢出セリ……………英徳

●講話
○害益蟲の二、三に就て……………名和

○エンドノキリムシの驅除法……………石田和三郎

●雜錄
○六足蟲彙纂 長野菊次郎○博覽會出品の昆蟲標本

小竹浩○昆蟲發句集 喜田川要三郎○工業に於ける益の應用 高橋徹一

●通信
○博覽會出品害蟲標本解説書 揖斐郡昆蟲學會○土佐産の蟲報(第九の續) 武内護文○農事試験場擔當人會の決議事項 西岡嘉十郎○昆蟲に關する葉書通信第三十一報

●雜報
○内國勸業博覽會昆蟲標本評(續)○工業應用昆蟲誌報(第五報)○第六回岐阜縣害蟲驅除講習會○第十六回全國害蟲驅除講習會○鳥取縣東伯郡昆蟲研究會○名和昆蟲研究所長の出張○愛知縣賀茂郡小學校冬季昆蟲展覽會概況○日本最初の昆蟲學者○新刊昆蟲書○千蟲萬才銀(第三)○諸國蟲送り○新刊雜誌中の昆蟲記事○岐阜縣昆蟲學會記事○昆蟲水曜會○昆蟲標本陳列館の觀覽人

○三六頁



(明治三十六年五月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

●寄贈物件受領公告

一金壹圓五拾錢 奈良縣 片山 莊平君
 一金壹圓 鳥取縣 神波 信藏君
 一本邦産葉蜂科第一集 一册 東京市 高邑 久次君
 東京市 中川 久知君
 一昆蟲摸樣野紙 貳千枚 岐阜市 井深 敏君
 岐阜市 小田藤太郎君
 一蝶摸樣七寶皿 一枚 岐阜市 三吉 艾君
 岐阜市 安井 此子君
 一蜻蛉摸樣商標 一枚 靜岡縣 神村直三郎君
 一支那樟蠶蛾 一頭 岩手縣 晴山 立郎君
 一紅大蛾 一葉 靜岡縣 神村直三郎君
 一靜岡民友新聞(昆蟲記事) 一葉 岩手縣 晴山 立郎君
 一三陸新聞(昆蟲記事) 一葉 岩手縣 晴山 立郎君

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す
 明治三十六年五月十二日 名和昆蟲研究所

●昆蟲世界購讀紹介者芳名

大阪府 橋本 亮君 (貳名)
 長野縣 三吉米熊君 (壹名)
 岐阜縣 中井藤助君 (壹名)

●鱗翅目、蝶の部、天蛾の部

●擬脈翅目、蜻蛉の部 悉皆
 右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんことを望む。

●アブラムシ(蜚蠊又は滑蟲)の標本

右分布調査材料として、同志の寄贈を望む。
 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

過日錦地へ罷出候節は不一方御優待に預り不堪感銘候所早々御挨拶可致之處所務多忙の爲め其義に及び兼候間乍失禮以本紙上謝意を申述候

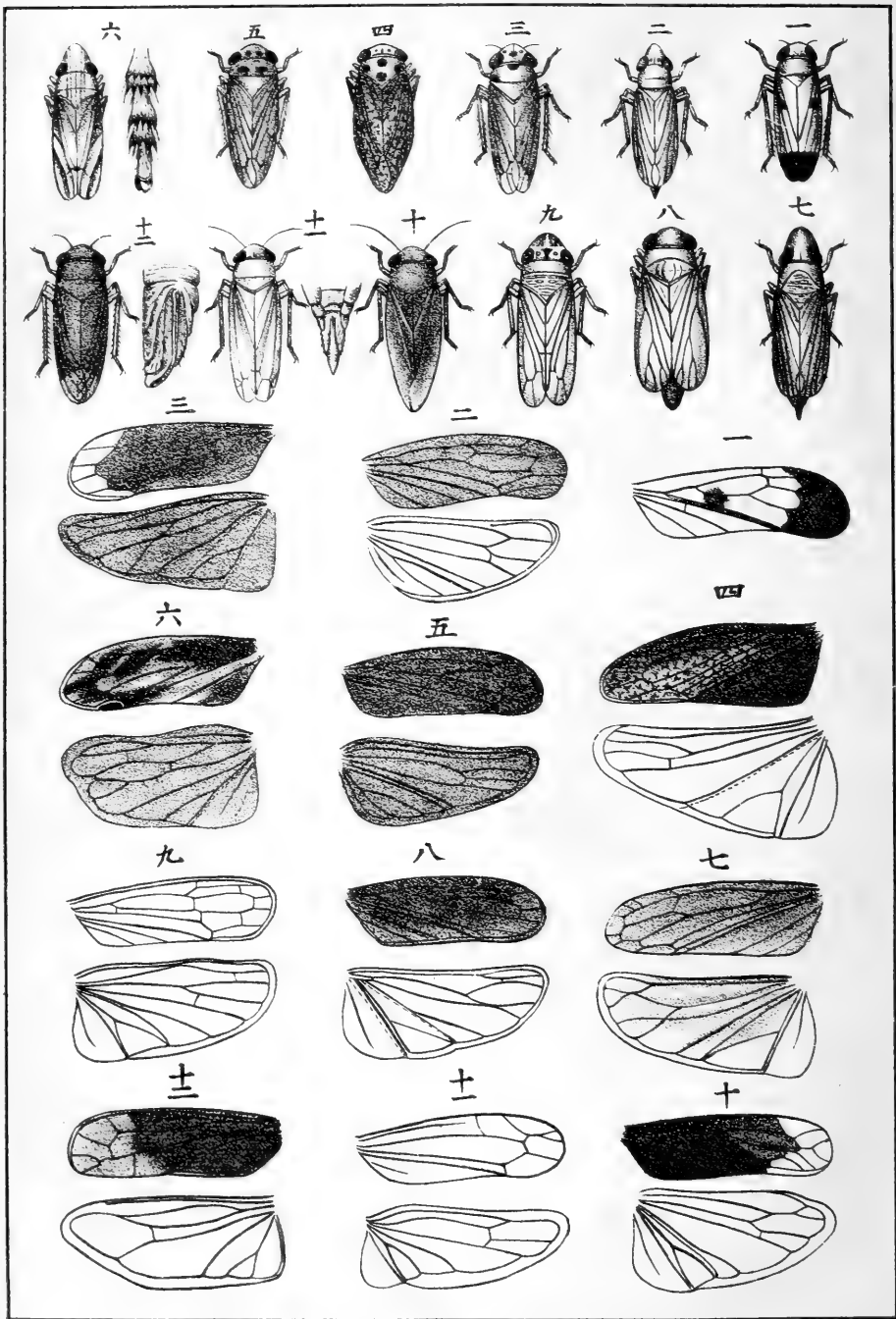
五月十三日 名和昆蟲研究所長 名和 靖

愛知縣 辱交諸君各位 寶飯郡

大博覽會 出品標本 對する 賞品贈與

第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、都合數百點の多きを算する趣をれば、隨ひて斯學ニ裨益を與ふるもの亦少なからざる可し。當昆蟲研究所茲に觀る所あり、此等出品標本中、左の條に該當するもの五點若くは七點を選抜して、各々これに紀念の賞品を贈與し、その斯學界に規範たるの名譽を表彰するとともに、其功勞に對して一片の謝意を致さんとす。

一、紀念賞品は、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持者の出品に限り之を贈與す。
 一、紀念賞品は、博覽會審査の結果、最優等に位せる者のみに之を贈與す。但し、審査規程に入格せざるため、優等賞を受くること能はざるも、現品の優良を認むべきものある時は、特に之を拔擢することある可し。
 一、雜誌「昆蟲世界」愛讀者中、卓絶の標本を出品し若くは優等賞を得たる時は、特に此規程を適用することある可し。
 一、紀念賞品は、昆蟲學に關係を有する書籍若くは、名和昆蟲研究所の徽章を附したる工藝品たるべし。



(一)種各子塵浮の産島大



◎大島産の浮塵子に就て (第五版圖參看) 在鹿兒島 生熊與一郎

此處に掲ぐるものは、余が客年夏期休暇を利用して、大島の各島を跋涉し、浮塵子^{うじんか}を就き採集調査したるものなり、而して其獲たるものは、浮塵子科^{うじんかひくわ}(Cicadellidae.)に屬するもの二十五種、薄羽浮塵子科^{うすはよじんかひくわ}(Feltariidae.)に屬するもの二十一種、角蟬科^{つのせみくわ}(Membracidae.)に屬するもの一種(調査未済のもの數種)、都合五十余種なれども、内地に産する普通なるものは何れも皆其名稱のみを掲げ、説明を省きたり。然れども内地に産するものと同種にして、体形の異なるもの等は、特に記載する事となしぬ。

第一、Cicadellidae.に屬するもの

其一、ツマグロヨコメ^{つまぐろよこめ}變種^{へんしゆ}(*Selenocephalus* sp.) 大島本島の南部(殊に篠川村)には、稜黑浮塵子の變種、夥しく稻田に發生す。大小、形狀、共に普通の稜黑浮塵子と全く同様なれども、背面は濃緑にして腹面は普通のものより一層濃く、前翅の臀脈の殆ど中央より半經脈を跨りたる著しき黒紋を有す。而して臀脈も亦多少黒色を帯ぶるを以て、一見前翅の破損して、后翅の黒色を顯したるが如き觀あり。本種は内地(鹿兒島縣下)に於ても五月中旬頃より發生し、常に稻田に棲息すれども、其數極めて稀なり。其二、クサノミヨコバ^{くさのみよこば}ビ(*Tetigonia* sp.) 全体、灰黄色よしして著しき斑紋無く、紡錘形をなし、

前翅の翅脈は稍縱綫をなすを以て、禾本科植物の種子に酷似す。故に、余は草質浮塵子の新稱を附せり。雌は体長二分六厘、翅の開張三分強あり。頭部は灰黄色にして前方に突出し、其后方兩側に灰色長卵形の複眼を有し、尙其兩複眼の中央背面には細き短縱線、及二小黒點を有す。前胸部は大よして稍半球形をなし、頭部と同色をなす。前翅は前胸部と同色にして細長く、長さ一分三厘、幅約四厘ありて濃色の太き翅脈を有す。后翅は前翅と同長なれども、幅六厘を算し、無色透明にして、翅脈のみ灰黄色をなす。肢は何れも黄褐色を呈し、長さ一分一、二厘内外あり。腹部は紡狀にして八關節より成り、頭部と同色を帶び、第二、三、四關節の背面には、各一對宛の褐色帶を具ふ。産卵管は著しく長く約八九厘ありて腹面の殆ど中央より顯れ、腹端は三厘餘を顯す。

該種は本島の北方なる山中に於て多く採集したり。蓋し乾燥地を好むものならんか。

其三、桑黄浮塵子變種 (*Tetigonia* sp.) 前種と同じく大形種中の小なるものにして、体長二分四厘、

翅の開張三分六厘内外あり。頭部は背腹共に黄褐色を呈し、兩複眼の中央、稍、頭頂に近く方形の大なる黒紋を具へ、其左右側に光澤を帶びたる單眼を具ふ。額面は中央少しく隆起し、頂部に二個、中央部に二個の黒紋を配列し、觸角は細くして鞭狀をなし、長四厘内外あり。前胸部及中胸部の背面に頭部と同色を呈し、前胸部の前方即ち頭部に接したる所、及前翅の翅底に接する部分に、各一個宛の黒紋を有す。而して各胸節の腹面は黄色にして肢も亦同色を帶ぶ。前肢は長さ一分二厘、中肢は一分三厘、后肢は二分三厘内外ありて、后肢の脛節 (*Tibia*) 及跗節 (*Tarsus*) は長粗毛を生ず、前翅は稍長方形にして長さ一分六厘、幅五厘ありて、大部分は灰黄色をなし、金屬性の光澤を有すれども、先端三分の一、及后縁に接したる部分は無色透明をなす。后翅は前翅と畧同長にして巾七厘許あり、全体淡き黒色を帯

す。腹部は八關節より成り、背面の一帶は黒色、側面は黄色、腹面は淡黄色にして、肛門は第八關節の背面より、鮮黄色の肛門片を有す。

該種は本島の北部なる福本村山中に於て採集したるものなれども、体形及採色は一見黄大浮塵子（小貫氏）桑黄浮塵子（松村氏）に酷似するを以て、余は桑黄浮塵子の變種となせり。今本種と、内地産の桑黄浮塵子（*Tetigonia gatifera*）（從小貫氏）と異なる主なる點を摘記すれば左の如し。

内地産のもの

大島産のもの

頭部

幅廣く四個の黒紋を有す

幅狭く背面に一個の黒紋を有す

胸部

前胸の後縁一帯は黒色をなす

前胸の前方及翅底に近き部に黒紋を有す

前翅

淡黄色を帯び後縁に接する部は褐色を呈す

灰黄色を帯び一種の光澤を有す
先端三分の一及後縁に接する部は無色透明

後翅

淡褐色を帯す

淡黒色を呈す

大雄

二分八厘

二分五厘——二分三厘

雌

二分八厘

二分五厘——二分三厘

其四、トビイロマダラヨコバヒ (*Thamnotetix* sp.)

全体褐色の大形種にして体長二分七厘、翅の開

張四分六厘あり、前翅に濃色のY字形斑紋を散在するを以て特徴となす。故に、余は鶯色斑浮塵子の新

稱を附せり。頭部は頭巾状をなし、幅廣く、赤褐色にして兩複眼間の前方に二個の小黒點を横列す。額

面は中央三角形に隆起して下端は丸ま。口吻は三節共に判然すれども短かく、觸角は中央の隆起部に沿

ふて存在し、形ち鞭状にして長さ九厘内外あり。胸背も亦赤褐色なれども、少しく黒味を帯び、四個の

不明なる斑紋を具ふ。前翅は少しく硬化し、長さ一分九厘、幅六厘内外あり、前縁角は稍尖銳にして

全体赤褐色なれども、中央部より白色の部ありて、全面よりY字形の斑紋を密布す。后翅は長さ一分八九厘

幅八厘許りありて、全体淡黒色をなす。肢は三對共より褐色にして、后肢は太くして長く約一分九厘あれ

ども、前肢並に中肢は一分四厘内外なりとす。腹部は紡状をなし、八關節より成る。其末節を除きたる他の各關節の背面は黒色を呈し、側面、腹面及末節は赤褐色をなす。産卵管は余り長からずと雖も、体に密着せざるを常とす。

該種は大島の南部阿木名村ある川畔に於て多く採集せり。

其五、トビヨツモンヨコバヒ 翅を疊む時は背腹共赤褐色にして、体長六厘五毛幅二厘内外を算

し、頭部の背面は二個、胸部の背面に二個の黒紋あるを以て、鳶四紋浮塵子の新稱を附せり。頭部は前種と同じく頭巾状をなし、背面は濃赤褐色、腹面は褐色にして黒色の複眼は割合に小さく、兩複眼の中央より二個の大黒紋を横列し、腹面には頂部に二黒紋を有す。

前胸部は半球形にして頭部と同色をなし、頭部の黒紋と相平行して二黒紋を横列す。前翅は全部濃褐色を呈し、長さ九厘、幅三厘内外あり。后翅は前翅より稍々短かく、長さ八厘幅四厘餘あり、全体淡黒色をなす。前肢は長さ五厘、中肢は六厘、后肢は一分ありて共に灰黄色をなす。后肢の脛節及跗節は長粗毛を生じ、前肢の脛節は稍褐色を帶ぶ。腹部は前種と同じく、腹面及尾節は褐色あせども、末節を除きたる他の關節の背面は黒色をなす。

該種は本島の東部戸口村なる山中に於て採集したりき。

其六、トビイロサジヨコバヒ 全体黄褐色の大形種にして体長二分八厘内外、翅の開張五分あり、

頭部は前方より突出して匙状をなすを以て鳶色匙浮塵子の新稱を附せり。頭部は背腹共に灰黄色を呈し著しく前方に突出す。複眼は割合に小さく、頭部の后頭角に位して黒褐色をなし、背面には縦走する四條の濃色線を具へ、其兩側即ち複眼の前方より、畧三角形をなせる青黒紋を具ふ。額面は稍扁平にして二

縦の濃色線を有し、其二線に沿ふて複眼の少しく前方よ、長さ七厘なる鞭狀の觸角を有す。胸部は灰褐色にして、前胸部は畧ば長方形をなし、中胸の菱狀部は大よして、其兩節に通ト、五條の濃色縦線を有す。而して其兩側の四條は、頭部の縦線と相接して一直線をなし、腹面は灰褐色を帶ぶ。前肢は一分五厘ありて全部又灰褐色をなせども中肢は一分五厘、后肢は二分五厘ありて、脛節及跗節は鮮青色を帶び、且つ后肢の脛節の外側に二刺と、先端よ十個の棘狀突起を出し、跗節の第一及第二小節にも、十個内外の棘狀突起及長粗毛を生ず。前翅は前縁角少しく尖り、長さ二分二厘、幅八厘あり、灰褐色よして三個の大黒紋を有し、内縁は少しく青色を帶び、外縁の後縁角に接する所に、判然したる濃黒紋を印す。后翅は長さ二分、幅九厘あり、全脈に凸凹多くして、且つ全面紫黑色を帶ぶ。腹部は能く肥大し、末節を除きたる背面の全部は淡黑色をなし、腹片及末節は灰褐色をなす。而して産卵管は短かくして末節よ短毛多し。

本種ハ大島の西部(久滋村)及德之島南部の山中に於て採集したりき。

其七、大サジ、*ヘラバト* (*Healus* sp.) 全体青色の大形種にして、前種と同じく頭部の匙狀を呈し、体

長三分、翅の開張四分五厘餘あり。頭部は背腹共よ青色を帶び、扁平にして前方に突出し、複眼は小さく后頭部の兩側に扁在し、兩複眼の間即ち后頭部の中央よ短縦線を有す。額面は隆起少なくて斑紋無く、口吻は短小にして、關節は不判明なり。觸角は額面複眼の稍々上部より出で、短かき鞭狀をなす。

胸部は頭部と同色にして斑紋無く、前胸部は倒凹字形をなし、中胸部は之れに發顛し、其背面よは少しく横皺を有す。前翅は前種と畧同形にして全部青色をなし、長さ一分八厘、幅六厘五毛あり。后翅は稍

乳黄色を帶び、長さ一分六厘、幅七厘五毛を算す。肢は三對共に基、轉、腿節は綠色を呈し、脛節及跗

節の鮮青色を帶ぶ。腹部は背腹共に灰青色を呈し、各關節の終りに淡色帶を有す。産卵管は稍褐色を帶び、短かけれども少しく尾端に現る。

該種は嚮に小貫氏が農事試験場特別報告第十號に於て、大サジヨコバヒとして發表せられたるものゝ酷似す。而して同氏は香川縣に於て只一頭を得たるものにて、寧ろ奇種に屬するものなり、と附記せられたれども大島に於ては、其全島に發生するものゝ如し。今、右兩者の異なる所を摘記すれば左の如し

小貫氏の大サジヨコバヒ

大島産のもの

体 長

二分八厘

三 分

頭部及胸部

褐色を帶ぶる部あり

上記のもの無し

頭部の額面

淡褐色を有す

斑紋あるを認めず

前翅の前縁脈に附着する翅脈

三個

四 個

右の如くなれども、色及大小は内地と島とに依て生じたる差異となし、前後翅の翅脈も小異の點あれども、深く質すべきものにも非らざるものゝ如くなるを以て、余は右二者を同種となし、小貫氏に従て大匙浮塵子と名稱し置きぬ。

其八、小サジヨコバヒ(Healus sp.)

一見前種に酷似すれども、形小にして、且つ頭部の突起も少な

きを以て、余は大サジヨコバヒに對し小サジヨコバヒの新稱を附せり。頭部は畧三角形にして全部青色をなし、后方の兩角に黑色卵形の複眼を有す。額面は畧正角形をなし、複眼の前方より短かき同色の觸角を出す。胸部は頭部と同じく青色を呈せれども、中胸背の中央に少しく淡褐色を帶びたる部分ありて、其部は四條の短縦線を具ふ。前翅は前種よりも短大にして、長さ一分五厘、幅六厘五毛あり、全面青色を帯す。后翅は灰色半透明にして、長さ一分五厘、幅五厘餘あり。后肢は長さ二分五厘ありて全体

青色をあし、中肢及前肢は共に一分四厘にして、后翅と同じく青色を呈すれども、中肢は著しく褐色を混す。腹部は西洋獨樂狀をあし、全体青色を帯び、尾端に粗毛を密生す。産卵管は短くして腹端に現れず。該種は大島の東部、及南部に於ける稻田の雜草、及河畔等の雜草中に於て多く之を採集せり。

其九、大シロエノバト (*Tettigonia* sp.) 大形種にして全体白色を帯び、体長二分二厘、翅の開張四分

七厘あり。頭部は白色にして、複眼は紅色を呈し、兩複眼の中間に畧三角形をあせる黒紋ありて、其兩側に單眼を有し、單眼の前方即ち頭部の兩側に沿ふて淡褐の三角紋を有す。額面は背面と同じく白色をなせども、中央に一縦線及十數條の横線ありて、其部は淡褐色を帯び、頂部に近く三個の黒紋を横列す。胸部及翅肢は頭部と同じく白色を呈し、前胸部は前方に彎曲し、中胸部は大にして横皺多く、中に二圓紋を横列す。前翅は長さ二分、幅五厘餘、后翅は長さ一分七厘、幅七厘許りあり。肢は、后肢最も長く三分内外あれども、前肢及中肢は二分弱に過ぎず。腹部も亦白色なれども、腹面は末端に至るに従ひ、稍黄色を帯び、短毛を密生す。産卵管は割合に短かし。

該種は大島全島の田圃及河畔の雜草中に夥しく發生するもの、如し。本種は嚮に小貫氏が農事試験場特別報告第十號に依て公にせられたるミツテン大ヨコバヒに酷似すれども頭、胸部の斑紋及翅脈に異なる點多きを以て、余は之れを別種となし、大島浮塵子の新種を附せり。

其十、タケエノバト (*Cicadula* sp.) 一見黄綠色をなせる小形種にして、常々竹に夥しく發生するを以て竹浮塵子の新稱を附せり。頭部は背腹共々黄赤色をなし複眼は灰褐色を呈す。額面は中央に隆起し複眼の内側には黄色鞭狀の觸角を有す、其長四厘あり。胸部及翅は灰褐色にして、前翅は長さ一分一厘、幅三厘を算し、内縁及后縁に接したる部分は少しく綠色を帯び、翅端は無色透明をなす。后翅は

長さ九厘餘、幅約五厘あり、極めて淡き黄色を帯ふ。后肢は前翅と畧同色を呈し、脛節及跗節に長粗毛多く、長さ一分五厘内外あり。前、中肢は共に淡灰色にして、脛節及跗節は黄色をなす。腹部は八關節より成り、側面及腹面は黄色をなせども、背面は黒色を帯ふ。産卵管は短かく、且つ著からざるを以て一見生殖器の外貌により雌雄を區別し能はざる程あれども、雄は尾端に長粗毛を密生す。

該種は本島阿木名村(東南部)なる路傍の竹垣中よ於て、夥しく採集せり。

其十一、ヒメシロコヨバヒ(Diameura sp.) 全体白色の小形種にして、体長七厘六毛、翅の開張一分二厘あり。頭部は幅廣く、複眼は稍紡錘狀をなし、背面の後方よ不判明なる一條の縦線を具ふ。額面は割合に長く、口吻は著しく三關節に分れ、觸角は鞭狀にして極めて長く、約三厘五毛あり。前胸部の背腹共に頭部と同じく白色を呈し、二對の翅は共に極めて薄く、白色半透明にして、前翅は長一分餘、幅二厘八毛、后翅は長さ八厘、幅三厘二毛を算す。肢は三對共に純白色をなし、前、中肢は六厘餘、后肢は一分二厘弱あり、能く飛跳す。腹部は紡狀をなし、長さ四厘あり、背面は淡黒色にして、腹面は白色を帯び、末節及産卵管は極めて淡き紅色を呈し、同色の粗毛を散生す。

該種は大島の東部及、徳之島の畦畔に於て採集したるものよして、内地に産する白色浮塵子 (Empoasca sp.) に酷似すれども詳細に調査する時は Diameura 屬なるを以て、姬白浮塵子の新稱を附し、Empoasca 屬なるシロコヨバヒ及 Tetigonia 屬なる大シロコヨバヒと區別せり。今内地産のものど著しく異なる點を摘記すれば、内地産のシロコヨバヒの腹部は、全体白色にして后翅に二頂室 (Apical cell) を有すれども (即ち Empoasca 屬の特徴) 大島産のものは腹部の背面少しく黒味を帯び、后翅に二個の頂室 (即ち Diameura 屬の特徴) を有す。

其十二、ベニイロエムバ (Empoasca sp.) 雌は体長一分、雄は九厘内外、翅の開張二分一厘乃至一分九厘あり。頭、胸、腹共に美麗なる紅色なるを以て紅色浮塵子の新稱を附せり。頭部は僧笠狀をなし複眼は紫青色をなす。觸角は長さ二厘五毛ありて基部の三節は長大なれども、第四節よりは著しく細まりて毛狀をなす。前翅は長さ八厘乃至九厘、幅二厘内外あり、其翅底に接する大半は美しき紅色を呈すれども、先端は殆ど透明にして、極めて淡き桃色を帶ぶ。翅脈は又桃色をなし、臀脈は淡色透明をなす。后翅は長さ六厘五毛、幅二厘五毛内外あり、透明にして僅かに紅色を帶び、濃色の翅脈を具ふ、脚は三對皆淺黃色ををし、而して前、中肢は共に長さ五厘弱ありて、前肢には其脛節端に紅色を混す、后肢は長さ一分弱あり、基節及脛節の基部は紅色の部あり。腹部は形、紡狀にして八關節より成り、長さ五厘餘、幅約二厘あり、産卵管は黑色を呈し、少しく腹端に顯る。

該種は大島の北部、及徳之島の雜草多き稻田に於て採集したりき。

(未完)

◎コオヒムシ(負子)につきての疑問

在東京 長野菊次郎

コオヒムシは有吻目中、異翅亞目の水爬蟲科に屬するものにして、本邦普通に産するものにつきては、Appasus japonicus Vullief の學名を有せり。然れども、單にコオヒムシと云へる、名稱の下に隸せる、種類につきては、本邦、幾何種を産するかは、未だ精檢せられざるが如し(全國昆蟲展覽會出品目錄)はコオヒムシの一種として京都産の別種をも挙げたり。外國にて能く知られたるは、ザイタ屬(Zaitia)及びチプロニクス屬(Diplonychus)のものなり。此蟲の成蟲は、其背上に多數の卵子を負へるを以て、人の能く知る所にして、京都にてヒルメシモチ又はメシモチと呼び、大阪にても亦ヒルメシモチ、下野にては、オコシウリなどの方名あり。皆、其の習性を表はせるなり。扱、其の卵子を負へるは、雌なるか

將た雄なるかにつきては、古來學者間に、多少の異見ありたることにて、本誌第六十七號六足蟲彙纂中に掲げたるは、ジョルダン氏のアニマル、ライフを、其儘譯したるものにして、卵子を負ふは、雄とせる方なり。又栗本丹州氏の如きも、雄蟲論者にして、其詳細なる記事は、千蟲譜中にあり。今之を摘記せんに、負子は汚水の溝中、或は地塘中にあり、其形タイコウチに似て、背は青黒、六脚は黒褐にして、赤色を帶ぶ、雄の背上に雌者卵を生みつくるに、粘着してはなれず、不日にして、其卵子より子を生ずると、一夜に二十個に及ぶ。始めは白色に微黄を帶び、背に一條の綠色なる所あり、卵を出で、立所より水中を游泳すること至て疾速なり、漸次青黒色に變ず。卵を負ふ最初は白色にして、明微圓かある形なり。日を経て長く横よりみれば、蜂房の如く、上よりみれば、龜甲紋に似たり。又微しく褐色に變ずれば、卵頭兩眼の黒點、すきとほりて見ゆるものなり。其卵を破つて出る所、至て速なり。小兒捕へて弄玩し、之を龜甲蟲と云ふ。龍蟲よりすれば、甲柔にしてミガラノ類なり。卵盡く子を生ずるの後、甲ありて、石上に日に晒して、能飛行す云々とあり、(又此餘白に田中芳男先生の附記せられたる事實は第六十七號六足蟲彙纂の末尾に編者の添附せられたる所あれば之を参照すべし)、然るに

(圖のシムヒオコ)



カムストック Comstock 氏は、雌蟲論者にして、同氏の著はされたる昆虫全書 Manual for the study of

insects 及び昆虫生活 Insect life 等にて、下の如く記せり。コオヒムシの雌は、水の浸透せざる薄膜を有せる卵子を、背上に附着せり、蓋し其薄膜たる、自身の分泌せるものなり。と又ケンブリッジ博物誌中に記せる所を見るに、コオヒムシは、其背より卵子を負へり。然れども之を負はんが爲めに、特別の托器を有するにあらず、唯水に溶解せざるセメントの状態にて、一定の場所に附着せるのみなり。是につき

てチムモツク氏(Dimmock)は説をなして曰く、蓋し長くして、屈撓し易き、産卵管の働作によりて、之を産附するなりと、是亦雌蟲論者たるを知るべし。然るは獨逸のシユミット氏(Schmidt)は、チプロニクス屬(Diplonychus)の卵子を負へるもの、一標本を驗せしに、全く雄なることを知り、爾來、其他の種類中にも、此と同一の事實を驗し得たり。然れども如何にして卵子を雄蟲の背部に置くか、又は此の如き奇異なる習性の目的は、如何なる點にあるかの如きは、不明な屬したりき。此の如く、甲乙の學者、互に其見る所を異にせしが、輒近に至り、米國スラッター嬢(Mrs. Slater)の實驗によりて略、其眞疑を解決せられたるが如し。即ち嬢は、水中飼育器(Aquarium)内にて、負子の習性を觀察せしよ、雌は思ひ掛けなき雄の背よ、卵子を産附すること通常として、時としては其亂暴なる目的を遂げんが爲には、數時間争ふことすらあり。斯くて、遂に其目的を成就し、已の配偶なる雄をして、幼仔を運ぶ馬車の役目をなさしむるに至れり。尙嬢の言よれば、元來負子(ザイタ屬)は、甚だ活潑にして、迅速に馳走するものなり。然れども、卵子を負へるものは、水面より腹部の尾端を出して、葉片に附着し、靜に其軀を保てり、若し攻撃せらるゝときは、穩に其打撃を受けて、死したる様を裝ひ、卵子の運搬と、保護とに對しては、侮辱をも忍びて、却て好果を奏するものなりと。此等の實事によれば、略、其眞僞を決せられたるが如しといへども、此實驗の、重にザイタ(Naitia)屬のものにつきてあせるものなれば、直よ以て屬を異にせる、邦産のものを概括すべきにあらず、特に本誌第三十九號の雜録欄に載せられたる、神村直三郎氏の實驗よれば、邦産種の負卵者は、寧ろ雌蟲なりとの論決を與へられたるが如し。然れども、同氏の記事を案するよ、多少の疑なきを得ず。尙は同氏の言によれば、三十四頭中、卵粒を負ふたるもの七にして、負はざるもの二十七なり。但し負はざるものにして、腹中に卵を藏するもの二

十二にして、藏せざるもの僅々五のみ。又負ふたるものにして、腹中に卵子を藏するものは、一もこれなく、七頭ながら皆無卵なりしと、而して同氏は、腹中に卵子を藏せるものも、藏せざるものも、皆其尾部を同一にせるを以て、盡く雌蟲なり、との斷定を與へたれども、藏卵の如何に關せず、雌は雌生殖器を有せるを以て、雌なりとの斷言はなさるが如し。固より田中先生の説にも雌雄の其尾端を異にせること見られたれば、尾端の差が、果して雌雄を區別し得べきものなれば、神村氏の決定たる、少しも間然すべき處なし。然れども三十四頭中、一の雌蟲なきことは、大に驚くべきことにして、若し同氏の説の如く、雄蟲は已に交尾の義務を了りて、斃れたるものとすれば、今一層溯りて、雄蟲の生涯を研究すべき必要あり。特々卵子を負はざる雌蟲にして、腹中卵を藏せざるもの五個ありとせば、此五頭の如く其卵粒を如何にせしか、是亦疑はざるを得ず。余は好みて神村氏の説を疑ふにわらねども、上述の如く負子に於ける疑問、百出の際されば、斯學の進歩上、今一層の研鑽を希望するものなり。之を要するも第一負子の種屬を確定すること、第二雌雄の區別を明すること、此問題を決すべき根本なり。此根本に確定せば、卵子を負ふもの果して雄なるか、雌なるか、又は雌雄共にするかの疑問を決するは易々たることならんのみ。聊か余が知れる範圍内よ於て、諸家の所見の異同を羅列して、其間、なほ研究の餘地あることを辨じ、斯學に忠實なる諸君の、參考に供すること爾り。

(完)

○ Anopheles maculatus Theobald. Anopheles Leucopus dooiz. を臺北附近に

於て檢出せり

臺北衛戍病院細菌病理室

英 健 也

本篇は臺北衛戍病院細菌病理室に勤の英健也氏が臺灣産瘧疾蚊種に就き研究せられたる事項を臺灣醫學雜誌に載せられたるものなるが時節柄參考に資すべきものなるを以て特に之を轉載せり

臺灣に産するアノフェレスの研究は、羽鳥、木下、都築諸氏に據り、既に其一面は世論に噴々たり、手
任を本島に帯ぶるや、親しく木下君等と交誼を辱ふし、相携へてアノフェレス捕獲吸血試験等を共に
し、斯學先輩の示教を受け、幾多の便益を得たるは多謝する所あり、されどアノフェレス種族命名に關
しては、論評未だ同軌に出でず、こは不日、木下氏肉又蚊第二回報告に詳述せらる可きを以て、之れを
後日に譲り、茲に近時予の下に採集し得られたる、本島アノフェレス中二箇の新種を補追せん。とす。
其一、本年一月基隆衛戍病院附長濱二等軍醫より送附せられたるものにして左の性状を有せり。
全長、大約六、五mm、羽翼の長さ三、四mmとして、アノフェレス北海道(都築氏)より稍小なれども、アノ
フェレス臺灣I及II(同氏)より稍大なり、脚の長さ之に準す。
特徴、後脚跗節三箇の末節は、其上下の關節端に廣き白輪を有し、中央に黒色の長さ帶輪あり、後脚跗
節最末の一節は純白なり、羽翼の前縁は、四箇の大黒斑と三箇の黄斑を有し、第二黒斑は、第一黒斑第
三黒斑の和より均しき長を占む。第一黄斑は、羽翼の前縁に達せず。第二黒斑上の第一縦脈は、三箇の小
黒斑よりある。第二縦脈と第四縦脈は殆んど同じ高さよ於て、或は第四縦脈少しく早く分岐す。頭部顔
頂は灰白色にして、集簇眼は帯綠色を呈し、顛頂毛は長く、後頭縁に淡黒色の鱗片放散す。
觸角、其色淡黄褐色にして、尖端は透明、肉眼上白色を呈す。
觸鬚、各關節端は鱗片を缺けるも、他は黒褐色鱗片を以て被はる。末端二節の觸鬚は黄褐色透明にして
黒色小鱗片を附着す。各節の長さは〇、六四—〇、七三—〇、三八—〇、二一を算せり。嘴は黒褐色にして
其唇のみ色淡し。

胸部、黄褐色を呈し、肩胛に黒鱗片叢あり。其他横縫線竝に背甲の周縁に長毛を發生す。振球柄は白色也。

羽翼、前縁よ於ては、第一黒斑の前方に、二箇の小黒斑を有す。第一及第二黒斑は、連續して全長の半に達する黒線を形成し、爲め第二黄斑は前縁に達せず。第二黒斑の長さは第一、第三黒斑の和に均し。第二黒斑と第三黒斑間、及第三黒斑と第四黒斑間には巾廣き黄斑あり。副脈は第一黒斑に一致せる黒斑を有し、次で第一黄斑を形成し、進で第二黒斑に參與し、其末端に至りて止む。第一縦脈は第一黒斑、竝に第一黄斑の形成に參與し、第二黒斑の部に於ては三箇の小黒斑を以て、其形成に參與し、以下前縁の第三黒斑、第四黒斑、竝に其間の黄斑に一致す。第二縦脈は第一縦脈第二大黒斑中の第二小黒斑部より起り、先つ起始部小黒斑を有し、次で上横脈の前後に二小黒斑を形成し、第三黒斑の外半部に一致する所よ於て分岐す。其前枝は殆んど色稍淡く、粗なる黒鱗片にて被はれ、後肢は先つ稍長き小黒斑を有し、次で同長の黄鱗片とあり、再び小黒斑とある。第三縦脈は第二大黒斑の第一縦脈上第三小黒斑部より起りて小黒斑を形成し、更に其末端に一黒點を備ふ。第四縦脈は第一大黒斑の外縁に一致する部より黒鱗片となり、第二縦脈の分岐と殆んど同高きよ於て分岐す。其前肢は二小黒點を具ふ。後肢も亦淡き二三の小黒鱗片を二箇所に具有せり。第五縦脈は、著しき根斑を有し、其前肢は三箇の黒斑、後肢は剪縁に達する部に於て、小黒點を有す。第六縦脈上には、三箇の黒斑あり。外縁は黒黄鱗片二三箇錯綜せり。前縁よ於ても、諸々に黒鱗片を混す。

脚、前脚の大腿は少しく膨大すれどもアノフレス北海道に於けるが如く、著しき根棒状をなせるに非らず、僅かに其厚徑の他より太きのみ。前脚、竝に中脚の大腿、及脛部は小黒鱗片を以て縞状を呈し、跗節は第一節も亦縞状なれども、以下跗節は黄褐色にして、帶輪を有せず。後脚の各關節部は、其色淡く、第一跗節迄は、前、中兩脚の如く縞状なれども、第二跗節の下關節端と第三跗節の上關節端とは、

廣き白輪を形成し、以下の跗節關節は、皆白輪を具有す。而して第三、第四跗節體の中央は、黒色の廣き帶輪を形成し、第五跗節は全然純白あり。

腹部、各部は一對の薄き斑點を有し、各節何れも黄色の長毛を粗生し、終末節には金黄色の美麗なる長毛あり。

鑑別、其羽翼はアノフェレス臺灣IIに類すれども、第一縦脈上の關係は、全く之れと異れり。即ち彼の如き丁字形をなさずして、三箇の黒斑を有せり。後脚は全然彼れと差あること、記載の如し。羽翼に於て類似せるものはアノフェレス、ロイコウプスなれども、第二、第三黄斑は彼れに於ては著しく狭く、且つ其後脚跗節は、其末節の三箇、純白なれども、本蚊に於ては、末節一箇のみ白色なり。本蚊に最も符合せるものは、*Anopheles maculatus theobaldi* として、近時 *donitz* が北スマトラより齎せられたる一種に付記載せるもの、竝に其寫眞附圖に示せる羽翼にして、大體の所見は概ね相一致せり。故に予は本蚊を以て、臺灣産アノフェレス、マクラツウスなり、と判定せん。若しデオニツツの記載せるものと、予が標本との異點を擧ぐれば。一、觸鬚第二末節は、彼れに於ては白色にして黒輪あれども、予のものは黒鱗片散生して、帶輪状と認め難し。一、羽翼第二縦脈前肢は、彼れの寫眞圖に於ては二箇の黒斑を有すれども、予のものは殆んど黒鱗片を以て被はる、第四條脈後肢は、彼れに於ては一箇の黒斑なれども、予のものは二箇なり。

其二、本年二月、臺北衛戍病院附西春二等軍醫、私用の爲め屈尺を携とし、アノフェレス蚊の採集を囑託し其十數頭中、左記の性状を有するものを得たり。

全長、五、五mm、翼の長さ二、三mmを有し、大約アノフェレス臺灣IIに類する大さを有す。脚の長さ之れ

に準ず。

特徴。跗節に於ては、其關節端に三箇の白輪を有し、其後脚第二跗節の下端より以下は、全然純白なり。觸鬚の末端は、白色を呈す。羽翼の前縁には、四箇の細長なる黒班あり、黄班は甚だ狭小なり。第二黄班は、第一縦脈上へ達せず。第二縦脈の分岐は、僅かに第四縦脈より早し。

頭部、後頭縁は、黒褐色鱗片叢あり、其他白毛を有す。

觸鬚、根幹は黒褐色長大なる鱗片を具有し、其他の節も黒褐色を呈すれども、其末節は黄色透明なり。各關節端に於ても鱗片を缺けるを以て、帶輪狀の觀を呈す。各節の長さ〇、四七—〇、五八—〇、三五—

〇、一七あり。

觸角、黒褐色を有すれども、其末節に近づくに従ひ色淡く、各關節端は白色を帯び、淡黄色の毛を有す。嘴は黒褐色鱗片を以て被はれ、橄欖體は透明黄色を呈せり。

胸部、黒褐色を呈し、其中央線は黒色、後半部、横縫腺部は暗色にして、長毛は黄色肩胛部は鱗片叢なり。振球の柄は黒褐色なり。

羽翼、前縁は於て四箇の細長なる黒班を有し、其間の黄班は狭小なり、第一黒班の前端も、黒鱗片を具

有し、僅かに黄鱗片を混することあれども、一見起根より第一黒班迄は、一條の黒線を爲せり。第二黒線は最も長く、第二黄班は前縁に止まり、第一縦脈上に達せず。第四黒班は短くして外縁に及べり、前縁は概して其鱗片他部より其色黒し。副脈は第一、及第二黒班の形成に參與し、第二黒班の末端に到り

て止む。第一縦脈は、其起始部より第一黒班迄は黒鱗片を附著し、次で僅かに黄班に參與し、再び第二黒班に一致し、第三黒班の末端に到る迄黒鱗片を有す、故に第二黄班は只前縁のみに止まれり。第三黄

斑の成形は參與し、第四黃斑に一致す。第二縦脈は第二黒斑の内縁より起り、分岐部までは黒鱗片を以て被はれ、其の前肢も亦黒鱗片、後肢は一般に鱗片粗あれども、特に白斑を認め難し。第三縦脈は第二黒斑の中央に當る部より起り、中央に於て黄鱗片を蔽み、前後は黒鱗片を以て被はる。第四縦脈は第二部より分岐部迄、殆んど黒鱗片のみを有し、第二縦脈分岐部より僅か遅く分岐す、前肢は外縁近き側に於て、後肢は其中央に於て、黄鱗片を有するの外、黒鱗片を以て被はる。第五縦脈は根斑の外分岐迄粗なる黒鱗片あり、前肢は前後兩端に黒鱗片を有し、中央の大部は黄鱗片、後肢は殆んど全く黒鱗片を以て被はる。第六縦脈上は於ては、三箇の黒斑を有す。外縁は黒鱗片に富み、各縦脈の末端は黄鱗片を混せり、前縁は黄鱗片よりある。

脚、前脚の大腿は膨大せず、僅かに其起始部の厚經廣さが如し、各脚の大腿より脛骨、竝に第一跗節に到る迄は、黒白の鱗片叢により縞状を呈し、前、中兩脚以下の跗節は、其關節端に於て白色の帶輪を呈し、體は黒褐色を呈すれども、後脚の第二跗節末端より以下は、全然白色なり。

腹部、暗黒色にして長毛を發生し、生殖部は於ては著しく黒鱗片を密生せり。其他最末第二節の腹面に於ても、鱗片叢を具有せず。

鑑別、後脚跗節の白色なるアノフェレス屬は稍多し、例へば *A. argyrotarsis desvoidy*, *A. paludis theob*, *A. mauritanus charnoy*, *A. maculipalpis theob*, *An. Jamesi theob*, *An. ablypes theob*, 等の如し。然れども其羽翼に於て差異多く、獨り類似せるものは前段の *A. maculatus* なるが如きも、既に記載せる所に照せば、其差自から明かならむ。 *Anopheles fuliginosus* Giles は最も本蚊と類似し、 Gnats or Mosquitoes Giles 1902 第二段に於ては、同氏はフリギノーヅスを以て、全然 *Anopheles leucopndonitz* と同一なりと認

めて記載したり。これを donitz 氏はフリギノウズスに於ては、其後脚跗節は最終二節のみ純白にして、ロイコーブスは第二跗節末端以下純白なり。何人や二と三とを同一なりと唱ふやと。

以上記載する所に據り、予は之れを Anophelus leucopus donitz と判定せんとす。予の標本とデオニツツの記載、竝に其寫真圖と符合せざる點を擧ぐれば、次の如し。

donitz の記載

臺灣産

第二縦脈は第四縦脈より早く分岐す。

同上なれ共其差渠の如く著しからずして僅に 0.8mm に過ぎず。

羽翼前縁の第一黒斑前には二箇の黒斑を著ぼす。

前縁第一黒斑迄は殆んど一直線に黒鱗片を附著す。

第二縦脈の後枝に白點あり。

明かならず。

第五縦脈は二箇處に於て黄鱗片を有せり。

中央のみ黄鱗片なり。

前脚の大腿の三分の一は他脚より厚徑なり他脚のものは其末端部厚徑なり。

上記の如き厚徑の差を認め難し。

腹節第六節に白斑を認む。

明かならず。

終りに西春長濱兩軍醫のアノフェレスの採集、竝に送附を快諾せられたる厚意を謝す。



◎害益蟲の二、三に就て

名和昆蟲研究所長 名和 靖

左の一篇は、此頃、常昆蟲研究所長が、縣下を始め、各處に於て、小學兒童などに向ひ、普通害益蟲に就き講話を試みられし際、兒童の極て了解し易からしめんが爲、圖入にて一葉刷さし配付されし者なるが、讀者の參考に資する点もあれば茲に掲載する事さなしぬ蟲の種類は極めて多い中にも益蟲と申して農家の大層爲めになる蟲もあれば、害蟲と申して大變の害をなす蟲もあります、其害と申すも蟲に由ては中々非常なもので彼の二化生螟蟲の如きは年々米作の割以上、即、全國で四百万石以上の害をして居るのであります、其他の蟲の害を合せますれば實に莫大な

ものであります、日本は昔から瑞穂國と申して結構なお米が穫れますが此、よいお米を澤山蟲喰せて置ても害蟲の惡むべきこと、之れを驅除せねばならぬことが分りませう、いでや左も惡むべき害蟲即二化生螟蟲と浮塵子とに就て其大畧を述べませう。

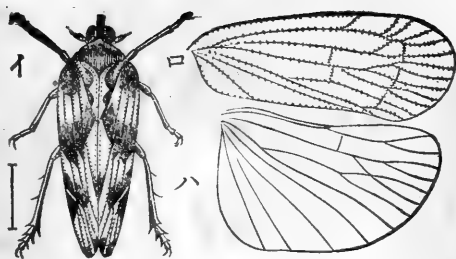
○二化生螟蟲はイネノ又井ムシとも申しまして一年二回發生致します、其順序は冬は幼蟲で藁の莖の中又は稻株の莖中に潜んで居て五、六月頃成蟲となつて出で稻葉に卵を産み約一週間位經つと孵化して幼蟲となり莖中へ喰ひ込み大きくなると其中で蛹となり八、九月頃又成蟲となつて卵を産み前の如く孵化すると直に莖中へ喰ひ込みその儘冬を越して翌年五、六月頃成蟲とあります、

ウシカノ圖

斯様な順序で發育致しますが之れを驅除致しますは色々の方法がありまして小學校兒童即ち阿方等に最も容易く出來ますのは採卵法と申して卵塊を探るのであります、其卵塊は圖に示す如く稻葉の表、しかも上の方に一所澤山産みますから、これを見出して採るのであります、早きは苗代田に於て産みますから、よく氣を付けて探つて御覽なさい、それから田植をしてからも三、四回採卵をせねばなりません試に本年は何れ位採れるかやつて御覽意外澤山採れます、其採れた丈は蟲の害を除いたのであります。



螟蟲卵塊の圖



○浮塵子はヨコバヒムシ又はウシカなどと申しまして、之れも時とするとき非常な害を致します、明治三十年の如きは全國で七千五百万圓と云ふ莫大な害を致しました、此蟲は幼蟲も成蟲も共に稻の液を吸ひますから澤山つきますと遂に稻が枯れてしまひます、この蟲には澤山の種類があつて一様ではありませぬ、早きものは苗代田に於て卵を産み成蟲なる迄の間が短くて秋の末迄には四、五回も發生致しますから初の一匹は年内に二万程になる勘定であります、斯様に殖へ方が早いから初は少い様でも中々油断が出来ませぬ、之れを驅除するは苗代田に於て捕蟲網を以て度々掬ふのが一番宜しい、斯く致しますれば、管に浮塵子のみならず前申した螟蟲の蛾や、稻の青蟲やら、其他色々の蟲が澤山採れますから是非

苗代田に於て度々掬つて澤山に殖へぬ中に採るのが上策であります、圖の(イ)は浮塵子の一種で(ロ)と

(ハ)は其翅を擴いた所でありませす。○前よ吾々の爲めになる蟲があるを申しましたが、其れも澤山の種類がありまして夜と

あく晝となく害蟲を捕食して吾々に非常な利益を與へて居ります、皆さん試に蚜蟲や貝

殼蟲の居る處を御覽をさい、圖に示す如き形の蟲が居ります、これはテンタウムシと申

します、このテンタウムシにも色々の種類があつて背の點が種々

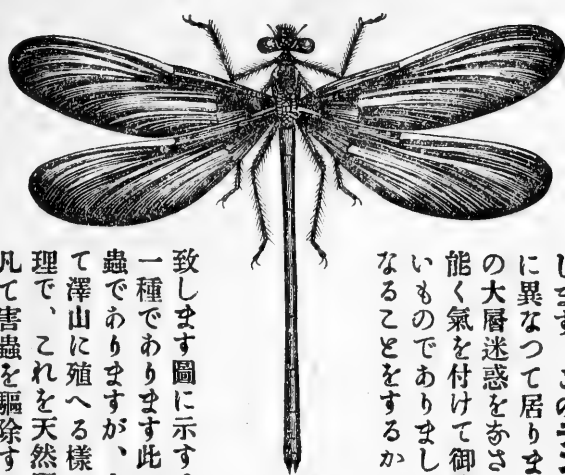
に異なつて居りますが形狀は大概一樣であります此ものがお百姓

の大層迷惑ををさいませす蚜蟲杯を頻りに食べますから大變の益蟲であります、尙

能く氣を付けて御覽なさい此の外に色色の蟲が來て蚜蟲を食べる有様は中々面白

いものでありまして、これ等のことは直に實驗が出來ますから何の様な蟲が如何

トバウの圖



○皆さん度々捕へて弄になさいましたトバウも矢張り大變

の益蟲であります、蝶々々々菜の葉よとまれと云ふ唱歌は皆

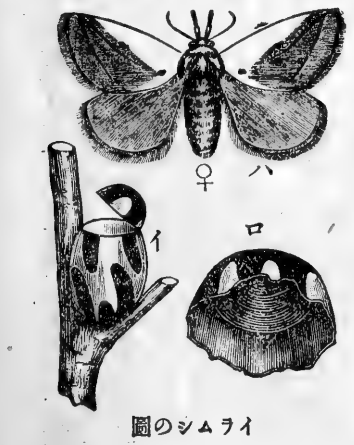
さんよく御存じであります、此の蝶は菜の葉や柑橘類其他

色々の葉杯を食べる所の蟲の親であります、トバウは此れ

等の蝶や或は蚊などを捕るもので、其幼蟲も共に非常の益を

致します圖に示すところのものはトバウの

一種であります此の外カマキリ、蜂なども益



トバウの圖

テタウムの圖



終に望んで一言申上げて實驗の材料と致しませう、皆さん柿の木や、梨、梅杯の木を御覧なさい俗に雀の壺とか、雀の枕とか申す、即ち圖の(イ)に示す所の堅いものが枝に澤山付て居りませぬ之を採て貯へて置て御覧、六、七月頃になりませすと一方の口が開いて(ハ)の様な蛾が出ませ、之は即ちイラムシの親でありませして(イ)は其繭であります、あの蛾が柿の葉杯に卵を産み遂に孵化して幼蟲即イラムシとなり葉を食し網の様に致しますこの蟲は大層奇麗でありますけれども毒のある毛をもつて居ますから、うつかり觸ると大變痛みを感じます、故に鳥なども容易に食べませぬから他も之れは眞似て体も恐しい毛を以て鳥などに食れぬ様は警戒して居る蜆も澤山あります、即梅毛蟲とか櫻毛蟲などは其中の一でありますこの梅毛蟲などは毒を有つていけないけれども恐ろしい毛の爲めに巧に敵の害を免れ益々子孫の繁殖を圖ります、其巧妙なる實は想像も及ばないのであります、皆さん活眼を開てよく觀察なさい幾多の面白い道理を發見することが出来ませう。

○問ふ幼蟲とは如何なるものを申しますか○答、幼蟲とは卵から孵りたる蟲、即ち蠶で申せば桑葉を食べる蟲を云ふのであります
○問ふ蛹とは如何○答、幼蟲が食物を食へて段々大きくなるに食物を止めて形の變る時代があります、其食を止めたる時代を蛹と申します、即ち蠶で申せば繭の中に居るムツゴを蛹と云ひます○問ふ成蟲とは如何に○答、成蟲とは蝶とかトンバウとかカマキリの如く親蟲のこゝであります

◎ エンドノキリムシの驅除法

名和昆蟲研究所助手

石田和三郎

編者云、本篇は四月廿九日、當昆蟲研究所員の催しに係る、水曜昆蟲會席上に於て、助手石田和三郎氏が講演せられたる大要なり。
夜盜蟲驅除は、目下急眉の時期なれば、特に掲ぐる事とせしむ。

エンドノキリムシは糖蛾類地蠶蛾科に屬するもので、蕎麥、豌豆其他蔬菜類等、各種の植物に發生して、農家を困むる所の一大害蟲でありませして、一年二回發生致します、此の幼蟲は、晝は土中或は塵芥等の下に潜み、夜間出で、食害致します故、此等の類を夜盜蟲とも申します。而して夜盜蟲の中でも、此のエンドノキリムシが最も害を致します(以下夜盜蟲と云へるはエンドノキリムシを指す)。該蟲の驅除法に就きませしては、幼蟲の時代に明渠を設けて、之に陥るとか、或は潜所に誘ひて、捕殺すると云ふ方法は、往々各地に於て、目撃する所でありませすが、此等の方法は、皆被害當時、狼狽の余り、止むを得ず行ふ處の窮策でありませして、假令其方法にして、多少効を奏するにせよ、早や、既に幾多の損

害を蒙り居る次第でありますから、成るべく、害を未發に防ぐ方法を講究せねばなりません。如何なる害蟲でも、既に發生してからの、如何とも致し方がありません。處で敵を破るゝは、其敵の弱点を突かなければなりません。申しまして、豫防と云ふ事が肝要であります。處で敵を破るゝは、其敵の弱点を突かなければなりません。申しまして、害蟲を驅除する上にも、やはり其弱点を見出して、之を突いたならば、一舉して驅除する事が出来ませう。此夜盜蟲の弱点は、何であるかと申しますれば、成蟲が、非常に糖蜜を好む性質で、余程の遠方よりも、其香を慕ひて、集り來ます故、其性質を應用して、驅除するを糖蜜誘殺法と申し、うまく應用したならば、簡單にして中々効果があります。私は昨年所長の命に依り、夜中採集を利用して、岐阜市近傍にて、年々此夜盜蟲の爲めに困めらるゝ、稻葉郡則武村の地を撰み、同地の林中にて、約四十本の樹幹を、夕方より糖蜜を塗抹し、之れが試験を行ひましたに、意外の好結果を得たれば、其の手法と實驗の成績を報告して、諸君の御參考に供する次第であります。糖蜜の調製法は、黒砂糖を酒にて溶くのみでありまして、其溶き加減は、既に御承知の事と存じますが、先づ、黒砂糖と酒とを混へ、摺鉢にて能く摺り、普通焚込と稱する下等の砂糖位ひの粘液に致します。余り淡ければ流れまして、且功能が薄く、濃くあれば、従て糖蜜の多量を要する事になります。其邊は適度を見計らはねばなりません。斯くして調製したる糖蜜を樹幹に塗りますと、夜盜蟲の成蟲即ち蛾は、砂糖と酒の香を尋ねて來ますのであります。爰に、其塗方等に就て、注意の要點を掲ぐれば左の通です。

○塗り方は樹幹へ幅約一寸、縦三寸乃至四寸位に、刷毛にて塗り付くべし、○捫、樺、栗、櫻等の如き、樹皮粗なるものにして、脂のなき樹木に塗抹すれば、多數集り來るも、松、杉、椿等脂の出するもの、又は外皮滑かなるものは、其効少し。○月夜の時は、月影に、風のある夜は、風の當らざる方面を撰みて塗るべし。○冷かなる夜は、成るべく下部(一、二尺の高さ)に、暖かなる夜は、四五尺位の高さに塗るべし。但し、普通三尺乃至四尺の高さを度す。○塗抹すべき場所は、成るべく夜盜蟲の被害地に接近せる林を宜しとす。○糖蜜は、黄昏之を塗り置き、三十分乃至四十分間毎に見廻りて、其蛾を捕獲すべし。○時々マロモロカアリ(舞々掉頭)

ハチ(蜂)メツグシ(蜘蛛)等來るものなり。是れ等の蟲類の來る時は、夜盜蟲の蛾は來らざるを以て、見付次第直に取除くべし。

前記の方法は依りまして、集り來る所の夜盜蟲の蛾は、糖蜜を充分に吸收しまして、燈火を差出すも、人の近づくも、一向平氣なものでありますから、靜かに其下に、捕蟲器を受け、然る后、毒瓶にて一頭宛伏せませすれば、容易に捕獲する事を得るものであります。若し、驚て逃げんとするも、大抵は糖蜜中にある酒の爲めに、身体を自由を失ふものと見へて、下なる捕蟲器の中へ落ちますから、中々愉快に捕

獲が出來得るものであります。故に該蟲發生の地は、是等の方法を共同して執行したならば、大に効果がある事と信じます。勿論私は標本の製作を第一の目的とし、旁々試験を行ひましたのですが、驅除を第一の目的とすれば、一々毒瓶を用ひずとも宜しい、尙糖蜜の中に毒薬を入れ置けば、勞せずして功を奏する事が出來ませう、尙昨年十月採集試験の結果は、左の通りでありました。最も十月七日以前の、種々差支の爲め、採集を行ふ事が出來ませんでしたのは、如何にも残念に存じます。

採集月日	回数	
	第一回採集數	第二回採集數
十月七日	三九	五四
同 八日	四八	七五
同 十一日	四九	八六
同 十四日	四七	八九
同 十五日	四二	六五
同 十六日	三七	五八
同 十七日	六九	一〇二
同 十九日	六七	四二
同 廿日	五八	八三
同 廿一日	四〇	四七
同 廿五日	三七	五九
同 廿六日	三三	四二
同 廿八日	八	二
同 廿九日	六	七
同 十月十一日	二	二
同 八月	一	一
計 合	一五八三	一九二三

即ち前表に依りますれば、十月七日頃は、第二期發生の夜盜蟲の蛾は、既に發生最中でありまして、十月十九日は最も盛よ、二十日よりは漸時衰へ、廿九日乃至りまして僅に七頭、尙下て十一月八日よりは、殆んど絶滅よ飯した、否成蟲の時期でないよ云ふ事が分ります。而して前表の如く、僅か十六日間の採集よ、九百廿三頭を得、一日平均五十七頭強に當る夜盜蟲の蛾を、しかも黄昏より僅か一、二時間よ捕獲すると云ふ事は、非常なる好結果よ云はねばなりません。そこで又九百二十三頭の蛾に就て調べて見ますと、發生の初期は雄多く、中頃は相半し、晩期は雌の方が多數を占むる様よなります、然しながら全体より申せば、雌は雄の三分の一に當る勘定でありました、尙又雌の腹中の卵を調べて見ましたが、一蛾の有する卵は、五百粒乃至七百粒ありました、今假りに昨年捕獲したる九百二十三頭の内、三割雌として、其雌が一頭に付き、五百粒の卵を産するものとしたならば、其卵より十五、六万頭の幼蟲が出来る勘定であります。然しながら、此内氣候、或は天敵等の爲め、三割位は斃れるものと見ても、優に十萬頭の夜盜蟲を驅除することが出來たと申してもよろしい、此十萬頭の幼蟲が、勢を揃へて前記則武村一部の農作物を害するよとしたならば、實に由々しき事であらうと考へます。斯る次第でありますか

ら、該蟲は苦めらるゝ地方は、宜しく此時に於て、大に驅除を講せねばおきませぬ。序ながら申す、本年も矢張り、昨年の試験を繼續して、實行に取掛りましたが、第一期發生の夜盜蟲の蛾も、既に四月八日より糖蜜に來り、漸次其數を増して、目下は一夜十數頭も採集し得る事故、此際大に試験を正確とし、種々なる方面に向て觀察しつゝあります故、此報告は追て申上ぐる事に致します。



◎六足蟲彙纂 (辰の巻)

在東京 長野菊次郎

(十一) 蝶の雌雄數 昆蟲の雌雄の比較數は、各類、各種によりて同トからざれども、鱗翅類に於ては雄數の雌數に超過せる場合多しとを。就中蝶類につきバツテス(Bates)氏の言によれば、上アマゾン地方(Upper Amazons)に産する、百種に近き蝶の雌雄の割合は、雌一に對して、雄百に當れりと。又エドワルド(Edward)氏の實驗によれば、北米にて鳳蝶屬の雌と雄とは、一と四との割合なり。と又ツライメン(Trimen)氏は、南米に於ける十九種の蝶は、皆雄の數の超過せることを見出し、特々其中の一種は、雌一と雄五十との割合に當りたれども、其他の種もつきては、六年間の採集は、雄は各地より多數を得たるに關せず、雌は僅々五頭を得しのみなり、とは驚く餘あり。又メーラルド(Mallard)氏の言によれば、ホルボン(Bourbon)島に於ける鳳蝶の一種は、雌一、雄二十の割合に當れり、と此他稀々雌の雄に超過せることおれども、概して雄數の雌數に超過せることを知るべし。

(十二) 蛾の雌雄數 蛾も亦概して、雄數の雌數に超過せるものにして、或る蛾の雄が、非常の多數を以て一雌蛾の周圍に群集することは、往々認むる所なり。ステントン(Stanton)氏の報告によれば、某蛾(Elachista rufocincta)の一雌の周圍には、十二乃至二十頭の雄の群飛せることありき、と又カレコノハガ或はサツルニア、カルピニ(Saturnia carpini) (野蠶蛾科の一種)の一雌を籠に入れて、外に露らせしは多數の雄蛾集り來り、之を室内に禁錮せしに、烟突を傳ひてさへ來りたりと、ダブルデー(Doubleday)

氏は是につきて、一日間に兩種の雄が、五十乃至百頭來りしことを見たり、と言へり。アウスツラリア (Australia) にて、ベルレアウクス (Verreaux) 氏は、小箱の内に、蠶蛾類の一雌を入れて、之を洋服のホックの中に入れて、殆んど二百頭の雄蛾は、其後より追躡し來りて、遂に家屋の内に侵入したりとあり。

(十三) 蝶蛾雌雄の價額　ダーブルデー氏は、スタウチンゲル (Staudinger) 氏の、鱗翅類目錄を調査せしに、三百種の蝶類標本につき、最も普通なる種類は、雌雄共々同價なれども、稀少なる種類百十一種は、其中僅か一種を除くの外、皆雄の價額廉しにして、之を平均するは、假に雄の價を壹圓とすれば、雌は壹圓四拾九錢に當れり、又二千種の蛾類につきて、雌雄其價を異にせるは、百四十一種にして、其中百三十種は、皆雄の方廉にして、僅か十一種のみ雄の高價に歸し、之を平均するに、雄を壹圓とすれば雌は壹圓四拾參錢の割合に當れりとなり。是れ亦雄數の、雌數に超過せる影響にあらざるや。(以上三件　ダーウキン氏のゼ、デツセント、ラブ、マン)

因に曰く、余はスタウチンゲル氏の最近の目錄を得て、近時の趨勢を知りたごと同時に、多數の昆蟲を採集、又は貯藏せらる、諸君が、其雌雄の數を比較せられて、本誌に投下、以て雌雄淘汰説の好材料を、供せられんことを希望するものなり。

◎博覽會出品の昆蟲標本(續)

岐阜縣不破郡垂井尋常高等小學校

小　竹　浩

第十一函、昆蟲之孳殖本能

昆蟲類が子孫の繁殖を圖るに於て、各其巧妙なる本能を有するは、何人も疑はざる所なり。即我子の生育するに都合よき、食物豊富なる場所を撰みて産卵するあり。木材に穴

を穿ちて、巢を營むあり、或は他の動物体内に産卵する等、皆子孫の繁殖を圖るに外ならず、之れを孳殖本能と名づく。其内容下の如し。蟲癭を造るもの、イガバチ、ヨモギワタバへの類四種。卵を幼蟲の食となる葉に包つみ置くもの、オトシブミザウムシ類二種。土中又は木材に穴を穿ち巢を營むもの、ベツ

コウバチ、クマバチの類五種。土よて巢を造り、卵を産みつけて食物を入れ置くもの、キスチバチ、トツクリバチ類九種。樹脂木皮等を以て巢を營み子を養ふもの、蜂類六種

第十二函、昆蟲冬季蟄伏状態

害蟲驅防の聲大なる割合に、其實の擧らざるは、必竟昆蟲學思想の乏

しさより、夏秋害を逞ふせし昆蟲も、冬季に至れば自然に死滅するものなりとし、冬季に於ける蟄伏状態の明ならざるより、其患を後年に遺すものゝあらずと信じ、之れが驅防を等閑に付するよるならん

然れども一たび冬季採集を試みたふんには、忽ち之れが迷想を氷解し、其發生は已に冬季に胚胎するものあるを覺らん、今是れ等の迷誤を訂さん爲め、これを調成せり。其内容次の如し。

○卵、木の皮にあるものヤマカマスノガ、土の中にあるものイナゴ、枯枝の中にあるものセミ、木枝に纏ひ付けあるものウメケムシノガ、

○幼蟲、卵に寄生しあるものカミキリヤドリバチ、繭の中にあるものイラムシ、巢の中にあるものチバチ、スズバチ、石の下に居るもの、ケムシの一種、他物を纏ひ居るもの、ミノムシ、土の中は居るものキリウジ、カプトムシ等、水中に居るものイサゴムシ、トンバウ等、木の中に居るものテツバムシ、朽木の中に居るものコメツキムシ、

○蛹、木の枝にあるものアゲハノテフ等、土の中にあるものセミ、ブダウノイモムシ等、

○成蟲、蝶にて越年するものアカタテハテフ、モンキテフ等、土中に居るものケラ、朽木の中に潜み居るものヒメクロアリ、キノコムシ等、塵芥中は居るものゴミムシ等、草若くは根の間に居るものヨコバヒムシ、テンタウムシ等、

第十三函、害蟲各種 茲に害蟲として蒐集せしは廣く一般の害蟲を示さんため裝成せるものにして、農作物の害蟲の重なるものは發生經過より之れが敵蟲をも添へ別に十箱を調成せしを以て茲には只數種を配列するに過ぎず。

人体に害を與ふるものカ、プト、ノミ、シラムシ、アタマジラムシの類、傳染病の媒介をなすものイハハカ、カ、の類、衣服に害を與ふるもの衣蛾、シミ等、筆の軸を害するものタケノシンクヒ、家畜に害を與ふるもの山羊ノシラムシ、イヌノミ、ハジラムシの類、標本を害する者カツラブシムシの一種、有益蟲を害する者カマキリ卵蜂、有用蟲を害するものカヒコノウチバへ、肥料成分を減少するものベツカフバへ、ハナアブの類、貯藏種子を害するものコクザウムシ、バクガ、コメツバリムシの類、果實を害すものナシザウムシ、木材を害するものスギカミキリムシ、キバチの類、蟲癭を造り成長を害するものイガバチの類、葉を食するものイナゴ、マツケムシ等の類、養液を吸収するものツマガグロヨコバヒ、桑貝殻蟲、蚜蟲の類、莖を害するものイチノズキムシ、樹心を害するものリンゴノカミキリムシ、クハカミキリムシの類、養魚の害をなすものコオヒムシ、ゲンゴウラウムシ等の類、

第十四函、益蟲各種 作物を害せる蟲類を斃すもの、即食肉蟲類の多くは、之れ益蟲あり。等しく食

肉性のものと雖も、其性質を見易からしめん爲め、食肉蟲類、寄生蟲類の二つに分つ、即次の如し。
○食肉蟲類、蟲の來るを待ち構へ一攫して捕食するものカマキリの各種、空中を翔りながら巧に多數の小蟲を捕食するものトンバウ、シホヤアブの類、晝隠れ夜出で、小蟲を捕食するものゴミムシの各種、マイマイカブリ等、青蟲尺蠖蟲の類を捕へ來りて幼蟲の食餌とするもの蜂の各種、小害蟲を刺殺するものサシガメの各種、蚜蟲又は貝殻蟲を食するものテナタウムシ類、尾端の鉄にて小蟲を捕食するものハサミムシの類、他の蟲を追撃して捕食するものミチヲシへの類、穴を掘り小蟲を陥落せしめて食するものアリヂゴク、○寄生蟲類、他の昆蟲に寄生するもの馬尾蜂、カモドキバチ、ハマクリヤドリバチ、アゲハヤドリバチ等の類、

第十五函、昆蟲に就ての俗説と迷信 害蟲驅除の行はれざるは、種々なる原因あるべしと雖も、古來種々なる俗説の行はるゝあり、迷信のあるあり、さればにや、田間ニ神符を建て、驅除の極意となし蟲送りをして最良の方法と爲す等より、延て害蟲驅除ニ影響を及ぼすや大なり。今是等の迷夢を醒さんため、尤も普通よ、且つ廣く行はるゝ、俗説と迷信とを集めて、簡單ある説明を加へたり。

○木田玄蕃に仕へしお菊の靈魂と稱せらるゝもの、お菊蟲 ○駿河の人由井正雪の靈魂と稱せらるゝもの、シヨウセツトンバウ ○優曇華の花とて世人の珍重するもの、クサカゲロウの卵 ○甘露の降りしとて嘉瑞と稱せらるゝもの、蚜蟲 ○麥化して蝶とあると稱ふるもの、麥蛾 ○小豆化して蟲となると稱せらるゝもの、ヒゲザウムシ ○實盛の靈魂が蟲となり稻田ニ害を與ふるなりと稱し蟲送となすものツマガテヨコバヒ ○鶯の落し行きし文なりと稱せらるゝもの、オトシヅミザウムシ ○雌雄の群集を以て蝨合戦と稱せらるゝもの、蝨 ○慶雲とて瑞祥となし、蚊柱とて凶事の前兆と稱せらるゝもの、蚊 ○ゲジの涎と稱し之に觸るれば禿頭病を起すと云ひ傳へしもの、カマキリの卵 ○佛者の使ゆへ之を虚待すれば瘡病を起すと云ひ傳ふるもの、シヤウジャウトンバウ ○マメハンメウの獄門とて申す貫き畑中に立て置けば他に移轉すと云ふもの、マメハンメウ ○古來冬は蟲となり夏は草となると稱せらるゝもの、セミタケ ○笹の節より生ぜし筍落ちて溪に入れば化して岩魚となると稱せらるゝもの、サウワ

因に記す右標本材料は全部兒童の採集せしものゝみを以て調成せしものなり故に尙適當の材料に缺くる所あれば他日を待つて完成せんとす

(二元)

◎昆蟲發句集

(一) 螢

晝見れば首筋赤きはたるかな
 螢火も百がものなりなめり川
 ほたる火や吹とはされて鴉の闇
 簀干して朝々ふるふ螢かな
 草も木も螢くさゝよ水の音
 走り込む螢のちかや谷の水
 田の水を見せて螢のさかり哉
 蚊遣火の煙にうれる螢かち
 傘をたゝまで螢見る夜かな
 みだれ落て螢くさゝよ舟の飯
 煙ともならで螢の行末かな
 水と火の相性もよき螢かな
 螢火に引かれてたよく蛙かち
 牛部屋に晝見る草のはたる哉
 疊むまで傘を放れぬはたる哉
 山水や見えぬ螢の影うつる
 草離れまゐる間もどかしはつ螢
 取りたがる顔てらし行く螢哉

◎工業に於ける螢の應用

古來螢は、詩歌俳句の材料となるの外、一般兒童等の玩弄物たるに過ぎりしが、近時昆蟲學發達の結果
 有益蟲として愛護せらるゝに至れり、而して、螢光の専ら燐火なりと稱したりしが、其酸化作用を基け

芭 宗 去 嵐 正 丈 北 許 舟 寥 度 望 花 言 流 鳳 圭 梅
 蕉 因 來 雪 秀 草 枝 六 泉 松 雄 一 子 水 芝 朗 朝 布 室

三重縣一志郡高岡村 喜田川要三郎

わりなしや螢もまはる水車
 往て戻る程の智恵あり飛螢
 はたる程無事なものなし水の
 上 飛螢人懼るでもちかりけり
 水の上を闇よして飛ぶ螢かな
 風呂流す頃は地を這ふ螢哉
 飛かけて光りを見する螢かな
 くらがりに牛の躰や飛螢
 ひつかしき世も日は暮れて飛螢
 はたる火に飛つく魚や水の音
 孫に手を引かれて出たり螢狩
 叱ぐるゝ子の手よ光る螢る哉
 奪合ふて踏つぶしたる螢哉
 呼ぶ聲は絶えて螢のさかり哉
 明からくらかりへ入る螢かな
 螢火や草にたさまる夜明方
 おのが火を木々の螢や花の宿
 人魂か魂祭る野よ飛ぶはたる

孤 井 大 史 柳 岱 南 拵 成 鐘 素 也 巳 丈 東 怒 芭 德
 山 眉 曾 千 眉 雲 枝 左 美 昏 明 有 百 草 工 風 蕉 之

千葉縣 高橋 徹 一

るものあることは、渡瀬博士の學說發表に依り、彌々明白となれり。同博士は、今猶將來理想の燈火として研究せられつゝありといふ。余輩は、是れが實際に發明せらる日の來らんことを、切望して已まざるなり。爰に亦、從來我地方に於て、螢を工業に應用するの一事あり。其は、夏時螢發生の際にあたりて、多く之れを採集し、陰干として貯へ置き竹細工の製業に供するものなり。今若し竹を板の如く成さんとする時は、先づ丸竹を伐り、之を兩半し、豫め一升許りの水は螢少しを入れたる溶液を備へ置き、其中に投つて煮沸し、數時間の後ち取揚げ、厚板にて壓し、其上は重石を置くときは、扁平なる竹を製し得べく、而かも後來火水の爲めに、決して其形を變ざることなきを以て、殊に賞美せらるゝなり。彼の方形若くは楕圓形ある煙管筒の如き製作は、多く此法に依るものなりと云ふ。噫微々たる小蟲と雖も前後相對照し來れば其効用亦多とするは足らん。



◎博覽會出品害蟲標本解説書

岐阜縣 揖斐郡昆蟲學會

本會は、今回第五回内國勸業博覽會に、昆蟲標本を、第一部八類へ十五箱、第九部五十類へ八箱を出品せしが、今覽者の參考に資せん爲め、本誌の餘白を借りて、第一部八類に於ける出品物の解説書を紹介せんとす、幸に御掲載あらん事を望む。

解説書

部	類	番號	品名	出品人
一	八	一	害蟲標本	岐阜縣揖斐郡昆蟲學會
				代表者 高橋俊益

一、出品の種類并に數 今回の出品は害蟲標本と稱し、岐阜縣揖斐郡内に於て最有害と認むべき害蟲卅三種に就き、從來本會員の調査研究の結果を標本に作成せしものなり。其種類と箱數及頭數は如左。

種 類	箱 數	蟲 種 數	頭 數	附 屬 蟲 種 數	頭 數
第一、稻の害蟲	五	九	一一一	七	二八
第二、桑樹の害蟲	四	八	八一	九	一四
第三、茶樹の害蟲	一	二	三一	一	一
第四、蔬菜類の害蟲	二	四	五二	一	二
第五、果樹の害蟲	二	三	一五	三	五
第六、森林の害蟲	二	六	四三	五	七
計	一五	三三	三三三	二六	五七

以上の標本中、第六森林に關する害蟲は第二部第九類に屬するものなりと雖ども、古來山林に富める本郡の一大害蟲として示すの要あれば、特に之を加へり。

一、添出品 第一號、害蟲標本説明書一冊。第二號、揖斐郡害蟲被害統計表一冊。第三號、揖斐郡害蟲被害統計色別地圖、同被害歩合色別地圖六十二枚。第四號、寫真四葉。

一、採集 本出品は、岐阜縣揖斐郡内害蟲驅除豫防委員、特別害蟲驅除豫防委員、及常務委員、其他一般會員の採集、或は飼育せしものたり。就中寄生蜂并に寄生蠅等は、専ら常務委員の飼育研究せしものに係る。

一、目的 郡内農作に對する主たる害蟲の發生經過及被害の有様、併に損害の尠少なからざるを示し、且害蟲の偶然に發生するものに非ざることを普知せしめて、害蟲驅除豫防、益蟲保護の必要を、何人にも理解し得る様、専ら啓發開導の點に重きを置き、各種の状態より、天敵、食物の關係をも説明せり是れ毎函、卵、仔、蛹より其敵蟲、及び被害植物をも、添加したる所以あり。

一、本會の來歴及事業 岐阜縣揖斐郡昆蟲學會は、明治三十二年四月の創設にして、始め揖斐郡昆蟲研究會と稱せしが、明治三十五年四月、揖斐郡昆蟲學會と改稱せり。目下會員、正會員六十六名、特別會員四十七名、名譽會員四名を有せり。本會の事業は専ら昆蟲學を研究して、理科思想の發達を計るにありと雖ども、主として應用昆蟲學の發展に力を注ぎたるを以て、郡下よ於ける害蟲驅除豫防事業の

設計等は、從來、皆本會の掌る所たり。而して、其組織方法は、害蟲驅除豫防委員七名、特別害蟲驅除豫防委員三十名（一小學校に一名）を置きて、常に、専ら害蟲驅除豫防に當らしめ、又常務委員一名を置き、諸害蟲を始め、一般の昆蟲をも飼育せしめて、害蟲驅除、益蟲保護の方法を研究せしめ居れり。

害蟲驅除をして完全に行はしめんと思せば、先づ昆蟲學思想を養成して、害蟲の如何に恐るべきかの觀念を與へざる可らず。故に本會より、岐阜縣害蟲驅除講習會修業生を出せるもの十名、又本郡に於て、昆蟲講習會を開くこと前後三回に及び、特々、明治三十二年六月には、小學校教員昆蟲講習會を開設して

一般教職にも、害蟲の觀念を與へ、之を小學兒童に注入して、感化誘導の功を他日に期せり。郡内の諸害蟲中、最も有害なるは、イチノゾキムシ即ち二化生螟蟲なるを以て、驅除豫防の全力は、殆んど之に傾注せり。而して本會の之に對する方法は、一面には會員自から其衝に當り。一面は小學兒童、其他一般人民を獎勵して、春季より各種の驅防を實施するに劣り、其他、また小學兒童をして、

稻蠶卵塊、浮塵子を採取せしめたる等、實施の成果少しとせず、此に參考の爲、明治三十三年度に於て苗代田害蟲の驅除に従事せる、揖斐郡鶯尋常小學校兒童の寫真一葉を附せり。苗代田は、目下、殆んど短冊形播きに改良したるは、本會が從來、屢次利益得失を説き、盡力したる功

果多しとす。今や、更に進んで、共同苗代田に改めしめんとの目的を以て、既に四五ヶ村をして之を實行せしむ、則ち、揖斐郡清水村共同苗代田の寫真三葉を附して參考に供す。本會が小學兒童を獎勵して、意外の效果を得たるは、稻蠶の驅除に在り、則ち五六月頃、灌水の時を以て、先づ卵塊を採集し、後秋季に及んで成蟲を採集したる際には、之を盡く肥料、或は家禽、養魚の飼

料、其他儀助資等の、實用に供せしめたる一事にて、數年間の經驗によれば、驅除に要したる費用は、廢物利用に依りて得たる収入に比して、遙に少なきことを確認せり。其他の害蟲に於ては、一々説明書、及被害統計表、并に被害統計色別地圖等を添へたれば、爰に略す。

尙、本會は、五倍子（木附子）、柞蠶、栗蟲等の、有効、有用蟲類利用の途を開かんが爲め、之が調査を加へたるに、春日村、久瀬村、坂内村等より産出する五倍子の、少額にあらざること知り、將來大に之を獎勵せんとの決議をなせり。

本會は、又昆蟲に就ての智識を與ふるには、標本を以て實物教授に頼るの利にして、且益あるを信し、本會事務所を始め、各小學校には、普通の害益蟲、其他普通の昆蟲標本を陳列したりと雖ども、更々、

尙進んで、明治三十六年度の事業として、各町村役場、及各區長の宅等にも、直接鄉村の利害に關係を有する標本を備ふることを決議し、現今の事務所を擴張して、昆蟲陳列館に充つる計劃をなし、今や一郡下に於ける昆蟲の分布調査は着手せり。

一、補助 揖斐郡よりは、本會の事業を有益と認め、年々郡費より五拾圓内外の、補助金額を交附せり。

一褒賞 明治三十四年、岐阜市に於て開催の第一回全國昆蟲展覽會、分類標本を出品して、一等賞銀盃を、害蟲標本を出品して、二等賞を受領せり。

一、審査請求の主眼 一、普通農家の智識を啓發し、又小學兒童をして、害益蟲の區別を知らしめんが爲めに、或標準を設けて、土地の實況と、人智に適切の標本を作成したること。二、本出品の蟲種は皆郡内所産なるが故に、各級農會等に於ける説明の實用は供し、併せて昆蟲の地理的分布を知らしむるに裨益あること。三、標本は、各方面より觀察し得る様の意匠を加へたるを以て、古來の迷謬を破り、兼ねて一般生物學上の智識をも、見學者に與ふべきこと。四、農桑業各種の害蟲を分別し、又極めて簡切に、昆蟲の状態を示し、兼て自然の制裁より、淘汰作用の利をも、明示したるが故に、農業上、直接に受くべき利益は、極めて顯著たるべきこと。五、本會の事業は、實利を擧ぐることを以て目的となしたるを以て、他の諸會の如く、理論のみ傾かず、着々、學理と經驗とを實試して、害蟲驅除の上は不少の成果を來したること。六、標本は凡て昆蟲學上の規準を守り、成るべく雌雄の別を示し、又、其保存配列等にも、注意を加へたること。

◎土佐産の蟲報 (第九の續)

高知縣土佐郡 武内護文

○葉蟲科 (一)アカハチハムシ。(二)ヨモギノヒメハムシ。(三)ヨモギノハムシ。(四)ハツカノハムシ。

(五)フヂノハムシ。(六)ヤナギノハムシ。(七)イチゴハムシ。(八)クハノハムシ。(九)ウリノハムシ。

(十)クロウリハムシ。(十一)ゴボウノハムシ。(十二)サツマイモノヒメハムシ。(十三)デンガサムシ。

(十四)トゲトゲノ一種。(十五)ナノノミハムシ。(十六)アキノノミハムシ。(十七)ヤナギノルリハムシ。

(十八)サルハムシ。(十九)ミヅキノハムシ。(二十)ダイツノハムシ。以上二十種中、(一)は産數少く、

(二)と(三)は主ら艾葉に來集し、(三)は時に牛蒡を害す。(四)は稀に之を獲るとあり。(五)は幼蟲成蟲共々藤葉は多し。即ち、濁朱色の翅鞘を有するものならん。(六)は柳葉に多く發生する地方あり。即ち

大形鈍黄にして、數多の小黒点あるものならん。(七)は時に西洋毒を害せるとあるも主にミヅンバ、諸種の蓼類及び野大黃も多く、幼蟲、成蟲共に往々蓼藍を害すると少からず。成蟲の状態を以て越冬し、一年六回内外の發生をあす。(八)は全縣到る所早春桑樹の新葉を害すると少からず。(九)は幼蟲成蟲共に最も農家を苦め。(十)は之に次く。(十一)は幼蟲、成蟲、共に牛蒡を害すると頗る甚しきを以て、仮りに此名を附す。胸部黄色にして、鞘翅は同色或は黒色に、脚亦黒色なり。形(十)より稍小く、鞘翅は柔軟にして、其後端相合せずして尖る。(十二)は一見(二)に似て甘藷葉に加害するもの、未だ細檢したるに非ず。(十三)は稀に之を産するを見る。(十四)は樹葉上に鳥糞を擬し、産數少からず。(十五)と(十八)は到る所、蔬菜を害すると極めて大なり。(十六)は野生の蓼科植物及び蓼藍も多く、(十七)は形(十八)に似て稍小に、潤畔の柳葉も多くは是ならん。(十九)は専らトサミヅキに發生し、大形にして深紅深緑の二色を交へ、金屬光を放て、最も美麗なるもの、仮りに此名を附す。(二十)は一分弱の小形種あり。淡黄褐にして、二黒條あり、大豆の新葉を害す。故に此仮名を附せり。此他、猶ほ幾倍の種類あるか、殆ど數へ盡すべからざ。

○豆象鼻蟲科

ヒゲゾウムシ。貯藏の小豆に加害すること頗る大なり。

○偽步行蟲科

(一)キマハリムシ。(二)スナモグリムシ。(三)コクヌストモドキ。(一)は山中に普通なり。(二)は海濱の沙地に多く、惡臭堪へ難き黒色なるもの、即ち是ならん。(三)はオホコクヌストと

共々穀類に大害を加ふ。

○地膽科

(一)マメハンメウ。(二)ツチハンメウ。此二種中(一)は高知市附近には之を見ずと雖ども地方によりては大豆に大害を加ふ。(二)は早春三月の頃より、既に地上に匍行す。

○赤翅蟲科

ベニカミキリダマシ。稀に山中に於て之を獲るとあり。

○小蠹蟲科

(一)マツノシンクヒ。(二)クハノコシンクヒ。(三)タケノコシンクヒ。(四)クハノヒメシンクヒ。此中(一)は松樹に多く。(二)は時に桑樹を枯死せしむるとあり。(三)は竹製の器物を害すると頗る大なり。(四)は二に比して小形、体長五厘餘あるを以て、仮り此名を附す。全縣桑樹に加害すると極めて大なり。

○青色象鼻蟲科 (一)オトシブミザウムシ。(二)ヒメクロオトシブミ。(三)クロホシオトシブミ。此三種の中(一)は到る所栗、樅等に多く。(二)は薔薇に大害を加ふるとあり。又山野に少からず。(三)は

樅樹等も在る大形黄色にして、數多の小黒点あるもの即ち是をあらん。

○象鼻蟲科

(一) シギザウムシ。(二) イチノザウムシ。(三) セメザウムシ。(四) サルザウムシ。(五)

マツノザウムシ。(六) ナシザウムシ。(七) コクザウムシ二種。右の中(一)は成蟲を見ると餘り多からず(二)は最も普通として、農家を困むると少からず。成蟲の状態を以て越年し早春二三月の頃、既に交尾せるを見ると少からず。他の稻作諸害蟲と同じくスツメノテツボウを食す。(三)は到る所桑樹に大害を加ふ。(四)はミツツバ及び蓼藍等に多く來るを見る。(五)は松樹に加害すると少からず。(六)は全縣到

る所に之を産するを見ずと雖も、地方によりては枇杷を加害すると大なり。或は梅實を害するとあり無論、梨果を害するとは疑はざれども、未だ梨樹栽培家の報を得ず。(七)は大小二種共、全縣農商を論せず、擧て其害に苦む。此他、此科のもの猶ほ幾倍種あるか殆ど知るべからざるなり。

鞘翅類附報

ミチシルベの類は俗に皆之をハンメウと稱し、其幼蟲をツボムシと云ふ地方あり。ゴミ

ムシ類には俗稱なし。唯、行夜一種をヘヒリムシと稱するのみ。(大和金峯地方にてはマヒマヒカブリを

ピハムシと稱す。形琵琶に似たる故あり)。ゴミムシの稻田に來るものは、時にクロクサガメムシと誤認して捕殺せらるゝとあり。龍蠶類には俗稱あるを聞かず。幼蟲、成蟲、共にガムシと同一視するもの多

し。ガムシは地方によりては之をカハゴゼと稱す。川蜚蠊の義なり。其俗稱なき地方にても、水中に棲む蜚蠊に似たる蟲と云へば、皆な之を解す。春季往々稻苗に卵を附するに因りて、農家を驚訝せしむる

とあり。幼蟲はタムカデ(田蜈蚣)と稱し、又たヤマメとも云ふ。頗る衆人の忌避する所なり。ミツスマ

シは之をマイマイムシと稱し、瓢蟲類は地方によりてはマンヂユウムシ(饅頭蟲)と稱し、蚜蟲と共に忌

嫉せらるゝとあり、カツラブシムシは一般に幼蟲成蟲共にガイダと稱す。一商人鳥賊の甲殻を刻で兎鼠

小鳥等を作り、其底を凹を陥せしめて、此蟲數頭の背面を其凹部に糊着し、負ふて之を動かさしめ、之

を兒玩の爲に鬻ひて頗る利を得たるものありと云ふ。タマムシは女兒の白粉函中へ投して愛重するるとわ

り。ウバタマムシはチンマ或はデイトと稱する地方あり、翁の義なり、往々タマムシの雌と稱す。コメツ

キムシはツメハジキと稱し、其幼蟲の加害するものはハリガチムシと云ひ、或は螟蟲と同じくスドウシ

の名を用ふ。ヒメホタルは一般にホタロ或はホウタロと稱し、ホタルは之をオニホタロと稱す。兒女歌

ふて之を捕ふ。幼蟲をムシホタロと稱す。大形の天牛、カブトムシ及びクハガタムシは通して多くヨロ

ヒムシと稱し、金龜子の幼蟲は之をニウドウムシと云ふ化して蟬となると稱するもの多し。天牛類のカ

ナワラムシと稱する地方あり、装甲せるが故ならん。又カヂキリムシと稱するもの多し、クハノカミキリムシが縣下の重要作物たる楮樹を咬害せるが故あらん。カミキリムシの幼蟲をテツポウムシ、又はカシムシと云ひ、兒童の疳疾を治するの効ありと傳ふ。ウリハムシはハラボテと稱する地方あり、腹膨の義なり。或はキハ(黃蠅)と云ひ、瓜に附く蠅とも稱す。サルハムシは金龜子に比してゴガ子と稱する地方多く、其幼蟲は蛄蝻に比してイラと稱するもの多し。ヒゲザウムシは俗稱なしと雖ども、小豆化して蟲となるを稱するは、此害多きに因るならん。マメハンメウはサルミヨウジンと稱する地方あり。コクザウムシは之をホリと稱す。故にヒメザウムシ及びイネノザウムシ、ナシザウムシの如き、皆ホリの稱を用ふ

(完)

◎農事試験場擔當人會の決議事項

三重縣 西岡嘉十郎

三重縣阿山郡農事試験場各町村擔當人會は、四月廿日午前十時より、阿山郡役所内に於て開會せしが、出席者拾四名にして、其協議事項中昆蟲に關するものは、左の如くなりしと。

- 一、苗代田に於ける捕蟲の準備を完成し、捕蟲器の使用、並に誘蛾燈の裝置等完成を期すること。
- 二、浮塵子及螟蟲其他病蟲害の發生を認めたる時は、其狀況を急報すること。
- 三、誘蛾燈は調査を精密よし、郡内の點火期日を定めて豫察の實を擧げ、且つ其裝置等一般の摸範的施設を期すると、尤も例により、兩期とも初めて拾蛾以上の誘殺を認めたる時は、本郡役所及町村役場へ急報すること。

◎昆蟲に關する葉書通信 (第三十一報)

(一七二) 昆蟲採集報(岐阜縣郡上郡、塩田健藏) 本郡に産する昆蟲の種類割合に多く、先般報導せし

蝶類の外、本月に至りてギフテフ、クジヤクテフ、チャマダラセセリ、コツバメテフ、其他蟲名不明のもの三種を獲たり。本郡の昆蟲に富めるは、我々採集者には好都合なれども、裏面には農業上寒心すべき事よこそ。(四月十三日附)

(一七二) サンホーゼー貝殼蟲分布報告(新潟縣農事試験場、星野信) 本縣西蒲原郡秋津村梨樹に、サ

ンホーゼー貝殼蟲を發見せり。聞く、同地は既に十餘年前より發生し居れりと、尙ほ大に調査せんとす。(四月二十一日附)

(二七三) ギフテフの分布報告(鳥取縣、高橋直義) 博覽會見物の爲め、生徒六十名を引率し、京坂まで旅行せしが、時日の都合上貴所を參觀し得ざりしは、今更残念なり。右旅行中京都泉涌寺にてギフテフを見出し、寺福寺にて三頭を捕獲せり。思ふよ、此附近に多く發生するならん。(四月二十一日附)

(二七四) 竹節蟲の産地(三重縣阿山郡、西岡嘉十郎) 前號の本誌に於て、名和先生の圖說せられし竹節蟲科四種の内、予が當地方よ於て採集せしものは、トゲナ、フシムシ(昨年八月十六日竹林中にて採集)、エダナ、フシムシ(同年十月二日松林中にて採集)、の二種にして、今尙、予が標本箱裡に、之れ有り候。(四月廿三日附)

(二七五) 桑のシンムシ付報告(岐阜縣武儀郡、松村菊太郎) 愛知縣より輸入したるシンムシ被害の桑苗出所の儀に付、御申越の趣拜誦、右は尾州丹羽郡布袋野町の者にて、其當時下之保村にて事實を確めし者なり、其行商人の氏名を取調べんとせしも、其年死亡せし由も付、遂に事止みし次第有之候、併しながら布袋野町なるは事實に御座候、尙同縣羽栗郡飛保村に行きし人の談に、同地にも發生あるやの由傳聞せし事有之候、熊本縣上益城郡農事巡回教師田中氏雄なる人の話よ、同地にも發生し、被害甚しき由、大阪の博覽會にて、本郡の出品標本を見て、驅除法等を問合せ越せしに付、回答に該標本をも送付致し置き候云々。(四月廿三日附)

編者附記す、シンムシは目下の調査によれば、岐阜縣に於ては、武儀、益田を始め其他郡上、加茂、惠那、大野、吉城、山縣、土岐、可兒の各郡に蔓延し且つ隣縣、長野、愛知の兩縣にも分布し居れば三縣聯合して大驅除を行はんと夫々準備中の由。

(二七六) 水族館の昆蟲(堺市水族館、藤田政勝) 曩きに御報告致置き候、水棲昆蟲中ギンヤンマの幼蟲は、去る四月廿五日、孵化し成蟲は盛んに飛翔しつゝあり、右は非常に面白く、從來の水族館にては未だ曾て見ざる所に御座候。(四月二十八日附)



雜報

●内國勸業博覽會昆蟲標本評(續) 美術館出品のもの、昆蟲標本にあつざるは勿論、是は美術以外より觀察して批評を加ふべき性質のものにも非ず、然れども古來東洋よ於て昆蟲を多く工業に應

用するの上より、將た現時の工業家の理科思想を付度するの上より云へば、全國の精粹を蒐めたる美術品と昆蟲の關係とを觀察するも、強がち用無きにしもあらざるなり。乃はち下ゝ出品名目其他を摘記し之を次回の博覽會に於ける出品物との對比用に供せんとす。(名和昆蟲研究所、永澤小兵衛記)

○美術館(樓下)

大阪市芝川又右衛門氏出品の蝶硯箱は小形のものなるが、蓋に十四頭の金色燦爛たる群蝶を描き、内部には七蝶を描けり、價は貳百圓とのこと。●京都市戸島彌一郎氏の牡丹蝶時繪硯箱は五百圓と云ふ贅澤品なるが、蓋には牡丹花を描き、硯の邊りに金と青貝とにて十二蝶を適宜配置し、附箋には「符華日久見華繞。無雨無風滿意開。一夢沈香亭下宴。春魂化蝶又飛來」の一絶をさへ添置けり。●京都市日進塗料工場の色紙箱は、其蓋に金銀高時繪の牡丹花を咲かせ、内部の金梨地に大小の二蝶を描けるものにて、意匠は面白きも蝶形は面白からず、價は三百圓。

●京都市並河靖之氏の筒形の七寶花瓶は、濃褐色の地質に竹を描き、上に翻々たる小蝶を飛ばしたるものにて、其内部は銀色なり、價は二百七拾圓。●京都市飯田新七氏の女帯地は、地質を七絲織金銀通しとし、これに雲に蝶を總敷しとなしたる優良品にて、價は百七拾圓との事なるも、其蝶形の實を失へたるは昆蟲學者の家人用とするの價値なからず可し、但し翅の内面を金絲とし、外縁を銀絲とし、最小の蝶をば、全部銀絲にて織成せしを以て、外観だけは人目を惹くべし。●京都市中丸清十郎氏の扇額モザイクは、積八寸許、縦凡そ尺二寸のものなるが、陶片を以て草花を造り、上に彩蝶を添へり(非賣品)。●京都市市田文次郎氏の錦上織女帯地は、前者にも増して四百五拾圓の高價のもの、扇面散し模様様の錆茶色にて、中に三蝶を織出したる數扇あり、蝶形の不合格なるは千里同風の感なきにあらず。此意匠は和歌御題「新年海」に取れるものさか云へど、甚だ覺束なき事と思はる。●島根縣園山與市氏の牡丹額面は、木彫の花蝶を杉板に膠したるものなるが、製作は巧妙ならず、價また低くして貳拾圓に過ぎず。

(鉢) 六十の報畫蟲昆用應業工



○美術館(樓上)

東京市白馬會の出品に係る、昨年二月發行の雜誌「歌舞伎」の表紙には蝶形あり、是は長原孝太郎氏の意匠なり

あれど、出處や典故を知らず。●東京市大日本圖案協會員深田藤三郎氏の形附圖案の上部には、我邦産外の鳳蝶三頭を寫生的に畫きなほ暗影を以て五頭許りを現はせり。是は當世語の所謂ハイカラ式の骨頂なれども、舊式に比較すれば優れる點なきにあらず。其他なほ花卉と配合せるもの、又は暗影と合せせるもの等數點あり、何れも同一筆法を用ゐて描出せり。●同協會員長澤時基氏の圖案資料中には、菊花に有紋白蝶、黃鳳蝶を以て模様と合せせるものあり、外に菊模様の花瓶形に數頭の鳳蝶を點添せしもあれば、書籍の表紙鏡縁、寫眞縁等と同じ菊花とにも飛蝶を配合せしものも少なからず。是亦洋式なれば花蝶は大醇小疵なるも、多く霜枯時の花と、平生蝴蝶などの好まぬ花と呼ばるゝ菊花に此昆蟲を配合せしを訝かる、これにても畫家と動植物の研究の必要を見るべし。●同會員十二町貞吉氏の織物圖案(テール掛)は先づ面白し、則ち中央をば群蝶を以て圓形となし、其四隅をば、菜花を以て飾り模様とせしものなり。●京都市山下官十郎氏の眞美大観は、古畫を臨摹せる精緻の木版刷なるが、中に藤の枝に蜂窩と孤峰とがあり。●京都市小島六太郎氏の服裝圖案は、地色を葡萄酒色とし、白き葡萄酒を以て唐草に擬ひ、上に金色の三蝶を放てるもの。●東京市小池盛之助氏の春秋模様服裝圖案は、裙模様他に花鳥と、もに數蝶を配合せしもの。●東京市櫻井春吉氏のりボン模様服裝圖案は、赤地に金の鶴龜及び松竹梅を顯はし、更に白きりボンを模様化して五蝶を配合せしもの。●島根縣鹽津親次氏の蝶香爐は、銅地に銀の象嵌を施し、蓋には唐草を纏ひ、上部の周邊に群蝶を飾れるものにて、其價百七拾圓。●石川縣宮地次右衛門氏の南鐐蝶撮香爐は、銀地に象嵌を施したるものなるが、其蓋に群蝶あり、中央の撮まね蝶形にて、下部の菊花は象嵌とす、價は二百五拾圓なり。●沖繩縣山口辰吉氏(號瑞雨)の風俗踊圖には、踊手の持てる杖の飾房に二蝶あり。●東京市關袖江氏の畫は、猿兒飛蜂の圖なり、感服すべき程のものにあらずも、一枚の價は百五拾圓との事。●東京市松野霞城氏の揮毫せる五穀豐穰圖は、其價五拾圓とにて穀粒の上に稻蠶三頭を配合せり。●東京市藤本翠香氏の秋草猫兒圖は、月前秋花の咲亂れたる傍に四猫兒戯るゝ景にて、一猫兒の竈馬を追ふ所如何にも可憐なり。

其他一二の出品ありしやうなれど、左まで眼も入るべき大作妙畫も無かりしを以て、爰も掲げざるべしなほ次號には、筆の序に、京都帝室博物館に於ける、時代美術品中の昆蟲をも紹介せんとす。(未完)

●工業應用昆蟲畫報(第五報) 本號掲載の應用昆蟲畫報の(十六)は石川縣能美郡小松町にて購入したる同地産有名の九谷焼なり、元來九谷焼には種々の昆蟲模様を現し居るも殆んど見るべきものなし、該器の蝶は比較的宜しきものなれども是を以て満足し得べきものゝあらざるなり、又(十七)は同縣工業學校の製作よして大小廿八頭の蝶を寫し出せり是は慥に先人の糟粕を舐めたるものにあざれば今二層の研究を積みなば恐らく高評を拍するに到らんか。

●第六回岐阜縣害蟲驅除講習會 前號所載の如く、四月十日より二週間、當昆蟲研究所内に

開きたる、岐阜縣主催の同會は、從來、縣費より其費用の殆んど全部を、各會員に補助し來りしかば、或はお義理的聽講者も有りし様間々見受けたりしが、今回は全く會員の自辨となりし故にや、會員僅十八名なりと雖も、皆熱心に日夜修業し、好良の成績を擧げて、去月二十三日修業證書を受領せり、今修業者の氏名を擧ぐれば左の如し。

別組	郡市名	町村名	族籍	役名	氏名	生年	履歴	摘要
第一組	不破郡	關ヶ原村	平民	組長	山口吉彌	明治二十年三月	農事講習會修業	農業ニ従事ス
第二組	安八破郡	名森村	平民	組長	古澤清一	明治十五年五月	高等小學校卒業	漢學修業
第三組	惠那郡	武並村	平民	副組長	丹羽高通	明治九年十一月	惠那郡書記	小學校補習科卒業、村役場書記
第四組	武儀郡	南武藝村	平民	組長	相宮廣吉	慶應二年四月	村會議員、村役場書記	高等小學校卒業、漢學修業
第五組	大野郡	清見村	平民	組長	榎谷市之助	明治七年五月	農事講習會卒業、農蠶業ニ従事ス	郡害蟲驅除講習會修業、農事講習會修業

第十六回全國害蟲驅除講習會

全國害蟲驅除講習會は、前回迄、既に回を重ねる十五、八百餘名の有爲なる修業生を出せしが、尙益々斯學の奮興を謀らんが爲、來八月上旬に於て、第十六回の講習會を開かんとす、尙詳細は、次號に於て報導すべし。

●鳥取縣東伯郡昆蟲研究所會

昨秋、當昆蟲研究所長名和氏が、鳥取縣下出張の序、東伯郡有志の請ひに應じて一場の講演をなしたる折、同志間の機關として、昆蟲研究所を興との必要を説き且懇ろに之が設立を慫慂せしことありしが、同郡有志者は其勸奨に従ひ、舊冬左掲の規則を協定の上愈發會せし趣むき、足羽財藏氏より通知ありき。

第一條 本會は東伯郡昆蟲研究所と稱し、事務所を當東伯郡農會内に置く。●第二條 本會は昆蟲學の研究、及び害蟲驅除豫防

の普及を圖るを以て目的とす。●第三條 本會の事業は左の如し。(一)昆蟲標本を製作し一般の參考に供する事(二)昆蟲に關する

講話會及談話會を開設すること(三)昆蟲に關する諸般の事項を協議し、汎く他研究會と氣脈を通ずる事(四)官廳に建議し又は其諮問

に應答する事(五)前各項の外必要と認むる事項。●第四條 本會々員は左の三種とす。(一)名譽會員(二)特別會員(三)通常會員。

●第五條 名譽會員は學識經驗ある者を、特別會員は本會に功勞ある者を總會に於て推選す。●第六條 通常會員は本會の目的

を賛成したる者に限る。●第七條 本會々費は毎年金拾錢通常會員より釀出するものとす、但納期は總會に於て之を定む。●第八

條 本會に左の役員を置く、其任期は各二ヶ年とす、但し役員は名譽職とす。會長一名 副會長一名 理事三名 評議員六名。●

第九條 會長は郡農會長を推戴し、副會長以下は總會に於て之を選挙す。●第十條 本會役員は職務を規程する事左の如し。會

長は本會を總理し會議の長とす。副會長は會長を補佐し又は代理をなす。理事は會長の指揮を受け諸般の事務に従事す。●第十一

條 本會總會は毎年春秋二期に開く、會務の狀況及其他報告は春期に之をなすものとす、但し會長の意見に依り臨時總會を開く、

とす。●第十二條 評議員會は隨時必要に應じ會長之を招集し、急務を要する場合は總會に代りて議決するものとす。●第十三

條 本會々則の加除更正を要するときは總會の決議に依る。

●名和昆蟲研究所長の出張

四月二十五日岐阜縣本巢郡彈正村農會より、五月三日愛知縣渥美郡昆蟲研究所總會へ臨席、次て同縣寶飯郡冬季昆蟲展覽會審査長として同會へ出張せられたり。

●愛知縣寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會概況

寶飯郡冬季昆蟲展覽會は、五月三日より一

週間、同郡役所内に開會せしが、意外の盛會にて、出品の重なるものは、分類標本百六十二箱(一万百

三十頭)、害蟲標本五十六箱(三千百六十四頭)、益蟲標本二十九箱(千四百三十四頭)、教育用標本五十八

箱(二千五百頭)、其他裝飾用標本二十五箱、參考品百四十二個、小學校兒童圖書二百五十四個等にして

尤も特色とする處は、生徒の圖書は悉く實物寫生圖なるよりあり、其他小學校教員の手に成る、教場用昆

蟲掛圖等ありて、教員と多大の利益あるを認む。審査は名和昆蟲研究所長指揮の下に、去六日全く完了

を告げ、七日褒狀授與式を舉行したり。

●日本最初の昆蟲學者

氏は依て編輯せらるゝ昆蟲學新報は、口繪に當昆蟲研究所發行の、昆蟲世界雜誌の表紙を入れ、其中央に名和所長并よ、息女貴子の最も鮮明なる肖像を掲げ、卷首に日本

最初の昆蟲學者 (Japan's Foremost Enomologist.) と題し、マールラット氏

に依て、氏が先年名和昆蟲研究所を訪はれし時の有様を數頁記載せられたり。或は紙面の都合により次號に掲載することあるべし。

●新刊昆蟲書

開成館發行

に係る、理學博士石川千代松氏著書、昆蟲學教科書は、凡て廿八章一七七頁より成り、分類及害益蟲、採集法、保存法等の、從來其記事に乏しからざる所のものは、記事を節畧し、外形の構造、内部の生理作用及外界との關係、即自然淘汰の妙理等は、詳細に説述し、且鮮明なる圖版百六十九圖を挿入し斯學の研究に一大利益を與へられたるは、是れ氏の賜といふべし。

三月發行の米國費府理科大學昆蟲學教室にてヘンリー、スキンナーに依て編輯せらるゝ昆蟲學新報は、口繪に當昆蟲研究所發行の、昆蟲世界雜誌の表紙を入れ、其中央に名和所長并よ、息女貴子の最も鮮明なる肖像を掲げ、卷首に日本最初の昆蟲學者 (Japan's Foremost Enomologist.) と題し、マールラット氏に依て、氏が先年名和昆蟲研究所を訪はれし時の有様を數頁記載せられたり。或は紙面の都合により次號に掲載することあるべし。

新刊昆蟲書 開成館發行

に係る、理學博士石川千代松氏著書、昆蟲學教科書は、凡て廿八章一七七頁より成り、分類及害益蟲、採集法、保存法等の、從來其記事に乏しからざる所のものは、記事を節畧し、外形の構造、内部の生理作用及外界との關係、即自然淘汰の妙理等は、詳細に説述し、且鮮明なる圖版百六十九圖を挿入し斯學の研究に一大利益を與へられたるは、是れ氏の賜といふべし。

○所友桑名伊之吉氏、昆蟲學研究法てふ一書を著し、裳華房より發行す、該書は最も人目に觸れ易き普通の種類を以てし、章を分つ七、更別ちて五十一節となし、百三十九の圖版を挿入し、研究の方法を簡明に記述したるものにして、書名に背かず、初學者の指南車たらんか。



工業應用の昆蟲圖報十七 (花瓶)

(岐阜縣 河田貞城氏寄贈)

●千蟲萬多錄(第三)

最近の諸報告より昆蟲界の記事を抄録すること左の如し

○奈良縣に於ては、巡查教習所に、自今害蟲驅除及豫防法の一科を加へ、且、農事巡回教師の設けなき郡には、縣廳より主務官を派遣し、害蟲驅除講習會を開くと、斯道の爲め慶すべし、何れの縣も斯くあらまほし。

○福井縣下各郡に於て、一郡一箇所、乃至二箇所に、其他、愛媛、鹿児島、徳島、千葉等の各縣、亦害蟲驅除講習會開設の舉を諸新聞に散見す、根本的驅除は昆蟲思想を興ふるを上策とす、益此舉の多からんを望む。

○兵庫縣知事は、今回各市郡長へ向け、害蟲の發生は、年を逐ふて増加するの趨勢なれば、自今嚴に之れが驅除を勵行し、其撲滅を期する爲め、採卵、捕蛾、短冊形苗代田實行に努めしむる様、訓令を發せられたり。

○千葉縣に於ては、稻作害蟲驅除豫防心得を發し、害蟲の習性經過及、之れが驅除豫防法に付き、詳細なる説明を與ふ、且地方長官の命令に従はざるものは、料料、拘留、若くは相當の罰則に處する旨の條項を含む。

○其十二條に曰く、第六條、及第八條に依れる官吏、若くは其指揮を承くる者の行爲を妨害する者は、貳圓以上廿圓以下の罰金、又は十一日以上廿日以下の重禁錮に處すと、宜しく命令を待たず、進んで驅除すべし。

○農學士舟木文次郎氏、此頃、螟蟲驅除に付き説をなして曰く、螟蟲は稻稈内に蟄伏し居れば、豫め藁を細密に打潰すか、熱湯に浸漬し後使ふべし、刈株は堀起して焼却すべしと叫ばれたり、知らず行はるゝや否や。

○兵庫縣朝來郡粟賀村農會は、桑樹害蟲、枝尺蠖幼蟲買上法を議し、十匹貳厘にて既に實行せしが、當業者は勿論、小學兒童は、歸宅後競て捕獲し、其收益を貯金せり、而て三日間に五萬頭とば、實に其多數に驚く。

○岐阜縣稻葉郡鷓沼村、宇幅及菖蒲池地方の桑園には、クハハムシの發生甚しく、數年前より非常に蕃殖し、爲めに春蠶には、該桑葉を用ふる能はずと聞く、依て驅除法を指導せしとは、可兒郡齋藤五六郎氏の所報。

○野生が澤山鳴出す頃には、相場も大に下落するならんが、目下蠶斯、響蟲、草雲雀、邯鄲等は一疋拾六錢、鈴蟲六錢、松蟲七錢、團覽蟋蟀七錢等にて、蟲籠は貳錢五厘より廿貳圓迄とは、東京賣蟲屋の相場なりと。

●諸國の蟲送

(イ)島根縣邑知郡矢上村にては、蟲送りの當日に、稻田へ(何蟲ヲ送ルカアブラ

蟲ヲ送ルゾ)と書したる旗を樹て、之を社頭に集めて燒棄て、而して後藁人形を造りて藁馬に乗せ、實盛様と云ひて擔ぎ出し、河の下流に乗つ、又蟲送りの當日には、踊子と稱する者、裝飾したる笠を被り、

太鼓などを打ち、奇異なる嘶子にて歌舞せり。(ロ)同縣能義郡赤江村にては、近年まで普通に行はれ、一名實盛と稱し、維新前後迄は、地主より獎勵して、行はれたるが如し。今、其概略を述べれば、挿秧

後害蟲發生の兆ある時は、一部落の農民は氏神社に集合し、實盛の像に擬したる藁人形を造り之れに害

蟲を入れたる紙袋を付し、竹又は藁製の輿に載せ、神官をして、祈禱をなさしめたる後(夜間)、實監道と稱する、一定の道路に沿ひて、多勢、行列をなして、擔き歩き、鳴り物を打ち、法螺を吹き、各自よ松明、提灯等を携へて(實盛登りよつた、實盛送る)、と大聲に連呼し、部落内を廻り、後飯梨川尻又は村界に至て、再び神官の祈禱を了りて、燒棄つるあり。(ハ)同縣飯名郡來島村にては、往古齋藤實盛が討死の時、深田に於て奔走自由ならざるに乘じ、百姓之を打ち殺したるに、其年稻作害蟲の爲、收穫皆無に屬せり。時人、以て實盛の崇りとなし、其蟲を名けて、實盛蟲又カブト蟲と呼べり、之れ浮塵子の一種なり。世人、大に其被害を患ひ、蟲除祈念祭として、蟲送り法を講じ、名けて實盛送りと稱し、藁よて人形及馬を作るハ前諸村と同しく、先づ夏土用前よ於て、壯丁之を擔ぎ、全村農家毎戸より一人づゝ相集り、各小旗を樹て、太鼓を撃ち、何蟲を送るか、稻の蟲を送るよ、何處まで送るか、界まで送るよ)と蟲送り歌を唱ひつゝ、終日田圃間を奔走し、村界に至りて茲に藁人形、馬及び旗を集めて以て神職祈念を爲し、後河中に投するか又は燒き棄つるを例とせり。然るに明治十七、十八年より、之を改めて火送りよ變更せり。則ち夜中、前例に倣ひ、行列をなし、各人手に松明を點して田畦を駆廻り、土産神社の境内よ集めて燒棄し、可成徹夜神社に籠り、祈念をなせり。然るに、今より十年前より又之を一變して、夏土用前、土産神社に於て祈念を行ひ、毎戸參拜して、了る事となり、(此習慣は)一年一年と廢類して、其現象を見ざるよ至るは、蓋し遠きよわらざるべし。(ニ)鹿足郡朝倉村にては、古來の習慣として、年一回、蟲祈禱と稱して、各大字共、社頭に於て害蟲退散の祈念をなし、且つ神輿を昇ぎ廻るの風習あり。其費用は反別割として、地主の負擔とす。(ホ)八束郡忌部村よ於ても、農作物よ害蟲發生したるときは、藁人形を作り之を實盛と稱して擔き廻し事は殆ど前諸村と同様に古來より行はれしが、明治三十四年より村農會よ於て斷然之を廢止の事よ決したり(以上島根縣農事試驗場、田中房太郎氏報)

●新刊雜誌中の昆蟲記事

近刊發行の諸雜誌中に掲載せられたる昆蟲記事は左の如し。

- (一)大日本農會報(第二百五十九號)農學士堀健氏の柑橘に寄生する貝殼蟲に就て柑橘栽培上の關係より該蟲の發生經過及び加害の天然驅除の有様、人工驅除の方法等を詳細に説明せられ、新潟縣平田氏萍果害蟲の質問に對する、農學士小貫信太郎氏の應答あり。
- (二)新農報(第五十號)には農事試驗場議内支場岡田嘉一氏の翻譯に係る驅蟲劑調製法及び使用法を第四十八號より連載せらる。
- (三)農事雜報(第五十七號)小貫信太郎氏は蟲害の豫防に冬季の事にすべしとて諸害蟲の經過習性より驅除豫防方法の注意を與へられたり。
- (四)島根縣農會報(第五十九號)島根縣農會委員伊藤權一郎氏は和歌山縣に於ける柑橘栽培培培狀況視察の記事中に同樹の害蟲たる蚜蟲、貝殼蟲、天牛、葉捲蟲、避債蟲等の簡易驅除方法をも載せられたり。

●岐阜縣昆蟲學會記事

同會第五十三回例會は、去る五月二日、當昆蟲研究所内に於て開會せり。當日は當昆蟲研究所主任永澤小兵衛氏の、臺灣並に清、韓地方へ斯學研究の目的を以て、近日中渡航せらるべきに付、席上別意を表する事とて、各地の篤志者は、孰れも出席せられ、尙千葉縣の老農大竹義道氏、及農商務省農事試驗場より、昆蟲調査の爲來所中の高邑助手等、特に出席せられたり。今其次第を記すれば、午後一時名和副會長の開會の辭に、次て第一席石田和三郎氏は、愛知縣渥美郡昆蟲分布調査報告をなして、環紋蝶科に屬するコノマテラフ外數種の奇品が、該郡に於て採集せられたる事に及ぼし、名和氏は之に敷衍して、是等の分布を説き、第二席高邑虎治氏は、西ヶ原農事試驗場備付の昆蟲標本に就て、一部の標本を供覽し、第三席名和靖氏は、姫蜂科に屬する寄生蜂の一種に就て、講演せられ、第四席岐阜縣大垣中學校教諭森宇多司氏は、トノサマバツタの聽音器と眼に就き、生理的關係を説明し、第五席大竹義道氏は、害蟲驅除に就て、自己の實驗に徴して、驅除の方法を詳説し、目下の有様を歎息せられたり。右終て、暫時休憩後永澤小兵衛氏は、今回洋行の目的、及將來の希望を述べて、告別の辭をなし、次に本會幹事村井正元氏は、岐阜縣昆蟲學會を代表し、揖斐郡坪井伊助氏、岡山縣福井克雄氏、名和昆蟲研究所長等の送辭ありて、一同惜別の意を表し、午後五時散會せしが、頗る盛んかりき。

●昆蟲水曜會

當昆蟲研究所員の催しに係る同會は、前號に報告後、毎水曜日に開會して、都合九回なりしが、紙面の都合上詳載するを得ず、故に其講演者と、談話の重なるものを、左に摘載せん。

小森實作氏は蝶類の翅脉研究談、貝殼蟲の種類と驅除法、某農學士の害蟲驅除論に就て、邦産環紋蝶科の分類數、蛭蝶科の分類。高橋喜男氏はルリタテハテフ、ヤチスサアゲハテフ、ヤナギハムシ等に就て毎會卵の研究談。棚橋昇氏は昆蟲腹部に就ての研究及目下採集すべき昆蟲の種類、桑葉蟲の食量試驗、クハケムシの黴菌并に蜻蛉に就て。名和愛吉氏はカハゲサの幼蟲並に梨葉蜂の經過に就て及避債蟲の種類調査、桑葉蟲の食量調査等。森宗太郎氏はハマゲラ蚊に就ての研究並に京阪地方の昆蟲採集旅行談、昆蟲採集方法及昆蟲脚部の名稱に就て等。石田和三郎氏はウリハムシの經過並に蝶蛾類の蛹に就ての研究談及夜中採集方法、夜盜蟲驅除試驗の結果報告等。渡邊樵四平氏はコナミキカケロフの性質、松毛蟲と蟲送りに就て。中井藤助氏はハマクリムシの話、飛騨國の昆蟲方言、蚊遣香の話等なりき。

●昆蟲標本陳列館の觀覽人

去る三、四兩月中に、名和昆蟲研究所の標本陳列館を觀覽せし人員は、總計九千貳百七十八にして、其中最も多かりしは、三月二十二日に於ける二千二百三十五人、最も少かりしは四月二十九日に於ける三十二人にして、一日平均百七十八人に當り、其重なる觀覽人は

愛基園東宮侍從を始め、愛知縣病院長乙狩醫學博士、理科大學教授箕作理學博士、大森農學博士、東京高等師範學校教諭岩川理學士、及各府縣の實業家、教育者、學生等の諸氏なりき。(雜報、五月十一日脱稿)

第六版

一、昆蟲の 昆蟲世界 全

定價貳拾錢 郵稅貳錢 (郵券代用一割増)

臨時刊行第二

通俗益蟲集覽 (第一輯再版) (説明書附)

定價 (郵稅共) 金貳拾貳錢 (同上)

臨時刊行第三

貝殼蟲圖說 全一冊 (再版)

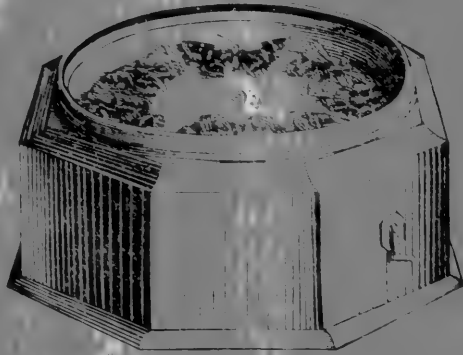
定價 (郵稅共) 金壹拾七錢 (同上)

- 農作物害蟲標本 (壹組) (桐箱入解成附) (金四圓五拾錢)
- 農作物益蟲標本 (壹組) (桐箱入解成附) (金五圓五拾錢)
- 教育用昆蟲標本 (壹組) (桐箱入解成附) (金四圓五拾錢)
- 自然淘汰標本 (壹組) (桐箱入解成附) (金四圓五拾錢)
- 雌雄淘汰標本 (壹組) (桐箱入解成附) (金四圓五拾錢)
- 氣候變形標本 (拾錢) (壹組) (桐箱入解成附) (金五圓五拾錢)
- 昆蟲發育標本 (各種) (壹組) (桐箱入解成附) (金四圓五拾錢)
- 山林園藝害蟲標本 (各種) (壹組) (桐箱入解成附) (金四圓五拾錢)
- 昆蟲學研究用書籍及び器具一式

昭和二十六年五月 名和昆蟲研究所會計部

昆蟲廻轉器頒與廣告

この昆蟲廻轉器は、昆蟲の翅色と光線の關係を示さんが爲め、數年前考案せしものなりしも、適當の製作者に乏しかりしより、弘く頒與するに至らざるにしが、今同特別調製昆蟲の依頼を受けて、拾餘個を製作し、世の希望者に分たんとす。雌雄淘汰の原理を説き、天地自然の妙用を知らしめんと欲せば、少なくも此種の備へ無かる可からざるべし。一器の價は、金六圓とす、別に送費を要す。



岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため、當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其偽版同様乃ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

- 第一。桑樹害蟲(エダシヤクトリ(枝尺蠖)(三版) ●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
- 第三。稻の害蟲イ子ノズキムシ(二化生螟蟲) ●第四。煙草害蟲タバコノアラムシ(煙草螟蛉)
- 第五。稻の害蟲イチモジセセリ(苞蟲又葉捲蟲) ●第六。桑樹害蟲ヒメザウムシ(姬象鼻蟲)
- 第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲) ●第八。稻の害蟲イ子ノアラムシ(稻螟蛉)
- 第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲) ●第十。豌豆害蟲エンドウキリムシ(夜盜蟲又地蠹)
- 第十。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛) ●第十一。稻の害蟲ツマガゴロコバヒ(複黑橫蚊又浮塵子)
- 第十二。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(糸引葉捲蟲) ●第十二。茶樹害蟲チャケムシ(茶帖蠹)
- 第十三。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ(擬瓢蟲) ●第十三。稻と麥の害蟲キリウジカガンボ(切蛆蚊姥)
- 第十四。桑樹害蟲キンクムシ(金條毛蟲) ●第十四。桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
- 第十五。定價壹枚金拾五錢 郵稅貳錢 百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵稅百枚に付貳拾錢
- 第十九。桑樹の害蟲クハケムシ(桑帖蠹) (昨年八月新刊)
- 第二十。稻の害蟲フタホシズ井ムシ(三化生螟蟲) (同十一月新刊)

發行所

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

●硫曹肥料を肥作に用ゆれば第一は米質を宜しく且つ頗る收穫を増すべし一反歩は付五六斗より一石二三斗を増す之を舊肥料を用ひたるものと比すれば見掛も遙に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀あり舊肥料を用ひたるものは之に反したる見掛は異ならざるも米質悪しく又木の收穫は同じくとも玄米となして一反歩三斗以上の相違あり之を春きて白米となすに硫曹を用ひたる分は春減少なく飯炊くに頗る炊殖すべし一例之は舊肥料の米は水一升米一升あるに硫曹の分は米一升水一升二合ならでは飯に適せず即二割以上炊殖の相違あり●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄に注意し之を實驗して其効用の偉大なるを驚くべし●輸出来は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれば尙洋熱帶地方通過の際多く腐融すべし●第一(過燐酸)を簡作に用ゆるは一反歩に三貫目より五貫目迄を舊肥料(大豆粕、油滓、堆肥、腐肥等)に混交使用すべし●硫曹肥料のみ施すべし●硫曹肥料を二回に分て施すべし(堆肥は何れも施すに宜し)●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷、麻、蘭其他陸稻、粟、砂糖黍、桑并野菜物、菓物等に施して其効實を驚くべきものあり●第五回勸業博覽會は硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金百圓づゝ銀賞牌には金百圓づゝ一等賞牌には金五拾圓づゝ二等賞牌には金貳拾圓づゝ三等賞牌には金拾圓づゝを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農産物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麥及徳島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を徳島縣の井原殿氏へ金百圓を贈呈せり●硫曹肥料の明細并に其本等は御申越次第贈呈すべし

商標 登錄

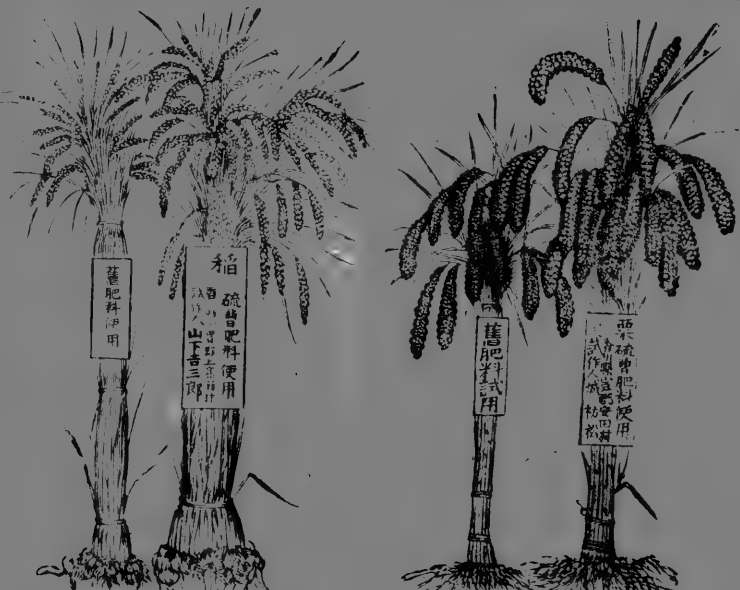
硫曹肥料

●硫曹肥料を肥作に用ゆれば第一は米質を宜しく且つ頗る收穫を増すべし一反歩は付五六斗より一石二三斗を増す之を舊肥料を用ひたるものと比すれば見掛も遙に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀あり舊肥料を用ひたるものは之に反したる見掛は異ならざるも米質悪しく又木の收穫は同じくとも玄米となして一反歩三斗以上の相違あり之を春きて白米となすに硫曹を用ひたる分は春減少なく飯炊くに頗る炊殖すべし一例之は舊肥料の米は水一升米一升あるに硫曹の分は米一升水一升二合ならでは飯に適せず即二割以上炊殖の相違あり●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄に注意し之を實驗して其効用の偉大なるを驚くべし●輸出来は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれば尙洋熱帶地方通過の際多く腐融すべし●第一(過燐酸)を簡作に用ゆるは一反歩に三貫目より五貫目迄を舊肥料(大豆粕、油滓、堆肥、腐肥等)に混交使用すべし●硫曹肥料のみ施すべし●硫曹肥料を二回に分て施すべし(堆肥は何れも施すに宜し)●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷、麻、蘭其他陸稻、粟、砂糖黍、桑并野菜物、菓物等に施して其効實を驚くべきものあり●第五回勸業博覽會は硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金百圓づゝ銀賞牌には金百圓づゝ一等賞牌には金五拾圓づゝ二等賞牌には金貳拾圓づゝ三等賞牌には金拾圓づゝを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農産物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麥及徳島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を徳島縣の井原殿氏へ金百圓を贈呈せり●硫曹肥料の明細并に其本等は御申越次第贈呈すべし

大坂西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

電話西四一九番



雜誌 昆蟲 世界 合本 出來 廣告

○第十二號以下完備
本邦唯一の昆蟲雜誌
昆蟲世界合本
第六卷(昨年分)出來

西洋綴
金文字
入美裝

● 昆蟲世界第一卷 五部

右は明治三十一年發行の分(但合本にあらず)
〔自第拾貳號〕
〔至第拾六號〕

● 昆蟲世界第二卷合本壹冊

右は明治三十二年發行の分
〔自第拾七號〕
〔至第貳拾八號〕

● 昆蟲世界第四卷合本壹冊

右は明治三十三年發行の分
〔自第貳拾九號〕
〔至第肆拾號〕

● 昆蟲世界第五卷合本壹冊

右は明治三十四年發行の分
〔自第肆拾壹號〕
〔至第伍拾貳號〕

● 昆蟲世界第六卷合本壹冊

右は明治三十五年發行の分
〔自第伍拾三號〕
〔至第陸拾四號〕

(合本は每冊金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢)
其他は定價の通り)

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し新學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閱覽索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

新發明切器圖



專賣特許 第四九八六號 莖切器發賣廣告
螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大にして之れか驅除を爲さんとすには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かざるなきは精農家諸君の實に認むる所に於て近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖も未だ完全の良器なく止むを得ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕すのみならず全く螟蟲の潜伏せる稻莖を根底より刈去ることを得ざるが爲め害蟲驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲を誑め堪へざるなり發明者多年茲意を籠めて遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は上圖に示す如く小形の鎌に彈性性の遮匙を付したるものにして本器を使用するに先づ把手(ハ)を握り而して切取らんとする稻莖を左手(イ)で握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間(エ)に當て鎌を少しく前方に押すへし然るときは遮匙(ロ)は彈性あるを以て外方に開き稻莖を押入るへし一度押入れたる後は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して於て健全なる稻莖は挿入する事なく他の稻莖を害せす容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の良器にして静岡縣農事試驗場等の協賛を博せり定價一挺金拾錢、農會等の共同御用は特別割引

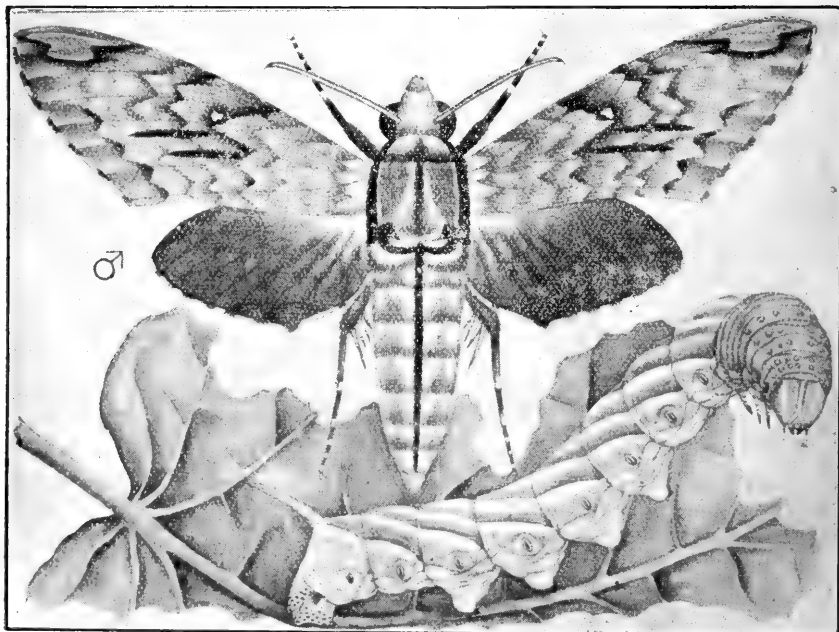
製造元 静岡縣小笠郡比木村 山本勘藏
發賣元 同 縣志太郡焼津町 吉野寅之助
縣下一手販賣所 岐阜市京町 高橋喜之助

Diludia increta Walker. (Shimofuri-suzume)

By K. Nagano.

Forewings dark grey, whitish-sprinkled with darker dentate striae; a discal white dot; two black median streaks; an irregular black apical streak. Hindwings blackish brown, partly whitish-sprinkled. Expanse 100-130mm. Body dark grey, whitish-sprinkled, below whitish; head and thorax black bordered; abdomen with three longitudinal blackish brown stripes.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu; 7, 8. Larva green, lighter or deeper; 1-3 seg. white dotted; sometimes other seg. black dotted; on 4-11 seg. a series of oblique lateral white stripes; sometimes a subdorsal and spiracular series of brown spots; horn brown: on *Paulownia tomentosa*, *Clerodendron tricotomum*, *Ligustrum lbota*, *Osmanthus aquifolium*; 7-9. Pupa furnished with a projecting curve tongue-sheath.



岐阜 虫屋旅店廣告

今回昆虫學研究家各位の御便利を圖り、第五回内國勸業博覽會開會中、本店を大坂市東區、西高津中寺町、十番地久成寺内に設け特別低價を以て御休宿の御用に應じ候間續々御光臨の程奉希望候

岐阜市東區西高津中寺町十番地久成寺
西野町 虫屋旅店 大出店

春蠶種豫約販賣廣告

純粋青熟一粒内外 粹小石丸一升二百粒
原種用一蛾二錢五厘 普通製一枚壹圓二拾錢
申込ミ六月三十日限リニ願上候

甲斐國南都留郡 舟久保 村
追テ右ハ非常ノ精良ナル種類ニシテ大ニ好望ナルモノニ付御試育ヲ得タク候也

舟久保 保証朗

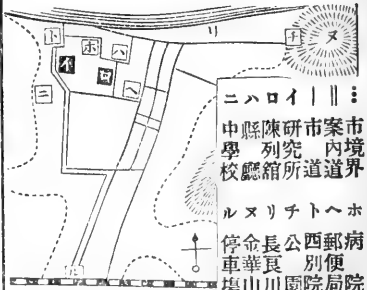
岐阜縣昆虫學會月次會廣告

岐阜縣昆虫學會は規則第三條ニ依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆虫研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成候也

名和昆虫研究所内 岐阜縣昆虫學會

岐阜縣昆虫學會本年申の日並に左の如し

第五十四回月次會(六月六日) 第五十八回月次會(十月三日)
第五十五回月次會(七月四日) 第五十九回月次會(十一月七日)
第五十六回月次會(八月一日) 第六十回月次會(十二月五日)
第五十七回月次會(九月五日)



名和 昆虫研究所案内

昆虫研究所の位置は上當の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蠶室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆虫標本陳列館(五間に十六間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町

本誌定價並廣告料

壹部 郵稅共 金拾錢 (見本は五厘郵券) (貳拾枚にて呈す)

壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢 (見本は五厘郵券) (貳拾枚にて呈す)

(注意) 本誌は總て前金ニ非れば發送せず

●爲替拂渡局は岐阜郵便局 ●郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

●廣告料五號活字廿二字詰一行ニ付金拾貳錢、三十行以上一行ニ付金拾錢とす

明治三十六年五月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二 (岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆虫研究所

不許 轉載

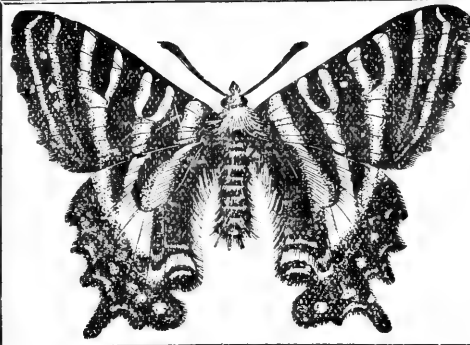
發行所 名和 梅 吉
發行所 名和 梅 吉
編輯者 小 森 省 作
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶
印刷者 河 田 貞 城

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

(六月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)



THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
SIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七拾號

(第七卷第六册)

(明治三十六年六月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

目次 (禁轉載)

●大島産の浮塵子各種(二) (石版圖) 一頁

●大島産の浮塵子に就て(續) 生熊與一郎

●コホレムシ(負子)に就て 齋藤啓二

●外國の昆蟲畫に就きて 長野菊次郎

●講話 一三頁

●二化生螟蟲の卵蛹の位置に就て 森 宗太郎

●害虫視察談 渡邊樵四平

●アケハ、テフ幼蟲蛹化の準備に就ての實驗

●雜錄 一八頁

●六足蟲變種(己の卷) 長野菊次郎

●昆蟲採集 小森省作

●効なり 大上宇一

●昆蟲に關する隨感隨筆(第一回) 昆蟲學部

●博覽會出品害蟲標本解說書 武儀郡農會

●昆蟲事項 岡田忠男

●展覽會彙報 岡田中周平

●西洲嘉十郎 明治三十六年度兵庫縣

●藥卵採集方法 岩田熊三郎

●(第三十二報) 昆蟲に關する藥書通

●問答 三六頁

●蝶蝨に就て質問 味勝正義

●木忠次郎 右に對する答 佐々

●雜報 三七頁

●岐阜縣農會の諸問答申案

●十六年度の害蟲驅除防費

●姫蜂科に於ける一新屬

●十六日全國害蟲驅除講習會

●員の派遣

●岐阜縣昆蟲學會記事

●水曜昆蟲會

●其他



寄贈物件受領公告

金五圓也 金壹圓也 半身肖像 半身肖像 半身肖像 半身肖像 靜岡縣農事試驗場寫真一葉
養蟲標本寫真一葉 石印(孤蟲女史)一個 金鳳製虹形緒一個 農事試驗場成蹟報告(第一號) 農事試驗場成蹟特別報告(根付 蠶に關する調査并に研究) 一冊
札帳農學校紀要第二卷第一號(松村氏泡吹蟲の研究) 昆蟲學研究法 昆蟲採集日記 蜚蠊數頭 同數頭 同數頭 同數頭
小學兒童採集昆蟲數百頭 敵菌に斃れたる蜻蛉一頭 妍蟲十三種其他數種 賈子二頭

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す
明治三十六年六月十日 名和昆蟲研究所

千葉縣 伯爵 堀田 正倫君
三重縣 三輪 好孝君
島根縣 樽 啓之助君
秋田縣 富樫 明治郎君
茨城縣 日比野 吉彦君
靜岡縣 岡田 忠男君
愛知縣 渥美郡 昆蟲研究會 武田安之助君
秋田縣 帶刀 喜一郎君
長野縣 愛媛縣農事試驗場 大坂府南河內郡農會 愛知縣農事試驗場

石川縣 西川 豊次郎君
鳥取縣 岡野 庫八郎君
京都府 菅沼 岩藏君
京都府 宇田 健藏君
靜岡縣 石井 比年君
長野縣 帶刀 喜一郎君
京都市 岩見 勇藏君

● 昆虫世界購讀紹介者芳名
德島縣 松林竹肥虎君 (貳名)
茨城縣 遠藤庄八君 (壹名)
大分縣 安部香之助君 (壹名)

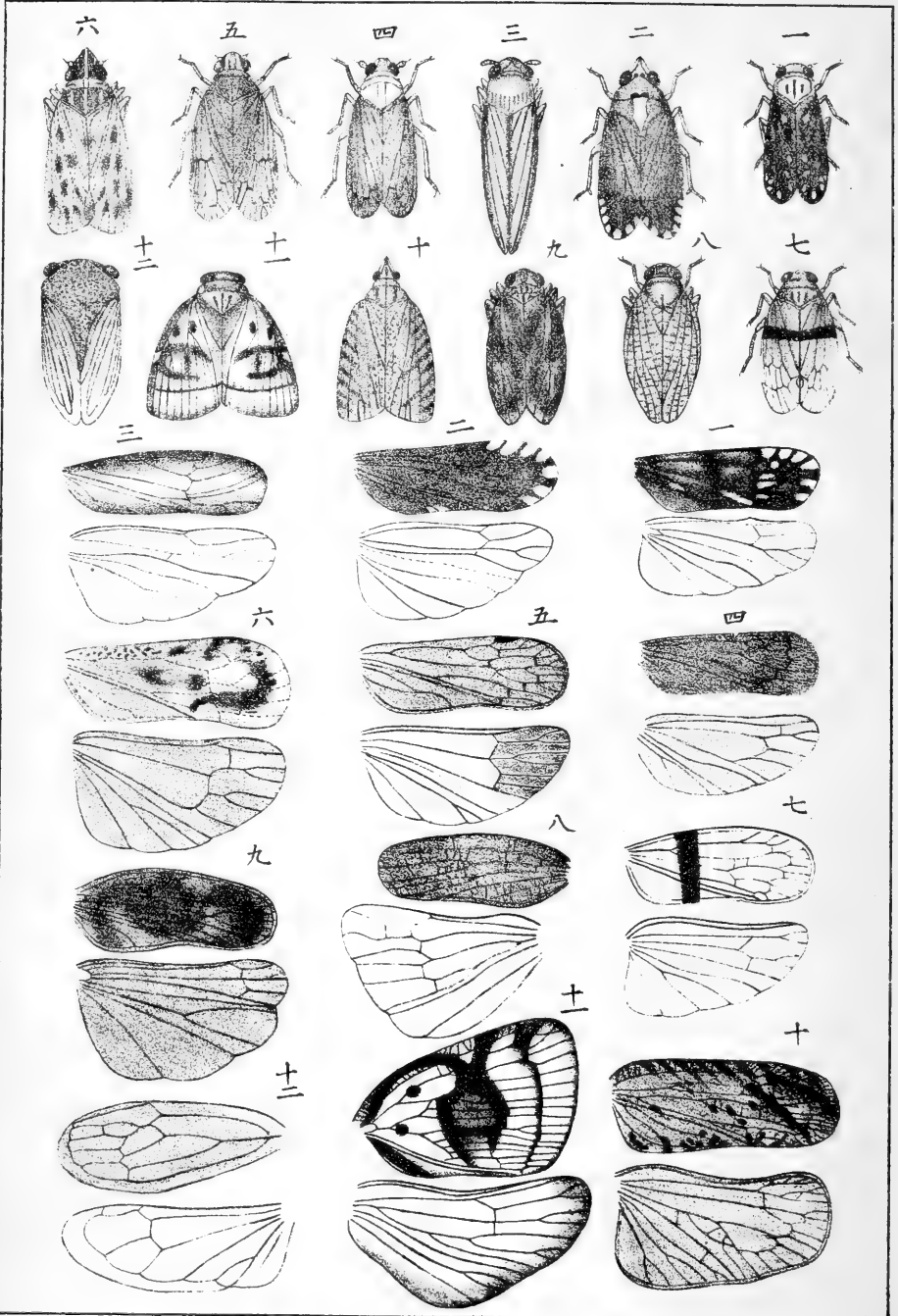
第十六回全國國害蟲驅除講習會員募集

開期(自八月十四日)二週間(四十名)
至同月十四日

全國害蟲驅除講習會は、一回と同志の歓迎を受け、既に前回迄に、三府四十一縣の出身者約八百名の有爲なる修業生を出せり、更に、此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、又應募者の便を圖り、來る八月一日を以て第十六回の開講式を擧げんとす。斯學に志あるの士は、速に其手續を経由せられ、尙今回の講習には左記開講の利益あるべしと信す。
一、講習の季節は、諸學校、官衙の夏季休業中なるを以て、公務に従事せらるる士は都合なる事。
一、今回は授科科目に改正を加へ、更に有用にして實行に適切な方法に依る事。
一、時節も害蟲發生の季節なれば、實地に臨み研究の利あること。
一、當昆蟲研究所々藏の昆蟲標本を觀覽に供するを以て、見學に多大の益あること。
尙申込期限を七月二十日以前と定む。雖も、當所の都合により、随時入會を謝絶することあるべし。規則書入用の向に郵券二錢添へ手急照會あれ、直に回送すべし。規則書入用の
明治三十六年六月 岐州市京町 名和昆蟲研究所

● 昆虫分布調査材料募集

名和昆蟲研究所
○鞘翅目。瓢蟲の部。
○鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。
○脈翅目。擬蜻蛉、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
○有翅目。水棲の部、蟬の部。
○直翅目。蜻蛉の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。
○擬脈翅目。蠅の部。
右今回寫主圖出來分布調査用紙に納められたれば最早何時にても調査の上記入に差支けなれば各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんとを望む
○アブラムシ(蜚蠊又は滑蟲)の標本
右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む
岐州市京町 名和昆蟲研究所



(二)種各子塵浮の産島大

(明治三十六年第六月)



◎大島産の浮塵子に就て (續) (第六版圖參看)

在鹿兒島 生熊與一郎

第二、Fulgoridaeに屬するもの

其一、クモガタヨロビヤ(Satermar sp.)

雌は雄に比し稍大なれども、異々同大同形にして、体長一分一厘、翅の開張二分乃至二分二厘あり。雲狀の斑紋あるを以て、雲形浮塵子の新稱を附せり。頭部は

灰黄色よして三日月形をなし、其兩端は黒紫色の複眼を具ふ。觸角は複眼の下方より出で、頭部と同色にして、基部の三關節は何れも圓柱形に膨大し、額面の中央及口吻に近き所は黒色をなす。胸部の第一關節は著しく小さく、中胸部の背面は濃青色をなし、三條の縦線を有す、前翅は長さ九厘乃至一分

幅四厘内外あり、暗青色に、濃淡相交りて雲狀をかし、前縁は五個、外縁は二個、臀脈に三個の白色紋を具ふ。後翅は長さ八厘、幅三厘五毛あり、無色透明にして、太き暗黄色の翅脈と、細き灰黄色の翅脈とを有す。肢は三對共に淺黄色を呈し、前肢は六厘五毛、中肢は五厘五毛、後肢は八厘ありて、後肢の脛節より一葉の肢片を出す。腹部は黒黄色にして(末節は黄色)、八關節より成り、末節の背面に肛門片を具ふ。肛門片は黄色橢圓形をなし、顯著なれども、産卵管は尾端に現れず。

該種は、大島全島に發生するもの、如くなれども、大島の最南部(嘉喜留摩島の南面於齋村)なる、雜草

多き稻田に於て、夥しく採集したり。

其二、セジロクモガタ ヨコバヒ (Salerumar sp.)

該種は前記のクモガタ ヨコバヒよりも稍小形にし

て、体長九厘、翅の開張二分内外ありて、同じく Salerumar 屬に屬し、胸部の背面に白色部あるを以て、背白雲形浮塵子の新稱を附せり。頭部は黒綠色にして劍狀に突出し、背面に四條の黃赤色線を列ね、後頭部の兩側に二黒紋を有す。複眼は橢圓形をなし頭の大部を占む。觸角は第一、二節は能く發達して大きく、灰黄色を呈し、感覺孔は著しく複眼に相接して存するが故に、複眼は圖の如く變形し、其孔口に近く單眼を具ふ。胸部は黒綠色を呈し、前胸の背面に黒色の二圓紋を横列し、中胸部の背面は稍々瓢形をなし、判然したる白色紋を有す。而して中、後肢は九厘内外、前肢は六厘内外あり、其は褐色をなせども、何れも基節のみは黒色をなす。前翅は頭部と同じく黒綠色をなし、前縁の終りに近く、各翅脈間も四個、外縁に三個の三角形をなしたる、無色透明なる部分、及後縁の殆ど中央より白斑を具ふ。後翅は無色透明にして、前記クモガタ ヨコバヒと殆ど同様なる翅脈を有す。腹部は全体黒く、稍綠色を帯び、各關節の終りは少しく黄色を帯ぶ。

本種は、大島南部の各村に於ける田圃に於て多く採集せり。

其三、ヘリクロカバ ヨコバヒ (學名?)

体長八厘、翅の開張二分六厘あり、全体褐色にして、翅を

疊みたる時、其外周黒色を呈するを以て、黒縁樺浮塵子の新稱を附せり。頭部は形小さく、黃褐色を呈し、背面に三角形をなせる隆起線あり、額面は黒褐色をなし、黒紅色の複眼の下方に、黃褐色の長さ觸角を具ふ。觸角は其第一、二節は長大にして、短毛多く、殊に第二節には數多の感覺突起を有す。口吻の額面と同色をなし二節より成り、其先端は第三肢の基部に達す。單眼は二個にして、觸角及複眼に接

近して存在し、著しき光澤を有す。胸部は淡褐色を呈し、前胸部は小さく、中胸部は大にして、左右の翅底に相接する淡黒帯ありて、前翅は半透明をなし、長さ一分二厘、幅三厘あり、淡黄色にして、前縁及後縁は黒味を帯び、各翅脈は其兩側より顆粒物を並列す。後翅は全部淡灰色をなし、半透明にして長さ一分、幅五厘を算す。肢は皆淡黄色を呈し、前、中肢は殆んど同大にして、後肢は前者より稍長く、長さ一分四厘内外あり。腹部は背腹兩面共に胸背と同色にして、産卵管は他の *Saterumata* 屬と同様なり。本種は、大島北部の雜草多き田圃及堤塘等より於て採集せり。

其四、クロバヨコバヒ(學名?) 体長一分二厘、翅の開張三分餘あり。全体灰黑色よして、前翅は

黒色あるを以て、黒羽浮塵子の新稱を附せり。頭部は黒褐色よして少しく黄色を帯び、方形をなして前方に突出し、複眼は灰黄色を呈し、大にして橢圓形をなし、兩側に突出す。額面は長くして少しく隆起し、黒褐色を呈す。觸角は複眼より稍離れて存在し、灰黄色をなし、第一節は小さく、第二節は最

も大よして多くの感覺孔を具ふ。口吻は長くして、灰黄色をなし先端は黒褐色よして、第三肢の基部に達す。前胸部及后胸部は灰色をなせども、中胸部の背面の一部は褐色を呈し、内に二條の縦走線を有す。前翅は長さ一分四厘、幅五厘あり、殆んど長方形よして、全部黒紫色を呈す。后翅は長さ一分四厘、幅六厘あり、極めて淡き黒紫色をなす。前肢は長さ八厘、中肢は七厘、后肢は一分餘を算し、共々灰紫色を呈す。腹部は全体淡鼠色をなし、九關節より成りて能く肥大し、尾端は太く、末節の背面に存する肛門片は、著しく大にして橢圓形をなす。

本種は、大島の最南部(諸勝村)の雜草多き田圃に於て、多く採集せり。

其五、クロヒシヨコバヒ(*Olixins* sp.) 全体黑色をなし、体長一分五厘、翅の開張二分六厘あり、中

胸部の菱狀部は著く大にして、且つ *Cixius* 屬すべきものなるを以て、黑菱浮塵子の新稱を附せり。頭部は黑褐色をなし、幅廣けれど、兩側に大なる黑紫色の複眼あるを以て、背面より見るときは幅狹く、中央に黑色の大なる縦溝を具ふ。額面に長くして、且中央部は著しく幅廣く、其裏面に當り、複眼に近く二個の單眼を具へ、背面に存する黑色の縦溝は、口吻の基部迄達す、口吻は長く、長さ五厘あり、三關節は判然し、腹部の第二關節は達す。

前胸部は(へ)字形をなし、中胸部は大にして黒く、内に眞黑色をなせる五縦線を有す。前翅は稍々方形にして、全体淡鼠色を呈し、長さ一分六厘、幅六厘あり、前線の終りより近く褐色紋を有す。后翅は長さ一分五厘、幅八厘餘あり、無色透明あれども、先端三分の一は淡鼠色を帯ぶ。肢の彩色は三對共に同様にして、基節は黑色をなし、轉節より跗節迄は黄灰色(時に少しく紅色を混する事あり)をなし、前肢は長さ一分一厘、中肢は一分四厘、后肢は一分六厘内外ありて、后肢の脛節、及跗節の第一、二節端には、數多の棘狀突起を有す。腹部は短大にして、背、腹共に黑色を呈し、腹片は極めて小さく、産卵管は濃褐色にして、肛門片は背端にありて、葉片狀をなし、尾端より白粉を有す。

本種は、名瀬附近田圃の雜草中に於て、多く之を採集せり。

其六、カスリヨコバ (*Cixius* sp.)

小形種にして体長一分二厘、翅の開張二分八厘あり、前翅の翅脈

は太く、飛白狀をなすを以て、飛白浮塵子の新稱を附せり。頭部は背面より見るときは、黒褐色をなし、前方に鋭く突出し、中央に判然したる一本の白色縦線ありて、兩側より黒赤色の大なる複眼あるのみなれども、額面は著しく變形して蕈傘狀を呈し、淡褐色を帯び、其裏面即ち複眼に接して觸角、及黑斑内に鮮紅色の單眼を具ふ。口吻は割合に短かく、灰褐色をなし、先端少しく黒褐色を帯ぶ。前胸部は(へ)字

形、中胸の菱狀部は畧方形をなし、三條の白色縦線ありて、條線の上には各一個宛の圓紋を具ふ。而して其中央なる線は、第一關節に亘り、頭部の白線と相接す。前翅は長さ一分二厘、幅五厘あり、殆ど無色透明にして、數個の黒紋、及前縁に紅色紋を有し、彎曲せる太さ翅脈は飛白狀をなす、后翅は稍々蝶類の後翅に似て、長さ一分、幅六厘あり、全体黒色をなす。肢は三對共々灰黄色を呈し、前、中肢は長さ八厘、后肢は一分餘あり。腹部は背腹共に褐色を帯び、短大にして、背面少しく隆起す。

該種の、名瀬港附近、田圃及河沿ひたる山中にて採集せり。

其七、イチモジ *Ichm. (Derbe sp.)* 体長一分、翅の開張二分六厘あり、前翅に赤色の横帯ありて、一文字形をなすが故、一文字浮塵子の新稱を附せり。頭部は小形にして、赤褐色を呈し、兩側に黒赤色の複眼を具ふ。額面は褐色扁平をなし、兩側の複眼に沿ふて、短かさ赤褐色の觸角を有す。口吻は稍黄色を混じ、二節に區別せらる長さ六厘あり。胸部は頭部と同じく、赤褐色を呈し、前胸部と中胸部の接線は判然し、背面の菱狀部に三個の隆起線を有す。前、后兩翅は共に無色透明にして、后翅は長さ一分三厘、幅六厘餘あり。前翅は長さ一分三厘、幅五厘ありて、中央より稍翅底に近く、前縁より后縁に亘りたる、赤褐色の横帯を具ふ。后肢は長さ一分一厘あり、褐色にして脛節端に二個の棘狀突起を有し、中肢及前肢は八厘弱にして、前肢は后肢と同色を合せども、中肢は黄褐色をなす。腹部は能く肥大し、七節より成り、背面は淡き黒褐色にして、腹片は灰褐色をなす。肛門片は球狀をなし、長毛多く、産卵管は背片と畧同色をなし、短かけれども、腹端に現る、部は割合に長し。

該種は、大島南部の薩川村及徳之島、母間村等よ於ける田圃の雜草中に於て、多く之を採集せり。

其八、アヲウスバ *Yobabi (Lerdia sp.)* 大形種中の小なるものにして、体長一分五厘、翅の開張二

分二厘あり、全体水色をなし、前翅は稍透明なるを以て、縁薄羽浮塵子の新稱を附せり。頭部は青褐色にして、五角形をなし、其兩側に殆ど球形にして、短毛を有する、黒褐色の複眼あり。額面は稍平たく口吻は二關節より成り、其先端は第三肢の基部に達す。觸角は複眼に沿ふて存在し、鮮青色をなし第一二節は能く發達し、前面に短毛を密生す。胸部は頭部と同色にして、前胸部は三角形をなし、前翅の翅底に相接し、中胸の菱狀部は正三角形をなす。前翅は殆ど無色透明にて、稍々褐色を帯び、太き縦走翅脈と、數多の横脈とを具へ、長さ二分、幅九厘あり。后翅は長さ二分、幅一分三厘あり、無色透明をなし、外縁は二個所より於て著しく凹陥す。后肢は長さ二分八厘を算し、基、轉及腿の三節は褐色にして脛節及跗節は青色を帯び、短毛を密生す。前、中の二肢は共に一分八厘あり、基節は胸部と畧同色をなし、他の褐色をなす。腹部は背腹ともに青灰色をなし、末節は黒褐色を呈す。産卵管は短かく、肛門片は著しく長く、背面より腹面より達し、長粗毛を生ず。

該種は、大島東部の山中路傍に於て採集せり。

其九、トビイロマルヨコバヒ (*Lenda* sp.) 体長二分、翅の開張五分あり、全体褐色を呈し、体軀肥大して幅廣きが故に、鶯色丸浮塵子の新稱を附せり。頭部は短大にして黄褐色をなし、背面の中央に黒色の縦線、及頭頂に黒色紋あり、額面は少しく綠色を帯び、短大にして兩複眼間を輪紋を具へ、小黒点を散在す。觸角は複眼の下方にありて、*Fulgoridae* 科の他の種類と同トク、第一、二關節は能く發達し

第三節よりは著しく小となり、毛狀をなせども、全体甚だ小形なりとす。前胸部は頭部と同色にして、鋭く前方より突出し、中央は濃色縦線ありて、其左右に同色の小斑紋を散在し、中胸の菱狀部は、鋭とく后方に突出して、濃色の三縦線を有す。前翅は短かく長さ二分二厘、幅一分あり、全体褐色を呈し内に

不規則ある濃色紋を印す。后翅は淡黒色にして、外縁に凸凹多く、長さ二分、幅一分三厘あり。肢は三對共に其色及大さを異にす、即ち后肢は長さ一分九厘あり、濃褐色を呈す。中肢は黄色にして最も短かく、長さ一分四厘あり。前肢は全部褐色を帯び、最も長く、長さ二分餘に達す。腹部も亦短大にして、背面は黒色を呈し、腹面は褐色を帯ぶ。

本種は、大島西部(宇檢村)の河原に叢生せる雜草中よ於て、多く採集せり。

其十、トビイダラ、ハノロモ (Poeciloptera sp.) 該種はPoeciloptera属の小形種にして、体長一分八厘、

幅五厘内外あり、全体褐色よして、黒褐色の斑紋あるを以て、鶯色斑浮塵子の新稱を附せり。頭部は著

しき側扁にして、褐色を著し、細く前方に突出す。中央部及兩側は隆起し、左右兩側に球状をなせる、

灰黒色の複眼を具ふ。額面は其先端少しく傘状を呈し、中央の側面は一個の大黒紋を有し、其前方に

黒色の二斜線を有す。單眼は黒紋に沿ふて複眼との間に位し、觸角は複眼の下方にありて頭部と同色を

なし、基部の三關節、殊に第二節は大にして、第四節よりは觸毛状をなし、第三節に附着す。其長さ約

七厘あり。前胸及中胸の菱狀部は、頭部と同色にして、兩節の接線は著しく、背面には三縱條の隆起線

あり。前翅は長さ二分一厘、幅九厘を算し、全体褐色をなして先端は丸く、諸所に黒褐の斜紋、及斑点

を有す。後翅は前翅より稍々短かく、長さ一分七厘、幅一分あり、稍々透明にして、黒色を呈す。肢は

何れも灰黄色をなし、腿節、脛節及跗節は、數個の黒紋を有し、長さ一分一厘内外なれども、後肢

は脛節のみ特に發達して、跗節は短かく、一見、二小節より成れるが如くなれども、背面より見るとさ

は、第二節は第一節に被匿せらるゝを認め得べし。腹部は七關節より成り、全体黒褐色をなせども、腹

本種は、大島の北部(福之本)なる山中に於て採集せり。

其十一、メンガタハゴロモ (*Ricania* sp.)

該種は *Ricania* 屬に屬する大形種にして、全体二分八厘、

翅の開張四分あり。前翅に眼狀及眉狀の斑紋を具へ、恰も人面狀を爲すを以て、余は面形羽衣の新稱を附せり。頭部は灰黃褐色をなし、極めて平たく、複眼は殆ど圓形をなし、其下方に灰黄色の短かき觸角を有し、觸角及複眼に接近して、鮮紅色を呈せる單眼を具ふ。胸部は濃褐色を呈し、前胸部は(へ)字形をなし、中胸部に淡色の三縱線を具ふ。前翅は長さ一分一厘あり、膜質透明にして、其殆ど中央に褐色の眼狀紋、及横脈系上に眉狀紋を有す。後翅は膜質透明にして、稍々褐色を帯び、長さ一分三厘、幅八厘あり。肢は三對共に褐色にして、前肢は一分一厘、中肢は一分、後肢は一分二厘あり。後肢の脛節の先端、及跗節には、多數の棘狀突起を有す、腹部は背、腹共に褐色を呈し八節より成り紡狀を爲す。本種は、大島南部の山中(蔵の多く繁茂せる所)に於て、夥しく採集せり。

第三、Membracidae 屬するもの

其一、ヒメツノヨロモ (*Smilia* sp.)

該種は体長一分、翅の開張二分八厘あり。本族の小形種なる

を以て、姫角蟬の新稱を附せり。頭部は胸部と同色をなし、殆ど同幅をれども、長さは極めて短かく常に胸部の下に隠る、額面は平たく、兩複眼間も二個の單眼を横列す。觸角は極めて短小にして、三小節より成り、頭部と畧同色をなす。口吻は褐色を呈し、二節より成り、上下顎は長くして下唇端も出づ前胸部は黒褐をなし、能く發達して全面も小黒點を散在し、後端は角狀をなして、後方に延長し、腹部の第六關節に迄達す。前翅は長さ一分二厘、幅五厘を算し、稍々褐色を帯び、膜質透明なり。後翅は其大さ前翅と同様にして、無色透明をなし、二翅共に全脈は外縁と著しく相分離す。肢も亦三對共に同

色よしして、基節、轉節、及腿節の基部は黑色を帯び、跗節、脛節、及腿節の先端は褐色を呈す。腹部の能く肥大し、八關節より成り、淡黒褐色を呈す。

本種は、大島北部の山中に於て採集したるものなれども、余は内地に於ても、椿樹等に棲息するものを數回採集したる事あり。

此他、尙余が大島に於て採集し得たる浮塵子中、内地に産する普通なるものは次の如し。

- 第一、Ciadellidaeに屬するもの 一、ツヅグロヨコバ (Selenophalus cinchiceps, Uh.) 二、イナヅマヨコバ (Thannotetix storvatus, Li.) 三、フタタニヨコバ (Ciadula waroni, Lethert.) 四、ヨシモトヨコバ (Ciadula sp.) 五、オホツマズロヨコバ (Tetigonia ferruginea, Fab.) 六、ハトムネヨコバ (Pediopsis sp.) 七、ヒシモンヨコバ (Thannotetix sp.) 八、マダラヨコバ (Deltocephalus striatus, Linn.) 九、ハチノシヨコバ (學名?) 十、ミトリナガヨコバ (學名?) 十一、チャイロヨコバ (Emgoasca sp.) 十二、ヒメミドリヨコバ (Emgoasca sp.) 十三、キイロヨコバ (Tryploeorda sp.)

- 第二、Fulgoridaeに屬するもの 一、セシロヨコバ (Delphax sp.) 二、ヒトスヂヨコバ (學名?) 三、カシヨコバ (Myndus apicalis, Uh.) 四、シマヨコバ (學名?) 五、ヤナギヨコバ (Cotyleceps marmorata, Uh.) 六、オホトビイロヨコバ (學名?) 七、ラングスケバ (Dictyophara inscripta, Walker.) 八、ツツカウノコロモ (Ricania albomaculata, Uh.) 九、アラバノコロモ (Poesioptera distinctissima, Walker.) 十、マダラアシナガヨコバ (Orthopagus lunnifer, Uh.)

◎コオヒムシ(負子)に就て

千葉縣印旛郡 齋藤 啓 二

負子^{こおひむし}に就^つては、先^まき増田^{まへた}、神村^{かむら}二氏の實驗^{じつげん}説^{せつ}ありしが、今^{いま}又^{また}本誌^{ほんし}前號^{ぜんごう}の紙上^{しじやう}に於^おて、長野^{ながの}氏の内外^{ないぐわい}の異説^{いせつ}を列舉^{れつぎよ}したる説^{せつ}ありて、余^よ輩^{はい}研究^{けんきゆう}者^{しゃ}を利^りしたると、淺少^{せんせう}ならざりき。然^{しか}るに、其^{その}論^{ろん}点^{てん}たる、彼^かの負卵^{ふらん}せるもの^{もの}が、果^{はた}して雌^{めす}なるか、將^はた又^{また}雄^{おとこ}あるかに付^つては、増田^{まへた}、神村^{かむら}二氏は雌蟲^{めすちゆう}論^{ろん}に傾^{かたむ}き、長野^{ながの}氏はや、雄蟲^{おとこちゆう}論^{ろん}に近^{ちか}きが如^{ごと}し。余^よも亦^{また}本年^{ねん}聊^{りやう}之^{これ}が研究^{けんきゆう}を企^{くは}て、今尙^{いま}數頭^{すうとう}飼養^{しやうじやう}中^{ちゆう}にて、未^{いま}だ十分^{じふぶん}の效果^{かうくわ}を收^{せき}むる能^{あた}はずと雖^なも、今日^{けふ}迄^{いた}得^ねたる結果^{けつこ}を以^もてすれば、余^よは寧^{むし}ろ雄蟲^{おとこちゆう}論^{ろん}に左袒^{さたん}するものなり。蓋^{けだ}し、之^{これ}を確定^{かくてい}せんには、精細^{せいさい}に剖檢^{はうけん}するを要^{やう}すと雖^なども、余事^{よじ}に遮^{さへ}られて、未^{いま}だ之^{これ}を果^{はた}さず、故^{ゆゑ}に解剖^{かいぼう}上^{じやう}より立論^{りつろん}するにあらざるを以^もて、讀論^{ずろん}甚^{しく}だ薄弱^{はくじやく}なるを免^{まな}がされども、今此^{こんし}の問題^{もんたい}の起^{おこ}りたる際^{さい}なれば、余^よが觀察^{くわんさつ}の要^{やう}点を述^のべて、讀者^{しやくしゃ}諸君^{しよくん}の參考^{さんかう}に資^しするも、強^{あなが}ち徒勞^{とらう}のみにはあふざるべし。

一、負子^{こおひむし}の負卵^{ふらん}期^きは、當地方^{たうちほう}に於^おては、四月初旬^{しがつしつじゆん}より、七月下旬^{しちがつしつじゆん}に至^{いた}る、殆^{たいてい}んど四ヶ月^{しがつげつ}に亘^{わた}る(是れ一回^{いちかい}の產卵^{さんらん}期^きには、餘^{あま}り永^{なが}きが如^{ごと}し、或^{ある}は二回^{にかい}あるか、暫^{しばらく}く疑^ぎを存^{ぞん}す)

二、負卵^{ふらん}の數^{かず}、多^{おほ}きは八、九十、乃至^{乃至}百内外^{ひゃくないがい}を算^{さん}す。而^{しか}して、是^{こゝ}れは一時^{いちじ}に產付^{さんつ}したるもの^{もの}にあらざりて、漸^{しだ}々^{じだじだ}產附^{さんぷ}したるものと、斷^つせざるを得^えず。何^{なに}となれば、負卵^{ふらん}期^きの初^{はつ}め^めに於^おては、負卵^{ふらん}の數^{かず}甚^{しく}だ少^{すく}なく、漸^{しだ}々^{じだじだ}増加^{ぞうか}すればなり。

三、若^もし負卵^{ふらん}せるものを以^もて雌^{めす}なりとせば、其^{その}產卵^{さんらん}の方法^{はうほう}は、自^{みづか}ら背上^{へいじやう}に產附^{さんぷ}したるか、又^{また}は他蟲^{たいちゆう}に依^よりて產附^{さんぷ}せられたるか、の二途^{にちう}に外^{ほか}ありず。何^{なに}れもせよ、其^{その}產卵^{さんらん}期^き中は、腹中^{はらちゆう}に藏卵^{ざらん}せざるべからず。然^{しか}るに本年^{ねん}四月初旬^{しがつしつじゆん}より、五月中旬^{ごがつしつじゆん}に至^{いた}る間^ま、余^よが實驗^{じつげん}の範圍^{はんい}に於^おては、負卵^{ふらん}せるもの(負卵^{ふらん}の數^{かず}少^{すく}きもの、即^{すなは}ち自^{みづか}ら背上^{へいじやう}に產附^{さんぷ}するものとせば、尙腹中^{やうはらちゆう}に多^{おほ}くの卵^{らん}あるべし、と想像^{さうざう}せらるものをも含む)に、藏卵^{ざらん}せるものもなく、之^{これ}に反^{さか}して、負卵^{ふらん}せざるものには、悉^{ことごと}く卵^{らん}あり。四、負卵^{ふらん}せるもの(即^{すなは}ち雄^{おとこ}と想定^{さうてい}せらるもの)の卵^{らん}を剝^はぎ取りて、更^{さら}に雌蟲^{めすちゆう}と同居^{どうきよ}せしむるに、雌^{めす}は雄^{おとこ}の背上^{へいじやう}にあると、しばしくなり。

五、負卵せるものは、雄蟲より、軀軀少しく小形なり。

右數條の前提に依りて、余は彼の負卵せるものは、雄蟲ありと、推斷せんとするものなり。蓋し、神村氏の實驗は依るも、負卵せるものには、藏卵するもの一も亦く、又負卵せざるものにして、藏卵せるもの二十七頭中、二十二ありと、而して是れは七月十七日より、同廿九日迄の實驗に係ると云ふ。即ち氏の實驗たる、余が地方の情況を以てすれば、産卵期の最終期と云はざるを得ず。或は疑ふ、残りの五頭は、早已悉く放卵し終りたりしはあらざるか、然らざれば負卵せざる雄蟲なりしならん（背上の卵塊は孵化するの后、間もなく脱落す）。若し、果して然りとせば、氏の實驗たる、取りも直さず、雄蟲論を証するものと云はざるべからず（但し氏は悉皆解剖したる趣なれども、長野氏の云ふ如く卵と尾部のみを檢して、生殖器は關せざる如き觀ありて、や、疑なき能はざ、今一度精檢せられんことを望む）已に負卵せるものを以て雄蟲ありとせば、其の卵は、即ち他の雌蟲が産附したるものなると、決して疑ふべからず。即ち米國ストラッター嬢の觀察せられしと云ふもの、亦以て邦産の負子を説明し得べし。現余が本年の飼養試験は於て、雌がしばしば雄の背上にあることを、觀察したればあり。

右は、負子は關する、余が卑見なり。之を要するに、眞因は此問題を決せんは、長野氏の云ふ如く、其種屬を確定すると、更解剖上より精檢することを、勉めざるべからず。想ふに讀者諸君中には、己に這般の研究を遂げたるものあらん、速に稿を寄せ、余輩の蒙を啓かれんことを、切望して止まず。

編者云、負子に就ては、本誌第六十七號雜錄欄内、六足蠹蟻巢の末尾に附記せしが如く、其雌雄の區別は、田中先生の實驗により既に明にして、敢て剖檢するの要なし（當所は念の爲剖檢したり）。當所は其負卵者が果して雄なるか、雌なるか、將又、雌雄の別なきかを各二十頭に就き檢したるに、負卵者は皆雄にして、負卵せざるものは十八頭迄雌なりき。然らば齋藤氏の説の如く、神村氏の實驗に徴するも、負卵者は凡て雄なりと斷言して、憚らざるを信ず（尙當所に於て飼育中雌が雄の背上に産卵しつゝ、あるを見たり）。

◎外國の昆蟲書に就きて

在東京 長野菊次郎

〔三〕ヂッケルソンの蝶蛾書 (Dickenson's Moths and Butterflies) 昆蟲類中にて最も人の注意を惹くものは蝶蛾類にして、其發育、變化の狀態の最も觀察し易きも亦此類なり。然れば、普通の昆蟲書中、蝶蛾の發育を記せることは、東西殆んど同一轍より出で、ユズボウがオキクムシとなり、桐でアゲハノテフとあるが如きは、孩提の童幼すら之れを知れり。然れども、翻て其詳細を探らんか、識者と雖ども亦及ばざる所なきにしもあらず。例へばユズボウが柑橘類の葉を食ふには、如何なる部分より始めて如何なる部分に畢るか、不規則なるか、果た規則あるか、幾回脱皮の後、如何にして躰の一端を以て樹枝を支へ如何なる方法によりて環狀の絲を績ぎ、以て己の躰を支ふるか、の如き連續せる生活歴史につきては殆んど判然たる答辯を與ふるもの少からん。ヂッケルソンの此書の如きは、此等の點につき、實に綿密として、丁寧なる觀察を述べたるものにして、蝶蛾の生活史を知るには、無上の好侶たるなり。全部の三編より成り、第一編は九種の蝶類を、第二編には十八種の蛾類を述べ、第三編には各種の蝶蛾を比較總括して、其區別の要點を明し、又保護色、及び擬躰の一、二例を挙げ、次に二形的を述べ、次に普通の蝶蛾の分類を試み、漸次蝶蛾の發生の相同じきことより、幼蟲、及び蛹の一般の構造、及び其等の成蟲の構造、及び習性の相同じき點に及ぼし、遂に他の昆蟲との關係より、節足動物との關係に論及し、最終に採集法、保存法等を附記せり。特に幼蟲、蛹、成蟲等につき、戸内及び戸外に於て、觀察すべき要點一百三十餘條を列擧せるが如きは、實に用意周到ありと云ふべし。著者の言の如く、本書は童幼の爲め、師範生徒の爲め、又夏期學校教師等の爲めに、著はされたるものなりといへば、其順序たる多數の昆蟲書の如く演繹的にあらずして、歸納的なることは、最も初學者の教育法、又は自習の方法

等に協へりと云ふべし。世の斯學に忠實なる、特に地方に在りて、參考書籍を欠乏を感せらるゝ君子、此書の示す所に從ひて、觀察實驗を積まれたらんには、徒に書籍に拘泥して、疊上の水練者たる笑を免るゝのみならず、到底研究室のみ蟄居するもの、企て及ばざる好成绩を擧ぐることに、敢て難からざるを信するなり。

本書は一千九百一年ポストン府の出版として、本文の紙數三百二十九頁、之に挿ひに、著者の手に成れる寫眞版二百三十二圖を以てし、重に生活の状態を表はせり。紺色のクロス表紙に、金色の蝶蛾模様を溢るゝ許に鏤め、光澤紙を用ひたるオクタボ形の美本なり。代價は九善にて五圓なるべし。因に曰く、此書の一部は、他日本誌の餘白を借りて、紹介すべし。



◎二化生螟蟲の卵蛹の位置に就て

名和昆蟲研究所助手

森

宗太郎

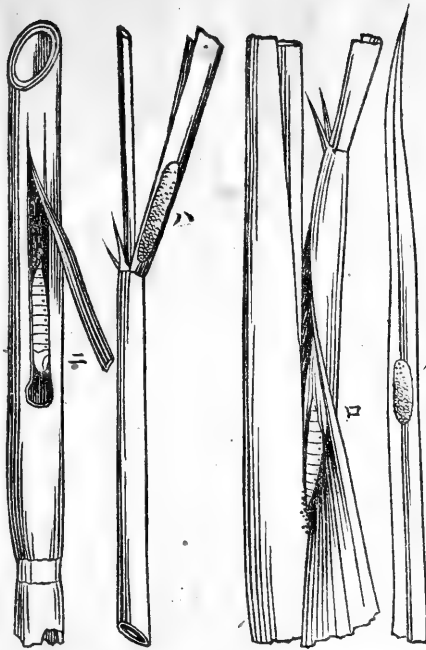
編者云、本編は當昆蟲研究所員の催しに係る、水曜昆蟲會席上に於て、當所養蠶係主任、森助手の講演せられし大要なり。

二化生螟蟲に就ては、本誌に屢々記載もあり、且發生經過の如きも、最早世人の一般に承知し、驅除法とても、種々なる方法を以て實行しつゝある時に當て、今更私が申上ぐる必要もない様であります。乍然、害蟲軍の王だけあつて、容易に盡滅し得られず、隨て研究すべき餘地の、未だ澤山にあるのでありますから、今私が該蟲に就て申上ぐるも、敢て無用の事でなからうと存じます。故に聊か研究しました幾部分を、簡單に申上げて、御參考に供する次第であります。拙私が申上げ様と思ふのは、二化生螟蟲が第一回の時と、第二回の時とは、如何様な差異が起るかといふことであります。即第一回の成蟲は、御

承知の通り、五月から六月に亘りて發生致しますが、其産卵は圖の(イ)に示す如く、大概は稻葉の表面しるも上の方より産みつけます。これは一寸考へますれば、直ち人目に觸れ、敵蟲も襲はれ易く、甚だ不利益の様と思はれます。去りながら、これが此蟲の生存上必要な事で、即此時分は温度が低いから、葉の表面に産み、日光を受けるのが、丁度孵化するに適當の温度である故に、大概は葉の表より産むのであらうと存じます。而してなせ葉の上の方に産むかといへば、これも必要があるので、此の時は稻が未だ小さいから、一本の莖に澤山の蟲が蝕入すれば、忽ち枯れて、直ぐ他に移轉せねばならぬ事になる。それで可成上の方より産み付け、孵化すれば糸を引き、出來得べきだけ廣く擴がる必要があるからである、故に第一回の幼蟲は孵化の當時でも、一莖中より澤山蝕入せぬ事は、實驗上確でありませう。ところが等しく第一回の時でも、時候が段々暑くなるに従ひ、産卵の場所も違つて、葉の中心、且裏面より多く産む様になる、第二回の産卵期は、八月頃で、氣候が極めて暑い時であるから、此時は最早葉の表には産まない、第一回の始め即ち五月から六月頃に産むものとは反對で(ハ)に示す如く葉裏の下方、葉鞘より近き處より産むのであります。此時分は稻も太くなつて居るから、一所に澤山蝕入しても差支がない、此時より莖を取て、調べて見ますと、一莖中に二三十頭、多きは百頭以上も入つて居ります。故に此の時の驅除法としては、孵

二化生蠶蟲卵、蛹の圖

(イ)は第一回發生の卵塊 (ロ)は同じく蛹
(ハ)は第二回發生の卵塊 (ニ)は同じく蛹



化して何日も経たない内に、被害莖を刈り取るが、最も良法と存じます。日を経るに従て、幼蟲は他の莖に移るから、此の好機を失してはありませぬ。以上申し上げました如く、第一回と、第二回との産卵個所に於て、氣候の關係、生存上の必要から、彼様に違ひがあります。孵化の時機も、第一回の時は

大抵午前十一時頃ハ孵化するものが多く、第二回の時は朝早く孵化するものが多いのであります。蛹時代ハ於ても亦差異がありまして、即第一回の時は、莖の髓部に入りて蛹化することは少なく、大概は圖の(ロ)に示す如く、葉鞘部に於て蛹化するのであります。之れは蛹期短かく、且成蟲となつて、外に出づるに都合がよいからであらうと思ひます。第二回の時は寒くなるにつれて、幼蟲は莖の髓部を段々下方に蝕ひ下り、翌年三月頃蛹化致しますが、其前より一方を喰ひ破りて、其穴に糸を纏ひ、何時でも成蟲の出るに都合のよい様にしてあります。且第一回の蛹化ハ、莖の中期に於て致しますが、第二回の時は莖の株の方より下りて、蛹化致します。之れも生存上必要な事で、若し第一回の如く莖の中期に在つては莖を積上げたり、或は莖莖を用ひた時は、彼れ成蟲の出づるに非常の困難であるから、可成株の方に於て、蛹化するの可有らうと存じます。彼様は第一回と第二回とは、種々なる原因からして、違ひが起ります。此性質を能く知らないで、折角の驅除も、非常に手間取り、時には徒勞歸する事も御座います。能く此性質を利用して、時機を外さず、驅除せねばならぬ事と存じます。

◎害蟲視察談

岐阜縣長期害蟲驅除講習生

渡邊樵四平

私は、五月二十八日害蟲取調べの命を受け、稲葉郡本莊村へ出張致しまして、主としてキリウジカバンボの幼蟲即ちキリウジと、螟蟲とを取調べましたから、其摸様を御話し申上げ様と存じます。先づ本莊村字中村の苗代田に於て、キリウジに就て取調べましたが、其發生意外に多く、苗代田の畦畔の如きは、該蟲の爲め地上は無数の小孔を穿たれ、殆んど原形を止めない位でありました。其他乾田、及濕潤なる畑地に至るまで、發生せざるの地なく、實に豫想外のことで御座いました。随分此地は、年々キリウジの發生多く、時としては穀種の蒔直しを成すこともあるをうで御座います。故に本年は殊に其筋よりの注意がありまして、苗代田の周圍に豫防溝即ち幅一尺深四五寸位の小溝を設け、常に水を貯へてありますから、斯く發生の多きにも係はらず、殆んど其被害を認めませんでした。中には溝の不完全で泥土の埋れたる爲め、甚しく害を蒙りし苗代も二三箇所見受けました、之れを見ても、豫防溝の如何に有効なるかを証することが出来ます。目下幼蟲は大なるは七分位に達して居りますが、私が之れを採集するを見て、さも珍らしげに、近傍に耕やす農夫は、一人寄り二人寄り、遂に七八人集りました。依て試に此蟲に就て色々尋ねましたが、其内の一人より、これはイボと稱する蟲で、晝は土中より潜み、夜出で、苗

代田に入り、苗を食害し、且此蟲は陸上にも、水中にも棲むものであるから、如何に水を深くするも、害を成すものであるとの答を得ました。故に私は、此蟲は決して水中に棲むものでなく、水の深きときは畦畔に遁れ、漸次水の減じて田土の露はるゝときは直ちに浸入し、つまり水の深淺より進退するものである。其往返の際、障碍となる苗を切斷するので、苗を常食とするに非ざることを説き、其證據として、豫防溝の完全なる所は、決して被害あきこと、其他種々此蟲の特性を語りましたれば、農夫は始めて悟りしものゝ如く、直ちに携へたる鍬を以て溝を浚へ、水を灌くものも御座いました。私は斯く話しながら幼蟲を採集しましたに、僅か三十分間、殆んど一千頭近くを得ました、現に此通りで御座います(實物を示す)。實に之れを見ても、大概想像が出来様と思ひます。次に螟蟲も就て取調べ様と思ひまして、或る農家に就て、昨年被害の多かりし所の藁一束(十把)を求め、之れを取調べましたに、是又其意外に驚きました。目下は尙悉く幼蟲で、此内より二百五十五頭の多きを得ました。今假りよ、一把の藁數二百本とすれば、一束の數二千本、内被害莖が二百五十本とすれば、昨年は優に一割二分強の被害で、恐らく之れより少なき事はなからうと存じます。此多數の螟蟲が、最早遠かゝす羽化して四方に飛散し、産卵するでありませうが、今より其覺悟がなくては、遂に救ふべからざる慘狀に陥る時が御座いませう、之れを思へば轉た寒心も耐へませぬ。聞く、此地は年々螟蟲害多く、昨年も或る一小部分は螟蟲の爲めよ、收穫皆無の處が有つたさうで御座います。之れも充分驅除をせざる結果で、實に遺憾に堪へませぬが、本年は今より注意して、再び昨年同様の踏まない様に致したいもので御座ります。

編者云ふ、右は本月三日水曜昆蟲會席上に於て話されたる同氏の視察談なり。本年は何れの縣にてもキリウツカンホの發生多き事は、諸報告を見るも明白にして、中には非常に猖獗して驅除法を問合はさるゝ向もあり、尙該蟲に就ては昆蟲世界第五十七號に詳細なる記載あれば参照せられよ。

◎アゲハノテフ幼蟲蛹化の準備に就ての實驗

岐阜縣長期害蟲驅除講習生

中井藤助

編者云ふ、本篇も亦去三日に於ける、水曜昆蟲會の談話なり。鳳蝶に就ては、同氏は晝夜の別なく成蟲に至るまで、調査を遂げ、本月十日の水曜昆蟲會に於て既に發表せられたるも、紙面の都合よ、會の順序により、茲には、只蛹化の準備に就てのみ掲げ、餘は次號に掲載する。こゝこそせり。

アゲハノテフの蛹が、奇異なる形態を著し、胸部を糸を懸け、体を支へて居ることは、既に諸君も知らるゝ通りで御座います。が、幼蟲が如何にして糸を懸けるかと云ふことは、大に疑ひが有つたのであります。故に幼蟲の充分成長して、はや蛹化せんとするものにつき、觀察を遂げ、大に愉快を感じましたから、只体を支ふる所の、糸を懸くる順序を、御話申上げ様と存じます。

五月廿七日午前より、一頭の幼蟲が食を斷ち、數回柔かき糞を出しまして、午後一時頃、殆んど体量の二分の一程、水の如き黒汁を出し、其れより一時間餘靜止の後、動き初めまして、所々這ひ廻り、頻りに居所を求むるもの、様でありました。而して此時体は、丁度蠶の熟蠶の如く、半透明とありました。やがて約四十五度の斜面をなせる、一樹枝の下面に來まして、其處を蛹化の場所と定めたること覺しく、午後十時五十分頃より、糸を其枝一寸五分計りの間に、三十五分間程纏ひまして、休止すること五分間十一時三十分より、上部及び下部を糸を纏ふこと十分間餘、又休止すること三分間、十一時五十一分より糸を纏ひ、休むこと三、四分時間でありました。而して是等の動作に就ては、頭胸部は伸縮自由にすれども、腹部は少しも移動することはありませぬ。

翌二十八日午前零時五分動き初め、今迄頭部を樹枝の上部に向け居りしもの、一轉して、初め腹部を据へ置きし邊に糸を纏ふこと七分間、後休止すること七分間、零時廿分、前の如く糸を纏ふこと五分間にして、復た止む十分間、零時卅分動き出し、折返して躰の位置を舊の如くし、休むこと一分間、復た糸を纏ひ、後止む(此時一分間目位は全体大なる脈搏の如き震動四回來る)。零時五十八分に漸次躰縮み一時五分胸部第一、二の肢を枝より放つ五分間(此時一分間毎に二回の震動をなす)、復た肢を舊の如くして靜止すると三十分(一時三十分より五分間に四回の震動來る、一時四十七分全躰甚だ縮少し、一時五十四分大小四回の震動來る)、二時卅分に至り、又漸く糸を纏ふこと三分間にして又前の如く、(第二回目)躰を一轉して頭部を下部に向け、前に腹端を据へ置きし邊に、頻りに糸を纏ひます。是れ蛹化の際尾端の樹枝より離れざらしめんが爲め、特は茲は多く糸を纏附するもの、如く思はれます。此間廿分、二時五十三分躰を舊の如くし(三時一分に一回の震動と共に、枝尺蠖の如く、腹脚を残して、頭胸部を枝より離れ、枝に斜なる事凡一分間、三時六分躰を震動する事五回)復た休止する事廿一分間、三時三十六分に動き出し、三時卅八分(第三回目)頭部を枝の下方に轉向し、級々として前の如く糸を纏ひます。三時五十四分に、再び轉して頭部を上に向け、腹部の末端を動揺します。四時三分(第四回目)躰

を一轉し、尾端を据へ置く邊、幾度となく糸を纏ひ、四時四十六分鉢の向を舊に復します。四時五十六分に至り、頭胸部を斜に伸長すること四五回にして止む、五時八分復た頭胸を斜に張り、頭を微動せると數回、五時九分頭胸を屈曲して、第六關節邊の、枝の側面に糸を纏附する事一分間、是れを端緒として一條の糸を引き、靜かに第五、六節の間より白色の班紋上を経て、第一、第二の腹脚の中央に掛け一方の班紋上を経て、第六關節邊の枝の側面に達し、茲に糸を附けます。而して枝の一方より一方に、自体を釣るべき一條の糸を纏附するには、三分時を要します。斯くの如く、殆んど一定の時を消やし、糸を引き終れば復た其糸に沿ふて一方に達し、糸を纏附すると實に十五回、それより直に第五關節と其張糸との僅かの空隙に、漸くにして頭先端を入れ、糸の頭部に過半被ひるや否や、全力を舉げて頭部を樹枝の上部へ向け突き出し、數回鉢を動搖すれば、糸は頭部を経て背に廻り、第五と第六關節の中央に至るに及びて止み、漸次鉢軀が縮少致しました。初め自己の鉢を釣るべき糸を、枝に掛け初めてより、十五回の往復をなし時を費す事四十六分間、最初場所を定め、糸を纏ひ初めしより約七時間、即ち午前第五時五十七分に糸を懸け終りました、實に本能とは云へ、其巧みあること筆紙の能く盡す所でありませぬ。以後晝間は別に變動なく、纏糸は靜垂するのみでありましたが、翌廿九日午前一時卅分より、鉢は尾脚一對のみを残し、他は皆枝を離れ、三時廿五分數回の震動がありました。此時に至る迄に、鉢色は背上稍々淡白を帯び、側面の各關節にある白き班紋は、變つて淡赤色となり、鉢の容積又漸く減衰、殆んど(初め糸を纏ひし當時より)十分の三を縮少しました。以上即ち蛹化の準備で、此のものが脱皮をすれば、全く蛹となるのでありますが、其脱皮を遂げ、蛹となるには、隨分巧妙なる經過をするならんと思はれますが、何れ又取調べて御話申上ぐる時機があらうと存じます。



◎六足蟲彙纂

(巳の卷)

在東京 長野菊次郎

(十四)烏蠅に對する迷信

迷信や誤解は、孰れの國にても多少有り勝ちの事にて、歐米にては、古來

天蛾類の幼蟲は、有毒なるものと信せられたり。然れば英國では、ベニスズメの一種キーロカンバ、エルペノル (*Cherocampa elenor*) の幼蟲は、俗に家畜の疫病蟲 (*Murrain worm*) と稱せられ、若し牛羊等が之を舐るか、又は吞ひか、又は是が爲め々整ざるゝときは一種の疫病を發し、又は腫物を生ずるなど、信せられたり。抑も天蛾に化すべき烏蠅は、通例其形の大なるを以て、斯かる誤解を來たしたるものならん。然れども其實全く無毒のものにして、其色彩紋理の如きは、寧しる保護的の屬し、尾角の如きも全く示威的の止まりて、決して刺螫の具にあらざるなり。然らば如何にして、かゝる迷信の種を蒔きしかと問はんや、元來此蟲の嗜食する植物は、重にアカバナの類 (*Euphorbia hirsutum*) ヤヘムグラの類 (*Gaillardia mollis*) 等の、水邊に産する草にして、此等は、固より家畜に對して有害なるものにあらず。然るに同じく溝渠、又は濕地に生ずる繖形科の植物にて、イナナフテ、クロカタ (*Oenanthe Crocata*) (ドクゼリ) の一種と名づくるものあり、此草は激烈なる毒分を含有するものにて、家畜之を食へば斃死すと云へり。固より家畜の疫病につきては、此草以外は其原因とあるべきものあるべしと雖ども、畢竟エルペノルの幼蟲が、水邊の雜草を嗜好せるより、思ひ掛なき冤罪を被りたるあるべし。兎にかく、此烏蠅が家畜病の原因たる俗説は、全く無根なる事を斷言し得べしとなり (オロメロード氏の害蟲報告抄畧)。

(十五) 昆蟲の關節數 昆蟲の體制が、頭、胸、腹の三部より成れることは、通常人の知れる所なるが其關節數に至りては、種類によりて多少の異同あり、今ケンブリッジ博物誌に記載せる所を見るに、其最大數は頭部に七節、胸部は六節、腹部に十一節、總計二十四節にして、其最小數は頭部は三節、胸部に三節、腹部は五節にして、總計十一節なりといへり。

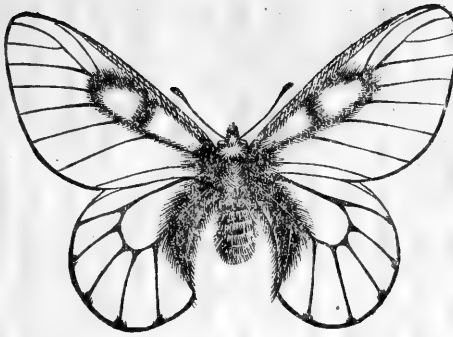
◎春日谷地方の昆蟲採集

名和昆蟲研究所助手

小森省作

去五月十六、十七の兩日、春日谷地方の採集を試みたり。抑も春日谷は、岐阜縣揖斐郡西南部の山村、春日村一體の地にして、西は滋賀縣に隣り、彼の伊吹山の過半此の村に位せり。岐阜市を距る北西七里にして該村入口の部落に達することを得、而して余は僅か二日間の採集に、加ふるは中途より風邪に冒され、爲に充分の採集を行ふ事能はざりしと、尙單獨なりしを以て、何處までも採集し得べき普通種は皆多く見逃したりき。今其模様を概記すれば、十六日早起輕裝腕車を驅りて揖斐郡池田山麓なる小島村

市場區に達す、時に午前九時なりき。其より道路幅九尺にして、車馬の行通自由なりと雖も、坂路に屬し、一面は山に、一面は谷あり。採集しつゝ登ると半里よして春日村瀧區に至る、右折山を攀つる約三丁、一大瀑布あり、高さ數丈、風景亦可なり、夏時杖を曳くもの多しと云ふ。下つて故道に據り、行く事里餘にして下ヶ流區に達す。該區は家屋七八十戸にして學校、役場、其他雜貨店、旅人宿等ありて春日村第一の部落あり。爰は於て晝飯を濟す、時正午なりき。而して此間に採集せし種類は、鱗翅目鳳蝶科にはカラスバアゲハテフ、オナガアゲハテフ、アラステアゲハテフよして、此三種は非常に數多飛翔せるを見たりき。弄蝶科にはクロハナセセリテフ、コチャバ子ハナセセリテフ、ウラボ



日光蝶の圖

シハナセセリテフを獲たり、此三種も亦普通にして、クロハナセセリテフ最も多數を占めたり。環紋蝶科にはコジヤノメテフを獲たり、ヒメジヤノメテフは到る所に多かりしも、採集せざりき。鞘翅目には叩頭蟲科のコメツキムシ、ヒメコメツキムシ、其他葉蟲科數種を獲たり。擬脈翅目には豆娘科のヤナギイトトンバウを、毛翅目には石蠶科に屬するもの二種を獲たり。共に谿に臨み、濕氣多き所を飛翔せる者なり。シホヤトンバウ、ギンヤンマ等は非常な飛翔しつゝありしが、皆見逃したりき。之より行く事數丁よして、ニクッコウシロテフ數頭を獲たり、是れ余の意外にして、該蝶が揖斐郡にも分布し居たるを發見し得たる事の愉快には、風邪の爲、快々たる此採集旅行に、大に元氣を添へたり。暫くにしてコイチモジテフを探る、行くこと里餘、小宮神に到る間、諸々小瀑布あり。風景幽邃、佇立觀望する所ありしが、左折川合區に到り、之より伊吹山麓ある古屋、笹又等に到る間は、斷崖壁絶にして、僅か一徑の存するのみ、一步を過れば千仞の谷底に墮落し、晝尚暗きの處、此里程二里にして古屋に達す。坂路狹險にして、採集自由ならずと雖も、昆蟲の多産ある、亦好適地ならんか、鳳蝶科はオナガアゲハテフ最も多く、カラスバアゲハテフ、クロアゲハテフ之よ次ぐ、アラステアゲハテフは川合以南の山奥には見受ざりし。蛺蝶科のコイチモジテフ亦多かりしが、余り多くは採集出來ざりき。ミスチテフは到る處に多く、粉蝶科にはツマキテフ二

頭を獲たり、モンシロテフ、スヂクロテフ、キテフ、モンキテフ、小灰蝶科にはベニシジミテフ、キルヤマトシジミテフ、ツバメシジミテフは又到る處に多く、ルリツバメテフは僅に一頭を獲たりき。脈翅目には、舉尾蟲科に屬する者四種を獲たり、此中、黃褐色にして翅に無紋の者最も多く、人の進むに従ひ、群をなして逃れ去る時は、爲に音を發するに至る、以て其多きを知るに足らん、之に次ぐは普通のシリアゲムシあり。其他奇品に屬するもの二種、草蜻蛉科に屬するもの三種を獲たり。擬脈翅目には積翅蟲科に屬するもの二種、豆娘科に屬するミヤマイトトンバウを採集せり。鞘翅目には步行蟲科に屬するもの三種、隱翅蟲科に屬するもの二種、瓢蟲科に屬するもの一種、吉丁蟲科に屬するもの二種、叩頭蟲科に屬するもの三種、螢火科に屬するもの四種、金龜子科に屬するもの三種、天牛科に屬するもの一種、葉蟲科に屬するもの二十一種、僞天牛科に屬するもの二種、赤翅蟲科に屬するもの一種、捲葉象鼻蟲科に屬するもの四種、青象鼻蟲科に屬するもの四種、象鼻蟲科に屬するもの四種にして、有吻目には黒椿象科に屬するもの一種、椿象科に屬するもの二種、有縁椿象科に屬するもの二種、食肉椿象科に屬するもの三種、泡吹蟲科に屬するもの一種、横岐蟲科に屬するもの九種、角蟬科に屬するもの一種、直翅目には竹節蟲、及螻蛄科に屬するもの一種、双翅目には喰蚜虻科に屬するもの二種、長脚蠅科に屬するもの二種、斑翅蠅科に屬するもの一種、寄生蠅科に屬するもの一種、膜翅目には姫蜂科に屬するもの三種を獲たるが、皆多くは奇品に屬するものにして、他の普通種は大低見逃したりき。午後六時古屋に達す、此處には旅人宿を營む家一軒あり、寢食すると云ふ迄なり、茶は此地方の名産なり。明れば十七日午前六時起床、直ちに支度を調へ、尙登ること約半里にして笹又に至る、同地にはニククウシロテフの非常に飛翔せるあり、忽として十數頭を獲たり。時々午前十時、余は尙登山を試むる意ありしも、天氣模様が悪かりし爲、此山奥まで降り籠めらるればやど、恐れて早々歸途に就きぬ。途中ニククウシロテフ非常に多かりしかば、方針を全く該蝶の採集に轉せり。

◎誘蛾燈は果して螟蟲驅除に有効なりや 播摩國 大上宇一

螟蟲の一大害蟲なるや、言を俟たずと雖も、之に對する驅除法に至りては、種々の説あれども、其効少かくして、有力の方法とては未だ之あるを見ず。徒らに手數を掛けしめ、又漫りに費用を要せしめ、而して効果を收むる能はざるものは、驅除の方法に於て、其當を得ざるに起因せずんばあらず、是れ今日

螟害の滅せざる一事よて明なり。若し此等の方法よして徒勞に屬せざりしせば、多年の實施上如何の効果を待たるや、必ず世よ示す處なかるべからず。從來の試驗成績に於て其報告を見るに、結論の誤謬たる者多し。例へば一兩年採卵、又誘蛾燈を實施し、其翌年天然驅除の效果ありしにも氣付かず、直に其結果なりと斷定を下し、其次年には氣候適順、加ふるも寄生蟲少なりし爲、又其害の甚しきも當て、始めて前年の判斷の誤りなりしを知る其例多し、夫れ害蟲には天然驅除あり、人の病にも亦自然療法ありて、其服藥無効なりと雖も、偶然病の治する事往々あり、直よ之を以て藥効と見る時は大なる誤謬を生ず。此の如き病に用ゐたる藥を採て、直ちに之を他人に應用したりとて、何の効あきや必せり。害蟲驅除に於ける又然り、直ちも臆斷を下して、豫防法其者の効と云ふが如きは、未だ早計よして、唯一の藥法を以て他に之を應用せんとする無智の醫師に等しきのみ。害蟲驅除に於ける、天然驅除の有力なるは、人工の遠く及はざる所よして、特よ螟卵寄生蜂を以て最とす。然るに一方には、國家經濟にも關係を及ぼすべき石油を施用し、莫大なる手數と、費用とを擲ち、寄生蟲其他有益蟲の保護を等閑に付する地方多きは、實よ憐むべきに非らずや。誘蛾燈其者よは、多分の有益蟲即ち寄生蜂の各種、石蠶科、がむし科、げんごろうむし科等無罪者の死刑よ注意せず、其益蟲、害蟲の區別を農家其人に教へざるが故よ、保護すべき者も保護せず、誘蛾燈の爲、却て愛護せざるべからざる有益蟲までが死刑とは、實よ無謀も亦甚しからずや。是れ恰も未開國人が罪を定むるよ、罪者を鱈魚よ與へて、之を食へは有罪と認むるが如く、有益蟲の爲實よ氣の毒千萬の事よぞある。是等有益蟲は、定めて邦人の無智なるを悔むるべし從來誘蛾燈の結果報告は、往々諸雜誌よ見受くるに、價値ある報告は一も見へせ、皆杜撰の報告に過ぎずして、其報告する所を見るに、何日夜蛾何疋、何日夜何疋合計何百疋等の記事にして、其有害蟲よ對しては、有益蟲の死數も計算報告し、其利害得失を論せざるべからざるに、之をなさざるは、恰も戰報を成すに、敵の死數のみ手柄顔よ云ふて、味方の死數を云はざると同一轍なり。何ぞ其報告の當を得ざるや、余が杜撰の報告と云ふ所以なり。

又採卵數の報告に就ても、注意せざるべからず、其報告を見るよ是れ亦何れも多少の誤謬あり、即ち何十何村、採集數何程、此を雌雄に分てば何程、之が産卵數何程、之に寄生蜂歩合何程、此が成長すれば何程の稻穂を害す、之が損益何程、此代價何程、此を本郡教育費何程に比せば何程の剩餘あり、など机上にて算盤的の報告多し、是亦其當を得たる報告にあらずるを信ず。昆蟲學大家さへ、未だ充分昆蟲界

の智識なきに、別々昆虫學も研究せざる者が、採卵數を基礎として立論するが如きは、薄弱の考にして無用の言多し、天然の事は、専門大家何程注意しても、未だ見透す事能はざるの点多くして、やゝもすれば誤謬に陥入るなきを保せず。況んや初學者よ於てをや、未だ諸學者が論せざる点に於て、天然驅除の行れつゝある事多々存す。害虫の利害を知らんと欲せば、頻々檢視せよ、其内にも天然の道理より、其他の理由も發見する所あるべし。螟蟲卵の孵化したる際、是を食殺する所の益蟲を見る事難からず、即ち歩行蟲科がむし科けんごう科の小形種は多種ありて、此等有益蟲が稻株よのぼり、好食を待つ事多し。此際此蟲に捕食せらるゝ螟蟲の妙は、又尠少からざるなり。此一事のみよても、諸氏の從來の報告よは、誤謬ある事を知る、依りて天然の驅除は有力にして、年に依り多少の増減あれども、多生すれば隨て寄生蜂、其他も多生して之を食滅す、今日多少の盛衰は免れざれども、螟蟲害は依然として昔日に譲らず、誘蛾燈は費用多くして、之を償ふの價値少なし。採卵とて、益蟲の保護を怠る時は、又小兒の手數を償ふに足るや否や、今日諸氏の云ふ如き利益なき事は、螟蟲其者が滅せざるよても知るを得、良法の發見者を待つの外なし。

編者云、大上氏は徒らに天敵のみに任せて、良法のなきを歎ぜらるゝ、如何に良薬も雖も、之を服せざれば、其効なきを如何せん。害虫驅除の事は根本的思想を養成し、共同以て之れに當らずんば、好果を收むる能はず。採卵法の如きは、儼に有力なる一方法と云ふべし。

◎昆虫發句集

(二) 蟬

(談事記) 初蟬、空蟬、(格物論)蟬、兩翼、喙長くして腋の下にあり或は以爲口なし脇を以て鳴者なり云々種類多し枚擧するに違あらず暑之○空蟬、すべての蟬をいひ又もぬけたるをいふこゝ古歌さにも多し○蟬しぐれ、蟬の聲しんくこして時雨るゝ様に聞

頼て死ぬ景色は見わす蟬の聲
ゆすりてよ筆捨松に蟬の聲

芭蕉
宗因

三重縣一志郡高岡村 喜田川要三郎

蟬なくや木登りしたる團扇賣
森のせみ涼しき聲や暑き聲
月代に夢見て飛ぶか蟬の聲
嘔蟬の鳴かぬ梢もあはれあり
逢坂やいとせきさ合ふ蟬の聲
客ふりや居所かへる蟬の聲
風の蟬いよ竹に鳴つものる
蟬鳴や寐て草臥る船の底
桐の木や雨の流るゝ蟬の腹

素堂
乙州
正秀
杉風
智月
掬志
水狐
漫々
梅室

蟬なくやおなじかけなる松柏
 蟬なくや貫ひ欠伸の渡し守
 蟬の聲人の夕かけ出来にけり
 日半日同じ茂みやあぶら蟬
 おどろへや一聲高き夜のせみ
 蟬なくやしぶく晴る、山の雨
 顔に来る瀧のしぶきや蟬の聲
 初せみや夕暮の聲は草の中
 初蟬や眼鏡かければ飛で行
 蟬のかく働くやうで哀れなり
 空蟬や石の鳥居も鳴すてし
 音の中になる山風やせみ時雨
 日の丘やせみのよるべもなき時雨
 鶏の聲も聞えずせみしぐれ

梧 十
 鶴 年
 一 具
 抱 儀
 鳥 明
 禾 木
 太 珉
 寥 松
 五 明
 句 空
 一 井
 丁 知
 三 彦
 禾 木

いてや我よき衣着たりせみ衣
 梢よりはたよ落ちけりせみの殻
 稲葉山にて
 撞く鐘もひやくやうなりせみの聲
 しつかさや岩にしみ入せみの聲
 せみの聲たまらで涼し薄羽織
 桐の葉に落ちよくとせみの聲
 せみなくやよく見れば松のこぶ
 啼まではちかぬせみかとおもひけり
 家ひとつありてせみ啼く野間かな
 夕せみや是かか道もはかのゆく
 清瀧や夢のやうなるせみの聲
 せみよりも夕かけ出来て札川
 せみなくや思へば古き庭の籠

芭 蕉
 同
 芭 蕉
 同
 許 六
 同
 桃 葉
 幾 秋
 史 千
 蒼 虬
 同
 同

◎昆蟲に關する隨感隨筆 (第二回)

昆 蟲 翁

(一)三化の二化と二化の一化生螟蟲 愛媛縣に於ける試験の結果に依れば、三化生螟蟲の必ずしも三回發生するにあらずして、山間の冷氣なると、濕地の低温なる場所に於ては、往々二化生に變ずるとありと云へり。又富士の裾野に於て、二化生螟蟲は、大凡一化生なりと云へるも、恐らく事實と信せざるに依り、各所に於ても、深く實驗するの必要ありと確信す。

(二)螟蟲に關する博覽會 本邦の最大害蟲は如何なるものと問へば、必ず稻の螟蟲(損害高少くも年々四、五千萬圓)なり、と答ふるを以て至當と云ふべし。然るに該蟲驅除に付、未だ明瞭せざる所多々ありて、到底満足する程の良法あるを知らず、仮令良法のあるも、未だ普及の域に達せざるは、遺憾とする所なり。現今本邦の昆蟲學は、實に一大進歩を來したるを以て、此期を失せざり、稻螟蟲一切に關する博覽會と迄は到らざるも、展覽會を開設して、廣く各地方に於て研究せられたる、長所を集めたらば

必ず得る所意外に多かるべしと信ず、讀者諸君以て如何となす。

(三)富士山採集の昆蟲 昨卅五年八月初め、讀賣新聞日就社發起の富士登山會に加はりし、當所助手名和梅吉の採集したる昆蟲は、七拾八種即ち膜翅類十二種、鱗翅類八種、雙翅類十一種、甲翅類三十五種、半翅類十種、羅翅類二種なり。其際の登山は、生憎暴風雨に出合ひたる爲め、全く頂上は達する事なくして下山したる有様なれば、従ひて採集品の少き事は當然の事なり。然れども、採集し得たる所のものを見るに、珍種奇品も多ければ、好時期を撰みて充分採集せば、必ず意外の獲物あるや疑ひおし速かに採集し得て、富嶽の名と共に、高く名譽を擧げられんことを希望す。

(四)小學兒童採集の昆蟲 岐阜縣郡上郡上保村尋常高等小學校長塩田健藏氏(第三回全國害蟲驅除講習修業)は、屢々小學兒童の採集したる昆蟲標本を寄送せられしが、茲に最近送附(五月初旬採集)の分を見るに、實に七十一種に達せり、今是を七類に分てば、膜翅類四種、鱗翅類三種、雙翅類五種、甲翅類四十五種、半翅類十種、直翅類一種、羅翅類三種あり。其内甲翅類は屬せる葉蟲の一種(赤色にして百合の葉を食するもの)、并に瓢蟲の一種(四星瓢蟲に近似のもの)は、慥に珍種に屬するものと云ふべし。



圖の蟲瓢星六

(五)黴菌の爲に斃れたる昆蟲 縞蠅 糞蠅を始め、バッタ、蟬、蛾等の、黴菌の爲に斃れたるを見るは、敢て珍奇とするに足らず。茲に天牛類、ゴミ蟲類、象鼻蟲類の死するものは、多少珍奇とするも、静岡縣岡田忠男氏寄贈の蝶蝓、特に同縣田方郡石井北平氏(第七回全國害蟲驅除講習修業)寄贈の蜻蛉に到りては、實に珍奇と云ふべし。因に記す本年は桑蝓等々の黴菌の爲に斃るゝもの、特に多きを感じず(黴菌は罹りたる昆蟲の標本を、多數蒐集の上、専門家に調査を請ひ然る後詳細報導するとあるべし)。

(六)豌豆象鼻蟲の産卵 京都府、兵庫縣、鳥取縣、和歌山縣等に於て、最も甚しく損害を與ふるエンドロザウムシの驅除法を、常々質問せらるゝも、未だ答ふるの言葉なかりしよ、本年五月中旬岐阜市に於て、圖らずも、該蟲の頻りに豌豆の莢上に樺色の橢圓形なる卵子を産附するを見たり。尙其卵子の多少を調査したるに、人家に近くに從ひ其數を増し、遠かるに從ひ殆んど稀なりき。故に驅除の法として四月迄は豌豆を使用し盡すあり、然らざれば、豌豆内は於て越冬するものを、豫め死滅し置くを必要とす。

(七) 外國輸入の害蟲 岐阜縣農事試験場に於て、米國より各種植物の種子を購入せし折、其内菜豆の種子は全く害蟲の爲め食害せられしのみならず、種子の内より續々成蟲(ヒゲザウムシ)の一種の出づるありて、甚しきは一粒内實に十頭に及ぶものあるは、驚くの外なしと云ふべし。試験場は機敏にも、悉皆焼棄せられしを以て、幸ひ蔓延の患ひなかりしも、若一誤りて飛散せば、隨に一種の有害蟲を増加したるものと云べし。又岩手縣某氏の質問に曰く、頃日澤山の蘭貢米を購入したるに、種々の害蟲混入し居るとて折角郵送せられしも、消印の爲め悉皆破損したるを以て、何種たるとを知る能はざりしは、遺憾とする所あり。以上の如き有様にて、續々外國より害蟲の輸入するは疑ひなければ、豫め注意し置ざれば、後日意外の損害を受くるやも圖り難し。



(八) 水松の蚜蟲驅除

岐阜市の或る醫師の庭内に、高さ八、九間の水松(イチイ)あり、五月初旬無數の蚜蟲發生したるを以て、強風の際には多く墜落す、此もの再び登らん欲して所々方々歩行するうち、誤りて室内に入り來るもの多く、爲に室を歩する毎に、二、三の蚜蟲を壓殺すると云へり。茲に於て驅除法の質問あれば、種々の方法を話し置きたるは、其の後二十倍の石油乳劑を藁帚に附けて、一々樹枝を洗滌したるに、僅か二人手間にて見事に驅除の効を奏したりと云へり。何事も熱心に従事せば必ず効あるものなり。

(九) 蟬寄生蛾に就ての書狀

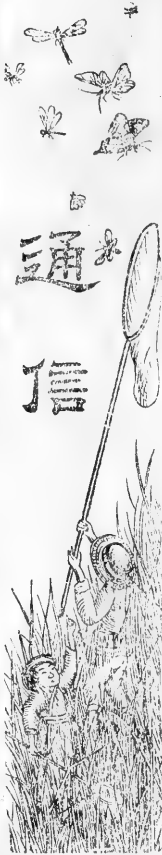
米國昆蟲學者ダイアー氏より、左の書狀到着せり。

小生は貴下の圖版を示されたる、寄生蛾の幼蟲と、其寄主とにつき、非常の興味を以て注意仕候。そは明にウエストウッド氏の定められたる、エビピロプス(Epipyrus)屬に隸するものにして、未だ記載せられざるものと、愚考仕候。小生は其種名を命せられんとを、貴下に御勧め申上候。尙其一標本を合衆國ナショナル、ミウゼウムに御送り下され候は、幸甚に存候云々。

尙又英國昆蟲學者キルカルデー氏より、左の書狀到着せり。
小生は英文にて、寄生蛾の興味ある記事を有せる、最近の昆蟲世界に向つて、感佩仕候。何卒此事を單簡にエントモロジスト雜誌に、轉載せんことを希望仕候云々。

右は本年一月發行の昆蟲世界誌上に記載したる、蟬寄生蛾の實驗説に對しての書狀なり。歐米人の注意する所、實に感服の外なし。願くは本年各地に於て、充分研究の上、報知あらんことを希望す。

(十)負子の雌雄と産卵に就ての實驗　コオヒムシの件に就て種々の説あるも、未だ確定の場合に到らざるを以て、五月廿四日の日曜日に於て、當研究所員數名は、午前中專ら負子採集に出で、百數十頭を獲たるを以て、午後は専ら之が剖檢に従事して、其雌雄の區別を研究したるに、先づ尾端を驗して容易に其の區別を爲すの法を知れり、即ち鑷子を以て尾様物を挟み、尾端を引出せば、其雌雄によりて異なる、一見明瞭なり。然して負卵者が雌雄何れなるかを驗するに、負ふものは悉く雄蟲にして、負はざるものは大抵雌蟲なるを以て之を推知せれば、負ふものは總て雄蟲あることを確認せり。然れども、雌蟲が如何にして雄蟲の背上に卵子を産むの点に就ては、未だ不明なれば、雌雄一雙宛器中に容れて、所員各自に注意したるに、五月廿九日の午前中に於て雌蟲は雄蟲の背上に登りて數十分毎に一、二塊宛産卵することを認めたり。尙米國スラッター嬢は、其亂暴なる目的を遂げんが爲、數時間争ふことあるを言はるるも、余が實見によれば、産卵當時雄蟲が交尾を遂げんが爲、争ふものにして、雌蟲が産附を行はんが爲めに、争ふものにあらざるが如し。



◎博覽會出品害虫標本解説書

岐阜縣 武儀郡農會

本會は今回第五回内國勸業博覽會へ、害虫標本として、桑樹の害虫、シンムシの經過習性を示せる標本五箱を出品せり。今覽者の便益と、讀者の參考と資せん爲め、本誌の餘白を借りて、該解説書を紹介せんとす、幸に御掲載を乞ふ。

解説書

部	類	番號	品名	出品人
一	八	一	害虫標本	岐阜縣武儀郡農會

代表者 會長 原田 種澄

一、採集地 岐阜縣武儀郡
 一、出品の目的 本郡重要植物たる、蠶桑に被害を與へ、生産力を減殺するを以て、害虫の習性經過

を明かにし、完全なる驅除豫防を行ひ、其撲滅を圖らんとするにあり。

一、害蟲シムムシ發生分布 岐阜縣下の内、美濃國は武儀郡を始め、郡上、加茂、可兒、土岐、惠那の六郡及び飛驒國壹圓に亘り、就中武儀郡は金山町を根源として、坂ノ東村、上麻生村、菅田町、神淵村、上之保村、下之保村、中之保村、富之保村、及び上有知町の一部に流布せり。飛驒川沿岸の地は、久しき以前より發生を認めしが、既往五ヶ年間に漸次蔓延して、現今の状態となれり。

一、被害反別並に減損高統計表 (明治三十五年調査)

町村名	上有知町	下之保村	中之保村	富之保村	上之保村	神淵村	菅田町	金山町	坂ノ東村	上麻生村	計
被害反別	一〇	二五	三五	四三	五五	五〇	五〇	八	三〇	二元	三三
被害減損高	二五〇〇	六五〇〇	八七五〇	一〇七五〇	一六五〇〇	一四五〇〇	一三〇〇〇	九五〇〇	七五〇〇	七五〇〇	九七五〇〇
被害歩合	〇割五分	一割二分	一割五分	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	二割七分

備考、明治卅二年より驅除を續行したる爲め、本年に於ては被害を減少し、卅二年に比し、概畧三〇一の比例なり。然れども現今平均二割七分以上の被害は免れず、本年シムムシの爲めに減損したる桑葉を、仮りに百貫目金拾貳圓五拾錢の相場と見做し、積算するときは、參萬貳千七百拾貳圓五拾錢の巨額となれり。

一、桑樹被害の狀況 春季嫩芽の萌生せんとするとき、芽の心を食害するを以て、枯死したる芽は恰も霜害を受けたるが如し。秋季則ち幼蟲の孵化したる當時は、葉裏に斑点を現はせり。
 一、習性經過 發生地たる武儀郡神淵村に於て、飼育場を建設し、調査したる結果左の如し。
 成蟲は六月下旬より七月中旬迄飛行し、桑葉の裏面に一粒宛産卵し、大畧八月上旬孵化して幼蟲となる。其幼蟲は葉裏の主脈或は枝脈間に棲息して、葉を薄く咀嚼し、糸を張りて晝間の蟄伏せり。十月に入れば、其幼蟲は葉を下りて、芽元又は幹の凹所等に入り、糸を張りて其中にて蟄伏越冬し、翌春五月新芽の萌へ出つるを待ち、直に心へ蝕入し、老熟せば出て、他の青き葉の先へ移り、葉面より二本の指を以てつまみ上げたるが如く、葉を表面に凸出せしめ、其凹所に入り、繭を作りて蛹化し、六月下旬に至りて成蟲となるなり。幼蟲の卵より孵化したる當時は、葉裏に薄き斑点を顯はし、其部分の薄き糸を掻き起すときは、棲息するを見る。越冬の幼蟲は芽元、又は幹の凹所等の糸を掻き起せば、棲息するを

見る。被害當時の幼蟲は、被害芽を摘み取るときは、心を食害しつゝ、あるを見る。幼蟲は一頭にて一芽を食害し、他の芽に移ると見ざりし。幼蟲及蛹は寄生する蜂數種ありて、蕃殖を妨ぐると多大なり。

一、驅除の方法 春季は被害芽を摘み取り、燒殺、又は湯殺すべし。秋季は九月末日迄に葉を摘み去り、殺蟲法を行ふべし。蠶糞は其儘田畑に捨てず、一度醗酵して肥料とすべし。成蟲は捕蟲器を以て、揃ひ殺すべし。驅除したる被害芽は湯殺を行ひ、肥料の用に供するを便とす。

一、驅除施行の經歷、及び將來の施設 往年被害激甚ありしと雖、該蟲の習性經過を知らず、又因襲の久しき害蟲は、天然に發生するものにして、人為を以て撲滅すべきものゝあらずと唱道し、驅除に手を下すところかりしも、明治卅一年名和昆蟲研究所長來郡し、各地に於て、營業者に就き、親しく講話せられし結果、始めて驅除に着手の念を惹起せり。爾來、講話會を開く事數回、又一面には志想養成の爲め同地、及び本會役員中より人物を選定し、岐阜縣害蟲驅除講習會、及び名和昆蟲研究所開催の全國害蟲驅除講習會に入學せしめ、指導啓蒙の途を開き、農藝委員を派し、標本を示して講話をなさしむる等畧ぼ準備を整へ、明治卅二年春季始めて菅田町、金山町、坂ノ東村を區域として、驅除は着手せり。明治卅三年よりは、郡内發生地を悉く區域に加へ、本年に至る繼續して、驅除を勵行したり。而して驅除は着手せんとするや、機關として各町村に五名、乃至拾名委員を置き、又害蟲驅除講習生を監督として一町村に一名宛配置し、而して始め桑園主に各自に驅除を行はしめ、最終に至り一回乃至二回共同驅除を爲さしめたり。又町村農會に令し、被害桑芽の買上げを實行せしが、是又獎勵方法として効果を收めたり。驅除の成績大よ見るべくして、被害少となりしと雖、此地方は概して夏蠶を飼育するもの多くして、春蠶地に桑葉を輸出する事多く、爲に分布區域現今の如く廣大とあり、且又、從來驅除したる地と雖、發生區々、殆ど一ヶ月の長期に亘るを以て、桑の繁茂に伴ひ驅除困難のみならず、被害芽を取り残すを以て、未だ全滅と云ふに至らず、依て明治卅六年度は、神淵村に於ける飼育場の調査を參酌し、從來の方法により、春季驅除勵行の外は、秋季落葉前を於て、更は驅除を行ひ、以て全滅を圖らんとするにあり。而して秋季驅除を就き、營業者の參考に資せんが爲め、發生地各町村に三ヶ所、乃至五ヶ所の地を卜し、一ヶ所一反歩（桑の占有面積）以上の模範驅除場を置き、九月末日迄に桑葉を除去せしむるの手段として、秋蠶の飼育を獎勵し、不知不識の間に、驅除の目的を達せんとす。

一、審査請求の主眼 害蟲の驅除、豫防を全からしめんと欲せば、其習性經過を知悉するにあらざれ

ば難し、故に本出品を以て、發生經過を一目瞭然ならしめ、且敵蟲をも出陳し、其有益蟲は保護すべき必要を知らしむると共に、本會が從來驅除を施行したる成績と、飼育場に於ける調査に徴し、之が全滅を期せんとする方針なり、仍て審査あらんとを請ふ。

標本の説明 第一函、シムシ七月下旬より翌年四月下旬迄の經過。第二函、四月下旬より六月下旬迄の經過。第三函、完全經過。第四函、飼育場被害の實況、共同驅除の實況。第五函、岐阜縣井に武儀郡分布圖及被害反別損害高統計表。

◎静岡縣昆蟲事項

静岡縣 岡田忠男

左は、余が記憶に係る、静岡縣昆蟲事項の大体なり、即ち御要望に任せ、茲に記載して參考に供せんとす。

開會年月日	開期	名稱	人員	開催主名
明治三十二年八月二十三日	七日間	昆蟲學講習會	八一	静岡縣濱名郡農會
同 十二月二十五日	五日間	同	三〇	同
同 三十三年一月四日	五日間	同	六八	同
同 八月三十日	九日間	害蟲驅除講習會	一〇三	同 縣引佐郡農會
同 三十四年二月二十一日	九日間	同	八六	同 縣濱名郡農會
同 十月六日	五日間	同	三六	同 縣安部郡大谷村農會
同 十月十二日	三日間	同	八八	同 縣磐田郡農會
同 十月十五日	三日間	同	一〇八	同
同 十月十八日	三日間	同	一二三	同
同 十月二十一日	三日間	同	一二〇	同
同 十月二十四日	三日間	同	二五〇	同
同 十月二十七日	三日間	同	五〇	同
同 三十五年三月七日	七日間	昆蟲學講習會	八六	同 縣田方郡農會
同 三月十六日	七日間	同	六八	同
同 七月二十五日	五日間	害蟲驅除講習會	一六	同 縣庵原郡農會
同 八月二十五日	七日間	同	七六	同 縣志太郡農會

同 三十六年一月十五日 昆蟲學講習會 六一 同 縣田方郡農會

同 三月二十日 五日間 同 八一 同 縣富士郡農會

右は、余が講師の鞭を執りしものにして、回数十八、會員數一千五百二十九名あり。最も磐田郡の如きは、極めて短期なるものにして、各地巡回講習に止まり。而して會員は、主もに實業者にして、或る町村の如きは、小學校教員、學校生徒をも加入せしめたることありき。右に記載したる外、各郡に於ける、昆蟲事項の既往と將來に付て、記すること左の如し。周智郡は、左の講習會及び昆蟲展覽會を開會せり。

開會年月日 開 期 名 稱 人員 主催者名

明治三十四年七月二日 五日間 昆蟲學講習會 七一 周智郡農會

同 三十五年九月二十日 五日間 同 一〇五 同

右は、名和先生が親しく教鞭を執られし處なり。尚ほ、同郡農會は、明治三十五年九月十九日より二日間、昆蟲展覽會を、森町に於て開會せり。

磐田郡は、昨三十五年八月二日、同郡教育會に於て、名和昆蟲研究所助手名和梅吉氏を聘して、昆蟲學講習會を、中泉尋常高等小學校に開會せしが、開期は七日間にして、會員は五十六名なりき。尙、明治三十五年十一月、同郡下阿多古村に於て、昆蟲學講習會を開會し、同縣濱名郡鈴木伊平氏、講師の任に當れり。開期は五日間にして、會員六十余名なりと云ふ。

志太郡は、同郡靜濱村に於て明治三十二年八月十五日より五日間、昆蟲學講習會を開會せり。會員六十八名。同郡焼津町に於て、明治三十四年四月十八日より五日間、昆蟲學講習會を開けり會員六十二名。尙ほ、昨三十五年八月十五日より五日間、同郡豊田村に於て、昆蟲學講習會を開會せり。會員五十八名にして、講師は凡て、多々良理吉氏はれに當れり。

榛原郡は、同郡農事巡回教師丸山方作氏、同郡各所に於て、農事講習會開會の際、特々農用昆蟲學を、教授せられしこと數十回なりき。

濱名郡は、昆蟲學講習會の外、郡費を以て、郡下各小學校に、昆蟲標本一箱づゝを配付せり（明治三十三年度）。

賀茂郡は、同郡農事巡回教師上遠野秀松氏より、各町村農會及び區農會に、害蟲圖の備付を見るに至

れり。又同郡三濱村に、農事講習會を開會せし際、特に昆蟲の一科を加へりと云ふ。尙ほ、静岡縣農會の事業として、明治三十四年度に於て、縣下各高等小學校へ、昆蟲標本一箱づゝを配付せり。又昨年縣農會開催の農事講習會は、特々農作物害蟲論を講習したるが如き事項は、其大体なり。前已に述ぶるは、既往の事にして、將來としては、縣下駿東、富士、田方の三郡農會は、三十六年度より於て、昆蟲學講習會開催の運びに至り、又榛原郡は有志により、昆蟲展覽會を開會せんとの議ありと聞く。補給、富士郡農會は、三十三、三十四年度に於て、二名づゝ撰抜して、全國害蟲驅除講習會へ入會せしめたること、二回ありたり。因に記す、本縣人にして、全國害蟲驅除講習會を修了したるもの二十九名なりと云ふ。

◎愛知縣寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會彙報 愛知縣 田中周平

去る五月三日より一週間開會の、寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會は、非常の盛況にて、會期中の觀覽人は總計七千七百十人ニ達し、内團體即ち學校教員及生徒等の觀覽者は五千四百十三人、普通人員二千二百九十七人の多數にて、一日平均千百餘人ニ及びたり。會場の寶飯郡會議事堂を以て之に當て、六室に分ち、第一室には教授用掛圖に作りたる、昆蟲の放大圖等を以て充たされたり。此は悉皆小學校教員の製作に係るもの、第二室にも亦教授用掛圖ありと雖も、多くは器械類に屬するものにして、即ち益蟲捕獲器、螟蟲驅除器、蜜蜂飼育箱、誘蛾燈、船形塵浮子捕殺器、浮塵子捕殺器、半圓形捕蟲器、大形捕蟲器噴霧器、水棲昆蟲飼育器(飼育中)、其他昆蟲に關する書籍類、名和昆蟲研究所出品の參考品等なり。第三室は陳列せしものは、即ち本會の主眼あるものにして、總ての昆蟲標本、小學校生徒の手に成れる實物寫生圖、昆蟲刺繡、及裝飾用標本の美麗なる扁額等にして、此等の部類別を示せば、分類標本四十三點百六十二個蟲數一萬百三十頭、害蟲標本廿九點五十六個蟲數三千六百六十四頭、益蟲標本廿三點廿九個蟲數一千四百三十四頭、教育用標本二十點五十八個蟲數二千五百頭、裝飾用標本十七點二十五個、生徒圖書二百五十九點、參考品二十二點百四十二個なり。第四室は役員事務室、第五室は來賓休憩所、第六室は審査室に充てたり。審査長には、名和先生を戴き、審査員十名にして、一同拮据黽勉、公平に終りを告げ、七日褒賞授與式を舉行したり。抑も今回の展覽會は、單に標本の精粗を判別し、圖書の優劣を比較するのみならずして、實に斯學思想を養成し、將來の郡教育の發展に於て、大に益する所尠少なかり。

らざりき、今其受賞の校名を擧ぐれば左の如し。

一受賞 ○分類標本 赤坂高等小學校、○害蟲標本 神ノ郷尋常小學校、○益蟲標本 千兩尋常小學校、

二受賞 ○分類標本 萩尋常小學校、赤坂尋常小學校、長澤尋常高等小學校、豊川尋常小學校、國府高等小學校、○害蟲標本 赤坂高等小學校、赤坂尋常小學校、○益蟲標本 桑富第一尋常小學校、赤坂高等小學校、牛久保高等小學校、御油尋常高等小學校、○教育用標本 江島尋常小學校、一ノ宮高等小學校、○裝飾用標本 御津尋常高等小學校

三受賞 ○分類標本 桑富第一尋常小學校、伊奈高等小學校、御津尋常高等小學校、千兩尋常小學校、一ノ宮高等小學校、國府第二尋常小學校、鹿背尋常高等小學校、埴津尋常高等小學校、佐脇尋常高等小學校、○害蟲標本 牛久保高等小學校、御津尋常高等小學校、御油尋常高等小學校、○益蟲標本 市田尋常小學校、萩尋常小學校、御油尋常高等小學校、三藏子尋常小學校、○教育用標本 豊秋第二尋常小學校、御油尋常高等小學校、埴津尋常高等小學校、三谷尋常高等小學校、○裝飾用標本 御津尋常高等小學校、桑富第一尋常小學校、佐脇尋常高等小學校、

四受賞 ○分類標本 前芝尋常小學校、市田尋常小學校、國府第一尋常小學校、桑富第三尋常小學校、八幡尋常小學校、麻生田尋常小學校、白鳥尋常小學校、神ノ郷尋常小學校、○害蟲標本 一ノ宮高等小學校、國府高等小學校、三藏子尋常小學校、桑富第一尋常小學校、千兩尋常小學校、市田尋常小學校、鹿背尋常高等小學校、○益蟲標本 一ノ宮高等小學校、鹿背尋常高等小學校、赤坂尋常小學校、○教育用標本 國府第一尋常小學校、蒲郡高等小學校、蒲郡尋常小學校、西蒲尋常高等小學校、○裝飾用標本 形原尋常高等小學校、白鳥尋常小學校、蒲郡尋常小學校、伊奈高等小學校、

右の外賞與に與らざし十八校、並に參考品を出品せし十七校に紀念狀を與へたり。

◎三重縣阿山郡新居村の蝶報

第八回全國害蟲 驅除講習修業生 三重縣 西岡嘉十郎

三重縣阿山郡新居村に於て、昨年迄に予が採收せし、蝶類を世に紹介せんとす。尙採收を重ねれば、

多種類を獲らるゝ事と信ずれば、本年採收の上、更ふゝ報する事あるべし。

採蝶科 一文字セセリ、ハナセセリ、キマダラセセリ、チヤマダラセセリ、

小灰蝶科 ベニシジミ、シジミテフ、ミドリシジミ、ウラナミシジミ、

天狗蝶科 テンゲテフ、

蛇目蝶科 シヤノメテフ、ガガシヤノメテフ、ウスイロコシヤノメ、ヒメシヤノメテフ、ヒカゲテフ、キマダラテフ、

蛭蝶科 ヒオドシテフ、コムラサキ、イチモシテフ、メスグロヘウモンテフ、ウラギンヘウモンテフ、アカタテハ、ヒメアカタ

粉蝶科
 テハ、キタテハ、ルリタテハ、コムシガテフ、ゴマダラテフ、
 モンシロテフ、モンキテフ、キテフ、ツマキテフ、スザグロテフ、
 鳳蝶科
 アゲハノテフ、キアゲハ、カラスバアゲハ、クロアゲハ、シヤカウアゲハ、ヤマシヨロウ、アナスガアゲハ、

◎明治三十六年度兵庫縣揖保郡農會懸賞螟卵採集方法

兵庫縣 岩田熊三郎

揖保郡農會に於て、昨三十五年懸賞螟卵採集を行ひし結果は、曾て昆蟲世界に記載されしが、本年は昨年と方法を少しく變更し、左の規程により施行することとなせり。

懸賞螟卵採集方法 本會は左の方法により、懸賞螟卵採集をなす。

一、採集したる螟卵は、第一回六月十五日、第二回六月二十五日、第三回七月十日迄に左の方法により、其村害蟲驅除豫防委員に差出すべし。

(イ)卵塊附着の苗葉は、卵塊を中央になし、葉長一寸位に切断し、十葉を一括さなし、更に十括を一束さなすべし。

(ロ)卵塊は状態等の如きものに入れ、其數及住所氏名を明瞭に記載すべし。但用紙は成るべく反古及色紙を避け鉛筆使用はなさせらるべし。

二、害蟲驅除豫防委員、前項の螟卵を受理したるときは、員數を點檢し、其翌日町村農會長に送附し、町村農會長は更に是れを點檢し、左記様式(書式畧す)に従ひ、二日以内に本會事務所に送附すべし。

三、本會は各町村農會長より送附したる螟卵を統計し、其多寡により、左の賞與をなす。

(イ)一般採集者に對しては、豫算額を採集總卵塊に割當て、金員を賞與す。

(ロ)一般採集者中、其數尤も多きものより百名を撰出し、左記の賞品を授與す。

一等賞 緞二挺(一名)、二等賞 緞一挺(五名)、三等賞 丁能緞一挺(十四名)、四等賞 緞一挺(八十名)

四、町村農會員にあらざるものは、賞與を受くることを得ず。

◎昆蟲に關する葉書通信 (第三十二報)

(一七七)栗毛蟲の繭(岩手縣、晴山立郎) 別に送附せし、三陸新聞第三面記事(栗毛蟲の繭百匁十錢より十五錢)、甚だ舊聞に屬すれども、我東北凶荒地には、本年非常の影響を及ぼし、昨年(一七六)の害蟲は、本

年の益蟲たるの考を抱き、利害得失を顧みず、却て蕃殖を希ふものさへあるに至れり(五月八日附)。

(二七八)ギフテフの採集(山形縣、南波克治) 昨春本縣北村山郡楯岡町宇湯澤及大倉村に於て、ギフテフ二頭採集せしが、本年は未だ採集せず(五月九日附)。

● 蠲者云ふ、南波氏は時期を逸したるには非らずや、尙昨年採集に係るものは或は蠲種にはあらざるか、望むらくは一頭贈られん事を

(二七九)竹節蟲科の分布通信二件(三重縣、白木金一郎) 昆蟲世界第六十七號に於て、竹節蟲科に就

ての記事中産地云々、小生は去る明治三十四年八月四日、三重縣桑名郡大山田村大字汰上通行の際、路傍叢間に於て、第一は屬するもの即ちナ、フシムシを採集せり(五月十日附)。

(山口縣、中井猛之進)四月十五日發行の昆蟲世界に於て、竹節蟲科に就ての記事中、第四のトビナ、フシムシは、一昨年八月小生が山口町上宇野令村字系米兄弟山麓雜木林中にて採集せしが、其果して何を食し居るかはもとより未知にして、採集當時之が性質を知らざりし爲、觸角、足部等皆脱せし故(最も充分發達せしものよはありざりき)、止むなく放棄せしが、全体綠色ありし所等より察するに、全く第四のものに符合する様考へらる。兎に角同科のものが、當地に産する丈は確なり(五月十一日附)。

(一八〇)ミカドアゲハテフの採集(於採集旅行先、福岡縣、高千穂宜鷹) 余は今より一時間前に、

豊前國田川郡彦山村字長谷に於て、ミカドアゲハテフ(Papilio mikado)の雄一頭採集せり。貴方の分布表に記入さるゝの榮を喜ぶ(五月廿一日附)。

(一八一)昆蟲雜信(鳥取縣、蓮佛万吉) 五月十七日螟蟲羽化せるもの四頭、蛹化せるもの二十一、幼

蟲四十二頭、浮塵子は四齡、乃至成蟲等、數種採集せり。今二十一日より矢崎、橋本兩技師は、縣下各

警察署へ出張、巡查を招集して、害蟲驅除豫防に關する講習を開始せり。本年より農事試験場は、害蟲

の發生經過、及驅除豫防、并に驅除濟等に係る試験施行につき、漸く此頃諸器械諸準備整頓せるが、此

等試験方法の、何れ貴所の指揮を仰がざるを得ず。本春、試験圃地の蔬菜は、夜盜蟲及蚜蟲等の爲、殆んど不結果了れり(五月廿一日附)。

(一八二)桑のシンムシ及シンクヒムシ(於飛驒國古川町出張先、松尾國松) シンムシ被害は、昨年督

勵の結果、益田郡は昨年比し、約三分の一、大野郡、吉城郡も、大よ少なく、好成績につき、此機に乗

下、各部とも大に驅除督勵中なり。尙、古川町小字藤代の桑園二十餘町歩、シンクヒムシ發生し、

被害少のらざるより、是亦切採り驅除施行中なり(五月廿五日附)。

(一八三)博覽會の陳列に就て(千葉縣、大竹義道)

博覽會陳列ありて、殊に貴所始め、貴縣下出品

の昆蟲標本が、陳列室の甚だ狹隘なるより、而も光線の不明なる邊に高く掲げあるが故、小生等は親しく就て目撃するを得ざるは、實に遺憾の至りなりき。其他の府縣にありても又然り、折角研究と、丹精を凝して製作せられし標本が、單に博覽會場の裝飾に要せしむでに過ぎずして、余輩の如き、斯學上參考にもと、勇み喜んで、遙々會場を臨みしも、斯の如き陳列方は、實以て失望せり(五月廿六日附)

(一八四)稻蠶の採卵(岐阜縣揖斐郡鸞學校)

本校下は於ける稻蠶は、放校後、兒童をして年々數斗の

卵塊を採集せしめたる結果、大に減少し、殆んど全滅に歸したるを以て、農家一般は非常喜び、是等の事實を見ても、驅除の必要を感じ居れり。尙本年も之を採集せしめつゝあるに、足健なる兒童は、鷹の如き眼を以て、他部内を迄侵入して之を拾集し、今や五、六升に達せり。螟蟲の採卵に於ては、時期尙二、三日早きも、各兒童は、發生せばやと待ち居れり(六月三日附)。



◎ 螻蛄に就て質問

愛知縣丹羽郡 味勝 正義

螻蛄は害蟲にして、甚だ惡むべきものと存じ候、右に付佐々木忠次郎君著に係る、日本農作物害蟲篇第四百七十八頁に、第十五有用植物の害蟲とし、直翅目蟋蟀族にして、其豫防驅除法に至るまで、詳細明記しありしにも關はず、昆蟲世界第六十一號學說欄内に於て、同氏の說に害蟲類を食とする昆蟲類の重なるものに、第一螻蛄と之れ有り、右を益蟲とす、とあるを以て、淺學なる小生の如きは、大に迷を生じ、螻蛄の害蟲と信じ居りしもの、一變して益蟲となるは、研究上如此なりしもの哉、又は或る場合に於ては、益蟲となるものと承知して可然哉、且螻蛄は、如何なる場合、何々の害蟲を捕食するものなり哉、御教示相成度候。

右に對する答

理學博士 佐々木忠次郎

頃日、味勝君の、名和昆蟲研究所に寄せられたる、質問書に對し、同所は、余に其答辨を望まれたり、依て左に卑見を陳べんとす。扱て螻蛄の、拙著の農作物害蟲篇には、害蟲として論じ、昆蟲世界第六十一號には、益蟲の一種として辨明せり。貴説の如く螻蛄は其棲息する位置に依り害蟲ともなり益蟲ともなるものなり、特に農作物其他苗床等よりは常に有害なるも森林其他の場所よりは、幼蟲類を食する益蟲あり、故に單に益蟲なりとするは穩當ならず、故に昆蟲世界第六十一號の記事には、益蟲の一種となしたるも場合に依りては患害尠なからざるものと見做されんことを乞ふ。



雑報

●岐阜縣農會の諮問答申案 岐阜縣害蟲驅除豫防規則第一條の害蟲種類は、改正を要せざるや否やに就き、岐阜縣知事よりの諮問に對する、縣農會の答申左の如し。

○害蟲驅除豫防規則第一條に、追加を要する害蟲種類。

- 一、トビイロウシカ (浮塵子の一種) 一、イ子ノガメムシ (椿象の一種)
- 一、ドロハムシ (葉蟲の一種) 一、イナゲ (稻蠶の一種)
- 一、トゲシヤクトリムシ(尺蠖の一種) 一、キンケムシ (蛄蠶の一種)
- 一、クハツラミ (木虱の一種) 一、サルハムシ (葉蟲の一種)
- 一、マメコガ子ムシ (金龜子の一種) 一、ヒメコガ子ムシ (金龜子の一種)
- 一、ウメケムシ (蛄蠶の一種) 一、イラムシ (蠟蟲の一種)
- 一、ホシハマキムシ (葉捲蟲の一種) 一、イラムシ (蠟蟲の一種)
- 一、イ子ノザウムシ (象鼻蟲の一種)
- 一、トラフカミキリムシ(天牛の一種)
- 一、クハケムシ (蛄蠶の一種)
- 一、ウリハムシ (葉蟲の一種)
- 一、アブラムシ (蚜蟲の一種)
- 一、ナシザウムシ (象鼻蟲の一種)

以上の害蟲は、規則第一條に追加すべきものと認む。而して其驅除法に就き、本會の調査したるもの左の如し。

- 一、トビイロウシカ(稻)ツマクロヨコバヒに同じ。
- 一、イ子ノガメムシ(稻)咽喉付圓形捕蟲器、又は廣口の器に掃ひ落して捕殺すべし。
- 一、イ子ノザウムシ(稻)圓形捕蟲器等の中に掃ひ落して捕殺すべし。筒等の廢物を利用して、稻株間に散在し置き、其集まるを依

て捕殺すべし。

一、ドロハムシ(稻)捕蟲器を以て成蟲を捕殺すべし、又田面に成るべく水を張り、少量の石油を注ぎて拂ひ落し、之を集めて殺すべし。幼蟲は朝露の消へざる前に、該蟲の群棲せる苗を、藁箒を以て拂へば、附着するを以て之を殺すべし。

二、イナゴ(稻)五、六月頃、田面に灌水の時を以て、卵塊を採集し、肥料瓶に投入すべし。捕蟲器を以て幼蟲並に成蟲を捕殺すべし。

一、トラフカミキリムシ(桑)クハカミキリムシに同じ。

一、トゲシヤクトリムシ(桑)卵塊を搜索して摘採すべし。幼蟲並に成蟲を捕殺すべし。冬期根部の土を掘りて、其蛹を殺すべし。

一、キンケムシ(桑)葉裏に産附せる卵塊、及び樹間等にある繭を摘採すべし。幼蟲を枝葉と共に摘採して、肥料瓶に投入すべし。

一、クハケムシ(桑)葉裏にある卵塊を摘採すべし。秋季群集せる幼蟲を枝葉と共に摘採し、肥料瓶に投入すべし。翌春幼蟲並に成蟲を捕殺すべし。

一、クハヅラミ(桑)幼蟲の時代に於て、枝葉と共に摘採し、肥料瓶に投入すべし。

一、サルハムシ(蔬菜類)捕蟲器を以て成蟲を捕殺すべし。

一、ウリハムシ(瓜類)捕蟲器を以て、成蟲を捕殺すべし。冬期被害地に接近せる山林原野若くは堤防等の雜草、及び石下に潜伏せる成蟲を捕殺すべし。

一、マメコガチムシ(大豆)。

一、ロメコガチムシ(同)共に捕蟲器又は廣口の器中に、成蟲を掃ひ落し、捕殺すべし。

一、アアラムシ(紫雲英、蔬菜類、果樹類)稀薄なる石油乳劑を散布すべし。發生の初期未だ蔓延せざる際、注意して其植物と共に摘採して、肥料瓶に投入すべし。

一、ウメケムシ(果樹)冬期卵塊を摘採すべし。卵子孵化の際、未だ蔓延せざる時に於て、幼蟲を燒殺するか、又は掃ひ落して捕殺すべし。繭を搜索して潰殺すべし。

一、イラムシ(果樹)冬期繭を摘採して、其中の幼蟲を潰殺すべし。

一、ナシザウムシ(果樹)被害果は直に取り去り、肥料瓶に投入すべし。

一、ホシハマキムシ(果樹)幼蟲を葉と共に取り去り、肥料瓶に投入すべし。

●稻作害虫驅除心得

岐阜縣揖斐郡に於ける、本年度の害虫驅除は、例の如く小學兒童を利用して之を行ふ由なるが、尙左に掲ぐる如き、稻作害虫驅除心得を數千枚印刷し、郡下一般農家に配附し

たりといふ、注意周到といふべし。

本郡に發生すべき重なる稻作害虫は、イネノズキムシ、ウンカ、イチモジハナセセリ、イネノアラムシ

イナゴ、イネノガメキシ、イネノザウムシ、キリウジカガンボ等なりとす、故に是等の害虫に就き驅除の方法を左に示す。

螟蟲卵塊の圖



イネノズキムシ、苗の二、三寸伸びたる頃より、七月中旬頃に亘りて、卵を稻葉に産附す。此卵は初め淡黄色なれども、漸次黒色に變ず、而して産卵後約一週間にて孵化するものあれば、苗代田にては三日、本田にては五日毎に必ず採卵すべし。

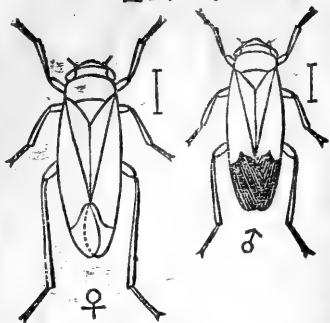
尙苗代田に於て捕蟲網を以て其蛾を掬ひ採るべし。前記の方法によりて見遁したるイネノズキムシは、二番除草の頃、蝕入したる稻莖を、極めて下部より、圖の如き器具を以て切り取り、適宜把束し、槌にて莖中の幼蟲を打ち殺すべし。

新發明莖切器の圖



尙前期の方法より、見残りたるイネノズキムシは、羽化して蛾となり、卵を稻葉に産附す。此卵の孵化して蝕入したる時は、其稻は白穂となるなり。而して其の初は一莖中に二三十頭乃至七八十頭ありと雖ども、漸次他の莖に移るものあれば、此時直ち切り取り、前記の方法によりて潰殺すべし。

圖のカンウ



ウンカ、此蟲の種類は數多あり、一年四五回發生するを以て、其繁殖力極めて強し、幼蟲、成蟲共に稻の液汁を吸收するを以て、稻は漸次黄色に變ぜ、特に甚しき時は收穫皆無なる事往々あり。之を驅除するには、苗代田に於て、捕蟲網を以て、日々掬ひ採るを最もよしとす。本田に於ては捕蟲器を施用して驅除すべしと雖ども、又石油を一段歩約壹升五合の割合に注油して、驅除することを得。但し此の場合には、特に注意を要す。

イチモジハナセリ、幼蟲をハマクリムシと云ひ、又俗にカジムシと稱す常は稻葉を綴りて其中に潜み、時々出で、食害す。之を驅除するには、

カジムシ潰殺器



圖に示すが如く、細き棒に、竹管を貫きたるもの二個を造り、稻を挟みて扱き上げて潰殺すべし。尙は發生の初期共同驅除を行ふ時は、最も効ありとす。又其の蝶即ち

イチモジハナセ、リを捕殺すべし。

イネノアラムシ、幼蟲は常に稻葉を食害す。一年三回の發生にして、苗代田時期の害最も甚し。之を驅除するには、苗代田に於て、捕蟲網を以て、幼蟲並に其蛾を掬ひ採るべし。又苗を採りたる後、水面に浮びたる、圖の如き繭を集めて肥料瓶に投入すべし。

イチノアテムシの繭



投入すべし。

イナゴ、人の能く知る所の害蟲にして、特に稻苗の嫩葉を食害す。之を驅除するは、五、六月頃田面を灌水の時を以て、水に浮び、風の爲に畦畔の周圍に集まりたる卵塊を採集するを最も効ありとす。又秋期其成

蟲を採集し、肥料又は家禽、養魚の飼料、其他儀助養等になす時は、大に利益あり。

イナゴの圖

イネノガメムシ、此蟲は出穂の際最も加害し、其汁液を吸収して糞米となす。之を驅除するは、咽喉付圓形捕蟲器、又は石油少許を入れたる廣口の器中へ掃ひ落すべし。

イネノサウムシ、此蟲は象鼻蟲の一種にして、常に稻の汁液を吸収する害蟲なり。之を驅除するに、圓形捕蟲器等に掃ひ落して捕殺すべし。又笥等の廢物を利用して稻株間に散在し置き、其集まるを俟ちて之を捕殺すべし。



キリウジカガンボ、此幼蟲は最も多く苗代田に發生して、大害を與ふることあり。之を驅除するには羽化の際成蟲即ちキリウジカガンボを捕殺すべし。又水を湛へて、幼蟲の畦畔に集まるを俟ち、田面の周圍に小溝を作り置く時は、其浸害を免れ得べし。

●三十六年度の害蟲驅除豫防費 農商務省の調べ據れば、明治三十六年度地方稅勸業費豫算決定額中、害蟲驅除豫防等に關する費額は左の如し、

京都府

害蟲驅除補助

一〇〇

大阪府

害蟲驅除豫防補助

一二、五一六

石川縣

害蟲驅除豫防補助

一〇〇

富山縣

害蟲驅除豫防

一六〇

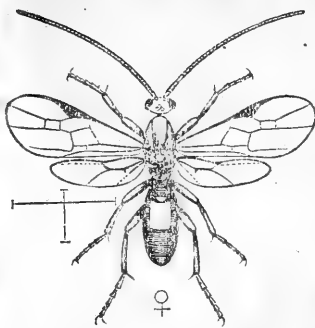
茨城縣	害蟲驅除豫防	二、五二〇	岡山縣	害蟲驅除豫防獎勵	三、〇〇〇
栃木縣	害蟲驅除	一〇	香川縣	害蟲驅除豫防	一
三重縣	害蟲驅除豫防	六〇〇	愛媛縣	害蟲驅除豫防	二、八一九
山梨縣	害蟲驅除豫防	一、〇〇〇	大分縣	害蟲驅除豫防	二、二七四
滋賀縣	害蟲驅除豫防	一〇〇	佐賀縣	害蟲驅除	四、四一〇
岐阜縣	害蟲調査 同豫防補助	一、九二一 五〇〇	熊本縣	害蟲驅除	四、三四〇
福島縣	害蟲驅除	五〇	宮崎縣	害蟲驅除豫防	五二五
			計 二府十六縣		三六、九四六

●害蟲標本出品受賞者 去四月十五日褒賞授與式を舉行されたる大阪府農會主催病蟲害展覽會の、第二部蟲害に關する出品點數は二百四十一點、其人員五十八人の由なりしが、今受賞者の氏名を掲ぐれば左の如し。

- 一等賞金牌 螟蟲驅除成績 南河内郡農會、同 北河内郡農會
 - 二等賞銀牌 貝殼標本 服部松之丞、昆蟲標本 藤戸作治郎、害蟲標本 由比昌太郎、
 - 三等賞銅牌 昆蟲標本 青柳才次郎、同 島津製作所、同 井上藤太郎、同 揖斐郡昆蟲學會、同 高知縣農學校、捕蟲網 市村 鹿三、昆蟲正圖 東成郡農會、
 - 四等賞々狀 害蟲數へ歌 門脇嘉治馬、莖切鎌 吉野寅之助、除草兼注油器 堀内市松、誘蛾燈 堀江專治、輕便注油器 松浪定吉
 - 注油器 川崎爲吉、莖切鎌 千賀鐵吉、昆蟲標本 福井克雄、改良苗代成績 吹田村農會、昆蟲標本 豐福正、同 泉北郡農會、
- 姫蜂科に於ける一新屬 先年當昆蟲研究所より、膜翅目の専門家、アスミード氏は送りたる寄生蜂中に、新屬のありしとて、今回同氏より通信ありたり。そは襟の蝸蝓に寄生するものにして、圖に示す如き小蜂なり、氏は之にナワイア、ヤポニカと命名せりと云ふ。尙氏の著に係る印刷物を贈られたるが、悉く蜂に關するもの、みよして、之を積み上げれば高さ五六寸あり、實に感服の外なし、今同氏の書狀を譯載すれば左の如し。

久しく昆蟲世界を御送附下され候御厚意を謝し奉り候、一部分まは申せ、透逸なる圖につきて感佩仕り候、エコノミック、アツツセーション(經濟會)の最近の會の節、小生は貴下を其會員に推薦仕り候處、正しく公認せられ申候、米國にて小生共は、日本にて貴下

新屬寄生蜂の一の種



が昆蟲學の爲に盡され候、有益なる事業を承認仕り候、而して永久繼續せられん事を希望仕候、又我々の關係が、理學上又は人性的上に、有益の結果を生ずべき事を希望仕候、今日小生は、貴下に別刷の一部を郵送仕り候、重に分類的のものに候へども、貴下の研究所に御用立下され度候、小生は只今日本の膜翅類の、完全なる記録を、準備致せる事を御喜び下され度候、そは重に貴下の採集品及千八百九十三年シカゴ博覽會後、ナシヨナル、ミウゼアムに送られたる、箕作博士の寄贈品又ケール、ルミミス氏の日本に於ける貴重なる採集品に基づき申候、此著述は最も完全にして、日本にて知られたる總ての膜翅類の記載を含有仕候、其種は四乃至五百種の中に御座候、新種は重に小膜翅類にして、卵蜂科、フシ蜂科、小バチ科、及びヒメバチ科の中に御座候、ヒメバチ科中のバウキニア科 (Tribe Braconini) 中に最も面白き新屬を發見仕り候、それにつき、小生は貴下の名譽の爲めに、ナライア (Nawaya) 屬を命じ候、尙其全き名を擧ぐれば ナライア、ツヤキニカ、アスミード (Nawaya japonica, Ashmeed) に御座候、それは四十七のレッテルあるものに御座候、昨年ハーワード氏に送られたる、標本の名稱目錄は、近日貴下に送附せらるべく候、貴下若し他の膜翅類にして、未だ名稱を附せざるもの御所持に候はば、番號を附して御送附下され度候、近日結果を告ぐべき、日本膜翅類に於ける小生の事業として、直に名稱を報すべく候、小生は此夏出版すべく希望仕候、若し御望も候はば、交換さきて名稱を附せられたる標本を御送り仕るべく候。

アスミード拜

● 虫賣 讀賣新聞に、渡世のいろくを詳記せらるゝ内、左の虫賣の一項あれば茲に載す。但し河鹿の記載ありしも、是は昆蟲にあらざれば省き置きぬ。

△問屋 虫賣の間屋は、淺草區上平右衛門町の須山、下谷區徒町一丁目山崎の二軒にて、問屋は諸蟲を何處より仕入るか云ふに其多くは四谷信濃町十一番地川澄武吉が製養の鈴蟲松蟲を仕入するなり。又自然發生の物も採集して之を賣れど、自然物の出づる頃には蟲屋の販路が未だなるより、多くは人造物を賣るを例す。自然物の鈴蟲松蟲等は、東京附近なれば、八玉子附近の山々より採收す云ふ。

△取引 凡て現金にして、取引の繁忙なるは六月下旬より盆前後なり。利益は蟲に依りて異なれど、胡瓜南瓜等の餌に金を費すを以て、大約五六分位に止まり、蟲の死する時は損失と知るべく、又た鳴聲の善惡により御直に高下を生ずれば、豫而鳴聲を聞き分け上中下と別ち置き、さて小賣へ卸すなり。籠も上等物より下等物まで一切備へありて小賣へ卸す例なるが、鈴蟲松蟲等の籠は上等八九圓以下二三錢まであり、螢籠も一錢以上四五十錢までありて、問屋の利益は平均約一割餘あり。併して營業期間に僅が三ヶ月位なれ

ば其餘は例の片商賣する事と知るべし。

△小賣商　云へば行商する者が大部分を占め、店賣するは僅少にて、地方より入来る行商と市中の流し賣とを合せば人員五六百人あり、房總邊の漁師も夏季は此行商となるもの尠からず。其荷拵には二種ありて、一を高荷と云ひ一を五呂荷と云ふ。高荷となれば諸附屬品を合して三四十圓を要せど、五呂荷なれば十四五圓以下二三圓にても出来、高荷は仕入金も蟲と籠とを合せて五十圓より百圓以上も要す、五呂荷は四五圓にて仕入らるゝなり。利益は籠三割餘、蟲も亦同じ位となり、毎年行商に出る者には得意ありて、紳士等の宅へ賣れば流賣よりは高價にて、利益も五割餘ありと云ふ。但其仕入は皆現金なる事論なく、賣口よきは松蟲、鈴蟲、螢、蟋蟀、響蟲(俗にガチャク)等。さて能く捌く行商なれば日に五、六圓の賣揚あれど、雨天と風の吹く時は商賣に出られず、結局一ヶ月間にて行商に出るは半ヶ月と見れば大差なく、平均三圓も賣る者は上等の部なり。

●キリウジの發生　本年は、各縣何處も該蟲の發生せざるなく、其損害も亦尠少からざりしが如し。而して去五月中官報に於て發生報告の見えたりしは、左の各所なりき。

埼玉縣南埼玉郡　北葛飾郡　北埼玉郡　熊本縣飽託郡　宇土郡　愛知縣愛知郡　丹羽郡　海東郡　三重縣桑名郡　靜岡縣濱名郡　磐田郡等

●第十六回全國害蟲驅除講習會の開期　豫て前號に豫報し置きし同會は、愈々來る八月一日より十四日迄、二週間と決定せり、就ては今回は夏期休暇中にもあれば、既ニ諸方より續々申込ある

により、假令申込期限は七月二十日なりと雖も、會場の設備等なき爲、定員に滿つる時は、謝絶さるゝ事あるべければ、志望者は此際至急申込まるべし。尙詳細は廣告欄にあれば就て見られよ。

●ボワース氏の來所　米人スポツツウード、デー、ボワース氏外二名は、去一日當昆蟲研究所

に來り、名和所長に面談の後、昆蟲陳列館を一覽せられたり。同氏は、嚮に北米シカゴ、並に佛國巴里の萬國博覽會に於ける、當所出品の昆蟲標本を親しく熟覽せられたる由なるが、今回の渡航につき、是非一度訪はんものをと、立寄られたりといふ。

●日本産泡吹蟲科出版　札幌農學校紀要第二卷第一號に於て、松村松年氏は、邦産泡吹蟲科八屬二十四種を、獨文にて記載せられたるが、其中十四種は新種ニ屬し、尙靜岡縣岡田忠男氏より寄贈の一種は新屬ありといふ。

●松村氏の旅行　松村松年氏は、浮塵子調査の爲、本月八日頃北海道を出發、琉球地方へ旅行さるゝ由、通信に見えたり。

●害蟲視察員の派遣 昨今、各地より續々農商務省へ宛て、害蟲發生の報告到るを以て、不日本省及び農事試験場の技師を派遣し、實況を視察せしむる筈なりと。

●岐阜縣昆蟲學會記事 同會第五十四回例會は、本月六日午後一時より、當昆蟲研究所内に於て開會せり。當日は農事繁忙の時期なれば、郡部よりの出席者は殆どなかりし爲、僅十六七名の小數なれども、皆熱心家のみにして、中々有益なる談話もありたり。即ち例に據り、名和副會頭の開會の辭に次て第一席小森省作氏の春日谷地方昆蟲採集旅行談、第二席大橋由太郎氏の糸引葉捲蟲の調査に就て、第三席中井藤助氏の鳳蝶に就ての實驗談、第四席渡邊樵四平氏の螟蟲調査に就て、第五席大垣中學校教諭森宇多司氏の蟲媒花植物に就ての實驗談、第六席名和靖氏の寶飯郡昆蟲展覽會に就ての講話等ありしが、皆多くは實物を以て説明し、熱心に研究の後、午后五時閉會を告げたり。

●水曜昆蟲會 當研究所員の催しに係る水曜昆蟲會は、前號報告後、例より、毎水曜日午後七時より、當昆蟲研究所内に開會せしが、其講演者と談話の重なるものを擧ぐれば左の如し。

小森省作氏の小灰蝶科の分類、春日谷昆蟲採集談、弄蝶科の分類に就て、高橋喜男氏の紋白蝶の飼育談、柳ルリハムシの飼育談、柳橋昇氏のアカコカモドキに就て、蚊の話、螢の幼蟲及蛹の標本製作法等、大橋由太郎氏の螢の誤認、ヒラタアブの食蟲數、中井藤助氏の岐阜蝶の分布、飛驒地方の昆蟲方言、飛驒地方の迷信及螢歌、鳳蝶幼蟲の蛹化準備に就て、渡邊樵四平氏の甲蟲標本製作法、杉の害蟲に就て、螟蟲調査談、可見郡地方昆蟲採集談、名和愛吉氏の螢に就て、江州地方採集談、ホシハマキムシ採集談、ウヤコウアゲハ蝶の飼育談、森宗太郎氏の蚜蟲に就て、具殼蟲と氣候との關係、エンドノザウムシに就て、蚜蟲の繁殖力等、石田和三郎氏の蚜蟲驅除試驗成績談、夜中採集談、晝間精密採集談等なりしが、何れも皆實驗談にて、質問應答の間に、知らずく興味と利益を得普通の昆蟲談とは大に趣を異にし、時として時鐘十二を耳にして閉會するこもありたりき。

●昆蟲標本陳列館の參觀人 昨五月中に、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は、總計三千五百十九人にして、其内最も多かりしは、二十四日に於ける二百五十五人にして、最も

少なかりしは、三十日よ於ける二十三人にて、毎日平均百三十人弱に當り。其重なる人々は、千葉縣伯爵堀田正倫氏は家令及び同家の農事試験場主任を從へ、其他米人スミス氏を始め、各府縣の實業家、勸業當局者、教育家等ありと。

◎新案教育用昆蟲標本 壹組 拾貳箱

- 一、分類標本 壹箱
- 一、自然淘汰標本 五箱

○保護色○擬態○警戒色及誘惑色○自己防禦
○生存競争

- 一、雌雄淘汰標本 貳箱
- 一、益蟲標本 壹箱
- 一、解体標本 壹箱
- 一、昆蟲標本 壹箱

該標本は、高等小學校、高等女學校、農學校、尋常中學校等の理科と參酌して製作せしものなり。従て害蟲標本の如きも、普通農作物害蟲標本とは大に其趣きを異にせり。而して一品毎に説明を附しあれば、假令初學者と雖も、一日して昆蟲界に於ける自然の妙理を會得するを得ん。

右標本は、壹組十二箱を以て完成せりと雖も、其中、一箱ノ御望の節は、新案教育用昆蟲標本中の何々と明記ありたし。

◎箱插式昆蟲標本

甲號 價一組ニ付き金四圓
乙號 同 金參圓
丙號 同 金貳圓

一組二十枚
但遞送費は別

右は實物寫生用の昆蟲標本にして、初等教育、中等教育何れにも適用すべき好標本あり。製法堅牢なるを以て、又幼稚園或は家庭に於ける玩具ともすれば、不知不識の間に、理科思想を養成することを得るなり。

- 農作物害蟲標本 壹組 桐箱入解説附 金四圓五拾錢
- 農作物益蟲標本 壹組 桐箱入解説附 金參圓五拾錢
- 教育用昆蟲標本 壹組 桐箱入解説附 金貳拾
- 自然淘汰標本 壹組 桐箱入解説附 錢小包
- 雌雄淘汰標本 壹組 桐箱入解説附 料は參
- 氣候變形標本 壹組 拾錢 桐箱入解説附
- 昆蟲發育標本 各種 金四圓
- 山林園藝害蟲標本 各種 金四圓
- 昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年六月 名和昆蟲研究所會計部

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため、當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其僞版同様ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

- 第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ(枝尺蠖)(三版)
 - 第二。桑樹害蟲トダシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
 - 第三。稻の害蟲イ子ノズキムシ(二化生螟蟲)
 - 第四。煙草害蟲タバコノアラムシ(煙草螟蛉)
 - 第五。稻の害蟲イチモジセリ(苞蟲又葉捲蟲)
 - 第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ(姬象鼻蟲)
 - 第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲)
 - 第八。稻の害蟲イ子ノアラムシ(稻螟蟲)
 - 第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲)
 - 第十。豌豆害蟲エンドノキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
 - 第十一。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛)
 - 第十二。稻の害蟲ツマゲロヨコバヒ(稜黑橫蛾又浮塵子)
 - 第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(糸引葉捲蟲)
 - 第十三。茶樹害蟲チャケムシ(茶帖蠹)
 - 第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウカムシ(擬瓢蟲)
 - 第十六。稻と麥の害蟲キリウジカガンボ(切蛆蚊姥)
 - 第十七。桑樹害蟲キンケムシ(金條毛蟲)
 - 第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
 - 第十九。桑樹害蟲クハケムシ(桑帖蠹)
 - 第十九。稻の害蟲フタホシズキムシ(三化生螟蟲)
 - 第二十。稻の害蟲フタホシズキムシ(三化生螟蟲)(同十一月新刊)
- 定價壹枚金拾五錢 郵稅貳錢 百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵稅百枚に付貳拾錢
(昨年八月新刊)

◎害蟲圖解未刊の分豫告

- ◎稻の害蟲イナゴ(稻蠶)
- ◎稻の害蟲オホズキムシ(大螟蟲)
- ◎稻の害蟲セジロウンカ(背白浮塵子)
- ◎稻の害蟲ヒゲナガアブ(長角虻)
- ◎桑樹害蟲クハハマキ(桑葉捲蟲)
- ◎蠶の害蟲カヒコノウジバ(蠶蛆)



- ◎松樹害蟲マツケムシ(松帖蠹)
- ◎藍の害蟲アキノゾウムシ(藍象鼻蟲)
- ◎粟の害蟲アハノズキムシ(粟螟蟲)
- ◎胡麻害蟲メンガタズメ(胡麻蠅)
- ◎赤楊害蟲ハンノキケムシ(赤楊帖蠹)
- ◎櫟の害蟲カミキリムシ(天牛)

- ◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ(梅尺蠖)
- ◎稻の害蟲トビイロウンカ(褐色浮塵子)
- ◎稻の害蟲クロクサガメ(黒色椿象)
- ◎桑樹害蟲アラハマキムシ(青色葉捲蟲)
- ◎桑樹害蟲クハゴ(野蠶)
- ◎蔬菜害蟲モンシロテフ(菜の螟蛉)
- ◎蔬菜害蟲サルハムシ(菜の葉蟲)
- ◎大豆害蟲ヒメコガ子(姫金龜子)
- ◎梅樹害蟲ウメケムシ(梅帖蠹)

◎圖解の紙幅縦一尺三寸横九寸 ◎壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
 ◎百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢
●豫約代價 壹枚拾錢郵稅貳錢
 但申込の際前金添附の事
 圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但郵券代用壹割増の事

- ◎梨樹害蟲ナシゾウムシ(象鼻蟲)
- ◎梨樹害蟲ホシハマキ(星葉捲蟲)
- ◎果樹害蟲イラムシ(刺蟲)
- ◎藍の害蟲アキノズキムシ(藍の螟蟲)
- ◎粟の害蟲アハノヨトウムシ(粟蠶)
- ◎里芋害蟲セスチズメ(烏蠅)
- ◎桐樹害蟲シモフリスズメ(桐蠅)
- ◎果樹害蟲ホシカミキリ(白斑天牛)
- ◎果樹害蟲ドウガ子ブンブン(金龜子)

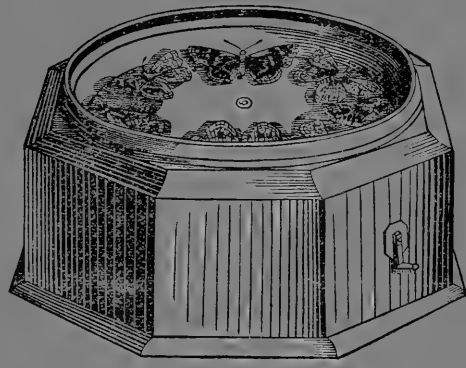
發行所

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

昆蟲廻轉器頒與廣告

この昆蟲廻轉器は、昆蟲の翅色と光線の關係を示さんが爲め、數年前考案せしものなりしも、適當の製作者に乏しかりしより、弘く頒與するに至らざりしが、今回特別調製昆蟲の依頼を受、けし序を以て、拾餘個を製作し、世の希望者に分たんとす。雌雄洵汰の原理を説き、天地自然の妙用を知らしめんと欲せば、少くも此種の備へ無かる可からざるべし。一器の價は、金六圓とす、別に送費を要す。



岐阜市京町 名和昆蟲研究所

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版
蔷薇の 昆蟲世界 全

第一行時
日本昆蟲分科表 全一冊
增補再版
定價(郵稅共)金貳拾八錢(同上)

第二行時
通俗昆蟲集覽 第一輯再版
(説明書附)
定價(郵稅共)金貳拾貳錢(同上)

第三行時
貝殼蟲圖說 全二冊
(版再)
定價(郵稅共)金參拾七錢(同上)

動物學雜誌 (第十五卷) 定價金貳拾錢
(第七十四號)

本邦産サンゴ岸上録吉(雜録) ●ヒキガヘルの毒 ●勢州桑名白魚調査に就て ●鳩の説 ●動物雜觀(第五) ●播磨産葉蜂報知 ●顔面神經は果して單純運動性なるか ●神經の傳達作用に關する研究 ●パクテリアの光を發する状態(雜報) ●池田大野兩學士 ●動物學臨海實習會 ●春季休業時に於ける三崎臨海實驗所日誌抄 ●本邦産トンボ着色圖版を附す

發賣所 東京神田裏神保町 會社敬業社
發賣所 東京日本橋通三丁目 丸善書店

雜誌 昆蟲 世界 合本 出來 廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第六卷(昨年分)出來

西洋文字
金文裝
入美裝

● 昆蟲世界第二卷 五部

右は明治三十一年發行の分(但合本にあらず) (自第拾貳號—至第拾六號)

● 昆蟲世界第三卷合本壹冊

右は明治三十二年發行の分 (自第拾七號—至第拾八號)

● 昆蟲世界第四卷合本壹冊

右は明治三十三年發行の分 (自第拾九號—至第拾四號)

● 昆蟲世界第五卷合本壹冊

右は明治三十四年發行の分 (自第拾伍號—至第拾陸號)

● 昆蟲世界第六卷合本壹冊

右は明治三十五年發行の分 (自第拾七號—至第拾四號)

合本は毎冊金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢
其他は定價の通り)

右昆蟲世界の表紙發刊以來、非常の高評を得、斯學研究上の寶物として、又又版次改良の先驅として、數回を發行し、未だこの合本に至るに至るまでに、全國讀者の勸告により毎年一分を發行して、讀者引に便せり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

專賣特許 第四九八六號 莖切器發賣廣告

螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大にして之れか驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かざるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖も未だ完全の良器なく止むを得ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕すのみならず全く螟蟲の潜伏せる稻莖を根底より刈去ることを得ざるが爲め害蟲驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲を撲滅せんと欲するも發明者多年苦心の意を能く遂に完全なる良器を考出せり此器は上圖に示す如く小形の鎌を強力に曲げを付したるものにして本器を使用するに先づ把手を握り而して切取らんとする稻莖を左手にて握り適宜の頭部と鎌の尖端との中間に之を當て鎌を少し前方に押すし然るときは適に鎌は弾力性を有して外方に開き稻莖を押し入るなり度押し入れたる後は適に弾力性を有し度押し入れたる稲莖は被破し他の健全なる稲莖は挿入する事なし此の健全なる稲莖は挿入する事なし此の健全なる稲莖は挿入する事なし此の健全なる稲莖は挿入する事なし



根底を挿入し後方に引くと稲莖は破れ、他の健全なる稲莖は挿入する事なし此の健全なる稲莖は挿入する事なし此の健全なる稲莖は挿入する事なし

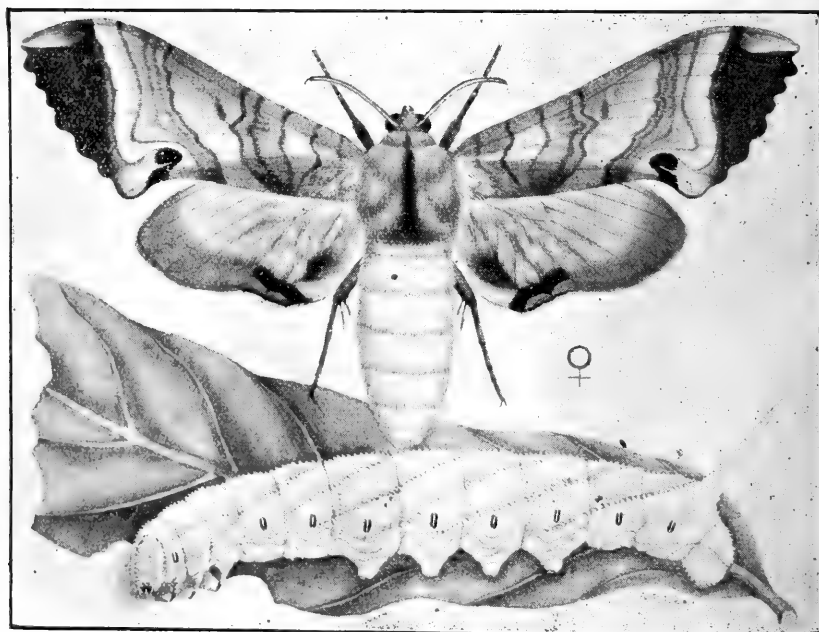
製造發賣元 高橋喜之助
縣下一手販賣所 高橋喜之助

Marumba Complacens Walker. (Momo-suzume)

By. K, Nagano.

Forewings brownish ochreous; dorsal and marginal parts dark purplish; three brownish curved fasciae; a dark lunate discal spot; a black spot near anal angle. Hindwings rose-colour, brownish posteriorly; two black spots at anal angle, sometimes connected altogether. Expanse 87-100mm. Head and thorax brownish lilacine, with indistinct dark central stripe; abdomen brownish lilacine.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo; 5. 6. 7. Larva pale green or yellowish, white dotted; on 1-3 seg. a yellow or brownish longitudinal lateral stripe; on 3-11 seg. a series of yellow or brownish oblique lateral stripes: on *Prunus percica*, *P. pseudo-cerasus*, etc.; 7. 8. 9.



岐阜屋旅店廣告

今回昆虫學研究家各位の御便利を圖り、第五回内國勸業博覽會開會中、出店を大坂市東區、西高津中寺町、十番地久成寺内に設け特別低價を以て御休宿の御用に應じ候間續々御光臨の程奉希望候

大坂市東區、西高津、中寺町、十番地、久成寺
 岐阜市 西野町 昆虫屋旅店 大出店

◎昆虫世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆虫世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらずれば、發送致さざる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御扱ひ致し候ひしに、往々却つて意外の御取扱ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封書に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫め御承知置願上候

六月十日
 名和昆虫研究所會計部

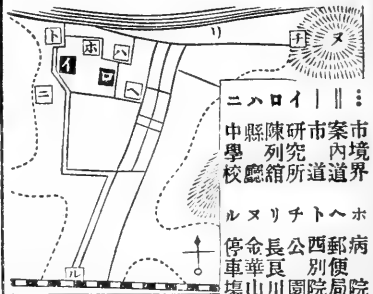
◎岐阜縣昆虫學會月次會廣告

岐阜縣昆虫學會は規則第三條に依り晴雨に關はず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆虫研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆虫研究所内 岐阜縣昆虫學會

- 岐阜縣昆虫學會本年中の日並は左の如し
- 第五十五回月次會(七月四日)
- 第五十八回月次會(十月三日)
- 第五十六回月次會(八月一日)
- 第五十九回月次會(十一月七日)
- 第五十七回月次會(九月五日)
- 第六十回月次會(十二月五日)

(明治三十年九月十日内務省許可)
 (明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)



名和昆虫研究所案内

昆虫學研究所の位置は上野に於て停車場より僅に十餘町養蠶室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆虫標本陳列館(五間に十六間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町

◎本誌定價並廣告料

壹部 郵稅共 金拾錢
 壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢
 (注意) 本誌は總て前金に非れば發送せず
 ◎爲替拂渡局は岐阜郵便局 ◎郵券代用は五厘切手にて壹割増とす
 廣告料 五號活字二十二字詰一行に付金拾貳錢三十行以上一行に付金拾錢とす

明治三十六年六月十五日印刷並發行
 岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
 (岐阜縣岐阜市京町)

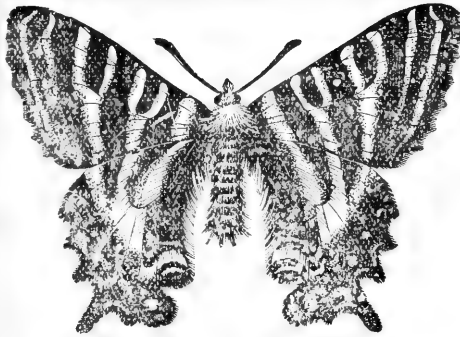
◎發行所 名和昆虫研究所

不許轉載
 同縣掛斐郡鷲村大字公郷三番戸ノ二
 編輯者 小森省作
 同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸
 印刷者 河田貞城

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

(七月十五日發行)

(每月一回十五日發行)



THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七卷第七號

(第七卷第七號)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

(禁)

禁

○有吻目水棲類各種 (石版圖)

目次

頁

○水棲有吻目十一種に就て
○第一回岐阜縣昆蟲分布調査
○無翅の營種に就て附臺灣産の螢種
○螟卵採收と卵蜂保護に就て

○講 話 二一頁

○蚜蟲の話 二一頁
○螟蟲驅除の一方 森 宗太郎
森島勘次郎

○雜 錄 二四頁

○螟蟲驅除獎勵展覽會準備記事 益の家主人
○六足蟲講義(午の巻) 長野菊次郎
○昆蟲に關する隨感隨筆(第二回) 昆 蟲 翁

○通 信 三三頁

○博覽會出品害蟲標本解説書 岐阜縣 稻葉郡農會
○キアラフ遠江に産す 神河直三郎
○小學兒童の害蟲驅除成績 弓削 貞彌
○昆蟲に關する葉書通信(第三十三報)

○雜 報 三九頁

○岐阜縣稻作害蟲驅除監督方法 ○博覽會出品昆蟲標
本受取者 ○水族館と昆蟲 ○新刊紹介 ○稻象鼻蟲の發
生 ○可貞村昆蟲調査所 ○害蟲驅除隊防監督官の出版
○岐阜縣昆蟲學會第五十五回月次會記事 ○昆蟲標本
陳列館の觀覽人



(明治三十六年七月十五日發行)

●寄贈物件受領公告

金拾五圓也
 昆蟲標本(アマノジャクハマダラカ等數十頭) 岐阜縣 揖斐郡昆蟲學會
 金龜標本(同上) 在樺濱 田中芳男君
 昆蟲標本(同上) 在大阪 山崎久藏君
 蠶繭四頭 岐阜縣 鹽田健藏君
 昆蟲標本數十種 靜岡縣 神村直三郎君
 天蛾類其他廿餘頭 愛知縣寶飯郡國府高等小學校
 紅斑天牛一頭 同縣同郡御油尋常高等小學校
 紅斑天牛并帽子。蟬形竹製花生。 大分縣 岩田秀太郎君
 蝶模標本數十種 同縣同郡 蚊針 蝶形襟止
 昆蟲標本數十種 岐阜縣 森字多司君
 誘蛾燈火口アリキ製一個 千葉縣 大竹義道君
 實用昆蟲學教科書 東京市 小貫信太郎君
 第五回內國勸業博覽會出品物說明書 在臺灣 木下嘉七郎君
 肉及蚊第二回報告 在臺南市 藤田政勝君
 第五回內國勸業博覽會堺水族館圖解 在臺南市 西岡喜十郎君
 除蟲御札(南部興福寺)說明付 三重縣 廣田孫多君
 淡路新聞(三化生蠟蟲記事) 秋田縣 富樫明治郎君
 酒田新聞(昆蟲記事) 山形縣 齋藤作兵衛君
 人物にハツタ給圖印刷 愛知縣 寶飯郡 一ノ宮高等小學校
 實物寫生(昆蟲)十枚 同 國府第一尋常小學校
 實物寫生(昆蟲)四枚 同 赤坂高等小學校
 實物寫生(昆蟲)三枚 同 赤坂高等小學校
 右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す
 明治三十六年七月十日 名和昆蟲研究所

●昆蟲世界購讀紹介者芳名

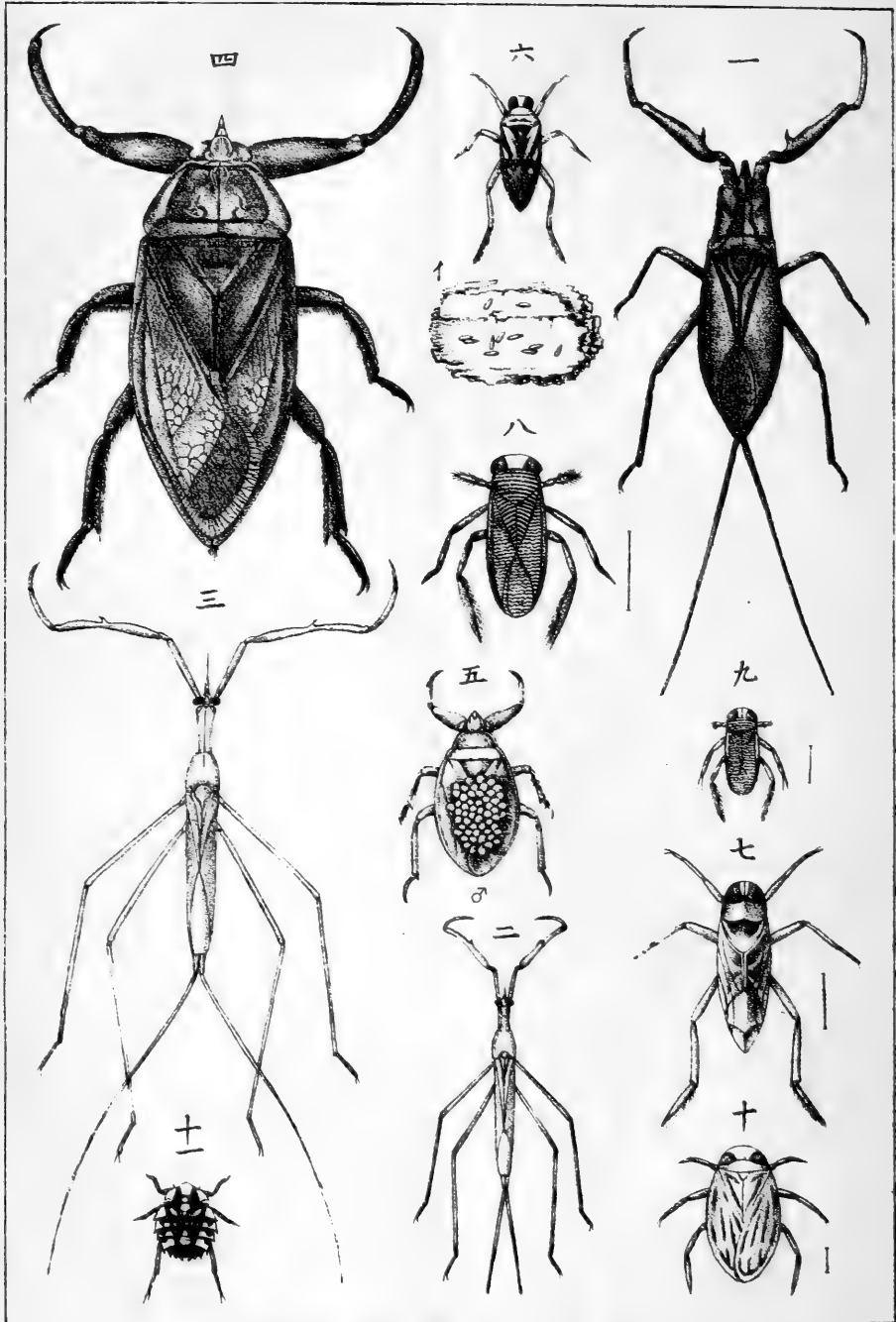
- 兵庫縣 三枝角太郎君 (貳名)
- 大分縣 小野覺太郎君 (貳名)
- 靜岡縣 神村直三郎君 (壹名)
- 愛媛縣 顯浦次男君 (壹名)
- 岐阜縣 小森省作君 (壹名)

第十六回全講講習會員募集
 國書蟲類除講講習會(定員四十名)
 開期(自八月一日)一週間(至同月十四日)

全國書蟲類除講習會は、回は一回と同志の歡迎を受け、既に前回依りて、三府四十一縣の出身者約八百名の有志なる修業生を出せり。此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、又應募者の便を圖り、來る八月一日を以て第十六回の開講式を擧げんとす。斯學に志あるの利は、速に其手續を経由せられ、尙今回の講習には左記條々の利益あるべしと信す。
 一、開會の季節は、諸學校、官衙の夏季休業中なるを以て、公務一、今從せらるる士は好都合なる事。
 一、從前は教授科目に改正を加へ、更に有用にして實行に適切なる方法に頼る事。
 一、當時も書蟲發生の季節なれば、實地に臨み研究の利あること。
 一、當昆蟲研究所々藏の昆蟲標本を觀覽に供するを以て、見學に多大の益あること。
 尙申込期限を七月二十日以前と定むと雖も、當所の都合により、隨時入會を謝絶することあるべし。規則書入用の向に郵券二錢添へ至急照會あれ、直に回送すべし。
 明治三十六年六月 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

●昆蟲分布調査材料募集

- 鞘翅目。瓢蟲の部。
 - 鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。
 - 脈翅目。蠶蛾、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
 - 有翅目。水棲の部、蟬の部。
 - 直翅目。蟋蟀の部、竹節蟲の部、蠶蟻の部。
 - 擬脈翅目。蜻蛉の部。
- 右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんとを望む
 ○アブラムシ(蠶蟻又は滑蟲)の標本
 右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む
 岐阜市京町 名和昆蟲研究所



有吻目水棲各類各種



◎水棲有吻目十一種に就て (第七版圖參着)

名和昆蟲研究所長 名和 靖

目下當所所藏の、有吻目異翅亞目水棲類に屬するものは、僅々十一種に過ぎざるも、悉く食肉性なれば養魚家の大害蟲として排斥せらる。然れども、水田中にありて、他の害蟲類を捕食するを以て、有益蟲と稱することあり。本年三月、當所より内國勸業博覽會附屬水族館に對し、ガムシ、ゲンゴロウムシを始め、コオヒムシ、トンバウの幼蟲などの水棲昆蟲二十餘種數百頭を送付せしが、同館在勤の藤田政勝氏より、屢々水棲昆蟲の動靜を就き報導ありしを以て、其概要を本誌に掲載せ、讀者に真相を照會せしが、今後大に研究するの必要あるを信ぜ、有吻目に屬する水棲類に就て記述することゝなしぬ。

(一)ユリメハナスヒ(Laccotrupes japonensis, Scott.) は紅娘華科に屬するものにして、雄は体長一寸内外、翅の開張一寸八分、雌は体長一寸二分内外、翅の開張二寸一分を算す。其は腹部の末端に二個の長き革質針狀の附屬物あり。頭小にして、頭頂部隆起し、前胸背は山形をなす。前翅細長くして硬化し、翅端は稍軟く、後方は屈曲す。後翅は前翅に比すれば短濶にして、膜質透明よ、見様よりては淡き藤色を呈す。前肢は發達して太く、腿節の基部に近く、一の太き棘狀突起あり。跗節は一の太き爪に化し

他蟲を捕獲するに便なり。中、後肢は細く跗節は一節にして長く、其端は二箇の爪を有す。腹部は扁平にして、背面は中央暗褐色、其兩側は褐色を呈す。腹面は中央腹端に至るまで、三角形に隆起し、雄は其隆起第四關節に於て狭まり、末端三角形をなす。雌は末端俄に細くなり、針状をなす。此蟲の水底に静止するや、竹木の切片に似たるを以て、容易に其所在を知る能はず。他蟲若し之れに近づけば、直ちに捕食す。擬態の好標本なり。(第七版圖第一)

(二) コミヅカマキリ (*Ranatra chinensis*, Mayr.) は前種と同科に屬し、体長八分乃至九分、翅の開

張一寸二三分、軀細長く、腹部の末端は、二個の革質針狀の附屬物あり、複眼圓く、外方に突出し、前翅細長くして、稍硬化し、翅端は半透明をなし、後方に曲る。後翅濶く、膜質透明に、見様によりて淡き空色を呈す。前肢はカマキリのそれに似て捕獲肢に變つ、雌は腹端は尖りたる産卵器を有す。(第七版圖第二)

(三) ミヅカマキリ (*Ranatra brachyura*, Horvath.) は前種と同科に配するものにして、軀軀亦酷似し

て大なり。雄は体長一寸三分、翅の開張一寸八分、雌は体長一寸五分、翅の開張二寸一分内外を算す。頭小にして、複眼は圓く、外方に突出す。前胸長く延びて、恰も鳥の頸の如し。前翅稍硬化し、先端半透明にして、後方に屈曲す。後翅は膜質透明にして、淡き藤色を帯び短濶なり。腹部五節より成りて細長く、背面の中央縦に黒褐色を帯び、其兩側褐色を呈す。腹面は三角形に隆起し、雌は其末端は針狀の産卵器を有す。前肢は基節長く延び、腿節の中央は棘狀突起あり、螞蟻のそれに似て、水棲なるを以て

ミヅカマキリの名あり。コミヅカマキリと共に、水中に静止するや、恰も樹枝の水中にあるが如く、

昆蟲眼を以てせざれば、到底其蟲類なるを辨明し難し。擬態の標本として最も適切なるものあり。(第七

版圖第三)

(四) タガメムシ (Belostoma deyrollei, Vullef.)

水蝨科に屬するものにして、雄は体長一寸八分、

雌は二寸三分を算す。軀軀扁平よして、水棲類中最大なるものなり。頭小さく複眼は殆んど三角形をなして外方よ突出す。前胸は梯形をなして自由に動き、中、後胸は愈着す。前翅は扇状をちして硬化し、翅端に半透明の部分あり。後翅は短くして甚だ濶く、乳白色を帯びて膜質なり。三對の脚は太く、中、後肢の内方には、各節共軟毛を密生す。前肢は其腿節甚しく肥大に、跗節は二節より成り、其先端にタガメムシ卵塊の圖



太き釣針の爪を有し、他蟲を捕獲するも便なり。尾端には二個の薄き板状の尾様物あり。上圖は此蟲の卵塊にして、六、七月頃稻莖、其他適宜の草木よ産付す。俗にイナゴの卵と稱し、灸りて醬油に浸し

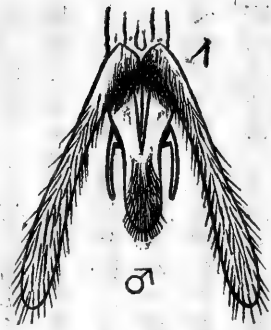
喜びて食する地方あり。(第七版圖第四)

(五) コオヒムシ (Appasus Japonicus, Vullef.)

は前種と同科に配するものにして、軀長六分乃至七

分、頭小さく、複眼殆んど三角形をちす。前翅は稍硬化し、翅端は半透明なり。後翅は膜質よして濶く見様により淡き空色を呈す。三對の肢は、タガメムシのそれよ似たり。軀扁平よして、雄の背上よは或る時期よ於て卵子を負ふことあり。該蟲に就き、負卵者が雄なるか將た雌あるかは、古來學者間に異説ありて、雌蟲論者ヂムモツク氏の如きは、屈撓し易き産卵管を以て、自己の背上よ産附云々の異説をさへ唱へたりしが、ザイタ屬のものは米國スレーター嬢の實見によりて、解決を與へられたることは、長野菊次郎氏が本誌前々號學說欄内よ記述せられたるが如し。本邦産の負子を就ては、明治七年田中芳男先生の實驗よよりて、略ぼ雌雄を區別するの要点を示されしも、尙彼此説を爲し、甲者は負卵者を雄と云へば、乙者は雌なりと主張し、互に譲らざりしが、必竟該蟲の雌雄形態を等しくし、容易に鑑別し難

きを以てなり。若し雌雄鑑別容易なれば、何んを争ふの必要あらんや。故に前號學說欄内に編者が附記せし如く、當所は一見雌雄を鑑別する方法を知らばやど、之れが刮檢を試みたるよ、負卵者が皆雄なることは明かり。今外部より容易く雌雄を區別する方法を示さんよ、鑷子を以て尾端にある尾様物を引き出せば、雄は(イ)圖に示す如く、中央副器の兩側に革質の突起あれども、雌よは(ロ)圖の如く之れを有せず。(第七版圖第五)



(エハ) マツモムシ (*Nokonecha tringitata*, Mots.) は松藻蟲科に屬するものよして、身長四分五厘内外、体の背面は船底形に隆起し、水中を倒歩するに適す

頭部は灰黄色にして、左右に大なる複眼を有し、前胸灰黄色を帯び、中、后胸部及腹部は黒色を呈す。前翅は扇状をなし、翅底に沿ふて黄色部あり、後翅は殆んど三角形をなし、膜質よして見様よより淡き藤色を呈す。前肢短く、後肢は長くして、其脛節及跗節の内方には軟毛を密生す。水中にあるや常は腹面を上にして游泳す。其狀バッテラを漕ぐに似たるを以て、バッテラムシの稱あり。(第七版圖第六「イ」は其卵)

(七) ロ ヲンモムシ (*Anisops scutellaris*, Bitbg.) は前種と同科に屬し、身形亦前種に酷似して小さく

身長二分二三厘を算す、複眼は大にして殆んど頭の大部を占む。前胸背は黄色にして、中胸背は暗褐色よ、菱状部の周圍黄褐色を帯ぶ。后胸は長くして、腹部と共に暗褐色を呈す。二双の翅は透明よして、前翅は稍硬化し、後翅は見様によりて淡き空色を呈す。后肢の脛節、跗節の内方に軟毛を密生し、水中

にあるや、常に腹面を上、背面を下方にして游泳するは、前種に異ならず。(第七版圖第七)

(八) ミヅムシ (*Corisus sp?*) は水蟲科に屬し、軀長橢圓形にして、軀長三分六七厘あり、頭部弓形に、三角形の複眼を有す。前翅は稍硬化し、黒色素地に黄色の微小なる紋を一面に散布す。後翅は濁く透明にして、見様により淡き空色を呈す。中肢は細くして、最も長く、後肢は扁平、游泳浮沈に適す (第七版圖第八)

(九) コニヅムシ (*Corisus substriata*, Thier.) は前種と同科に隸するものにして、体形前種に似て小

さく、二分内外を算す。頭は横に長く、弓形をなし、前胸背は多くの黒色横線あり。前翅は黒色素地に黄色の小紋を一面に散布せるは前種に等しく、一見濃灰色をなす。後翅は濁く、淡き藤色を呈す。此の蟲は水中に在るや、中肢を以て枝葉等に附着して静止す。若し其物体の大小、蟲の數により、比重

水より軽くなるときは、忽ち物体と共に上昇し、水面に浮ぶ。此時蟲は驚き、物体を放ち、後肢を動かして水底に達し、又中肢を以て物体に附着す。今或る器中へ水を盛り、一定の枝葉を入れ、此の蟲を放ては、常に前の運動を繼續す。其狀恰も風船の上昇するに似たるを以て、風船蟲の名あり。夜中燈火を慕ひ、誘蛾燈に集ることあり、形の浮塵子に似たるを以て、往々浮塵子と誤るゝことあり。風船蟲

に就ては、本誌第二卷第九號口繪に其實況を描出し、同論說欄内に詳細なる記事を掲げれば、茲に詳述せず。(第七版圖第九)

(十) ヒメミヅムシ (*Gn? sp?*) は軀長八、九厘、形態前種に似たれども、稍圓く、同科に屬す。頭横に

長く、前翅は灰黄素地に黒條を有し、翅底に近く黄色部あり、后翅は淡き藤色をなす。(第七版圖第十)

(十一) ナベブタムシ (*Gn? sp?*) は水棲類に屬すれども、未だ何科に隸するものあるや明かからず。

雄は体長三分幅二分二厘、雌は体長三分三厘、幅二分五厘、扁平にして殆んど銅蓋狀をなすを以て、ナベ
 プタムシの俗稱あり。頭は形龜のそれに似たれども黄褐色を呈し、長さ口吻を有し他蟲を刺殺す。雌は
 其体黄褐色素地に黒褐色の斑紋を散在し、雄は殆んど黒褐色にして稍黄褐色の斑点を有す。体の邊緣各
 關節毎に尖りて鋸齒狀をなし、三對の肢は黄褐色にして後肢最も長く、前翅は退化したる圓形の小さき
 翅を存すれども、飛翔の用をなさず。後翅は之れを欠く、余は明治二十九年十二月三日、之れを當市の
 小川に採集したれども、餘り多くを見せ。該蟲に就きては、本誌第五十五號雜錄欄内に於て、長野縣小
 山海太郎氏のものせられたるものあれば就て見らるべし。(第七版圖第十一)

◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査(一)

名和昆蟲研究所助手 分布調査主任 小森省作

昆蟲分布調査の必要なることは、學者既に定論ありて、茲に喋々を要せずと雖も、るも之をなさざるは
 何の理由の存するなるか。斯學に於ける如何に之を窮明せんと欲すと雖も、之が分布の明瞭せざる限り
 は、其根源を尋ねること能はず。特に應用昆蟲學に於て、其必要の多大なるを認む。即ち農作上より謂
 へば、何れの蟲種は、何地に於て蠶食を恣にし、何種の蟲種は、何地に於て天然驅除者たるやも、詳
 知せること能はざるは、實に遺憾の至りにして、分布調査を忽諸に附せし結果に外ならずと雖も、又之
 を調査せんとするものゝなさは、畢竟斯種の調査は事頗る多難の業にして、到底個人の企て及ぶ所に非
 ざるに歸因せずんばあらず。

當昆蟲研究所に於ては、常に意を之に注ぎ、以て此の大業を成さんと劃策する既に數年、又た岐阜縣昆
 蟲學會は、事を永遠に期し、縣下に於ける調査を遂げんと、昨三十五年より着手し、今や第一回の調査

を終りたれば、同會は、其の一部を割きて第五回内國勸業博覽會に出品せり。余は、今是等調査の方法と、其の結果を報し、尙漸次本邦全般に及ぼさんとす。さりながら素より斯種の調査は、前陳の如く容易の業と非ずして、多數の翼賛と、幾數年の勞苦を積まざれば、成效を期し難と次第なれば、此際、特々斯學の爲、當所及岐阜縣昆蟲學會の事業を援けて、以て數多の標品を採集寄贈せられんことを、切望して止まざるあり。

調査の方法、調査の方法は、各地より送附し來るものある毎に、一々封入したる三角紙より、之を蟲針に移し、各目各科に配して大別を加へ、後種屬を小分し、而して標本に缺くべからざる諸要素たる、採集上の記號より員數等に至るまで、之を原簿に登載し、假令一種一品と雖も、必ず精確明細を記せり又調査表には、一郡の獲たる所、一種十頭以下なるものに、其員數を記し、其以上の採集品には、多と記入して多少の概況をも明し、別表には、各學校毎に、其採品の最も完全にして、且明瞭なるもの一名を擇びて、略説を附し、以て異日の考證に備へり。斯くして編製を終へたる時は、蟲種に隨ひて、之を分布調査用縣地圖に設色し、一見直ちに蟲種の分布を知り得、併せて植物の分布を想定し得せしむるの順序を立てたり。而して岐阜縣昆蟲學會が、他日の考證に備へん爲、如何に苦心せるかは、既に述べたる所によりて明なりと雖も、茲にアゲハノテフに就き、分布調査原簿に記入の例を示して、斯種の事業を興さんと欲するもの、參考と供せんとす。

アゲハノテフ (Papilio xuthus, L.)

郡市名	採集地名	同場所	同年月日	校名	兒童學年別	採集人名
岐阜	岐阜	岐阜	三五、八、三〇	岐阜高女	—	中島ひる
稲葉	—	蜜柑樹	—	鏡島尋	—	—

羽島、海津の如き平坦部とは、自々其趣を異せり。特ニ飛驒國に於ける地方は、奥羽及北海道地方のそれに類似し、クジヤクテフの如き、ヒメシロテフの如き。ヒメシロテフの如き、エゾゼミの如き其他天牛、金龜子、葛上亭長、椿象等の或種の如き、是等は山地ニ産するものなりと雖も、又斯る奇品に富めるは、分布調査の艱難を、聊か慰撫すべきものにして、斯種調査の必要を益々感せしむるに至る。而して、山林原野より、田畝海濱の間に涉り、斯く廣く是等が蟲種を網羅せんとせば、勢ひ區域を擴大なすしめ、隨て又頗る多難に屬す。故に、當所ニ於ては、從來諸氏が分布調査材料として、或は質問の故を以て贈られし品種等は、假令一蟲一翅と雖も、皆鄭重に分布調査用保存箱底ニ收藏しあり、然りと雖も、是等ハ廣き斯界ニ向て、九牛の一毛だに當らざる程のものなれば、愈々是より諸氏の力を藉らざるべからざる所以なり。

岐阜縣昆蟲學會に於ては、前陳の如く採集をして冷く廣かすしめんが爲、籍を會員に置くものは勿論、更に縣下各小學校に依頼し、昨年第一回の採集を行はしめしに、之に應諾して採品を送附せし校數は二百十六に達し、蟲種約一千、總數二萬餘頭を算せり。是れ偶然の結果の如きも、理科思想發展の一策として、各校競ふて學童を勸奨せしに依るならんと信ず。今參考の爲、各小學校に發送の依頼狀ニ添へ、當時頒布せし小學兒童昆蟲採集注意の要項を掲載すれば左の如し。

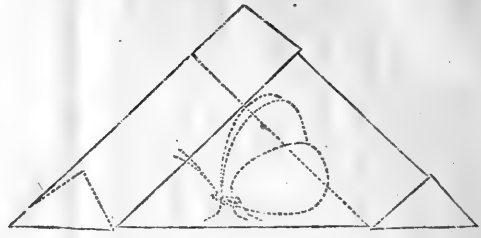
小學校兒童昆蟲採集注意の要項

一、採集月日は採集したる當日を記入する事、一、採集地名は採集したる町村名及字名を記入する事、一、採集すべき區域は其校の學區内に限る事、一、採集場所の項には山川田畑野池沼等を區別して記入する事、一、幼蟲類は今

回の調査に不必要に付添加せざる事、一、學校名は校名を記入し若し尋常小學校なれば高等の二字を消し高第小學校なれば尋常の二字を消す事、一、尋(高)第年の欄は一學年より四學年迄を區別して記入する事、但尋(高)は前項に仍り加除する事、一、郡とある欄には郡名を、氏名の欄には採集したる兒童の氏名を記す事、一、記入方は總て明瞭なるを要するは勿論なれども可成兒童をして手記せしむる事、但他人に於て代書するも妨なし、一、採收の昆蟲は九月末日を以て到着期限とし其以前に必ず送附せらるべき事、一、採

集せし標本は長方形に切りたる紙片を三角形に折りて一々第一圖に示すが如くに包み其内へ第二圖大の小札を一包、に一枚つゝ容

第一圖



第二圖

郡名	尋(高)第 學年	尋常小學校	明治卅五年	月	日
			採集地名	町字	採集場所

る。事。一、標本郵送の場合に成べく堅固なる容器を用ゐる表面に博物標本の四字及び第四種郵便物の六字を朱書して開き封とするときは重量三十匁毎に郵税貳錢を要するのみなれば成るべく其体裁とせられたき事。一、紙箱の容器を用ゆる時は途中にて破損し種類を鑑別し能はざることを往々之あれば深く注意ありたき事。

尙、茲に調査の結果を發表するに先ち、其材料を贈與せられし岐阜縣下二百十六校の校名を掲げ、岐阜縣昆蟲學會に代りて、其勞を謝せんとす。但し、送付せられし標本中には、校名は尋常高等の區別明記をかりし者もありたれば、或は高等小學の尋常小學となりしもの、或は尋常小學校なるに尋常高等併置となり居るも保し難し。尙又、第一回調査終了後に到着せし分は、今回の調査に入らざるものあらん、或は又數校一纏に混同せしめて送附せられし所もありたれば、是等の中より、記載漏れとなり居るも計り難し、然しながら調査原簿には、一品毎に精細なる調査を加へしものあれば、確に登錄せる事を斷言す。讀者之を諒せよ。尙特は茲に遺憾とする一事は、安八郡に於ける、唯一品の送附もをかりし事にして、是等は止むを得ざる事情の存せしによるならんも、實に惜むべき事なところ。(尋は尋常小學校、高は高等小學校、尋高は尋常高等併置と知るべし)

(岐阜市)岐阜高等女學校、(稲葉郡)三里尋、更木同、則武同、厚見同、且格尋高、鏡島尋、岩田同、芥見尋高、精華同、長良同、佐波尋、前宮同、(羽島郡)上羽栗尋、竹ヶ鼻尋高、足近尋、博文尋高、松枝尋、福壽同、柳津同、笠松尋高、上中島同、敬格同、笠田同、江吉良

尋、八神同、(海津郡)西江尋、今尾尋高、(養老郡)下多度尋高、上多度尋、池邊同、小畑同、時尋高、牧田同、日吉尋高、高田同、(不破郡)垂井尋高、宮代同、青墓同、今須同、關ヶ原同、府中同、關ヶ原野上分校、(揖斐郡)大和尋、小島尋高、養基尋、鶯同、大野尋高、豐木尋、西郡同、(本巢郡)本田尋高、網代尋、横屋同、呂久同、一色尋高、彈正尋、牛牧同、席田尋高、土貴野尋、西郷同、(山縣郡)大森尋、保戸島同、山縣尋高、葛原尋、(武儀郡)神洞尋、神淵尋高、富野同、片知尋、岩佐同、本郷同、池尻同、上牧尋高、保杵尋、下有知尋高、長瀬尋、岩本同、上有知尋高、立花尋、下ノ保尋高、藤生尋、中有知同、(郡上郡)山田尋高、和真尋、上保尋高、八幡同、(加茂郡)黒川中等高、黒川東尋、蜂屋尋高、未真尋、榎野同、西田原尋高、酒倉同、迫間尋、上川邊同、下佐見尋高、上米田同、福地同、飯地尋、八百津尋高、越原南尋、川邊尋高、中盛同、平尋、大平同、上佐見尋高、黒川西尋、富田同、古井尋高、鹿摺尋、太田尋高、大平賀尋、甘屋同、(可兒郡)帷子尋高、伊香尋、春里同、大森同、中華高、錦織尋、上之郷尋高、下切尋、(土岐郡)下石尋高、柿野尋、妻木尋高、渡南高、細野尋、益見同、白倉同、萩原尋高、曾木尋、多治見尋高、餘戸高、小里尋高、(惠那郡)吉田尋高、巖邑同、明知同、杉野尋、鶴岡同、椋實同、淺野同、上村尋高、河合尋、瀬戸同、猿爪同、佐々木尋高、下野尋、串原尋高、水川尋、東方尋高、藤同、久樓同、川上尋、落合尋高、毛呂窪尋、阿木尋高、千旦林同、本郷同、茄子川同、中津同、福岡同、大井同、下原田同、野井尋、(大野郡)山田尋、丹生川尋高、大名田尋、大原同、折敷地同、牧ヶ洞尋高、楢谷尋、白井同、大西同、三福寺同、山口同、槻崎同、三之瀬同、巢俣同、高山尋高、竹折尋補、瀧尋高、久々野同、(益田郡)東上田尋、夏焼同、久野川同、尾崎尋高、竹原第一尋、竹原第二同、竹原高、宮田尋高、萩原同、中山尋、中切同、西同、川西尋高、朝日尋、下呂尋高、秋神同、小坂同、和佐尋、(吉城郡)荒城尋、金桶同、宇津江同、上寶尋高、長倉尋、漆山同、宮原同、双六同、國府高、稻越尋、林同、三日町同、種藏同、船津尋高、古川同、太江尋、上廣瀬同、藏柱尋高、

昆蟲分布調査の多難として、到底數年間に於て、能く結了すべきものに非ざる事は、既に前陳の如し。故に、爰に掲ぐべきものは、唯第一回蒐集の結果報告とも稱すべきものとして、固より僅々兩三月間の採集よ、加ふるは偶然の採品なきを保せざれば、決して之を以て、岐阜全縣下に於ける、昆蟲の分布を想定すべきものにあらざるは、既に讀者も了せざる、事と信ず。而して、今茲に報すべき順序は、昆蟲分類上既に定められたる位置を據らずして、便宜上蝶類の如き大形種より始め、漸次微細のものに及ぼさんとする。

鱗翅目鳳蝶科に屬すべきものにして、目下當昆蟲研究所に所藏せる邦産種は、四屬十七種ありと雖も、今回の採品に加はりしものは九種なりとす。今、之が略説を左に試みん。

(一)キアゲハ、テフ (Papilio machaon, L.) 本種は、鳳蝶科中最も廣く分布を有し、成蟲は三月より十月に亘りて現はる。而して春季に於て發生するものは、形矮小にして色澤淡く、夏季に於て現はるものは、形大よ、色澤亦濃かなり。是れ所謂氣候變形なるものなり。今回の採集は、昨三十五年八、九の兩月中に於て行はしめしものなれば、採集月日亦多くは此兩月中にありき。之れ第二期發生即ち夏生のものゝみにして、山林原野より、田圃第宅の間に於て採集せられ、縣下一市十七郡中(安八郡を除く)九郡に及べり。

(二)アゲハ、テフ (Papilio xuthus, L.) 本種も、亦最も普通種にして、本邦到る處に産せざるなし。成蟲は前種より等しく、發生の季節より、形狀、色澤を異にせり。即ち春生種は、矮小にして黄色部多く、夏生種は、肥大にして黒色部を増せり。今回全縣下に於て(安八郡を除く)採集せられたり。

(三)カラスバ、アゲハ、テフ (Papilio bianor, Cramer.) 本種も亦た、氣候變形より、大小と色澤に於て數種の差異あり、本邦各地に産すと雖も、特に山地に多くして、平坦部は稀あり、養老、土岐、惠那、益田、吉城の五郡は於て獲らる。

(四)クロアゲハ、テフ (Papilio demetrius, Cramer.) 本邦普通の種にして、氣候變形より、又大小の差あり、雄蟲は後翅の前縁に、淡黄白色の帶紋あり、雌蟲の後翅裏面に於ける半月形赤紋には、多少の差ありて、往々初學者をして、別種ならんとの感を起さしむることあり、海津、大野、益田、吉城、及び、安八の五郡を除き一市十三郡に於て獲られたり。

(五) ヲナガアゲハテフ (Papilio maclintus, Janson.) 此種は、前種と酷似せりと雖も、前後兩翅の共に狭長なると、特ニ尾の長さを以て、容易に區別し得べし。夏季山間に多く飛翔するも、平坦部には稀なり。今回、養老、惠那の二郡に獲らる。

(六) シヤカウアゲハテフ (Papilio aleinous, Klug.) 此種は、氣候變形により、大小を異にせりと雖も又雌雄により、大に色彩を異にせり。而して雄蟲の生活する間は、一種馨香様の佳香を發するを以て、此の名あり、是れ雌雄洵沙の然らしむる所なりとす。幼蟲は馬兜鈴を食むるを以て、堤防等に多し。養老、不破、揖斐、山縣、可兒、惠那の六郡に於て獲らる。

(七) アフスデアゲハテフ (Papilio sarpedon, L.) 幼蟲は樟科植物を食するを以て、樟樹のある處、何地にても飛翔するを見れども、岐阜縣に於ては、特に山邊に屬する部も多くして、飛翔活潑なり。養老揖斐、本巢、武儀に於て獲らる。

(八) キフテフ (Luehdorfia japonica, Leech.) 此種の分布は、始め頗る狭小ありしが、漸次擴張して

西は山口縣より、東北は岩手縣よる殆ど本州の全部に蔓延し、尙各地より、續々分布の報に接するは是れ採集者の周到なる檢索に依るものにして、之より推さば、何種の蟲類と雖も亦檢索の周密を得ば、發生を認ざるの地なきが如し。今回の採品中には二頭ありて一頭は揖斐郡爲尋常小學校職員が、同郡谷汲村山路に於て三月廿九日に採集せしもの、一頭は惠那郡川上尋常小學校尋常二學年生小縣文吾なるもの、同郡坂下村畑に於て八月二十二日採集せり。是れ大ニ疑ひを存する處。元來、該蝶は一年一回の發生よして、三月下旬より四月より亘りて現はるものなるよ、惠那郡に於て採集せしものは八月廿二日あり。是れ即ち疑問の点にして、余は之を川上小學校に照會せしに、左の如き回答ありたり。

本月二十四日附を以て御照會之趣拜承、右につき篤々相調へ申候處、小縣文吾と申す者は尋常二學年に有之候間、何分確乎たる答辭を得る能はず候へども、八月中に採集せしものには相違無之、此段は確乎御答申上候。

之を以て之を見れば、兎も角八月中には採集せしものにして、或は梅、桃等に於ける回咲の如く、氣候の變化により、俄々羽化せしものにはあらざるか、嘗に本種のみならず、次に記する日光白蝶の九月十五日に於ける、又粉蝶科に屬するツマキテフの九月二十日の採集に於ける亦同様の有様を呈せり。

(九) ニックワウシロテフ (Parnassius cirrharius, Mois.) 邦産鳳蝶科中最小なるものにして、後翅の外縁は圓形をなし、外形、色彩、共に粉蝶科に類似す。本種は五月頃羽化するものあるも、武儀郡保杏尋常小學校尋常一學年長屋すきは、板取村畑に於て、九月十五日に採集せりと、是等は大に研究すべき價値あるものにして、或は氣候及食草の如何より、一年二回の發生をなすに至るやも計り難し、大に注意すべきことにこそ。

以上述べたる處の採集數を表出すれば、即ち左の如し。(表中△印は十頭以上のものに限る)

番 號	種 名	市	郡	採集數
一、	キアゲハテフ	岐阜	市	一
二、	アゲハノテフ	岐阜	郡	四
三、	カラスバアゲハテフ	岐阜	郡	一
四、	クロアゲハテフ	岐阜	郡	五
五、	チナガアゲハテフ	岐阜	郡	二
六、	シヤカウアゲハテフ	岐阜	郡	一
七、	アチスガアゲハテフ	岐阜	郡	一
八、	ギフテフ	岐阜	郡	一

九、ニックラウシロテフ

右表によれば、飛驒三郡に於て、キアゲハテフの多數と、カラスバアゲハテフを獲たるのみにして、他に於て多數を獲たるアゲハテフ、クロアゲハテフ等を獲ざりしは怪しむべく、又他郡に於ても棲息せざるべからざる蟲種にして、茲に確證し得ざるは、採集期の秋季より多きと、僅一回なりしによれるものなると信すれども、是等は、尙今後調査すべき点にして、濫り加減すべきものに非ざるなり。

◎無翅の螢種に就て附臺灣産の螢種 在臺灣臺北僑居 永澤 小兵衛

博士渡瀬庄三郎氏の説に依れば、樺太島産の螢は、恰かも英國産のそれの如くに、雌は全く蛆形をなしたる雄のみ翅翼を有せり、我が長崎縣對島國に産するものと、朝鮮種とは、また雌の翅翼を缺けるよ似たるも未だ分明ならず、而して沖繩縣産は黄茶色にして、呂宋、南清等の産は、皆茶褐色を帯べり。余はこの記事を腦底に刻し、渡臺以來、數回採集を行ひし、端なくも氏が記載以外の事實に遭遇せり。臺灣は既に螢火の旺盛期を過ぎたるも、内地はなほ螢狩の清興多かるべしを信じ、次其概要を報道す。但、參考に資すべき書冊と、文辭推敲の餘暇に乏しくて、頗ぶる不備を免れず、且觀察上、誤脱無きことを保せざれば、その一は讀者の是正に俟つ所あらんとす。

(一)無翅の螢の邦稱 本邦に無翅の螢種無し、隨ひて未だ邦稱無しと雖ども、古來國俗は、ろの未

だ翅翼を備へざる幼蟲を目的に、ウジポタル又はクサポタル等の名を以てしき、而して螢種中、雌に無翅のものありとの説は、近年渡瀬氏等が鼓吹の力によりて普知せらるゝに至りたるも、西洋學說の傳播以前は、斯る想像もなす者無く、早くより支那の博物家及び本草家の唱道せる無翅螢別種説の

如きも、本邦のウジポタル即ち幼蟲期のもど同一視せられき。是を以て松岡恕庵、中村惕齋、寺島良安、小野蘭山の諸氏の如きすら、蠲即ち蛆蝨を對譯するにツチポタル(土蠶)の名を以てし、貝原益軒氏は、此蟲の特性に適當せるクサポタルの訓を以てせしかども、惜ひかな其意義に於ては明瞭を缺けり、次で坂元慎、谷川士清の諸氏また同トクサポタルの稱を用ゐられしが、一は詩經の東山篇の宵行に適て、一は幼蟲の義たる草蠶の俗字を以て解釋を與へられき。其他學者間よは、種々の説を立てしもありしかど、結局一定するに至らざりしかば、其解釋頗る區々に岐れて、殆んど拾收すべからざるに至れり。貝原氏、坂氏等が蛆蝨には、またミズポタル(水蠶)の訓をも施し、水谷豊文氏が其説に左袒せしむ徴するも、其一斑を伺ひ知るべきなり。而して此等の衆説を括摠して、當時を代表すべきものを求むれば、唯これ小野氏の説にあるべきか、其略よいはく。

蠶蛆はツチポタル。ミヅポタル。ムシポタル(筑後) ミミヅポタル(雲州) 水中に生ト形細

長く、翼無くして尾よ光あり。三才圖會に、有二種、如蛆、尾亦帶火、但無翼不飛、名爲蛆蝨、一名は馬蠲。宵行はクサポタル(筑前) これも亦ムシポタルと云ふ、形蠶の如く、長さ一寸許、秋夜竹木葉にあり、喉に光あり、三才圖會に又一種如蠶、喉下有光、如蠶、謂之宵行。

それ斯く支那人の蛆蝨を目して、邦俗のウジポタル即ち蠶の幼蟲となし、が故に、彼此の記載よは互ひ合はぬ節多かりしも敢て怪しむ足らず。例へば、李東璧氏の「蠶有三種、其小而杳飛、腹下光明、乃茅根所化也、呂氏月令、所謂腐草化爲螢者、是也。長如蛆蝨、尾後有光、無翼不飛、乃竹根所化也、一名蠲、明堂月令、所謂腐草化爲蠲者、是也。水蠶、居水中、皆感濕熱氣、遂變化成形」に對して、寺島氏が「蠲はツチポタル、俗に云土蠶也、田圃溝邊に之あり、翅無くして飛ぶこと能はせ

して光あり」となせるが如し。假ひ支那の舊説には迷誤多かりしとは云へ、本邦の學者が、其種類の異同を辯別せずして、往々附會の説を立てしは、また惜むべき事ならずや。

(二)無翅の螢の記載 邦産の無翅螢種に關しては、渡瀨氏のもの、他、未だ其説あるを知らざ。松村

松年氏は、螢科は百二十餘の邦産ありて、ホタル、ヒメボタル、ラバボタル等に屬する由を記述せられしかど、簡約觀るに足らざるのみか、猶ほ無翅螢の存在をば認められざりしが如し。而して渡瀨氏は、疑ひを朝鮮種及び對馬産種に置き、遠からず判明すべしと豫斷し、對馬の人平田駒太郎氏また書を名和昆蟲研究所に寄せて、同國には無翅の雌螢を産するも、只纔かに數頭を捕獲せし止まる、其性貌等は之を渡瀨氏公表の後に譲らんとの趣ひきを通告せしやに聞けば、蓋し渡瀨氏の對馬産種に於ける研究は、専ら平田氏の採集に埃つ所あるが如く、平田氏は渡瀨氏に對する徳義を守りて、少焉之れを緘黙に附するに似たり、是れ本邦に未だ無翅螢に關する記事乏しき所以なるか、去れば對馬産種の習性形貌經過を擧げて之を知るに由無しと雖ども、是れ將た郝懿行氏の記載せられし種類とは、左まで遠ざかれる異品なりとも思はれず。郝氏は李氏と同じく、其雄と雌とを全然別種となせしかど、此類の缺點は、今なほ有がちの事にて、深く咎むるに足らざるのみならず、其有翅と無翅との相違を確認し、又體色、發光等の觀察に非難すべき点無きは、實に敬嘆堪へざる所なり。氏は曰く「燐、光明也(中略)今驗螢火有二種、一種飛者、形小頭赤、一種無翼、形似大蛆、灰黑色、而腹下火光、大三於飛者」と、即ち朝鮮より我が對馬にかけて分布の種類は、また此一種たるべしと信定るあり、而して余が渡臺以來、採集且つ研究の成績より云へば、臺灣産種また雄は有翅なるに違はざるも、雌は無翅よして蛆形をなすに似たり。然らば則ち我が版圖内は、少くも二國內には此奇異の種類を産することを知るべし、惜

ひらくは、未だ琉球産種を調査するの機会を得ざることを、抑も、螢は爾雅、毛詩の本文に記載せられしのみか、本邦に於ては、紀記の太古史も挙げられしものあれば、其東洋國民に知られしは、蓋し三千年に下らざるべし、然れば、詩歌も最とも多く詠まれし中に就て、支那に於ては、約千五百年前に當れる晉代に郭璞の詩あり、本邦には萬葉集にこそ收めざるやう覺ゆれ、千年内外を経たる各種の物語本よ、多々之を載せ置ける程あれば、その文士騷人の雅賞に入りしは、必ずしも車胤の故事あるが爲めとも限らぬあるべし、併し乍ら、之を以て化生蟲類の一となし、は明白の事實にして、今より二百年前までは、誰しも卵生蟲類とは思はざりき、既に之を卵生蟲に加へず、その雄雌に交殖の道を缺けりと信じたるや明らかし、是れ古人が、其の雌雄の區別を粗漫に附し、肯て同種を目的するに別種たりとの觀察を加へたる所以なる歟。郭氏が四言の古には、出自腐草、煙若散漂とあり、堀川百首の大江匡房卿の詠には『五月雨に草の庵は朽れども螢と成る嬉しかりける』などあるは、以て古代に於ける和漢の理科思想を測るべき好資料とこを言ふべけれ。

(未完)

◎ 螟卵採收と卵蜂保護に就て

第一回 全國害蟲 驅除講習修業生

在奈良縣 中野末喜

名和昆蟲翁が、岡田螟蟲採卵法を賞揚し、之を各地に指導せらるるや、螟蟲驅除法は翕然として採卵法に傾き來り、彼の點火誘殺の如き、今や幽幻殆んど見るべからざるに至れり。隨て往時よ在ては、諸報告紙上、點火の數を報し、誘殺の額を報するに止まりしもの、今や一變して、採卵數の多きを誇るもののみとなれり。學術の應用が、如何に實業上に大變化を及ぼすかは、實之を見て知る事を得べし、然るに、余は獨り怪む、各地共採卵の成績は報告せらるゝも、其採卵の結果として幾千の好影響を與へた

るやを詳にせざるを、適々採卵數に依り、稻の被害高を算出し、何萬何千圓の利益を收めたる割合なりと稱するものあれども、這は果して正當なる計數なるや否や、頗る疑の節なきを得ず、余は數年來、採卵の結果も就き觀察を下すを怠たらざるものなるが、山間の部落にして、螟蟲の移轉の比較的容易ならざる地に於て、採卵せる地方と、否ざる地方とを比較するに、兩者被害の輕重なきのみならず、或は却て激甚あるもの往々之れ無きにわらず、奈良縣生駒郡北倭村の如き、實に一村百萬に近き採卵をかし、一人にして多きは二三萬、又一反歩より千五百餘の採卵をなせるものありと雖も、其被害は隣村の採卵せざるものと輕重なく、亦長崎縣北高來郡眞津山村の如き、年々數百圓の螟卵買收費を支出すと雖も、今よ於て尙螟蟲の最大被害地たり、其他各府縣に就き、詳かに採卵の結果を調査すれば、判然其好果を收め得たるを聞くこと少なし、只幾分か少なし、若し採卵せざれば一層甚しかりしならんと云ふに過ぎず、是れ豈に驅除上の一大遺憾にわらずや。

而かも、其原因は深く研究するを要せざるが如し、余は實之を卵蜂保護の至らざるに歸するものありと信ず、名和氏は到る處の講演に、昆蟲相互の關係を詳説し、害蟲の驅除すべきが如く、益蟲の保護せざるべからざるを唱導せらるれども、世間は未だ斯く進歩すること能はざるなり、彼等は螟卵は益蟲ありと雖も、其益蟲の數や、害蟲の數より少なきを以て、併せて之を殺せも何の不可わらん、無智の百姓何ぞ害益を別つの暇あふんと自認するなり、去れば益蟲保護器ありと雖も、一村二三個乃至五六個を有するに過ぎず、甚しきは全然之を有せずして、直ち燒殺するものも亦少からざるが如し、若し果して斯の如くんば、螟卵採收は却て螟害を甚しくするの愚に陥らざるか、余の計算に従へば、螟蟲の産卵は二化螟蟲の第一期にあつて大凡そ五十日に亘る、而して卵蜂の螟蟲に寄生せる割合は、大凡そ五六

割に達し、卵蜂は亦大凡十二三日にして卵より成蟲に化するを以て、螟蟲の一産卵季節中、三回乃至四回化生するを得べし、若し果して四回化生するを得るものとすれば、五割の寄生卵は二十割の寄生卵となるべく、初期の採卵は、却て害蟲に數倍するの益蟲を殺すこととなるべし、翻つて採卵の實況を見るよ本田に於て、採卵を行ふものは、極めて少數に屬し、其多數は單に苗代田に於てのみ之を行ふが如し果えて然らば、一代の螟蟲に三代四代すべき卵蜂を有するを以て、前記の如く卵蜂寄生の割合は、十五割乃至二十割となり、益蟲保護器なくして採卵せらるゝのは却て採卵せざるものに劣るの現象を映出すべし。螟蟲採卵費に幾千の金額と、多大の勞力とを投じて、未だ其効果を認めざるもの、夫れ之に依るにわらざるか、余は實に益蟲保護器の數は、一村五六個の少數にては、絶對的に不可なりとし、往時の點火器の如く、少くとも一村百以上、一町歩は一個内外の設備を見るに至らずんば、採卵の効果を顯著ならしむる能はざるを信するものあり。記して以て大方の教を仰ぐ。



◎ 蚜蟲の話

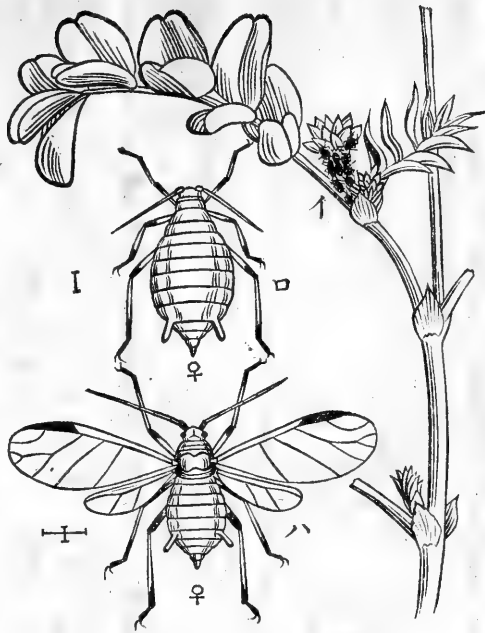
名和昆蟲研究所助手 森 宗 太郎

編者云ふ、本篇は當昆蟲研究所員の催しに係る、水曜昆蟲會席上に於て、森助手が講演せられたる談話の主要なり。

蚜蟲は有物目同翅亞目蚜蟲科に屬し、漢名を蚜蟲、和名をアブラムシと申しよして、アリマキ、アリコ、アプロ、コゴメ、ウンカ杯の方言があります。其種類極めて多く、從て被害の範圍も廣く、殆んど全株の植物に發生し、其繁殖の旺盛なる爲め、往々作物を枯死せしむることのあるは、既よ世人の認むる所であります。斯様に繁殖加害の甚しきより、之が驅除法の質問書を當研究所に寄せらるゝ方が非常に多

く、一々應答の暇なき程であります。故に私は不充分ながら蚜蟲に就て概略を申し上げ様と思ひますが、御參考の一助にも成りますれば幸と存じます。扱蚜蟲は、種類の異なるに従て習性経過の異なるは無論

(イ)は蚜蟲が紫雲英を加害するの狀
(ロ)は無翅の成蟲の放大圖(ハ)は有翅の成蟲の放大圖



らうと思はれます、乍然、幸に氣候の制裁やら、天敵の爲めに征伐せられて、右の如き繁殖は見ないけれども、素と繁殖の甚しきものであるから、折角驅除し盡したりと思ふも、數日を経ば又以前に異ならず繁殖し居るから、天より降りしか、地より湧きしかの疑ひを起すのは無理からぬ事であります。然し繁殖力より考ふれば、何も不思議な事はないので、寧當然の事でありませぬ。岐阜縣本巢郡地方は、農家の重要肥料として大切な紫雲英の産地でありますが、此紫雲英が蚜蟲の爲め著しく害を受け、年によりては半作にも充たんことがあります。上圖の(イ)は蚜蟲が紫雲英を加害するの狀、(ロ)は無翅の成蟲、

のことで、或は若葉を害するもあれば、根を害するもあり、幹に付くものもあれば、蟲癭を造るものもありませぬ。而して蟻の爲めに諸方に輸送されるもあり、或る時期は於て翅を生じ飛散するありて、非常に複雑であるから、之れが経過を詳しく調査するは容易の事ではありませぬが、先づ大体の経過は、春夏の頃は無性生殖で胎生をなし、其生れた仔蟲は悉く雌で、大概一週間内外を経れば成蟲となり、又胎生を始めます。漸次斯くの如くして、一年に十乃至三十世代を重ねるのであります。而して一母蟲の産する數は、少くも五六十頭多きは五六百頭でありますが、今仮に一雌蟲が三十頭産むとしても、十世代に至れば、五百三十五兆四千二百七十九億三千万余頭の勘定となるが、實際に於ては、中々是れ位なものでない。或る學者は、一頭の蚜蟲の一ヶ年間に繁殖することは、世界總人員の重量に等しと云はれたが、實よさもある

(ハ)は有翅の成蟲を書いたのであります。斯く若芽の處に居て養液を吸收致しますから、紫雲英は大に發育を妨げられ、時としては萎縮するのであります。本年は餘程害が少なかつた様でありました。私は本年五月十三日紫雲英の蚜蟲を採集して、一頭を別に飼育致しましたが、其産仔數は表の如く、

月日	仔蟲數	溫度	天候	月日	仔蟲數	溫度	天候
五、一四	八	六三	晴	五、一九	一二	六七	曇
五、一五	八	六二	晴	五、二〇	八	六五	曇
五、一六	九	六七	晴	五、二二	一二	六七	晴
五、一七	一〇	六七	晴	五、二三	一三	六七	晴
五、一八	一一	六五	曇	五、二四	一四	六八	曇

合計十間日、一母蟲が(毎日一母蟲を残し、産仔蟲は悉く他に移せしを以て、百〇五頭の數は全く一母蟲の産みしものなり)百〇五頭を産みました。又別に一雌蟲を飼育箱に入れ、五月十四日より三十一日迄十八日間、其儘にして置きましたに、無翅蟲六百四十二頭とありました。此他有翅蟲が無翅蟲よりも多い様でありましたが、これは或る用務の爲め、調査漏となりましたのは残念でありました。此の結果によれば、僅か十日間、一母蟲の産仔數百四頭でありまして、一世代の内には少くも二三百頭産むのであります。先に計算した五百三十五兆億萬の頭數は、僅か其一割程の小數として計算したのであるが、實際に於ては、實に算盤の持てる様なものでありませぬ。故に驅除の困難なる、大低想像が出来ませう、況や田圃一面に繁殖して、作物も萎縮する様に成つてから周章する方が多いですが、斯くありし上の驅除は、容易な事ではありませぬから、最初發生の未だ少さい中に驅除するのが肝要であります。これの蚜蟲に限らず、如何なる害虫を驅除するにも、此の心掛が無くてはなりません。さすれば驅除が容易で、奏効確實、加ふるに作物の生育上莫大の利益がある、所謂一舉三徳とも申しませう。藥劑驅除としては、石油乳劑の三十倍位の稀薄液を、噴霧器を以て一面に注射すれば最も効があります。

◎ 螟蟲驅除の一方法

岐阜縣稻葉郡 森島 勘次郎

編者云ふ、去六月六日第五十四回岐阜縣昆蟲學會月次會の節、森島氏は差支ありて出席出来ずして、斷り狀に添へ朗讀文を贈られたり。そは即ち本篇にして、中には參考に資すべき節あれば茲に掲載する事となしぬ、
追々螟蟲蛾の發生時季に近きました、何卒して本年は害虫を充分に驅除豫防して、十二分の收穫秋を

迎へんと希望致す。私は螟蟲驅除に就ての一錢の費用を要せず、又少しの勞力をも要せずして、螟蟲を驅除し得る方法を發見しました。夫れは何かと云ふと、た互が毎夜用ふる處の洋燈の直下三寸乃至五寸の處に、餛飩鉢位の器に水を盛り、其中に少量の石油を入れ置くのであります。而すれば農家の二階には、昨年收穫した藁が堆積しある、其莖中に越冬したる螟蟲の、羽化して田圃の稻葉に産卵せんとて飛出づるものは、洋燈の火光を慕ひて、其近邊を飛廻り、終に水中に陥り死すること妙であります。而も此の方法は別に誘蛾燈を用ふるに非らずして、常々毎夜用ふる洋燈の下に、一器を置く手數のみにて、其傍に讀書をなし、又は夜業を成し乍ら、多くの害蟲を採集し得られます。私が昨年此方法にて七月九日、十日の兩夜に於て採集しました結果は、螟蟲蛾六百二十二頭、螟蛉蛾七頭、浮塵子六頭、金龜子一頭、ハムシ二頭、ゴミムシ一頭でありましたが、僅か二日間の實驗なれども、螟蟲蛾實に六百廿二頭を獲ることが出来ました。若し之れを六月下旬より、七月中旬頃まで毎夜斯様に爲したならば、實に大變の螟蟲蛾を獲ることが出来ませう。又之れを一村一郡共同して此方法を用ひ、尙採卵法に注意したならば、恐らく螟蟲は一年として取り盡すことが出来ようと思ひます。然しながら、名和先生の言によれば、屋外の誘蛾燈に集まる處の螟蟲は殆んど雄にして、雌蛾は一小部分に過ぎない、而も産卵後の蛾が多いこの事でありましたから、私は疑ひを存し、去る卅四年七月試驗しましたよ、果して其言に違はば、家内にて燈下に陥るもの雌雄相半ばするよも係はらず、屋外にては甚だ少くありました。其試験の結果は、其當時の昆蟲世界に掲載してありますから、御覽なれば能く分りませが、諸君に於ても御實驗あらんことを希望致します。



雜錄

◎ 螟蟲驅防獎勵展覽會準備記事 (第二)

蟲の家主入

(一) 螟蟲驅防獎勵展覽會準備記事を設るの理由 本誌前號に於て昆蟲翁の隨感隨筆中に、螟蟲に關す

る博覽會と題し、本邦の一大害虫に對しては、大に調査するの必要あるより、少くとも展覽會を開きて、各地方の長所を集めて以て此強敵を驅防せばやとの説あるより、各地方の讀者よりは、實際に展覽會を開設するは第二とし、先づ第一に其準備として、螟蟲に關する件は新舊を問はず、あらゆる記事の本誌と掲載せんことを、續々希望せらるゝの向あるを以て、直に其意を了し、螟蟲驅防獎勵展覽會準備記事と題して、毎號多少に拘らず記載することに確定せしかば、大方の諸君、願くば續々御出品、否御報告あらんことを望む。

(二)農事月報中の螟蟲記事 内務省勸農局に於て出版せられたる、農事月報第一號(明治十一年三月)を見るに、鳴門義民稻螟蟲驅除實驗説と題して、青森縣津輕郡に於ける稻田蟲害の慘狀より、螟蟲の卵幼蟲、蛹、成蟲の着色圖を挿入して説明し、其他驅除の方法等に至る迄詳記せられたり紙數廿一頁。同報第七號(十二年九月)には、東京、大阪、青森、秋田、岩手、茨城、和歌山、三重、静岡、島根、兵庫、廣島、福岡、熊本、長崎、鹿兒島、滋賀の二府十五縣下に於ける、螟蟲被害の情況より、驅除の方法を記し、尙該蟲被害の分布圖をも加へらる紙數五十頁。尙又同報第十三號(十四年十二月)には、青森、岐阜、福島、長崎、熊本、島根、開拓(今の北海道)の六縣一使に於ける、螟蟲被害の情況より、驅除の方法を記せり。又ダマ油注入の實況を、挿圖を以て明示し、尙明治十二年并に十三年に於ける、螟蟲被害地名一覽表あり紙數廿二頁。

(三)螟蟲圖解 此ものは農商務省農務局藏版(明治十六年十二月刊行)にして、練木喜三氏の撰述なり。掛軸牀の一枚ものよて、中央に着色被害稻を畫き、卵塊の附着したる所より、幼蟲及び蛹の莖中に潜伏する状態、并に成蟲即ち螟蛾の飛揚の有様を示せり。尙放大圖を以て、四形牀(卵塊、幼蟲、蛹、成蟲)を現はし、驅除器械をも示したるに依り、一目して螟蟲の何ものたることを知るに足り、且つ簡單なる説明をも加へたれば、一讀直に驅除の方法を了解し得べし、而して茲より可笑しきは、幼蟲并に成蟲を見るに、二化生螟蟲に屬するも、卵塊を見れば三化生螟蟲のそれにな似り、恐らく誤りならんと信す。

(四)福岡縣の螟蟲驅除豫防法 河島福岡知事には、本年五月十日并に十四日、縣令第三十、卅一號、及び訓令第廿六、七號を以て、螟蟲驅除豫防の方法を示せり、之を左に記さん。

(縣令第三十號)三浦、山門、三池、八女四郡、久留米市、三井郡の内上津荒村、國分村。稻田畑に螟蟲蔓延の兆あるを以て、明治廿九年法律第十七號害蟲驅除豫防法第四條、及明治卅一年本縣令第廿號第一條に依り、來る五月廿日より七月廿日迄、苗代田畑及本田畑

に於て、市町村費を以て螟卵螟蛾採集を行ふべきを命ず。市町村に於ける施行の方法及日割は、郡市長の定むる所に依るべし。
(訓令第廿六號)三溝、八女、山門、三池、三井郡役所、久留米市役所。本年、本縣令第卅號を以て、螟卵螟蛾採集を行ふべきを、市町村に命じたるに就ては、左の各項に準據して之を行ひ、又は行はしむべし。(一)螟卵螟蛾の採捕は、早稲苗代田畑に於ては二回以上、中稻、晚稻苗代田畑及靱播本田畑の初期(他の苗代田畑ある期間を云ふ)に於ては五回以上、雇人を使用して之を行はしめ且各自をして之を採捕せしめ、移植田及靱播本田畑の後期(移植田とし期間を云ふ)に於ては、各自のみ採捕せしむべし。其各自をして採捕せしめたる卵又蛾は、市町村費を以て之を買収すべし。但採捕蛾に要する雇人の賃銀は、一人毎に、其部は一定の金額を支給し、殘部は採捕蛾の數に應じて支給するも妨げなし。(二)卵及蛾の買上價格は、苗代田畑及靱播本田畑の初期に於ては一卵若は一蛾に付金壹厘以上、移植田及靱播本田畑の後期に於ては、五毛以上にて之を定むべし。(三)本令施行に要する市町村書

蟲驅除豫防費の豫算は、其市町村内稲田畑反別一町歩に付、金五拾錢以上に當るべき金額を標準とし之を設くべし。
(縣令第卅一號)筑紫、糟屋、宗像、遠賀、鞍手、嘉穂、朝倉、早良、糸島、企救、京都、田川、築上、浮羽、三井郡上津荒木村國

分村を除く、門司市、小倉市。稲田畑に螟蟲發生せるを以て、明治廿九年法律第十七號書蟲驅除豫防法第三條、及明治卅一年本縣令第廿號第一條に依り、來る五月廿日より七月廿日迄、左の通り之が驅除豫防を行ふべきを、稲田畑作人に命ず。但稲田畑作人本令の通り行はざる時は、市町村長は市町村費を以て之を行ひ、其費用を該作人より徵收すべし。(一)苗代田畑及靱播本田畑並移植田に於て螟卵螟蛾驅除を行ふべし。(二)螟卵螟蛾驅除の方法及日割は郡市長の定むる所に依るべし。

(訓令第廿七號)筑紫、糟屋、宗像、遠賀、鞍手、嘉穂、朝倉、早良、糸島、浮羽、三井、企救、京都、田川、築上郡役所、門司、小倉市役所。本年本縣令第卅一號を以て、螟卵螟蛾驅除を行ふべきを、稲田畑作人に命じたるに就ては、該施行の方法及日割は左の各項に準據し之を定むべし。但其定めたる方法及日割は、郡市長より當廳へ届出づべし。(一)螟蛾の驅除は点火誘殺又は捕殺の方法に依るべし。点火誘殺法を用ふる時は、其点火數の割合は、苗代田畑壹反歩に付三個(百坪未滿は總て壹個)、靱播本田畑及螟蛾産卵前に移植せる本田壹町歩に付三個(千坪未滿は總て壹個)以上とすべし。捕殺法を用ふる時は、其施行の度數は、苗代田、靱播本田及移植田共、通じて五回以上の割合にて、其日割を定むべし。(二)螟卵の驅除は、苗代田畑、靱播本田及移植田通じて五回以上の割合にて、其日割を定むべし。(三)螟蛾の捕殺は、螟卵の採集とは、同時に之を行ふも妨げなし。

(五)福岡縣糟屋郡螟蟲驅除費 福岡縣糟屋郡農會は於ける、明治卅六年度經費豫算中、特に螟蟲に關係したる費目を調査したるよ、(一)稻螟蟲驅除豫防補助費一千圓とあり、其説明に、町村に於ける螟卵買収及殺蟲燈、雇夫、点火の事業に對し、内五百圓を田畑租金に依り、五百圓を螟卵螟蛾の採集數に依りて、補助額を定む。但螟卵千塊と、螟蛾一合とを以て、補助額算出の單位とす。(二)害蟲驅除法試驗

費十八圓、其説明に、三化生螟卵を一塊に付五厘以内にて買収し、大字佐谷障子岳に於ける、秋季螟蟲の驅除を試験す。

(六)新農報記載の螟蟲驅除法 大阪市新農報社發行の新農報第五十三號を見るに、螟蟲驅除に關する有益の記事あり、且つ編者の附言をも添へられたれば、今左に是を轉載す。

○螟蟲驅除に關する懸賞 大阪府東成郡農會にては、螟蟲驅除獎勵の爲、卵塊及び被害莖採集者に賞金を付與する事とせり。其方法は、(一)螟蟲卵塊廿塊又は螟蟲の蝕入せる莖二百本に、抽籤券一枚を付與す。(二)抽籤券十枚以上を得たるものには、十枚毎に一枚を加付す。(三)抽籤券を有するものには、抽籤法により、左の金額を賞與す。右賞與金額三百廿圓にて、一等拾圓(一箇)、二等五圓(三箇)、三等壹圓(百箇)、四等五拾錢(二百箇)、五等卅錢(三百箇)、等外壹圓(十五箇)あり、此等外と云ふは、最も多數に抽籤券を得たる者、十五名を限り賞與するもの、由、抽籤券引替期限は、十月十日限りなりと。

○螟蟲卵塊買上の告示(佐賀縣假名文字報) 佐賀縣杵島郡長は、此程管内各町村へ、左の規程に従ひ、螟蟲卵塊を買上ぐべしと布達せり。(一)本年、郡内に於ける、苗代田より採取したる、螟蟲の卵塊は、千個に付金卅錢の割合を以て、金四百五拾圓の額に充つる迄、之が買上を爲す。(二)卵塊買上高、豫算額を超過せんとする時は、郡役所へ卵塊到着の前後に依り、買上をなす。(三)卵塊買上を受けんとするものは、卵塊百個毎に一括し、千個を一束とし、其數及び自己の住所氏名を記したる付箋を爲し、左記書式(畧)の請求書と共に、之を摘採地の町村役場に差出すべし。但し小學校生徒にして、教員引卒の下に採卵したるものは、其學校に於て取纏め、其數及び校名を記し、凡て本條の手續に依り送附すべし。(四)前條に依り括束なきものは、之を受理せず、但し百個未満の端數は此限りにあらず。

编者(新農報)曰大阪府東成郡と云ひ、佐賀縣杵島郡と云ひ、其方法は異なれりと雖も、其主眼は、螟蟲を驅除せんが爲めに、卵塊の採集に重きを置くものなり。誘蛾点燈の如き、徒らに金錢と手數を要するに過ぎざる螟蟲驅除法の、年々減少するは喜ぶべきの現象なりとす。

(七)一螟蟲蛾の有する卵數と卵塊數 螟蟲蛾を解剖して、其卵巢を調査するに、蠶蛾と同様八個の卵囊を有す。又一卵囊中は、凡そ七十乃至八十の卵粒を保てり。故に今一囊七十粒と假定して、八囊に乘する時は五百六十粒と成る、是れ即ち一螟蛾の卵粒を計算するの便法なりとす。又他に於て、稻葉に産附したる卵塊を見るに、一塊少きは三、四十粒より、最も多きは四、五百粒許に達するものあり、故に大抵一蛾の一塊に産卵せしを證え得たるも、其多くは、一蛾能く數塊別ちて産卵し得るものと信ぜらるゝなり。

(八) 屋内より飛び出づる螟蟲蛾 農家の屋内には、常々多少の稻藁を貯藏し置くものなれば、自然螟蟲も、屋内に於て越冬す。此もの時期を得ば、蛹化に、次で羽化して田圃に飛び去るなり。然るに此頃水曜昆蟲談話會の席上に於て、助手名和愛吉の話を聞くに、「螟蛾の屋内より飛び出づるは、大概午後七時頃にして、先づ戸口とか壁とかに止り、暫く休止して、後田圃に向ひ飛び去るなり。之れを捕獲するには、戸口等に止まりし時(容易に逃げざるを以て)を以て宜しとす。次々又室内に燈火を点じ置くときは之を慕ひ來る故、此時適當の方法を設けて捕殺するを良しとす」と云へり。尙本誌講話欄内。森島氏の螟蟲驅除の一方法と題する一項を、参照せられんことを希望す。

(九) 螟蟲羽化の時期 年々の調査に依れば、第一回の羽化は於て、早きものは四月中旬より、遅きものは七月下旬に到る、實に三月に渡り羽化するを以て、恰も第一回の遅きものと、第二回の早く羽化するものとは、相連絡して、殆んど區別し難きとあれば、是等は驅防上、大に注意を要すべきとなり。現に本年七月上旬の調査に依れば、飼育中の螟蟲、十の二三は未だ蛹化せざるものあり。

(一〇) 小學兒童と螟蟲採卵 螟蟲採卵には、到底老人壯年の不適當にして、寧ろ婦人小兒の適當なるとは、最初より幾多の經驗に依りて、明白とする所なり。然るに年は一年と、採卵法の行はるゝと同時に、小學兒童が如何に好成績を現はしつゝあるかは、次に示す所の各地新聞紙上の記事に於て證し得るゝなり。

(一) 小學生徒と害蟲

昨年害蟲發生の稠り、各小學生徒をして、螟蛾及び螟卵の捕集を行はしめ、頗る好成績を得たるを以て、本年も目下害蟲發生の摸樣あれば、便宜上右生徒をして、害蟲捕集方取計はれ度由、昨日下午毛郡長は、各學校長へ通牒を發したり

。(大分縣中津新報六月十二日)

(二) 螟蟲蛾捕獲數

五月廿九日より六月七日までに、大原郡各小學校に於て、螟蛾を捕獲せし數は、二万五千九百五十一にして其卵數は三千三百廿一なりしと。(島根縣松陽新聞六月十二日)

(三) 懸賞害蟲驅除

府下豊能郡にては、目下苗代の害蟲驅除法履行中なるが、頗る好成績を呈し、現に同郡細河村尋常小學校生徒は、螟蟲の卵塊六千餘を採集し、爲に懸賞抽籤券に缺乏を告げ居る由にて、此際尙懸賞券を續出すべしと云なり。(大阪毎日新聞六月九日)

(四) 螟蟲採卵狀況

蒲生郡各町村小學校兒童の螟蟲採卵狀況、其後の分左の如し。

▲櫻川小學校兒童八十八人、採卵數千二百七個、五月卅日より四日間從事▲馬淵小學校、採卵數二千餘個、五月廿一日より六月

三日迄、職員及び三學年以上生徒總て從事▲平田小學校兒童六十二人、採卵數三千四百四十五個、五月廿二日より六月三日迄▲南比部佐小學校兒童六十人、採卵數七百廿一個、六月一日三日四日の三日間に於て從事▲老蘇小學校兒童三十九人、採卵數九十個、螟蟲數百一匹、五月廿一日より六月四日迄▲岡山小學校、採卵數百八十一個、五月十九日より廿二日迄、尋常四學年及高等生引卒從事▲鏡山小學校兒童百人、採卵數九十七個、六月一日及同三日兩日間▲鎌掛小學校、採卵數百廿個、六月八日迄の採卵數▲苗小學校兒童八十四人、採卵數二千四百八十七個、螟蟲數五百個、五月廿九日及六月四日兩度▲市原小學校兒童三百三十三人採卵數九千九百廿個、外に隨意二千百一十個、五月廿八日より六月五日迄▲金田小學校兒童百八十二人、採卵數二千四百九十三個、五月廿七日より七日間▲上田小學校兒童四十人、採卵數三百六十三個、同上▲淺小井小學校兒童十五人、採卵數六十七個、同上▲玉緒小學校兒童三百十六人、採卵數百四十八個、六月三日より三日間(近江新報六月十七日)

(五)小學生徒の害蟲驅除 一昨十二日、西山梨郡役所に於て開會したる、同郡小學校校長會議に於て、小學校生徒をして害蟲驅除を行はしむるを、原案の通り可決したるが、右は明十五日より、毎日授業前後の餘暇を利用して之を實行するとさし、郡長より各村長へ傳達の上、農會長等も同行せしめ、郡役所より河西技手を出張せしむるよし。又右に付き若干の費用を投じて、生徒獎勵法等も行ふことになせしといふ(山梨日日新聞六月十四日)

(六)小學生徒の害蟲採取 宮城郡根白石村にては、本月十日より三日間、小學校生徒五百名をして、苗代田害蟲を採取せしめたる由にて、其結果は、高等科四年六千六百廿九塊、同三年一万三百二塊、同二年一万五千百塊、同一年一万七千九百三十塊、尋常四年六千四百三十六塊、同三年二千四百六十三塊、同二年千六百六十塊、合計六万五千三百三十塊にして、此獎勵金三拾六圓余は、役場より夫れく教員をして、生徒に配與せしめたりき(宮城縣河北新報六月十九日)

◎六足蟲彙纂 (午の巻)

在東京 長野菊次郎

(十六)水棲の鱗翅類(其二) 髓蟲科(Pyralidae)に隸するアケントロプス屬(Acentropus)の幼蟲は鱗翅類中、全く水棲の性を有するものなり。斯る奇性を有すると、又翅鱗の甚だ劣等なることによりて、此屬は從來久しく毛翅目(Trichoptera)に編入せられたることありき。抑此屬の雄は、往々淺瀬の上に、無數飛翔することを認むることあり、然れど雌は人の目に觸るゝこと甚だ少くして、往々使用に堪へざる位の微小なる翅を有し、殆んど無翅の状態を呈することあり、斯る雌は交尾の爲め、水の表面を浮び出で、水中にて交尾す。幼蟲の脚は、普通の鱗翅類と同數にして、尙他の鱗翅類が空中にて、其食を取る

が如く、此類は水中にて植物の葉を食ふものあり。此類は鰓の痕跡ぐよ有せざるよ、如何よして水中に呼吸し得るかの方法に至りては、未だ不明に屬すと云へり(ケンブリッジ博物館)。

(十七)水棲の鱗翅類(其二) 梅毛蟲蛾科(Lasiocampidae)より、近來分離せられたる、ユープレオチデー科(Eupteroidea)に隸するパルヌストラ屬(Palustris)の者にて、南亞米利加に産するもの、其幼蟲、水棲の性を有せり。此幼蟲は總狀の毛を背部に密生し、兩側には長毛を粗生し、軀を捲縮伸長して、水中に游泳するものなり。稀に水面に浮び出づる時は、背毛は全く乾きて側部の毛のみ濡れ、氣孔は甚ぶ小あるが、其呼吸の方法は未詳ありと云へり。今此蟲を水の外に出すときは、空氣中にも移動することを得、然れども、久しく此状態を繼續すること能はず。又此幼蟲は奇異ある方法により、水中にて蛹化する。即ち最初一疋の蟲が繭を形成するとき、他の蟲は順次來りて是に附加し、終に群繭の塊を生ずるに至る。此屬の一種は、長さ絨毛の間を混じたる空氣を呼吸するならんと信せらる。此幼蟲が時々水面に浮び出づることあるは、蓋し新鮮なる空氣と交換せんが爲ならんか、又其短き刷毛狀の毛の先端は、皆膨脹せりとなり。然れども孰れが呼吸に關係あるかは、未だ分明ならずと云へり(ケンブリッジ博物館)。

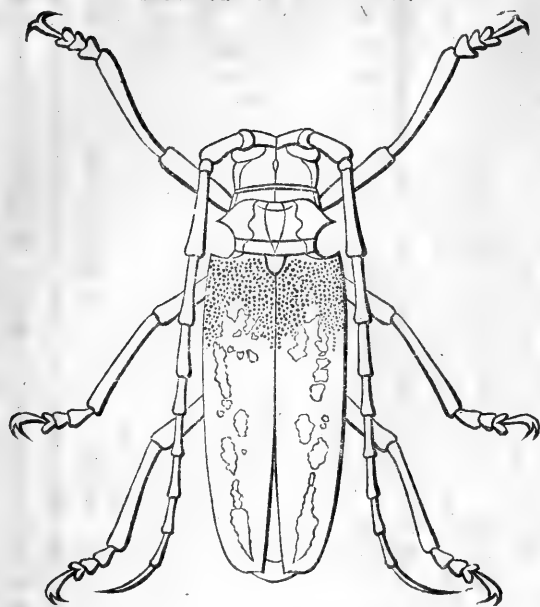
(十八)負子に對するカムストック氏の意見 前々號の學說欄よ、カムストック氏の著書を引用して、同氏の負子の負卵に對する意見は、雌蟲論者なりとしたり。然れどもスレーター嬢(前號にストラッターと有るはスレーターと訂すべし)の實驗以來、同氏も雄蟲論に首肯せられ、新版のインセクトライフ(昆蟲生活)中よは、多分訂正せられたるならんとなり。且又同氏はスレーター嬢の記事中、亂暴なる目的を遂げんが爲め、數時間爭ふ云々の語を見て、斯る現象は、交尾の際、昆蟲界も行はる、通常の事よしとて、決して負子にのみ限りたるに非ざれば、餘り文を弄したるものなりとて、大に非難せられたりといへり。尤も米國産のザイタ屬のものは、雌雄の形態殆んど同一なるを以て、外形にては殆んど之を區別すること能はずとなり。以上述ぶる所は、親しくカムストック先生の許にて、斯學を研鑽せられたる、河内忠次郎氏の直接の談話を記したるものなるが、負子に對する余の疑問、否多數の人の疑惑も、内外研究の結果、同一轍に出でたる今日にては、久しく立籠めたりし雲霧を一掃して、光明万丈の天目を觀る思あり。斯學の進歩上豈慶賀せざる可けんや。

◎昆蟲に關する隨感隨筆、(第二回)

昆 蟲 翁

(十一) 岐阜蝶の新産地 岐阜縣飛驒國益田郡下原村字三原に於て、本年四月二日中井藤助氏採集、又同國吉城郡小鷹利村寺地觀音堂に於て、本年四月十八日後藤幹氏採集、昨年同國大野郡に於て、千原治作氏採集(昆蟲世界第六卷四百六十八頁通信欄參看)されしを以て、飛驒三郡共々發生し居ることを確認したり。

(十二) 伊吹山採集の昆蟲 本年六月十三、四の兩日間、助手森宗太郎、名和愛吉の兩人、伊吹山に於て昆蟲採集をせしに、相當の獲物ありたり。今茲に全く標本と成りしものを調査せしむ、膜翅類には、鋸蜂科廿四種七十七頭、姫蜂科三種六頭、胡蜂科二種二頭、蟻科一種二頭。鱗翅類は、蛇目蝶科一種一頭、粉蝶科一種一頭、蛺蝶科一種一頭、弄蝶科一種一頭、葉捲蛾科二種四頭。雙翅類には、喰



(形眞) 圖の(シムリキミカ)牛天

科一種一頭、葉捲蛾科二種四頭。雙翅類には、喰呀虻科一種三頭、家蠅科二種二頭、寄生蠅科二種二頭、籠甲蠅科三種六頭、扮蜂蠅科三種十九頭、食蟲虻科二種六頭。甲翅類は、螢科十五種六十五頭、斑蝥科一種九頭、步行蟲科四種七頭、隱翅蟲科三種十頭、瓢蟲科四種十頭、叩頭蟲科三種廿頭、象鼻蟲科八種十一頭、青象鼻蟲科六種八十九頭、金龜子科十一種五十五頭、葉捲象鼻蟲科六種十五頭、葉蟲科廿三種百八十一頭、地膽科一種一頭、天牛科八種十頭。半翅類には、角蟬科一種三頭、浮塵子科九種十三頭、泡吹蟲科四種六頭、食蟲椿象科二種二頭、椿象科五種九頭。羅翅類に、舉尾蟲科三種十五頭。合計卅七科百八十一種六百九十一頭にして、此内尤も珍種と稱すべきは、天牛科に屬する姫天牛あり。

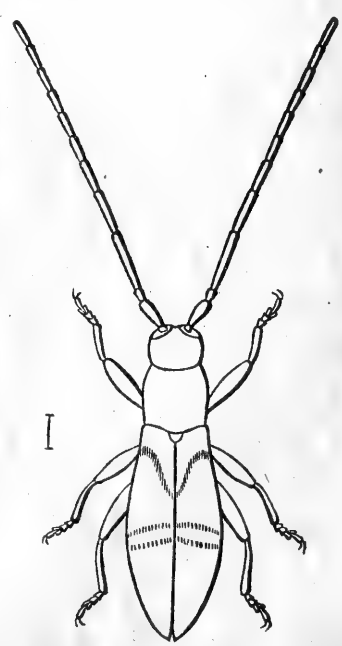
(十三) 普通天牛と姫天牛との比較 昆蟲類中重

量の尤も多ものは、恐らくカプトムシならん夫も次ぐものは、天牛(カミキリムシ)即ち天牛科中の代表者たる、普通天牛なり。此ものは誰人も能く知る所なれば、天牛の總名代とありて、單にカミキリムシと稱すれば、直に該種のことを意味せり又姫天牛(ヒメカミキリムシ)は、カミキリムシに反して、百數十種の天牛中、尤も小形なるものにして、体長漸く三分に達するに過ぎず、該種は伊吹山に於て稀に採集し得る所の珍種と云ふべきなり。

(十四)美濃國氣象俚諺と昆蟲 岐阜縣岐阜測候所發行の、美濃國氣象廿年報を見るに、其内に美濃國氣象俚諺と題して、百數十ヶ條を記せり。今昆蟲に關するもの、みを左に示さん。

●晴の部 蜻蛉屋内に入れば晴天なりと云。赤蜻蛉一處に群集するときは日和なりと云。蟻島畔の低き所に集合するは晴れと云。●雨の部 蟻穴巢より土を搬出せば將に雨ふらんとするも雨ふらず。蚊の刺し方酷しきは雨の兆なりと云。夜中蠅出るときは雨近し。●風の部 諸蜂巢を土中より作る年は風災ありと云。●雜の部 蜂の巢の高ふかけるは風吹かず、ひくふかけるを大風と知れ。冬温暖なるときは翌年蟲類多しと云。

(十五)鼠毒蟲を食せず 昨卅五年一月始め、岐阜縣本巢郡船木村の高等小學校生徒に依頼して、冬季休業中に於て鴟の刺餌を蒐集せり。其集まりし數實に數百、其内イナゴあり、ガメムシあり、カマキリあり、ケムシありツチハンメウ等あり、然るは是を箱中より分類の上保存し置きたるに、豈に計らん鼠害に出合ひ、殆んど見るに堪へざるに到り、如何に悔むも最早致方なし。然しながら茲も、不幸中の幸福とも云ふべき面白き事實は、ツチハンメウのみ一も鼠害を罹り居らざるとを見出したり。是れ元來ツチハンメウには一種劇毒の成分(发泡劑に使用す)を有するを以て、鼠の食害を免れたるを知れり。



(大放)圖のシムリキミカメヒ牛天姫



◎博覽會出品害蟲標本解說書

岐阜縣 稻葉郡農會

編者云ふ、岐阜縣稻葉郡農會は、今回第五回内國勸業博覽會に害蟲標本を出品して三等賞牌を受領せしが、今該標本解説書並に沿革史を得たれば茲に掲載して讀者の參考に供す。但し該標本は桑樹の害蟲ヒメザウムシに重きを置けるものなり。

部	類	番號	品名	出品人	會	長	小	幡	忠	藏
一	八	一	害蟲標本	岐阜縣稻葉郡農會						

一、製造地 岐阜縣美濃國岐阜市西野町稻葉郡役所内

一、原料 岐阜縣稻葉郡是として調査すべき、農作物害蟲を採集し、之を飼育し以て之に充てたり。

一、製造用品 飼育箱、毒瓶(青酸里加)、アルコール等、其他整理に要する展翅板、名刺用紙、針、ダラカ

ンドゴム、アラビヤゴム、綿、紙及び顯蟲鏡、鍬、ピンセット、吹管等なり保存としてナフタリンを用ふ。

一、製造方法 明治三十四年五月十日、本郡内各岐阜縣害蟲驅除講習修業生に養蟲箱を分與し、各分

擔を定め、郡是たる農作物害蟲を採集し、名和昆蟲研究所の養蟲法に倣ひて飼育し、發生經過に番號を

附し、其時々標本用に製せり。其方法は、卵は蒸熱し、幼蟲は毒瓶(青酸加里)に投入し、全く死歿した

る後、腐敗を防ぐ爲め臟腑を抜き出し、乾燥の上綿或は紙等を以て原形を存するを務めたり。蛹は卵同

様熱殺し、成蟲は展翅板に掛けて適法に調製し、小形の物は、名刺用紙に直接に貼り付け置き、標本製

作の際温湯に浸し、再び之を整理したるものなり。亦植物に至りては、被害當時のもの、或は被害植物

を採集し、標本に充てたり。全く整理の末、腐敗及び微菌豫防の爲め、ナフタリンを適當に挿入したり

一、沿革 創立は、明治三十三年九月五日、稻葉郡農會中は昆蟲研究会を置き、明治三十四年四月第

一回全國昆蟲展覽會を岐阜縣に於て開設し、裝飾用及び分類並に害蟲標本を出品し賞を受く、明治

三十五年二月、岐阜縣冬期昆蟲展覽會に、分類標本並に害蟲各越冬の狀況標本を出品し賞を受く、又事

業としては、明治三十二年、稻葉郡島村桑樹害蟲ヒメゾムシ模範驅除を勵行せんが爲め、郡内の岐阜縣害蟲驅除講習修業生を特派し、村内各要所に模範伐りを爲し驅除に便ならしめ、又同村驅除執行中は監督として巡回説明の勞を取らしめ、大に効を奏せり。而て本郡の模範をして、縣下の模範たらしめんことに務め、漸く完成し、其養蠶期に至り、桑樹生長を助け、且つ桑葉繁茂し、加ふるに伐採の際し、以外に手数を省きたると、伐採跡發芽充分なりし爲め、本縣下一般の模範と爲り、其翌年明治三十三年及三十五年には、本郡を初め、七郡三十有餘町村の驅除實行を見るに至りしは、全く本郡の模範と出しものなり。其詳細は別に添附せる沿革史にあり。

一、効用 壹號はイネノアラムシ、稻苗代田竝に本田の害蟲にして、發生經過を示し、學理及實地研究材料として、驅除の適期を悟らしむるに便として、加ふるに益蟲及間接の害蟲をも添、植物も添附し以て一目瞭然ならしめたり。貳號はイナゴ、苗代田及本田の害蟲として、表示の如く、發生經過等を明白に解悟せしむるに便せり。參號はイチモジセ、リ、本田の害蟲にして、之に伴ふ寄生蜂、及び寄生蠅即ち益蟲類竝に被害植物も挿入しあれば、見學に極めて利便なり。四號、五號はイネノゾウムシ、第一回及第二回の發生經過を示したるものなり。而して該蟲は一年二回の發生を爲し、且つ其繁殖力極めて夥しく、之が驅除の方法に至ては、難易頗る大差あるを以て、其經過中該蟲の弱點、即ち驅除の爲し易き時季を撰ばざるべからず。該標本は卵塊部、被害部及寄生類等をも添へたれば其經過を認むるに適せり。六號は桑樹の害蟲金姑蠅にして、被害植物、及其經過、竝に現況を表示し、如之ならず、益蟲類二種を添へ、學理研究の應用に便せり。七號は桑樹の害蟲枝尺蠖、發生經過を表示せしものにして、加ふるに寄生蜂、及寄生蠅を添付しあれば、學理研究上にも大に便あり。八號は桑樹害蟲、鐵砲蟲として、其發生經過、被害の狀を顯し、極めて驅蟲の當を悟り易からしめ、加ふるに寄生類を添へあるを以て、學理研究材料にも、大に効あるは明かなり。九號は桑園の害蟲ヒメゾムシ、發生經過を示し、其被害の狀況を顯し、加ふるに寄生蜂も添付しあれば、研究上最も必要あり。拾號は桑樹の害蟲ヒメゾムシの冬季即ち蟄伏越年の現象を顯し、且つ驅除の實狀を示し、加ふるに器械を挿入し、及其方法を顯しあれば、驅除實行に際し、其獎勵材料として最も効力を有す。

一、褒賞 明治三十四年五月十二日、第一回全國昆蟲展覽會に於て、分類標本は貳等賞、裝飾用標本

は參等賞、害蟲標本は參等賞を受く。明治三十五年二月十一日、岐阜縣冬季昆蟲展覽會に出品し、害蟲標本に對し貳等賞を受く。其他益蟲標本、及分類標本等何れも賞與を受けたり。

一、審査請求の主眼 本會出品物は、本郡中、農産物を損害する最大の害蟲にして、之が驅除の爲すに當り、其害蟲の發生經過を知得するは最も必要なり。故に其發生經過をして、一目瞭然ならしめ、加ふるに敵蟲を添付し、其有益蟲は保護すべき必要を示し、且つ研究上最も必要なる点、并に標本製作は堅牢にして永く標本たるに適する点等なり。

◎ギフテフ遠江に産す

静岡縣 神村直三郎

昆蟲の總てに於ては、其食草と氣候の一致ありて、且地續きよかりければ、大概、同種のもを産すると云へることは、學者の是認する所なり。然して我遠江は岐阜と共々同じく本州中央部に位すれば、即ち地續きに於て、其氣候、亦大差なければ、岐阜に産するギフテフの遠江に居らざるは、獨り其食草の如何によるものなるおとは、明ならん。其唯一の食草たる、ウスバサイシンをば、未だ當地に所産を認めずと雖も、其同科のカンアフヒなるものに至ては、所々にこれを見ること珍らしからず、又同蝶の稀に食する(動物學雜誌に其説あり)馬兜鈴の如きも、中遠地方には頗る豊のよ産する植物あり。因て吾人を初め、同好の士の、遠江地方に於てギフテフ所産を疑ふや茲に年あり、友人岡田忠男氏は、其郷里即濱名湖以西に於て、曾つて一頭を採集せられたりしことありとか話られしことありき。去れど、目下同君の所有せらるゝにあらざれば、或は何かの誤にはあらずやと、吾人は半信半疑のうちに、彷徨しつゝありしに、圖らずも本年四月上旬に於て、我中遠の地、然も隣校の生徒のこれを得たりとの報は傳えられたり、隣校とは見付高等小學校にして、同校生徒某通學の途次、磐田原の一部に於て捕獲せられたるなり直に馳せて一見せしに、正しくギフテフなりき。磐田原は見付町より北方秋葉光明の諸山に連れるの高阜よして、カンアフヒに富み馬兜鈴亦少なからず。因て、該蝶は磐田原の産よして、他より移り來りしにはあふざるものありとの推測を下したり。而して該標本は現に見付高等小學校に在り。以上の事實亦も、尙且所産の証據となすよ足れるを、又一層信憑すべき大発見あり、を何ぞといふに、同校職員久松、溝口、の兩氏、去る五月三日、附近の原野に於て採集を試みられたるよ、偶カンアフヒに産附せられたる卵粒を發見し、これを採集せられ、併せて又同植物に於て幼蟲をも捕へられたり、これを見

るに、又々がひもなきギフテフの卵と幼蟲あり。此幼蟲今久松氏手元に飼育しつゝあり、食草はカンア
フヒなり。試に馬兜鈴を與ふるも、好まざるの傾向ありといふ。是は發見及飼育に係る大要なり、以て
同蝶が確に予が地方、即静岡縣の一部なる、中遠地方磐田原に産するの事實を、世に告知するものなり。

◎小學兒童の害蟲驅除成績

岐阜縣揖斐郡鶯尋常小學校 弓 削 良 彌

本校に於ては、年々螟蟲并に稻蠶の卵塊採集を兒童に獎勵して之を實行せしめつゝありしが、本年も亦
放課時間、或は土曜日午後、又は日曜日等に於て、職員自ら兒童を引率し、實地に臨みて採集方法を
授け、尋常一學年の幼童に至る迄熱心に驅除せし結果、螟蟲卵塊六万五千四百六十三塊、稻蠶卵塊五十
二升一合七勺を獲たり、今之が採卵數を、各學年男女別記載をれば左表の如し。

●螟蟲卵塊採集表

採卵人員	採卵塊數	一人平均採卵數	最多採卵數	最少採卵數
第一學年男十三人	一六一三	一二四	四二四	四塊
同 女七人	七三〇	一〇四	三九五	一六
第二學年男十九人	三八四一	二〇二	七二二	三二
同 女十七人	三八一〇	二二四	五二八	三
第三學年男廿二人	七七六六	三五三	一三二〇	三三
同 女二十人	九九六〇	四九八	一八一	九三
第四學年男卅一人	二一〇七七	六八〇	二五九九	三九
同 女廿一人	八八七八	四二三	一〇〇八	五九
卒業生男女廿一人	七七八八	三七七	一九五七	三一
計	百七十一人 六五四六三	三八三	二五九九	三

●稻蠶卵塊採集表

採卵人員	採卵量	一人平均採卵量	最多採卵量	最少採卵量
第一學年男十四人	四八、八	三、五	七、六	一、四
同 女八人	三三、一	四、一	六、七	一、一
第二學年男十人	四三、〇	四、三	一一、〇	一、二
同 女十三人	八五、八	六、六	一六、〇	一、〇
第三學年男六人	五二、四	八、七	二〇、〇	一、〇
同 女十一人	四四、六	四、一	九、〇	一、〇
第四學年男十四人	一五五、五	一一、一	二五、六	二、〇
同 女九人	三一、六	三、四	九、二	〇、六
卒業生男女七人	二七、〇	三、八	九、一	一、〇
計	九十二人 五二一、七	五、七	二五、六	〇、六

備考右螟蟲卵塊は苗代田に於て採集せしもの、みにして、本田の分は、尙採集中なれば追て報告せん。而して是等の驅除は買上
法等に據るに非らずして兒童が全く害蟲の恐るべきを識れると、一つは年々筆墨類の學用品を與へて、僅かの獎勵をなせる結果にし
て經費は僅々五、六圓に過ぎず。

編者云ふ、害除驅除の完全に行はれざるは、其蟲の經過習性を自ら極めずして、徒に巨額の費用を投じ、以て買上法或は獎勵法を行ひ、一時騒ぎ立つるも、宇宙百般の關係に暗き、遂に其効を見ずして中絶し、失敗に歸するものなり、豈歎すべきの至りならずや。必竟是等は、昆蟲思想の幼稚なるによるも雖も、亦驅除費を濫用するもの、其一因たらんばあらず。蠶村に於ては、年々小額の驅除費を以て成蹟中々見るべきものあり、編者は寧ろ巨額の費用に使ふべし使ふべからずし、當局者の手腕と、昆蟲思想の發達を促すものなり

◎昆蟲に關する葉書通信 (第三十三報)

(二八五)長野縣北安曇郡松川村の蟲送(長野縣、帶刀喜市) 横蚊非常に發生する時は(少々位又は小部落發生よりは行はず)村内一般午后八時より、各松明を持ち、三五人宛組を作り、中には太鼓又ハ石油空鐘等をたゞき、或はヤンチャ〜と大聲を發して、田圃の畦畔を順次巡回の後、午后十一時頃、村内の産神に集合して神酒を飲み、以て能事了れりとなす。(六月十七日附)

(二八六)稻作害蟲報告(大分縣南海部郡上墜田村、岩田秀太郎) 本年當地に發生せる重なる稻作害蟲は、下に列記せるが如し。トビイロウンカ、イナヅマヨコバヒ、ツマガグロヨコバヒ、クロクサガメムシトビイロガメムシ、二化生螟蟲(目下産卵最中)、イナゴ、イネノアラムシにして、三化生螟蟲は未だ之を認めず。(六月二十二日附)

(二八七)小學兒童の螟蟲採卵二件(岐阜縣山縣郡保戸島村、篠田五郎) 本村小學校兒童は、十日程以前より日々教員に引牽せられ、苗代田の螟卵採集の爲、二時間宛各苗代田を巡採せしに、昨日迄は卵塊五万五千餘に達せり。而して丁度本年にて、兒童に採卵せしむる事、五ヶ年に及び、年々好成绩を得たりき。(六月二十四日附)

(三重縣一志郡高岡村、喜田川雲三郎) 昨年は時季を失せし爲、挿秧前僅々の採卵にして、隨て多少の害をも被りたれば、本年は早くより之を行ひしに、當村尋常高等小學校兒童の採卵表は左の如し。但一塊に對する賃金五毛。(六月廿六日附)

採卵日數	採卵總數	賃	錢	採卵兒童數	一人最多採卵數	一人最少採卵數
1日	5874	圓	2940	1人	586	7塊
1日	5874	圓	2940	1人	586	7塊

(二八八) 昆蟲の分布報告(福岡縣、嶺要一郎) 本年五月廿一日、福岡縣筑後國八女郡矢部村大字北矢部字御側に於て(御前嶽の中腹)ミヤマカラスバアゲハの雌一頭を採集す。同六月二十四日、リヨクシヨクヒヤウモン雌雄數頭を、當地及同郡矢矧村に於て採集せしが、該種は昨年同地にて採集せり。當地に分布せることを、記入せられんことを乞ふ。(六月廿五日附)

(二八九) 螟卵買收と幻燈講話(兵庫縣明石郡伊川谷村、井上藤太郎) 本村農會にては、螟卵買收方法を規定し、拾卵塊に對し四厘にて買收中にして、目下買上高は一万五千八十塊に達したり。尙害蟲驅除普及の爲、東京進成社より購入の幻燈種板に、自製の種板數十枚を加へ、大字毎に農會吏員出張して巡回講話中なり。(六月廿六日附)

(二九〇) 螢狩の童謡(下總安食町、後藤新左久) 當地方螢狩の童謡は、次に示すが如し。ホータロ、ホータロ、コイコイ、ホータロムーシヤ、コッチヘコウ、オーガムーシヤ、アッチイケ、ホータロ、ホータロ、コイコイ。(螢螢來い來い螢螢は此方へ來い椿象は彼方へ往け螢螢來い來い)。(六月廿八日附)

(二九一) ナナフシムシに就て(豊前國城野にて矢野宗幹) 明治三十五年八月七日、豊前國英彦山服に於て、エダナ、フシムシ(Lonchdes slomphax)一疋を採集す。躰は赤褐色にして、脊線は美綠色、肢は綠色、躰長七〇ミリ、觸角五三ミリなり。豊前企救郡及び周防山口附近にて、初春多くの仔蟲を見たるも、其成蟲は未だ發見せず、且つ余の標本中も存せざるが故に報知し難きも、何れ採集の後よ報告致すべし。(六月廿八日附)

(二九二) 稻象鼻蟲と黴菌(岐阜縣、原攝祐) 惠那郡坂下村地方は、稻象鼻蟲の發生中々多し、余は去六月廿日一種寄生菌の爲に斃れたるもの一頭を採集し、同廿二日之を健全なる稻象鼻蟲に接種し、瓶中にて飼育せしに、七月二日に至り遂に斃れたり。

編者云、原氏は幾頭につき、如何なる方法を以て試験せしが、報告簡にして殆んど要了を得ず、或は疑ふ飼育不完全にして、爲に斃れたるには非らずや、望むらくは今后一層の精檢と確報あらんことを。



✳



雑報

●岐阜縣稻作害蟲驅除監督方法 岐阜縣にては、多數の害蟲驅除監督者が命令するに於て、甲乙相齟齬する如き事あらんを慮り、今回左の如く其方法を定められたり。是等は素より、實地に臨み臨機應變の所置に出でざるべからざるも、其大躰に於て標準を定むるは、最も必要なる事なり。

稻作害蟲驅除監督方法

一、從來農業者が害蟲を驅除するは、他動的に余儀なくせらるゝの感念を持し、農業上の一の作業として行はざる可らざるものたることを自覺せざるもの多く、隨て充分に除害の目的を達する能はざるの遺憾あり、故に害蟲驅除監督の爲め吏員出張の際は、務めて講話(晝間多忙なるときは夜間に於て)及實地指導を爲し、害蟲驅除は農家が他の耕耘除草と均しく、農事作業の一科目として行ふべきものたるの習慣を養成せんことを圖るべきこと。

二、縣費の補助は、縣下一般に害蟲驅除を施行せば、現今の豫算にては交付すべき額至極僅少なるを以て、一般に補助を出願せざることに誘示すること。

三、害蟲驅除は一町村内又は少くとも一大字内は同日時に施行せしめ、互に奨勵して驅除の完全を期すること。

四、害蟲驅除に關する農家の感念未だ充分に發達せざるを以て、一般に完全なる驅除を施行せんとせば、之れが監督機關を備へざる可らず、依て農家一團の單位には一兩名の監督員を設け、町村役場員、郡役所員等順次之を監督すること。

五、害蟲發生の場合に於て、出張員が指示する驅除豫防の方法は、概ね左記の標準に據り統一を圖ること。

(イ)螟蟲(ズイムシ) 發生の町村に於ては來る七月上旬まで、苗代及本田に於て、凡五日目毎に採卵を行はしむること。七月中旬よりは、螟蟲の蝕入せる稻莖を剪伐せしむること。十月以後は、白穗となりたるものを、稻莖の根部より拔取らしむること。螟蟲は、陸稻にも發生するに付注意のこと。

(ロ)浮塵子(ウシカ) 苗代田に於ては一反歩に一升、本田に於ては凡一升五合の石油を注ぎ、捕蟲器を以て擲殺し、落下するものは斃死せしむること。此場合に於て、落下斃死するものは重に効蟲なり。發生多きときは、日を距て、數回前項の驅除を行ふこと。

(ハ) 苞蟲(カウムシ、コウジウ、イチモザセーリ、ハマクリムシ) 潰殺器等にて掻き上げ、潰殺すること。發生の初期、捕蟲器にて成蟲たるイチモザセーリを捕殺すること。

(ニ) 螟蛉(アチムシ) 本田にては、一反歩凡二升の割を以て石油を注ぎ、幼蟲を拂下し驅殺すること。苗代にては、捕蟲器にて蛾及幼蟲を捕殺し、又苗を採たる後、水面に浮びたる、苗葉を結べる如き繭を集めて、肥料瓶に投入すること。

六、左の害蟲は、本縣の豫防規則中に規定なしと雖も、發生多き場合には其被害甚しきを以て、驅除豫防の方法を教示し、除害の策を講せしむること。

(ホ) 稻蠶(イナゴ) 田面に初めて灌水したるとき、水に浮び風の爲に畦の周圍に集りたる卵塊を捕殺すること。發生夥しく、損害多しと認むるときは、苗代又は本田に於て、捕蟲器にて捕殺すること。

(ヘ) キリウシ 苗代に發生したるときは、水を湛へて幼蟲の畦畔に集まるを俟ち、周圍に小溝を作り再び苗床に侵入を防ぐこと。羽化の際、成蟲たるカロンガを捕殺すること。

(ト) ムクゲムシ 一反歩に八合位の石油を注ぎ、且捕蟲器にて捕殺す、而して其内に入りたるものは之を殺し、落下したる仔蟲は斃死す。苗の未だ短きときは、灌水を深くして苗の沈む程とし、其上に石油を注ぎ拂落すこと。被害甚しきときは、葉先の黄變亂より切取ること。

(チ) 泥負蟲(ドロハムシ) 捕蟲器を以て捕殺すること。

(リ) 稻椿象(イチカメムシ) 早稻の抽穂に當りて群集し、養液を吸集するときは、咽喉附捕蟲器、又は石油を少し入れたる廣口の器中に拂落し驅除すること。

(ヌ) 稻象蟲(イチソウムシ) 捕蟲器にて捕殺するか、又は筒の屑又は皮等の廢物を稻株間に散布し、其集まるを俟ち捕殺すること。七、最後に注意すべきは、益蟲保護の事なりとす。元來、現時一般の農民に、蟲の害益を區別して、之を云爲するが如きを望むは頗る困難なりと雖も、平均害蟲の半以上が益蟲の爲に殺さるゝを思へば、漸次益蟲愛護の感念を養ふこと亦必要なるべきを以つて害蟲には之を殺すの敵蟲あり、此の敵蟲は保護すべきものなりとのことを知了せしむるは有要のことなるを以て、講話の序手には併て之を諷示すること。但、爲に害蟲驅除を等閑に付せざる様注意を要するは勿論とす。

以上の外豌豆、蠶豆等にエンドノキリムシ(夜盜蟲又は軍隊蟲と云ふ)の發生したる時は、溝を設けて其中に落下せしめ驅除すること。蠶繭の蠶蛆發生の機に際しては、蛆を捕殺せしむるを要す。又稻の稻熱病(イモチ)の發生なきを期し難く、且夏秋蠶飼育者の爲には今暫くの後、蠶病消毒施行の必要あるを以て、機會あれば、必要なる所以と、方法を授くること。

●博覽會出品昆蟲標本受賞者 今回の博覽會に於て、第一部八類、第二部九類、第九部五十類へ出品して、受賞ありし者は左の如し。但し受賞人名録不備の爲め遺漏なきを保し難ければ、是等は他日更正することすべし。

昆蟲標本

岐阜市今泉町

名和靖

多年昆蟲ノ採集調査研究ニ從事シ學術及實業上裨益スル事大ナリ特ニ昆蟲研究所ヲ設立シ講習會ヲ開キ生徒ヲ養成シ或ハ地方ニ巡回シ害蟲及益蟲ノ農事ニ及ホス關係ヲ説キ以テ農業ノ改善ヲ授ク其功績著大ナリトス

名譽銀牌

審査官 正五位勳四等理學博士佐々木忠次郎
 審査官 從四位勳三等理學博士真作佳吉
 審査官 從四位勳四等理學博士村岡範爲
 審査部長 正三位勳二等辻新次
 審査部長 正三位勳一等男爵大島圭介

審査ノ成績ニ依リ前記ノ賞牌ヲ授與ス

明治三十六年七月一日

第五回内國勸業博覽會總裁大勳位功四級載仁親王

岡縣周智郡農會。害蟲標本 靜岡縣、鈴木伊平。教授用昆蟲標本、滋賀縣、大津尋常高等小學校。害蟲標本類集 大分縣、野上尋常高等小學校。蝶類扁額 沖繩縣、國郡同切島組合立農學校。

○編賣賞 昆蟲標本の製作

山形縣、齋藤朝之輔。稻螟蟲驅除に關する事業 福岡縣、益田素平。殺蟲油注入器の考案、福岡縣

○名譽銀牌 昆蟲標本 岐阜縣、名和靖
 ○二等賞 害蟲標本 岐阜縣、揖斐郡昆蟲學會。昆蟲標本 岐阜縣、垂井尋常高等小學校。害蟲標本 福岡縣、嶺前一郎。

○三等賞 害蟲標本 岐阜縣、石田英壽(本巢郡農會) 害蟲標本 岐阜縣、武儀郡農會。同 岐阜縣、海津郡昆蟲研究會。同 岐阜縣、郷佐太郎(稻葉郡農會)。同 岐阜縣伊藤祐之(大野郡農會)。昆蟲標本 岐阜縣、岐阜縣昆蟲學會。同 岐阜縣、揖斐郡昆蟲學會。同 大阪府、早川熊次郎。害蟲標本 兵庫縣、東郷隆次。害蟲標本及調査新潟縣、新潟縣農事試驗場。同 香川縣、香川縣農事試驗場。害蟲標本 靜岡縣、神村直三郎。

○褒賞 害蟲標本 岐阜縣、橋松珍麿(山縣郡昆蟲學會)。同 岐阜縣、水谷弓夫(可兒郡農會)。重要農作及果樹害蟲標本 岐阜縣、不破郡農會。害蟲標本 岐阜縣、養老郡昆蟲學會。同 岐阜縣、可兒郡農會。昆蟲標本 岐阜縣、山縣郡昆蟲學會。害蟲標本 兵庫縣、有馬農林學校 蟲類實物標本 愛知縣、逢妻尋常小學校。害蟲標本 靜岡縣、大津尋常高等小學校。害蟲標本 岡山縣、岡山縣

豐原守。

因に記す、名和昆蟲研究所の今回受領せし賞状は、前頁に示せる如く、素地は銀色に桐に鳳凰の古代模様を描寫せるものなり。

●水族館と昆蟲

此頃、堺水族館在勤藤田政勝氏より、第五回内國勸業博覽會堺水族館圖解てふ小冊子を贈られたり。其中の水棲昆蟲に係る説明を掲ぐれば左の如し。

第二十九號種

節肢類中の昆蟲類即六本足を有する蟲にして、水中に栖むもの、みを容れたるものなり。ゲンゴロウムシ、ミヅカマキリ、イシミノムシ、タガメ、コオヒムシ、ガムシ、ミヅスマシ、マツモムシ、ダイコクムシ、ダイコムシ等にしてダイコムシはトンボの幼蟲なり。ミヅスマシは小さき蟲にして、よく水の表面を廻るものなり。ガムシ、ゲンゴロウ、ミヅスマシ、ミヅカマキリ、タガメ等は、いづれも四枚の翅を有するを以て、身軀乾燥すれば、能く飛ぶことを得るなり。以上水産昆蟲は岐阜市なる昆蟲研究所よりの寄贈に係るものなり。

是等の水棲昆蟲が水族館に於て如何に活動しつゝあるかは、既に屢々藤田氏の報告によりて明なりと雖も、今、近頃の消息を同氏より得たれば左之を掲載す。

當館に收容の水棲昆蟲につき、其後の様子を報ぜんに、ゲンゴロウムシは相變らず活潑に游泳して盛んに魚族を食害し廻り、又此幼蟲も、日々脱皮して成長し、金魚などの尾鰭など切斷し、誠に憎まれものなり。ミヅカマカリは、斧を振り翳して魚類を窺ひ、タガメムシも同様、逞しき状態を現はし、形勢甚だ穩かならず、中にもガムシは、先づ温厚の君子らしく見ゆ、キャンヤマの幼蟲は、杭に倒立して眼を瞑らし、時に或は水中に突進し、又は脱皮して成蟲と化し、盛んに飛翔する有様實に面白し。此他の昆蟲は大抵死し去り、到底以上の勇敢なるもの、競争場裏に立ち行き難く、何程採り込みても皆多くは戦死し、死屍累々たる有様なり。要するに、當館の廿九槽たる、水棲昆蟲の生存競争の有様は、非常に觀覽者の注意をひき、從來思はざる興味を與へつゝあり。苟かに考ふれば、是等は將來經營せらるべき水族館の收容水族として、定めて歓迎さるべきならんと思ふ。換言すれば、水棲昆蟲の種類は、確に水族館用水族の一に適せり。隨て之と同時に、是等が放棄の行はれ來らば、自から水棲昆蟲の經過などは、意外に早く發見さるべきことならん。而して當館庭園内には、既に知らるゝ如く、連夜イルミチーシオンを行ひ居ることにて、四方より飛び集まる昆蟲夥しく、殊にアークライトの下は、昆蟲採集に最も適する有様なり。此内水棲類の重なるものは、矢張ガムシ類なる草花も、爲に之が害に遇ひ、大に閉口せり、又金魚池の四面に於ける、電燈の水に映する爲、水棲昆蟲が來集して、圖らずも多少の蟲害を金魚に及すなどは意外の珍事にして、之より見れば、燈火集蟲の事は、今後大に講究すべき事なりと自信せり云々

●新著紹介

(一)實用昆蟲學、近來昆蟲書の續々發行さるゝは、斯學の爲慶すべき現象なり。農學士小貫信太郎氏は、今回一書を著はし、名けて實用昆蟲學と云ふ。本書は紙數二百九十四頁よりなり、章を分つ二、一を總論とし、一を各論とし、總論に於ては、解剖生理より分類より昆蟲學の大意を述べ、各論に於て、目、亞目、科及種屬に細別し、更に之を害益を分ちて、農作物より一般の害益蟲に至る迄、圖版を挿入して習性經過及驅除豫防法を詳説し、且各目の終りに科名索引表を附して初學者に便せり。東京成美堂發行定價壹圓六拾錢。(二)農用昆蟲學教科書、本書も亦小貫農學士の著にして、紙數百六十六頁、十章より成り、昆蟲學大意より害蟲各論より、尙昆蟲の生理、蕃殖、驅除豫防法及び標本採集製作法を説かれたり。蓋し教科書として、又初學者を益する鮮少なからざるべし。成美堂發行定價七拾五錢。(三)愛知縣農事試驗場特別報告第一報、愛知縣農事試驗場は陸稻の大害蟲たる根蚜蟲に關する調査并に研究を公せられ、一書を當所に寄せらるゝ、就て見るゝ、紙數八十一頁より成り、鮮明なる着色石版圖十一葉を挿入し、根蚜蟲の沿革より、土質氣候等の關係、侵害の情況、蟻との關係等も説き及ぼし、最後に驅除豫防法の研究事項を記載したる必讀すべき良書なり。(四)肉又蚊第二回報告、臺灣地方病及傳染病調査委員會より發表せらるゝ、見るゝ六十六頁より成りて、寫真版二葉二十九圖を挿入し肉又蚊七種に亘り詳細なる研究事項を記載せられたる良書にして、刀圭社會を利する僅少なからざるべし。

●稻象鼻蟲の發生

岐阜縣長期害蟲驅除講習生大橋由太郎氏は、本月十一日、安八、養老郡地方へ害蟲調査の爲出張したりしが、同地方は、今尙螟蟲の屋内より貯藏せる糞より、羽化して飛去るもの多き由なるが、又稻象鼻蟲の發生甚しく、現に同氏が通行の際、安八郡川並村にて、僅か、四、五坪の所にて六百二十四頭の多きを捕獲せりと、該蟲は一般に發生するものなりと雖も、往々局部に非常多く發生加害することあれば、注意すべきことあり。



●可眞村昆蟲調査所

岡山縣赤磐郡可眞村にては農會の事業として、昆蟲調査所を設置し、元當所助手たりし福井克雄氏主任となり、農作物及果樹の害蟲を調査する事となり居れるが、本年の害蟲驅除の如き、縣下の模範とも稱すべき、好成績を得たりと云ふ。

●害蟲驅除豫防監督官の出張

近來各地に於ける害蟲の發生漸次夥しきを以て、不日主務省及農事試験場より技師の派遣を見るべき旨を本誌前號に於て報し置きしが、愈々左の如く、驅防監督の爲出張を命せられたり。

鳥取、島根、岡山、廣島、山口 農事試験場技師 岡田 鴻三郎 大阪、滋賀、和歌山、 同 莊島 熊六

三重、愛知、靜岡、岐阜、 同 牛村 一氏 德島、香川、愛媛、高知、 同 大工原銀太郎

福井、富山、石川、新潟、 同 大塚 由成 茨城、福島、 同 中川 庄司

岩手、秋田、 同 小貫 信太郎 京都、奈良、 同 上田 榮次郎

大分、福岡、長崎、佐賀、宮崎、 同 堀 正太郎 熊本、鹿兒島、沖繩 農商務省技師 加藤 末郎

●岐阜縣昆蟲學會第五十五回月次會記事

同會は本月四日午後一時より當昆蟲研究所内に於て開會せしに、當日は雨天なりしも係らず、郡部よりの來會者も多く、又愛知縣農事試験場技師美濃部鏘次郎氏、も特に來會せられ、中々有益なる談話ありたり、今其概況を報すれば、左の如し。

例により名和靖氏の開會の辭に次で、第一席中井藤助氏は、害蟲驅除の實況より昆蟲思想普及の必要を實物を以て証明し、第二席渡邊樵四平氏は、此頃一意螟蟲に就き研究しつゝありて、前會に引續き其調査せし事項を報告し、第三席小森省作氏は、邦産蠶形蟲科十一種の標本につき、其各種の特性及變化より雌雄の關係を説明し、及び揖斐郡鷲村害蟲驅除視察に就て、實物を以て實況を述べ、第四席松村菊太郎氏は、桑樹の一大害蟲たる心蟲驅除に就て、氏が親しく其衝に當り調査せられし結果を報告し、第五席松尾岐阜縣屬は縣下に於ける害蟲驅除の實況を述べて農民の頑迷を憤慨し、第六席森字多司氏は、近來蟲入琥珀の非常に偽造さるゝより、之が注意を與へて其製法を述べ、實物を示されたり、第七席美濃部鏘次郎氏は、數年來陸稻の一大害蟲たる根蚜蟲に就て調査されたる事項を説明し、第八席波磨實太郎氏は、昆蟲研究上プレパラートの必要を述べて其製法を講演し、第九席名和靖氏は、博覽會出品昆蟲標本の結果に就て説明し、尙將來の方針につき注意を與へられ、閉會せしは全く午後七時二十分なりき。

●昆蟲標本陳列館の觀覽人

去六月中、當昆蟲研究所常設の標本陳列館を觀覽せし人員は、總計二千百〇八人として、其内最も多かりしは、七日及び二十一日に於ける百五十三人として、最も少かりしは十一日に於ける十五人にて、平均一日に八十四人餘に當り、其重なる觀覽者は司法省總務長官

波多野敬真氏、同參事官齋藤十一郎氏、昆蟲學者松村松年氏、米人ボワース氏を始め、各府縣の實業當局者、教育者、學生等なりき。
(雜報、七月十二日脱稿)

◎新案**教育用昆蟲標本** 壹組 拾貳箱

一、分類標本 壹箱

一、自然淘汰標本 五箱

○保護色 ○擬態 ○警戒色及誘惑色
○自己防禦 ○生存競争

一、雌雄淘汰標本 貳箱

一、害蟲標本 壹箱

一、益蟲標本 壹箱

一、解体標本 壹箱

一、俗説と違符に就て昆蟲標本 壹箱

該標本は、高等小學校、高等女學校、農學校、尋常中學校等の理科と參照して製作せしものなり。従て害蟲標本の如きも、普通農作物害蟲標本とは大に其趣きを異にせり。而して一品毎に説明を附しあれば、假令初學者と雖も、一目して昆蟲界に於ける自然の妙理を會得するを得ん。

右標本は、壹組十二箱を以て完成せりと雖も、其中、一箱又御望の節は、新案教育用昆蟲標本中の何々と明記ありたし。

◎箱裝式**昆蟲標本**

甲號 價一組²付き金四圓
乙號 同 金參圓
丙號 同 金貳圓

一組二十枚
但遞送費は別

右は實物寫生用の昆蟲標本にして、初等教育、中等教育何れにも適用すべき好標本あり。製法堅牢なるを以て、又幼稚園或は家庭に於ける玩具ともすれば、不知不識の間に、理科思想を養成することを得るなり。

●農作物害蟲標本 壹組（初箱入解發箱金四圓五拾錢）

●農作物益蟲標本 壹組（初箱入解發箱金四圓五拾錢）

●教育用昆蟲標本 壹組（初箱入解發箱金四圓五拾錢）

●自然淘汰標本 壹組（初箱入解發箱金四圓五拾錢）

●雌雄淘汰標本 壹組（初箱入解發箱金四圓五拾錢）

●氣候變形標本 壹組（初箱入解發箱金四圓五拾錢）

●昆蟲發育標本 各組（拾錢）

●山林園藝害蟲標本 各種

●昆蟲學研究用書籍及び器具一式

雜誌
昆蟲
世界
合本
出來
廣告

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第六卷 昨年分 出刊

西洋綴
金文字
入美裝

合本
出來
廣告

● 昆蟲世界第二卷 五部

右は明治三十一年發行の分 但合本にあらず
(百第貳拾貳號)
(百第拾六號)

● 昆蟲世界第三卷合本壹册

右は明治三十一年發行の分
(百第拾七號)
(百第貳拾八號)

● 昆蟲世界第四卷合本壹册

右は明治三十三年發行の分
(百第拾九號)
(百第四拾貳號)

● 昆蟲世界第五卷合本壹册

右は明治三十四年發行の分
(百第拾四號)
(百第五拾貳號)

● 昆蟲世界第六卷合本壹册

右は明治三十五年發行の分
(百第拾五號)
(百第六拾四號)

(合本は每冊金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢
其他は定價の通り)

右昆蟲世界の表は發刊以來、非常の高評を博し、斯學研究上の寶典
として又農事改良の先驅として歡迎せられたり、未だ之を合本と
するに至らざりしに、今回讀者の勸告により、毎一年分を裝訂して
閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版
著者の
株
昆蟲世界 全

日本昆蟲分科表 全一册
増補再版
定價 郵税共 金貳拾八錢 (同)

通俗昆蟲集覽 第一輯再版
定價 郵税共 金貳拾貳錢 (同)

貝殼昆蟲圖說 全一册
定價 郵税共 金拾七錢 (同)

害蟲圖解 既刊 貳拾枚
定價壹枚金拾五錢 郵税貳錢 百枚以上 一圓壹枚拾錢の
割郵費百枚に付貳拾錢

害蟲圖解 追次刊行
定價壹枚金拾五錢 郵税貳錢 百枚以上 一圓壹枚拾錢の
割郵費百枚に付貳拾錢

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

東京帝國大學農學科大學教授
 理學博士 石川千代松 著

普通教育
昆蟲學教科書

彩色石版圖全一冊定價七拾錢郵稅八錢

本書の價值は昆蟲世界が左の如く評せられ且名和昆蟲研究所が本年四月講習用書に採用せられたるに依り明なり

●昆蟲世界第六拾九號評

前畧 本書は分類及害益蟲、採集法、保存法等の、從來其記事に乏しからざるものは、記事を節略し、外形の構造、内部の生理作用及外界との關係、即自然淘汰の妙理等は、詳細に説述し、且鮮明なる圖版百六拾九圖を挿入し斯學の研究に一大利益を與へられたるは、是れ氏の賜といふべし

發行所

發賣所

東京大阪 小石川 市橋 小石川 市橋 小石川 市橋 小石川 市橋

安岡大垣堂文郁

・郎次平林

●硫曹肥料を肥作に用ゆれば第一は米質を宜しくし且つ頗る收穫を増すべし一反歩は付五六斗より一石二三斗を増す土用を越して蟲附たるもの比すれば見掛も遙に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀あり舊肥料を用ひたるものは之に反したるに見掛は異ならざるも米質悪し又母の收穫は同じくとも玄米となして一反歩三斗以上の相違あり之を吞きて白米となすに硫曹を用ひたる分は春減少なく飯は炊くに頗る炊殖すべし一例之は舊肥料の米は水一升米一升あるに硫曹の分は米一升水一升二合ならでは飯に適せず即ち割以上炊殖の相違あり●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄に注意し之を實驗して其効用の偉大なるを驚かす●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからざるべし然らざれば南洋熱帯地方通過の際多く腐蝕すべし●第一(過磷酸)を肥作に用ゆるは一反歩に三貫目より五貫目を施す●大豆肥料(大豆粕)を肥作に用ゆるは一反歩に二貫目を施す●堆肥、糞肥、骨粉、油粕、燐肥、硫酸、海産物を二回に分けて施す



は第八號を最も適當とす 反歩に十貫目乃至十五貫目を施すすべし(堆肥は何れも施すに宜し)●硫曹肥料を用ゆるは其効用は麻、藁其他陸稻、粟、砂糖黍、桑、野菜、物、菓物、肥料を用ひたる農産物をくべきものあり●第五回勲業博覽會は硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金參百圓づ、銀賞牌には金百圓づ、一等賞牌は金五拾圓づ、二等賞牌には金貳拾圓づ、三等賞牌には金拾圓づ、を贈呈す●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農産物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麥及德島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したものなれば會社には香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を德島縣仁井輝藏氏へ銀壹百圓を贈呈せり●硫曹肥料の明細并に見本等は御申越次第贈呈すべし



大阪西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

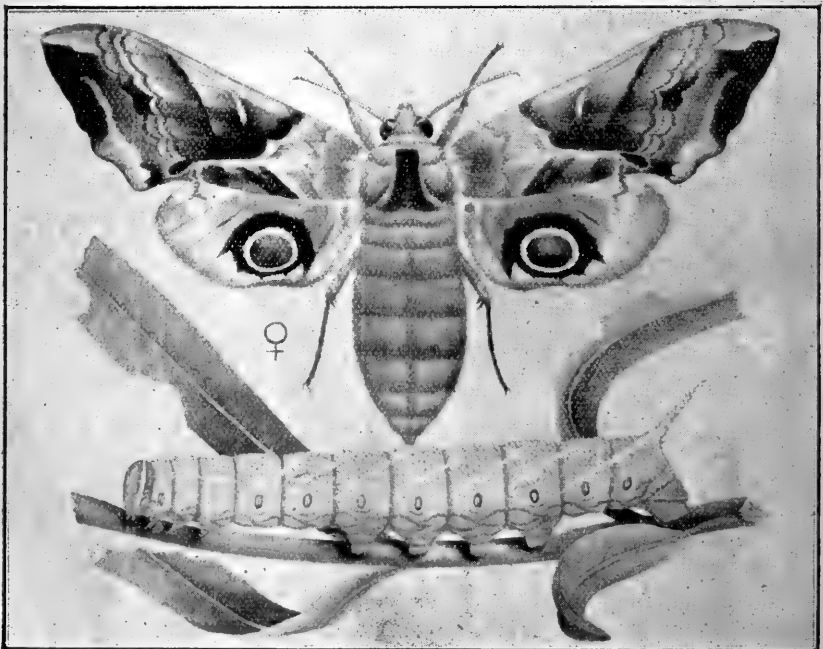
電話西四一九番

Smerinthus planus Walker. (Uchi-suzume)

By K. Nagano.

This species seems to be same to *S. ocellatus* L. Fore-wings pale rosy-brownish, clouded with darker in median and marginal areae; inner line light brown; darker angulated central stripe broken in middle; median band brown; subterminal waved lines brownish or darker; a whitish lunate discal spot. Hindwings rosy, posteriorly light ochereous brownish; a large round black blotch near anal angle, enclosing a dark grey spot encircled with pale blue. Expands 72-100 mm. Body grey or brownish, thorax with a broad dark brown central band.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo; 6, 7, 8. Larva green white-dotted; on 1-3 a white longitudinal lateral stripe; on 4-11 a series of white oblique lateral stripes; spiracles red-circled: on *Salix*, *Prunus pseudocerasus*, *Pirus Malus*, etc.; 6-9.



●美濃 本場 大紫雲英種子販賣

諸君紫雲英ノ種子ニ早中晩ノ數種アリ升ガ多クノ御方ハ一升價ノ安キモノヲ需用セラル、様デアリ升ガ誠ニ遺憾デアリ升故ニ私ガ試驗ノ結果ヲ左ニ掲ゲ御參考ニ供シマス御一覽ノ上ハ如何ニ本郡産種ノ利益カラ御認ノ上御買上アラントテ希フ種類 一併代 一反歩播種量 反當收量

撰晚種 四拾錢	壹升五合以内	壹千五百貫目以上
大晚種 叁拾七錢	二升以内	壹千四百貫目以内
中晚種 貳拾七錢	三升以内	壹千貫目以内
早生種 貳拾錢	四升内外	五百貫目内外

岐阜縣本巢郡生津村

△西堀彌市

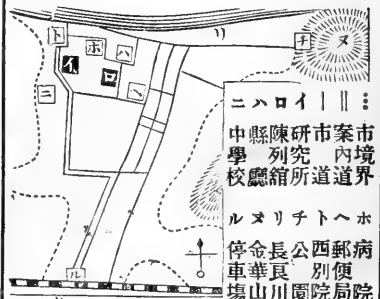
紫雲英種子 精撰會主幹 追テ郡村農會ニテ多數御注文ハ割引ス御照會次第回答ス

●岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ニ依リ晴雨に關はず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於テ開ク、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内 岐阜縣 昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中之日並に左の如し
 第五十六回月次會(八月一日) 第五十九回月次會(十一月七日)
 第五十七回月次會(九月五日) 第六十回月次會(十二月五日)
 第五十八回月次會(十月三日)



●名和昆蟲研究所案内
 當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蠶室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館(五間ニ十六間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ
 岐阜縣岐阜市京町 名和昆蟲研究所

●本誌定價並廣告料

壹部郵稅共 金拾錢
 壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢
 (注意) 本誌は總て前金ニ非れば發送せず
 ●爲替拂渡局は岐阜郵便局 ●郵券代用は五厘切手にテ壹割増とす
 廣告料 五號活字二十二字詰一行ニ付金拾貳錢
 三十行以上一行ニ付金拾錢とす
 明治三十六年七月十五日印刷並發行
 岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二 (岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆蟲研究所

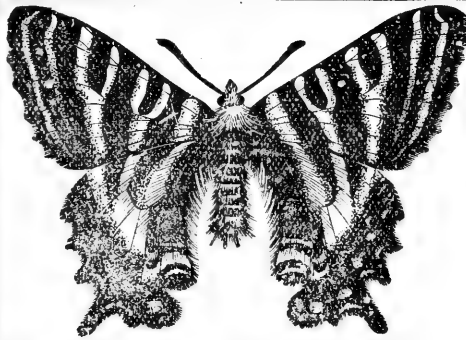
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
 發行所 名和 梅 吉
 編輯者 小 森 省 作
 印刷者 河田貞次郎
 不許轉載

明治三十年九月十日內務省許可

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

(八月十五日發行)

(每月一回十五日發行)



THE INSECT WORLD.

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
SIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七拾貳號

(第七卷第八冊)

目次

(禁轉載)

●綠黑青燕尾蝶の發育 (石版圖) 一頁

●第五回內國勸業博覽會と昆蟲標本 三頁

●終黑青燕尾蝶の發育雌雄の多形に就て 名和 梅吉
●第一回岐阜縣昆蟲分布調査(一) 小森 吉作
●蟻形象鼻蟲に就て 神村直三郎
●天牛の小實驗 藤 勇

●講話 一八頁
●除蟲液の性質を述べて害蟲驅除に及ぶ岡田 忠男
●アゲハノテフの經過に就ての實驗 中井 藤助

●六足蟲彙纂(木の巻) 長野菊次郎 ●蟻驅除獎勵
●展覽會準備記事(第二) 蟲の家主人 ●藥用ニ供する
●昆蟲 林壽祐 ●昆蟲界の興業者 長瀬清五郎 ●稻
●の根喰葉蟲に就て 川越誠吉 ●昆蟲發句集 喜田川
●要三郎

●通信 三二頁
●博覽會出品害蟲標本解說書 有馬農林學校 ●博覽
●會出品理科教授用昆蟲標本解說書 大津尋常高等
●小學校 ●山口縣大島郡通信 財源字市 ●長野縣北安
●曇郡の昆蟲方言 帶刀喜市 ●昆蟲に關する葉書通信
(第三十四報)

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書 ●第十六回
●全國害蟲驅除講習會實況 ●害蟲驅除の方針 ●昆蟲叢
●書第二編の出版 ●工業應用昆蟲叢報(第六報) ●北米
●に於ける角蟬科 ●蟬寄生蛾の發生 ●博覽會出品昆蟲
●標本受賞者追報 ●理學界の發刊 ●養老郡害蟲驅除講
●習會 ●農業昆蟲講習會 ●岐阜縣昆蟲學會第五十六回
●月次會記事 ●水曜昆蟲會記事 ●昆蟲標本陳列館の參
●觀人

(明治三十六年八月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)



● 害蟲圖解新刊廣告

○第二十一。稻の害蟲イナゴ(七月發行)
 當昆蟲研究所發行の害蟲圖解は、本邦
 産有害蟲種の大要を何人にも理解し
 易からしめん爲、當所の一事業として
 數年來續刊し來れるものにて、今や其
 第二十一號を發行せり。而して府縣の
 各級農會より諸學校、警察署、郡衛等
 に備附られしもの甚だ多く、又或地方
 の如きは之を小學校の教授用に充てし
 もあり、甚だ有益なる圖解なり。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

● 昆蟲分布調査材料募集

- 鞘翅目。瓢蟲の部。
 - 脈翅目。蝶の部、天蛾の部。
 - 脈翅目。擬蜻蛉、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
 - 有吻目。水棲の部、蟬の部。
 - 直翅目。蟋蟀の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。
 - 擬脈翅目。蜻蛉の部。
- 右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんとを望む

○アブラムシ(蜚蠊又は滑蟲)の標本

右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版

薔薇の
株
昆蟲世界
全

定價貳拾錢 郵稅貳錢 (郵券代用一割増)

臨時刊第一行

日本昆蟲分科表 増補再版
全一冊

定價(郵稅共)金貳拾八錢 (同上)

臨時刊第二行

通俗益蟲集覽 第一輯再版
(説明書附)

定價(郵稅共)金貳拾貳錢 (同上)

臨時刊第三行

貝殼蟲圖說 全一冊
(版再)

定價(郵稅共)金參拾七錢 (同上)

農家應用

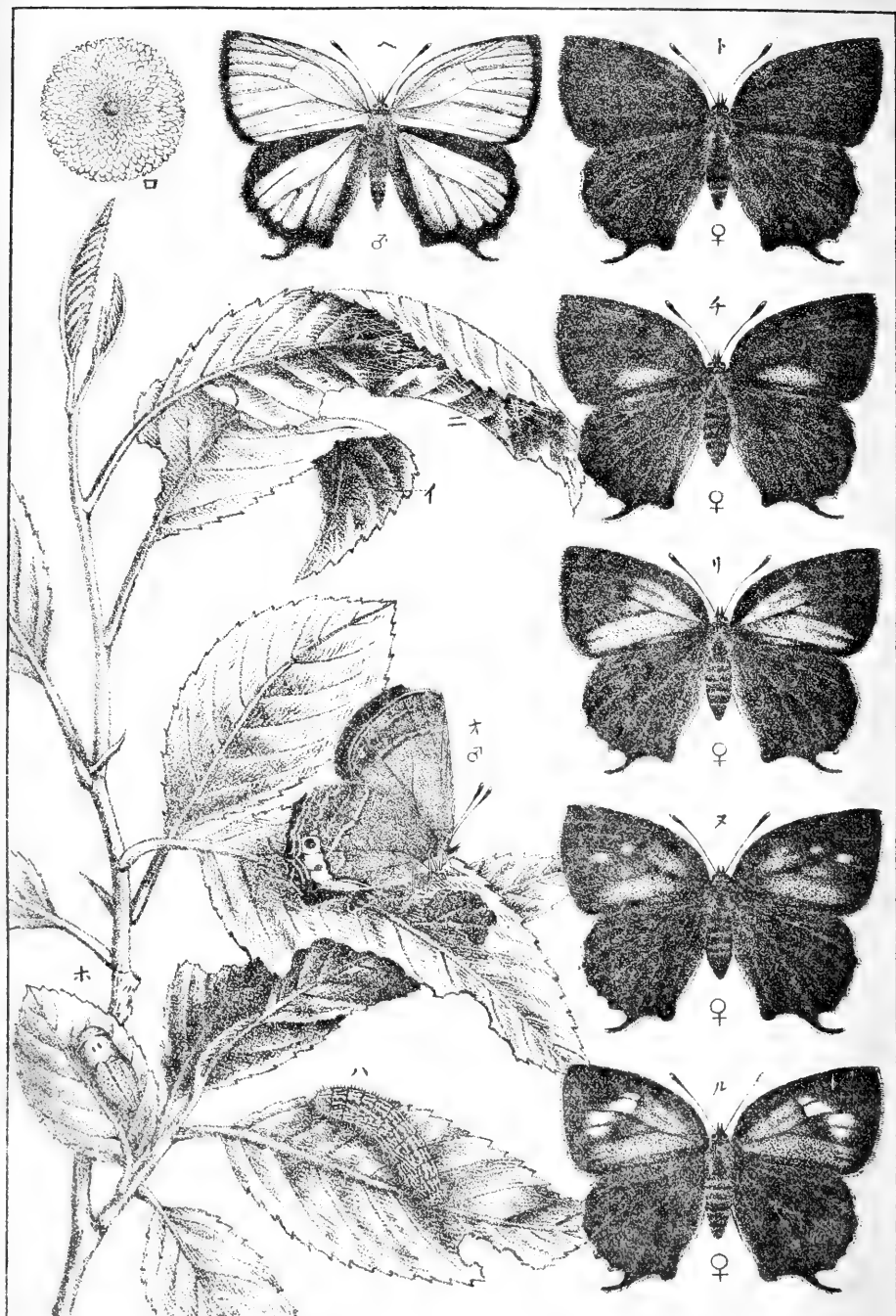
害蟲圖解 既刊
貳拾壹枚

定價壹枚金拾五錢 郵稅貳錢 百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵稅百枚に付貳拾錢

農家應用

害蟲圖解 追次刊行
一百枚迄

岐阜市京町 名和昆蟲研究所



育發ノ (Zephyrus taxila, Brem.) 蝶尾燕青黑縁



論說



◎第五回内國勸業博覽會と昆蟲標本

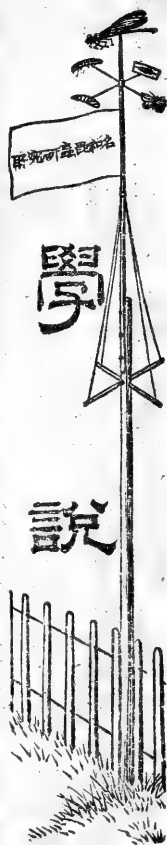
第五回内國勸業博覽會開設の舉あるや、其當路の有司は固より論を、業に其衝に當るもの、酷苦經營が成功に努めたるの結果は、能く本邦文物の精華を宇内に紹介し、退いては實業の發達に至大の利益を興へ、洋洋春の海の如き五ヶ月間の開期も、今や其終を告げ、茲に本月一日を以て無事其閉會の式を舉行せられたり。

抑も今回の博覽會は規模宏大にして、名は内國勸業博覽會なりと雖も、其實は世界博覽會なりしなり。爰を以て其出品物の精撰と、其陳列意匠の雄大なるとは、之を從來の博覽會に見るべからざる所にして彼農産物の如き過去に在りては、觀覽者の一顧をも得ざりしもの、今や則ち然らず、婦女童幼踵を接して此淡泊無味の陳列場を訪ふ、蓋し時勢の進運之をして然らしむるものなりとは言へ、復た出品物の精撰、陳列意匠の雄大、自然に觀覽者の足を惹きしに非るなきを得んや。而して我昆蟲標本の出品を見るに、其出品点数の夥多ある、是亦た從來の博覽會に見ざる所にして、其製作の佳良なる、其意匠の嶄新ある、加ふるに學理を應用して克く實業上、科學上の智識を開發し世を益すること尠少ならざるを認むるに拘らず、各府縣の當局者は頗る之を冷視し、陳列棚の一隅小暗き所に排列し、或は高所に掲揚して

之を見るに由みからしめ、甚だしきは裝飾に代用して出品の趣意を沒了し、爲す折角の見學者をして大に失望せしめ、非難の聲を聞くに到りしは必當當局者より昆虫思想の乏しきと、又他方より於ては徒らに壯大美觀を呈するものにして婦女童幼の眼を喜ばしむるものからんには、内容の如何を問はず好位置を與へしに由る、是等は固より當局者其人の罪より非ずして、世の未だ進歩せざるに職由するものとして寧ろ憫諒せざるを得ず。

退て思ふに、陳列は於て夫れ斯の如く缺點ありしにも拘らず、今期の博覽會に於て昆虫の何ものたるかを世人に知らしめ、實業界に、科學界に、大に利益を與へたるは争ふべからざる事實なり。見よや、審査の結果に於て世に盲審亂查の聲の喧しきにも拘はらず、斯界に於ては比較的公明なりしなり、元より審査の機密は得て知るべからずと雖も、其結果により之を推考すれば、強ち其大体を窺ふ能はざるより非ず、即ち今回の受賞者の多數は出品其物の完全なること勿論なれども、團体出品にして然も其普及を圖り、調査の緻密なる、基礎の強固なる點に重きを置かれたるが如し。今之を例せば、二等賞を受けたる岐阜縣揖斐郡昆虫學會は、郡是の害虫を定めて之が被害の統計を調査し、之を分布調査用地圖上に顯はし、然る後標本を作製したるが如き、又三等賞を得たる武儀郡農會は、彼れ雜駁なる出品をなさず、唯桑樹の害虫心蠱一種に就て調査し、其結果を標本に顯はしたるが如き、其他滋賀縣農事試驗場は浮塵子につき、岐阜縣不破郡垂井小學校は教育の方面に於て研究せし結果を出品し、共に二等賞を得たるが如き、是等を始め總て受賞の名譽ありしものは、何れも模範たるべきものにして、世を利し、人を益し、延いて斯學に貢献するの出品物に非るはなし。吾輩暫て、此博覽會を目して一大活學教室なりと絶叫せしが、今回親しく此等の標本を見たるもの、如何なる感を腦裡に印象せしものぞ。

今や第五回内國勸業博覽會は世人謹呼の間に閉會を告げ、將に來らんとするの第六回は其時期未だ豫知すべからず、昆蟲學に志あるもの、此間に處して一層の奮勵なかるべからざるは、之を今期の博覽會擬賞に徴して明白なりとす。吾輩は常に自ら揣らずして斯界の木鐸を以て其職責とし、多大の注意と精細の觀察を此博覽會に拂ひしもの、其審査の結果も鑑みて豈に多少の感慨なしとせんや、苟も昆蟲學に志あるものは、今後大に注意を要すべきなり。



◎緣黑青燕尾蝶の發育並に雌の多形に就て (第八版圖參看)

名和昆蟲研究所長 名和靖

フチダグロアフラツバメテフ (Zephyrus taxila, Bremer. = Thecla japonica, Murray.) は從來岐阜附近に於ては余り多くを見ざるも、約三里を距てたる本巢郡船木村地方に到れば、又容易に採集し得べし、是れ該蟲の食草たる赤楊に富めるを以てなり。卵は白色にして上面平直をなし、菊花の如き刻紋を有す。老熟の幼蟲は八分内外ありて、淡黄色に綠色の背線と模様とを有し、全体淡黄色の短毛を生ず。蛹は兩端圓く中央縊れて繭形をなし、長四分一二厘、頭胸部は褐色を帯び、腹部は中央に黒色の線あり、其兩側には各關節毎に黒色と黄色とを斑點を有す。成蟲は雄にありては翅の表面美麗なる藍青色を呈はし、翅縁黒色を帯ぶを以て緣黑青燕尾蝶の名ある所以なり。開翅一寸五分よして、后翅の外縁には稍外方に曲りたる尾あり、翅の裏面は灰褐色にして、前翅の外縁に近き處に前縁より后縁を向て白色の一線を

走らせ第二翅脈に到りて止み、後縁角に近く褐色に橙黄色を混せる斑紋を有す。后翅には前縁より后縁に亘りW字形の白線と、外縁に沿ふて同色の細線を走らせ、其内側は稍太き二條の白帯あれども鮮明ならず、后縁角部は橙黄色よして中に黒紋あり、前後兩翅とも白色の短き縁毛を有す。雌の裏面は殆んど雄のそれと異らざれども、表面は大に彩色を異にし、加ふるに同じく雌の内よても變化多くして殆んど別種ならざるやを疑はしむ。即ち第八圖(ト)の如く全棘茶褐色にして斑紋を有せざるあり、或は(チ)の如く前翅の第一翅脈と第二翅脈との間より少しく紫色を交ふるあり、或は(リ)の如く其紫色一層増加して中室に滿つるあり、又或は(ヌ)の如く更に微かに柿色紋を加ふるあり、若くは(ル)の如く其柿色の斑紋判明なるありて實に其變化多し、昆蟲學上之を稱して多變形種と呼ぶ。凡て昆蟲にはメスグロヘウモンテフの如く雌雄甚しく翅色を異にし、カプトムシ、クハガタムシの如く雌雄によりて著しく其形態の異なる等其例多く、おれを雌雄異形といふ。又アゲハノテフの春季に發生せしものと、夏季に於て羽化せしものとは大小及び色彩に差異あるが如き、モンシロテフ、キテフ等の發生時期によりて斑紋の有無を生ずる如きは最も普通にして、之を氣候上の二形若くは多變形と云ひ、又單に氣候變形といふ。前述の縁黒青燕尾蝶の雌の變形は、氣候上の變化とは稍趣きを異にし、同時季に發生せしものよして斯く多くの變化を來せしものなり。ブライアー氏の日本蝶譜には左の如く記載せり。

セクラ、シヤボニカ (Thecla japonica, Murray) の雌は多變形種にして甚だ變化し易し、而してセクラ、シヤボニカの多變形種は全く茶褐色にして、第二は光輝ある藍色の大なる斑點あり、第三は前翅に黄茶褐色の斑點あり、第四は藍色又は黄茶褐色の二斑點あり、而して其變化の各階級を混合せる標本を屢々發見することあり、故に雌の彩色は専ら季候の寒暖に關し、北地或は高緯度の處に於て獲たる標本は多くは藍色を呈すること制規の如し。バットラー氏は此の理由に就て、北方形種を別種なりませられしは、既に紛亂せる種屬に猶一層の錯雜を加ふるのみにして正當さは認め難し。

之を見るに、バットラー氏は別種なりと誤認し、フライアー氏は一に氣候の寒暖によりて變化するを説けり。然れども當所の飼育の結果によるも、或は同時に同所よ於て此の五形の變種を採集せしに徴するも、あちがち氣候にのみ委する能はず、其雌雄の異なるは全く雌雄洵汰の現象に外ならざるも、雌蟲間に於て斯く多形の變化あるは其原因の那邊に存するか、而して最も普通に多く發生するは前翅に紫色を帯ふるものなると、比較的雌蟲の多く採集し得らるゝ等より推考すれば、今后當研究を要すべきことなりと信ず。

口繪の説明、(イ)は葉上に産着の卵子(ロ)は卵子の上面を放大せしもの(ハ)は五齡の幼蟲(ニ)は幼蟲が葉を巻きて其内よ潜ひる狀(ホ)は葉上に附着せる蛹の狀(ヘ)は成蟲の雄(ト)(チ)(リ)(ヌ)(ル)は雌蟲の變化を示せるもの(ヲ)は静止せる雄蟲

◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査 (二)

名和昆蟲研究所助手 分布調査主任 小森 省 作

粉蝶科(Peridae)、今回の採品中粉蝶科に屬するものは左の八種ありき。今、此等よつき略説すべしと雖も、唯調査上或特種の點を適載するに過ぎず。

(一〇)エメシロテン(*Leucoptasia sinapis*, Linm.) 邦産粉蝶科中最小なるものにして、全翅白く、翅端に黒斑ありて一見紋白蝶に擬ふべきも、遙かよ小形にして大に異れり。該蝶は北海道及奥羽地方には普通なるも、其以南よ於ては、本島の山間よ稀に見る所の、優美愛すべき種なり。今回、飛驒國大野郡に於て三頭、吉城郡に於て一頭を獲たり。

(一一)モンシロテン(*Pieris rapae*, L.) 發生の季節により、大小色彩よ於て差違あり、即ち春生種

は形小^{かたちちひ}として、夏生種^{かせいしゆ}に比すれば黒班^{くはん}少^{すく}く、特に雄^{をす}は於ては翅^{はね}の表面^{へうめん}殆んど無紋^{むもん}の有様^{ようさま}あり。幼蟲^{ちゆうちゆう}は菘菜類^{そうさいるい}の害蟲^{がいちゆう}にして、往々大害^{わうたうたいがい}を興^あふるとあり。今回^{こんかい}、キテフ、モンキテフ、スヂクロテフ等と共に、多數^{たすうあつ}集まりたるは、其發生^{そのはつせい}の多^{おほ}さを知るべし。

(一二) スヂグロテフ (*Pieris napi*, L.) 本種^{ほんしゆ}は翅^{はね}白^{しろ}く、脈^{みやく}黒^{くろ}きを以て、スヂクロシロテフとも稱^{なづ}す。普通^{ふつう}の種^{しゆ}として、發生^{はつせい}の季節^{きせつ}より、又大小^{たうせう}色彩^{しきさい}も變化^{へんかわ}あり、一種^{いんしゆ}の香氣^{かうき}を放^{はな}つ、岐阜^{きふ}、羽島^{はね}、海津^{うみづ}、養老^{やうらう}、可兒^{かご}及安八^{やすやち}の一市^{いち}六郡^{りくぐん}を除^{のぞ}き、各郡^{かくぐん}に於て獲^わたり。

(一三) ツマキテフ (*Anthracaris soolymus*, But.) 美麗^{びれい}なる小形種^{せうけいしゆ}にして、前翅^{ぜんし}の翅端^{ししたん}に橙黄色^{ていしやう}の斑^{はん}紋^{もん}あるを以て此名^{このな}あり、然れども雌^{めす}は此^{こゝ}の斑紋^{はんもん}をなし。該蝶^{がいてつ}は四五月頃^{しふごげつぎん}飛翔^{ひしやう}するものなれども、稻葉^{いんげ}郡^{ぐん}三里尋常^{さんりじゆんじやう}小學校^{せうがく}兒童^{じどう}長屋^{ちやう}すさなるもの、採集^{さいしゆ}品^{ひん}は、九月二十日^{くわがつにじゅうにち}なりしかば、之^{これ}を三里小學校^{さんりせうがく}に照會^{せうかい}せしに、採集^{さいしゆ}場所^{ばしよ}より、其當時^{そのとき}の模様^{もよう}に至^{いた}る迄^{いた}回答^{こたう}し來^きり。之^{これ}れ、本誌^{ほんし}前號^{ぜんがう}に於て記載^{きざい}せし日光^{にっこう}白蝶^{はくてつ}と云^いひ、岐阜^{きふ}蝶^{てつ}と云^いひ、又此^{また}の種^{しゆ}黄蝶^{わうてつ}と云^いひ、共^{とも}に蛹^{むす}期^きを以て越冬^{えつとう}するものなれば、氣候^{きがい}の變異^{へんい}により、俄^はに羽化^{うくわ}せしものあらんも、而も、該蝶^{そのてつ}は二頭^{ふたご}迄^{いた}之^{これ}を獲^わたりしは、甚^{おほ}く訝^{いぶ}しき事^{こと}ならずや、尙^{なほ}此^{こゝ}他^たは揖斐^{いひ}郡^{ぐん}より一頭^{ひと}ありしが、こは三月二十八日^{さんがつにじゅうはちにち}の採集^{さいしゆ}品^{ひん}なりき。

(一四) モンキテフ (*Colias hyale*, L.) 本種^{ほんしゆ}は、極めて普通^{ふつう}の種^{しゆ}にして、粉蝶^{こなてつ}科^か中最^{ちゆう}も廣^{ひろ}き分布^{ぶんぷ}を有^あし、全國^{ぜんこく}到^{いた}る處^{ところ}其發生^{そのはつせい}を認め^みざるの地^ちなし。雄^{をす}は皆^{みな}黄色^{きやう}なれども、雌^{めす}は黄色^{きやう}なるものと、帶^{たい}黄^{わう}白色^{はくしやく}との二形^{ふたがた}あり、今回^{こんかい}、岐阜^{きふ}及び安八^{やすやち}を除^{のぞ}く外^{ほか}、各郡^{かくぐん}に於て多^た數^{すう}を獲^わたり。

(一五) ヤマキテフ (*Gonopteryx rhanni*, L.) 常^{じやう}に山地^{さんち}に於て活潑^{くわつぱく}に飛翔^{ひしやう}する處^{ところ}の種^{しゆ}にして、雄^{をす}蟲^{ちゆう}の翅^{はね}は濃黄色^{のうきやう}よ、雌^{めす}蟲^{ちゆう}は淡黄色^{たんきやう}にして、兩者^{りやう}共^{とも}、四翅^{しつゝ}の殆^{たいてい}んど中央^{ちゆうじやう}に橙黄色^{ていしやう}の斑^{はん}點^{てん}を有^あす。而^{しか}して此種^{こゝしゆ}

も亦發生の時期により、色彩を異せり。即ち春生のものは、翅の裏面は於て一面に褐色の細點あるも夏生種は、之を飲く。今回、揖斐、加茂、益田の三郡に於て獲たり。

(一六)キテフ (*Terias heabe*, L.) 此蝶は、發生の季節により、變化極めて多き種あり。即ち、早春に顯はるゝものは、翅の表面無紋にして、夏月も顯はるゝものは、翅端に黒紋を有し、殆んど別種の如く見ゆ。今回、縣下各郡(安八郡を除く)に於て最も多數を獲たり。

(一七)ツマグロキテフ (*Terias laeta*, Boisid.) 此蝶は、極めて前種に酷似し、又變化多き種なれば、夏生種に於て、或は殆んど前種と區別し難きものありと雖も、前翅の前縁角の尖れると、外縁の一直線よして、翅端の黒紋は、第二翅脈に到りて急に終れりと、前種に於ては、翅の裏面に褐色の斑點ありと雖も、該種の後翅には一條の褐色線ある等、其特徴を檢すれば、又容易に區別することを得べし。海津養老、郡上、大野、及安八の五郡を除き、各郡に於て獲たり。

斑蝶科 (*Danaidae*)、此科に屬するものは、左の一種ありき。是れ本邦に於て琉球以南の地には數種ありと雖も、本島は、僅アサギマダラの一種を産するに過ぎざれば、當然の事なりとす。

(一八)アサギマダラテフ (*Daneis tytia*, Gray.) 優美なる大形種にして、前翅は黒褐色に、後翅は赤褐色よして、共に淡青色の斑紋あり、而して雄蟲には、後翅の後縁角に近く、灰褐色(裏面は黒色に白色鱗を混す)の發香腺斑あるを以て、容易に雌雄を區別し得べし。養老、吉城の二郡に於て獲たり。蛺蝶科 (*Nymphalidae*)、此科に屬するものは、今回の採品中左の二十二種なりとす。

(一九)オホハヤテフ (*Grapia caerulea*, L.) 此種は、ハヤタテフ (*G. c-album*, L.) に能く似たるも、翅縁の出入り彼れの如く甚しうなせ、且、翅色稍淡くして帯赤黄色を呈し、裏面は帯褐黄色

なるを以て、キタテハテフとも稱す。氣候變形により、大小色彩も差異あり、岐阜、揖斐、山縣、郡上、惠那、益田の一市五郡に於て獲たり。

(一〇)ヒオドシテフ (*Vanessa xanthomelas*, Schiff.) 翅の表面は黄赤色に、黒色の斑紋を有して美麗

なるも、裏面の黒褐色は、淡褐色の帯紋を有し、恰も樹皮色なるを以て、静止のときは容易に見出し難し。該蝶は成蟲を以て越年すれば、何時までも採集し得べきも、初夏の候に發生すれば、其時期に於て最も完全なる標本を得べし。稻葉、養老、揖斐、加茂の四郡に於て獲たり。

(一一)クジャクテフ (*Vanessa io*, L.) 翅の表面は朱黒色にして、孔雀紋狀の斑紋あるを以て此名あり。

該蝶は北海道及奥羽地方には普通なるも、其以南に於ては、本島の山間に稀に見る所のものなり。益田郡秋神小學校尋常二學年岩畑長右衛門の採品あり。

(一二)ルリタテハテフ (*Vanessa canoede*, Nieville.) 翅の表面は黒色にして、前後兩翅を通じ、一條の紺碧色の帯紋を有し、裏面はヒオドシテフ、クジャクテフ等と殆んど同彩にして、保護色の好標本なり。今回、一市八郡に於て獲たり。

(一三)アカタテハテフ (*Pyraeis indica*, Moore.) 此の蝶も亦分布廣く、全國到る處に早春より秋末に到る間飛翔するものにして、翅面は黒褐の地色に、黄赤色の斑紋ありて美麗なる種類なり。羽鳥、養老、揖斐、山縣、武儀、益田、吉城の七郡に於て獲たり。

(一四)ヒメアカタテハテフ (*Pyraeis cardui*, L.) 前種に似たるも翅色の稍淡きと、黄色部の多くして斑紋の異なるより容易に區別し得べし。海津、不破、揖斐、本巢、武儀、吉城の六郡に於て獲たり。

獲たり。

(二五) アウモンテン (Argimus anadyomene, Feld.) 翅の表面は、帯赤黄色にして、一般に黒色の斑紋を有し後翅の裏面は、帯緑黄色に、微かに白色の雲状紋を有す。而して雄蟲の特殊鱗は、第二翅脈上に在り。揖斐、加茂、惠那、益田の四郡に於て獲たり

特殊鱗 (Androconia) は、一種の香氣を發する所の鱗毛にして、豹紋蝶類に於ける雄蟲の多くは、前翅の表面、翅脈上よ、黒色毛状の特殊鱗を密生し、灰褐色の保護鱗を以て掩ふ。而して蟲種により、其數と翅脈を異にすれば、豹紋蝶分類上、最も必要の点なりとす。

(二六) ウラギン・ハウモンテン (Argimus adippe, L.) 翅の表面は、前種と殆んど同様にして、特殊鱗は、第二第三翅脈の二條にあり、後翅の裏面は緑黄色に、稍褐色を混ト、多數の銀紋は基部と外縁に沿ふて分れ、その中央に褐色の圓紋列あり、外縁に沿へる銀紋は半月形にして一列をなす。養老、山縣、武儀、郡上、加茂、惠那、大野、益田、吉城の九郡に於て獲たり。此等豹紋蝶類の表面に於ては、餘程標本を取扱ふ上に於て熟達せるものに非らざれば、容易に區別し能はざるべし、以て其酷似せるを知るに足らん。

(二七) オホウラギン・ハウモンテン (Argimus neippe, Feld.) 前種と酷似せるものにして、稍大形なり。雌に於ては形の大なるど、斑紋により容易に前種と區別し得べきも、雄に至りては殆んど同様にして區別容易ならざり、今その兩雄蟲の異なる重なる點を掲ぐれば、前種に於ては、特殊鱗叢は二條なるも此種は第二翅脈に於て、微かに存するのみ、後翅の裏面の銀紋は前種に比し比較的小にして疎なるど、褐色の圓紋列は前種の如く密ならずして、その表面に顯はる、黒點は三個あるど、外縁に沿へる銀紋は前種に於ては半月形なるも、此種はB字形をなす等は重なる点にして、尙其他に於ても多少の相違あれ

ば、標本鑑別に熟達せるものは、表裏何れよりも直ち區別することを得、今回、稻葉、武儀の二郡に於て獲たり。

(二八)ギンスヂヘウモンテン(Arginmis paplia, L.) 後翅の裏面は綠色にして、前縁より後縁角より向ひ

銀白色の三條帶と、外縁に沿ふて同色の二列紋あり、此種は、雌雄の區別稍著しく、發香腺脈は第一

第二、第三、第四の四翅脈にあり。不破、武儀、加茂、惠那、大野、益田、吉城の七郡に於て獲たり。

(二九)ウラギンスヂヘウモンテン(Arginmis laodice, Pall.) 後翅の裏面は殆んど中央に於て、前縁

より後縁より亘り、切々ある銀紋列ありて二分し、基部に向へる部は帶縁黃色にして、内より褐色の二線

あり、外縁に沿へる部は褐色をなし、表面の斑紋列は微かに顯はる、惠那、益田の二郡に於て獲たり。

(三〇)オホウラギンスヂヘウモンテン(Arginmis rulsana, Motsch.) 此種は、極めて前種に酷似せるも

のにして、唯、其異なる點は、前翅の前縁角の長く延びたると、特殊鱗は第一、第二、第三翅脈の三條

もあるも、前種に於ては第一、第二の二脈のみなると、後翅表面の基部に向へる黒點は、相連接し、裏

面の黄色部にある褐色線は、前種に比し細くして直線をなせると、前種の前翅裏面には、微なる白紋列

ある等、其重なる相違の点とす。山縣、加茂、惠那、大野、益田、吉城の六郡に於て獲たり。

(三一)メスグロヘウモンテン(Arginmis sagana, Doubl.) 凡て、豹紋蝶類の雌蟲は、雄蟲に比し大形

にして黑色を増せりと雖も、此の種の如く、色彩に於て全然相違せるものは總ての蝶類に於て多く見

ざる所、雌雄陶汰の好標本として著名なり。稻葉、養老、不破、山縣、武儀、益田、吉城の七郡に於て

獲たり。

(三二)ミスヂテン(Nepis acepis, Lep.) 翅は帶縁黑色にして、前後兩翅に通して三條の白紋列ある

を以て此名あり、裏面は茶褐色にして、白條紋は鮮明あり。岐阜、稻葉、羽鳥、海津、土岐、及安八の一市五郡を除き、各郡に於て獲たり。

(三三) オホミスヂテフ (*Nepis alherna*, Brem.) 前種よりも遙に大形にして、ハヤシミスヂテフ (*excellens*, But.) とは、大小色彩に於て酷似し、前翅の中室内に於ける白色の帯紋は、不規則なる鋸齒状をなし常に山地に産す。今回、惠那、大野、益田に於て獲たり。

(三四) ホシミスヂテフ (*Nepis pyren*, But.) 翅の色彩はミスヂテフに似たるも、稍大形にして、後翅の基部に數個の黒點あるを以て、容易に識別し得べし。該蝶は、山地に於て稀に得る處のものなり。惠那、益田の二郡に於て獲たり。

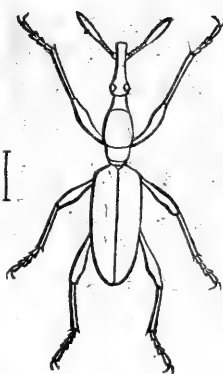
(三五) イチモジテフ (*Limenitis sibylla*, L.) 翅の表面は黒褐色にして、前後兩翅に通し一列の白色紋あるより此名あり、夏季林間に普通にして、今回一市九郡に於て獲たり。

(三六) ヒメイチモジテフ (*Araschnia purjana*, Bremer.) 美麗なる小形種にして、氣候變形より春生種と夏生種とは、恰も別種なるが如し、即ち、春生のもものは、中央の帯紋は細く樺色をなし、其兩方には不規則なる同色の斑紋あるも、夏生のもものは、中央の帯紋太く白色をなし、外縁に沿ふて僅に樺色の紋列を存するに過ぎず。其他、裏面に於ても亦紋様を異にせり。該蝶は山地に産するものにして、郡上、惠那、大野の三郡に於て獲たり。

(三七) コムラサキテフ (*Apatura ilia*, Hüb.) 雄蟲の翅の表面は、見様により美麗なる紫色を呈はすを以て、雌雄淘汰の好標本として有名なり。常に夏季に於て柳樹の津液に集まる、今回縣下十一郡に於て獲たり。

するを以て、又甘藷の象鼻蟲とも謂へり。元來、此種は本州にて其發生を認知せずと雖も、沖繩縣に於ては、年々發生して甘藷作に加害すること多く、爲め同地方の栽培家は之が驅除豫防の方法に苦慮されつゝありと聞けり。余は先年同縣より研究所へ加害の甘藷根を添附して其驅除豫防法及習性等に就き照會ありし時、其現品を見て、栽培家の

蟻形象鼻蟲の圖



苦慮の容易からぬ事を知得したりき。即ち其送附されし甘藷の二十餘個にて、何れも外觀は餘り變化なきも、内部は全く穿食を蒙り、殆んど蟲糞を以て造られたるやの觀ありき。而して、此種に就ては未だ一の經驗もなく、又記述されたるものを本邦にて見し事あらざりしが、今米國

農務省の發刊に係る千八百七十九年の年報を見るに、甘藷根の穿孔者と題し、シラス、フホルミカリウスオリブイア (*Cylas formicarius, Olivier.*) として恰も此蟻形象鼻蟲と同一種とも思ふべきものが甘藷作を加害することにつき、そが發生の模様より習性等に到る實驗の結果を記録しあれば、該蟲研究の材料ともならんかと信じ、左よ之を記載して讀者の参考に供せんとす。

此種は千八百七十八年の七月八日、米國フロリダ洲のマナーを稱する所のジェー、ダブリユト、カーリー氏より其成蟲を得たりしが、同氏は同地方の甘藷作は全く該蟲の爲めに收穫を絶滅に歸せしめん由を報告せられぬ。而して、氏は又同地より少しく離れたる所の甘藷栽培家なるギルレット氏の質問に對し、其習性を明答し能はざりきと云へり。余は、千八百八十年の二月二十日、該蟲の件に就き充分調査を試みんとて其被害地に出張せり。然るに、不幸にもギルレット氏が該蟲の加害猛烈なるより、所有の甘藷を悉く採掘せられたる後に邂逅したりき。されど此種の爲に受くる所の損害は莫

大よして、所よりては殆んど甘藷作の全部を勦滅に歸せしめし由を聞けり。

此蟲は其形狀恰も蟻の如く、翅鞘、頭部及び口吻は藍色を帯びたる黒色にして、胸部は帶赤褐色を呈せり。卵子は帶黃白色にして、管狀なる根部の一端、莖部に接近せし所に小孔を穿ち、其内は産附せられ、乳白色を呈せる幼蟲は根部の各方向に穿食し、所謂トンネルを造る爲めに甘藷の莖は枯死するに到れり。而して此トンネル中を驗すれば、全く幼蟲の後方部は其糞を以て充塞し、蛹化せんとする時は卵形の孔を造り、其中よて化するを常とす。

二月に於て、余のマナテラへ出張せし時ハ成蟲のみありしが、五月の十七日ハはカーリー氏より僅かの蛹と共に卵子及び成蟲の存在する所の甘藷を得たりき。而して飼養瓶中にて、此等のものが三十一日間を費して、卵子より成蟲に到る迄の變態を完ふせしことを知得したりしが、其内蛹にて八日間を費せり。之より之を考ふれば、該種は此時期に到る迄は既ハ三回の變化を終へたるものならん。然し、今後尙幾回の變化を爲すものなるやは明言し難し。

該蟲の驅除法としては、尙、詳細に此種の習性經過等に就き、研究を爲すよらざれば考按を發見し難し。故に、目下の處、該蟲の加害を見出すに當り、直ち掘り採りて家禽に食せしむるの外致方なからん。此種の分布は廣くして、レコント氏はコーシンチャイナ、インディア、マダカスカル、キエ

バ及びビルイジアナ等に産すと云へり。余は、今フロリダの一産地を加へんとす。

右の記事に次で、卵子、幼蟲及び蛹の形狀色澤等につき、尙左の説明あり。

卵子は帶黃白色にして卵形をなし、附着部は稍細まりたり。其最も廣き部分よて〇、六五ミメを算し、表面は光澤を有せしめて僅かの粒狀面を示せるも、此は肉眼にては明かならざる。幼蟲の充分成育せし

ものは六ミメの長さをも有し、肥大にして、側縁は稍乳頭狀を爲す。色は純白にして、頭部は淡褐色を呈し、口部は暗褐色なり、軀に有する細毛は肉眼にて見得べからざるも、鏡檢すれば容易に認知し得べし。胸關節の腹面、脚部の處には各一の大なる結節を備へ、腹部は滑大なりとす。蛹は最初幼蟲と同色なれども、漸次暗色に變ず、其形狀成蟲に似たり。脚の膝節は胸部外に達し、第一對のものは特に凸出し居るを見るべし。翅部と翅鞘は狭く、且つ短かくして軀の腹側に達し、口吻は胸上より下方に折れたり。而して腹部の末節には后方と、外方に二個の曲りたる角狀突起を具有す。頭部の末端は數個の小結節ありて、之より細毛を生ぜり。

以上の記事に依りて察するに、殆んど、我沖繩縣に發生して加害を逞ふする種類と同一種なるやの觀あり。若し果して同一種ありせば、該蟲の原産地は其何れの部分に屬するや、我邦にて、只沖繩縣地方のみとすれば、或は支那、印度地方より來りたるものにはあらざるか、兎に角記して以て后来研究の資料と爲す。

◎天牛の小實驗

静岡縣 神村直三郎

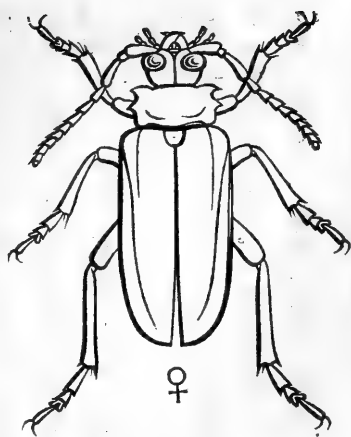
明治三十六年三月九日、遠江國磐田郡岩田村一寺院の竹林を開墾するあり、予の好事、何か獲ものもがなど見よ行きて蟲は出ずやと問ふに、何も出ませぬと人夫の一同は答へぬ。さるにてもとあちこちと、或は掘起したる處、未だ蠟のとゞかぬ處、そこかして尋ね居たるに、一人大聲に妙な蟲が居ましたといひ喜色满面差出すを見れば、三四年も前より切りたるかと覺しき竹の切株の半ば腐れたる一塊にして、中に一幼蟲棲息せり。

幼蟲 白色にして、長さ二寸五分、徑四分あり、天牛の幼蟲かと思れば、微かきかとも正に三對の胸脚あり

り、其顎強銳にして、天牛の幼蟲に普通見るが如き腹背兩面の隆起物及粗面部あり、兎に角稀有なる幼蟲かな、いで飼育して其正体を見届けくれんものと、即ち、考一考の後左の方案によりて飼育することゝはあしぬ。

●飼育、器は其竹の根株より少しく太き硝子瓶を撰べり。是れ其幼蟲をして尙根株の中に在るの思ひあらしめんがためなり。而して其器は深さ四寸五分、徑二寸五分あり、此中には其根株の周圍の有機物を含する土を満し、尙其従前の住所、且食餌たりし竹根の一片を加へて幼蟲をば其中に放ち、濕氣を土に與ふるがためには細管を以て瓶の側壁より腐りたる水を注入せり。

ノコギリカミキリムシの圖



ありけり。一ヶ月の後、即ち四月七日之を見るに、尙初めの如し。同月下旬に至りて中より瓶の四壁を土よてぬり、内部を透見すると得ざらしめたり。五月五日試に瓶内の土を少しづゝ去りしに、中には一の大空洞を造り、其中よて化蛹し居たり。而して幼蟲の舊皮は其傍らに在りぬ。

●蛹、白色よして長一寸二分、幅五分五厘、六脚四翅の狀態腹面に備はり、鞭狀の觸角全体の半に達し、時々腹端を回轉す。即ち、再び是を瓶内よ收るゝ當り瓶の一壁を透し、外より蛹体を見得る様になりし、木葉を以て洞の蓋となし、其上よは例の土を置く、越て六月七日、白色蛹の透見せざるゝより、再び瓶を開きしに、一成蟲ありて活潑に運動し居たるが、蛹皮のなかりしは蓋し食盡したるものなるべきか

成蟲、成蟲は雌にして、岩川氏のノコギリカミキリ(動物學雜誌第十二卷百四十一號日本天牛科第一版第一圖)なり、体長一寸三分、幅五分、觸角七分、前胸の左右に二個の鋭突起ありて、翅鞘は光澤ある黒褐色なり。其の觸角岩川氏の記事と合はざるは、雌蟲なればあるべし。又同氏の云はるゝ如く、幼蟲はブナの老木をも食するかは知らざれど、腐りたる竹根を食するは明なり。友人某の言も、竹林を切開きて小學校を建築せしに、其庭園より該成蟲の多數出たりとあり、彌々以て竹根を食ふの説堅固なるに似たり。

予の寡聞なる、天牛科の幼蟲は皆無脚なるが如く記憶し居たりしものが、以上の實驗によれば微々ながらも六脚を有す。即、其幼蟲の説明も、此の一項を加ふるの價值あるものとなれり。不完全ながら目誌より拔萃して、貴誌に寄することゝなしたり。



◎除蟲液の性質を述べて害蟲驅除に及ぶ 静岡縣 岡田忠男

編者云、本篇は去四月開會の第六回岐阜縣害蟲驅除講習會開期中、静岡縣農事試験場技手岡田忠男氏が一場の講話を試みられし際、筆記の概要なり。注油驅除に就ては時節柄参考に實すべき節あれば茲に掲ぐる事となしぬ。

私は只今名和先生から御照會下された、静岡縣の岡田と申すものであります。這回大阪博覽會見物の爲めも參りました歸路、一寸此處へ立寄り、名和先生に御目に懸りました處、幸ひ此會が開けて居るから何か話せと先生から御注文がありました。何分突然の事で宜い考へもありませぬ故、私は先づ除蟲液よ就て、少しく御話し致さうと思ひます。然しながら無學無識なる私の取調べましたのであるから、不

行届で分らない事もありませうが、其段は御許しを願ひます。扱て私の縣では、害蟲驅除の事が充分行届させぬから、年々少しは苗代田の驅除を致しましたも、本田は植付をしてから後に於て、必ず螟蟲や浮塵子にやられます。先づ螟蟲の事は差し置きまして、浮塵子の本田は發生の際は、最も初期を見計ひて、注油驅除を行ふのが肝要の事と考へます。其れは付て、私是一般農家に對し、浮塵子發生の際は、可成初期を見計ひ、是非油を注ぎて驅除する様よと申して居ります。而して其油は何油であるかと申しますと、油の種類も種々様々でありまして、到る所異つて居りますが、先づ燈油として何處にでもある石油で、是は何處でも浮塵子驅除に用ひます、又近年頻りに除蟲液と申すものが、我縣下などへ、諸處より輸入して參りまして、何處にでも此油を賣て居ります。然し一般の農民等へ、此除蟲液は如何なるものであるか之を知るものは少ないのみならず、其使用を危むものが多くあります、依つて私は、是非此除蟲液の性質を調べて見たいと思ひまして、我縣下の輸入先を調べますと、先づ東京、名古屋、越後等から輸入されます。而して我縣下でも、或る所で製造して居りますが、其原料を調べて見ると、一は黄棟樹の煎汁に、他は何か二三品を配合したものが聞きて居りますが、他の一ツは普通除蟲液と申して、浮塵子驅除の際用ゆる所のものは、石油製造の際に出づる所の滓の如きものであります。故に此除蟲液は濃厚にして惡臭ある暗緑褐色の液であります。而して此者は如何にして製造さるゝかと申すと、先づ順序として石油の製造に付て少しく御話し申さねば分りませぬが、石油の原料は、原油と申して石油の湧出する地方は、山の中腹に井戸が掘つてありまして、是れから汲み取りたる液で、これは、其の色が綠色を帯びて一種の臭氣があります。今此の原油を汲み取りて、暗き所を貯藏し置き、釜即ち、蒸溜器に入れて熱度を與へますと、一方の管の先へ白色にして透明なる液が第一番に出ます、是れを揮發油と申して、時計の器械等を磨く油であります。故に價も高價であります、一斗の代金が大抵七、八圓以上致します。其次ぎは出ますのが即ち石油で、普通燈油と致すものであります。其次は輕油と申す油で、黄色は少しく赤みを帯びた色でありまして、是れは何も使ひ途がないと聞て居ります。其次ぎに出るのは重油と申すもので、其色が暗紫赤色と云ふ様赤色かと思つて居りませ、而して、釜の内には、油滓が一石に對して一、二斗残ります。此者は黒褐色にして、極めて濃厚であります。扱て除蟲液は此の内如何なるものから製造されるかと申すと、以上述べました、石油製造後の殆んど不用物を調合致すのであります。其調合の方法は、先づ大きな器に輕油を

何分、重油を何分、油滓を何分と混合したるのみで、斯様は製作法は至極簡易なものであります而して其重油や油滓は、臘即パラフィンとか申すものが有りますから直に水に散ります。然る全体の水が水に溶解せることは見えませぬ。私は是れが全体水に溶けるや否やを試験致しましたが、全く水に溶けぬ様と思はれます。其試験は、大なる漏斗に木栓をなし、其栓の中央に長き玻璃管を通し、此漏斗に水を満たし、其内に石油又は除蟲液を注ぎ、能く攪拌したる後徐々に玻璃管を抜き、下部なる水のみを取りて、多くの人に其臭の有無を訂したるに、一人も石油及除蟲液の臭氣を感ずるものなく皆油は水面より浮いて居りました。然し私は下なる水に、油分が溶けて居るや否やを化學的に調査して貰はなかつたのが遺憾でありました。前申上げた通り、先づ水に臭氣も付かず、且油は水面に浮て居りますれば、水に溶解せぬものも考へても差支はありませぬ、故に水田に油を注いでも、其れを排除さへすれば、油分は流れ去りますから、稻に害はあるまいと考へます。又除蟲液と石油の價を比較すれば、其價は除蟲液が二升十錢なれば、石油は十五錢致します。農家の經濟より申せば、成るべく價が安くて効能が澤山あり得らるゝ程結構あるはとありませぬ、されば、除蟲液でも宜いが、然し石油が却て安く、除蟲液が少くない所で、價が高かつたり、又は得ない處であつたり、無理に求むる必要はないと考へます、今迄で御話致しました通り、除蟲液と申すものは、別なものでもありませぬが、然し除蟲液にも其調合の分量によりて、種々善悪がありまして、之を鑑別致すことは、農家として余程六ヶ敷と思ひます。斯様ちとを長く申しても御縣の如く、最早數回の害蟲驅除講習會を御開きに成り、害蟲驅除も充分行届いて居る處に來て、斯様を除蟲液などのは、或は必要かと考へますが何も差當り御話するにありませぬから、唯、責塞ぎに申上たので何も御參考ともならぬは實に愧じ入る次第であります。尙諸君には將來益々御研究の上、是非共昆蟲學の深味を會得せられ農業上我れが期する所の、應用昆蟲學の價値を發揮あらんことを偏に希望する所以であります。

◎アゲハノテフの經過に就ての實驗

岐阜縣長期害蟲驅除講習生

中井藤助

編者云ふ、本篇亦水曜昆蟲會席上に於ける同氏の談話にして、此實驗は本誌前々號所載の續きなれば、參照せられんことを要す。先會に於て、アゲハノテフ蛹化の準備として、幼蟲が糸を樹枝に纏ひ、次に環狀の糸を以て自己の軀を

支ふることは付き申し上げましたが、只今は其後の経過即ち脱皮して蛹となり、成蟲とある迄の経過を御話し申し上げ様と存じます。

五月廿九日午前十一時廿分より、第二關節の背面及側面稍々隆起して、全軀舊皮と新皮との間に水波

(イ)はアゲハテフの成蟲
(ロ)は其蛹



を生じ、十五分間程経て、第二關節の背面の皮膚開裂し、頭部の先端少し出ました。其れと共に軀を伸縮しますれば第三關節より、漸次第四第五關節開裂して外皮を順次下方に脱ぎ下げ、漸次縮みて腹端に到るや、舊皮を脱して直ちに以前より掛け置きし糸は、腹部の先端を附着しました。此腹部を舊皮より脱して糸に纏附する間は、僅かに舊皮が腹部に附着し居る時にして、若しも風其他のものゝ激動を與へられたれば墜落を免ぬかれざらん有様で、實に危機一髪の間にて、其巧妙なる又本能とは云へ感すべきの至りであります。而して尙舊皮の全く落ちざるを以て、幾回となく軀を廻動し、二三分間にして其皮落ち、茲は全く脱皮し終つて蛹となりましたが、糸を懸けましてから之まで卅時間を経ました。以後數日間は、別に變化致しませんでしたが、六月十日頃、今まで青色の蛹が稍々薄白色を帯び、翌十一日に到たれば、既に成蟲の有する軀の班紋は、畧は蛹皮外より認めらるゝ様となり、又頭部にある一雙の突起物と、胸背上に有る一の突起物とは半透明となりました。

十二日午前第八時頃、羽化の前兆と覺しく全軀微動し、凡そ十五分を経ちますると、頭部にある一雙の突起物と、胸背上の一つの突起物との間が開裂して、頭部現はれ直ち胸部の腹面の角に向つて、其先端僅かを殘し、左右觸角を藏する邊に沿ふて斜に裂け、同時に觸角、胸部、腹部等漸次出で、遂に全く出殻し終て、附近の樹に移る時は八時三十分でありまして此間十五分を要しました、而して此者は觸角胸部、腹部及脚部等は、老成の成蟲と差異を認めませんでした、二雙の翅は甚ゞ小さく、僅か三四分

よ過ぎないのであります。さりながら暫時口吻及翅を動かせば、翅は漸次延大となり、凡そ廿五分間よして飛翔に堪ふる充分な翅になりました。以上述べましたのは、蛹化より成蟲に至る迄の経過の大畧で御座り升。今迄私は數頭を飼育して來ましたが、要するに皆殆んど其経過の時日等にも大差なきようで御座いました。之を取り摘んで申せば、即ち始め黒褐の幼蟲は、四回脱皮して青色となり、そのもの二週間内外にして糸を引き己の躰を繅り、三十時間内外よして五回脱皮して蛹となり、後二週間内外よして成蟲となつたので御座います。



◎六足蟲彙纂 (未の卷)

在東京 長野菊次郎

(十九)亞米利加野蠶の食量と生長 鱗翅類の幼蟲が多量の食物を食ひて速に生長することは、人の能く知れる所ろあり。今、ツループロ氏 (Trouwel) は亞米利加野蠶の (Telen polyphemus) の幼蟲の嗜食力につき、次の如く言へり。曰く、此幼蟲の生長の速なることは實に驚くべき程にして、其食料を要することの莫大なるは、到底實驗せざる人の殆んど信する能はざる程なりと、今、同氏の試験によれば、此幼蟲の始めて卵より孵化したる際は、僅に一グリーン(邦量一厘七毛強)の二十分の一に過ぎず。然るよ十日を経れば一グリーン二分の一となるを以て、即ち最初の重さの十倍とあり、二十日を経れば三グリーンとなりて最初の六十倍となり、三十日には三十一グリーンとなりて六百二十倍、四十日には九十グリーンとなりて千八百倍、五十六日即ち十分生長したるときは二百〇七グリーンとなりて四千一百四十倍となるあり。又幼蟲の三十日間に要する食量は殆んど九十グリーンなれども、五十六日間乃ち十分の生長を遂ぐるまでに要する全量は、榭葉の百二十葉に當り、其重さ一磅の四分の三に當る、此他半オンスの水をも要すと云へり。然れば、唯一疋の野蠶が要する食物の全量は、幼蟲の最初の重さの八萬六千倍に相當せり。豈驚くべきの至りならずや。(バックカード氏昆蟲研究指針)。

(二十) 没食子蜂科の世代の交番 今より五十余年以前、ハルチツヒ氏(Hartig)は没食子蜂の蟲癭より、或種の多數を脱化せしめしに、二萬八千個の蟲癭より殆んど一千のヂスチカ没食子蜂(Cynips disticha)を得、又ホリ没食子蜂(C. folii)の蟲癭より其種の三千或は四千を得たり。然るに、此等の蜂は皆雌のみなりき。而して此觀察は其後他の博物學者より一層確信せられたり。そが中にフレデリッキ、スミス氏(Frederich Smith)は如何にもして此蜂の雄を得んと欲し、或時エングランド(England)の南方より於て、コラリ没食子蜂(C. Kollarii)の蟲癭四千四百十個を採集し、此等より千五百六十二疋の蜂を得たり。然るに、此等も亦雌のみにして、雄は一頭だもあらざりき。かく第二の實驗も亦同一の結果を奏すると且ハルチツヒ氏の多年實驗の結果とは、遂に同氏をして、没食子蜂属の二十八種は一も雄を見る能はざることを發布せしむるに至りぬ。是蓋し千八百四十三年あり。然るに其後此等の事實は多少の誤謬ありて、多分雄蟲は異りたる蟲癭に棲むなぐんどの意見表はれたり。是に於てアドラー氏(Adler)は此等の疑問を解決せんと欲し、蟲癭より脱化したる雌蜂を取りて、鉢に植わたる小き櫛に移し、單爲生殖によりて蟲癭を作らしめんことを勉めたり。然るに、此企圖は實に好果を奏して非常の發見を孕ましたりける。即ち此等の雌は單爲生殖によりて、鉢植の櫛に新なる蟲癭を生じけるが、此蟲癭は母雌の出でたるものとは全く形を異にするものにして、從來、全く別種と認められたる蜂の出づる蟲癭と同一ありき。かくて此形の蟲癭より始めて雌雄の兩性を生ずるに至りぬ。アドラー氏の觀察は他の博物學者の實驗より愈確實となり、遂に没食子蜂科(Cynipidae)に属するものは、世代の交番を行ひて、其一代は單爲生殖をなすものなることを確定するに至りぬ(ケンブリッジ博物誌)。

◎ 螟蟲驅除獎勵展覽會準備記事 (第二)

蟲の家主入

(一) 滋賀縣栗太郡大寶村農會螟蟲驅除獎勵規程 栗太郡大寶村農會にては螟蟲驅除豫防獎勵の爲め左の規定を設け、已よ本年五月廿日より實施の由。害蟲驅除豫防獎勵上有益なる事業なれば、茲に掲載することなしぬ。

(第一條) 螟蟲驅除を獎勵せん目的を以て懸賞抽籤券を發行す。(第二條) 抽籤券は螟蟲卵塊二百個、又は螟蛾五十頭毎に各一枚を交付す。(第三條) 懸賞抽籤券等級金額及個數は左の如し。壹等「金一圓五十錢五個通計金七圓五十錢」、貳等「金一圓八個通計金八圓、叁等」金五十錢十五個通計金七圓五十錢、「四等」金三十錢二十個通計金六圓、「五等」金十錢三十個通計金三圓。(第四條) 卵塊は二百個を一

束とし、蛾は五十頭を紙袋に入れ各字所屬幹事に差出すべし。但二百個又は五十頭に満たざるものは一個と見做さず。(第五條)各字幹事は前條の數を精査し、之を取纏め、三日毎に採取者の氏名と共に現品を村農會長に差出し、抽籤券の交付を受くべし。(第六條)村農會長は字幹事より受けたる現品及氏名を對照し、登録の上相當の籤抽券を交付すべし。(第七條)驅除期日は五月廿日より六月十日迄三週間とす。(第八條)抽籤執行は八月中に於て村農會長之を定め、字幹事二名以上の立會を以て之を行ふものとす。但し、執行期日は執行前少くも五日前に各字幹事に其旨を通知するものとす。(第九條)立會人は村農會長之を指定す。(第十條)被指定者は正當の理由なくして是を拒辭するを得ず。(第十一條)抽籤券は紙片に一二の數字を記入し、村農會長印及取扱者の認印を押捺するものとす。(第十二條)螟蟲驅除抽籤記簿を調製し、當籤者の記號、金額、氏名を記載し、保存するものとす。(第十三條)螟蟲驅除統計簿を調製し、第六條の登録をなし、成績の結果を明にすべし。

尙、同會にては左の通り實施督勵しつゝある由。(一)捕蟲網を調製し捕蟲監督として村農會員巡視すると、(二)螟蟲卵塊は五個に付壹厘の價格を以て買入ると、(三)苗代の誘蛾燈は六月一日より十四日迄二週間点火すること(滋賀縣農會報第十六號)。

(二)岡山縣の獎勵金下付規程 岡山縣知事檜垣直右氏は、三十六年五月十九日、岡山縣令第四十五號を以て、害蟲驅除豫防獎勵金下付規程を左の如く定めらる。

害蟲驅除豫防獎勵金下付規程、(第一條)本規程の獎勵金は明治三十六年に於て、稻螟蟲の卵塊を採集したるものに下付す。(第二條)獎勵金を受くべきものは、明治三十六年七月二十日迄に卵塊を添へ、市役所又は町村役場に届出たるものに限る。前項の卵塊は二百個毎に一纏となし、端數は別に纏め封皮に其數を記し置くべし。(第三條)前條の届出を受けたる市長又は町村長は、左記書式により卵塊を添付し、明治三十六年七月三十一日迄に、市長は縣知事、町村長は郡長に届出づべし。郡長は八月十日迄に、採集者住所氏名及卵數を縣知事に報告すべし。(第四條)本規程の獎勵金額は參千圓を限りとす。(第五條)前條の金額は採集せる卵塊の數に應じ下付するものとす。但卵塊一千個に付金壹圓を超過するを得ず。一人に付採取せる卵塊二百個未満のものにては獎勵金を下付せず。(書式)螟蟲卵塊採取届。採取者住所氏名。卵塊數。合計。右採取せる卵塊を添へ及御届候也。年月日市(町村)長氏名。知事(郡長)宛。

(三)岡山縣の螟蟲驅除豫防法 檜垣岡山縣知事は本年五月廿四日、縣令第四十八、九の兩號を以て螟蟲、浮塵子の驅除豫防法を命せられたり、今其螟蟲に關する所のみを掲載すれば即ち左の如し。

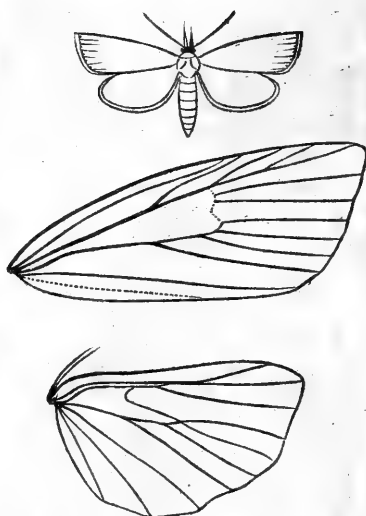
(縣令第四十八號)、縣下各郡の稻苗代地、直播田及陸稻畑に螟蟲發生せしに依り、明治二十九年法律第十七號害蟲驅除豫防法第三條に據り、左の期間及方法に依り、郡令の定むる期限に従ひ驅除豫防を行ふべきを命す。主務官吏又は警察官吏に於て、施行の方法不完全にして其効充分ならずと認むる時は、該官吏をして直に臨時驅除豫防を命せしむ。

(第二) 苗代地に於て螟蟲驅除豫防の期間及方法 (一) 六月三日より同廿五日迄の間に於て四回以上採卵を行ふべし。(二) 六月十一日より同廿五日迄の間に於て點火し能はざる風雨の時を除き、毎夜點燈誘殺を行ふべし。

(縣令第四十九號) 岡山市の稻苗代地に螟蟲發生せし云々(以下四十八號と同文)

(第二) 螟蟲驅除豫防の期限及方法 (一) 六月八日迄に第一回採卵を行ふべし。(二) 同十四日迄に第二回採卵を行ふべし。(三) 同廿日迄に第三回採卵を行ふべし。(四) 同廿五日迄に第四回採卵を行ふべし。(五) 六月十一日より同廿五日迄の間、點火し能はざる風雨の時を除き、毎夜點火誘殺を行ふべし。

二化生螟蟲の雌蛾と其翅脈の圖



(二四) 二化生螟蟲の翅脈 蝶蛾類の調査には専ら翅脈研究の必要あるを以て、邦産蛾類に於ても亦漸次研究せらるゝに到れり。所友長野菊次郎氏は目下専ら此の方面に於て進行せられたるが、其内二化生螟蟲の翅脈の原圖を同氏に請ひ、特に茲に示して參考と供す。

(二五) 誘蛾燈に對する螟蟲會議 古來、飛で火に入る夏の蟲と稱し、昆蟲の或種の燈火を慕ふて集まるの性あるを利用し、誘蛾燈又は殺蟲燈と稱して夜間點火を爲し、其下を水を盛れる盥の如きものを受け、之を石油少許を注ぎ置かば、螟蟲蛾を初め種々なる小形昆蟲の來りて投入死滅するものなり。故に目下誘蛾燈は螟蟲驅除の良法として中々廣く採用せられ居れり。而して漸次減少する傾向あるも、尙未だ容易に中止するの時期は來らざるべし。茲に於て螟蟲會議あり之を傍聽するよ、甲の曰く、誘蛾燈の採用せらるる間は、吾等種族の絶滅は勿論繁殖にも余り大なる妨碍あらざれば、先づ安心し居るべしと云へば、乙曰く、然し甲の云へる如く中々安心は出來ざるべし。何となれば、誘蛾燈に入らざる時は自然無効と稱し、又如何なる方法を以て吾等を苦むるやも計り難し、幸ひ吾等も類似せる小蛾類を誤魔化して投入せしむれば可ありと。丙曰く、成程乙の云ふ通りあれども、此頃は漸次吾々仲間の性質、形狀等を研究するもの出で來りたれば全く雜蛾を誤魔化し置くのみにては十分ならず。故に繁殖の義務を果せる雄蟲をして、吾等社會の犠牲に供せしむれば如何。丁曰く、如何にも丙の云ふ如くなれども、雄蛾のみよては、或は疑ひの

起る心配もあれば、是非産卵後の雌蛾も投死せば安心からん、成曰く、諸君の考ふる如く雌雄共投死せば差支なき様あれども、若一研究の末、腹部に卵子の無きことを發見せられざる内に、病疾等に罹り、最早産卵の力なきものは勉めて早く投死せしむるを得策とす。以上の會議に依れば、誘蛾燈を用ひて容易に驅除の効を奏するの如何は、一目否一讀瞭然たるべしし

◎薬用に供する昆蟲

千葉縣 林 壽 祐

薬用に供する昆蟲と題すといへども、こゝには普く民間に行はるゝものを蒐めれば、悉く確實なりといふに非ず、唯一々其出所を示したれば、これが信否は宜しく讀者自身に定むべし。但し本文中○は民間に行はるゝもの、◎は昔の書物に載せられしもの、●は現下薬舗に販賣せらるゝもの、◎は動物學上及び醫學上に出づるものと知るべし。

(一)直翅類 ○蝗は黒焼と爲し、小兒の疔の薬に用ふ◎蟲蝨もまた黒焼とし、これに朱を混和し、水にて練りシモヤケの患部に塗れば効あり。●赤蜻蛉の黒焼も薬用となる。○蟻螂は、棘をつきたる創口に塗れば、速に治するを得べし。又腫物にも効あり。

(二)有吻類 ○蟬の脱殻は粉末と爲し、耳の薬に用ふ。○五倍子蟲は、酢と混合し、瘰癧の薬と供す。●膿脂蟲(Coccus)は、赤紫色料となるを以て著はる。其一種は下劑薬となる。●呀囁蟲(Cochinifera)も、コクシダの一種にして、多くカルミン酸を含有す。齒牙用の丁幾に製し、又神經、腎臟、利尿等の諸薬と供せり。此蟲は墨西哥國の原産にして、今は各地に傳殖せり。

(三)雙翅類 ●虻の一種は内科用に供す。

(四)鱗翅類 ●蠶は薬舗にては白姜虱と稱す。俗間其糞を煎じ痲病の薬と爲せり。○黑鳳蝶の翅にある細粉は腫物に効あり。

(五)鞘翅類 ●芫菁(Lytta)は、一に青斑猫と稱し、羯荝利素を含有す。普通發泡膏に製し、効能頗る多し。或は誘道薬となし、又芫菁丁幾に製して毛髮病に用ふ、露西亞より多く産出す。●葛上亭長(Epicauta)は、豆類を棲めり。之を捕え、熱湯にて殺し、乾燥して發泡劑と製す。本邦にては上總産を以て良質となせり。普通豆畑に居れども、一旦薬舗に出づれば、劇薬なりとて容易に販賣せざるあり。●地膽(Maleo)は、一にアリノオヤヂと稱し、醫薬に供せり。●螢は、薬舗にて熱取薬と爲し、民間にては細粉として指痛症に用ふ。

(二)膜翅類 ●没食子蟲(Cynips)は、よく櫛に生ト、其没食子は多く單寧酸を含有す。醫療にては、煎藥、收斂劑、或は丁幾よ製し、中毒病、下痢病等に用ひ、又外科用として効多し。●蟻の、腹部に蟻酸を含有するを以て、丁幾、或は蟻精に製し、神經、痲質斯等に用ふ。昔西洋の民間にては、蟻を囊に充たし、痲質斯の患部に當て、以て治療に供したりといふ。●蜂の幼蟲は、燒さて小兒の疳の藥と爲し、又蜂の巢と甘草とを混じ、煎じて飲用する時は、耳の聞わざるを治すと云ふ。●蜜蜂(Apis)の巢は有用なるものよして、蜜と臘とを得べし。蜜は調味等の諸藥となるべく、臘は膏藥、丸藥となし、或は血止めとなし、或は洞齒の充塞物と爲す等、其効能多しとす。

▲附記 ●耳の中に蟻の匂ひ入たる時は、煎胡麻を囊よ充て、マクリとなせば効あり。●毛虱生じたる時は、唐辛或は煙草の粉末を塗れば効あり。●蜂よ刺れし時ハ、創口に青芋の葉柄の汁液を注ぎ、或は齒糞、又は釣瓶の水垢を塗り附くれば其痛を去るべし。●毒蟲よ刺されし時は、アンモニアを用ゐて効あり。●毒蟲及び毒蛇の毒を受けし時よは、荳科植物の一種、ハブサウの葉液を附け、以て療するを得といふ。

○昆蟲界の興業者

東濃諏訪尋常小學校

長瀬清五郎

予、此頃右足の膝關節に腫物を生じ、好める野外の運動も出來ざるより、昆蟲界の興業者を一つ二つ記しつけぬ。固より參考書もなく、只思ひ出せる儘なれば、杜撰遺漏も多かるべけれど、唯、人にして蟲にだも如かざる、怠惰者流の頑眠を覺さんと欲する微意のみ。

(一)建築者

○ミノムシ

枯葉小枝を集め、糸を吐て人間界の、繩からげの居家を巧に作る。頭のみを出して、草木の葉を食ひ盡れば、家と共に他に移る。敵に逢ひ、又は食よ飽けば、其中に隠れて眠る。

避債者の世を忍ぶに似たり。○アリ、土木建築者にはアリこそ殊勝あれ。殊に共同一致、力を協せて働く様は、彼の支離滅裂、黨争ならすんば我利つくものと、同日の論にあらず。普通は大地に隧道を穿て其家を作れど、一種木皮の裂縁等よ沿ふて營むもあり、又アフリカなどには人をも上うしむる程の蟻塚を作るものありと。○ケラ、土工を以て世に許さる、だけありて、常に土中に穴居す。されど時ありて空中に飛翔し、溝河を越て居を移す。斯の如く、所謂水草を逐ふ的性行ゆる、其建築構造甚だ粗雑なり。○ハチ、全軀を蠟細工にて築くミツバチあり、泥細工を以てするジガバチあり、樹皮を咀嚼粉碎し、粘

液にて涅り固むるアカバチ、ヤマバチ、ヂバチ、アシナガバチ等あり、兎も角、其精巧あるは、人工の及ばざるものあり。○テツbaumシ(天牛の幼蟲)樹幹等の中に穴居す、通風採光は殆んど皆無にして、構造巧ならずと雖も、木屑を以て通路を塞ぎ、又其隧道を屈曲して敵を防ぐの用意なか／＼周到なり。○アリヂゴク(ウスバカゲロフの幼蟲)、軒下岩下等雨のあたらざる所の膨軟せる土中に居を構ふ、建造簡單なれども、敵を防ぎ、獲物を捕殺するの用意を觀るべし。

(二)紡績者 ○カヒコ、近頃西洋人人工絹絲を發明したりと吹立るものあれども、カヒコのそれは較ぶれば、其巧拙又論なし。○ヤママユ、一時柞蠶とて、或る山師の爲よ、傳來の家産まで失ひしもの東濃にはありき、然れども、其はヤママユの罪にはあらず。○クリケムシ、漁者の一要件として、釣糸には欲くべからざるテグスを人よ供す。然れども人智未だ進まずして、彼が成工せざるに、理不盡に壓殺して腸を抉出し、直よ酢に投ざるは慘の極。其他ケムシ、ナムシ等昆蟲界には、尙多少紡績するものあれども、以て國家よ貢獻するは、右等に止るか。

(三)醸造者 ○ミツバチ、一王の下よ同心戮力春より秋まで、夏の暑き日は日中僅に休息するのみよて營々花より花に飛び廻り、蜜を集め、之を醸し、蠟細工のタンクに貯へて、不時の用よ供ふるは、彼の僅かの不作に飢を訴ふる或地方の農民と撰を異にす。○オホマルバチ、地を深く穿ち、一子に一個の粘土を以てタンクを作り、蜜を満て、乳汁よ代て之を與ふ。則ち子を育つるは、親の務あることを知るものと謂ふべし。○アブラムシ、草木の同化液を吸ふて蜜を醸す。故よ農家よは最も嫌はる。昔漢土にては之を甘露なりとて、臺を作りなど祭禮的噪きをなせしことありと云ふ。

(四)牧畜者 ○アリ、好める甘汁を得んが爲よ、蚜蟲を諸方に運びて繁殖せしめ、或は蚜蟲の爲よ、害敵と戦ふて、互に殺傷することありと云ふ。

(五)航業及潜水者 ○カハグモ、形蜘蛛の如くして、長き四脚と短き二脚を働して、自由に水上を航す。○マツモムシ、背を下になしたるは、小き裝甲艇とも見るべく、短き六脚にて漕廻る様の可笑しさ、未だ曾て坐礁等せしとなしと云ふ。其他タガメムシ、ユリノハナスヒ、ミツカマキリ、ゲンゴロフムシ等の共よ潜水術に長せるものなり。是より水底の新事實を、陸上同類よ知らしむるものは、蓋し彼等ならんか。

(六)冒險者 ○アリ、銳利ある一對の劍を口角よ含み、全身甲冑にも似たらん如き剛き皮を被り、滿

身是膽的の勇氣當り難し。或時は隊を組み或時は單獨に險を冒して遺利を採檢し、一旦獲物に遇ふや、奮進身を以て之に當り、命を輕んずること鴻毛の如し。日本國民古來勇を以て稱せらる、彼れ是れ倣ふか、此れ彼に倣ふか。○ハチ、人間には輕氣球の發明ありたれど、未だハチの如く自由ならず。彼れは一對の膜翅を開き、單身山を越え、川を越え、縦横に採檢して、獲物あれば、例の毒液を塗れる利劍を振ひて一撃に之を倒し、餘り重量あるものは、數回に運ぶ。此際其場所を記憶するの識力、なか／＼感ぜべきものあり。

(七)彫刻者 ○コクザウムシ、世に倣妙彫として、持囀さるゝものあれども、恐くは、未だ曾て米麥粒乃至粟黍粒をくりぬきて、其内面を細工する殺象蟲程のものなからん。其他麥蛾、穀蛾、シンクヒムシの類は、同業組合員中の優者なりと。

(八)樂器業者 ○直翅類、此仲間を昔より、風雅者流に名を知らるゝもの多し。先づスズムシはリリシマコホロギはクチエ、コホロギはコロコロジ、と鳴らす。ガチャ、と續けさまに騒々しきはクツワムシにして、ギースチオン、と涼しさうなるはキリギリスなり。又シ、と馬を追ふように鳴らすはウマオヒムシにして、パタ、と千兵一時に駆出せるが如き羽音を立るはバツタあり、平家の御曹子ならば夜逃みや仕給ふらん。扱其樂器は如何なるものかと云へば、背に負へる前翅にして、翅面には龜甲形、鞘形等の脈條あり、それを擦合して音を出すなり。キリギリス、クツワムシ等は二枚の前翅を上と下に重て、右の表と左の裏とを擦る。而して前右翅には、太鼓の如く圓き膜ありて響かする故よ、其音高し。又キリギリス脛等のシュー、と云へる音は、後足の内脛を細刻せる紋ありて、之を翅の脈條に擦合はすなり。畢竟人間が是等の音樂を聞てナクと云ふも、既述の如く、口にて啼くにあらずして、翅即ち彼等の作れる樂器の鳴れるなり、○有吻類、此連中よは、僅かセミのみよて、ヒゲラシ、セミ、ツクツクホウシ、セミは稍聞くよ足れど、喧しきばかりにて、更に面白味なし。其樂器の呼吸口も張れる膜にして、強く空氣の觸るゝに依て鳴るなり。其他双翅類にはハ、カ、アブ、ブイ等あり、鞘翅類にカミキリムシ、タマムシ、コガネムシ、ハンメウ等あり、膜翅類にはハチ等あれど、大抵翅にてブン、或はピン、等單調の音を發するのみ、餘り人間界を賞せられざるものなれば茲に略しぬ。

編者云ふ、記者は蟲界の興業者として、兩棲類より、蜘蛛類に至る迄記されたるも、昆蟲以外のものは、餘り關係淺ければ昆蟲界の興業者として、それ等を省きたり。

◎ 稻の根喰葉蟲に就て

在姫路市 川越誠吉

稻の根喰葉蟲に就ては、本誌第十四號名和靖氏、同第十五號に鳥羽源藏氏の所説あり。且つ、其他の昆蟲書も諸學者の所説を見ると雖も、未だ其發生の經過に至つては充分の記述あるを見ず。然るに余は本年此根喰葉蟲に就て大に研究するの必要に迫られたる結果、余が本年經驗せし事實を陳述すると共に世の該蟲に就き研究せられたる事實殊に根喰葉蟲の冬期に於ける情態に就き、世の實驗家の高説を聞かんと欲するものなり。余は本年七月二十日、始めて兵庫縣飾磨郡津田村の内今在家村字津田前新田に四五町歩、英賀保村の内英賀村字粕谷新田に約一町歩、同字十八新田に約五六反歩、同字五郎太新田に約二三反歩、合計約七八町歩根喰葉蟲の被害あるを發見せり。而して以上の場所は凡て相近接したる土地にして、海岸の一毛作田あり。土壤は泥土にして地下水高く、蛭藻(方言バルムシロ)多く發育し、而して多きは一株に四五十、少きは五六の根喰葉蟲の附着するを見受けたり。余が發見したる當時即ち七月二十日には、幼蟲六分、蛹三分、成蟲一分の發生を認めり。聞く處に據れば同地方は四五年以前より、作人の該蟲被害を認むる處にして、既昨年、一昨年同様の如きは收穫皆無なりしと云ふ。而して同地方の作人は該蟲を稱して小麥と稱せり。蓋し、此爾の能く小麥粒に相似たるを以てなるべし。且つ、該蟲驅除に就ては從來素人的な種々の方法を實行せしと雖も、未だ充分の効果を奏したるものあらず。茲を以て余は其方法の果して當たれるや否やは難計と雖も、差當り目下の驅除法として次述ぶる處の方法を指示し、作人をして此方法を實行せしめたり。即ち、其方法は水を入れたる桶を持廻はらしめ、稻株を抜き取り、其根に附着せる根喰葉蟲を、其桶の中よて一々洗ひ落し、再び其株を移植せしめ、蛭藻は之れを一々取集めて除去せしむる方法を取らしめたり、是れ元より余が所謂一時の窮策に出でたるものにして、果して其當を得たるものなるや明かあらざる處なるが故に、此の場合に於ける驅除法に就き余が世の實驗家の明説を聞かんと欲する一なりとす。然り而して、以上の方法は、元より前述の如く發見當時に差し當り余が指示せし方法にして、余は冬期に於ける充分の豫防法を講究せんと欲するものなり。而して根喰葉蟲と鴨との關係に就ては、曾て鳥羽氏の所説の如く、當地方に於ても津田鴨と稱し有名なるものにして、此被害田に集まり、頻りに稻株を起し、其根に附着せる該蟲を食するを見る。故に從來作人は、或は案山子に、或は篝火に之れが襲來を防止せり。而して聞く處に據れば、冬期は此被害田に頻りに鴨の集まるを見ると云ふ。茲を以て推察する時は、根喰葉蟲の幼蟲若くは蛹を食せんが爲め

に鴨の襲來するよ非らざるかを疑ふを得べし。即ち、冬期に於ては、根喰葉蟲は如何なる状態にあるや之れ余が世の識者に問はんとするの第一義なりとす。然り果して冬期該蟲は幼蟲若くは蛹の形態なりとすれば、冬期間其田面に驚を放飼する時は、大に根喰葉蟲を喰滅せしめ、一舉兩得の策たるべきを信するあり。尙、該蟲發生豫防の一として、田面に砂土を加入し、客土法を行ふ時は大に該蟲の發生を減少する事たるは、從來同地方の實驗に據つて明かなりとす。是れ一は蛭藻の發生を減少する一手段なるが故なるべし。要するは冬期該蟲の經過状態を詳かよするは、該蟲豫防上最も必要なる事件なりと信せるが故に、茲は余が管見を陳述して、敢へて識者に問ふ所以なり。

◎昆蟲發句集

(三二)蚊

(歳事記) 蚊柱、(事文類聚後集) 秦には之を蚋といひ、楚には之を蚊と云、蚊は文なり、人の肌膚に文するの義なり。○時珍曰、木の葉及び爛灰の中に生じ、子を水中に産み子下となり、仍て變じて蚊となる。(和漢三才圖會) 俗に云ふ、棒ぶりむし、溝泥の中温熱相感じて小蟲を生ず、長さ二三分、灰黒色、蠶し科斗の形に似て常に一曲二直して棒を振る狀の如し。

我庵は蚊の小さを馳走かな
血を分けし物と思はず蚊の憎さ
山里の蚊は晝中に喰にけり
蚊のひとつ來るめる宵の曇り哉
晝の蚊や机の下のかくし酒
庵の閉はめて晝蚊も喰れけり
紛るゝや今さゝれたる蚊の行方
雨の暮傘のくるりも鳴蚊かな
薄縁のへり傳ひ來るひる蚊かな
逃た蚊の又來て頓て打たれけり
一ツ追へば四ツも五ツも啼蚊かな

芭蕉 丈草 去來 猿雖 梅室 同芝 流水 二水 史千 蘆丸 可布

三重縣一志郡 喜田川要三郎

蚊の聲よおされて低き草家哉
蚊よ起きて嬉しき母の寝顔哉
晝されぬ事は知りつゝ、打つ蚊かあ
蚊柱よ夢の浮橋かゝるなり
蚊柱や關を隣の草の庵
蚊柱の暫らく退かぬ體さき哉
蚊はしらや番禰宜衆のひた歩行
蚊柱やぬけ出て見れば元の儘
蚊子も降りたか雨のたまり水
子子のわくや浮世のうつせ貝
子子や木よも石よも苔のつく
子子や流るゝ水のいつこまで
子子や蚊よなるまでの浮沈み
子子や遊びあがらに浮しづみ
さした蚊の憎うも高く飛びけり
晝の蚊や伐おろす木にまどひ啼
蚊は逃て打損よある天窓のち

平波 茶静 若非 其角 千本 鳥谷 九岐 濠石 梅室 重厚 得燕 水花 三津 縁人 洞天 小柯 虎山



◎博覽會出品害益蟲標本解說書(褒狀) 兵庫縣有馬郡立有馬農林學校

編者云。今回の博覽會に於ける昆蟲標本の多くは、陳列其當を得ず、或は其内容の如何を窺ひ知る能はざるものありしを遺憾とし爰に受賞の名譽ありし諸氏に請ふて其出品解説を得之を讀者に紹介して大に新學界を利せしめんを欲し、既に幾多の投稿を得たれば茲次本欄に收むるこゝに納む。

一、調製の目的 昆蟲の各種につき分類的に配列せるにわらず、單に害益蟲を區分せるも非らず、植物殊に農用作物に對する害蟲及び其敵蟲即ち益蟲とを變態の形式及生存關係を一函内ニ配列したるものにして、容易ニ其各時の形態と、名稱と、經過と、并に之に對する驅除豫防の方法を知らしめ、教授上標本として至便至利を目的とし調製したるものなり。

右目的に副はしめんが爲め、其函の裝置は、中央部に一區劃を設け、其内部を内界と稱し、其外部を外界と稱す。而して其内界を必要に應じて二區、三區若くは四區に分ち、其劃を外界に延長して内界の區分數に従ひ外界を區分す、而して其各部は自由に取り外づしの出來得る様よす、是れ標本指示の際、其他必要に應じて取り出すに便せんが爲あり。其函内の色に注意し可成蟲體の鮮明ならんことを期す。

蟲躰の配列は、中央の區劃内に害蟲を變態の順序例へば卵、幼蟲、成蟲との如く配列し、外界には其卵時代ニ於ける敵蟲を卵の外界區分内に、成蟲時代に於ける敵蟲は其外界區分内にこの如く配列す。而して敵蟲も變躰の明かなるものは之を示す。又形態の小にして見難きものは傍らに膨大圖を添付し且各名稱を明記す。各區分函の裏面には、其蟲類よつゝ經過、産卵期、孵化期、驅除法、豫防法等の事項につき、特に注意すべき點を記載して參考に資す。

一、出品昆蟲の種類 一、螟蟲(二化生) 卵時代ニ於ける敵蟲(寄生蜂)、成蟲時代に於ける敵蟲(寄生蜂)成蟲時代ニ於ける敵蟲(蜻蛉、カマキリ、ムシヒキアブ)。一、蚜蟲 諸蚜蟲ニ對する敵蟲(クサ

カゲロフ、テントウムシ、大ヒラタアブ、ヒラタアブ)。
 一、審査請求の主眼 教授上の参考に資する所ありや否や。
 其内容、一、變態の状況を知らしむるゝ容易なる點。一、害蟲に對する各種敵蟲及び變態の各時
 代に於ける敵蟲を一目の下に知り易き點。一、形態の小にして見分け難きものは膨大圖を添付せる
 點。一、函内の色取りに注意し蟲體の鮮明を期する點。一、函の裏面に注意事項を記載し參考に
 資せる點。一、必要に應じて各部分を任意に抽出し得ると、即ち取扱上極めて便利なる點。以上

◎博覽會出品品理學科教授用昆蟲標本解說書(褒狀)

滋賀縣 天津尋常高等小學校

一、材料及製作法

鱗翅目 捩蝶科 イチモジセ、リ

鳳蝶科 アゲハ

粉蝶科 キテス

小灰蝶科 ウラギンシジミ

蛺蝶科 コムラサキ

天蛾科 アキツバメ

阿檀蝶科 アサギテフ

有吻目 椿象科 ナガメ

盲椿象科 アラメクラガメ

蟬科 ヒグラシ

虱科 シラムシ

植蠶科 アブラムシ

擬脈翅目 蜻蛉科 オハグロトンボ

脈翅目 蛟蜻蛉科 オバトンボ

膜翅目 胡蜂科 ノバチ

姬蜂科 フシヲナガバチ

蟻科 オ、アリ

蜜蜂科 ミツバチ

龍蟲科 シマゲンゴロ

吉丁蟲科 タマムシ

金龜子科 ヒメコガチ、サイカチムシ

蝨科 ホタル

鍬形蟲科 クワガタムシ

天牛科 コマカミキリ

斑猫科 ハンメウ

家蠅科 イハハ

蚊科 カ

毛翅目 石蠶科 トビケラ

微翅目 蚤科 ノミ

彈尾目 衣魚科 シミ

昆蟲は、本校所在地附近の山野に於て生徒の採集したるものにつき調製し、昆蟲各目を代表するに足るべきものを選びて、其常習生活の状態よりて排列したり。

一、考慮發明せし要点 昆蟲の數は萬を以て數ふべく、悉く之を採集し、排列することの困難なるは言ふ迄もなし、こゝを見る所あり、昆蟲一般の重かる各科を代表するに足るべきもの一二種つゝを取り、之を理學的に排列せずして自然の情態に應じて排置し不知不識の間に昆蟲界の一斑を知らしめんとするにあり。

一、審査要求主眼 特に小學校博物教授に於て直觀的ニ昆蟲の情態を知らしむる方法としての適否。

◎山口縣大島郡通信

山口縣大島郡蒲野村 財満宇市

害蟲 苗代は明治二十九年以來短冊形に仕立居れども、害蟲の驅除豫防てふものは至りて幼稚ある姿あり、然れども近年農事改良發達上に於ては、漸く其の進歩をなし、之が驅除豫防も又た伴ふて歩調を同くせり。本年發生の種類は二化生螟蟲、浮塵子、蝗等として、螟蟲の第一期は六月七日羽化現出、稻田に産卵すれども其の被害至て少なし、之れ前年來當局業兩者の熱心と精勵とに由らずんばならず、今後益々之が全滅を期すること肝要なり。

蟲送り 當村は昔時より稻苗の挿秧を了るや、半夏生後二三日以内に於て、蟲送りとて害蟲の發生を未發に防がん爲め、藁にて騎乗せる人形(齋藤實盛)を造り、禪僧侶の祈禱をなし、多勢行列をなし、旗を立て、鐘を打鳴し、太鼓を叩き、法螺貝を吹き、唐團扇を振り使ひて踊り「シカシカ」とて蟲送りの祈禱文を朗讀し、棒を仕ひなとして昔時より定めの場合々々を踊り巡り、海濱に於て最終の踊を了へ、遂に人形を海中に投入するを古例とせり。然れども、近年之が改定をなし、唯藁人形を造り、旗を立て禪僧の祈禱を了れば二人にて肩よし、確定の場所を巡りて海中に放流するよし止れり。

因に記す、當日は村内の農家は休業して、各家酒宴を開催し、騎馬せる實盛は稻苗を送る(蟲送捨)の意にて通行の際持行くなり。又蟲送り費として村費に約五圓以内の費目ありしが、近年踊を歇め、從ひて之に要する人員の減少せし爲め、今は僅かに壹貳圓に減せり。「シカシカ」の朗讀せる文章は中々意味あることなれば、他日之が調査をなし、更に報告せんとす。

◎長野縣北安曇郡の昆蟲方言

第十五回全國害蟲
驅除講習會修業生

長野縣 帶刀喜市

當地方の昆蟲方言は、追々見聞に任せ報導すべけれど、先づ余が是迄聞知りたる分を、二三かい摘みて報せんよ○黒臭椿象をヘッピリムシと云ふ、臭氣を發するが故なふん○蚜蟲をアリゴと云へるは、蟻の群集するためなふん○金龜子の幼蟲をノケサと云ひ、蟬の幼蟲と誤解し居れり○カガンボをカハドンボと云へるは、水邊に多きを以てなふんか○トンボをドンボ○イトトンボをメクラドンボと云ひ○マツモムシをサカサムシと云へるは仰向に游泳する故あらん○ミヅカマキリをタイコウチ○カハグモをトラチツコ○キリギリスをギーチヨ○エンマコホロギをキリギリスと云ひ○地蠶の幼蟲をキロウジと云へるは、キリムシの傳説ならんか○ヤママユをウスツタビ○アリジゴクをハコサマ○偽瓢蟲をコウヤムスメ又はコウヤノオカタ○キハネツノトンボをボホマハシ○イラムシの幼蟲をシワムシ○其藨をサコケと云ひ○栗毛蟲の藨をモジ○キマルバチ、オホマルバチ、クマバチ等をベボ○ヤマバチをクマンバチと稱し○其他蛆をゴウジ○蛾をテフ○天蛾をピンス等と稱す。

◎昆蟲に關する葉書通信 (第三十四報)

(一九三)二十四鳥羽蛾と蜚蠊(丹後國與謝郡四辻、山崎久藏) 昆蟲世界第七卷六十六號に掲載せられたる邦産二十四鳥羽蛾は當地方にも生息せるや、六月四日室内障子に静止せるを發見したり。直ちに捕へて之を檢するに、全軀は黃白色よして体長二分餘、翅を開展せるときは三分餘ありて、前後翅共羽毛狀に分裂し、静止のときは翅を水平に開く、尙後日研究すべく爲、収藏し置きたるに、鼠害に罹りて不明に屬せり。何れ後日採集次第送附すべし。又蜚蠊は當地方に數種ありて厨房に害を及ぼすこと甚し世人此蟲の發生するときは富むとて採らざるより、斯く蕃殖せるなふんか、方言アブラムシと云ひ、茶色のものを火蟲と云ふ。(六月十七日附)

(一九四)二十四鳥羽蛾(新潟縣農事試驗場、星野信) 昆蟲世界第六十六號に於て長野氏記載の二十四鳥羽蛾を、昨年八月中、本場試驗田畦畔の雜草中に於て一頭採集し、其の儘貯へ置き、此頃漸く思ひ出して調査したるに、全く二十四鳥羽蛾なりき。但し、*Ornoides hexadactyla*なる學名のものなるや否や目下研究中なり。(七月十八日附)

(一九五)コツノトンバウの分布報告(長野縣下伊那郡下久堅村、平岩鶴吉) 昆蟲世界第五十九號に記

載せらる、ツノトンパウの内第四のツノトンパウを、昨二十一日長野縣下伊那郡下久堅村大字知久平村社境内雑草中に於て捕獲せり。体長一寸五分、翅の開張二寸八分、觸角の長さ八分五厘まで昆蟲世界記載のものより体長は稍短く、翅の開張に於て四分許り長し。又軀の形状に於ても稍異なる點あれど、全くツノトンパウなり。而して同號には其產地伊吹山とあれど、當縣下にも儘も分布せることを報告す。(七月廿二日附)

編者云、昆蟲の分布調査報告に於て現品を添へざるものは唯茲に參考として掲載するも、當所の分布調査原簿には登録せざるべし是れ昆蟲の種類鑒別に於ける困難は、到底少數の標本を比較して以て斷定を下すべきものに非ざれば、後日に誤謬を遺さざらしめんが爲なり。幸に是より以後分布を報告せらるゝの士は、成るべく現品を添へられんことを望む。

(一九六) 蟲歌(大分縣、岩田秀太郎) 共益商社編纂の唱歌教科書より昆蟲に係るものを採萃して次に之を記載せん。「蟲。(一)月冴えわたる秋の野に、よすがら誰をまつむしや、ふりだす鈴蟲聞きつけて、乗りくる駒のくつわむし、チ、ロヤチ、ロ、リンくく。(二)秋風さむく身にしめば、はたをりむしも忙はし、ついにれを刺せどきりくす、蟋蟀さへも鳴さしきる、チ、ロヤチ、ロ、リンくく」

(一九七) 山口縣大島郡に於る螢狩の童謡(山口縣大島郡蒲野村、財満宇市) 當地に於て夕方子供の螢狩をなす際稱呼する歌は次の如し「ホテルコーイ、コーイヨ、アツチノ水ハ苦イヨ、コツチノ水ハ甘イヨ、柳ノ下カラボロキテコイ」(七月十日稿)

(一九八) 岐阜縣不破郡に於ける螢狩の童謡(岐阜縣不破郡、杉江初治) ホッタロ來ヒ ショーロムシ、天川ノ水ノマシヨ、アツチノ水ハ苦イニ、コチノ水ハ甘イニ。(七月十五日)

(一九九) 京都府與謝郡に於ける螢狩の童謡(京都府與謝郡四辻、山崎久藏) 夕刻になれば、長さ五六尺の竹に菜種稈を縛し、螢籠片手は兒童等は三々伍々相伴ひ「螢コーイ太郎吉來イ、行燈ノ下カラ笠着テ來イ。螢コーイ太郎吉來イ、其地ノ水ハ苦イド、此地ノブ、ハ甘イド」と稱へつゝ集へり。(七月廿八日附)

(二〇〇) 柑橘の貝殻蟲一種(靜岡縣、岡田忠男) 去月十七日柑橘の貝殻蟲(Dactylopus sp.)一種採集せり。本種は昨年未本邦にて初て發見せられたるものなりと桑名氏より通知あり、又昆蟲世界に於て同氏柑橘の貝殻蟲中、此科は本邦にて加害せしことなしと記載ありしも、縣下志太郡岡部町子持坂に於て紀州蜜柑(數百年を経たる)樹にて三頭採集せり。幼蟲の餘程面白き形態を有し、胎生の如く見受たり。

(八月四日附)



雑報

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解説書
 出品して名譽銀牌を得たるは、既に讀者の知了せらるゝ所なるが、今茲に其解説書を掲載して參考に供す

當昆蟲研究所より今回の博覽會に昆蟲標本を

解説書

部	類	番號	品名	出品人
九	五〇	一	昆蟲標本	岐阜縣美濃國本巢郡船木村大字重里七番戶 當時岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ一寄留 名和昆蟲研究所長 名和 靖

一、產地並に採集年月

岐阜縣美濃國岐阜市を指定し、山野の兩區に於て冬季嚴寒の際に採集せしもの、一半にして、時は明治三十五年一月上旬より中旬の間に屬せり

一、添出品

第一號	薔薇の蠶株昆蟲世界	全壹冊	第六號	日本昆蟲分科表	全壹冊
第二號	昆蟲世界	從第一卷至第六卷	第七號	第一回全國昆蟲展覽會出品目錄	全壹冊
第三號	害蟲圖解	從第一號至第廿號	第八號	鞘翅目蠶蟲屬分布圖	貳拾葉
第四號	貝殼蟲圖說	全壹冊	第九號	鱗翅目鳳蝶科分布圖	拾三葉
第五號	通俗益蟲集覽	全壹葉說明書附	第十號	寫生用昆蟲標本	拾三個

一、履歷

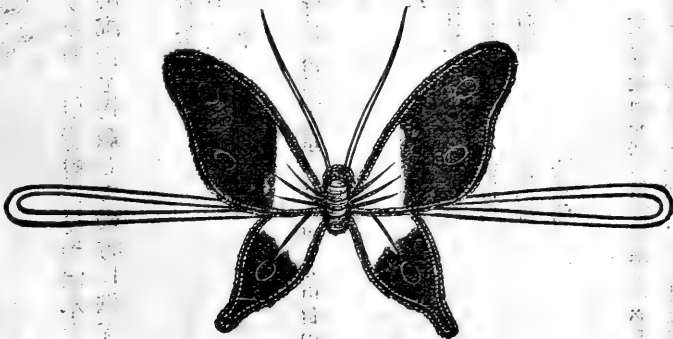
明治二十八年第四回内國勸業博覽會に出品したる後の履歷を摘記せんに、時勢の推移に伴はれ、學術實業兩界共に追漸昆蟲學の必要を感ずるに至りたれば、到底能く餘暇を以て之に應じ難きを自覺し、全く他の繫累を絶ちて専心之に従事せんと欲し、明治廿九年四月本職岐阜縣師範學校教諭を辭任し、岐阜市京町に、新に名和昆蟲研究所を設立せしに、岐阜縣廳より特に岐阜縣害蟲調査を囑託せらる、當時研究所は數名の助手（現今は拾數名に至り調査、編輯、圖畫、採集、養蟲、製作等を分擔従事す）に過ぎざりしが、相

率て夙夜昆蟲學の研究を事とせり。其翌三十年には浮塵子の大發生あるを機と親しく、之が驅防策を究明せんことを欲し、先づ岐阜縣下より京都、大阪、兵庫、岡山、廣島、山口、愛知等比較上溫暖に、且つ災異の劇甚なる各府縣を巡視して、其化育加害に關する調査を遂げ、翌三十一年三月更に山梨、茨城、福島、宮城、福井等の各寒地に歴巡して、浮塵子越冬の狀況を積雪の裏に調査し、始めて同蟲越冬の報告を世に公にせり。爾來各府縣の請求に依り、浮塵子驅除等の巡回講話をなすと貳百回以上に達し、又各種の講習に講師たりしこと六十四回、其雜誌昆蟲世界及び害蟲圖解等を發刊し、私費を以て第一回全國昆蟲展覽會を開催し、又各地に昆蟲學會を設立せしむる等、斯學の啓發普及を目的として下層界の拓開に微力を致せり。越えて三十三年には愛知縣瀨美、八名、南設樂、寶飯、四郡農産物共進會附屬昆蟲標本展覽會より、三十四年には岡山縣邑久郡昆蟲展覽會、三十五年には岐阜縣冬季昆蟲展覽會、岐阜縣津郡昆蟲展覽會及び靜岡縣周智郡昆蟲展覽會より何れも審査員長を囑託せらる。而して今や舊來の規模を擴張し、事業の進行を期し、將に明年を以て研究所を新築し、且長期の昆蟲學講習會を開設せんことを欲し、已に其設計を終へ昨秋を以て助手一名を北米合衆國に派遣して、専ら斯學界の狀況を視察する所あらしむ。此他の事項に至りては、便宜上以下の各項に分載せしを以て茲に省く。

一、事業
第一、冬季昆蟲の採集

昆蟲は春季に發生して夏季に盛んに、秋季に衰へて冬季に絶ゆる生物なりとは、舊來世人の一般に信ずる所にして、偶々其説の非を唱道する者あるも未だ耳を傾ぐるに到らず。此を以て所謂害蟲なるものも、天地の陽氣を得れば自生を遂ぐることを敢て驅防に勉めて除害興利の手段に出づる者少なし。是れ蟲類偶生説の未だ容易に農家の腦底より脱却せざる所以にして、又、到る處神佛の加護を祈るに熾なる所以なり。而して世人の冬蟲に耳を傾げざるは、未だ之れを眼に解せざるの致す所なるを以て、此迷謬を洗掃し、昆蟲學の發達を期し及び國害を薄らげんと欲せば勢ひ自から冬蟲の狀態を示すを以て最捷徑となす。冬季の狀態を示すの方法一にして足らざる

(掛根) 八十の部齒昆用應業工



も、先づ之を無邪意なる學齡兒女に採取せしめ、之れを頑迷なる父兄に知らしむるに如くは莫きを知り、或は懸賞を以て、或は勳獎を加へて、去る三十三年十二月より三十四年一月に亘り、試みに岐阜縣安八郡大藏小學校、揖斐郡本郷小學校、羽島郡竹ヶ鼻小學校、加茂郡八百津小學校等の兒童に採集せしめたるに、其成績意外に佳良を呈し、現に全國昆蟲展覽會に出品したるもの悉く受賞の列に加はり、就中、大藏小學校の出品物の如きは、農商務省より買收の榮を膺へり。此より之を内にしては當所の各助手を督して專意冬蟲の採集に精勤せしめ、之を外にしては岐阜縣昆蟲學會の事業として、三十五年二月岐阜縣冬季昆蟲展覽會を開設せしむるに執掌せり。而して同會の成績に依りて之が判定を下したるに、全出品の約七八分は學齡兒女の冬期休業若くは放課時間を利用して採集せしものに係り、面あたり之を觀覽せし者、亦爲めに冬蟲の輕視すべからざることを悟れるに似たり。當時參考品として當所よりも岐阜市に於て、冬季に採集せる昆蟲標本若干函を出陳せしが、是は今回の出品と同時の蒐收に係り、明治三十五年一月即ち寒氣酷烈にして、百蟲皆蟄伏潛藏の好期を擇び、當研究所所在地たる岐阜市を以て其採集地域を限り、更に市を山野の兩區に別ち、適當の技倆ある助手五名を撰拔して五種の採集法（篩網採集法、木皮採集法、雜草採集法、石起採集法、叩網採集法）を各十回行はしめて、都合五十回採集の後に獲たる五百二十七種九千九百四十七頭の昆蟲の一部たり。但し、冬季採集の利益は、遠く明治十四五年頃より之を認めたりきと雖も、固より個人採集に過ぎざりしを以て其効果また甚だ大ならざりしに、此に至りて始めて二十年來の宿望を達し、且其利益の豫想外に多きことを實地に證明することを得たり。乃ばち、其採集品に對する統計、蟲種別等に至りては、出品添附の雜書昆蟲世界第五十五第五十六號に記載せしを以て此に掲げざるべし。而して岐阜縣昆蟲展覽會の際、全出品に就て特に有益蟲類屬の比較調査を加へたるに、概ね成蟲の形態を以て越冬する事實を發見し、又飛翅目草蜻蛉の如き盛夏の候に蕃殖するものと雖も多少冬季にも採獲し得ることを確めたり、恐くは是れ本邦に於ける從來の學說に一變動を與へたるものならん歟（添出品第八號）

第二、全國昆蟲展覽會の開設

軌近昆蟲學思想の發達に伴れ、之が研究と其應用の上にて長足の進歩を爲したるが如き觀あるも、其成績に至りては區々として深く世に知られざるもの多し、洵に昭代の恨事にして、斯の如きは復た昆蟲學の發達を計る所以にあらざることを悟りし明治三十三年三月三日を以て全國昆蟲展覽會開設の旨意書を世に發表し、尋で男爵花房義賢氏を總裁に、貴族院議員田中芳男氏を會長に農學士小貫信太郎氏を審査員長に推し、翌三十四年四月十六日より五月十五日に至る三十日間之を當所内に開設して、無事に閉場を告げたり。當時參同加盟の有志意外に多く、其出品區域は全國の半に過ぎたり。而して之が計劃、規模、出品より調査等に至るの顛末は擧て第一回全國昆蟲展覽會出品目錄（添出品第七號）に詳記せしを以て茲に畧す。

第三、昆蟲標本陳列箱の擴張

從來十坪に満たざる小昆蟲標本陳列室を研究所内に有するに過ぎざりしも、去る三十四年に、當所主催の第一回全國昆蟲展覽會開設の結果として、遽に陳列品の増加を來たし、爲に岐阜縣物産館構内に面積八十坪(五間に十六間)を有する獨立の縣建築物を借用し、新に昆蟲標本陳列箱を開設して、同年八月十五日より公衆一般の觀覽に利し、併せて斯學者の見學に便せり。即ち、同年五ヶ月間の入館人員は都て四萬四千八百六十一人、昨三十五年の入館者は七萬四千〇三十八人を算せしに徴するも蓋し冥々裏に人智拓開の効無きにあらざるべし。而して其陳列品數は數千点より成り、昆蟲標本としては諸方面より研究し得べき様各種の分類的標本を裝成し、これに次ぎて内外の害蟲標本、(稻、桑、茶、其他重要植物并に果樹、樹木、家畜、水産、衛生等の害蟲標本)若干を加へたるが、斯種のものには概れ被害植物及び幾多の敵蟲をも示せる、所謂發育標本を採して一に觀覽者の理解を促がせり。更に又有効蟲、有用蟲、愛玩昆蟲、驅除器械、驅除藥品、教育用并に裝飾用標本、自然淘汰、雌雄陶汰、有益蟲、有益鳥等の標本を整列し、更になほ各種昆蟲の放大圖、各種の採集圖、統計表等を交錯布置せしめ、他にまた數百點の昆蟲應用の美術工藝品(陶器漆器、銅器、竹器等)を分種陳列し、以て婦女小兒に至るまで一見昆蟲の何物たるかを知り易からしむ。當館には日々所員を派出して監督をなさしめ、若し覽者の請あれば輒は巨細の説明を加ふるは勿論、見學者の爲めには別に一區の研究室を設けて隨意講明の道を得せしむるに勉めり。

(未完)

●第十六回全國害蟲驅除講習會實況

同會は、豫期の如く本月一日午前九時を以て簡單に其開講式を舉行せり。今回の講習會は其定員四十名なりしが各府縣よりの申込者非常に多く、三重縣、岐阜縣、兵庫縣、徳島縣の如き一縣よく十名以上に達し、到底各府縣應募者の満足なる希望を得せしむること能はざる場合に到りしかば、四十名以外のものは皆准會員として之を許諾したりき。而して總會員は一府二十二縣九十八名にして、開期中は殊に此の炎暑の候にも拘らず始終靜肅に聽講し、又八日には養老山麓まで旅行採集を試むる等、其熱心なる事は從來の講習會に於て稀に見る處よまて、特に一名の女子の加はりたるは、各府縣よける出張講習に於ては其例多しと雖も、全國害蟲驅除講習會に於ては今回を以て嚆矢とす。尙詳細は次號に掲載すべし。

●害蟲驅除の方針

當昆蟲研究所は左の如き害蟲驅除の方針を印刷し、今回の全國害蟲驅除講習員に配付せり。尙此の方針に就ては、他日大に論及する所あるべし。

一、害蟲驅除を都合能く行ふは、第一昆蟲とは如何なるものなりや、其大体を知ること最も緊要なり

二、害蟲と益蟲の區別を明し、害蟲を惡むと同時に益蟲を愛護すべし。

三、害蟲の習性経過を委しく了知するに隨ひ、愈々都合よく驅除を實行し得らるべし

四、單獨驅除は比較的其効少く、共同驅除は比較的効多し。

五、害蟲驅除は一人前ある男子の務まらず、宜しく婦人小兒の務とすべし。

六、害蟲驅除には簡單有効なる器械と、確實廉價なる藥品を撰びべし。

七、誘蛾燈用ふべし用ふべからず、注油法行ふべし行ふべからず。

八、天然驅除を貴び、可成的人爲驅除を避くべし。

九、害蟲驅除は抑も末にして、平素豫防に注意するは最も必要の事柄とす。

十、豫防の一々は、驅除の一貫々に優ること、心得べし

●昆蟲叢書第二編の出版

昆蟲叢書は、既に全部の出版を終へべき筈なりしが、種々なる事情の爲大に延引せし處、此頃漸く其第二編の印刷を終へたれば、本月末には發行するおどなれり。茲に四方愛讀者諸氏に遅延の罪

謝す。

●工業應用昆蟲畫報(第六報)

本號に掲載の應用昆蟲畫報の(十八)は鐵線に銀モゴルの如く銀線を纏へる骨子にヌメを張りたる鳳蝶形の根掛にして

觸角は鳥毛を以て作り羽毛状をれば、強て之が蟲名を求むればアカイロアゲハ

テフモドキとも稱すべきか。(十九)は銅線を骨子とし之に絹糸及銀線を巧みに

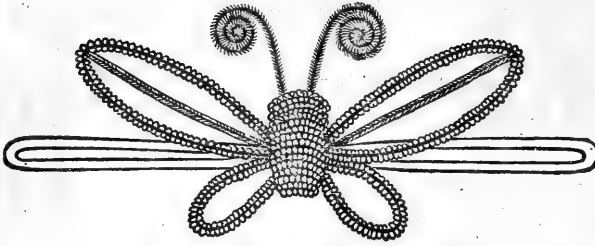
纏結せるものなるも、形狀に於ては所謂古流的にして餘り感心は出來ず、二者

共に岐阜市に於ける商店にて購入せしものなり。(二十)は麥稈眞田製の蜂形根

掛にして、岐阜縣小坂專重氏の寄贈に係るものなり。同氏は第三回全國害蟲驅

除講習修業生として、又曾て麥稈眞田製造を傳習せしことありと云ふ。此他尙

蝶、蜻蛉等種々なる形を多數編みて贈られたるが、實に巧みなるものと云ふべし



(掛根) 九十の報畫昆用應業工

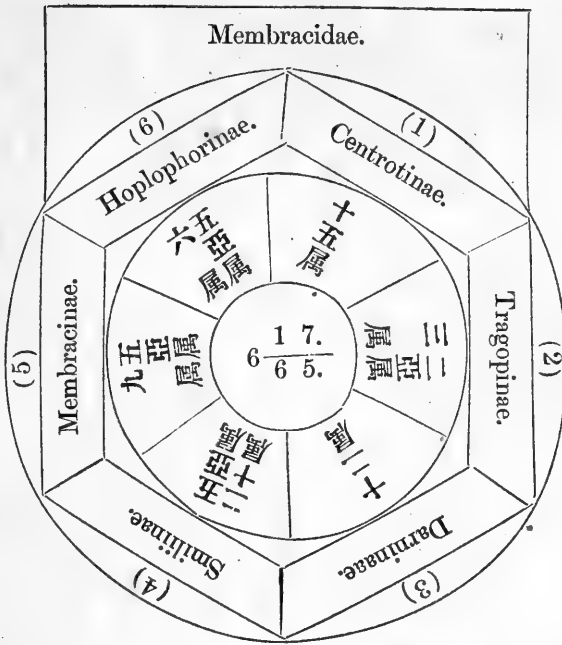
●北米に於ける角蟬科 在米國桑港の名和梅吉氏より、此頃當昆蟲研究所助手の催に係る、水曜昆蟲談話會へ送られたる朗讀文中、北米に於ける角蟬科 (Membracidae) に就て一言せられたり。之を見るに、元來、此種は本邦に於て知られたるもの僅三、四種なりと雖も、彼地に於ては其種類非常に多くエフ

ダブリュー、ゴツディング氏 (F. W. Goding) は之を六亞科に分ち更に六十五屬十七亞屬に分たれしとて、名和氏は之を明瞭ならしめんが爲表に製して報告せられたり、實に其種の多きは想像し得られぬ。

●蟬寄生蛾の發生 去八日第十六回

全國害蟲驅除講習生の養老山下へ長途採集せし際、蟬寄生蛾の多數を採集し來りければ、當所は之を合衆國ナショナル、ミウゼアムに送附せり。今や發生の時期あれば各地の諸氏の充分研究せられんあを望む。該蛾は就ては本誌第六十五號に詳説あり、又同七十號昆蟲翁の隨感隨筆中に記載の如く、米國昆蟲學者ダイアー氏はエビピロツプス屬 (Epirops) に隸するものなることを明言せられたるが、近頃在米名和梅吉氏は之にシカデボラ (Cicadivora) と云ふ種名を附したい者であるが如何との書面到着せり。

和名梅吉氏の送られたる表



●博覽會出品昆蟲標本受賞者追報 本誌前號よ於て受賞者報告中、受賞人名録不備の爲、或は遺漏なきを保し難ければ、是等是他日訂正すべきことと報じ置さしが果せるかな左の二名を脱漏したりき。尙或は漏あらば、願くば御一報あらんことを乞ふ。

二等賞 害蟲標本及調査 滋賀縣農事試驗場。三等賞 害蟲標本 愛知縣渥美郡昆蟲研究會。

●理學界の發刊 理學界と題せる雜誌此回東京市神田區裏神保町六番地理學界社より發行せられ
たり此雜誌は博物學と理化學とを總括せるものにして論說、實驗、學術
彙報、理學の應用、發明歴史、問題解釋、質疑應答、雜錄等の各項あり
て寫真版及び木版等數葉を挿み其体裁科學雜誌中稀に見る所なり此の中
昆蟲に關するものは第一號に蚤の話蝶蟻の激戰第二號に蚊の話等あり。

●養老郡害蟲驅除講習會 岐阜縣養老郡は昨年當昆蟲研究所
長名和靖氏を聘し害蟲驅除講習會を開きしが、本年も亦去月十五日より
五日間、同郡高田町に於て其第二回を開きたり。講習員は同郡各小學校
教員全躰及び實業者等にして毎日午前八時より午後四時迄八時間つゝ聽
講し、其熱心ある事は未だ會て從來の講習會を見ざる所なりしと云ふ、
而して修業證書を受領したるものは九十一名にして内五名の女教員を含
めりと、又岐阜縣害蟲驅除講習會及び昨年同郡害蟲驅除講習會を受けたる
もの廿二名は、今回の講習會には助手として大々斡旋の勞を執りたりと

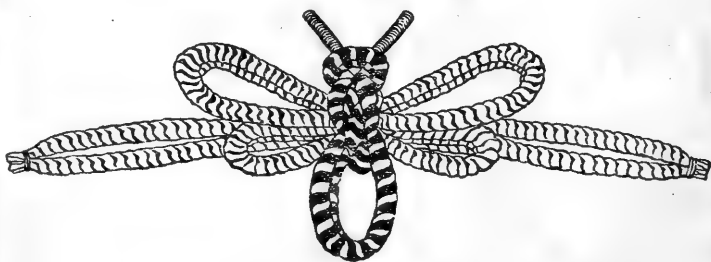
●農業昆蟲講習會 京都府下丹後國加佐郡舞鶴町教育會にては
理學博士佐々木忠次郎氏を聘し、八月二日より十日間農業に關する昆蟲
の講習會を開設せし由あり。

●岐阜縣昆蟲學會第五十六回月次會記事

同會は本月一

日午后二時より、岐阜縣會舊議事堂内に於て開會せり。當日は第十六回
全國害蟲驅除講習會開講日にて、同會員も加はりたれば以外の盛況にて
來會者百數十名に達せり。今其模様を概記すれば、例により名和副會長
の開會の辭に次で、第一席渡邊樵四平氏は伊吹山へ一日間の長途採集談
を述べ、第二席小森省作氏は豹紋蝶の分類上特殊鱗の必要と其構造を説
明し、第四席茨城縣森市太郎氏は害蟲驅除の効果に就き數字を以て現はし、第五席泉繁太郎氏は害蟲驅
除と小學兒童に就き岐阜縣下に於ける實況を述べて害蟲驅除の根本的施設を計ると共に、教員昆蟲講習

(掛根) 十二の報畫昆蟲用農工業



(贈寄氏專重坂小 縣阜岐)

會の必要を説き及ぼされ、第六席長野菊次郎氏は我國の昆蟲學に於ける現今の趨勢と題し、本邦に於ける昆蟲界の有様に就き歐米諸國より其例を採りてあらむる方面より論及し、實に我國昆蟲學の暗黒時代よして其紛亂せる殆んど極點に達せるを憤慨せられ五時二十分閉會を告げたり。

●水曜昆蟲會記事

當研究所員の催しに係る水曜昆蟲會は、前々號報告後、毎水曜日午後七時より當所内に開會せしが、其重なる演題と講演者を擧ぐれば左の如し。

小竹浩氏の蚜蟲の分類、ムクゲムシの形態に就て、浮塵子の分類、双翅類の分類、石田和三郎氏の螟蟲驅除の方法及害蟲驅除簡單器械、尾三遠地方の昆蟲採集旅行談、愛知縣額田郡に於ける害蟲驅除視察談、蟲糞と採集、小森省作氏の豹紋蝶の分類、鞘翅目の分類法、クワガタムシの分類、象鼻蟲の分類、セラフヒデー (Psalaphidae) の一種に就て、キクスキモドキクスギダマンに就て、森宗太郎氏の伊吹山昆蟲採集談、山縣郡害蟲視察談、蚊の話、シンムシの産卵に就て、棚橋昇氏のツッリムシ及びフクラス、メ飼育談、蜜柑の蚜蟲驅除成績報告、ヒメカンノコランタウムシの經過の實驗、紋白蝶の蛹化の準備に就ての實驗、アラスチアゲハテフ蛹化の準備に就ての實驗、高橋喜男氏の紋黃蝶飼育談、螟蟲の産卵に就て、稻蠶の卵塊より孵化する状態、萩のツッリムシの寄生蜂に就ての疑問、名和愛吉氏のミチヲシへ飼育法、伊吹山昆蟲採集談、キマユヤドリ蜂、及びマダラザウムシの話、アラクサガメムシの飼育談、黒鳳蝶の飼育談、郷保吉氏の昆蟲採集談、渡邊樵四平氏の蚜蟲驅除試驗報告、螟蟲に就ての調査研究談、中井藤助氏の本巢郡害蟲調査談、鳳蝶飼育談、飛驒國に於て行はるる、苞蟲驅除方法、イチモジセ、リの形状に就て、イチモジセセリテフとハナセセリテフの比較、大橋由太郎氏の山縣郡に於ける害蟲視察談、螟蟲とスヂキリムシの翅脈に就て、安八郡に於ける害蟲視察談、甘藷の葉卷蟲の卷葉方法の實驗、土岐五郎氏の紋白蝶の産卵及發育に就ての實驗談等よして、其他客員として長野菊次郎氏、岐阜縣屬松尾、井深の兩氏、農事試驗場員山田與十郎氏等の有益なる談話ありたり。

●昆蟲標本陳列館の參觀人 昨七月中に當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は總計千八百二十七人にして、其内最も多かりしは十二日よ於ける百三十七人、最も少なりしは八日よ於ける十三人にて、平均毎日六十七人弱に當り、其の内重なる人々は海軍々醫小監立花保太郎氏は帝國大學海軍々醫學生十名を從へ、農商務省害蟲驅除豫防監督員牛村一氏氏、徳島縣書記官告森良氏を始め各府縣の農會幹事、農事巡回教師、實業家、教育家等ありたり。

(雜報、八月十二日脱稿)

◎新案 教育用昆蟲標本 壹組 拾貳箱

一、分類標本 壹箱

一、自然淘汰標本 五箱

○保護色 ○擬態 ○警戒色及誘惑色
○自己防禦 ○生存競争

一、雌雄淘汰標本 貳箱

一、害蟲標本 壹箱

一、益蟲標本 壹箱

一、解体標本 壹箱

一、俗説で迷信に就ての昆蟲標本 壹箱

該標本は、高等小學校、高等女學校、農學校、尋常中學校等の理科と參酌して製作せしものなり。從て害蟲標本の如きも、普通農作物害蟲標本とは大に其趣きを異にせり。而して一品毎に説明を附しあれば、假令初學者と雖も、一目して昆蟲界に於ける自然の妙理を會得するを得ん。

右標本は、壹組十二箱を以て完成せりと雖も、其中、一箱ヲ御望の節は、新案教育用昆蟲標本中の何々と明記ありたし。

◎箱裝式昆蟲標本

甲號 價一組ふ付き金四圓
乙號 同 金參圓 一組二十枚
丙號 同 金貳圓 但遞送費は別

右は實物寫生用の昆蟲標本にして、初等教育、中等教育何れにも適用すべき好標本あり。製法堅牢なるを以て、又幼稚園或は家庭に於ける玩具ともすれば、不知不識の間に、理科思想を養成するこゝとを得るなり。

●農作物害蟲標本 壹組 桐箱入解説附 金四圓五拾錢

●農作物益蟲標本 壹組 桐箱入解説附 金貳拾 荷造費

●教育用昆蟲標本 壹組 桐箱入解説附 金貳拾 錢小包

●自然淘汰標本 壹組 桐箱入解説附 金五圓五拾錢

●雌雄淘汰標本 壹組 桐箱入解説附 金五圓五拾錢

●氣候變形標本 拾錢 壹組 桐箱入解説附 金四圓

●昆蟲發育標本 各種

●山林園藝害蟲標本 各種

●昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年八月

名和昆蟲研究所會計部

雜誌

昆蟲

世界

合本

出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第六卷(昨半分)出來

西洋綴
金文字
入美裝

●昆蟲世界第二卷 五部

右は明治三十一年發行分(但合本にあらず) 自第拾貳號 至第拾六號

●昆蟲世界第三卷合本壹册

右は明治三十二年發行分 自第拾七號 至第貳拾八號

●昆蟲世界第四卷合本壹册

右は明治三十三年發行分 自第貳拾九號 至第拾號

●昆蟲世界第五卷合本壹册

右は明治三十四年發行分 自第拾壹號 至第拾貳號

●昆蟲世界第六卷合本壹册

右は明治三十五年發行分 自第拾三號 至第拾四號

(合本は每冊金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢 其他は定價の通り)

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し新學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

謹告

●最優經濟的窒素肥料トシテ弊部ノ取扱ニ關ル

●晩生大紫雲英種

ニ對シ

●第五回内國參等賞銅牌受領

●勸業博覽會 美濃物産 品評會 貳等賞銀牌受領

●御試作用種子御希望ノ諸君へハ無代價進呈ス

明治三十六年七月

岐阜縣產晚種 本場褒賞最高 利己主義之商 人會社勿同視

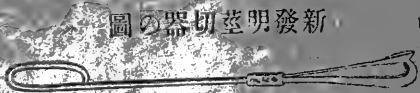
●第四回内國勸業博覽會ニ於テ褒狀受領

●東海實業區五縣聯合五二會品評會ニ於テ壹等褒狀受領

●紫雲英種子部 關谷俊治

專賣特許
第四九八六號
莖切器發賣廣告

螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大よして之れが驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かざるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れが實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖も未だ完全の良器なく止むを得ず在來の鎌を使用して徒に他の良莖を戕



イムのみならず全く螟蟲の潜伏せる稻莖を根底より刈去ることを得ざるが爲め害蟲驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲を擧げざるなり發明者多年茲に此意を籠め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は上圖に示す如く小形の鎌に彈力性の遮匙を付したるものにして本器を使用するに先づ把手(一)を握り而して切取らんとする稻莖との中間(二)に當て鎌を少しく前

の尖端どの左間(一)に當て鎌を少しく前の方に押すべし然るときは遮匙(二)は彈力性あるを以て外方に開き稻莖を押し入るべし一度押し入れたる後は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は挿入する事なほ此に於て鎌をなる稻莖は挿入する事なほ此に於て鎌を根底迄押入れ後方に引くときは毫も他の稻莖に害せず容易に取らざるを得る至極廉便の良器にして諸國縣農事試験場等が賞賛せり定價一挺金拾錢

製造發賣元
高橋啓之助
縣下一手販賣所



毎月一回

○每號美麗なる寫眞銅版の口繪を挿入す○記事は嶄新にして農家に肝要有益なる者而已○蒐集せり○見本方を往復葉書にて御申は無料一部進呈すべし

定部一部金六錢大部金
並六錢十二部金七拾錢
大阪市西區野下之町
電話西區百拾九番

新農報社

第五回勸業博覽會褒狀受領

合成分殺蟲液各府縣農事



★其特色ハノ擴散力ハ優

一滴ノ油液ヲシテ全水面油膜ヲ普

害蟲驅除上ノ最大要務

害蟲ノ驅除ニ計ルニハ油類ニシテモノナキ
 之ヲ問ハシテ勿論世上一般ニ認ムルモ勿論
 之方今ハ又應用セラルルモノハ油類ニシテ就
 中経濟的殺蟲力ニ富ムル石油類油或ハ之レガ
 殘滓重油ハ最も需用多ク然レモ是等石油
 屬ニシテ往々適不適或ハ有害無害ノ疑問ヲ生
 モラセテ又之レ以テ他ナシ
 元來浮塵子ハ水面上ニ於ケル油膜ニ逢着セバ
 直チニ斃死スルハ勿論ナリト雖モ又巧ニ水面
 ナ飛翔スルノ性質ヲ有ス故ニ幾回葉華ノ振搖
 ナ行ヒ墜落ヲ促スモ其油膜ニシテ普及シ能ハ
 ザル限リハ再び稻葉或ハ畦畔ノ雜草中へ飛翔
 シ去リ遂ニ勞シテ功ヲ空シクスルニアリ且又
 有害ノ點ニ至リテハ石油輕油重油類ノ概シテ
 擴散力ニ乏シク水面ニ滴下スルモ殆ド球狀ヲ
 保チ是等物質ノ綜合稻林ニ附着シ發育上不測
 ノ被害ヲ醸スニ因セリ
 要スルニ如上ニ大欠点ハ以テ最も偉大ノ擴散
 力ヲ有スル油類ノ選擇ニ耐スヘシ之レ害蟲驅
 除ニ就キテノ最大要務トス

稻丸印合成分殺蟲液

●性質 本液ハ石油ヲ原料トシ之レニ加フルニ
 種々殺蟲的藥劑ヲ以テシタル合成分液ニシテ品質
 一ナルハ勿論一一滴ノ油液モ優ニ全水面ニ其
 油膜ヲシテ普及シ得ベキ非常ナル擴散力ヲ含有
 シ置キ殺蟲力ニ富ミ更ニ厭フベキ惡臭ナキ等浮
 塵子驅除用トシテ最も適切ス

●特色 苗代田ニテ未ダ稻苗ノ幼稚ナル時季可成
 の少量ヲ注意ヲ以テ豫防且ツ驅除ヲ要スル際ニ
 ハ本油液ノ如キハ偉大ナル擴散力ヲ有スルヲ以
 テ其成育程度ニ準ジ少量ノ注油則チ隨時稀薄ナ
 ル油膜ヲ全水面ニ普及セシメ全滅シ得ルハ本液
 ノ最も特色ナリ

●本田插苗後モ苗代時季ニ均シク成育程度及ビ害
 蟲發生ノ状態ニ應ジ其水面上ニ於ケル油膜ノ厚
 薄適度自在ニ注油驅除ノ目的ヲシテ充分ニ透徹
 シ得ベシ

●國家の最大經濟 驅除上仮リニ上松石油及
 び除蟲液ニシテ一反歩二三升ノ注油ヲ施スモ其
 油膜斑點ニ區分シ目的ヲ達ザルニ反シ本油液ハ
 其半量以內ナル一升ニテ全滅ヲ期シ得ベク以テ
 其効果ト經濟ハ國家ノ富源ニ莫大ナル裨益ヲ與
 フルヤ必然ナリ

▲弊店ハ弘ク各位ニ御實驗ヲ得度希望
 ヲ有スルト且ハ便利上一函以上ハ直
 接御注文ニ應ジ速時出荷可仕候

試驗場及ビ郡村農會ニテ優効證明ヲ受領セリ

及シ得ベキ奇効有リ

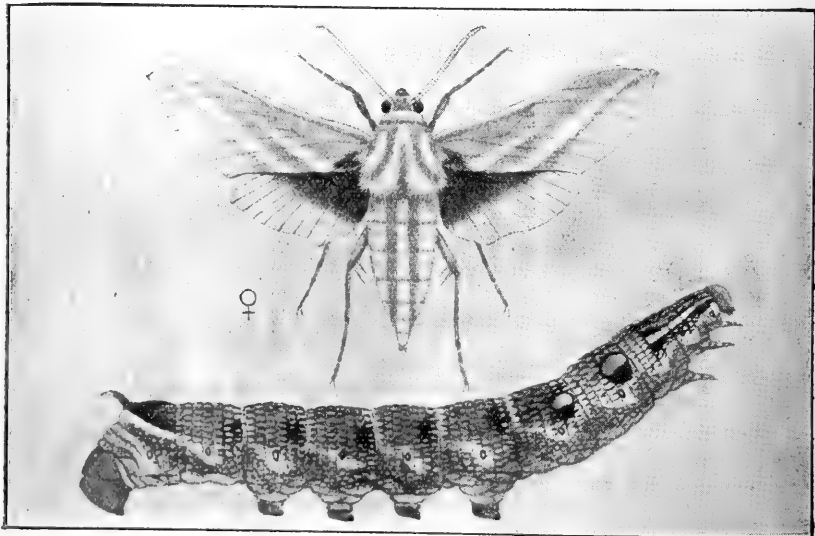
大阪區船橋北橋西電話九百八十八番 發賣元 合成分殺蟲製造

Chaerocampa Lucasii Walker. (Beni-suzume)

By K, Nagano.

Closely allied to *C. elpenor* L. Forewings olive-green; costa rosy; marginal area purplish-rosy; near base black; a white discal dot; median band purplish-rosy; a purplish-rosy streak from beyond of middle of dorsum to apex. Hindwings rosy, basal half black; cilia white. Expanse 64-72m. m. Head and thorax olive-green with rosy stripes; abdomen rosy with two olive-green stripes; a black spot on each side of base.

Formosa, Kiusiu, Shikoku. Honshiu; 6, 7, 8. Larva green or brown, finely streaked with darker; on 1-3 a pale longitudinal lateral strips; on 4, 5 blackish lateral blotches enclosing reniform pale yellow spots; on 4-11 a series of darker oblique lateral stripes; horn short, black, tip white: on *Lythrum salicaria*, *Impatiens balsamina*, *Oenothera odorata*, *Galium verum*, etc.; 6, 7, 8.



謹告

名和先生御考案

●本邦六大島蝶圖

●昆蟲繪葉書

●昆蟲採集用小札

●昆蟲名稱小札

一葉	三葉一組	五百枚	五百枚
定價金拾五錢	定價金五錢	定價金拾五錢	定價金拾五錢
郵税金貳錢	郵税金貳錢	郵税金貳錢	郵税金貳錢
定稅金貳錢	定稅金貳錢	定稅金貳錢	定稅金貳錢
郵税金貳錢	郵税金貳錢	郵税金貳錢	郵税金貳錢

右者今般斯學研鑽家諸君の御便利を圖り名和昆蟲研究所の御檢閲を受け多數印刷仕り特別廉價を以て廣く同好の士に頒たんとす企くは陸續御注文あらんことを祈り奉り候

美濃大垣

八月

西濃印刷株式會社

石版部

●岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も每會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内

岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十七回月次會(九月五日) 第五十九回月次會(十一月七日) 第五十八回月次會(十月三日) 第六十回月次會(十二月五日)



●名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所の位置は市境內の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲至あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館(五間に十六間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町

名和昆蟲研究所

●本誌定價並廣告料

壹部郵稅共 金拾錢

壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢

(注意) 本誌は總て前金に非れば發送せず

●爲替拂渡局は岐阜郵便局 ●郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

廣告料 五號活字二十二字詰一行に付金拾貳錢

三十行以上一行に付金拾錢とす

明治三十六年八月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二

(岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二

發行所 名和梅吉

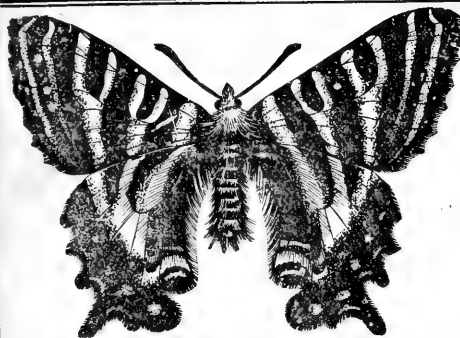
編輯者 小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二

印刷者 河田貞次郎

不許轉載





THE INSECT WORLD: A MONTHLY MAGAZINE. EDITED BY Y. NAWA. GIFU, JAPAN.

(毎月一回十五日發行)

(九月十五日發行)

昆蟲世界

第七拾參號

(第七卷第九册)

目次 (禁轉載)

●中等教育昆蟲標本寫真(一)(寫真版)

●學說

○本邦將來の害蟲 松村 松年

○皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解(其一) 小竹 浩

○稻の貝殻蟲 桑名伊之吉

○無翅の蝨種に就て附臺灣産の蝨種續 永澤小兵衛

○第一回岐阜縣昆蟲分布調査(三) 小森省作

●講話 一七頁

○第十六回全國害蟲驅除講習會員の五分時演說

●雜錄 二一頁

○昆蟲界之花壇 名和 梅吉

○六足蟲築巢(申之卷) 長野菊次郎

○昆蟲に關する隨感隨筆(第三回) 高橋 徹一

○自然的害蟲驅除豫防趣意書 岡田 忠男

○十一星瓢蟲の食飼に付て

●通信 二八頁

○博覽會出品害蟲標本並に調査解說書(三等賞) 新潟縣農事試驗場

○神村直三郎博士三重縣阿山郡昆蟲通信 西岡嘉十郎

○長野縣北安曇郡の昆蟲方言續報 帶刀喜市

●雜報 三四頁

○名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書(前號の續)

○苞蟲の發生とその驅除器 天田郡昆蟲學講習會景況

○氷上郡の同窓者會合 第十六回全國害蟲驅除講習會

○生氏名 北海道の演說 凸眼椿象の發生 浮

○塵子の發生 朝鮮の昆蟲 昆蟲畫の好評

○稻の莖切鎌 名古屋松操會の總集會 本誌の改良

○聖路易萬國博覽會昆蟲標本出品 中田谷藏氏の訃音

○五十七回月次會記事 水曜昆蟲會記事 昆蟲學會

○列箱の觀覽人 寄稿家に告ぐ

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

(明治三十六年九月十五日發行)

●寄贈物件受領人公告

- 一金貳圓也
 - 一金壹圓五拾錢
 - 一金五拾錢
 - 一寫真(書蟲除景况)二葉
 - 一昆蟲標本 數十種
 - 一昆蟲標本 數百頭
 - 一昆蟲標本 十三種
 - 一美術的調製蠅叩 一本
 - 一東京新報
 - 一東海日日新聞
 - 一稻莖切鎌 十挺
 - 一小笠原小灰蝶 二頭
 - 一獨逸産山黄蝶 一頭
 - 一陶器桃形菓子器(蝶模様付)
 - 一絹張蝶繡團扇 一本
 - 一大形霜降天蛾幼蟲 一頭
 - 一同蝻 一頭
- 右寄贈相成候に付芳名を掲げて其厚意を謝す
- 明治三十六年九月十一日

名和昆蟲研究所

●昆蟲世界購讀紹介者芳名

- 静岡縣 岡田忠男君(貳名)
- 佐賀縣 飯田儀太郎君(壹名)
- 岐阜縣 河田貞次郎君(壹名)
- 福井縣 敦賀郡松原村役場(壹名)

●購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遅延相成候諸君も尠からず會計上非常な迷惑を來すのみならず爲め本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滞納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

昆蟲世界會計部

●昆蟲分布調査材料募集

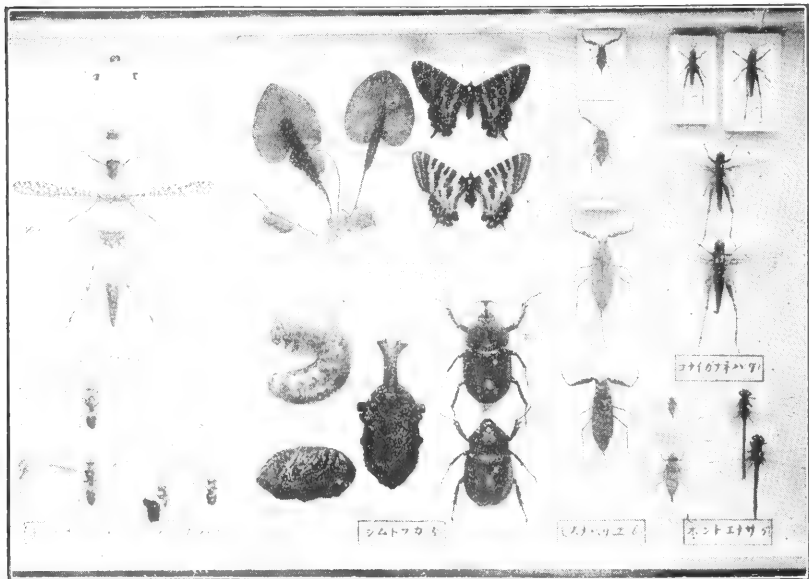
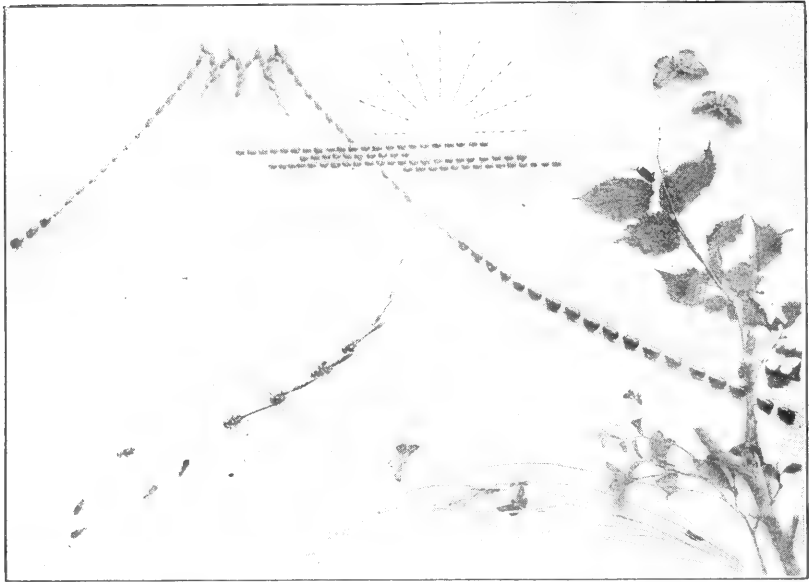
- 鞘翅目。瓢蟲の部。
 - 鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。
 - 脈翅目。擬蜻蛉、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
 - 有吻目。水棲の部、蟬の部。
 - 直翅目。螞螂の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。
 - 擬脈翅目。蜻蛉の部。
- 右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんと望む

○アブラムシ(蜚蠊又は滑蟲)の標本

右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む

岐阜市京町

名和昆蟲研究所



(一) 眞寫本標蟲昆育教等中



◎本邦將來の害蟲

農學士 松村松一年

有名ある害蟲の分布ハ普通昆蟲の分布論によりて之れを論ずる事難し、通商貿易の盛からざる昔日にありては其傳播の機關甚少なく、或は浮木に攀じ、或は鳥の足に絶り、或は風に乗り、或は龍巻に持ち揚げられて其居所を異にせし位にして、之れとても今日の如く數千里を離れたる地に移轉するが如き事あらざりき。尤も昔時撒拉利亞地方の熱帶なりし際共に棲息せし動物は水河に追はれ、或はウラル山を越へて歐洲に出で、或はビリング海峡を渡りて北亞米利加に轉じ、或はヒマラヤ山を越へて印度に到りしものもあるべしと雖も、此等は皆普通の動物分布論よりて其説明を興ふるとを得べし。夫昆蟲の分布は甚だ食物ハ關係を有するものにして、單に一種の食物に依るものは其分布極めて狭く、其食物の數種ハ渉れるものは大に之れハ相反するものあるを見るなり。而して有名なる害蟲の食物は多く數種に渉るを以て、從て食物の欠乏を告ぐるの期少なく、加ふるに其性強靱として甚だ蕃殖力に富み、容易に死滅する事なし。試に粟の夜盜蟲を見よ、大凡禾本科植物として彼れの食餌ならざるものなく、其分布の廣き推して知るべきなり。又其食草の一種に限られたるものを見よ、假令風によりて其所を異にし水によりて其地を變するも、若し其食草にしてなくんば何ぞ蕃殖する事を得ん。彼の麥類に大害を加ふ

蟻蛄の如きは其分布極めて廣く、初めて其亞弗利加にて發見せられたるは今を去る大凡百年前にして
パリン (Palsot) 氏は之れを *Gryllotalpa africana* の學名を附し、ブルマイステル氏は東印度より之れ
を得て *G. orientalis* の名稱を與へたり。此者全亞弗利加は云ふよ及ばず、亞細亞、濠洲地方も廣がり
其加害の大なる能く人の知る所なり。普通夜盜蟲 (エンドノキリムシ) は殆んど世界共有にして、唯だ南
米及び濠洲よ於て其發見せられしを聞かず。粟の夜盜蟲 (*Leucania nimpuncta* Haw) は其分布前者よりも
遙に廣く、之れこそ純然たる世界共有と稱しても可ならんか、余は之れを印度洋の船中にも發見したり
又彼の三化螟蟲 (*Schönobius bipunctifer* Wk.) は其初め印度に發見せられ、次で支那、臺灣も看出せられ
後亦本邦も産するあるを知るに至れり。彼の有名なる稻の害蟲褐色浮塵子 *Delphax furcifera* は其初め
本邦に發見せられたりと雖も、其分布甚だ廣く、東印度は勿論、余之れを亞弗利加及び伊太利のシシリ
島に於ても捕獲したりき。其他ツマグロヨコバヒと云ひ、或はフタテンヨコバヒと云ひ、何れも其分布
の廣きとを見るなり。要するに著名なる害蟲の分布は甚だ廣きものにして、皆世界共有の傾あり。況や
普通貿易の盛なる、其交通機關の具備せる今日に至りては、東西所を撰ばず其傳播するものあるを見る
故に歐米に於ける今日の害蟲は將來に於ける日本の害蟲ともなり、今日に於ける日本の害蟲は又將來よ
於ける歐米の害蟲ともあるなり。既にフランコケムシ (*Tymantria dispar*) は今を去る大凡四十年前歐洲よ
り北米に輸入せられ、年々巨萬の損害を加へ居れり。草樹の芽蟲 (*Emetooera ocellana*) は百年以來歐洲
よ於ける害蟲なるが、大凡六十五年前北米よ渡り、本邦同様に大害を加へ居れり。其他草樹の綿蟲の如
き、或は貝殼蟲の如き、或は又蚜蟲の如き、歐洲を原産地として今や世界に廣がり此内殊に本邦に於け
る貝殼蟲の如き、其猖獗既に極度に達し、今日之れが爲めに農業者の其果樹を放擲するもの少なからず

彼の有名なる葡萄の害虫ヒロクセラは未だ本邦に襲来せざと雖も早晚其招致を見るの時あるべし。若し一朝にして其害虫の繁殖するに至りては、葡萄の栽培も亦望むがに至るべし。故に外國種を輸入するものあらば、當局者は活目以て大に其害虫の有無を検査せざるべからず。若し貝殻虫の如く、其既に傳播するに至りては、千百の薬劑も亦如何ともする能はざるなり。

今通商貿易の爲め、既に本邦に傳播せるもの、及び將來傳播の憂ある重要な害虫を擧ぐれば即ち左の如し

Coleoptera

<i>Dermestes lardarius</i> L.	ホシカツラムシ	<i>Corynetes ruficollis</i> F.	アカクビホシカムシ
” <i>elongatus</i> Lec.	ナガカツラムシ	<i>Bruchus obtectus</i> Say.	ダイヅゾウムシ
<i>Attagenus piceus</i> Oliv.	ヒメカツラムシ	” <i>rufimanus</i> Boh.	アカアシマメゾウ
” <i>pellio</i> L.		” <i>psii</i> L.	エンドゾウムシ
<i>Anthrenus scrophulariae</i> L.	シロハラハナムグリ	” <i>chinensis</i> L.	マメゾウムシ
” <i>verbasci</i> L.	ヒメマルカツラムシ	” <i>4-maculatus</i> F.	ヨツボシマメゾウ
” <i>muscorum</i> L.	マルノウホナムシ	<i>Calandra oryzae</i> L.	コクゾウムシ
<i>Gibbium scotias</i> F.	ケナガノウホナムシ	” <i>granaria</i> L.	コムギゾウムシ
<i>Sitotrepa panicea</i> L.	シンサンムシ	<i>Tribolium ferrugineum</i> F.	コクヌストムドキ
<i>Plytus fur</i> L.	ノウホナムシ	<i>Silvanus surinamensis</i> L.	コクヌスト
<i>Lycetus brunneus</i> Steph.	タケシンクビ	<i>Tenebrioidea mauritanica</i> L.	オホコクヌスト
” <i>unipunctatus</i> Hbst.	ロメホシマメシムシ	<i>Tenebris molitor</i> L.	オホコナムシ
<i>Corynetes violaceus</i> L.	ルリホナムシ	<i>Scolytus rugulosus</i> Raty.	サクラギロメシムシ
” <i>rufipes</i> Deg.	アカアシホシカムシ	<i>Xyleborus dispar</i> .	カウチノロメシムシ
		<i>Agrius sinuatus</i> Oliv.	ナンノヒメタマムシ

Oiorhynchus picipes Hbst. ノモトキタロムサヤミ

Lepidoptera

Aporia crataegi L. エンシシロテフ

Aegeria tipuliformis L. スグリヌカシバ

Galleria mellonella L. ハチミツガ

Schoenobius bipunctifer Wk. サンカメイチユウガ

Acrobasis nigrenella Zell. ツノハマキムシガ

Aglossa dimidiata Haw. コメノクロムシガ

Ephestia kuehniella Zell. コナムシガ

Pyralis manihotalis Guén. カシガ

Dichocroalis punctiferalis Guén. モモノシンクモガ

Caracacia rosaceana Harr. リンゴハマキガ

Tmetocera ocellana F. リンゴヌムシガ

Carpocapsa pomonella L. リンゴキキミンタコガ

Tinea granella L. コクガ

Trichophaga tapetzella L. モウセンガ

Tineola pellionella L. イガ

” bisellifella Humm. コイガ

Hypnomenuta mainella Zell. リンゴスムシ

Argyresthia conjugella Zell. キンケロメミンタコガ

Sitotroga cerealella Oliv. バクガ

Coleophora nigricella Steph. ハシノムシガ

” malivorella Riley. ビストルミノムシガ

Hymenoptera

Nematus ribesii Scop. スグリノコバチ

” erichsonii Hart. ラクヨウシヨノコバチ

Cephus pygmaeus L. コムギノコバチ

Cladius pectinicornis Four. バラメダノコバチ

Emphytus cinctus L. バラマキノコバチ

Diptera

Ceidomyia destructor Say. フシカンバク

Diplosis tritici Kirby. コムギバク

” pyrivora Riley. ナシバク

Haematobia serrata R. D. ウミンノシバク

Pollenia rulis F. オホイバク

Musca domestica L. イバク

” corvina F. クロイエバク

Lucilia caesar L. キンバク

Calliphora vomitoria L. クロバク

Anthomyia ceparum L. ネギバク

Phorbia brassicae Bouch. ダイコンバク

Prophila casei L. チースバク

Rhynchocha

<i>Acanthus lecturaris</i> L.	ナンキンムシ	<i>Mytilaspis conchiformis</i> Gemel. (M.pomerana, Bouch.)	モモノカイガラムシ
<i>Psylla pyricola</i> Förstl.	ナシジラミ	<i>Leucantum</i> Persicae F.	バラカイガラムシ
<i>Aphis mali</i> F.	リンゴアブラムシ	<i>Orthoptera</i>	
” <i>pruni</i> Koch.	スモモアブラムシ	<i>Phyllodromia germanica</i> L.	チャバネアブラムシ
” <i>cerasi</i> F.	サクラアブラムシ	<i>Periplaneta americana</i> L.	アメリカアブラムシ
” <i>ribis</i> L.	スグリアブラムシ	” <i>australis</i> ae F.	オステラリヤアブラムシ
” <i>brassicae</i> L.	ダイコンアブラムシ	” <i>polita</i> Wk.	ダイワンアブラムシ
<i>Nectarophora cerealis</i> Koch.	ムギアブラムシ	” <i>semiancta</i> Wk.	オビアブラムシ
<i>Phorodon humuli</i> Sch.		<i>Stylopyga concinna</i> Hag.	アブラムシ
<i>Schyzoneura lanigera</i> Haus.	ワタムシ	” <i>orientalis</i> L.	コバネアブラムシ

◎皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解 (其一)

名和昆蟲研究所内 小竹 浩

明治二十九年四月岐阜縣尋常師範學校に於て中等教育昆蟲標本を調製し、皇太子殿下に奉獻せしことは尙吾人の記憶に存する所にして、其内容に至りては寫眞帖によりて窺知せらるゝの士尠なからざるべし。然れども未だ其の説明書の發表なきを以て、當所に向て之れが説明を望まらるゝの士多きにも係らず一片の書信能く盡し得らるゝの類に非ざれば、遺憾も一々應答し得ざりしが、永く之れを埋没して諸士の希望を空ふする如きは、斯道に忠實ならざるの嫌あるを以て茲に紹介の勞を執らんとす。左に掲ぐるは即ち其主意書の原文なり

明治廿六年以降、岐阜縣尋常師範學校職員生徒一同 奉獻の意を以て蒐集し着手し、時の校長坪井仙次郎事を督し、教諭名和靖主任とあり調製保管を司り、他の職員全体は生徒を督し、生徒は第四年級考案者となり、第三年級解説蒐録の事を執り、第二年級専ら採集に従事し、第一年級これが補助となり、爾來年を閱する殆んど三年、其間校長の更任ありたるも、現校長多和田豊吉此の擧を繼ぎ、今茲に漸く完成するに至れり。

是れ因て之を見るよ、一朝一夕は装成せられしものに非らず、永き間職員一同は生徒を督勵鼓吹し生徒は苦辛經營能く事に従ひし結果に外ならず。抑昆蟲標本の纏まりたるものを製せんと欲せば、意外の時日と、意外の煩勞とを要することは到底昆蟲を手にせざるもの、想像の及ばざる所なり。況や今より約十年前に於て、其箱十五を算し、種類二百に垂なんとし、之れに一一々説明を加へたるに於てをや。本號の口繪は即其一部の撮影にして、今之れが説明書を縮き、相對照玩味せば得るところ蓋し尠少ありざるべきを信じ、以下號を追ひ順次口繪を挿入すると共に説明書に改訂を加へ、以て本欄に収録し讀者に紹介せんとす、讀者豫め之れを諒せよ。聞く當所長名和先生は其當時職を岐阜縣尋常師範學校に奉じ動物學科を擔當せられし折なりしが、意已に職を辭し、昆蟲研究所を設立して専ら應用昆蟲學の發達を圖らんとの意ありしかば、紀念の爲めもと率先指導せられ、特に口繪の上圖即裝飾用標本は全く同先生の考案に成り附屬として奉獻せられしものなりといふ。

第一裝飾用標本説明(本號口繪上圖參看) 該標本は縦二尺三寸横三尺大の額面に製したるものにして奉獻

の當時 皇太子殿下は沼津の御用邸に在りせられ、特其の年、寄山祝てふ御題なりしかば、是れ等因み装成したるものなり。富岳の山顛は青象鼻蟲を配して雲上高く聳え、四時白雪を戴くの狀を象り

漸次下りて山腹に至る迄は、金龜子を、中腹以下は金龜子の小形のものより順次大形のものをしてし、茶色金龜子を列ねて雲に擬し、青腰蟲を配して太陽に象り、蜻蛉の各種を以て下り龍に擬す。時恰も日清戦役の後なりしかば、蜻蛉を暗に日本軍隊よ、ミチヲシへを支那兵よ擬したるあり。之れミチヲシへは學名をシンデラ、チエネセスと云ひ、支那の原産なるを以てなり。日本軍隊の正々堂々隊伍を整へ進撃すれば、逃走に巧みなる支那兵は抵抗の勇なく忽ち四分五裂先を争ふて逃走し、僅に彈丸の達せざる後方の一部隊は殊勝にも反抗せんとするの状にして、戦役當時の眞想を穿ちたるものなり。右方には三保の松原を畫くべき處あるも、事の茲に出でずして稻、茶、桑に各種の害蟲を入れたるは、少しく意の存するありてなり。即ち本邦に稻作の重要なる、茶桑の直接に、間接に輸出品として貴重なるは贅辦を要せず。之れ等の重要作物に對する害蟲の全滅を圖りて後、茲に初めて富峯の魏然東海よ聳て萬世變りなきが如く、我國家も亦益發達して東洋の一方に嶄然頭角を表はし、以て天地と共に無窮に動きなきことを意味したるなり。

◎稻の貝殼蟲

米國理學士 桑名伊之吉

貝殼蟲は多く叢樹及び果樹に寄生するを以て、我産業上夥しく害を被むることは世人の夙に知る處あるが、貝殼蟲は單に樹木を害するのみならずして禾本科植物を害するもの又尠なしとせず。然れども是迄皆て稻に貝殼蟲の寄生するあるを聞かざりしが、本年（西曆一千八百九十三年明治三十六年）の印度博物館報（第五卷三冊）を閲するに、同國昆蟲學者グリーン氏は新種なる、稻の貝殼蟲てふ一文を掲げた。本邦に於ては、未だ之を發見せざりと雖ども、我が最重要農作物とする稻に寄生するものなれば、

左に其説明を譯して以て愛讀者に照會せんと云爾。

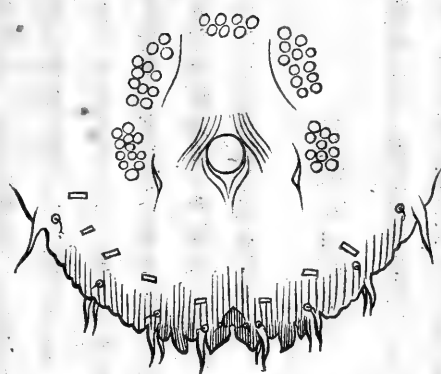
稻の貝殼蟲、(Chionaspis decurvata Green)

托生植物 稻、發生地 印度

雌蟲の貝殼、貝殼は白色にして、蛻皮は稟黄色を呈し、楕圓形にして少しく凸起す。第二蛻皮より小

しく尾端に依りたる部分の幅最も廣く、尾端に向ひて狭小なり。裏面の貝殼は能く發達せり。長さ一、五〇M乃至一、七〇M、幅〇、七五Mあり。

雄蟲の貝殼、白色半透明にして縦に三個の凸隆線あり、長さ一、一〇M、幅〇、四〇Mあり。



稻の貝殼蟲の雌蟲の腎板の圖

にあるものは大なり。第三扁長板は甚だ小なり。五群の圓形分泌孔あり、中央の一群は七個乃至八個前側の一對は十一個乃至十四個、后側の一對は十個乃至十二個よりなれり。中央と第二扁長板との間及び第二と第三扁長板との間各二個の棘あり、又第三扁長板の上位に二個の棘を有す。

◎無翅の螢種に就て附臺灣産の螢種(續)

在臺灣打狗港 永澤小兵衛

(三)臺灣産の無翅螢

余が臺灣産に無翅螢あることを認めしは、近く今月一日の事まで、之が研究用

は供せしは、都合二種三頭の所謂ウジポタルなりき。是より先、六月十一日の夜、臺北の郊外に於て二種二十餘頭を獲たりしが、皆悉く雄蟲たるに疑がひを懷き、茲に始めて研究の端緒を啓きたれど、生憎や、豪雨連日、屢次其機會を失したりしを以て、同月二十日轉じて城南の村落古亭庄に採集せり、去れど此際は早や四邊に螢影だも無く、歸途道傍の草間より、一の蛆螢を捕へしのみなりき。越えて廿二日の夜、臺北と頂内埔庄間を搜索せしが、只遙に一螢の飛行するものあるを目撃せしのみにして、是また不成功に歸したりき。斯く絶望に瀕し乍らも、尙ほ多少頼む所ありしを以て、南門外街、劍潭、古亭庄等の土人は買収を約せしが、時期既に遅れたりとて、一頭 גם 捕へたる者無く、益々失望を重ねしめぬ。折しもあれ六月廿九日の夜は、高温無風よして月さへ見ぬ曇天なりしかば、獨り自から城外を距る十數町の地に採集せしに、幸ひよも二頭の飛螢と十餘の蛆螢とを獲たれば、欣然歸りて之を燈下に檢せしよ、飛螢の一は黃褐色のもの(乙)にて、他は別種(甲)に屬せり。而してこの蛆螢に至りては、大小肥瘦一樣ならずりしも、自づからまた此二種のものたることを知らしむべき特徴を有しき。翌日再檢を加へたる結果、深く信する所ありしを以て、試みに其一頭を剖解して、腹部の構成を檢せしに、果然老熟の雌蟲たることを確か得たり。然れども、自信の餘り或ひは誤視することもやあかんかと、其翌七月一日を以て、臺灣總督府國語學校理科室よ、教授永澤定一氏を訪ひて、鏡檢の勞を煩はし、剖愛また他の二頭をも解體細檢せしに、何れも發育その極に達したる成蟲たること判明し、此時を以て始めて臺灣種の雌蟲は、世に所謂ウジポタルなることを確認しぬ。但その幼蟲と成蟲との分界、及び甲種と乙種との區別に至りては、今なほ斷言するに憚かるものあり。是れ研究上よ於ける難事の一たるに違はざるも

眞の幼蟲と蛆形の成蟲との間には、其舉動に稍異なる所あるを以て、今後數回の研究を積まざるは、必ずしも辨別し難きものあらざる可しと信す。

(四)臺灣産の螢種 臺灣島に於ける蟲種の調査は、今なほ不明に屬し、會々その分布を知らしむる材料ありと雖ども、採集區域の狭小あるは、未だ十が一にだも及ばざるが如し。故に螢種に就ても、亦頗ぶる之を知るに難んずるものあり。而して余が臆想到に依れば、全島には、次の三種を以て普通種と謂ふことを得べきに似たり。即ち(甲種)全體扁平、胸背黃褐、翅色灰黒にして、黃褐の邊緣を前翅の周邊に彩せれる大形種。(乙種)全身黃褐色を呈し、前者よりは小形なれども、其性活潑よ、飛行輕捷にして且つ強烈の發光をなすもの。(丙種)其大さは甲乙兩者の中間に居り、翅色黒くして、腹部より赤色を帯ぶる所のものは是なり。今これを次に概説せん。

い(甲種の雄)

體軀は扁平横溝にして、全長四分七八厘、濶二分を普通とす。前中の兩胸は密着し

後胸は大にして著るしく隆起せり。胸背は長半圓形をなして俗に所謂銜色を帯び、中央膨起の處は赤

褐を呈し、長一分三厘濶一分八厘許り、其上端には八字形の透明鏡を點す、常に全たく其頭部を蓋ふ

を以て、内面より見る時は、きは黄笠を被ふれるがごとし。眼は純黒にして小に、双々近く相隣接す

觸角は長一分八厘許り、鋸齒状をなせる十一節互ひに相連結す。前翅の實質は銜色にて、これに灰黒

の色彩を添へたるものなるも、後翅の全部の灰黒色あるより、宛がら黒翅に黃褐の邊緣を施せるが如

くに見ゆ、其長約三分八厘、濶一分一厘あり。邊緣は左右兩縁と翅端とよ於て稍太く、中央接合部に

於て細直なること葛上亭長のそれとも似たり。腹部は上半の四節、微褐黒色を呈し、其濶二分より垂ん

たり、これに續て蒼白色を帯べる發光器二節、並びに尾節等あり、其よ長三厘、濶一分内外を算す。

ろ(無翅の雌) 是はいの雌蟲にして外貌は全く蛆形をなし、體軀肥大、地質は灰黒なり。故之を背後より見れば宛然十二節片を聯繫せる一種可厭の幼蟲あるが如し。其背部の中央には、二條の白縦線、若くは縦溝を貫通し、毎節美麗なる刻點紋を有せり。頭部は不正長方形をなし、尖端の稍狭けれど、下方は次第に其潤を増し、且つ三條の白縦線を具ふ。其構成は最も奇にして、龜鼈の頭部の如く、頸首の出入自在なるより、物に驚怖する時は、收縮して圓筒中に藏り、適意の時にのみ之を伸長す。圓筒の内面は、色稍白く、口徑約七厘あり。體長は常に九分五六厘に止まるも、跂行に際りては、増して一寸許りとなる。胸部は雄蟲と反對に前中兩者最も發達し、後胸は極めて短かく、縦横に交錯せる帶紅白細線を描けり。腹長約五分五厘、其左右に二縦線を走らすの他、なほ各節の兩端には、帶白微紅の異彩を有するものあり。發光器は其第七節ありて、表裏の兩端は各々八字形の白紋を點す。發光器に次げる末節は、魚尾狀をなし、これを以て能く物に吸着するの性あり。脚は六足にして黒く、各節上には、顯著なる白斑と、褐色の小爪とを有し、脛節及び跗節の内側は、一列に微毛を生ぜり。今試みよ、之を十二節二分つ時は、第一節の頭部は、長一分六厘を算するも、胸部に屬する第二第三兩節は共に一分一厘、第四節は五厘あり。而して腹部に屬する第五節は七厘、第六第七第八第九の四節は何れも八厘、第十節は六厘、第十一節の發光器は五厘、第十二節の尾端に於ける中央部は僅かに四厘にして、其左右は略ぼ之に倍するを見る。而して頭部の最廣部は、その潤一分五六厘に達することありて、胸腹部は稍これよりも潤し。但し稀には腹部の彩色の微黃色なるものあり。は(乙種の雄) 身長三分前後あり。眼は藍黒にして巨大に、且の前方は凸出するが故に、背後よりも之を見ることを得、前翅は原と黃褐なるも、後翅の灰黒色透徹して、暗褐色に見ゆ。胸背は赤褐色

よして、其長七八厘、濶九厘より一分の間あり。翅長は二分五厘、その濶二分五厘許り、長く腹端の外に出づるを以て、體軀自づから細長なるやの觀あり。觸角は纖細よして、甲種の如く分明あらざるも、之を鏡下照せば、此科特有の形狀を具備するを見る。脚部は、股節のみ、體色と同一色にして脛節跗節は共に黒く、其爪は褐色よして鋭し。腹部また體色と等しく、後半には淡青白色の發光器二節を有せり。而して第一光節は、恰かも細帯を纏ひたるが如くにて、長三四厘、濶一分なれども、第二光節は矢鏃狀をなして、周縁には黃褐の細邊縁あり。腹部の各節中、特に注目を惹くは、第一光節に接する第一節若くは第二節の、必らず黒色を帯ぶる一事にて、其長三厘、濶二分四五厘あり。尾端は甲種のその如くに圓からで、何れも尖銳の角度を有す。

(有翅の雌) 是ははの雌蟲にして、雄よりも體軀稍小に、且つ少しく扁たし。翅翼また短かく、尖端の腹端と並行するもの多し。眼は純黒にして小に、加ふるに觸角も前者よりは纖細なるを以て、胸背より頭部を見ること難し。其他は略ぼ雄蟲と鬚鬚たるも、發光器の唯一節よしまると、其以外の諸節の一樣に淡黒を帯ぶると、翅面の暗黒なるもの多き等は、主たる相違點とすべし。然は云へ、明かに此第二第三の區別を設け難きものあるのみか、また稀よは、全翅灰黒をなせるもの無きよあらず。腹部は概むね豊肥にして、末端は雄の如く尖銳ならざるも、尾上よは微細の刺を有せり。

(丙種) 余の未だ此種を採收し得ず。臺灣總督府國語學校に於て、昨年之を入芝蘭の草山に獲たり。惜ひかな、只纒よ二頭に止まるを以て、之を記述するに苦む。隨ひてまた其習性等を報道し難し。想ふよ、此三種中(甲種)と稱するものは、普通の早種と覺しくて、六月十一日に採集の際よは、殆んど其全數を占めたりしが、其後六月廿九日、七月三日、七月四日、七月六日、七月廿一日、七月廿二日の

數回、各地に於て採集の結果によれば、次第に其數を減じ、遂に(乙種)の之に代れるを見る。則ち之を内地産と譬ふれば(甲種)は、五六月頃に全盛なるオホボタルの如く(乙種)は、六七月頃は群飛のヒメボタルに類せり。特よその性質の上より言ふも、彼此酷肖する所多く(甲種)は、溫柔にして悠揚、飛行の際に一種特有の奇癖あるも(乙種)は、常に反對の舉動をなし(甲種)は清澄の河邊、又は山腹の草間に棲息するも、(乙種)は田畔、池水の上に輕飛するもの多き等、數へ來れば内地産の兩種は比ぶべき點少からず。但外界の刺戟によれる發光には、如何なる異同ありやの一事に至りては、未だ精細の研究を加へず(未完)

◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査(三)

名和昆蟲研究所助手 分布調査主任 小森省作

環紋蝶科 此科に屬するものは、今回の採品中には凡て十一種ありて、其中ウスイロコジヤノメテフ、ヒメジヤノメテフ、ヒカゲテフ、ジヤノメテフ、キマダラテフは多數に、ジヤノメモドキテフ、ヒメキマダラテフ、カスリヒカゲテフは極めて少數なりしは、前者は最も普通種にして採集亦其時期なりしと、後者は常に山地に産するものにして、又稀なるに囚れるなるべし。今左に略説を試みんとす。

(四一)コジヤノメテフ(*Mycalesis perdiccas*, Hew.) 多く山地に飛翔するものにして、翅の表面は一

跡に黒褐色を呈し、外縁に近く前翅に大小二個と、後翅に微かなる環紋を有す。裏面は表面より比し色稍淡く、外縁に沿ふて前翅に二乃至三個、後翅は七個の環紋一列をなす。(但此環紋は變化多し)而して前後兩翅を通し帶紫白色の帯紋あり。雄蟲は前翅の第一翅脈上に特殊鱗と、後翅の基部前翅の下面に屬する處に總狀の鱗毛(特殊鱗の一種?)を有す。今回養老、山縣、郡上、加茂、可兒、土岐、大野の七郡

に於て獲られたり。

(四二) ウスイロコジヤノメテフ (*Mycalasis gotama*, Moore)

前種に極めて酷似せるものにして、其

色稍淡し。只異なる處は前種に比し淡色なると、裏面に於ける前後兩翅は通せる帯紋あるが如し。即ち前

種の帯紋は帶紫白色にして多少屈曲せるも、此種は帶黃白色にして直線をなす。又雄蟲の特殊鱗に差異あり。夏期日陰は普通にして、幼蟲は稻等禾本科植物を食す。安八を除き縣下各市郡に於て多數獲られたり。

(四三) ヒカゲテフ (*Lethe aequalis*, Hew.) 常に日陰に居るを以て此名あり、翅の表面は一樣に暗褐色

を呈し、僅か後翅は微かなる環紋の現はるゝのみ。裏面は其色表面に比し淡く、前翅の翅端に一乃至二

個、後翅の外縁に沿ふて六乃至七個の大小環紋と、兩翅共帶褐白色の帯紋を有す。又此蝶は變化非常に多

し。今回海洋、安八の二郡を除き各市郡に於て多數獲られたり。

(四四) クロヒカゲテフ (*Lethe diana*, But.) 此蝶は表裏何れも前種に酷似せるものにして、只其異

かる處は前種に比し、一般に小形にして、前翅は比較的廣く、裏面の白帯は前縁に近づくに従ひ廣く且

つ鮮明なり。後翅は黒褐色の線條のみにして、環紋は比較的大なり、然れども雄蟲は於ては一般に濃色

よして、前翅の裏面後縁の中央部に黒色の長き特殊鱗を有するの特徵あれば、容易に區別し得べし。常

に山地に産す。今回武儀、土岐、惠那、大野、益田、吉城の六郡に於て獲られたり。

(四五) ヒメキマダラテフ (*Lethe calypteris*, But.) 翅の表面は淡褐色にして、翅端は濃く暗褐色をな

す。前翅には數多の淡き黃褐色の斑紋あり。後翅には外縁に沿ふて淡黃褐色の斑紋列ありて其中に黒色

の圓紋を有す。裏面は黃褐色よして褐色と白色の斑紋ありて、後翅の外縁に沿へる部には環紋列あり、

山地に産す。惠那、大野、益田の三郡に於て各一頭つゝ獲られたり。

(四六) キマダラ モドキテフ (Lehe? epimenides, Men.) 中形の蝶にして、翅の表面は前種の如く淡褐色にして翅端は稍濃く、淡黄色の斑紋ありて前翅の前縁角は近く一個、後翅の外縁は近く沿ふて數個の黒色の圓紋を有す。裏面は暗褐色の曲折せる線斑數條と、前翅に一個、後翅に六個の環紋を有し、後翅の外半は白色を帶ぶ。稻葉、揖斐、山縣、武儀、加茂、大野の六郡に於て獲られたり。

(四七) ジャノメ モドキテフ (Pronophila schrenckii, Men.) 稀に山地に産する大形種にして、翅の表面は一樣に淡褐色を呈し、前翅の前縁角は近く一乃至二個、後翅の外縁に近く六個の黒褐色の圓紋あり。裏面は色稍淡く、前翅に二個、後翅に六個の環紋を有し、茶褐色の線條を走らす。吉城郡稻越尋常小學校四年生宮腰みゑの採品あり。

(四八) キマダラテフ (Neope gschkevischin, Men.) 本翅の表面は黒褐色にして、基部は黄褐色の鱗毛を密生す。外半には數多の帶褐黄色の斑紋ありて、其中に黒點を有す。裏面は黄褐色にして前後兩翅共不規則なる褐色の斑紋を有し、外縁は近く環紋列を有す。而して春生種は形稍小にして黄色を増し、後翅の裏面白色を帶ぶ。羽島、海津、土岐、吉城及安八を除き各市郡に於て獲られたり。

(四九) カスリヒカゲテフ (Pararge deijamia, Evers.) 常々山地に産し、翅の表面黒褐色にして白色の縁毛を有し、前翅に白色の斑紋あり。裏面は前翅に一個、後翅に六個の環紋ありて兩翅共白色の斑紋を有す。今回益田郡に於て一頭を獲たり。

(五〇) ジャノメテン (Satyrus dryas, Scop.) 大形種にして全翅の表面一樣に黒褐色を呈し、前翅に二個後翅は一個の環紋を有す。裏面は表面に比し色稍淡く、雌蟲の後翅は灰白色の帯紋を有す。變化非常に

講話

◎第十六回全國害蟲驅除講習會員の五分時演説

編者云、左に掲ぐるは去る八月一日より二週間、當昆蟲研究所の開催せる第十六回全國害蟲驅除講習會々期中、當市鶴飼ホテルに於て其會員のなしたる五分時演説の一斑なり。固より今回の會員は其數殆んど一百に達し、到底全員の演述し盡し能ふべくもあらざれば各府縣より一名づゝ代表者を出し講演せしめられたれば都合二十三名の演説筆記を得たれど、これにて紙面の都合により悉く収録し能はざれば、只演説筆記の類により左の四名を掲載するにせしむ。

(一) 害蟲驅除の要件、付卑見を述ぶ
德島縣 鎌田 愛藏

私は只今先生ヨリ紹介せられたる徳島縣人十一名の代表者として聊卑見を述ぶる考であります。我地方にては、此頃余輩の生命財産を侵害する害蟲軍が蜂起して其勢非常に猖獗を極め實に底止する所を知らざるの有様です。故に之を驅除するは目下焦眉の急にして一日も忽諸に附すべからざる事でありまが、此事を實行するには或一の技術を學び、以て其正鵠を誤らざらんことを要します。今余等の此處より來り此の講習を受くる事を軍事に例して申せば、此技を學ばんが爲め千里を遠しとせずして害蟲驅除鎮守府たる當地に參り、名和指令官の下に在て其技術を練習する茲に十日、今や其大半を研究し數日を出でずして各幹部適任証書を享受し、各歸縣して以て其實務に従事せざるべからざる時機とかりました。されど諸君よ、活眼を放つて我國の害蟲軍の棲息する昆蟲海の現象を見給へ、實に茫茫漠々、廣大無邊而已ならず前述の如く害蟲軍の現狀は眞に痛嘆に堪へざる次第ではありませぬか。余等幹部たるものは此大海を横航し、敵と戦ふて死を顧みざるの覺悟を以て事に當らねばなりません。而して此昆蟲海中には、種々の暗礁あり激浪がありまして、立海灘も只からぬこと、考へます。今此暗礁の主なるものを申せば、其名稱は儘に天保岩、念佛岩、御守岩、神水岩、護摩灰岩、天理岩等ありと思ひます。其他數ふるに堪へざる位あります。而して此暗礁の歴史を調べて見ますれば、實に數百年來成長して容易に破碎する事は出来ませぬ。今之を文明の利器たる火薬ナマズを以て一撃の重に破らんか之れ却て得策にあ

まずと信すれば、余輩は腦力と勞力とを以て此暗礁中に完全なる航路を採見して以て進行せねばなりませぬ。然らば暗礁も、年と共に波浪の爲に碎滅するの時もあらんかと信じます。之れ私の第一要訣とする所以である。次には此航路を見出せば、其攻撃方法は決して一人討ち或はぬけがけの功名、彼の往昔の佐々木高綱の功名は既に前世紀の事に屬し、今世紀は是非聯合軍を編成し、舉國一致之れが驅除に従事せねばならぬと信じます。之れ第二の要訣である。次は如上の航路、軍隊編成出来上りし上は、之を决行して目的を果すには第一經費を要すは自然の道理でありませう。此に注意すべきは、之れは要する船艦其他攻撃要具は委く内國産のものたるを要するのと、其他諸事萬端一に經濟を脱して决行するは收支相償はざるの結果を生じ、嚙臍の悔を生ずる様になりませう。此れ要訣の第三でありませう。今、前申述べました事を概括すれば害蟲驅除の要訣は即ち左の通りでありませう。

第一 迷信打破、 第二 協同一致、 第三 經濟的の策を講ずること

終りに臨み一言申添て置きますことは、前述の航路にして若し航路困難進行する能はざる場合も到れば岐阜縣名和燈明臺の光を的にし、名和式探海燈を備付けなば危險を免かれ、目的の彼岸に達すると信じます。聊卑見を述べて余の責任を免ぬがる、次第でありませう。何卒諸君の御叱正あらんことを願ひます。

(二) 害蟲驅除の普及を計る方法

富山縣 室子次郎

私は富山縣の室子次郎で御座います、今度五分間演説の抽籤に當り、不肖を顧みず暫時諸君の清聽を煩します次第であります。古語に言ふは安く行ふは難しと申すことがありますが、實に害蟲の驅除豫防に於て斯の言の適切なることを認めました。凡そ害蟲驅除の完全を望むには、一般の農民に昆蟲思想を興ふる事が必要と存じます。今日の農民は尙ほ蟲は氣候の爲に自然に湧くもの、如く心得居るもの殆んど一般でありませして、適々害蟲發生の結果驅除法を行ふと雖も多く他動的換言せば干涉命令の結果外ないど存じます。故に自動的豫防驅除を望むと言ふ様の事は容易に行くと思はれませぬ、實に憫然の次第ではありませんか。時維れ第二十世紀生存競争の烈しき恰も狂波怒濤の渦中に沈淪しつつあるの今日、轉た痛惜の情は堪へません、之れ私しの講習會出席の希望の起りたる所以であります。今後に於ては、愈々我等は國家の爲め、害蟲驅除、益蟲保護の任を執る決心に御座ります。併しながら不肖の如き一二の者共の力にて決して功を奏する事は出来まい、故に私の考へは一般農民間には精神教育を盛にし、國家的觀念を振起すると共に昆蟲思想の發達を謀るの方法を講ずることが目下の急務だろりと考へます、之れ

より其二三の方法を申上させよう。

(一)各町村に於ける大地主をして害蟲驅除豫防獎勵委員と爲し、彼等をして先づ自ら進んで害蟲驅除の事を研究せしむること、我郡の如きは本年郡農會評議員會に於て、毎町村の大地主中三名以上五名迄を必ず害蟲驅除獎勵委員にする事に決定し、之が實行の結果頗る好成績を見る事が御座りました。固より大地主に於て、害蟲驅除其他農業一般の事を力に致すは、明かき彼等に命トある天職であらうと考へます。

(二)小學兒童には害蟲の恐るべき觀念を與へ、驅除豫防の簡易なる方法及之が實地應用等の手段を實行せしめ、以て生徒をして常に害蟲驅除の手傳人たらしむるは、經濟上現時及將來に於て大に効果あること、信じます。

(三)宗教家を利用して婦人教會の如きものを組織せしめ、學校教育あきものに害蟲驅除と宗教との關係より害蟲の驅除せざるべからざることを説くは、宗教の盛なる地方に於ては最も効あること、信じます。

(四)昆蟲講話、昆蟲幻燈を實行して昆蟲思想の發達を助くること、凡そ害蟲驅除を完全に行ふには先づ昆蟲思想を養成せねばなりませぬ、此の昆蟲思想を養成するよりは從て是等に關する智識を授けねばなりません。此に於て昆蟲講話并に幻燈の必要なる所以であります。

(五)實物標本圖解等を示し、其發生經過習性等を知らしむるは目下の急務なりと信じます、之れ今日の農民中其最も重なる害蟲が如何なる形態をなし居るやすら知る者の少なくして、例へば幻燈により説明するも其實物よりの効果に勝れたるはありませぬ。猶申上度き事も多々ありますけれど、丁度時間に至りましたから是れで御免を蒙ります。

(三)害蟲發生の基因并に豫防驅除法

京都府 村上義一

抑も害蟲の發生するに就て其基因を調べて見ますと、大凡左の四つの要件を具備して居ると考へます

第一、害蟲の卵子の存在して居ること。

第二、氣候が其害蟲の性質に適當なるか、又は絶對的不適當ならざること。

第三、其害蟲の嗜好せる作物を栽培したる時。

第四、總ての農業者が害蟲に對する觀念に乏しき結果自然注意を怠りたる時。

即ち右の四條項で害蟲發生の基因は大抵云ひ盡せたりと思ひます。そこで驅除豫防を致しますに害蟲の發生する基因を知る事を得れば、驅除豫防は自然と判つて來ます。そこで驅除豫防を致しますに

は、前の四條項を完全と備へざらしむる事が必要である、之を換言しますれば、前の四條項の内一或は二以上の條項を避けることが必要であると云ふのです。斯く申せば既に諸君も御了解にまつたことでありませうが私だけの卑見を一通り申述べて此五分間演説の責を塞ふと存じます。

第一の卵子の存在を除くは即ち採卵法を行へば夫れで宜しい、此採卵法を完全に施せば、氣候が如何に害蟲の發生に適當であつても、如何に農業者が害蟲ある觀念に乏しくして注意を怠りても、如何に害蟲の嗜好せる作物を栽培しても、總ての蟲が涌くものでない以上は決して發生しない、此の害蟲の卵の存在を除くのは蟲害豫防として唯一の良策と考へます。

第二の基因を除くのは到底人工を以て爲すべからざる事である、之れに就き將來氣候を人工で以て左右することか出来るとして之れは容易と濫用すべからざる事であるのです。故に第二の基因を除きて害蟲を驅除すると云ふのは余輩の理想以外の方法にして、唯注意を以て當るより致方はありません。

第三の基因を除くと云ふことは、所よりては容易と行ふことが出来ませんが、所によりては實行が大困難であるのみならず、不利益も亦之れに伴ふことがあります。故に容易と行ふことが出来る所は可成此の方針を執るのが利益でありませう。現今農業の利益を増進する爲め、輪作法を奨励しつゝあるのは此の趣意は外ならぬのであります。此方法は豫防上最も必要であると考へます。

第四の場合に際しては一般農業者に必要なる智識を注入して後初めて好果を奏すべきものである、即ち自己の業務に付き不親切、不注意なる我が農業者に對しては、現今最も困難なる一條件であるのです。

而して之に對して飽くまで注意を怠らざらしめんとするのは甚だ容易な事ではありませんが、一時は斯く怠りなきの注意と云ふことは、思慮に乏しき農家は於ては到底行はるべき事でありませぬから、相當局者に於て干渉的に注意を與へなければなりません。又之れと同時に適當なる施設を將來の爲めに計るが必要であるのです。其施設の方法等は諸君の御思案に委す事に致します。抑も農民をして愈々注意を周到ならしめば、害蟲を未發と防ぐことが容易と出来るのみならず、總てに於て農業者の福利を大に増進せしむることが出来ず。故に私は前申述べました四條件の内、此農民の注意を惹起せしむることが目下最大の急務と考へます。

(四) 婦人と昆蟲
 私とは本年五月黃花盛るの頃、某友人を訪ひまして互に談笑しつゝありし時、其友人の令嬢然かも本年
 埼玉縣 桑田庄 治郎

四才の愛らしき嬢も此座に参りまして、私と友夫との談話を聞いて居り、庭前より黄色なる蝶と白色の蝶と翔り來りたるを見て、立上りて下婢を呼び、彼の蝶を捕てよと焦りませぬから、下婢は竹箒を以て之を捕へんとしましたに蝶は忽ち飛び去りました。嬢は不平顔に下婢の顔を熟視して在りければ下婢は又次よ飛び來りし蜻蛉を捕へんとしたるに、嬢は蜻蛉は捕ていけませぬと申しました。私は之を見て、僅か四才の少女が蝶と蜻蛉に對して、益蟲と害蟲との區別を識れるを嘆賞し、之れを賞しました。嬢の母君は某高等女學校の卒業生にして博物學の趣味を有せるものありと、之を以て之を考へまするに、女子よ昆蟲學の思想を有せしむる様よ誘導懇話したならば、害蟲驅除は容易に行はるゝのみならず、又幼童を導き不知不識の裡に理科思想を養ひ、又害益蟲の區別を明にし、害蟲は驅り益蟲は保護する様よ到ること、信じます。又婦人は迷信の強さのものなれども、昆蟲學の思想確實なるときは、之を信するもの少きに到り、從て社會の改良進歩上益すると少からざるべしと深く信じます。仍て私は婦人よ昆蟲學の思想を有せしむることを望む次第であります。



◎昆蟲界之花壇

在米國 名和梅吉

(二) 邦産と米産の蜻蛉種屬よ就て 本邦よ産する蜻蛉類は曾て本誌上に記載せし如く、既に世よ知られたるもの六十余种を算す。右之内學名を有するものは三分の二余、即ち四十余种にして、殘餘の二十餘種は未だ不明の裡あり。故に此不明種の中には、或は新屬に屬するものもあらんと信せれども、知るに由なきを以てそは後來の研究を俟つ事となし、既知の種類に就て屬種の幾何を有するやを調査せしに、二十八屬四十二種を算し、之を二科に配分する時は、豆娘科には六屬九種と成り、蜻蛉科には二十二屬三十三種と成れり。然るに今米國昆蟲學者ハワード氏の著なる昆蟲書に記載されたる種屬を見るに、全く米國産種を含有するとは謂ふ可からざるも、記載しある所の種類七十余种を算し、殆んど米國産の蜻蛉類に就ての主要を知得するに足れりと信すれば、今此七十餘種のものより邦産種の如く配分せ

ば、前科に屬するもの十一屬三十三種、後科に屬するもの二十三屬四十三種と成れり。素より邦産種の内には學名未知のものあるとは云へ、米國に産するものは種屬に於て邦産のものより多きを知るに足れり。然り而して此兩者の内、同種屬に屬するもの、如何を驗するに、同種と認知すべきものは只ウスバキトンボの一種あるのみ。屬に到りては八屬ありて、前科に屬するものにはハグロトンボ屬、アオイトトンボ屬、後科にはオニヤンマ屬、ギンヤンマ屬、トラフトンボ屬、ウスバキトンボ屬、ベツコウトンボ屬及サナヘトンボ屬の六屬となす。右の如く、屬に於ては多少同一のものありと雖も、それが種に到りては前掲の如くなれば、此蜻蛉類が如何に邦産と米産種との間に差異あるかは、明かき察知するを得ん。幸ひ當時研究所にては、之が邦産種の分布を調査せんとて讀者諸彦に標本の寄贈を請ひ、併せて種類の調査を爲さん爲め募集中なれば、定めて新種屬の發見もありて、更に其種屬の増加する事ならん。余は斯學界の爲め、有志諸君の助力あらん事を希望して止まざるなり。

(二) 米國の糖蛾類種屬 糖蛾類には、農作物に大害を加ふる處の彼の夜盜蟲の總てを包含するものゝて、獨り農業者のみならず、園藝なり、果樹なり、森林植物などにも發生して、往々非常なる慘害を來すものなれば、此糖蛾類中の種類に就きては、大ひに注意すべきものとす。本邦に於ては未だ確たる調査を経しものあければ、此有害種屬に付き難きも、當時研究所所藏の標本は數百種に達し居るより察すれば、亦其種屬の余り少數もあらざる事を豫想し得べし。曾て聞く米國の博物館に所藏さるゝ、此類に屬する種類は二千三百六十余を算すと、然れども此二千余種のものが全く米産のものなるや否やは知るゝ由あきも、米國昆蟲學者者ジョン、ビー、スミス氏の調査に係る、北米國の糖蛾類目錄に依れば、千六百四十三種と成り居れり。氏は此糖蛾類を三科に別ちて記述されたり。即ち第一にはスイア (Thya) ナリーデュー科 (Tiridae) を置き五屬十四種、第二はノクツイデー科 (Noctuidae) にして三百二十七屬千六百二十四種を包有し、第三はブレフキデー科 (Brepidae) と稱し二屬五種を擧げられ、屬の總數は三百三十四屬となれり。此類の中は多少害蟲を食殺する所の有益種を存すと雖も、そは實に微々たるものにて、其大部分は全く有害種に屬するを以て見れば、此糖蛾類のものゝみにても、米大洲に於て加害するの結果、生ずる所の損害額は實に莫大あるものあらん。

(三) 床蟲 床蟲 (*Acanthia tectularis*, L.) は亦ナンキンムシ、チンダイムシなどを稱して、吾人の血液を吸収して苦惱せしむる所の有名なる害蟲あり。我國にては普通に見る事難く、鎮臺等に於て往々發見す

るのみあり。然るに米國、特は余の目下滞在し居る加利福尼亞洲に於ける發生の狀態を調査し見れば、其發生の區域は、殆んど全洲に涉りて蔓延し居るの有様なり。去れば加洲中、西に、東に、將又南に、北に旅行されし人々の談話に依れば、何れも旅宿にて之が侵害を蒙り、苦惱せしむる事ありと謂へり。現に去る七月下旬の事なりき、加洲の内南方にて、有名なるロース、エンジェルズ市地方へ旅行されし余が知人の言に依れば、該市に一夜の宿泊をなし、寢床に就くや、間もなく頭部なり、足部なりを何にかムツ／＼なま如く感ずる間に、一二ヶ所を刺撃されたれば、早速之を驗せしに、豈に圖らんや彼の恐るべきトコジラミにてありければ、こはたまらじと、寢臺なり其周圍の板張りなる壁を見れば、無數の彼れ惡むべき害蟲は、板間の間隙より自身の寢臺に來り攻撃せん有様なりしかば、旅中の疲勞を癒せんとして宿りに、若し此儘よせんか、到底安眠をなし疲勞を癒し難しと思ひ、宿主に告げて他宿を轉せしに、亦該蟲の棲息し居りて侵害を蒙りたり。然れども最初の如く其數多かゞざりしかば辛棒をなしたりしも、其一夜は全く該蟲の爲めに安眠を爲す能はず、非常な苦みたりと。之を以て之を見れば、加洲中所に依り如何に該蟲の繁殖が旺んにて、吾人人類に害を加へ居るかを察するに足らん。而して桑港に於ては如何と云ふに、是亦該蟲發生各所にありて、病院を始め、下等の旅宿などには常に發見され、我同胞の内よも之れが侵襲を受け、苦しまるゝもの少かかゞざる有様なり。右の如くにて該蟲の刺撃する所は、人躰中頭頸部、手部及び足部等は重なる部分にて、胸腹部に到りては余り侵害せず。多くは前掲の三部にして、何れも刺撃を受けし個所は脹れを生じ、甚しきは一種の腫物様を呈するに到れり。るも此三部に刺害多きは、該蟲の潜伏場所より匍ひ出で、刺撃するに適し、追はれば又直ちに潜伏に便利なるに因由するものゝ如し。故に察するに、此種の人身を侵害する狀態は、恰かも苗代時代に稻苗を害するキリウジカガンボの幼蟲キリウジが加害の狀態と類似するやの感あり。

◎六足蟲彙纂 (申の卷)

在東京 長野菊次郎

(二十一) 氣管の大きさ 昆蟲躰の側部に開ける氣孔は氣管の門口にして、氣管は躰内各所に於て網の如く分枝し、其先端に至りては其直徑一ミリメートル(三厘三毛)の三十分の一乃至六十分の一に至ると云へり(ケンブリッジ博物誌)。

(二十二) 蝶と蛾との産卵の差異 蛾類は卵を産するは、通例一所に群集せしむる傾きあり、是に反し

蝶類は通例一個づゝ産卵するものなり。特ニ蛾は羽化の後直に交尾して産卵を始むるを以て、之を捕獲して産卵せしむること容易なり。然れども蝶類は比較的長時間に渉りて産卵するを以て、之を捕獲して産卵せしむること甚ゞ困難なりとす(ヂッケルソン氏蝶蛾書)。

(二十三) 昆蟲ニ對する花の進化 地質學者の説をして信ならしめば、地球の歴史上、一度植物が昆蟲の食物とならざりし時あるべく、又花より花に花粉を傳搬するに、昆蟲の力を借らせしめて風の媒介によるか、又は自家受粉を營みたる時期ありしなるべし。蓋し顯花植物の出現は昆蟲の出現よりも早ければなり。抑風は花粉媒助の役目を果すには、甚だ浪費的の使者にして、僅か一粒の花粉を適當の場處にるだゝ、數千粒の花粉を散せざる可からざるあり。扱地質時代の經過ニ從ひ、最初出現したる昆蟲は下等のものあるが、此等の或る者は、食物に適せる或花の花粉を見出して之を舐食したること、恰も今日の風媒花が往々昆蟲の訪問を受くるが如きこと有りしならん。かくて此等の花の或者が、柳の如く漸次昆蟲媒花となり、或は最初微小かりしものや、綠色を帯びたるものや、又は自家受粉ありしものが、時々昆蟲の訪問を受くるに從ひ、遂に他家受粉を營むに至りしなるべし。然るに他家受粉の子孫は、自家受粉花の子孫よりも強壯ニ生育して、生存競争に勝を占めたりとすれば、植物は漸次ニ變化の傾向を周圍よりも一層顯著となることに及ぼし、以て昆蟲の訪問を受くるに恰適して他家の花の花粉を俟つゝ至るべし。大勢此の如くあれば、植物の變化は已の生存上專ら顯著となることニ傾きて永續し、遂ニ雄蕊變トて萼とあり苞となりて華美の色彩を現はすに至り、以て生存競争ニ適應するの目的を達したるなるべし(ウキード氏ニユー、エングランドの十花、ウキード氏昆蟲世界より)。

◎昆蟲に關する隨感隨筆 (第三回)

昆 蟲 翁

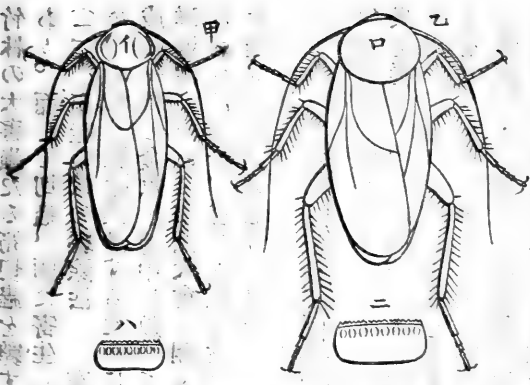
(十六) 蟻螂驅除法

梅原寬重翁の著書、續田圃驅蟲實驗録中に、蟻螂驅除法と題して『蟻螂は植物の

大害をなさいる者の如しと雖又柞蠶を害すると甚し、此蠶蠶の發生より結繭までを害する者なれば捕殺を怠るべからず。但該卵子は小さき燒獣のやうなる者の中にあり、之を除くハ冬春の頃其卵巢を探りて燒殺すを尤良法とす』とあり。元來害蟲益蟲とは、何か一つの目的物ありて、是ニ對して害を與ふるの蟲類を害蟲と稱へ、其害蟲を斃す所の蟲類を益蟲と稱ふるなり。蟻螂も普通ニ於ては益蟲かれども、柞蠶、野蠶等の飼育者に對しては如何にも害蟲と稱すべきなれども、今蟻螂驅除法として卵塊迄燒殺する

は實に遺憾と云ふべし。此際蒐集したる卵塊を焼殺するとなく、他の方面へ移轉して孵化せしめば、如何に利益なるや知るべからざるなり。聊か感ずる所あれば特ニ茲に記す。

(十七)天田郡の天蛾類 京都府天田郡内に於て、採集せられし昆蟲標本數百種中におりし天蛾類を調査せしに、ベニスワメ、スワメガ、メンガタスワメ、エビガラスワメ、モリスワメ、シモフリスワメ、コスワメ、セスヂスワメ、オオシモフリスワメ、クルマスワメ、ウチスワメ、クチバスワメ、ピロウドスワメ、クロスワメ、オオスカシバ、スケバハウジヤク、ヒメハウジヤク、ロメクロウジヤクの十八種なり。然るにオオシモフリスワメの幼蟲は、梅樹の害蟲たるをも知れり。是迄所々に於て桃、李等にて大形の蠅を捕へたりと云へるより考ふれば、全く薔薇科植物に生ずるとを確知せり。又其幼蟲は一種の鳴聲を發すと云へり。



甲(甲)は(甲) 乙(乙)は(乙) 胸廣蜚蠊は(乙) 胸廣蜚蠊は(甲)

(十八)蜚蠊(ゴキブリ)の分布に就て ゴキブリ(又アブラムシとも云ふ)には種々ありて一種ならざるも、茲には只二種に就て其分布を示さんとす。甲種(ゴキブリ)に屬する者は、岐阜縣(全部)石川縣(鹿島郡鳥屋村西川豊次郎氏)、京都府(丹波國天田郡曾我井村菅沼岩藏氏)、(丹後國與謝郡山崎久藏氏)鳥取縣(東伯郡岡野庫八郎氏)又乙種(ムチビロゴキブリ)に屬するものは、愛知縣(三河國寶飯郡本茂村松倉まさ子氏)、(渥美郡牟呂村小柳津廣三郎氏)、静岡縣(志太郡豊田村増井林太郎氏)、千葉縣(長生郡鶴枝村林壽祐氏)、鳥取縣(西伯郡米子町三好徹次郎氏)、島根縣(那賀郡増田齡造氏)、徳島縣(勝浦郡多家良村本生良三氏)、大分縣(南海部郡上堅田村岩田秀太郎氏)宮崎縣(農事試験場竹井繁滿氏)にして目下の所甲種より乙種の分布を廣じとす。願くば續々標本惠送あらんとを請ふ。尙茲に甲乙兩種の區別を示さんに、乙は甲より大形にして、特に著しきは胸部第一關節の圓大なるに由り、是れムチビロゴキブリ(胸廣蜚蠊)の名の起る所以なり。

竹林の大害蟲たる筍切蟲を斃す所の寄生蜂は、本年特別多く發生して、殆んど害蟲を斃し盡したるの感あり。而して切蟲一頭に寄生したる蜂の最多數は百八十二頭、最少數は五十五頭なりと云へり。

(二十一) 布哇の蚊の驅除法 布哇の衛生局では、蚊の現存に依て起さるゝ健康上の危險と苦惱とを認め、これを驅除撲滅するため市民大會をホノル、市は開いた。驅除の方法は溜水は石油を灌ぐ事や、或る一種の金魚を池中に放つて其幼蟲たる子を食はしむるとや、蜻蛉を放つ事位であつた様だが、蚊群退治のために市民大會を開く位ざら如何に多數の蚊が居るかは想像されると、近頃の大坂毎日新聞に見へたるが、曾て昆蟲學者ゲーベル氏の本邦へ來りし際、澤山の蝙蝠を持ち販りしは、全く此の目的を達せんが爲めなりしと。

◎自然的害蟲驅除豫防趣意書

千葉縣 高橋 徹 一

害蟲被害の激甚なるは今こゝに贅言せず、其驅除方法として、既に本年實施したる、螟卵採取は頗る好果を奏し、殆んど遺憾なきが如し。然りと雖も彼の益蟲をして害蟲を捕食せしむる、所謂自然的驅除を利用して之れが豫防方法を講ずるの手段に至りては、未だ嘗て試むる所あらず。是れ恰も天與の賜ものを空しうするに等し。蓋し益蟲の絶へず害蟲を捕食し、直接間接吾人に益する偉功を考ふる時は、益蟲を保護するは即ち害蟲驅除方法の一端にして、仍ほ進んで、益蟲をして害蟲を捕ふるに便なる方法を設くることを、即ち其保護の主意を全ふする所以なり。既往を案するに、吾醫王山安樂寺に於て、昔より村民は配付する蟲除札は、水田の四隅に笹竹を立て、之に札を結びたりと傳ふ。抑此笹竹は、彼鳥類及び益蟲の害蟲を捕ふに際し頗る恰當の休息所といふべし。これ即ち佛陀の遺徳にして自然の妙法を利用する主意に冥合し、以て民衆の福利を計れるなり、古人の深意豈欽仰せざるを得んや。今や不幸にして其良法既に絶へ、驅除札は依然配付せらるゝも之れを利用するものなく、空しく笹底の紙片に畢る、是れ曾に古人の遺徳を空ふするのみならず、所謂天與に靠負するの懼れあり。今茲に蟲除札を配付せらるゝに際し吾等祖先の嘗て利益を受けたりしと傳ふ舊慣を復古し、之れを水田に建て以て人為的害蟲驅除法と、兩相待つて行はし其結果の更し著しきものあるや疑なからん。是れ吾人の本分として祖先の慣行を尊重するのみならず、又以て天與の福祉を享くる所以の道なり。村民幸々此意を體し、直ちに之を實施し、害蟲の殲滅を計らん事切望の至りに堪ざるなり。

因に記す、右は目下實行しつゝある事柄にして、本年四月村農會惣集會席上に於て、其悉信に陥らざる様懇篤口演すると共に、萬一を慮り此書を分布することゝなせり。

◎十一星瓢蟲の食餌に付て

静岡縣 岡田忠男

昆蟲の食餌に付て一定ならざるは、既に識者の認むる所なり。而して食餌に付ては、動物を食とするものと、植物を食とするものと有るの勿論にして、植物中單植物を食するものと、複植物を食するもの等ありて、世の進歩と共に開拓の事業進みに従ひ、從來原野なりし所も今は田畑と變じ、野生植物を以て食餌とせし處の昆蟲は、自然農作物に移轉して害を加ふるものなることは明かなる事實なり。殊に余が縣下に於て採集したる、浮塵子百九十余種中、山野に於ては野生植物に寄生するも、一朝開墾の時期に遇ひ田畑と變じ、稻桑の栽培を見るの土地に於ては、是等の作物に加害しあることは屢々見る所なり。

今茲に讀者に紹介せんと欲するは十一星瓢蟲にして、此の蟲に付いては已に昆蟲世界紙上は、植物を食する所の一害蟲なることを記載せられたるも食草に付ては不明の文字を以て滿たされたり。此頃、縣下伊豆地方旅行の際、同國田方郡伊東村柏峠に於て、去る九日路傍のカラスウリなる蔓草を見るに、瓢蟲の蠢動するを認めたり。依而直ちに採集の上調査せたるに、豈計らんや從來食草不明なりし此瓢蟲は盛んにカラスウリの新芽を食食しつゝありたるなり。故に此瓢蟲はカラスウリを食害するも、若し人家近く此害蟲の棲息することあれば、或は農家の栽培する處の瓜類を害するやも計るべからず、然れども余の採集せしは、人家を去る一里余の山腹にして僅かに三頭の少數なりと、聊か報導して以て十一星瓢蟲の食草を明かす所になり。(明治三十六年七月二十日旅宿南窓の下に記す)

編者云、名和先生の談に依れば、名和梅吉氏は此種の食草不明の由を記載されたるも、同先生に既に日光に於て、茄子科植物、葫蘆科植物等を食するものドリジョウオンを食食しつゝあるを採集せられたり。然らば即ち該種は他の擬瓢蟲の如く、茄子科植物、葫蘆科植物等を食するものなるべし。





◎博覽會出品害蟲標本並に調査解説書(三等賞)

新潟縣農事試驗場

一、稻の害蟲ニ化生螟蟲寫生圖 稻の害蟲ニ化生螟蟲及び寄生蜂の形態を圖解したるものにして、殊
 一、寄生蜂の如きは新たに發見したるもの多ければ、昆蟲學上利益する所あらんと信す。

二、稻の害蟲ニ化生螟蟲標本 飼育したるものを標本に製作し、學術上の便覽に供す。

三、明治三十三年三十四年三十五年三ヶ年間稻の害蟲ニ化生螟蟲經過發育式 稻の害蟲ニ化生螟蟲に
 付三十三年より三十五年まで三個年間、野外に於て研究したる、其發育の經過を見易からしめんが爲め

に表に示したるものなり。

四、三十三年三十四年三十五年三ヶ年間ニ化生螟蟲蛾誘殺數調査表 二化生螟蟲時期發生の多寡及び
 雌雄割合を知らんが爲に、三十三年より三十五年まで三ヶ年間誘殺蛾燈を以て調査したるものを表に示し
 たるものなり。

五、三十三年三十四年三十五年三ヶ年間ニ化生螟蟲蛾誘殺數對照表 其方法は第四と同じく、只發生
 の時期及び發生の多寡を比較するに便ならしむるのみ。

六、二化生螟蟲研究成績 新潟縣下に於て、稻の害蟲として最も其播布の區域廣く、從て被害甚ざし
 きものは二化生螟蟲なり。故に此蟲の形態、經過、習性及び豫防驅除の方法に就て研究したるものを編
 纂す。

七、蔬菜の害蟲サンシヨウ蟲寫生圖 蔬菜の害蟲サンシヨウ蟲の形態を圖解したるものなり。

八、蔬菜の害蟲サンシヨウ蟲標本 飼育したるものを標本に製作し、學術上の便覽に供す。

九、三十四年卅五年蔬菜害蟲サンシヨウ蟲經過發育式 蔬菜害蟲サンシヨウ蟲に就て、卅四年、卅五年
 の二年間、室内及び野外に於て飼育研究したる、其發育經過を見易からしめんが爲めに表に示した
 るものなり。

一〇、蔬菜害蟲サンシヨウ蟲研究成績、新瀉縣下は於て、蔬菜の害蟲として其被害甚だしく、又之が豫防驅除に困難なるものはサンシヨウ蟲なり。今此蟲の形態、經過、習性及び豫防、驅除の方法に就き研究せたる成績を編纂す。

沿革 明治卅二年四月本場は植物病蟲研究室を設け主任一名、助手一名を置き専ら縣下重要農作物の病蟲類を研究し、之れが豫防、驅除の方法を講ず。設立以來、茲より四年、其間研究せたる昆蟲類、害蟲驅除豫防に關する調査研究等尠ならず、或は報告に、講話に、或は標本調製に務め、爾來益々之が研究は怠らざらんことをす。

審査請求主眼 稻の害蟲に専ら二化生螟蟲に就て研究せり。其豫防驅除法は就ては、之を實行するに當て、數理上未だ正確なるものなきに由て、卵數、莖内生蟲數、被害の程度等調査に重きを置き、又天然力の効果を明にせんが爲めに、寄生蜂の研究に力を盡し、遂に六種を發見するに至れり。蔬菜の害蟲は専らサンシヨウ蟲に就て研究せり。從來其經過は不明に屬し、豫防驅除の良法なかりしが、本場に於ては其飼育方法に就き種々苦心の結果、今や其經過稍明かなるに至れり。驅除法に於ても亦良法を得着々實地に應用し、其効果を奏したり。猶ほ今後果樹の害蟲に就て十分研究せんと欲す。其他標本、寫生圖、統計表は昆蟲學上の思想を起さしむるに最も必要なり。其意匠配合等審査あらんことを請求す。

◎博覽會出品害蟲標本解說書(三等賞)

静岡縣 神村直三郎

予は第五回内國勸業博覽會第一部第八類に害蟲標本拾箱を出品せり。これに添付したる解説書は當局者より簡單に記載すべき様の注意ありしを以て節略して大要のみを差出したれど、讀者の參考に其原稿を掲載せんと名和昆蟲研究所長の請求に應じ、予が手扣を茲より淨書して本誌に載するとはなしぬ。

解説書

部	類	番號	品名	出品人
一	八	一	害蟲標本	神村直三郎

静岡縣磐田郡岩田村

神村直三郎

一、出品の種類及員數 種類は害蟲標本として、害蟲合計一百二十四種、其敵蟲二十二種あり、これが細別左の如し。

害蟲		種類	成蟲	卵	幼蟲	蛹	繭	更に		害蟲		成蟲	卵	幼蟲	蛹	繭
鱗翅目	五〇	五〇	五〇	五	一八	一七	三	こ	こ	鱗翅目	一〇二	五	一	一七	一四	
鞘翅目	三七	三七	三七	二	四			に	に	鞘翅目	七四	二	九			
有翅目	二五	二五	二五					が	が	有翅目	〇四					
直翅目	二七	二七	二七					れ	れ	直翅目	四					
雙翅目	二	二	二					個	個	雙翅目	四					
膜翅目	三	三	三					を	を	膜翅目	五					
合計	一二四	一二四	一二四					數	數	合計	二四九	七	二	一	一四	
敵蟲	二	二	二	七	三	一	三	別	別	敵蟲	四	七	四	一	七	四
寄生蜂	一六	一六	一六					す	す	寄生蜂	二四	卵	幼蟲	蛹	繭	
寄生蠅	一六	一六	一六					ば	ば	寄生蠅	九					
合計	二二	二二	二二					れ	れ	合計	三三					

一、採集地 本村の害蟲を世間に紹介して、傍ら斯學者の參考に資せんが爲め、専ら予が居村即ち静岡縣磐田郡岩田村に於て採集し、他の採品をば一も加ふることなし。本村所在は東海道の官道を北に距る一里半、天龍川の東岸に位して田圃あり、山林あり、堤塘あり、砂磧あり、沼池あり以て諸種の昆蟲を採集するに便あり。

一、採集法及器具 予が採集法としては掬網法、篩網法、叩網法、石起法、皮剝法、草分法、燈誘法、糖誘法、探操法、陥落法の十法を用ふ。

其一、掬網法は要する器具は圓形捕蟲器なり、これは寒冷紗の袋に鉞力の柄を附したるものにて、花上葉間に在りて跳躍飛翔に巧ある昆蟲即鱗翅類、ウシカ類、膜翅類、蟬類等捕ふるの法なり。

其二、篩網法は塵芥中の小甲蟲及ガメムシ等捕ふるに用ふ。其用具としては、普通の篩の如きものは麻袋を附したる篩網を用ふ。

其三、叩網法は於ては、方形捕蟲器を下に受け、杖を以て草木の枝葉を打ち、金龜子類、ハムシ類、ゾウムシ類の葉上に居るものを捕ふ。

其四、石起法は重に冬期も行ふの法にして。甲蟲、ガメムシ等の石下に潜伏するを捕ふ。

其五、皮剝法は枯木若しくは立木の皮を剥きて、其中に潜伏せる甲蟲類の幼蟲、成蟲及ガメムシなどを

を捕ふ、この法も冬期に於て利あり。

其六、草分法は畦畔堤塘等の枯草の根部を仔細に尋ね、甲蟲及ガメムシなどを捕ふ。

其七、燈誘法は夜間に蝶蛾を誘ふため林間に於て点燈し、燈火を慕ひ來て其近邊を飛翔するものを掬ひ捕ふるの法なり、これに用ふる燈は反射装置のものを可となす。

其八、糖誘法にて捕ふるものは、甲蟲及蝶、蛾、蜂類なり。此等が樹木の液汁を吸収する性を利用したるものにて、砂糖を揮發性の液体アルコールの如きものにて溶し、穀斗科植物の樹の腹に塗抹し置く時は、其香氣に誘はれて集まり來る、其際巡り見て捕獲するなり。夜間、燈を携へて其箇所を訪ふも亦獲もの少なからず。

其九、探藻法にて捕ふるものは水生昆蟲なり。其法は先づ麻布又は寒冷紗にて圓形捕蟲網より稍淺き袋を製し、之を長き柄の先端に付し、小流れの川若くは池沼の藻中を探るなり。又此袋に代ふるに極めて細き銅線を以て編みたるカナアミを用ふるも可なり。

其十、陥落法は夜間出歩くケラ、ゴキブリ等、其他夜盜蟲の幼蟲、ゴキブリ類を捕ふるため、畑の畦間若しくは路傍等適宜の處に廣口の瓶を埋め置きて陥落するを捕ふ。其瓶中に動物の死体、若しくはカボチャの内容等にも入れ置けば尤も妙なり。

右の諸法にて捕へたる昆蟲を殺さんには、一ポンド入若しくは半ポンド入の廣口瓶の底部に、苛酸加里を紙包よなしたるものを固定して口に密栓を施したる殺蟲瓶を要す。此中に投じて殺したるものは、携帶箱に収めて持歸るなり。携帶箱は輕かつしむるため桐を以て蝶番ひの箱を製し、其双方の底部に疊表二枚を合せたるものを敷き固着せしめたるものにて、死したる蟲をこれに針を以て刺し置くなり。幼蟲類を持ち歸るにはブリキ筒或は竹の筒を以て一器を作り、この中へ一頭づゝを入れ食草を入れて持ち歸るなり。又甲蟲の如きは、小形種は數多一の麻袋に入れて持ち歸ることあれど、大形種は手輕きグラス管若くは竹筒へ一頭づゝ入れ、密栓を施して持歸るあり。カンボの捕獲は其肢を損するの恐れあるが故に、以上の諸法にては捕へがたし。これは薄暮靜止するものを赤手にて捕へ、螢かこの如きものに入れて生かし置くなり。殺すときは製作に困難なればなり。

(未完)

◎三重縣阿山郡昆蟲通信

第八回全國畜蟲
驅除講習修業生

三重縣

西岡嘉十郎

(一)昆蟲研究擔當人の囑托 我が三重縣阿山郡にては、去る十二日附を以て、郡役所より左の諸氏に昆蟲研究擔當人を囑托したり。

山田村 岡島 文六 玉瀧村 中林 保藏 丸柱村 竹澤 善藏 東柘植村 橋本 豊松

壬生野村 居附兼三郎 新居村 西岡嘉十郎 布引村 廣田 仙吉

(二)昆蟲研究擔當人規程 一 郡内に於ける昆蟲の性質、形狀、經過等を研究し、以て益蟲の繁殖、保護、及害蟲の驅除豫防等も關し普及を圖ると。一 本擔當人は、其目的を達する爲め、左の事項を行ふものとす。(一) 郡内に於ける昆蟲の分布、經過等を調査すると。(二) 常に害蟲の經過に注意し、苟も發生を認めたる時は直に左の各項を郡役所及町村役場に通報のと。(イ) 害蟲の種類。(ロ) 害蟲發生の狀況。(ハ) 害蟲發生の町村大字。(三) 害蟲の被害を認めたる時は之に對する驅除の方法を講究すると。(四) 常に便宜の場所に於て昆蟲に關する講話をなすと。(五) 實業者の質問に應じ、又は官廳の諮問に對ふると。(六) 前各項の外斯業研究に關し必要と認むる事項。

(三)昆蟲研究擔當人會協議事項 昆蟲研究擔當人會を去る十四日午前八時より郡役所内にて開會せしが、其協議事項は左の如し。

第二回螟蟲よ就て 一 點火の本日より八月末日迄施行のこと、但、狀況により九月月上旬に亘るとあり。一 點火中は記録を製し、天候、蛾數、胎卵蛾數の歩合等を日々記入し、最終に至り報告のと。

一 點火の装置は付一般の狀況を調査すると。一 枯莖切り取りの期節を誤らず實行の模範を示すと

一 幼蟲の經過に注意すると。一 寄生蜂及病菌蕃殖の狀態を察すると。一 其他必要な所見を記録し置くこと。

浮塵子の發生に就て 一 始終發育經過の狀態を察すると。一 發生を認めたる時は、時期を逸せず、局部に於て驅除をなさしむるの方法を講ずると。一 齡期の別、發生の多少、及稻の發育期等に關し被害の異なる點。一 驅除の方法又は施行の時刻に依る成蹟の良否並に作物に及ぼす影響。

(四)農事試験場擔當人會の協議事項 去十三日開會の同會協議事項中、害蟲に關するものは左の如し

一 螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと(本期の螟蟲は初期

に於ける發蛾の状態に反し或は多からんも計り難し。一 螟蟲被害の枯莖は初期(蔓延せざる内)も切り取る可き。一 浮塵子發生の調査に留意すること。(本月二十四日頃より九月中旬に至る期間にあらん。

(五)浮塵子の發生 當郡下野町、府中村、三田村にては、昨今に至り浮塵子(種類鬚丸)三化期二三齡のもの夥しく發生したれば、直ち之れが驅除を行ひたり。尙又新居村にては(種類稜黒、電光)發生し、直ちに驅除を行ひたり。

(六)害蟲驅除講習會 當阿山郡役所の事業として、今回害蟲驅除講習會を各町村に於て開設し(壹週間)、講習生は修業証書を授與する筈にて、晚くも本月中には二三ヶ村も開會する都合なり。而して右講師は、郡農事巡回教師橋本逸次郎氏其任に當らるゝ由なり。

◎長野縣北安曇郡の昆蟲方言續報

長野縣 帶刀喜市

本誌前號に於て當地方の昆蟲方言を報告し置きしが、其後尙聞知したるものを報せんに○衣魚をキラムシ○トビムシをアマムシ○殺象をコメムシ○一文字セ、リの幼蟲をツトムシ又はタハラムシと云ひ○ツナスガリをスガレと云ひて幼蟲を食す○黃足長蜂をメバチと云ひ○蜜蜂をクマノヘボと云ふ○鍬形蟲の雄をヨシツチ、同雌をダルマと云ひ○ヤママユの繭をアラ○柞蠶の繭をアカと云ふは其色による故ならん○ハルセミをマツムシ○ミヅスマシをシシマハシと云ふ○水龜蟲も龍龜も區別なくゲンゴラウと云ひ○タガメムシをカツバ○コオヒムシをヤモメムシ○プトをブユ又はブヨ○シホヤアブをハチアブ○ヒメアブ及びメクラアブをウルリ○蛹をゾホ又はドケフ○シラミを觀世音様○茶柱蟲を障子蟲又はハタオリと云ふ○馬追蟲をスイーチヨと云ふはやはり鳴聲より起りたるものにして○横蚊をウンカと云へるは何處も稱ふることにして余り異りたるにはあらざらめ。

正誤、前號に於てヤマムシとせしはヤマカマスの誤なりしにつき茲に訂正す

編者云、ツナスガリをスガレと云ひ幼蟲を食す、さあるはサバチのことにあらざるか、此類の幼蟲を食することは地方により中々盛なるものなり。



●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解説書 (前號の續き)

第四、出版物

一、薔薇之壹株昆蟲世界 明治三十年一月開版以來、每版二千部乃至五千部を印行し、遂に第六版を重れり。是は當研究所の主眼とせる、斯學普及の目的を貫徹せんが爲に編述せしものに係る。即ち各種講習用の教科書に充て、又諺話の材料を得せしめんが爲なるを以て、全篇簡潔の通俗體を用ゐたり。而して其結果頗る需用の多きのみならず、近年又之を幻燈種板に製作せし者あるに至れり云ふ。(添出品第一號)

二、昆蟲世界 斯學界の機關として、明治三十年九月第壹號を發刊し、爾後毎月發行を重れ、昨三十五年十二月を以て第六十四號に達せり。而して其目的及び其効果の如何に至りては、特に説明するの要なかるべきを以て之を省く。(添出品第二號)

三、害蟲圖解 一般農家及び學生等の昆蟲思想を養成せんが爲に、明治三十年始めて其第一號を發行し目下正に第二十號に達せり。是は岐阜縣に於て管内の各級農會、小學校、警察署等に頒布せしのみならず、其他の府縣に於ても廣く之を採用して教育農事の參考に供せしが如し。將來第百號を發行するの日を以て之が終期となさんとす。(添出品第三號)

四、貝殼蟲圖說 明治三十四年の出版に係り現に再版を重れり。是は昆蟲學上の調査を記述し、更に進んで海外輸出品に對する損害を救濟せんが爲めに公行せるなり。即ち卷首に其大意を明記せしを以て詳説を缺く。(添出品第四號)

五、通俗益蟲集覽 諸害蟲の國家に對する害毒は之を知る者多きも、未だ益蟲の保護を知らざる者多きを認め、其急に應ずるの手段として先づ此書を公にせしなり。將に第二輯第三輯をも續出せんとす。(添出品第五號)

六、日本昆蟲分科表 邦産昆蟲名稱を一定するの初階として之を刷行し、中に蟲名四百有餘を網羅せり、蓋しまた未だ斯種の出版なく初學者の不尠なからざりしに依る、是亦既に第二版を發行せり。(添出品第六號)

七、第一回全國昆蟲展覽會出品目錄 斯書は全國昆蟲展覽會の成績報告書に兼り、昆蟲叢書第一編として發行せしものに係る。而して其目的は蟲稱一定、分布調査の先驅たるにあり、蓋し斯種の出版は本邦に於ける嚆矢となすべき歟。但し其内容に至りては事頗る冗漫に渉るの嫌あるを以て茲に細説を缺く。(添出品第七號)

第五、昆蟲分布并に種屬調査の開始

昆蟲の地理的分布并に其種屬調査の必要なるは恰も人類に於ける戸口調査のそれと同じく、其明晰ならざらん間は得て斯學の促

進を期すべからず。當研究所夙に其緊急事業たるを認め、創立以前より勉めて力を此方面に傾注し、先づ機關雜誌を以て歷次各地に於ける通信報告の途を開き、又退きては之を所員の實行に求め、今や蒐收の種屬部で六七千種に達せりと雖、之を完成するは實に容易の業にあらざるを信じ、更に去る三十二年より此を以て所務の首腦に置き、邦産蟲種の分布及び種屬調査を以て調査部唯一の任務となし、事業開始の第一着として三十三年より全國昆蟲展覽會開催の計劃を立て、之を三十四年の春季に開き又三十五年二月には岐阜縣昆蟲學會へ接護を與へて岐阜縣冬季昆蟲展覽會を開き、此際蟲類原簿を調製し併せて原圖の整理を圖り、漸次銜銖積累の功を收め、既に略ぼ蝶類、天蛾類、蜻蛉類を集成し、目今他處に於ける調査を繼續するを以て向後十年を経なば邦産蟲種の約半數は之を登記し得べき豫定なり。而して其方法の一斑を記せば、當所に所藏せる約二十万頭の昆蟲標本に就きて、形狀、色彩の中庸を得たるものを擇び、之に採集地、採集年月日、採集人名等を記入し、後更に之を科屬別に保存函に移し、纏て其品種を原簿に載せ又原圖をも作らしむるにあり、即ち一頭の昆蟲と雖も前後五七日を費すにあらざれば完了するに至らざるもの往々之あり、其煩勞蓋し意料の外に出づ。而して材料蒐集の方法は、全國各地に四千五百餘名の講習修業生を有し尙且つ幾多の所友を有するが故に、或は其地特産種の寄贈を乞ひ、或は彼我採集品の交換を望み、斯くして漸次其區域を擴むるに怠らず、又兼て各地小學兒童の採集品を有力の一材料となせり。他なし方今未だ良好の蒐收方法無きに依る、即ち今回出品の分布圖(添出品第九號)は既成の局部にして鱗翅目鳳蝶科に屬する十三種を擧ぐるものとす。是れ固より一端に過ぎざるも、他年一たび本調査の成功するに至らば斯學の進歩は拭目視るに足るものあるべきを信ず。今之が一例を桑樹の害蟲系引葉卷蟲に求むれば、該蟲は其始め岐阜縣飛驒國大野、吉城の兩郡に發生の報あり、後滋賀縣近江國高島、阪田、東淺井等の各郡にも發生し、特に阪田郡伊吹山麓の桑樹に於て常に棲息するを目撃せしを以て、或は岐阜縣美濃國に屬する不破郡亦該蟲の加害を見るに非ずやと思惟し、去つて細かに之が調査を加へしに、果して其發生を確認しき、而して該蟲は尙美濃國揖斐郡坂内村にも發生するより其山西に當れる近江國東淺井郡に於て明かに移殖の理を示し、又福井縣若狹國三方郡十村に發生の種は近く近江國高島郡と系統を同うせるとを證し、富山縣婦孺郡に發生のものは其隣地飛驒國吉城郡のものと分布の本源を一にするを知らしむ。夫れ斯く岐阜、富山、滋賀、福井の四縣下に發生するに關らず、唯久しく石川縣下に於てのみ之が加害を聞かざりしを怪みしに昨三十五年一月同縣能美郡小松町へ出張講習の際、詳密の見聞を遂げたる結果、前舉四縣の發生地に隣接せる白山脈の山麓一帯の地には多く之あることを確證せり。則ち此結果を以て弘く他に及ぼす時は分布より來る所の利益は實に多大にして其効や彼の軍用地圖と同じく、居ながらに研究及び驅除の方策を計畫するに足るべきものあるを知るなり。現に近年京都府天田郡地方に於ける桑樹大被害の同じく此蟲の發生に外ならざることを確め得しが如きは、抑も分布調査より來れる推測の賜のことも謂ふべき哉

第六、巡回講話並に講習

從來各府縣の請託に依り當研究所の關係せる巡回講話には其性質數様を含み、一府縣又は一郡下の數ヶ處に開會せるあり、又は

一ヶ處に限れるあり尙年々之を繼續せしものすらある等、其施設格別なりしも明治二十八年來過去八年間に招聘せられしは岐阜縣を始とし愛知、靜岡、長野、千葉、茨城、宮城、富山、福井、京都、奈良、大坂、和歌山、岡山、廣島、山口、鳥取、大分等の十八府縣にして、其回数はおそむるに餘れり。

昆蟲に關する講習も亦其會期の長短、科程の高低自から二三種に區別し得べし、就中當研究所の主催に係れる全國害蟲驅除講習會は既に十四回繼續の末、三府四十三縣より七百二十一名の修業生を出し、其他岐阜、愛知、靜岡、長野、千葉、福井、鳥取、島根、岡山、山口、大分、香川の諸縣に於て縣事業又は郡事業として縣農會、郡農會、縣教育會、郡教育會等の名義を以て開設せしもの、即ち其會期の五日間乃至二十一日以内の講習に關係せしは實に五十回に及び、其修業生約三千八百名を算するを以て目今全國に四千五百十八名の修業生を有せり。而して其細別の如きは、參考を以て提出せる雜誌昆蟲世界第四十二號並に第五十三號に統計表を掲出せしを以て茲に略す。

一、褒賞

- 一、明治二十三年第三回内國勸業博覽會に昆蟲標本を出品して有功一等賞を授與せらる。
- 二、明治二十六年コロンボス世界博覽會に有害蟲類標本三拾國を出品して優等賞を贈與せらる。
- 三、明治二十八年第四回内國勸業博覽會に模範六足蟲標本を出品して進歩一等賞を授與せらる。
- 四、明治二十九年大日本農會より綠白綬有功章を贈與せらる。
- 五、明治三十一年農商務大臣より應用昆蟲學に於ける功績を賞し褒詞並に金員を授與せらる。
- 六、明治三十三年佛國巴里に開設したる千九百年萬國博覽會に昆蟲分類標本二十四國六百十六種を出品して銀賞牌を贈與せらる。
- 七、明治三十四年全国教育品共進會に教育に關する寫生用昆蟲標本(添出品第十號)其他一點を出品して賞狀二通を得たり。
- 八、明治三十四年五月十四日昆蟲學の普及發達に盡瘁の故を以て 勅定の藍綬褒章を下賜せらる。

一、審査請求の主眼

一、名和昆蟲研究所設立以前の研究經營に係る事蹟及び其成果。

二、今回出品の昆蟲標本は冬季採集蟲類の局部に止まるも、明治十四五年以來屢次其利益を唱道し、遂に昨年に至りて之を一縣下全縣に實行せしめ、昆蟲越冬の状態を公示して解惑啓蒙に勉め、又之が爲に鞘翅目、脈翅目等には從來固信せる學說と相違の點あることを證示し得たる事蹟。

三、名和昆蟲研究所設立後、全國三府四十餘縣に涉り四千五百餘名の講習修業生を出したるを以て、多少學術の研鑽に裨補し及び國家經濟上に貢獻したる事蹟。

四、定期臨時に出版物を刊行し特に世に未だ多からざる蟲類原圖を調製發表して新學思想の普及伸張に資せしめたる事蹟
 五、數年前より主として邦産昆蟲の地理的分布及び種類調査の須要なるを首唱して獨力全國昆蟲展覽會を開設し、尋て又其調査事業を實行して今や其一部を成功し得たる事蹟。

六、當昆蟲研究所抱持の意見にして已に著々世に採用せらるゝもの多く、特に小學兒童利用説の如きは殆んど全國に普及し、又害蟲の驅防は培根固抵にありとの意見の現に當路者に納れられて各府縣へ訓示せらるゝに至りし等の事蹟。

七、古來錯雜の蟲稱を一定するの段階を作爲し、及び邦産蟲種の約四分一は之を蒐收して弘く學者研究の便に資し、又一般世人の爲に陳列館を常設して見學の用に充てしめたる事蹟。

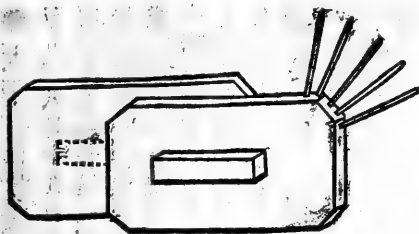
八、使用者の程度に相當の昆蟲標本各種を頒ちて學校教授用及び農事説明用に供したるもの多きを以て、今や實物教授の實を擧げ併せて害益蟲の發育を知れる者を増加せしめたるの事蹟。

九、害蟲驅除、益蟲保護に關する器械を創製し、標本製作法の新式を案出し、及び各種の寄生蟲種を發見して除害攻學の便益を與へたる應用昆蟲學上の事蹟。

●苞蟲の發生と其驅除器

苞蟲は成蟲をイチモジセ、リと云ひ幼蟲をハマクリムシ、ツトム

シ、カジムシ、コウジウ等と稱し又豊年蟲とも云ひ「カジかまふな、驅除するよりも俵あめ」など稱し此蟲の發生するを却て喜ぶ地方あり、これ該蟲は本年の如き温度高く、稻の生育宜しき時は其發生多きが故あり。然しながら斯る事に迷はず進みて驅除せば一層の豊年を來すべし。飛驒國地方にては其發生非常多く従て其害も甚しければ誰一人として驅除せざるものなきに至れり。即ち其方法は(甲)圖に示せる如き長六寸、幅三寸許の四分板様のもの、中央に長方形の手を附けたるもの二個を造り、又一方の隅に數本の竹串を打ち附けたるものにて、之を打ち合せて潰殺し櫛様の處まで稻葉を梳り綴りを解くあり。而して該蟲の發生せし時は之を打ち鳴して驅除するは非常に盛んなるものありと云ふ。此地方にては該蟲を



(甲)圖の器除驅蟲苞

コウジウと稱し、此器をコウジウバンバと稱すと又(乙)圖は細き棒と竹管を貫きたる者にて、稻を挟み扱き上げて潰殺するものなり。こは岐阜縣の農政家大畑市太郎氏の考案なれば大畑潰殺器とも云ふ。



苞蟲驅除器の圖(乙)

●天田郡昆蟲學講習會景況

京都府丹波國天田郡福知山町高等小學校に於て同郡農會主催となり、八月十九日より十日間、當名和昆蟲研究所長を聘し昆蟲學講習會を開設せり。今其模様を少く記さん。講習員は郡内小學校教員並に實業家等百數十名にして午前八時より十二時迄は昆蟲學大意、害蟲驅除並に益蟲保護法、昆蟲採集、製作、保存法等専ら講話に屬し、午後は一時より四時迄野外實習、或は已よ各學校にて集めたる二百餘箱の昆蟲標本を對し種屬を分類し或は名稱を附し、又は時として夜中糖蜜採集をなす等専ら實地練習に従事せり。修業証書授與式は十八日に舉行せられ、其証書を得たるものは一百三名にして内二名の女子ありたりと云ふ。而して從來の出張講習は普通五日若くば七日間にして、一個所十日間の講習は未だ曾てあらざりしと云へば定めて好結果を得たりと云ふと信ず。

●氷上郡の同窓者會合

兵庫縣氷上郡内よは全國害蟲驅除講習修業生は十八名の多數あるを以て、去る八月廿九日同窓者の打合會を催されたるに付當名和所長は福知山町よりの歸途、同郡柏原驛に下車して同會に臨まれたるが、當日は尙此他に町村長、小學校長、農會長其他有志者等凡そ二百餘名の集合ありしかば、名和所長は二時間餘より亘り害蟲驅除に關する談話を試みられ、非常に盛會なりしと云

●第十六回全國害蟲驅除講習生氏名

同會の概況につきては、講習員實に百名に達し甚だ盛會ありと其會員の熱心あることは、既に前號に於て略ぼ報じ置さしが、尙開期中よは害蟲驅除管督員

牛村技師及第十四回全國害蟲驅除講習修業生西川豊治郎氏の講話等あり、特よ所友長野菊次郎氏は科外講話とて花と昆蟲の關係よつき數回の講話を試みられたれば、從て各自の得し處は多かりすと信ず。其修業証書の授與式は十四日午後より舉行せられ、來賓には吉田岐阜縣參事官を始め縣屬、縣農會理事等よして、席定まるや名和所長の証書授與及訓諭、來賓の祝詞及び修業生總代の答辭よて式を終り、後研究所より茶菓及び紀念品の贈與ありて全く閉會を告げたりしが、修業証書を受領せしものは左表の如く一百名中九十八名ありき。(表中○印は中途退會△印は欠席)

別組	府縣別郡市名町村名	氏族籍	役名	氏名	生年	履歴	摘要
第一組	岐阜縣土岐郡餘戶村平民	小川比治	組長	小川比治	明治十六年一月	岐阜縣師範學校四年生	
	靜岡縣庵原郡由比平民	小川比治		小川比治	明治十六年十一月	大日本柑橘會幹事由比町農會會長	
	滋賀縣蒲生郡馬淵村平民	小川比治		小川比治	明治元年十一月	郡教育講習會修業、小學校教員勤務中	
	德島縣名東郡上八万村土族	小川比治		小川比治	明治九年二月	陸軍歩兵少尉、小學校教員勤務中	

<p>組五廿第</p> <p>京兵福香 都庫島川 府縣縣縣</p> <p>京多伊木 都紀達田 市郡郡郡</p> <p>上雲長林 京部岡 區村村村 平平民民</p> <p>組長</p>	<p>組四廿第</p> <p>京滋群香 都賀馬川 府縣縣縣</p> <p>南蒲勢木 桑生多田 郡郡郡郡</p> <p>千武富三 歲佐士少 村村村村</p> <p>組長</p>	<p>組三廿第</p> <p>京群鳥富 都馬取山 府縣縣縣</p> <p>南勢日下 桑多野新 郡郡郡郡</p> <p>保富印入 津士賀善 村村村村</p> <p>組長</p>	<p>組二廿第</p> <p>三香岐靜 重川阜岡 縣縣縣縣</p> <p>員木惠濱 辨那名 郡郡郡郡</p> <p>丹牟武河 生禮並輪 村村村村</p> <p>組長</p>	<p>組一廿第</p> <p>京青香三 都森川重 府縣縣縣</p> <p>乙上木名 訓北田賀 郡郡郡郡</p> <p>新七奧藏 神方鹿持 足町村村</p> <p>組長</p>	<p>組十二第</p> <p>岐富愛三 阜山知重 縣縣縣縣</p> <p>武下額員 藝新田辨 郡郡郡郡</p> <p>神石坂梅 淵田崎戶 村村村村</p> <p>組長</p>	<p>組九十第</p> <p>鳥岐香京 取阜川都 縣縣縣府</p> <p>日武三南 野儀豐桑 郡郡郡郡</p> <p>渡上紀千 有伊代 村町村村</p> <p>組長</p>	<p>組八十第</p> <p>香福三愛 川井重知 縣縣縣縣</p> <p>三教員西 豐賀辨春 郡郡郡日</p> <p>大松山豐 見原鄉場 村村村村</p> <p>組長</p>
<p>△△ 松安菲能 田井澤野 7瀧孝吉 サ藏耶次</p>	<p>小岩關真 川越口柴 初彌喜太 耶耶重耶</p>	<p>村羽西室 上烏子子 義太善次 一平藏耶</p>	<p>富小樋大 田西田塚 覺一玉安 輔夫治耶</p>	<p>岡米國河 本內宗村 亦山繁甚 三一太七 耶耶耶耶</p>	<p>平宮鈴遠 田崎木藤 桐吉雄 三之助助 耶助助晉</p>	<p>川杉石侯 上山川野 上吉延 榮三榮次 治耶藏耶</p>	<p>長龍中寺 尾頭津町 嘉原三 入助耶讓</p>
<p>明治三年十一月 明治四年五月 明治五年八月 明治十六年三月</p>	<p>明治元年十二月 明治十年七月 明治十四年三月 明治十六年三月</p>	<p>明治元年九月 明治十九年八月 明治十四年四月 明治十六年三月</p>	<p>明治五年三月 明治九年五月 明治十六年九月 明治十四年五月</p>	<p>明治五年十月 明治十二年三月 明治十六年十一月 明治十六年三月</p>	<p>明治元年十二月 明治十三年十月 明治十四年十一月 明治十四年十一月</p>	<p>明治十一年八月 明治十一年七月 明治十一年七月 明治十三年十月</p>	<p>文久元年二月 明治五年九月 明治十六年六月 明治十六年六月</p>
<p>陸軍步兵伍長、村役場書記勤務中 高木小學校卒業、農業ニ從事ス 高等師範學校、植物專習科卒業、中學校教員 師範學校卒業、小學校訓導勤務中</p>	<p>陸軍豫備上等兵、村役場書記勤務中 農業學校別科卒業、小學校代用教員勤務中 農事講習會卒業、農業ニ從事ス 府立農學校卒業、農業ニ從事ス</p>	<p>害蟲驅除講習會卒業、農業ニ從事ス 農種講習會卒業、小學校代用教員勤務 農學校修業、農業ニ從事ス 農學校修業、農業ニ從事ス</p>	<p>師範學校第一類講習會修業尋常小學校訓導 大川郡養蠶傳習所教師、實業ニ從事ス 高等小學校卒業、農業ニ從事ス</p>	<p>尋常小學校訓導兼校長 農事講習會所修業、奧鹿村農會會長 青森縣畜產學校卒業、同校助手勤務中 京都府農學校書記</p>	<p>高山社養蠶傳習所卒業、村長勤務中 農事教育講習會卒業、村役場書記勤務中 富山縣農學校卒業、村役場書記勤務中 師範學校卒業、小學校訓導勤務中</p>	<p>陸軍步兵少尉、南桑田郡農會技手 師範學校卒業、高等小學校訓導勤務 數理專修學校卒業、郡吏員勤務中 簡易農學校卒業、農業ニ從事</p>	<p>元郡會議員、西春日井郡書記勤務 中學三ヶ年修業、農業ニ從事ス 農業補習學校長兼訓導 師範學校卒業、高等小學校訓導勤務</p>

●講習會と五分間演説

當所に於て開催する害蟲驅除講習會は器具の貸與、研究上の便利を謀り四人を以て組を編成することゝなれるが又其一組は成るべく相遠ざかる縣人を以て組織せり。こは他縣は事情を談合せしめ互に智識の交換をなさしむるに止まらず、會員間の親睦を謀り、害蟲の驅防上に於ける一國の輿論を喚起せしむる上に於て大に利益あるを認むればなり。而して又講習閉會前より於て會員の五分間演説を行はしむるも其意の茲に存するより。第十六回全國害蟲驅除講習會員の五分間演説會は八月十日午後二時より當市鶴飼ホテルに於て之を開き、引續き懇親の宴を催せり。其演説は講諾欄に一斑を示したれば又茲に言はず。當日の來賓には吉田岐阜縣參事官を始め第四課員、岐阜、濃飛兩新聞記者、堀口岐阜市長、農事試験場員、縣農會理事等十數名にして、席は例より蟲名を以て定め、宴中よは名和昆蟲研究所より寄贈の福引あり、會員の蟲に縁める演説あり手踊あり、弦歌盛んに起りて十二分の歡を盡し散會せり。

●凸眼椿象の發生

岐阜縣揖斐郡の所喜久氏より大豆の害蟲として送附せられたるものは、全くメダカガメムシにして、是を驅除するには咽喉付圓形捕蟲器等に掃ひ落すを以て最も便利の方法とす。



凸眼椿象の圖

●浮塵子の發生

本年は連日の晴天にて温度高きを以て、稻作の生育は極めて宜しきも、從ひて浮塵子の發生は甚しく、各地方何れも今更の如く狼狽せるも、既に手後れにして又如何ともあすべからずとは云へ、及ぶ丈け咽喉付圓形捕蟲器等にて驅除せざれば意外なる大損害を受くることあるべし。

●北海道と朝鮮の昆蟲

此頃北海道後志國志根津川小學校に奉職せらるゝ本縣人小川七治郎氏は、多數の昆蟲を採集して送附し越されたるが、其内にはミヤマカラスアゲハテフ、ヒメヒオドシテフ

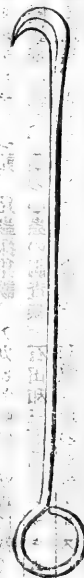
クジヤクテフ等彼地には敢て珍しからざるも、是等の多數や蠶蛾類の或種の如き、或は天牛、金龜子、葉蟲、埋葬蟲、步行蟲の或種の如き、又は毛翅目石蠶、有吻目椿象の或種の如き、奇品の多數ありたるは、彼我氣候の相異よりてなるべし。然るに朝鮮元山津の村主隆左右氏の送られたる昆蟲はアゲハノテフ、モンシロテフ、モンキテフ、オホハヤバテフ、ルリタテハテフ、クマアリ、アシベニイナゴ、エンマコホロギ、ウスバキトンバウ、シホヤトンバウ、メシメトンバウ、ナツアカネトンバウ、トビイロイトトンバウの十三種まで、我岐阜地方に産するものとは皆少しも異らざりけり。

●**昆蟲畫の好評** 大垣西濃印刷株式會社は本邦六大島蝶圖、昆蟲繪葉書其他二三を印刷して販賣せらるゝが、頗る好評にて各地よりの申込者非常に多しと云ふ。其中此の蝶圖は本島を代表せるギフテフ北海道を代表せるエゾシロミテフ、九州を代表せるミカドアゲハテフ、四國を代表せるイシガキテフ、琉球を代表せるツマベニシロテフ、臺灣を代表せるキシタバアゲハテフの六種の蝶類を十六度刷着色石版に附したるものにて、其畫の眞に迫りたる意匠の優美なるは、同好者の是非室内裝飾とすべし價値あるものなり。

●**稻の莖切鎌**

農家に害蟲驅除を勸むる上、於て、高價なる器械を買はしむることは到底實行し能はざる處なり。此頃鍛冶を以て有名なる美濃國關町の後藤喜兵衛氏は、圖の如き稻の莖切鎌十餘挺を贈られたるが、價は貳錢、貳錢五厘、參錢六厘の三品にて何れも實用には適當あるものなるが、尙其鎌の先端を少しく圓めて他莖を傷はしめざる様なさば一層完全するなるべし。

稻の莖切鎌の圖



●**名古屋松操會の總集會**

同會は本月一日午前九時より名古屋高等女學校内に於て第十回總集會を開かれ、出席者百餘名にして頗る盛會なりし由なるが、當所長名和氏は之に臨み、昆蟲に關する女子の心得につき一場の談話を試みられたりと云ふ。

●**本誌の改良**

當所發行の昆蟲世界は、發行以來本月を以て滿六週年を迎ふることゝなれり。而して其間多少の變遷ありたるも漸次改善の實を擧げたるは既に讀者の知了せらるゝ處なるが、尙後益々改良に意を注ぎ、成るべく多くの圖書を挿入して記事を補足し、以て愛讀諸氏に酬ゆる處あらんとす、されば尙舊より續々玉稿を投せられんことを冀ふ。(編者白す)

●**聖路易萬國博覽會昆蟲標本出品**

聖路易萬國博覽會へ當昆蟲研究所より、有害有益の昆蟲標本凡そ三拾箱を出品せんとて、目下所員一同は材料蒐集に従事しつゝあり。

●**中田谷藏氏の訃音**

第十七回全國害蟲驅除講習修業生若手縣中田谷藏氏は同縣農事試驗場昆蟲部在勤中、此程病魔の犯す處となり遂に永眠せられたりと、斯界の爲此の前途有望なる氏を失ふは實に惜むべきことと云ふ。

●昆蟲標本陳列館の陳列品増加 第五回内國勸業博覽會農産館岐阜縣陳列區の門に、昆蟲標本を以て設計せしより人皆昆蟲門と稱して大に賞讃を受けたりしが、今回紀念の爲其儘當所常設の昆蟲陳列館内に陳列して公衆に示すことになし。又當所出品の添出品たる昆蟲分布圖(鳳蝶科十三種)等をも陳列したりき。

●岐阜縣昆蟲學會第五十七回月次會記事 同會は本月五日午後一時より當昆蟲研究所内に於て開かれたり、出席者は二十餘名にして第一席小森省作氏は環紋蝶科の分類につき標本を以て説明し第二席中井藤助氏は飛驒土産として、氏が先月十七日より十八日間害蟲視察として飛驒國地方旅行をせし情況を述べられ、第三席森宗太郎氏の害蟲驅除と氣候との關係につき各地の例を擧げて演述し、害蟲驅除に於て時期を觀察するの最も必要なるを説き、第四席篠田房治郎氏は桑樹の害蟲黒金龜子に就き加害の狀況より驅除法を、第五席所嘉吉氏はルリタテハテフの飼育談を述べ、第六席長野菊次郎氏は蜻蛉に就き多方面より講演せられたるが、ろは他日本誌に發表せらるゝ都合なれば茲に贅言を用ひず。

●水曜昆蟲會記事 當研究所員の催しに係る水曜昆蟲會は、前號報告後、毎水曜日午後七時より當所内に開會せしが、其重なる演題と講演者を擧ぐれば左の如し。

高橋喜男氏 ヨムラサキテフの習性に就て、ベニシロミテフの話、ルリタテハテフの話、昆蟲採集談、アカシヤ樹の一幼蟲に就て。
森宗太郎氏の郷里の土産、聖路易博覽會出品に就て、渡邊樵四平氏の優華華に就て、桑の心蟲の調査談。石田和三郎氏のハマキムシの話、静岡縣濱名郡地方の昆蟲方言、念佛と昆蟲。所嘉吉氏の幾何學と昆蟲、ルリタテハテフ飼育談。名和愛吉氏のシモフリスノメの飼育談、クログアゲハテフ飼育談。棚橋昇氏の穴蜂の舉動に就て、アチハダイトトンガの産卵、マキノハマキムシに就て。中井藤助氏の飛驒地方害蟲視察談。大橋由太郎氏の葉卷蟲各種の研究談、本巢郡地方の害蟲視察。小森省作氏の特種鱗の研究談。採集と飼育等に於て、其他客員として、長野菊次郎氏のトンバウの話、昆蟲の戶外觀察、及在米國名和梅吉氏の蟲界報告文の朗讀等なりき。

●昆蟲標本陳列館の觀覽人 去八月中に當昆蟲研究所常設の標本陳列館を觀覽せし人員は、總計千九百七十一人にして、其内最も多かりしは二日に於ける百九十六人にして最も少なりしは十五日に於ける四十六人にて平均一日は七十五人余に當れり。而して此月は官衙、學校等は夏季休暇中なれば從て各府縣の勸業當局者、教育者及學生等多かりき。

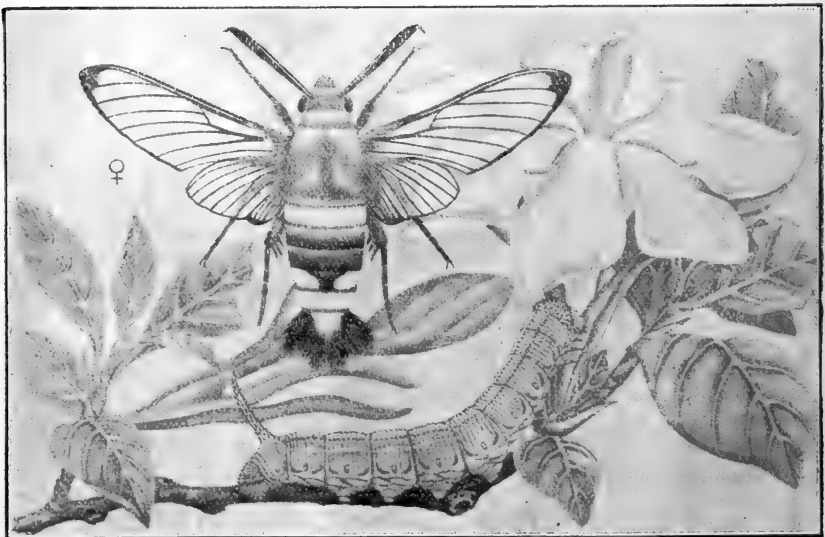
●寄稿家に告ぐ 本誌本月分は記事幅濶の爲、盡く投寄の玉稿を収録すること能はざるより次號へ廻はしたるもの尠からず、此旨謹告す。

Cephonodes hylas Linne. (O-sukashiba)

By K, Nagano.

Wings transparent (but on emerging from the pupa, they covered with white scales, which are lost almost immediately); veins blackish; costa and base of forewings yellowish-olive, and apex blackish; hind margin and base of hindwings yellowish-olive. Expanse 62-68mm. Body yellowish-olive with reddish belt on abdomen; anal tuft black.

Formosa, Kiusiu, Shikoku, Honsiu; 6, 7, 8, 9. Larva green with pale dorsal; dorsal line sometimes pale blue; subdorsal lines white; one or two series of black dots on lateral sides; 1, 11, 12 seg. yellow dotted; spiracles reddish; horn yellowish, black dotted, tip black: on *Gardenia florida*; 7, 8, 9, 10.



新刊廣告

昆蟲叢書 第二編
昆蟲標本製作全書 全壹冊
 題字及寫真銅版、木版圖數十種插入 ●定價壹部金八拾五錢(郵稅四錢)

記載目次

第一章 昆蟲標本の價值 ●第二章 昆蟲標本製
 作法の沿革 ●第三章 昆蟲標本製作書の出版 ●
 第四章 昆蟲採集用の器具 ●第五章 昆蟲採集
 の方法 ●第六章 幼蟲及蛹の採集と飼育方法 ●
 第七章 昆蟲採集地の撰擇 ●第八章 標本製作
 用の器具 ●第九章 昆蟲標本の製作方法 ●第十
 章 昆蟲の排列と保存方法
 本書出版の義につき種々事情の爲遅延致し何とも
 申譯無之候處漸く製本出來致し候に付豫約御申込
 の順序を以て御送附可致候間此段御承知置願上候
 明治三十六年九月

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

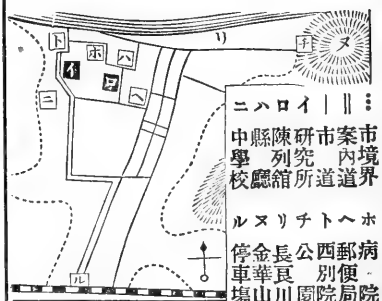
岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關は
 ず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名
 和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何
 人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内 岐阜縣 昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十八回月次會(十月三日) 第六十回月次會(十二月五日)
 第五十九回月次會(十一月七日)

明治三十年九月十日内務省許可
 (明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)



名和研究所案内
 ●昆蟲研究所の位置は上
 當昆蟲研究所の位置は上
 圖の如くにて停車場より
 は僅に十餘町養蠶室あり
 又新築の岐阜縣物産館構
 内には常設の昆蟲標本陳
 列館(五間に十餘間)あり
 て標本器具數千点を陳列
 す有志諸君の來訪を俟つ
 岐阜縣岐阜市京町
名和昆蟲研究所

本誌定價並廣告料

壹部 郵稅共 金拾錢 (見本は五厘郵券) (貳拾枚にて呈す)
 壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢
 (注意) 本誌は總て前金に非れば發送せず
 ●爲替拂渡局は岐阜郵便局 ●郵券代用は五厘
 切手にて壹割増とす
 廣告料 五號活字二十二字詰一行に付金拾貳錢
 三十行以上一行に付金拾錢とす
 明治三十六年九月十五日印刷並發行
 (岐阜縣岐阜市京町) (岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆蟲研究所

發行所 岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
 發行所 同縣揖斐郡鷺村大字公郷三番戶
 編輯者 同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
 印刷者 同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二

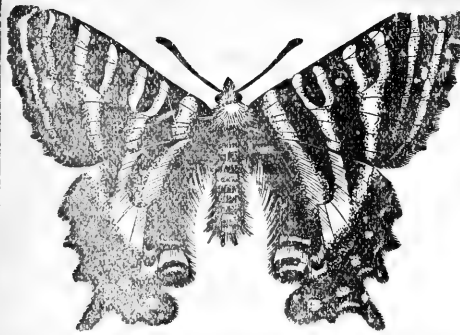
不許轉載

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
 印刷者 同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
 印刷者 同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

（十月十五日發行）

（每月一回十五日發）



THE INSECT WORLD.

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY **Y. NAWA.**
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七拾四號

（第七卷第拾冊）

目次

●石竹と大和小灰蝶（石版）

●本年の蟲害と浮塵子

●皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解（黃二）

●無翅の螢種に就て附臺灣産の螢種（續）

●第一回岐阜縣昆蟲分布調査（四）

●マユミカガハメシの飼育に就て

●ルリタテハテフの飼育談

●六足蟲靈宴（西の巻）

●昆蟲小感（一）

●讀者諸君に望む

●螟蟲驅防獎勵展覽會準備記事（第三）

●薄荷の一大害蟲なる青蟲の幼蟲に就て

●博覽會出品害蟲標本及調査解說書（香川縣農事試驗場）

●博覽會出品害蟲標本解説書（續）（神村直三郎）

●本號の口繪に就て

●對する昆蟲講習の嚆矢

●長吉村川邊區の害蟲驅除成績

●謝狀

●代田品評會の賞品

（禁轉載）



（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（明治三十六年十月十五日發行）

●寄贈物件受領公告

- 一 白山産昆蟲標本 各種 岐阜縣 埴田健藏君
- 一 一本背筋天蛾 二頭 鹿兒島縣 生熊與一 郎君
- 一 昆蟲標本 各種 東京市 田中芳男君
- 一 雲南産冬蟲夏草 二把 名古屋市 寺島昇君
- 一 珍種蚯蚓 十頭 長野縣 百瀬茂君
- 一 戸隠神社耕作安全蟲除之御札 〇戸隠神社養蠶倍盛之御札 〇戸隠神社五穀豐熟養蠶倍盛御祈禱之靈 東京市 桑名伊之吉君
- 一 除蟲御札 一葉 長野縣 藤森清君
- 一 稻莖切鎌 一挺 愛媛縣 木村岩吉君
- 一 稻莖切鎌 三種 十三挺 岐阜縣 渡邊喜兵衛君
- 一 稻莖切鎌 二挺 岐阜縣 後藤善兵衛君
- 一 注油散布器 一個 靜岡縣 松下源四郎君
- 一 塗盆(菜花に昆蟲摸樣)一個 大阪府 坪内貞家君
- 一 七寶塗硯箱(牡丹に蝶摸樣)一個外に 名古屋市 松操會
- 一 塗盆(蝶摸樣) 一個 在岐阜市 中井藤助君
- 一 獨逸製甲蟲玩具 一個 大阪府 由比昌太郎君
- 一 茶卓(蜻蛉摸樣) 五枚 岐阜市 豊田宇三郎君
- 一 淡路燒煎茶碗(群蟲摸樣)一組 外に 兵庫縣 中野壽郎君
- 一 一天田郡昆蟲講習員一同寫眞 一葉 京都府 辻川清玉軒
- 一 牛身肖像寫眞一葉 (第十六回全) 茨城縣 森市太郎君
- 一 牛身肖像寫眞一葉 (國害蟲驅除) 德島縣 森井與平君
- 一 牛身肖像寫眞一葉 修業生 岐阜縣 河本伊六君
- 一 中京新報〇新愛知〇扶桑新聞〇東海日日新聞 名古屋市 甫守謹吾君
- 一 (昆蟲記事掲載)各一葉 東京市 裳華房
- 一 蘭草栽培書 一册

右寄贈相成候に付芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年十月十二日 名和昆蟲研究所

●購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遅延相成候諸君も尠からず會計上非常な迷惑を來すのみならず爲め木誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滞納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

●昆蟲分布調査材料募集

- 鞘翅目。瓢蟲の部。
 - 鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。
 - 脈翅目。擬蜻蛉、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
 - 有叻目。水棲の部、蟬の部。
 - 直翅目。螞螂の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。
 - 擬脈翅目。蜻蛉の部。
- 右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんとを望む

○アラ ムシ (蜚蠊又は滑蟲)の標本
右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む
岐阜市京町 名和昆蟲研究所



蝶灰小和大と竹石





論 說



◎本年の蟲害と浮塵子

害蟲の發生は氣候と密接の關係を有し、氣候は又其年の豊凶に關係を及ぼすべきを以て、本年の如く氣候高温ある時は稻の成育極めて良好なるにつれ害蟲の發生は又免るべからざるあり。本年螟蟲の發生非常に多かりし爲、全力を之に傾注して以て漸く其効果を收めんとするに當り、浮塵子は彼の三十年に次くの大發生にして收穫皆無若くば半作なりとの慘報は續々各地より來り、隨て是等の驅除に要する油液は非常に莫大なるものにして多きは一村既ニ數十石を使用したる所あり、而して又我政府は第二豫備金より七萬餘圓を支出して之が驅防に勦めりと。全國に於ける其損害と費用は幾干なるや未だ知るべからずと雖も、三十年には七千五百餘萬圓を算せり。本年は之より超過することはあらざるべきも、之が精査を加ふれば又決して少なからざるべし。世人は最近年間ニ於て二回迄も浮塵子の爲に大損害を蒙りたれば、浮塵子なる語は最早忘れざるべし、否浮塵子なる語を忘れざると共ニ尙之より恐るべき螟蟲なる語をも永く忘れざるのみならず現時は勿論將來ニ於て大に警戒を加へざるべからざることを吾人は望むものなり。假令本年浮塵子の爲收穫皆無なりし所も若し驅防の方法其宜しきを得ば、平年作は勿論多少の増收ある事は信じて疑はざるなり。見よや三十年に於て凶作の聲四方に喧しかりしよも係らず、愛知

縣渥美郡野田村の如きは平年に二割の増收を來したるは其當時河合同村長の報告に依りて明かよして、必竟驅防其當を得たるに由れり。

抑も害蟲の發生は前述の如く氣候と密接の關係を有するものなりと雖も、又其寄生蜂類との均衡を失するも其一因なれば、本年非常に發生したりとて翌年必しも大發生するものに非らず、翌年少かりしとて又其翌年發生せざるも非らざれば決して油斷すべきにあらざるあり。故に我農民は常に害蟲の驅防を念頭に置き、除草耕耘と等しく之を農家行事の一に數へんことを切望せざるを得ず、豫防の一爰は驅除の一貫爰に優るとは吾人が平素唱導する所なり。當業者は宜しく之を今日の被害に鑑みて、將に來らんとするの明年を警省すべし。



◎皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解(其二)

名和昆蟲研究所内 小竹 浩

(一) 昆蟲の分類

バツカード氏の調査に據れば動物界には大約廿五萬の種類を有し、就中昆蟲類は其五分の四を占むると爾來斯學の進歩に伴ひ、漸次増加し、現時昆蟲の種類既に三十萬と稱せらる。尙微細に調査を遂ぐれば殆んど其止まる所を知らざる有様なり。されば其分類も學者の所信よりて一定せず、バツカード氏は七目よ、フイギユア氏は九目よ、ニコルソン氏は十二目に、クラウス氏は十三目に、カムストツク氏

は之れを十九目に分類せられたり。而してカムストツク氏の分類の最新にして精確あるにも抱らず、今此の標本をバツガード氏の分類によりて製したるは、是れ唯其分類法の從來世上に多く用ゐられたる且最も簡單なるを以て觀覽し便をらんことを欲してなり。今カムストツク、バツカード兩氏の分類を對照して參考を供す。

バツカード氏	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	第十三	第十四	第十五	第十六	第十七	第十八	第十九
膜翅類	鱗翅類	雙翅類	甲翅類	半翅類	直翅類	羅翅類													

カムストツク氏	膜翅目	甲翅目	微翅目	雙翅目	鱗翅目	毛翅目	蝸翅目	脈翅目	半翅目	胞翅目	直翅目	疊翅目	食毛目	噬蟲目	白蟻目	積蟻目	蜻蛉目	蟬目	尾彈目
---------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----

右の表は種類の高等下等をも次第して示せるものにして、兩氏の意見多少相異あり、而して前表に於て第一類乃至第四類及羅翅類の一部、后表に於ては第一目乃至第八目は完全變態をなし其他は不完全變態をなすものなり。完全變態とは卵期、幼蟲期、蛹期、成蟲期の明なる四期を経過し、蛹期には停食不動殆ど死したる如き有様を合せり。不完全變態との其經過前者の如く明かならず、概して蛹期に於ても食し、且活潑に運動するを常とす。

本誌前號第九版下圖は幅一尺四寸六分、長九寸九分、深一寸六分大の箱に藏せる一函の撮影にして、各類變態の模様及模範昆蟲の解体を示せるものなり。是等都合拾五箱の昆蟲標本は左圖の如き高二尺八寸八分、幅一尺五寸八分、奥行一尺一寸二分の保存箱に收容して奉獻せしものなりと。

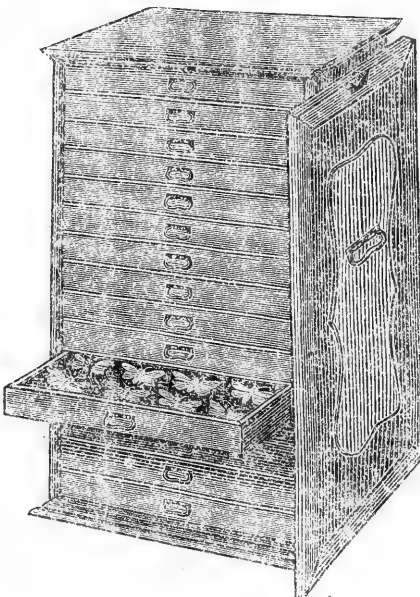
(二) 模範昆蟲

(一) トノサマバツタ (Pachyplus determinatus, Thumb.)

此の解体標本は昆蟲の著しき外部の區別を

示す模範となすに足れり。此蟲ハ直翅類稻蝨科に屬するトノサマバツタの雌蟲にして、軀體は頭、胸及腹の三部より成り、其區分判明なり。頭部は癒着せる數個の環節より成りて一對の觸角と、二個の複眼並に三箇の單眼と、口に附屬せる數器即ち上唇、下唇、上顎一對、下顎一對等を具ふ。胸部は三個の環

圖の箱存保本標蟲昆



節より成り、前の一節を前胸といひ、中の一節を中胸、後の一節を後胸といふ。是等三個の環節に

は各一對つゝの脚を具へ、都て六足あり、これ昆

蟲に六足蟲の別名ある所以あり。又中胸、後胸に

は各一雙の翅を具へ、其中胸にあるを前翅又は上

翅と稱へ、後胸にあるを後翅又は下翅と稱す。前

翅ハ細長にして稍厚く、後翅は膜質にして翅脈と

稱する數多の空洞管に支へられて擴張し、縦に疊

むことを得。而して翅は他の種類にありては双翅

類の如く后翅退化して一雙なるあり、蚤の如く二雙共に退化したるあり、半翅類の蝨の如く全く之

を缺くあり、又二雙を完備するも甲翅類の如く上翅の堅厚なるありて一様ならず。腹部は九個の環節よ

り成り、其各側面に呼吸を營む所の氣門を具へ、其第一節に聽器を、腹端には産卵管を有す。其體軀は脊

索動物の如き骨骼なきを以て、体形を保持し内臟機關を掩護するには皮膚其代用をなし頗る堅硬なり。

(三) 昆蟲變態の模様

(二) アシナガバチ (*Polistes chinensis*, Fab.) 此蟲は家屋の檐下、草木の葉裏等に巢を營み、其内よ
仔を養ふ、其仔を養ふや螟蛉、尺蠖等の害蟲を捕へ來り、能く噛み適度な幼蟲と與ふ。幼蟲は無脚に
して蛆狀をなし、蛹は裸蛹にして巢の中に在り、後羽化して成蟲となる。該蟲を以て膜翅類變態の模様
を示す。

(三) ギンテン (*Luendorpha japonica*, Leach.) は卵子をウスバサイシンの葉裏に産付し、孵化の幼蟲は該
葉を食して成育し、老熟すれば自体を縊りて蛹化す。羽化の成蟲は美麗なる彩色を有せり。該蟲を以て
鱗翅類變態の模様を示す。

(四) ハナアブ (*Eristalis tenax*, Linn.) 此の蟲の幼蟲は無脚の蛆にして尾長さを以て尾長蛆と稱す。
常は不潔物の混ざる水中にありて肥料分を食して成育し、后陸上に出で鼠狀の蛹となる。羽化の成蟲は
花間は普通なり。該蟲を以て双翅類變態の模様を示す。

(五) カブトムシ (*Xylotrupes dichotomus*, L.) 此の蟲の幼蟲は塵芥中にありて有機物を食して成長し
后蛹とある。羽化の成蟲は、其雄には額片より一の長突起を生じ、身体甚だ壯嚴なり。夏期柳、粟、皂
莢等の樹幹より出づる甘液を舐食す。此蟲を以て甲翅類變態の模様を示す。

(六) ユリノハナスヒ (*Laccotrophes japonensis*, Scott.) 幼蟲は水中にありて小蟲を捕食して漸次成育
し、蛹期判明ならせして遂に成蟲となる。前肢は螳螂のうれに似て、体は扁平に、腹端に二個の硬さ長
角を有す。該蟲を以て半翅類變態の模様を示す。

(七) ハチナガイナゴ (*Oxya* sp.) 此蟲は秋季土中に産卵し、翌年六月頃孵化す。好んで稻葉を食し
漸次成育すれば蛹期判然ならずして遂に成蟲に化す。常はイナゴと共棲し大害をなすことあり、該蟲を

以て直翅類變態の模様を示す。

(八) サナヘトンバツ (Gomphus melampus, Selys.) 幼蟲は水中に棲息して小蟲を捕食し、漸次成長して羽化せんとするときは陸上に匍ひ出で成蟲となる。苗代田に多く、頻りに諸害蟲を捕食する有益蟲なり。該蟲を以て羅翅類變態の模様を示す。

◎無翅の螢種に就て附臺灣産の螢種(續)

在臺灣打狗港 永澤 小兵衛

(五) 臺灣螢の分布交種 臺灣土人の螢火は對する觀念は、原來殆んど絶無にして、偶々之を捕獲する者ありと雖ども、うは只春夏の交、翫弄に供するに過ぎず。土語にては之をホイキムコオ(火金姑)と稱之、南部地方にては專ばらホイキムシムと呼べり。而して其分布を尋ぬるに、全島到處に之を産すと云ふも敢て不可なし。唯澎湖列島には、稀に瑪宮城附近まで目撃するのみなれば、漁翁島等の土人には、終生之を知らざる者すら多しとか。南部に於ては恒春、海口、枋山、枋寮等多少産するやに聞さしかど、余が採集の際には、時期少々遅れ、且つ強風その他の事故に妨げられて、毎宵一頭だも獲ざりき。幸ひに鳳山、打狗等には今なほ多く、以て比較研究の資を供すべし。中部の臺南、苗栗に到れば、發生また少からずと聞けりど、未だ實地を踏破せざれば、之を確言するに由なし。兎に角に、既往の事實を徴すれば、全島内に甲乙兩種の分布の廣濶なるは確實なるも、その丙種に至りては、尙疑問の間置かざるを得ぞ。而して七月廿二日採集の結果に依れば、前數回の成績と稍異なる現象を呈したるのみか、從來未だ嘗て見聞せざる奇品の棲息をも示さき。憾むらくは、今之を讀者に敬告するの機會に達せざることぞ。

纏へつて其交産方法の一斑を述べん、黄色翅の乙種は、内地産と同一の作用よりて蕃殖を遂ぐるも他の無翅の甲種に至りては、蜻蛉の異例なるが如くに、前者とは其趣むさを異にするに似たり。即ち雌蟲は屈伸自在なる魚尾狀の尾節を以て、緊く他物も吸着し乍ら、自體を伸べて天を仰げば、雄蟲は俯して其上に重なり、互ひよ其頭部を對等とするや、體て雄蟲は其尾端を雌蟲の腹部の第二節に接合し、約十分時以上は、共に焔火を滅して動かす。而して此間、雌蟲は爪端を雄蟲の前翅縁に鉤懸し、雄蟲は時々觸角を膨らして左右に動すを見き。此かる觀察は、容易に遂げ難きものなるのみか、余は只纒かに一回目撃せしに止まれば、或ひは雌雄間に於ける一時の動作を斯く誤認せしやも測られず。然かも、脱離後この雌蟲に配するよ、乙種の雄蟲を以てせしに、雌蟲の之を厭避して、絶えず近づけざるの狀あるに反し、或は甲種の雄蟲の傍らを離れざる等に想ひ及ば、此舉動には、必ずや特殊の事由の存するごとを疑はず。

(六) 臺灣螢種の位置

それ斯く、臺灣には諸種の螢火ありて、其中甲種は最大形を有するも、雌蟲は翅翼を缺き、乙種は南清、琉球種の如くに其翅色黃褐にして、雌雄ともに飛行し、丙種は今猶ほ不明なるも、是また乙種の如かるべきか。他に一種奇異の狀態をなせるものを發見せりと雖ども、是は分布、性態、全たく未詳に屬せり。而して古來最も人に知られたるは、有翅種なるを以て、隋の煬帝が數斛を捕へしめて、之を山谷に放ち、夜出て之を賞觀せまなどの舊話は、蓋し甲種の雄蟲か、若くは乙種たりしなるべし。然るに、外國種もありては、無翅の雌蟲のみ光輝強くして、雄蟲には全たく放光せざるもありとの事なるが、臺灣産に於ては、雄蟲も光力は却つて雌蟲のものよりも強大なり。然らば則ち、臺灣種に於ける蟲學上の位置を、今何處に定むべきか、故人マッケー氏は、臺灣螢を以て *Lampyris*

hochiica となせりと聞けりぞ、是は的當の學名とも思はれず、特に一種に冠する稱なるをや。去ればとて、彼の Phengoles 種に屬する道理なければ、已むことを得ずして、茲は甲乙の稱號を用ゐて紹介せしなり、學者の究明こそ望まほし。なほ讀者の參考として、採集上の注意をも述置かんよ、甲種の雄蟲の飛行するや、青燐焰々として、其火光には極微の振動を感じ、直進また直退、決して内地産と同一にあらず、故に遠くより之を望むも、他種と區別するに難からず。其雌蟲は主に水濕の草叢に棲息し、初更までは幼蟲と同じく根邊に蟄伏するも、次第に莖幹を傳ふて梢頭に岐行し、時々尾端を擧て燈火を熾し、以て其友を喚ぶの標識とすなり。若し物に驚けば、其瞬間に明光を藏して所在を晦すも、幼蟲期のものにありては、概ひね草根に潛居するのみよて、莖幹に攀登することなく、且つ其光力さへ一様にして、肯て雌蟲の如くに明滅の差違多からず。一たび此區別だに會得せば、一夜に數頭の採集は、左まで困難ならざるに、何故か對馬に於ける平田氏は、多く之を搜索し得ざりきと、余はその採集上の成蹟に就て、心疑惑なきこと能はざるなり。乙種に至りては、殆んど内地産のもの、如く、又甚だしく高處を飛翔せざれば、寧ろ捕獲の容易あるを覺ゆ。共に出遊の時刻は午後九時十時頃を最多とし、八時十一時之に亞げり。其卵粒の色澤、形狀また内地産に彷彿たりと雖ども、成蟲を捕ふるに毫も惡臭を聞かざるの一事は、少さか彼此その種屬を異にすることを證するに足れり。

(七) 螢火に關する雜說 臺灣産の螢火よつきては、唯臺灣府志卷十八、蟲魚の部よ、螢の名を留むる

のみにて、其種別、經過より、色彩等を記載せしものとては、他に未だ之あるを見ず。是れ無翅螢の今日まで、絶わて世人に知られざりし所以か。然は云へ、祕傳花鏡よ「初生は蛹の如く、蚊に似て脚短く翼あり、腹下に亮光あり、日は暗く、夜に明にして、天半に群飛すること猶ほ小星の若し、池塘の邊

は生ずるものを水螢と曰ふ、喜んで蛟蟲を食ふ、好事者毎に一二十を捉り之を小紗囊内に置く、夜火も
代ふべし、一種の水螢多く水中に居る、故に唐の李卿に水螢の賦あり」などの説も見えたれば、前章に
引證せる陶邨二氏の説と相俟て臺灣の母國に於ては、早くより無翅螢の半面を知りし的確と見ることを
得べし。而して本邦の坂氏等は、宵行をクサポタルの訓を施し置けるも、クサポタルを以て、無翅
の雌螢、若くは幼蟲たる蛆螢なりとさざば、宵に行くとどの字義に合はざるのみか、また郭氏の詩意にも
反さぬべし。薛嘉穎氏が、熠燿を解して「夜間黔寂之時、惟螢火之光乎。熠燿、螢火也。孔疏、螢火
夜飛、故曰宵行」と言はれしこそ正しけれ。又漢詩に蛆螢を詠せしものどては莫けれど、螢火の習性に
は、細緻精確の觀察を加へて、中には未だ邦人の言及ばぬ所を曲盡せしやう覺ゆるも多かり。例へば、
梁の簡文帝の「騰空類三星隕、拂樹若花生、屏疑神火照、簾似夜珠明」と、元帝の「著人疑不熱、
集草訝無煙、到來燈下暗、翻往雨中然」とは、五言古の双璧とも稱すべく、唐の李嘉祐が「夜風吹
不滅、秋露洗還明、向燭仍藏焰、投書更有情」と、周繇が「亂飛同曳火、成聚却無煙、微雨灑不
滅、輕風吹欲燃」の五律とは、同工異曲の對聯とや言はまし。李百藥が「窓裏憐燈暗、階前長月明、
不辭三逢露濕、祇爲重宵行」の絶句は、筆を螢火に藉りて、戀愛の情緒を述べしに過ぎざれども、
宋の吳肇が「閒撲流螢衝暗樹、危梢點々墮寒星」の七絶の如く、夏夕採螢の實境を寫出せし佳作
や、孔武仲が「魚游鳥宿自不驚、我知此火初無情」などの、高雅清逸の趣むさを存するものも少しとせ
ず、特に元の謝宗可が、螢燈といへる題にて「銀粟無煙棲碧蘚、玉蟲留影綴青紗、秋空兩歇寒光墮、
晚徑風閒冷燼多」と詠せしは、形容の妙、實に感服に堪へざるなり。而して和歌も、唐宋の詩味を譲
らざるものあるが中に、最とも余が意を得たるは、藤原定家卿の詠物歌と、頓阿法師の遺草との二者な

るが如し。今や暑熱漸やく加はり、塵界身を處するに懶し、讀者もし榻を縁陰水の如き處に移して、静かよ此等の名什佳篇を繙かば、其研學に裨益する所、蓋し鮮少にあらざるべし、豈啻り銷夏の一方のみといはんや。

(完)

◎第壹回岐阜縣昆蟲分布調査(四)

名和昆蟲研究所助手 分布調査主任 小森 省 作

天狗蝶科 (Lemonidae)、此科に屬するものは本邦よ於て僅一種を産するのみ、而して此テングテフは成蟲を以て越冬すれば何れの時季に於ても採集し得ざるよからざるべきも、我岐阜縣に於て最も多く現出するは三四月の候よして、他の季月に於ては餘り多く見ざる所よして、隨て今回採品の少なかりしは其時期に非ざるしによれるなり。

(五二) テングテフ (Tybitha Lepita, Moore.) 翅の表面は黒褐色よして黄赤色の斑紋を有し、前翅の

前縁角よ近き二點は白色なるを常とす。前翅の外縁は前縁角の部に於て甚しく突出して鈎狀をなす。裏面は前翅よ於ては紋様表面の如く判然せずと雖も略ぼ同一にして、後翅は枯葉狀を呈するも多少變化あり、下唇鬚は非常に發達して長く前方よ突出し、雄蟲の前肢は退化して脛節より先方鱗毛を叢生す。稻葉郡三里尋常小學校尋常一年生鹽谷啓作は九月二十日學校附近にて、揖斐郡鷺尋常小學校職員は三月十九日、加茂郡越原南尋常小學校尋常三年生安江幸次郎は五月十日山地よ於て採集せり。

小灰蝶科 (Tycaenidae)、此科に屬するものは皆小形種にして、今回の採品は凡て十二種なりき。

(五三) ボイシウラバシツミテフ (Taraka hamada, Druce.) 形小よして翅の表面は一樣に黒褐色なり

裏面の白色は黒點の散在せる状恰かも碁石を駢べたるが如くなるを以て此名あり、幼蟲は竹類に附着する白色蚜蟲を食す、邦産蝶類中食肉性のものは此の一種のみ。惠那、益田の二郡に於て獲られたり。

(五四) シジミテフ (*Cyaniris argolus*, L.) 普通種にして六七月頃最も多く現はる、雌蟲は前後兩翅共前縁より外縁に沿ひて幅廣く黒色を呈し、前翅の中室の先端に於て黒點あり。裏面は雌雄共に同彩にして、帶青灰白色に多數の黒點を有す。變化多し。羽島、揖斐、加茂の三郡に於て獲られたり。

(五五) ヒメシジミテフ (*Lycæna argus*, L.) 雌蟲の翅の表面は藤紫色を呈し、脈黒く、前翅の外縁及后翅の前、外縁は廣く帶褐黒色なり。裏面は白色にして基部は青色をなす、外縁の黒く、外縁に沿ふて二列の黒紋列間は橙黄色を呈はし、其内部にも數多の黒點ありて多少列をなす。雌蟲は表面一様な黒褐色を有し、後翅の外縁に沿ふて赤色斑紋の現はるゝあり。裏面は灰褐色を呈し、紋様は略雄蟲に等しく橙黄色に接せる二黒紋列の兩側は白色を呈す。大抵シジミテフより稍小にして、山地に産す。益田、吉城の二郡に於て獲られたり。

(五六) ウラボシシジミテフ (*Lycæna ephemus*, Hübn.) 小灰蝶科中大形種にして、雄蟲の翅の表面中央部は淡き藍色を呈し、前後兩翅の中央に黒褐色の微かなる斑紋列と中室の先端に各一個の斑點を有し外部は黒褐色なり。裏面は灰色にして黒色と黒褐色の斑紋列あり。雌蟲は表面一様に黒褐色にして、此種は變化多く、山地に産す。惠那、大野、益田の三郡に於て獲られたり。

(五七) ヤマトシジミテフ (*Zizera maha*, Kollar.) 小灰蝶科中小形種を以て春秋の間到處に飛翔せざるなし。故に今回其採品の多きを見るべし。雄蟲の翅の表面は一樣に藤紫色にして外縁は帶褐黒色を

以て縁どり、雌蟲は一樣に帶褐黑色なるを常とすれども、雌雄共變化多し。裏面は灰色にして數多の黒點を有す。岐阜、安八を除き最も多數獲られたり。

(五八) ベニシジミテフ (*Chrysophanus phleas*, L.) 此蝶の翅の表面は前翅より於ては、帶黃赤色に數個

の黒色斑紋ありて邊縁は黒褐色なり。后翅は黒褐色にして外縁より沿ふて一條の帶黃赤色の斑紋あり、然れども此種は變化頗る多く、而して雌蟲は一般に黒色部多くして前翅は殆んど全く黒褐色を呈するものあり、又發生の季節によりて變化あり即ち春生種は形稍小にして赤色鮮明に、夏生種は黒色を増せり。裏面は皆殆んど一樣にして、前翅は黃赤色より黒色の斑點を有し、外縁は灰色なり。後翅は灰色より黒色の細點を有し、外縁より沿ふて帶黃赤色の斑紋を有す。岐阜、稻葉、羽島、可兒及安八を除き各郡に於て多數獲られたり。

(五九) ツバメシジミテフ (*Everes argiades*, Pall.) 此蝶はヤマトシジミテフと同大にして、翅の表面亦彼れに等しく雄蟲は美麗なる藤紫色にして、雌は帶褐色なりと雖も、此種は後翅の後縁より近くさ尾様物のあると、裏面に於ける黒點と黃赤色の斑紋が表面に微かに現はるゝあり。裏面は白色にしての多の黒褐色の細點と、後翅の外縁より近く稍大ある二個の黒點と黃赤色の斑紋を有す。而して此種も亦變化頗る多し。岐阜、羽島、海津、山縣、土岐及安八を除き各郡に於て多數獲られたり。

(六〇) ウラナミシジミテフ (*Polymnatus boeticus*, L.) 雄蟲は翅の表面淡紫色にして、后翅の後縁角に二個の黒紋を有す。雌蟲は暗褐色にして、翅の中央より基部に於て光輝ある瑠璃色を呈す。裏面は一樣より灰褐色にして白色の細線を以て波状をなし、後縁角には樺色の斑紋ありて其内に帶青銀色の半環

を有せる黒點二個あり、秋季に於て多く現出す。今回加茂郡に於て僅一頭獲られたり。

(六一) ルリ シジミテフ (*Arhopala japonica*, Murr.) 翅の表面中央部は美麗なる瑠璃色を呈し、外部は帶褐黒色なり。裏面は褐色にまて光輝ある暗褐色の斑紋あり、前翅の前縁角は非常に尖る。揖斐、山縣武儀の三郡に於て獲られたり。

(六二) コツバメテフ (*Satsuma ferrica*, Burf.) 春季山地に多く飛翔する處の小形の小灰蝶として、翅の表面は銀鼠色にして前縁及外縁は暗褐色なり。裏面は褐色にして基部及後翅の外縁部は黒褐色を呈し白色の粉鱗を散布す。后翅の後縁角は尖りて内方に向ひ長き縁毛を生じて切片状をなす。揖斐郡に於て獲たるは三月十九日の採品なり。

(六三) アカシジミテフ (*Curetis acuta*, Moore.) 大形のシ小灰蝶にして、翅の表面は帶褐黒色に中央部は雄蟲は帶黄赤色、雌蟲は蒼白色を呈し、前翅の前縁角及び後翅の後縁角は著しく尖る。裏面は一樣に銀白色を呈するが故にウラギンシジミテフとも云ふ。郡上、加茂、惠那の三郡に於て獲られたり。

(六四) フチグロアラツバメテフ (*Zephyrus taxila*, Brem.) 本種は小灰蝶科中大形の種にして、雌雄により色彩を異にし、而して其雌蟲に於て又多變形なる等本誌前々號に於て名和所長の詳説あり。今回揖斐郡に於て一頭獲られたり。

(六五) ツバメテフ (*Zephyrus atitia*, Brem.) 翅の表面は暗褐色にして后翅の外縁に沿ふて蒼白色の斑紋を有するものあり、尾様物は長し。裏面は白色にして前翅の中央にリ字形、后翅の中央に鍵形の黒褐色の斑紋ありて其外部に同色の斑紋列あり、而して后翅の後縁角に二個の橙黄色の斑紋ありて其中に黒點を有す。大野郡に於て一頭獲られたり。

以上の採集數を表出すれば左の如し (表中△印は十頭以上のものに限る)

番號	種名	市	郡	採集數	市	郡	採集數	市	郡	採集數	市	郡	採集數	市	郡	採集數	市	郡	採集數	市	郡	採集數	市	郡	採集數
五二、	テンガテ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
五三、	ゴイシウラバシジミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
五四、	シツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
五五、	ヒメシツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
五六、	ウラボシシツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
五七、	ヤマトシツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
五八、	ベニシツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
五九、	ツバメシツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
六〇、	ウラナミシツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
六一、	ルリシツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
六二、	コツバメテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
六三、	アカシツミテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
六四、	フチクロアチツバメテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一
六五、	ツバメテフ	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一	市	郡	一



編者云、左の二篇は水曜昆蟲談話會に於て森助手及特別研究生所嘉吉氏が講演せし談話筆記の主要なり。こは繼續的十分の飼育研究にあらざれば枉撰の譏りは免れざるも、茲に掲載して以て讀者の參考に供す。

◎ マユミガメムシの飼育に就て 名和昆虫研究所助手 森 宗太郎

マユミガメムシは御覽の通り頭、胸部の背面及前翅は帶褐黑色を呈はし、后翅は透明にして紫色を帯び兩翅共前縁脈は黄色をなして居ります。腹部の背面中央は黄色に、周圍は黄色と黑色と交互に蛇腹紋にあり、頭、胸、腹の腹面は黄色で側面に黑色の微細なる點列がありまして、複眼は小さく圓形で、單眼は頭頂部に二個あり、觸角は四節より成り黑色に未節は褐色をなし、肢は又黑色よして腿節の中央部は白色をなし、基節は帶紫赤色をなして居ります。

私は八月上旬より縣下揖斐郡本郷村なる郷里へ病氣療養に參て居りました節、或日散歩に參りまして不意に一頭のマユミガメムシを發見せましたから、更に多數を得んと思ひまして先づ食樹たる衛矛の樹を搜索しました處、意外にも其近邊は大なる衛矛の樹があつたから、其樹を熟視しましたが樹の大なる爲に容易に見當りませんから試み此衛矛を動搖したれば、例の彼の特有なる惡臭氣が致しました、爲に茲に此蟲の棲息して居ることが分つて、澤山の成蟲を採集せんと得ました。こは彼等が防禦の爲も惡臭氣を放ちしなぐんも、我等採集者には却て好都合でありました。是等は採集者の

マユミガメムシの圖



マユミガメムシの習性經過は未だ克く分つて居りませんが、私の豫想では此蟲の習性經過は容易に知ることが出来るであらうと思ひます。是は凡ての飼育に於て食草の得安き者と、飼育箱中にて食草が容易に凋ぬ所のものならば好結果を得ます故に、岐阜地方にて最も普通なる此衛矛は兩者を兼備して居ります爲に、此蟲を飼育する念が増して、此卵子を得んとて毎日産卵するや否やを見參まして八月二十二日漸く産卵したのを發見しました。處が私は病氣も最早や全癒せましたから明日にも歸岐致さうと思て居る前日に於て、此卵子を發見したのは私の幸福であると云はねばなりません。依て翌日即ち二十三日の朝澤山の卵子を得て岐阜へ戻りまして、先づ飼育せんとする前より卵子を能々調べて見ましたが、此卵子の色は光澤ある茶褐色で、形は丸く、澤山並列して樹枝或は葉裏に産附してありました。而して其附着部は平扁であつて容易に取れない様に成て居ります。之を飼育箱中に入れて置きました。其中の多くは寄生蜂の爲に斃されましたが其内の小部分は斃され無かつた爲、漸くにして飼育するを得ました。之が孵化したのは二十六日であつて、産卵してより五日目でありました。此時の幼

蟲は黄色であつて、觸角及肢は淡黒色で、軀には黒色に瑠璃色を帯びたる斑点が側部は各四個と、背面中央は同色の二個の突起した點があります。第一回脱皮は八月三十一日で、其より四五日を隔て、一回つゝ脱皮し都合六回の後成蟲となりました。而して四回脱皮の後は觸角黒色に、肢は腿節の中央部は白色、此れより前後共黒色となりました。第五回脱皮後即ち蛹時代は觸角及肢は略前と同様でありましたが胸部は大分異て参りました、こは不完全なる翅の顯れたる爲であらうと考へます。即ち頭部は黒色に光澤を有し、前胸部は黄色に、中胸部は兩側に突起を有し(是は特にツノガムシ類に發達す)、後胸部は不完全なる翅を備へ、腹部の第一、第二關節は之を以て掩はれたるが、此翅は濃き瑠璃色であります。腹部は別に異状はありませぬが、唯少しく色の濃くなりし位でありました。而して九月二十二日に成蟲となりましたが、成蟲及幼蟲は其彩色に於て多少の變化があります。尙今後之を繼續飼育して經過習性を調査し、他日御話を致さん考へてあります。

◎ルリタテハテフの飼育談

名和昆虫研究所特別研究生

所 嘉 吉

私は先達而中ルリタテハテフを飼育して居りましたから、其れを諸君に御話し致して今晚の責を塞ぐ次第であります。

八月二十八日の事でありました、私は稻葉山附近へ昆蟲採集に参りますと、偶然山復にサンキライの有る所ルリタテハテフの一端が翻々とまて嬉遊し、或は止まり或は飛び、其去就定まらざるの状態をなしつゝるを發見しました、怪しみて之を熟視すれば、即ち彼は産卵するのであつたのです。其有様は食草即ちサンキライの葉の一端は止まり表面に一粒づゝ産下しました、依て私は其卵を探り來り飼育を試みる事に致しました。卵は橢圓形をなし、光澤ある淡綠色にして縦に白色の少しく突起せる細線が十一筋ありました。卵期は五日にて九月一日に至り孵化しました。孵化の當時は軀長八厘許りにて、全體黒色にして一面に同色の毛あり、頭部は比較的大にして眞黒であります。孵化するや食葉の中央より網の如く葉縁を食し、九月六日は第一回の脱皮をなした、此時は全軀黄色に黒き斑紋ありて各關節は數本の黒き棘毛あり、九月八日第二回の脱皮す、其當時は軀長三分餘、黃褐色にして始めと殆ど同様でありましたが、九月十三日第三回の脱皮をなし、体長七分五厘となり、棘毛は次第に發達して基部黄色にして太く、先端は黒く數本は分岐して鋭く尖れり。九月十七日第四回の脱皮をなし、体長一寸許りまして

全体茶褐色に黒色の斑紋ありて第一關節に黒色の毛あり、第二三關節より四本、第四關節乃至第十一關節に七本、第十二關節に四本の先端分岐せる棘毛ありて、老熱期に至りて軀長一寸四分は達し、九月二十一日は蛹化しませした。蛹は垂蛹よて、長さ約一寸ありて頭の方の二突起をなし、先端尖りて居ります。胸部は側面より二個、背面に一個の突起ありて角をなし、背面突起の兩側には小突起があります。腹部は側面第三關節の邊少しく突起し、背面よりは數個の突起がありまして、胸部と腹部と接する邊の凹めるは常々、蛭蝶科の蛹に見る所でありませす。全軀赤褐色をなし、背面の中央部は金色を帯び、凹處には四個の銀紋があります。而して此蛹は十月三日に羽化して成蟲となりませた。



◎六足蟲彙纂 (酉の巻)

在東京 長野菊次郎

(二十四) 飛蝗の大數 移住的蝗 (Migratory locust) は地方的 Endemic 種よりも一層の慘害を逞しくするものなり。然れば一度此蟲群の侵掠を受けたる地方は、瞬間に滿野の榮穀を損害せられて、人類及び他の動物に向ひ寸青の食物だに殘さる酸鼻の極に陥らしむる事は、到底蝗軍の來襲の實況を目撃せざる者の夢よも思ひがけざる所なりと云へり。或る博物學者の言によれば、千八百八十九年の十一月に紅海 (Red sea) を通過したる蝗軍は二千方哩の面積を擴がりたるが、今一疋の重さを一オンスの十六分の一 (邦量の四分七厘許) と假定すれば、全量實は四百二十八億五千萬噸に當れりと、かくて翌日も亦一層多數を認むべき蝗軍は亂雲が同一の方位に向ひて通過するを見たりとせば、實に驚愕の至ならずや。又サイプレス鳩 (Gypus) 地中海に在り) には、一千八百八十一年の十月末に至るまでに蝗の卵鞘 (各卵鞘には更に多數の卵を含めり) 十六億個を採集して之を撲滅したるが、其季末に至るまでの重さは千三百噸以上に上りけり。かく多數の卵鞘を撲滅したるは關せず、一千八百八十三年に其嶋に置かれたる卵鞘の數は實は五十億七千六百萬個より少らざりきとなり (ケンブリッヂ博物誌)。

(二十五) 蝶蛾の蛹を越冬せしむること 飼育したる幼蟲より生じたる繭蛹及び裸蛹、或は野外より採集したる繭蛹或は裸蛹をして、無難に冬を經過せしむる事は甚だ困難あることあり。折角飼育又は採集したる幼蟲が満足な繭を紡ぎて蛹とあり、或は直に蛹と化したりとも、所置宜しきを得ざれば、翌年成蟲の羽化を見ることが能はずして前年の苦心水泡に歸すること少からず。今之を無難に經過せしめんは次の三個條に注意すること肝要なり。即ち第一氣候の劇變を防ぐこと、第二濕氣を適度にすること、但し濕氣多きと過ぐれば却て黴を生ずる恐れあり、第三乾燥に過ぎざる様注意することは是なり(ヂツケルソン氏蝶蛾書)。

(二十六) 翅の振動數 エム、マーレー氏(M. Marey)の説によれば、普通の蠅を捕へて之を保つ *straw*、其翅を振動する數は一秒時間二百卅回にして、蜜蜂は百九十回、而してモンシロ蝶は僅かに九回なりとなり。尙ランドア氏が翅によりて發する音の高低によりて其振動數を測定せることは、前年の本誌、昆蟲の發音の條に略記したれば之を省くこととせり(バツカード氏昆蟲研究指針)。

◎昆蟲に關する隨感隨筆 (第四回)

昆 蟲 翁

(廿一) ルリシジミテフの幼蟲 ルリシジミテフは成蟲まで越冬し、常に椶の在る處に飛揚し、又は椶の葉に棲止するを以て、何等關係のあるを知るも、未だ確證を得ざりしが、本年八月丹波國福知山町公園城山の椶の軟葉に於て、橢圓形の幼蟲數頭を捕へ來り、之を飼育したれば、蛹化し續き羽化したるよ、果してルリシジミテフ (*Arhopala japonica*, Murr.) の出でたるを以て、愈々其幼蟲の食物は椶なるとを知れり。又茲に最も面白き事實を發見したるは、其幼蟲を捕へし際、數頭の蟻の其背上に登り居ると、恰も貝殻蟲を見るが如し。其數時間乃至數日の後に於けるも背上を去るとなく、特は其幼蟲を保護するが如し。幼蟲も亦少しも其蟻を嫌ふ模様をければ、或は幼蟲の躰より一種の甘味を分泌する爲め蟻の來るものならんか、是れ恐らく蟻と蚜蟲の如き共同棲息を爲し居るやも知れずと信ず。後日の研究を保ちて更に詳報せるとあるべし。

(廿二) ゲジとクモの昆蟲捕食の有様 曾て某所にて、洋燈の許に一頭のゲジと來り居るを以て、親しく注視したるに、圖らずも一頭の二化生螟蟲蛾の飛揚し來りて其近傍に棲止したるよ、ゲジは一躍して其蛾を飛び乗り、澤山の足にて少しも動くとの出來ざる様に抱き、然る後蛾の頭部より食し

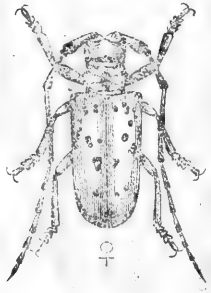
始めたるを見たり。又此頃ハイトリグモの頻りユグラス障子に於て、小形寄生蜂を捕食せんとせしも、一度も捕へしを見ず、如何なるとなるやと親しく接近して見たるに、蜂はグラスの反對面を歩行するものなればなり。是れ恰も猿の水面に影トたる月を捉ふるに異ならず。實に面白しと云ふべし。

(廿三)蜻蛉の群飛 宮林桂次郎氏の談話に依れば、本年八月十二日のとありき、愛知縣三河國渥美半島に於て、同日午後二時より三時迄の間、渥美郡小塩津村より和地村に至る内に於て、蜻蛉の西に向ひて群飛すると實に無數なり。其高さ六七間、群飛の始めは未詳なれども、和地村にて全く終れり。此時常々西風吹き居れり。而して蜻蛉の種は不明なれども、大形黃蜻蛉ならんかと云へり。

(廿四)ホシベニカミキリムシ(斑點紅色天牛)の分布に就て 第一回全國昆蟲展覽會出品目錄中、分類標本百六十八に出せるホシベニカミキリムシの學名は不明ありしも、其後の調査にて *Scotinoides diplovisis*,

Page.なることを知れり。又同目錄の内にある産地は、三重縣志摩郡大矢圓三郎氏 *ホシベニカミキリムシ*の圖並に愛知縣渥美郡宮林桂次郎氏によりて、兩縣下に産することを知れり。其後知り得たる所を列記せば、長崎縣對馬國嚴原久田道町平田駒太郎氏卅五年中より十

數頭、山口縣美禰郡伊佐尋常高等小學校安永源吉氏三十五年七月、鳥取縣西伯郡成實村生田英雄氏三十五年九月、又同縣岩美郡桂木村山田豐藏氏同年同月、愛知縣渥美郡堀切高等小學校卅五年六月二十日、同縣同郡高松村福井信太郎氏同年七月廿日、同縣同郡野田高等小學校同年六月九日各一頭を寄贈せらる。其



の後本年五月愛知縣寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會の節出品中にあるものを見たるハ西浦村一月廿日、大塚村三月四日樹間鈴木勢次郎氏、同二月四日樹間稻石佐市氏、同三月十三日樹間大須賀繁彌氏、同三月五日樹間上村豐藏氏、靜里村二月十四日芝の中、形原村二月十八日樹中、國府高等小學校三月卅日山、三谷町十月十日草、同三月二十日木、其後國府、御津の分各一頭宛寄贈せられたり。以上の分布を見るに西は長崎、山口、鳥取を始め三重、愛知の五縣下に於て目下分布せるとを知れり。然るに茲に奇なるは、何れも海岸に接する所に於てのみ發生するは、或は海岸に生ずる樹木と關係し居る哉疑ひなし。目下夫々調査中なれば、近き内は如何ある樹木を食害するかを知るに至るべし。又獨逸にて出版したる日本産甲蟲目錄中には、對馬に産することを記せり。今其大さを測定せしむ、十八頭中最大のものハ八分五厘にして、最小は六分五厘、其平均大は七分六厘なることを知れり。色は其名の如く紅赤色にして、不

規則なる黒點を現せり。該蟲は成蟲にて越冬するとは明かなれども、又七、八、九、十月に於ても採集し得たるは、特に注意すべきとあり。願くば海岸接近の諸君は大ひに研究の上續々報告あらんとを希望し、終りに望み標本寄贈の諸君に對し深く其厚意を謝す。因に記す、其後三河國寶飯郡の田中周平氏よりの報告に依れば、多分ダマガスの樹に發生するもの、如しと。

(廿五) ムチビロゴキブリの分布 前號の本欄(十八)の所よ、ムチビロゴキブリの分布に就き記し置きたるに、其後知りたるは神奈川縣中郡西川豊次郎氏、并に尾張國名古屋市谷てい子、同平野はな子、同鈴木まさ子、同中島い子の諸氏より寄贈せられたるを以て、普通ゴキブリに對して愈々分布區域の廣さを知るに至れり。

(廿六) 豌豆象鼻蟲の羽化 本誌第七十號の本欄(六)の所に、豌豆象鼻蟲の産卵と題して、豌豆内よ於て越冬する趣を記載し置きたるに、九月下旬に至りて羽化し豌豆内を出でたるも、全く成蟲にて越冬するとは明白なる所なり。

(廿七) イナゴのフライ 此頃市立名古屋高等女學校卒業生の組織したる松操會主催となりて、昆蟲學講習會を開かるゝ際し、圖らずも昆蟲翁は同會の依頼にて講師の任に當りしが、同會は萬事少數の委員諸子の奔走に依りて、恰も痒き處へ手の届く迄に獨立自治の發達し居り、常に委員の手を成れる西洋料理の晝食を與へたるに依り、試みに委員に向ひ、願くば次回にはイナゴのフライの御馳走を預りたしと言へるよ、速に承諾を得たり。故に次回に至るを俟ちたるよ、果して委員の手にて採集し、且つ調理せられしものを供せられたれば、二三の方々と共に試食したるよ、實に美味なるを互に稱賛せり。尚澤山の品をも貰ひ來りて、當研究所員一同分與したるよ、皆々大ひに喜び合へり。

(廿八) コウカバへの寄生蜂 助手森宗太郎の本年九月中に於て調査したる所のコウカバへの寄生蜂は百頭の蛹中より九十七頭迄出でたるを以て、漸く三頭丈成蟲即ちコウカバへ羽化したる割合なり。又一頭の蛹より寄生蜂の出づる數は廿二、三頭を以て普通となす。

(廿九) 稜黑横這の腹中卵數調査 長期講習生渡邊樵四平氏は、本年九月廿三日ツマガグロヨコバイの腹中にある卵數を調査したるに、十五頭の内卵子なきもの二頭あり、他の十三頭中卵子の尤も多きものは三十四個、尤も少きは七個、一頭平均十六個強なりとす。

(三十) イチモジハナセセリテフに就て 本年九月八日午前六時、當研究所内の朝顔、雞頭等の花に、

澤山のイチモヂハナセリテフの來りて頻りに花蜜を吸收するものを見たり。普通の蝶よりは比較的早朝より飛び來ることを知れり。又ヒラタアブの一種も同時に來りて花蜜を吸收せり。

◎昆蟲小感(一)

岡山縣 福井 克 雄

螟蟲に對する敵蟲 害蟲に對する天然驅除の有力あるとは屢々本誌に記載せらるゝ所あるが、如何に入爲の驅除を遺憾なく實行するとも天然の驅除者を等閑に付せば、折角の驅除も徒勞に歸する事あるのみならず、驅除すれば反て害蟲増加の奇態を顯出するの不幸に遭遇するとなさにも有らず。斯の如き場合は、多く天然驅除を等閑に伏したる罪多けれ、されば害蟲驅除を爲ると同時に天然の驅除者を充分探究し、以て之が保護の方法を講ぜざる可からず。余は去月廿二日稻の螟蟲被害如何を調査せしに、敵蟲たる寄生蜂多きを驚さし。今一端を左に記さん。

(一)被害稻莖總數 七一。内、被害莖にて螟蟲の居らざるもの 四六。寄生蜂の寄生を受けたるもの

二〇。完全なる螟蟲蛹化せるもの 五。

(二)被害稻莖總數 五〇。内、被害莖にて螟蟲の居らざるもの 一五。寄生蜂の寄生を受けたるもの

二一。完全なる螟蟲蛹化せるもの 一一。螟蟲にて未だ蛹化せざるもの 一。甲蟲の仔蟲を咬殺されしもの 二。

以上成績中第一の試験に於ては螟蛾とある可き蛹僅に五頭、第二に於ては十一頭。幼蟲一頭、由之觀之、現在螟蟲六十頭に對し、敵蟲は斃されしもの三十九頭、生存せるもの僅かに二十一頭。敵蟲の効實に偉大なるを知る可し。右の試験は單に一部の事なれば廣く一斑を推究し難しと雖ども、又有益蟲の力大あるを証するに足るかと思はるなり。然れども讀者に對し、此調査杜撰の譏りを免れずと雖ども、唯繁忙の際一部を報導したるものなれば、幸に諒とし以て讀者諸氏に深く研究を冀ふ所なり。

前記寄生蜂は當時結繭して蛹化せるもの、及び宿主たる螟蟲の肌肉を辭し去て莖中に出で結繭中のものもあり、又螟蟲一頭に對し寄生蜂一頭のものあれば、數頭寄生せるものもあり(勿論種類は異あれり)、繭の淡黒色のものあれば白色或は淡褐色のものもあり、孰も之を飼育せしに數日の後羽化小蜂を得たり、其種類は五種にして、一々記するは無用にあふざるも、そは他日譲り茲に大要を記し讀者に報す。

◎讀者諸君に望む

蟲廼家蟲奴

我國に於ける昆蟲界を通觀すれば漸次變遷し來り、目下の状態を以て察すれば、慥かに其度を増したる事は獨り余のみならず一般世人も之を認知する所なり。之れ斯學界の爲め、又國家の爲め誠に憂すべき事と也。然り而して此變遷の結果は、昆蟲學なるもの、種々なる科學に應用され着々其効を見るものあり近時害蟲の驅除豫防より益蟲保護の事に亘り、之が奏効を完からしめん爲めに、國を通じて昆蟲の躰制より發生經過の状態を研究する人々其數を増加し來り、其良法を發見せんには是非此力を藉らざる可からざる事を認識するに到りたるなり。從て今一面に於て、古來より施行し來りし害蟲驅除の方法として各所へ行はれし御札あり蟲送りなりの所謂舊式的驅除豫防あるもの、状態を見れば、其の變遷は伴ふて全く迷信的驅除豫防法なりと呼唱され、一般に排斥するに到り之が脱破を爲さんとの聲各所に起り、既に某所に於ては全く之を廢止せし所あるは本誌上にて了知せり。今余は此所謂迷信より起りたりと呼唱する舊式的驅除豫防方法に就て研究するは、強ち無益の業にあふざるを信じ、此所に讀者諸君に向て其が材料の蒐集を大に屬望せんとするものあり。そも此研究を試みんとする要旨を簡單に言へば、果して一般に是認する如く、所謂舊式的驅除豫防の方法が、害蟲驅除豫防上全く無効として排斥すべきものなるや、或は其方法中取るべきもの、存在如何を究むるありとす。而して今時斯の如き言を免角するは甚だ愚笑すべき至りありと雖も、余は慥は是等に就き研究し置くは後來害蟲驅除豫防の一大方針を定むべき上に於て大に參考とすべき事柄あるを信ぜればなり。されば讀者諸君の地方に於て、御札を以て驅除豫防を爲すの方法、或は蟲送り施行方法及び其起原、變遷等も就て調査し、續々報告せられん事を望む。尙終りに望み昆蟲翁が本誌第七卷第七十一號雜錄欄中、昆蟲に關する隨感隨筆(十四)中に記述されし如き、昆蟲に關する俚諺をも共に希望に堪へざるなり。

◎螟蟲驅防獎勵展覽會準備記事 (第三)

蟲の家主人

(一六) 稻白穂中の螟蟲數 本年九月廿日、稻白穂百莖中の螟蟲を詳細に調査したる所、一莖中平均十五頭強を得たり。其後同月廿六日の調査に依れば、一莖平均十頭強、尙其後十月三日調査の結果は、實に一莖平均漸く七頭許に減せり。是に依りて考ふれば、日は一日と他莖も移轉蝕入するの實證なれば、白穂切取は出來得る限り速に實施するを以て利益あることを知るべし。

(一七) 切取白穂の槌撃 切取りたる白穂の所分に依り、殆んど無効に期するとあり、即ち切取りたる白穂を澤山堆積せば、螟蟲は醱酵熱の爲に外部に這出するを常とす。故に土を掘りて稻莖を埋没するも、亦螟蟲の這出する患ひありと云へり。茲に於て石炭油を散布して漸く稻莖を燒棄するものあるも、是等の方法は實に農家經濟に戻るを以て、決して奨勵すべき方法にあらざ。故に其切取りたる白穂百莖位を一束とし、兼て携へ行きたる槌を以て、地上又は厚き板の上にて百位づ、打てば、悉く螟蟲を死滅せしむるは容易なりとす。然る其眞藁を堆積肥料等に用ふれば、尤も經濟に叶ひたる簡便なる良法と云ふべし。

(一八) 螟蟲の稻莖中に潜伏の數 中野壽郎氏の談話に依れば、淡路國三原郡に於ては、三化生螟蟲の殆んど刈採中に潜伏し居るも、二化生螟蟲に至りては、普通は於て、平均藁中に五頭、株中に四頭、刈取の際に於て一頭は死滅する割合なりと云へり。是等の試験は各地方に於て、詳細に施行の上續々報導あらんとを希望す。

(一九) 螟蟲蛾の燈火に飛集する力を測る理想的試験法 誘蛾燈に對して、螟蟲蛾が如何なる距離に至る迄飛集するものなるやの間に明答するとは、實に容易の業にあらざるなり。先づ光力の種類(普通洋燈、アセチリンガス等)并に其強弱、螟蟲發生の多寡并に其遲速、發生地の廣狹、温度の高低、風の有無并に其方向、天氣の晴曇并に月の有無明暗等と關し、決して一様に論ずると能はざるべきも、今假に是等の事情は別として、其燈火に集り來る所の力を測るには、海岸又は湖水近傍に於ける、螟蟲發生地を見出したる後、水面に船を泛べ、或は岸を離るゝと十間、或は五十間、或は百間と適宜に位置を定め、点燈して蛾の來るを俟つも宜しからん。尙別法として廣き田面の中心に、点燈すべき位置を定め、然る後夫を中心点として十間、五十間、又は百間等適宜の距離に圓形を劃し、然る後豫て數百頭の螟蟲蛾を附着し、勉て健康なる雌雄五十頭宛、即ち百頭宛甲乙丙の三組を作り、甲の百頭には翅の左に色素を附着して十間の所に、乙の百頭は右の翅に附して五十間の所に、丙の百頭には翅の上に附して百間の所に適宜放置し置き、時期の來るを俟て点燈し、其蛾の來るものを調査せば意外に面白き結果を得るやも計り難く想像し得らるゝが、實際に於ては果して如何、大方の諸君是等實驗の成績續々報導あらんとを希望す。

(二〇) 被害甚しき筑後地方の螟蟲豫防に就て 福岡縣の老農益田素平氏は、近頃福岡日々新聞に左の一編を寄書せられたるを以て、參考の爲め茲に轉載す。

例年多少の螟害を受けつゝありし我筑後地方の早稲は最早成熟し、中稲も殆んど半熟晚稲も亦出穂し、目下の景況に依れば、早稲には浮塵子の被害多少ありしも、過る卅一年の豊作に比し增收あるも劣る事はあるまじき見込にて、麥等凶作の爲め農家の愁眉は今や笑眉を以て變じたり。加之本年の如き螟害の僅少なる事は、余輩の記憶せし四十餘年間通もあるまじきと思ふ、畢竟昨秋來螟蟲豫防法稻株切断等に就ては其筋の監督非常に厩きしと、一旦縣令の發布ありし稻株掘採を切断に變更されてより、施行者たる町村長諸氏も競て獎勵せし結果と、昨冬來季候の關係によるからであると思ふ。一體三化性螟蟲は濕氣を好みて乾燥を嫌ふ性質なるも、昨冬來當春化蛹の頃まで非常に降雨多く、冷氣も加りて濕氣過度の爲め螟蟲生育を害せられ、次で第一回第二回の發蛾期も亦風雨冷氣の爲め發育不良、故に第一回第二回の發蛾期は例年に比し殆んど三週間をも後れ、其後溫度非常に高くなり發育十分なりしも、詰り最終第三回の發蛾も亦例年より二週間内外を後れたるにより、從來被害の本場とも言ふ八女郡の西部及三藩郡、山門郡の北部に於ける早稲に就ても容易に穂枯を見ず、是れ第二回と第三回との發蛾の中間に早稲は出穂し、知らず逃げ作法に適したるによるべし。大概早稲の出穂の頃は該蟲は眠期に屬するものなるにより、全く早稲の莖中には喰入するの螟蟲はなきかと言ふに、間にはなしとも限られず、該早稲の白穂ならざるは三化性螟蟲の第一回の發れしものが點々中節以下に喰入せしにより、矢張穂には顯れざるものあらん。是等の事は本年の實況によれば、或は地方によりては簡便有益の螟蟲豫防法たる、稻株切断を不必要と唱ふる者もあることごとくを聞く。我國農民の短所として、兎角今の世に於て格別必要ならざる舊慣と墨守し、嶄新有益の事を實行するに躊躇するの風あり況してや螟蟲豫防の如き公共的事業に於ては、尙能はざると多し。稻株切断は實に公共的事業にして、其効果の著しきことは、余が數十年來の實驗に徴し疑なきは、一般農家も亦認めて、今や漸く一の良習慣と爲さんとする曉において、本年害の薄きを口實として萬一該切断を中止する事共あれば、國家の不幸此上なき次第にして大嘆、随分込み入たる事なれば、普通の農家にては解せざるもの多からん。又三化性でも必らず三化するに限りず、二化して後其年は其儘越年して翌年に害を残すものもある、是は過る三十三年余が佐賀縣へ奉職中發見し、幸ひ當時同縣巡回の大塚九州支場長へも實地及實物を一覽に供したり。前陳の如く三化性の二化の儘越年せしもの、本年とても間々之あるべし、目下第三回の害を受けるものは中稻(二百十日頃より二百廿日頃)にて出穂の分にして、點々白穂又は半熟の穂となる。第一本年輕き害の内にも割合に多かるべきは三藩郡及八女郡の西部、其他山門郡の幾部、三井郡の南部の地にして、晚稲に白穂又は莖穗を生ずるなるべしとおもわるゝも、當年だけは損害と言ふ程の事には至らず、大概二十分の一乃至十分の一位のもの多からん。然るに息を爲さざるを得ざる次第である、廢止するは易し、眞實に再行するは難し、若し良習慣となるにあらざれば必らず將來に於て穂先のみを抜きざる等の形式に流るゝ惡弊を生ぜん。先覺の確言に、驅除の百分は豫防の十分にかゝす、又油斷大敵とせば此等の事を言ふならむ。該蟲を豫防するは、恰も國家が其の國の安全獨立を保護する爲常に、陸海軍を備ふると同じ道理にて、該蟲の蕃殖を防ぎ得べきだけの常備を成し置くは、稻作保全の上に欠くべからざるものである。

◎ 稻の害蟲クロクサガメムシの驅除法

第八回全國害蟲
驅除講習會學生

和歌山縣

大野宗一

昆蟲世界第五卷第五十號の口繪に其圖を載せ、次號に於て名和梅吉先生が「多く九州、四國、紀伊地方の稲田に發生して痛く作物を加害するものにて、農作上特に注意をべき害蟲の一とす云々」と説かれたるクロクサガメムシは當地方言クロナゴと稱し、年々其影を見ざるなく、本年も亦夥しく、目下孵化時代なり。

該蟲の驅除法に就て未だ完全良好なる方法を發見せられざるもの、如し。驅除劑、捕蟲器を用ひ得べくと雖も、寧ろ手を以て一々驅除するの經濟的にして、安全に且周到あるに及ばざるは予の確く信ずる所なり。殊に幼童婦女子の作業として尤も適當にして、枯莖切取の如きよりも尙易々たればなり。

稻稍成長して尺に至る頃、日暮風に乘じて山林より群をなして飛來るや、加害中は毫も飛散するなく、重に日中は稻株の下部水に接せる邊に潜み、大陽西に傾く頃葉先に出づ、舉動活潑なれども抵觸すれば死を真似て水上に落つ。

之を驅除するには、靜かに葉上のものを捕殺して後株中を探索すべし。該蟲は少時間水中に潜む力ある故、根部には特に注意を拂ふべし。採卵は尤も必要にして其効多大なれば是非行はざるべからず。産附の場所は一定せず、葉の表にあるあり、裏にあるあり、上部もあり、下部にありて甚だ不規律あれども卵子は二列併行して其數大抵十四なるもの、如く、又は二乃至三塊同所に産附しある事もあり。之が驅除は指先にて捻殺するが第一早けれども、多く捻る時は指先樺色とあり痛みを生ずる者なれば、摘採して麥酒瓶の如き器に投下するをよしとす。

該蟲驅除上鷲を使用するは當地方に於ける近來の流行にして、實際効驗あるものなり。されども親鳥は田螺、鱒の如きものを餌りて椿象は餘り目を着けざれども、雛はよく捕食するものなれば、之れを以てするを可とす。又假令捕食少量なるとも水田に浮遊さすれば、株の下部に潜める該蟲は、自然上部に出で來るものにて、驅除するに甚だ便利を感ずるものあり。然れども彼にのみ放任せずして、己が助手として共々、勉めざるべからず。然して彼は鶏と等しく農家の副業として利あるものなれば、一家各數羽を飼育して一舉兩得の益を得られたるものなり。尙一歩進んで一區内共同飼養し、驅除上に使用するの法を設けおば又妙なる光か。

尙一言すべきは、捻殺の際液汁の眼に入らざるやうにする事なり。若し誤つて入る時は痛み甚だしく、
嚴重しきは一週間以上も癒へざる事あり、吳々も注意すべき事よころ。(八月一日稿)

編者云、該蟲に就ては本誌第二卷第十六號に於て中川久知氏の詳説あり、特に其卵子寄生蜂の如きは最注意を要すべき事なりと信ず。
而して大野氏の驚使用云々は却て稻作に害あらざるなきやを疑ふ。尙其他に於ても該蟲發生地方の諸氏は十分なる試験と觀察を以て
研究せられんことを望む。

◎薄荷の一大害蟲なる青蟲の幼蟲に就て

備後國福山東町 山田惠喜太

我が三備地方は、奥羽地方と共に貿易作物なる薄荷の本場とも稱すべき地方あるが、三番草よ青蟲發生
し、本年は殊に猖獗を極め、一坪内に數百疋と云ふ有様よて、青葉を食害し甚しきは中肋のみとあし、
其の損害鮮少なうざるを以て、至急標品を具し、東京西ヶ原農事試験場宛種々問合せしよ、小貫學士の
調査よより名稱、科名、驅除法等直に應答を得たれば、斯學研究者の參考の爲め左に附記す。尙本害蟲
の經過につきては、試験場よ於ても經驗なきを以て詳報するを得ずとの事なりしが、將來薄荷の害蟲と
して研究すべき價値あるものと信ぜるを以て、予は目下飼育實驗中なり、何れ詳報すべき時あらん。幸
に斯學研究の爲め、本蟲御入用の諸君に御通知次第直よ送附すべし。

科名及名稱 本蟲は鱗翅類夜盜蟲科擬尺蠖亞科に屬するものにして、稻大青蟲に頗類似せるものあり。
和名は薄荷の青蟲とも稱すべきか(小貫學士調査)。

發生 早は九月上旬、晚きは下旬頃孵化す。生育盛ある薄荷よ多く、殊に人家の周圍等陰濕の地に多し。
形態 孵化當時は綠色を呈すれども、漸次黃變し、蛹化前には半透明の帶綠淡黃色となる。蛹化前は
一寸三分の長さとなり、直径二三分の太さとある。十二個の關節より成り、背面に六條の白色線あり。
氣門線は帶黃白色を呈し太くして明亮なり。九對の氣門を有す。脚は鉤狀の胸脚三對、吸盤狀の腹脚二
對、尾脚一對合せて六對を有す。口は咀嚼に適し、口邊に一對の觸鬚あり、全身處々に微毛を存す。
驅除 幼蟲、蛹を採取し、又朝露の有る時除蟲菊粉一、石灰四(容積)の混合粉を散布せば有効あらん(小
貫學士の説)。

編者云、該蟲は Plusiidae に屬するものにして、常に胡蘿蔔に發生して其葉を甚しく食害すれば、同植物に就ても注意せられよ。特
に奇態なるは此螟蛉一頭に寄生する微細なる蜂は常に數千頭なるにあり、こは一頭の母蜂の産附するものなりや、又數頭の産附せる
ものなりやは疑問なり。當所に於ても是等試育研究中なれば追て報告する時あるべし。



◎博覽會出品害蟲標本及調査解説書(三等賞)

香川縣農事試驗場

解説書

部類 番號 品名 出品人

香川縣農事試驗場

材料 此標本は明治三十三年四月より同三十四年七月に至る製作よして、何れも農家に慘害を與へつゝあるは論を俟たず。而して其害蟲は概ね本場の耕作地、其他附近の田畑、或は草間よ於て採集したるものにして、之が飼育の結果によるものあり。

審査請求の主眼 近來害蟲の多く發生するに伴ひ、世人其恐るべきを漸く覺知するに至れりと雖も、今尙頑迷固陋の輩は、往々害蟲の多くは自然地中より湧出するもの、如く、飽く迄之を墨守し、敢て疑惑を解するの意なく、徒らに魔術的の發生する者と誤解し、遂に其繁殖蔓延を看過し、一朝其猖獗を極むるに至りて、狼狽唯よ其驅除を神佛に依頼するの愚を演ずるものあるを見るは、怪訝に堪へざる所なり。故に此標本を世に紹介し、以て斯る人智未熟の輩は、一般の害蟲は必ず親ありてころ初めて生ト、斯る經過習性の基に發生繁殖出顯するものあることを確信せしめ、強て之が害蟲の志想を惹起せしめんとするものにして、且一方に於ては本縣下に於ける害蟲發生の一端を知らしめ、農用昆蟲學攻究の資と供せんとするにあるものにして、即審査請求の主眼とする所なり。

解説書

部類 番號 品名 出品人

香川縣農事試驗場

八類 二 二化性螟蟲調査表

本場に於ては爾後年々繼續し、其發生の狀態及分布等を調査しつゝあるものにして、即ち三十四年は前年に比し稍發生の少なかりしやの感ありしと雖も、殆ど相彷彿たり。三十五年は單に三豊郡を除くの外一般極めて發生少く、殆ど被害を認ざる程にして、其發見の當時より今に至る迄元より其發生の多少はありと雖も、新たに發生侵蝕の町村を認めず。是即其以來蔓延の増加を認めざるものにして、此の分布圖は既往三ヶ年間調査の結果によるものとす。

審査請求の主眼 本縣下に於ける三化生螟蟲は今や幸よ其發生全部に亘らざるを以て、著しき被害を見るに至らずと雖も、此時は際し等閑に附すれば他日甚しき蔓延を來たし、大に被害を極むる非境に陥るべし、依て農家は其未だ事の小さな臨んで、其現在分布の狀態を明くにし、今現に發生地は之が益驅防に努め、其發生地の附近及其他に於ては飽く迄其害蟲の侵入を未發に防遏するの覺悟あらしめんと欲するにあり。これ審査請求の主眼とする所なり。

◎博覽會出品害益蟲標本解説書 (三等賞) 兵庫縣 東郷隆次

部	類	番號	品名	出品人
一	八	一	害益蟲標本	兵庫縣神崎郡船津村
				東郷隆次

製造地 兵庫縣神崎郡船津村。

採集地 兵庫縣下。

製造用品 器具には捕蟲網、採集用携帶箱、毒瓶、展翅板、仔蟲箱、ビン其他雜具、藥品には那布答

林、靑酸加里、ホルマリン液、酒精、アラビヤ護膜、タラカント護膜其他雜品。

製造方法 先捕蟲網を以て採集せし昆蟲を毒瓶中に投じ、或は酒精を蟲体中へ注入して殺す。之を標

本に仕上ぐるには卵及蛹は熱殺し、幼蟲は毒瓶(靑酸加里)中へ投入し、全く死歿したる後腐敗を防ぐ爲

め臟腑を抜き去り、防腐劑を施せし綿若しくは之を代用すべきものを填充して原形の觀を呈せしむ。成

蟲は展翅板に掛けて觸角翅脚を整理し、乾燥するを待ち保存箱に移す。小形の昆蟲にして臟腑を除却するの要なきものは、タラカント護膜にて厚き臺紙に粘附す。

沿革 明治三十年害蟲稻田に發生し、非常の慘害を來し、上下之が驅除豫防に狂奔すと雖も、昆蟲よ

關する知識未だ一般に幼稚なるを以て充分に其効を奏すること能はざりき。爰よ於て余は昆蟲研究の志を起し、我郷里及郡内に於ける諸種の蟲類を採集し、昆蟲に關する書籍に對照して日夜研究したりと雖も未だ其目的を達すること能はざりき。偶、岐阜縣に名和昆蟲研究所起り、雜誌昆蟲世界を發行せらるゝ及び該誌を購讀し、該所發行の圖書について研究を重ね、三十四年同所開設の講習會に出席し大に得る所あり、其後昆蟲採集の範圍を縣下に及びし、名和氏について質疑研究を重ね、以て今日及べり。効用 昆蟲の農作物に及びす利害の重大なる事は今更喋々を要せず、近時漸く此思想の一般農民に普及せんとするは大に喜ぶべき現象なりと雖、益蟲と害蟲とを區別し、或は是等を驅除保護するの法に至りては未だ幼稚なるを免れず。此時に當り之が指導をなすもの、徒に言辭のみに依る時は聽者に感動を與ふること容易の業にあらす、若し之を補ふは害益蟲の標本を以てし、且つ實物に依て其の變遷を示す時は聽者の頭腦に印象を刻すること深く、從て驅除の方法を勵行するに躊躇せざるべきは信じて疑はざる所なり。然らば即ち昆蟲標本の農業界に大効ある事は敢て多言を要せざるあり。

審査請求主眼 害蟲の驅除豫防を全からしめんと欲せば其の發生經過を知らざるべからず、故に余は重要なる害蟲に付ては各時期の状態を炳然たらしむる爲め其順序を駢置し、其の有益蟲は保護すべきことを知らしむる爲め重要なる種類を集め、且つ自家の飼育研究したる寄生蜂をも示したり。而して標本は凡て昆蟲學上の規準を守り必ず雌雄の別を示し且つ其配列製作保存等に大に注意を加へたり。

◎博覽會出品害蟲標本解說書(三等賞)(續) 静岡縣 神村直三郎

一、飼育方法及器具 完全の標本を得んにも、亦變體經過を知らんも飼育をなすの必要あるを以て余は左の方法に於て飼育を試みたり。第一は箱内飼育あり、これは多く鱗翅類を用ふ。先づ方一尺、高さ二尺位の行燈形の箱を製し、前面にガラスを嵌めて開き戸となし、後面は堅固をはかるため板を以て圍ひ左右をば寒冷紗を以て張り、下は抽出しを付け置くあり。此中へ一個の小瓶を据へ、これに水を湛へ、食草を挿し、幼蟲を放つ。水盡くれば加へ、草枯れば代へ、其抽出しは積る糞粒は時々之を排除するなり。小形の幼蟲に至ては此箱に代ふるにガラス蓋の小箱を以てするも亦ランプホヤの兩端を寒冷紗にて覆ひたるものにて可なれども、斯くては食草を日々取り代ふるの煩あれば余はこれを取らず、尤も繭を作り、蛹と化したるもの、羽化を待たんには至極簡便なれば、専ら此法を用いたり。斯くて箱

内にて幼蟲の老熟したる時は繭を營むものあり、又天蛾類等は其色彩に變化を現はすべければ、此際濕砂を盛りたる化蛹器に移し化蛹せしむ。此器は幅四寸、長六寸、深さ三寸位の木製にして、不絶濕氣を與ふるを要す。此器の蓋はガラスを可となす。一器一種を限り、其品名を記し置くべし。一定の時日を經過すれば羽化し出づ。次には瓶内飼育あり、甲蟲類、有吻類の幼蟲にして地中にあるものは、これを瓶中に養ふなり。其法は濕砂を瓶に盛り、幼蟲を放ち、食物の知られたるものは之を與へ常に平等の濕氣を保たしむるを要す。かくすれば化蛹し、次で羽化するものなり。其瓶内に入る、砂は、可成其幼蟲生息の地より取り來る土を可とす。又テツバウムの如きは其幹部を切り取り、根部を淺水に浸し置く時は化蛹して成蟲に化す。此外貯穀の害蟲の如きは、少しく空氣を通ずるの裝置をなし置く時は、ガラス瓶中にても充分の經過を見るを得るものなれば、予は此法を用ふ。

一、製作法及藥品器具

(一)展翅式、鱗翅類の成蟲及蜂などの如く、開翅の必要あるものを展翅板上せて製作するの法なり。此展翅板、桐の板の中央に溝を設けたるものなれど、普通のものは一木を以て中に溝を穿ちたるものあるを以て、其溝中を針を植つること數々なれば遂には破損するの恐れあり、因て予はこれを改造して、底部をば横板をうちつけて製したり。其板及溝の廣さは、蟲体は應じ數種異なるものを要すれども、溝の深さは五分と定む、これは保存箱中に藏むるの便を計りて定めたるなり。其方法を簡單に云へば、先づ開翅せんとする蟲体に一本の針を背面より胸部に刺し、次に腹面に一枚の厚紙を添ふ。これは其腹部の下垂を防ぐがためにして、其紙の巾は溝の巾を斟酌して適宜に定むべし。次に蟲体を溝中に藏め、兩翅を水平に兩堤に擴張せしめ、紙片を以て之を壓しつけ、脚は腹下の紙上に整へ、觸角は翅と水平に之を整ふ。兩翅を開くの度合は前翅の後縁、左右一直線をなすを度とす。後翅は殆ど全部を見得る程となす。されど此法よして美的形態を欠くの觀ある時は、上下に斟酌をなす。かくてこれを乾燥箱に收むるにあたり、其採集年月日、及飼育に係るものは羽化の年月日を蟲の傍に記し置き、充分乾燥の後、又これを復面に添へたる厚紙の裏面に轉記するなり。此時採集地名を記入して置けば、大に後の参考となる。此年月日及地名を記入することは、以下の製作法よ於ても皆同様なれば一一記さす。

(二)貫針式、大形の甲蟲類及バッタ類には此式を用ふ、甲蟲は右の鞘翅の前胸に近き處に針を貫き、直翅類は甲蟲の如くなすもよく、又前胸部中央に貫くもよし。此式に於て最も重きを置くは脚の整理

なるを以て、予は展翅板の如き桐の板を用ふ。此板に二分若しくは三分の深さに極めて細き溝を穿つ。此溝中に針尖を收めて板上に蟲体を安置し、留針を以て其脚を整ふるゝ意の如くならざるはなく、角を整ふるにも此の不便なし。天牛科の觸角は後方へ背面を走らす時は、固く締りて位置を保つゝ便なり。直翅類は此際貫針の前に當りて其腹部を切開し、汚物を排出するを要す。然らざれば變色腐敗の恐れあれば、予はつとめて之を出せり。

(三) 貼附式、小形の種類を厚紙の臺紙上に糊付となすの式なり。紙は名刺を用ふるものにて足り、糊はメラカンドゴムを用ふ。これは塊状のものと粉末のものとの兩様ありて、予は粉末のものを用ふ、其の溶解速にして曇りも少し。これが腐敗を防ぐには昇汞水若しくはナフタリンを用ふ。後者の場合はナフタリンを粉末となしゴムの粉中の加ふ。かくて水を注入して溶かすは數十日の後尙些しも變色を見ず。さて蟲体を貼附せんとするには、先づ毛筆を以て前記の糊を紙上に塗り、其上にかねて觸角及脚を整へたる蟲体を据へ、柄付針を以て姿勢を整へ、開翅の必要あるものは此際翅を開張す。乾燥後は臺紙の形狀を正し、蟲体の後部に針を貫き、尙裏面よりアラビヤゴムを以て固定す、年月日等を記すは裏面なり。

(四) 吹脹式、幼蟲の製作に用ふ、先づ内臓を肛門より出すに腸の一部脱肛せるを少しく殘して切り、徐々に汚物を揉み出す。次に吹脹器の一端に附しあるガラスの細管を肛門より挿入し、其殘し置きたりし腸の一部を絹糸にて括るなり。次に酒精燈上を翳して徐々に空氣を送り乾燥す。後管を抜き取り臺紙上に固定す。其固定法種々あれども、皆効を奏せず。因て予は仔蟲の脚を真綿の如き纖維にて纏ひ、其纖維の端を長くし、紙上に貼附して試みしは大に効あり、動搖するも轉落の憂なし、今回出品の固定法は全く此式によれり。

一、乾燥及選擇 以上製作したる標本を乾燥するには、余は乾燥箱なるものを用ふ。そは普通の保存箱より稍深き箱を備へ、底部全面に多量のナフタリンを散布し置き、展翅したるもの、其他の標本を此箱中に收めて乾燥するなり。此法によれば、比較的迅速に乾燥し、又肥大の体を有するものもよも腐敗等の恐れ更になし。多數の標本中其種類を代表するに恰當なるものを選択するの必要を感じ、大小種々あるものは其中間大のものを採用し、又氣候によりて變形の著しきキアゲハテフの如きは、其春生、夏の兩種を採りたり。其他凡ての種類、雌雄によりて大小の差あるものはこれを現すにつとめ、班紋、光

澤等あるものは其全部をしかも鮮明よ、完全に、且美術的に觀者をして満足せしむることに努めたり。

(未完)

◎昆蟲に關する葉書通信 (第三十四報)

(二〇二) 昆蟲小實驗(丹後國宮津町大黒山別荘にて、田中五一、同健太郎) 余等二人廿三日の朝、枳

殼の木より鳳蝶の幼蟲を採集し來りて之を羽化せしめんと、蠅帳の中に入れ置きしに、一頭のクヒキリ
バッタ入り來りて幼蟲の尻に喰ひつきたれば、幼蟲は臭き角を出したるも、遂に次第に喰はれたり。そ
れより其以前キリギリスの飼料に、死したる蛾又は小さきネギバッタを與へけるに、皆喜びて喰ひけり
(八月廿六日附)

(二〇三) 稻の枯莖切取數(羽前國北村山郡、村山榮太郎) 本郡に於ては、今夏第一回螟蟲驅除として

被害稻莖を拔除せしめたるに、二十四ヶ町村の内、最も多きは五十四萬莖以上に達し、總數二百七十餘

萬莖に及びたり。而して本月一日より三十日迄、第二回の驅除を施行することとなり居れり(九月四日附)

(二〇四) 岩手蟲信第一回(岩手縣農事試驗場内、好園坊) 本縣の昆蟲學者鳥羽源藏君は、頃日早池峯

山に採集を試み、兼て花と蟲との關係を調査せりと。定めて珍しき報導に接するを得ん○苹果は綿虱少

く、結果宜し、人は春來高温の致すところなりと唱ふ。須く研究すべき問題なり○縣下上閉伊、紫波の

兩郡に、粟夜盜蟲發生し目下技術員出張驅除督勵中。(九月五日附)

(二〇五) 穀倉に於ける蟲害豫防法(愛知縣、田中周平) 愛知縣寶飯郡萩村長白井徳右衛門氏の實驗せ

し良法ありと云ふを聞くよ、同氏は數年前に考案をめぐりして穀倉を二つ設け置き、隔年に之を使用す

例へば初年收穫の米をば甲倉に貯藏し、次年收穫の米をば乙倉に貯藏し、此次年の米の貯藏の頃には、

初年の米をば残りなく賣り盡して甲倉の貯藏なからしむれば、第三年目に收穫したる米を甲倉に藏する

迄、一ヶ年間に害蟲餓死す。故に同氏の貯穀は穀象蟲、穀蛾等の被害これなしとぞ。麥其他の穀類をも
右甲乙二倉の内へ、右の順序によりて貯藏し居るといふ。(九月十六日附)

(二〇六) 日光白蝶の一產地(東京、岸田松若) 昨年九月十日、東京府南多摩郡高尾山裏山におゐて、
ニツクワウシロテフ一頭採集せり。遲蒔ながら本年は友人採集に行きたれど見當らずと。(九月十七日附)

岩田君、君が友人は何月採集に行かれしや、該蝶は土地の氣候により多少の差異はあれど、五月中旬頃最も多く發生すれば其頃採集に行かれよ、必ず獲る處あらん。尙一言望むらくは、今後書信に於て宿所を明記されんとを、これ調査上非常に困難なればなり。(分佈調査主任白す)

(二〇六)兵庫縣明石郡伊川谷村の蟲報(兵庫縣、井上藤太郎) 挿秧後一時甚しかりし螟蟲も、驅除勵行の結果、其害稀少にして好都合なり。之を反して浮塵子は、初發以來相當の驅除を施行せしも、目今に至り晚稻は被害最も甚しく、二三割の減收を見るに至るべき個所多々あり。(九月十六日附)

(二〇七)京都府與謝郡市場村の蟲報(京都府、山崎久藏) 一般稻作は良好にて豐年の聲高く、農家は之等に甘じて、除草後一向に本田の巡視を怠り勝にて等閑に付し、九月上旬即ち出穂當時に至り害蟲の飛行するに驚き、周章狼狽して其れを驅除をなすの有様、一向効力も顯はれず、又今年も半作とて啣つの農家多し、誠に嘆すべきことたり。當地方にて蕃殖盛なる蟲種はイナヅマヨコバヒ、ツマガロヨコバヒ等にして、目今ヒメトビウシカ、トビイロウシカ等發生せり。(九月二十三日附)

(二〇八)北勢地方の蟲報(三重縣員辨郡丹生川村、富田覺之助) 我三重縣南勢地方は浮塵子多少發生せるも、北勢地方は殆んど發生なき姿にて、少々の發生も先日の風雨にて撲滅せるが如し。昨今稻の害蟲としては、唯少數の二化生螟蟲あるのみ。(九月三十日附)

(二〇九)大風と昆蟲採集(在東京、長野菊次郎) 前略、大風と昆蟲採集てふ問題を解せり。即ち其前日は非常の大風雨にてありければ、樹木の梢に居りて、到底樹下よりは如何ともなし難き幼蟲も、大低地は拂ひ落され、思はず幼蟲の採集をなすことを得たり。其節トネリコを食する烏蠅の一種も手に入れり。此等は皆大風の御蔭なりと云はん。(九月二十七日附)

(二一〇)八町蜻蛉の分布と黄紋鳳蝶(鳥取縣東伯郡瑞穂村、竹信虎藏) 予は昨年九月、昆蟲世界第六十一號口繪を見て以來、八町蜻蛉が吾が鳥取縣には分布し居らずやと、常に注意せしよ、友人東伯郡服部村石龜一郎氏が、本年(月日不詳)居村田畔に於て雄一頭を捕獲せりとて予に示されたり。之を右口繪のそれと對照せしに、一の違ふ所なく全く其のものにてありき。依て同蜻蛉が本縣に分布し居ることを確めたり。黄紋鳳蝶の發生は本郡に甚く多く、昨今に至るも尙飛翔するを見たり。本郡にては之を新種として貴重することなるが、直に新種なるか將た昆蟲眼發達の結果近來之を見ることを得るに至れるか

疑はし。該蝶に就て、ブライアー氏は雌は中々稀である(本誌第六十二號)如く書かれたる由なれども、予が本年採集せる拾數頭の中、雄は僅に一頭あるのみにて他は悉く雌ありき。(九月二十八日附)

編者云、君の新種なる語は、新來種と云へる意なるが如し。果して然らば、恐らく貴説の如く昆蟲眼の發達せし結果なるべし。雌雄云々に就ては、凡て蝶類を始め、昆蟲の多くは皆雄蟲の多くして雌蟲の稀なるは、昆蟲學者のみならず一般の認むる所なり。さば云へ發生の時期により非常の差異あれば一様には斷言すべからざれば、常に採集して其平均を探らざるべからず。望むらくは其雌蟲二三頭贈られんことを。



雑報

●本號の口繪に就て

第十版圖は瓢蟲女史の筆よなれるものなり。同女史は從來圖書係補助として、屢々本誌挿圖の原圖其他の揮毫に餘念をかりしが、本誌第六十四號の殘菊の蜂語中にも一寸それとはなく記されしが、女史は本年二月、未來のアントモロギストを此世に紹介し、女史が社會に對する義務を盡されたのは誠に目出度い、之が爲久しく執筆されかつた、されど此頃當所は博覽會の出品物やら、又出版物の事で、圖書係主任が非常に多忙の爲、其勞を助けんとて揮毫を試みられた謂所女史が本年の試筆とでも謂ふべきものであるから、茲に口繪として掲げた次第で、別に意味のあることでない。

●山梨縣下に於ける昆蟲學講習會景況

山梨教育會は昔昆蟲研究所助手小竹浩氏を聘し、

八月二十三日より縣下五箇所よ於て昆蟲學講習會を開設せり。今其概況を記さんに、甲府市を始め北巨摩郡韮崎町、西八代郡市川大門町、東山梨郡日川町、南都留郡谷村の五箇所に開會し、講習員は教育者を始め實業家其他有志者にして、一個所會期五日間とし、午前八時より正午十二時迄は昆蟲學大意、害蟲驅除並益蟲保護法昆蟲採集并に標本製作法等の講話をなし、午後一時より三時迄は野外實習を試み、各自採集の蟲類若くは已に採集しありし標本に付質問應答し、皆熱心に研究せられたり。而して甲府市に於ては講習員八十七名中證明書を授與せしもの七十五名内女十二名、韮崎町に於ては講習員百十八名

中証明書を授與せしもの百七名、市川大門町に於ては講習員百二十六名中証明書を授與せしもの百十三名内女二名、日川町にては講習員七十七名中証明書を授與せしもの五十九名内女二名、谷村に於ては講習員六十八名中證書を授與せしもの三十名なりと。而して尙同縣東山梨郡七里村實業青年會は、山梨教育會の昆蟲學講習會を機とし、九月廿一日より五日間昆蟲學講習會を開きしが、會員は主に實業家より、會場の都合により毎日午後一時より五時迄昆蟲學大意、害蟲驅除法並益蟲保護法等を講習し、小竹氏又講師の任に當れり。而して講習員六十二名中證書を授與せしもの五十五名なりしと云ふ。

賞 狀

一 昆蟲標本各種

名譽賞銀盃 三ツ重 壹組

右ハ第五回内國勸業博覽會場内
弊社陳列館御出品ニ對シ特定審
査委員ノ審査成績及觀覽人ヨリ
募集シタル投票得点ニ依リ其精
良ナルヲ確認シ前記ノ賞品ヲ贈
呈シテ貴下ノ御譽ヲ表彰致候也

明治三十六年七月

大阪硫曹株式會社

名和昆蟲研究所長名和靖殿

●硫曹館昆蟲標本出品に對する賞狀

第五回内國勸業博覽會に於て、大阪硫曹株式會社は、其場内に特別陳列館を建設し、硫曹肥料の原料、藥品、製品等は云ふに及ばず、同肥を施用して栽培せし農産物を始め、苟も農事ニ關係あるものは悉く陳列せられたるが、當昆蟲研究所よりは農作物害益蟲標本を始め分類標本、昆蟲標本製作順序標本、箱裝式標本、蚤の發生經過模形、昆蟲廻轉器、害蟲圖解、日本昆蟲分科表、害蟲驅除器等を出品せしが、先月廿四日、岐阜縣舊縣會議事堂に於て、岐阜縣出品者に對し賞狀授與式を行ひ當所へは上部に示せる如き賞狀に銀盃を添へ贈られたり。

●女子に對する昆蟲講習の嚆矢 當所

が是迄昆蟲に關する講習に與りしは、實に七拾餘回五千餘名に修業證書を授與したることあるも、悉く男子を以て主とし女子を主としたることなし唯一度六十餘名の多數なる女子の加はりし事ある

も、是又女子を主としたるに非ず、其他の稀な數名乃至十數名の少數に止されり。彼の實業に熱心なる代議士井上甚太郎氏より、當所の主催にて、女子を目的として講習を開けとの忠告を受けしことあるも、目下の如き不充充分なる、當所の到底出來得べからざることを信じて、未だ其運ひに到らざるあり。然るに常に是等の点に注意せらる、市立名古屋高等女學校長甫守謹吾氏は、今回同校卒業生の組織に成れる松操會の主催にて、昆蟲學講習會を開設せられしに、會員一百八十三名の多きに達し意外の盛況ありしと云ふ。是れ全く今回を以て、女子に對する昆蟲學講習の嚆矢とせり。今其詳細を別項に記さん。

●女子昆蟲學講習會の景況 前項に記せし名古屋松操會の主催に係る昆蟲學講習會は、從來の講習會と稍其趣を異にし、毎日曜日に開會せり。即ち九月一日其端緒を開き、同月廿七日及十月四日の兩日に於て、昆蟲學大意より昆蟲採集法、標本製作法等を話し、兼て家庭教育并に家事と昆蟲の關係を説き、尚螟蟲及浮塵子等の恐るべきを説明すると同時に白穗莖中へ潜伏せる螟蟲の多少、大小等を各自に調査せしむる等、専ら實地に就て講習し、終て修業証書授與式を舉行せり。証を受くるもの百八十三名、斯くも多數の女子にして熱心に、各自競て研究せられしは、斯學の爲、否國家の爲賀すべきことあり。何れ十數年の後には、大に見るべき好果を得るならん。今會員總代十時なつ子の朗讀せられし答辭を左に掲ぐ。

答 辭

我等がため茲にこそかなる式場を設けられ名譽ある來賓臨ませたまふ御前にて會員傍聽生合せて百八十三名にめで度第六回女子講習會修了證書授與せさせ給ひあまつさへ會長の君講師の君よりはいさも懇なる御諭しをさへ蒙りぬ我等が幸何かはこれに過さんそも此度の講習はさかくに我國女子の理科思想に乏しく且つ自然に遠ざかるを以て其一端を補ひ此第廿世紀における完全なる日本女子たらしめむこの深き會長の君の御心つくしによりて開かれ其科目も材料豊富にして研究に便なる昆蟲學科を選ばれ斯道もて世に開け高き名和先生を講師に仰ぎまつりしたしく御講話承る事となり講師の君には公私御多忙の御なかむ御身さへ常ならずばしますなるなつさめて本會の爲臨ませられいさも懇に教授の勞をさらせ給ひし深き御なさいいつの日にか忘れ参らすべき。

あはれ本會も今を限りにささるゝかと思へばいさも名殘の惜まれて答へまつるべき言の葉も知られど定めの際に限りあるを如何にせんたゞ此上は今日の御さし言を深く心にしるし受け得にし御教へを基とし自然としたしみいよ、斯道の研究をつみ圓滿なる人物となり世に立ち家を治め子女を導びくなどよろづの上にてこれを應用し此限りもなく極みもなき御惠分の萬が一にも報ひたまつらん事をひたすら誓ひまつるにこそ。會長の君講師の君には國家のため御身いたはらせ給ひていやが上にも榮えさせたまへや嬉しき忝じ

けなさのあまり拙き言の葉を、へりみず講習員一同に代り謹みてあつき御恵みを謝したてまつるあなかしこや
 明治三十六年十月四日
 第六回女子講習員總代 十時 納つ

因に記す、式後一同撮影し、講師より寄附の昆蟲は緑みある物品貳百餘点を各會員に分配せられしと。
 ● 蟲入琥珀に就て 古代に於ける昆蟲の標本を、當所常設の昆蟲陳列館に陳列せんと苦心せる折柄、漸く米國理學士桑名伊之吉氏の寄贈に依りて平蜻蛉の化石を陳列せるの幸運に到りし顛末は、本誌第六十號の講話欄に記せり。其後千葉縣の高橋徹一氏は本誌第六十二號雜報欄昆蟲雜錄拾遺の内に蟲入琥珀と題して、天賞堂小蟻並に甲蟲入の琥珀を所持せざるの記事ありければ、直ちに購入方照會したるに、種々なる相違を來したる爲購入を見合するの不幸となれり。其後頻りに人造蟲入琥珀の説出で、購入の際注意を要すべしとのことありしより、大垣中學校教諭森宇多司氏は兎も角一度試験せんとてカナダバルサムの溶解中へ種々の昆蟲を挿入して硬固ならしめられしと、一見蟲入琥珀にて、相當に琥珀を知れる人にも直ち人造なることを發見し能はざる程の結果を得られしかば

該標本二個を當所へ寄贈されしのみならず、其製作法の詳細を本年七月四日の岐阜縣昆蟲學會月次會の席に於て講演ありしかば、うゝ聽者の已に知らるゝ所なり。然るに此頃京都の玉石商より印度産なりとて象鼻蟲、蠅、蟻、蜂等の蟲入琥珀十數個を送り來りしが、中よは實に美麗なるものありて決して偽造とは見えざるも他日之が専門家の鑑定を請ふと同時に、在中の昆蟲を詳細に調査せば其眞偽を知るに到るべし。兎も角是等の標本を蒐集して陳列し置き公衆の縦覧に供せんとす。今茲に示す所のものは、薔薇を生ずる青鼻蟲も最も類似せるものにて、光輝ありて實に美麗なり。此品は是迄多分時計等に附屬して携帶せしものならん。讀者諸君願くば蟲入琥珀に就ての高説並に所持者等を報導あらんとを希望す。

蟲入琥珀の圖



● 螟蟲驅防に關する岐阜縣告諭 螟蟲の驅防上枯穂莖切りの必要なることは、吾人の常に唱導するところなり。これ枯穂莖切法たる、本年の驅除に非らずして明年の豫防に屬すればなり。而して之を施行する上に於て、一日早ければ幾倍の効力を有するや知るべからざるも、若し時期を謬らば全く徒勞に屬するのみならず却て後日に害毒を流すは何れの方法と雖も皆然らざるはなし。茲に岐阜縣知事は害蟲驅除豫防に關する告諭を發せられたれば、左よ之を掲載することゝなしつ。

○ 岐阜縣告諭第三號

農作物の害蟲驅除豫防に就ては再三訓諭する所あり、漸次普及の緒に就きたりと雖も、未だ耕耘と均しく、農事作業の一科として一般に行はるゝの域に至らず。抑害蟲の發生を視又は其の發生を豫知したるときは、未だ其の害を被らざるに前ち、之を豫防するの必要にして且利益あるは言を俟たざる所なり。然るに従來多くの農業者が、害蟲の加害を見て始めて惶惶驅除に着手するものあるが如きは、驅除の時期を謬れるの甚しきものと言はざる可らず。今や稲作の一大害蟲たる螟蟲は、稻莖中に侵入して越年の準備を爲し居れり。故に此の際之を驅除して來年の加害を豫防するは目下緊要の事なりとす。依て當業者は左の方法に準じ普く驅除豫防を行ふべし。

明治三十六年十月三日

岐阜縣知事 川路利恭

記

一、枯穂莖切り 稻の枯穂となりたる者は根際より切取り、莖中に潜伏せる螟蟲を槌よて打殺すべし。注意 切取の際、他の稻莖を害せざる様注意し、左圖の如き小鎌を用ゆるを可とす。

(圖を略せ、但し此圖の甲は廣告欄にある吉野寅之助氏の製造に係るもの、乙は別項枯穂莖切鎌の圖) 甲は代價拾錢以内、乙は代價參錢内外、乙は武儀郡關町に於て製造販賣せ。

二、切取り期 前項の切取りは成るべく速に傾穂に前ちて之を行ひ、爾後枯穂の生じたるときは隨時切取るべし。

三、稻株低刈 幼蟲は稻株内に止まりて越冬することあるを以て、成るべく低刈すべし。

四、被害地藁の處理 螟蟲の發生多き土地の藁は幼蟲の蝕入せるもの多きを以て、翌年五月までに燃料とし、又は堆積肥料(外面を土にて塗るか藁の類を以て包圍すること)と爲し、俵其の他に使用せんとするときは、槌にて打つ等、壓殺したる後使用すべし。

五、施行上の注意 稻熱病等に因り枯穂となりたるものと、螟蟲の爲に枯穂とありたるものを一々鑑別して切取るに却て煩雜に渉るを以て、病害に因れる枯莖をも併せて之を刈取り、病害菌の驅除を行ふべし。

螟蟲は冬期稻の刈株中に殘留するとあるを以て、片毛作の場所に於ては之を掘起し燒棄するを可とす。害蟲の驅除は平素農業者に於て之を行ふべきは當然ありと雖も、尙市役所、町村役場に於て一定の期

日を指定し、一樣に之を行はしむべし。
前項の期日は前以て郡役所(市は縣廳)に報告すべし。

●長吉村川邊區の害蟲驅除成績 大阪府中河内郡長吉村地方は、本年浮塵子發生甚しく從て其害も鮮少なうざりし由なるが、同村大字川邊區の第十一回全國害蟲驅除講習修業生辻岡彦治郎氏の熱心に驅防に盡力せられし結果、浮塵子の被害は殆んど皆無にして、螟害も亦尠少ありし由は中河内郡役所の証言せし處なり。今辻岡氏の施行せし驅除の方法を聞くに左の如し。

苗代時代に小學兒童をして二化生螟蟲の採卵法を執行し、且つ浮塵子其他害蟲驅除の爲二回少量の石油を注入し、苗の二寸位成長の頃より本田へ移植迄、一週間に一回捕蟲網を使用せしめたり。本田にては八月九日第一回の石油驅除を行ひ、一反歩に付五合つゝ瀧下せしめたり。孵化後兩三日より經過せざるを以て全滅の傾あり農民より大に歡迎せられき。其際二化生螟蟲の心枯莖を抜かしめたり。九月三日第二回石油驅除を行ひ、一反歩に付一升つゝ瀧下せしめたり。爾來白穗の切取を勸誘し、傍浮塵子の成蟲驅除の爲咽喉付捕蟲器を使用せり。

●水族館出品に對する謝狀

第五回內國勸業博覽會附屬水族館へ、當所より水棲昆蟲を出品したる模様は、其當時屢々報導せし處なるが之に對し平田副總裁より上部に示す如き謝狀を受領せり。

水産昆蟲 名和 靖
第五回內國勸業博覽會附屬水族館ノ前記出品ハ特ニ有益ナルコトヲ認ム依テ茲ニ謝意ヲ表ス

●新刊紹介

頃日徳島縣農會技師押方克己、同技手林寅藏(第十一回全國害蟲驅除講習修業生)の兩氏は昆蟲書を共編せられ、名づけて稻作害蟲篇附益蟲略解といふ。紙數六十一頁より成り、圖版六葉を挿入し、稻作

明治三十六年七月一日

第五回內國勸業博覽會副總裁 平田東助
三位勳二等男爵

害蟲の主要なるもの十數種につき、經過習性より驅除の方法及最も普通ある有益蟲數種を記載せらる。○滋賀縣農事試驗場より害蟲試驗成績報告第四報を發表せらる、紙數七十一頁、着色石版圖八葉、寫真版四葉を挿入し主要農作物害蟲八種の經過試驗及浮塵子の被害試驗十件并に二化生螟蟲に關する種々なる實驗の結果を記載せるものよして、蓋し營業者を利する尠少なうざるべし。余輩は此種の報告の續々發表あらんとを望むものなり。

●九月分の官報紙上に現はれたる害蟲發生 本年は初め氣候適順なりしかば、諸害蟲の發

生甚しかりしが、其後不順の爲大に減退せしも、再び氣候適順に從り、連日の快晴を以て高温を來せしかば、漸次害蟲の發育盛んとなれり。今九月分の官報紙上、現はれたる害蟲發生の實況を蒐載して參考と供す。

○害蟲發生 (九月二日官報)

奈良縣 吉野郡國樺村大字南大野全部に滲り楮畑面積約一町歩に蝸蝓に類する害蟲發生甚しきは一株約二百餘頭附着殆ど楮葉を蝕害し盡したり同村は國樺紙の製産地にして之が原料たる楮の栽培最多く其被害少からざるを以て各作人を召集し驅除勵行の結果撲滅したる旨同縣知事より報告あり(去月二十五日付)

○害蟲發生 神奈川縣外七縣より害蟲發生に關する報告の概要左の如し(九月三日官報)

神奈川縣 津久井郡日連村及名倉村に於て害蟲(夜盜蟲)發生し益々蔓延の兆あり(去月二十四日附) ●兵庫縣 加西郡各町村の稻田に浮塵子螟蟲發生せり(去月二十四日附) ●愛知縣 中島郡開明村及幡豆郡寺津村、富田村に葉卷蟲發生せり(去月二十六日附) ●福島縣 岩瀬郡濱田村の稻田に苞蟲發生せり(去月二十六日附) ●青森縣 北津輕郡中里村大字宮川地内に於て浮塵子發生せり(去月二十四日附) ●島根縣 仁多郡布勢村周知郡原田村外五村の稻作へ浮塵子發生せり(去月二十四日附) ●廣島縣 豊田郡各町村稻田浮塵子發生せり(去月二十四日附) ●佐賀縣 杵島郡龍玉村外六村及藤津郡北鹿島村南鹿島村の稻田に葉枯病發生蔓延の兆あり(去月二十二日附) 藤津郡杵島郡神島郡一同に浮塵子發生せり(同二十五日附)

○害蟲發生 茨城縣外二縣より害蟲發生に關する報告の概要左の如し(九月四日官報)

茨城縣 北相馬郡六郷村高須村及相馬町等の稻田に害蟲(地蠶の種類)發生し稻葉及穗(早稻)を蝕害し其被害四十町歩以上に及び又、縣下各地稻田に第二回螟蟲蛾發生せり(去月二十八日附) ●山梨縣 各都市稻田に害蟲發生せり(去月二十八日附) ●石川縣 河北郡東英西英金津村の稻田に苞蟲發生し蔓延の虞あり(去月二十七日附)

○害蟲發生 都外一府八縣より害蟲發生に關する報告の要領左の如し(九月七日官報)

京都府 竹野郡濱詰村外七箇村に浮塵子發生せり(去月二十九日附) ●大阪府 昨今管内處々に浮塵子發生稍蔓延の兆あり(去月二十九日附) ●三重縣 志摩郡一圓水稻田に浮塵子發生せり(去月二十八日附) ●愛知縣 海東郡大治村に葉卷蟲發生せり(去月三十一日附) ●静岡縣 富士郡加島村に浮塵子發生せり(去月三十一日附) ●山梨縣 南巨摩郡都川村の粟作に夜盜蟲發生せり(去月二十九日附) ●宮城縣 登米郡上沼村に浮塵子發生せり(去月二十九日附) ●福島縣 石城郡小名濱町外二村安達郡針道村及信夫郡笹谷村の稻田に苞蟲も發生せり(去月二十八日附) ●島根縣 邑智郡都賀村の粟作に地蠶發生せり(去月二十六日附) ●鹿児島縣 出水郡阿久根村の水稲に葉卷蟲發生せり(去月二十八日附)

○害蟲發生 北海道廳外七縣より害蟲發生に關し報告の概要左の如し(九月十一日官報)

北海道 爾志郡蛾蠶蟲村外六村の馬鈴薯に二十八星瓢蟲、莖蠶蟲、地蠶及土川郡神樂村の稻作に浮塵子、又中川郡豐頃村の馬鈴薯に馬鈴薯疫病執も發せり(去月三十一日附) ●群馬縣 吾妻郡大字松谷村の一部粟畑に地蠶發生益々蔓延の兆あり(本月日附) ●宮城縣 互理郡各町村の稻作に葉捲蟲發生せり(本月一日附) ●福島縣 石川郡川東村外一村一町、西白河郡大沼村外三村、信夫郡杉妻村外四村の稻田に苞蠶發生せり(本月一日附) ●石川縣 羽咋郡神造村稻田に浮塵子再發し蔓延の虞あり(本月二日附) ●廣島縣 高田郡粟屋村字追外四字に粟地蠶發生蔓延の虞あり(去月三十一日附) ●徳島縣 海部郡牟岐村及川東村の稻作に葉捲蟲發生せり(本月二日附) ●佐賀縣 佐賀郡一圓稻田に浮塵子發生せり(本月一日附)

○害蟲發生 (九月十二日官報)

熊本縣 知事より縣下玖摩郡藍田外三箇村地方粟作に地蠶發生蔓延の微あり目下驅除施行中なりとの電報あり(本月十八日附)

○害蟲發生 京都府外六縣より害蟲發生に關する報告の概要左の如し(九月十四日)

京都府 乙訓郡羽來師村の稻田に浮塵子發生せり(本月四日附) ●茨城縣 鹿島郡大同村大字志崎地内稻田へ浮塵子及ハマクリ蟲發生せり(本月五日附) ●靜岡縣 富士、庵原二郡に浮塵子發生せり(本月五日附) ●宮城縣 玉造郡温泉、眞山二村及牡鹿郡蛇田村に浮塵子發生せり(本月五日附) ●山形縣 東田川郡に浮塵子發生(本月三日附) ●東置賜郡一圓の田面に葉卷蟲發生せり(本月四日附) ●山口縣 佐波郡牟禮村の一區域に螟蟲發生せり(本月三日附) ●大分縣 大分郡に七島間に浮塵子發生せり(本月二日附)

○害蟲發生 (九月十五日官報)

大分縣 大野郡土師村一圓及野津市村大字都原の粟畑に夜盜蟲發生せる旨、同縣知事より報告あり(本月七日附)

○害蟲發生 北海道廳外一府三縣より害蟲發生に關する報告の概要左の如し(九月十七日官報)

北海道 歌葉郡熱郭村の大豆に豆象蟲發生せり(本月七日附) ●京都府 綴喜郡草内村外三村、船井郡高原村及南桑田郡本梅村の稻作に浮塵子發生(本月八日附) ●宇治郡醍醐、山科兩村稻田に浮塵子發生せり(同十日附) ●神奈川縣 三浦郡衣笠村久里濱村の稻作に浮塵子發生せり(本月十一日附) ●群馬縣 北甘樂郡高瀬村外二村一町の水田に苞蠶發生せり(本月十日附) ●三重縣 安濃郡八段餘歩津市下部田五町步上濱町四段歩に浮塵子執も發生せり(本月十日附)

●浮塵子の寄生線蟲

浮塵子に寄生する處の線蟲に就き、此頃佐賀縣農學校より照會ありしが

該線蟲は中々有力あるものにて、去三十年の大發生の節にも之が大驅防を援けし事ありき。而して該線蟲はトビロヨコバヒ、セジロヨコバヒ、コバネヨコバヒ等ウスバヨコバヒ科に屬するものゝ寄生せるが如し。是等に就ては大に研究すべき價値ありと信す。

(未完)

●根木東枝氏の洋行 第八回全國害蟲驅除講習修業生岡山縣根木東枝氏は、北米合衆國サクランボトへ向ふ三ヶ年間の豫定を以て、九月九日歸里出發留學せられたる由。

●苗代田品評會の賞品 兵庫縣淡路國にては、淡路燒と稱して盛んよ陶磁器を製出することは世人の殆く知る處なるが、第七回全國害蟲驅除講習修業生中野壽郎氏の談によれば、同國三原郡にては苗代田品評會も、其賞與品として皿、猪口、湯呑等の日用品を與へ、其磁器は必ず苗代田に於ける害益蟲の模様を畫けるものなりといふ。是等の賞與品に害蟲驅除器等を與ふも良きが、こは中々面白き考へなり。

●枯穂莖切鎌 螟蟲の驅除豫防上枯穂莖切法の獎勵せらるゝに至り、各地に於て續々此種の鎌を製造さるゝ事になりたるは誠喜ばしき次第なり。美濃國關町の鍛冶渡邊喜兵衛氏は、此程圖の如き莖切鎌外數種を製造して當所に寄贈されたるが、實用上適當なるものなり、價は一挺參錢なりと云ふ。

●貝殼蟲の調査 東京西ヶ原農事試驗場在勤米國理學士桑名伊之吉氏は、本邦に於ける貝殼蟲調査の爲、中山道を経て先月十日來所せられ、近地採集の上當所の名和正氏と共に岡山、松江、鳥取地方に採集を試み、再び當所に立寄られしが、飯場の後又直ちに東北地方に向はれたる由、本月六日岩手縣網張温泉より消息ありたり。

●岐阜縣昆蟲學會第五十八回月次會記事 同會は本月三日午後一時より當所内に於て開會せしが、出席者二十四名として孰れも各地方の熱心家のみなりき。今其概況を報すれば、例より名和副會頭の開會の辭に次で、第一席岐阜縣長期害蟲驅除講習生惣代として渡邊樵四平氏は螟蟲白穂拔取及其處分法に關する講習生一同の調査せし結果を報告し、第二席名和靖氏は螟蟲調査の結果より、引て驅除豫防上に於ける注意を説き及ぼされ、第三席岐阜中學校教諭波磨實太郎氏は *Parnidae* に屬する *Psephenes* の一種に就て、剖檢的研究と内外の書籍に徴して調査せられし結果を報告し、次で第五十五回の月次會に續けるプレバート製法を實地に就て熱心講演せられ、第四席第七回全國害蟲驅除講習修業生兵庫縣三原郡農會技手中野壽郎氏は淡路國と三化螟蟲てふ演題の下に、初めて淡路國に三化螟蟲の發見せられし顛末より、其原産地は徳島縣那賀郡地方にして炭俵、石灰俵等よりて輸入傳播せしなりと説き、

枯穂莖切鎌の圖



之につき驅除豫防せし方法より其結果を詳細に演述せられたるが、時既に午後六時なりしかば茲に閉會を告げ、頗る盛會なりき。

●水曜昆蟲會記事

當研究所員の催しよ係る水曜昆蟲會は前號報告後毎水曜日午後七時より當所内に開會せしが、其重なる談話の概略を一括すれば左の如し。

小森省作氏は特殊鱗に就て、小灰蝶の種類と採集、天狗蝶の發生經過談等なりしが、其中特殊鱗に就ては種類、形狀、位置等を各蟲種に區別して之に説明を與へ、組織の剖檢的研究にあらざれば斷言し難きも、特殊鱗なるものは雄蟲の特有物とのみ考へ居りしに、調査の結果雌蟲にも該鱗の具備し居る様に認めり云々と實物を示して之を説き○石田和三郎氏は夜中の昆蟲採集に就て、昨年より今日迄の成績を報告して糖蛾類成蟲時期の略は判明したる十數種を擧げて其經過表を示され○小竹浩氏は山梨縣下に於ける昆蟲採集及害蟲驅除視察談として、同縣教育會主催に係る昆蟲學講習會へ出張中に野外昆蟲採集を成せし狀況より山梨縣令にて發布せられし害蟲の種類及び害蟲驅除の方法等に就て視察せられし結果を報告し○名和愛吉氏は澤庵漬等に發生するシヤウウシヤウバへの發生經過につき、其蠅は其卵を桶の縁に産み、孵化せる幼蟲は澤庵漬の中に入りて蛹化し而して數日の後成蟲となるも、其幾分は寄生蜂の爲めに繁殖を妨げらる旨を、順序標本を以て最も親切に説明を與へ○森宗太郎氏はマユミガメムシ、ヒゲザウムシ、ハラアカシロガ等の習性經過を又標本に依り説明せらる○渡邊樵四平氏は螟蟲驅除と枯穂莖切、浮塵子の産卵數調査談等なりしが二化生螟蟲驅防の一大良法は枯穂莖切なるも頑固なる農民は之れが實行を等閑に附するは實に遺憾の次第なり、目下の場合、如何にせば頑農等は之が實行勉むるや否やを研究せざるべからずと、少しく憤慨の口調を以て述べ、枯穂莖切後の處分は其藁を槌にて打潰すより良法なし云々と説かれ○中井藤助氏は浮塵子に就てと題し、其實験の結果によれば發生の多少は第一氣候、第二稻の種類、第三乾濕の如何、第四施の方法、肥料成分の如何等にありとて一々其項目に亘り説明を與へられたり。其他大橋由太郎氏の害蟲驅除監督に就て、所嘉吉氏の偽 蟲と發生地、小川謙司氏の害蟲驅除の困難なる理由、近藤伊佑氏の稻熱病と浮塵子との關係、土岐五郎氏の昆蟲採集談(實物供覽)高橋喜男氏の浮塵子卵塊解化の狀況(實物証明)棚橋昇氏の卵蜂の種類に就て(實物供覽)等なりき。

因に、す毎水曜會には名和所長も出席せられて會員各自の講演に就き一々批評を加へて大に會員を督勵せられ、且每會内外各地より送付し來れる昆蟲標本及書籍を示して時事談を試みらるゝを例とせり。

●昆蟲標本陳列館の參觀人

去九月中當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は總計五千五百十三人にして、其中最も多かりしは二十四日に於ける二千六百八十二人、最も少なかりしは九日に於ける四十五人にして一日平均二百十二人弱に當り、此内實業家最も多く、之に次ぐは各府縣の勸業當局者、教育者、學生等ありき。

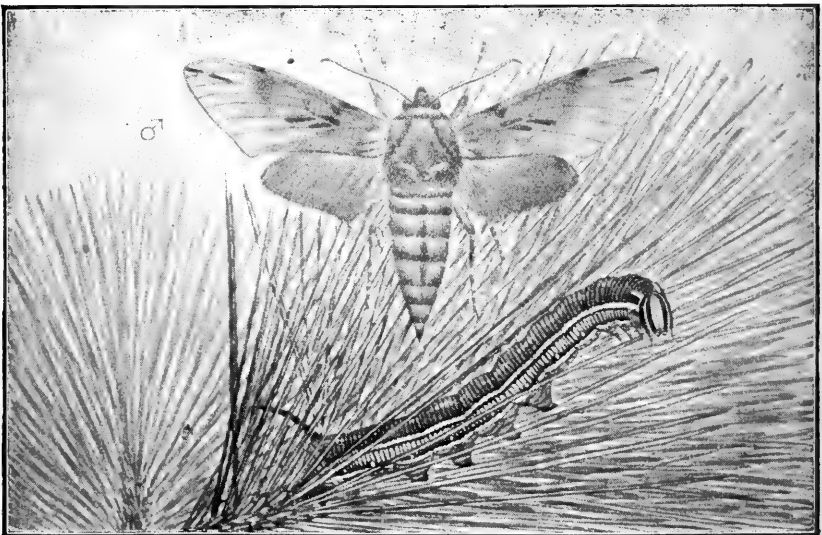
(雜報、十月十三日脱稿)

Hyloicus caligineus, Butler. (Kuro-suzume)

By K. Nagano.

Forewings dark grey, closely irrorated with white; two strongly curved blackish brown bands running from costa, inner turning inwards to base and outer running to dorsum; sometimes a white discal dot; three or four longitudinal black dashes in disc; an oblique black apical line; cilia white and dark grey. Hindwings dark grey, deeper in terminer. Expanse 60-74mm. Body dark grey, whitish-sprinkled; thorax with arch shaped blackish-brown band; abdomen banded with blackish-brown and with longitudinal blackish-brown stripe.)

Kiusiu, Shikoku, Honsiu. 5, 6, 7. Larva green; dorsal line dark-brown, edged by pale yellow lines; lateral lines white; spiracles pale orange; subspiracular lines yellowish; 1 seg. with four black blotches; 11 and 12 seg. black dotted; horn purplish-brown with black short bristles: on *Pinus Tunbergii*, *P. densiflora*; 6-9.





THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE
 EDITED BY Y. NAWA,
 SIFU, JAPAN.

(十一月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)

昆蟲世界

第七卷第拾壹册 (第七卷第拾壹册)

目次

- 中等教育昆蟲標本寫真(二) 頁
- 論說 頁
- 冬季の採蟲を務めよ 頁
- 學說 頁
- 蜻蛉に就きて(一) 頁
- 皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本(其三) 頁
- 第一回岐阜縣昆蟲分布調査(五) 小竹 省浩
- 桑のシンダン調査に就て 森 宗太郎
- 講話 頁
- エンドノキリマン糖蜜驅除試驗 石田和三郎
- 雜錄(二) 頁
- 六足蟲彙纂(戊の卷) 長野菊次郎 ○ 昆蟲に關する隨感隨筆(五) 昆蟲翁 ○ 昆蟲界の花壇 名和梅吉 ○ 昆蟲驅防獎勵展覽會準備記事(四) 蟲の家主
- 通信 頁
- 博覽會出品害蟲標本解説書 瀨美郡昆蟲研究會 ○ 昆蟲の二、三 小田勢助 ○ 宮城縣志田郡志田村に於ける本年の昆蟲狀況 加藤久之助 ○ 昆蟲に關する藥書通信
- 雜報 三六頁
- 昆蟲の種類分布調査の一欄を増加せんとす ○ 昆蟲陳列館の整理と擴張 ○ 蟬寄生蛾の學名確定 ○ 昆蟲研究會の出品と協賛賞狀 ○ 害蟲驅除隊防方針 ○ 私製葉書の意匠 ○ 渡瀨博士の螢に於ける清韓視察談 ○ シヤサン(和蠶)の飼育 ○ 白山の昆蟲 ○ ジョーン、パルナイツ、スミス氏の小傳 ○ 昆蟲幻燈會 ○ 東條昆蟲研究會 ○ 愛知縣瀨美郡教育品展覽會 ○ 昆蟲標本美術的蠅叩 ○ 吉野郡の驅蟲事業 ○ 額田郡の昆蟲展覽會 ○ 特別研究の入手を許す ○ 第七回全國害蟲驅除講習會延期 ○ 岐阜縣昆蟲學會第五十九回月次會記事 ○ 水曜昆蟲會記事 ○ 昆蟲標本陳列館の參觀人



禁轉載

(明治三十六年十一月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

●寄贈物件受領公告

- 一 Δ子ビロギアブリ(二頭)、チャバ子ギアブリ(四頭)、シヨカリヨウバツタ(黴菌斃死一頭) 東京市 岸田 松若君
- 一 チャバ子ギアブリ(七頭) 尾張國 服部 通範君
- 一 Δ子ビロギアブリ(二頭)、チャバ子ギアブリ(一頭)、ドクナナフシムシ(一頭) 高知縣 武内 護文君
- 一 北海道産昆蟲標本(多數) 後志國 小川 七治郎君
- 一 昆蟲學講習會員紀念寫眞(一葉) 名古屋市 松 操 會
- 一 昆蟲學講習會員紀念寫眞(一葉) 岐阜縣 養老郡昆蟲學會
- 一 半身肖像寫眞(一葉) 鳥取縣 岡野 庫八郎君
- 一 半身肖像寫眞(一葉) 鳥取縣 石龜 一郎君
- 一 昆蟲模樣外國畫葉書(八葉) 在京都 武田 五一君
- 一 中京新報、齋藤新聞、東海日日新聞、新愛知、(四種四葉) 各古屋市 甫守 謹吾君
- 一 害蟲驅除要覽(一冊) 丹波國 菅沼 岩藏君
- 一 桑葉、繭形菓子(一箱) 滋賀縣農事試驗場
- 一 一貫張菓子數牡丹に蝶模樣付(一)、一貫張卷煙草入 名古屋市 谷 てい子君
- 一 蝶模樣付(一) 靜岡縣 岡田 忠男君
- 一 寺尾保十氏製作稻莖切鎌(一丁)

右寄贈相成候に付芳名を掲げて其厚意を謝す

明治卅六年十一月十日 名和昆蟲研究所

●昆蟲學特別研究生募集

今回數名の特別研究生を募集するに付規則書入用の向は郵券相添へ至急照會あれ直送致すべし

明治卅六年十一月十日 名和昆蟲研究所

●昆蟲叢書 昆蟲標本製作全書

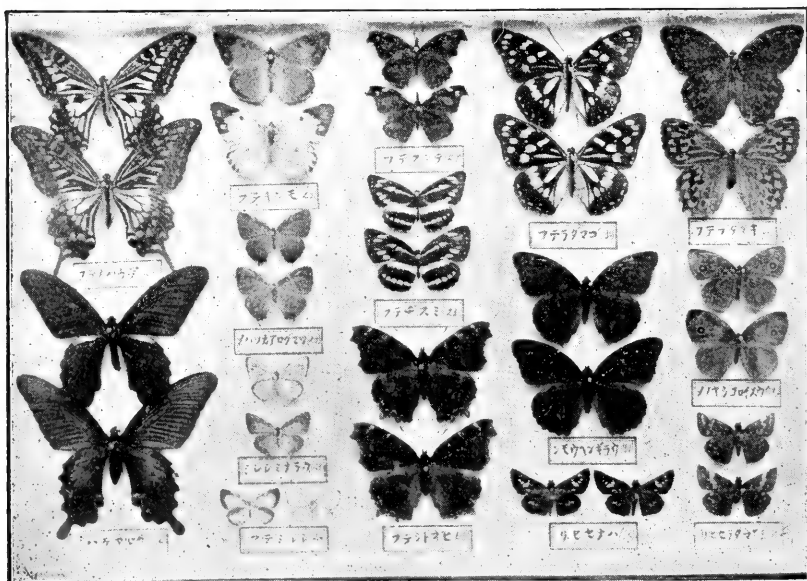
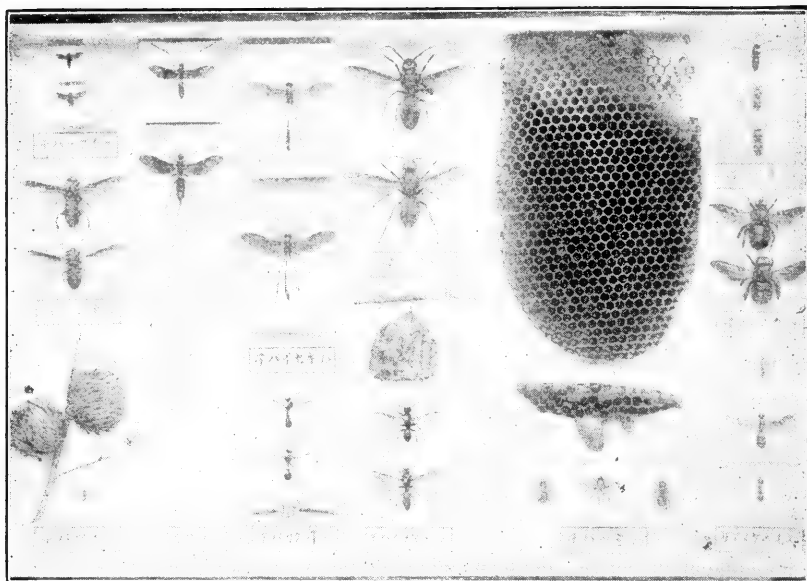
右に對し各新聞紙批評の二三を左に掲ぐ。

大阪毎日新聞 本書は有名なる名和昆蟲研究所編輯部の編に係り、昆蟲採集の方法、器具、採集地の選擇、標本の製作方法等最も簡明に叙述したりしに、實地の應用に資せんことを欲したるが故に初學の士に取つては趣味、實益二つながら併せ得べし(九月廿九日の分記載)

日本新聞 昆蟲の標本ほど容易に出來て、動物學上有益なもので有つて、しかも趣味が有り且つ樂みになるものは無い、然れども其道を得ざれば、其最も容易なる者亦決して容易にあらざるなり。此書は之に關して採集、製作、保存等を噛みて含めるが如く教へたる者にして、蟲の種類に就て其方法を異にするを、反覆丁寧に説明し、詳密を極めたり。(六月四日記載)

大阪朝日新聞 昆蟲叢書の第二編にして、主として實地研究の結果に成りたるものにて、説明の方法皆適切、單に書中に得たるものと選を異にす。故に専門ならざるものに在りても昆蟲研究の趣味を催さしむ。昆蟲標本製作法の沿革、其書の出版の二章はまた我が科學的書籍史上に參考とすべきもの、要するに吾人は多くの興味を以て此の書を讀み、更に昆蟲研究の趣味を催進せしめたり(十月九日記載)

二六新報 著者が昆蟲研究に熱心なる岐阜市に名和昆蟲研究所を設置せるを觀て知るべし、此書は製作の方法を記述して周到明白遺憾なきに近し。(十月廿一日記載)



(二) 眞寫本標蟲昆育教等中

.....

0

(明治三十六年十一月)



論說



◎冬季の採蟲を務めよ

冬季昆蟲採集の斯學を利するの多大なる、敢て他季の採集に譲らざるは、吾人の常に唱導する所なり。蓋し百蟲蟄伏の状態を詳にし、兼て其種類を蒐集するを得ればなり。方今昆蟲學の進歩遅々にして、害蟲驅除の普及せざるは、之れ畢竟昆蟲の習性經過の明ならざるより、世人の過半は、夏季に於て繁殖加害甚しき蟲屬も、嚴寒氷結の候に入れば悉く死滅して片影を止めず、春陽來復草木萌芽の候に至れば、忽然地より湧くものなりとの迷信を抱き、人工の左右し能はざるものと誤認せるの罪にして、之れ冬季に於ける採蟲を忽にするの致す所なり。一たび冬季に於て其巢穴を突き、蟄所を發きて其状態を目撃せば、如何に頑迷の徒も首肯せざるものあらざるべし。然れば此の季に及んで之が採蟲を試み、各種に於ける冬季の状態を探り、一以て科學的研究の材料となし、一以て農氏の啓蒙解疑の資料となし、實業上は科學上は、遺利を収むるは目下の急務なりと信す。然り而して岐阜縣昆蟲學會が昨春岐阜縣冬季昆蟲展覽會を開き、愛知縣寶飯郡が今春寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會を開きしも、全く爰に觀る所ありてなり。之が爲兩者共、直接に將た間接に利益を得たるは決して尠少なからざりしあり。而して之が採蟲の最好適期は一、二兩月の間にありと雖も、而も比較研究の必要上、其前後十二、三の兩月よも

亦必ず之を行はざるべからざることを忘るべからず。然るは世人の多くは、此好時期を以て採蟲、研究爾つながら爲すべきものありざるが如く思惟するは、不識の爲とは云へ、實は慨嘆の至りなりすや。今將は此期に到らんとするに臨み、茲に一言注意を促して、以て此好時期を逸せざらしめんことを希ふのみ。



◎蜻蛉に就きて(一)

在東京 長野菊次郎

此篇は、重にホワード氏の昆蟲書に因り、傍らワード氏の家庭昆蟲、ケンブリッヂ博物誌、其他二三の書を參酌して記述したるものなれば、或は本邦蜻蛉類の全躰は通せざる所もあらん、讀者之を諒せよ。昆蟲類中、最も美麗として、最も人の注意を惹くものは、蝶類を第一とし、次は蜻蛉類を推すべし。抑此類は、各地普通に産するを以て、其名稱にも種々あり、本邦にてはアキツムシ、アキツハなどて古歌に詠せられ、又トンボウ、トンボ等の普通名あり。然れども其方言に至りては、殆んど數ふるに遑わらず、或はアケブ、エンマ、エンバ、ヤンマ、エンブウ、ヘンボウ、ヘンボ、タンボ、タンブリ、ダアブリ、グンヂ等の名稱は、既に本草啓蒙に載せたる所あり。又歐米に於ても種々の方言を有し、往々迷信の伴へることさへあり、例へばエングランド(England)よては最も普通に龍蠅(Dragon fly)と稱し、或る地方よては鬼の縫針(Devil's darning needles)と云ひ、其他飼蛇者、或は蛇醫、又は捕蚊鷹ともいへり。スコットランド(Scotland)にては飛蚊蛇(Flying adders)と云ひエングランドの或地方にては刺馬者と呼ぶ。元

來、蜻蛉は全く無害の昆蟲なるに關せず、此の如き名を有するの、俗人の迷信を基けるものにして、或る人は蜻蛉が惡童の耳を縫ふならん、或は馬を刺すならんと信じ甚しきに至りては蛇類特に水蛇を飼育し、或は之を醫するなるとの迷信をさへ抱けるあり。

成蟲、蜻蛉類は甚だ大なる頭を有して柔なる頸に接し、容易に之を動かし得べし。左右の複眼は凸出して最も大よ、且つ美麗の光澤を有し、三個の單眼は通常頭部の前面に三角形に配列し、或は一行に並列せり。觸角は甚だ短く、且小にして基部の二節は少しく強大なれども、先端は柔軟にして尖り、決して八關節を越ゆることなし。口部は甚だ異様に構成せられ、大顎及び少顎は大にして、扁平なる上下兩唇の間で隠れたり。蓋し此兩唇は、蜻蛉が食ふ際に上下に動くものにして、一見蜻蛉の口は上下に動くも横よは側がござるものなるの看あり。胴軀は常々長くして圓筒状をなし、稀に廣くして扁平なることあり。翅は細長として前後殆んど其大さを同じし、縱横の細脈によりて翅面を無數の小室に分劃せり。脚は柔軟にして胸部の前方より生じ、毛狀刺の美麗なる列を有して前方に曲り、食餌を拉ぶるに用ゐるものにして、歩行の用をなすものにあらざり。例令靜止せるとき枝椏等を把持するといへ、歩行よは不適當なることを知るべし。

蜻蛉は食食なるものにして、昆蟲類中之が食餌とあるは蚊及び蠅なるべし。抑も蜻蛉は成蟲の時代より幼蟲の時代に於て食を要すること多く、且晝間飛翔するものなれども、曇天の折又は黄昏之際しては、之が爲りて殺さるゝ蚊の數實に小かたざるあり。ドクトル、メーンヌ (Dr. A. Meunier) 氏の言によれば、北米メーンヌのフォート、ヌチルリントン (Fort Neill) に於て、蚊が廣き沼澤に發育すれば、直ち蜻蛉の大群出現して、爲めに著しく蚊の數を減すと、以て蜻蛉の効果を卜すべし。然れば前年ドクトル、ラム

ポーン氏 (Lamborn) は蠅及び蚊の驅除に對して、人工的に蜻蛉を繁殖せしむべき方法を懸賞によりて募集したるに、數名の學者の是に應じたることあり。蚊蠅の外、蜻蛉は往々ヨコバヒの類、小蝶及び蛾類を捕ふることあり、昆蟲採集の際、蜻蛉を追ふて思はぬ蝶蛾類を得ることあるは、蓋し之が爲あり。或る蜻蛉は水草或は雜草に止まれる蛾を攫み去ることあり、稀は鳳蝶、甚しきは大なる丸蜂さへも捕ふることありとなり。又其貪食の度に至りては驚くべきものにて、之を捕へて其翅を背上に保ちながら是に家蠅を興ふるに、平氣にて之を貪食するを見るべし。又其暴食の量も過大なるが、ビューテンミューレル (Bentmiller) 氏の試験によれば、大形種の一は二時間に家蠅四十疋を食ひ、小形のもの二十疋を食ひしと。又特に驚くべきは、若し其軀の一部を口邊に齧らすときは、自身をさへ食ふことありとなり。又之を魔解せしめて喙針に貫き置くに當り、例令蘇生するおどあるも、之を給するに家蠅を以てすれば、少しも逃れんとせずして之を噛み、其食欲を充たすに當りては全く大針を以て胸部を貫かれたる不快と苦痛とを忘却するもの、如し、然れども蜻蛉も亦鳥類の爲めに貪食せらるゝこと少からざるあり。蜻蛉は沼澤池塘多き地方に多きこと通例なるが、往々非常の大群をなすことあり、獨逸昆蟲學者コツペ氏 (Köppen) は、千四百九十四年より千八百六十四年に至る間、起れる蜻蛉群の移動につき報告を寄せり。かゝる群集は屢歐洲に於て見る所にして、北米に於ても往々注目せられたり。マンド氏 (A. H. Mundy) の言によれば、千八百八十一年八月十三日午後五時より七時の間に涉り、數哩の空中蜻蛉群飛して、地上一尺位の所を彷徨し、皆な南西の方向に移動しつゝ、眼の及ばざる程に擴張したりと、此移動は多分晴天打續きて池沼の乾燥したるより起りしあるべく、其他の移動も多く此れ等の理由なるとなり。

(未完)

◎皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解（其三） 第十二版圖參看

名和昆蟲研究所内 小 竹 浩

膜 翅 類

膜翅類とは蜂蟻の如き蟲類の總稱にして、普通複眼の外に三個の單眼を有す。口具は能く咬嚼舐吸に適し、翅は膜質として脈條少く、前翅は後翅より大きく、概ね四翅を有すれども、稀には之れを缺くものあり、雌は腹端に整針若くは劍狀の産卵管を有し、其長さものは五六寸に達するあり、幼蟲は多くは無脚あるも、中には十八脚乃至二十二脚を有するもあり、此の類に屬するものは多くは有益蟲よみて、僅かに有害蟲を含有す。本號口繪の上圖は、皆此の膜翅類に隸するものなり。

(九)カブラ バチ (*Athalia spirarum*, Fab.) 此種は食葉類 鋸 蜂科に屬し、体長二分五厘、翅の開張六分内外を算し、体赤黄色にして肥大に、頭部及後胸背は黑色を帶ぶ。複眼は卵形をなし、頭頂は三個の單眼を有して淡黄色を呈し、翅は淡き暗黄色を帶び、前縁及び縁紋は黒褐色なり。雌は腹端に鋸狀の産卵管ありて、葉柄又は葉脈等を切り、其中に産卵す。幼蟲は帶綠黑色にして、横皺多く、十一對の脚を有し、物に恐るゝときは体を環狀に捲きて墜落するの性あり、年二回の發生をなし、常に蕪菁、大根等の十字科植物の葉を食害して、大害を興ふることあり、老熟すれば地中に入り、繭を營み、蛹化し、其儘越冬す。

(一〇)ナシ バチ (*Cimbex nomurae*, Marlatt.) 前種と同科に屬し、体長七分、翅の開張一寸五分乃至

一寸七分、体赤黄色にして各關節の基部稍黑色を帶び、腹部背面の中央、縦に黑色を呈す。複眼は卵形にして、頭頂は三個の單眼を有して黄色を帶び、觸角は六節より成りて棍棒狀をなす。常に山林に多く

往々梨樹^{わうくわじゆ}に産卵^{さんらん}し、孵化^{ふくわ}の幼蟲^{ようちゆう}は、梨^{なし}の葉^はを食^しし、大害^{たいがい}を興^{おこ}ふることあり、老熟^{らうじゆう}すれば、赤褐色^{せきこくしやく}の繭^{まゆ}を營^いみ、蛹化^{ようくわ}す、鋸蜂^{のこざりはちゆう}中大形^{ちゆうおほがた}の種^{しゆ}なり。

(一一)イガバチ(Oynips sp.) 寄生類^{きせいるい}没食子蜂科^{まはくしゆけい}に屬^{ぞく}し、体長^{たいちやう}一分七厘、翅^{かいちやう}の開張^{かいちやう}三分五厘内外^{ないがいわい}を算^{さん}す。頭胸部^{ごうちゆうぶ}黒色^{くしやく}にして、腹部^{ふぶ}茶色^{ちやくしやく}を帯^おび、縦^{たて}に扁大^{へんたい}あり。翅^{かいちやう}は透明^{とうめい}にして廣^{ひろ}く、觸角^{じやくかく}糸狀^{しじやう}にして關節^{くわんせつ}一定^{てい}せず。常^{つね}に柶樹^{せきじゆ}の嫩芽^{にんげつ}に産卵^{さんらん}するを以^もて、嫩芽^{にんげつ}の變^{へん}ト一種^{いっしゆう}の毛球^{もうきゆう}狀^{じやう}をな^しし、恰^{あた}も栗^{くり}のるれ^に似^にたり、幼蟲^{ようちゆう}は其内^{そのうち}に成育^{せいよく}し、翌年^{よくねん}五月頃^{ごごう}羽化^{うけつ}す。

(一二)ヲナガバチ(Bracon penetrans, Smith.) 寄生類^{きせいるい}小齒蜂科^{せうしゆけい}に屬^{ぞく}し、体長^{たいちやう}五分五厘、翅^{かいちやう}の開張^{かいちやう}一寸乃至一寸二分、複眼^{ふくがん}は橢圓形^{だいろんけい}にして、單眼^{たんがん}と共に黒^{くろ}し。觸角^{じやくかく}長^{なが}く、黒色^{くしやく}にして先端^{せんたん}膨太^{はうたい}す。翅^{かいちやう}は籠甲色^{ろうけいしやく}にして黒斑^{くろはん}を有^あし、前緣角^{ぜんえんかく}より外緣^{ぐわいえん}に沿^そふて稍淡黒色^{しやうたんくしやく}を呈^{てい}す。頭胸部^{ごうちゆうぶ}及前中二對^{ぜんちゆうにたい}の肢^しは、翅^{かいちやう}と同色^{どうしやく}にして、後肢^{ごうし}は黒色^{くしやく}を帯^おび、腹部^{ふぶ}は稍暗色^{しやうあんしやく}を呈^{てい}す。雌蟲^{めし}は五六寸^{ごろうすん}に達^{たつ}する長^{なが}き産卵管^{さんらんくわん}を有^あし、樹幹^{じゆかん}中^{ちゆう}に潜伏^{せんぷく}せる諸蟲^{しよちゆう}に寄生^{きせい}するの有益蟲^{いやくちゆう}なり。常^{つね}に山林^{さんりん}中^{ちゆう}に樹木^{じゆもく}の繁茂^{はんぼ}せる處^{ところ}に多^{おほ}し。

(一三)キセイバチ(Ophon sp.) 寄生類^{きせいるい}姬蜂科^{きちゆうけい}に屬^{ぞく}する大形^{おほがた}の種類^{しゆるい}にして、体長^{たいちやう}一寸二分、翅^{かいちやう}の開張^{かいちやう}一寸九分内外^{ないがいわい}、翅色^{かいちやく}淡黃褐色^{たんわうこくしやく}を帯^おび、腹部^{ふぶ}長^{なが}く、胸部^{ちゆうぶ}に接^{せつ}する處^{ところ}細^{こま}く、先端^{せんたん}に至^{いた}るに従^{したが}ひて太^{ふと}く、縦^{たて}に扁大^{へんたい}なり。前中二對^{ぜんちゆうにたい}の肢^しは黄色^{わうしやく}あれども、後肢^{ごうし}は黒色^{くしやく}部^ぶ多^{おほ}し。常^{つね}にヤママユ、クリケムシ等の幼蟲^{ちゆうちゆう}に寄生^{きせい}す。

(一四)トツクリバチ(Eumenes pomiformis, Fab.) 兩性類^{りうしやうるい}螺贏科^{らうけい}に屬^{ぞく}する有柄種^{いうへいしゆ}にして、体長^{たいちやう}五分翅^{かいちやう}の開張^{かいちやう}一寸内外^{ないがいわい}、複眼^{ふくがん}は腎臟形^{じんざうけい}をな^しし、單眼^{たんがん}は黄色^{わうしやく}を帯^おぶ。体黒色^{たいくしやく}にして、頭胸^{ごうちゆう}相接^{せつせつ}する所^{ところ}黄色^{わうしやく}をな^しし、腹部^{ふぶ}は赤黄色^{せきわうしやく}の帶條^{たいじやう}あり、四五月頃^{しよごごう}より出^いで、土^{つち}にて德利形^{てりけい}の巢^すを營^いみ、尺蠖^{しやくごくり}、螟蛉^{めいれい}等を捕^{とら}へ來^{きた}り

て其内は貯へ、側は産卵す、卵が孵化すれば、幼蟲は該蟲を食して成育し、遂に蛹變羽化して成蟲となる。世人が、蜂は他の仔蟲を養ひて己が子とあす云ふは、此の状態を誤認したるものなり。

(二五) ヤマバチ (*Vespa mandarina*, Smith.) 兩性類胡蜂科に屬し、體長九分乃至一寸三分、翅の開張一寸六分乃至二寸五分、頭部樺茶色、胸部稍暗色を呈し、腹部樺茶色、黒褐の横帯あり、複眼は腎臟形をなし、三個の單眼は黒色に、觸角は赤黄色にして、先端に至るに従ひ黒色を帯び、雄は十三節、雌は十二節より成る。蜂類中大形の種にして、土中に大形の巢を營み、螟蛉、尺蠖等を捕へ來りて仔蟲を養ふ、若し之れは刺さるゝときは、甚しく痛傷を覺ゆ。

(二六) アシナガバチ (*Polistes chinensis*, Fab.) 此種は前種と同科に屬し、體長七分、翅の開張一寸四分内外、複眼は腎臟形にして、單眼は黒し。體黒褐色にして、中胸背は赤褐條を有し、腹部の後半は黄褐色を帯ぶ。常は樹枝又は檐下等、巢を營み、螟蛉等を捕へ來りて仔蟲を養ふの益あり。

(二七) ミツバチ (*Apis japonica*, Rad.) 集英類蜜蜂科に屬し、人の能く知る所の、有益なる小形の種にして、雄蜂、女王蜂の外に、職蜂を有して、一社會を組織す、王蜂尤も大きく、雄蜂は腹端圓く、職蜂は腹端尖り、且灰黄色の横條あり、常に花粉を以て蜂房を造成す。蜂房は六角の小室より成りて、室内には卵子を置き、或は蜂蜜を蓄藏して食料となす、而して其蜂蜜は、蜂房より蜜を取り出したる後、此蜂房を水に溶かして得るものにして、之れを華氏九十度内外の温度にて軟質の物体となし、模型に入れて種々の模形品を製し、或は蠟燭を造る、又其白蠟は軟膏を製すべし。蜂蜜は動物類及植物類を其中に入れ置けば、久しく蓄藏するを得べく、又之れを食用として砂糖と同一の効を奏す。

(二八) チンチ (*Vespa cingilata*.) 兩性類胡蜂科に屬し、體長四分五厘乃至六分、開張八分乃至一寸内

外、雄は体細長く、觸角長し。雌は腹部太く、觸角短し。職蜂は体小なり。体灰黑色にして、腹部は灰黄色の横帯あり、複眼腎臟形にして、單眼黒し、地中に數層の大なる巢を作りて群居す。春夏の候巢を採り來りて之を飼養し、其幼蟲を美味として食用に供するあり。

(一九)クマバチ (*Xyrocopa circumvolans*, Smith.) 集英類蜜蜂科に屬し、体長八分、開張一寸七分内

外、体軀肥太にまて天鷲絨様の黑色軟毛を密生し、胸背は黄色を帶ぶ。肢は三對共に長さ黒毛を密生し複眼大に、單眼黒し。檐下の椽等に穴を穿ちて巢を營み、空中を飛揚して小蟲を捕食し、或は花間に來りて花蜜を吸收す。

(二〇)オホクマアリ (*Formica* sp.) 大形の種にして、雌雄並に職蟻を有し、雌は体黒く、腹部肥大にして、体長六分五厘、雄蟻の腹部は胸部より小にして、体長三分五厘内外にして、共に時期により翅を生ず。職蟻は大さ其中間にありて、全く翅を有せず。胸背茶褐色、腹部黒くして圓し。地中に穴を穿ち巢を營みて群居し、職蟻は巢を造り、食物を搜索して仔蟲を養育す。凡て蟻は蚜蟲の分泌液を好むを以て、常に蚜蟲の居る處に集り、中には之れを已が巢に移し又は特に巢を營みて飼養すること、恰も人類が牝牛を飼養するに異ならず。

◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査 (五)

名和昆蟲研究所助手 分布調査主任 小森 省 作

弄花蝶科 (*Hesperidae*)、此科に屬するものにして今回の採品に加はりしものは十種なり。其内イチモジハナセセリテフ最も多く、ハナセセリテフ之に次ぎ、其他は概ね一二頭乃至三四頭に過ぎざりし。

(六六) チャマダラ ハナセセリ テフ (*Thanaos montanus*, Brem.)

此蝶は弄花蝶科中大形種に屬するも

のにして、前翅は黒褐色に灰色の微かなる斑紋あり、後翅は黒褐色に、多少列をなせる數多の帶褐黃色の斑紋ありて、縁毛は灰色なり。裏面は表面に比し色稍濃く、前後兩翅共帶褐黃色の斑紋あれども、表裏共多少の變化あるを免れず。特に雌蟲は前翅の中央に灰白色の斑紋ありて、其裏面は黄色部多きが如し揖斐郡に於て一頭獲られたり。

(六七) クロステ ハナセセリ テフ (*Adoptea leonina*, But.)

此蝶は常に山地に産する種にして翅の表面

は橙黄色に、邊緣は黒褐色に、翅脈は黒く判然せり。雄蟲は前翅の第一肢脈と第三翅脈との間に斜に特殊鱗を有し、黒條を呈はす。雌蟲は表面黒色部多きも、裏面は殆んど相等やく、一様に橙黄色にして、翅脈は黒し。益田郡に於て二頭を獲られたり。

(六八) キマダラ ハナセセリ テフ (*Padraona clara*, Kollar.)

翅の表面は帶褐黒色にして、前後兩翅共

不規則なる黄色の帶紋を有す。裏面は黄色部多く、而して黒斑點在し、前翅の後縁部は黒色を呈す。稻葉、養老、揖斐、本巢、可兒の五郡に於て獲られたり。

(六九) ヒメ キマダラ ハナセセリ テフ (*Angiades ochracea*, Brem.)

此種は雌雄により色彩を異よせり

即ち雄蟲は前後兩翅共黒褐色に中央部は橙黄色にして、翅脈は黒色を呈はし、前翅の第一翅脈と第三翅脈との間に特殊鱗を有し、黒斑をなす。裏面は殆んど一樣に橙黄色を呈し、翅脈は判然せり。雌蟲は翅の表面黒褐色にして、中央に翅脈を以て區劃せらるゝ淡々橙黄色の斑紋列あり。裏面は雄蟲と殆んど同様にして、表面の斑紋微かゝ顯はる。今回加茂郡に於て一頭獲られたり。

(七〇) コ ハナセセリ テフ (*Parnara mathias*, Fab.) 翅の表面は暗褐色に鶯色の鱗毛を有し、前翅よは

帶黃白色の微細なる斑紋あれど、後翅^{こうし}はなし。裏面^{うらめん}は表面^{へうめん}に比し黄色を帯び、兩翅^{りやうし}共微細なる斑紋を有す。雄蟲^{おす}は前翅^{ぜんし}の表面^{へうめん}第一翅脈^{だいいし脈}と、第二翅脈^{だいにし脈}との間^{あひだ}に特殊鱗^{とくしゅりん}ありて、斜^{なめ}に一直線^{ちよくせん}をなす。今回武儀加茂の二郡に於て獲られたり。

(七二) ハナセセリテフ (*Parnara pellucida*, Murray) 翅^しは前種^{ぜんしゆ}と殆んど同色^{どうしよく}にして少しく黒く、前翅^{ぜんし}の中央^{ちゆうわう}に帶黃白色の斑紋^{はんもん}列^{れつ}ありて不規則^{ふきそく}なる半環^{はんかん}狀^{じやう}をなし、尙其後方^{なほそののちほう}は一紋^{もん}あるを常^{つね}とす。後翅^{こうし}の中央^{ちゆうわう}にある同色の斑紋^{はんもん}は一直線^{ちよくせん}をなさずして、多少出入^{たうしうしゆつ}せり。裏面^{うらめん}は帶褐黄色^{たいかつわうしよく}にして、前翅^{ぜんし}の後翅^{こうし}に重なれる部^ぶは暗褐色^{あんかつわうしよく}をなし、後翅^{こうし}の斑紋^{はんもん}は銀白色^{ぎんぱくしよく}を呈す。稻葉^{いんが}、養老^{やうらう}、不破^{ふた}、武儀^{ぶぎ}、郡上^{ぐんじやう}、加茂^{かま}、惠那^{えな}、益田^{えきでん}吉城^{きちじやう}の九郡に於て獲られたり。

(七二) イチモジ ハナセセリテフ (*Parnara guttata*, Brem. & Grey) 此種^{このしゆ}は前種^{ぜんしゆ}に頗る酷似^{たうごくし}すれども翅^しの幅^{はつ}は狭くして長く、後翅^{こうし}の斑紋^{はんもん}は一直線^{ちよくせん}をなすを以て、容易^{ようい}に區別^{くわつべつ}し得べし。幼蟲^{わうちゆう}は稻^{いね}の大害蟲^{たいがいちゆう}なるを以て有名^{いふめい}なり。安八郡^{あやちやう}を除き縣下^{のぞ}各市郡^{しんか}に於て非常^{ひじやう}に多數^{たすう}を獲たり。

(七三) ウラボシ ハナセセリテフ (*Parnara jansoni*, Butl.) 常^{つね}に山地^{さんち}に産^{さん}するものにして、翅^しの地色^{ぢしよく}はコバナセセリテフに類似^{るうじ}し、前翅^{ぜんし}には八個^{はつこ}の帶黃白色^{たいわうぱくしよく}の斑紋^{はんもん}相列^{あひれつ}りて不規則^{ふきそく}なる半環^{はんかん}狀^{じやう}をなし、後翅^{こうし}は二乃至三箇^{ふたにすいさんかん}の細點^{さいてん}を有す。裏面^{うらめん}は表面^{へうめん}に比し著しく黄色^{わうしよく}を帯び、前翅^{ぜんし}は表面^{へうめん}に等しく、後翅^{こうし}には數箇^{すうかん}の銀白色^{ぎんぱくしよく}の斑紋^{はんもん}を有す。今回吉城郡^{きちじやうぐん}に於て二頭^{ふたづこ}獲られたり。

(七四) オホチャハチ ハナセセリテフ (*Ismene aquilina*, Speyer.) 弄花蝶科^{はながせりてよくちやう}中大形種^{ちゆうたけいしゆ}に屬^{ぞく}する者^{もの}にして、茶褐色^{ちやかつわうしよく}に帶褐黄色^{たいかつわうしよく}の鱗毛^{りんもう}を有し、普通^{ふつう}無紋^{むもん}なれども、前翅^{ぜんし}の中央^{ちゆうわう}は數個^{すうこ}の淡黄色^{たんわうしよく}の斑紋^{はんもん}を有するものあり。裏面^{うらめん}は表面^{へうめん}より色稍淡^{いろせうたん}く、前翅^{ぜんし}に多少^{たせう}淡黄色^{たんわうしよく}の斑紋^{はんもん}を有す。今回益田郡^{えきでんぐん}に於て一頭^{ひとづこ}獲られたり。

(七五)クロ ハナセセリテフ (Daimio telys Men.)

前後兩翅共一樣に黒色にして、切々なる白色の縁毛

を有し、前翅に大小數個の白色斑紋あり、裏面は殆んど表面と同一なれども色稍淡く、後翅の中央稍基部に近く、微かなる白斑を有し、軀體及後翅の基部に帶紫白色の鱗毛を有す。此蝶は夏季山部に多くして、静止の時は翅を水平に横たふ。今回武儀、郡上、惠那、大野、益田の五郡に於て獲られたり。以上述べたる處のもの、採集數を表出すれば、即ち左の如し。(表中△印は十頭以上のものに限る)

番號	種名	岐阜	早稲	市郡	羽島	津海	老養	不破	不安	揖本	山武	郡上	加可	土惠	大益	郡田	益城
六六	チヤマダラハナセセリテフ								○								
六七	クロスヤハナセセリテフ								○								
六八	キマダラハナセセリテフ								○								
六九	ヒメキマダラハナセセリテフ								○								
七〇	コハナセセリテフ								○								
七一	ハナセセリテフ								○								
七二	イチモシハナセセリテフ								○								
七三	ウラホシハナセセリテフ								○								
七四	オホチヤバ子ハナセセリテフ								○								
七五	クロハナセセリテフ								○								

◎桑のシンムシ調査に就て

名和昆蟲研究所飼育主任

森 宗太郎

桑の心蝨は桑樹の一大害蟲として、本年五月三縣聯合して一大驅除を勵行せんとの議ありき。當局者の苦心思ふべきなり。然りと雖も、尙は驅除其の効を奏せず、益傳播の患あるは、實に寒心に堪へざるあり。而して本縣下に於ける被害地を擧ぐれば可兒、土岐、加茂、惠那、武儀、郡上の諸郡及飛驒一圓な

り。該地方は蠶業盛んとして、家計の半ばは之れが收利に仰ぐもの多し。特に飛騨地方に於ては、殆んど専業とするもの多く、蠶業の豊凶は、直ちに家計上に影響を及ぼすや大あり。然るに近年に至り、害蟲夥しく、特にクワノシンムシの如き、加害激甚にして、其慘狀實に憐むべきものあり。今其被害反別を擧ぐれば左の如し。

可兒郡 五十三町九反歩 土岐郡 三十一町三反歩 加茂郡 三百五十六町七反歩

惠那郡 九十八町九反歩 武儀郡 三百八十三町歩 郡上郡 九百七十七町五反歩

吉城郡 二百九十一町四反歩 大野郡 二百三十二町一反歩 益田郡 千百七十七町二反歩

右の表は、郡別被害反別を示したるものなり。今武儀郡に於ける被害を町村別示せば次の如し。

上之保村 六十五町歩 坂東村 三十町歩 菅田町 五十町歩

中之保村 三十四町歩 神淵村 五十八町歩 上麻生村 二十八町歩

金山町 三十八町歩 下之保村 二十五町歩 富之保村 四十四町歩

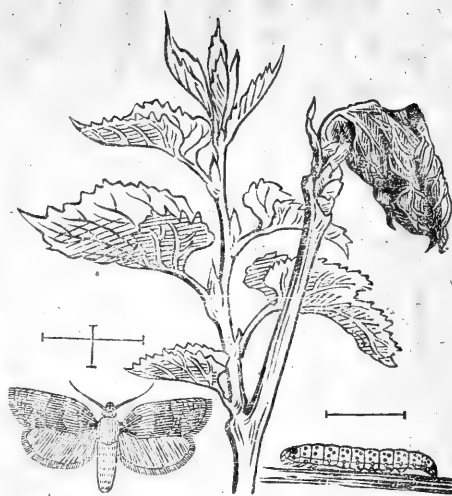
上有知町 十町歩

右の表より推せば、益田郡に接する地は被害多く、漸次西南下するに従て減少するの感あり、是れ益田郡は該蟲の原産地とも目指する處に於て、被害最も多く、漸次武儀郡地方に傳播せしものなるや明あり。而して年々之れが驅除を厲行するも、効果意の如くならざるは、當局者の大に怪む處となれり。是れ該蟲の習性經過を究めず、啻に驅除に力を盡し、研究を對岸火視し、調査に重きを置かざるの罪ならんと信す。余茲に着手し、一昨年是れが調査に着手せしより、經過習性の大要を知り得たるも、唯研究所より於て飼育研究を遂げしのみにて未だ被害地との比較研究の途を得ざりしが、本年又幸に之れが調査の道を得たれば、武儀郡に出張して、調査に着手し、略ぼ其概要を知り得んとするの中途に於て、不幸にも病魔に犯され、研究意の如くならざりしが、十月に至り全快と共に、之れが研究を繼續せしに、

豫想に大差なきを喜ぶと雖も、研究尙淺きを以て、茲に明言するを憚るなり。然れども今研究の大要を記して參考に供するは、敢て無用に非らざるを信ぜ、聊か記する所あらんとす。

抑之れが驅除を行ふも好果を收る能はざるは、必ず敵蟲と共に殺戮するの罪に非ざるなきかを疑ひ、先づ経過を知ると共に、敵蟲の歩合を知らんと欲し次の如く之れを試みたり。「一、數樹の被害芽を自ら摘

シシムン發育の圖



採して、詳細に其數を調べ、一ツの箱に入れ置けり。二、農家の驅除せし芽の同數を他の箱に入れ置けり。然るに第一は

四割五分、第二は八割強の寄生蜂發生せり。之れを以て見るに、寄生蜂の意外に多くて、同時に農家は此の優勢の味方を殺戮せるものあり。而して第一は寄生蜂割合に尠なく、第二の割合は多きは、之れ他なし、第一即自ら摘採せしものは被害芽の枯黄せしと否らざるを問はず、苟も該蟲の蝕入せりと認むるものは悉く摘採せしものにして、第二の農民の摘採に係るものは、枯黄せしもの即ち只目に付き易きものみを摘採して、蟲の小さき爲め被害芽の未だ枯れざるものは其儘

に残しあるを以て、同じく被害芽を摘採するも、茲に大に其差異を生じたる故ならん。該蟲は發生時期の不同あるより、越冬せし幼蟲に大小の差甚しく、其大あるものは翌春桑樹の發芽之際し加害多く、直に桑芽を枯死せしむる者も、蟲体の小なるものは芽に蝕入せるも、食量の少き爲芽の枯黄すると遅し寄生蜂は、蟲体の大なるものは多く寄生せ、蟲体の小なるものには甚少なし。然るに農家の驅除せし被害

害芽は蟲体大よして、芽は枯黃し、蜂に寄生せられしもの甚だ多きものあれば、折角の驅除も効果を收むる能はず、却て寄生蜂を減少せしむるを以て、益々該蟲の播殖する所以ならん。然れども一般農民は如何なる方法を採らんか、余は秋期に於て桑葉を摘採するに利ありと信するものなり。然るに武儀郡に於て、昨年秋期は驅除したる結果(當時は被害葉を見出すは困難なるを以て悉く摘採せり)を見るに桑樹は先端(中刈桑)半ば枯死し、蟲は尙減少せしむる能はざりしと、余亦昨年之れを試みしと、同結果に出でたり。之れ余が研究の尙淺きと基因するものにて、深く習性を究めざるの罪あるを發見したれば余は尙秋期驅除を行はんとするものなり。先づ之れが經過を示せば、余が武儀郡に於ての調査によれば七月中旬頃、盛んに羽化して葉裏に産卵す。卵は葉の主脈と支脈との交叉附近に一個つゝ産付し、約一週日にして孵化し、葉裏の葉綠素を食し、常に糸を吐きて蜘蛛の巢の如くなし、其中に棲居す。故に表面よりは容易に見る能はず、且其産卵當時、春刈桑は大概三四寸に成長し、夏刈は最早切取しもの多ければ、勢ひ春切に産卵せざるを得ず。是れ春刈は夏刈に比し、害多き所以なり(若し之れを立て通し桑に仕立つれば其害實に夥しく殆んど收葉する能はざるに至る)。漸次成長して、九月中旬頃より葉を辭し枝の基部即株基に來り、其樹皮又は芽の附近に於て粗薄の白き繭様物を造り、茲より越冬を遂げ、翌春出で、芽を害し、六月中旬頃蛹化、七月中旬最も盛んに羽化す、之れ經過の大要あり。而して幼蟲の寄生蜂に斃ざるものは、秋期に甚少なく、春期に多く、又産卵當時、桑枝の三四寸成長したるも、彼の性質として、産卵は必ぜ判然たる葉主脈、支脈間に産卵し、芽は産卵せず。而して芽は漸次成長するを以て實際産卵されるは枝の中央以下なり。然るに是は充分成長したる枝は就ての意なるも、株中には短か

き春切の殘にありては、殊に甚しく産卵するを以て、是れ余が秋期驅除に利ありと信する所以あり。昨年之不結果に終りしは、摘採時期の遅れたるものにして、八月下旬より九月中旬の間に行ひたらんには必ず好果を得るならんと信す。其頃は尙ほ木の成長盛んにして、悉く葉を摘採せば桑樹の發育に至大の關係を及ぼし、昨年如き半ば枯死するの恐なきにあらず、然れども茲も最も面白き一事あり、即ち枝の二三尺も成長せしものは、該蟲の棲息場所枝の半ば以下にありて、半ば以上には殆んど稀なるの事實是れなり。故に該蟲の驅除としては、半以下の葉を摘採すれば足れりとす。然れば樹の成育を妨ぐること尠なく、且秋蠶の期節なれば、寧ろ秋蠶を奨勵し、枝の半ば以下の葉を悉く蠶兒に與ふるを講せば、所謂一舉兩得にして、其利益大なるを信す。而して茲に注意を要するは、蠶下は必ず肥料壺を投下腐熟せしむるよりあり、若し然らずして其儘桑畑等に入る、とさひ、其効果の顯はれざる明ければ、豫め注意をすべきことあり。



◎エンドノキリムシ糖蜜驅除試験

名和昆蟲研究所助手 石田和三郎

編者云、本篇は先月の水曜昆蟲談話會席上に於て報告せられたるものなり。エンドノキリムシ糖蜜驅除法に就ては、石田助手主任となり、昨年より専ら調査研究中にして、茲には唯其一部なれど、本欄に收めて讀者の参考に供せんす。

糖蛾類地蠶蛾科に屬して、豌豆、蕎麥其他有ゆる蔬菜類等を蝕害して、農家を苦ましむる所の大害蟲エンドノキリムシは、其成蟲が非常に糖蜜を嗜むの性質あるを以て、此特性を利用して、其驅除豫防の

備考、本試験は甲區五十四頭に對する、乙區は僅か二頭なりしが、而も其二頭は共に雄蛾ありき。
 第二試験 此試験は第一試験と同様なるも、甲區と乙區の距離を遠くして、甲區は従前の場所を用ひ、乙區は被害地の畑中に於てす、但甲乙共八ヶ所とし、其結果左の如し。

採集月日	四月	同	同	同	五月	同	同	同	同	同	同	同	同	同	合計
甲區採集數	九日	十一日	十二日	廿五日	廿六日	一日	二日	五日	八日	十一日	十四日	同	同	同	十一回
乙區採集數	三	一四	一〇	一	四	七	三	二	四	三	二	〇	〇	〇	五三
合計	三	一四	一〇	一	四	七	三	二	四	三	二	〇	〇	〇	五三

第三試験 此試験は當所にて普通行ふ處の夜中糖蜜誘殺法を甲區とし、甲區の方法に依りたるもの、近傍に点火し置きたるものを乙區として、害蟲なるエンドノキリムシ蛾來集の多寡を比較したるものあり。

採集月日	四月	同	同	同	五月	同	同	同	同	同	同	同	同	同	合計
甲區採集數	十一日	廿日	廿九日	三十日	二日	四日	八日	九日	十一日	十四日	同	同	同	同	合計
乙區採集數	二	七	七	六	一〇	五	七	二	四	二	〇	〇	一	二	五二
合計	二	一〇	九	八	一三	七	八	二	四	三	〇	〇	一	二	六六

備考、甲區に集り來る所の蛾は糖蜜に溺れ、舉動不活潑なるも、乙區は集り來る者は活潑にして、採集困難なるが如し。而して甲區採集數五十二頭に對する、乙區は採集數僅に十四頭の不結果を來したるも試験外なる尺蠖蛾類は、比較的多く集り來る様見受たり。

以上の試験に據り第一第二の試験に於ける漏斗形糖蜜採集は、驅除豫防の方法と云ては全然不結果にして、被害地近傍に、殼斗科植物等の如き外皮粗よして脂の出でざる樹木あるに於ては、其樹幹に糖蜜を塗抹して驅除する方法尤も効あるを認めたり。茲に又該蟲は糖蜜の外燈火を親しむの性あるを以て、糖蜜誘殺を加ふるに点火せば一層の効を奏すべきならんとの想像より、第三試験を成したるも、之れ又却て蛾の性質を活潑ならしむるの傾きありて、意外の不成蹟を見るに至ると同時に、次の如き試験は大に勞力を省くべきあらんとて、其試験をも合せて實行せる事となれり。

キコリムシのみは少許の異状だも呈せざりき。

右に依りて考ふる時は、毒藥の分量を今少しく増加するに於ては、之が糖蜜を吸收する昆蟲は或は死するからんも、彼等の觸角は非常に發達したるものと見へ、無臭同様にして、神經過敏なる鼠さへ之が爲に倒さるゝ程の亞硫酸百分二の分量なる糖蜜にさへ集り來らざる程あるを以て、多量の毒藥には殆んど無効なるべく、從て人類其他の者に對しても危険の恐あるを以て、到底實行する能はざるものなりと信す。以上諸種の試験は、研究の時甚だ短かく且つ不備の点多ければ、今後尙出來得る限りは回を重ねて試験を繼續するの目的なるも、第二期發生に於けるエンドノキリムシの成蟲は、八月十二日より始めて一頭を見附けてより、漸次其數を増加して、目下は一夜に數十頭を捕殺する事を得る程なるを以て、こは他日報告すべきも、兎に角、不完全ながらも茲に記述して、一は參考に供し、一は諸君の叱正を乞て、一臂の助力を願はんとする次第なり。



雑録

◎六足蟲彙纂 (戊の巻)

在東京 長野菊次郎

(二十七) 小き昆蟲の大害

自然は往々吾人に教ふるに、物の大小は其の關係の大小を示す標準にあら

ざることを以てせり。即ち昆蟲類中よて最も慘害を逞ふるものは、大形のものよりも寧ろ小形のもの

にして、小なるものは却て大なる損害を及ぼすことは、一見不條理に似て不條理にあらざるなり。彼

の葡萄蟲(Phylloxera)の如きは、千八百五十四年より米國ニューヨークよ於て初めて發見せられたるもの

あるが、千八百六十三年には佛國に移轉せられ、漸次蔓延して、葡萄の栽培に大打撃を與へたり。即ち

千八百七十九年に之が害を被りたる地面は、殆んど三百萬エーカーに達し、全く葡萄の栽培を廢して他

の用に供せざる可からざるに至りぬ。然れば之が研究精査の爲めに、佛國政府が支出したる金額は、年々殆んど貳拾萬弗に及び、之が適當なる救助法の發見につきては、六萬圓の懸賞をさへ辭せざりけり(ウ

キード氏の昆蟲世界

(二十八) 昆蟲と鳥と 合衆國及び加奈太に於て、年々害蟲の爲めに受くる損害は、殆んど四億弗の巨額に達すと云へり。此の如く、昆蟲は實に植物の自然の大敵なるが、鳥類は又昆蟲の自然の敵とも云ふべきなり。今一羽の鳥が、一日平均二十五疋の昆蟲を捕獲するものとし、假に一エーカーの地は僅か一羽半の鳥が棲息するものとすれば、ネブラスカ (Nebraska) には七千五百萬の鳥の存すべき理にして、之が爲めに驅除せらるゝ昆蟲は、毎日實に十八億七千五百萬疋なる譯なり。今昆蟲の數十二萬を以て一ブツセル(殆んど我國の二斗許)を充すとすれば、一日に鳥の食量とあるべき昆蟲は一萬五千六百二十五ブツセルに當り、六十日間には九十三萬七千五百ブツセル、百五十日間には二百三十四萬三千七百五十ブツセルに當る譯なり。抑も此計算たるや、鳥が一日に要すべき昆蟲數の最低額を批準とせるに關はらず、尙此大數あり、然れば其實に至りて一層の多さを加ふるや知るべきなり。今其一二例を擧げんに、ヤマガラの一種 (Chickadee) の四羽の胃中よりはカンカー、ウラーム (Kanker worm、尺蠖類にして雌の成蟲は翅を有せざるもの) の卵千〇二十八個を含み、他の四羽には同蟲の蛾の雌百五疋と、六百の卵とを含みたることありと云ひ、又一羽の郭公の胃中よ、百〇一疋の馬鈴薯甲蟲 (Potato beetles) 及び五百疋のカムシ類 (Chinch bug) を含み、又朝の六時は射撃せられたる黃嘴郭公 (Yellow-billed cuckoo) が、既に四十三疋のテンマクケムシを取り、又コマドリがケバイ (Bibio) の幼蟲百七十五疋を食ひたりと等の事實ありしことを知らば、實に思ひ半ばに過ぎん (ウキード氏の昆蟲世界)

◎昆蟲に關する隨感隨筆 (第五回)

昆 蟲 翁

(卅一) 蚊帳使用の遲速 大阪府天下茶屋に於ては、三月彼岸の頃より最早蚊帳を用ひらるゝ由を聞知せり。然るに翁は五月初旬、三河國御油町に泊したるとありしに、同地にては已に四月末より蚊帳を用ひ居ると云へり。當岐阜市に於ては、六月始め、漸く蚊帳の準備を爲す位なり。僅五里を隔る大垣町は、岐阜市に比して、約一ヶ月遅く用ひて早く收むるの傾きあり、又飛驒國に到れば、多く蚊帳を用ひざる所あり、故に強て蚊帳の効用を問はば、恐く晝間蠅を防ぐものならんと答ふることを信ず。因に記す本年岐阜市京町に於ては、十月始めより全く蚊帳を廢せり。

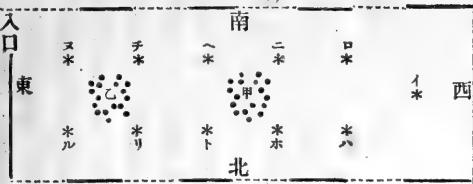
(卅二) 現蟲調査の必要を感す 曾て某氏は廿四鳥羽蛾を採集したりとの報知あるを以て、一度現蟲を

親しく視たき故送附方を依頼したるも、遺憾ながら鼠害に罹りたれば、再び採集の上送るべしとの返信を得たり。然るも其後一頭を得たりとて、態々郵送せられしを以て、直に開封親しく視るに、豈も圖々んや、廿四鳥羽蛾よあらずして十鳥羽蛾即ち普通の鳥羽蛾なるを始めて知れり、依て考ふるに、最初鼠害に罹りて失ひしものは、果して廿四鳥羽蛾なりしや否や、疑を生ずるに至れり。故に分布調査は必ず現蟲を以て摸範標本と比較して誤りなきを認めたるにあらざれば、決して記入すると能はざるを確信せり。

(卅三) 光線の焼点に昆蟲の群集 昨卅五年八月、全國害蟲驅除講習會を例の如く開き、夜の自習の際教室は於て上圖の如く十一個の洋燈を位置正しく点火せしよ、某夜天井の紙面に無数の小形昆蟲(雙翅類に屬するもの尤も多し)の(甲)点に群集するを發見したれば、試みにイ、ロ、ハ、ニ、ホ、の五燈火を消滅せしに、昆蟲は直に變動を起して漸次移轉を始め、遂に(乙)点に到りて全く位置を定めたり。再び点火すれば、又始の如く(甲)点に複す、幾回試むるも規則整然たれば、實に愉快絶なりと、會員一同叫びたり。依て考ふるに、昆蟲は光線の焼点に群集するの性を有するもの、如し茲に記して後日の參考に供す。因に記す、教室は岐阜縣農會事務室の樓上にして、三間も八間の面積を有せり。

(卅四) 紋黃鳳蝶の分布 昨卅五年十月發刊の本誌講話欄に「モンキアゲハテフの分布に就て」と題して記載したるとあり、然るに茲に本年開設の第五回内國勸業博覽會へ當研究所より出品の添出品として、鳳蝶科に屬する十三種の分布圖あり、其記載を茲に示せば、即ち(京都府)卅四年全國昆蟲展覽會出品、丹後、岩見勇藏。(兵庫縣)卅四年七月二日、神崎郡船津村、クサギ、雄、東郷隆次。(長崎縣)エツチ、ブライヤー。(三重縣)卅四年全國昆蟲展覽會出品、伊勢、三重郡、後藤幸吉。(愛知縣)卅五年、三河國渥美郡老津村并に泉村、宮林桂次郎。(静岡縣)卅二年八月十日、濱名郡蒲村神立、雄一、岡田忠男。(鳥取縣)卅五年八月十八日、氣高郡、山中、クサギ

花、雄一、竹信虎藏。(岡山縣)卅四年二月、邑久郡昆蟲展覽會出品、名和梅吉實見。(高知縣)廿二年四月、高知、黒岩恒。(福岡縣)卅年八月、筑紫郡、長野菊次郎。(鹿児島



教室平面の圖(イ)より(リ)迄は洋燈の位置(甲)乙は昆蟲群集の位置黒線は壁点線は窓

鳥縣)廿八年八月、大島郡名瀬、沖繩師範學校生。(沖繩縣)琉球、黒岩恒。以上は分布圖中、採集年月日、採集場所、採集人名の部へ一府縣一ヶ所宛府縣順を以て記載せり。故に一府縣一ヶ所以上知られたる際には、欄外備考の部に記載するを例とす。今備考中記載のものを擧ぐれば、卅五年八月廿九日鳥取縣氣高郡山中クサギ花上に於て見る、又同縣師範學校教諭高橋直義氏は同縣下に於て常々見且採集せしと云へり(名和靖記す)。沖繩縣八重山、五六月、黒岩恒。同縣同山五六月、三木原廣介。日本蝶譜中グライアーは暖地即長崎、高知も産と云へり。卅五年五月、靜岡縣周智郡久努西村増田彌三郎採集す。三重縣後藤幸吉は卅二年紀伊にて採集の由。福岡縣企救郡彦山、矢野宗幹。以上。其後に於ける紋黃鳳蝶に關する件を記せば、本年八月廿三日附の中川純氏(姫路市下寺町)の報告に依れば「モンキアゲハ播磨にも産す。余昨廿二日自宅構内に於て、モンキアゲハテフ雌一頭を採集せり。播磨にては未だ該蝶を採集せし事を聞かざれば分布調査の御參考にもと報告せる次第なり。尙該蝶は六月八日馬關春帆樓庭内に於て、同月十日豊後速見郡立石村に於て、同月十一日同國大野郡西大野村山中に於て飛翔せるを見受たり」と。又本年五月初旬、三河國寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會の節、參考品の内に於て、同郡にて採集せしもの二、三頭を見たり。又本年八月、丹波國天田郡に於て昆蟲學講習の際、會員持參の標本中に二、三頭を見たり。尙又福知山町公園城山に於て飛揚するものを慥に見たり。聞く所に依れば、紋黃鳳蝶は天田郡内には多數發生し居るとは確實なる所なり。其後鹿兒島縣農學校教諭生熊與一郎氏の話に依れば、同縣下に産するとは勿論、柑橘類に産卵して其幼蟲をも得られしとありと云へり。茲に於て分布區域も漸く廣く、食餌の植物も初めて明瞭となれり。

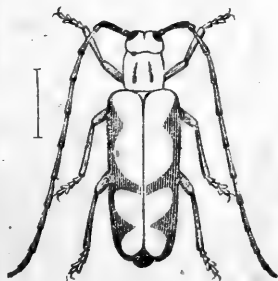
(卅五)旭天牛と鹽田氏 當研究所は目下所藏の天牛科に屬する標本は凡そ二百種程に達するも、茲に鹽田健藏氏は、當所の未だ有せざる所の一珍種の天牛を惠與せられしを以て、挿圖の上、略記を掲げて厚意を謝す。旭天牛の体長は三分三厘(頭より翅端までの長さを指す)、幅一分、觸角十一節より成りて体より長さと一分、第三節迄は黒くして太く、第四節以下は細くして黃褐色を呈す。複眼は大にして腎臟形をなし、黒色を帯ぶ。額面帶黃黒色よして、前胸は殆んど方形よして頭部と共に黄色に、中央縦に隆起し、其左右に一條の黒色縱線あれども餘り判明あらず。翅を疊むときは形長方形にして、前胸より幅稍廣く、表面黄色に中央及其上下に矢筈形の黒斑あり、中央よあるものは判明あれども、上方にあるは不明、下方よあるは稍判明なり。側面の下方は頭胸部を通じて黒色を帯び、肢は三對共に暗黄色

にして長さ大差なく、腹面は黄白なり。此種は明治卅六年七月三日、岐阜縣郡上郡上保村塩田健藏氏が福井縣大野郡下穴馬村字旭に於て、枋の葉に居りしを採集せられしものなれば、紀念の爲め採集場所の地名を執りて旭天牛(アサヒカミキリムシ)の新稱を附せしは、全く斯學の爲は素より、特に塩田氏よりは爾後旭日の登るが如き勢を以て、斯學に勉められんとを希望するの餘り、茲に此の名を命せし所以なり。(卅六)鳳蝶蛹化の際に於ける變色 本年鳳蝶(アゲハノテフ)の幼蟲を數十頭飼育して、蛹化の際に於ける變色の有様を試験したるに、食餌とする枳殼の綠枝に於て蛹化する時は、悉く綠色の蛹を得しも、黒褐色に枯死したる苹樹の枝に於て蛹化せしめたるものは、悉く黒褐色の蛹となれり。又白色の壁面に於て蛹化せしめしに、幾分か薄き綠色の蛹を得たり。其他種々の試験を爲したるも、材料乏しく、準備不充分の爲め報告する程の結果を得ざるも、明年は數百の原料を得て試験する

アサヒカミキリムシの圖

の考へなれば、何れ相當の結果もあるからんと信せり。(卅七)窠切蟲は卵にて越冬す 美濃國揖斐郡北方村森本常三郎氏は、昨卅五年に於て、窠切蟲數百頭を飼育して、四百個以上の繭を作らしめ、其羽化したる蛾の産卵は全く越冬せしことを證せられたり。

(卅八)胡蘿蔔青蟲の寄生蜂 胡蘿蔔の青蟲には寄生蜂數種ありて、大形種は大抵一頭の宿主より一頭の寄生蜂出づるも、小形種に至りては實に意外の最大多數を出すもあり、即ち本年十月廿三日長期害蟲驅除講習生中井藤助氏の調査したる所に依れば、一頭の宿主を解剖して貳千六百卅三頭の寄生蜂の蛹を得、又去る卅四年九月に於て、助手名和愛吉の調査したる際にも殆んど同數を得たり。恐く一頭の宿主よりは程多數の寄生蜂を出すもの多からざるべしと信ず、尤も始めには多數の成蟲來りて、同時に青蟲即ち宿主に集りて産卵せしに外ならず。



◎昆蟲界の花壇

在米國 名和梅吉

(四)貝殼蟲附の果實に就て 余は曾て本邦よりありし時、年々梨其他柑橘類等果實の各市場に現はるゝや、貝殼蟲の附着、加害の程度如何を調査し、以て該蟲加害の多寡を豫想せし事ありき。故を以て亦當米國に於ても同一の關係を調査せばやとて、夏季以來、加洲桑港市に於て市場に現はるゝ所の苹果、梨及

桃等に付、該蟲類の附着加害の狀況に注意しつゝありしは、最初の程は殆んど貝殼蟲の附着を認知し得ず、流石は害蟲驅除に注意の到れる國丈、其効果の著しき事を感じたり。然るに其後追々市場に現はるゝ果實の多數なるに従がひ、獨り貝殼蟲のみならず、果實内を蠶喰する所の蛾類の幼蟲が加害せるものさへ多くあるを認知するに至りたり。茲に於て余は尙其貝殼蟲の加害の程度を知らんとて、或時は某店に入りて細驗する事再三に止まらず、回を重ねる度毎にその加害の度を測かふれて、最初の感は全く反對の結果となり、増々害蟲驅除の困難なる事を思ふ様になりたり。さはいへ特に余の讀者諸氏の注意を促さんとする一事こそ其間に存せり、即ち他にあらず、本邦に於ける果實販賣店に就て見れば、一目瞭然、果實の表面に點々貝殼蟲の附着し居るもの有りと雖も、當地にありては全く然らずして、貝殼蟲の附着を一目の下に認知し得べきものは、殆んど皆無とも云ふべき程にてありき。然らば如何になり居るかと云へば、貝殼蟲附着の者は、總てろが貝殼の剝離しある事にて、一目之を認知し難くなり居りて、恰も無害の觀を爲せり。さりながら此處は覆ふ可からざる標徴のあるありて、其加害の狀態を豫想し得らるゝこそ如何ともすべからざるなり。即ち其標徴とは各果實に近接して細驗すれば、該蟲附着の證跡の殘存する事なりとす。そも此剝離の一事は該蟲の蔓延を防止するの一方と見て可ならんか、故に余の本邦に於ても、亦貝殼蟲驅除と共に、一方には斯の如くして豫防に注意する迄に到達せんことを望む。

(五)米國に於ける松樹害蟲數　今米國の昆蟲學者バツカワード氏の十余年前に調査せられし森林植物の害蟲中、松樹に發生加害するものを見るのに總數百七十種の多きを算せり。右百七十種中各目に分別せば、膜翅目は屬するもの拾參種(内拾壹種ハ鋸蜂科、二種は樹蜂科)にて、鱗翅目は第二位を占め五十一種(内蝶類二種、天蛾類六種、蠶蛾類八種、尺蠖蛾類十五種、糖蛾類七種、小蛾類十三種)、雙翅目は二種にて共に蟲癭科に屬し、鞘翅目は第一位の數を占め八十一種(内金龜子科三種、吉丁蟲科十八種、天牛科二十種、象鼻蟲科十一種、小蠹蟲科十八種等は重なるもの多し)の多きあり、而して有物目に屬するものは二十三種(内貝殼蟲科及蚜蟲科は各六種宛、泡吹蟲科八種、木蝨科二種及薄翅浮塵子科のもの一種)となれり。以上の結果に依り考ふるに、各科中、本邦に於て未だ聞知せざる害蟲は蝶類に屬するものにて、他の科類に屬するものは殆んど本邦の松樹に於ても加害することを信ず。然し其種數は到りては、今此處に記述し能はずと雖も、兎も角、松樹害蟲の大要を知るに足らんか、記して參考の資となす。

(六)煙草螟蛉に就て　タバコノアラムシと言へば、全く煙草のみを加害するもの、如く思はるれども

實際に於ては然らず、各種の植物に發生して大害を來すことあり、本邦にては、煙草の外茄子科植物のホホヅキ等も發生するのみにて、未だ他の栽培植物に加害せしを聞かずと雖も、當米國に於ては草綿、玉蜀黍及び赤茄子等を始めとして、葦科植物に迄加害を逞くし、非常なる損害を與ふる事ありと云ふ。現に余の實驗に依れば、玉蜀黍の如きは、市場に現はるゝもの、内、十中八、九迄は、全く此種の加害を受け居るを以て見れば、該蟲の加害が如何に旺盛なるやは知るに足らん。

◎ 螟蟲驅防獎勵展覽會準備記事 (第四)

蟲の家主人

(一) 切取稻莖所分の結果 昨卅五年九月廿一日のとありき、静岡縣周智郡飯田村に於て、螟蟲の爲め稻の白穂とありたるものを切取りて一所に堆積したる所、實に山を爲せり。其莖數三十四万六千八百〇三本(今假りに一本の粒數百粒とせば、三千四百六十八万〇三百粒となり。一升を三萬八千粒とせば、九石一斗二升六合となり。是を六分摺とせば玄米五石四斗七升五合六勺とある。一俵金四圓五十錢即ち一升金十錢七厘とせば此代金實に五十八圓五十八錢九厘となる。實際に於ては尙ほ三分二の白穂残り居ると云へり)あり、然るに暫くにして、酸酵熱の爲め螟蟲は殆んど莖中を出でたるを以て、石炭油にて稻莖と共に焼却せんとしたるも、夫は農家の爲め不經濟なれば是非見合せられたし、願は後日の好摸範を示したければ、此莖を悉く槌にて打ち、然る後堆積肥料として用ひられんとを深く希望し置きたるも、其後何等の報知もなければ如何なる結果を得られしものなるやを心配の餘り、今回飯田村役場へ照會したるよ、左の報知を得たり『前號本欄の(一七)切取白穂の槌撃の部を參照ありたし』。

拜復、本月八日御投函の書狀、正に拜見仕候、陳は昨年九月御尊來の節、本村農會員一齊に切取たる白穂は、御教示に依り五、六ヶ所に推積し、田方二毛作の元肥に施用候所、相當の効有之候趣、御陰を以て、本年は大抵各戸切取たる白穂は、矢張堆積し置き、茶又は二毛作肥料に施用候事に相成候、先は御禮旁御回報仕候也(廿六年十月十四日)。

(二) 螟蟲被害莖拔取り成績 愛媛縣周桑郡石根村農會に於て、螟蟲被害莖拔取りを施行せられし成績を同縣農會報に報告せられしものを左に掲載せん。

八月廿七日より九月十日に至る十四日間、本會役員及村役場常置驅除委員出張監督の上、螟蟲被害莖拔取りを執行す、其方法收集結果左の如し。執行中に被害莖三百本に對し番札一葉を與へ、抽籤當者に一本の抽籤を成さしむ。抽籤當は、一等賞(金貳圓)一本。二等賞(金五拾錢)四本。三等賞(金貳拾錢)十本。四等賞(金拾錢)三十本。五等賞(金五錢)五十五本。六等賞(金貳錢)五百本。無賞

五百十本。收集莖數總計三十三萬三千本。人員三百二十六名。抽籤執行日九月十一日。但し當日不參者の分、無抽籤に因り、豫定金額より六拾錢を減す、支出總計金貳拾壹圓拾五錢。

(二) 南河内郡の螟蟲驅除 大阪府南河内郡農會三十五年度事業中、螟蟲驅除に關する件を中央農事報より左に轉載す。

苗代卵塊採取順序方法、同採取獎勵金交付規程等を定めて、小學兒童に採卵を實行せしめたり。其れが爲め、校數五十九校。採卵數百九十萬五千五百八十六塊。獎勵金額千貳拾五圓七拾八錢五厘。交付人員四千八百八十一人。平均一人交付額廿六錢九厘。廿五年末此獎勵の金が基礎となりて貯金となりしもの四千九百九拾八圓壹錢四厘、此一人宛貯金高壹圓拾九錢五厘となりて、大に貯金の美風を起せり、又其交付金は凡て切手貯金を以てせり。今螟蟲驅除に關する諸規程を左に抄録すべし。

○南河内郡螟蟲卵塊及螟蟲蛾採取獎勵金交付規定 (第一條) 本郡稻苗代若くは稻田に於て、螟蟲卵及螟蟲蛾を採取したるものには此規程に仍り獎勵金を交付す。(第二條) 螟蟲卵塊は、明治廿六年七月末日迄に、小學校生徒が苗代及稻田に於て採取せしものを、小學校長を経て當廳へ送達したるものに限る、百卵塊に付五錢以内の獎勵金を交付す。但百塊未滿の端數は獎勵金を交付せず、本條の期限は時宜に仍り伸縮するところありし。(第三條) 螟蟲蛾は一部落以上の農家が、苗代内に於て、共同誘蛾燈を用ひ採取したるものに限る、百蛾に付四錢以内の獎勵金を交付す。但百蛾未滿の端數は獎勵金を交付せず。(第四條) 螟蟲蛾を採取し獎勵金の交付を得むとするものは、實施の一ヶ月前に組合人名、苗代總反別及誘蛾燈數を記したる事業計劃書及經費豫算書を添へ、獎勵金交付申請書を郡長に提出すべし。(第五條) 獎勵金は螟蟲蛾に就ては所屬町村農會長に、螟蟲卵に就ては小學校長に之を交付し、農會長又校長は更に之を各當事者に轉付するものとす。(第六條) 小學兒童に對し交付する獎勵金は郵便切手を用ひ、校長は之れが貯金監督を爲すものとす。(第七條) 本規程を施行するに方り必要なる細則は別に之を定む。

○南河内郡螟蟲卵及螟蟲蛾採取獎勵金交付規程細則 (第一條) 南河内郡螟蟲卵塊及螟蟲蛾採取獎勵金交付規程に基く事務は、總て本則に仍り之を取扱ふものとす。(第二條) 町村農會は誘蛾燈を點する計劃ある部落毎に、害蟲驅除豫防委員中豫め點燈主務者を擔任すべきものとす。(第三條) 點燈主務者は日々受持區の誘蛾燈を檢し、其誘殺せし螟蛾は乾燥の上紙嚢に容れ、蛾數及部落名を記し、甲號書式の目錄書を添へ、三日毎に之を町村農會へ送付すべし。(第四條) 町村農會は螟蛾受付簿を調製し、收受したる蛾を點檢記入の上七日毎に取纏め、乙號書式の目錄を添へ、當廳へ送付すべきものとす。(第五條) 小學生徒の採取せし卵塊は熱殺乾燥の上、百個一束とし、校長に提供し、校長は名簿を作り、之を取纏め五日毎に丙號書式の目錄を添へ、當廳へ送付すべきものとす。(第六條) 小學校長は締切後一週間に、丁號書式の報告書を作製し、當廳へ差出すべきものとす。(第七條) 締切後三週間に、校長は戊號、町村農會は己號書式の統計を作製し當廳へ報告すべきものとす。(第八條) 左の各項に該當するものは、獎勵金を減殺若くは交付せず、一、

小學校生徒が螟蟲採卵を教員監督の下に於て行はざるもの、一、螟蟲蛾誘殺に方り、當廳より指示する方法を遵守せざるもの、一、前項の外規程又は當廳の指揮に違背せしもの。(第九條)本則の明記なき事項は、必要に應じ、隨時郡長より之を指示す(書式略)。

○螟蟲卵塊採取に就ての注意(教員に對する分) (一)監督教員一名に、兒童十名乃至十五名を以て一組とす、但高等小學校は全部尋常小學校は四年生以上に限るを可とす。(二)監督教員は兒童の卵塊を誤採せざるとに注意すべきは勿論、殊に苗代に損害を與へざる様注意を要す。(三)村内苗代數に應じ、採取順序を定め、一般に普及するを要す、但第一回に於て綿密採取したる苗代の、第二回採取は一週日後に於てするも差支なし。(四)採取する大字の日割を定め、所屬町村長に通報するものとす(五)高等小學校兒童は場合により、便宜兒童居住の尋常小學校教員に其監督を囑托するも差支なし。(六)實施に際しては、兒童毎に受持區域を定め、綿密注意せしめ、遺漏なきに及んで更に新區域に移らしむるものとす。(七)區域を定むるには左の圖の如くするを便とす(圖略す)。(八)各大字苗代の採卵日割を定むるに方り、必要なる苗代圖は、豫め村役場に就き寫し取り置かれたし。

(二四)臺灣の螟蟲 日本藩國內に於て、苟も米作の土地には、二化生螟蟲の發生被害せざるはなし。臺灣は素より、近頃漸く米作の出來得るに至りし北海道に於ても、螟蟲の害は中々盛んなりと聞けり。又離れ島なる佐渡國も於けるも、螟害甚しく、随分驅除の方法も發達し居る由。實に螟蟲の爲は、神武以來稻に對して損害を與へ居るや明かなる所なり。是を驅除せんとせば、特に注意を要すべきなり。今茲に臺南新報の報する所の記事を掲載して、臺灣に於ける螟蟲發生の狀況を知らしめんとす。

○灣裡方面螟蟲發生狀況 去月廿七日灣裡方面に出張せる臺南廳總務課登島技手の取調によれば、灣裡附近は白穗多く、稻莖を三節又は四節目より摘取りつゝあるのみにて毫も驅除の効を奏せず、仍て同技手は驅除の方法を指示し、人夫百五十名を集め、驅除に従事せしめたりと。安定里東堡内は甘蔗作を主として、米作尠なき地方にして、全体より觀察するときは、水田耕作法に似たるも、實際は畑作をなすが故に、既に收穫を終りたるもの多く、未收穫の分と雖も、數日の後收穫を終るべきもの多し、該方面は水害の結果泥沙を被りたる爲め、牛畜の飼料たるにも適せざるべく、平年よりも高刈となしあるか、螟蟲は此殘株内に發生するもの多し、故に先づ之を刈取るの要ありと、善化里東堡は收穫済みなれるもの二百四十餘甲にして、目下尙は收穫中の所もあり、五六日後に收穫せんとする面積は約三百五十甲あり、此地方の被害面積は善化里東堡五百四十甲、同西區六百甲、安定里東堡二百六十甲合計千四百甲なり、土人の唱ふる所によれば、溝灌又は散播は被害少しと雖も、其土地は既に收穫後に屬し、今之を知るに由なしと。



◎博覽會出品害蟲標本解說書 (三等賞)

愛知縣 渥美郡昆蟲研究会

解説書

部 類 番號 品名 出品人

渥美郡昆蟲研究会長 山田正

沿革 我が渥美郡は太平洋に面する半島地にして、氣候温暖、作物に適すると、併せて昆蟲類の繁殖も亦盛なり。古來稻作の害を受くるは浮塵子を以て其重あるものとし、之れが驅除を唱ふるもの又なきにしもあらずしが、其被害の却て大なる二化生螟蟲に至りては、少しも注意するものなきが如く、往々秋收の際倒臥せる田面を見るときは、之れを秋浮塵子の害とあし、天候の然らしむるもの亦如何ともなし難きとて放任したるもの、如し。物變り星移り、時勢の進運は何時迄か此腹脹を持續せしめず、茲は本郡田原町に岡田虎二郎なるものあり、幼よして農業に志し、身士族よして自ら勸を採り耕耘に従事す、思へばく螟蟲の被害浮塵子に倍する事幾許ぞや、如何よもして一般に施行せしむべき簡單なる驅除法を發明せんと、多年刻苦研究の曉、採卵法を以て適切なる方法なりと信じ、自ら其方法を示して親友知己に實行せしめたるに、成績何れも顯著なりしかば益々之を普及せん事に勉め、時の郡長松井讓氏に陳述し、又一方は郡農會より獎勵の法を設けしめ、種々盡力の結果、郡内各町村に施行せしむるに至れり。而して其成績の良否如何を察するは、一般昆蟲志想の乏しき、往々誤解を生じ、爲めに良成績を示すもの少し。爰は於て岐阜縣より名和靖氏を聘し、郡内六ヶ所は害蟲驅除講話會を開設すること前後三ヶ年、稍や害蟲の何たるを辨知し、大に其効を奏せり。然れども未だ普及の策を得たるものと認め難きを以て、普通教育時代の學校生徒は昆蟲志想を普及せしめんと欲し、郡内小學校教員の内より三十六人を選抜し、郡費を以て岐阜市に派遣し、三週間の講習を開きたり。然して二ヶ年開設し、前後七十二

名を養成す。本講習生及び有志の團體を組織したるもの即ち渥美郡昆蟲研究會と稱す。本會は常に昆蟲志想の普及を計り、併て害蟲驅除の効果を收めん事を欲し、各會員義務の傍ら標本を製作し之れが説明をなし、兒童に昆蟲志想を起さしめ、且つ一方にありては青年者若しくは農業者夜間集合し、害蟲驅除の講話を行ふ。標本材料採集の如きも兒童によりて得、野外運動隊伍をなし、或は家庭にありて注意せしむる等専ら科學上に資せしめ、知らず識らず害蟲驅除、益蟲保護の觀念を生せしむる手段たり。本會の規約及現在會員住所姓名は左の如し。

渥美郡昆蟲研究會規則

第一條、本會は渥美郡昆蟲研究會と稱す、但事務所は當分の内本郡役所に設く。

第二條、本會は昆蟲講習會修業生及其他の有志を以て組織す。

第三條、本會は昆蟲の性質、形狀、經過等を研究し、斯學の普及を圖り、實地に應用せしむるを以て目的とす。

第四條、前條及昆蟲講習會規程第九條の目的を達する爲め、左の事項を行ふものとす。

一、郡内に四個の部會を設くる事。一、官衙の諮問及當業者の質問に應じ又は意見を官衙へ開陳する事。一、昆蟲標本を陳列し、衆人の縦覽に供する事。一、名和昆蟲研究所及其他昆蟲に關する諸會と聯絡する事。

第五條、本會に關する費用は各會員の負擔とす。

第六條、本會に左の役員を置き、幹事をして部長を兼務せしむ。但任期は滿一ヶ年とし、總會に於て推舉するものとす。

會長 一名 副會長 一名 幹事 四名 書記 一名

第七條、總會は毎年一回(三月)之を開き、部會は隔月之を開く。但其都度實況を名和昆蟲研究所へ通知し、部會に於ては同時に會長へ報告するものとす。

第八條、本會役員は凡て無給とす。但事宜に依り報酬又は實費を支給する事あるべし。

渥美郡昆蟲研究會會員名簿

第一部

豊橋	伊東安太郎	同	伊藤佐度平	同	大竹泰市	吉田方村	田愛之助	福岡	伊藤重太郎	東京	彦坂幸太郎
同	山本來作	同	越川伊助	同	鈴木里吉	谷山藤平	豊岡	中神清太郎	米國	岡田虎二郎	宮林菊次
同	藤井治郎	同	大林作次郎	同	坂柳梅太郎	古濤喜代太郎	計	二十二	八名	平尾啓次郎	休會者
同	大矢重次郎	同	宮林桂次郎	花田	平井四男	小林	靜次	北設樂	田村政五郎		

額田	杉浦 吉	同	豊田 小平	合計	十九人	同	太田清右衛門	第四部	堀切 山口七九郎
計	六人	同	彦坂 久藏	第三部		同	仲井式次郎	若戸	伊藤 要藏
合計	二十八人	豊南	豊田俊次郎	田原	杉原 孝	相川	鈴木澄藏	同	永田 茂兵
第二部		大崎	河合浦治	董浦	鈴木 額之同	河合	庄藏和地	河合	重吉
大川	青木久三郎	老津	中村喜助	野田	長神 廣	杉山	河邊 嘉一	堀切	間瀬 半助
同	野口惣吉	同	彦坂 利作	同	高橋 譽四郎	計	十六人	中山	渡會 米三郎
谷川	夏目彌太郎	植田	鈴木 保一同	河邊	每保	休會者	一	清田	齋藤 專吉
同	佐原啓次郎	泉	兵藤 京藏	大久保	中神愛次郎	八名	井上 泰次郎	同	鷺山 善連
佃太	村田熊次	計	十七人	高松	福井信太郎	名古屋	山本孝太郎	同	杉浦 桐平
小澤	飯野 市藏	休會者		六連	大羽 辨吉	南設楽	鈴川 英泉	丸井	近藏
同	山田嘉作	寶飯	田中周平	同	大久保一彌	東京	伊藤藤太郎	同	松野 紋治
高根	長濱 丈助	同	柴田俊太郎	赤羽根	小林 伊吉	計	四人	計	十人
野依	山田 文耕	計	二人	同	鈴木 里吉	合計	二十人	休會者	

本會は於て調査せし郡内螟蟲採卵數三ヶ年分左の如し。

明治三十三年 五十五萬七千〇七十二塊 明治三十四年 六十七萬八千四百九十塊 明治三十五年

五十七萬二千九百三十五塊

効用 本會は主として昆蟲志想の普及を計る爲め各小學校生徒をして材料を採集せしめ、會員之が説明の資料となす、故に賣品の如き製法完全を期し難しと雖も、一般の害蟲驅除を等閑に付すべからざる事を信せしむる材料なり。

褒賞 明治三十三年東三聯合物産共進會に於て四等賞を受け、明治卅四年全國昆蟲展覽會に於て三等賞及び四等賞を受領し、同時に會長岡田虎二郎は螟蟲採卵法發明の点に依り功勞賞銀盃を受領せり。

審査請求主眼 以上各項を述べたる如く本會の組織、昆蟲志想の普及を計り、農作物の害蟲驅除豫防を完全に行はしめんと欲するにあり。故に一般の賣品標本と同一視せられずして、普通教育即ち義務教育時代たる學齡兒童の採集品たるを、害蟲驅除豫防方法の全部に普及し居るや否や調査あらん事を望む。

◎昆蟲の二、三

山口縣 小田 勢 助

冷や、近來何や取り紛れ、暫く筆を執らざりしが、今や閑を得て二三を記し、余白を塗せんとす。
 (一) 岐阜蝶の發見 岐阜蝶の發生頃は、兎角春蠶期に會し、其の目的を達し得ざりしが、頃は本年四月七日、玖珂郡新庄村大平山頂にて其の頭を採集せり。嘗て同郡柳井村琴石山にて、廣島縣某氏採集せりと聞き、半信半疑の内ありしが、今や愈々本郡に發生することを確めたり。

(二) 蠶蛆の異種 本年九月、京都蠶業講習所蠶病消毒講習會へ出席し、何か珍しき得物がなと、同桑園を見巡りしに、野蠶の多化性を澤山認め、養蠶箱にて飼育せ、結繭せるものを保存し置きたるに、豈計らんや、十が十盡く蠶蛆を出したり。其の長さ凡を三分、幅一分、外形光澤普通の如し。後三四時間にて蛹化す。蛹は長さ凡を二分八厘、幅一分計りあり。是れ嘗て清國にて發見せられたる一種の蠶蛆にして、蠶体に直接に産卵寄生するを特點とす。而かも年數回なるが故に春蠶より秋蠶に及ぶと云ふ。

(三) 青尺蠖 是れ又同所桑園にて採集せり。普通の尺蠖は桑の樹幹に止まりて擬体すれども、此の者は樹梢に止まり居るが故に、共に青色なるを以て發見は苦む。自然淘汰の結果、今やドビンワリやソマシラスにては人智進みて胡魔化し得ず、一つ新發明でもして博士までも(よめや)と氣取りたるが。左りと感心ならずや。尙同所及其附近にては、随分面白き獲物もあるべけれど、時日無くして研究し得ざりし。宜敷同所生徒及當局者は研究して可なり。

◎宮城縣志田郡志田村に於ける本年の昆蟲狀況

宮城縣 加藤 久之助

本日吾が地方大雨あるが爲め、晴耕雨讀例に依り、机邊に座し、昆蟲書を繕き、昆蟲日誌を記するに當り、聊か予が記せし所の當地、本年の昆蟲狀況を日誌より抜萃して貴誌に報ずるとはなしぬ。
 一月三十日桑樹の幹の缺朽せし處に、螟蛉の蛹の多くあるを認め、五六個を採集して飼育箱中に入れ置きしに、四月十日紋白蝶は化せり。尙一頭の蠅をも出でにけり。○二月中桑樹の幹の皮間より瓢蟲の一種一頭を捕へたり。○三月廿七日ヤマキテフ及アカタテハテフの飛揚するを見受たり。○四月五日モンシロテフの發生して、花間を戯れ居れるを、直に採集して數多の標本を作れり。○五月初旬キリウシカマンボ多く

發生せり○六月初旬螟蟲蛾發生せり、然れども例年に比し非常に少なく、隨て卵塊も又少なし。泥負蟲も例年に比し少なきの感あり。越て六月十三日に至り、或場所の苗代田一枚より、福俵蜂一名豊年俵とも云ふの造爾せしを認め、數十個を採りて一部は標本にし、一部は之を保護せり。「附記す、本年は前記の如く、螟蟲蛾非常少なく、又農家の尤も發生を喜び居る益蟲即ち豊年俵の例年は稀に見る位なり。夥多なるに限り、本年は必ず豐作ならんものと思ひしは、果せる哉目下螟蟲害非常に少なく、稻作又相應の出来映あり。唯、葉捲蟲は例年に比し割合に多きを見る」○七月七ヨイモン蝶、ミスヂ蝶、シムメ蝶、一文字蝶、スジグロ蝶、黄蝶、モンキ蝶、コムラサキ蝶、ルリシバミ蝶、ベニシバミ蝶、春蟬、日暮蟬、アブラ蟬、等多く發生せり○八月に至ればキアゲハ蝶、カラスバアゲハ蝶、ジャコウアゲハ蝶、イチモジセハ、ムクゲムシ、ホシガミキリ、クスカミキリ、ノコギリムシ、カブトムシ、キイロケントウムシ、シロホジテントウムシ、マツ蟬、オホ蟬(ミンミン蟬のこと)等多く發生せり。同月尺日飼育箱中にて飼育せる、桐樹の害蟲(名稱不詳)夫蠶蛾科の一種造爾し始め、十日全たく化蛹せり。九日苹果の害蟲たるカレバ蛾の幼蟲一頭を捕へ飼育せり。十九日桑樹の害蟲枝尺蠖一頭を桑樹より捕へて其を飼育せり。十月十一日

○昆蟲に關する葉書通信 (第三十五報)

(二二) 浮塵子の驅除と幻燈會(兵庫縣水上郡葛野村谷川平左衛門) 貴所講習修業歸宅後、種々害蟲に就て注意せえに、九月二日頃より浮塵子の繁殖に心着き、其驅除を爲さんとするに、水の有る田は從來使用する所の注油驅除を勵行したれど、水の無き田の地主は只其害蟲の慘状を見るのみあり。自分は先生の御教示に基き、捕蟲器を利用する方法を執りたれど、稻は大抵花盛中なりければ、初め該器を用ふるは稻の穂に害の及ばざらんことを恐れたれども、先づ試験するに若かじと自ら之を試みたるに、もには別に害のあらざりければ、さては各人に誘導し勵行したる次第なり。然るに注油驅除のそれより稻、却て費用少くして其効ありたる爲め、村民は大に喜びたり。尙八月十九日より十日間、毎日各區に

於て害蟲驅除、益蟲保護の幻燈會を催したるに、參集人員總計男三百六十人、女四百十九人に達し、非常に感動を與へたるもの、如し。

(二二二) 岐阜蝶の分布に就て(鳥取縣東伯郡日下村、岡野庫八郎) 八月二十一日午後八時、大阪府立農學校卒業生眞壁貞一君、鳥取縣立農學校卒業生谷田虎治君、村岡虎藏君、細田隆二君の四名來訪あり農事改良上より害蟲驅除談及及び、尙昆蟲標本交換の定約をなしたり。中に村岡虎藏君は岐阜蝶雌雄二頭大根の花より飛翔しつゝあるを採集せりと、翌二十二日、東伯郡教育品展覽會を參觀したるに、參考室に昆蟲標本の陳列ありて、其中に村岡君の岐阜蝶雌雄二頭をも認めたり。依て吾東伯郡にも岐阜蝶の分布しあることを知る。因に曰ふ、同君は東伯郡榮村大字下種の住なり。(十月七日附)

(二二三) 曾我井村昆蟲研究會(京都府天田郡曾我井村、菅沼岩藏) 曾我井村昆蟲研究會ハ、當夏昆蟲講習會の講習生及傍聽生十二名にて發起し、村長以下村内名譽職員の賛成ありて組織し、其會主は同村長芦田安兵衛氏、副會主は笹尾校長大槻竹次郎氏と托し、同會の事業第一着手として九月廿一日より五日間、曾我井尋常小學校、笹尾尋常小學校と二箇所に於て、毎夜昆蟲講習會を開きたるに、聽講生各五六十名ありたり。(十月十一日附)

(二二四) 京都府立農學校所在地の蟲報(京都府立農學校にて、岡本亦三郎) 當地方本年の稻作害蟲模様は、八月中に於ける苞蟲は例年に比し發生多く、多少の被害ありしも甚だしきに至らず、次で九月中旬頃より、浮塵子の發生ありて一般に驅除を勵行し、甚しき被害を見ず、同時に二化生螟蟲の發生多く驅除を行ひし。然るに方今に至り俗に云ふ坪ウンカの發生甚しきも、水利不便の處は意の如く驅除を行ふを得ず、之が爲め多少減收の見込みなり。(十月十七日附)

(二二五) 八町蜻蛉外二種の分布報告(三河國寶飯郡赤坂町、田中周平) 三河國額田郡にて知られたる八町蜻蛉、ヒゲコガネ、ホシベニカミキリムシの分布を報せんに、●八町蜻蛉、男川村(本村は岡崎町を距る一里程東にして大平川の西沿岸)、山中村(本村は岡崎町を距る二里餘の東)●ヒゲコガネムシ、岡崎町に接近せる森林、和合村(大平川の東岸)、高富村大字片寄(赤坂町を距る北方三里)●ホシベニカミキリムシ、山中村、此等の町村は皆東海道の國道に沿ふ所にして、前二種は本年九月前後其地の學校にて、ホシベニカミキリムシは七月頃多く採れたる由なり。(十月二十一日附)

(二二六) 浮塵子の驅除と有益鳥蟲(下總國安食町、後藤新左久) 既報の如く、當地にも亦浮塵子發生せしにつき、直ちよ作人と謀り、共同驅除に従事したり。殊に九月十二日午後四時頃の驅除中には、無數の燕鳥並蜻蛉(ギンヤンマ多し)集り來り、手網を振ふ數十の工夫の肩邊を飛行しつゝ、進退を共にせしは、頗る奇觀ありき。(十月二十二日、小便)

(二二七) ホシベニカミキリムシに就て(周防山口、矢野宗幹) 本年六月上旬、其交尾せるものと、周防國山口町附近の林中にて採集せり。樹種は明かならざれども、樟科一種の枝上よりありし事を記憶す。此地は海岸より四里餘なり。又昨年豊前英彦山にて、福岡縣筑前國嘉穂郡某氏の該地方採品を見たる内に、同種の一頭存せし事を記憶す。採集地は明かあらざれども、兎に角海岸より十餘里以上なり。記して研究の料となす、或は暖地産樹を害するにあらずや。(十月二十四日附)

(二二八) 螟蛉蛾一種(靜岡縣、神村直三郎) 薄荷の害蟲として、前號に備後國山田君の記事に對し編者の附言ありしが、當地にも此蟲胡蘿蔔多し、又車前花をも食す。予は此蟲を一昨三十四年より昨三十五年に涉りて飼育せしを以て、其結果を參考の爲め茲に報せん。卅四年十月十三日、一頭の幼蟲を車前花にて捕へしは、折しも眠期にて、同十四日脱皮し、同十八日に營繭をなし、同廿三日化蛹して十一月十五日羽化せり。又一は三十四年十一月十五日繭を採りしは、此中にて已に少しく軀を縮少したるものあり、これを破りて中を見たる爲め大に其繭を損せしに、同日又直ちに舊の如く綴合せり。之を放置せしは、三十五年二月九日に至りて羽化せり。前者は体長四分強、開翅一寸、後者は体長五分、開翅一寸二分ありて、何れも胸部は毛簇の突起ありて左右に並べり、前翅は外縁に近き一半は弓形の大金色紋にて占め、後翅の基部灰褐、其外縁部は灰黒なり。即ち普通キンモン蛾と稱する種にして、當地には其幼蟲の多きそれ丈成蟲を見ず、自今胡蘿蔔畑にて繭を採るも多くは寄生蜂のために斃死したるもののみあり。敢て報す、斯く申もこれ異種かも知れず、幸に叱正を賜はれかし。

一編者云、本年當所に於て試育の結果によれば、胡蘿蔔の螟蛉には二種あるが如し、一つは神村氏のそれにてツマキンガ(Plusia chrystina, Marl.)と稱するものなり。山田氏の送られたるものは、數頭中二頭生存者ありたれば、胡蘿蔔を以て之を飼育し置けるに、蛹化し次て羽化せしが、幸ひ雌雄にて、成蟲はツマキンガより稍小さく、前翅の表面は灰褐黒色の雲紋状を呈し、中央より稀基部に近く二箇の銀紋を有し、後翅は淡墨色なり。當市近傍にて採集飼育せしものは數百頭の中殆んど寄生蜂の爲に斃され、僅數頭羽化せしが、其中一頭斯種を出せしのみなれば、十分の調査を遂ぐる能はざりしが、當所に此の兩種に屬するもの十數種あり、而して殆んど識別に困む種酷似せるもの多ければ、尙今後十分研究を要すべきものなりと信す。



雜報

●昆蟲の種類分布調査の一欄を増加せんことす 昆蟲學の年々進歩するに従ひ、益々種類分布調査の必要を感ずるを以て、明年一月發刊の第七拾七號よりは、特に調査欄を設けて、讀者諸君の寄送に係る標本を一々調査して出來得る限り詳細に説明し、然も尤も著しき種は挿圖の上掲載せんとす願くは各地方の諸君、續々斯學の爲め標本寄送あらんことを請ふ。但し標本には一々採集年月日、採集場所、採集人名、其他備考として何々草木の上とか、河邊とか等の件を記入せらるゝなれば尤も都合宜しとす。

●昆蟲陳列館の整理と擴張

當岐阜市にある岐阜縣物産館構内に設立せる當研究所の昆蟲陳列館は、是迄物産館より一名の監守を附するとよて、其人撰は當所にて適當のものを擧ぐるを常とせり然るゝ今回は是を廢して、當所専ら監督することとなりて、當所長監守主任となり、助手の内適任者七名を撰みて主任代理とし、日々交代監守するとにせり。右の結果として、陳列館中の陳列品を特に精撰改良し、且つ斯學研究者の爲めには是迄とても請求に應じて説明の勞を執りたるも、今後は一層満足を興ふるとよせり。又特に小學兒童等の爲め、日曜日の某時を撰み、各自受持學科に就て實物供覧の上一々説明する様夫々準備中なり。又陳列館内に特別揭示場を作りて昆蟲學に關する總ての出來事を始め、珍奇なる標本等を得るに従ひ、是を示して一目瞭然たらしめ、尙又飼育場を設けて有名の害蟲は素より、普通學として必要なるものを、特に飼育して生活の有様を經覽者の眼前に示さんとす。爾後陳列館の整理したる部分より、漸次詳記して誌上に掲載し、一々是を明瞭ならしめんと欲す、讀者諸君其時の來るを俟たれよ。

●蟬寄生蛾の學名確定

本年一月發刊の昆蟲世界第六拾五號の口繪に、着色圖よて蟬寄生蛾を現はし、和英兩文よて説明し置たるゝ、其後米國昆蟲學者ダイアー氏より、學名云々の件に就き書狀到着

の次第は、第七十號の雜錄欄より一寸記したる所、夫より對して在米の名和梅吉氏より *Epipytrops aedivora* と云ふ種名を附したいといふ考へであるが如何この報知あれば、第七十二號の雜報欄に於て、其旨を掲載し置きたるに、曾てダイアー氏に現蟲を送りしものより對し、此頃には *Epipytrops Navai, Dyar.* と種名を附し來れり。茲に至りて蟬寄生蛾の學名は全く確定せり。

山形縣

害蟲益蟲標本 飽海郡昆蟲研究會

三 審査官 正七位 莊島 熊六
從六位 堀 正太郎
等 審査部長 從六位 小貫信太郎
賞 審査部長 從三位勳二等田中芳男
牌 審査總長
正三位勳一等男爵大島 圭介

審査ノ成績ニ依リ前記ノ賞牌ヲ授與ス

明治三十六年七月一日

第五回内國勸業博覽會 載仁親王
會總裁大勳位功四級

山形縣飽海郡松嶺村

昆蟲標本ノ製作 齋藤朝之助

審査官 正七位 莊島 熊六
從六位 堀 正太郎
審査部長 從六位 小貫信太郎
審査總長 從三位勳二等田中芳男
正三位勳一等男爵大島 圭介

審査ノ成績ニ依リ之ヲ授與ス

明治三十六年七月一日

第五回内國勸業博覽會 載仁親王
會總裁大勳位功四級

●飽海郡昆蟲研究會の出品と協賛賞狀 山形縣飽海郡昆蟲研究會は曩々全國昆蟲展覽會へ害蟲標本を出品して一等賞を受領せしが、第五回内國勸業博覽會にも害蟲標本を出品して三等賞を得たり。而して其標本の製作主任者は共に第三回全國害蟲驅除講習修業者齋藤朝之助氏なりしより、博覽會は同氏より對し茲に示せる如き協賛賞狀を授與せられたり。

●害蟲驅除豫防方針 害蟲の王とも稱すべき螟蟲及浮塵子の驅除豫防方法に就ては種々ありと雖も、多種なる方法を執るは、却て其方法の施行をして不完全ならしめ、虻蜂取らずの不結果を終るべきを憂ひ、吾人は常々其内の最も完全に近きものを撰み、始終一貫之を奨励し來りしは讀者の既に知了せらるる處なるが、當局者に於ても亦此に見る處ありけん、先頃農商務省に於ては、害蟲驅除豫防監察の爲め各地に出張巡回せる技師其他斯道を經驗ある技師を召集し、螟蟲及浮塵子の驅除豫防方法に就き諮問せし由あるが、其の結果左記の方法を勵行するを以て最も適當なりと認め、先月十五日農務局長より參考として、地方長官へ通報せり。今之を見るに、誘蛾燈の如き一も加へられざりしは妙と云ふべきも、螟蟲驅除に頗る必要なる本田採卵のなきは少しく物足らぬ心地せり。

- 一、二化性螟蟲驅除豫防方法 苗代に於て、採卵及捕蛾(捕蟲網使用)。本田に於て、枯種取り。
- 一、三化性螟蟲驅除豫防方法 苗代に於て、採卵及捕蛾(捕蟲網使用)。本田に於て、株

掘取若くは株の切斷

一、浮塵ノ驅除豫防方法

苗代に於て、注油及捕蠶(捕蠶網使用)。本田に於て、注油及捕蠶。

●私製葉書の意匠

京都高等工藝學校教授工學士武田五一氏は、此程外國製昆蟲繪葉書八葉を寄贈されたりしが、内は一葉三種つゝ收めたる蝶蛾類圖譜とも稱すべき着色石版の美麗なるもの、甲蟲

の食草に止まれる着色寫真版等意匠の嶄新なるものあり、又紙面を木葉狀に印刷し、其周圍を葉邊に於ける鋸齒狀に刻み、紙にて造れる蝶類模形を糊着せしめたるものあり、實に驚くの外なし。本邦に於て讀者諸君の内には、毎年新年の年始狀等に、昆蟲を以て意匠を凝らさるゝもの尠からざるが、今より少しく考へられたきものなり。

●渡瀨博士の螢に於ける清韓視察談

地理研究に密接の關係を有する動物取調の爲、對馬

より清韓地方を遊歴されたる理學博士渡瀨庄三郎氏が門司に於て訪問者に語れる中、螢に關する所を聞くに、總て蛇、蛙、螢類の如きは、支那大陸より朝鮮に至る所謂地續と、海洋を距る本邦とは彼我種類を異し、朝鮮より本邦に最も近接せる對馬迄は渡來せるも、内地は未だ渡來せざるがあり、或は歐洲大陸より朝鮮までには棲居すれども對馬には見ざるがあり、之に反して本邦内地のもの、對馬迄には渡り居るも、朝鮮には未だしなるがあり、是等蟲類の棲息如何に據つて其大陸的の島枝なると、大洋島なるを推測し得べし。先づ螢の如き本邦産のもの、清韓産のものとは大に異り、本邦はありては所謂源平兩種(源氏大、平氏小)にて夏季に産すれど、清韓に産する種類は夏季より秋季に産し、其形亦異なるなり。秋季に産するものは、降霜前にありて所謂秋螢と稱するものなり。此一類對馬迄渡來し居り、本邦の一種亦朝鮮迄に至りたるものあり、而して一般螢に屬する蟲は何地も其の種類多く、本邦にても凡十四五種の多きあり、池澤溝渠などに産するものは、其形小にして所謂糠螢と稱し、河川に生ずるものは總て大なり。尙蛆なる時のみ光を放つがあり或は光なきがありて、各特殊の性状を有し居れり云々と、先月廿四日の讀賣新聞に見えたり。

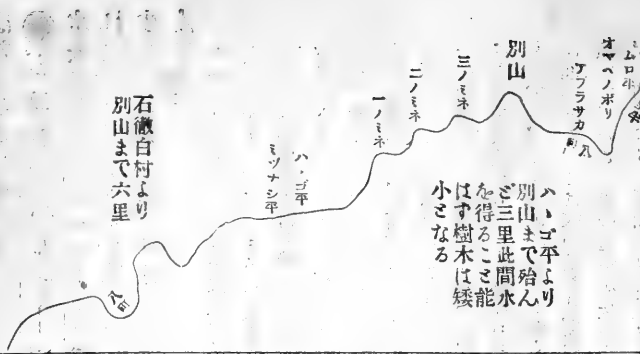
●シヤサン(柘蠶)の飼育

凡蠶兒は桑葉を食して結繭するものにして、他は於て何れを食する

ものに非ざる如く思惟せしに、本年農科大學に於て飼育せし蠶種は柘葉を食せしめて好成績を得たりと此蠶種は清國四川省の原産にして、彼地にては育蠶の初期に桑葉を給し、末期に臨みて柘葉を給與するの習慣あるも、農科大學に於て飼育の結果によれば、終始柘葉を給與せしものも其差あることなかりし

と、此蠶兒は三眠にて結繭し、繭は白色と黄色の二種あり、紡錘形にして絲質等は普通の蠶絲に劣らざるものなりと、而して其食桑たる栢も亦清國の原産よして無花果科に屬して幹枝に刺を有し、葉は長橢圓形にして葉尖は細く延長するも鈍頭に終り、其着色は濃緑よして光澤あり、葉腋には花を生ず、成長宜しき樹よして、病蟲害に罹ること罕なり。其枝に棘を具ふるが故に枳殼の代用とて生垣を造り其葉にて育蠶せば最も妙からんといふ。

別山より白山
まで三里八町



● 白山の昆蟲

岐阜縣郡上郡上保村塩田健藏氏は去八月十一日出發加州白山へ昆蟲採集の爲登山せられたり。今同氏の語る處によれば、氏が住村より其登山口なる越前石徹白まで三里半、其れより峯傳ひよて山頂まで九里八町にして、中腹以上は到れば種々なる草花今を盛りと非常に咲き亂れ、植物標本採集家は是非一度登山の必要ありと云ふ。氏は發足の初め中途にて宿泊する考の處、種々ある事情にて、遂に頂上まで登ることゝあせし故、非常の疲勞を感じ、充分採集を試むることを得ざりし由なりしが今後登山者の便にもと、上圖の如き順路を記し且つ其昆蟲の一部をも贈られたり。今之を見るに、皆珍種に屬するもの多くして、膜翅目には蜜蜂科に屬するもの一種二頭、細腰蜂科一種一頭、姬蜂科五種五頭、鋸蜂科二種四頭、鞘翅目には龍蠱科一種四頭、瓢蠱科一種一頭、叩頭蠱科二種二頭、蠶科二種二頭、鍬形蠱科一種四頭、金龜子科二種五頭、天牛科十四種十九頭、鋸蠱科三種四頭、象鼻蠱科一種一頭、擬象鼻蠱科一種一頭、雙翅目には蛇科一種一頭、扁前蠅科二種二頭、鱗翅目には鳳蝶科一種一頭、粉蝶科二種二頭、蛺蝶科二種二頭環紋蝶科四種六頭、天蛾科一種一頭、赤頭蛾科一種一頭、毛翅目には石蠶科一種二頭、脈翅目には舉尾蠱科四種十二頭、有吻目には椿象科二種三頭、薄翅浮塵子科二種二頭、擬脈翅目には積翅蠱科一種一頭、直翅目には蝨科一種一頭、總計六十二種九十三頭なり。此中天牛の一種及び擬象鼻蠱に屬するものは確よ新種にして、金龜子の一種ピロウドコガチムシに類するもの及天牛、舉尾蠱の或種の如きは珍種たる

べく、チャマダラヒカゲテフ(一名ベニヒカゲ)、ヒメキマダラテフ及アサギマダラテフの如き、彼地には普通なるが如し。

●ジヨン、バルナーツ、スミス氏の小傳 昆蟲學大家フエルナルド氏は其昔米國海軍の

水夫にして、コムストック氏は又商船の火夫ありしに、本誌第二十四號コムストック氏の小傳に記載されたるが、今スミス氏よつき去七月三十一日の米國桑港にて發行せる日本新聞新世界に記載されれば少しく舊聞に屬せれども、同氏の性行を窺知するに足るべきものあれば、左に之を轉載して參考に供せんとす。

ニューゼルシーの人は牛蠶類の昆蟲について疑問あるときは、ラットツヤルス大學の昆蟲學教授にして當洲隨一の昆蟲學者なるジョン、バルナーツ、スミス氏に質すを常とす。氏は當洲驅屬の牛蠶學者にして、昆蟲類について精細なる研究を遂げしこと實に驚くべく、昆蟲種屬の生活の状態、發生の摸樣、解剖生理、繁殖の方法など殆んど知らざるることなし、學者未發見の蠅、甲蟲、鱗鱗などがポテト或はピーチの農作物を食ひ始むるときは、其害蟲を検査して、それは如何なる種類に屬するか、其生活の状態、繁殖の順序などを公表し、それが未知の種類ならば、その精細に研究して其成蹟を報告し、以て驅除法を公衆に發表するがスミス氏の任務なり。而して昆蟲類の氏が研究の法廷に偵捕招喚せらるゝものは逐一其行爲、性状を白狀せずして遁るゝこと能はざるなり。スミス氏は偶然の事よりして昆蟲學者となりしに非ずして已むを得ずしてそれが研究に一身を委ぬるに至れるなり。氏は牛蠶の研究を始めし前に、生涯の職務として辯護士ならむと欲し、制規の法律を研究したる後辯護會員となり、數ヶ月間法廷の辯護事務に執掌しけり。かくて氏は辯護を依頼せられたる事件ある毎に法廷に出て、熱心辯論中、蚊或は蠅の不意に來りて氏の顔を襲撃し、爲めに注意を奪はるゝものから、その爲めに心むしやくしやくして疥癩玉の道の上をさするふと屢々ありしかど、凌ぎ／＼堪へたりき。辯論に失敗する毎に惟へらく、こは蚊の爲なり蠅のしわざなりと、さまでには非ざれど彼奴等にも幾分が余が失敗の責任を負せざるべからず、憎き蟲類かな、いざ彼等の退治法を研究して呉れむものとの望みを起し、それより暇あれば判決例を參看詮索する替りに昆蟲類の習慣を研究し初めたり。研究すればする程益興に入り、昆蟲と愈親密になるに隨て法律事務はそつちのけさなり、遂に所有の法律書は古本屋へ送られ、裁判記録はストーアの焚き付けと變じ、こゝに昆蟲學者たる新生涯の道途に上る決心をなせり、斯くて氏は多くの昆蟲學者、好事家、或學校教授連と交際を始め、斯道について大に得る所あり。米國中に最よく組織立ちたるブルクソン昆蟲學會の會員となれり。スミス氏をえて昆蟲學者として名をなさしめたるは、蚊の撲滅法に關する氏が實驗を發表せし大著述なりとす。蚊といふ奴は讀者も知らるゝ如く、其群り來りて人を襲ふときは甚だ不快の感を起さしむるものなり。氏の撲滅法たる隨分財資を要するにて氏は今より一年以前其翌夏期中ニュージーランド全洲の人民をして蚊の襲撃を脱れ、例年よりも一層愉快ならしめん爲め撲滅法を試験す

る準備資本を以て一千弗を洲議會に要求せり。因てその洲議會の討論に附し其議案は通過したれど、所要の金額の財源を定むるを
を決せずして其内議會閉ぢられたる。此に於て洲知事は備荒貯蓄金の内より所要一千弗の支出をなせり、因て氏は夏期中通じて蚊の研
究を續け、時々其成績を報告し、大學の學期始まりて後も研究室にありて顯微鏡を使用し、蚊の生理作用を研究せり。斯くの如くニ
ユールセルン一洲は蚊の撲滅法試験のため一千弗を費し、氏は數回月専心其研究に従事しけれど、そが全滅の法は發見する能はざりき
されど氏及氏の學生は蚊は何處より生じ來るかを知り得たるを故に、其孕卵所を放乾し清潔にして其繁殖の幾分を防ぐべきやう全市
民に注意を與へたり。蚊を撲滅する氏の試験は、未だ全効果を收めざれど、氏は研究中蚊の胃中一種の寄生蟲を發見したり、而して
其寄生蟲は人力を以て繁殖せしめ、その蚊の産卵地に撒布して蚊の胃中に侵入せしめ以て撲滅する望みありといひ、其標本を七月二
十九日華盛頓政府農務課に送りたりとす。

●昆蟲幻燈會

宮城縣志田郡保柳小學校に於ては、農事上刻下の急務たる害蟲驅除豫防の一策と
して、十月五日午後七時より昆蟲幻燈會を開たし、同夜は恰も明月の事とて來會せしもの頗る多く第
十一回全國害蟲驅除講習會修業者加藤久之助氏の熱心なる説明も、何れも非常の益を得て散會したる由
十月九日の奥羽日報は報せり。

●東豫昆蟲研究會

愛媛縣周桑郡外三郡に於て、東豫昆蟲研究會なるものを組織し、本年七月
七日小松町に其組織會を開きて規約を設け、引續き臨時總會を開きて役員を選擧を行ひ其他諸般の事項
を協議せられたりと、同地の矢野延能氏より報知ありたれば、尙左に該規約及役員氏名をも掲載せしむ。

東豫昆蟲研究會規約 第一條、本會を東豫昆蟲研究會と稱す。第二條、本會は昆蟲を研究し、斯學の發達を圖り、之を實地に應用
するを以て目的とす。第三條、事務所を周桑郡小松町に置く。第四條、會員を分つて通常會員、名譽會員の二種とす。第五條、本會
の主旨を賛成し、斯道に熱心なる者を以て通常會員とす。學識徳望あるものを、本會の決議を以て名譽會員に推薦す。第六條、本會
に左の役員を置く。會長一名、幹事一名、委員各郡二名。會長及幹事は總會に於て選舉し、委員は其郡會員の互選とし、任期は各二
年とす。第七條、會長は本會を總理す。幹事は會長の命を請け、本會の庶務を掌るものとす。委員は其郡内に於ける本會の事務を執
るものとす。第八條、會員は質問應答により智識の交換を爲すを勉め、且毎年一回の總會に出席すべきものとす。第九條、入會及
退會せんとするものは其郡委員を経由し、會長の認許を経べきものとす。第十條、本會の經費は會員の負擔及寄附金を以て之に充つ
るものとす。

役員 會長 佐多彦熊。幹事 矢野延能。委員 (越智郡) 加藤徹太郎、森支作(周桑郡) 青野岩平、佐伯團作(新居郡) 小野今太、山
内幹衛(宇摩郡) 未定。

●愛知縣渥美郡教育品展覽會之昆蟲標本

渥美郡豊橋高等小學校内に於て、先月十六日より四日間、同郡教育品展覽會を開催せられ出品點數一萬餘點に達し頗る盛會ありしといふ。其内昆蟲に關するものは二十餘點にて、受賞者は二等賞、牟呂尋常高等小學校生徒(裝飾用昆蟲標本、雌雄陶汰標本)褒狀、同校生徒(昆蟲分類標本、水生昆蟲標本)高松尋常高等小學校生徒、(昆蟲標本)等として又參考品として渥美郡昆蟲研究會より分類標本三百五十點、害蟲標本十二點、昆蟲研究會第一部會員より高等小學理科標本二十八點を出品し、而して日々觀覽者は一萬二三千人を超えたりと。

●美術的蠅叩

衛生上の害蟲として世人の最も嫌へる蠅の驅除は就ては種々ありて、從て之が驅除器も多くあり、是等は本誌第一卷第四號及第六卷第五十四號に於て圖說せし處なるが、其内蠅叩に就ては、金網製のものは從來の經驗上空氣の抵抗なきを以て、蠅の驚き逃ぐるることなく、至極便利なりしが、此程當市の坂井雅太郎氏の製造寄贈に

美術的蠅叩の圖



層輕便にして且つ高尚優美なるものあり。今此器の特徴とも云ふべき點を擧ぐれば、第一金網製と同一く空氣の抵抗なく、音のせざるを以て、其蠅の驚き逃げざるのみならず、他の蠅も一向平氣なること、第二叩かれたる蠅は一時腦震蕩等起して氣絶せるのみならず、潰れて汚物の出づることなく、從て各所を汚すの憂ひなき事、第三殺したる蠅は此器の先にて擦すれば其毛の間は挟まりて蠅入器に移すことを得、從て衛生上恐るべき害蟲を手にて持つの煩ひなきこと、第四此器は頗る輕きものなれば貴重なる器物等に居るものを打つも其器を損する憂なきこと、第五普通の蠅叩は直ち汚物の附着して見苦しく之を見れば人をして嘔吐を催さしむるの感あるも、此器は然らず、且高尚風雅なる作方あれば座敷にも備付けらるゝこと、第六廢物を利用して作りたること等あり。

●吉野郡の驅蟲事業

奈良縣吉野郡農會の事業として、卅七年度に於ける驅蟲の件は(一)螟蟲

●額田郡の昆蟲展覽會

三河國額田郡に於ては、十一月廿八、九、卅の三日間、昆蟲展覽會を開設せらるゝ由にて、過月來頻り準備し居るゝを以て、定めて盛會ならんと信ず何れ詳細は次號に

卵塊懸賞採取(二)螟蟲白穗莖採取懸賞(三)害蟲驅除獎勵委員設置等にして悉く可決せられたりと。

於て報する所あらん。

●特別研究生の入所を許す

時運の進歩も伴ひ昆虫學を研究せんとするもの益々増加するに至り、各地方より當所に来て之を研究せんと續々申込あるも、從來是等の設備なかりしかば、空しく其希望を納るゝ能はざりしが、今回規程を設けて之を許すことにせり。

●第十七回全國害蟲驅除講習會延期

全國講習會ハ例年の通り本月中に開設すべき筈なるも、何分聖路易萬國博覽會へ害益昆蟲標本を出品せんとて、昆蟲採集調製の爲研究所員の大多忙を極めしに依り、折角多數の申込者あるにも拘らず、延期すると決したるも明年三月には必ず例の通り開設する筈なれば、希望者は一日も早く申込みある方好都合ならん。

●岐阜縣昆蟲學會第五十九回月次會記事

同會は本月七日午後二時より當研究所内にて開會せり。當日は雨天なりしも係らず各郡部より代表者の出席あり且本縣蠶種検査員、農學校、師範學校等の學生も來會せられ、近來稀ある盛況を呈せり。今其講演の概要を摘載すれば、名和副會頭は本會は初會以來如何なる事情に遭遇するとも未だ曾て一回も休會又は時日を變更せし事なきは、之れ本會の特色と忝す所ならん云々と開會の辭を述べ、續て第一席小竹浩氏は甲陽昆蟲瑣談と題し、氏が本年八月二十二日より一ヶ月餘間山梨縣の昆蟲學講習會に臨み、同地に於ける昆蟲に就き各方面より調査せし事項を報告し、第二席森宇多司氏はキンケムシの寄生蜂よつぎ、キンケムシ六十餘頭を飼育して解剖研究の結果を説明せられしが、寄生蜂がキンケムシの体内に産卵するや、其當時は卵子が宿主の皮下にあるも、暫くにえて体内の各所に血液によりて輸送せられ、後孵化して漸次成育し、老熟に至り体内の側面各關節間より体外に出で、直ちに結繭す、而して其幼蟲の体外に出づるは一齊にして、宿主は其蜂の幼蟲が全く出で終りたる後死するあり云々と、第三席名和靖氏は鳥類の胃中にある昆蟲に就き、此頃調査せし結果を實物により説明せられ、終て暫時休憩せり(此間稲齋の茶菓を供し、各種の標本其他工藝美術品を供覽せしめたり)後再び開會し、第四席小川謙司氏は昆蟲の自然淘汰と題し適者生存上自然の妙理と進化の次第を講演して午後五時半散會せり。

●水曜昆蟲會記事

當研究所員の催しに係る水曜昆蟲談話會は、前號報告後毎水曜日午後七時より當所内に於て開會して、毎週間に研究せし結果を報告するを例とせり、其談話の要項を一括すれば

左の如し。

小竹浩氏は山梨縣昆蟲方言、カマキリカゲロフの幼蟲、トンバウの生殖器、昆蟲の複眼、エンマコホロギの産卵狀況等に就き自己の實驗に徴して詳細に説話せられ●小川謙司氏は揖斐郡宮地村の害蟲驅除の狀況ウリハムシの解剖等にして、特にウリハムシの藏卵數は是迄何人も調査せし事を聞かざるが、一雌蟲の卵巢内に千粒乃至千五百粒の多數を藏卵し居るを以て、冬季共同して石下又は雜草中に潛伏する成蟲を捕殺するは該蟲驅除の上に莫大の效果あるならんを述べらる●大橋由太郎氏は岐阜縣加茂郡害蟲驅除視察談、天蛾類の調査等にして其中天蛾類の調査に就ては其幼蟲蛹の各種類を蒐集して悉く實物を示し、各蟲種の性質及特徴を丁寧に説明せらる●近藤伊祐氏はトンバウの複眼を顯微鏡の下に調査したる結果、複眼の側面部なる六角形の水晶体は上面部の水晶体に比して大なる事五割なるを以て、試に他の昆蟲即ちアゲハノテフを取りて前同様の調査をなしたるに同一の結果を呈したるより考ふれば、即ち複眼の上面部は高き所の者を見るに適し、側面部のものは比較的近き所の者を見るの必要あるによりてならんか、尙唐突の調査なれば今後各種に亘りて詳しく研究し以て報せん云々述べらる●高橋喜男氏は横這の卵塊孵化の狀況、クダマキダマシの卵塊調査等にして、其中横這の卵塊の孵化するには其幼蟲は卵の太き部分より薄き皮膜を穿りて脱殻し、殻外にて之を脱ぎ捨てる様見受けたりとて、其皮膜等を持ち來りて之を証據立てたり●渡邊樵西平氏は東濃地方の害蟲驅除の狀況及びエンマコホロギの解剖談等にして、特にエンマコホロギ雌蟲の卵巢を調査したりしに、成熟卵數のみにて多きは百四十五粒、少なきは八十二粒、平均一頭に付百十粒強に當るべき旨を述べられたり●森宗太郎氏は桑の心蟲、蚜蟲、桑葉卷蟲、桑の天牛及蚊の話等なりしが、其中桑の天牛は桑樹の害蟲中にて直接或は間接に最大害を成す者にして、其産卵期は早き者は六月上旬より晚きは十月下旬に至り産卵し居るを認め、殆んど百二十日内外の期間なるが、其内尤も多く産卵するは七月下旬より八月月上旬にして早く孵化したる者は三ヶ年目に、晚き者は四ヶ年目に成蟲となる割合なるを以て、隨而加害の大なるを知るを得べし云々述べられ●其他中井藤助氏は昆蟲雜話、カウムシに就ての研究談●所嘉吉氏の花さ昆蟲の關係、秋の野の蟲●土岐五郎氏の出雲郡地方の方言、昆蟲採集談●名和愛吉氏のカレハガに就て芙蓉の青蟲柳の害蟲二種●石田和三郎氏のエンドノキリムシ驅除試驗●小森省作氏の天狗蝶に就て、地膽、葛上亭長の經過習性、蠅蠅の産卵狀況●棚橋昇氏のエンドノキリムシの卵塊調査等なりき。

●昆蟲標本陳列館の參觀人

去十月中、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は、總計二千九百八十八人に至り、其中最も多かりしは十五日に於ける三百四十七人、最も少なかりしは一日に於ける二十五人に至り、一日平均百拾人強に當り、此内實業家及學生最も多く、之に次ぐは各府縣の勸業視察者教育者等なりき。

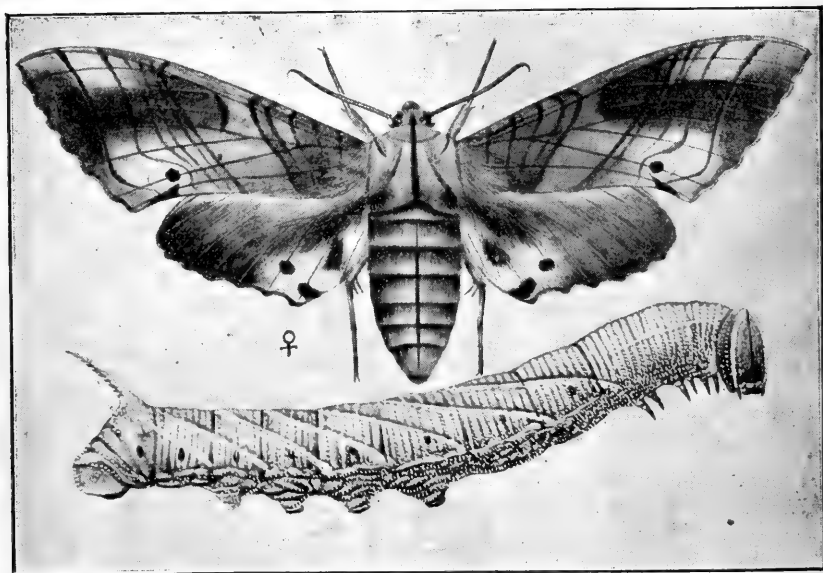
(以上、十一月十日脱稿)

Marumba piceipennis Butler. (Kuchiba-suzume)

By K. Nagano.

Forewings yellowish brown, median and marginal parts darker; a dark-brown lunate discal spot; about ten dark-brown striae, posteriorly curved; two reddish or blackish brown spots near anal angle. Hindwings purplish brown; two reddish or blackish brown spots near anal angle. Expanse 100 - 138mm. Body arab, with a dark brown longitudinal stripe.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo; 6, 7, 8. Larva pale or yellowish green, white or yellow dotted; on 1-3 seg. a pale yellow longitudinal lateral stripe; on 4-11 seg. a series of pale yellow oblique lateral stripes, with red dots; horn green, white dotted: on *Quercus glauca*, *Q. myrsinaefolia*, etc.; 8, 9, 10.



出版廣告

昆蟲叢書 第一編 (明治卅五年七月出版)
● 全國昆蟲展覽會出品目錄 全壹冊

題字及び寫真銅版四葉插入 ● 木版寫真銅版
書七十餘圖 ● 紙數二百餘頁 ● 定價金八拾五
錢(郵税金六錢)

記載目次

第一章 昆蟲展覽會出品目錄の必要 ● 第二章 分類標本に於ける
蟲種別 ● 第三章 害蟲標本に於ける蟲種別 ● 第四章 益蟲標
本に於ける蟲種別 ● 第五章 教育用標本其他の出品 ● 第六章
出品物と其出品者(附錄)開會の計劃 ● 役員の撰定 ● 開會設備 ●
開會式 ● 審査方法 ● 褒賞授與式 ● 閉會式 ● 雜件彙報 ● 蟲種の調
査 ● 殘務所理 ● 昆蟲名稱の意見 ● 展覽會の效果 以上
昆蟲叢書 第二編 (明治卅六年八月出版)

● 昆蟲標本製作全書 全壹冊

題字及び寫真銅版、木版圖數十種插入 ● 定價
壹部金八拾五錢(郵税金六錢)

記載目次

第一章 昆蟲標本の價值 ● 第二章 昆蟲標本製作法の沿革 ● 第
三章 昆蟲標本製作書の出版 ● 第四章 昆蟲採集用の器具 ● 第
五章 昆蟲採集の方法 ● 第六章 幼蟲及蛹の採集と飼育方法 ● 第
七章 昆蟲採集地の選擇 ● 第八章 標本製作用の器具 ● 第九
章 昆蟲標本の製作方法 ● 第十章 昆蟲の排列と保存方法
右出版仕候に付御愛讀あらんとを請ふ

明治卅六年十月 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

● 昆蟲種類分布調査欄

一月より
を新設す

● 岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會本年中的日並に左の如し
第六十回月次會(十二月五日)



● 名和昆蟲研究所案内
昆蟲研究所の位置は上
當昆蟲研究所の位置は上
圖の如くにて停車場より
は僅に十餘町養蠶室あり
又新築の岐阜縣物産館構
内には常設の昆蟲標本陳
列館(五間に十六間)あり
す有志諸君の來訪を俟つ
岐阜縣岐阜市京町
名和昆蟲研究所

● 本誌定價並廣告料

壹部 郵稅共 金拾錢 (見本は五厘郵券)
壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢 (貳拾枚にて呈す)
(注意) 本誌は總て前金に非れば發送せず
● 爲替拂渡局は岐阜郵便局 ● 郵券代用は五厘
切手にて壹割増とす

廣告料 五號活字二十二字詰一行に付金拾貳錢
三十行以上一付に付金拾錢とす
明治三十六年十一月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
(岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
發行所 名和梅吉

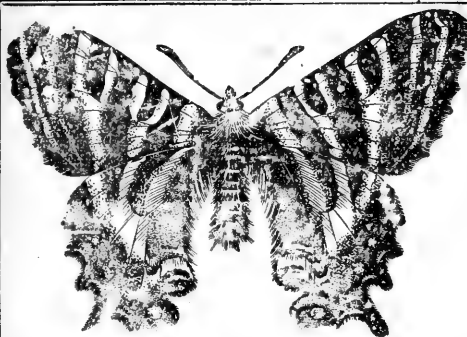
同縣揖斐郡鷺村大字公郷三番戸ノ二
編輯者 小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
印刷者 河田貞次郎

不許轉載

596.70552

Vol. VII. DECEMBER. 15TH, 1903. No. 12.



THE INSECT WORLD.

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

(十二月十五日發行)

(每月一回十五日發行)

昆蟲世界

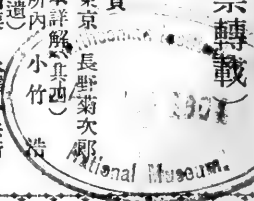
第七卷第拾貳號 (第七卷第拾貳冊)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

(明治三十六年十二月十五日發行)

目次

(禁轉載)



● 枝竹節蟲其他四種

● 蜻蛉につきて (一) 一頁

● 皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解 (其四) 小竹 浩

● 臺灣産蠶種に關する第二報告 (拾遺) 在臺灣苗栗 靜岡縣 岡田 忠男

● 柑橘の害蟲に就きて

● 昆蟲の肢に就て 藤吉登の語 長崎縣對馬國 小森 省作 平田駒太郎

● 昆蟲雜信 (其一) 二頁

● 六足蟲 (纂 (亥之卷)) 在東京 鳥羽 源藏 長野 菊次郎 福井 克雄

● 昆蟲小感 (二) 在東京 福井 克雄 蟲の家主主人

● 螟蟲驅防獎勵展覽會準備記事 (第五) 三三頁

● 博覽會出品害蟲標本解說書 (續) 神村直三郎 ● 揖斐郡昆蟲學會 ● 昆蟲に關する葉書通信 (廿六報) 三九頁

● 昆蟲學 ● 新刊紹介 (一) ● 特別研究生証明書授與

● 昆蟲學調查 ● 香川縣並に京都府南桑田郡昆蟲學研究會規則 ● 昆蟲學講義錄の發行 ● 愛知縣額田郡昆蟲展覽會 ● 岐阜縣果實蔬菜品評會 ● 員毅蟲 ● 聖路局萬國博覽會出品昆蟲標本 ● 特別研究所の入所 ● 岐阜縣昆蟲學會第六十回月次會記事 ● 研究會 ● 岐阜縣昆蟲標本陳列館の參觀人員 ● 明年度の昆蟲世界

報

三九頁

● 昆蟲學 ● 新刊紹介 (一) ● 特別研究生証明書授與 ● 昆蟲學調查 ● 香川縣並に京都府南桑田郡昆蟲學研究會規則 ● 昆蟲學講義錄の發行 ● 愛知縣額田郡昆蟲展覽會 ● 岐阜縣果實蔬菜品評會 ● 員毅蟲 ● 聖路局萬國博覽會出品昆蟲標本 ● 特別研究所の入所 ● 岐阜縣昆蟲學會第六十回月次會記事 ● 研究會 ● 岐阜縣昆蟲標本陳列館の參觀人員 ● 明年度の昆蟲世界

●寄贈物件受領公告

一金六圓也

一有鶴頭元折銃附屬品共

一稻株拔取器 一個

一鞭兼用捕蟲網 二個

一姬巢鼻蟲驅除用鋸 二丁

一蟬形笄 一蟬形襟止 一蝶形襟止

一赤坂高等小學校生徒帽子 蜻蛉徽章

一蟬形鉛筆削(以上金屬製) 一蟬形笛

一蝶模樣杯(以上陶器) 一蝶形菓子

一昆蟲模樣刺繡 二枚

一昆蟲寫生圖 七枚

一紙折蟬形并に蝶形幼兒製作品 各數個

一蟬形玩具 一個

一雲雨産冬蟲夏草 十四把

一對島産藤吉蟹 雌二頭 雄十數頭

一胸廣ゴキブリ 一頭

一除蟲御札 十二種

一實驗野外教授 一冊

一拓董の飼育 一冊

一東京新報三葉 一東海日々新聞二葉 名古屋市 甫守 謹 吾君

右寄贈相成候に付芳名を掲げて其厚意を謝す

明治卅六年十二月十日

名和昆蟲研究所

名古屋市

兵庫縣

淡路國

愛媛縣

岐阜縣

三河國

寶飯郡

鈴木

伊奈高等小學校

市立名古屋高等女學校附屬

名古屋山田

稚園

周子君

寺島

昇君

對島國

平田駒太郎君

山口縣

財滿 宇市君

青森縣

新渡戸 稻雄君

東京市

安東伊三次郎君

東京市

佐々木忠二郎君

名和昆蟲研究所

瀨本 本雄君

中村千代之助君

伊藤 瑞頁君

土川 隆吉君

東郷 隆次君

中野 壽郎君

森 喜作君

渡邊 喜兵衛君

田中 周平君

大石 吉三郎君

鈴木 兵四郎君

●昆蟲叢書 昆蟲標本製作全書

右に對し、本誌前號に於て東京、大阪諸新聞の批評を掲載せしが

今動物學雜誌、新農報の批評を掲ぐれば左の如し。

●動物學雜誌 本書は昆蟲叢書の第二編として名和昆蟲研究所より出版せられたるものにして、目次凡例等を除きて百三十三頁、

二枚の口繪の外五十の木版を挿む。

第一より第三章までは昆蟲標品の價、本邦に於ける標品製作法の沿革及今日まで本邦にて出版せられた標品製作書に付て記述し

第四より第七章までは採集法(時節、時刻、場所、處置を説き幼蟲、蛹の飼養法)に及ぶ。第八より第十章までは本書極超通り製作法、製作用器具、標本排列及保存法を詳述す。

されば昆蟲研究志望者の爲には親切なる手引きの一たるべく、處置の當否技術の巧拙等に關しては斯道に明るき人の批評あるべければ其内本誌に掲ぐるごとくにして、こゝにはたゞ紹介まで。

●新農報 本書は昆蟲叢書の第貳編として發行せし者にて、流石に昆蟲學者揃ひの研究所で編纂せしもの程ありて痒き所へ能く手が届き、昆蟲標本の作成に就ては聊か漏す所なければ、昆蟲學を研究せんと欲するの人は参考書として是非座右に欠く可からざる良書である云ふ事を保証致し升。

●昆蟲種類分布調査欄

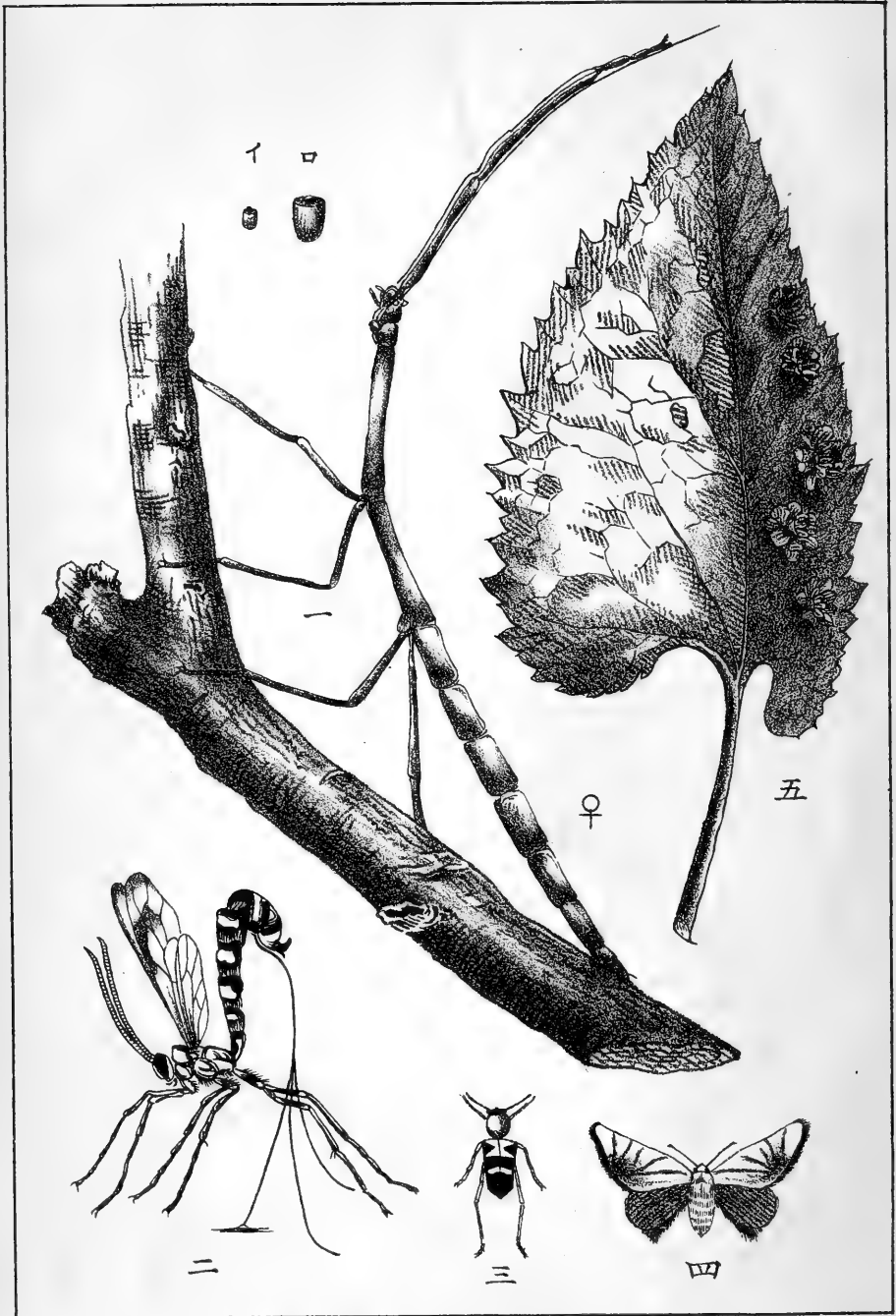
一月より
を新設す

●昆蟲學特別研究生募集

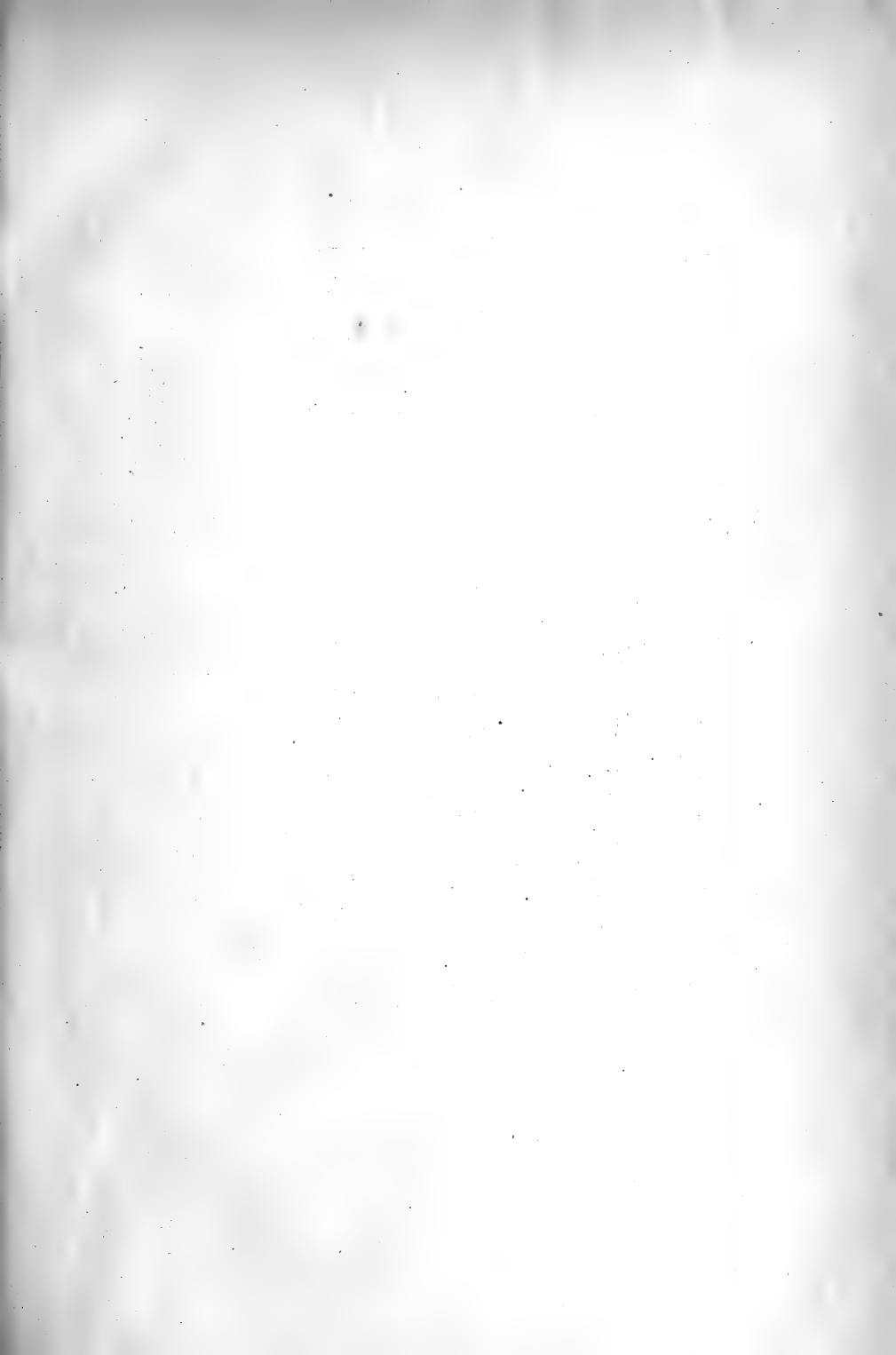
今回數名の特別研究生を募集するに付規則書入用の向は郵券相添へ至急照會あれ直に送致すべし

明治三十六年十二月十日 名和昆蟲研究所

●昆蟲世界購讀者紹介者芳名
德島縣 高羽仁三郎君 (一名)
岐阜縣 小竹 浩君 (一名)



種四他其蟲節竹枝





學

說

◎蜻蛉に就きて (三)

在東京 長野菊次郎

交尾、蜻蛉類の交尾の方法は實に奇異なるものなり。抑蜻蛉の腹部は十節より成り、雄の生殖孔は第九節に存して之より精液を排出す。又腹部第二節の下面に少しく屈曲せる貯精囊を有し、第九節の生殖孔より出したる精液を此囊中に貯ふるものなり。又其尾端は扁平の附屬器と方盤とありて、能く雌の頭部に附着すべき構造を有せり。雌の生殖孔も亦第九節に開けり。今交尾せんとするや雄は尾部の方盤を雌の頭部に緊着せしめ、雌は腹部を曲げて其第九節を雄の腹部の第二節に接し、貯精囊より精液を受くるものなり、其關係の大要は模型圖につきて知るべし。斯くて交尾を畢るも雄の尾端は容易に雌の頭部より離れざるを以て、雌雄連續して空中を飛翔すること往々吾人の目撃する所なり。尙ほ之が詳細なる觀察は動物學雜誌第七十一號に佐々木博士のやんまの交尾に就きての記載あり。

蜻蛉交尾の關係を示す模型圖

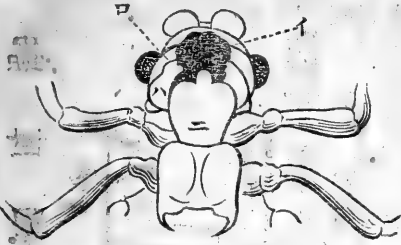


産卵、卵は水中、或ハ水草の莖中に産下せらる。或る種類にて水草の莖に挿入すべき装置を有せざるものは、靜に水中に産卵するか、或

は卵を圍繞せる粘着物よりて水中に沈みたる物より附着せしむ。然れども其他は軀の一端奇異な變化して尖るか、或は堅硬となりたれば、是にて植物の組織を切り開き、其切口に卵を挿入せしむ。雌蟲は卵を置かんとて漸次水草の莖を下に這ひ行くに従ひ、往々全く水中に沈むことあり。然れど雌蟲は常に空氣の層よて包まれたれば、水中に在るも若干時間呼吸するおとを得。卵の數は種々なれども大なるを常とす、但し此等の卵に寄生する奇異なる寄生蜂ありとなり。

幼蟲、孵化したる幼蟲は直に活潑に動作す、之を水蠶又はヤゴと云ふ。水蠶化して蜻蛉となることより既に知られたるは、本草綱目其實を記せるにて知るべし。曰く、水蠶化蜻蛉蜻蛉仍交于水上附物散卵復爲水蠶也云々と、蓋し蜻蛉の形の大なると、其數の多きと、飛翔區域の略定まれとは大に其觀察に便を與へしものならんか。既に世人の知る如く蜻蛉類の幼時は盡く水棲的性質を有するものにして、幼蟲は成蟲と全く其形狀を異にすれど、蛹は静止の状態を取らずして殆んど幼蟲と區別するおと能はざる

ホリヤ見たり
ホリヤ見たり
マヤ見たり
マヤ見たり
トマ見たり
トマ見たり
ノトマ見たり
ノトマ見たり
の幼蟲の頭部の下面



上唇は(イ) 顎上は(ロ)
下唇は(ハ) 顎下は(ニ)
示すてき開を面假は(ニ)

こと多し、是蓋し變態不完全と稱する所以なり。幼蟲の形狀たる甚だ奇異にして驚くべきもの多し、其頭部の如き一見何等の異様を認めざるが如しと雖も、若し之を轉覆して裏面を觀察するときは、殆んど全く頭部の下面を被へる角質の板ありて、其板の後端は殆んど第二脚の基部に達せるを見るべし。此板たるや前方に鉸鎖關節を有して二重とあり、上なるもの廣くして二個の顎狀附屬物を有し、之を開閉するおとを得べく、又其下端には細齒を有せることあり。此奇異なる装置は下唇の發育せるものにして假面と呼はる、蓋し頭の下面を覆へばなり。假面の目的たる

食餌を捕獲する用をなすものにして非常に有効なる装置と云ふべし。若し不幸なる昆蟲其近傍に來るときは、幼蟲は直に其假面を十分伸長し、顎狀片を以て其蟲を捕へ、然る後假面を閉ちて其顎狀片を口の適當の位置に持ち來たし、容易く其食餌を取るものなり。幼蟲の呼吸法は奇異にして、直腸は無数の氣管支を有し、無数の乳頭狀を形成しつゝ、腸壁をも貫けり。水は直腸に吸はれて腸腮 (Rectal gill) は水中より酸素を攝取す。此方法は又或種に向ひて運動の動作を與ふるものなり。即ち呼吸の爲め吸收したる水を急激に射出するときは、之が反動によりて幼蟲は前方に進むことを得べし。或るものは又腹部外頤を兩側及び尾部に有せり。若し幼蟲十分に生成して水を去る時よれば、或る隠れたる氣孔によりて呼吸することを得。併し水を去りてより空氣呼吸を始むるに至る精密なる方法は、今一層の研究を經るに非ざれば詳細に知ること能はざるあり。幼蟲十分に成長すれば、寧ろ柔かなる動物より廣く扁平なるものに變じ、水草の莖の上或は堤防又ハ岩の上等に這ひ上り、皮膚背部より裂けて蜻蛉羽化するなり。幼蟲の此脱殻は水流に於て普通に見るべし。

水蝨は其性貪食にして弱き水棲の昆蟲類は殆んど之か飼食たるを免るゝこと能はず、此性は幼蟲の全時代を通じて引續き、漸く成長するに従ひ次第大なる昆蟲を捕へ、遂に小魚及び他の水棲動物をも捕ふるに至る。又同類相食むことも少からず、甚しきに至りては十分生長したる幼蟲が成蟲の未だ翅を展張せざるものを捕ふることあり、然れども是に反し往々水棲動物の爲めに攻撃せられ、強暴なる水棲者の犠牲となることも少からざるあり。

種數、蜻蛉類の記載せられたるものは二千種以上ありとあり。而して英國自生のものは殆んど四十六種を算すべく、米國に産するものは三百種を下らずして、其内二百二十五種は同國固有のものなりと云へ

り。ケリコット氏 (Kellcott) の言によればオハイヲ洲には殆んど一兩種あるべく、ウイリアムソン氏 (Williamson) はインヂアナ洲にて一層多數を検出し得べと云へり。本邦所産の種に至りては其全數を知るに由なしと雖ども、學名を有せるもののみよても既に四十餘種ありて、之が精細ある圖は動物雜誌に載せられたり。

(完)

◎皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解 (其四) 第十一版圖參看

名和昆蟲研究所内 小 竹 浩

(五) 鱗翅類

鱗翅類とは蝶蛾類の總稱にして四翅鱗狀の細紛を以て色彩を施し、口部は上唇、下唇、大腮は退化すれども下唇鬚は發達し、小腮は延長して管狀の長吻となり吸收に適す、常に螺旋狀に卷縮し、其長さものは四五寸に達せるものあり。幼蟲は皆咀嚼に適する口具を有し殆んど植物を害す。多くは八双の脚を有すれども、中よりは腹脚一對乃至三對を欠くものあり。前號口繪の下圖は蝶類のみを蒐集したる者なり。蝶は晝間飛翔し、靜止のときは翅を背上に直立せしめ、翅の彩色概して表面美也。觸角棍棒狀をなし、下翅には翅刺を欠く。蛹化するには繭を營まず垂蛹若くは帶蛹也。稀には葉を捲き其中に蛹化するあり。

(二二) アゲハノテフ (Papilio xuthus, L.) 鳳蝶科に屬し、四翅黒色素地、黄色斑紋を有し、前翅の中室には黄色の四條線あり、發生時期によりて大小及び色彩に多少變化を來す。普通年三回の發生よし、稀には四回發生するものあり。幼蟲は柑橘類の葉を食害し、初め茶褐色に黄白色を交へ恰も鳥糞に似たれども、五齡に入りて暗綠色と赤り、第三節の背面兩側には眼狀紋と其間に四個の馬蹄狀紋を有す。第四節より十一節に至る迄は兩側の下方に各一個の輪紋ありて、第四節にあるは小さく、第一節よ

り三節迄は腹面に小さき同状紋を有す。物に恐るゝときは後頭部より肉角を出し悪臭を分泌す（此科に屬するもの、幼蟲は凡て一齡より肉角を有す）。蛹は帶蛹にして本誌七十號及七十二號に中井氏の實驗說あれば茲に畧す。

(二二) クロアゲハテフ (*Papilio demetrius*, Cramer.) 前種と同科に屬し、全体黒色を帶ぶ。雄は翅色

濃くして後翅の前縁に黄白色の半月紋と後縁角は赤紋を有し、雌は後翅に黄白色の半月紋を缺く。幼蟲は初め烏糞に似たれども遂に暗綠色に變し、第三節背面に眼状紋を、第七節側面の下方より第九節背面の中央に向て暗茶褐色の太き斜條を有す。蛹は帶蛹にして前種に似たり。（本誌七十一號參看）

(二三) モンキテフ (*Colias lyale*, L.) 粉蝶科に屬し、發生期により大小一ならず、翅色黄色にして、前

翅の先端殆んど三分の一は暗褐色を帶び、其内に黄色紋あり、中央の前縁に近き處に一個の黒点を有す。後翅は外縁は暗褐色部と、中央に一個の黄色圓紋あり。雄は皆黄色なれども、雌は黄色と帶黄白色との二形あり。幼蟲は青綠色にして、氣門線太く黄白色なり、其線上各關節に一個の赤黄紋を印す。紫雲英、ミヤコグサ、スバメノエンダウ等を食す。（本誌第七十二號參看）

(二四) ツマグロアカツバメラフ (*Zephyrus Intea*, Hewitson.) 小灰蝶科に屬し、四翅赤黄色を呈し、

前翅の前縁角部は暗褐色に、後翅の後縁角は二個の黒紋あり、其中間より尾様物を出だす。裏面は前翅の外縁に沿ふて黒色点線あり、中央に始まり後方に至りて太く明なり。中央は長短四條の細き銀白色線あり、後翅は外縁部稍濃色にして各翅脈間に數個つゝの黒紋あり、中央には判明なる二條の銀白線有す。六七月頃柗樹等の多き山林中に飛揚す。

(二五) ウラナミシバミテフ (*Polymnathus boeicinus*, L.) 前種と同科に屬し、雄は翅の表面淡紫色を

呈し、外縁褐色を帯ぶ。後翅の後縁角には二黒点を有し。裏面は灰褐色よして、多くの白色波状細線を有す。後翅の後縁角部は橙黄色を帯び、内よ二黒点あり。雌は翅の表面暗褐色よして、中央より基部に向て瑠璃色を帯ぶ。幼蟲は淡緑色よして、暗綠色の背線と灰白色の氣門線とを有し、頭小さく褐色を帯ぶ。刀豆、鵲豆等の莢中に入りて内部を食害す。(本誌第七十四號參看)

(二六) シノミテフ (*Cyanitis argiolus*, L.) 前種と同科に屬し、雌雄により翅色を異にし、雄は鳩羽色にして外縁黒色を帯び、雌は前縁より外縁に沿ふて中廣く黒褐色を呈す。裏面は雌雄共に青灰色にして外縁に一條の細さ黒線ありて縁毛を分界す。其内方に雄は二列に、雌は三列よ小黒点を并列すれども判明ならず、後翅は其内方に尙數個の小黒点あり。(本誌第七十四號參看)

(二七) テングテフ (*Lybidea lepita*, Moore.) 天狗蝶科に屬し、翅色黒褐色よして前翅の中央に赤黄色の大なる斑紋あり。前縁角に近き處に四紋ありて二群をなし、前縁角は鉤狀をなす。後翅の邊縁は凸凹多く、中央には赤黄色の斑紋あり。下唇鬚は長くして口吻狀をなし、頭の前方に突出す。幼蟲は暗綠色にして朴の葉を食し、成蟲よて越年す。(本誌第七十四號參看)

(二八) ミスジテフ (*Nepis acenis*, Lep.) 蛺蝶科に屬し、翅は黒くして開展すれば前後翅を通して三條の蒼白色の横列紋ありて飛揚不活潑なり。幼蟲は褐色にして第三節には粗毛を生トたる突起あり、五節の背面隆起し、尾端に突起ありてアカシヤの葉を食す。長く静止するには常よ葉柄を少しく咬み、其葉を黄變せしめ、該葉に休止す、是れ保護の爲め葉色を自己の休色に似せしめんが爲めならん。蛹は垂蛹よして黄金色を呈す。(本誌第七十二號參看)

(二九) ヒオドシテフ (*Vanessa xanthomelas*, Schiff.) 蛺蝶科に屬し、翅色樺色よして黒色と黄褐色とを

以て外縁部を彩り、後翅には藍色を交ぬ。内方には前翅に數個、後翅に一個の黒斑あり、裏面は枯葉色をなす。幼蟲は一寸四五分に成長し、頭には小疣を有す。黒色の背線と亞背線ありて、第二節以下各節に四個若くは六個の大小棘刺を有し、常々木の葉を食害す。蛹は垂蛹にして成蟲にて越冬す。(本誌第十號參看)

(三〇)ゴマダラテン (*Hesina japonica*, Feld.) 蛺蝶科に屬し、翅色黒く、上翅には大小十數個の蒼白色の斑紋あり、後翅は中室及其上方并々臀脈部は蒼白色を帯び、外縁に沿ふて數個の小斑点と、中央の前縁より後縁角に向て一列々蒼白紋を并列す。幼蟲は木の葉を食害す。其初め鼠色或は灰褐色なれども成長すれば綠色に變す。頭部には二個の角状突起ありて先端岐る。蛹は垂蛹として淡綠色に白粉を覆ふが如し、年三回の發生にして幼蟲にて越年す。(本誌第五十六號參看)

(三一)ウラギン ハウモンテン (*Argynnis adippe*, L.) 蛺蝶科に屬し、翅の表面は赤黄色にして、黒色の斑紋多く、前翅の第二第三翅脈上には特殊鱗を有す。翅の裏面は後翅に於ては綠黄色にして判然たる銀白紋を有し、中央より稍外縁に近き所に褐色の圓紋列ありて銀色紋を横斷す。幼蟲はスミレを食し、赤褐色にして背に切れ切れの線ありて其下に黒色の斜條紋あり、且つ赭褐色の棘を生す。(本誌第七十二號參看)

(三二)ハナセ、リテン (*Parnara pellicuda*, Murray.) 弄花蝶類弄花蝶科に屬し極めてイチモジハナセ、リテンに似て翅色暗褐色に黄金色の鱗粉を散布す、前翅には灰白色の斑紋を耳狀に羅列し、後翅の中央には四個若くは五個の灰白色紋を横に列ね出入をなす。幼蟲は笹を食し、稀々は稻葉を食害す。飛揚活潑として各種の花に集り花蜜を吸收す。(本誌第七十五號參看)

(三三)キマダラテン (*Neope gashkevitchii*, Men.) 環紋蝶科に屬し、翅の表面黒褐色にして外半は

帶褐黃色の大なる斑紋ありて、其内に黒点を有し、後翅の基部には黄褐の長さ軟毛を密生す。裏面は黄褐色にして、前翅には黒褐色の斑紋あり、外縁に波状線と其間に三個の黒褐紋とを有す。後翅の内半は種々ある彩色を以て雲状紋をなし、外縁の波状線は前翅に似て其間に八個の蛇目紋を有す。(本誌第七十五號參看)

(三四) ウスイロコジヤノメテフ (*Mycalasis gotama*, Moore.) 環紋蝶科に屬し、翅の表面は淡き黒褐色にして、前翅には外縁に近き處に大小二個の蛇目紋あり。裏面は灰色にして外縁部に波状紋あり、前翅の環紋は表面と等しく、時としては三個なることあり、後翅には六個ありて二簇をなし、其内方より前後兩翅を通じて灰白色の一條あり。幼蟲は淡黄綠色にして、腹端の一節は異様に突出す。常々禾本科植物の葉を食し、五月より九月に亘りて發生す。(本誌第三十八號及第七十三號參看)

(三五) チャマダラハナセ、リテフ (*Thanaos montanus*, Brem.) 弄花蝶科に屬し、翅色黒褐色にして前翅の中央及外縁に近き處に灰白色の雲状紋あり、後翅は黄色の斑紋多く、裏面は前後兩翅共に帶褐黄色の斑紋多し。幼蟲は綠色にして竹の葉を食し、三四月頃發生多し。(本誌第七十五號參看)

◎臺灣産螢種に關する第一報告 (拾遺)

在臺灣苗栗 永澤小兵衛

曩に、余は臺灣産に係る螢種を紹介するに當り、島内に弘く分布するは、甲種(雌の無翅あるもの)と、乙種(黄褐色の翅を有するもの)との如くなるも、他に猶ほ鳳山地方には別種を産する旨を附記し置けり蓋し、彼の稿の其一節より第三節までは、臺北に於て、第四節より第七節までは、打狗に於て執筆せしが故に、自づから局限の嫌ひありしのみか、當時は鳳山産を多獲せざりしを以て、異日、中部臺灣産螢

どゝもに、之を併記せんと欲せしが故なりき。幸ひにして、豫想は違はず、茲も他の螢品と共に、之を列記するの機會を得たれば、前報の補足として讀者に告ぐる所あらんとす。

一、三種の螢火と其產地　前報後に採集せし種類は、都て三種あるを以て、假に丁種、戊種、己種の符號の下に其産地を記載せんに、「丁種」前報寄送後、即ち七月廿五日、還た鳳山に往て、土人と共に城門の内外を搜索せしよ、是夜獲たる所のものは數十頭に上りしも、余が豫期せる或種（追て言ふ所あらんとす）は絶無にして、未だ見慣れぬ別種十餘頭の紗囊底に微光を發するものあり、臆て之を檢視せしに、内地産の最小形種に彷彿たる一種にて、回想すれば、六月中、臺北に於て其雌蟲一頭を獲たることありき。其際は乙種を多く採集したれば、或ひは變種にもやと輕信し、敢て介意せざりしに、此に至りて頗る意外の感起しぬ。其後、八月十二日より臺中にて試みし五回の採集、同月十七日の葫蘆墩十八日後に於ける后里庄、廿二日の三叉河、廿三日後の苗栗に於ける採集に徴して、是は主はら中部と南部とに産するも、多少北部にも棲息する種たることを認めり。「戊種」初め余は、南部臺灣には、必ずや螢火の蕃殖多からんとの想像を畫きて力を此方面に致し、打狗に於ては概むね隔夜に、臺南に於ては七月廿七日より八月三日の間に五回、橋仔頭庄、嘉義、雲林、彰化に於て、各一回の採集をあしし、かど毎に獲る所のものは、甲種は非れば、乙種のみにて、私かに其分布區域報道の多く謬らざりしことを悦ぶと共に、將た新種の獲難さや失望せしが、臺中に移るに及びて、八月十一日より五回の採集中に、二種の異品をば、乙種と共に捕獲することを得き。此戊種は即ち其一にして、外貌酷はだ乙種に似たるも、之を細檢すれば、明かに別種に屬する特異點を具備せるを見る。而して此種の臺中より稍多く、葫蘆墩、后里庄また其發生あり、三叉河と苗栗とには、頗る蕃殖の盛んなる等より考ふれば、蓋し北部より

り中部にわたれる普通種の一たるべし。「己種」是は戊種と同トく、始めて臺中に於て獲たる異品あるが、また葫蘆墩、三叉河等に於ても採集せり。翅色は前者と違はざるも、其軀軀の巨大なるは、一瞥の下に兩者を鑒別し得べし。余が採集せる黃褐翅螢の一類三品中、最大のものにて、最小の丁種と同じく多く獲難し。便はち此種また中部臺灣を主産地とするものたることを知れり。從來余が採集の成績を以て云ふときは、甲種は臺北、打狗に普通にして、臺南には特に多く、乙種は到處に多と雖も、臺中と葫蘆墩とに最も多く、丁種は鳳山に多く、戊種は三叉河と苗栗とに多く、己種は臺中に多かり。而して不結果に終りしは、澎湖島、恒春、海口、枋山、東港、嘉義、雲林、彰化等なりしが、未だ採集を試みざるは、臺北と苗栗間の各地とす。然ども季節の早晚、夜色の明暗、時刻の遲速によりて、成績は異同を來たすものなることは、豫じめ知りざる可らず。

二、三種の螢火の形貌 由來、形貌を詳説するは、記事の乾燥に失する嫌ひあるも、右述の事實を釋證せんが爲めに、此等の新螢に就て、大要を摘記すれば、次の如し。

(イ) 丁種の雄蟲

全體内地産の小形種に似て、體軀は少しく細長と、身長二分四厘、濶一分、翅長

一分九厘、濶五厘あり。臺灣産螢中の最小形種にして、全翅正黒、周邊は淡黄を帯べる繊細の邊緣を彩どり、翅端は腹末よりも稍長し。即ち甲種また黒翅を有するも、其形長大局濶と、且つ其胸

背の大なる、翅の邊緣の設色の濃厚にして細太の差ある等は、此種と違ふ所なり。胸背は黃褐にして稍赤色を帯び、眼は藍黒にして大に、兩眼の間隔は纔か一厘五毛に過ぎず。解角は長九厘許り、短

細にして上に淡褐の微毛を生せり。胸部は淡褐色を呈するも、腹部は純黒にして光澤あり。發光器は淡青白色にて二條の並行線をなせ、上節は稍太く、下節は細く、都て長三厘強、濶八厘を算するのみ。

發光器に續て尾節あり、形極めて微小にして、其色は胸背と同ト。

(ロ) 丁種の雌蟲 全體雄蟲に似たるも、其違ふ所は、稍大形にして、且つ發光器と眼球の小なる等

あり。此種の性質として、飛行の際には駛力遅緩、光力また頗る微少あるが、特に雌蟲に於

て顯著なるを見る。然れば夜間水邊の雜草上靜止せる時の如きは、其光力の薄弱あるが爲めに、

彼の幼蟲期のものと誤認することあり、又飛行の際には、往々他種の光輝を消されて、網羅を脱る、

ことあり。多くは初更より出で、低處を往返す。其棲息處は、水田の近傍なるに似たり。而して臺灣

産蠶中、最も内地産のそれに類肖し、且つ最小形のものを探むれば、實に此一種の外に出でず。然

れども雌蟲には、稀に乙種と同大に肥滿せるもの無きにもあらず。

(ハ) 戊種の雄蟲 形貌、色彩等より云へば、最も能く乙種に肖たりと雖ども、翅端に顯著なる黒

斑を有すること、猶ほ襍黒構蚊蟲の如くなるを以て、直ちに彼此を判別し得べし。身長三分強、濶一

分二厘、前翅は長二分五厘、濶七厘ありて、之を展開するときは都て五分四厘を算す。後翅は長二分

七厘、濶一分二厘を有し、其尖端は腹尾よりも稍長し。胸背は其色黃褐、數點の淡黒斑を印之、且つ中

央には一條の縱溝を劃し、兩側は尖銳にして、刺狀をみせり。胸腹の折界は明白にして、前胸は長六

厘、濶九厘弱、後胸は稍大にして且つ厚し。頭部は長五厘許り、其濶七厘ありて、眼の間隔は二厘を

餘り、其色碧黒、外方に露出して、殆んど全頭を掩へり。觸角は絲狀黒褐、長一分三厘許り、初節と

第三節とは長く、第二節のみは短きも、他は概むね同長にして、密に細毛を生ぜり。腹部は肥滿して

上四節には兩脇に濃褐斑を以て、巧みに長三角形を彩どり、長一分三厘、濶一分あり。腹背の前二節

は黃褐を帶ぶるも、二中節は淡黒褐、後三節は黒褐を呈す。發光器の全長は九厘を算し、上節は横

帶狀をなし、下節は漸次窄小す。故に上節の最廣部に於ては、長三厘強、濶一分を算するも、下節との接着線に於ては、長六厘弱、濶八厘に減じ、下方に至るに隨ひて、遂に篋頭狀をなす。而して乙種は矢鏃狀をなして少しく凹窪の局部を存するも、此種は平滑にして潤澤を有する帶緑白色を呈するのみか、全たく尾節を缺如するが故に、其翅端の黒紋と相俟て鑿別の徵證を供し得べし。脚部は乙種に似て腿節と爪色とは黄褐より、其他には黒色を交ゆ。前脚の腿節と脛節とは、各五厘、其跗節は三厘に出でざるも、中脚は腿脛兩節とも六厘ありて、跗節は四厘を算し、後脚は腿節六厘、脛節七厘、跗節は五厘左右あり。

(二) 戊種の雌蟲 體長三分二厘、濶一分三厘、翅色は乙種に比して稍黄緑なるを覺ゆ。翅長二分七厘、濶七厘五毛、半透明にして、末端は多少の黒彩を有するも、敢て雄蟲の如くは分明ならず。後翅は深黒微黄を帯び、長二分五厘、幅一分二厘ありて、體長よりは短かし、胸背は雄蟲よりも其色稍濃

かにして、寧ろ丹褐を帯び、其幅一分二厘許り、中央縱溝の左右は數點の灰黒痕を留め、兩側は稍尖れり。觸角は長一分二厘、細毛を生じ、末端は微褐色を帯ぶ。頭部は幅六厘、眼球は帶藍黒にして小に、双眼の間隔は約三厘あり。腹部は黄褐を帯び、其兩脇に些少の黒褐紋を彩せるのみにして、發光器上の一節よりは通有の黒帶を缺き、背後も尾端の他は帶白黄色を呈し、唯發光器上の二節のみは淡黒褐なり。發光器の一節なること、他種と異ならざるも、原と正一字形をなさず、不規則なる波狀をなすが故に、其放光を當りてや、兩側のみ明かよして、中央狹窄部の暗黒あるを見る、長二厘、幅一分一厘あり、其次節は短たにして、尾端また乙種等の如くに尖長にあらざるも、一枝の針樣物を有せり。脚部は他種の如くは脛節以下漆黒ならず、概ね帶黒褐色にて、美麗なり。試みに其長を測

りしに、前脚は四厘強、五厘弱、三厘強の三節より成る。中脚また殆んど同長あるも、唯跗節は稍長く、後脚には六厘、六厘、四厘餘の三節あり。此種は、雌雄ともよ光力強烈にして、常に乙種と同棲するものあるが、特に雌蟲の體軀は豊肥にして、腹部の色彩少しく淡さの別あり。而して乙種の雌蟲の尾端には縦裂の皺皮二條を有するも、此種のものとは反つて膨起せり。

(ホ)己種の雄蟲 此種は、余が採集品中、最大の黃褐翅蝨にして、中部に多く、南北南部には少し、焰光高翔の狀、頗る甲種を類するを以て、採集の際には誤認することあるも、彼は青鱗を發し、此は黃鱗を放つが故に、容易に識別し得るなり。常に好みて駛行し、又種族の繁殖少なきが故にや、捕獲すること難し。身長は三分七厘より四分二厘及び、濶一分五六厘あり。前翅長は三分七厘許り、幅一分を算し、後翅長は三分二厘、濶一分四厘弱、比較上短かさを以て尾端は達するに至らず。頭頂の幅は八厘ありて觸角は絲狀をなし、其長一分二厘あり。眼色は藍黒を帯び、露眼に屬すれども左まで巨大ならず。兩眼の間隔は約三厘ありて、其色淡朱褐を帯ぶ、是れ未だ他種に見ざる所の特異點たり。胸背は淡朱褐にして、直ちに間隔線は聯なり、中央の縱溝の左右は、灰黒の斑點を留め、其兩側は著るしく尖銳よ、幅一分二厘あり。腹部は稍大にして黃褐に、發光器上の一節は漆黒窄狹なり。發光器の上節は長三厘餘、幅一分三厘、下節は長八厘弱、幅八厘を算え、匙頭狀をなして、其周邊には黃褐色を彩せる。腹背は淡黃微褐よして各節は一樣に窄く、發光器以下の三節を除くときは、他は二厘強の長を算するよ過ぎず。脚部は他種よりも稍長く、前脚は五厘の腿節、四厘強の腿節、四厘弱の跗節より成り、中脚は六厘強の腿節、六厘の腿節、四厘の跗節ありて、後脚は七厘の腿節、七厘の腿節及び六厘の跗節を有せり。

(一) 己種の雌蟲 外貌は宛がら雄蟲に似て、身長四分二厘、幅一分六厘あり。前翅の開張七分五厘強、全長三分七厘、幅十分を有し後翅は長三分六厘、幅一分五厘ありて、其末端は發光器と末節との間あり。頭頂の幅は九厘強に及び、觸角は長一分三厘ありて、初節の長く、次節の短かきを見るの他、概むね同長を算す。胸部の黃褐、胸背は赤褐にして、中央には凹線を刻し最闊一分四厘あり。眼球は小にして、雄蟲の如くに露出せざるも、兩眼の間隔は四厘に及び、其色の胸背に同じきことは雄蟲の如し。腹部は豊滿にして、幅一分六厘、淡黃褐色を帯び、それ微小なる黒褐斑を印するが故に恰かも鼈甲の斑點にも比ぶべし。發光器は四厘弱、次節は約六厘、尾端は四厘内外ありて、發光器と並行せる一節又は黒澤を有す。腹背は淡黃を帯び、各節の長は約四厘にして鎧袖状をなせり、中に就きて發光器上の四節には、左右各々一小黒斑を有し、尾端は黃褐色を帯ぶ。脚部は雄蟲と大差なく、前脚の脛節脛節は共六厘、跗節は五厘、中脚また略ぼこれに同ト、唯後脚のみは、脛節七厘強、脛節八厘、跗節六厘ありて、爪鉤は褐色なり。

三、臺灣産螢の命名 臺灣に産する各種の螢火には、特有の標識を具ふること、前に列擧せるが如し而して斯く採集を重ねるに隨ひて、漸やく新種を増すの事實より推測を下すときは、將來、必ずや幾種かの奇品を發見するの日あるべく、特に蕃界開放の時に於て、未だ世人に知られざる種屬を獲ることあらんと信す。然れば邦稱の如きも、弘く採集の後と比較研究を遂げ、各々これに恰當の命名を欲するの餘り、余は毎に符號をのみ用の來り、敢て擅まゝに、新稱を命ぜるに至らざりしが、翻つて顧みれば、記載上不少の煩累を免かれ得ざるのみか、また覽者の記憶に不便あらんと思はるゝ節無きやあらず。蓋し本邦に於ては本草和名、和名類聚抄、新撰字鏡、萬葉集(前報に萬葉集に螢火の名稱之れ無きやあらず)

もせしは記臆違ひありき)等にポタルてゑ名稱を存するに關はらず、國學者流の莊子に倣ふてや、夏蟲として之を歌文の材料となせしより、古今集、古今六帖、枕草子、後拾遺集等には之を夏蟲の名稱にて收載せしも多かり。隨ひて其種屬に對する名稱も頗る單純にして、同ト夏蟲の一なる蟬等より比ふれば、其異同を辨知するに足れる俗稱をも有せざることは、大小二形種の名稱も止まれるに徴するも昭らけし。斯れば、他日有識の士の鑒定に依りて之が學名を知り、併せて邦稱を命せんどの希望をば茲に擲して、假に其形貌、色彩を準據せる新稱を公けにするの已むことを得ざるに際會せり。而して此等の邦稱たる、固より大體に照して定むる所に係れば、名實必走まも相合ふものゝみにあらず。例へば、甲種の胸背と、其翅翼の周縁とは、節色を彩ざるも、俗稱に從ひて之を茶縁とすし、乙種の翅色は帯灰黃稱なるに、略して之を茶翅となし、が如し。識者頼ひに杜撰僭越を咎むること莫らんことを。

第一、甲種 チヤベリクロポタル(茶縁黒螿) 無翅の雌蟲には命名せず、たゞ雄蟲の色彩を標準

とせり。

第二、乙種 チヤバチポタル(茶翅螿) 此種は弘く全島に分布するを以て、黃褐翅螿を代表せしむ

第三、丙種 (名を缺く) 未だ研究を遂げざるを以て、暫らく命名を缺く。

第四、丁種 ヒメクロポタル(姫黒螿) 内地にはヒメポタルと稱する種類あるも、敢て混同する

あと無かるべしと信じて、斯く名づく。

第五、戊種 ツマグロチヤバチポタル(襍黒茶翅螿) 黃褐翅螿中、雌雄とも翅端に黒斑あるを

以て、此稱を適當ならんと思考せり。

第六、己種 オホチヤバチポタル(大茶翅螿) 目今捕獲せる黃褐翅螿中、最大形種に屬するを以

て斯く命名せり。

◎柑橘の害蟲に就きて

静岡縣 岡田忠男

近年到る處柑橘栽培の聲喧しく、其栽植日に月々多々ならんとするの傾きあり、此時に當て本縣の如きも多少其熱に感染せし結果、本年本縣農事試験場に於て調査したるに、其栽植反別一千〇八十餘町歩の多さに上れるのみならず尙ほ進んで栽植せんとす。然るは是等の繁殖は將來に於て喜ぶべき事なるや否や、顧みれば是等栽植の盛んなると同時に一つの憂ふべき事實を認めつゝあるなり。其事實とは何ぞや、即ち貝設蟲の輸入として、或は近縣より、或は遠く米國より取り寄せたるの結果、其害蟲の棲息よ好適するの地方に於ては著しく繁殖しつゝあるは余が認むる處として、現に七八年を経過したる柑橘樹の如きは、購入の際其害蟲の有無を知らずして輸入したるの結果、遂に枯死し瀕せんとするものあり、又一方には輸入害蟲のみならず、從來野生の植物に托生したる處の昆蟲も此新植物を移植すれば是れに移轉し來りて、或は葉を害し、或は莖幹を傷ひ、或は果實を害するの種少なからず。今余が茲に照會せんとするは後者に屬するものにして、全く其地方野生植物の害蟲なるも此栽培植物たる柑橘に移轉し來りて害を加へたるの事實を、實地踏査したるまゝ、左に項を別ちて述べんとす。

(一)被害の場所 這回柑橘に蟲害を被りしは縣下田方郡西浦村と云へる村落にして、縣下柑橘栽培の有數なる個所なり。而して同村の地勢たる、一方は海を控へ、一方は山嶽を帯び、柑橘に最も好適なるの土地あるを以て、古來より栽培し來りたるも、現今畑地に、或は新に開拓して盛ん温州チーブル種等を栽植し、目下一村にして總反別六十餘町歩の多きに達せり。然るに本年は多少結果を見るに到りしも、去る九月上旬より突然少しく黄色に變じ、下旬に至りて落果するもの夥多なり。依て如何なる事より斯く落果するものなるやに就き調査したるに、晝間は異狀なきも夜間至れば無數の蛾類の飛



翔し來りて皆果面に附着し居るを認め、全く此の害蟲の害なることを知るに至れり。依て同村農會は郡農會に、郡農會は縣農事試驗場に其調査方を請求せられたるを以て、余は十月十五日同地に出張して調査したるに、被害地は平坦なる土地にあらずして全く山間部あり、而して其種類たる香柑、温州の兩種にして、或る場所の如きは香柑の如きは採るべき果實なきに至り、其被害區域たる山間の園として反別數町歩及び、落果するもの實は夥多なりしあり。

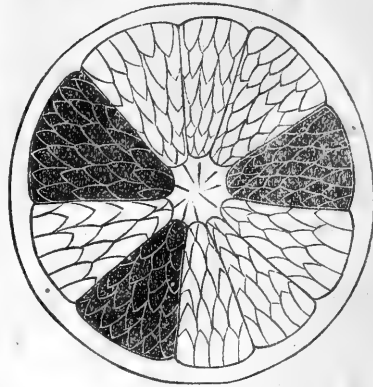
(一) 害蟲の名稱及び性質加害の状態 右に述べたる被害は如何なる害蟲の加害したるものなるやは知るに由なきを以て、同村に出張し同村柑橘の熱心家を訪問せしに、已に加害する所の害蟲を採收し標本となして保存せられたり。依て之れを一見するにアケビノキノバガ、コガタノキノバガは其主なるものなれども稀にはヨトウムシの一種、シヤクトリガの一種をも見受けたり。而して是等の害蟲の來襲するは何れの時刻なるかを調査するは毎日没後にして、晝間は柑橘園に棲息するもの稀なり。即ち夜間に於て食餌を得れば又何れにか逃げ去りて跡を調査するに、多く山間幽谷の樹陰は晝間潜伏し居るもの、夜間に到れば直ち飛び來りて加害するもの、如く、若し一度捕獲を過されば

圖のガハノキノバガ



直ちよ幽谷に向ひて逃げ去るを認む。其加害せんとするや、飛翔し來りて果實の何れを論せず、少しく

圖面斷横の柑蜜州溫の害被。



黃熟の氣味あるものより銳利なる口吻を挿入して液汁を吸收するを以て、其の委しく調ぶる時は微細なる穴より液汁の流出し居るも内部は蜜房破裂せられて空隙となる、此時に當つて根部より來る養液は自由に運行する事能はざるを以て、遂よ黄色を呈して落果するもの、如し。其落果したるものを驗する時は、其口吻を挿入したる跡一個に付き七八個所より十ヶ所以上を認む。其被害高多きは一日落果するもの一反歩に付き千個以上二千個の多きと達せし事あり、其被害の甚しきを証するに足るべし。

右の害虫は兩種共鱗翅目蛾類擬尺蠖蛾科に屬するものあるを以て茲に附記せ

参考、此二種の害虫は今夏縣下富士郡加島村に於て梨果に加害するものなりて同地の知人採集して送附せらる。又田方郡韭山、函南兩村に於て葡萄に加害するものなりて同地に採集せしものを實見せり。尙余はコガタノキノノハガに就ては名稱不明なりしを以て、名和昆蟲研究所に質問せしに去る十月二十二日同所員小森省作氏よりコガタノキノノハガ(Calpe excaevata, But.)なる名稱を附し、其加害植物に就ては或者は葡萄の害虫とも云ひ、又梨の害虫とも申すもの有之候へども、確然相分り不申候との回答ありたり。又西浦地方にては、今年夏時、葡萄及梨を加害したるものありたれ共、其何種なるやは不明なり。或は此種ならんか云ふものありたり。又此記事を草するの際、全國害虫驅除講習會を修了したる増田秀雄氏に會ひたるに、同氏の前種を飼育したる所に依れば、アケビの尺蠖なることを明言せられたり。

右の事實より考ふる時は、是等二種の害虫は柑橘のみならず梨、葡萄等をも害し、幼蟲の時代は野生植物に托生し、成蟲となれば果實の液汁を吸收する所の害虫ならんと考ふ。

(三) 驅除及び其結果 今同村栽培被害者は如何にして驅除せられたるやに就て調査したるに、其被害

を認めしより毎夜圖の如き竹筒を以て(イ)の口より(ロ)の節を貫き、是に石油を入れて口に木綿の栓を固くなして之に點火し、圖の如き捕蟲網(咽喉付)の口の小さなものを用ひ、曩の火光を以て搜索しつゝ、其内に蜜柑の蛾の附着したるものを入れて動揺して網内に落ちて捕獲するにあり。斯くして採集したるもの、一人よて一夜、數百頭の多さに達せりといふ。



イ 點火用竹筒及小口形捕蟲網の圖



りしも、コガタノキノハガは左表の如く集來せり

施行月日 誘引個所の數

三十六年十月十七日 松杭の高さ四尺許の者四本を立て是れに糖蜜を塗れり

同 十月十八日 同 三本共各一頭宛 二本は三頭宛、二本は二頭宛

同 十月十九日 同 四本共各二十頭内外

右施行せし個所は被害の最も多き所を行ひしなり、其結果として益々害蟲の香氣を判斷感するに到れば益多く集合するの傾あり、然れ共此研究は同地熱心家尙引續き實施し居るも、未だ報告を得ざるを以て後報を得て報せんとす。

以上述べたる所の記事は、單に考ふる時は唯柑橘に蛾類の害蟲集合して液汁を吸収したるものなれども亦一方より考ふる時は、現今我國に於ける果樹栽培益盛にして、其結實時季に達せしの際野生植物も托生したる處の是等の害蟲、何時か移轉して加害するに於ては計るべからざる損害を招くの恐あるを以

て、聊か顛末を記して當局者諸君の注意を促し、一方は是等の如き野生植物は托生せる害蟲の農作物に侵害する種類の調査を讀者諸君に乞ひ、本誌に掲載して廣く一般に知せしめられん事を希望する所以なり。



講話

◎昆蟲の肢に就て

名和昆蟲研究所助手 小森省作

編者云、本篇は本月五日第六十回岐阜縣昆蟲學會席上に於て、小森助手の講演せられたる談話の主要なり。

月日の脚は實に迅速なるものにて、本年も己に此會は是れにて終りとなりました。余は如何にして此月日を歩み來りしかを思へば、轉た寒心に堪へない事があります。故に今日は其れに關係して昆蟲の肢と云ふ演題を出しまして越年致さうと存じます。

凡て物は必要に應じて發達するものなることは、今茲に申上げあいでも御承知であります。昆蟲の肢は就ては實に其甚しきものがあろうと存じます。而して昆蟲の肢は其翅と關係を有するものにして、翅の比較的發達せるものは肢は比較的退化し、翅の比較的退化せるものは其反對の結果となれる、是れ自然の勢であります。先づ御覽なさい、直翅類の如き比較的翅の發達せざるものは肢の發達は非常なるものにして、蝶蛾類の如き、蜻蛉の如き翅の發達せるものは肢は比較的退化せるを見る。又其必要上より發達し或は退化することは、幼蟲と成蟲との關係を見ても自ら知ることが出來ます。即ち蜻蛉の幼蟲の肢が發達せるに係らず成蟲の肢は比較的退化せるが如き、甲蟲類の幼蟲の肢が退化せるに係らず成蟲の肢の發達せるが如き、或は鱗翅類、双翅類、此等の關係を觀察し來れば皆此の自然の妙理に適合せざるものはありませぬ。特に茲に奇態なるはカマキリカゲロフ、ツチハンメウ、マメハンメウ等の幼蟲であります。是等は孵化の當時見事なる肢を有するも、一度其宿主に寄生するときは、肢は其用を失ひ、又は全く之を飲くに至る、實に自然の必要より起る現象は豈に驚かざるを得ざる次第ではありませ

ぬか。是等より推せば蜂類、蠅類、天牛類、象鼻蟲類、蛾類の或種等の幼蟲が無脚なる理も、自ら明かなることでありませう。

昆蟲の脚は鱗翅類及膜翅類の或種の幼蟲には腹脚と胸脚とあれども、成蟲には前、中、後の胸部に各一對つゝ有するのみよして、基節、轉節、腿節、脛節及跗節より成り、跗節は又一乃至六節より成りて先端に爪鉤あるを常とす。而して肢も亦其必要上種々の變形があります。即ち其一例を擧ぐれば螻蛄の肢は各對とも非常に發達せるも特に前肢は於て甚しく、基節は長く發達して腿節、脛節には鋭棘を有し、脛節の先端にあるものは鎌の狀をなして物を攫むに適し、螻蛄の前肢は土を起すの必要より大に發達して、脛節の一部及跗節は變化して鼯鼠のそれに似て居る。ゲンゴロウムシの後肢は能く發達して脛節の先端に二棘と跗節は長毛を有し、其雄の前肢は交尾上の必要より跗節の第一、二、三節は變じて膨大し、吸盤を備へて楕圓形となり、繩類の跗節は吸盤ありて平滑面よ止まるを得べく、蜜蜂科に屬するものは多毛を有して跗前節を有し、其他タガメムシ、ミヅカマキリ、ユリハナスイ等の如き、又蝶蛾類の或種の爪鉤を有するあり有せざるある等、是等を數へ來らば盡くる處あふざるを以て、先づ此邊まで止め、是より歩き方につきて少しく御話致しませう。

蠅類等の幼蟲なる蛆は躰を緊張して匍ひ、尺蠖は屈伸して進み、直翅類の或者、微翅類の蚤の如く跳ぶものもあり、又浮塵子は横に匍ふとあるも、それは兎も角茲には肢を前後して進むなる即ち歩むことと就ていある。抑も昆蟲には蜚蠊の如く速く走るものあり、又竹節蟲の如く緩歩するものあるも、皆多くは一定の方則に従つて居ります。即ち其の操脚の有様を云へば、上部に示せる如く



一定の方則に従つて居ります。即ち其の操脚の有様を云へば、上部に示せる如く(1)なる前肢を上ぐるや(2)なる中肢、(3)ある后肢は之より引續きて前進せしめ次よ(4)(5)(6)を進むるのである。而して此の場合に於て、前肢は躰を前方より引き、中肢は躰を支へ、后肢は躰を前方より押すの用をなす。又昆蟲の歩行せし痕跡を見るに、蟲種により前後肢の非常に

異なるありて多少の差異は免れざれども下圖に示す如くあり居れり。是等は昆蟲の肢に色を塗りて紙上を匍はしむるか又は砂上を歩ましむれば容易に實驗し得べきことであります。尙蟲種に従ひ肢の各部分の發達退化せる關係を論ずるとは随分興味あるとなれどもそは他日に譲るとおしぬ。



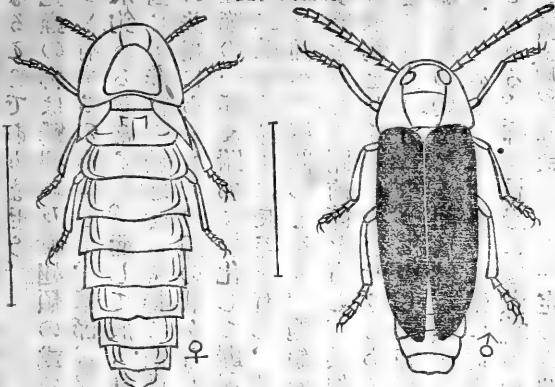
◎藤吉螢の話

長崎縣對馬國 平田駒太郎

本篇は先月二十三日對馬國の昆蟲學熱心家平田氏が來所の節、所員一同より催したる茶話會席上に於て談話せられたる一節にして筆に馴れざる者の筆記なれば、文章の拙劣は勿論、誤謬の点あるも計り難し、讀者之を諒せよ(筆記者自す)

吾が對州は南北三十六里、東西四里乃至七里の一小島嶼なれども、潮流の爲めに南北は於て其の氣候を異にし、南部は亞熱帶植物を生じ、北部には寒帶植物を有するが如き實に面白き所であります。從て動物に於ても高等動物には山猫は非常に多く、黃鼬にはワタボシカブリ、鳥類にはナミエゲラ(方言キタキ)、ミヤマシヤウビンある等餘程内地とは趣を異にすれば、定めて昆蟲も面白きものがあるうと存じます。中にも藤吉螢に就ては秋季非常なる壯觀を呈しますから、

藤吉螢の圖



私共は初め螢は全く秋出づるものにして却て春出づるのを不思議の様は考へました。三十二年に渡瀬博士の依頼より採集して送りましたに、春採集したるものは内地に普通なる源氏螢、平家螢ありしも、秋に送りたるものは非常に異なりて、解剖の結果皆雄にして支那東海岸地方にて採集せしものと同結果ありし由。然らば其雌は如何なる場所如何にして棲息し居るやと就ては其當時一の疑問でありましたが、或日私が植物採集の爲、當島有明山に登りました歸路、黄昏小川の流に沿ひて、禾本科植物あるトザンバに登りて切りて切りに光火の明滅せるものがありましたか、之れ螢の幼蟲ありと思ひて採集し、歸りて能く調査したるは、完全なる複眼を備へ、其他の点も於ても成蟲なるもの、如くありました。故に之が調査を乞はんと早速渡瀬博士の許に送りましたに、調査の結果、意外にも此の無翅螢は秋季盛に空中に於て光火を發する所のもの、雌なることが分り、又其産卵するを認めましたは三十四年であります。而して此雌の光火は明滅するも、雄は常に非常なる光度を有し、三四頭之を集むれば書籍位は讀むこと得ます。其分布は支那の東海岸より朝鮮地方に亘りて居るから此地方より

擴まり來り、我が對馬や臺灣等にも居るのであります。併し朝鮮の北海岸元山津地方に棲息し居るも

のは、未だ何種なるや不明に屬して居ります。而して又此の藤吉螢の雌は躰が非常に大きく太りて、其最も小なるものにては長さ一インチ位あります。翅は退化して只痕跡を止むるのみ、舉動頗る不活潑にして、殆んど生殖の用を成さんが爲に出來て居るもの、如くで、常に禾本科植物類の葉に止まり、頭を地面に、尾端を上に向け、尾端より異様ある光を放ちて雄を招きますが、配合者を得れば發光力を失ひます。雌雄の割合は雄三十乃至四十に對する雌一頭位なれば、雌雄淘汰の結果、さてこそ雄は壯觀なる光火を發するに至りし次第でありませう。發生の時期は九月中旬より十一月初旬頃迄にして至て不規律である、一雌蟲の藏卵は七八十粒ありて甚だ大きく、蘚苔類のある濕氣多き所に産附し、産卵後一週間を経れば其卵は黒褐色を帯びて約二週間に孵化し、幼蟲は蝸牛を食し、大さ一分内外まで其儘越年し來春充分成長して蛹化するものであります。此成蟲は各地に於て往々聞き傳ふる所の螢合戦と云ふ如き事は奇きものと見え、未だ一度も見聞したる事なきは、雌蟲の翅の無きが爲めでありませうか。尙是等の螢は就ては渡瀨博士より近々詳細なる發表があるでござらませう。



◎昆蟲雜信 (其一)

岩手縣 鳥羽源藏

○夜あぐ蟬 夜鳴く蟬のありやなしや余は深くも研究せず、又夜間蟬の聲をき、しと云ふ人あれど何蟬あるかを確めしを聞かざりき。然るは昨年飼育箱にチツチゼミを入れ置きしは、夜間人靜かなる一室に於てチツチ〜と鳴き出てしは、晝と思ひし故か將九月夜とでも思ひ違ひたるにや、想ふに月夜には稀に鳴くものあらんか、此蟬は本邦所産中の小形種の一にして、吾か地方には最も多き種なりとす。昨卅五年十一月十三日に猶この蟬の鳴聲をきけり、之れ恐らくは蟬類中最終まで鳴くものならん。

○エダナ、フシムシの食餌 形態の奇狀を以て、標本箱内に在りて先づ目につき易きは竹節蟲科の昆蟲なるべし。体形何れも木枝に酷肖せるを以て、斯學者の珍とする所なり。余は曩に屢々竹節蟲を捕へたれど、幼蟲やら成蟲やら何時も其識別に苦めり、之れ彼は他の昆蟲の成蟲の如く羽翅を生するこ

となければなり。然してたとへ幼蟲と知るも、食草の不明なる故飼育を試みて十分老成せしむるの便を欠き居りしが、昨年彼に種々の植物を與へ、遂に苹樹の葉を嗜食するを覺りて一頭を飼育し、又同年十一月十一日更ニ野外に於て一頭を得しよ、直ちに圖の如き卵子を産出したるなり。依て共に飼育箱に養ひ十分成長せしめしに体長三寸三分五厘とあり、觸角は前肢より長きこと圖(第十二版一圖)を見るが如しこの蟲枝上に靜止するや、時々前肢を頭上に擧げて合掌するが如くにして動かざるなり。体色は初め褐色にて綠色を帯びたりしが、落葉の候に及びては黒褐色に變じて、愈々木枝の如くなれるも奇なり。苹樹の葉を食するは據り考ふるに、この昆蟲は野外に在りては薔薇科植物たるズミ或はオホズミの類を食するなりん。卵子は青灰色にして恰もジユズダマ *Coix Lacryma Jobi*, L. の色澤のそれに似たり、二頭産む所の總數九十二個なれども、一頭は若干個を野外に産遺せしものなれば、一頭の産數不明に屬すれども四十六個以上なるべし。

○クビキリパッタの越冬 昆蟲類中は嚴冬を凌ぎて安全に越冬するもの、多きは今更いふの必要なければども、本年三月一日午後五時、庭前にて發見せるクビキリパッタ(名和氏のツユムシ? 出品目録の七五三、松村氏のツユムシは又別種なり)は觸角は二本共過半を折損し、右の後脚の腿節以下を失へるも猶よく生命を保持して靜かに歩行しありき。我が寒地に於てこの種の越冬せるは余の最も珍とする所あり。

○オホヲナガバチの産卵の方法 オナガバチや馬尾蜂の雌の産卵器の長さを見ては、一般の世人も奇蟲として珍重する所なるが、其産卵器の説明をさして一層奇異の感を懷く者多きも無理ならず。この類の産卵器は、生活せる際は中央針を、兩側の二針は其被鞘とありて之を抱き挟み、一本の觀を呈すれども、乾燥の標本に於ては三本に分離せるものなり。一昨卅四年の晩夏、妹等の大聲に余を呼ぶを以て走り行き見しに、オホオナガバチの松材の皮に靜止して、其小孔を切りに圖(第十二版二圖)の如き状態にて突き探し居るありけり。余は其奇狀を目撃して眞に面白く思ひ、今猶其狀の髣髴として目前に迫せるの感想あり、彼は多くの小孔を一より二と熱心に挿し試みつゝありて、熱視するに孔内に挿入するものは中央針にまて、他の兩側の二本は裂けて三本鼎足の如くなり腹部を支持する事の妙なる驚かざるを得ざりき(大孔には三本を一束にして挿入するならんか)。餘り彼を熱視せしに、遂に飛揚せしめぬ。依て小孔部を靜かに切り取りつゝ、驗せしよ、内部淺くして卵粒を認めざりき。余頃日昆蟲生態學なる書の挿圖を見しにオナガバチ一種の産卵狀を示せるものあり、余の見たる狀と異なるを以て茲に圖

する所以なり。想ふに彼の馬尾蜂に在りては産卵器の長さ五寸六分もあるを以て、樹上に静止して使用困難なるべければ、飛翔しつゝ、孔内へ挿入するなるべし。

○キスデカミキリの害 當地方近年葡萄を栽植するもの多し、然るに新芽伸長して葉片開展し果園新緑の美を装ふの時に當り、處々の葉片日毎衰弱して新莖又萎凋の不幸を遇ふこと多し。就て莖部を檢せば、小形の天牛科に屬する幼蟲の内に潛み、皮間に於て莖を噛みまはしあるを發見するなり。このものは圖の如き形狀にして頭部至て小さく、却て前胸は膨大して頭部の觀を示し暗赤色なり、翅鞘黑色よし淡黃の線條あると圖(第十二版三圖)を示せる如き成蟲となる、名稱はキスデカミキリ(*Xylotrichus pyrrhoderus*, Bates)なり。九月上旬頃産卵するもの、如く、翌年八月中羽化す。この害蟲は他日葡萄の大害蟲の一として大に恐るゝの地方あるべしと信ぜ。冬季に於て贅枝を刈込みて燒棄し、八九月の頃成蟲の捕殺を行ふは大にこの害蟲の蕃殖を防ぐに足るべし。

○發音する小蛾 鱗翅目中の昆蟲には鳴聲を發するものは其例少なきが如し、余はシモフリスマメを捕へたる時其腹端の剛毛を物体に摩する時に當り一種の音を發したるを聞けるのみなりしが、本年七月十四日午後六時二十分芋樹園内に於て捕へたるトラガ(*Eusemia japona*, Motsch.)は上下に飛揚するときは切りよセツチ、リツチくゝの如き音聲を發するものなり。初め其聲をきし時は直翅目の或るものか、或は蟬類の或小形種の枝上に静止して鳴き居るものと思ひ、靜かに鳴聲を發する個所を探かし、よ飛翔しつゝ鳴けるこの小蛾を獲たり。前翅淡黄色にして黒條を圖(第十二版四圖)の如く散し、外縁の半ばより後縁の方面には濃き赤色の斑線ありて頗る美なり。後翅の全面濃黄色なり。腹部の下面を見れば第一環節に當り明瞭なる發音器を有し、後脚の基部併に腿節は其上被となれり、一寸蟬類の發音器に似たれども其構造も發音法も蟬類とは異なるものありと信ず、されども只一頭を獲たるのみなれば當分詳細の調査を缺けり。嘗て本誌六十五號に齋藤啓二君の記されし花布紋蛾といへるはこれにあらざるか。

○シラヤマギクの蟲癭 シラヤマギクは山野に普通なる植物なるが、昨卅五年十月一日に得たるシラヤマギクの葉片は圖(第十二版五圖)の如き蟲癭五個を生せるを見たり。其狀宛然芽の將に伸長せんとする如き觀ありき。就て剖き見るに、膜翅目に屬する小蟲の蛹の潜めるを知り得たり(其後成蟲を得るの便を缺けり)。某植物書に不定芽の例証として、シラヤマギクの葉よりも芽を生ずる旨明記せり。恐らくはこの種の蟲癭を誤認せるにはあらざるか、暫く疑を存す。

◎六足蟲彙纂 (亥の巻)

在東京 長野菊次郎

(二十九) 日本に於ける昆蟲採集。今こそ東京より上等のホテルも出来たれ、余が日本より遊びし頃、疊の上に寝ぬる様の不快なることもござせで、外國人に懇切なりしは、獨り精養軒のみなりき。然れどそれさへ今は飽き果てぬ。余は五日間宿の窓より、引潮につれて築地の海も流れ入るいと穢き溜水を眺めつゝ、かゝる低地に長居したらんには、何時しかマラリア又は他の病氣に取りつかるゝは必定なりとの恐を抱きければ、山地へ赴かんと決心をぞなしたりける。山とは如何に、そは國の内部も聳て緑の色に装はれ、雲の白帽を戴きて噴烟の響の遠雷にまがふ有名な山ありけり。さて汽車にて行かるゝ限を馳せ、人力車を曳き、又は押す爲めには人夫を傭ひ、又採集者の一行をも伴ひ、やがて碓氷峠を越えぬ。十二年前までは、西より東に赴く旅人の、いと苦しみて過ぎ越え之所なりとかや。東京灣まで連続せる一帯の關東平野の上、三千フィートの位置に達せし時、日は西に沈み、烈しき雷雨は日の暮るゝと共々襲ひ來りぬ。やがて九時半の頃に及びて、雲間を漏るゝ月光に、泥濘深き路をたどりつゝ、行きしに、西の方より掃ひ來る夜氣の冷なる吸呼は、我等の顔を容赦なく扇ふぎ、今や我等は峠の頂上にあるなるべし。朦朧たる月の光に透し見れば、彼の有名なる淺間火山の偉大ある影は、近く我等の前に横はりぬ。そも此淺間山は、再三其附近數里の地を荒蕪に歸せしめ、殆んど彼のベスピアス(伊太利の火山)の巨大なるものと見るべし。我等は其夜日本の疊の上に寝ね、翌朝早く出發して、草葉に輝ける露の玉を踏み分けつゝ、追分さして野原を急ぎぬ。荷物は前に送りつゝ、我等は自然の艷美に圍まれて、逡巡の中に一日を暮しぬ。籬の内又は野の中に咲ける數種の百合の花や、艷麗を競ひ、嬌態を闘はす數百の花弁は、芳香を以て空氣を薫らしめ、其所にも、此所にも、蜂蝶の飛びかふを見るべし。空に旗を翻がへすが如き黒雲は、晝夜をわかず淺間山の火口を噴出して、我等の頭上を掠め去れり。五種の豹文蝶は灌木の傍、谿川の上に銀色の翅を閃めかし、大なる黒鳳蝶は牧場を横りて飛翔せり。或は青きシジミテフ又は輝けるベニンソミ、其他ヒラドシテフ類の十數種は、低き灌木の上よ、或は草の間に戯れけり。最も熟練なる太郎と云へる採集者は、大得意よて叫びぬ。且那さん此種は横濱にては見つかりません。且那さん此種は東京附近よては捕まりません。かくの如く、我等は米國人にも、日本人にも、同様に目新しき種類をか集しつゝ、太陽の西山を搗く頃まで、山の裾野をさまよひけり。かくて雲のとばりは夕日に照りさへて、眞紅の色を現はし、紫の色を生ずる頃、我等は追分の道の邊の旅人宿の前庭に歸り着きぬ。扱一週

間此所を本據として採集したる報酬には、千の蝶蛾及び二千の甲蟲を携へ歸ることを得たりけり。(ホルランド氏の蝶譜)

◎昆蟲に關する隨感隨筆 (第六回)

昆 蟲 翁

(卅九) 蟲聲に依りて結霜の有無強弱を知る 毎年十月頃迄は毎夜蟲聲(普通に於てコホロギ、エンマコ

ホロギ、ミツカドコホロギ等)を聞けども、一度結霜せば當夜よりは殆んど蟲聲を聞かざるに至る。然れども結霜の時期遅れ且つ其度強ければ、一度に全く蟲聲を聞かざるに至る。是に反して時期早く、且其度弱ければ多少の蟲聲を減ずるも全く止むとなし。是れ蟲聲の有無、其強弱の程度に依りて結霜の強弱をも知るとを得るなり。此記事は十月末日の執筆にして、當時は全く蟲聲を聞かざるを以て、試みに岐阜測候所に問合せたる所、結霜は十月十五日、廿日、廿一日、卅日の四回ありたりと云ふ。

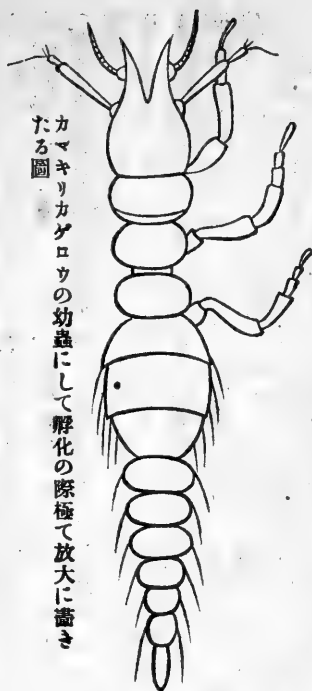
(四十) 冬季昆蟲採集の利益 普通世人の想像に依れば、害蟲は自然に湧出するもの、如き感を抱きて春季に於て始めて蟲類の現はれて漸次増殖せ、夏季尤も眞盛を極め、秋季に到りて減少し、冬季に於て全く滅盡するもの、如く思ふを常とせり。故に害蟲驅除を勵行するも偶然説を主張して熱心に従事するもの極めて少く、寧ろ害蟲發生は偶然なれば打捨置くも自然に消滅するが如く思考せり。或は害蟲發生は到底人意の及ぶべきものにあらざるを以て寧ろ神佛の加護を請ふより外がしどて、除蟲の神符を田圃に建て、恬として人為驅除を願るものなきに到れり。是れ結極冬季昆蟲が如何にして經過するものあるや、知らざるに原因せり。是れ仮令春夏秋の採集を廢するも、寧ろ冬季の採集に勉めなば如何に昆蟲が越冬し得るやを容易に知るとを得て其効果の不尠にあらざるあるべし。現に昨年二月、岐阜縣昆蟲學會主催となりて冬季採集の昆蟲展覽會を開設し、如何に利益を得たるや、又本年五月、愛知縣寶飯郡小學校冬季採集昆蟲展覽會の結果は如何、實に意外なる害蟲の意外なる所に潜伏し居るを認めたる等一々枚擧に遑あらざるなり。自下大ひに夫々準備を爲し、一月乃至二月中に於て越冬の昆蟲を採集するは、尤も利益あること信するなり。是等のことは本誌上に屢々記載したることあれば、宜しく参照ありたし。

春夏秋冬に於て昆蟲の増減する有様を示す所の圖



(四十一) 鳥胃中の昆蟲 鳥胃中の昆蟲を調査せんと欲して、解剖したるに其結果次の如し。十一月二

日カケス一頭中直翅類(バッタ)一、小豆澤山。モズ一頭中直翅類の卵三十五塊、甲翅類一。同一頭中直翅類二、甲翅類二。トビ一頭中蛙八、イナゴ四十七、蠅一。烏一頭中甲蟲一、甲蟲足四本、甲蟲上顎一、
 糲九、麥四、瓜の實二、魚の骨二。十一月六日烏一頭中オナガウジ十七、ソバ、エノキの實。
 (四十二)擬螳螂蜻蛉の幼蟲 カマキリカゲロウの幼蟲は、外國の昆蟲書を見るに蜘蛛の卵塊に寄生することを記載せり。而して昆蟲世界第五十九號(卅五年七月發行)口繪第八圖も示す所のものに就て、翁が日記よは次の如く記載せり。「明治十七年七月廿七日、伊吹山絶頂の雜草中にて一頭を捕へたり。而してマツチの箱も收めたるに、一兩日中に、箱中よ於て五、六百粒の卵(卵子の形狀は八圖のイ及びロに於て示せり)を産み直に死せり。卵の大きさ長二厘強、幅一厘許の橢圓形にして、二厘許の柄を持つこと恰もクサカゲロウの卵に異なることなし。産みたる卵塊の狀態は、一見黴菌の如くにして密生せり、然し卵子と卵子とは接することなし、其高さ一様あれば殆んど一平面をなし、其色は淡黄色なり、而して八月十日頃孵化したり、即ち産卵後約二週間なり。幼蟲の色は淡褐にして少く胸部に黒色を帯び、体の長さ四厘許なり」。廿年八月十三日御嶽山麓即ち飛騨國益田



カマキリカゲロウの幼蟲にして孵化の際極て放大に畫きたる圖

郡小坂村字落合小字暗に於て捕へ、其後廿五年八月某日伊吹山よて一頭捕へたるのみよて、該種は極めて僅少なりと信す。

(四十三)害蟲驅除の良法如何 往々害蟲驅除豫防の簡便方法を質問する人あり、深く尋ねれば不便の方法をも知りざるの人なり、到底是等の人に對して如何なる良法を教ふるも、殆んど無効に屬せり。目下の所は良法、便法を需むるよりも、寧ろ昆蟲學の思想を普及して組織を完全にせば、驅除其法の完全を得るよりも其効を奏すると多し。故に仮令茲に良法あるも、組織不完全なれば得る所殆んどなしと云べし。

◎昆蟲小感 (二二)

岡山縣赤磐郡可具村昆蟲調査所 福井克雄

昆蟲分布と小學生徒の昆蟲學研究の一方として分布調査の必要なるは、今更喋々を俟たざる所、夙に名和昆蟲研究所は、其一部として全國の昆蟲分布調査に従事し、百方研究調査に怠なし、斯學界の爲め、誠に慶賀すべき次第なり。殊に蝶類分布の如き、小森氏擔當せられつるもの、如し。さらば地方同學の士は須らく細心以て精密なる採集と、緻密なる觀察を持ち、晉に其地の分布のみよても調査おらんことを希望す。勿論一地方と雖ども、よろしく其が發生時季を誤らざる様、出來得る限り廣く採集を努め又能く其地勢と、植物分布の有様とを考察し、依て以て充分採集に注意を要すべきなり。故其地に同學の士なく、晉に一己の採集觀察のみにては調査すること極めて難し。茲に於て平斯學研究者は同志の者をつくるか、或は他に方法を設けて助力を仰ぐを要す。斯くせば假令研究者は一人なりとも、比較的容易に調査し得らるればなり。余は郷里に歸省以來、日未だ淺く、凡我が地方の昆蟲界に極めて疎く、蝶類中稍々普通種たるゴマダラテフ及びコムラサキテフは、地勢上本郡も分布せらるらんと推想し、百方採集に注意したるも、昨初秋より今日まで、未だ一頭だも手中に入らざりき。余思へば、是れ此地に産せざるか將又採集の範圍狭きが爲めかと種々考慮を回し、後日の研究採集を積むに如かずと爲せしよ、偶々今夏、本郡某高等小學校の希望により、時々昆蟲談を爲す可き依頼を受け、恰も暑中休暇たる、七月卅一日の閉校式に臨み、八月十五日復習日に出校の際、必ず蝶類の何たるを問はず、一人に付き二三種づゝ採集携帯すべき問題を與へ置きしよ、其採集物中に前記二種の蝶類我地方に發生せるを知り得たり。されど其が發生地は、我が郷里を距る二里余の山陬、さば言へ郡内是れが分布を確めたるは、そも亦小學校生徒の力與て大なりと言ふ可し。昆蟲學と生徒の關係、ただ是れのみならずや。蚊の調査を希望す。蚊は昆蟲學上及び衛生學上研究す可き價值あるを信す。殊に麻拉利亞病源の如きは、ハマダラカ其の張本者たり。隨て其他これに屬する種類をも調査するを、又頗る必要の事に屬す。而して醫學に於ては専ら病的關係を調査研究し、主として病害の蔓延なからしめんことを努め、昆蟲學に於ては多く習性經過を探究し、驅除豫防するを要す。余淺學なれ共、名和昆蟲研究所在學中少しくこの調査に従事したる事ありと雖ども、素より葦才の余目醒しき發見もあざりき。然れ共ヤブ蚊の如きはそが産卵の場所並に該族にして同類相食ひ等の事實を確め得たるは、また幾分か茲に注意したりし結果ありと自信す。されど悲哉、一度研究所を去て以來、兎角百事猬集し、又在所研究と同日の比にあらず誠に遺憾に堪へざるあり。去年十月より一の水溜めに、ヤブカの幼蟲幾百千棲息しけるが、冬期は如何

にせよと觀察しけるに、遂に其儘今春まで生活し、幼蟲にて越冬せし事を確めたり。然れ共未だ一疑問として、昨冬は平年より温暖なりしが爲めなるや否や、宜しく本年の實見を積むの必要あり、刻下當さに草葉凋落し、蚊虻又冬眠の準備をなす、讀者請ふ是等の研究を祈る。

螟蟲驅除と地方青年

螟蟲と浮塵子二種、何れを怖る可きやと地方農家に質せば、忽ち浮塵子なりと答へんのみ。是れ曾て一大打撃を受けたる後の農家の害蟲心なり。此の語は各地同しと信ず。然れども

稻作の一大害蟲は、浮塵子よりも螟蟲ありと言ひ、驅除の必要を縷々數千言陳べ立つも、農家は左まで感ぜざるなり。故を以てこれ等の驅除稍もすれば等閑に付し去る嫌を免がれず、枯穂苜採り容易に行はれ難し。偶々本年、本郡可真村にて、今夏始めて地方青年會の組織成るを幸ひ、森崎同村長之れを利用し、枯穂苜採の有効を青年に談し、席上一致を以て各部落の農家に觸示し、期日を定めて苜採りを實行したるは、農家不平なく従事することを待たり。

附記、本誌前々號雜錄欄内余の螟蟲に關する記載中、去月二十二日とせるは八月二十二日なれば茲に訂正す。

◎ 螟蟲驅除獎勵展覽會準備記事 (第五)

蟲の家主

(二五) 螟蟲驅除記事の増加

卅年浮塵子大發生の爲世人は始めて蟲害の恐るべきを感ずると同時に、

害蟲なるものは只浮塵子あることを知るも、未だ他は害蟲あるを知らず。故に浮塵子にあらざれば害蟲にあらざり、害蟲は即ち浮塵子なりと信せり。然れども稻に對する害蟲の大將に擬すべきものは螟蟲にして浮塵子は副將に相當す。又之を病に例ふれば螟蟲は慢性病にして、浮塵子は急性病あり。急性病は自己共に注意するも、慢性病に至りては其病症の恐るべきを知るも、自然怠り勝となりて結極一命を失ふに至るあり。故に第一此際浮塵子の急性病を所理すると同時に、久しく患ひ來りし螟蟲の慢性病をも全治するに到らしむれば、國家の命脈を無窮に傳ふるを得べきと信するの餘り、微力ながらも其方針を執り來りしが、此頃に至りては漸次螟蟲に關する記事の増加したるのみならず、然も尤も有益なる成績を續々發表せらるゝに到れるは、實に幸福と言ふべし。然るに目下の所、新聞、雜誌等に掲載せらるゝ螟蟲に關する記事のみにても、能く當昆蟲世界の紙數を悉く満して尙餘りあることを信せり。此分までは遠からず大將たる螟蟲を斃すに至るべきか、讀者諸君以て如何となす。

(二六) 渡邊講習生 螟蟲驅除視察報告

第二回 岐阜縣長期害蟲驅除講習生 渡邊樵四平氏は、七月六日、

り同廿二日迄岐阜縣惠那、土岐の兩郡へ螟蟲驅除監督の爲め出張し、其際視察したる所の報告は如左、
 惠那郡 本郡は年々螟蟲被害甚しく、昨年の如きも之が爲め僅に二割以上の減收なりし故に農家一般に螟蟲驅除の等閉に附す可
 らざるを自覺したるを、一は其筋よりの熱心なる督勵により、今年の如きは、去る五月、郡内町村長會議に於て螟蟲驅除法とし
 て、苗代田に於ては必ず五日目毎に採卵を爲すと、時期を見計ひ誘蛾燈を用ふるも、農家は必ず一箇以上の捕蟲器を鶏し苗圃にある
 螟蛾を捕殺すると、苗代田には所有者の氏名を記したる札を立つると、螟卵及び蛾は各町村農會費を以て買上を爲すと、之等の驅除
 には農家は勿論小學校兒童を利用すると、植付け後と雖も採卵を爲すと、心枯及び白穗拔取を勵行すると等を決議し、各町村は非常
 なる熱心と決斷を以て、町村内を數區に別ち、各區に驅除委員若干名を設け、委員長之を監督して決議事項を勵行し、中にも採卵
 法は一層の注意をなし、小學校兒童にも放課後又は日曜日等に共同驅除を爲さしめ、教員之を監督せり。又心枯及び白穗切取り等も
 熱心に之を勵行し、螟蟲驅除としては殆んど完全無欠とも云ふべき程なりしを以て、今秋に至り其効空しからず、全部殆ど螟蟲の被
 害を認めざる程なりき。併し螟蟲買上げを爲したる町村内には、多少の弊害ありし箇所二三を見受けたり。之に反し阿木村の如きは
 買上法に換ふるに獎勵法則ち採卵及捕蛾數の多寡に依り之を一、二、三等に別ち、小學校兒童には硯、墨、紙、筆等、農長には拾錢より
 五拾錢迄を各等級に依りて之を賞與したるに、僅の費用にて却て多くの費用を以て買上を爲たる町村より遙に好成績を擧げたるを認
 めたり。之等を以て見れば、螟蟲驅除法としては採卵の最も効あると、賞勵法の買上法に比して弊害少く、僅の費用にて其効果の大
 なるを認むるに難らず。本郡は此度の白穗切取の如きも、郡内を三區に別ち、郡役所より左の如く各區に一人づゝの監督を出し
 先九月中旬より之を施行し、今十月十二日迄に全部完結せり。三區の町村名及び監督者次の如し。(一)甲區村尾農事巡回教師擔當
 苗木町、福岡村、付知町、加子母村、坂下村、蛭川村、笠置村、中之方村の八ヶ町村。(二)乙區渡邊善記擔當、落合村、中津町、坂
 本村、大井町、長島町、東野村、阿木村、本鄉村、武並村、三郷村の十ヶ町村。(三)丙區伊藤郡書記擔當、岩村町、遠山村、鶴岡村
 陶村、吉田村、明知町、三濃村、串原村、下原田村、上村の十ヶ町村。本郡陶村宇猿爪の一部に二畝歩計りの田面白穗を以て滿され
 たる箇所ありしを以て之を取り調べたるに、多くはホクビイモチの爲なりしが、其内一割位は螟蟲被害の爲に白穗となりしものあり
 し故、村長及び持主立會の上悉皆之を刈り取らしめ、概は稻拔にて抜き落し、葉は之を槌にて打ち、螟蟲を壓殺せり。其葉一百本に
 付き取調べたるに、内三十三本は健全のものにして、五十四本はイモチの爲に枯死し、残り十三本は螟蟲被害の爲なりき。其莖中に
 居る螟蟲數を取調べたるに、次の如き結果を顯せり。

明治廿六年十月十一日調べ白穗一本中に居りし螟蟲數

稻莖 第一 第二 第三 第四 第五 第六 第七 第八 第九 第十 第十一 第十二 第十三

最大 六〇 五、五 六、五 六、五 五、〇 七、〇 六、〇 五、〇 四、五 六、〇 五、五 六、五 六、〇

最小 三、〇 四、〇 〇 五、〇 三、〇 〇 五、五 三、五 〇 〇 五、〇 四、〇 〇

螟蟲數 一〇 八 三 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

計白種十三本、螟蟲五十九、一本中に居りし螟蟲最も多きもの十六、最も少きもの一、十三本平均一本中に四頭五分強、最も大なるもの七分、最も小なるもの三分。

土岐郡 本郡も探卵法、心枯及び白種切りを勵行せしにも係ず、惠那郡に比し稍被害の多き感あり。郡吏員は旅費欠乏の故を以て警察に之が監督の依頼を爲しありしが、多治見及び土岐津の警察署長は非常なる熱心を以て、次の日割にて郡内一般の白種切りを勵行しつゝありたり。十月十日土岐津町、泉村。十一日明世村、日吉村。十二日餘戸村、土岐村。十三日稲津村、瑞浪村。十四日肥田村、多治見町。十五日市ノ倉村、笠原村。十六日妻木村、石下村。十七日駄知村、曾木村。十八日鶴里村。本郡は一般に農事より工業の發達せし所にして、從て害蟲驅除等は一向冷淡にして、之が勵行は非常に困難なりとの評ある郡なるにも係らず、警官諸氏の終日奔走監督の結果、此度は充分なる驅除の効果を奏したり。多治見町字外ノ島は螟蟲被害の白種割合に多かりし爲め、十四、五の兩日間共同して之を切り取らしめたり。他の町村は多少の差支ありしにも係らず、豫定日限内に悉皆驅除し終りたり。

(二十七) 吉野郡螟蟲卵塊懸賞方法 奈良縣吉野郡農會事業として、卅六年度に螟蟲卵塊懸賞方法を設けて好成績を得たりし由なれば、今左よ之を掲載す。

一等賞玄米四斗俵(十二個)、二等賞麥四斗俵(一個)、三等賞石油二斗(三個)、四等賞石油一斗(三個)、五等賞蠶座四十枚(五個)右の外抽籤洩れのものには一等上半紙(三帖宛)、二等上半紙(二帖)、三等上半紙(一帖半)、四等並半紙(三帖)、五等並半紙(二帖宛)、授與す。抽籤し得べきもの一等券附與五百九十五枚、二等券附與五十枚、三等券附與百卅一枚、四等券附與百四十八枚、五等券附與二百卅四枚、計一千百五十八枚之を町村別に區分すれば、

町村名	市	野	淀	市	野	白	賀	宗	國	小	龍	中	龍
一等	1	6	6	208	308	54	6	1	1	1	1	3	7
二等	1	6	6	15	13	1	1	1	1	1	1	3	3
三等	1	12	39	43	22	1	1	1	1	1	1	4	9
四等	1	18	19	39	29	1	6	8	3	1	3	6	13
五等	9	43	24	49	49	2	14	2	7	1	1	1	11
合計	11	85	286	454	167	9	20	15	10	3	17	27	54

採卵塊數 天竺 六元七 四三三 七四五 一〇五〇 一五七 一六〇 一〇三 一九〇 四八五
右の外南芳野村、天川村、野迫川村、大塔村、十津川村、下北山村、上北山村、川上村、中莊村、四郷村、高見村の十一ヶ村には稻田至つて少く採卵な難りしと云ふ。今採卵塊數を各學校別に區分せば、十四万四千七百十三塊(阿賀賀尋常小學校)二万九千五百五

四塊(下淵尋常小學校)、二万六千八百八十五塊(檜垣本尋常小學校)、十三万九千六百八十三塊(大庭高等小學校)、三千八百六十六塊

抽籤表

抽籤券 何等

裏

採卵

塊

明治何年何月何日
何村大字何何ノ某

ふ以上は學校にて採卵せし者を掲げたるが學校教師が少しく熱心に生徒に奨勵さるゝ否と其地方害蟲驅除の上に於ては頗る影響すべきなり。

(二八) 二化螟蟲驅除の注意

静岡縣農會にては二化螟蟲驅除の注意を、左の如く記載して印刷配布せられたる由。

(第一)各郡農會長は時日を定め螟蟲被害の稻莖を一齊に薊り取るべし。(第二)螟蟲の喰枯したる稻莖は直に必ず薊り取り、若し捨く時は他の善良の稻莖に喰込むに付、其前に於て薊り取りを實行すべし。(第三)被害莖は根元より薊り取り、稻莖は一處に寄せ集め螟蟲を打殺し、後乾燥の上堆積肥料の原料に成すべし。(第四)薊り取りたる稻莖を道路畦畔等に捨て置くべからず。



◎博覽會出品害蟲標本解説書(三等賞)(續) 静岡縣 神村直三郎

一、排列法 排列の順序は種類の多少によりてこれを定む、即ち鱗翅類尤も多數を占むるを以てこれを第一とし、次は鞘翅目、次は有吻目、次は直翅目、雙翅目、膜翅目とす。其主とする所は、成蟲に有るを以て、成蟲は雌雄を完備し、一も之を欠きたるの種はあらず。卵、幼蟲、蛹、繭の如きは、得るに隨て成蟲の次よ之を添ふ。且敵蟲を有するもの亦おれを添ふ。従來の排列法を見るに害蟲標本として一箱一種を限りこれが加害の狀、潜伏の有様を見せたるものなきよならず、されど此法にては、一箱一種なるが故に十箱にて十種の余を收むること能はず、斯くて數十種を調製せんか、到底經濟の許さる所なるを以て、失費少あくして其種類を多からしめんとの考案より、予は一箱に多數の種類の種類を收容すると

となしたり。其内容左の如し。

第一函、柑橘の害蟲アゲハノテフニ頭、幼蟲二、蛹一、同寄生蜂アゲハヤドリバチ及外一種成蟲三頭付、柑橘の害蟲タロアゲハニ頭、幼蟲一、蛹一付、胡蘿蔔の害蟲キアゲハ春生(極めて小形)ニ頭、同夏生ニ頭、幼蟲一付。

第二函、蚕臺の害蟲モンシロテフニ頭、幼蟲一、蛹一、寄生蜂キマユヤドリバチ成蟲一、同繭一付、椶の害蟲ゴマダラテフニ頭、茸科植物害蟲モンキテフニ頭、椶及柳の害蟲ヒオドリシテフニ頭、十字科植物ノ害蟲スダグロシロテフニ頭、牛蒡の害蟲ヒメアカタテメテフニ頭、樟科植物ノ害蟲アオスチアゲハニ頭、同幼蟲一、蛹一付、稻の害蟲一文字セ、リニ頭、同幼蟲一、蛹一、繭一、同ヤドリ

パイ成蟲一頭、蛹二、同ヤドリバチニ頭、豆科植物害蟲キテフニ頭。

第三函、薯蕷の害蟲スロメテフニ頭、同ヤドリパイニ頭、葡萄の害蟲コスロメテフニ頭、青芋害蟲セスジスロメニ頭、同幼蟲一付、ヤドリパイニ頭、柳の害蟲ウチスロメニ頭、幼蟲一、ヤドリバチニ頭、甘藷及朝顔害蟲エヒカラスロメニ頭、蛹一付、胡麻の害蟲、メンガタスロメニ頭、山梔子害蟲大スカシバニ頭、蛹一付。

第四函、桑の害蟲キンケムシニ頭、同卵一、繭一、ヤドリパイ一、同蛹付、桑の害蟲クハケムシニ頭、同蛹一付、穀斗科植物の害蟲毒蛾ニ頭、繭一付、ひさびさの害蟲ホタル蛾ニ頭、同繭一付、桃の害蟲モリスロメニ頭、櫻の害蟲シリアゲケムシ蛾ニ頭、同蛹一付、松の害蟲マツケムシ蛾ニ頭、同繭一付、同ヤドリバチニ頭、同繭二付、苧麻の害蟲フクラスロメニ頭、桐の害蟲キノハマキムシ

蛾ニ頭、酸漿の害蟲ホホツキシシクヒムシの蛾ニ頭、同幼蟲一付、稻の害蟲コナラハマキムシ蛾ニ頭、同蛹一付、同ヤドリバチニ頭、柳の害蟲ヒメカレンテフニ頭。

第五函、桃及櫻の害蟲カレンテフニ頭、卵一、幼蟲一、繭一付、茶樹の害蟲チヤケムシ蛾ニ頭、竹の害蟲タケケムシ蛾ニ頭、同幼蟲一、蛹一、繭一付、茶樹害蟲トンボテフニ頭、幼蟲一、蛹一付、樟樹及肉桂の害蟲クノキノシヤクトリ蛾ニ頭、幼蟲一付、茶樹害蟲

チヤンハマキムシ蛾ニ頭、柿の樹害蟲キノカバテフニ頭、同幼蟲一、繭繭二付、同ヤドリバチニ頭、桑の害蟲クハシキクトリ蛾ニ頭、第六函、梅及桃の害蟲ウメケムシ蛾ニ頭、同卵一、蛹一、繭一、同ヤドリハチニ頭、蓼藍の害蟲アインゾイムシ蛾ニ頭、同ヤドリバ

チニ頭、同繭一付、楊梅害蟲オマモバノキムシ蛾ニ頭、果樹害蟲イラムシ蛾ニ頭、繭一、同ヤドリバチニ頭、梅の害蟲ウメヤクトリ蛾ニ頭、繭一、繭一、桑の害蟲エダシヤクトリ蛾ニ頭、卵一、幼蟲二、繭一、繭一、蓼藍害蟲アインゾイムシ蛾ニ頭、桑の

害蟲トゲシヤクトリ蛾ニ頭、同幼蟲一、繭一ヤドリバチ一、同繭一、桑の害蟲クハノスキムシ蛾ニ頭、同ヤドリバチニ頭、稻の害蟲ニ化スイムシの蛾ニ頭、卵一、幼蟲一、同上タマゴメチ一、同ヤドリバチ二種三頭、桃實及柑橘害蟲モヒマダラ蛾ニ頭、幼蟲一付。

第七函、柑橘害蟲ホシカミキリニ頭、はしの害蟲ヤンノキカミキリニ頭、よりの害蟲ノコギリカミキリニ頭、葡萄ノ害蟲キンザサ

ムシニ頭、養魚害蟲ガムシニ頭、養魚害蟲ダンゴロシニ頭、松樹害蟲リバタケムシニ頭、蕪の害蟲アザミメムシニ頭、柳の害蟲

スパカミキリ二頭、儲の害蟲キマダラカミキリ二頭、同幼蟲一、大小豆害蟲マメハシメウ二頭、堆肥ノ害蟲サイカチムシ二頭、同幼蟲一付。

第八函、大豆害蟲マメコガネ二頭、儲の害蟲コフキコガネ二頭、儲及椎の害蟲カミカリムシ二頭、同幼蟲一付、大豆害蟲ヒメコガネ二頭、桑の害蟲クハカミキリ二頭、幼蟲一付、杉の害蟲スギカミキリ二頭、杉の害蟲四ガシスギカミキリ二頭、菊の害蟲キクス井二頭、桑の害蟲クハハムシ二頭、蓬の害蟲ヨモギハムシ二頭、茄子、馬鈴薯、酸漿の害蟲テントウムシダマシ二頭、柳の害蟲ヤナギハムシ二頭、獨活害蟲ウドノゾウムシ二頭、薔薇の害蟲ヒメクロオトシアミ二頭、蓼の害蟲アインサルゾウムシ二頭、標本害蟲ヒヨドリムシ二頭、小麥害蟲ケシコメツキ二頭、栗の害蟲オトシアミゾウムシ二頭、桃實及梨實害蟲チヨツキムシ二頭、鯉節害蟲カツチアシムシ二頭、桑の害蟲ヒメゾウムシ二頭、大豆害蟲コフキゾウムシ二頭、松の害蟲マツゾウムシ二頭、瓜類害蟲ウリハムシ二頭、柳の害蟲アオアムシ二頭。

第九函、稻の害蟲ツマゲロヨコバイ二頭、稻の害蟲オホヨコバイ二頭、禾本科植物害蟲アハフキヨコバイ二頭、薄の害蟲スィキアハフキムシ二頭、檜の害蟲グンバイムシ二頭、あひめがしは害蟲ツマゲロスケバ二頭、大豆害蟲アオクサガメ二頭、小豆害蟲アヅキガメ二頭、稻の害蟲ハリガメムシ二頭、大小豆害蟲サゲガメムシ二頭、稻の害蟲クモガメムシ二頭、煙草害蟲ゴマガメムシ二頭、茄

子科植物害蟲ホヅキガメムシ二頭、稻の害蟲マルガメムシ二頭、桑の害蟲アオバハゴロモヨコバイ二頭、薄の害蟲トビイロガメムシ二頭、大根害蟲ナガメ二頭、くさき害蟲アミガサハゴロモ二頭、樹根害蟲アブラセミ二頭、水産害蟲タガメ二頭、同卵一付、桑の害蟲ベツコウハゴロモ二頭、樹根害蟲ツクツクゴロシ二頭、樹根害蟲ニールセミ二頭、水産害蟲コオヒムシ二頭、卵一付、水産害蟲マツモムシ二頭。

第十函、禾本科植物害蟲クサキリ二頭、苧麻害蟲オンパツタ二頭、衛生害蟲ゴキブリ二頭、稻の害蟲イナゴ二頭、赤楊害蟲マルイナゴ二頭、大小豆害蟲エンマコローヤ二頭、禾本科植物害蟲クルマツタ二頭、衛生害蟲イヘバイ二頭、稻及麥害蟲カンボ二頭、松の害蟲マツノキイロハバチ二頭、同幼蟲一、同ヤドリバイ二頭、蛹二付、同ヤドリバチ二頭、蟻の害蟲カマキリタマゴバチ二頭、野蠶害蟲ナマ、ユナドリバチ一。

以上の名稱を實物の頭上に附記するに當り、其害蟲に係る百二十四種よつきては、一見觀者をして、其加害を悟了せしむるため、悉く被害植物名を記入したり。

一、保存法 保存法としては、第一保存箱の製造法なり。先づ桐製の外箱を造り、其底部に二枚の疊表を入れる。其疊表たる表裏より生漉の紙を以て張り、能く乾かして底に收め、其上を壓するため又箱の四週を二重になすために、底無しの内箱を容れて固着し、尙其内面より底部表面へかけ一枚の白紙を以

て張る時の、其疊の織目等現はれずして、大よ美術的よ出来上るなり。此底部に蟲体を刺し止め、名稱を附して、四週の溝中にナフタリンを多量に入れ置き、枠付のガラス蓋を以て密封し置く、これ予の保存法にして標本蟲及黴菌の害なし。

履歴 明治九年以來身は普通教育の職にあれど、常よ事業にあらざれば國は富まぬとの考より、明治十九年中、二宮尊徳翁の遺訓よ基き、報徳の社を居村よ結び、又帝國農家一致協會よ加盟して、現に權講師の任にあり。明治三十年度の浮塵子大發生に憤慨して、三十一年より昆蟲の飼育調査を始め、郊野山林を跋渉して、採集につとめ、明治三十三年岐阜市名和昆蟲研究所よて、害蟲驅除の講習を受け、三十四年夏期又同所よて、名和所長より親しく昆蟲學上の指導を受け、爾來今日に至るまで常に通信を以て疑義を質しつゝあり。明治三十三年以來、兒童を勸奨して、螟蟲、尺蠖、烏蠅等の害蟲を捕獲せしめて農會の事業を助け、又三十五年度には螟蟲、浮塵子驅除の唱歌を作りて兒童に唱謠せしめたり。明治三十五年十月三日静岡縣磐田郡物産評會參考品中に昆蟲標本貳箱を出品したるに、其參考品たるよも掲はらず、山田本縣知事より特よ褒狀を賜はる、其寫し左の如し。

昆蟲標本

褒狀

静岡縣磐田郡岩田村

神村直三郎

右ハ昆蟲ノ變体順序ヲ明瞭ニシ加フルニ其製作精巧有益ナル參考品ト認メ依テ特ニ褒狀ヲ授與ス

明治三十五年十月三日

静岡縣知事正五位勳四等

山田春三

一、効用 今回出品したる害蟲標本の効用を云へば、昆蟲は他の動物と異にして、其變体著しきものあるを以て、一般農民は申すよ及ばず、斯學研究者と雖も、其幼蟲成蟲の關係の如きは、往々にして誤ることなきにあらず、因て其有様を治く一見の下に悟つせしむる様つとめたり。又次には害蟲の多種よして、吾人に害を興ふることも隨て多く其割合鱗翅目、鞘翅目、有吻目に殊に多種を占むることをも悟らしむる効あり。第三には寄生蟲ありて天然驅除をなしつゝあることを示し、結局多數の産卵にて繁殖夥しきが故よ、驅除豫防の忽諸に附すべからざることを眼目とす。此効あるを以て、各級農會、農事試験場、山林局等の參考品とすし、又大小各種學校の教授用標本となすに足れり。

一、審査請求主眼 一、種類の多數を收容したること。二、昆蟲の變体を現はしたること。三、飼育によりて、多數の寄生蟲を發見したること。四、採集羽化の年月日及採集地名を蟲体の裏面に明記した

ること。五、被害植物を明したること。六、保存箱の製造法に注意したること。

◎揖斐郡小學校昆蟲寫生畫展覽會と紀念品贈呈

岐阜縣揖斐郡昆蟲學會

去る十一月十五日、揖斐尋常高等小學校内に於て本會秋季總會を開き、併せて郡内小學校兒童の昆蟲寫生畫展覽會を催したりしが、出品点数五百十三点に達し、又参考品は谷汲村有志者の寫生畫、西郡村名和裁縫女學校より紙折細工、毛糸細工等、鶯尋常小學校よりは兒童の採集せし稻蟲を儀助煮、茶菓子等に製して出品し、觀覽者に味はしめ、名和昆蟲研究所よりは不破郡垂井小學校兒童の昆蟲寫生畫、愛知縣寶飯郡小學校兒童の寫生せし昆蟲畫及刺繡等を貸與せられ、又本會より全國昆蟲展覽會に出品して一等賞を得たる分類標本、二等賞を得たる害蟲標本、大阪府農會主催の病蟲害展覽會より出品して三等賞を得たる害蟲標本、博覽會に出品して二等賞及三等賞を得たる害蟲標本、昆蟲標本等を陳列したれば縦覽人員數千人に達し頗る盛況なりし。又其際、博覽會出品に當り特に盡力せられし小森省作氏に對し紀念品贈呈式を舉行したり。今其紀念品に添附せし感謝狀を示せば左の如し。

明治三十二年本會創設以來、君熱心會運の振興を圖り、周密に研究して本會の事業を翼け、以て會の面目を保持するを得せしめられたり。

曩に本會、第一回全國昆蟲展覽會及第五回內國勸業博覽會出品の計畫を立つるや、常に君を推して調製の委員となす。君拮据勵精其囑托を全ふし、本會をして受賞の名譽を荷はしむ。之れ洵に君盡瘁の賜にして、本會の多とする處なり。

茲に本會は大理石製昆蟲彫刻置物一基を贈呈して、聊感謝の意を表せんとす。物素より薄けれども、情厚し、希くは君其意を諒し、永く紀念に存せられんことを。

明治三十六年十一月十五日

昆蟲學會々員 小森省作 贈

岐阜縣揖斐郡昆蟲學會々長 高橋俊益

◎昆蟲に關する葉書通信 (三十六報)

(二二九) 二化性螟蟲刈株中にて越冬す(山口縣大島郡蒲野村、財満宇市) 本年本郡に於ける二化性螟蟲も所々白穂を現出し、驅除せしも全滅せず、爲る翌年苗代に發生することならん。該蟲の糞糞中より

ありて越冬せることは、世人の能く知る所なれども、尙外界の爲めに左右せらるゝか、刈株中よて越冬すること彼の三化性螟蟲の如し。然れども彼の如く其數多からせ。余は本年此等に關し調査せしに、左の如き結果を得たりき。

種類 一坪株數

刈取期

一株本數

土際より刈取せしもの、刈株中蟄伏蟲數

土際より約一寸以下高く距て、刈取せし莖中

土際より約一寸以上高く距て、刈取せし莖中

中稻金時 四十九株

十月廿五日

十六本

二十頭

十頭

二十一頭

備考、土際以上の一莖中には數頭の群棲をなせども、土際以下の刈株中には必ず一莖一頭の棲息を認む。然れども只一回調査のこゝとなれば、尙研究を重ねて以て後日確報するこゝあるべし。(十一月九日附)

(二二〇)三備地方に於ける薄荷の螟蛉(廣島縣芦品郡岩谷村、橘高勉)

薄荷の大害蟲なる螟蛉

きては、本誌前號及前々號に、山田君及神村君の報告ありしが、今我が三備地方の狀況を述べんに、當地方は近年棉の癩作及藍作の減少と共に、薄荷の栽培非常増加し、本年の如きは芦品郡のみにても作付反別四百十一町歩以上(芦品郡農會調査)の多きよ達せり。然るに年々害蟲軍の爲めに被害を受けること少からず。之が主なるものハ蚜蟲、葉蟲、根切蟲、螟蛉等なるが、殊々螟蛉は年々猖獗を極め、之が良法のなきを以て農家の苦慮すること一方ならず、本年の如きは三備地方至る所葉澁病と共に猖獗を極め、最も甚しき所よては全く莖ばかりとなり居る有様なり。最も葉澁病豫防の爲めポルドー合劑を使用せしものには被害輕きが如し。而して茲に最も奇態なるは、此蟲よは數種の寄生蜂あるも、其中の微細なる一種は、一頭に寄生する平均四千五百六十二とは、實に驚かざるを得ざるなり。是れ一頭の母蜂の産卵せしものなるが將た數頭の母蜂の産卵せしものなるかよ就ては、昆蟲翁は數頭によりてなりと明言せられたるが、余も亦左の事項より考ふる時は、之に同意するものなり。

一、薄荷耕作地には無數の寄生蜂存し、之に觸るれば恰も米糖を散すが如し。
二、螟蛉の盛に食害しつゝあるものが、五分間に四五回も跡の上部を左右す。其度毎に數頭の寄生蜂が蟲の跡上に居れり。



雜報

●昆蟲文學 由來科學は無味乾燥に流れ易きを弊とす。科學と文學との調和は洵に現時の急務なる可し。吾人が大に昆蟲文學を鼓吹せんと欲する以所のもの又實に之が爲なり。

寒 蝶 牧野南山

欲隨風去力難支。空托衰殘菊一枝。憐汝孤栖多少恨。夢尋春塢舊胭脂。

魯岳曰。詠物者諸家所尤難。吾兄輕輕着筆能通其情。非老手不能也。

冬 蟻 晴堂逸士

夏月分曹聚餉資。冬時鳩首免寒飢。槐安國裏熙熙樂。荒政由來蟲蟻知。

寒 蝶 雄山魯岳

芳草落花何處求。烟霞一瞥恨悠悠。風前無力霜殘翅。飄挂蛛絲不自由。

南山曰。蝶兒之末路寫出巧妙。

冬の蟲 本居五鈴

一葉すらのこらぬ枝にみのひしのゆふかせさむく冬こもりせり

蟻 歴 ひしまろ

蝶いはく 咲く花の露のひぬ間の夢の世をいそしむ君が心おろすよ

蟻こたへて 冬の日のおるだにちくば春はただ花のうてなに眠

りてましを

かくて冬になりて

もの少したまへありまろありて世ははかなきもの

冬の蟲

雪まとりみぞれ降る日をねさな子がしるこ追ひつ つひれあそぶ見也

昆蟲十句

冬の蠅

天井の蠅初冬となりにけり
 煤掃かぬ一茶が庵や冬の蠅
 冬の蠅軒よ干柿吊るしけり
 穢多村に馬の皮干も冬の蠅
 乾鮭の切口赤かしよもの蠅
 冬の蠅座蒲團干せば飛びよけり
 小春日の障子はたくや冬の蠅
 魚屋に並べし牡蠣や冬の蠅
 煤掃ひ天井の蠅も掃ひけり
 冬の蠅刻む薬に日のわたる

建部樟園

歸麓園 冷水村 轉々園 翠園 去水月 孤月 明笛子 友逸 華園

●新刊紹介

(一) 東京早稻田中學校講師安藤伊三次郎氏は、此頃自然研究實驗野外教授てふ一書を著はされたり。此書は小學兒童をして、自然界の現象を親しく觀察せしめ、如何に理科學の多趣味なるかを覺らしめて、不知不識の間、此の智識を了得せしめんが爲め著せしものにして、全篇を別ち、路傍の生活、河及池の生活、田野の生活、山中の生活の四章となし、鳥獸魚草木の類にして苟も兒童の眼に觸れんとするものは、殆んど網羅して、種々の方面より問題を與へ、又は説明して容易に觀察せしめ得る様記載せ、而して其大半は昆蟲に屬せり。蓋し教育者の座右に必ず供ふべき良書ならん。(二) 滋賀縣農事試験場は害蟲驅除要覽なる者を發行せり。書中重用作物害蟲二十三種の經過の状態を示せる着色石版畫二十三葉を挿入し、最も簡明な經過習性、加害の状況、驅除豫防法を記載したるものなり。從來害蟲驅除豫防法を記載せる書籍の世に乏しからざるも、實用上却て此等の書の勝れるを信するもの也

●特別研究生証明書授與と貝殼蟲調査 當所特別研究生として入所したる岐阜縣武儀郡關警察署巡查部長笹島鍾治氏は、害蟲驅除豫防の件に付研究を了したるを以て、十一月廿六日午後七時、所長より研究証明書を授與せられたるが、當所に於て研究生として証明書を渡したるは氏が嚆矢なるを以て、所員及び講習生發起とあり、送別の紀念として、可成多數の貝殼蟲の附着したる蜜柑、柿、梨、柚等の果物を市中より買集めて該蟲の種類調査をなし、其終へたる果實を茶果に代用して送別の意を表し十二分の興味を以て午後十二時退散したるが、紀念調査の貝殼蟲の種類は左の如し。

梨(大垣町地方産)、二種中サンホゼー最も多し ●蜜柑(海津郡山崎産)、九種 ●同(羽島郡正木村産)、七種 ●同(大阪附近産の者)、十種 ●柚(岐阜附近産)、一種 ●柿(本巢郡西郷村産)、三種 ●柿(武儀郡倉地村産)、二種。

而して蜜柑には八割以上貝殼蟲の附着し居らざるものあきも、柿は該蟲の被害尤も寡少なりき。

●香川縣并に京都府南桑田郡昆蟲學研究會規則

科學の進歩に伴ひ昆蟲學の益々研究せざるべからざることを感ずるに至り、各地に研究會なるものを設けらるゝは、實に斯學の爲め慶すべきの至りなり。今又香川縣及び京都府南桑田郡の研究會規則を得たれば左に掲載することゝなしぬ。

香川縣昆蟲學研究會規則 第一條、本會を香川縣昆蟲學研究會と稱す ●第二條、本會事務所を假りに香川郡栗林村字上ノ村山口茂太郎方に置く ●第三條、本會は昆蟲學に關する事項を研究し、農業上の裨益を計るを以て目的とす ●第四條、本會々員を左の三種とす。

一、名譽會員は學識經驗あるもの、二、特別會員は本會に功勞あるもの、三、正會員は本會の目的を發し入會するもの ●第五條

本會に左の役員を置く。會長一名、幹事若干名●第六條、會長は本會を總理し、幹事は諸般の會務を處理す●第七條、役員は總會に於て推選す其任期は二ヶ年とす●第八條、本會は本會の目的を達せんが爲め左の事項を行ふものとす。(イ)標本及圖畫の製作(ロ)害蟲の驅除豫防及益蟲保護繁殖法を講ずる事(ハ)標本圖畫等展覽會を開設する事(ニ)講話會をなす事(ホ)標本交換をなす事(ヘ)目的を同じとする他の會と氣脈を通ずる事(ト)質問應答を爲す事(チ)會報を發刊する事(リ)前各項の外必要事項●第九條、本會は毎年春秋二回總會を開く、但し必要の場合により臨時會を開くことあるべし●第十條、本會の經費は會費及寄附金を以て之に充つ●第十一條、正會員は會費として一ヶ月金五錢毎月末に納付するものとす●第十二條、本會に入會せんとするものは左の入會申込書に記名捺印の上之を切り取り提出すべし(書式略)●第十三條、本會には支部を置くことあるべし。(木内久松氏報)

南桑田郡昆蟲研究會規則 第一條、本會は南桑田郡昆蟲研究會と稱す●第二條、本會は農業上害益蟲の性状、驅除、豫防並保護法を研究し以て昆蟲思想の普通を圖るを以て目的とす。今其事業を示せば概ね左の如し。一、昆蟲に關する參考書及雜誌等を本會備品として購入し以て普く希望者に閱讀せしむる事。一、標本を製作し常に之を陳列し置き一般の觀覽に供すること。一、郡町村農會其他農業諸團體と氣脈を聯通し相互に利益の交換を圖ること。一、斯學に學識經驗ある名士を招聘し講話會開催する事。一、時々郡内を巡迴し害蟲發生の有無を調査し之が驅除豫防法を獎勵する事●第三條、本會は府縣農學校昆蟲講習所の終了者並郡村農會技術員を以て組織す●第四條、會員を分ちて名譽會員、贊成會員及通常會員の三種とす●第五條、名譽會員は本會に功勞あるもの、贊成會員は本會の主旨を賛成したるものを推薦し其他は通常會員とす●第六條、本會を整理するため左の役員を置く。會長一名、副會長一名、幹事一名●第七條、會長は會務を總理し、副會長は會長を補佐し、幹事は本會一切の事務を司るものとす●第八條、會長は郡農會長に副會長は同副會長に囑托し、幹事は通常會員の互選とす●第九條、役員は任期は一ヶ年とし改選期は毎年一月とす。但し欠員あるときは臨時補充選舉をなすことあるべし●第十條、本會は第二條の目的を達せん爲め毎日一回便宜其時日を定め通常會を開會す。但臨時會は此限りにあらず●第十一條、本會場は當分本郡農會事務所を以て之に充つ。但し便宜上變更することあるべし●第十二條、會員は會費として一ヶ年金壹圓貳拾錢を左の二期に分ち幹事に納付すべし。第一期一月、第二期七月、但し會費處分法は別に之を定む●第十三條、必要ある場合は本會協議の上臨時費を徵收する事あるべし●第十四條、會費は總て通常會員之を負擔するものとす●第十五條、經費の決算は毎翌年一月通常會に於て報告するものとす●第十六條、本會の主旨を賛成し金員物品を寄附したるものは之を本會の事業に充つ●第十七條、本會へ入退會せんとするものは其旨會長へ申出で許可を受くべし●第十八條、會員にして本會則に違反し若くは履行する見込なきものは本會協議の上退會を命ずることあるべし●第十九條、本會を退會したるものに既納の會費を返付せず●第二十條、本會則は會員協議の上加除修正することあるべし。

●昆蟲學講義錄の發行 久しく米國に於て昆蟲學を專攻せられし米國理學博士河内忠二郎氏は

本邦昆蟲學研究者の便を謀り、今回昆蟲學講義録なるものを發行せらるゝ由、其聞く所に依れば、同氏は可及的多方面より精細に講述し、且成るべく通俗の語を用ひて學術上の難句の如きは、一篇毎に解釋して卷末に附し、初學者をして容易に了得せしめらるゝ様記述せらるゝ。從來世人が昆蟲學を研究せんとするも適當の書籍なく、空しく初學者をして失望せしめ、其方向に迷はしめたるもの、今や此の良書の發行わらんとす、是れ尙暗夜に燈光を得たるの思ひわらしめ、益々斯學界をして進運に向はしむるべし。

●愛知縣額田郡昆蟲展覽會

額田郡教育會の主催に係る同郡昆蟲展覽會は、去七月上旬より採集に従事し、十一月二十八日より五日間岡崎町に於て開會せられたれば、當所長は出張して親しく視察せられ、尙同教育會に臨みて一場の講話を試みられたるが、其出品の重なるものは分類標本百九十四箱、蟲數四千七百五十一頭。害蟲標本百七十八箱、蟲數四千二百三十八頭。教育用標本五十九箱、蟲數千〇十四頭。合計四百三十一箱、蟲數一万三頭、種類八百八種にして、其他參考品として採取網、採集器、噴霧器、害蟲標本蟲類の繪畫等無慮數百点に達し、縦覧人は毎日非常の多數にて世人に益する所少なからざりしと云ふ。今其受賞者を擧ぐれば左の如し。(尋は尋常、高は高等、尋高は尋常高等小學校と知るべし)

分類標本 (壹等賞) 連尺尋、福岡尋高、(貳等賞) 岡崎尋高、岡崎尋高、豐岡尋、(三等賞) 男川尋高、本宿尋、相見尋高、山中尋、東海高、下山尋高、(褒狀) 夏山尋、大幡尋、坂崎尋、大雨河尋、片寄尋、岡崎高兒童、三島尋高、中山尋。害蟲標本 (壹等賞) 岡崎尋高、豐岡尋、(貳等賞) 本宿尋、男川尋高、東海高、東部高、福岡尋高、豐岡村農會、相見村農會、(參等賞) 連尺尋、大幡尋、山中尋、投尋、下山尋高、大樹寺尋高、岡崎尋高、大雨河尋、夏山尋、(褒狀) 大樹寺村農會、鳥川尋、美合村農會、岩津高、宮崎尋高、男川村農會、廣幡町農會。教育用標本 (壹等賞) 東海高、岡崎尋高、(貳等賞) 東部高、連尺尋、(參等賞) 荻谷尋、相見村農會、(褒狀) 福岡尋高、男川尋高、生平尋高、大樹寺村農會、相見尋高。

●岐阜縣果實蔬菜品評會と貝殼蟲

同會は本月一日より五日間岐阜縣物産館内に於て開催せられたるが、其出品種類は柑橘類、柿、梨子、栗、菜類、葱類、午旁、蘿蔔、蕪菁、芋類、百合、漬物及罐詰等最も多く、苹果、胡桃、椴梓、银杏、桃、棗、慈姑、蓮快、山葵、蕃椒、大角豆、南瓜、胡瓜、茄子、獨活、菌類、胡蘿蔔、薤、蒜、菱、甘蔗、落花生、蕨、筍、天門冬、切干等にして、當昆蟲

研究所よりも參考品として果實、蔬菜の害蟲五箱及貝殼蟲被害樹并に被害果實數點、果樹蔬菜の害蟲圖

解等を出品し頗る盛會なりき。而して吾等昆蟲研究者は關係するものは、只當所の出品物のみなりし如しと雖も、其大に然らざるなり。即ち是等出品物と害蟲との關係を調査すれば、蔬菜類に於ては只僅に夜盜蟲、螟蛉、蚜蟲等の痕跡を存するものありたるも、そは極めて微々たるものにて先づ關せざる方なりしが、果實に於ては如何、特に柑橘類の如き二百三十餘点中、香柑にて一二点を除くの外皆貝殼蟲の附着せざるものなく、温州蜜柑の如き、形狀品質大に見るべきものありと雖も之が被害の甚しき、豈概嘆の至りならずや、余輩は之を見て、如何にしても果實品評會とは思はれず、寧ろ貝殼蟲標本展覽會の適當なるを信せり。如何に當業者が害蟲には頓着せざるとは云へ、果蠹蟲類が蠹入して其蟲糞の現はれたるが如きものは、如何に愚なりとは云へ出品するものなきも、斯く多數ある貝殼蟲の附着せるを顧ざるは、當業者が貝殼蟲なるものを知らず、寧ろ貝殼蟲の如き斑点の非らざるものは正當なる果實に非らざる如く思惟せるには非らずや、實に憐むべき至りなり。此の柑橘類に次で害の大なりしは梨子にして彼の有名なるサンホゼー種中々多く、次は柿にして被害最も少なかりしとはいへ、大に警醒せざるべからざるあり。

●聖路易萬國博覽會出品昆蟲標本

當昆蟲研究所より聖路易萬國博覽會へ昆蟲標本を出品することは、讀者の己に知らるゝ處なるが、右は害蟲發生經過標本二十函、天蛾類發生經過標本四函、瓢蟲標本一函、寄生蜂標本五函計三十函にして、目下調製を了したれば、近日該地へ向け發送することとなれり。

●特別研究所生の入所

本誌前號に於て、特別研究所生の入所を許す旨を報導し置さしが、該規定より入所せしものは岐阜縣四名、香川縣一名、大阪府一名なり。

●岐阜縣昆蟲學會第六十回月次會記事

同會は本月五日午后一時より名和昆蟲研究所内に於て開會せしが、出席者五十餘名ありて頗る盛會なりき。今其講話の重なるものを擧ぐれば、例により副會頭名和靖氏の開會の辭より次で第一席松野春一氏は天の教ふる所を味へと題し、害蟲の發生、年の豊凶は天の吾人を誨むるものなれば、常に之を鑑みて怠らざる様すべしと廣く例を擧げて論じ、第二席近藤伊佑氏は果樹栽培と貝殼蟲に就て、果樹栽培の必要より栽培方法及其大害蟲たる貝殼蟲の驅除豫防法を説き、尙岐阜縣果實蔬菜品評會に於て調査せし貝殼蟲に就て報告し、第三席愛知縣の若林高久氏は氏が明治十二三年の頃北海道に於て四年間飛蝗驅除に従事せられし狀況より該蟲の習性經過等詳しく説

明せられ、第四席波磨實太郎氏は先會よりの續きなるブレパレート製法に就き實驗の上説明せられたり時已は四時半なりしかば、更ニ七時半より夜會を開く事として散會したりき。因に記す、當日は來會者は當所より聖路易萬國博覽會出品すべき昆蟲標本を縦覽し供したり。

●昆蟲水曜會記事

當研究所員の催に係る水曜昆蟲談話會は、前號報告後毎水曜日午後七時より當所内に於て開會して、毎週間に研究せし結果を報告するを例とせり、其談話の要項を一括すれば。

名和愛吉氏はクヌギガメシの産卵、ツバミミノシの潜伏に就て及クダマキダマシの卵塊調査等なりしが、クダマキダマシの卵は大き七分内外の樹枝に、平均二寸七分強の長さに五十三粒を産付け、其内寄生蟲類の爲に三分位は倒され、残り七分は計算上より言へば孵化する割合なる旨を實物に依りて説明し●中井藤助氏は苞蟲と浮塵子及二三の昆蟲に就て等なりしが、氏の調査に依れば紋白蝶の幼蟲に寄生するキムユナトリバチは、宿主の第四、第五、第六の關節氣門附近に穴を明け、一つの穴より數頭宛出で、其遺菌數は大抵一頭の螟蛉に十六乃至四十七の間において、平均廿九強に當り居れる旨を述べらる●大橋由太郎氏は蚜蟲驅除試驗に就て、煙草石鹼及水の溶液にて製した驅蟲劑に就き試験したる結果を報告し●小川謙司氏は稻の刈株中に潜伏する二化生螟蟲調査の結果百株中に最も多く伏在せしものは一株中に十二頭なりしが、尙一層驚きしは僅か二三寸の莖中に四頭の螟蟲の潜伏し居りたりとて、實物及圖に依りて説明し且其驅除の方法をも詳細に陳述せらる●所嘉吉氏は地蜂に就て調査を成して、働蜂、雄蜂、雌蜂の三種に別ちて巢の構造より順序を追て丁寧に説明し●小森省作氏は粟の夜盜蟲の習性並に驅除法及ハサミムシ、カマキリに於ける内外の迷信等を話し●小竹浩氏は蜂の翅脈に就て説明し●石田和三郎氏は稚の實の中にある象鼻蟲の幼蟲に就て調査せし事項を報告し●其他近藤伊佑氏の未來の害蟲、稻葉郡昆蟲の種類に就て●森宗太郎氏の海津郡に於ける粟夜盜蟲の調査報告●高橋喜男氏のウチスマメの寄生蜂に就て●土岐五郎氏の蟲採りの失敗●西川砂氏の蟹蛆の話●笹島鑑治氏の所感●棚橋昇氏の昆蟲雌雄の區別(實物説明)等なりしが、例に依り所長は每會各自の談話に就きて有益なる講評を加へ、或は研究問題を出して所員一同を督勵せられたり。

●昆蟲標本陳列館の參觀人員

去十一月中、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は、總計二千八百九十七人として、其中最も多かりしは十二日に於ける三百九十六人、最も少なりしは二十七日に於ける二十六にして、一日平均百三十一人強に當り、此の内實業家、學生最も多く、之に次ぐは各府縣の教育者勸業視察員等なりき。

●明年度の昆蟲世界

本誌の誌載記事の内容の如き、卷は一巻と改良し、號は一號と進めるは讀者の已に知らるゝ所なるが、明年度よりは一層之が注意を加へ、以て愛讀者諸君に酬ひんと茲に豫告す。

●年賀廣告割引

先例により、本月廿五日まで、廣告料を添へ、御依頼の年賀廣告に限り、左の通り特別割引可仕候
(郵券代用若しからず)

一、昆蟲世界購讀者〔五號活字壹行に付金八錢〕
各級農會の役員

一、昆蟲世界購讀者〔介紹介者〕同壹行に付金六錢
〔當所證明の修業証所持者〕

なほ長文の廣告又は三ヶ月以上長期約束の普通廣告は此以外とす。但年首に限り特々割引の照會も應じ可申候

十二月 名和昆蟲研究所會計部

●讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遅延相成候諸君も尠からず會計上非常な迷惑を來すのみならず爲め本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滞納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

岐阜市京町

名和昆蟲研究所 昆蟲世界會計部

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版 薔薇の 昆蟲世界 全
定價貳拾錢 郵稅貳錢 (郵券代用一割増)

臨時刊行第一編 日本昆蟲分科表 増補再版 全二冊
定價(郵稅共)金貳拾八錢 (同上)

臨時刊行第二編 通俗益蟲集覽 第一輯再版 (説明書附) 全一冊
定價(郵稅共)金貳拾貳錢 (同上)

臨時刊行第三編 貝殼蟲圖說 全一冊 (版再) 上
定價(郵稅共)金參拾七錢 (同上)

農家應用 害蟲圖解 既刊 貳拾貳枚
定價壹枚金拾五錢 郵稅貳錢 百枚以上一圓壹枚拾錢の割郵稅百枚に付貳拾錢

昆蟲叢書 第一編 第一冊 第一編 全一冊 第一編 全一冊
定價金八拾五錢 郵稅金六錢 (郵券代用一割増)

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

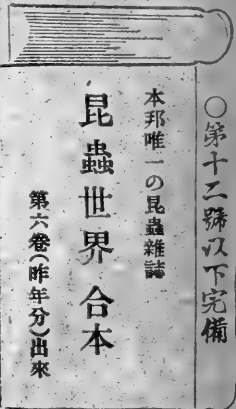
雜誌 昆蟲 世界 合本 出來 廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界 合本

西洋綴
金文字
入美裝



● 昆蟲世界第二卷 五部

〔自第拾貳號
至第拾六號〕

● 昆蟲世界第二卷合本壹册

〔自第拾七號
至第貳拾八號〕

● 昆蟲世界第四卷合本壹册

〔自第貳拾九號
至第肆拾號〕

● 昆蟲世界第五卷合本壹册

〔自第肆拾壹號
至第伍拾貳號〕

● 昆蟲世界第六卷合本壹册

〔自第伍拾三號
至第陸拾四號〕

● 昆蟲世界第七卷各本壹册

〔自第陸拾五號
至第柒拾六號〕

右は明治三十六年發行分(總目錄付)
右は明治三十五年發行分(總目錄付)
右は明治三十四年發行分(總目錄付)
右は明治三十三年發行分(總目錄付)
右は明治三十二年發行分(總目錄付)
右は明治三十一年發行分(但合本にあらす)

其他は定價の通り
合本は每冊金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられし、未だ之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町

名和昆蟲研究所

○謹告

名和先生御考案

● 本邦六大島蝶圖

一葉 定價金拾五錢 郵稅簡入六錢

● 昆蟲繪葉書

三葉一組 定價金五錢 郵稅金貳錢

● 昆蟲採集用小札

五百枚 定價金拾五錢 郵稅金貳錢

● 昆蟲名稱小札

五百枚 定價金拾錢 郵稅金貳錢

右者今般斯學研鑽家諸君の御便利を圖り名和昆蟲研究所の御檢閲を受け多數印刷仕り特別廉價を以て廣く同好の士に頒たんとす企くは陸續御注文あらんことを祈り奉り候

美濃國大垣町

西濃印刷株式會社

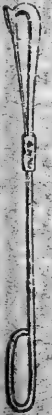
石版部

十二月

專賣特許莖切器發賣廣告

定價一挺金拾錢...農會等の共同御用は特別割引

新發明莖切器の圖



製造發賣元

靜岡縣志太郡燒津町

吉野寅之助

岐阜市京町

縣下一手販賣所

高橋喜之助

◎新案 教育用昆蟲標本 壹組 拾貳箱

一、分類標本 壹箱

一、自然淘汰標本 五箱

○保護色 ○擬態 ○警戒色及誘惑色
○自己防禦 ○生存競争

一、雌雄淘汰標本 貳箱

一、害蟲標本 壹箱

一、益蟲標本 壹箱

一、解体標本 壹箱

一、俗説に迷信に就ての昆蟲標本 壹箱

該標本は、高等小學校、高等女學校、農學校、尋常中學校等の理科と參酌して製作せしものなり。從て害蟲標本の如きも、普通農作物害蟲標本とは大に其趣きを異にせり。而して一品毎に説明を附しければ、假令初學者と雖も、一目して昆蟲界に於ける自然の妙理を會得するを得ん。

右標本は、壹組十二箱を以て完成せりと雖も、其中、一箱ヲ御望の節は、新案教育用昆蟲標本中の何々と明記ありたし。

◎箱裝式昆蟲標本

甲號 價一組ふ付き金四圓 一組二十枚

乙號 同 金參圓 但遞送費は別

丙號 同 金貳圓

右は實物寫生用の昆蟲標本にして、初等教育、中等教育何れにも適用すべき好標本あり。製法堅牢なるを以て、又幼稚園或は家庭に於ける玩具ともすれば、不知不識の間に、理科思想を養成することを得るなり。

●農作物害蟲標本 壹組 桐箱入解説附 金四圓五拾錢

●農作物益蟲標本 壹組 桐箱入解説附 荷造費 金貳拾

●教育用昆蟲標本 壹組 桐箱入解説附 錢小包 料は參

●自然淘汰標本 壹組 桐箱入解説附 金五圓五拾錢

●雌雄淘汰標本 壹組 桐箱入解説附 金五圓五拾錢

●氣候變形標本 壹組 桐箱入解説附 拾錢

●昆蟲發育標本 各種

●山林園藝害蟲標本 各種

●昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年十二月 名和昆蟲研究所會計部

帝國理學博士河内忠次郎君口述

昆蟲學講義

來一月十五日
第一篇發行

右八十數年間河内博士が親シク研究セラレタル昆蟲ノ性狀并ニ其體軀ノ構造ヨリ農作上ニ及ボス害毒且ツ驅除ノ方法ヲ詳細ニ講述セラレタル者ニテ僅々三百部ヲ限リ來一月十五日ヨリ毎月一回發行ノ上有志ノ士ニ分タル、者ナレバ十二月卅一日迄ニ至急全部(六ヶ月分)ノ代價金壹圓ヲ添へ左ノ處ニ申込アルベシ

東京市麻布區新龍土町十二番地

河内方

神貞一

出版廣告

昆蟲叢書 第壹編 (明治卅五年七月出版)

●全國昆蟲展覽會出品目錄

全壹冊

題字及び寫眞銅版四葉挿入●木版寫眞銅版書七十餘圖●紙數二百餘頁●定價金八拾五錢(郵税金六錢)

記載目次

第一章 昆蟲展覽會出品目錄の必要 ●第二章 分類標本に於ける昆蟲種別 ●第三章 害蟲標本に於ける昆蟲種別 ●第四章 益蟲標本に於ける昆蟲種別 ●第五章 教育用標本其他の出品 ●第六章 出品物及其出品者(附錄開設の計劃) ●役員の撰定 ●閉會設備 ●閉會式 ●審査方法 ●褒賞授與式 ●閉會式 ●雜件彙報 ●昆蟲種の調査 ●殘務所理 ●昆蟲名稱の意見 ●展覽會の效果 ●以上昆蟲叢書 第貳編 (明治卅六年八月出版)

●昆蟲標本製作全書 全壹冊

題字及び寫眞銅版、木版圖數十種挿入●定價壹部金八拾五錢(郵税金六錢)

記載目次

第一章 昆蟲標本の價値 ●第二章 昆蟲標本製作法の沿革 ●第三章 昆蟲標本製作書の出版 ●第四章 昆蟲採集用の器具 ●第五章 昆蟲採集の方法 ●第六章 幼蟲及蛹の採集と飼育方法 ●第七章 昆蟲採集地の選擇 ●第八章 標本製作の器具 ●第九章 昆蟲標本の製作方法 ●第十章 昆蟲の排列と保存方法

右出版仕候に付御愛讀あらんとを請ふ

明治卅六年十月 岐阜市京町

名和昆蟲研究所

動物學雜誌

(第十五卷) (第百八十號)

本號には極彩色蛾類圖版及海蛇の類石版圖版を附す

日本産蛾類圖說(二)

三宅恒方

已知本邦産姫蜂科目錄

中川久知

發賣所

東京神田裏神保町 合資會社 警業社

昆蟲世界第七卷

自第六拾五號總目錄
至第七拾六號總目錄

● 口 繪

- セミヤドリガ並に被害蟲類……………(着色石版) 第一版
- イシガキテアの發育……………(石版) 第二版
- ノコギリムシとミヤマノコギリムシ……………(石版) 第三版
- 竹節蟲の種類……………(石版) 第四版
- 大島産の浮塵子各種(一)……………(石版) 第五版
- 大島産の浮塵子各種(二)……………(石版) 第六版
- 有叻目水棲類各種……………(石版) 第七版
- 綠黑青燕尾蝶の發育……………(石版) 第八版
- 中等教育昆蟲標本寫真(一)……………(寫真銅版) 第九版
- 石竹と大和小灰蝶……………(石版) 第十版
- 中等教育昆蟲標本寫真(二)……………(寫真銅版) 第十一版
- 枝竹節蟲其他四種……………(石版) 第十二版

● 論 說

- 昆蟲研究者の學修すべき大教室…………… 八九
- 第五回内國勸業博覽會に昆蟲標本…………… 三一五
- 本年の蟲害と浮塵子…………… 四〇五
- 冬季の採蟲を務めよ…………… 四四九

● 學 說

- セミノヤドリガ(蠶寄生蛾)の實驗(第一版圖入)(名和梅吉)…………… 一
- グンバイイトリガ(蠶寄生蛾)の實驗(佐々木忠次郎)…………… 四
- 東北地方の果樹の害蟲たる棉蟲驅防の一策(桑名伊之吉)…………… 六
- 蠶蛆以外の寄生蛆に就て(圖入)(荒木武雄)…………… 八
- イシガキテアの發育を記す(第二版圖入)(竹内護文)…………… 四四
- 邦産廿四島羽蛾に對する疑問(圖入)(長野菊次郎)…………… 四九
- 岡田氏の採集寄贈に係る昆蟲種(桑名伊之吉)…………… 五五
- 同上の續き(完)…………… 一三九
- 同上の續き(後)(圖入)…………… 一五七
- 邦産燻煤蚊種上古棲息の説前(圖入)(晴耕雨讀子)…………… 九八
- 同上の續き(後)(圖入)…………… 九八
- 昆蟲研究の發達史(桑名伊之吉)…………… 九九
- 種子ノズ井ムシの解剖(圖入)(岡田忠男)…………… 一〇四
- 外國の昆蟲書に就て…………… 一〇四

- 竹節蟲科に就て(第四版圖入)(名和靖)…………… 一四二
- 動物に對する森林の保護(岸部易太郎)…………… 一四四
- 大島産の浮塵子に就て(第五版圖入)(生熊與一郎)…………… 一八三
- 同上の續き(完)(第六版圖入)…………… 二二七
- コオロムシにつきての疑問(圖入)(長野菊次郎)…………… 一九一
- アノフェレス、マククライトウス及アノフェレス、ロイコ…………… 一九四
- イプスを臺北附近に於て檢出せり(英健也)…………… 二二六
- コオロムシに就て(齋藤啓二)…………… 二三八
- 外國の昆蟲書に就て(長野菊次郎)…………… 二七六
- 水棲有叻目十一種に就て(第七版圖入)(名和靖)…………… 二七六
- 第一回岐阜縣昆蟲分布調査(圖入)(小森省作)…………… 三一九
- 同上の續き…………… 三三三
- 同上の續き…………… 三三三
- 同上の續き…………… 四一四
- 無翅の蠶種に就て附臺灣産の蠶種(永澤小兵衛)…………… 四五六
- 同上の續き…………… 二八六
- 同上の續き…………… 三六八
- 同上の續き…………… 四一四
- 同上の續き…………… 四一四
- 其卵採取と卵蜂保護に就て(中野末喜)…………… 二八九
- 綠黑青燕尾蝶の發育並に蠶の多形に就て(第八版圖入)(名和靖)…………… 三二七
- 蠶形象鼻蟲に就て(圖入)(名和梅吉)…………… 三二七
- 天牛の小實験(圖入)(神村直三郎)…………… 三三〇
- 本邦將來の害蟲(松付松年)…………… 三三一
- 皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解(第九版圖入)(小竹浩)…………… 三六一
- 同上の續き(圖入)…………… 三六五
- 同上の續き(第十一版圖入)…………… 四〇六
- 同上の續き…………… 四四三
- 同上の續き…………… 四四三
- 稻の昆蟲(圖入)(桑名伊之吉)…………… 四四六
- 蜻蛉に就きて(長野菊次郎)…………… 四四七
- 同上の續き(圖入)…………… 四四九
- 桑のシムシ調査に就て(圖入)(森宗太郎)…………… 四五〇
- 臺灣産蠶種に關する第二報告拾遺(永澤小兵衛)…………… 四五〇
- 柑橘の害蟲に就きて(圖入)(岡田忠男)…………… 五〇八

● 講 話

- 蚤の發生と驅除方法(圖入)(名和靖)..... 一〇
- 第拾回全國害蟲驅除講習會員の五分時演說
- △ 昆蟲學思想未發達の影起に就て(安達庸一)..... 六五
- △ 昆蟲學思想の喚起及び普及の一捷路(西川豐次郎)..... 六六
- △ 蠶兒に寄生する蛆の驅除法(三澤勝重)..... 六七
- △ 害蟲に對する吾々地方の迷信誤解(佐々木傳五郎)..... 一〇七
- 幼孩と軟装式の昆蟲標本附新式標本(圖入)(名和靖)
- 第拾回全國害蟲驅除特別講習會員の五分時演說
- △ 物の見解(中瀬陸太郎)..... 一五二
- △ 新潟縣に於ける害蟲驅除の根本的改良(山田益五郎)..... 一五二
- △ 浮塵子共同驅除の實驗談(染谷良佑)..... 一五三
- △ 千葉縣下に於ける害蟲の種類より之が驅除法に及ぶ(行木藤)..... 一五四
- △ 鹿兒島縣下に於ける農事上の摸樣(河野綾橋)..... 一五五
- 害蟲の二、三に就て(圖入)(名和靖)..... 二〇〇
- エンドノキリムシの驅除法(石田和三郎)..... 二〇三
- 二化生螟蟲の卵蛹の位置に就て(圖入)(森宗太郎)..... 二二九
- 害蟲視察談(渡邊橋四平)..... 二四二
- アケハノテフ幼蟲蛹化の準備に就ての實驗(中井藤助)..... 二四二
- 蚜蟲の話(圖入)(森宗太郎)..... 二九一
- 螟蟲驅除の一方方法(森島勘次郎)..... 二九三
- 除蟲液の性質を述べて害蟲驅除に及ぶ(岡田忠男)..... 三三二
- アケハノテフの經過に就ての實驗(圖入)(中井藤助)..... 三三四
- 第十六回全國害蟲驅除講習會員の五分時演說
- △ 害蟲驅除の要件に付卑見を述ぶ(鎌田愛藏)..... 三七七
- △ 害蟲驅除の普及を計る方法(室子次郎)..... 三七八
- △ 害蟲發生の基因并に豫防驅除法(村上義一)..... 三七九
- △ 婦人ミ昆蟲(桑田庄治郎)..... 三八〇
- マユミガメムシの飼育に就て(圖入)(森宗太郎)..... 四一九
- ルリタテハテフの飼育談(所嘉吉)..... 四二〇
- エンドノキリムシ糖蜜驅除試驗(石田和三郎)..... 四六三
- 昆蟲の肢に就て(圖入)(小森省作)..... 五一二
- 藤吉蟹の話(圖入)(平田駒太郎)..... 五一一

● 訪 問

● 雜 錄

- 女子高等師範學校教授岩川友太郎氏の談話..... 一〇
- 六足蠶蠶囊(長野菊次郎)..... 一〇
- △ (一)カイテン質(一)仔蟲の食量(三)蛹の色(四)螟蛉の筋..... 一〇
- △ (五)蚊の耳..... 一四
- △ (六)蝶と蚜蟲との關係(七)昆蟲の嗅感..... 七〇
- △ (八)天蛾類の一盛一衰(九)幼蟲に對する保護の一二..... 一〇六
- △ (十)蝗を斃す黴菌(圖入)..... 一八五
- △ (十一)蝶の雌雄數(十二)蛾の雌雄數(十三)蝶蛾雌雄の價額..... 二〇六
- △ (十四)烏蠅に對する迷信(十五)昆蟲の關節數..... 二四四
- △ (十六)水棲の鱗翅類其(一十七)水棲の鱗翅類其二..... 二九九
- △ (十八)貢子に對するカムストック氏の意見..... 三三六
- △ (十九)亞米利加野蠶の食量と生長(廿)沒食子蜂科の世代の交替..... 三八三
- △ (廿一)氣管の大き(廿二)蝶と蛾との産卵の差異..... 四二一
- △ (廿三)昆蟲に對する花の進化..... 四六八
- △ (廿四)翅の振動數..... 四六八
- △ (廿七)小昆蟲の大害(廿八)昆蟲と鳥と..... 五一八
- △ (廿九)日本に於ける昆蟲採集..... 一五
- 蟲界の漫語(齋藤啓三)..... 一七
- 食蟲動物の餌食研究に就て(林壽祐)..... 一七
- 昆蟲學發展の一方案(鳥羽源藏)..... 一九
- 蠶姪の撲成に就て(圖入)(高橋敬二)..... 二一
- 蜻蛉の保護を如何にすべきか(神村直三郎)..... 六九
- 米國昆蟲界の所感(一)(名和梅吉)..... 七一
- 害蟲驅除講習會の必要(原色生)..... 七三
- 栗毛蠶と天蠶に就て(芝原浩)..... 一三四
- 博覽會出品の昆蟲標本(小竹浩)..... 一六五
- 同上の續き..... 二〇七
- 同上の續き(完)..... 二〇七
- 蚊に就て(三吉朋十)..... 一八

- 昆蟲動物の餌食(林壽祐) 一五九
- 比蟲應用の釣魚法に就て(高橋徹一) 一六〇
- 比蟲の地名(田村晴耕農夫) 一六一
- 泥質蟲の冬期伏溝箇所に就て(中浦藤吉) 一六一
- 昆蟲發句集(喜田川要三郎) 二一〇
- △螢 二四九
- △蚊 二四七

- 工業に於ける蠶の應用(高橋徹一) 二四七
- 春日谷地方の昆蟲採集(圖入)(小森省作) 二四五
- 誘蛾燈は果して螟蟲驅除に有効なりや(大上宇一) 二四七
- 昆蟲に關する隨感隨筆(昆蟲會) 二四七
- △(一)三化の二化と二化の一元生螟蟲(二)螟蟲に關する博覽會(三)富士山採集の昆蟲(四)小學兒童採集の昆蟲(圖入)

- △(五)黴菌の爲に斃れたる昆蟲(六)豌豆象鼻蟲の産卵(七)外國輸入の害蟲(圖入)(八)水松の蚜蟲驅除(九)蟬寄生蛾に就ての書狀(十)負子の新産地(十一)伊吹山採集の昆蟲(十三)普通天牛と姬天牛との比較(圖入)(十四)美濃國氣象俚諺と昆蟲(十五)鼠毒蟲を食せず 三〇一
- △(十六)蠅驅除法(十七)天田郡の天蛾類(十八)蜚蠊の分布に就て(圖入)(十九)筒切蟲の寄生蜂(二十)布哇の蚊の驅除法 三八四

- △(廿一)ルリシジミテフの幼蟲(廿二)ゲジトミカモの昆蟲捕食の有様(廿三)蜻蛉の群飛(廿四)ホシメニカミキリムシの分布に就て(圖入)(廿五)ムチヒロキアリの分布(廿六)豌豆象鼻蟲の羽化(廿七)イナゴのフライ(廿八)コウカバハの寄生蜂(廿九)複黒横這の腹中卵數調査(三十)イチモツナセシテフに就て 四二二
- △(卅一)蚊帳使用の遲延(卅二)現蟲調査の必要を感ず(卅三)光線の燒点に昆蟲の群集(圖入)(卅四)紋黃鳳蝶の分布(卅五)旭天牛と楯田氏(圖入)(卅六)風蝶蛹化の際に於ける變化(卅七)筒切蟲は卵にて越冬す(卅八)胡蘿蔔青蟲の寄生蜂 四六九

- △(卅九)蟲聲に依りて結霜の有無強弱を知る(四十)冬季昆蟲 四六九

- 採集の利益(圖入)(四十一)鳥胃中の昆蟲(四十二)擬蜻蛉の幼蟲(圖入)(四十三)害蟲驅除の良法如何 五一九
- 螟蟲驅除防獎勵展覽會準備記事(昆蟲の家主) 五一九
- △(一)螟蟲驅除防獎勵展覽會準備記事を設けるの理由(二)農事月報中の螟蟲記事(三)螟蟲圖解(四)福岡縣の螟蟲驅除防法(五)福岡縣糟屋郡螟蟲驅除費(六)新農報記載の螟蟲驅除法(七)螟蟲蛾の有する卵數と卵塊數(八)屋内より飛び出づる螟蟲蛾(九)螟蟲羽化の時期(一〇)小學兒童と螟蟲採卵 二九四

- △(一一)滋賀縣栗太郡大寶村農會螟蟲驅除防獎勵規程(一二)岡山縣の獎勵金下附規程(一三)岡山縣の螟蟲驅除防法(一四)二化生螟蟲の翅脈(圖入)(一五)誘蛾燈に對する螟蟲會議 三三七
- △(一六)稻白穗中の螟蟲數(一七)切取白穗の植擊(一八)螟蟲の稻莖中に潜伏の數(一九)螟蟲蛾の燈火に飛集する力を測る理想的試験法(二〇)被害甚しき筑後地方の螟蟲豫防に就て 四二六

- △(二一)切取稻莖所分の結果(二二)螟蟲被害莖拔取り成績(二三)南河内郡の螟蟲驅除(二四)臺灣の螟蟲 四七四
- △(二五)螟蟲驅除防記事の増加(二六)渡邊清智生螟蟲驅除防觀察報告(二七)吉野郡螟蟲卵塊懸賞方法(二八)二化螟蟲驅除の注意 五二二

- 藥用に供する昆蟲(林壽祐) 三四〇
- 昆蟲界の興業者(長瀬清五郎) 三四一
- 稻の根喰蟲に就て(川越誠吉) 三四六
- 昆蟲界の花壇(名和梅吉) 三四六
- △(一)本邦産と米産の蜻蛉種屬に就て(二)米國の糟蛾類種屬(三)床蟲 三八一
- △(四)貝殼蟲附着の果實に就て(五)米國に於ける松樹害蟲數(六)煙草螟蛉に就て 四七二

- 自然的害蟲驅除防注意書(高橋徹一) 三八七
- 十一星瓢蟲の食餌に就て(岡田忠男) 三八七
- 昆蟲小感(福井克雄) 三八七
- 螟蟲に對する敵蟲 四二五
- △昆蟲分布と小學生徒。蚊の調査を希望す。螟蟲驅除と地方青年 五三〇

- 讀者諸君に望む(蟲癩家蟲奴)……………四二六
- 稻の害蟲クロクサカメシの驅除法(大野宗)……………四二九
- 湖術の一大害蟲なる青蟲の幼蟲に就て(山田惠喜太)……………四三〇
- 昆蟲雜信(第十二版圖入)(鳥羽源藏)……………四三〇
- △夜なく煙。エダナナフシムシの食餌。クビキリバツタの越冬。オホチナカバチの産卵の方法。キスヂカミキリの害。發育する小蛾。シラヤマキクの蟲癩……………五一五
- 島根縣下の兩害蟲調査報告(田中房太郎)……………二二三
- 同上の續き(元)……………七二二
- 土佐産の蟲報(前卷の續)(圖入)(武内護文)……………二二五
- 同上の續き……………一六七
- 同上の續き……………二一四
- 同上の續き(元)……………二二七
- 岐阜縣郡上郡蝶報(島田健藏)……………二二八
- 昆蟲月報(第七信)(櫻井倚研)……………二二六
- 同上(第九信)(元)……………二七四
- アイヌ人の用ゐる昆蟲の名稱(三吉豐屋)……………二七五
- 鹿兒島縣下の昆蟲方言(林俊房)……………二二一
- 岡山縣下昨年の螟卵摘採數(篠岡春太)……………二二二
- 京都府天田郡害蟲驅除景況(菅沼若藏)……………二二四
- 岐阜縣惠那郡農會の決議事項(晝耕夜讀生)……………二二四
- 學童の害蟲驅除成績表の出品(田中房太郎)……………二二四
- 岐阜縣郡上郡の蛾報(盛田健藏)……………二二七
- 愛知縣寶飯郡の冬季昆蟲展覽會(田中周平)……………二二七
- 岐阜縣郡上郡の蟲報(盛田健藏)……………二二七
- 小學兒童害蟲驅除成績表(藤澤節太郎)……………一六五
- 害蟲驅除に關する建議(岡田忠男)……………一七〇
- 三重縣阿山郡の昆蟲方言(西岡嘉十郎)……………一七一
- 三重縣阿山郡の昆蟲方言(西岡嘉十郎)……………一七一
- 農事試験場擔當人會の決議事項(西岡嘉十郎)……………二一七
- 博覽會出品害蟲標本解說書(武儀郡農會)……………二五三
- 靜岡縣昆蟲學項(岡田忠男)……………二五六
- 愛知縣寶飯郡小學校(冬季昆蟲展覽會彙報(田中周平)……………二五八

- 三重縣阿山郡新居村の蝶報(西岡嘉十郎)……………二五九
- 明治三十六年度兵庫縣擔保郡農會螟卵採集方法(岩田熊三郎)……………二六〇
- 博覽會出品害蟲標本解說書(稻葉郡農會)……………三〇〇
- ギフテフ遠江に産す(神村直三郎)……………三〇五
- 小學兒童の害蟲驅除成績(弓削良彌)……………三〇六
- 博覽會出品害蟲標本解說書(褒狀)(有馬農林學校)……………三四八
- 博覽會出品生理學科教授用昆蟲標本解說書(褒狀)(大津尋常高等小學校)……………三四八
- 山口縣大島通信(財滿字市)……………三五一
- 長野縣北安曇郡の昆蟲方言(帶刀喜市)……………三五一
- 同上の續報……………三九三
- 博覽會出品害蟲標本並に調査解說書(三等賞)(新潟縣農事試驗場)……………三八八
- 博覽會出品害蟲標本解說書(三等賞)(神村直三郎)……………三八九
- 同上の續き……………四三四
- 同上の續き(元)……………五二五
- 三重縣阿山郡昆蟲通信(西岡嘉十郎)……………三九二
- 博覽會出品害蟲標本及調査解說書(參等賞)(香川縣農事試驗場)……………四三二
- 博覽會出品害蟲標本解說書(三等賞)(東郷隆次)……………四三二
- 博覽會出品害蟲標本解說書(參等賞)(渥美郡昆蟲研究會)……………四三七
- 昆蟲の二三(小田勢助)……………四八〇
- 宣城縣志田郡志田村に於る本年の昆蟲狀況(加藤久之助)……………四八〇
- 擔斐郡小學校昆蟲寫生書展覽會紀念品贈呈(擔斐郡昆蟲學會)……………五二九
- 昆蟲に關する葉書通信(自第二十九報至第卅六報)……………二二八
- △誘蛾燈の俗曲(採藤隊人)……………二二八
- △切取蚊の發生(阪口幸之助)……………二二九
- △全國の修養生同窓會に就て(堂本俊治郎)……………二二九
- △昆蟲の解體標本製作を望む(佐藤榮)……………二二九
- △元日祝賀會餘興の福引大橋懸逸……………三〇〇
- △昆蟲唱歌編作の必要(坊城子生)……………三〇〇
- △害蟲驅除の効果(高柳源多郎)……………三〇〇
- △地蜂の動作(池田健熊)……………三〇〇

- △廿四鳥羽蛾の一產地(矢野宗幹).....一七二
- △蟬寄生蛾の一產地(水野清).....一七二
- △郡會の決議事項(西岡嘉十郎).....一七二
- △水棲昆蟲の動靜に就て(藤田政勝).....一七二
- △害蟲報告(松下千吉).....一七二
- △昆蟲研究會の發會(足羽財藏).....一七二
- △昆蟲採集報(益田健藏).....一七二
- △ギンホーセー貝殼蟲分布報告(星野信).....一七二
- △サブテフの分布報告(高橋直義).....一七二
- △竹節蟲の產地(西岡嘉十郎).....一七二
- △桑のシンムシに付き報告(松村菊太郎).....一七二
- △水族館の昆蟲(藤田政勝).....一七二
- △栗毛蝶の繭(晴山立郎).....一七二
- △岐阜蝶の採集(南波克治).....一七二
- △竹節蟲科の分布通信(二件)(白木金一郎。中井猛之進).....一七二
- △ミカドアブハテフの採集(高千穂宣磨).....一七二
- △昆蟲雜信(蓮佛萬吉).....一七二
- △桑のシンムシ及シンクヒムシ(松尾國松).....一七二
- △博覽會の陳列に就て(大竹義道).....一七二
- △稻蠶の採卵(爲尋常小學校).....一七二
- △長野縣北安曇郡松川村の蟲送帶刀喜市).....一七二
- △稻作害蟲報告(岩田秀太郎).....一七二
- △小學生の螟蟲採卵(二件)(篠田五郎。喜田川要三郎).....一七二
- △昆蟲の分布報告(翁要一郎).....一七二
- △螟卵買收と幻燈講話(井上藤太郎).....一七二
- △螢狩の童謡(後藤新左久).....一七二
- △竹節蟲に就て(矢野宗幹).....一七二
- △稻の象鼻蟲と黴菌(原祐祐).....一七二
- △廿四鳥羽蛾と蠶躰(山崎久藏).....一七二
- △廿四鳥羽蛾(星野信).....一七二
- △コソトソトバウの分布報告(平岩鶴吉).....一七二
- △蟲歌(岩田秀太郎).....一七二
- △山口縣大島郡に於ける螢狩の童謡(財滿宇市).....一七二
- △岐阜縣不破郡に於ける螢狩の童謡(杉江初治).....一七二
- △京都府與謝郡に於ける螢狩の童謡(山崎久藏).....一七二

- △柑橘の貝殼蟲一種(岡田忠男).....三五二
- △稻小實驗(田中五一。田中健太郎).....三四七
- △繭の枯莖切取回(村山榮太郎).....三四七
- △岩手蟲信(第一回)(好園坊).....三四七
- △穀倉に於ける蟲害豫防法(田中周平).....三四七
- △日光白蝶の一產地(岸田松若).....三四七
- △兵庫縣明石郡伊川谷村の蟲報(井上藤太郎).....三四七
- △北邊地方の蟲報(富田覺之助).....三四七
- △大風と昆蟲採集(長野菊次郎).....三四七
- △八町蜻蛉の分布と黄紋鳳蝶(竹信虎藏).....三四七
- △浮塵子と幻燈會(谷川平左衛門).....三四七
- △ギブテフの分布に就て(岡野康八郎).....三四七
- △曾我井村昆蟲研究會(菅沼岩藏).....三四七
- △京都府立農學校所在地の蟲報(岡本亦三郎).....三四七
- △八町蜻蛉外二種の分布報告(田中周平).....三四七
- △浮塵子と有益鳥蟲(後藤新左久).....三四七
- △ホシベニカミキリムシに就て(矢野宗幹).....三四七
- △螟蛉蛾一種(神村直三郎).....三四七
- △二化性螟蟲刈株中にて越冬(財滿宇市).....三四七
- △三備地方に於ける薄荷の螟蛉(橋高勉三).....三四七

問 答

- クサカゲロウに就て質問並に答.....三〇
- 猫頭橫蟲に就て質問並に答.....三一
- 栗毛蟲の蛹繭に就て質問並に答.....三一
- 苗代害益蟲に付て質問並に答.....三七
- 柑橘の天牛に付て質問並に答.....三七
- 蠨蛛に付て質問並に答.....二六二

雜 報

- 明治三十六年の昆蟲學界.....三八
- 去年の昆蟲學界.....三三
- 工業應用昆蟲誌報(第一報)(圖入五個).....三四
- 同上(第二報)(圖入四個).....三一
- 同上(第三報)(圖入四個).....三一

- 同上(第四報)(圖入三個).....一八二
- 同上(第五報)(圖入二個).....二二〇
- 同上(第六報)(圖入三個).....三五七
- 千蟲萬考錄(第一).....三三五
- 同上(第二).....三三六
- 同上(第三).....三三四
- 特別講習會の開會期.....三三六
- 今後の昆蟲世界.....三七七
- 長短期の兩講習會.....三七七
- 三重縣阿山郡の蟲報.....三七七
- 晴天に甘露の雨.....三七七
- 昆蟲標本の展覽.....三八
- 博覽會出品の昆蟲標本と批評.....三八
- 食草蟲の發見.....三八
- 名和梅吉氏の來翰.....三八
- 岐阜縣の害蟲驅防勳行.....四〇
- 除名會員の件に就て.....四〇
- 名和昆蟲研究所に對する建議.....四一
- 今年の天候に注意せよ.....四二
- 米國製の蠅捕紙.....四二
- 物産品評會の昆蟲標本.....四三
- 年賀狀の披露.....四三
- 岐阜縣昆蟲學會記事.....四四
- 水曜昆蟲談話會.....四四
- 昆蟲標本陳列館の勸覽人.....四四
- 此好機を逸すこと勿れ.....四四
- 本號口繪の説明.....八一
- 特別講習會の開閉に就て.....八一
- 害蟲驅除講習修業生の同窓會.....八二
- 森林寺益蟲標本の出品.....八三
- 靜岡縣の昆蟲學講習會.....八三
- 三十五年の昆蟲學講習會一覽.....八三
- 岐阜縣の講習事業.....八五
- 米國の蝶類展覽會.....八六
- 博覽會出品の昆蟲標本.....八六

- 栃木縣下の蟲塚.....八七
- 採蟲紀念碑に就て.....八七
- 冬暖と昆蟲の發生.....八七
- 昆蟲書の出版.....八八
- 越冬蟻の調査.....八八
- 昆蟲學界雜信.....八八
- 岐阜縣昆蟲學會の記事.....八八
- 昆蟲標本陳列館の參觀人.....八八
- 今年の蟲害を占ふ.....八八
- 農事試驗場の計畫.....八九
- 内國勸業博覽會出品の昆蟲標本.....八九
- 色と昆蟲との關係.....八九
- 全國害蟲驅除講習修業生同窓會.....九〇
- 蟲の人の消息.....九〇
- 本號口繪の説明(鋸蟲と深山鋸蟲).....九五
- 全國害蟲驅除特別講習會の開講式.....九七
- 害蟲驅除の獎勵.....九七
- 水棲昆蟲の出品.....九七
- 岐阜縣昆蟲月會の記事.....九七
- 昆蟲水噺會.....九八
- 昆蟲標本陳列館の參觀人.....九八
- 作物病蟲害展覽會の昆蟲標本.....九八
- 第十五回全國害蟲驅除特別講習會.....九八
- 全國害蟲驅除講習會修業生同窓會.....九八
- 特別修業生の姓名.....九八
- 内國勸業博覽會昆蟲標本評.....九八
- 同上の續き.....九八
- 寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會規則.....九八
- 紀念昆蟲繪葉書.....九八
- 昆蟲學者の歸朝.....九八
- 昆蟲標本の審査.....九八
- 岐阜縣害蟲驅除長期講習と短期講習會.....九八
- 岐阜縣昆蟲學會記事.....九八
- 第六回岐阜縣害蟲驅除講習會.....九八
- 第十六回全國害蟲驅除講習會.....九八

鳥取縣東伯郡昆蟲研究所長の出張	二二二
名和昆蟲研究所長の出張	二二二
愛知縣寶飯郡冬季昆蟲展覽會概況	二二二
日本最初の昆蟲學者	二二三
新刊昆蟲書	二二三
諸國の蟲送り	二二四
新刊雜誌中の昆蟲記事	二二五
岐阜縣昆蟲學會記事	二二六
昆蟲水曜會	二二六
昆蟲標本陳列館の觀覽人	二二六
岐阜縣農會の諮問答申案	二六三
稻作害蟲驅除心得(圖入)	二六五
三十六年度の害蟲驅除豫防費	二六六
害蟲標本出品受賞者	二六七
姬蜂科に於ける一新屬(圖入)	二六七
蟲賣	二六八
キリウツの發生	二六九
第十六回全國害蟲驅除講習會の開期	二六九
ホリス氏の來所	二六九
日本産泡吹蟲科出版	二六九
松村氏の旅行	二九六
害蟲視察員の派遣	二七〇
岐阜縣昆蟲學會記事	二七〇
水曜昆蟲會	二七〇
昆蟲標本陳列館の參觀人	二七〇
岐阜縣稻作害蟲驅除監督方法	三〇九
博覽會出品昆蟲標本	三一一
水族館と昆蟲	三一一
新著紹介	三一一
稻象鼻蟲の發生(圖入)	三一一
可畏村昆蟲調査所	三一一
害蟲驅除防監督官の出張	三一一
岐阜縣昆蟲學會第五十五回月次會記事	三一一
昆蟲標本陳列館の觀覽人	三一一
名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解説書	三三三

同上の續き	三九四
第十六回全國害蟲驅除講習會況	三五六
害蟲驅除の方針	三五六
昆蟲叢書第二編の出版	三五七
北米に於ける角蟬科	三五七
蟬寄生蛾の發生	三五八
博覽會出品昆蟲標本受賞者追報	三五八
理學界の發刊	三五九
養老郡害蟲驅除講習會	三五九
農業昆蟲講習會	三五九
岐阜縣昆蟲學會第五十六回月次會記事	三五九
水曜昆蟲會記事	三六〇
昆蟲標本陳列館の參觀人	三六〇
苞蟲の發生と其驅除器(圖入)	三九七
天田郡昆蟲學講習會景況	三九七
氷上郡の同窓者會合	三九八
第十六回全國害蟲驅除講習生氏名	三九八
講習會と五分間演說	四〇二
凸眼椿象の發生(圖入)	四〇二
浮塵子の發生	四〇二
北海道と朝鮮の昆蟲	四〇二
稻の莖切鎌(圖入)	四〇三
名古屋松操會の總集會	四〇三
本誌の改良	四〇三
聖路易萬國博覽會昆蟲標本出品	四〇三
中田谷藏氏の訃音	四〇三
昆蟲標本陳列館の陳列品増加	四〇四
岐阜縣昆蟲學會第五十七回月次會記事	四〇四
水曜昆蟲會記事	四〇四
昆蟲標本陳列館の觀覽人	四〇四
寄稿家に告ぐ	四〇四
本號の口給に就て	四三九
山梨縣下に於ける昆蟲學講習會景況	四三九
硯曹館昆蟲標本出品に對する賞狀	四四〇
女子に對する昆蟲講習の嚆矢	四四〇

- 女子昆蟲學講習會の景況……………四四一
- 蠶入琥珀に就て(圖入)……………四四二
- 蟻蟲驅防に關する岐阜縣告諭……………四四二
- 長吉村川邊區の害蟲驅除成績……………四四四
- 水族箱出品に對する謝狀……………四四四
- 新刊紹介……………四四四
- 九月分の官報紙上に現はれたる害蟲發生……………四四四
- 浮塵子の寄生線蟲……………四四六
- 根木東枝氏の洋行……………四四七
- 苗代田品評會の賞品……………四四七
- 枯穂莖切鎌(圖入)……………四四七
- 貝殼蟲の調査……………四四七
- 岐阜縣昆蟲學會第五十八回月次會記事……………四四七
- 水曜昆蟲會記事……………四四八
- 昆蟲標本陳列館の參觀人……………四四八
- 昆蟲の種類分布調査の一欄を増加せんとす……………四八四
- 昆蟲陳列館の整理と擴張……………四八四
- 蟬寄生蛾の學名確定……………四八四
- 飽海郡昆蟲研究會の出品と協賛狀……………四八五
- 害蟲驅除豫防方針……………四八五
- 私製葉書の意匠……………四八六
- 渡瀬博士の蠶に於ける清韓視察談……………四八六
- シヤサン(柘蠶)の飼育……………四八六
- 白山の昆蟲(圖入)……………四八七
- ジョン、マルナーツ、スミス氏の小傳……………四八八
- 昆蟲幻燈會……………四八九
- 東豫昆蟲研究會……………四八九
- 愛知縣渥美郡教育品展覽會と昆蟲標本……………四九〇
- 美術的蠅叩(圖入)……………四九〇
- 吉野郡の驅蟲事業……………四九〇
- 額田郡の昆蟲展覽會……………四九〇
- 特別研究生の入所を許す……………四九一
- 第十七回全國害蟲驅除講習會延期……………四九一
- 岐阜縣昆蟲學會第五十九回月次會記事……………四九一

- 水曜昆蟲會記事……………四九一
- 昆蟲標本陳列館の參觀人……………四九二
- 昆蟲文學……………五三二
- 新刊紹介……………五三二
- 特別研究生証明書授與と貝殼蟲調査……………五三三
- 香川縣井に京都府南桑田郡昆蟲學研究會規則……………五三三
- 昆蟲學講義録の發行……………五三四
- 愛知縣額田郡昆蟲展覽會……………五三四
- 岐阜縣果實蔬菜品評會と貝殼蟲……………五三五
- 聖路易萬國博覽會出品昆蟲標本……………五三五
- 特別研究生の入所……………五三五
- 岐阜縣昆蟲學會第六十回月次會記事……………五三六
- 水曜昆蟲會記事……………五三六
- 昆蟲標本陳列館の參觀人員……………五三六
- 明年度の昆蟲世界……………五三六
- 新春閑筆一點瓢蟲(圖四個入)……………五三六

◎昆蟲世界新年附錄

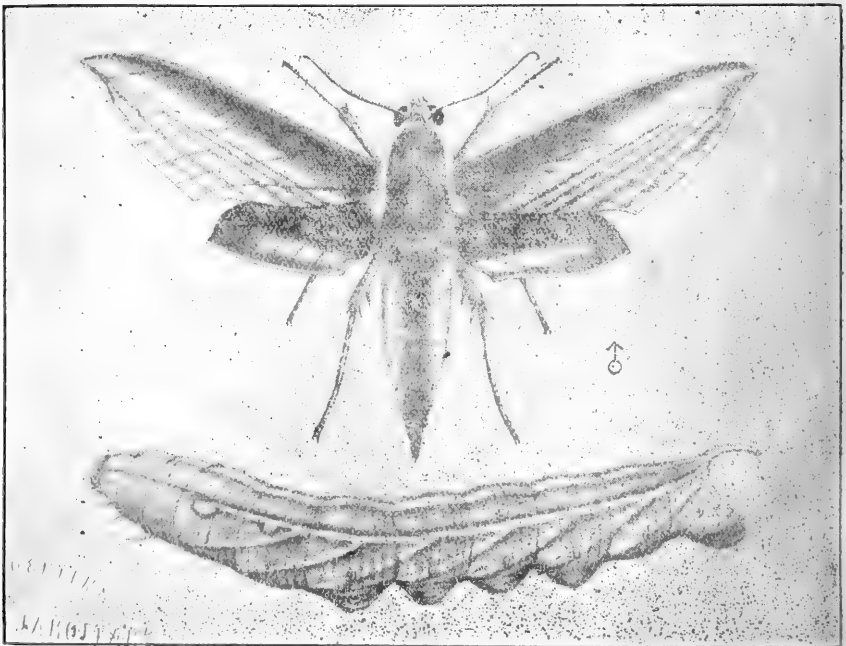


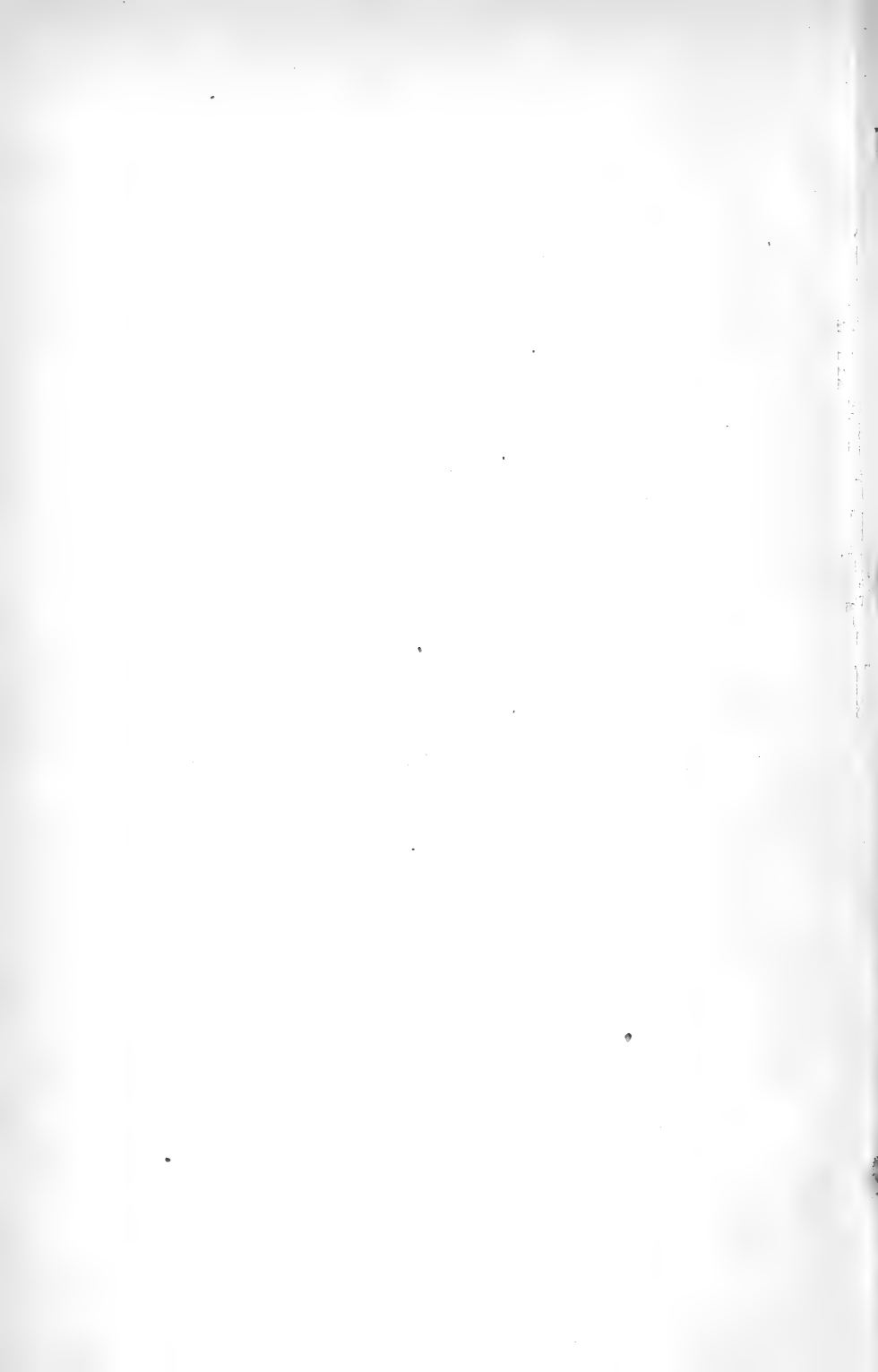
Chaerocampa nessus Drury. (Suzume-ga)

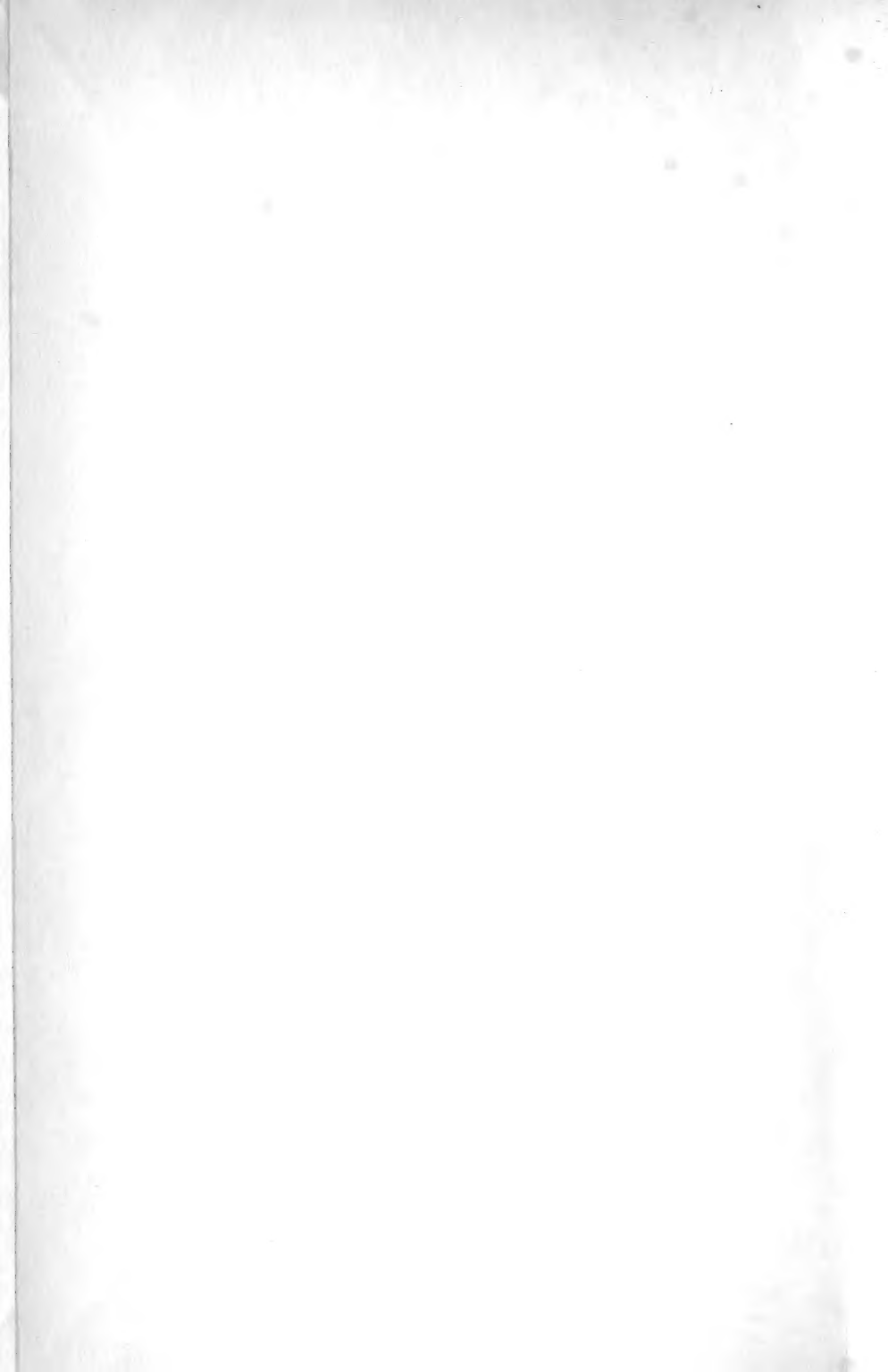
By K. Nagano.

Forewings yellowish-brown; costal area dark-green; base black and whitish; a black discal dot; many purplish-brown striae from dorsum to apex; submarginal wavy line purplish-brown. Hindwings black, dark-green towards outer-margin; ochreous subterminal fascia. Expanse 83-100mm. Head and thorax olive-green, suffused with ochreous-brown, with whitish grey border; abdomen orange-yellow; dorsal fascia olive-green; lateral stripes pale green.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu. 6, 7, 8, 9. Larva whitish-green (turning brownish or reddish previous to pupation); two dorsal lines white; laterallines white; on 4-11 segments a series of oblique lateral white stripes; on 4-5 segments white spots; horn ochreous; on *Dioscorea japonica*, *D. tokoro*, etc.; 7, 8, 9, 10.







AUG 1961



